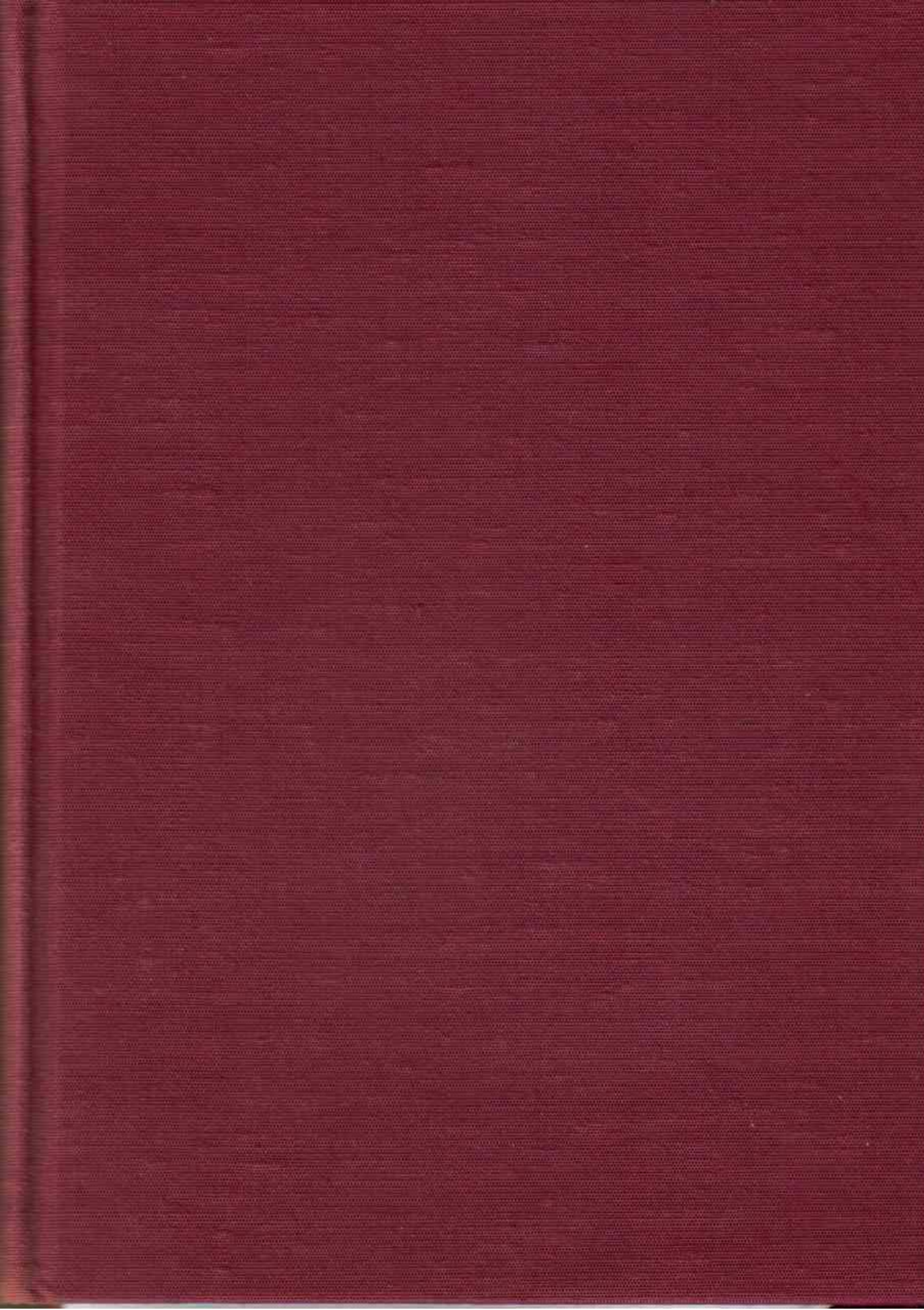


樽本照雄 著

林紓冤罪事件簿

統合増補版

清末小説研究会



林紓冤罪事件簿

統合増補版

樽本照雄 著

清末小説研究会



林紓（琴南、1852-1924） 畏廬老人七十一歳は1922年のとき
『人間世』第14期（1934.10.20）掲載

まえがき

清朝末期から中華民国初期にかけて中国翻訳界に名を轟かせた、あの林紘^{りんじょ}である。その翻訳は、林訳小説とよばれて著名であることはいうまでもない。当時の読者から大歓迎された。

翻訳した数がおびただしい。単行本になっていないものを含めると200種類以上の作品を世に送り出している。その作品は、英国、アメリカ、フランス、ロシア、ギリシア、ドイツ、日本、ノルウェー、スペインなどの諸外国におよび、まさに翻訳の超人と呼ぶのにふさわしい。

外国の文学作品を翻訳したその彼は、1910年代の文学革命に反対した人物としてもよく知られている。雑誌『新青年』集団などを中心にして青年世代から旧文人の代表者と目されて攻撃の的になった。反撃に立ち上がった林紘は、武力をちらつかせて文学革命派を恫喝したといわれている。その評価は、地におちてしまった。

「中国文壇における地位も完全に動揺した」といったのは鄭振鐸である。1928年、魯迅から「ファシスト [Fascist]」と罵られてもいる。いずれも林紘の死後につきつけられた負の評価だ。それは、現在にいたるまで変更されたことはない。

簡単にいえば、林紘の文学上の位置は、つぎの図式で理解されることが多い。

清末には外国文学への窓を開いた彼ではあるが、民国後、特に1919年の五四時期を境にして変節し文学革命の反対者になりはてた。

その林紘が「冤罪」とはどういうことか。冤罪とは、いうまでもなく無実の罪をいう。濡れ衣を着せられたのである。

林紘と何の関係があるというのか。「ファシスト」林紘の復権をはかるつもり

か、などと短絡しないでほしい。私は、あくまでも事実にもとづいて林紘と林訳小説について考察している。日本で入手できるかぎりの資料を集めるように努力しているのもそのためなのだ。

「林紘冤罪事件簿」という書名を見て、いぶかる読者が大多数であろう。いままで、このようなことを述べた研究者はいない。

林紘のなにが、また、林訳小説のどこが冤罪なのか。

研究界では、林紘の再評価が必要だと、いわれることがまれにある。だが、実践されたことはない。ましてや、林紘が冤罪だという認識は皆無だ。表面に出たことは一切ない。逆にいえば、だからこそ重大事件なのだ。

1910、20年代の中国において、文学革命派の劉半農、鄭振鐸らは、林紘を批判するにあたって彼の翻訳を問題のひとつにした。

すなわち、翻訳する価値のない外国の駄作を多く取り上げた。もとの戯曲を小説化した。誤訳が多い。勝手な加筆、削除を行なった、などなどである。

林紘は、外国語ができなかった。外国語を理解する人物が口述翻訳するのを聞きながら、古文で筆記したのが林訳小説なのである。この共同作業という翻訳方法が、言語の異なるあの大量の翻訳作品群を生んだ秘密であった。そこをつかれて、「外国語を理解しない翻訳者」といわれてもいる。その表現から受ける印象は、きわめて悪い。外国語を知らずに翻訳するなど、ありえない。翻訳はでたために決まっている。そのような結論すらできそう。

結局のところ、外国文学の翻訳で著名だとはいえ、内実は無価値な出版物であったというのと変わらない。ご注意ねがいたい。私がそう言っているのではない。学界での一般的な評価なのだ。

林訳小説を否定するのは、学界全体の統一意見であるというわけでは、当然ながら、ない。多くの欠陥があったとしても、当時の文芸界におよぼした影響は大きい。低く見られていた小説の地位を大きく引きあげた。ゆえに、林紘の功績は無視することはできない、と高い評価をあたえる研究者も大勢いる。総じていえば、その時々で、林紘の評価は左右に揺れるのである。

最終評価を正の方向、あるいは負の方向のいずれにおくにせよ、研究者の共通認識というものがその前提として存在する。これはまぎれもない事実である。

共通認識とは何か。

林訳小説の欠陥のなかでも最大のものは、原作である戯曲を小説に書き換えたことだ。これが事実だとひろく、かつ長期間にわたって認定されている。だから共通認識である。これを定説という。

シェイクスピアとイプセンの作品を小説化した、と批判する。せりふを大幅に削除し、劇本のよさをだいなしにしてしまった。林紓は、戯曲と小説の区別もつかないほど愚昧である、と嘲笑し非難するのだ。戯曲の小説化をもって、林訳小説のでたらめさ加減を代表させる研究者もいる。

林紓が行なった戯曲の小説化を否定した研究者は、存在しない。林紓研究の専門家も、例外ではない。

ところが、である。結論を先に書いておく。

批判の根拠である戯曲の小説化という事実は、なかった。

林紓ならびに共訳者は、原作の戯曲を勝手に小説化してはいない。事実無根なのである。いままで継続されていた林紓批判、林訳小説批判は、誤解にもとづくものであった。

本当のことが、今、目の前に明らかにされている。白日のもとにさらされた事実を前にして、事のあまりの重大さに私はかえって脱力感すらいただく。

過去の林訳小説批判は、何だったのだろうか。中国文学研究史上、中国翻訳研究史上、これほどの冤罪事件があったであろうか。

本書でいう林紓冤罪事件とは、くりかえすが林紓と彼の翻訳小説に向けて下された無実の罪を指している。その事例を複数集めて本書が成立している。ゆえに「事件簿」という。

すべての林訳小説について述べているものではない。ご了解いただきたい。

従来、林紓は文学革命派からのみ一方的に見られて評価が下されていた。本書は、逆に林紓から見たらどのような文学風景になるかという試みである。

しかも、問題が翻訳という範囲を超えることになるうとは、正直に言って私自身も想像することができなかった。翻訳問題を追求していくと、林紓批判の全体構造が見えてきたのである。

誤解を避けるためにあらかじめ書いておく。

林紓について、また林訳小説がどのように評価されたのか、それを紹介するために多くの先行論文を引用している。私がそれらの論文名を出したのは、批判するのが目的ではない。客観的に見て、そういう論文が発表されたということを示しているにすぎない。

林紓冤罪事件簿 統合版

目 次

まえがき 5

1	林紓を罵る快樂.....	19
1	林紓の翻訳	19
2	『青年雑誌』から『新青年』へ	22
3	林紓が奇妙な登場のしかたをする	30
4	林紓批判のはじまり 捏造論文による挑発	40
5	林紓評価をめぐる新しい展開	67
6	林蔡問題	69
7	陳独秀問題	86
8	林紓書簡	111
9	北京大学をめぐる風説風聞	137
10	林紓が書いた短編小説	156
11	張厚載の退学処分	168
12	結 論	175
2	林訳シェイクスピア冤罪事件.....	196
1	林訳小説の欠陥	197
2	定説がくり返される	207
3	林訳シェイクスピア歴史劇の底本	243
4	結 論	262
3	林訳イブセン冤罪事件.....	267
1	シェイクスピアのばあい	267
2	イブセンのばあい	268
3	林訳イブセン	273
4	イブセン「幽霊」の英訳	274
5	林訳『梅孽』	276

6	イブセン戯曲の英文小説化本	デル版『幽霊』	279
7	デル版原作と林訳		282
8	結 論		284
4	林訳スペンサー冤罪事件		286
1	林訳スペンサー		286
2	研究者の言及		288
3	底本の提示		290
4	あらたな冤罪事件		291
5	マクルホーズの小説化英文原作		293
6	マクルホーズ版の底本		295
5	林訳セルバンテス冤罪事件		299
1	大幅削除説		300
2	鄭振鐸のばあい		301
3	周作人のばあい		304
4	傅東華のばあい		313
5	林訳否定の方向へ		314
6	林訳「ドン・キホーテ」		321
7	「ドン・キホーテ」の英訳本		323
8	日本松居松葉抄訳版		325
9	モトゥー版以外の版本		328
10	エブリマンズ・ライブラリ版		333
6	林訳小説冤罪事件の原点		
	鄭振鐸「林琴南先生」について		340
1	第1章 林紓に敵対したことを明示する		341
2	第2章 林紓の性格と翻訳方法		346
3	第3章 創作小説、戯曲および林紓の「変化」		348
4	第4章 翻訳小説を検討する		350
5	結 論 謬論が死後に決まる		357

7	魯迅による林紓冤罪事件	
	「引車売漿者流」をめくって.....	359
1	『博徒別伝』の誤解	360
2	「引車売漿者流」についての魯迅自注	363
3	ふたつの注釈	366
4	魯迅から見た林紓	368
5	魯迅と蔡元培	373
6	「引車売漿者流」についての魯迅理解と林紓の意図	375
7	2005年版『魯迅全集』の注	379
8	魯迅「出乎意表之外」の意表外.....	386
1	魯迅の文章	387
2	林紓誤用説の発生	388
3	注釈についての疑問	389
4	銭玄同のばあい	390
5	林紓諷刺ではなく銭玄同に向けたもの	392
9	林訳小説評価の最近	
	ある不安な新展開.....	395
1	林訳小説評価の構造	395
2	郭延礼の提案	396
3	再創造ということ	398
4	結 論	399

林紓研究論集

10	阿英による林紓冤罪事件	
	『吟辺燕語』序をめくって.....	402

1	林訳批判のきっかけ	404
2	『吟辺燕語』の原作	406
3	『吟辺燕語』のこと	409
4	林序について	414
5	阿英の林紘批判　もうひとつの冤罪事件	419
6	戯曲と小説	421
7	「区別がつかない論」は成立するか	425
8	複数の版本	429
9	結　論	432
11	林訳「ハムレット」	
	『吟辺燕語』から.....	436
1	林訳「ハムレット」	436
2	林紘と周作人	440
3	林訳「ハムレット」のつづき	441
4	林紘の誤訳	445
5	結　論	447
12	ラム版『シェイクスピア物語』最初の漢訳と林訳	
	「十二夜」を中心に.....	449
1	阿英の説明	449
2	大系版『澠外奇譚』	452
3	ラム版「十二夜」の漢訳2種	457
4	結　論	474
13	林訳シェイクスピア	
	クイラー=クーチ版「ジュリアス・シーザー」.....	477
1	Qの英文小説化本	479
2	第1回(1-10頁)	481
3	第2回(11-20頁)	486
4	第3回(21-32頁)	490

5	結 論	496
14	林訳チョーサー	499
1	馬泰来の指摘	499
2	クラーク1947年版のばあい	501
3	クラーク版以外	507
4	クラーク版のばあい	509
5	林訳の具体例「死口能歌」	513
15	林訳ユゴー	519
1	林訳ユゴー	519
2	鄭振鐸の林訳批判	522
3	ユゴー英訳要約版の追求	528
4	メギー要約版と林訳	533
5	要約版のさらなる追求	536
6	チャンドラー要約版	540
7	林訳ユゴーの底本	542
8	要約版を底本にするものの是非	542
16	中国現代文学史における林紓の位置	545
1	林紓再評価の論文	548
2	文学史の記述	552
3	風説風聞について	652
4	結 論	664
17	林紓落魄伝説	669
1	林紓落魄説	670
2	いくつかの中傷	673
3	林紓へのあらたな中傷	680
4	林紓の原稿料あるいは経済的基盤	682
5	北京大学図書館における毛沢東の給料	685
6	林紓の揮毫料金	687

18	陳独秀の北京大学罷免	
	『林紓冤罪事件簿』補遺.....	692
1	北京大学をめぐるウワサが事実になるとき	692
2	北京大学改組と陳独秀の罷免	711
3	林紓の皮肉	722
19	周作人が魯迅を回想して林紓に言及する	
	日本語訳注釈について.....	743
1	周作人と松枝茂夫の往復書簡	743
2	松枝茂夫の質問と周作人の回答	745
3	松枝茂夫の翻訳と注釈	747
4	小川利康の注釈	750
5	結 論	752
20	『林紓冤罪事件簿』ができるまで	
	あるいは発想と研究方法について.....	755
1	林紓翻訳に対する批判	757
2	「林紓を罵る快樂」	760
3	林訳シェイクスピア	765
4	前段階「小説化本」	770
5	後段階「歴史劇」	772
6	原本入手の手順	773
7	林訳シェイクスピアのばあい	776
8	林訳イブセンのばあい	781
9	より大きな問題 林紓冤罪事件の全体構造	782
10	研究体制	785
11	一瞬の判断	786
12	研究の理解度	787

21	施蟄存による林紓冤罪事件.....	793
1	施蟄存の説明 794	
2	施蟄存による林紓冤罪事件 796	
22	『吟辺燕語』批判の謎.....	800
1	文学革命派の林訳小説批判 801	
2	林訳『吟辺燕語』批判の謎 806	
3	魯迅とシェイクスピア 808	
4	文学革命派のたくらみ 810	
5	張俊才の注目すべき新著 811	
6	張俊才の説明 812	
23	蔡元培を中傷した北京大学元教員.....	815
24	「林訳小説叢書」の作品数.....	820
1	商務印書館版「説部叢書」 821	
2	「林訳小説叢書」 822	
3	複数の数字 823	
4	結 論 827	
25	瀬戸宏報告を評する	
	「林紓のシェイクスピア観 林紓は冤罪か」について.....	829
26	中国のシェイクスピア最新成果.....	841
27	漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序	
	「区別がつかない論」再び.....	847
1	劇作家と詩人に区別する 847	
2	詩人と劇作家 849	
3	シェイクスピア（詩）とラム（散文） 849	
4	漢訳ラム本など 852	
5	シェイクスピア名の漢訳と肩書き 854	

- 6 追加資料 2 件 856
- 7 詩人シェイクスピア 859
- 8 ラム序文 860
- 9 『澠外奇譚』のばあい 862
- 10 ラム本とシェイクスピア 864
- 11 訳例いくつか 「戯本小説」 866
- 12 「詩詞小説」の解釈 873
- 13 『英国詩人吟辺燕語』のばあい 880
- 14 ハガードと並べる 881
- 15 杜甫と並べる 882
- 16 家庭から劇場へ 887
- 17 「林序」のラム本表記 893
- 18 莎劇(詩)とラム本 895
- 19 阿英による誤解の影響 899
- 20 伝本多数 901
- 21 劉半農から胡適を経て鄭振鐸へ 902
- 22 劉半農の「区別がつかない論」 904
- 23 瀬戸博士の理解 907
- 24 「誤った通説」の原因は林紓にある トンデモ説の出現 910
- 25 「シェイクスピア作品ではないもの」 911
- 26 加害者が被害者に成りすます 915
- 27 瀬戸博士は林紓を詐欺師に認定し林紓の名誉を毀損する 916
- 28 余 話 918
- 29 林紓冤罪事件 魯迅との関係 920
- 30 「林紓を罵る快樂」 924

林紓冤罪事件簿あとがき 930

林紓研究論集あとがき 937

統合増補版あとがき 943

凡 例

- 1 書名の角書、副題は、本書での初出のみ記し、以下は省略する。
- 2 旧暦は漢数字で、新暦はアラビア数字でしめす。
例：宣統二年九月十九日（1910.10.21）
ただし、引用文はこの限りではない。
- 3 記号は以下のとおり。
『 』 雑誌、新聞、単行本（書名）全集
「 」 論文、雑誌掲載、あるいは単行本中の個別作品、作品名一般、叢書名
[] 原文と翻訳文の区別がつきにくいばあい、使用することがある。また筆者の注
- 4 漢語文献に使用される記号は、そのままを引用する。ただし、簡化字は使わない。日本語漢字にかえる。
- 5 カッコ類は、引用文のなかでも原文のままである。例：「 「 」 」とし、「 『 』 」と書き換えない。
- 6 本書で使用する用語は、以下のとおり。
原 作：詩、戯曲、小説の分野、および使用言語をとわず、作品それ自体を示す。
小説化：詩および戯曲を、特に小説に書き直すこと。英語の詩、戯曲を英語で小説化したときは、単に小説化（本）とのみ書く。英文小説化本というのは、英語を使用して小説に書き直した本を指す。
改 作：原作をもとにして、児童用に改作する、省略加筆して改編する。改作本というばあいもある。

林紓を罵る快樂

『清末小説』第28-30号（2005.12.1-2007.12.1）に掲載。ただし、第30号は、番外編（「林紓シェイクスピア冤罪事件」）である。別原稿として本書に収録した。「5 林紓評価をめぐる新しい展開」以下は未発表。本書に収録したため連載は中断した。寛文生氏よりご教示いただきました。感謝します。

清末民初時期の翻訳界において、林紓は、他の翻訳者を圧倒して屹立する存在だった。それがどうしてあんな風になってしまったのか。突然、「あんな風」といわれてもわかる人にしか理解できない。おいおい説明する。

1 林紓の翻訳

林紓（1852-1924）、字は琴南、号を畏廬、冷紅生、踐卓翁などという。福建の貧しい家に生まれた^{*1}。父親がはじめた商売がうまくいかず苦学する。台湾に活路を求めた父親を助けて帳簿づけをしたこともある。十八歳で結婚し（年齢表示は数え年。以下同じ）、肺病をわずらい二十一歳のとき村塾で教え始めた。勉学を続けるかたわら絵画を学んだ。三十一歳の時、科挙の試験に合格して挙人になる。同期の合格者に高鳳岐（張元済と親しく、1902年、商務印書館に入社した。高夢旦は弟）と鄭孝胥らがいる。役人にはならず、著述、翻訳、絵画を生業とした。日清戦争に破れたのを見て、新政をとる。古文（文言）をよくし、王寿昌の口述で小デュマ作の『椿姫』を筆述した漢訳名『巴黎茶花女遺事』（1899年福州で刊行）によ

って有名になった。外国語に堪能な人物が口頭で翻訳し、林紓が古文で筆記する方式のはじまりである。四十八歳の時のことだ。

林紓の翻訳した作品がどれくらいの数にのぼるか、以下に示す（単行本ではない。翻訳作品の数であるから注意されたい）。

1899年から数えて、1912年の中華民国成立を経た1916年までに146件の翻訳を発表している。1917年から彼の死去（1924年）をへたのちの1925年までに、67件が公表された。

1916年で区切ったのは、翌1917年より文学革命論が提起されるからだ。1899-1925年の全体をとおして翻訳数は、213件にのぼる。

清末民初の同時期に活動した人たちの業績を参考までにあげてみる。曾孟樸が1905-31年に22件を、周作人が1904-20年に42件を発表している。

主として清末時期であるならば、周桂笙が1903-10年で43件、1905-13年に呉棹の20件がある。

民国前後の1910-25年には、周瘦鵑が94件を発表して目につく。そのほか、劉半農（復の字。のちにあらためて半農。論文で使用している以外は半農で統一する）が1914-18年で48件、胡適が1908-1919年に16件、沈雁冰（茅盾）が1918-19年の2年で12件というぐあいだ。

林紓のばあいは、それらとは比較にならないくらいに数が多い。しかも、翻訳した外国文学はイギリス1国とは限らない。ほかにアメリカ、フランス、ロシア、ドイツ、ノルウェー、日本、スイスなど広範囲にわたる。数のうえだけならば、包天笑が他人との共訳を含んで1901-20年に109件というのが、林紓につぐ。それにしても213件に対しての109件だから、林紓の仕事量がきわだって多いことがわかる。

大量でしかも多様な外国文学の翻訳を世に送り出したのを見ると、まさに超人的ということが出来る。それが可能だった理由は、簡単だ。翻訳にあたって、彼は他人との共同作業という方法を採用したからだ。イギリス文学なら英語の達人と、フランス文学であればフランス語の専門家と組む。翻訳者が口述し、林紓がその場で古文を使って筆記する。彼個人についていうならば、膨大な時間を費やして外国語を習得する必要がない。また、自分が修得した外国語の種類にしばら

れるという制限とも無縁である。専門家の数をふやせば、世界各国の文学に対応できる。また、英語に重訳された作品を選択すれば、より多くの外国文学を翻訳対象とすることが可能だ。各人の長所を有効に利用した翻訳方法である。

可能性をいえばそうだ。しかし、漢訳に協力した人々の専門を見ると、英語とフランス語が主となっている。ロシア、ドイツ、日本などの作品も英語訳を経由しての重訳だと考えるのが適切だろう。

利点に注目する私の簡単な説明は、中国においてはほとんど触れられたことがない。あるとしても多くはないはずだ。林紘の翻訳方法は、おおむね負の評価が下される。

清末時期に、商務印書館が発行した「説部叢書」と称する外国小説の翻訳シリーズがある。民国になって再版されてもいる。単行本全322種のうち、林紘の翻訳は147件を占めて全体の約46%にのぼる。のちに、彼の翻訳だけ100種を抜き出し「林訳小説叢書」第1、2集と銘打って特別に発行された。1914年から15年にかけてのことだ。それくらい読者の人気を博した*2。売れると判断しなければ商務印書館が出版するはずもない。

以上、こまごまと数字をあげた。その意図は、林紘の翻訳が量的に他の翻訳者をはるかに抜いていたという事実を確認するためなのだ。林紘は、1919年の五四時期よりも前から文学界では十分に著名人だった。

魯迅（周樹人）と周作人の周兄弟は、学生時代に林訳小説を好んだ。出版されると購入した。感化されて、清末に彼ら自身がハガードの作品1種を漢訳したほどだ。また、郭沫若が林訳小説のうちの特に3種類をあげて深く影響を受けたと告白しているのも有名な話だろう。のちの作家、評論家の多くが、林紘の翻訳によって外国文学の存在を知った。

だが、外国文学の翻訳者として栄光の頂点にあったように見えた林紘は、文学革命が提唱されはじめる五四時期以前から、新しい作家、評論家たちによって口をきわめて罵られることになる。

いわく、外国語を理解しない。いわく、作品選択に妥当性を欠く。いわく、戯曲を小説にした。いわく、省略誤訳が多い。林紘と彼の翻訳小説についての評価は、一転して地に落ちた。現在にいたるまで尾を引いているといっても過言では

ない。

本稿は、外国文学翻訳の旗手であった林紓が、どのようにして批判の対象とされるようになったのか、その過程を明らかにするものである。

2 『青年雑誌』から『新青年』へ

林紓は、『巴黎茶花女遺事』を刊行してのちの1901年、北京へ居を移した。金台書院、五城学堂で教えながら、外国文学の翻訳を続けた。林紓の翻訳は社会を改良し人を感動させるためだ、と考える識者がいることは、彼の翻訳小説の序跋文を見ればわかる*3。なによりも、外国文学を翻訳することにおいて林紓の才能の一部は十分に発揮されたといえるだろう。林訳小説は、中国において伝統的に評価の低かった小説を見直す契機になった。その意味で、梁啓超が示した小説重視の主張は、林紓の翻訳によって実践され証明されたということもできる。

1903年、京師大学堂（北京大学の前身）訳書局に勤め、1906年には同じく京師大学堂預科と師範館の経学教員となった。1911年の辛亥革命時、林紓はすでに六十歳である。1913年、京師大学堂を辞めてからも、著作、翻訳、絵画制作の生活を送り、それは死去する1924年まで続いた。

「林訳小説叢書」が商務印書館から発行されていたころ、同じ上海において、ある啓蒙雑誌が創刊された。雑誌の題名を『青年雑誌』という。群益書社を出版元とし、創刊号（1915.9.15）の「社告」には、該誌の刊行は若者諸君と修身治国の道を相談するためだとうたう。通信欄を設けて読者からの投書とそれに対する返答を掲載するのも新趣向だ。若者を啓発しようという意図だった。

おなじ号の巻頭を飾ったのが陳独秀の「つつしんで若者に告げる [敬告青年]」だ。内容は、6つの標語に集約される。

すなわち、1 自主であって奴隷ではない [自主的而非奴隷的]、2 進歩であって保守ではない [進歩的而非保守的]、3 進取であって隠遁ではない [進取的而非退隱的]、4 世界であって鎖国ではない [世界的而非鎖国的]、5 実利であって虚飾ではない [実利的而非虚文的]、6 科学であって空想ではない [科学的而非想像的] という。

若者に期待するのは、前者であって後者であってはならない。その主旨は見ればわかる。善悪好悪を対比し一方を批判否定するという簡単な論理の構造は、理解しやすい。

否定する姿勢をより強調して、文学に的を絞って発言をするのが胡適である。最初は、読者の投稿で通信欄に登場した。

胡適のばあい

『青年雑誌』は約半年の休止時間をおいて、1916年9月1日付の第2巻第1号から『新青年』と改題する。その第2巻第2号(1916.10.1*4)通信欄に、陳独秀にあてた胡適の手紙が掲載された。

胡適は、文学が墮落した原因を「文が質にまさっている」ところに求める。「形式があって精神がない」という意味だ。胡適は、つぎのように主張する。文学革命をいうならば、つぎの8項目から手をつけなければならない。

- 1 典故を用いない[不用典]
- 2 陳腐なきまり文句を用いない[不用陳套語]
- 3 対句を重んじない[不講对仗]
- 4 俗字俗語を避けない[不避俗字俗語]
- 5 文法の構造を重んじなければならない[須講求文法之結構]

以上は形式上の革命である。

- 6 病気でもないのにうめかない[不作無病之呻吟]
- 7 古人のことばを模倣しない。ことばには個性がなければならない[不摹倣古人語語須有個我在]
- 8 内容のあることを言わなければならない[須言之有物]

以上は精神上的の革命である。

どこかで見かけた標語だと思われるのも当然だ。のちの有名な「文学改良芻議」で主張する内容と一致している。順番がわずかに異なっているだけだ。陳独

秀がさきに示した否定的論調を、胡適が十分に吸収したうえで利用していることがわかる。

上の「7 古人のことばを模倣しない」について、胡適は精神上に分類している。だが、実はことばにまつわるものだから、形式に入るのではないか。してみると、内容に関して述べるのは、8 項目のうちの2 項目にすぎない。しかも、その内容がどうあるべきかについては、具体的に説明しているわけではない*5。

1917年、『新青年』の編集部は、北京に移転した。陳独秀が、蔡元培に招かれて北京大学文科学長に就任したからである*6。

つぎに、胡適が「文学改良芻議」(第2 巻第5 号1917.1.1)において主張したのは、各時代にはその時代の文学があるということだ。そのたどりつく結論は、卑しまれている白話小説こそが、現代における中国文学の正統である、となる。末尾に添えられた陳独秀のことばにも「白話文学が中国文学の正統となるであろう」とある。胡適と陳独秀の両者の意見が一致しているからこそ『新青年』に論文が掲載された。もっとも、白話文学を主張する該論文は、古文で書かれている。その矛盾に誰も気がつかない。

8 項目宣言は、先の通信に見られるものと内容は同じだ。ただ順序が入れ替わっただけ。主張の重点は、あくまでも文章の形式にある。内容に関していえば、その比重は重くない。しかも、文章上は否定の姿勢を強調する。約1 年後に発表する彼の「建設的文学革命論」(第4 巻第4 号1918.4.15)は、「不」を前面に押し出してより否定的な標語に発展している。彼のいう「八不主義」を原語のままに、矢印部分に掲げる。掲載順の数字を見れば、ここでも順序を入れ替えている。さきに通信欄でかかげたものと同じでしつこいと思いはする。だが、胡適の主張が雑誌上で3 回も繰り返されているくらいに、当時は人の目を引く主張であった。また、「八不主義」に変化するのを見るためにも、重ねて引用する。

1 内容のあることを言わなければならない[須言之有物]

1 不做「言之無物」的文字。

2 古人を模倣しない[不摹倣古人]

7 不摹倣古人

- 3 文法を重んじなければならない [須講求文法]
 - 6 不做不合文法的文字。
- 4 病気でもないのにうめかない [不作無病之呻吟]
 - 2 不做「無病呻吟」的文字。
- 5 陳腐なきまり文句をできるだけ除く [務去爛調套語]
 - 4 不用套語爛調。
- 6 典故を用いない [不用典]
 - 3 不用典
- 7 対句を重んじない [不講对仗]
 - 5 不重对偶 文須廢駢詩須廢律。
- 8 俗字俗語を避けない [不避俗字俗語]
 - 8 不避俗話俗字

「1 内容のあること」とは「4 病気でもないのにうめかない」と同じことをいっているように思える。しかし、その中身が具体的に説明してあるわけではない、とくりかえしていわざるをえない。

胡適が文学の正統と認める作品は、なにか。評価するに足ると胡適が認める文学作品はといえば、すなわち白話小説だというのだ。

今日の文学で世界「第1流」の文学と比較して遜色のないものは、ただ白話小説（我仏山人、南亭亭長、洪都百鍊生の3人のみ）があるだけだ。3-4頁

胡適が例にあげたのは、いずれも清末の作家の名前である。我仏山人は吳趸人を、南亭亭長は李伯元を指す。洪都百鍊生とは、劉鉄雲のことだ。別の箇所では、『儒林外史』、『水滸伝』、『石頭記』という書名を出したりもする。こちらは、1912年に成立した中華民国よりもはるか以前に発表された作品だ。アメリカ滞在中の胡適には、当時、中国で流行していた小説についての知識がなかったのかもしれない。ついでにいえば、のちに胡適は亜東図書館から李伯元著『官場現形記』、劉鉄雲著『老残遊記』などを復刻出版しており、この時の論文に関係して

いるといえる。

該論文において、外国文学の翻訳は、胡適にとっては対象外であったようだ。言及がないから私はそう判断する。ただ、1カ所に『十字軍英雄記』という書名が見える。林紓+魏易訳のスコット原作である(Walter Scott “The Talisman” 商務印書館1907)。林訳小説というだけで、胡適がこれについて評論しているわけではない。なにしろ林紓の名前さえも出していない。この時点で、林紓の姿は見えないといっていだらう。

陳独秀のばあい

白話を強調した胡適に続いて陳独秀の「文学革命論」が第2巻第6号(1917.2.1)に掲載された。

創刊号で示した二者択一の文章構造をここでも採用している。文学革命軍の3大主義という。

飾り立てて迎合する貴族文学を打倒し、平易で抒情の国民文学を建設せよ。
陳腐で見栄っ張りの古典文学を打倒し、新鮮で誠実な写実文学を建設せよ。
まわりくどく難解な山林文学を打倒し、明瞭で通俗な社会文学を建設せよ。

標語を掲げるのは、それなりに理解しやすい。だが、いくら標語を叫んだところで、標語だけのことだ。打倒の対象は漠然としている。ただ、改革、革命を行なうには困難な現状を、文学を突破口にして攻撃している、というのであればわからないでもない。

仲間内の議論

今でこそ有名な胡適と陳独秀の論文である。また、『新青年』誌上で文学革命、文学改良、文学革新に関連する文章も公表された。しかし、意見が出るといっても該雑誌上に限られており、仲間内だけのものだった。

たとえば、第3巻第1号(1917.3.1)の通信欄には、いくつかの意見が掲げている。銭玄同が、胡適の「文学改良芻議」に触発されて自らの考えをのべる。結局の

ところ、文学の進化を肯定して小説が近代文学の正統であると認める。最近の小説では、李伯元『官場現形記』、吳趸人『二十年目睹之怪現狀』、曾孟樸『孽海花』をあげ、また、蘇曼殊にも触れる。しかし、胡適が持ち上げた劉鉄雲『老殘遊記』については、「老新党」にすぎないと切り捨てた。錢玄同の文章で注目されるのは、現代文学の革新は梁啓超に始まる、と認識しているところだろう。ただし、1ヵ所だけ見逃すことのできない部分がある。翻訳して引用する。

また、某氏のように人と西欧小説を訳して、もっぱら『聊齋志異』の筆づかいである。一方で、韓愈、柳宗元を引いて自らを重んじたがっているが、その価値は、桐城派の下なのだ。だが、世間は美文豪と見なしている。

他人と共同して、しかも古文を用いて外国小説を翻訳しているといえ、誰か。「某氏」と名前をぼやかしてはいる。だが、普通に考えれば、林紓の名前を当然のように思いうかべる。ここには、林紓批判のきざしが、かすかにだが確かに出現している。留意する必要がある。また、錢玄同は、林紓のことを「文豪」と一貫して揶揄していることも後に触れることになるだろう。

劉半儂「我之文学改良觀」(第3巻第3号1917.5.1)は、論じる範囲が広い。文学、言語、文字、散文、韻文さらには記号にまで及ぶ。また、古文を評価するなど少しの異論を差しはさんでいるが、改革の必要性をのべる点においては、胡適の「八種改良」と陳独秀の「三大主義」および錢玄同らの主張の延長線上にある。ただ、注目すべきは「近人某氏」が外国小説を翻訳してわけのわからぬ語句を使用しているという箇所がある。この某氏とは、林紓を指す。錢玄同と同じ言葉使いであるのが奇妙だ。劉は、明記しないが、『巴黎茶花女遺事』のなかの語句をやり玉にあげる。のちの展開を見れば、錢と劉が仕組んだ林紓批判の予兆が、こちらあたりに隠されていたといえよう。

同じ号に掲載された胡適「歴史的文学觀念論」は、ひとつの時代にはその時代の文学があることを主張する。すなわち、今日の文学は、白話文学が正統なのだという意見である。これが「歴史的文学觀念」だ。白話文学の正統性を主張することは、それ以外の、つまり今日の古文文学を否定することになる。胡適の一貫

した姿勢である。

胡適が批判するのは、今という時代に生きながら時代にあわない古文を使い続けている「古文家」なのだ。

「古文家」を否定する気分は溢れてはいる。しかし、具体的な攻撃目標が設定されているわけではない。批判すべき現存する人物の名前は、でていない。

劉半農「詩と小説の精神上の革新 [詩与小説精神上之革新]」(第3巻第5号1917.7.1)は、詩が思想において「真」でなければならないと強調し、サムエル・ジョンソン Samuel Johnson から大量に引用する。小説には、真理にもとづいて発言し理想世界をつくること、それぞれが見た世界について詳細に描写することのふたつを求める。ヘンリー・ヴァン・ダイク Henry Van Dyke を引用する。彼が評価するのは、中国では、曹雪芹、李伯元、吳趸人である。イギリスではディケンズ [狄鏗士]、サッカレイ [薩克雷]、キプリング [吉伯林]、スチープンソン [史梯文生] を、フランスのゴンクール [龔枯爾] 兄弟、モーパッサン [莫泊三] を、アメリカはオー・ヘンリー [政^{ママ}[欧]亨利]、マーク・トウェイン [馬克吐温] をあげる。排除するのは、ウェルズ [惠爾司] の科学小説、コナン・ドイル [康南道爾] の探偵小説、ル・キュー [維廉勒苟] の秘密小説、ルブラン [瑟勒勃郎] の強盗小説だ。

この時点で、大衆小説を排除しようとする意識がすでに表面化していることに着目しておく。

上記論文には、作品名が具体的に出されてはいない。また、中国における翻訳にも言及していない。彼は、外国語ができたから原書を読んで得た感想なのだろう。だが、読者にしてみれば、翻訳を読むことによってでしか劉半農の意見を検証することができない。

参考までに、1917年の時点で、劉半農が言及する外国作家たちの漢訳があるかどうかを簡単に見てみよう。数字は、その年から翻訳があることを示す。漢訳は1件だけとは限らない。複数の訳者による複数の翻訳が出版されている可能性がある。

劉半農が評価する作家

ディケンズ 林紓ほか1907
サッカレイ 周瘦鵑1917
キプリング 胡適1915
スチープンズ 林紓ほか1908
ゴンクール兄弟 陳嘏1917
モーパッサン 陳景韓ほか1904
オー・ヘンリー 鉄樵1914 (林紓訳は1925)
マーク・トウェイン 巖通ほか1905
×劉半農が評価しない作家
ウェルズ 楊心一ほか1915 (林紓訳は1921)
コナン・ドイル 張坤徳ほか1897 (林紓訳は1907)
ル・キュー 陳景韓ほか1904
ルブラン 楊心一ほか1912

上を見るかぎり、林紓の翻訳が、ほかの漢訳に比較して一方に偏向しているということとはできない。劉半農が評価する作家の作品を、林紓が早くから翻訳しているのに気づいてもいい。その意味で、林訳は幅広く目配りされている。

翻訳作品を見る限り、ここから林紓批判は出てきそうにもない。

同じ号の「読者論壇」に載った易明「改良文学之第一歩」は、文学改良には「俗語」を使うことからはじめなければならない、と主張する。論説、書簡、小説のすべてに適用せよという。

第4巻第1号(1918.1.15)「通信」欄には、銭玄同あて胡適の手紙、銭玄同の返答、劉半農あて銭玄同の手紙、劉半農の返答がある。さらに、「読者論壇」欄に北京大学学生の傅斯年が「文学革新申義」を投稿している。

いずれも、仲間内の討論にとどまっているだけだ。白話の使用という胡適の主張は、彼自身のことばでいえば「ダーウイン以来の進化論の影響を受けていた」*7。進化の法則だと考えれば、古文から白話への転換は必然ということになる。自然選択によっていずれそうなる運命だろう。ならば、淘汰されると決まったものをわざわざ攻撃する必要はないではないか、と私なら考える。実作の出現

が進化の法則の正しさを証明するだろう、とも思う。しかし、胡適、陳独秀、錢玄同、劉半農らは、なにもせずに到達する結果には満足できなかったらしい。だからこそ胡適の「八不主義」につながる。否定に力を入れたい。自分たちの前に立ちはだかる強力な敵がいてこそ、改革、革命を主張するカイがあるというものだ。だが、その敵が姿を現わさない。

鄭振鐸は当時の状況を回想して、「彼らが「文学革命」の大旗をたててからというもの、はじめから終わりまで有力な敵たちに出会うことはなかった」*8と説明した。ここには、革命を提唱する若者たちのいらだちが、正直かつ露骨に記述されている。

そうして、現状を打開するためにせっぱ詰まってでっちあげたのが、架空の人物「王敬軒」に手紙を書かせた捏造事件である。林紓を攻撃して、対立が生起して論争になる。

通常は、このように記述が流れていく。批判されて堪忍袋の緒を切った林紓が、はなばなしく登場してきて若者を攻撃する。若者がそれに反撃を加える。そうして派手な泥仕合になる、という筋書きである。新旧世代が対立したというわかりやすい展開なのだ。

だが、事実は、異なる。それ以前に不思議な状況が出現している。今まで、研究者のだれもほとんど注意を払ったことがない。林紓が反論をしているような、そうでないような、批判といえるかどうかともあいまいな彼の文章が存在している。

3 林紓が奇妙な登場のしかたをする

私が「奇妙な」というのは、林紓が書いたといわれる文章を読むことができないからである。少なくとも私が本稿を書き始める前は、そうだった。

幻の林紓論文

問題の文章は、「古文は廃止すべきではないことを論じる[論古文之不宜廢]」という。題名だけを見ると、林紓が胡適らの主張を否定しているように推測できる。想像をたくましくすれば、林紓が書いた強烈な攻撃文のような気もする。だが、

全文を見る機会がないのだから、そうと決めつけるわけにもいかない。林紓が古文を擁護し、胡適らの対立者として姿をあらわした証拠として重要な文章だと考えられる。だが、重ねていうが、不思議なことにこの文章を読むことができない。ゆえに「幻の」という。林紓研究の関係資料集をさがしても、どこにも収録されていないのだ。詳細が不明だと書いてあったりしてどこかおかしい。

『新青年』第3巻第1号(1917.3.1)の通信欄において、錢玄同が林紓を当てこすった文章を公表していることを私は指摘した。林紓の「論古文之不宜廢」は、これに触発されたのだろうか。はっきりしない。

林紓が書いた幻の該文を紹介するのは、ニューヨーク在住の胡適である。彼は陳独秀にあてた手紙(第3巻第3号1917.5.1)のなかで、次のようにいう。

このごろ林琴南氏の新しい著作「古文は廢止すべきではないことを論じる [論古文之不当廢]」という一文をみて、喜んで読みました。われわれ古文を非難する者にとって研究の足しになるはずだと考えたからです。ところが大いに失望しました。林氏がいうには、「ラテン語が廢止できないことを知れば、司馬遷、班固、韓愈、柳宗元もまた廢止すべきではないということに自然になるのだ。私はその道理は知っているが、そうである理由を説明することができない。これは古いものを好むものの病気であろう。知臘丁之不可廢。則馬班韓柳亦自有其不宜廢者。吾識其理。乃不能道其所以然。此則嗜古者之癩也」と。4頁

胡適が引用するのだから林紓の文章の重要箇所だろう。だが、そこには古文をラテン語になぞらえていることばがあるだけだ。彼は、古文を静かに擁護する。日常生活とは無関係に生き残るのが古文の運命だという主張は、あまりにも弱々しい。

胡適は、林紓の文章をもう1ヵ所引用する。その古文が間違っているという。

嗚呼、有清往矣。論文者独数方姚。而攻掊之者麻起。而方姚卒不之踣。4頁

清朝の昔に、方苞、姚鼐を攻撃するものがおびただしく出てきたが、包姚は、最後まで倒れることはなかった、というのが大意である。方姚は、桐城（古文）派の代表的人物である方苞、劉大櫟、姚鼐らを指していう。

うしろの「而方姚卒不之踣」は文法に合わない、と胡適は説明する。つまり、目的語をとらない自動詞である「踣」を否定するばあいは、「而方姚卒不踣」か「方姚卒不因之而踣」としなければならない。【統合版補記】間違いではないという説がある。程巍「為林琴南一辯 “方姚卒不之踣” 析」『中国図書評論』2007年第9期 2007.9.10

胡適は、古文の大家である林紓の文章が間違いだと指摘した。その結論は、林紓が古文の大家で「古文は廃止すべきではない」といい、「そうである理由を説明することができない」というのであれば、古文は廃止すべきであるというのもまたはっきりしたことではなかろうか、である。

古文を廃止しろという胡適の文章が、古文で書かれているのも、また矛盾したことだと私は再びいう。

重視しなければならないのは、胡適が攻撃の対象とした人物として林紓の名前がはじめて明確に登場していることだ。

胡適が、大いに失望したのも理由のないことではない。白話を痛罵し、その提唱者を抹殺してやる、というような威勢のよさは、林紓の文章には皆無だからだ。すくなくとも、胡適が引用した部分から受ける私の率直な印象である。

『新青年』集団の敵対者として林紓が存在するといっても、その登場のしかたは、颯爽というのとはほど遠い。私はそう感じる。まず、全文を読むことができないこと、さらに、外国に滞在中の胡適に引用されているということが原因なのだろう。遠くの方で、ゆらゆらとかすかに存在しているだけのようだ。

それにしても、林紓の該文は、どこにあるのか。引用しているのが胡適だけだということも気になる。今までに出版された資料類を見ると、文章の題名をいずれも「論古文之不当^マ廢」としている*⁹。

楊聯芬が正しい論文名と掲載誌を明らかにしたのは、比較的最近のことだ*¹⁰（後述）。「論古文之不宜廢」というのが本来の題名で、『民国日報』（1917.2.8）に掲載されたという。今まで題名が間違っただけのまま伝わっていたのもおかしなことだと気づく。胡適の誤記をそのままに引用し続けたという意味だ。研究者はそれを

長年にわたって検証していないことがわかる。題名の誤りを訂正することができなかったのがその証拠だ。

該文は、埋もれた林紓の文章だ。ゆえに私は「幻の」という修飾語をつけた。文学革命を圧殺しようとした古文家の代表であるはずの林紓が書いた批判文である。なぜ、全文が明らかではないのか。

調べてみて驚いた。掲載紙である『民国日報』は、オーストラリアのシドニーで発行されていた新聞だというのだ。華僑が1910年に創刊した民主主義革命を宣伝する内容であった*11。

林紓は、なぜオーストラリアの新聞に文章を寄せたのか。まず疑問に思う。彼とオーストラリアの接点が見つからない。そもそも、彼が白話運動に反対し胡適らを敵視しているのであれば、北京あるいは上海の刊行物に文章を発表するのが普通だろう。その機会は、いくらでもあったはずだ。

外国で発行されていた新聞に掲載された文章だから、胡適の手紙だけに見えるのだろうか。北京の『新青年』集団は、文書を手に入れる努力をしなかったのか。あるいは、胡適は新聞を切り抜くなり写しをつくるなりして彼らに郵送しなかったのか。疑問の多い林紓の文章だ、と私は考える。

林紓の「論古文之不宜廢」

胡適に引用された部分だけを見て、林紓の文章の主旨を推察したところで正確な把握しかできない。

林紓の該文を読むために、今回さがして得ることができた。

林琴南の署名があるこの文章は、以下のとおり。新出資料だから原文のままを掲げる。

論古文之不宜廢 （林琴南） 『民国日報』1917.2.8

文無所謂古也。唯其是。顧一言是。則造者愈難。漢唐之藝文志。及崇文總目中。文家林立。而何以馬班韓柳。独有千古。然則林立之文家。均不是。唯是此四家矣。顧尋常之牋牒簡牘。率皆行之以四家之法。不惟伊古以來無是事。即欲責之以是。亦率天下而路耳。吾知深於文者。万不敢其設為此論也。然而一代之興。必有數文家撐拄於其間。是或一代之元氣。盤礴鬱積。發洩而成至

林紓の文章をあらためてながめる。

『新青年』第3巻第1号(1917.3.1)に見える錢玄同の文章が林紓を当てこすっていたことと、何らかのつながりがあるのかと思ってもみた。だが、発表の日時(1917.2.8)を見れば、林紓の該文は、錢玄同の文章とは関係なく書かれていることが判明する。

その内容は、主として中華民国成立以後の文章界について、林紓が日常に感じていることを静かに述べているものだとわかる。中心は、胡適が引用した部分にほかならない。くりかえし以下に示す。

「ラテン語が廃止できないことを知れば、司馬遷、班固、韓愈、柳宗元もまた廃止すべきではないということに自然になるのだ。私はその道理は知っているが、そうである理由を説明することができない。これは古いものを好むものの病気であろう」

林紓は、ただひたすら古文を擁護するだけだ。

胡適が彼の文章に対して失望の感情をあらわにしたのも無理はない。ここには、白話運動を攻撃する論鋒の鋭さ、元気溢れる強靱な精神など皆無であるからだ。しかも、白話を使用するな、とも書かれてはいない。これでは自分たちの立ち向かうべき敵にはなりえない。胡適が嘆くのも納得できる。

胡適が引用しなかった部分に林紓の打ちひしがれた気分が濃厚にあらわれている。心の底に「悲しみ」を抱いた姿すら浮かび上がってくる。

日本人の斉藤少将^{*12}に「復古」であると教えられても林紓は怒りはしない。反論していないところからも、彼はその言葉を受け入れていることがわかる。

陸心源の蔵書が日本人の手に渡ったことをいい、中国では新しいものを得る前にその古いものを失うと嘆くだけだ。

日本の静嘉堂文庫が陸心源の長子樹藩から蔵書を購入したのは、1907(明治40)年のことだった。

売り立てのために蔵書の抄録が出回っていたらしい。商務印書館の夏瑞芳がそれを手にした。編訳所に勤めていた張元済に向かって、夏は、購入するつもりだと告げた。編訳の資料とすると同時に図書館をつくるときの基礎にするとという。

夏が準備したのは8万元であった*13。

張元済が以上を紹介していいかったのは、経営規模の小さい商務印書館だったが夏瑞芳の決断で書籍購入のために大金を用意したという、その夏の剛胆さである。しかし、このエピソードは、当時の商務印書館が夏社長のワンマン経営であったことをはしなくも証明している。ただ、当時、商務印書館には雨山長尾楨太郎らの日本人が勤務していたが、彼らの反応について張元済は言及していない。

日本人すなわち岩崎家の静嘉堂文庫が支払ったのは25万両だ、と張元済は聞いた。張は時の軍機大臣栄慶に京師図書館の基礎とするようすすめたがいられなかったとも。実際は、陸樹藩が最初提示したのは50万両で、のちに35万円から25万円までに減額した。最終的には10万円だったらしい*14。

蔵書をめぐって日中の知識人が大騒動を演じたわけだ。その結果、蔵書は日本に渡ってしまった。林紓の嘆きは、大きかったと理解できる。古文とそれに関連する文化財の擁護という彼の姿勢には一貫したものがある。

古文は中国の生命力だから、それを惜しげもなく棄ててしまえば国が滅びる前に文字が死んでしまうと恐れる。そうなれば日本人に笑われることになりはしないだろうか。林紓は、日本人を借りて、中国人への危惧の気持ちを表明する。

林紓の文章の主調をいってみれば、「悲しみ」であり「嘆き」であり「危惧」であり「恐れ」である。

こう見ていくと、林紓の文章の後半には、重要な言葉が登場していることにお気づきだろう。ご賢察のとおり、胡適があえて引くことをしなかった日本人〔原文：日人、東人〕だ。

見ればわかる。林紓は、日本と日本人を批判するために書き込んだわけではない。その逆なのだ。日本と日本人を引き合いに出して中国文章界の現状に対する失望の感情をすなおに吐露している。ひたすら古文を援護しているだけのことだ。

私が注目するのは、胡適が、林紓がのべた日本と日本人の部分を見捨てた点である。よりによって日本と日本人を賛美するか、と批判をしてもいいところではなからうか。

だが、斉藤少将のことは確認することはできないにしても、詔宋楼の蔵書が日本人の手に渡ったことは事実だ。これについて胡適は批判することができない。

日本人を非難すれば、すぐさま、購入しなかった、あるいは購入できなかった中国人そのものを攻撃することになるからだ。無視した、というよりも無視せざるをえなかった理由であろう。それを飲み込んで表にださなかったところに、事実を口にした林紓に対する胡適の内に秘めた怒りを感じるのはいきすぎだろうか。

「論古文之不宜廢」は、林紓六十六歳の時の文章である。六十六歳といえば、十分に老人だ。しかし、ただの老人ではない。外国文学の翻訳によって当時の文学界に大きな貢献をしている老人だ。その支持者も多く存在していたにちがいない。しかし、彼らは沈黙したままで、聞こえてくるのは、仲間内とはいえ威勢のいい文学革命、文学改良、文学革新などのかけ声ばかりだ。林紓にしてみれば、自分の一生をささげた古文が今にも棄てられそうな情況を目の当たりにすれば、嘆きたくもなる。普通に見れば、老いの繰り言である。

当時、胡適は二十七歳だから、彼から見れば林紓は祖父といってもいい世代だ。それだけ歳のひらいた胡適が目をつけた林紓の文章だった。

補 足

前出の林紓「論古文之不宜廢」について補足をする。松村茂樹氏より、掲載紙『民国日報』に「文選」欄とあるから再録したのではないかとご教示いただいた。資料類には何の説明もなかった。それで私は、「文選」という表記を頭から無視してしまったらしい。確かに、その可能性が高いように思う。前述したように林紓とオーストラリアの『民国日報』とが直接には結びつかない。再録であれば、この疑問も氷解する。ならば、初出は、どこなのか。まだ、探し当てることできない(見つけたので複写をかかげておく。初出は、1917.2.1付天津『大公報』)^{*15}。

もうひとつつけ加える。この『民国日報』についてだ。

『中国近代報刊名録』には、オーストラリア発行のものしか掲載されていないかった。中国人民大学と上海図書館が部分的に所蔵していると説明もしている。私が入手した複写は、該当記事の部分だけだ。たぶん上海図書館所蔵のものだろう。

あとから、当時発行されていた同名の新聞がほかにもあることに気づいた。ひとつは、1916年1月22日、上海で創刊された国民党の機関紙だ^{*16}。あるいは、漢口で1913年に創刊されたものもあるらしい^{*17}。

特別記載

(内外各報有轉載本欄記載者請書明係由本報轉錄)

論古文之不宜廢

林琴南

文無所謂古也唯其是願一言是則造者愈難漢唐之藝文志及崇文總目中文家林立而何以馬班韓柳獨有千古然則林立之文家均不是唯是此四家矣願尋常之賤賤簡牘率皆行之以四家之法不惟伊古以來無是事即欲資之以是亦率天下而路耳吾知深於文者萬不敢其設爲此論也然而一代之興必有數文家播柱於其間是或一代之元氣盤礴鬱積發洩而成至文猶大城名都必有山



水之勝狀用表其靈淑之所鍾文家之發顯於一代之間亦正類此嗚呼有清往矣論文者獨數方姚而攻培之者靡起而方姚卒不之踏或其文固有其是者存耶方今新學始昌即文如方姚亦復何濟於用然而天下講藝術者仍留古文一門凡所謂載道者皆屬空言亦特如歐人之不廢臘丁耳知臘丁之不可廢則馬班韓柳亦自有其不宜廢者吾識其理乃不能道其所以然此則嗜

古者之病也民國新立士皆剽竊新學行文亦澤之以新名詞夫學不新而唯詞之新匪特不得新且舉其故者而盡亡之吾甚虞古系之絕也向在杭州日本齊藤少將謂余曰敵國非新蓋復古也時中國古籍如南宋樓之藏書日人則盡括而有之嗚呼彼人求新而惟舊之寶吾則不得新而先殞其舊**意者後此求文字之師將以厚幣聘東人乎**夫馬班韓柳之文雖不協於時用固文字之祖也嗜者學之用其淺者以蹊人轉轉相承必有一二鉅子出肩其統則中國之元氣尙有存者若棄擲踐唾而不惜吾恐**國未亡而文字已先之幾何不爲東人之**

所笑也

1917.2.1付天津『大公報』

ところが、上海図書館所蔵新聞目録には、あるはずのオーストラリア『民国日報』が収録されていない。なぜだか私は知らない。所蔵されているのは、前述1916年創刊の『民国日報』だ。ほかにも同名の新聞はあるにしても、時間的に合

致するのは、これだけだ。今のところ、書くことができるのは以上である。

『民国日報』がオーストラリアの漢字新聞かどうかは、疑問符をつけてひとま
ずおいておく。

林紓の該文が、各種資料に収録されていないことは何を意味するのか。一般に
は目にすることができない文章だということだろうか。胡適以外に引用する人が
いないこともそれを裏付けているようにも見える。ただし、簡単に見ることがで
きない文章であろうとも、白話運動を激しく攻撃する内容であれば、反撃の標的
となるだろう。しかし、そうではなかった。うち捨てられた。林紓の文章など検
討に値しない、と判断されたのではないかと私は思ったりもする。批判された人
物の新聞掲載文だから研究者の関心を引かなかったものか。たとえば、最近出版
された方漢奇、史媛媛主編『中国新聞事業図史』（福州・福建人民出版社2006.1）でも
「論古文之不当廢」と題名を誤ったままだ。ただし、上海『民国日報』と書いて
いる（129頁）。

雑誌『新青年』を取り巻く状況をもう一度ながめてみよう。

旧文人たちからの反応がまったくない。空中で拳をふりあげているだけで、怒
りの持っていきようがなく寂寞にとらわれていた（鄭振鐸のことば）。そこに胡適
からの通信文が舞い込む。林紓が古文を擁護しているらしい。錢玄同、劉半農ら
は、これを見逃しはしなかった。

今まで像を結ばなかった敵の姿が、林紓という具体的な名前で焦点があって
くる。その主張が控えめであろうと、全文を読むことができなくとも問題ではない。
自分たちに賛成しない意見を出す人間は、即敵対者である。待ちにまった敵の出
現なのだ。

彼らは、敵を林紓に見定めて攻撃するにあたり、ひとつの工夫をせざるをえな
かった。林紓の文章を読むことができないから、それに反論を書くという形を取
ることができない。しかも、胡適の報告によると、反論するにも値しない文章だ
という。そうであれば、古文を擁護する偽論文を創作すればよい。それへ反論す
るのである。古文擁護も攻撃と見なす、攻撃を受けたからやむを得ず反撃する、
という巧妙な仕掛けでもある。まさに、人の意表をつく方法だということができ
よう。

4 林紓批判のはじまり 捏造論文による挑発

今から思えば、胡適がニューヨークから投函した通信文が、林紓批判に大きく舵を切る転換点だった。

林紓の名前が胡適によって公表された約10ヵ月後のことである。『新青年』に王敬軒の手紙が掲載された。これには劉半農の回答がついて1組なのである。本格的な林紓批判が開始された。

鄭振鐸の概説

五四時期の文学状況について説明するばあい、鄭振鐸が前出『中国新文学大系』第2集文学論争集に掲載した「導言」(1935)にもとづくことが多い。鄭振鐸は当事者のひとりであったから事情に詳しいと考えられる。

鄭振鐸(1898-1958)は、1917年、北京の鉄道管理学校に入学した。1919年、瞿秋白らと五四新文化運動を宣伝し社会改造を主張する『新社会』などを発刊する。また、彼は1921年に発起人のひとりとして文学研究会を設立し、商務印書館編訳所に入った^{*18}。彼は、文学革命派の一員なのだ。

その鄭振鐸が、大系のなかの「文学論争集」を編集し概説を書いている。彼が論争の状況を身近に見聞していることは間違いない。しかし、考えてみれば異様である。なにが異様かといえば、論争を見ていたとはいえ一方の側に立つ人物が約20年前を回想して記述しているのだ。勝者の記録にほかならない。公平で客観的な論述を期待するのはむづかしいだろう。そう考えるのが普通だ。鄭振鐸の文章は、一方に偏向しているという前提で読まなければならない。

王敬軒登場までのいきさつを、鄭振鐸が述べるこの「導言」にしたがってあらためて紹介しておきたい。彼の文章を慎重に読めば、事実が浮き出てくるはずだ。状況の把握には役立つと考える。しかも、勝者の記述にはどこかほころびが生じているのを見つける可能性もあろう。

陳独秀の主宰する『青年雑誌』が『新青年』に改題され、胡適「改良文学芻議」(2頁。鄭振鐸が誤記している。正しくは「文学改良芻議」)、陳独秀「文学革命論」をへ

て胡適「建設的文学革命論」が発表されることを各論の内容をまじえて紹介する。この部分で鄭が幻の林紓論文に言及しないのは、理由がある。若者の前に立ちほだかるのは、強い敵対者でなければならない。気弱な林紓は、彼にはまったく必要がないのだ。意図的に省略したとわかる。

当時の言論界において、文学革命派に対する反応がどのようなものであったか。どのように鄭振鐸が書き込んでいるだろうか。私はそこに興味を感じる。

彼ら（注：陳独秀、胡適ら）が初期の2、3年間に文学革命の問題を討論していた時、賛同者たちはもとより日一日と増加をしていたが、それに反対する人も少なくはなかった。ただし、みな有力であったわけではない。当時、付和雷同する人々が『新青年』に少なからぬ文章を発表したが、往々にして凡庸な折衷論に走るものだった。4頁

はかばかしい反応が生じなかった、つまり文学革命論が最初から大方の支持を得たわけではないことが述べられている。鄭振鐸の説明を見ると、反対論がほとんど発生しなかったし、支持もない、無視に近いものであったことがよくわかる。それが現実だった。

言論界は無反応であった、というのは、魯迅が書いた文章で有名かもしれない。当時、魯迅は、北京政府の教育部に勤めていた。その彼が「狂人日記」を『新青年』に発表するきっかけになったのが古い友人銭玄同の勧めだった。以下は、魯迅のあの有名な「自序」から。

彼ら（注：金心異。銭玄同のこと）はそのころ『新青年』雑誌を出していたが、しかし、賛成してくれる人もいなければ、反対する人もまだいないかのようだった。彼らはたぶん寂寞を感じていたのだろう、と私は思った。^{*19}

魯迅は、銭玄同のことをなぜ「金心異」とよぶのか。林紓が書いた小説が関係する。あとで詳しく述べることになるだろう。

ここで重要なのは、最初は反対者がいなかったという事実なのだ。魯迅から見

ても、反応のない状況だった。林紓の姿などどこをさがしてもありはしない。だからこそ、後に錢玄同は王敬軒名の捏造論文を発表しなければならなかった。それをバネにして勢いがついたところで、文学革命派の支援者が登場する。月刊誌『新潮』だ。1919年、北京大学の学生傅斯年、羅家倫などが白話の雑誌を創刊し『新青年』に相呼応した。といっても北京大学が必要経費を負担していた。援軍のひとり羅家倫が『新潮』に発表した興味深い、「とても」と修飾語をつけてもいい彼の論文については、あとで詳述する。

さて、鄭振鐸の文章にもどる。

「文学革命」という大旗が立てられたのは、旧文人たちの意表を完全についた[出於旧文人們的意料之外]できごとだった。彼らははじめは相手にせず無視し、ついで輕蔑しともに論じることを潔しとせず、ついには憤怒し呪詛せずにはすまなかった。5頁

旧文人たちの反応の変化を概括する。徐々に変化していったかのように書いてある。この変化がおこったのには、ある人為的な操作が必要だった。いうまでもなく、例の捏造論文による挑発である。

『新青年』第4巻第3号に王敬軒の『新青年』編集者あての手紙と劉復(注:半農)の王敬軒への返書が同時に掲載された。王敬軒は、もともと名なしの樞兵衛[亡是公、烏有先生]である。王敬軒が書いた手紙ということにしていたが、ほかならぬ新青年社の同人錢玄同の手になるものだった。/彼らはなぜそのような「苦肉の策」を演出する必要があったのか。/彼らが「文学革命」の大旗を立ててからというもの、はじめから終わりまで有力な敵たちに出会うことはなかった。彼らは「桐城派はろくでなし、文選学は魔物だと見なしていた」。しかし、いわゆる「桐城派、文選学」の者たちは、はじめから終わりまで全然とりあおうとはしなかった。ゆえに、多くの考えがあったが彼らはまったく表現しつくすことができなかった。旧文人たちの反抗言論がひっそりとして聞こえてこないものだから、彼らは空中に拳をふ

りあげるだけで、寂寞の感を抱かざるをえなかったのだ。／いわゆる王敬軒のその手紙は、旧文人の多くの見解をひとつにまとめたもので、それに痛快な致命的一撃をくわえたのだった。／しかし、しばらくして、真に有力な反抗運動がやってきた。5-6頁

王敬軒という偽名を使った捏造の手紙である、と鄭振鐸は書いているのかわからない。旧文人が憤怒するようにし向けた「苦肉の策」であった。その表現を見れば、あたかも文学革命派が追いつめられたように書いてある。だが事實は、反応がないから手の打ちようがない、だから追いつめられた、と彼らが勝手に感じただけだ。究極の打開策が、策略であった。それをあっさり認めている。驚くべき天真爛漫さである。その行為について、やましさを恥ずかしさをみじんも感じていないからこそ書くことができたというべきだ。なすべき事をやったという態度だし、正統性を疑うということもない。文学革命のために文書を捏造してどこが悪い。鄭は、居直ったということができる。自分は勝者だという認識から生じた傲慢な記述だと私には思える。

王敬軒をめぐる不可解なこと、ひとつの謎

王敬軒の偽手紙がどのようなものであったかを検討する前に、不可解なことについて述べたい。

王敬軒が錢玄同だということは、周知の事実である。辞典、筆名録などでは、王敬軒を錢の筆名だと記述するものがほとんどだ（例えば、徐迺翔、欽鴻編『中国現代文学作者筆名録』長沙・湖南文藝出版社1988.12。541頁）。はっきりいって、これには、私は違和感をおぼえる。自分の考えを筆名で発表することにはある。なんらかの事情で本名を使うことができないばあいもあるだろう。だが、自分では信じてもない反対主旨の文章を公表するときに使用したのも、筆名であろうか。大いにおかしい。こういう時は、筆名ではなく、偽名というべきだ。私は、そう考えて本稿では、偽名と称する。

もうひとつ不明なことがある。

今でこそ有名な捏造書簡である。研究者のだけれどもが、当たり前の事実として

紹介する。王敬軒は錢玄同である、と書く。だが、当然のことながら『新青年』誌上に掲載された時、偽名だと書いてあるはずがない。捏造であることは隠されたし、本当のことが明かされるのはずっと後になってからだ。

それを最初にあばいたのは、誰か。これが、はっきりしない。

鄭振鐸は当時の状況をよく知っていた。だから、「中国新文学大系」の「導言」(1935)において捏造であったと述べている。だが、これが文献にあらわれる最初かと言えば、あやしくなってくる。

1918年に王敬軒が登場してのち、鄭振鐸の指摘が公表されるのは1935年だ。単純に引き算をして17年の時間が経過している。その間、捏造された手紙であるとはわからなかったものか。

錢玄同自身が、どこかに書いていないか。一応は探した。だが私の力が不足しているらしくみつからない。

たとえば、1919年2月14日付だという周作人にあてた錢の手紙がある。

その内容はみつつの質問だ。そのひとつが林紓の翻訳についてのもの。

また、「詩人解頤語」というのは、大文豪があれ(割注:チェンバース書店の短編物語)を訳した書名ではありませんか。^{*20}

錢玄同が質問をしたのは、周作人の論文「論黒幕」のなかで述べたことに関係している。周は、次のように書く。

チェンバース書店が子供の作文練習用のために編集した短編物語を詩人解頤語と訳して西洋の聊齋志異と見なした。このような状況は笑止だとはいえ、彼の度量の大きさを称賛すべきだ。なぜならば全身が經典賢伝まみれの人が、意外にも外国のものをもってきてこじつけるのは、中国ではやはり珍しいといわねばならない。^{*21}

署名は仲密、該文は「文藝時評」欄に掲載されている。周作人が示し、錢玄同が質問した『詩人解頤語』とは、ほかならぬ林紓の翻訳であった。

(英) 倩伯司戲輯 林紓、陳家麟訳『詩人解頤語』(上海商務印書館1916.12/1918.6再版 説部叢書3=17)。馬泰来は W.& R.CHAMBERS,LTD. 発行の CHAMBERS'S COMPLETE TALES FOR INFANTS か、という。

周作人は、該論において林紓の名前をあえて出していない。錢玄同は、手紙でそれを確認したばかりか、林紓を指して「大文豪」だという。明らかに皮肉である。名前をよほど書きたくなかったらしい。それほどまでに嫌っていた。

私がこの私信に注目するのは、署名が「王敬軒／黄介石同啓」だからだ。林紓を話題にしているからこそわざわざ王敬軒の名前を使用したとわかる。錢玄同が王敬軒の偽名で林紓を攻撃したことを踏まえているのは説明するまでもない。仲間内では、当然ながら周知の事だったからだと理解する。黄介石は、「皇該死」ではないかという指摘がある*²²。「活該」と「該死」だと考えればクタバレの2乗になる。錢はふざけているのだ。

しかし、それはあくまでも私信でのことだ。公表しようなどとは考えていない。錢玄同の文章では、このあと1934年まで飛んでしまう。その中間には王敬軒に触れるものが、今のところみつからない。

劉半農を回想した錢の文章がある。15年前(としている)のことに触れて、劉が林紓、“王敬軒”、丁福保らを痛罵した時のあの熱狂的態度が、まるでありありと目前にあるようだ、と書く*²³。

林紓と丁福保は実在する。王敬軒を引用符で囲ったのは、架空の人物である、と書き分けたと了解できる。その初出は1934年7月21日だ。鄭振鐸の「導言」が1935年だから、それよりも早い。しかし、錢玄同は、王敬軒が自分の偽名だとは書いていない。

また、彼は魯迅を回想してもいる。そこでは、当時の状況を次のようにのべる。1917年、蔡元培が北京大学校長に就任し、陳独秀を文科学長(日本でいえば学部長)に、胡適と劉半農を教授に招いた。陳胡劉の諸氏は新文化運動に力を尽し、文学革命を主張した。周作人も北大教授に招かれた。周兄弟に勧めて『新青年』に文章を書いてもらい、紹興会館に足繁くかよい魯迅に催促して入手したのが「狂人日記」だ。

「狂人日記」成立についての錢玄同から見た回想になる。ここでは、錢は、自

分と魯迅の交流をのべているだけで、王敬軒が出てくるわけではない。

以上をながめて、わかることがひとつある。錢玄同は、私信のなかでふざけて王敬軒名を使用することはあった。だが、公表した文章において自分の偽名であることを認めたことはなさそうだ。

私のいう偽名なのだから、錢玄同にしてみれば公の場において自分から積極的に暴露し認定するものではなかろう。

魯迅が劉半農を回想した文章「憶劉半農君」(1934.8.1付)において、「……王敬軒に答えたなれあいの手紙[答王敬軒の双鑽信]……」*²⁴と書いている。「なれあい」だとわかっていた。日付からしてこちらも鄭振鐸の「導言」よりも早い。魯迅は、留学先の日本で錢玄同を知った。のちにふたりが親しくつきあったのは、1917年から1926年までだった。錢が魯迅を追悼する文章のなかでそう書いている。王敬軒名義の捏造論文が発表された1918年は、まさに、その時期にあたる。錢玄同自身から王敬軒にまつわる内実を聞いていたと考えて間違いないだろう(聞いていたどころか、王敬軒にかかわって重要な役割を演じていたことが後日判明した。注26も参照)。

前に引用したように『呐喊』の「自序」には、金心異という名前で錢玄同が登場している。金心異には林紓が関係して由来がある。ただし、王敬軒の件には触れていない。

もうひとつ、魯迅が筆名康伯度で発表した文章がある*²⁵。「昔の若者が、心中に劉半農という3文字で刻まれた原因は、彼が音韻学を得意としていた、あるいはいつも戯れ詩をつくっていたからではない。彼が鴛鴦蝴蝶派から飛び出して王敬軒を罵倒し『文学革命』陣中の闘士となったからである」

こちらでは王敬軒を出してはいるが名前だけにすぎない。裏の事情については、魯迅は、説明しようとはしない。

以上を見れば、ここでもある推測をすることが可能だ。王敬軒問題について、錢玄同本人が公には沈黙している。これをはじめとして、関係者はなんとなく口をつぐんでいる。ほのめかしはするが、声を大にして指摘するわけでもない。その理由は、手紙を捏造したという行為には誇るものがないという自覚が共通してあったからではないか。

後年、鄭振鐸があらわれて事の真相を暴露する。くりかえす。鄭は居直ったの

である。

興味深い事実がある。沈尹默が当時を回憶して王敬軒問題について証言している。

当時、新旧文学の双方は激烈な闘争を展開していた。(錢)玄同と(劉)半農は最も張り切っていて、林琴南を攻撃目標にした。半農(注：錢玄同が正しい)は「王敬軒」という偽名を使い、当時大騒ぎとなるなれあい芝居を玄同と演じようとしたところ、はからずも「胡(適)博士」の怒りに触れ、彼は抗議してきて、このような士大夫の面目を失う「品の悪い[不登大雅之堂]」文章は、発表すべきではない、その雑誌(注：『新青年』)は彼がひとりで編集することにし、半農に関与させないと主張した。魯迅は玄同と半農を支持していたから、「胡博士」のことは聞くと彼にきっぱりと言った。もしあなたがこの雑誌を一手に引き受けるといふのであれば、私たちは断固として投稿しない、と。こうして「胡博士」は困難であることを理解して退却したのである。^{*26}

胡適に引用符がついているのは当時の胡適批判運動に関係しているだろう。魯迅は林紓を積極的に批判していたことがわかる。魯迅のきっぱりとした態度を称賛するつもり文章だ。だが、今読めば、胡適の反応の方がまともだと私は思う。魯迅の取った態度の方が問題だ。

王敬軒の名前は、1918年の数ヵ月後にもう一度でてくる。張厚載の旧劇擁護に関して胡適が王敬軒を持ち出す(後述)。

劉半農の親族はどのように認識しているか。時間は下るが、参考までに紹介しておく。

劉小蕙『父親劉半農』(世紀出版集団、上海人民出版社2000.9)を見た。その「附録二：劉半農大事年表」の1918年3月の項目に次のように書いている。「『新青年』第4巻第3号誌上に「文学革命之反響 奉答王敬軒書」を發表し、錢玄同と協力して当時社会の封建復古思想に対して反撃を行ない、文学革命に対してはっきりとした態度を表明した」(156頁)。王敬軒が錢玄同の筆名であることは、今では常識だ。「錢玄同と協力して[与錢玄同合作]」と記述しているのはそれにもと

づいて説明している。それだけのこと。常識の範囲内におさまる。新しい発見があるわけではない。

王敬軒にまつわる実名暴露の経過については、結局のところ、以上のところまでしかわからない。

さて、鄭振鐸は、『中国新文学大系』第2集文学論争集においてわざわざ「第2編従王敬軒到林琴南」と項目をたてた。関連論文をここにまとめている。その冒頭に置くのが王敬軒名の捏造論文だ。これが革命文学運動の転換点になったという認識が鄭振鐸にはあったからだとわかる。それほど重要な論文だった。

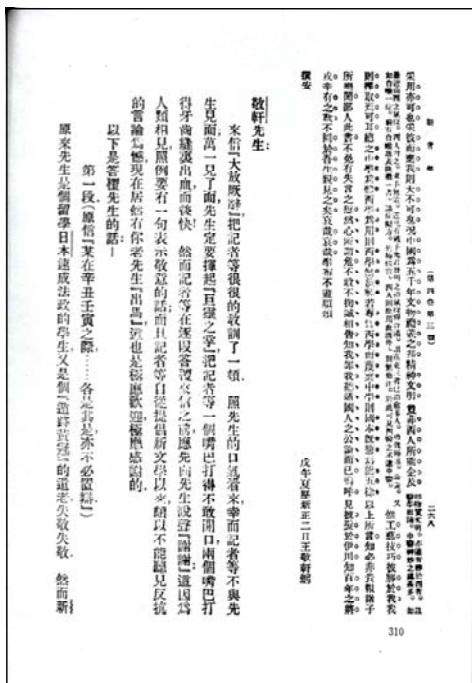
ただし、転換点の重要論文が捏造だったという点が、私にはどうしても引っかかる。もっと真っ当な方法はなかったのか。注目を集めるためなら何でもしたのか。何をしてもいいのか。そう、彼らは、文学革命のためなら、何をしてもいいと考えていたに違いない。その正当化のひとつが鄭振鐸の編集になる『中国新文学大系』第2集文学論争集である*27。

銭玄同（偽名が王敬軒）のばあい

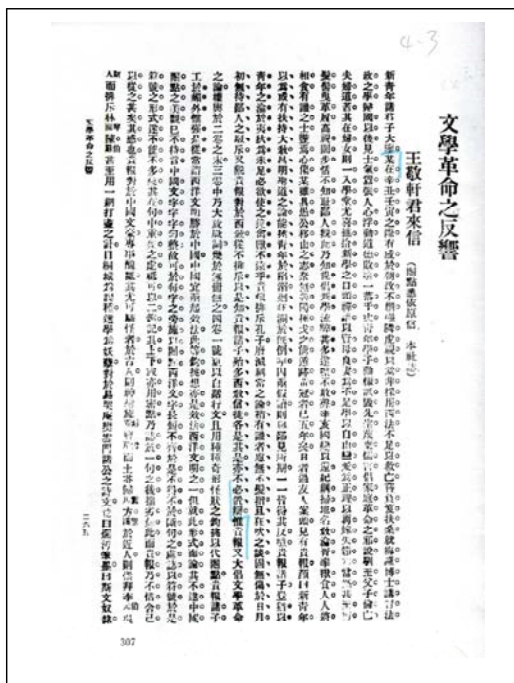
1918年当時、林紓は、六十七歳になっていた。文学革命に当事者たちの年齢は関係がない。ただ参考のためにだけ各人の原籍と所属、年齢を示す。

陳独秀（1879-1942）	安徽懷寧	北京大学文科学長	四十歳
魯迅（1881-1936）	浙江紹興	中華民国教育部部員	三十八歳、
周作人（1885-1967）	浙江紹興	北京大学文科教授兼国史編纂処編輯員	三十四歳
銭玄同（1887-1939）	浙江吳興	北京大学国文系教授	三十二歳
劉半農（1891-1934）	江蘇江陰	北京大学法科預科教授	二十八歳
胡適（1891-1962）	安徽績溪	北京大学文科教授	二十八歳
羅家倫（1897-1969）	浙江紹興	北京大学学生	二十二歳
鄭振鐸（1898-1958）	福建長樂	北京鐵路管理伝習所学生	二十一歳（浙江永嘉は生地）

なるほど、年齢だけから見ても老人（旧人）に対立する若者（新人）という図式が成立しそうだ。林紓（福建閩侯）の六十七歳に比べれば、という話だ。陳



劉半農の反論



王敬軒名の捏造論文

独秀を含めて彼らは全員が若者である。それにしても、林紘ひとりに対して複数の青年が集団をくんで批判する情景は、どこか異様に見える。林紘はひとりでも多数に対抗できるだけの位置と実力があつた、と逆にいうことができるかもしれない。

舞台は『新青年』第4巻第3号(1918.3.15)の「文学革命之反響」欄だった。

『新青年』は、読者からの手紙欄を開設していた。編集部あての手紙だから「王敬軒君來信」と題された理由だ。題名の下に「圏点はすべてもとの手紙のまま」と注釈をつける。これにも意味がある(後述)。劉半農の反論(今、仮に「答覆王敬軒先生」と題しておく)が同時に掲載されて対になる。劉の文章は、王名義の手紙に比較して約3倍半もある。簡単な返答ではないことが、その圧倒的な分量によって示されている。ここからしてすでに公平ではない。対立する両者は同量の字数で討論する。これが常識的な規則だが、それを遵守する考えははじめからないのである。なにしろ「なれあいの手紙」なのだ。規則はあってもないと同じ

だ。

劉半農は、以下のように8分解して記述する。今、それにあわせて内容を要約して紹介したい。

第1段

王敬軒の自己紹介からはじまる。辛丑(1901)壬寅(1902)、日本に留学し梅謙博士について法政の学を学んで帰国した。帰国後に見るものは、士気は放縱、人心は浮動し、道徳は損なわれてガタガタである。家庭革命の邪説が唱えられてもいる。新学が提唱されて流弊がはなはだしいことを知るのだ。『新青年』は孔子を排斥し、儒教の根本を廃棄せよとの論を掲載する。諸君は外国教〔西教〕の信徒であると知った。307頁

王敬軒は日本に留学していたという設定になっている。錢玄同は、1906年、日本に留学し早稲田大学在学中に魯迅らを知った。自らの経歴を踏まえているのだろう。

第1段では、王敬軒が日本留学を経験していて、頭の固い孔子教の信者だと読者が理解するようになっている。外国に関係していながら、頭の中身は保守そのもの。おのずと林紓を連想するように誘導するのだ。

これに対して劉半農は、どのように反論したか。

まず、批判の文章を寄せてくれたことに感謝する。すなわち、「記者(注:劉半農のこと)らは新文学を提唱して以来、反抗の言論を聞くことができなかつたことを残念に思っていた」(310頁)と書いている。語るに落ちるとはこのことだ。反応がなかつたからこそ文書捏造に走った。

さて、劉半農は王の経歴に触れる。日本に留学し速成法政の学生だったのか、と。梅謙次郎が法政大学を設立していることを知ってこう指摘した。一般にいつて、「梅謙博士」とあるのを見てすぐさま言及できることではない。錢玄同と劉半農が裏で連絡をとっていることの証拠だ。「梅謙博士」はあとで劉半農の文章にもう一度出てくる。

『新青年』が孔子を排斥しているのには理由がある。それが王には理解できないのだろう。「根拠のない狂気の叫びは堅牢で時世とは無関係〔狂吠之談固、無傷於日月〕」(311頁)だと劉半農は罵りかえす。外国教は孔子教よりもまし、とい

う比較の問題にすぎない。陳独秀、蔡元培の名前と文章名をあげて、彼らの考えに同調していることを示す。罵りの応酬である。

第2段

王敬軒は、問題は記号であるとのべる。『新青年』は文学革命を提唱し、奇怪な形状のカッコを使用し圏点に替えている。外国に媚びている。中国文字には圏点があう。307頁

劉半農の反論。外国式の符号を採用しているのは、中国の符号では間に合わないからだ。312頁

王は日本に留学しているのに、それが理解できないのか、という意味を含ませている。

王敬軒手紙の冒頭、題名下に「圏点はすべてもとの手紙のまま」と注釈がつけられていることを指摘した。王敬軒のほぼ全文には圏点がほどこされている。小さな活字に3種類の圏点をくまなくつけるから読みにくいことはなはだしい。段落もおかない。くわえて（偶然だが）印刷が不鮮明である部分もあって、読みにくさを倍加させる。一方の劉半農論文は、大きな活字を使用し段落をもうけゆったりと組版している。圏点にかえて傍線をほどこして読みやすい。『新青年』の編集者は、そういう印象を与えるように活字をわざわざ指定した。用意周到だといえることができる。なにがなんでも反撃しないではおかない、という劉半農らの意志の強さを感じる。

外国式の符号を使用するように提案したのは錢玄同その人である。だが、王敬軒名の文章では、錢自らの主張とは反対の中国本来の圏点を強調する。自分の考えではないことを述べるばあいを使用した王敬軒名は、ゆえに筆名ではありえない。偽名というべきだ、とくりかえす。

第3段

中国の文豪を無視していると王はのべる。近人では李伯元、吳趸人、林琴南、陳伯巖らだ。「桐城派はろくでなし、文選学は魔物だと見なしている[目桐城為謬種。選学為妖孽]」。林紓のいう「而方姚卒不之陪」は、前の文からの続きを見なければならぬ。307-308頁

劉半農は、樊增祥と易順鼎の作品から「くそ[爛汚]」部分を引用して反論す

る。林紓の語句は、語調が問題ではなく文法問題だ。313-314頁

林紓の語句を出して次の第4段の前ぶれとする。

第4段

王敬軒は、「林氏は当代の文豪である」と書きはじめる。

林紓は、唐代小説の気品でもって外国小説を翻訳している。外国人のことを述べているにもかかわらず、それを感じさせない。尋常の文人ができることではない。ところが、貴報（注：『新青年』のこと）は通じないと中傷しているのは、まことに予想外のことである〔真出人意外〕（308頁）。4巻1号に掲載された周君の翻訳した陀思の小説こそが、通じないという批評があたる。某（注：王敬軒のこと）は外国語はできず陀思の原文がどのようなものか知らない。が、もし原文がこのように通じないものであれば翻訳するにはおよばない。吟辺燕語、香鈎情眼など林氏の翻訳小説こそがすばらしい。また、掲載される白話詩は噴飯ものである。

308頁

林紓を擁護し支持してみせる。だが、勇み足の箇所があることにお気づきだろう。『新青年』ではそれまで表だって林紓批判を行なっていない。当てこすり、林紓の名前に触れることはあったにしてもだ。それにもかかわらず、あたかも『新青年』誌上で批判が実行されたかのように書いた。そうでもしなければ林紓擁護の手紙が成立しないとわかっていたからだ。

劉半農の林紓評価に関する反論は、約5頁もある。力を込めた部分だと考えてよい。ここが主要箇所なのだ。劉は、さらに段落を4つに区切るからそれに従う（小見出しは、理解しやすいように樽本がつけた）。まず、劉の言い分を聞こう。

1. 林紓の翻訳小説

林紓が翻訳した小説を「娯楽本〔閑書〕」として見れば攻撃する必要はない。たとえば「ハガード〔哈氏〕叢書！」などだ。しかし、少しの文学的意味もない。

理由1：原稿の選択がよくない。価値のない作品を翻訳している。

理由2：誤りが多すぎる。原本と対照すると削り改め原本の面目を失っている。外国語が堪能でない友人が訳すことができない箇所、あるいは辞典を引くのを怠った箇所は、ごまかした。林氏は外国語を理解しないから、比較対照してもわからないのだろう。

理由3；林氏がやっているのは「娯楽本」であって、文学的意味のあるものではない。著書と訳書は根本的に異なる。訳書は原本に忠実でなければならない。

314-315頁

劉半農があげた批判の理由3カ条は、のちの林紓批判の原型になった。

文学革命派が実行した林紓批判は、その根本に大衆小説に対する嫌悪、輕蔑が横たわっていた。文学ではなく娯楽本だというのだ。林紓訳書の大衆小説部分にのみ焦点をあわせ、林たちが娯楽書しか翻訳していないかのように言いたてるのである。

だが、林紓たちの翻訳にはシェイクスピアも含まれているではないか。こちらのシェイクスピアについては、劉半農は特別に批判を加えた。そのあげく、とんでもない展開になる。事実を知れば、驚かない人はいないだろう。

2. 林訳『吟辺燕語』

王敬軒が推奨したふたつの書名があった。『吟辺燕語』と『香鉤情眼』*28だ。

『吟辺燕語』に関しての方がより重要な意味をもつ。こちらについて劉半農は、次のように批判した。

「『吟辺燕語』は、本来は英国の戯曲である。林氏は「詩」と「戯曲」のふたつの区別がついていない」316頁

原文は「詩」と「戯」である。林紓は、シェイクスピアの「詩」、彼のことを「詩家」と称している。いうまでもなく詩人という意味だ。劉半農は、それにもとづいて「詩」と「戯」に分けるのだろう。ただし、実際に出てきたものは戯曲ではなく、散文で小説に仕立てたもの（小説化本）だった。劉は、そこを攻撃する。つまり、林紓は、シェイクスピアの戯曲を小説に書き換えて翻訳してしまった。戯曲と小説の区別もつかないデタラメな翻訳である。そのことをいうのに『吟辺燕語』で代表させた。

なにが重要な意味をもつかといえば、戯曲の小説化というこの指摘は、のちのちまでもくり返して引用されることになるからだ。林紓批判の重要な根拠である。必ずといっていいくらいに理由としてあげられる1条だ。

劉半農のいう通りであれば、つまり、林紓らが戯曲を小説に書き換えたのであれば、いかななものかと私も思う。しかし、事実はそうではない。『吟辺燕語』

の原作を知れば、問題は解決する。

該書は、(英) 莎士比著、林紓、魏易同訳『(英国詩人 神怪小説) 吟辺燕語』(上海・中国商務印書館 説部叢書一=8 光緒30.7(1904)/光緒32.4(1906)三版)である。

翻訳書の表示は、シェイクスピア著となっはいる。だが、実は、ラム姉弟(Charles Lamb, Mary Lamb)著『シェイクスピア物語 Tales from Shakespeare』(1807)が原本なのだ。原本である『シェイクスピア物語』が小説仕立てなのだから、林紓たちはそのまま翻訳したにすぎない。

劉半農は、原本がラム姉弟の作品だとは知らなかった。シェイクスピア著としか表示されていない。ならば、原作は戯曲にほかならない。林紓が勝手に書き改めて小説にした、と判断した。誤解である。『吟辺燕語』についていうと、無知と誤解にもとづく批判だから、林紓たちにとってみればまったくの冤罪であり濡れ衣になる。ひどい話だ。

劉半農が自信満々で断定し、しかも実は誤ったこの批判は、後の学界に多大な影響を与えた。林紓批判を正当化する根拠となったのである。批判者の誰も、『吟辺燕語』の原作が何であるのか調査しようとはしない。調査せずして、劉半農の批判を口移しに引用して林紓批判の尻馬に乗る。しかも、のちに鄭振鐸が巧妙に批判を誘導した。

3. 「陀思之小説」

王敬軒は「周君の翻訳した陀思の小説」と書いた。「陀思の小説」はこのままだとわかりにくい。そう感じるように、わざとそのように表現したのだと理解できる。

劉半農は打ち合わせ通り、ここに噛みつく。王のいう「陀思之小説」とは、(W. B. Triltsch 著、周作人訳)「陀思妥夫斯奇之小説」を指すのか、と。ドストエフスキーは、「陀思」のように中途半端な略しかたをするものではない。それでは林紓氏も賛成しないだろう。「梅謙博士」と同様に略すなら別人になってしまう。姓は梅、名は謙次郎なのだと言指す。317頁

4. 胡適の白話詩

胡適の白話詩が気に入らなければ、できるものなら自分で修改してみればいいのか。318頁

林紓批判の中核は以上である。残りは簡単にすませよう。

第5段

王敬軒はいう。西洋の字句を取り入れ、漢字の素晴らしさを知らない。西洋文学、それも詩と小説と、どちらかといえば小説のほうに重きをおいているが、幼稚なものだ。308-309頁

劉半農の反論。文字は思想学術を表わす符号にすぎない。小説を重視するといっただけで批判するが、それならば、王氏が大いに持ち上げる林氏は自らが反省すれば後ろめたいところがはっきりする。319-321頁

林紓は大いに小説を翻訳している。だから、王敬軒が小説をくさすのは、いわば天に唾することだ、という意味だ。

第6段

王敬軒は、桐城の文、文選の文が外国人の白話詩に比較できない奥深さを有していると主張する。309頁

劉半農は言い返して、『新青年』が「桐城派はろくでなし、文選学は魔物だ」と反対していることはすでにこれ以上仔細に述べる必要もない、だ。321頁

第7段

今日の真に新文学を提唱できるのは、嚴復と林紓のふたりだけである。論理学を名学と訳し、理想国を烏托邦と訳すなどすばらしい。『新青年』が外国の文字を漢文にはめ込めるのに比べれば、その優劣は明らかだ。309頁

名詞の翻訳については再三討論しているが、解決することのできない難問なのだ。西洋の Logic と中国の名学は同じではないし、Utopia を烏託邦とするのは完全に音訳しているにすぎない。王敬軒が漢文に英語をはめ込むことに反対すれば、劉半農は反論においてわざとローマ字を使用してみせる。嫌味全開である。

第8段

王敬軒は、新文学に反対しているわけではない。『新青年』の諸氏が旧文学を排斥し新文学のみを言うのに反対なのだ。309-310頁

「中学為体、西学為用」を提唱する。日本でいう「和魂洋才」にほかならない。劉半農は逆であって、新しい知識が豊富でなければ旧学を研究する資格はないと反論する。325頁

以上、王敬軒（錢玄同）と劉半農の主張を紹介した。

『新青年』誌上でくりひろげられたこの問答は、文学革命派にとっては重要な位置を占める。運動の転換点となったからだ。

仲間どうして捏造した論争であるという考えが、どうしても私の頭から去らない。その意味で、最初から劉半農の勝利が約束された反論、論争なのだ。

それにもかかわらず、私が見れば『吟辺燕語』についてはほころびが生じてしまっている。その事を今まで誰も指摘したことがないというのも、妙なことである。林紓を批判することがまったくの常識になっているためだろうと考えたりする。

王敬軒に追隨する者が出現した。『新青年』第4巻第6号（1918.6.15）に「討論学理之自由権」と題して崇拜王敬軒先生者の投稿があるのがそれだ。本物か、あるいはこれも偽作なのか、それはわからない。それに対する陳独秀の返答「復崇拜王敬軒者」が掲載されていることを記しておく。

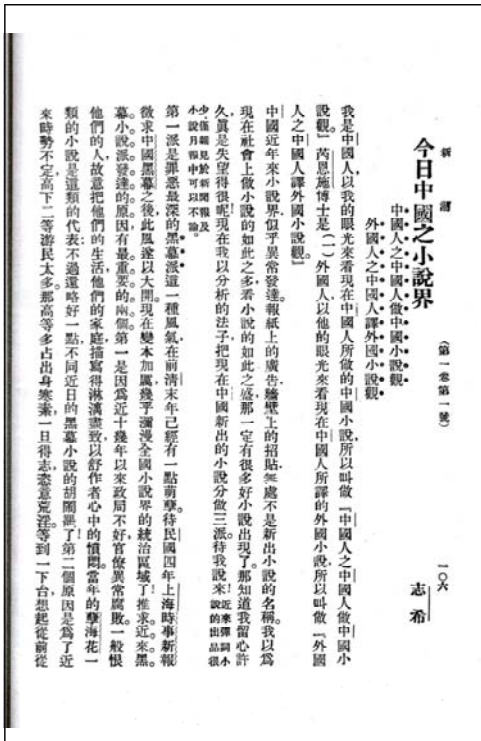
劉半農の林紓批判には、援軍が登場する。支援者は劉半農論文に触発され、林紓をどのように罵ってもよいと考えた。批判の程度をより拡張しており、これがさらに驚くべき結論に到達するのである。

羅家倫のばあい

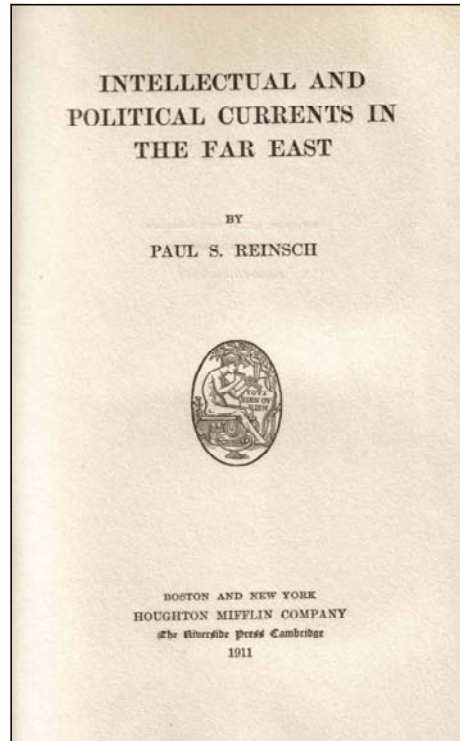
林紓批判は、外国人の援助をも得て行なわれた。といっても文字通りではない。少しひねってある。つまり、外国人の文章を引用して林紓を攻撃するのだ。中国人である著者が直接批判するよりも、権威、威力がさらにあるように感じるからだろう。高等技術だといってもいい。

志希「今日中国之小説界」(『新潮』第1巻第1号1919.1.1 / 上海書店影印1986.4. 106-117頁)がそれだ。志希は、羅家倫^{*29}の字である。英語の著作を引用しているところが特徴だ。彼は、この後の1920年にアメリカへ留学する。それ以前から英語が堪能だった。

羅家倫のこの論文は、べつに珍しいものではない。幻の林紓論文とは異なり、普通に読むことができる。『中国新文学大系』第2集文学論争集（1935）^{*30}に収録されている。ゆえに、よく知られた論文であるといってもよい。



羅家倫の論文



ラインシュの著作

羅論文には、林紓批判のやり方が典型的にあらわれている。私が注目する理由だ。

羅論文の内容は、みっつにわかる。

ひとつは、「中国人が書いた中国小説を中国人がどのように見るか」という。つまり、羅家倫が中国人を代表して目の前に流行している小説について分析する。もうひとつは、「中国人が翻訳した外国小説を外国人がどのように見るか」という内容だ。見る外国人はラインシュである。

ポール・S・ラインシュ (Paul S. Reinsch, 1869-1923) は、1913年から6年間、アメリカ駐華公使をつとめた外交官である*31。

彼の著書 “Intellectual and Political Currents in the Far East [極東における知と政治の動向] ” (HOUGHTON MIFFLIN COMPANY, 1911.11) の一部分を使用して羅論文が成立している。あとで詳しく紹介しよう。

最後部分は、小説家および外国小説の翻訳家へ向けての羅家倫による提言となっている。

羅家倫は、目前の小説を紹介して3種類に分類する。すなわち、官僚の異常な腐敗を暴露する小説〔黒幕派〕、千篇一律のうわついた恋愛小説〔濫調四六派〕、（彼にとっては）どうでもいい無思想小説〔筆記派〕である。

羅がそれぞれの種類に当てはめた固有名詞を掲げた方が理解しやすい。暴露小説は、民国以前の『官場現形記』『孽海花』の流れをくむ、たとえば『留東外史』などを指す。恋愛小説家としては、徐枕亜、李定夷の名前をあげる。無思想小説は、その内容を「言情」「神怪」「技撃」「軼事」に4分する。雑誌は、商務印書館が発行する『小説月報』があげてある。

これが、羅家倫の見た当時の中国小説界の現状だった。若者を害するこれらの書籍について、（小説を書くことを教えて）学生を陥れる組織について、教育部が早急に取り締まらないでいられようか^{*32}、と書いていることに注目しておく。重要な箇所だからあとで問題にする。

ラインシュが見た中国における外国小説の翻訳については、どうか。

羅家倫は、ラインシュの文章を引用漢訳する前に、次のように述べて論文の方向付けを行なう。

中国人で外国小説を翻訳するものとしては、最初に林琴南氏をあげる。林氏は私たちの先輩であり、私は彼を攻撃（原文のまま）するつもりはない。林氏自身は外国語を理解せず、往々にしてだまされたと認めており、さらに彼の轍を踏まぬために外国語を学ぶようほかの人に勧めてもいる（四）。ゆえに「許す〔恕〕」という道理に照らして私も彼を攻撃したくはない。しかし、アメリカのラインシュ博士は、「賢者をしかる」という考えを抱いて林氏に対していくらか遠回しに批判している。110頁

文中の「四」というのは、羅による注釈だ。これを説明しておく。原文は、次のようになっている。「（四）見林訳撒克遜劫後英雄略自序」。少しくわしくいうと、（英）司各徳著、林紓、魏易訳『（国民小説）撒克遜劫後英雄略』上下冊（上海

商務印書館(1905.10)/1914.4再版 説部叢書1=27。原作は、Walter Scott “Ivanhoe” 1820)の林紓「序」に書いてあるという意味になる。

林紓は、この序において、伍昭辰が訪問した時、スコットの作品がよいことでふたりが意気投合したところから書き起こす。羅家倫が紹介した部分に該当する個所を以下に示そう。

私は外国語に通じておりませんが、訳述者がのべる物語を聞くたびに、往々にして伏線接続、変調脈絡のところになが古文家の言葉に大いに似ているものを感じるのです。……1頁

周知の通り林紓は、外国語ができなかった。翻訳者が口述するのを聞くはしから古文になおして筆記していた。彼は、そのやり方をここで述べているにすぎない。羅家倫は、どこから「往々にしてだまされた」という意見を引っぱり出してきたのか。不可解である。羅にこう書かれて、林紓がもしそれを読んだとして、彼は何のことだか理解しなかっただろう。さらに、羅の記述に該当する部分をさがすと、林紓序の末尾にとぶ。

惜しいことに、私はすでに五十四歳であり、書を抱えて学生のあとに従い、外国語の先生につくことはできない。訳書のすべては、耳にたより目をおおっていたわけで、まことに私の人生の大不幸であった。外国の文章の大家には、フランスではデュマ父子を知っており、イギリスではスコット、ハガード両氏を知っている。しかもスコット氏の本は、技巧が格別に違っているのだ。中国と外国の文章が異なっていることを考えると、私淑したくとも従うこともできない。ああ！若者学生諸君よ、この老人の過ちをどうして戒めにしないでいいものか！4頁

ここでは、林紓は外国語ができないことを「人生の大不幸」だと書いている。外国小説を味わうためには、外国語を理解していなければできないことだ。その認識が林紓にあったことは、わかる。外国語を学ぶ環境にはいなかった彼は、そ

の学習を若者にむかって謙虚に勧めている。それだけのことだ。自分の翻訳という仕事に自信を持っているがゆえに、自分のできなかつた事柄について余裕をもって若者にむかって説いている。ここから林紵があたかも自責の念にさいなまれていると読みとるのは、過度の反応だと私は考える。

ということは、羅家倫が、林紵について外国語を理解していないことを恥じているように説明したのは、曲解だということになる。考えてみれば、自分の著作に関連して自らが不足していることをあからさまに述べることは、そうあることではない。自著のできればには自負の念を表明するのが通常だ。

林紵を「攻撃」するつもりはない、と書いて、羅家倫は冒頭からケンカ腰であることが明らかである。後輩である自分は攻撃しない、と否定してみせる。否定を装っている。だが、次に外国人が特別に登場する。ラインシュは、林紵を批判している、つまり、あえて「賢者をしかる」外国人が前面にでてくるという段取りだ。先輩後輩のしがらみのない外国人だからこそ中国の現実がよく理解できている、といたいらしい。その外国人が行なった林紵批判がどのような内容なのか、羅は、引用して丁寧に紹介する。少し長いが原文を翻訳して披露したい。ひとまとめに示すことが、羅家倫が林紵批判にさいして採用した彼の方法を理解するための助けになると考えるからだ。

ラインシュ博士がものした『遠東思想政治潮流』という本において、次のように書かれている。「中国人のなかに嚴復と同郷で名を林琴南という人がおり、彼は多くの西洋の小説を翻訳した。たとえば、Scott、Dumas、Hugo らの著作で最も多い。……中国は維新以来、文学という項目についてはなおまだ確実に有効な新しい動機、新しい基準がないとはいえ、旧文学の遺伝もまだ少しも打破されていない。ゆえに新文学の潮流も発生しておらず、現在、中国において西洋文学が勢力をもっているけれども、しかし中国人が翻訳する西洋小説を観察すると、中国人はなおまだ西洋文学の真の価値を理解していない。中国では近来ひとにぎりの文人が翻訳したのはすべて Harriet Beecher Stowe、Rider Haggard、Dumes、Hugo、Scott、Bulwer Lytton[、] Canan Doyle、Juls Verne、Gaboriau らの小説である。多くが冒険物語および「ロマンチシ

ズム [荒誕主義] の不自然な作品だ。東方の読者が Thai^マ keray や An^マ tole France
らの著作を理解するにはなお時間がかかるだろう」110頁

欧米の作家名は原文のままである。ただし、誤植がある。羅家倫は『新潮』創立者のひとりであり編集者をもつとめているのだから誤植を減らす努力をしていたはずだ。だが、上のような結果になっている。誤植を指摘したついでに触れておく。羅は、文中で2ヵ所でてくる「ロマンチズム [荒誕主義]」をふたつともに Romanism と書き誤る。

ラインシュは林紓を批判している、と羅家倫は書き始めた。だから、ラインシュの引用がそれに続いていれば、読者は、当然、林紓批判が継続して展開されていると受け取る。また、羅は、そう理解するように文章を構成して読者を誘導するのだ。だが、実のところ、林琴南が多くの西洋小説を翻訳した、とラインシュは書いているにすぎない。

注意してほしい。ラインシュが林紓批判を行なったと読者が思いこむように、羅は文章の舵を取るのだ。

ラインシュの原文をここで示せば、羅家倫がほどこした小細工が一目瞭然だろう。「第4章 中国革新運動における知的傾向 CHAPTER IV. INTELLECTUAL TENDENCIES IN THE CHINESE REFORM MOVEMENT」から原文を引用する。

Credit is also due S^マ in Chin-nan, a fellow provincial of Yen Fu, for his admirable rendering into Chinese of the novels of Scott, Dickens, Dumas, Hugo, and other Western writers. p.158

栄誉は、当然ながら嚴復と同郷の林琴南にも与えられるべきだ。なぜなら、スコット、ディケンズ、デュマ、ユゴーほかの西洋作家の小説を、中国語へとすばらしい翻訳を行なったからである。

ラインシュは、林琴南の林をなぜかしら Sin と誤記した。単純な誤植だろうから、今は問わない。彼は、文章の前段で嚴復、梁啓超らの翻訳がすばらしいことを称賛している。その文脈におけば、林紓の翻訳も同様にラインシュから高い評

価を受けていることは動かしようがない。しかるに、羅家倫は、文章の最初に置かれた「榮譽」についての語句を削除した。それは、ラインシュ論文にはもともと存在しない林紓批判を彼がいかにも行なっているかのように見せかけるためにはじゃまだったからだ。まさに、白を黒といいくめるための小細工だといわざるをえない。また、ラインシュがあげた外国作家のなかからディケンズを省略したのも、羅家倫には特別の用意があったためである（後述）。

羅家倫の作文術は、知らない人が見れば手がこんでいる。私がそう考えるのは、記号の「……」を利用してはるか後方に位置する文章をまるで一続きの文脈に存在しているかのように装っているからだ。魔術といってもいい。

記号「……」は原文で6頁分を意味する。それをとばして以下の原文が続く。

The definitive effect of the new movement on literary standards and production has therefore not yet declared itself. There has, however, been a great deal of indiscriminate borrowing from all kinds of sources. The fondness for literature inspired by the old traditions of China has not abated, but it cannot be said that any distinct tendencies of modern literature have emerged. European letters have thus far had but a superficial influence in China. It is always interesting to note what books will be first translated. Chinese editors and translators have judged that the following would best respond to the curiosity and intellectual wants of their public: Harriet Beecher Stowe, Rider Haggard, Dumas, Hugo, Scott, Bulwer-Lytton, Conan Doyle, Jules Verne, Gaboriau, and Zola. That being so, we must needs submit to having our literary tastes and standards judged for a while according to the impression made by these writers. It seems to be quite generally true that the books first translated are tales of adventure or the artificial products of romanticism. It is only slowly that Oriental readers learn to care for or come to understand a Thackeray or an Anatole France. pp.164-165

文学の基準について、新しい運動による決定的な結果および作品は、ゆえにまだ明らかにされてはいない。しかし、すべての種類の源から大量に見境のない取り込みがなされている。中国の古い伝統に刺激された文学への愛好

も衰えてはいないが、しかし、近代文学の明確な潮流が出現したということもできない。ヨーロッパ文学がおおいにもたらされたが、中国では表面的な影響にすぎない。どのような書籍が最初に翻訳されるのかを記録することはいつも興味深い。中国の編集者と翻訳者たちは、次のようなものが一般大衆の好奇心と知的要求にもっともこたえるものだと判断した。すなわち、ハリエット・ピーチャー・ストー、ライダー・ハガード、デュマ、ユゴー、スコット、ブルワー＝リットン、コナン・ドイル、ジュール・ヴェルヌ、ガポリオそしてゾラである。ゆえに、私たちは次のことを甘受しなければならない。すなわち、私たちの文学趣味および標準はしばらくの間、それらの作家によって作られた印象によって判断されているということ。最初に翻訳された書物は、冒険物語か技巧をこらしたロマンチズムの作品であることは、一般にいてまったく事実であるらしく思われる。東方の読者がサッカーあるいはアナトール・フランスの作品を好むようになる、あるいは理解するようになるにはもうすこし時間がかかるだろう。

この部分は、中国における当時の翻訳作品についての一般状況を説明しているだけだ。たしかに林紓とは無関係ではない。だが、西洋文学を翻訳したのは林紓だけではなかった。ラインシュがあげた作家たちの翻訳の多くは、林紓以外の人々も漢訳している。全体を見ればきわだった貢献をしたのは林紓であるにしても、そのすべての責任を林紓ひとりに押しつけることはできない。当然のことだ。

羅家倫は、一般的な解説を林紓についての説明に直結した。そうすることにより、ラインシュの記述が、すべて林紓についてのものであるかのように読めてしまう。これが羅のほどこした工夫なのだ。

もうひとつ、日本文学についての紹介がある。

羅は、ラインシュの文章から引用して日本での創作、翻訳は東京弁で行なわれていることなど、日本文学の状況について作家名をあげて要約説明した。それらの人名は、たとえば、Toson Shimazaki、Mori Ogowai、Homeci^{ママ} Iwano、Natzume、Kwatai Tayama、Tafu^{ママ} Nagai、Tunikida^{ママ}、Hasagawa^{ママ} という調子だ。

原著が英文だから西洋の作家を原文であげるのはしかたがない。それでも英文

の作家名を見て理解できる読者は限られる。英語ができる人しか相手にしない、という態度表明だろう。だが、日本の作家名をラインシュの記述をそのまま、しかも羅が責められるべき誤植をまづして（Hasagawa^{ママ} はラインシュの間違い）提出するのはいかなものか。漢字という便利なものがあるではないか。島崎藤村、森鷗外、岩野泡鳴、夏目（漱石）、田山花袋、永井荷風、国木田（独歩）、長谷川（辰之助。二葉亭四迷）と表示する知識と親切心が、羅家倫には欠けていた。もっとも、該論文の主旨は、学術上の正確さを追求するという誠実さとは無縁のものだ。だから、それがかまわないという見解は成立する。

日本の紹介部分の最後で羅が翻訳した箇所を下に原文とともに示す。

Among English novelists, none is more widely read in Japan than Dickens. p.328

日本において、英国小説家たちのなかで、ディケンズよりも広く読まれた作家はひとりもない。

但是訳出最多，為社会最崇拜的是 Dickens 呢！111頁

しかし、翻訳が最も多く社会で最も崇拜されたのはディケンズであった。

羅家倫は、日本でディケンズが好評を博したことを強調したかった。そのため、ラインシュが林紓賛美のなかで言及していたディケンズを意図的に削除したのである。評価されるディケンズの作品を林紓が複数翻訳しては都合が悪かった。姑息なやり方である。

ラインシュ論文を紹介して締めくくりをどうしたか。

ラインシュ博士の言葉は以上の通りである。林氏および中国の小説翻訳家に考えてもらいたいと私は希望する。111頁

こう書かれてラインシュ自身は驚くと同時に困惑するのではなかろうか。そんなことは書いてはいない、と彼はいうだろう。ラインシュにしてみれば、自分の著作を著者の意図とはまったく逆の方向に勝手に使用されて迷惑であったに違いない。

最後の提言部分を簡単に紹介する。

羅家倫が重ねて強調するのは、小説は社会を改良するためにあるという点だ。それを理解して創作、翻訳をやれという提言となる。梁啓超の主張が、羅に受け継がれていることが理解できる。

さらにいえば、彼は、魏易、馬君武の翻訳をとりあげ、勝手に削除すると批判している。こう書くのは、読者を誤誘導して巧妙だ。翻訳家としてやってはならない、と羅家倫が述べるのだから、まさか羅自身が自分の論文で勝手に削除しているとは誰も思わない。

あきれるとはこのことだ。自分がラインシュ論文について行なった削除は棚にあげている。林紓批判をくりひろげるために必要であれば自分には許される行為だが、他人が似たことを実行すると許さないと批判するのである。こういうのを、一般に二重基準という。手前勝手といいなおしてもいい。

羅家倫が、ポロリともらした取り締まりについて検討しよう。

官憲による上からの弾圧を歓迎し主張する

羅家倫は、当時流行していた恋愛小説と、それを書くように教える組織について、教育部が取り締まらないはずがない、と書いていることを紹介した。実は、彼は、それより前の部分にも同様の記述をしている。

すなわち、1916年、范静生が教育総長だった時、内務部とともに暴露小説およびそれを掲載した雑誌など数十種を取り締まった*³³、と羅は説明する。そればかりか、彼は、「私は、現在も当局は注意してしかるべきだと願っている」という。当局が取り締まることを期待している態度が露骨なのだ。

范静生が取り締まったのは1916年だ、と羅は明記した*³⁴。たしかに、当時、言論弾圧があった。

たとえば、宋原放「近代出版大事記」には「1916年 内務部は民国2年11月より5年3月まで、中外の新聞雑誌印刷物全部で60種を取り締まった」*³⁵と説明がある。注意しなければならないのは、取り締まりが行なわれたのは1913年11月から1916年3月までだった点だ。1913年といえば、第2革命になる。辛亥革命（第1革命）につづいて袁世凱の国民党弾圧に対して討袁の兵をあげた。これが

実現せず、言論界では弾圧の嵐が吹き荒れる。ある資料によれば、1913年5月から1916年2月まで93種類の新聞雑誌が発行禁止処分になっている。これには、中国国内ばかりではなく海外に発行拠点をもちものも含まれる。

掲げられた処分理由は、治安妨害、言論激烈、政府攻撃、政府誹謗、革命主張、帝制反対、革命鼓吹などである*³⁶。取り締まりの根拠にされたのは、袁世凱が発した「出版法」(1914.12.4公布)、「報紙条例」(1914.4.2公布)などになるのだろう*³⁷。

後者の第10条には、新聞に掲載してはならないものを、政体混乱、治安妨害、風俗腐敗などなど8項目にわたって明記する。どの項目をみても内容をはっきりと定義できるものではない。政府にとって都合が悪いことは自在に禁止することが可能な法律だ。当局者には便利このうえもなく、言論界にとってはあってはならない悪法である。ゆえに、1916年6月6日に袁世凱が死去し、その1ヵ月後には、以前に発禁になっていた新聞について北京政府内務部は解禁を通知し、さらに「報紙条例」を廃止している*³⁸。

以上、いきさつを簡単にたどるだけで羅家倫の説明がおかしいことがわかる。つまり、羅が該論文を発表したのは、すでに「報紙条例」が廃止になった後である。それよりもずっと以前の弾圧を蒸し返すのだ。あたかも廃止されたのが不満であるかのようだ。しかも、弾圧をやれ、と主張する。そのまま信じるのはむづかしい。文学革命派である羅家倫が、弾圧を期待しているのだ。

自分の理想とする小説が出現しない文芸界の現状を、羅家倫が批判するのは理解できる。だが、いくら自分に気に入らない小説がもてはやされているとはいえ、それを官憲が取り締まり、弾圧することを望むとはどういう神経なのだろうか。少なくとも、表現の自由がある、という認識が彼には欠落している。羅家倫個人には表現の自由はあるが、他人にはその権利がない、と知っているのと同じだろう。

文学革命派の人間が、時の権力である教育部の出勤と取り締まりを期待するというこの奇妙な事実、私は首をひねらないでもない。ただ、文学を革命するためには、捏造論文であろうとなんであろうと手段を選ばないという意味であれば、私はそれなりに理解する。

ラインシュが書いてもいない林紓批判を羅家倫が捏造した点だけを見ても、そ

の論文の水準はあまりにも低すぎる。当局に言論弾圧を期待するなど、内容が悪すぎる。しかも、彼の言論弾圧期待論は、のちの風説風聞流言飛語が発生する源となっている可能性がたかい。羅家倫論文は、箸にも棒にもかからない愚劣なものだと私は判断する。

以上が、「五四運動の学生リーダーの一人」と称された羅家倫がくりひろげた林紓批判の中身である。

5 林紓評価をめぐる新しい展開

本稿を書いている過程で、林紓をとりまく状況が大きく変化してしまった。

その原因は、林紓について新しい事実が明らかになったからだ。調べていったらそういう結果にたどりついた。

きっかけは劉半農の林紓批判である。これが、問題解決の手がかりとなった。どういふことか。

劉は、林紓 + 魏易訳『吟辺燕語』を取り上げて、シェイクスピアの戯曲を小説化したと林紓を非難した。劇本と小説の区別がつかないと指摘してその根拠とする。本稿において、これが誤りであることはすでに述べている。ラム姉弟の『シェイクスピア物語』を漢訳の底本にしているのだから出てくるものが小説体であるのは当然ではないか。そのことを知らなかった劉半農の方が間違っていた。

問題は、それだけでは終らない。探索してみると、その先が存在していたのである。今、問題にしている林紓批判のはじまりよりあとの事だ。1924年の林紓死去後にとぶ。

要点のみを紹介する。

鄭振鐸が「林琴南先生」を『小説月報』に公表した。林紓の死後、彼の仕事を公平に評価し直すとのふれこみだ^{*39}。その再評価のなかでもくり返したのが、例の戯曲の小説化である。

彼は、該文においてシェイクスピア原作の戯曲を小説化したとあらためて批判する。形の上では劉半農を引き継いだことになる。ただし、『吟辺燕語』には触れない。そのかわり、新しくシェイクスピアの歴史劇とイプセンの戯曲をとりだ

し小説化の証拠にかかげた。これこそが鄭振鐸の行なった巧妙な修正なのである。鄭がそう指摘して80年以上が経過する。その間、のちの研究者はひとり残らず鄭振鐸の意見に賛成した。林訳がおかした原作戯曲の小説化は事実である、と認定し続けたのだ。

奇妙である。シェイクスピアの歴史劇「ジュリアス・シーザー」ほかの作品、あるいはイブセンの「幽霊」と林訳を比較対照したとき、私はそう思った。戯曲を翻訳して林訳のようになるものだろうか。小説化したと簡単にいう。だが、そのあまりの違いを目の当たりにすれば、両者はまったくの別物であることがわかる。ゆえに、鄭振鐸は、「彼（注：林紓）は翻訳して別の本に変えてしまった」と書いた。小説化したと断定したのだ。

しかし、私はもうひとつの可能性があるのではないかと考えた。例として『吟辺燕語』が、もっとさかのぼればエドモンド・スペンサー著、ソフィア・H・マクルホーズ訳、林紓＋曾宗鞏漢訳「荒唐言」(1908)^{*40}がすでにあるではないか。シェイクスピアの歴史劇、イブセンの「幽霊」にも同様の小説化本があったとしてもおかしくはない。私はそれを追求して探し当てた^{*41}。

まったく新しい状況が生まれたといってよい。本来の姿をとりもどした、というのが本当のところだ。

鄭振鐸が行なった林訳批判は、間違いであったことが証明された。林紓は、翻訳にあたって小説化などしてはいなかった。彼らは、シェイクスピア歴史劇についてはクイラー＝クーチの小説化本を、イブセン「幽霊」に関してはドレイコット・M・デルの英訳小説化本をそれぞれ底本に使用したにすぎない。もともと小説化本なのだから、林訳が小説体であるのはなんの不思議もない。簡単なことだ。ラム姉弟の小説化本を底本として使用したのと同様のことをくり返していたのだ。

林紓らは、原作の戯曲を小説化していない。冤罪である。無実の罪なのだからそういわざるをえない。これが中国翻訳研究史上まれにみる冤罪事件であることは、明らかであろう。

林紓は戯曲を小説化した、という定説がくずれた。

そうすると、林紓に関する別の定説までも疑わしく感じられてくる。林紓は軍

関に働きかけて「武力による北京大学抑圧を促していた」という例の有名な話である。軍人徐樹錚という具体的な名前まで掲げられることもある。

これは事実なのだろうか。

6 林蔡問題

林紓と蔡元培のあいだでかわされた手紙から問題が大きくなった。さらに、林紓の公表した小説がからんでくる。今まで、文学革命という文学上の問題だとばかり考えていた。その流れの中のいわば対立、衝突にすぎず、あくまでも言論上のものだと思った。ところがここにきて、武力によるだの、北京大学弾圧だの、政治運動の流れが突然発生するのだ。しかも、これに陳独秀らが関係している。複雑な状況が出現しているといえよう。この一連の動きを私は「林蔡問題」とよぶことにする。(理解を助けるため文末に「五四時期の林紓をめぐる略年表」を掲げた)

混乱状況の中心に林紓が位置しており、彼は北京において武力による弾圧を画策していたというのである。

本当なのだろうか。なんどもくりかえしたくなる。重大問題だからだ。林紓は、五四時期の悪役をまるで一手に引き受けているかのように「大活躍」している。文字通り孤軍奮闘である。批判が林紓ひとりに集中していることを私は知っている。

林紓の弾圧画策説

林紓が「武力による北京大学抑圧を促していた」と上に引用符を使って書いたのは、そう説明する文章があるからだ。丸山松幸はつぎのようにいう。

『『公言報』に呈し、あわせて林琴南氏に答える書簡』は、彼(注：蔡元培)の戦闘的自由主義者の面目を最もよく示したものである。一九一七年文学革命が提唱されてから、北京大学に対する保守派の攻撃は次第に激しさを加えていた。校長である蔡元培に対して陳独秀、胡適を免職せよという圧力が陰に陽に加えられ、警察のスパイに尾行されることなど日常茶飯のことで

あったという。当時の北京は完全に北洋軍閥の支配下にあり、政界は段祺瑞の私党である安福俱樂部が絶対多数を誇り、文化界も圧倒的に旧派で占められていた。上海や南方とちがって、ここでは新派は四面包囲のうちに孤立しており、林琴南の書簡も決して単なる一保守主義者の発言ではなく、政府をはじめ広い保守勢力の反感の上に立って発せられたものであった。実際、林は段祺瑞幕下の徐樹錚に運動して武力による北京大学抑圧を促していたともいわれている。(下線樽本)したがって北京大學校長として「思想自由の原則に従って兼容併包主義をとる」と宣言し、儒教批判と文学革命を擁護することは、圧倒的「世論」に抗して大学の自由を守りぬく決意なしにできないことであった。彼が真向うから孔子および文語文を否定することはせず、思想の自由を正面に掲げて闘ったのは、このような背景があったからである。新文化運動の成功は、こうした蔡元培の存在が大いにあずかって力があったのである。^{*42}

蔡元培と林紓の往復書簡について説明している。丸山松幸は、林紓の蔡元培あて書簡を「保守派の攻撃」のひとつとして位置づけているのは明らかだ。

蔡元培は、「思想の自由」を主張する。新派思想だけを認めては「思想の自由」にはならない。当然、旧派の思想も認める。「包容主義 [兼容併包主義]」は、そういう意味だ。蔡元培の有名な主義主張である。それが林紓にあてた手紙に表現されているのだから重要文書ということになる。蔡元培は「大学の自由を守りぬく決意」を表明したと丸山松幸が高く評価するところだ。この説明は、研究界では広く認められている。立派な蔡元培に対して林紓が卑劣な行動をとって批判した、というのもまた同時に広く認められている。わざと同じ言いまわしにしてみた。

「大学の自由を守りぬく決意」という表現に込められた意味は、北京大学の教職員、学生を守りぬくことも含まれていると普通は考える。それで間違いないだろう。蔡元培は、中国社会に対して態度表明を行なったのだと普通は考える。ところが、実際はそうはならなかった。蔡自らが招聘した陳独秀を文科学長から解任し、北京大学の学生ひとりをして退学処分している。蔡元培の言うことと実際の

行動は矛盾しているのである。のちほど詳しく説明するつもりだ。

「北京は完全に北洋軍閥の支配下にあり」は、どういう状態であったのかを別の記事、それも北京で雑誌を発行していた藤原謙兄の報告から紹介しよう。時間は少しさかのぼり、1916年当時の様子だ（ルビ省略）。

支那の軍隊はかつて北京において大掠奪を為せり。其の後、各地方において又続々之等の事あり。今日においても、もし少しく当局其の給料の支払いなどにおいておくれるか、たちまち人民は掠奪の惨禍に逢うべし。今、支那新聞に拠って各省における軍隊の状況を見るに、あるいは兌換を強制し、あるいは徴発を行い、あるいは出兵を命じ、あるいは劫掠を為し、あるいは強姦を為し、各地の人民は軍隊を恐る事虎よりもはなはだしと言う。即ち、支那国民は軍隊に拠って其の生命財産を安全に守護せられて枕を高うするに非ずして、軍隊に拠って其の生命財産を脅威せられ、戦々競々として安臥する事も能わざるなり。^{*43}

日常生活において軍部による圧迫があったことを知ることができる。いってみれば市民にとっては重苦しい時代だった。一部引用しただけだから簡単な説明だ。しかし、同時代に書かれているため印象深く感じる。

一方、本稿でいう林蔡問題とは、古文と孔孟の教え（三綱五常、儒教、礼教、名教などとも）をめぐる言論あるいは思想についてのものである。

丸山松幸論文の引用文で下線をほどこした部分が問題だ。重要だからくりかえす。

「実際、林は段祺瑞幕下の徐樹錚に運動して武力による北京大学抑圧を促していたともいわれている」

これが事実だとすれば大変なことだ。林紓は、言論に対して武力を行使しろといているのとかかわらない。これは本当にあったことなのか。ただ、逃げ道はつくってある。「ともいわれている」と書いて伝聞であることを示したつもりらしい。しかし、その文の冒頭は「実際」なのだ。文章の流れからして林紓が武力による北京大学抑圧を徐樹錚に働きかけたことは、あたかも事実であったかのよう

に説明する。なにしろ丸山松幸は、「新文化運動の成功」と書いて、自らの立場を新文化運動側においていることを明確にしている。彼にとって、林紓は非難されるべき存在であり、これは疑う必要もない。

ただし、よく考えれば、この短い説明はわかるようでよくわからない。

理解がむつかしいのは、別のものをくっつけて論じているからではないか。白話と古文という言語問題、また礼教について認識は、たしかに新旧の思想問題になるだろう。だが、それがそのまま政治と結びつくのだろうか。この部分の説明が不足しているから私にはわかりにくい。丸山松幸にとっては、当然のことだから説明がないのだろう。

「陳独秀、胡適を免職せよという圧力」があったという。反対派からの人事についての圧力は、政治問題になる。討論という段階をこえるからだ。

もうひとつの「文化界も圧倒的に旧派で占められていた」とは、どういうことか。

時間を少しさかのぼるが、1915年夏以降の状況を同じ著者が別の書物で次のように説明している。

袁世凱が帝制復活の動きが活潑化した一五年夏以後になると、言論統制はさらに激しくなり、脅迫、誘惑、弾圧などあらゆる手段で帝制批判の言論を封じ、ついには国体問題を論ずることを一律に厳禁した。これを犯すものは、国内発行の場合は直ちに発禁・閉鎖、租界で発行された場合は郵送扱い停止、国外での発行の場合は輸入禁止の措置がとられた。^{*44}

ここで説明しているのは「帝制批判の言論を封じ」込めることだ。為政者にとって都合の悪い政治的発言は厳重に取り締まる。独裁政治には普通に見られる。本稿でも、袁世凱時代に言論界が受けた弾圧について触れておいた。それでは、五四直前において北京大学をめぐるそのような状況があったのか。ここで問題にしている林蔡問題は、白話か古文かという言語について、あるいは孔孟の教えという思想問題であって、「帝制批判」ではない。それが政治と結びつくから複雑だ。

「旧派で占められていた」というから、保守的論調が文化界を制圧していたとでもいうのだろうか。

事實は、そうとは限らない。にぎやかなのは陳独秀らの『新青年』、陳と李大釗らの『每週評論』(1918.12.22創刊)、北京大学学生である羅家倫、傅斯年、徐彦之らの『新潮』(1919.1.1創刊。北京大学の陳独秀、胡適らの支持があり、大学は、[ということとは蔡元培が認めて]経済上の援助[2千元]をしたうえに大学の出版部が発行し[表紙に明記してある]損益を負担した*45。北京大学の出版物とかわりがない)などの文学革命派雑誌における発言、主張の方だった。ただし、このなかで『每週評論』の性格は、『新青年』とは異なる。『新青年』は理論闘争を主にした雑誌であるが、それでは政治闘争ができない。その不足を補うものとして『每週評論』を創刊した*46。

文学革命をとらえても旧派からの反応はまったくない。その無反応ぶりを逆説で「旧派で占められていた」というのであれば、わからなくもない。しかし、旧派が新派に圧力をかけていたと理解するならば、言語文学の分野でいうと、それは事実と反する。1918年、錢玄同と劉半農のふたりは、旧派からの反対がないからやむをえず「なれあいの手紙」を捏造した。これが事実だ。無視されていた彼らは、注目させるために、林紓を攻撃目標に定め彼を旧派の代表者に指名した。それを実行したのは『新青年』集団の方だった。もし仮に、旧派から反対の声がひとつでもあがっていたら、錢玄同と劉半農が見逃すはずがない。黙っていなかったであろう。無反応だからこそその「なれあいの手紙」だったとくり返すまでもない。鄭振鐸が、当時の状況を詳しく証言している。これもすでに、紹介した。

それとも、言語問題以外の発言について圧力が陳独秀らにかかっていたというのだろうか。それならば、可能性はありそうにも思われる。「なれあいの手紙」が公表された後、1919年になってからのことだ。ことに2月の林紓作短編小説「荊生」の公表、そして3月頃には、北京大学に対する弾圧の風説風聞が広まっていた。

言論弾圧とは、丸山松幸が説明しているとおり、刊行物の発行禁止がいちばん有効だ。「帝制批判」であれば、その可能性も高く、事実多くの刊行物が発禁になった。では、革命文学派のばあいは、どうか。『新青年』は、発行禁止にはなっていない。五四時期をへて内部事情による発行の中断がありながら、のちには

中国共産党純理論機関誌となり1926年まで刊行され続けている。『新潮』の最終号は1922年に出ている。いずれも、五四事件を経過して普通に発行されているのだ。直接に政治を論じる雑誌ではないという一般の認識があったものだろう。

ただし、『毎週評論』は、弾圧された。北洋軍閥政府によって封鎖されたのは1919年8月第37期を発行するときのことだ。五四事件のあとだが、封鎖という実力行使にあった。『新青年』『新潮』とは違いそれだけ政治色が強かった証拠となる。

『新青年』第6巻第1号(1919.1.15)に掲載された編集委員会の成員は注目にあたいする。

「本雑誌六巻分期編輯表」と題されている。当該年第1号からの編集長を掲げたものだ。これについての説明は、ない。名前が列記されるだけ。陳独秀、錢玄同、高一涵、胡適、李大釗、沈尹默の6名である。

陳独秀は北京大学文科学長だし、そのほかの全員が北京大学の教授か関係者^{*47}である。また、文学革命派の論客劉半農、周作人も北京大学教授であった^{*48}。

文学革命派の主要構成員は、北京大学教授、学生でもある。丸山昇は、そういう状況を評して「北京大学は文学革命のメッカの観を呈した」^{*49}と書いている。その北京大学の頂点にいるのは、校長の蔡元培だ。しかも、教授陣を刷新し陳独秀たち主要構成員を大学に招聘したのは蔡自身である。外から見れば、蔡元培がすべてを制御しているように思われてもしかたがない。

だからこそ、次の『新青年』第6巻第2号(1919.2.15)で「新青年編輯部啓事」を特別に掲載して説明をしなければならなかった。

近頃、外部の人は往々にして新青年と北京大学を混同して論じている。ゆえに種々の不当な風説が発生している。今、私たちは特別に声明する。新青年編集と文章を作る人間は何人がが大学で教員をしているとはいえ、しかし、この雑誌は完全に私人が組織するものであり、私たちの議論は、完全に私たち自身が責任を負うものである。北京大学とはまったく関係がない。

この声明はなんであろうか。こう説明して、風説風聞がなくなると陳独秀たちは本当に考えたのだろうか。不思議な感覚である。自分たちと北京大学は関係がない、といいながら関係があることを宣伝しているようなものではないか。風説風聞を封じ込めるためには、自らが北京大学を辞職するしかほかに方法はないだろう。普通は、こう考えるものだが、声明を出してそれで終わりだ。

さらに、丸山松幸のいう「武力による北京大学抑圧」とは具体的にはどういう状態を指すのだろうか。言葉通りだとすると、軍隊が北京大学を占拠し、蔡元培校長以下の教職員を罷免し、大学の解体を実行することかと思う。それくらいの事態があることをこの語句は想像させる。それにしても法律上の手続きが必要だろう。戒厳令を実施すれば、別か。また、大学内で暴力事件が発生し、通常の警察力では停止できない状況でもあれば、軍隊が出てくる可能性もあるかもしれない。そうなるのはよほどの事だろう。だが、当時は、そういう状況にはなかった。

私が思い出すのは、1919年からちょうど70年後の1989年6月4日に北京で発生した六四事件（第2次天安門事件）である。平和なデモと座り込みがあっただけだ。ソ連共産党書記長ゴルバチョフが訪中していた。中ソ友好をうたいあげる天安門広場での儀式が実行できず、中国の指導者たちは「面子」をつぶされた。表面的にはそう見えるだけだが、中国共産党の奥深いところで事態が進行していたらしい。鄧小平が、すべてをひっくるめて「反革命暴乱」だと認定し、その結果の人民解放軍出動だった。その時は、戒厳令が実施されている。最後には人民解放軍が戦車とともに登場してきた。人民を敵から解放するのではなく反対に武力で弾圧した。天安門広場周辺で多数の死者が出て世界が驚愕したのは、ついこの前のような気がする。

中華人民共和国で発生したものならば、中華民国の北京において段祺瑞幕下の徐樹錚が登場してもおかしくは、ない、か。1989年の六四事件では、軍隊が出動するなどという話は風説風聞ですらもなかった。しかし、軍隊が移動しているというニュースが報道されると、人民解放軍は戦車を押し立てて突然出現し天安門広場にいた人々を一掃した。衛星放送から流れてくる映像でほぼ同時に北京の事態を見ていた日本にいる私は、本物の弾圧がどのようなものかを理解したような気がした。それからすると、五四関連の文献に見える「武力による北京大学抑

庄」などという語句は、まるで迫力がない。文献からのみの情報だからか。それを割り引いて考えるにしても、やはり風説風聞の段階で停止している。表から見て、実現しなかった事件は、実際のところ事件というわけにはいかない。風説風聞にすぎなかった。

本稿であつまっている林蔡問題を中心とした北京大学をめぐる一連の事柄は、五四事件がおこる直前のことだ。これを無視しては話が混乱するだけだ、と私は判断する。

たしかに、当時、中国の政治情勢は不安定であった。

1917年に蔡元培が北京大学校長に就任したのちに起こった主要な政治事件を項目だけあげても、めまぐるしく変化している。項目をかいなでるだけで説明にはならないが、とりあえず羅列する。

日本の西原借款開始、ロシア2月革命、張勳復辟（清朝復活）事件、黎元洪大總統の日本公使館への避難、段祺瑞を國務總理に任命、張勳討伐の挙兵、馮国璋の大總統就任、ロシア10月革命など。1918年には、段祺瑞派の王揖唐らの安福俱樂部結成、段祺瑞の國務總理任命、北京で日中共同防敵軍事協定反対の学生デモ、第2回西原借款、徐世昌の大總統就任、11月第1次世界大戦終了、北京で第1次世界大戦戦勝祝賀大会など。大總統は、くるくるかわるし、日本からの借款もからんでいる。第1次世界大戦とも関係があつて、これまた日本の存在が無視できない。

1919年1月からパリ講和会議が始まっている。4月末の講和会議で膠州湾租借地および山東省旧ドイツ権益の日本への譲渡が決定された^{*50}。それに怒った北京の学生が、5月4日にデモ行進を実行する。一部の学生が焼き討ちをするなどの暴力事件を引きおこし30余名が逮捕される事態になった。これが五四運動の起点となるのは周知の事実だ。中国自身に關係する外交問題が、歴史的背景として存在している。

しかし、以上の政治状況と林蔡問題は、区別する必要があると私は考える。五四事件以後の政治に範囲をひろげて林蔡問題にからませるから複雑になる。

林紓と蔡元培のあいだでかわされた手紙、また林紓の小説公表は、北京大学についての風説風聞とは無關係ではない。より大きな政治問題、たとえば国内では

軍閥間の争いが言論界に影響をあたえているのは事実だ。大小それぞれの問題が背後で微妙につながっていたということはあるだろう。

林紆と蔡元培のやりとりは、有名ではあるが、わずかに1回限りのものだった。誤解があるようだが、論争という性質のものでは、まったくない。その後の流れは、主として文学革命派の主張が一方向的に、かつ大量に公表されるにすぎない。また、「武力による北京大学抑圧」はどこから出てくることばなのか。軍隊による実力行使の必要があるような状況ではないから不思議に思う。冷静に見れば、北京大学をめぐるのは、あくまでも言論の段階でとどまっている。だからこそ風説風聞なのだ。また、謠言が発生しやすい状況だったというのもそうだとは思う。林紆が軍人徐樹錚の武力にたよったというのも「いわれている」と、これまた風説風聞にすぎないのではないか。また、ふたりがどう結びついているかの説明もない。詳しい説明がないから、どこかおかしい。

林蔡問題は、五四運動が始まる直前に、北京大学とその周辺という限定された場所で発生したいわばコップの中の嵐だ。私にはそのように見える。その証拠に、北京からはじまった五四運動が大きな勢いを得て全国にひろがって動き出すと、林紆のことなどもう誰も話題にしなくなる。手のひらをかえしたように、という形容がそのまま当てはまるのである。あれほど大騒ぎして、その結果が無視して放置か。私は、それを見て正直なところあきれる。

丸山松幸の説明には、当然ながら典拠があるはずだ。日本の研究者は、根拠なく書くことはない。そのように説明する中国の文献によっていると考えていいだろう。

歴史研究者がそのように書くから、おなじように記述する人もでてくる。宮尾正樹は林紆について、つぎのように説明する。

(19)17年、文学革命が始まると真っ向うから反対し、「新申報」などに、『妖夢』『荊生』など新文化運動を攻撃する文章、小説を発表した。特に19年に北京大学学長の蔡元培に宛てた公開書簡は有名で、このころ段祺瑞の片腕徐樹錚の武力による新文化運動破壊に期待をよせたりもした。^{*51}

字数の関係もあるのだろうが、こちらには林紓が「真っ向うから反対し」と書いてある。だが、林紓を批判の標的にしたのは、文学革命派の方が先だった。宮尾は、林紓が「徐樹錚の武力による新文化運動破壊に期待をよせたりもした」と断定している。林紓の書いた短編小説を指しているのだろう。徐樹錚の名前が出てくるように、この説は一般に広く信じられている、と私はいう。「期待をよせたりもした」という表現は、林紓と徐樹錚が陰で陰謀をたくらんでいるかのように読める。林紓ならばやりかねない、という憶測が根底にあってもおかしくはない。なにしろシェイクスピア、イプセンの戯曲を小説化するくらいでたらめな林紓なのだから。「荊生」「妖夢」という短編小説を発表して文学革命派を誹謗中傷する林紓なのだから。思考の回路は、そういったところではあるまいか。そもそも「真っ向うから反対し」と書いて林紓の方から積極的に行動したように把握しているのが、私の見る経過とは異なっている。くりかえす。林紓は、捏造書簡によって無理やり攻撃目標にされたのである。明確にしておくが、林紓の方が被害者なのだ。

もうすこしさかのぼって日本人研究者の説明を見ておきたい。

尾坂徳司の説明

以下のいくつかは、尾坂徳司『中国新文学運動史』（法政大学出版局1957.11.5。ルビ省略）からの引用だ。

段祺瑞の御用党安福倶楽部の機関紙『公言報』は、たちまち新文学運動の首領と目される胡適、陳独秀、錢玄同らに攻撃の矢をはなった。文学上思想上の問題が、政治上の問題にまで発展したのである。87頁

御用党安福倶楽部の『公言報』だから、その報道が政治問題になった、という意味だろう。新聞での報道は、あくまでも思想上の範囲内だと思うのだが。政治問題といえば、軍隊が北京大学に進駐してきて大学解体を命令するといった事態ではないのか。機関紙で攻撃するのは、よほど遠回りで効果が期待できない方法だ。手間をかける必要はなかろう。実力行使のための軍隊ではないのか、と私は

思う。1989年六四の時、人民解放軍がいきなり登場したのを思い出して書いている。逆からいえば、軍隊が動かないのは、それほど深刻な事態ではないわけだ。新聞を使って恫喝していると解釈すれば、情報の発信地である北京大学に対して睨みをきかせたいということだろうか。脅迫してなにかの取り引きをするかもしれない。それにしてもあやふやなやり方だとくり返している。

このころになると、『公言報』は陳独秀、胡適、錢玄同らにますます毒づき、世間一般には、安福派の武人政客が教育部を動かして北京大学に干渉させるだろうとか、陳、胡、錢の三名は北京大学を誅首されるだろう、とかいう噂がひろまる一方であった。北京大学内の反新文学派は『国故』『国民』等の雑誌をだして、その氣勢をあおった。88頁

陳独秀、胡適、錢玄同の3名が北京大学をクビになる。軍人がでてきて干渉する。これが「ますます毒づき」の内容だろうか。攻撃するといっても、どういう内容なのかは不明なのだ。この風説風聞については、のちに検討することにした。

さて、軍部が新文学運動を敵対視した、という説明である。その主要な舞台が、『公言報』だというのだ。ところが、日本では該紙を読むことができない。少し説明する。

『公言報』については、記述が分かれる。辞典類に紹介がない*52。ましてやそれを所蔵するところが日本ではみつからない。だが、中国の図書館には所蔵されているらしい。だから、中国の研究者は見ることもできるのだろう。研究書には、『公言報』から直接引用しているものもある。ところが、日本で普通に入手できる目録には所蔵を示していない。中国では別に不思議な現象ではない。時代の風潮によって目録に採録するものとしめないものがある。所蔵している資料はすべて目録に掲載しているはずだと考えるのは、中国についていうと早計である。『公言報』は、所蔵していても目録には掲載しない部類に属するらしい。つまり「段祺瑞の御用党安福倶楽部の機関紙」だからだろう。表には出てはならない種類の新聞だと判断されていることがわかる。たとえ所蔵目録であっても恣意的に

資料を取捨選択するのは、中国では普通のことだ。ただし、世界基準からいえば奇妙な学術習慣のひとつである。(2007年2月、念のためウェブ上の上海図書館蔵書を検索すると『公言報』が出てくる。ただし、1970年代に発行された外国の新聞だ)

『公言報』を創刊したのは林白水だ。日本に留学したことがあり、『杭州白話報』の編集をし、のちに『中国白話報』『俄事警聞』『警鐘日報』など革命派の新聞を主編、編集してもいる。愛国学社に参加したことがあるから、蔡元培とも知り合いだったことがわかる。その林白水が安福倶楽部の機関紙『公言報』を創刊した*53。

ちょうどそんな時(一九一九・三)に林紓が北京大学校長蔡元培に一書(『致蔡鶴卿太史書』)を呈したのである。林紓はその前、すでに上海で発行されている『新申報』に小説『妖夢』『荊生』を発表して、陳、胡、銭の三名を罵っていたが、今やその三名の長たる蔡元培に、大学のありかたをただし、新文学派教授に対する善処をもとめたのである。88頁

林紓が蔡元培にあてた書簡には、あの有名な「車を引いて豆乳を売る輩[引車売漿之徒]」が出てくる。その手紙と「荊生」「妖夢」の発表については、日にちまで分け入って考える必要がある。だが、該書は概説書だからそこまでは述べていない。それにしても、林紓の書簡のどこに「新文学派教授に対する善処をもとめた」部分があるというのだろうか。林紓は、「古文を全廃することはできません[不能全廢古文矣]」、あるいは「公(注:蔡元培)が五常(仁義礼智信)を守ることが肝要だと留意されんことを願う」と述べているだけだ。教授の人事に言及するところは、ない。もしかすると、林紓書簡を掲載した『公言報』の記事と混同しているのかもしれない。

この手紙のやりとりがあったのち、安福派政客は国会に教育総長傅增湘弾劾案を呈出し、陳、胡のみならず蔡元培をも北京大学から追おうとしたのである。蔡元培はやむをえず文科科長陳独秀を平教授におとして危機をのがれたが、陳独秀はこの侮辱にたえず北京大学を辞職した。一九一九年三月のこと

で、これを北京大学事件という。89頁

私が奇妙だと思うのは、林蔡ふたりの手紙のやりとりが、安福派政客の動きと連動しているかのような記述になっているからだ。著者にはその意図はない、といわれても文脈から見ればそうとしか読みとれない。

上の記述は、説明が不足しているというべきだ。あるいは故意に省略したのか。別の人名辞典では、陳独秀について「1919年の5・4運動では街頭でピラを配布して逮捕され、北京大学を辞して上海に逃れた」*54と説明している。こちらはこれで理解しやすい。陳独秀は北京大学を辞している。しかし、陳の逮捕は五四事件のあと6月11日のことだから尾坂の書いている1919年3月とは時期的に一致しない。五四以前の出来事であるのが重要だ。

安福派政客が蔡元培を北京大学から追放しようとしたところまではわかる。安福派批判を行なう北京大学の人々（特に陳独秀）の最高責任者として蔡元培が目をつけられたという意味だ。では蔡元培は、なぜ陳独秀を文科学長から平教授におとしたか。尾坂の説明では、危機をのがれるために蔡元培が自らの保身を優先したことになるか。そう読まれてもしかたがない。また、北京大学の自由を守ることを最優先していたはずの蔡元培が、自らが招聘した陳独秀に対して処分を下したというのは、そのままでは理解することがむづかしい。だいいち理由がはっきりしない。陳独秀の日頃となえている主義主張が降格処分の理由であれば、それこそ思想の自由を主張する蔡元培がとった行動とも思えない。しかも、陳独秀は「侮辱にたえず北京大学を辞職したと」いう。平教授への降格を侮辱だと陳独秀は感じたと書いてある。本当だろうか。

もうひとつ理解しにくいことがある。平教授への降格、である。

陳独秀は蔡元培に招かれて文科学長に任じられてはいる。だが、教授ではなかった。つまり、講義は担当していない。学長は行政職なのである。ついでにいえば、北京大学では、校長蔡元培も、理科学長夏浮筠（元璵）ともに職員であり、教員ではない*55。陳独秀の北京大学内での職務は、文科学長、編訳会評議員、成美学会会員、評議会評議員、校刊編輯、大学附設国史編纂股主任、大学入学試験委員会副会長、法文協会代表*56などだ。進徳会評議員もつけ加える。平教授

へ降格と簡単にいうが、教授になるためには審査、承認が必要だろう。その手続きがとられたとは書かれていない*57（後述）。

1919年3月といえば、五四事件の直前ではないか。

山根幸夫の説明

尾坂の記述について疑問をだしておいた。説明はほぼ同じで、より詳しく書いているのが山根幸夫である。「五四運動と蔡元培」という。該当部分を少し長いが引用する（ルビは省略）。

北大に対する政治干渉を、『晨报』は次のように伝えている（52）。／参議員張元奇なる者あり、傅増湘〔教育総長〕に謁し、北京大学の新潮運動に干渉せんことを請う。否れば則ち参議院は將に弾劾案を提出せんとす、云々と。／張元奇は傅総長に面会して、北京大学の新思想運動を、教育部の権力で抑圧するよう要求したのである。これは張一個人の要求では決してなく、安福派の一致した要求であり、張はそれを代弁したにすぎなかった。張の要求は、具体的に言えば、新思想の旗手陳・胡二人の免職であった（53）。張は傅総長がこの要求を入れて、適当な措置を採らなければ、陳・胡の免職は勿論、蔡校長をも引責辞職せしめ、場合によっては北大「解散」をも辞さない、と恫喝した。／張元奇の抗議を受けた傅は、早速蔡校長を呼んで善後策を講じた。これまで、大学の「政治からの独立」を主張してきた蔡も、すこぶる対策に苦しみ、文科・理科を併合して、本科 College of Liberal Arts and Science に改編し、文科学長・理科学長のポストを廃止するという苦肉の策をとった。保守派（安福派）が最も憎んでいたのは陳独秀であったから、彼を文科学長から平教授に格下げすることによって、保守派の攻撃の鋒先をかわし、その半面、教授としての陳の地位を保全せんとするものであった。理科学長秦汾は、この巻き添えで教育部へ転出した。この糊塗策によって、蔡は一まず窮地を脱したが、要するに妥協案であり、結果的には保守派に譲歩したことになった。かかる解決策に飽きたらぬ陳は、北大の前途に見切りをつけ、教授をも辞任してしまった。*58

山根の説明によれば、事件の原因は安福派である。安福派が、陳独秀を北京大学から放逐するための陰謀であった。安福派は参議員張元奇に圧力をかけ、張元奇は教育総長傅増湘に北京大学抑圧を要求する。内容は陳、胡の免職である。恫喝は蔡校長にもおよび、北大「解散」もちらつかせた。傅増湘は蔡をよび善後策を講じた。それが文科理科の併合だ。ここでも、陳を文科学長から平教授に格下げしたと書いている。

「平教授に格下」に疑問を持たなければ、妙に筋の通った山根の説明である。尾坂と同じだから、こういう見方が従来からくり返されているのかも知れない。

私が、山根論文で気になるのは、資料の扱いが正確ではないことだ。そこにある資料についての吟味が不足している。

たとえば、注52は『毎週評論』第17号に掲載された淵泉「警告守旧党」をさす。淵泉の文章は山根が書くように『晨报』だが、『毎週評論』に転載された時、掲載月日を明記していない。陳独秀が『毎週評論』で2回にわたって特集した風説風聞特集には、もとの新聞名は書かれていても、肝心の掲載月日を記録していないのである。しかも、陳独秀が自分で編集した資料集であるところに注目しなければならない。なんらかの偏向があると考えるのが普通だろう。そういう種類の文章を資料として使うばあいには、それなりの扱い方があるはずだ。

山根の説明事項を順番にならべてみる。

- 1．張元奇は教育総長傅増湘に北京大学抑圧を要求する。
- 2．傅は、蔡校長を呼んで善後策を講じ、文科学長・理科学長のポストを廃止する。
- 3．陳は教授をも辞任した。

順次検討する。

検討1：張元奇と傅増湘

『晨报』とは別に『申報』(1919.4.1)「傅教育弾劾説之由来」がある。要約する。北京大学の教員学生らが発行している出版物に、新思潮からの主張が掲載され

ている。旧思想の者がそれに反対している。先日、張元奇が教育部におもむきこれらの出版物を教育総長が取り締まるようにいった。制裁をしなければ新国会に教育総長弾劾案を提出するという。さらに校長蔡元培および文科学長陳独秀を糾弾した。大学では陳の辞職という説もあったが、全国最高学府は外部の干渉は受けてはならず、ゆえに陳の辞職もない。また、新国会で弾劾案を提出するには多数の議員の賛成が必要だが、それはむづかしい。事實は、張元奇が傳総長に向けた警告は恫喝にすぎなかった。(要約おわり)

これは、山根が引用した『晨报』と同じ内容だ。張元奇が傳増湘に北京大学の出版物を取り締まるように迫ったという。結局のところ、新国会に弾劾案を提出してはいない。だから、記事でも恫喝にすぎなかったと書いてある。4月1日の報道であることにご注目いただきたい。

検討2：文理科学長ポストの廃止

文理科学長職の廃止を決定したのは、3月1日である。「文理科教務処組織法」が北京大学評議会で承認されたのがそれだ。さかのぼれば、2月に会議を開催してそのポスト廃止の方針を決めている。さらにさかのぼれば1918年10月末に北京大学改組の計画が公表されている。

だから、山根のいう1と2は逆転する。張元奇の恫喝があったから文理科学長ポストを廃止し、陳独秀を学長から追放したというわけではない。北京大学改組は、ずっと以前からの計画なのだ。

検討3：陳独秀の教授辞任

陳独秀が北京大学文科学長を正式に罷免されたのは、4月8日のことだ。だが、彼はもともと教授ではないから、教授を辞任することもない。陳独秀は、北京大学においてほかの役職を続けていた。

以上によって、山根の説明は成立しない。

新しい人名がでてきたので少し説明する。

参議院議員張元奇と当時の教育総長傳増湘の名前があがっている。

張元奇について、人名録から引用する。「張元奇(Chang Yvan-ch'i)福建省閩侯県人 光緒己丑の進士にして曾て振貝子の治遊を弾劾して硬骨の名を知らる、後湖南省岳州府知府たりしが民国成立するや奉天巡按使に任ぜられ四年九月十八日

署理内務部次長に任命せられたるも辞退し、後参政院参政となり洪憲元年弐月肅政庁肅政使に任ぜらる年齢五十餘」*59

1916年当時は、肅政庁肅政使だった。この官職は、1916年5月29日に廃止されている。張元奇は、1918年8月12日から新国会（安福国会）の参議院議員（福建）だ*60。張は閩侯県人だから、林紓とは同郷になる。林紓が張元奇に詩を贈っている事実があるという*61。その関係からかのちには、林紓が張元奇を動かした黒幕であるとウワサされた。

しかし、風説風聞はあくまでも風説風聞であり、林紓と関係していたという証拠はない。

傅増湘については、橋川時雄『中国文化界人物総鑑』から関係部分だけを引用する（539頁）。「傅増湘 一八七二 - × 字は沅叔、四川江安の人。前清光緒二十四年戊戌科の進士、前清時代の郷試試験官翰林院編修。袁世凱の秘書、直隸提学使、北京景山官学教習、北洋女子師範学堂総辦、憲政編查館諮議官、中央教育会副会長、民国成立後約法会議議員、肅政庁肅政使等に歴任して民国六年の王士珍内閣に教育総長となり、八年五月迄歴代内閣に留任した（後略）」

傅増湘は、張元奇と同じ肅政庁肅政使だったことがわかる。それだけのこと。関係があるようなないような。結局のところ弾劾云々は、実現しなかった。やはり風説風聞なのである。

風説風聞が中傷でなくなり、ウワサが噂でなくなる。事実として認識される。風説風聞をくりかえすと結果としてそうなるのではなからうか。

それにしても尾坂と山根の説明は、よく似ている。ふたりの文章は、約20年間の時間差があるから字句は当然異なる。だが、あらすじがそっくりなのだ。こういばあい、拠った資料が同じであることを示唆する。そうして波多野乾一の『現代支那』（1921）を見つけた。

波多野乾一の説明

波多野は、「北京大学事件」だと説明している。引用する。

かくて文学革命の評語は遍ねく都中青年の間に唱へられ、改造の烽火は漸く

天に冲せんとするに至つたので、守旧派の錯愕一方ならずその機関誌「公言報」は陳胡二人を孔子教の破壊者なりとして極力攻撃し、在野の旧学者林紆（琴南）は蔡元培に書を贈つて陳胡を攻撃すると共に大学校長としての蔡の責を問ひ、其実際政治に牽動するや軍閥政治家の尤たる徐樹錚及び安福倶楽部は、新国会議員張元奇をして教育総長傅增湘弾劾案を提出せしめ、陳胡のみならず蔡をも引責辞職せしめ、一挙に新思想派を北京から駆逐し去らうとした。蔡は此間に在つて頗る立場に窮したが、結局一の声明を發して守旧派の意を緩和し、学長を廃して理科学長秦汾を教育部に送り、文科学長陳独秀を平教員にしたが陳は教育部の圧迫に堪え切れずして辞職して了つた。^{*62}

私が問題にしている1919年3月の状況を、波多野は解説して以上のとおりだ。もとが「(註一) 北京大学事件」の一部分だから、さらに注がつくこともない。なにを根拠にしているのかは不明である。「自序」によると執筆は1920年という。ほぼ同時代の事件を概括していることになる。ということは、根拠を示す必要がないほどの常識になっていた把握のしかたということになる。波多野論文の骨格に山根はいろいろ資料をつけ加えたが、それが成立しないことは説明した。さかのぼって波多野論文についても、同様である。

1920年というまったくの同時代において、日本人が以上のように記述している。文学革命派を攻撃する守旧派林紆という見方は、早くから、かつ広く知られていたといえる。

1919年3月26日、蔡元培は世論に迫られて陳独秀の北京大学文科学長の職務を解いた^{*63}。3月1日に学長職は廃止することに決定している。さらに、26日にそのようなことになる。わざわざ3月26日であるのは、なぜか。

7 陳独秀問題

林紆と蔡元培の文書によるやりとりが、今まで中心に論じられていた。手紙の応酬だからわかりやすい。注目されるはずだ。だから、研究者は、その動きに目を奪われてしまっているといつてよい。だが、表のやりとりを隠れて存在したの

が陳独秀問題である。蔡元培を悩ませていた重大問題だった。しかも、実は、この陳独秀問題こそ林紓批判の謎をとくカギなのだ。

当時の政治状況、特に北京大学に対する圧力につながる。風説風聞が出てくる背景がある。

周作人が北京大学に招かれたのは1917年のことだった。彼は、当時を回想して次のようにいっている。

当時、袁世凱が死亡し、まったく無能力の黎元洪の大總統にかわり、すべての実権は北洋軍閥の手に握られた。國務總理は段祺瑞で、まさに袁世凱の大番頭だった。このため府（總統府）と院（國務院）の双方が衝突するのは避けることができなかったのだ。^{*64}

周作人がどこから情報を得ていたかという、主として新聞からだった。彼が読んでいたのは『公言報』と『順天時報』で、前者は安福倶楽部の機関誌だし後者は日本人が発行する中国語新聞だ。

段祺瑞がひきいるのは、安徽派（段派、皖系ともいう）という軍隊である。中央政界に地歩をかためた。その政客集団が安福倶楽部だ。この段祺瑞の下にいるのが徐樹錚で安福倶楽部の黒幕ということになる。安徽派は、日本から援助を受けていた。対立するのが、大總統の馮国璋の直隸派（直系）で、英米からの援助があった。日本に対抗するためであるのはいうまでもない。段祺瑞と馮国璋は、さかのぼればふたりとも袁世凱の北洋陸軍における幹部である^{*65}。

張勳の復辟事件後、周作人は北京大学から文科教授、兼国史編纂処纂輯員の辞令をもらった。彼は、北京大学に勤務していて、直接に見聞している。だから、私は作人の説明に耳をかたむけているのだ。

蔡元培が北京大学校長に就任してから実行した改革の様子を、周作人は次のように述べている。

蔡子民（注：元培）が1912年南京臨時政府の教育総長に任じられた時、まず孔子を祭ることをやめ、その次は北京大学で経科を廃止し文科と正式に名前

を定めた。このふたつの事は中国への影響はきわめて大きく、評価を低くしては絶対にだめなのである。中国の封建旧勢力は孔子の聖道という名称に寄りかかってどれだけの年月のさばってきたか、現在、すべてが地上に押し倒され、威信を失い、幾度も巻き返そうとしたが、しかし、廢帝の復活のようについには成功しなかった。蔡子民は、科挙出身ではあったが、彼は毅然と、決然とこの垣根をうち破ることができたことは、えがたく貴いといわなければならない。(中略)蔡子民は、大学を經營するにあたり、學術の平等を主張し、英フランス日本ドイツロシア各国の文学系を設立し、各国文化を多く理解させようとした。彼はまた男女平等を主張し、大学を開放して女子学生を入学させた。^{*66}

蔡元培が北京大学で行なった改革は、まさに中国の伝統をくつがえすものにほかならない。中国の最高教育機関において十分な古典教育が行なわれているのか、と林紓が心配するのも、ある意味では当然であろう。林紓は、大学の外にいて内実を知ることがむづかしい。だからこそ、親しい北京大学学生の張厚載が話してくれることが、彼にとっては状況を理解するための情報となっていた。

蔡は、科挙試験の最難関を通過した進士で翰林院編修だった。しかし、彼は清末に革命工作に参加する決意で愛国女学校、愛国学社を作り、過激言論で引き起こした蘇報事件に連座してもいる。革命団体である光復会の会長に推された。中華民国になって教育総長として教育改革に努力したのを見れば、彼の北京大学における改革も当たり前ということになる。旧派旧文人からこれを見れば、彼は叛逆者に違いなく、強く反発したとしても、これまた不思議ではない。

その蔡元培が、指名して文科学長に招聘したのが『新青年』を編集していた陳独秀なのだ。その陳独秀に何がおこったのか。

そもそも陳独秀は、反段祺瑞の急先鋒である。すなわち、安徽派、安福倶楽部を批判し、それに結びついた日本を罵倒する記事を『毎週評論』などに書き続けていた^{*67}。彼は『新青年』を編集もしている。また北京大学では学生を主体とした雑誌『新潮』も発行されていた。北京大学が、そのなかでも特に嫌われていたのが陳独秀だ。安福倶楽部から目の敵にされた。安福倶楽部の黒幕は徐樹錚で

あり、その御用新聞が『公言報』という関係になる。

図式化すれば、一方の中心人物と媒体は、陳独秀と『每週評論』であり、これに対立するのが徐樹錚と『公言報』だ。陳独秀の背後には蔡元培を校長とする北京大学の新派集団が存在している。蔡元培は古くからの革命党だったし、安徽派からはその敵である南方政府と気脈を通じていたと見なされていた*68。

『每週評論』編集部に警察がしょっちゅうやってきていたのは、そういう政治的背景があったからだ*69。

北京大学内部にも摩擦が生じていた。当時、自らが体験していた周作人の説明を聞きたい。

学校の中ではじめに不満を表明したのは、新派は古いものを排斥する考えを表示していなかったから、旧派の方がかえって真っ先に表明したのだった。最初は、風説をながした。北(京)大(学)は、最初に元曲を開講したから、教室で歌うことを教えはじめたといい、白話文を提唱したため、金瓶梅を教科書に使うといった。つぎには、古い教員が教室で罵りはじめ、ほかのものはまだ少しばかり隠していたが、黄季剛は、もっとも大胆でしょっちゅう隠さずに直言した。彼は新派の教員が蔡子民に迎合するのを罵って彼らのことを「真理をねじ曲げた学問で世におもねる[曲学阿世]」といい、だから後にひょうきん者は蔡子民に「世」というあだ名をつけて、校長室に行くとなれば、自分で「世におもねに」行くと称した。この名称は、つねづね使用されたもので、馬幼漁、銭玄同、劉半農などの人々、魯迅もその中のひとりで、書簡のなかによく見えるし、ひとつの典故となっているのがわかるのだ。*70

北京大学の旧派が蔡元培を攻撃するとはいえ、学内に限定された批判であったことがわかる。しかし、学内で批判があれば、それが外にもれて風説風聞になるのも当然だ。それをすくい上げたのが安福倶楽部の『公言報』であるのも容易に推測することができる。私は日本で『公言報』を読むことができないから、各種文献に見える引用によって推測するのだ。風説風聞については、後にのべる。

そういう雰囲気の中で、蔡元培にあてた林紓の手紙が登場する。周作人の受け止め方を示すため、つづきを引用する。

新聞紙上にも反響があり、上海では研究系の『時事新報』が攻撃を開始し、北京では安福系の『公言報』がさらに猛攻を加えた。林琴南が顔をだし、蔡子民に公開書簡を書いて学校では孝ではないことを提唱しているといい、陳（独秀）胡（適）の排斥を要求した。蔡は手紙に答えて、『新青年』は、孝ではないことを行なってはならず、たとえそのような主張があったとしても私人の意見であり、大学の中で宣伝しないのであれば、干渉しようがないといった。林氏は、恥ずかしさのあまり逆に怒りだし、当時の実力派徐樹錚の勢力を借りて大いに圧迫を加えようとしたが、この時は五四の風潮が勃発して政府は大事件に対応するのに忙しく、学校の新旧衝突はさいわいにも免れたのである。^{*71}

以上が、普通、現在まで言われているおおよその事実経過だ。陳独秀、胡適の排斥、あるいは徐樹錚の名前がでてくるのも、当時のことを体験している周作人ならではの記述であろう。一般に、そのように考えられている。ただし、林紓が「陳胡の排斥を要求した」というのは周作人の勘違い、記憶間違いだ。いったん刷り込まれた記憶は、当事者であろうと訂正することができない例である。

主たるものは、陳独秀と安福倶楽部の対立なのだ。それにもかかわらず、これに胡適を加え、蔡元培とさらに林紓を巻き込むから問題が複雑になる。

陳独秀文科学長の罷免

陳独秀問題である。

蔡元培が林紓にあてた手紙のなかで、思想の自由と包容主義を宣言した約1週間後だ。3月26日、蔡元培の判断で陳独秀は北京大学文科学長の職務を解かれることに決められたという。ただし、正式決定は後日になる。それにしても、なぜ突然の罷免か。

本稿は、林紓についてのべるものであるが、背景の動きを知らなければ、林の

占めた位置を正しく把握できないと考える。

表面から見た大きな流れをざっと述べよう。

まず、上海で林紓「荊生」(『新申報』2.17-18)の発表がある。北京の『毎週評論』第12号(1919.3.9)がそれを転載する。文学革命派からすれば、それこそ下品でおぞましくも人を誹謗中傷する林紓の短編小説なのだ。これからが大騒動になる。並行して林紓と蔡元培の手紙が発表される。

文学革命派が林紓の小説、蔡元培あての手紙を大々的に取り上げた。私の見るところ、これは文学革命派が攻撃する(反撃ではない)絶好の機会である。銭玄同と劉半農は、「なれあいの手紙」を捏造して林紓を誘い出そうとした。約1年後にその実現をついに見たのである。文学革命派は、てぐすね引いて待っていた。この機会を見逃すはずがない。

安福倶楽部にしてみれば、敵対する陳独秀と北京大学が騒ぐのは彼らを攻撃するいい機会になる。『公言報』にあることないこと風説風聞を流して挑発し脅迫を加える。ありそうな話だ。そこに北京大学学生の張厚載が巻き込まれてくる。

もう大騒ぎである。『毎週評論』、『北京大学日刊』と『公言報』、さらに『新潮』をくわえての発言が五四直前まで続く。2ヵ月くらいの短期間に発生したのが特徴だ。

安福倶楽部が『公言報』を使って陳独秀攻撃を行なったのが、問題の発端であるらしい。らしい、と書いておく。該紙を確認することができないからだ。

表面上は、大混乱の様相を呈している。しかし、この底には別の流れが存在していた。上に書いた陳独秀と安福倶楽部の対立である。

1919年3月26日夜、湯爾和の家に蔡元培と関係者が来訪する。大学のことでついて相談して12時に帰っていった*72。

湯爾和は、日本の金沢医学専門学校を卒業して、国立北京医科専門校長だ。蔡元培が事前に北京大学の様子をたずねた人物として彼の回想にでてくる。文科預科の状況は沈尹默*73に、理工科については夏浮筠に聞くように助言された*74。文科学長が未定であれば陳独秀はどうか、と蔡に推薦したのは湯だった*75。

陳独秀は、結局のところ文科学長を罷免になる。だが、そのいきさつを説明する文章は、そう多くはない。

胡適は、陳独秀の文科学長おろしについてずっと気にかけていた。後年、胡は湯爾和の日記を見る機会があったらしい。それにより、1919年3月26日の簡単な記述、つまり蔡元培が来て夜中まで会談をしたことを知った。その内容を確認するために質問の手紙を湯爾和に3度だしている。つぎは、湯爾和にあてた2度目の手紙（1935年12月28日付）である。必要箇所を翻訳する。

3月26日夜の会議では、蔡氏はその時に陳独秀を切る〔去独秀〕ことをまったく望みませんでした。しかし、先生（注：湯爾和）は彼の私的な道徳が悪すぎる〔私徳太壞〕ことを力説しました。その時、蔡氏は進徳会の提唱者でもありましたからあなたの御説に大いに動かされたのです。私（注：胡適）が当時いぶかったのは、当時の小新聞が書いたこと、町の風説はすべて信用のできないにもかかわらず、学界の指導者がそれを事実と考え動かすことのできない証拠だと見たことです。おかしいではありませんか。女郎買いは（陳）独秀と（夏）浮筠のふたりともが行なったことですが、「某妓女の下半身を傷つけた」というのは誰が見たのですか。今から思えば、一笑にも値しないでしょう。当時、外の間人が私的な行動を理由にして独秀を攻撃するのは、北大にいる新思潮の指導者数人を攻撃する手段のひとつであることは明らかで、先生方が私的行動と公的行動を区別できないのは、まさに敵の術中にはまったのです。^{*76}

胡適のこの手紙は、もとは湯爾和からの来信にたいする返信だという。問題の夜の会合に胡適は参加していない。胡適は、のちにその時のことを湯爾和に質問して、湯から事情を説明する手紙があった。

日本語訳では「陳独秀を切る〔去独秀〕」としておいた。「去」を「行かせる」「失う」と置き換えても同じ意味だろう。

蔡元培は陳独秀を支持していたが（蔡が陳を招聘したから当然だ）、湯爾和らが陳の私的道徳を理由に罷免を決めたという説明だ。胡適の記憶に誤りがあるように思う。なぜなら、陳独秀罷免については、文理科学長廃止というかたちですでに3月1日時点で決定していた。そもそも蔡元培の主導によって陳独秀たちの罷免

を計画していたのだ。その事情を胡適は、知らなかったらしい。それとも昔のことで忘れたか。

それにしても、陳独秀が妓女を負傷させたというのである。にわかには信じがたいことだ。三角関係のはてという説もある。

もうひとつ胡適の湯爾和あて別の手紙から。

大学教授は女郎買いをしても差し支えない、と私は主張しているわけでは決してありません。政治の指導者は女郎買いをしても差し支えないと主張しているわけでもありません。社会において指導者の地位にいる人々はすべて西洋人のいう「公人 (Public men)」でありますから、自分の行為について注意しなければならないと私は思うのです。なぜならば彼らの私的行為は公衆への影響を発生させるだろうからです。ただし、いかなる人も某人の私的行為を利用して彼を攻撃する武器にすることには私も賛成しません。当日、(沈)尹黙らの人々は、まさにこの持病が再発しました。近年の事実が証明するように、その日、独秀を攻撃した人は、のちにみな「オールド・モダン [老摩登]」になってしまい、これも時代の影響でしょうし、いわゆる歴史の「ユーモア」なのです。^{*77}

陳独秀の妓楼通いは、胡適の書信にしか出てこないかといえ、そうでもない。早くから周作人の証言がある。現在では、複数の文献に引用されているから周知のことになっている^{*78}。

五四事件以後、ビラ「北京市民宣言」をまいて逮捕留置されるのは政治行動ゆえである。陳独秀は、1921年、中国共産党を創設し、初代総書記に選ばれている。その彼が、妓女をめぐる問題を起こしていた。

三角関係の結果が刃傷沙汰となれば、文字通りの痴情事件ではないか(陳独秀事件と称する)。1回だけ妓楼にあがって傷害事件をおこすはずがない。三角関係が発生するのは、かなり時間が経過してのことだろう。ということは、陳独秀は、相当長い期間にわたって妓楼通いをしていた証拠だ。こう書きながら、学術論文には、まるでそぐわない話題だと私は強く感じている。本稿は、小説でも物語で

もないのだが、この事件を説明しなければ陳独秀問題から林蔡問題に移動することができない。しかも、陳独秀についてはほかにも問題がある（後述）。

陳独秀事件の謎

妓楼通いといっても、当時としては特別なことではない。わざわざ新聞報道されることはないだろう。一般人のばあいはそうだ。だが、北京大学の文科学長、理科学長だったらどうだろうか。そのことを胡適も指摘している。しかも、安福倶楽部攻撃の先頭を走っている陳独秀なのだ。

北京『晨报』、『順天時報』、天津『大公報』、『時報』には、陳独秀事件が見えない。その種の話題が掲載される新聞ではないのか、と思ったりする。

傷害事件なら警察が出てくるはずだ。それとも、妓楼では日常茶飯事で警察沙汰にはならなかったのか。あるいは、たいしたケガではなかったのかも知れない。この種の事件は、妓楼の内部で処理するはずで表に出ないのが普通だろう。評判になれば商売にさしつかえる。しかし、陳独秀を狙っていた安福倶楽部だから、陳に不祥事があれば見逃すはずがないと思う。その間の詳しい事情は不明である。当時の別の新聞を調べれば事件の報道がされているはずだ。中国の研究者は調査しているが、記事本文は引用していない。活字にするのは、現在のところはばかれる、という判断なのかもしれない。

それにしても、陳独秀のこの問題について言及が少ないというのは、おかしい。文学革命支持派、あるいは林紓批判者は、陳独秀のこの妓女事件をなぜ取り上げないのか。反動派が悪意に満ちた中傷をしたという絶好の証拠になるではないか。事実無根の事件をでっち上げて陳独秀の人身攻撃を行なった。まことに卑劣な安福倶楽部の連中である。そのことを証明する好例だと思う。ところが、不思議なことに、そうはならない。また、蔡元培にしても、抗議文を新聞社になぜ送りつけなかったのか。学生にあたえた手紙まで収録しているにもかかわらず、彼の全集にそれらしい文章を見つけることができない。謎としておく。

胡適の手紙には、夏浮筠という名前がでてくる。夏はドイツにおいて蔡元培と同級で、湯爾和とは同郷だった、と沈尹黙は説明している。彼の父は著名な夏曾佑である。その夏浮筠も妓楼通いをしていたと胡適は証言している。

蔡元培は、北京大学校長就任後に「進徳会」を設立した。それまでの悪い校風を一掃しようとする改革のうちのひとつだ。道徳的な方面に重点をおいた活動である。

進徳会は、呉稚暉、李石曾、汪精衛らが1912年に上海で発起した。それを蔡元培が継続して北京大学に持ち込んだ。政界、実業界が腐敗の極みにあることを見て、「私徳」を高める運動を大学内で推進しようという趣旨である。会則は、女郎買いをしない〔不嫖〕、賭事をしない〔不賭〕、妾を囲わない〔不娶妾〕が基本になる。これが甲種会員の資格だ。乙種会員は、甲の3戒に加えて、官吏にならない、議員にならない（ただし、大学には法科がある。その学生は卒業後の進路を閉ざすことになるので除く）。丙種会員は、さらにタバコ（アヘン、モルヒネを含む）を吸わない〔不吸煙〕、酒を飲まない、肉を食べない、を追加する*79。「不」で統一するところだけを見ると、まるで胡適が唱える文学の「八不主義」のようだ。

陳独秀は、進徳会に参加している（甲種会員。2月27日付『北京大学日刊』）。湯爾和が陳を批判してわざと「私的な道徳が悪すぎる〔私徳太壞〕」と言ったのは、蔡元培が進徳会設立説明に盛り込んだ「私徳」をふまえている。

ここでも周作人に登場してもらおう。

もうひとりいて、陳仲甫（注：独秀）であるが、彼は北京大学の文科学長で、改革時期の重要人物でもある。しかし、仲甫の行為はそれほど慎み深いというわけではなく、時に花柳界へ足を踏み入れた。これは旧派の教員ではよくあることで、みんな当然のことだと認めていた。しかし、新派のなかでは異なり、新聞にしばしば暴露され、陳老二（注：独秀は次男）が妓女を傷つけたなどの事が載った。これは進徳会を高らかにのべていた蔡子民には、まことに頭の痛いことであった。*80

周作人は、かなり筆を抑えて表現していることがわかる。「時に〔有時〕」と書いて、陳がめったに妓楼には登らなかったかのようにいいながら、新聞には「しばしば〔時常〕」報道されたと矛盾するからである。

周作人の説明は、ひとつの興味深い事実を私たちに教えてくれる。蔡元培は、

陳独秀の妓楼通いを知っていて日頃から頭を痛めていた。蔡は北京大学進徳会の設立者だ。女郎買いをするな、といいながら陳独秀の行為を見逃すわけにはいかないだろう。独秀は会員であるばかりか、評議員にも選ばれているのだ^{*81}。責任者の地位にありながら何事か、という批判になる。

陳独秀の妓女傷害事件は、偶然おこったにせよ、それが発生する条件がすでにあった。遠回しの書き方をしたが、独秀の妓楼通いは日常化しており、しかも周知のことであったことをいう。だからこそ、新聞にしばしば暴露されたのであろう。

もしこれが風説風聞であれば、蔡元培のことだからすぐさま新聞に事実無根だと主張する抗議文を送りつけるに決まっている。だが、陳独秀の件については、蔡が抗議したという記録は、ない。くりかえして申し訳ない。

胡適の手紙には、夏浮筠の名前がでていた。夏といえば北京大学理科学長だった人物ではないか^{*82}。

蔡元培が、陳独秀あるいは夏浮筠の私的な日常行動について把握しながら、何も対策を練らなかつたとすれば、大学内行政に無能であるというそしりを免れないだろう。だが、改革者として有能な蔡元培は、事前に手を打っている。陳独秀と夏浮筠のふたりについて、それぞれ文科学長、理科学長という責任者の地位からははずすことだ。

さかのぼって1918年10月30日、蔡元培は、北京大学を代表して専門以上の各学校校長会に討論すべき問題を提出した。大学の改革草案だ。そのなかに文科理科の学長制度見なおしが含まれている^{*83}。

蔡元培は、文科、理科学長の処遇について入念に準備していたことがわかる。

1919年2月22日、蔡元培は会議招集の通知を発送した。各科学長、教授会主任、研究所主任あてに、議題は「本校拡張計画およびその他重要問題いくつか」となっている^{*84}。

議題の内容は、北京大学改組の具体化である。上の通知書には、内容までは書いていない。私が、これは改組問題であり、陳独秀の人事問題だと考えるのは、新聞報道があるからだ。

北京大学法科政治門の学生張厚載が記事を書いた。これが、また問題にされる。

張厚載の登場

張厚載（1895-1955）は、江蘇青浦（今の上海市）の人。別号は繆子など。1953年、上海文史館館員。著作に『京劇発展略史』『歌舞春秋』などがある（両書とも未見）^{*85}。

彼は、中学校で林紓の生徒だった^{*86}。北京大学在学中から新聞社の通信員もつとめていた。『晨報』に旧劇評を定期的にかけている。また、『北京大学日刊』の「文藝」欄に論文を掲載しているくらいだから大学内でも有名な学生だった^{*87}。

張厚載が別の意味で有名である理由はふたつある。ひとつは、『新青年』誌上で中国旧劇を擁護して論陣をはったからだ^{*88}。

『新青年』に掲載された張の文章について簡単に紹介しておく。

張厚載「新文学及中国旧戯」（『新青年』第4巻第6号1918.6.15）は「通信」欄に掲載される。題名はひとつだが、署名はふたつになっており、もとは投書2通だった。

『新青年』を読んでいた張が考えることのひとつは、文学改良は自然の進化であること、おおよそひとつの事の改革は、ゆるやかでなければならず急いではならないことをいう。もうひとつは、中国の戯曲は劣っている点も多いが、しかし、本来の面目は真の精神がたしかにある、というもの。「改良したいのであれば、実際に近づき理想からは離れる必要がある。そうでなければ理論があまりにも高いと、高くなりすぎてプラトンの「ユートピア」のように実現することがまったくできないからである」

ゆるやかな改良、前進、変化という張厚載の主張は、『新青年』集団には受け入れられなかった。

胡適は、戯劇については専論を書くつもりだと将来につなげる。錢玄同は罵りかえし、劉半農は各人の見方は同じではないが、とにかく旧劇を見ると気分が悪いという。最後に陳独秀が登場する。芝居の隈取り、立ち回りのふたつは、わが国の人間が野蛮で凶悪である真相および美感の技術とは絶対的反対の地位にあることを完全に暴露している、と書くのである。

張厚載は、『新青年』の成員から袋叩きにあっているという印象を私は受ける。胡適はおくにしても、錢玄同、劉半農、陳独秀は、旧劇を否定しているのだから、張厚載との討論はもともと成立するはずもない。

それでも張厚載がつづいて「我的中国旧戲觀」(『新青年』第5巻第4号1918.10.15)を書いたのは、胡適から執筆の勧めがあったからだ。張が書いているところによると、胡から、中国旧劇のよさを詳細に論じてほしいと手紙で依頼があったという。もうひとつ張の「『臉譜』 『打把子』」が同号の通信欄に掲載された。

張厚載論文が掲載された同じ号に傅斯年「再論戲劇改良」がある。長文の反論を同時に掲載するのは、王敬軒の書簡を捏造した時と同じ処置方法だということができる。

これに関して興味深い事実がある。

旧劇を擁護する張厚載の文章が2本も『新青年』に掲載されることに、錢玄同は大いに不満を感じた。胡適あてに手紙を書いている。

張厚載にいたっては、彼の文章が私の『新青年』を汚す価値もまったくないと考えています(その通信は、まだよい)。また、私はあなたに以下のことをお勧めします。あなたが中国の旧劇について、林琴南の文章、南社の詩と同様に取り扱うのはかまいません。あなたの思想は、私はもともと敬服しております。しかし、正しいとは思わないことがひとつあります。千年も腐敗が積み重なった旧社会に対して、あまりにも相手にしすぎています。対外の議論は、旗幟鮮明にすべきで、あれら腐臭のただよう人たちを相手にする必要はないのです*89。

胡適はこれにたいして次のように返答した。

私が彼(注:張厚載)に文章を書くように依頼したのは、私自身のために作文の材料をさがしてもらうためにすぎません。私が思うに、どのみちこの材料は、閉じこもって王敬軒という材料をでっち上げたのにくらべれば、討論するに値します。あなたは王敬軒をよるこんででっちあげましたが、私が張繆

子にかこつけて文章を書くのは許さないというのであれば、あまりにも不公平であるのを免れません。私のことばが正しいかどうか、どうぞお考え下さい。^{*90}

張厚載の存在は、胡適にとっては王敬軒と同じだという。胡適のこの発言はなにを意味するか。

王敬軒は、錢玄同がなりすました捏造の人物だ。林紓批判をするためにだけ必要だった。ということは、主眼は反論にある。つまり、胡適は張厚載を利用して自分の主張を述べることだけを目的にしていた。まじめに議論するつもりなどなかった。張の意見など最初からどうでもよかったのである。討論を装っているだけだ。これが『新青年』集団のやり方のようだ。その時まで、討論もできないくらい何も反応がなかった。実在する生身の張厚載が出現したことに胡適は大いによろこんだと理解できる。

張厚載を有名にしたもうひとつの理由は、北京大学の学内状況を新聞記事にして胡適、蔡元培、陳独秀から叱責されているからだ。しかも、これが北京大学から退学処分を受ける理由にもなっている。張厚載は何をしたのか。

以下では、いくつかの文章にでてくる事柄のうち日時が比較的明確なものを中心に、時間の順に配列しなおして述べることにする。いずれも1919年の五四事件以前に発生した。

2月22日、蔡元培は北京大学で会議を開催し重要問題を決定した。文理科学長職廃止だ。

2月26日、『神州日報』に張厚載（半谷通信）の記事が掲載される。少し長いが翻訳する。以下のとおり。

近頃、北京学界ではひとつの風説が、突然盛んに伝えられている。北京大学文科学長陳独秀はもうすぐ解任される。文科学長、教員らは言論思想が激烈で輕薄にすぎ、学界の前途に大きな影響があると東海（注：徐世昌）に報告する者がおり、東海はすぐさま教育総長傅沅叔に面会し、調査し処理するように命じた。傅氏はついに陳学長に辞職するように遠回しに命じると、陳も

また地位に安んじず、もうすぐ引退するもよう。また一説には、東海はちかごろ某方面からの報告にもとづき、陳独秀および大学文科の各教授、たとえば陶履恭、胡適之、劉半農らに対して大いに不満で、一律に辞職の命令を考えている云々。しかし、陶胡の両君は学問品行とも優れており、なぜ巻き添えにされるのか、漢文を廃棄せよと主張する錢玄同がかえって外に逃れているのか、当局のこの考えはまことに監督不行届といわざるをえない。……これら種々の風説がもし本当であれば、北京学界は大変動を免れないであろう。陳独秀が文科学長の職を解任されるだろうという説は最も信頼できる。先日、大学ではきわめて重大な討論会が開催され、大学改組の問題を討論し、某科某門を某系に改めるといふ。そうであるならば、学長は必要ではないことになり、この討論が陳学長辞職説と大いに関係があるに違いないと断言できる。(王楓「五四前後的林紆」239-240頁による。【統合版補記】のち原紙で確認した)

この記事が、すなわち張厚載がまき散らしたデタラメであると一般に認められている。私は、該新聞を直接読むことができないので(日本には原物が所蔵されない)孫引きした。多くの研究論文は、一貫して風説を流したのは張自身だと決めつけており、例外はない。だが、よく読んでほしい。張厚載は、冒頭に「風説」と書いているのではないか。彼は、それを紹介しただけだ。この記事の重要な部分は、そこには存在しない。後ろ部分こそが大事であるにもかかわらず、誰もそれを指摘しようとはしない。

すなわち、北京大学の改組問題である。張厚載の記事で興味深いのは、蔡元培が北京大学で開催した重要会議について紹介していることだ。張厚載は、陳独秀解任のための改組であるとおわせている。これこそが、蔡元培の怒りを誘い出した。事実だったからだ。

3月1日、「文理科教務処組織法」が北京大学評議会で承認された。文理科合併の改組である(『蔡元培年譜長編』中冊187頁)。実施の時期については、幅をもたせていたらしい。1日に承認して即実施ではない。

3月3日、『神州日報』に張厚載(半谷通信)「学海要聞」が掲載される。

前回の通信で北京大学文科学長、教授が異動するだろうと報告した。文科学長陳独秀は、すでに自分で辞職することに決め、聞くところによるとすでに天津におもむき、態度はすごく消極的であるという。たぶん文科学長の席は他の人にかわるのは必至であり、それで陳独秀は解任となるのは疑問の余地がない。時間の遅い早いの問題でしかない。(王楓「五四前後的林紓」240頁による。【統合版補記】のち原紙で確認した))

この記事の一部は、事実ではない。陳独秀は、天津に行ってはいないからだ。記事としてはそこが余計であった。だからこそ、風説風聞を流したと張厚載は批判されることになる。

3月4日、「文理科教務処組織法」そのものが『北京大学日刊』に掲載された。ただし、この記事には、文理科合併と学長職の廃止を明記していない。北京大学側、すなわち蔡元培としては、この段階ではその事実を公表したくなかった。そういわざるをえない。

3月9日、張厚載(半谷通信)「学海要聞」が『神州日報』にのる。ということは、北京大学関係の記事はこれで3回目になるうか。

北京大学文科学長陳独秀が近く辞職するという説は、先日記者が該校校長蔡子民氏を訪問し、その事を照会した。陳学長が辞職することについて蔡校長は否認の表示をしなかった。また該校評議会は、文科は次の学期あるいは夏休み後に理科と合併し、教授会主任ひとつを設け、文理ふたつの教務を統轄すると議決した。学長という地位は、当然撤廃する云々。記者の前の報告は、信用できるその証拠となる。(王楓「五四前後的林紓」241頁。【統合版補記】のち原紙で確認した。『蔡元培全集』第3巻279頁は「四日」とする)

張厚載は、蔡元培に会い質問したうえで記事を書いている。まさに、3月1日の大学評議会後のことだ。

張厚載の記事は、風説風聞をまきちらしたということに現在はある。だが、私はそうは思わない。もう一度、上の記事を読んでほしい。張厚載は、大学

評議会の議決内容を明らかにしている。文科と理科の合併である。あとで蔡元培校長より、細かい誤りを指摘されるが、会議の大筋はおさえた記事だと私は考える。これこそが蔡元培の陳独秀に対する措置なのである。学長職を廃止する。すなわち、くり返すまでもなく陳独秀（と夏浮筠）を学長から解任することにほかならない。陳（と夏）の妓楼通いに対する新聞の批判をいくらかでもかわすためには、責任ある文科学長（と理科学長）であっては不都合であるという発想だろう。

ところが、話は思わぬ方向に流れていく。胡適が、記事を書いた張厚載に抗議してくる。

胡適の張厚載批判

3月10日、『北京大学日刊』に見える「胡適教授致本日刊函」がそれだ。

胡適は、この2週間に発生した風説風聞についていう。文科陳学長および胡適ら4名が政府の干渉を受けて大学から放逐され、逮捕されたという話もある。北京から上海へも広まっている。通信員である張厚載への手紙と彼からの返信を送るので疑惑を解いてほしい、と。胡適と張厚載の手紙が同時に掲載された。

胡適の張厚載（半谷）あて手紙では、大学文科学長教員の更迭というこのニュースは、どこから知ったのか、が中心になる。さらに、教員逮捕もつけ加えている。張の記事には、辞職の風説はあった。だが、逮捕までは書かれていない。これは胡適による憶測か。張厚載は、それに答えて、同じクラスの陳達才が話してくれたもので、法政専門学校でも多くの人がそういっている、先生に真相を確かめてから通信を書かなかったのは自分の過失であり、申し訳ない、という内容だ。

張厚載は、「私たちのつまらない通信 [我們無聊的通信]」などと書く必要もない謙遜をした。無防備であるといわなければならない。あとで陳独秀から批判される。それにしても、張の胡適あて返答は奇妙である。新聞記事によれば、張は蔡元培に会ったうえで記事にしたと書いているではないか。

翌3月11日、またもや『北京大学日刊』に「胡適教授致本日刊函」続稿が掲載された。胡適が陳達才に確かめると、そのようなことはない、といっている。張厚載の声明書を送るから掲載してはどうか、と。

張厚載は、該紙に「本校教員胡適、陳独秀が政府の干渉をこうむったというの

は風説であり、事実無根である」と声明をだした。全面的に自分が誤っていたと認めたのである。と普通は、こうなる。

さらに、3月16日付『神州日報』は社名義で訂正記事を掲載した。「まえにこの北京通信で言及した北京大学陳独秀の辞職、胡適、錢玄同などが教育部の干渉を受けたなどは正確ではなかったので、ここに訂正する」*91

多くの研究者は、張厚載自身が風説風聞だと認めた、と受け取っている。なによりも張自身が声明を出しているではないか。風説風聞の発信源は、なんと北京大学法科の学生であった。悪い学生だ。

わかりやす過ぎてかえって不自然である。

簡単にいえば、張厚載は、北京大学改組、すなわち陳独秀の文科学長罷免をつかんで新聞記事にしている。だから、その部分は正確である。ただし、政府の干渉を受けたというのは、不正確だ。その部分に関して誤りを認めた。そう区別して考える必要がある。だが、一般に張厚載は記事全体が誤りだと認めたということになっている。

3月も中旬になろうかという時期だ。4年生の学生にとっては大事な卒業をひかえている。著名な教授の胡適先生に刃向かって、あくまでも自分の記事は事実であると主張すれば、どのようなことになるかわからない。自分の誤りにして事がすむのであれば、悪いのは自分であると認めてしまおう。そういう心理が働いたとしてもおかしくはない。新聞記事の内容と、自分の非をあっさり認める張厚載の文章を読み、その隔たりを感じて以上のように私は推測する。だが、張が考えたこの決着のつけ方は、かえって彼に大きな代償を払わせる結果になる。

張厚載の記事については、もう一度、ほぼ1週間後に話が蒸し返される。北京大学校長蔡元培が登場する。

蔡元培の張厚載批判

3月19日、蔡元培は「蔡元培致函」を『北京大学日刊』に公表して張厚載に対して反論する（『蔡元培全集』第3巻279-280頁にも収録）。『神州日報』編集部にあてたかたちになっている。

蔡元培は、張厚載の記事にはいくつかの誤りがあると指摘するのだ。

化為白話耶果以豪雋之文雜之白話之中是引漢唐之瓊燕與村婦談心陳商周之俎豆為野老聚飲類乎不類弟問人也南蠻舌亦頗習中原之語言脫授我者以中原之語言仍令我為談舌之聞語可平蕪存國粹而投說文可也說文為客以白話為主不可也乃近來尤有所謂新道德者斥父母為自感情慾于己無思此語曾一見之隨園文中僕方以為不倫斥袁枚為狂謬不圖竟有用為講學者人頭畜鬪辯不屑辯置之可也彼又云武聖為聖王卓文君為名媛此亦拾李卓吾之餘唾卓吾有禽獸行故發是言李穆堂又拾其餘唾尊嚴為忠臣今試問一李之名學生能舉之否固為揆滅何苦增甚口舌可惡也大凡為士林表率須通廣大據中而立方能率由無弊若憑位分勢力而施趨怪走奇之教育則惟穆、默德左執刀而右傳教始可知其願望今全國父老以子弟託公願公留意以守常為是況天下潮矣滑鎬之禍邇在肩嗚而又成爲南北美之爭我公為南士所推宜痛哭流涕助成和局使民生有所蘇息乃以清風亮節之躬而使議者紛紛集甚為我公惜之此書上後可以不必示覆唯靜盼好音國民端其趣向故入老性甚有幸焉愚直之言萬死萬死林紆頓首

君書

（二）蔡校長復張饒子

饒子兄鑒得書知林琴南君攻擊本校教員之小說均由兄轉寄新申報在兄與林君有師生之誼宜愛護林君兄為本校學生宜愛護母校林君作此等小說意在毀壞本校名譽兄偷林君之意而發布之於兄愛護母校之心安乎否乎饒生平不喜作謾罵語輕薄語以為受者無傷而施者實為失德林君嘗僕僕將哀矜之不暇而又何憾焉惟兄反諸愛護本師之心安乎否乎往者不可追望此後注意此復並候學訊。

蔡元培白

▲附錄張饒子君函

子民校長先生大鑒新申報所登林琴南先生小說稿悉由鄙處轉寄近更有《妖夢》一篇攻擊陳胡兩先生並有牽涉先生之處稿發後而林先生來函謂先生已乞彼為劉應秋文集作序《妖夢》當可勿登但稿已寄至上海殊難中止不日即可登出倘有損犯先生之語務乞歸罪於生先生大度包容對於林先生之遊戲筆端當亦不甚介意也又林先生致先生一函先生對之有若何感想可作復函否生以為此實研究思潮變遷最有趣味之材料務懇先生將對於此事之態度與意見賜示不勝企禱東問敬頌 教祺

學生張厚載拜啟

再林先生係生在中學校時之教師與生有師生之誼合併附 聞

『北京大學日刊』1919.3.19

もとが箇条書きだからそれを要約し、私の所感を述べる。

1. 陳学長は、決して辞職しないこと。もしこの事についてたずねる人がいれば、私は絶対に否認する。ゆえに否認の表示をしなかったというのは誤りだ。

蔡元培が「否認の表示をしなかったというのは誤り」とわざわざ書くのは、張厚載が面会のうえ質問したことが事実だと認めたことになるだろう。張厚載の質問に対して蔡元培はことばを発しなかったということだ。言質を取られないようにするのが行政責任者の普通に採用する方法である。

張厚載がそれに気づかないのは、二十五歳という若さによる。一方の蔡元培は、五十三歳の強者である。これくらいのことは平気でやる。

2. 文理が合併し、学長を設けず、教務長を設けて教務を統轄する。学長、教授会、主任会が議定し（陳学長も出席）、評議会を通過して夏休み後に実行する。さきの報告で次の学期というのは誤りだ。

蔡元培が指摘する誤りというのは、実施時期にすぎない。新聞記事は、「次の学期あるいは夏休み後」だと含みをもたせていた。また、改組については、言及していないから蔡は正しいと認めている。夏休み後に実行する、と書きながら、実際は、4月はじめに時期を早めた。これには、理由がある（後述）。

2にはつづきがある。

また、本校には現在教授会が11あり、各会には主任がひとり、全部で11人いる。そうして将来の教務長は、その主任からひとりを選び任命するから「教授会主任ひとつを設け」というのは2番目の誤りだ。陳学長が学長を設けないという議に賛成をしたのは純粹に校務進行の見地からのもので、個人が辞職するかどうかとは無関係である。

張厚載の使用した用語が違うことを指摘しているだけ。教授主任ではなく教務長が正しい名称だ。しかし、改組することにはかわりがない。蔡元培は、わざわざ陳独秀学長の名前を出して学長職の廃止に賛成したと強調するのも不自然だ。彼の潜在意識、このばあいは陳学長おろしが無意識に露出したのだろう。そのための改組であったのだから。

この部分は奇妙だと私は感じる。陳独秀は自分を文科学長職から追う会議に出席し、しかも賛成したと蔡校長は説明している。従来の説明は、陳独秀は、平教授に降格される侮辱にたえることができず、怒って教授まで辞職したのではなかったのか。もっとも、陳独秀は教授ではなかったのだから、なってもいない教授を辞職するわけにはいかない。これは、すでに述べた。不思議なのは、陳独秀は、それ以後も北京大学に籍をおいたまま（この表現が正しいかどうか不明）北京で『毎週評論』を編集しつつ政治活動を行なっていることだ。だから、研究者は陳独

秀が「北京大学を離れた」のはいつか、など書いて区別している*92。

3. 貴報には先月2回、半谷通信が掲載され、陳学長および胡適、陶履恭（孟和）、劉復（半農）ら4人が思想激烈のため政府の干渉を受けたという。また、陳学長はすでに天津にあって、態度は消極的になっている。陶胡ら3人は、校長が去ってしまったので努力してようやく職を去らないようになった、云々。すべては風説である。記事で陳学長辞職の証拠を虚構して「記者の前の報告は、信用できるその証拠となる」というが、新聞の読者は、2回の通信と私のこの手紙をあわせて見れば、信用できる証拠となるのはどちらであろうか。

多くの研究者が、蔡元培の反論を読んで、張厚載は風説風聞をまき散らし、それは蔡によって論破されたと考えるらしい。私には、その率直さが信じられない。張厚載の新聞記事が報じているのは、北京大学組織の改革であり、陳独秀の学長職からの追放なのだ。この重要問題について、蔡元培は誤りだとは説明することができなかった。事実だからだ。陳独秀が辞職しないと蔡元培が主張するのは、組織の改組を強調したいからだろう。だが、改組によって学長制を廃止することは実質的には学長の追放である。それは、3月1日の会議によって決定したと公表しているではないか。

3月19日に蔡元培が『神州日報』編集部に抗議した内容は、以上のとおりである。

北京大学改組、すなわち陳独秀の学長おろしは、夏休み後を予定していた。これが蔡元培の計画であった。ところが、3月26日に湯爾和宅で行なわれた、それも夜12時までかかった相談の結論は、陳独秀学長罷免である。蔡はしぶったが、湯爾和が「私的な道徳が悪すぎる[私徳太壞]」と力説して決定した。

19日の『北京大学日刊』紙上において、蔡元培は、陳独秀学長は辞職しないと大見得を切った。改組の時期は「夏休み後に実行する」とも明言した。それをくつがえして一気に罷免とは、なにが起こったのか。

この急展開を見て思い浮かべることのできる事件は、ただひとつしかない。陳

独秀が妓楼でおこした刃傷沙汰である。

陳独秀の妓女傷害事件は、20日から25日のあいだに発生したものと推測できる。罷免のニュースを風説風聞だと決めつけたが、そのあとで事件が起こったため、最初の計画よりも前倒しで罷免を実行せざるをえなかった。3月26日の緊急会議開催と大学改組の前倒し実施を説明できるのは、これしかないと考える。

結局のところ、文科と理科は統合された。つまり、結果として陳独秀学長の罷免はあったのだ。陳独秀らの逮捕という箇所は尾ひれのついた風説風聞にしても、その主な部分については張厚載が書いたとおりである。

北京大学改組は、前倒しして4月8日に実行するよう決定された。

4月10日付『北京大学日刊』に「大学本科教務処成立紀事」が掲載されて経過を説明している。

理科学長秦汾君は、すでに教育部司長に任命され、ゆえに代理学長の職を辞去する。また陳独秀君も事情により休暇をとり南に帰る。校長は特に今月8日に文理両科の各教授会、主任および政治経済門主任会議を招集した。当日出席したのは、秦汾、俞同奎、沈尹默、陳啓修、陳大齊、賀之才、何育杰、胡適の8名である。出席した諸君の議決により3月4日に発表した文理科教務処組織法を前倒しして実行し、施行細則を以下のように議決した。(後略)

大学改組について北京大学が公表したこれが、公式の見解となる。表面上は、秦汾と陳独秀の人事異動だと取り繕った。特別に会議を開かなければならなかった理由が、それか。おまけに、陳独秀がなぜ休暇を取ったのかの説明もない。知っている人が見れば、大学側がきれい事と収めようとしているとわかっただろう。別のいいかたをすれば、陳独秀について大学は明らかに虚偽の発表をしたことになる。陳独秀は南に帰るといいながら、彼はそのまま北京にいて文筆活動を継続していたのは周知の事実だ。

秦汾の教育部専門教育司長就任は、4月4日付である^{*93}。秦は、8日の北京大学における会議に参加しているから、この時までふたつの職を兼任していたということか。

文科学長罷免後の陳独秀について、追加説明をする人がいる。胡適である。

胡適口述、唐徳剛注訳『胡適口述自伝』において、ピラをまいて逮捕された陳独秀に関して証言する。すなわち、「この時、陳独秀はすでに北大の「文科学長」ではなくなっていた。大学は1年の休暇をあたえ、次の学年に開く新しい授業の宋史にそなえさせたのである」(214頁)と。

石鍾揚『文人陳独秀 啓蒙的智慧』は、胡適のこの証言を取り入れた。「陳独秀は文科学長の職務を解くが、教授として招聘し〔仍聘為教授〕次の学年に新設する宋史のための準備に1年間の休暇をあたえる」(279頁)。しかも、「4月10日、蔡元培は教授会でこの決定を宣告した。この教授会には、陳独秀は出席していない」と注する(教授会の日付を間違っているのではないか)。多くの論文が、同じことを述べている。だが、『蔡元培年譜長編』には該当する蔡元培の発言、資料は収録していない。『北京大学日刊』にも関係する記事は掲載されていない。胡適は罷免後の陳独秀について証言したが、それを裏付ける資料を見つけないのだ。

胡適の説明は、理解するのがむづかしい。ひとつは、文科学長を罷免された陳独秀が、すぐさま教授に任用されたのかどうかが不明だ。学長職は行政専門だから、教授就任となればそれなりの手続きが必要ではないのか。もっと理解しがたいのは、突然に宋史の授業がでてくる。説明がないから陳独秀と宋史のむすびつきがわからない。その教授会に出席していた胡適の証言だから無視はできない。だが、以上いくつかの不明な点があることを指摘しておく。かりに、胡適のいうようなことがあったにせよ、どのみち、いくら新設する予定の授業とはいえその準備に1年間の休暇というのは、誰が見ても処罰を粉飾したものだとなる。

北京大学改組前倒し実施の新聞報道

改組のニュースは、上海でも報道された。

「大学改組案提前実行」(『申報』1919.4.12)の内容はおおよそ以下のとおり。

北京大学では昨年10月に将来は文理科合併すると決めていた。このたび教育部の認可をうけ、今年2〔3〕月には大学評議会で議決をへた。学長制を廃止することにし今年夏休み後に実施する予定だった。理科秦学長が教育部司長に新任と

なり、文科陳学長も休暇を願い出て南に帰ることになったため、蔡校長は、前倒しして早めに実施することにした。馬寅初博士が教務長。

以上は、北京大学の公式発表をそのまま記事にしていることがわかる。くりかえすが、大学改組の原因が陳独秀の私生活であるなどとは書いていない。だが、鋭い人が見れば、陳独秀が休暇を願い出た、というのはなぜか、と疑問に思うところだろう。『申報』には続報がある。

「北京大学之消息 陳独秀辭職」(『申報』1919.4.13)は、短文だから翻訳する。

聯合通信社北京9日の速達郵便。北京大学文科学長陳独秀は『新青年』雑誌において新文学を提唱し、かつ孔子の道が文化を阻害すると考えたため、旧派の容れるところとはならなかった。校長蔡子民は教育部の口出しにたえがたく、陳氏は蔡子民を困難な状況におくことを願わず、ついに本日(9日)書類を提出し辞職し、明日(10日)より登校しないことにした。陳氏にふだん同調している胡適之、錢玄同、劉豊^{ママ}[半]儂らは、現在なお変動はない。

陳独秀が休暇を願い出た、というあいまいな理由だった。それをこの報道は、解明しているように見える。陳独秀が思想問題によって大学を辞職したと解説するのだ。しかも、陳は自主的に登校しない意志を表明したように書いてある。事実は、大学が陳を罷免したのだから、主客が転倒している。これは陳独秀の側に立った報道ということになる。

どうやら、当時のこの見方がのちの研究にまで影響をおよぼしているとわかる。旧派の攻撃にたえられず、また蔡元培の窮地を救うために自分から大学を辞任した陳独秀という経緯にしてある。だが、それでは蔡元培は、陳独秀を犠牲にして北京大学を守ったことになるではないか。蔡の主張は、思想の自由と包容主義であり、教員の学外における活動は大学とは関係がない、というものだ。それからすれば、陳独秀を守りきれなかった。これでは蔡元培の主張が実行力を伴わなかった、つまり虚偽だということになる。

陳独秀が辞任したのには裏がある、すなわち思想問題に発して大学人事におよんだ政治問題だという、いかにもそれらしい報道である。だが、これこそが陳独

秀が意図した方向づけにほかならない。自らの私生活が学長罷免の真の理由であった。このことから人々の注目をそらせるのが目的であり、またそのような結果になるのである。

陳独秀は、6月11日に北京新世界でピラをまいて逮捕された。休暇中のできごとである。それを記事にした北京の藤原鎌兄がいる。紹介する(ルビ省略)。

(45) 燕塵〔陳独秀のピラまき〕

前北京大学文科大学長の陳独秀君が新世界の三階から伝単を撒いて捕まったとは如何にも軽率な話のようだが。

陳君は、元来、伝単には縁故のある人で、君は安徽の出身、元、家には十数万の富を擁していたのを革命派に与し、横浜で印刷屋を開いて、盛んに革命派のために檄文の印刷などを引き受けたものだ。それで、先生スッカリ財産を棒に振って了った。

そんな事から南方の人には重んぜられ、革命後だんだん大学の学長にまどなったのだが、今度の騒ぎを見てはジットして居られず、旧病再発したものと見える。

ことに伝単の文字も知って居る者が見たら、先生自分で書いたものであったそう。

軍人連からは大いに嫌われているが、しかし安徽出身で安徽派の中に後援するものもあった、目下其の方面でしきりと保釈の運動中だという。(『新支那』一九一九年六月十九日初出未見)*⁹⁴

記事の中に横浜がでてくるのは、陳独秀が、1901年より数度にわたり自費で日本に留学しているからだ。

『大阪朝日新聞』(1919.6.15付)では、6月12日に逮捕されたと報道された(ルビ略)。「前文科大学長逮捕(北京特電十三日発)北京大学前文科学長陳独秀過激思想鼓吹の嫌疑を以て十二日逮捕されたり」

陳独秀をめぐる問題は、以上のように進展していった。これと並行して林蔡問題が生じる。

従来は、林蔡問題があくまでも中心であるかのように説明されてきた。一方、陳独秀問題はほとんど触れられることがなかったといえよう。林紓研究でそうなるのは、しかたがない。だが、私が見るところ、陳独秀問題の方が主である。蔡元培を筆頭にした北京大学内の新派集団は、陳独秀問題を長期間抱えこんでおり、それを理由のひとつとして安福倶楽部および『公言報』から恰好の攻撃目標にされていた。それへの対策が文科理科学長制度の廃止である。これを計画し着々と準備していた。林紓と蔡元培の書簡交換は、それからすると傍流という位置づけである。

8 林紓書簡

林紓が蔡元培にあてた手紙は、公表されたものが2通ある。

『公言報』の記事

手紙の内容を紹介するまえに説明することがある。北京大学をめぐる風説風聞が以前からあることを把握する必要があるだろう。当時の北京大学がどういう雰囲気につつまれていたのかを見れば、林紓の書簡がでてきた背景を理解することができる。

再録というかたちで読むことが可能な新聞記事がある。「北京学界における思潮変遷の近状を見られよ」と題する。

『公言報』で報じられ『北京大学日刊』と『新潮』に転載された。転載されることによってより広く知られることになる。要約する(冒頭の をつけた箇所、あるいは著者名から「要約おわり」までを指している。以下同じ)。

無署名「請看北京学界思潮變遷之近状」『公言報』1919.3.18 転載『北京大学日刊』1919.3.21 転載『新潮』第1巻第4号1919.4.1

北京大学は蔡子民が校長になってから様子が一変した。文科学長陳独秀は新派首領である。教員には胡適、錢玄同、劉半農、沈尹默などがいる。貴族文学、古典文学、山林文学を打倒し、国民文学、写実文学、社会文学にかえるというのが

文学革命だ。胡適は、議論を『新青年』に発表しており教授される哲学講義も白話文体にかえている。学生組織の『新潮』もその学説を宣伝する。そのほかに『毎週評論』が旧派文学、旧思想に反対する。同時に、対立するものとして旧文学一派がある。劉師培を首とし、黄侃、馬叙倫がいる。対抗して雑誌『国故』を創刊した。国史館の屠敬山、張相文ら一派も彼らに同情をよせる。従来、大学の教壇は桐城派の古文家によって占められてきたが、民国になって章太炎学派が勃興した。姚叔節、林琴南の輩は劉黄らを見て文芸が衰微した感を免れない。中間に章太炎の高弟朱希祖がいる。彼のいう新しいものは古い範囲を脱却したのではなく、その手段は破壊ではなく改良にある。過日、教育部が大学に訓令を発して陳錢胡の3氏を辞職させたと喧伝されたが、記者が詳細に調査したところそのような事はなかったと判明した。陳胡らは新文学の提唱にあたって、旧文学の抹殺ばかりでなく、絶対的に旧道徳を捨て去り、倫常を排斥し、孔孟を罵り、さらには国語を廃してフランス語（注：エスペラントの誤り）を国語にせよと主張する議論までがある。その粗暴で滅裂であるのは実に度を過ぎている。林琴南の蔡子民にあてた手紙は、学界の前途について深い悲しみを表わしている。（要約おわり）

表題に使われているのは「北京学界」だが、文章の内容は北京大学についてのもの。静観「北京大学新旧之暗潮」（『申報』1919.3.6）から大幅に無断借用した。

学内の思想的対立を新旧とその中間に分類して紹介している。外から見れば、そのような勢力関係だったのだろう、と理解できる。今読んでも、特に異論を差しさむ必要があるとも思えない*95。陳独秀が『新青年』で主張したこと、新旧それぞれの考え方が異なっていることを説明しているだけだ。

一般には、『公言報』はこの記事で北京大学を攻撃したといわれるのだが、はたしてそうだろうか。記事の最後部分で、たしかに陳独秀らの考えに反対している。攻撃といえば攻撃か。しかし、事実無根のことを書いているわけではない。陳独秀らの主張は、そのまま紹介したうえで、それには反対だというだけだ。新聞の論調は不偏不党でなければならない、と考えれば『公言報』は偏向しているかもしれない。だが、当時の中国で中立でない刊行物があるのも不思議ではない。だから、『新青年』『毎週評論』『新潮』も存在している。だが、陳独秀は、新聞の報道を攻撃と受け止めた。あるいは、攻撃だと強調した。

『公言報』の記事は、林紓書簡の前ぶれの役割をはたしている。変化した北京大学の状況を知り、それを憂えた林紓が、手紙を蔡元培に出したという順序になる。

さて、最初の林紓書簡は、同時代の文学革命派から批判され、現在にいたるまで研究者に批判され続けて有名である。

書簡だからもとは題名などない。ただ、林紓自ら名付けて「大学堂校長蔡鶴卿太史へ答える書 [答大学堂校長蔡鶴卿太史書]」という。この手紙の呼び方はいくつがある。多くの文献に収録されて、少し異なる題名をつけられているからだ^{*96}。

謎をとく手がかりは、この題名の中にこそある。

多くの人々は、批判するために引用、言及する。また、反動派、旧文人の資料として収録するばあいもある。林紓は、のちに自分の文集に収めたとき上の題名にしているから、彼のよび方に従うのが適当だろう。ただし、そのままでは長いから本稿では林紓書簡1とする。林紓書簡2があるからでもある。

題名がなぜ「答」となっているかという点、これ以前に蔡元培から林紓に手紙を送っているからだ。蔡元培が説明しているところによると、その内容は、こうだ。明代の人劉応秋の文集を印刷するので梁啓超、章太炎、林紓に題詞を書いてもらいたいと依頼をうけた。そこで3人にそれぞれ手紙を出した。それを受けた林紓が蔡元培に返答をだしたから「答」である。

林紓書簡1の初出は、1919年3月18日付『公言報』（初出未見）である。私信であるから、蔡元培へ直接送ればいいものを、なぜ新聞に掲載したのか誰も説明していない。よりもよって安福倶楽部の『公言報』である。その間の事情は不明だ。今、とりあえずそれは不問にしておく。新聞で公開された林紓の手紙を読んで、蔡元培はすぐさま返書をしたためこちらも公開した。これが3月21日付『北京大学日刊』に掲載された蔡元培「答林君琴南函」（3.18付）である。参考資料として林紓書簡1を収録している。

林紓書簡1についての従来の評価

林紓書簡1についての言及を先に紹介するのは、読者に予断をあたえるかもし

● 日刊投稿簡章

所求；或以學校為書院，暖曖昧昧，守一先生之言，而排斥其他。於是治文學者，恆蔑視科學，而不知近世文學全以科學為基礎；治一國文學者，恆不肯兼涉他國。不知文學之進步，亦有資於比較。治自然科學者，固守一門，而不肯稍涉哲學，而不知哲學即科學之歸宿，其中如自然哲學一部，尤為科學家所需要；治哲學者，以能讀古書為足用，不耐煩於科學之實驗，而不知哲學之基礎不外科學，即最超然之玄學，亦不能與科學全無關係。有月刊以網羅各方面之學，庶學者讀之，而於專精之餘，旁涉種種有關係之學理。庶有以祛其偏狹之意見，而且對於同校之教員及學生，皆有交換知識之機會，而不至於隔閡矣。

三曰：釋校外學者之懷疑。大學者，囊括大典，網羅衆家之學府也。禮記中庸曰：「萬物並育而不相害，道並行而不相悖，足以形容之。如人身然：官體之有左右也，呼吸之有出入也，骨肉之有剛柔也，若相反而實相成。各國大學，哲學之惟心論與唯物論，文學美術之理想派與

寫實派，計學之干涉論與放任論，倫理學之動機論與功利論，宇宙論之樂天觀與厭世觀，常鑒然並峙於其中。此思想自由之通則，而大學之所以為大也。吾國承數千年學術專制之積習，常好以見聞所及，持一孔之論。聞吾校有近世文學一科，兼治宋元以後之小說曲本，則以為排斥舊文學，而不知劇秦兩漢文學，六朝文學，唐宋文學，其講座固在也。聞吾校之倫理學，用歐美學說，則以為廢棄國粹，而不知哲學門中於周秦諸子，宋元道學，固亦為專精之研究也。聞吾校延聘講師，講例學相宗，則以為提倡佛教，而不知此不過印度哲學之二支，藉以資心理學論理學之印證，而初無與於宗教，並不破思想自由之原則也。論者知其一而不知其二，則深以為怪。今有月刊以宣布各方面之意見，則校外讀者，當亦能知吾校兼容並收之主義，而不至以一道同風之舊見相繩矣。

以上三者，皆吾校所以發行月刊之本意也。至月刊之內容，是否能副此希望，則在吾校同人之日勉，而靜俟讀者之

批判而已。

中華民國七年十二月十日，北京大學校長蔡元培

(一)對於教員，以學詣為主。在校講授，以無背於第一種之主張為界限。其在校外之言動，悉聽自由。本校從不過問，亦不能代負責任。例如復辟主義，民國所排斥也，本校教員中，有拖長辯而持復辟論者，以其所授為英國文學，與政治無涉，則聽之。籌安會之發起人，清議所指為罪人者，也。本校教員中，有其人，以其所授為古代文學，與政治無涉，則聽之。標賭娼妾等事，本校進德會所戒也，教員中間有尋作側室之詩詞，以納妾狹妓為餉事，以賭為消遣者，苟其功課不荒，並不誘學生而與之墮落，則姑聽之。夫人才至為難得，若求全責備，則學校殆難成立。且公私之間，自有天然界限。譬如：公曾譯有茶花女，適因小傳，仁德畫鑿錄等小說，而亦曾在各學校講授古文及倫理學，使有人誦：公為以此等小說體裁講文學，以挾妓姦通爭有夫之婦講倫理者，當值一笑。然則革新一派，即偶有過激之論，苟於校課無涉，亦何必強以其責任歸之於學校耶？

此復並候 著稿

八年三月十八日蔡元培敬啟
▲附錄本月十八日公言報原文
○請看北京學界思潮變遷之近狀
▲北京大學之新舊學派……

……兩種雜誌之對抗……

……三者以外之學者議論……

……林紆南致蔡伯卿書……

北京近日常教育雖不甚發達，而大學教師各人所鼓吹之各式學說，則五花八門，頗有足紀者。國立北京大學自蔡子民氏任校長後，氣象為之一變。尤以文科為甚。文科學長陳獨秀氏以新派首領自居，平昔主張新文學，黃力教員中與陳氏沆瀣氣者有胡適鏡之同劉半農沈尹默等學生間風興起，服膺師說，張大其辭者亦不乏人。其主張以為文學須應世界思潮之趨勢，若吾中國歷代相傳者，乃為雕蟲的阿諛的貴族文學。陳獨秀的鋪張的古典文學，迂晦的艱澀的山林文學，應根本推翻，代以平民的抒情的國民文學。新鮮的立誠的寫實文學。明瞭的通俗的社會文學。此其

● 國史徵集股啟事

徵收者自國史館附設本交際本股發行收票已年見在日外各機關新聞刊登

北京大學日刊

號八十三百三第

編輯部
經理部
廣告費

北京後門國立北京大學內
電話東局一千零七十二號

每份銅元二枚每月自取三角派送三角五分外省四角五分郵票不收廣告用四號字七日以內每字八厘一月以內五厘長期面訂五十元起算封面中縫加倍

本校布告

法科教務處告白

馬寅初先生因丁憂回里所授銀行論各課均暫行停講俟回京後再行補授此白

英文學研究所啓事

敬啟者今日(即星期五)下午小說由胡適之先生講演特此通知

體格 查處啟事

(1)凡本屆應受檢查而在檢查期間內未來本處者茲特延長一日(今日下午四時起六時止)務乞諸君按時來此補行檢查為禱

(2)去年已檢查體格諸君中關於眼科一部分須再覆驗者共四十二人請於今

日下午四時到檢查體格處第四部重行檢查姓名列后(先到第五部領取原檢查單)

法本科 曲宗邦 張鳳岐

預科 王耀宗

文本科 徐彥之 江紹原 周澍

楊文冕 蔡世賢 蔣希曾

蕭 贛 雷永祜 陳登恪

文預科 李秀龍 薛華倫 洪維辰

郭智石 李蘭昌 魏延齡

張 華 戴玉滄 邢審彭

曾青雲 班興文

理本科 張麗舉 宋毓瑛

唐文楠 饒泰讓 張席樞

理預科 石光彥 張彥升 盧允生

張上金 張競擇 紀紹綱

楊非熊 劉昌壽 盧啟宗

徐有聲 唐紹宗 席啟顯

熊天社 范 濤

(2)本屆已檢查體格諸君中關於眼科一部分須再詳驗者共十一人請於今日下午四時到檢查體格處第四部重行檢查其姓名列后(先到第五部領取原檢查單)

法本科 何培心 何啟禮 段班斌

王毓琦 金長社 譚壽祺

常宗起 王文燦 馮嗣賢

法預科 李興輝 杜光瑛

(4)一部或全部須覆驗者茲特開列姓名於後乞於今日下午四時到本處為禱

(先到第五部取原檢查單)

華以慎 楊濟華 韓芝如 蕭 和

吳俊昌 任乃訥 許耕良 楊樹南

鄭彥三

通 信

蔡校長致公言報函並附答林琴南君函

公言報記者足下讀本月十八日

貴報有「請看北京學 思潮變遷之近

狀」一則其中有林琴南君致鄙人一函

雖原函稱「不必示覆」而鄙人為表示

北京大學重相起見不能不有所辨正謹

以答林君函抄奉請為照載又

查報稱「陳謂等絕對的非棄舊道德毀

斥向常、既排孔孟」大約即以林君之函

為據鄙人已於致林君函辨明之惟所云

「主張廢國語而以法蘭西文字為國語

之議」何所據而云然請示復

▲答林君函南函如左

琴南先生左右於本月十八日公言報中

得讀

惠書索到應秋先生事略據第一次奉函

時曾抄奉趨君原函恐未達覽特再抄一

通奉上如荷

謹詞其幸

▲附錄趙君函來函

敬懇者敝部明遺老劉應秋先生遺著

▲中華郵政特准掛號認爲新聞紙類

れない。あえて、引用してみる。ただし、これで全部だというわけではない。ご了解いただきたい。

まず、当事者のひとり胡適から。

胡適「五十年来中国之文学」『最近之五十年』上海・申報社1923.2初版^{*97}。21頁

「8（1919）年3月に、林紆が蔡元培に手紙を書いて新文学の運動を攻撃した。蔡元培も長い手紙を書いて彼に答えた。この手紙は、当時の「新旧の争い」という両方面を代表することができる。（引用省略）しかし、蔡元培の手紙が最も重要な点は、反駁にあるのではない。なぜなら、もとの手紙は反駁する値打ちがなかったからである」

林紆書簡1は、「新文学の運動を攻撃」するものであったが、反論する価値もない。胡適にいわせると根拠薄弱で攻撃文にもなっていないことになる。

この胡適の判定を受け継ぐのは、鄭振鐸の「導言」（1935）だ。林紆書簡1の一部を引用したうえでつぎのようにまとめる。

彼（注：林紆）の論点は錯乱したものだ。蔡元培の返信は、ことば正しく意味が厳格で、事理を説明して明白である。彼には反駁できることばがなかった。^{*98}

下世話な表現をすれば、林紆は蔡元培を批判する手紙を出したが、蔡からの反駁にグウの音もでないほどに論破され完敗した。林紆と蔡元培のあいだでかわされた手紙に関して、その評価の方向が、このように定められた。文学革命派である胡適あるいは鄭振鐸なのだから、結果はそうなるに決まっている。だから、後の記述は、基本的に胡適と鄭振鐸が記述した方向に沿ったものになっているといえる。日本での説明を、いくつか見ておこう。中国での研究をふまえて記述しているからだ。

松枝茂夫『中国の小説』白晝書院1948.4.15。292-293頁

「白話運動反対者 白話運動が次第に隆盛に趨くと共に、旧文学者方面から反対の声が出た。北京大学内部でも『国故』『国民』に據る古文学擁護派があり、校外では桐城派古文の大家林紆^{リンジヨ} (Lin Shu) を中心に、安福派軍閥の援護を利用して新運動弾圧策に出た。林紆は海外名著の翻訳家として清末民初の文壇に貢献するところ大きく、後進の人々に与へた影響から云つて嚴復 (Yan Fu)、梁啓超 (Liang Chi-chao) の二人のそれに劣らない。しかし根本的に頭が古かつたので今や時代の落伍者となつた。彼は小説『妖夢』『荊生』を作つて蔡元培はじめ、陳・胡・錢等の新人を罵倒し、また蔡校長に書を致して (八年三月) 新文学運動を攻撃し、白話運動の停止方を要請した。蓋し「引車売漿^{くるまひきあめうり}の徒が操る所の語」を以つて文字としたならば、人々はつひに古書を読むことができなくなり、聖賢の道はやがて中国の地を払ふに至らんことを危惧したのである。剛愎なる蔡校長は堂々これに論駁して大学の自由を説き、自らも白話の擁護者たることを公言した」

林紆は「安福派軍閥の援護を利用して新運動弾圧策に出た」「新文学運動を攻撃し、白話運動の停止方を要請した」とある。本当なのか。

劉麟生著、魚返善雄訳『中国文学入門』東京大学出版会1951.10.20 / 1967.2.25七刷。
114-115頁

「古文派の人たちからは大反対の叫びが起こり、林紆、章士釗^{ジョ ショウ} (呼び名は行嚴)、梅光迪^{テキ キン} (呼び名観莊) その他の学者文人は、数年にわたつて新しい文学に強く反対した。「車引きや物売りの使う俗語で風格のある文章が書けるか！」というのがこの一派のいい分であつた」

引用符でくくつた「車引きや物売り」という有名な文句は、まさに蔡元培にあてた林紆の手紙のなかで使われている。原文は「引車売漿之徒」である。あとで説明するが、林紆の文章は、「卑俗なことば [土語] を用いて文章を作るならば」車を引いて豆乳をうる輩でも大学の教授になることができる、と書いているだけだ。皮肉であるのはいうまでもない。それを「！」をつけて「書けるか！」と表記すると、林紆が書いた意味とは離れてしまう。劉麟生がそのように受け取つたということだ。また、それが今では普通の解釈になっている。

倉石武四郎『中国文学史』中央公論社1956.10.25 / 1968.3.9十三版。181頁

「胡適はその年の秋、留学をおわって帰国し、翌一九一八年には二十八歳の若さをもって北京大学の教壇に立ち、全学生の人気を一身にあつめた。これを見て憤激した林紓は、北京大学校長蔡元培ツァイユワンペイにたいし白話を禁ぜよと迫ったが、蔡元培は思想自由の原則をかかげてこれを却下した」

林紓は、ここでは胡適の人気に憤激したことになっている。林紓は「白話を禁ぜよと迫った」とある。本当なのか。

小野忍編『現代の中国文学』毎日新聞社1958.5.1。28頁

「『新青年』は一九一八年以後文章を全部口語に改めた。翌一九一九年、林紓から言文一致に対して反対の声があがった。林紓は蔡元培あての公開状という形で文章を書き、大学内での言文一致の禁止を要求した。蔡元培は大学では「思想自由」の原則に従っているといって応じなかった」

林紓は「大学内での言文一致の禁止を要求した」とある。本当なのか。

増田渉「蔡元培について」『中国文学史研究』岩波書店1967.7.25。310頁

「ただ『新青年』に拠った人々は、多く北京大学の教授であったために、学外の保守勢力の反感は蔡元培に集中し、とくに古文の名家とされた林紓は、蔡元培に対する公開詰問状を新聞に発表した。北京大学の諸教授は孔孟をくつがえし、倫理をそこなうものだといひ、また「引車売漿」の徒のあやつる言語（口語をさす）が文学用語になるなら、北京・天津のかつぎ商人はみな教授になれるといった。だが、蔡元培は同じ新聞紙上で林紓に答え、「思想自由の原則に従って、兼容并包主義をとる」ことを宣明し、また「小デューマ、ディケンズ、ハーデー^マ*99などの小説はみな口語だが、君が翻訳して文語にしたのである。君は君の訳文が原書より以上だというのか？」と反問して、保守派の抗議を一蹴し、その態度は、一步もゆずらない屈強ぶりを示した」

「林紓は、蔡元培に対する公開詰問状を新聞に発表した」とある。「詰問状」というのは、本当なのか。

倉石武四郎『中国文学講話』岩波書店1968.11.20。岩波新書（青版）696。216頁

「最初は案外にも（文学革命に対して）反対論があらわれぬ。それではつまらぬというので、錢玄同などがサクラになって、『新青年』に偽名で反対論をだしました。するとたちまちこれに同調するものがあらわれ、大変にぎやかになりました。とりわけ、清朝時代にみんなにさきがけて西洋文学を翻訳した林紓^{しよ}がなんと大変な反対で、この人も当時北京大学教授だったものですから、北京大学の総長の蔡元培にむかって、こんな車夫馬丁のつかうようなことばで物をかくことを禁止せよとねじこんできました。しかし、さすがは蔡元培で、思想は自由であるというたてまえからこの要求をしりぞけてしまいました。林紓はよほど腹にすえかねたとみえて、自分で、胡適・陳独秀・錢玄同の三人がかってな熱をふいてるところへ偉丈夫があらわれて三人を征伐するという小説までかきました。いかにも林紓は西洋文学を紹介しましたが、それはまったく古文の形をもちいており、紹介とはいっても自分で原文がよめるわけでなく、英語やフランス語のよめる人をそばにおいて口頭で翻訳させ、それを古文になおしたため、内容もかなりかわっており、誤訳も相当あったのですが、こうした中途はんばな改革者がやがて反動化するという、おもしろい実例になったわけです」

林紓は、当時、すでに北京大学には勤務していない。「当時北京大学教授だった」は、誤解だろう。倉石の林紓小説に対する評価は、相当低いことがわかる。

「反対論があらわれぬ。それではつまらぬというので」文学革命派から攻撃目標にされた林紓は、とるに足らない存在で、批判されるのも当然だという判断らしい。つまらないからと気晴らしのようにして敵対者にされた林紓の方こそいい迷惑である。

林紓は、「車夫馬丁のつかうようなことばで物をかくことを禁止せよとねじこんできました」とある。蔡元培にむかって林紓は「禁止せよとねじこん」だという。本当なのか。

くりかえせばしつこいとわかって書いている。

白話運動の禁止、言文一致の禁止、口語で書くことの禁止などと表現されている。表現は違うが、禁止という点で多くが一致している。説明の方向が一致することは、ものによってはある。だが、林紓については、一致しているほうがいさ

さか怪しい。林紓が原作の戯曲を小説化したという定説は、定説ゆえに研究者の全員が、例外なく一致していた。少なくない数の研究者が、それも90年近くの長期間にわたってそうだったのだ。その例を、私はすでに見ている。林紓の手紙についても、その「禁止」ということばで一致していることに対して私はうさんくささを感じる。

高田昭二『中国近代文学論争史』風間書房1990.1.15。69-70頁

該書は、林紓書簡1を引用しながら、詳しくのべている。一部省略して紹介する。

「旧派文人で当時の有名な文章家林紓（琴南）が、友人の蔡元培（北京大学^マ長時代陳独秀を文科^マ長として招聘した）に宛てて、「文学革命」運動の非を鳴らした長文の手紙を送ったことは有名である。彼はその中で白話文運動を評して言っている。／（「引車売漿之徒」部分を引用している。省略）／陳独秀教授とその同志への痛烈な皮肉のつもりであろうが、要するにヒステリカルな漫罵に過ぎない」

「痛烈な皮肉」でよいと思うのだが、高田は、それを一歩進めて「ヒステリカルな漫罵」だと判断した。林紓は、頑固な老人だからか。こまかいところだが、陳独秀は文科学長だが、教授ではない。

「また「文学革命」運動のもうひとつの側面である「反礼教」については、／（手紙からの引用。「孔孟を覆滅し、人倫を根絶やしにすることを以て、常に愉快としている」の前後部分。省略）／これも到底理屈にもなにもなっていないが、それだけ清末以来の時代の劇変に対する、彼ら旧文人の困惑がよく感じられる。たしかに、彼らに取って死守すべき最後の砦であり、彼らの世界観の根幹にかかわる問題であった。なりふり構わぬ林紓のこの手紙が、その事をよく物語っている」

「彼ら旧文人の困惑がよく感じられる」で十分ではないか。ここでもまた一歩踏み込んで、林紓は、「なりふり構わ」ないとある。本当なのか。

以上の説明から受ける林紓についての印象は、きわめて悪い。老醜、醜悪、悪の権化である林紓、といったところだ。旧文人の、また守旧派の代表者である林紓が、なりふり構わず、感情的に、北京大学内での言文一致を禁止し、白話運動の停止を要求した。外国文学をあれほど大量に翻訳した人物が、五四の直前には

若者を圧迫し、こともあろうに軍閥をそそのかして北京大学を脅迫し、教授人事にまで口をはさむ。最低である。魯迅が彼のことを「ファシスト」(「我的態度氣量年紀」1928)と罵ったのも当然のことだ、ということになりかねない。その見方の上に築かれた林紓像である。いうまでもなく、これは錢玄同、劉半農、陳独秀、鄭振鐸ら文学革命派がそうあってほしいと描いた林紓像の延長線上にあることを明確にしておきたい。

本稿で林紓作「幻の」文章を紹介したことがある。本稿を執筆していた時は、読むことができなかつたから「幻の」という形容詞をつけた。資料集にも収録されていない。新聞に転載されているのを見つけたから紹介したし、あとで天津『大公報』初出の文章を入手してもいる。本書で複写を掲げたとおりだ。1917年に林紓が公表した「古文は廃止すべきではないことを論じる[論古文之不宜廢]」である。この文章で、林紓は、ただ静かに古文を擁護しているだけだった。その彼が、今、急に嫌悪の感情をむきだしにして蔡元培を攻撃するだろうか。そこから考えても私には腑に落ちない。

林紓が自身で定めた手紙の題名をもういちど見てほしい。「答大学堂校長蔡鶴卿太史書」である。林紓は、この手紙を後世にまで残すことを意識して書いている。自らの文集『畏廬三集』(1924)にこの題名で収録したということは、それだけの意味を持たせていると考えるべきだ。

北京大学の旧称に使われた(京師)大学堂の校長である蔡鶴卿(蔡の字)まではいい。この「太史」とは、なにか。蔡元培は、科挙の進士であり翰林院編修だった。その官名が太史だ。挙人の林紓からすれば、年齢は自分より十五歳も若い科挙についていえば蔡のほうが格上だ。ゆえに官名を使用して敬意を表したのである。林紓は、中華民国に生きていながら、意識としては清朝の人間だった。時代の変わり目には、そのような人がたまにあらわれる。

題名をつけたのは後年だとしても、書簡の冒頭は「鶴卿先生太史足下」である。蔡元培に「太史」と敬称をつけて出した手紙に、しかも記録して残そうとする文書に、蔡本人をあからさまに罵り批判する言辞は出てこないだろう。蔡元培以外の人であれば話は別である。また、いうまでもないが、小説とは違うのだ。

上でいくつかの文章を引用し論者の名前を出しているが、私は批判しているの

ではない。ご注意ねがいたい。文学革命派が提出して今ではすっかり定着した定説の強固さ、固定観念の動かしがたさ、事の意外さ重大さを前にして、私はここでもポー然としているだけである。

林紓書簡 1 の内容

林紓が書簡 1 で述べている主題は、ふたつしかない。すなわち、大学教育において孔孟の教え (= 五常 [仁義礼智信]) を遵守すること、および古文の擁護である。まず、五常についての言及を引用する。

公 (注 : 蔡元培) におりいってお願いしたいことがございます。大学は全国の模範であり、五常の属するところです。近頃、世の中では風説中傷が入り乱れておりまして、公もお聞き及びのはずでしょうが、私も疑ったり信じたりです。*100

まず、これから述べる事柄は、大学の教育に関する林紓からのお願いだと宣言する。

大学が全国の模範であることが明示されている。それには、五常が中心にあるべきだ、という考えである。

風説風聞中傷は、事がおきるまで正体不明であるのは常識だ。だから、疑いが半分に信じるのが半分だ。

北京大学をめぐる風説風聞がある事実を、まず述べる。つぎが、西洋を例にあげて五常について説明する箇所だ。

外国では孔孟を知りません。しかし、仁を尊び、義を頼み、信を誓い、智を重んじ、礼を守り、五常の道に逆らってはいません。それどころか、勇気をもって助けようとしています。私は外国語を理解しませんが、十九年の筆述をかさね、訳著は百三十三種、すべてで千二百万言になります。その中で五常のことばに逆らうものをまったく見たことがありません。いつごろからか人はこのような親にそむき人倫を破る論を言いはじめたのでしょうか。これ

は外国人から得たものでしょうか。それとも別のところから授かったというのでしょうか。165頁

外国文学を多数翻訳した経験をもつ林紓である。彼の体験から発言している。訳書のなかに、中国でいうところの五常に違反する例をみたことがない。つまり、五常とは世界に通用する基本思想だというのだ。ところが、最近の論調はこの普遍思想である五常を破れという。了解することなど到底できない、と述べる。ここには、他人を批判する強い調子を見ることはできない。自分の信じる五常の思想が、簡単に捨てられている状態、あるいは声高にそう主張されている現状を深く悲しんでいるとしか私には読めない。

つぎは古文問題である。

もしも、死んだ文字が生きた学術をさまたげるというのでありましたら、科学は古文を用いませし、古文はまた科学をさまたげることもありません。イギリスのディケンズは、ギリシア、ラテン、ローマの文を死物としてしばしば排斥しましたが、しかし、今もなお存在しています。ディケンズが自らの名声によっても、私心で古えを辱めることなどもとよりできないことなのです。ましてや、わが国の人でディケンズに匹敵する誰がいるというのでしょうか。165頁

科学についての記述は、白話を使えばよろしい。ご注目ねがいたい。林紓は、白話に反対しているわけではない。文面を読めば自然に理解できるはずだ*101。ラテン語がでてきた。どこかで見たおぼえのある表現だと思われたはずだ。「古文は廃止すべきではないことを論じる」において、林紓はすでに同じことを書いている。くりかえせば、すなわち「ラテン語が廃止できないことを知れば、司馬遷、班固、韓愈、柳宗元もまた廃止すべきではないということに自然になるのだ。私はその道理は知っているが、そうである理由を説明することができない。これは古いものを好むものの病気であろう」

古文を擁護しているだけだ、と重ねていうよりしかたない。

つぎは古文と白話の関係である。

「水滸伝」「紅樓夢」を例にあげ、白話の最高峰だと認めたくえで、いう。

結局のところ、万巻を読破しなければ古文を作ることもしないし、また白話を作ることもしないのです。もし、昔の書籍のこぼを白話に変えて敷衍して説くというのでしたら、ダメというわけではありません。166頁

古文を基礎としなければならない、という考えが林紵にある。だから、その応用として白話を使うのはなんら問題ではない。ここを見ても、白話を否定していないことが明白である。

短い語句だから引用符を使って示せば、「もしもとの書籍を読むのであれば、古文を全廃することはできないのです」(166頁)、「そもそも国粹を保存して「説文」を教えるのはいいのです。しかし「説文」を従として白話を主とするのはダメです」(167頁)となる。

あくまでも古文が主であって、それから白話という順序になる。その逆はありえない。これは関係問題であって、古文なしの白話は存在しえない、というだけのこと。林紵は、主客の順序さえ守っていれば白話の存在も認めている。それどころか、林紵自身が白話の作品を発表してもいる*102。

最後は、「全国のお年寄り、子弟を公に託しています。公が五常を守ることが肝要だと留意されんことを願います」(167頁)としめくくる。

林紵の手紙全体に流れる基調の色彩は、文中にあきらかにされている。「私は歳すでに七十になろうとしており、富貴功名は捨てられた灰だと三十年も前から見なしております。今、非常に老齡でなお古く壊れたものを大事にしておりますが、その姿勢は死ぬまで変えるつもりはありません」。頑固な老人の繰り言である。ただし、静かな決意が表明されている。その調子は、林紵の抱く深い悲しみ、憂いだと私は感じる。

1919年当時、林紵はすでに六十八歳だ。十分に老齡であるということが出来る。大量の林訳小説を上海の商務印書館から発行しており、原稿料も最高級に位置づけられていた。経済的にはなに不自由ない。絵を描くことに長時間を費やすこと

のできる生活である。なにもわざわざ北京大学の教育方針について質問の手紙を蔡元培に出す必要はないではないか。意識としては清朝に生きている林紓なのだから、民国の社会など無関心でいてなんの不思議もない。だが、それが林紓にはできなかった。

読者の中には、「車を引いて豆乳を売る輩 [引車売漿之徒]」と書いて蔡元培の父親を当てこすって批判したではないか、という人がいるだろう。魯迅が、そう書いている。林紓は、蔡元培の父親の職業まで持ち出して批判するくらい卑劣な輩だ。攻撃したに違いない、と。

この有名な箇所を林紓の手紙で見てみよう。

もしすべての古書を廃し、卑俗なことば [土語] を用いて文章を作るならば、北京の車を引いて豆乳を売る輩が操っていることばはいずれも文法がありますから、福建広州人の文法もない鳥の鳴き声とは違い、そうであれば、北京天津の小商人はだれでも教授に採用できることになります。166頁

この部分のどこに蔡元培の父親と関係するものがあるというのだろうか。古文を知らない小商人でも、北京天津の口語をしゃべるものなら教授になることができる。白話をそのように林紓はとらえていた。それだけのことだ。軽い皮肉である。蔡元培の父親批判の意図は、もともと含まれていない。

だいいち蔡元培の父親は錢莊の支配人であって物売りの小商人ではない。当てこすっていると考えるのは、魯迅の判断である。林紓よりも後に、まったくの別人が、蔡元培の父親は豆乳売りであると罵ったのだ*103。林紓とは無関係である。ところが、魯迅は、それを知っていて林紓に罪をなすりつけた。

林紓が蔡元培を罵ったなどとは、とんでもない濡れ衣である。手紙そのものが、蔡元培に「太史」と敬称を使用して書かれている事実を見てほしい。ありえないことをあたかもあったかのように読み込み、それを書き連ねるのは、林紓悪玉説にもとづきそれをくり返しているのである。

林紓は北京大学の人事に言及しているかといえば、それも、ない。陳独秀、胡適らをクビにしるなどの文句は、どこにも見つけることはできない。

前に私は、周作人が林紓書簡について「陳（独秀）胡（適）の排斥を要求した」と書いているのを紹介した。当事者の記憶が間違っている。のちに尾坂徳司が「今やその三名の長たる蔡元培に、大学のありかたをただし、新文学派教授に対する善処をもとめたのである」と述べるのをもういちど見る。蔡元培に「大学のありかたをただし」たのは、そうかもしれない。だが、それにつづく「新文学派教授に対する善処をもとめたのである」は、間違いである。林紓は大学の人事問題など触れてはいないからだ。わざわざ周作人と尾坂の文章をくり返すのは、この見方が普通に信じられていることを示すためだ。私は、批判しているのではない。

大学においては古文を教え、古くからの倫理である五常を守るという教育方針を貫いてほしい。これが林紓が蔡元培にむかって、静かに穏やかに差し出した要望だ。

林紓書簡1には、国の将来を憂える林紓の気持ちが、切々と書かれている。国の最高教育機関である北京大学において、古文教育を基礎として孔孟の教えを守ってこそ国の将来を背負う人材を育成することができる。林紓は、この信念を固く抱いていた。彼が、北京大学学生の張厚載から聞いた話によるとその基本部分がおろそかになっているらしい。大丈夫だろうか。大学での教育が悪い方向に変われば国の将来も危うい。林紓の蔡元培にあてた手紙は、この憂国の心情であふれている。文学革命派から思いもよらず旧文人の、守旧派の代表にされてしまった林紓の深い悲しみをともなっているということもできる。文学革命派、あるいは『新青年』集団が、それは保守思想だ、旧思想だと批判したところで、林紓の信念が揺らぐことはない。

林紓の蔡元培あて手紙（林紓書簡1）は、言語思想問題にとどまっている。それが、安福倶楽部の『公言報』に掲載され、陳独秀の『毎週評論』にも転載された。両陣営から利用されたということだ。それだけの価値があると認定された。

蔡元培の返答

林紓の書簡に対して蔡元培は長文の返答を書いた。蔡元培が、思想の自由と包容主義のふたつを再度言明していることによっても知られる。

蔡元培は、手紙のはじめ部分で林紓書簡についてつぎのようにのべている。

公（注：林紓）のお手紙は多くのことばを費やし深くお考えになり、世の中で風説中傷が入り乱れていますから北京大学のために惜しまれることには、まことに感謝にたえません。ただ、風説中傷は決して事実ではありません。公が大学を愛し、そのために誤りを正してくださるのはいいのです。今、入り乱れるこの風説中傷によって責められるのであれば、聞きかじりの輩にますます風説中傷が事実であると信じ込ませますし、これは大学を愛されています公の本意ではないでしょう。公が責められるのは、つぎのふたつにほかなりません。ひとつは「孔孟を覆し、倫常を滅ぼす」です。もうひとつは「古書をことごとく廃止して卑俗なことば〔土語〕をもちいて文章をつくる」です。^{*104}

林紓が大学での教育について憂慮している、と蔡元培は正確に読みとっている。林紓書簡1の主眼が、ふたつだけ、すなわち五常についてと古文にまつわるものだと把握している。それはそうだ。林紓はそのふたつを問題にしたのだから当然だろう。北京大学の人事問題など、はじめから書かれていない。だからそれについて蔡元培が答えるはずもない。

孔孟の教えについては、大学内でそれを否定して学生に教える教授はいない、と答える。ただし、「もし大学の教員が学校外で意見を自由に発表するのでしたら、学校とは無関係で、もともと論じる必要もありません」(268頁)とつけ加えることを忘れない。

言語問題では、北京大学の授業では古文を廃止してはいない、と答える。

蔡元培は、林紓が使用した「車を引いて豆乳を売る輩〔引車売漿之徒〕」という文句を引用する。その意味は、内容がともなわなければならないという。蔡は普通に使っていて、それ以上の意味を持たせていない。さらに引用して、林の「結局のところ、万巻を読破しなければ古文を作ることもしかないし、また白話を作ることもしかないのです」に対して「その通りです〔誠然、誠然〕」と賛意を示す。そこまではいい。問題は、そのあとだ。蔡元培は、自分なりの表現に書

き直して反論する。すなわち「(胡適之、錢玄同、周啓孟[作人]らは)群書を涉獵しておらず、古文を作ることができないから、白話でもって自分の無能を隠しているのだと、公はなにをもって判断されたのでしょうか [公何以証知為非博極群書, 非能作古文, 而僅以白話文蔵拙者?]」*105

「古文を作ることができないから、白話でもって自分の無能を隠しているのだ」。注目してほしい。林紓は、そのようなことは書いていない。林の手紙には、胡錢周の名前は出てこない。蔡元培が自分の判断で彼らの名前をだし、自分の判断で林紓の文句を書き改めたのだ。ところが、のちに、蔡元培が書いた文句が、林紓ら旧派が使用した罵りの文句だとすり替えられるのである。

蔡元培は、大学についてふたつの主張を持っている。すなわち、「思想の自由」の原則に従って、包容主義をとっている [循“思想自由”原則, 取兼容并包主義]。だから、学内には旧派も新派もいるが、北京大学内で授業をきちんと行なっているのであれば、学外での言動は教員の自由であり大学は干渉しない。また、大学もそれについては責任を負わない、と説明する。

思想の自由と包容主義については、蔡元培は林紓への返書以前にすでに公表している。『北京大学月刊』第1巻第1号(1919.1)の発刊詞において、「思想自由の原則を破らず [不破思想自由之原則]」「我が校の包容主義 [兼容并収之主義]」とある*106。蔡元培は、これをくり返した。

林紓の書簡は、大学内での教育を問うものでしかなかった。蔡元培は、それを理解しているから回答も学内の状況を説明しておわる。普通のやりとりである。林紓が罵り、蔡元培が軽く論破した*107という性質のものではない。

学内での授業と外部における言論活動は別物だと強調するため、蔡元培は林紓の翻訳を例にあげる。

たとえば、公はかつて『茶花女』、『迦茵小伝』、『紅礁画槳録』などの小説を翻訳し、また各学校で古文と倫理学を教授されたことがあります。公が、これらの小説の体裁で文学を講じ、芸者遊び、姦通、妻帯者を争うといったことで倫理を講じている、と中傷する人がいましたら、一笑にも値するでしょうか。*108

ご留意いただきたい。この部分の真意は、翻訳小説と学校の授業は別物だということだ。蔡元培は、たしかにこう書いている。私のことばでいいなおせば、小説の虚構と授業の現実は異なるということにほからならない。張厚載批判のところで、もういちど触れることにする。蔡元培が林紓に投げかけたことばは、そのまま蔡にもどってくる。

蔡元培の返信をとりあげながらあまり指摘されないことをつぎに紹介しよう。蔡元培は、進徳会について2ヵ所で言及している。まとめて示す。

近年、教科以外に進徳会というものが組織されました。その基本戒律は、女郎買いをしない〔不嫖〕、妾を囲わない〔不娶妾〕のふたつがあります。

269頁

女郎買、賭博、蓄妾などは、本校の進徳会が禁じていることで、教員のなかには艶情の詩詞をよろこんで作ったり、蓄妾、芸者遊びを文雅風流と考え、賭博を暇つぶしにするものもいますが、授業が荒れるのでなければ、あるいは学生を誘って墮落させるのでなければ、しばらく放任しております。

271頁

教員個人についていえば、私生活の道徳的あり方と、大学内における授業とは区別していると主張する。だから、広くいえば、思想の自由だし包容主義だということになる。

妓楼通いを続ける陳独秀だった。蔡元培は、それを承知していた。その対策として大学を改組することをこの手紙のすこし前に決定している。計画の段階からいえば、1918年10月末からだ。蔡が手紙で進徳会にわざわざ触れるのは、陳独秀らの行状に関係していると理解できる。

蔡元培にしてみれば、林紓への返信のなかで思想の自由、包容主義を高らかに宣言したばかりだ。妓楼通いも、大学の授業さえ支障なく行なっていれば大目に見て放任した。進徳会の設立者であっても、広い意味の思想の自由を優先させたということだ。しかし、その宣言すなわち林紓への返信を発表した直後に、おそ

らく陳独秀の妓女傷害事件が発生した。湯爾和からも言われてしぶしぶ文科学長罷免を前倒しして実施することを承認したと考えられる。表面をとりつくりうために改組の時期を早めざるをえなかった。

だから、林紓との手紙のやりとり（批判、攻撃、反論、反撃、論争という種類のものではない）は、蔡元培とふたりだけの問題にはおさまらなくなった。林紓へあてた蔡元培の返信が、迂回しながら結果として陳独秀を文科学長の地位から追放するという事態を招いた原因のひとつになったといえる。陳独秀の学外における行動が、北京大学内の人事問題につながった。蔡元培のいう広い意味での思想の自由は、俗な言い方をすれば陳独秀の下半身問題とは完全に無関係ではなかったということになる。

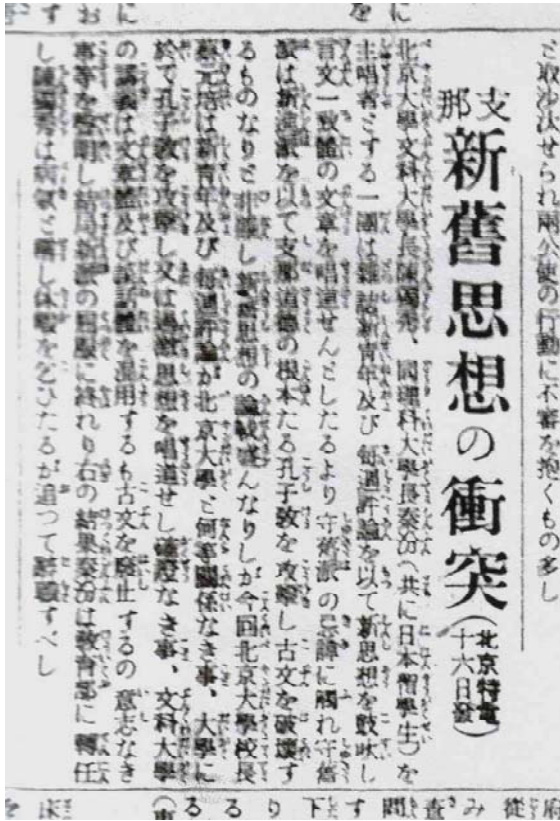
林紓の蔡元培あて書簡は、言語（＝古文）と思想（＝五常）に限定している。林紓の書簡を冷静に読めば、当然そうとしか理解できない。さらに、蔡元培の返信も、このふたつの事柄に限られているのは説明したとおりである。

林紓書簡1には、くりかえすが北京大学の教授である陳独秀、胡適らを辞めさせろ、などとはどこにも書かれていない。

それにもかかわらず、林紓書簡1と北京大学について当時ひろまっていた風説風聞を、そのまま安易に、無責任に林紓と結びつける論評、記述が多く書かれている。なぜそうなるのか。答えは簡単だ。文学革命派が、そのような林紓像を作り上げたからである。守旧派、旧文人の代表者と定めたのだから、北京大学を攻撃する風説風聞は、すべて林紓が陰謀したものになっても不思議はない。

当時の日本において蔡元培の返書内容が報道されている（ルビ略）。

「支那新旧思想の衝突（北京特電十六日発）」『大阪毎日新聞』1919.4.18付
北京大学文科大学長陳独秀、同理科大学長秦汾（共に日本留学生）を主唱者と
する一団は雑誌新青年及び毎週評論を以て新思想を鼓吹し言文一致体の文章
を唱道せんとしたるより守旧派の忌諱に触れ守旧派は新進派を以て支那道德
の根本たる孔子教を攻撃し古文を破壊するものなりと非難し新旧思想の論戦
盛んなりしが今回北京大学校長蔡元培は新青年及び毎週評論が北京大学と何
等関係なき事、大学に於て孔子教を攻撃し又は過激思想を唱道せし確証なき



『大阪毎日新聞』1919.4.18

事、文科大学の講義は文章体及び談話体を混用するも古文を廃止するの意志なき事等を声明し結局新派の屈服に終れり右の結果秦汾は教育部に転任し陳独秀は病気と称し休暇を乞ひたるが追つて辞職すべし

この記事によると、蔡元培の林紓あて返信は、結局新派の敗北であったということになっている。結果的に陳独秀の辞職であれば、そういう評価になるだろう。現在の中国学界での見方とは反対なのだ。

それにしても、林紓が、五常を守ることを文学革命派に期待することが、そもそも間違いであった。両者は、基本的なところで決定的に相容れない。それを、なぜあえて書簡にし、しかも公開までしたのか。『新青年』でくりひろげられた

錢玄同と劉半農が捏造したあの「なれあいの手紙」を無視したのと同じ態度を林紓はとってもよかった。たまたま、蔡元培から題詞についての依頼を受けたという時期的なものはあったかもしれない。だが、林紓は、この点について判断を大きく誤ったというべきだ。

林紓の当時の心理を理解することはむづかしい。だが、しいていうとすれば、中国の将来を担っているはずの大学教育に期待していた、その思いを断つことができなかつたのではないか。北京大学をとりまく風説風聞のひどさに林紓は惑わされたとしかいいようがない。

林紓の書簡2がある。蔡元培が『北京大学日刊』に掲載して返答したことに対して、ふたたび林紓は手紙を公表した。こちらを見れば、林紓書簡1が、言語と思想に限定して書かれている証拠となる。

林紓書簡2

私が見た限り、といってもそれほど広い範囲ではないが、林紓書簡2を収録する資料集は見つからなかった*109。当時の新聞、たとえば『公言報』(1919.3.24)*110、『新申報』(1919.3.26)にも掲載されているという。今、私が入手することのできた1919年3月25日付天津『大公報』および1919年3月26日付『時報』がある。後者の全文を掲げる。

「林琴南再答蔡鶴卿書」『時報』1919.3.26

鶴卿先生足下読大学日刊得報書欣慰無似弟辞大学九年矣然甚盼大学之得人幸公来主持甚善顧比年以来惡声盈耳至使人難忍因於答書中孟浪進言既得覆書足見我公宗聖明倫之宗旨始終未背也此外尚有何說弟所求者存孔子之道統也来書言尊孔子矣所求者倫常之關係也来書言不悖倫常矣所求者古文之不宜屏棄也来書言仍用古文矣鑿心遂欲暢遂無言至於伝聞失実弟拾以為言不無過聽幸公恕之然尚有闕白者弟近著蠹叟叢談(見新申報)近亦編白話新樂府(付之公言報)專以抨擊人之有禽獸行者与大学堂講師無涉公不必懷疑与公交好二十年公遇難不變其操弟亦至死必伸其說彼叛聖逆倫者容之即足梗治而蠹化拚我残年極力衛道必使反舌無声瘝狗不吠然後已弟浅衷狹量視公之雍容大度並蓄兼收相去遠矣

中華民國八年三月廿六日 禮拜五
 西曆一千九百十九年三月廿六日 星期三

時報

THE EASTERN TIMES

號八十八百二千五第
 分三第大者張三天今

每張二一電次 郵部一上開本
 一十百郵 號第平傳政郵

零售每份五分
 本埠每月一元二角
 外埠每月一元五角
 廣告刊例
 第一版每行一元
 第二三版每行五角
 第四版每行三角
 長期刊登另議

如右遺漏

情形國人友邦自有公論煊等惟知公理而已因再答復以明是非岑春煊伍廷芳陸榮廷唐繼堯孫文林葆懌元(十三)印

◎林琴南再答蔡鶴卿書

鶴卿先生足下讀大學日刊得報書欣慰無似弟辭大學九年矣然甚盼大學之得人幸公來主持甚善願比年以來騷聲盈耳至使人難忍因於答書中孟浪進言既得覆書足見我公宗聖明倫之宗旨始終未背也此外尙有何說弟所求者存孔子之道統也來書言尊孔子矣所求者倫常之關係也來書言不悖倫常矣所求者古文之不宜屏棄也來書言仍用古文矣鑿心遂欲暢遂無言至於傳聞失實弟拾以爲言不無過聽幸公恕之然尙有關白者弟近著蓋叢叢談(見新申報)近亦編白話新樂府(付之公言報)再以抨擊人之有禽獸行者與大學堂講師無涉公不必懷疑與公交好二十年公遇難不以其摸弟亦至死必伸其說彼叛聖逆倫者容之即足梗治而盡化拚我殘年極力衛道必使反舌無聲鬪狗不吠然後已弟淺衷狹量視公之雍容大度並善兼收相去遠矣春寒伏唯珍衛林紆頓首

◎派員慰留陸總裁

「林琴南再答蔡鶴卿書」『時報』1919.3.26

春寒伏唯珍衛林紆頓首

林紆書簡1には使われていた「太史」という敬称が見えない。こちらの題名は、新聞社の編集者がつけたのだらうと推測する。本文も「先生」になっている。

林紆書簡2の中心は、以下の記述である。便宜的に番号をふる。

1. 私がお願いしたのは、孔子の伝統的な道です。お返事には孔子を尊ぶとあります [弟所求者存孔子之道統也。來書言尊孔子矣]
2. お願いしたのは、倫常の関係です。お返事には倫常にそむかないとあります [所求者倫常之關係也。來書言不悖倫常矣]
3. お願いしたのは、古文を放逐するのはよろしくないということです。お返事にはやはり古文を用いるとあります [所求者古文之不宜屏棄也。來書言仍用古文矣]

1が孔子、2が倫常で、このふたつは伝統思想だ。3が古文だから、林紘が書簡1で質問した五常と古文の件に対応している。蔡元培の返答は、林紘を満足させるものだった。ことばにできぬくらいうれしいと述べる理由である。

以上を見れば、林紘書簡1とそれに対する蔡元培の返答、さらに満足の意をあらわした林紘書簡2とつづいて、ふたりのやりとりは普通にかみ合ったものになっているとわかる。

林紘と蔡元培の間にあったのは、批判罵りの応酬ではない。守旧派の林紘からの挑戦でもないし、北京大学に対する攻撃でもない。また、蔡元培は敵からの攻撃に凜然と反撃したわけでもない。林紘から出された質問に回答したにすぎない。だから、林紘書簡2を読んで、どうして林紘が「ついに口を閉ざし、北京大学に対するあてこすりと攻撃を中止した」*¹¹¹ということになるのか、まことに不思議な感覚だとしかいいようがない。

林紘は、文末で「残りの年月をなげうって道を守ることに力をつくします〔拚我残年極力衛道〕」と固い意思表示をしている。ゆえに、この部分をつかまれて風説風聞の製造元に見なされた可能性がある。

林紘は、北京大学における教育についての風説風聞を耳にして憂慮した。こうあらねばならないと自分が信じていることからあまりにも隔たった教育がなされているらしい。大いに心配になった彼はあえて手紙を出した。もともとあてこすり、攻撃の意図があるわけではない。書かれていないものを見るのは、従来の林紘悪玉説から離れることができない証拠であろう。

陳独秀は、林紘書簡2に対してすばやく反応した。わざわざ短文を書いている。

陳独秀（筆名隻眼を使用）「林琴南很可佩服」（『每週評論』第17号1919.4.13「隨感録」欄）という。「林琴南はたいしたものだ」という題名からして揶揄している。

林琴南は各新聞社に手紙を書いて、自分が人を罵ったのは誤りだと認めた。このように勇気をもって改めることは、たいしたものだ。しかし、彼が熱心に孔子の道を守り古文を擁護するという理由は、十分詳細に明らかに考えなければならず、それでようやく信じることができるのだ！

陳独秀には、謝罪文に見えたらしい。しかし、「自分が人を罵ったのは誤りだと認めた[承認他自己罵人的錯処]」などの語句は、林紓書簡2のどこから出てくるものか不明。つまり、そういう箇所は存在しない。つぎに紹介する創作部分に関する部分からそう思ったのだろうか。しかし、手紙全体からは読みとれるものではない。強引に自分の論理にねじ曲げたと考える方が自然だ。

もうひとつ陳独秀のこの短文を読むと、なにか奥歯にもののはさまったような感じを私は受ける。陳がわざわざ書かなくてはならない種類の短文だろうか。林紓が謝罪したと強弁する必要はあったかもしれない。だが、文面から浮き出てくる陳独秀の疑い深い眼差しには理由があるのではないか。私が思いつくのは、林紓書簡12に共通して出現する単語である。「有禽獸行者」という。

林紓書簡1では、李卓吾の名前をだし「卓吾有禽獸行」という。書簡2では、引用で示した原文に「有禽獸行者」とある。「禽獸の行ないがある者」。これは、なにか。これこそが陳独秀にかかわっていると推測することが可能だ。

1897年、陳独秀が十九歳のとき高氏(乳名大衆)と結婚した。3男2女をもうける。1910年、高大衆の異母妹^{*112}である高君曼(乳名小衆)と結婚し2男2女が生まれた。高君曼は、系譜では「側室」となっているそうだ^{*113}。

義理の妹を妻にする。林紓が生きていた時代の中国では、人によってはこれを「有禽獸行」といったであろう。妓楼通いの比ではない。ただし、陳独秀の故郷では物議をかもしたとしても、林紓の住んでいた北京にまで、その事実が伝えられていたかどうかは不明だ。さらに、林紓がそれを知っていたかどうか、彼の書簡を見ただけでは判断がつかない。しかし、思わせぶりに「有禽獸行」がくりかえして使用されている。だからこそ陳独秀の疑い深い書き方になるのではないか。陳独秀が、その文字を見て一瞬身構え林紓からの攻撃だと認識してもおかしくはない。

事実、清水安三は、実際に会ったことのある陳独秀を紹介する文章において「公言報が彼(注:陳独秀)を悪評して、彼は姉と妹二人を嫁つて居るとか何とか書立てたことがある」^{*114}と書いている。私は、現在『公言報』を見る機会を得ていない。いつの報道なのか、確認のしようがない。だが、『公言報』が陳独秀の結婚について報道した事実があるのは確からしい。ただし、これまた林紓と関

係があるのかどうかは、依然として謎のままであるとしておく。

林紓書簡2には、興味深いことが書かれている。その箇所は、なぜかしら『蔡元培年譜長編』中冊181頁の引用では省略してある*115。

大問題にされる林紓の短編小説について自分で言及している。

私は、近頃「蠡叟叢談」(新申報に見えます)というものを書いております。最近また「白話新楽府」(公言報に渡しました)を書いて禽獸の行ないのある人間をもっぱら攻撃しましたが大学堂の教員とは関係がありません。公にはお疑いのないように。[弟近著蠡叟叢談(見新申報)近亦編白話新楽府(付之公言報)専以抨擊人之有禽獸行者与大学堂講師無涉公不必懷疑]

林紓がここで述べている「蠡叟叢談」に彼の「荊生」と「妖夢」が含まれている。だが謝罪はしていない。

林紓が書いている作品は、『公言報』1919年3月24、26、28日に掲載された。全体の題名が「觀世白話新楽府」といい、小題「母送兒」「日本江司令」「一見大吉」である*116。

題名に注目してほしい。「白話新楽府」だ。白話を使用している。ほかならぬ林紓自身が白話を使用して作品を書いている。古文を書くことができる自分だからこそ白話も自由に操ることが可能なのだと林紓は誇りすらもっている。林紓は白話に反対していた、というのはとんでもない曲解であることがわかる。白話を使うな、という人物が白話作品を公表するかどうか、考えてみればわかりそうなものだが。一度頭の中に作られた、白話の反対者林紓という考えから離れることができないのだろう。

私が見るところ、林紓が抱いていた憂国の情から発した蔡元培あての手紙である。だが、文学革命派には、この手紙と林紓のふたつの小説「荊生」「妖夢」が1組になって見えた。短編小説で北京大学の教授たちらしい人物が嘲笑されると、新聞で北京大学についての風説風聞が書き立てられるのと区別がつかなくなったようだ。あるいは、区別はついてはいたが、わざと同一視した。守旧派からの大攻撃がはじまったと見せたかった。

陳独秀は、林紓書簡1を含めて自分たちに対する攻撃だと見なした。といっても、主として書簡と短編小説2作品だけにすぎない。それを大声で人身攻撃だといいはじめるのだ。その時点で、彼らはすでに偏向していたといわざるをえない。おまけに陳独秀自身は、差し迫った問題を別に抱えていたのだった。この主たる問題から目をそらすことができるならば、どんなことでもやったであろう。緊急の問題とはなにか。例の陳独秀問題にほかならない。

当時の新聞を見ればどのような風説風聞が流布していたかわかるだろう。しかし、日本では新聞そのものを見ることが、一部を除いては、できない。好都合なことに、それらを集めたいわば資料集がある。陳独秀の編集する『毎週評論』が2回にわたって特集している。陳独秀が編集したものだから、当然、記事を取捨選択している。偏っているとは思いますが、どのような風説風聞なのか知る手がかりにはなる。紹介しよう。陳独秀問題がはたして収録してあるかどうか点検するとき見落とすことはできない。

9 北京大学をめぐる風説風聞

『毎週評論』の特別附録での特集名は、「新旧思潮についての輿論」となる。2回あるから、特集1、特集2とする。ただし、それ以外にも、また以前から陳独秀らについての報道が紹介されている。

陳独秀による編集

早いといえば1919年3月4日付『申報』には、以下のような報道がある。参考までに紹介しよう。

北京電 北京大学の教員陳独秀胡適ら4人は放校となった。出版物に関係するという(2日午後3時)

すでに張厚載のところの説明したが、この記事も3月1日の北京大学評議会で決定を伝えている。ただし、「胡適ら4人は放校」あるいは「出版物に関係す

る」というのは風説風聞にすぎない。

事実と風説風聞がこのように混在しているのが特徴だといえる。

陳は、特集1、2とは別に、はやくから風説風聞を集めており、しかも再録した。それらについての記事を書いている。あきらかにある意図が秘められているとわかる。そちらから先に見てみよう。記事内容は要約する。

陳独秀(隻眼)「關於北京大学的謠言」『每週評論』第13号1919.3.16

『時事新報』……出版物の關係で国立の大学教員が追放されるという。陳(独秀)胡(適)があげられる。

『中華新報』……北京大学教授陳独秀ら文学革命論を書いたので追放。

『中華新報』……4君への侮辱。

『民国日報』……首謀者数人が大学から追放。

『晨報』……連日報道される。流言をながしている。

『国民公報』……新旧思想の衝突。(要約おわり)

以上は、守旧派が圧迫を加えて北京大学の進歩的教授4名を追放するそうだ、という風説風聞である。陳独秀は、これに続けて特に名指しするのが小説「荊生」を書いた林紓と『神州日報』の通信記者張厚載のふたりだ。張厚載については胡適との関係ですでに少し触れた。陳独秀は、張厚載が旧劇問題で『新青年』に反対したこと、および胡適に叱責されたことを書いている。

林紓と北京大学学生の張厚載のふたりで守旧派、反対派を代表させることに陳独秀は決めた。これが名前をだした理由だ。学生の張厚載は、すでに胡適教授にたいして誤りを認めている。謝罪文を公表しているという認識が陳独秀にはある。敵の半分は降参しているから、自分たちの勝利は約束されたも同然である。ただし、一方で、陳独秀を北京大学文科学長からはずすという方針は、すでに2月22日には蔡元培が主宰した会議で決定されている。3月1日、「文理科教務処組織法」が北京大学評議会で承認された。陳独秀ひとりについては、新聞報道は風説風聞ではなく事実である。

陳独秀が文科学長をおろされる理由は、彼が文学革命を主張したからではない。独秀が妓楼通いをしていたのが原因で、責任ある地位にふさわしくないと判断さ

れたためだ。それを決定したのは、蔡元培校長を含む北京大学の教授である。

陳独秀は、自分にふりかかってきた学長罷免という事柄を、当時北京大学をとりまいていた風説風聞と結びつけ、逆手に取って自分たちの方から攻撃を加える絶好の機会にした。文学革命派という新派が圧迫されているという危機感をあおり、その原因、責任を林紓と張厚載に押しつけることにした。こう考える方が自然だ。

陳独秀（隻眼）「林紓的留声機器」『毎週評論』第15号1919.3.30「随感録」欄

林紓は、もともと武力を借りて新派を圧倒しようと考えている人間である。彼と同郷の国会議員に運動して国会で弾劾案を提出しようとしているらしい。教育総長と北京大学校長を弾劾するという。どの国の国家でも、国民の信仰言論の自由に干渉する道理はない。常識のある議員ならば、林紓の蓄音機（注：おうむがえしのおしゃべりをする）になりたがるものはいないだろう。（要約おわり）

国会議員に働きかけるほどの政治力を林紓はもっている、と印象づける。しかも、林紓以外は具体的な名前がでていない。陳独秀は、自分から風説風聞を積極的に流している。

つぎが、陳独秀編集による特集1である。

[特集1] 特別附録「対於新旧思潮的輿論」『毎週評論』第17号1919.4.13

淵泉「警告守旧党」『晨报』……参議員張元奇は傅增湘に会い北京大学の新潮運動に干渉するよう要請した。そうしなければ弾劾案を提出するぞ云々。旧派は北大の教員に罪を着せている。学問の独立、思想の自由は、わが人類社会における最も権威のある2大信条である。（樽本注：1919.3.30付であることを確認。『申報』4月1日付に同様の記事があることは前述した。『蔡元培年譜長編』中冊184-185頁）

毋忘「最近新旧思潮衝突之雜感」『国民公報』……頑固守旧思想、すなわち綱常名教がいまだにはびこっている。思想の自由は、どんなに大力でも抑圧できないものだ。

遺生「最近之學術新潮」『北京新報』……北京大学教員の陳独秀、胡適之、劉半農、錢玄同は、中国新文学を提唱し、白話にかえるよう主張している。林琴南

本報發刊已屆十年現在力圖應世界潮流將內容大加改良具有世界眼光注重時代思潮發行所在北京宣武門外丞是為江蘇夏商先所著良採訪中外新聞務極靈敏主張正大以期促政治之改良相期同入本報甚為可惜只好陸續發表再行刊布以饜閱者教白

對於新舊思潮的輿論

特別附錄

警告守舊黨

(涇陽)

報載有參議員張元吉其人者、揭傳增租、請干涉北京大學之新潮運動、否則參議院將提出彈劾案云云。吾輩北京大學三教員去歲問題、實吾中華民國國民有無權讓學問獨立思想自由之能力同視。此吾所以不能不有一言以告守舊者流及教育當局者也。

學問獨立、思想自由、為吾人類社會最有組織之兩大條條。有敢蹂躪之者、吾輩認爲學術界之大敵、思想界之毒賊、必盡吾輩之力、與之奮戰者、以維護之。在昔帝王專制時代、往往因個人之愛憎、濫用權力、壓迫思想。然其結果、反動愈烈、卒莫之何。試問今日何時、爲派乃欲以專制手段、驅逐世界潮流、多見其不知量耳！吾輩所執以罪北大教員者、曰、排孔也。吾輩所執以爲我國政治、學案之一、其學說之是非、後人自得而批評之。既有批評、自有賞否之自由、無足異者。若以反對孔子學說、即爲離經叛道、則西洋反對亞利士多德、柏拉圖、索克拉特士諸賢之說者、亦皆爲同罪矣。請問舊派者流、吾聞西洋學界有此滑稽之議論否？我國人讀書、向不以研究真理爲目的、而以盲從古人爲能事、是以養成一種學問上之奴隸心。苟能擔荷前人餘嗜者、便爾自足、以學員古今自命、此英儒培根所謂字偶像之類者。此種觀念不去、則孔孟思想尙有進步發達之希望耶！

黨、以此種論調爲侵犯國體、實難四起。然吾未聞其有人要求政府以權力干涉之者。嗚呼！以君主國之日本、對於歡迎民主政治之大學教授、尙不敢以權力壓迫。請我堂堂民主國、因區區反對孔子學說問題、便欲干涉思想壓迫大學耶？思想之爲物、與時代互爲因果、豈權力所得而摧殘之者哉！吾願守舊者流、勿爲感情所隔、自陷而爲學術界之大敵、思想界之毒賊。則舊派之爲舊派、尙是寄生於現代之社會也。

最近新舊思潮衝突之雜感

(鍾國民公學)

近來思想界纔有出的一枝嫩芽、不料竟有人想來摧殘。這種舉動本不值得批評、不過記者回想民國三四年的時候、復古主義、披靡一世、什麼忠孝節義、什麼八德的建議書、連篇累牘的被產出來、到後來便有帝制的結果。可見這種頑舊的思想、與惡濁的政治、往往相因而至。現在這頑舊思想、思想的人又想供不正當的勢力、來摧殘新思想、思想是不可摧殘的、並且經度而摧殘、便是一度的助長。所以記者對於這種頑舊的舉動、倒也毫不悲觀。不過這種頑舊的思想、在今日的時候還是這種頑舊、不過前途的影響、保不定要發生與帝國一般的危險哩！

外人批評吾國、總說是半開化的國家、他們的觀察點、就在這種頑舊思想的存在。這種頑舊思想的是非、是一問題、簡單一句話、多不是小過

至於孝字、除了哀敬上鋪張的什麼指地呼天白身英願等等端蓋而外、只怕他們平日儘有逆着父母的行爲哩！

今再回到本題、這思想自由、無論什麼大力、是不可抑制的。吾國幾千年來、拿着孔子之道、定爲一尊、沒有人敢拿自己的思想、去批評孔子。所以現在見了批評孔子的話、就以爲叛經離理、大逆不道、想要拿罪名來加在這批評孔子的人的身上。其實古代聖賢的議論、未必句句都是。就算句句都是、也還因時代變遷、未必一成不變。你看梭格拉底至今有人稱道他的學說、正因爲西洋沒有人禁止批評梭氏的學說、所以他的學說、長處短處、都顯出來、轉能歷久彌光。吾國孔子的學說、只因禁止批評、所以變成一種鋼殼思想的指頭、連他學說的本來面目、也都失去。到現在的時代、小民蠢工人等尙且要求釋放、難道吾國的思想界、就永遠鎖鐵籠嗎？中世紀歐洲教會的勢力、何等偉大、也還有人推翻、可思想是不可壓制的。現在的耶教、並不禁人批評、却也沒有害於耶教的存在。若說吾國的孔子之道、不但這帝制法孔子之道的人、並不能實行、就全國看過去、橫的方面、全國四萬萬人、那回佛教的信徒有多少人？豈的方面、佛教的輸入中國有多少年？佛教以出世爲究竟、與孔子的綱常名教是絕不相容的。他們既不容現在的人去批評孔子、何不起幾千年的陳死人來料他的真端。中國的弊病、所以說實際上說、究竟這孔子之進早已不純粹存在了。他們現在來維持孔子之進、豈能成事。

最近之學界

近時北京大學教員君、提倡中國新文學於我國二千年來陳腐說、及駁散文體、爲世界進化之公例、吾輩大、雖其至理。不都抱殘守缺、結固反抗。治別惡習當私私、此東京甲斐京、雖見其勢之不復見之口吻、近如夢一期、以元緒二胡爾君、曾以發達之文學之思想、在巴也、其復大學校日、皆我幾年方新派諸子矣。願吾輩及文壇之敢其不說、吾輩不知其提倡、是否適合於及發源所欲保存之必要、是否對一但陳詞舊君所主張折衷之各種守理、氣、爲論理上之新不能一律採熱、使新派之主張、終究貽世人莫大之害。

は『新申報』によせた小説のなかの「妖夢」で蔡子民と陳胡を圧迫している。林は手紙で「残りの年月をなげうって道を守ることに力をつくす」と書いて新派の諸氏を威嚇している。

太上餘生投稿「新旧思潮」『順天時報』……新文学思潮に反対するものは、口をきわめて罵っている。はなはだしきは、教育総長傅增湘を弾劾し、北京大学蔡校長を辞めさせろと要求している。(樽本注：1919.4.5付であることを確認)

無記名「醞釀中之教育総長弾劾案」『順天時報』……大学教員陳独秀胡適之らが新文学を提唱すると旧派の学者が大反対した。林琴南と蔡子民の往復討論の書簡が各新聞に見える。林琴南は、議員張元奇などに運動している。問題は教育総長の弾劾で、もし蔡校長を辞めさせなければ弾劾案を提出する云々。

冷眼投稿「新思想不宜遏抑」『順天時報』……新思想は抑圧すべきではない。

隱塵「新旧思想衝突平議(一)」『民治日報』……新旧の意見が衝突しているのは、言論自由だから思想問題、言論問題であって政府の干渉する余地はない。各新聞でのべている、某人が罷免されるだの某人の学を弾劾するだのというのは証拠がない。

住「新旧思潮平議(二)」『民治日報』……現在、わが国はすでに共和に改まっているから、ふたたび君臣の倫理を行なおうとしてもダメである。

儀湖「林蔡評議」『民福報』……林琴南は、旧文学思想の代表であり保守を主とする国粹学派。蔡子民は維新学説の代表であり進取を主とする实用主義。

蘊巢「新旧之争」北京『益世報』……古いものは滅び、新しいものが勝利する。このたびの外の人間が大学を攻撃するのは、新旧の争いの1種である。

無記名「論大学教員被擯事」『民国日報』……出版物によって大学に騒動がおこる。

匡僧「為驅逐大学教員事鳴不平」『時事新報』……4日付『申報』で「北京大学の教員陳独秀胡適ら4人が驅逐放校される。出版物が関係していると聞く」と報道されている。大学教員は、思想自由学説自由の権利を持っている。大学の出版物は、外部の拘束を受けるべきではない。

匡僧「大学教員無恙」『時事新報』……『申報』で大学教員陳胡が放逐されると伝えたが、幸いにも事実ではなかった。陳胡諸君のためによるこぶ。

匡僧「威武不能屈」『時事新報』……北京大学新派教員が旧派学者の攻撃をたびたび受けている。近くは旧派の軍人が新国会の権力を借り、新派文科学長陳独秀氏に迫った。彼は、新学を自由に主張するために辞職を願うという話がある。不幸なことに陳氏は、はたして退職し、これは新派の脅迫が功を奏したのだ。

裴山「新旧思潮之開始決闘」『神州日報』……新旧思潮の闘争がはじまる。

平平「北京大学暗潮之感想」『浙江教育週報』第7年第5号……4日付『申報』で北京大学教員陳独秀胡適等4人が出版物の関係で駆逐放校されるというニュースがあった。のち北京通信で、その事実はないという。(要約おわり)

陳独秀が集めたのは、基本的に文学革命を支持する文章だ。同時に、旧派が新派に圧力をかけているという風説風聞を丹念に拾っている。旧派の強烈な攻撃が行なわれていることを強調したいという意図である。風説風聞は、風説風聞として現実に存在している。事実の裏付けがあるかどうかは問題ではない。

特集1の冒頭には、『晨報』からの文章がかかげられている。同じ『晨報』に風説風聞を否定するものがあるから紹介しておこう。

「北京大学謠言之無根」(『晨報』1919.3.10)という報道記事だ。

最近、北京上海の各新聞は、北京大学では新旧思潮の衝突があり、教員が罷免され『新潮』雑誌が差し押さえられるなど種々の風説が伝えられている。しかし、詳細な調査を行なったがこの説はまったくの無根である、という内容だ。『晨報』(『晨鐘』が改組されて改名)の「自由論壇」は李大釗が主宰している。すなわち、李大釗、羅家倫らの文章が掲載されているから、どちらかといえば文学革命派に近い立場をとっている。その新聞紙上で風説を否定する報道がなされているのだが、陳独秀は、自分が必要としない文章は、基本的に収録しない。ゆえに『晨報』の上記記事は、特集1には見当たらない。

もうひとつすでに紹介した記事がある。3月16日付『神州日報』の社名義による訂正記事だ。「まえにこの北京通信で言及した北京大学陳独秀の辞職、胡適、錢玄同等が教育部の干渉を受けたなどは正確ではなかったので、ここに訂正する」。これも特集1には、収録されていない。

1919年3月24日付天津『大公報』時評欄に掲載された无妄「読林氏書感言」という例もある。国家が革新するとき、一切の制度文物は改変すべきだ。ただ、倫

約百	份	估領	通告	小三	而干	不悉	引	用總	悉聞	此應	明此	類表
<p>氏尙須略候云</p> <p>總代表並通電各省要求去陳</p> <p>北京大學謠言之無根</p> <p>最近京滬各報盛傳北京大學因新舊思想之衝突有教員被辭新潮雜誌被封之種種風說本社雖聞此說不勝駭異以爲思想之爲物不能無新舊兩方面北京大學爲全國最高學府新舊學說自宜兼容並包而思想自由講學自由尤起神聖不可侵犯之事安得以勢力</p> <p>以此說實絕無影響不過因類者流說辭演又不能先明高著在學理上相爲辯證故此流言聊且快意而已乃一被無識之人不問事實之有無遂引爲謠言助風轉相傳述有此說登特依本社所聞揭載如右以釋謠傳</p> <p>張錫元與于右任</p> <p>區區寸誠仍不忍以內部之爭</p>												
購閱	粉設	內務	未及	行原	則辦	私困	希餘	版直	一事	閱其	辦已	上海

『晨報』1919.3.10

常道義はいかなる政体であろうとも決して変革してはならない。林琴南の蔡子民にあてた書簡を読むと、老成の典型であって敗勢を挽回するに足るものだ。无妄は、林紆の書簡に賛成している。

以上の例を示せば十分であろう。陳独秀にとって都合の悪い記事は収録しない。陳が編集している、と私がいう理由である。

張勳復辟（清朝復活）事件に軍閥の闘争など政治的な不安が社会を覆っていたことは文献からは理解できる。そういう重苦しい状況下にあって、思想の分野でも旧派の圧迫がある。その圧迫が強ければつよいほど、陳独秀らの存在理由がある。権力を持たない弱い林紆では、敵にする価値もない。軍閥勢力と結びつき大きな武力をちらつかせて新思想、白話運動を弾圧する林紆でなければならなかった。そうであってこそ陳独秀らは、勇猛果敢に闘争しているといえる。

のちの研究論文は、だいたい陳独秀の編集記事をそのまま受け入れている。風説風聞をそのまま引用することによって、あたかも事実であるかのように考えられるにいたった。事柄の裏に林紆がすべて存在することになったのである。陳独

秀たち文学革命派は、そういう方向に導いた。加えて後に魯迅が林紓を「ファシスト」と呼んだから、その評価は決定的になったといえよう。「ファシスト」林紓ならば、いくら攻撃批判しても罵詈譏をあびせかけても当然のことであり、問題になることはない。

『毎週評論』に特集された2回目の風説風聞集を見る。陳独秀編集による特集2である。こちらも要点だけを示すので了解されたい。

[特集2] 特別附録「対於新旧思潮的輿論」『毎週評論』第19号1919.4.27

無記名「關北京大学新旧思潮之説」北京『国民公報』……(林紓書簡1が出てから)議論百出。張元奇が教育総長を弾劾する、徐世昌が教育界の重要人物を召見するなどの話がある。各新聞が報道しているのは事実とはいえない。推測するに『公言報』の通信は張繆子書いたものだ。張繆子は、芝居狂で旧劇批評の文章をいくつか書いて銭をかせいでいる。だから旧劇がよく、新劇はダメ、旧劇は消滅させることはできない、新劇は提唱してはいけないで凝り固まっている。この芝居の新旧を学問に応用した。新しいものはきっと軍閥を恐れていると、ついに彼が古いと考える林琴南を探し当て、まず文章で攻撃させた。そののち政府あるいは軍閥に干渉させて新劇を提唱する人間を完全に駆逐させる。そうすれば彼らは外にいてもそれまでどおりに主張できる。彼の考えでは地位の低い者のことばは重んじられない、大学教授ほど有力ではないのだ。林琴南のように知識も学問もない人間が手紙を書いて非難してくる。大学では十分に彼を導かなくてはならないし、また、蔡の返信のように、どうして社会にこのような人間が出てくるのか仔細に研究しなければならない。(要約おわり)

無記名であるのが、まず怪しい。しかも、風説を一応は否定しているところが、芸が細かい。推測といいながら内部のことをよく知っている。なにしろ張繆子(厚載)が登場しているではないか。張が繰り広げた旧劇擁護の論文は『新青年』に掲載された。しかも胡適から執筆を勧められて書いたものである。『国民公報』に投稿されたというから、陳独秀に近い人が書いたものかも知れない。それにしても、この文章では張繆子が主人公で、彼が林紓を利用したことになっている。ついには政府、軍閥に干渉させるほどの影響力を張が有しているのだから、

風説風聞も大きくなったというべきだ。

無記名「社会的醒覚之曙光」北京『順天時報』……今日の新旧文学の論争は、社会が苦悶している表徴である。

魯遜「学界新思想之潮流」北京『唯一日報』……北京大学が出している各種雑誌『新潮』『新青年』などが流行して新思想の潮流が拡大した。保守の旧思想がこれに抗戦する。

遺生「時勢潮流中之新文学」『北京新報』……旧文学、孔孟学説、礼教、綱常倫理などについての疑問点は、陳胡錢劉の諸君がすでに分析しているから、贅言するまでもない。

遺生「規勸林琴南先生」『北京新報』……林琴南が新文学の潮流に反抗していることに怒りを表明する。罵るんじゃない。私は文学革命に賛成する。ゆえに陳胡錢劉諸君の主張に賛成する。林が人を罵ることばを検討すると彼の理由がいくつかある。「新派は旧学の基礎がないから白話文体を提唱するのである」(要約あり)

林紆はそのようなことは書いていない。似ているかもしれない箇所をしいていえば、「万卷を読破しなければ古文を作ることもできないし、また白話を作ることもできないのです」だ。それを蔡元培が林への返書のなかで上に引用したように書き換えた。意味が異なる。林紆がいうのは、白話をつくるにしても深い古文の教養が必要だ。ところが、蔡元培の書き換えになると、白話をつくるのに旧学は必要ではないとなる。林紆の表現とは反対になっている。遺生は、蔡元培が勝手に言い換えたことを林紆のことばにすりかえた。

どこかで見たような表現だ。思い出すのは、魯迅が「出乎意表之外」という誤表現をわざと使用している例があり、それにつけられた現代の注釈である。『魯迅全集』第1巻にあるくらいだから以前から知られているのだろう。「林紆と白話文に反対していた連中は、新文学者が白話を提唱するのは自分が古文に通じていないためだといつもいっていた」*117

くりかえす。もとは蔡元培本人が使用した。それを、文学革命賛成者である遺生が、林紆の使った文句だとすり替えた。驚くとはこのことだ。林紆が書いてもいないことが、『魯迅全集』の注釈者によると林紆のことばになって定着してい

る。新派に反対する言辞は、すべて林紆の責任にしてもかまわない、という了解でもあるのであろうか。林紆にしてみれば、あきらかに濡れ衣である。

蘊巢「再論新旧之争」北京『益世報』……北京大学が攻撃されるのは、新旧の争いの細い支流にしかすぎない。反対がなければ進歩もない。昨日、東海に招かれて蔡子民が入府した。その会談内容はわからないが、風潮の激しさが想像できるというものだ。(要約おわり)

東海とは、当時の大総統徐世昌の号である。蔡元培が大総統によばれるのは、何かあったにちがいない。蔡ひとりよばれて攻撃された、というほのめかしだ。ただし、会見の事実はあった。

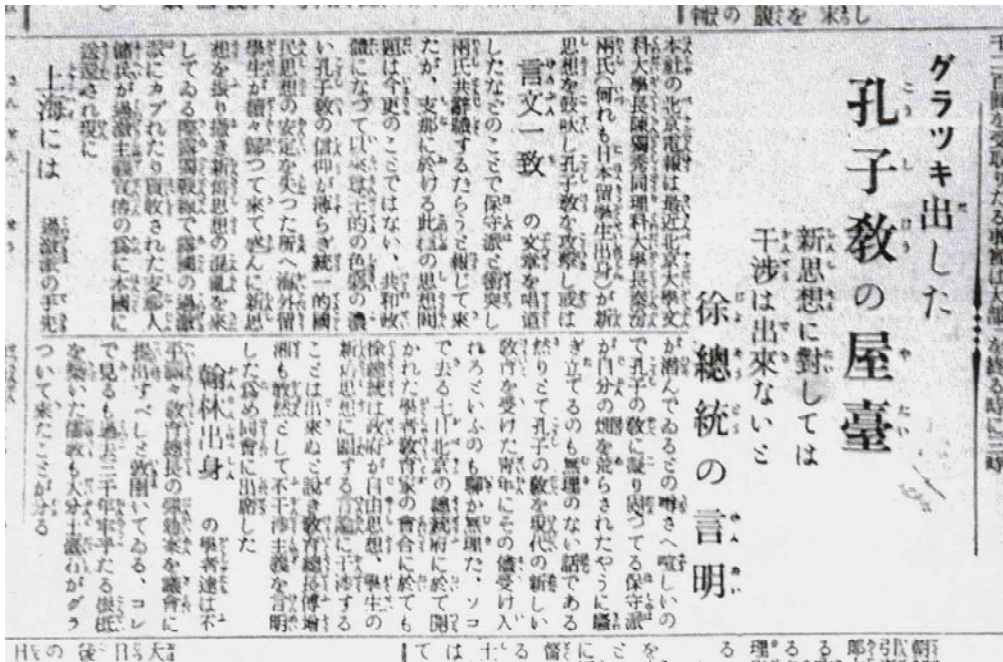
4月4日、北京政府総統徐世昌は教育界の人士20余名を招いている。会見の内容は、北大の新旧両派の学者が衝突するのを調停するよう希望する、というものだった*118。

北京大学は北京政府から攻撃を受けている、というのが通説ではなかったのか。蔡元培らが大総統によばれて勧められたのは、北大内部の対立を調停することだった。大総統が出てくるくらい、また教育界の人士20余名がよばれるくらい、その対立の程度は激しいという見方は成立する。だが、北京大学内で大いに騒いでいるだけ、という認識であってもおかしくない。これが政府による武力をともなった攻撃だというのだろうか。そうだというならば、それは風説風聞である。

総統府での会合について、まるで逆の報道説明もある。

『大阪毎日新聞』(1919.4.19)の表題は、「グラツキ出した孔子教の屋台 / 新思想に対しては干渉は出来ないと徐総統の言明」という。題名からして今までいわれていたことと異なる。日本で報道された会合開催は4月7日のことになっている。少し長いが引用する(一部を除きルビ省略)。

本社の北京電報は最近北京大学文科大学長陳独秀同理科大学長秦汾両氏(何れも日本留学生出身)が新思想を鼓吹し孔子教を攻撃し或は
言文一致の文章を唱道したなどのことで保守派と衝突し両氏共辞職するだらうと報じて来たが、支那に於ける此種の思想問題は今更のことではない、共和政体になつて以来尊王的の色彩の濃い孔子教の信仰が薄らぎ統一的国民



『大阪毎日新聞』1919.4.19

思想の安定を失つた所へ海外留学生が続々歸つて来て盛んに新思想を振り撒き新思想の混乱を来してある際露独戦線で露国の過激派にカブれたり買収された支那人傭兵が過激主義宣伝の為に本国に送還され現に

上海には 過激派の手先が潜んであるとの噂さへ喧しいので孔子の教に凝り固つてる保守派が自分の畑を荒らされたやうに騒ぎ立てるのも無理のない話である然りとて孔子の教を現代の新しい教育を受けた青年にその儘受け入れるといふのも聊か無理だ、ソコで去る七日北京の總統府に於て開かれた学者教育家の会合に於ても徐總統は政府が自由思想、学生の新旧思想に関する言論に干渉することは出来ぬと説き教育総長傅增湘も敢然として不干涉主義を言明した（下線樽本）為め同会に出席した

翰林院出身 の学者達は不平満々教育総長の弾劾案を議会に提出すべしと教團いてある、コレで見るも過去三千年牢乎たる根柢を築いた儒教も大分土台石がグラついて来たことが分かる

下線部分を見てほしい。この報道では、時の北京政府は、まるで新派の支持者ではないか。陳独秀が集めた情報とは正反対である。

翰薈「學術与政治」北京『益世報』……北京大学教授の陳独秀と胡適之の諸君は、新文学を提唱して旧派の学者から反対されている。また、教育総長に、大学校長を辞めさせなければ議会で運動し弾劾案を提出するという話もある。政治を利用して學術に干渉することは、外の力を借りて内政に干渉するのとかわらない。

志拯「思想革命中の北京大学」上海『中華新報』……蔡子民の手紙と張厚載の蔡あて手紙について述べている（樽本注：林紆の小説に關係する。後述）。林紆と張厚載の關係にも言及。

志拯「誰的恥辱？」上海『中華新報』……北京大学教授陳独秀、胡適之ら4人が追放されるというニュースは、前の晩、本社の張季鸞氏が記者に語ったもので、章行巖氏のところで得たという。

祭安「遏止新思潮」上海『民国日報』……新派の出版物を購読することを禁じる地方がある。

因明「对北京大学的憤言」成都『川報』……北京大学の文科は、3時期に分かれる。清朝は福建派で嚴復、林紆、陳衍ら。辛亥以後は、浙江派で章太炎の弟子黄侃ら。それ以後は、安徽派の陳独秀、胡適が出て白話を主張し欧風を鼓吹する。陳独秀は非孔を主張し、胡適は白話文学を主張し、傅斯年は中国學術界の基本誤謬を除くことを主張し、錢玄同は漢字を廢止し^{ママ}esperantoを使用するよう主張する。陳胡傅錢の4人は解職され、(北京)大学月刊、日刊、新潮雑誌はすべて禁止となった。ただあの禍を引き起こした新青年だけが禁止されていない。(要約おわり)

最後の記事は、教授たちの中に学生傅斯年を混入させている。教授と学生の区別がつかなかったものか。出身地別の派閥を説明しているのは、中国の伝統的とらえ方だろう。たしかに同郷人が集団をつくるのはわかる。ただし、出身地が同じといっても、必ずしも思想を同じくするとは限らないだろう。出身地にこだわりすぎると誤認する可能性も出てくるように思う。たとえば、張元奇と林紆は同郷だから結びついているに違いない、という風説風聞などに容易に変化する。

特集1、2ともにそうだが、記事に日付が明記されていない。日付がない記事

は追跡できない。追跡証明が簡単にできない情報を流すのは風説風聞を再生産するのと同じだ。この手法は、扇動家の常套手段であるのは周知のことである。

北京大学をめぐる風説風聞が入り乱れていた、という従来の説明であった。尾坂は「このころになると、『公言報』は陳独秀、胡適、錢玄同らにますます毒づき」と説明していた。「毒づき」の内容が陳独秀の記事、また特集1、2で明らかになるかと思っただが、そうはならないのが不思議だ。しかも、陳独秀が編集した文章は、『公言報』掲載のものではない。おかしくはないか。『公言報』が風説風聞を流したと普通にいいながら、それを採用していないのである。

陳独秀が集めた風説風聞によって提示した全体の構造は、思いのほか単純だ。

すなわち、守旧派が圧迫を加えて北京大学の進歩的教授4名（陳独秀、胡適、劉半農、錢玄同）を追放する、さらには、北京大学蔡校長を辞めさせろとっている。参議員張元奇は傅增湘に働きかけて北京大学の新潮運動に干渉するよう要請し、そうしなければ弾劾案を提出するぞとおどした。旧派の林紓が蔡元培を手紙で批判するばかりか、小説を発表して北大の教授を個人攻撃している。黒幕は林紓で、同郷の張元奇をたきつけ、親しい安福俱樂部（の徐樹錚。ただし、この段階では徐の名前は出てきていない）に働きかけて武力を行使しようとしている。林の使い走りが北大学生の張厚載である。

人物が少し具体的になってふくらむくらいの変化はある。だが、風説風聞だからなのか、内容が細部に分け入って深化、細密化、複雑化することが基本的に、ない。同じ内容がくり返されるだけだ。

北京大学内で新旧思想の対立はあっただろう。それぞれが立場に応じて刊行物を発行し自らの意見を積極的に表明する。普通の現象である。しかし、そのことと林紓は、直接の関係はないのだ。彼は大学外にいるただの民間人にすぎない。大学の旧派と組んで論陣をはるということもしない。林紓は、ひとりで行動している。

ところが、それでは文学革命派にとっては、都合が悪い。そこで特別の構造を考えてつくりあげた。

すなわち、旧派の首領に林紓を置き、取り巻きに張元奇（のちに徐樹錚を加える）、張厚載らを配置する。新派には北京大学文科学長の陳独秀を中心にして、

校長蔡元培、教授に胡適、劉半農、錢玄同を配役する。対立点を言語思想問題に限定するのは弱いと考えたのか、教授たちにクビを迫る人事問題にした。学問の自由は、人事の自由によって保証される。両者は不可分の関係にある。

新旧の争いといっても偏っている。背後に軍閥がひかえている旧派が、新派を一方的に攻撃するという図式だ。武力をともなった強力な敵に攻撃される新派が、旧派に向かってしかたなく反撃するという形をとりたらしい。特に、林紓書簡1、また後に述べる林紓の小説が発表されてからは、上の図式が強調されている。

北京大学教授の人事問題で、クビの風説風聞は常に語られる。陳独秀が集めた新聞記事は、基本的に新派が圧迫される内容である。新旧対立を解説する中立的なものも許容される。風説風聞を否定した記事も無視はしないが消極的だ。しかし、旧派を支持する記事は採用しない。

もうひとつの事柄も、特集1と特集2を通じてまったく出てこない。注意深く除いてあるといってもいい。陳独秀の妓楼通いについての記事だ。新聞で本当に報道されたのか、と疑問に感じるほど無視している。新旧思潮の対立とは無関係だといいたいのだろうか。周作人はたびたび報道されたこと証言していた。彼が読んでいたのは『公言報』と『順天時報』だったという。やはり『公言報』が調査の鍵であるようだ（今見ることができない。今後の問題とする）。新派の陳独秀を攻撃しようと特に狙っている新聞機関が記事にしていないわけがない。文学革命よりも一般受けのする話題だからだ。だから、人身攻撃の証拠として利用しない陳独秀のやり方がかえって不審なのである。

当事者の説明、あるいは感想

北京大学とその教授たちについて新聞でこれだけ風説風聞が報道されている。当時の人が、どのような感想を抱いたのか知りたくなる。文章が残る人に限られるが、それはしかたがない。

まず、魯迅から直接に聞いたという証言から。

増田涉「林紓について」『中国文学史研究』岩波書店1967.7.25

「……「文学革命」の運動がはげしくなった一九一九年、すなわち「五・四」

の起った年であるが、彼を首領とする古文派の文人たちは軍閥の徐樹錚（段祺瑞の下に陸軍次長や参謀総長をした）を動かして、武力によってそれに弾圧を加えようと策したのである⁽¹⁴⁾。徐は軍人であったが、また桐城派文人の仲間の一人で、林紓の弟子（『文集』には徐のことをしばしば見る）でもあったからだ」218-219頁

「(14) 周作人『魯迅的青年時代』の『魯迅与清末文壇』に、「五・四の年になると反動派文人は『新青年』の言論に対して非常に痛恨し、林琴南を首めとする一群により徐樹錚に運動して武力を用いて鎮圧しようとした、云々」と見える。武力で鎮圧しようとしたということは、(具体的な方法までは聞かなかったが) 筆者(注: 増田渉)は魯迅の口からも聞いた。軍人の圧力によって、という意味であろう」222頁

魯迅が増田渉に直接語ったというのが貴重だ。実体験からの話には迫力が感じられる(ような気がする)。「武力で鎮圧」するのが徐樹錚で、林紓がそれをそそのかしているという有名な風説風聞だ。魯迅は、そういう事実があったと考えていた。風説風聞があった、というのは事実だろう。だが、実際に林紓と徐樹錚が武力による鎮圧を考えていたかどうかは、別問題だ。だいいち、増田も書いているように武力による鎮圧の意味が不明である。だから、増田は「軍人の圧力によって、という意味であろう」と説明する必要があった。圧力であれば、新聞『公言報』を使い北京大学の教授をクビにすると風説風聞を流して脅迫するくらいか。軍閥政府批判をやめさせるために恫喝を加えるということかと推測する。ここが私には理解しにくい。脅迫するよりも、出版禁止命令を直接だす方が手っ取り早いのではなからうか。軍閥政府ならそれくらいはやるだろう。出版の自由を認めないのが恐怖政治だからだ。

徐樹錚の名前がたびたびあがっている。徐は、たしかに林紓とは親しくつきあっていたとっていいだろう。

徐樹錚に関連して

徐道鄰が刊行した父徐樹錚の文集がある^{*119}。これを参考にして林紓との関係部分のみを抽出することにしたい。

まず、息子から見た徐樹錚像を紹介しておこう。

父親（注：徐樹錚）は「新しい」人物だった。文をすて武を学び、辮髪を切り、共和を主張し、帝制に反対し、服喪中に妾を囲い、拳兵して造反したなど、当時の士大夫は多くやらないことだった。一方で、白話文に反対し、女子解放に反対し、経書を読むことを提唱し、中国文化が最高であることを信じ、中国の倫理観念を進行し、詞詩古文を作るのを好み、遺老式（前朝の生き残り）文人を尊敬した。（序より）

白話に反対し古文を好み、前朝の生き残り老文人を尊敬したのであれば、林紓の出てくる可能性がたかい。もっとも、父親が林紓とつき合うのを見て上のような紹介になったものかもしれない。

徐樹錚（1880-1925）と林紓の関係は、学校教育を縁にして結ばれた。日本陸軍士官学校歩兵科に留学した経験を持つ彼は、段祺瑞のもとで文化方面も担当している。1912年、『平報』を創刊した*120。

林紓は『平報』に長期連載して、専門欄の筆記「鉄笛亭瑣記」、詩「諷諭新樂府」、翻訳概論「訳論」、時事評論、文論「春覚生論文」、筆記小説「踐卓翁短篇小説」などがある。

徐樹錚が正志中学校を創設したのは、陸軍部次長の職にあった1915年のことである。その教育方針は、国語の重視だった。また、軍官予備学校でもあり軍事教練を実施した。日本の士官学校からの経験によるのだろう。外国語はフランス語とドイツ語が教えられた。1920年、成達中学と改称され、1928、29年頃停止となったらしい。

国語重視の方針から招かれた教員のなかのひとりが林紓だ。毎週水曜日の夜、徐樹錚は、料理屋で老先生方と食事をした。参加したのが林琴南（紓）、姚叔節（永概）ら数人で、林がほとんどひとりで話をしたという。食事の後に、多くは虎坊橋の平報館でおしゃべりをし、時には琉璃廠の松華齋紙店にいったらしく時間をすごしたりした*121。

林紓が徐樹錚とどのようにつきあっていたのか、徐の息子が説明しているところからは詳細がわからない。水曜日の会食もいつ頃のことか、いつまで続いたのかも不明だ。十歳の時を回顧しているのだから、話の内容まで記憶していないのはしかたがない。だが、外から見れば、林紓が安福倶楽部の黒幕と親しい関係を

もっていることになる。密議をこらしていたと見られる可能性もなきにしもあらずだ。林紓にまつわる風説風聞のなかに、徐樹錚が登場する理由になるのだろう。しかし、それはあくまでも風説風聞にすぎない。

徐樹錚を紹介する新聞記事がある。『順天時報』(1919.2.21)に「徐又錚氏熱心教育」という。又錚は徐の字。正志中学を創設した徐が、西直門内陸軍大学付近に文科、商科の大学を設立しようとしている、という内容だ。教育熱心だと表題にあるとおりのことを紹介している。徐は軍人だから武力も使うだろう。だから、目の前の陳独秀や『毎週評論』に対して実力行使をしない方がかえって不可解なのである。学校を設立して運営するなどの教育熱心なその徐樹錚が、林紓にそそのかされて武力で北京大学を抑圧するとは、いまひとつ納得がいかない*122。

林紓の文章には、日本の斉藤少将が登場していることはすでに触れた。それならば、林紓は日本軍と陰でつながっていたという風説風聞が流れてもいい。さすがにそこまではいかなかった。現実味がないと判断されたか。つまり、私がいいたいことは、こうだ。文学革命派は、自分が敵側だと認識している誰かが、林紓とどこかで接触し、なにかで関係があれば、すぐさま林紓の陰謀だと恣意的に断定するのである。自分たちにとって有利な状況に転じることができれば、どんなことでも利用する。

当事者といえば、そのひとりが胡適になる。彼が当時を回想して文学史にしているのはいうまでもない。引用する。

胡適「五十年来中国之文学」『最近之五十年』21頁

「校外の反対党は、安福部の軍人政客を利用してこの新しい運動を掣肘しようとした。1919年23月の間に外では風説があふれ、教育部がでてきて干渉するというものがあり、また陳胡銭らはすでに北京を追い払われたというものいた。この種の風説は大半が不確かであったが、しかし反対党が心理で願望していることを明らかに示していた」

胡適が風説風聞だったというのは、彼自身は北京から追放などされていないからだ。この文章が公表された1923年から振り返ってわずかに4年前のことにすぎない。実現しなかった風説風聞は、やはり風説風聞であったと考えるほかない。

だから教育部が干渉するというのも、風説風聞だったのだろう。

しかし、風説風聞は風説風聞として存在していた、といういい方はできる。

周啓明（周作人）『魯迅的青年時代』北京・中国青年出版社1957.3。80頁

「五四」のあの年になると、反動派文人は『新青年』の言論に対してひどく恨み、林琴南を首とした一群は徐樹錚に運動して武力で鎮圧しようとし、……」

たびたび登場する周作人である。彼が述べているところによると、この時点ですでに風説風聞ではなくなっている。同一人物の書いたものは、同じ内容になる。すでに、風説風聞の構造はまとめておいた。その範囲内におさまるとい見本として周作人を重ねて紹介する。

段祺瑞派に徐樹錚というものがおり、彼の手下のなかでは力のある方だったが、不幸なことにいくつかの文章を書くことができたから、自分では桐城派の人間だと任じていた。彼は成達中学を経営して幾人かの文人士と関係をつけており、そのなかに清朝の挙人を自称する林紓がいた。聖道を守ることを自任しており、その武力を借りて北京大学に打撃を加えようとした。また校内の人間と連絡をとりスパイ〔内線〕とし、騒動をひきおこしたのである。^{*123}

すでに見た徐樹錚の文集によると、成達中学は後の呼び名だから、ここでは正志中学とするのが正しい。校内の人間、スパイとは学生の張厚載を指す。

あとの論文は、にたりよったりだ。

風説風聞と実際におこったことは、区別しなければならない。風説風聞があったことは事実にしても、林紓が風説風聞どおりに行動したかどうかは別物だ。それを証明することができるのだろうか。

私が疑っているのは、当時の風説風聞だといいいながら、それを記録することによってあたかも実在したかのような印象をあたえる可能性があることだ。風説風聞を本当にあったことにしてしまえば、林紓批判が正当だということになる。

流言飛語は、根拠がない。だからウワサという。ところが、このばあい、明確

な文章が存在している。つまり証拠があるのだ。

前に触れた羅家倫論文をふたたび取り出すことにする。

羅家倫「今日中国之小説界」

すなわち、当局が言論弾圧をするように期待した人物こそ文学革命派の羅家倫その人であったという事実である。羅が自分の論文で陳述しているのだから否定のしようがない。その論文は、筆名志希で発表した「今日中国之小説界」(『新潮』第1巻第1号1919.1.1)であった。

ふたたび紹介する。つまり、1916年当時、政府が雑誌など数十種を取り締まったことを説明し、羅は、「私は、現在も当局は注意してしかるべきだと願っている」と書いた。この文章の公表が1919年1月という日付からしても、同年3、4月に風説風聞が広まるのに先行していることが明らかなのだ。

これが社会にひろまった流言飛語の源になった可能性が高いと私は述べた。可能性というまでもなく、風説風聞として流布すれば、源が詮索されることもない。根拠のないウワサだから謠言という。しかし、ここからが奇妙なことになる。当局に弾圧するように要求したのは文学革命派の羅家倫であるにもかかわらず、それが反対派と目された林紓の要望であったことにされる。

その手法は、用意周到であるといわなければならない。あるいは魔術といってもいい。

まず、陳独秀が『毎週評論』第11号(1919.3.2)の「随感録」欄で予告する。

旧党の罪惡 言論思想の自由は、文明深化の第一重要条件である。新旧いずれの思想にしてもそれ自体にはなんの罪惡もない。しかし、著者が政府の権勢を用いて自分とは異なる新思潮を圧迫するのは、古今中外の旧思想家の罪惡にほかならない。これは彼らが従来から失敗する原因でもある。政府を利用して自分とは異なるものを圧迫させるほどの力がなく、風説を作って人を脅すのは、さらに卑劣で恥知らずである！

つぎに李大釗(守常)が「新旧思潮之激戦」を3月4、5日付『晨报』におい

て発表する。彼は、日本で思想上の議論が活潑に行なわれていることをまず述べる。それに比べて中国では新派も旧派も沈滞しきっている〔死気沈沈〕と嘆く。

そういう状況があったからこそ錢玄同と劉半農は王敬軒名の手紙を捏造してまで林紓を敵側の代表者にしたかったと理解できる。しかし、林紓はまったく反応を示さなかった。その彼が、捏造書簡から約1年後に自ら小説を発表して文学革命派の人物らしきものを罵ったとなると、これは待ちにまった好機到来であったに違いない。つぎが注目される箇所だ。

人の背後に隠れ、偉丈夫の太い足にかじりつき（注：取り入るの意）、狂暴な勢力でお前たちに反対する人を圧倒して、それでお前たちは鬱憤晴らしをしようとする。あるいはたわごと妄想の小説を1篇書いてちょっと満足する。^{*124}

旧派のやり口を説明しているが、これはそのまま林紓を指している。なにしろ李大釗がいう偉丈夫は、林紓の「荊生」にでてくる偉丈夫のことだとすぐわかってしまう。林紓の小説を登場させるための入念な準備だということができる。

いよいよ『毎週評論』第12号（1919.3.9）は、李大釗の文章と林紓「荊生」を同時に転載した。陳独秀の「旧党の罪悪」および李大釗の「新旧思潮之激戦」は、その前ぶれであることが理解できる。林紓の小説を再録する計画が先にあって、それにつなげるための「隨感録」であるのは、誰が見ても明らかだ。

驚くべきことだといわなければならない。羅家倫を林紓にすり替えた。そうとしか私には思えない。風説風聞を伝える人陳独秀は、伝えるという行動によって風説風聞をかえって強調した。しかも、無実の罪を林紓になすりつけたのである。

10 林紓が書いた短編小説

五四事件直前の論争をとりあげるばあい、林紓が書いた2篇の小説は、文学革命派に対して人身攻撃を行なったというので特別に有名であるのは周知のことだろう。有名すぎて、読まないのに内容を知っているつもりになりそうだ。

鄭振鐸は、つぎのように説明する。

しかし彼（林紓）の道を守り文を「正す」という情熱は、別の方面に出口を見つけた。彼は新聞紙上につづけて2篇の小説を書いた。ひとつは「荊生」で、もうひとつは「妖夢」だが、ふたつとも意味は同じだった。侠客を望み、鬼神に託するというだけ。しかも彼はある「外力」が、この新しい運動を制裁し屈服させることを望んでおり2篇ともに一致した精神なのである。罵りだけでは終らず、つづいて呪いになった。（中略）林紓の『新青年』同人たちに対する熱心な反撃は、1919年23月の間のことだった。数ヵ月後、「五四」運動が発生したとき、安福系はしばらくして崩壊し、新文学運動について圧迫する力は自然となくなってしまった。^{*125}

鄭振鐸が引用符を使用し「外力」と書いたのは、それが安福倶楽部の徐樹錚だといいたからだ。そういう風説風聞はあったが、事実であるという証拠はない。だが、文学革命派にくり返し強調されてしまうと、それがいつの間にか本当に存在したような気になる。また、その方向に導くのが鄭振鐸「導言」の目的でもあった。

問題の「荊生」と「妖夢」だが、もとは連載作品の一部である。上海『新申報』（1919.2.4-1920.3.16連載）に林紓の専門欄が設けられ「蠡叟叢談」と命名された。古文の短編小説58篇を集めて『蠡叟叢談』（上海・成記書局1920）が刊行されるが、私は見る機会をもたない。中国では、反動派代表林紓の著作だからなのか、『蠡叟叢談』は再刊されていないようだ。「林訳小説叢書」の中の10冊が1981年に再刊されたのを見れば、そのうち『蠡叟叢談』も刊行されるだろう。

全58篇のうちわずかに2篇だけが取り上げられる。残りの56篇に言及されることは、ほとんどない。この2篇は特別なのだ。内容を要約して紹介する。

「荊生」『新申報』1919.2.17-18（『林紓研究資料』81-82頁による。【統合版補記】原紙で確認した）

1911年辛亥の五月十八日、人気のない北京陶然亭に荊生という者が宿泊するこ

とにした。そこへ3名の若者が来る。田其美、金心異、狄莫らは、みなアメリカ帰りで哲学をよくする。荊生のいる近くで酒盛りをはじめた。田がいうには、中国は滅ぶぞ、誤りはすべて孔氏の学である、と。狄莫は、文字だけが人を誤らせる、白話を行なえといえ、金は、自分の姓のとおり金にほしいだけ、と3人ともに大喜びをしている。壁を破って闖入してきた荊生は、孔子を擁護し中国は4千年あまり倫常によって立国してきたと述べた。田が抗弁しようとする、偉丈夫は2本の指でその頭を押さえつけ、狄莫へは足で踏みつけ、金は近視だから眼鏡を投げ捨てた。3人ともに無言で去っていった。(要約おわり)

これだけのことだ。おおざっぱな一筆書きを思わせる短文で、ひねりもなにもない。3人の若者にはモデルがあり、それをからかっているだけの作品でしかない。笑ってすませる程度のものだ。

だが、信じられないことだが、この短編小説が、文学革命派を怒らせた。あるいは、彼らは怒った風を装って大問題にするのである。

まず、3月9日付『毎週評論』第12号に全文が転載された。

「雑録」欄に掲載されるにあたり、数文字が冒頭につけられている。「強権を用いて公理を圧倒しようとする表示である」。このように受け止めたという編集者の意思表示だ。そればかりか、「記者」名義の前書きがある。

いわく、「国内の古文家、駢文家の一団が国語文学の主張(注：白話で作文をすること)に極力反対している」こと、「はなはだしきは、武人政治の権威を借りてこの種の主張を禁圧しようとしている」と。つぎが興味深い。「数日前、上海の新申報に掲載された古文家林紓の夢想小説は、この種の武力で制圧しようという政策を代表しており」、転載するから皆にそれを知ってほしい。

この前書きこそ、林紓の短編小説「荊生」が武力を用いて抑圧しようとしている、という風説風聞のはじまりである。私は驚く。陳独秀は、あれだけ、北京大学が軍閥の武力に脅迫されているとあって風説風聞を集めていたが、その発信源は『毎週評論』そのものであった。文学革命派の羅家倫が権力発動を要望したことを林紓に置きかえたのである。こちらのほうがよほど悪質だろう。

もうひとつ興味深いのは、この前書きはモデルを特定していることだ。田其美は陳独秀、金心異(のちに魯迅は錢玄同をからかって好んで借用した)は錢玄同、狄莫

は胡適だとする。また荊生は、「当然、あの『技撃余聞』著者本人である」。『技撃余聞』の著者は林紓だ。この段階では、荊生は林紓自身をモデルにしたと考えられていた。徐樹錚ではない。荊生、ほかならぬ林紓が政府の強権を利用しようとしている。これが、『毎週評論』の示した最初の見解である。しかし、荊生を林紓だと指定すると、都合が悪くなつたらしい。あるいは衝撃度が不足すると考えた。のちに、荊生を徐樹錚に変更した。

モデルを特定して武力での制圧を意図していると批判する。この『毎週評論』の反応は、どう見ても奇妙である。なぜなら、現実と小説という虚構を混同しているからだ。

虚構と現実は違う。この当たり前のことを、わざわざ書かなくてはならないのは、林紓批判に関しては、この基本原則が無視されるからだ。無視するのは文学革命派の人々とその支持者である。

林紓は小説を書いて武力行使を意図していたというのだろうか。それでは、この基本的な文学的常識が、文学革命派にはなかったことになるではないか。舞台上演じる悪役に向かって悪罵をなげつける無知な観客と同じ水準である、と批判されたらどうするつもりだったのだろうか。陳独秀たちが文学的常識を知らなかったといえば、あまりにも文学革命派を侮辱することになる。だから、彼らは、それを百も承知であえて危険領域に足を踏み入れたとしか考えられない。その危険をおかすだけの価値が林紓の小説にはある、と判断したのである。そうとしか私には解釈のしようがないではないか。

錢玄同と劉半農が『新青年』で公表して林紓批判を展開したのは、「なれあいの手紙」だった。これは彼らが捏造したものである。論文は事実にもとづいて論証可能なかたちで立論するものではないのか、と私は考えるのだ。

一方、小説という虚構は、あらゆる制約から自由である。何をどのように書いてもよい。

ところが、文学革命派は論文を捏造し誤認にもとづいて林紓批判をしていながら、林紓が書いた自由であるはずの小説については、それを許さない。矛盾しているからこれは理解しがたい。

錢玄同と劉半農が行なった捏造は正しく、林紓の小説は悪いというのだろうか。

偽造手紙には、シェイクスピアの翻訳についてあきらかな誤りがあった。その誤りにもとづいて林紓を批判した。これを不問にして劉半農の林紓批判は正しいというのか。

革命文学派の批判は正しく、林紓の小説は誤りだという論理は、わかりやすいといえばこれほど容易に理解できるものもない。革命文学派の側にたった説明だからだ。

小説と現実を一致したものと考える、この古びてカビのはえた見方が、現代にまで生き延びている事実のほうが私には不思議な気がする。

陳独秀は、林紓の小説を読むと、待ち望んでいたものがやってきたと計画成功の喜びをひそかに声に出したのではなからうか。そうでなければ、上海の『新申報』で掲載されたものをわざわざ北京の『每週評論』に転載することはない。貴重な紙面を使用してでも利用価値があると判断した証拠である。また、転載だけでは終らなかつたのももうひとつの証拠だ。

「荊生」には、蠡叟名で林紓の後記がついている。

台湾で林紓がある人の家に宿泊したとき、その家で飼っていた犬20余匹が終夜鳴いていたが、聞こえぬふりをした。また別の場所に住んでいたとき、白鷺千百羽が明け方に鳴いたが、これも聞かぬふりをした。

林紓は何がいいたいのかといえば、人間の言葉を理解しない獣に干渉しようとしてもムダということ。1918年『新青年』からはじまった錢玄同と劉半農による林紓批判に、林が答えようとしなかつた理由がここで明らかにされている。いくら説明してもわからない人々だと林紓は、最初から見限っていた。ならば、なぜ、今になってモデルが特定できる小説を書くのか。

林紓が説明を続ける。「門人李生」がこの3人に不満を感じているようで、それを林に話した。林紓は大笑いして、と説明している。

名前をぼやかしているが、北京大学の関係者ならば、だれでも即座に思い当たる。張三李四というではないか。張厚載だと容易に判明するような書き方をしたのは、林紓の過失であった。おまけに、3人に不満を感じているとまで記したから、このあと張厚載には禍がふりかかってくる。

すでに紹介した陳独秀「關於北京大学的謠言」(『每週評論』第13号1919.3.16)に以

下のように書いてある。

この国故党のなかに、現在私たちが知っているのは、『新申報』の「荊生」著者林琴南と、『神州日報』通信記者張厚載のふたりがいるだけだ。林琴南が『新青年』を恨んだのは、彼らが孔教および旧文学に反対したからだ。その実、林琴南が書いた筆記と翻訳した小説は、本当の旧文学家から見れば、古くもないし雅でもない。彼が崇拜し希望しているあの偉丈夫荊生は、まさしく孔夫子が会いたくない陽貨のような人物なのである。

ここで、張厚載の名前が公表された。しかも、つぎの論調は激しい。これこそ罵りというのにふさわしい。陳独秀は、張厚載批判を展開する。

張厚載は、旧劇問題で『新青年』に反対し、これは余裕をもって討論できたとしても、自分と異なるものについて風説を伝えて中傷することはないのだ。もし何も考えずに伝えたというのなら、聞くが、身は大学生であり、本校の新聞に対して目をつぶってたわごとを話し、「つまらない通信 [無聊的通信]」(これは張厚載の胡適君への謝罪文にあることばで、10日『北京大学日刊』に見える)を書くのは、新聞記者の資格を失うことになるのではないか。もし考えて伝えたのであれば、人格問題が発生するぞ!

北京大学文科学長が自分の大学の学生に向けることばとも思えないくらいに、激しい調子で非難するのである。陳独秀は、学生を教え諭し導くという教授の役割をここにいたって完全に放棄している。もっとも、彼は文科学長であって教授ではないのだが。「人格問題」の段階まで到達するのを見れば、独秀の発言の方が恫喝になっている。陳独秀が書きつけることばの激烈さに、実態のない風説風聞ではなく肉体と実名をそなえた敵の出現を求めていたその程度の強さを私は感じる。

さきに転載だけで終らなかつたと書いた。なぜなら、同じ『毎週評論』第13号に、二古「評林蜩廬最近所撰「荊生」短篇小説」が掲載されているからだ。

題名にある「林蝟廬」は誤植ではない。林紓の号畏廬と同音の「蝟（ハリネズミ）」に入れかえて林紓を侮辱するためである。

文章の内容は、林紓の短編小説を添削したものだ。二古は中学教師をしていて（ということになっている）生徒の文章を点検するのと同じことを行なう。たとえば、原文のこの部分は重複しているから不必要、「能哲学」ではなく「通哲学」に改めなければならないなどなど。たとえば、金が近視だから眼鏡を取られるとハリネズミのように恐れた〔怕死如蝟〕という箇所だ。これが可能であれば、「林畏廬のように恐れた〔畏死如林畏廬〕」ということもできる。恐れるのは金の心中のことだから、ここは「ハリネズミのように縮こまった〔瑟縮如蝟〕」とすべきだ。ここから「林蝟廬」という呼び名になる。相当に深く読み込んでいることがわかって、さすがに文字の国の人である。

作者の意図は、いうまでもなく文章がうまいといわれる林紓の文章を試験して、中学生並みに扱って罵るつもりだ。老人が尊敬される中国では、子供扱いされることは最大の侮辱になる。この二古は誰なのか今にいたるまで明らかになっていない。しかし、あまりにもできすぎた添削だから、文学革命派の誰かが偽名を使用した可能性もある。王敬軒と同じかもしれない*126。

何を考えたのか林紓は、『毎週評論』第15号（1919.3.30）に投書している。今後も蠹叟小説は継続するから、「添削〔斧削〕」をよろしく、と皮肉のつもりだろう。これにも「記者」の返答がある。仕事が忙しいから「添削」するヒマなどないわい、と怒鳴りかえしている。林紓の投稿は利用されているだけ。お人好しにもほどがある。

同誌には、投稿が2件掲載された。ひとつは、貴兼からで、「妖夢」が発表されている、なかで蔡元培を「元緒」といつている、批評に値しない人間を批評する文章は掲載しないように、と提案する。

もうひとつの鄭遂平は、林琴南が設立した中華編訳社通信教育部にだまされたと訴える。保証金が返還されないなどと細かいことが長々と書いてある。調べてみれば、1916年に上海の中華編訳社が国文通信教育部を設立しているのがこれに該当する。林紓はその教材『文学講義』の編集主任になっていくつか本を執筆した。このことをいつているらしい。上海の出版社が経営している組織のもめ事ま

でも林紵の責任にされるのか、と『毎週評論』の編集方針をあらためて確認する。悪いのはすべて林紵に原因があるといいたいのだ。

林紵批判は、それだけにはとどまらない。

魯迅が登場する。これも『毎週評論』第15号だ。「随感録」欄に筆名庚言で「敬告遺老」、「孔教与皇帝」、「旧戲的威力」の3篇が掲載される。

「敬告遺老」の遺老とは、清室拳人と自称する林紵をさす。魯迅が林紵に忠告していわく、「あなたはすでにわが国の人ではなのだから、なぜ苦しいめにあいながら余計な世話をやき、腹を立てるのか。近頃は公理が戦勝し、小国もみな民族自決を主張し、東隣の強国も、中国の内政には干渉しないとしばしば宣言している。あなたさまは、少し手間をはぶいて、のんびりと家にひっこんで、わが国のことにはもう干渉するなよ」と。「你老人家」と祭り上げて呼びかけながら、「不要再干渉敝国的事情罷」と命令するのだ。魯迅が好きな人は、この意図的に不均衡にした文字使いが絶妙で皮肉がきいていてよろしい、というのだろう。

「わが国の人ではない」とは、中華民国になっているのに遺老と自称して清朝の人間であることを指す。それにしても、魯迅は口汚く罵ったものだ。とても上品とはいえない。のちに林紵を「ファシスト」とよんだ(1928)。また、「車を引いて豆乳を売る」という文句は蔡元培の父親を林紵が当てこすったのだ、と中傷だと知りながら日本人山上正義に伝えた。林紵を毛嫌いし批判するその態度は一貫して変わらなかったことがよくわかる。

「旧戲的威力」は、以下のとおりである。

前の北京大学についての風説は、近頃の一大事件であるということが出来る。私は、当初頑迷でかわいそうな老人のやることだと考えていたが、なんと事実はまったく違って、すべて旧劇を罵るところからおこったことだった。首謀者は、小説「荊生」のなかの李四だが、聞くところによると劇評家だとか何とか。旧劇がこれほどの威力をもって、このように恐ろしいとは考えることすらできなかった。以前はたくさんの新聞が評論をしていて、多くは新旧思想の衝突だと思っていたが、邪悪なものが暗闇のなかで人を冷笑していることを本当に教えてくれることだ。

案の定、李四とよばれて登場している。張厚載のことである。北京大学校長は、ふたたび張厚載を叱責する手紙を公表する。こちらについては後に張厚載の箇所で紹介するつもりだ。

そのほかの人々の、といっても文学革命派になるが、反応をみてみよう。

劉半農「《初期白話詩稿》序目」『初期白話詩稿』北平星雲堂書店1933影印版未見 / 鮑晶編『劉半農研究資料』天津人民出版社1985.2。243頁 / 北京出版社影印版2010.11

「道を守る林紓氏は、文章をつくってこれに（注：白話文）反対するばかりか、軍事力を借りようとした　つまり彼の「荊生將軍」だが、私たちが小徐とよんでいた徐樹錚である」

『每週評論』では、荊生は林紓本人だとしたが、いつのまにか徐樹錚にされている。「荊生將軍」であれば、旧文人の林紓よりも正真正銘の軍人である徐樹錚の方が現実味があるという判断なのだろう。

周作人「林琴南的「蠹叟叢談」」「紅樓内外」の一部。『知堂乙酉文編』香港・三育図書文具公司1962.3。98頁 / 陳平原、夏曉虹『北大旧事』392頁

「校外の反対派代表は林琴南で、『新申報』『公言報』によく文章を発表してほしいままに攻撃をおこなっていた。もっとも有名なのは『新申報』の「蠹叟叢談」で、もとは「聊齋」のやり方で、なんという価値もないもの〔沒有什麼價值〕だが、その中に「荊生」という名前の寓言があり、陳独秀、胡適、錢玄同をもっばら攻撃するものだった」

周作人が見ても作品としては「なんという価値もないもの」だった。だが、陳独秀たちは過敏に反応した。重複するが、同じく周作人の記述から。

林紓が武力を借りて北京大学に打撃を加えようとしたこと、また校内の人間と連絡をとりスパイをし〔做内線〕騒動をひきおこしたと説明して以下につづく。

最初、彼（林紓）は上海の『新申報』に「蠹叟叢談」を発表した。これは

「諧鐸」流の短編で小説形式である。北大の『新青年』の人物に侮辱と攻撃をくわえて、最初の作品は「荊生」というのをおぼえている。田必^{ママ}〔其〕美、狄莫および金心異がいて 陳独秀、胡適および錢玄同の名前をあてこすっている この3人が大声でしゃべりちらし、先賢を中傷するのを荊生に聞かれてしまう。これらの人に痛打をくらわせるのだが、いわゆる荊生とは徐樹錚を暗示している。^{*127}

荊生は徐樹錚を指す。これが定着している。徐樹錚の息子までもがそう信じ込んでいるのだから文章の力は見逃すことができない。すでに、触れている徐道鄰の著作から。

徐道鄰『徐樹錚先生文集年譜合刊』台湾商務印書館1962.6。263-266頁（「荊生」全編を引用している）

「林琴南氏は守旧派の中心人物で、父（注：徐樹錚）は当時思想上では守旧派に接近していた。ゆえに、林氏は父に政治上の力を運用して新思潮の人物を攻撃するよう希望していた。彼の当時有名な「荊生」という小説が彼の思想を暗示している。（「荊生」は省略）/ここの「荊生、田其美、金心異、狄莫」は、それぞれ父、陳独秀、錢玄同、胡適を指している。小説の意図は明白ではあったが、父はどのような反応もしめさなかった」

徐樹錚の息子が、このように説明する。だが、彼の林紓に関する記憶といっても、せいぜいが十歳をこえた頃のものだ。「荊生」にしても後の学習によって得た知識だろう。しかし、徐樹錚の息子が証言している、となればいくらかの信憑性があるように見えるらしい。著書のなかに引用されたとき^{*128}、従来の説明を補強することになる。

なんともいうように、武力を使うとは何をさしているのかまったく不明なのだ。そもそも、徐樹錚が古文を尊んだがゆえに実際に行なったことは、正志中学の創設と経営だったではないか。この点に関しては地道な努力を重ねているといわなければならない。その彼が武力で北京大学をどうしようというのか。息子の徐道鄰は意味もわからずにくり返しているだけ。小説と現実を混同し、しかも林紓が

抱きもしなかった「希望」を勝手に想像しただけ。結果として徐樹錚は動かなかった、という箇所のみが証言としては信用できる。事実、何もおこらなかったのだから。

つぎは、もうひとつの短編小説である。内容を要約する。

「妖夢」『新申報』1919.3.19-23（『林紓研究資料』85頁が3.18-22とするは誤り）

陝西甘泉の人鄭思康が、ある日夢見が悪いとたずねてきた。十月十七日、酒に酔い寝ていると夢の中で長いヒゲの人に冥土に行こうと誘われた。行けば白話学堂がある。校長は元緒、教務長は田恒、副教務長は秦二世で傑物である。2番目の入り口には「斃孔堂」と書いてある。二世は孔子は役立たずといい、田は死文字は活文字におよばない、五倫五常は恨むべしと罵る。元緒はうなずいてそれを称賛する。そこに羅睺羅阿修羅王が出現し、彼らを食べた糞が積もった。そこで目覚めた。（要約おわり）

ただの夢物語である。古文と孔子を攻撃する学校がある。たしかに、林紓が一番気にかけている事柄ふたつであり、これをくり返して話題にする。その点では、林紓は一貫した態度を堅持しているといえる。

「荊生」と同じく蠡叟名義で著者による解説がついている。かなり長い。その部分を少しだけ示そう。

「死文字」という3字は、田恒がいい出したのではない。英国のディケンズがかつて言ったことがある。ラテン、ローマ、ギリシアの古文を指す。

ここを見ただけですぐご理解いただけるだろう。蔡元培あての林紓書簡1に書かれていることと同じ内容をくり返している。古文は廃止することはできない、白話を書くにはまず読書をして道理をよくわきまえなければならない。同じ時期に書いた林紓書簡1と「妖夢」だから、主旨に変更があるはずもない。

例の「車を引いて豆乳を売る輩 [引車売漿之徒]」に似た表現もでてくる。すなわち、「白話でもって白話を教えるだけで、その道理がどこから出てくるのかを知らなければ、驪馬市大街で人力車を引く者でも白話を知っているのだからどうして教える必要があるのか [若但以白話教白話不知理之所從出，則驪馬市引東洋車之人，亦知白話，何用教耶？]」である。当然ながら、人力車夫が蔡元培の

父親であるなどとは、林紓はまったく考えていない。普通の比喩である。誤解のないように。

林紓が述べるのは、古文と白話は干渉しない、それぞれが独立して併存する、孔孟の教えは重要だ、このふたつだけである。

のちの研究者は、この小説について強く反応する。登場人物3人にはモデルがあつてそれが人身攻撃だと批判するのだ。元緒は蔡元培を、田恒は陳独秀を、秦二世は胡適を指すということになっている。

もともと小説だし、しかも夢物語だ。いくら似ている人物が登場しようが、これと現実を混同するというのが、私にいわせるとまず不思議な感覚である。

多くの論文は、内容を紹介するのさえいまわしい、といわんばかりに小説の内容を点検するものはほとんどない。せいぜいが元緒が亀を意味し蔡元培を罵るとのべるくらいのことだ。

林紓は、蔡元培にあてた手紙に「太史」を使用し敬っていた。だが、小説では違ったあつかいをした。

私の興味を引くのは、大学の役職を説明している箇所である。

つまり、校長は元緒、教務長は田恒、副教務長は秦二世という部分だ。注目するのは、教務長と副教務長である。

北京大学の改組がからんでくる。2月22日の会議で文科理科の学長を廃止する方針を固めた。3月1日の大学評議会で「文理科教務処組織法」が承認され、それを張厚載が『神州日報』で報道した。だから、林紓の小説に教務長が出てくるのは、北京大学の改組を知っていることの証拠になる。ただし、事実とは一致しない箇所もある。

北京大学の会議で教務長を新設し、その初代には選挙によって馬寅初が就任した。次点は俞星枢（同奎）だ。この会議は4月8日に開催されている。しかし、「妖夢」の公表はそれよりも以前の3月だ。ゆえに、役職の教務長は該当するが、その人物に田恒（陳独秀）をあてたのは早合点ということになる。また、実際に副教務長が選出されたどうか不明だ。

このように考証らしきことをしてみてもムダなこと。結局は小説なのだから、現実とは違ってもかまわない。

現在でこそ「妖夢」は「荊生」と一緒にして批判的にされている。だが、1919年当時では、「荊生」が主たる攻撃目標だった。モデルの特定を含めて詳細に論じられている。その原因は、『毎週評論』が全文を転載したからだ。北京で比較的容易に読むことができた。だが、「妖夢」はその発表が「荊生」より約1ヵ月遅かったし、上海の『新申報』が掲載紙だから北京まで伝えられるには時間がかかったと考えられる。それよりも、そのすぐ後に五四事件が発生して全員の目がそちらに奪われてしまった。林紓の小説どころではなくなる。

そのころ北京大学では、ひとりの学生が退学処分になる。張厚載である。

11 張厚載の退学処分

張厚載が北京大学卒業を目前にして退学処分になったのは、なぜか。

張厚載の名前を歴史に刻みつけたのは、林紓との関わりである。それだけで普通にいえば、致命的である。有名とはいっても、称賛されるのではなく罵られて知られる人だ。中国では、そのような人物については詳細が不明になることが多い。詳しく調べようとする、その研究者が被批判者と同一視されるからだろう。ゆえに、酷ないい方だが、現代中国では「敗北者に歴史はない」と私は、いう。個人史は、当然存在している。だが、人によっては地下にもぐったままそれが表面にでてこない、表だって語られる歴史はないという意味だ。

張厚載自身が北京大学で経験した自分にかかわる事柄を回想して書いている。

数年前、師（注：林紓）が上海の某新聞に「妖夢」という小説を書いた。蔡子民氏を「元緒公」と称したら蔡は大いに怒り、この原稿が私の紹介したものだということで、怒りを私に向けた。その時、私は北大法科政治門で勉学しておりあと23ヵ月で卒業ができるころだったが、私に退学を命じた。師は申し訳ないと「送張生出大学序 [贈張生厚載序]」という文章を書いて証書のかわりとしてくれた。しかし、私は学校の証明書などは、もうどうでもよかったのである。*129

退学処分から3年後に書かれた張厚載の文章だ。ここには、「荊生」が出てこない。「荊生」の後記に林紓は小説執筆のいきさつに触れていた。張厚載が文学革命派の教授に不満を感じていてそれを林紓にもらした。それで書いたのが「荊生」だったという説明だ。張厚載の回想によると、問題にされたのは後の「妖夢」だという。その原因が登場人物の名前「元緒公」だ。作品には「元緒」とだけあって「公」はついていないから、ここは張厚載の記憶違いだろう。

蔡元培を怒らせた何かがあるはずだ。一般に説明されるのは、元緒は亀の別名で、中国では罵りになるという。性的な意味をともなっているからだ。だが、それだけでは子供が落書きした程度のことだろう。これが、普通感覚ではなからうか。では、何が蔡元培を激怒させ、学生の張厚載を叱責するにいたったのか。その結果が退学処分である。

より深い意味があったとすれば、張厚載が記憶違いをしていた「元緒公」ということばである。張が勘違いしておぼえているくらいに「元緒公」の方が印象深かった。

「元緒」は亀を意味する。しかも、亀は隠語で亀公ともいい妓楼の主人をさす。あるいは、上海での妓楼言葉で使う「元緒公」は、妓女の下男を意味する*130。

主人でも下男でも、どちらも妓楼に関係することばであるのが重要だ。ただの亀ではない。妓楼で使われる下品な単語であるからこそ蔡元培は、それに反応した。つまり、陳独秀の妓楼通いがあり、彼の上司は蔡元培だから、蔡は妓楼の関係者になってしまう。こういう背景があるとわかれば、蔡元培の尋常ではない内に秘めた怒りが理解できる。

というように、蔡元培の怒りの原因を「妖夢」に求める。しかし、事実は異なる。張厚載が回想してそう書いているといっても、これは、彼の勘違いなのだ。

蔡元培は、あとで張厚載を叱責する手紙を公開するが、その時、「妖夢」は読んでいない。

その根拠は、つぎに紹介する蔡元培の張あて手紙の公開日付だ。『北京大学日刊』に掲載されたのが3月21日のこと。一方、林紓「妖夢」が『新申報』に連載されたのは3月19-23日だ。短編小説だが、5日に分割されている。「妖夢」そのものが5段に分かれているのに該当する。元緒が登場するのが、最初の3段分、

といってもこれが小説部分であるから、19-21日の新聞掲載となる。手紙の公開と新聞連載が微妙に重複している。しかし、北京と上海の距離を考慮して、蔡元培は「妖夢」は読んでいないと私は判断した。

あくまでも前の作品「荊生」を読んだからの張厚載あて手紙であることをご確認いただきたい。

蔡元培が林紓の先行作品「荊生」に立腹した原因は、北京大学教授を攻撃したと受け取ったためである。それはわかる。では、彼が『公言報』『神州日報』に対して行なったと同じく、『新申報』社、あるいは林紓に直接手紙を書いて反論をしたか。責任を追及するのであれば、そうしなければおかしい。ところが、それはしなかった。奇妙なことに、批判の矛先を林紓にではなく学生に向けるのである。

張厚載は、新聞記事に関して蔡元培、胡適、陳独秀からすでに批判を受けている。ここで、再度、校長が登場してきて3月21日付『北京大学日刊』で、学生張厚載を名指しで批判する。これには驚いた。

張厚載がまず蔡元培に手紙を書いており、それに蔡が答えるという順序通りに必要部分を引用したい。

張厚載は、それまでの経緯を説明する。

『新申報』に掲載されている林琴南氏の小説原稿は、すべて私が転送しています。また「妖夢」1篇は、陳胡両氏を攻撃し(蔡)先生に関連するところがあります。原稿を送ったあとで林氏より手紙で、劉応秋文集に序を書くように求められたから「妖夢」は掲載してはならない、と言われました。しかし、原稿はすでに上海に送ってしまい中止することはむつかしく近いうちに掲載されます。先生を冒瀆することばがございましたらその罪は私にあります。先生は寛大で包容力がおありですから林氏の戯れの文章は意に介されないでしょう。(後略)

上海『新申報』の林紓「蠹叟叢談」は、1919年2月4日から掲載がはじまる。ほぼ毎日、なんと翌1920年3月16日まで約1年以上の連載だ。全58篇の短編小説

のうちの2篇が「荊生」「妖夢」になる。林紓の都合で新聞社に原稿を送るな、といわれても連載を前提としているのだから中止することは不可能だったのではなかろうか。

これに対する返答、すなわち蔡元培「(二)蔡校長復張繆子君書」は、以下のとおり。

手紙をもらい林琴南君が本校教員を攻撃する小説を書いたのは、すべて兄が『新申報』に転送したことを知りました。兄と林君には師弟のよしみがあり、林君を愛護するのは当然です。兄は本校学生ですから、母校を愛護するのも当然でしょう。林君はこれらの小説を書いて本校の名誉を破壊する意図にもかかわらず、兄は林君の考えにしたがいこれを発表しました。兄の母校を愛護する気持ちにやましいところはないですか。私が平生罵りことば、あるいは軽薄なことばを使うのを嫌うのは、受ける者は無傷で、なげかける者は徳を失うと考えているからです。林君は私を罵りましたが、私は哀れむだけのことで、どうして恨みに思いましょう。ただ、兄は業を受けた師を愛護することに反した気持ちにやましいところはないですか。すんだことは追ってもむだです。今後注意されることを望みます。

張厚載にあてた蔡元培の公開書簡は、「荊生」に関してのもので「妖夢」はまだ読んではいないことはすでに説明した。

さて、蔡元培のこの手紙はなにを意味しているか。蔡元培も小説と現実の区別をつけることができなかつた証拠となる。林紓の小説を虚構とは受け取らず、実際に北京大学を攻撃したと考えている。

蔡元培は、林紓の手紙に返答して林紓小説と授業は別であると言明したではないか。林紓にむかっては両者は別物であるといいながら、学生の張厚載に対しては、林が小説で北京大学の名誉を破壊していると批判する。相手によって別の基準を取り出して適用している。一般に、これを二重基準という。

蔡の手紙にあるように、哀れむだけで十分ではないか。著者林紓を哀れむのなら、その連絡をただけの張厚載については少し哀れんでそれですませるのが妥

当だ、と私は考える。だが、蔡元培は、わざわざ手紙を公開して張厚載を叱責している。

文面は、おだやかに見える。ゆえに、蔡元培は度量広く教え諭して、さすがである、などと考える人もでてくる可能性はある。だが、この手紙は基本的におかしい。あってはならない種類の行動を表明している。重ねて言うが、攻撃目標を誤っている。しかも二重基準を使っているのだ。攻撃するとすれば林紆本人でなくてはならない。同時に、小説を掲載した『新申報』社に抗議するのが当然だ。蔡元培が張厚載を批判するのは筋違いである。蔡の誤りであるといわざるをえない。

蔡元培は、思想自由、包容主義を新聞紙上で宣言した。その内容も具体的にのべている。

すなわち、教員のなかには妓楼通いをする者がいるが、授業をきちんと行なっているのであれば放任している、学外での行動発言は大学とは無関係だ、と林紆に対して言いきり社会にむけて公言した。

ならば、学生にもそれは適用されなければならない。授業をきちんと受けて勉強していれば、学外で旧劇擁護論を発表しようが、劇評を書こうが、学内の状況を報道しようが自由だ。大学とは関係がない。蔡元培の論理ではそうなるはずだ。

傷害事件、あるいはほかの刑事事件を起こして大学の名誉を傷つける、ということも起きるかも知れない。だが、張厚載のばあいは、新聞記事を書いた、あるいは林紆の小説を新聞社に取り次いだというだけなのだ。新聞記事にしても北京大学の改組に関するもので、大筋は正確なものであった。林紆に学内の様子を話題にして話すことはあつただろう。しかし、大学内の事情について秘密があると思う方が奇妙だ。それらすべてが、どうして叱責批判の理由になるのだろうか。大いに疑問である。周作人は張のことをスパイだと言っているが、あきらかに濡れ衣である。

また、張厚載に対する校長、文科学長、教授たちの批判を当然のこととして考えている研究者が、現在でも大多数を占めている。言論の自由という考えは当時もなく、今にいたるまでも存在しないらしい。

張厚載『歌舞春秋』(上海・公益書局1951未見)の「附録」が当時の様子を説明し

ているという。原文を見ることができないので孫引きして示す。

あとわずか2ヵ月あまりで卒業だったから、当然満足できず、彼（注：張厚載）は蔡校長に会いに行くと、校長は評議会に押しつけ、評議会責任者の胡適に会いに行くと、また校長に押しつけた。クラス全体の同級生が彼のために請願したが、だめだった。彼にかわって教育総長の傅沅叔（注：増湘）あてに手紙を書きもしたが、やはりだめだった。……^マ^マ彼が担当した通訊の『新申報』に特にたのんで、通訊の題目を列挙し「学校の名誉毀損」の罪を構成する1字もないことを証明して弁明してもらったが、結果は処分を免れることはできなかった。蔡校長は彼に成績証明書1枚をあたえ、天津北洋大学に転学すれば本学期に卒業が可能だとしたが、彼はすでに意気消沈してしまっておりそのまま中途退学した。^{*131}

張厚載の友人が書いたように読める^{*132}。同級生の多くは張厚載を支援していたとわかる。

学生の退学処分は、校長名によって発令実施されると考えていいだろう。

3月31日付『北京大学日刊』には、「本校布告」が掲載された。

「本校布告」

（1）学生張厚載は北京上海各新聞へのたびかさなる通信にて根拠のない風説を伝え本校の名誉を毀損した。大学規程第6章第46条第1項により退学を命ずる。右のとおり布告する。

北京大学の名誉を毀損したことを理由に学生張厚載を退学処分にした。これが、蔡元培がとなえる思想の自由、包容主義の実態である。

周作人は、のちになって北京大学を退学処分されたふたりの学生のことを回想してつぎのように書いている。そのうちのひとりが張厚載だ。時間が経過しているから、受け止め方にも違いがでてい

張繆子も内側から応じたと疑われ、そこで学校では断固とした処置をくだし彼を除名した。卒業前であったが、ある学生と前後して光が当り、3番目に美をあらそうものはいなかった。蔡校長が治める北京大学では、もともとから退学にする学生はそれほど多くなかったからだ。今から思えば（注：本文は1948年の文章）このふたつは疑わしい事件のようである。あの匿名のメモはその学生がやったものかどうかたぶん十分な証拠はなかっただろう（注：人身攻撃をする匿名メモを書いたとされて退学処分になった）。張（繆子）君の（林紓との）内応もそれほど嚴重なものには見えない。おおよそ学内の消息をもらして林琴南に情報としたくらいで、たぶんそれほど重視するにあたらなかった。しかし、当時、北京大学は旧勢力の攻撃を受けていて、風雨に揺れ動くなかであたたく自衛をするためにはその種の処分をせざるをえなかったから怪しむに足らない事だったのだろう [也是不足怪的事吧]。*133

これはなんだろうか。周作人はひどい感想を書きつけたものだ。私は、彼の文章を日本語に翻訳しながらそう思う。「ひどい」の前に「とても」という副詞をつけるだけでは足りない。張厚載という学生ひとりの将来を周作人はどう考えていたのだろうか。

張厚載は、演劇好きで劇評を書くほどの知識をもち、『北京大学日刊』に掲載できる論文を書くことができた。張が旧劇援護について胡適に利用されたということは、逆にいえばそれだけの実力があったという証拠にほかならない。学生でありながら新聞社の通信員をつとめるとは、よほどその方面の才能に恵まれた人だと推測できる。

北京大学卒業を目前にしているその張厚載を退学処分にした。しかも、処分の理由は重視するにあたらぬ、と周作人はいまさらながらいう。北京大学が自衛のために行なった処分だと周は説明している。所属は違うが彼も北京大学教授のひとりだった。張が大学の犠牲になるのを傍観視しながら、処分は「怪しむに足らない事だったのだろう」ですませている。おまけに、文章がふざけていて無神経だ。3人目の退学者がいなことを表現して、光が当たるだの美をあらそうだの [与心君後先暉映，更没有第三人可与媲美] と書く。学生ひとりの将来を台無し

にしたという自覚が周作人には欠如している。

12 結 論

1919年の五四事件が発生する直前の北京において、政治的なある対立が存在していた。陳独秀と安福倶楽部の対立である。安福倶楽部を攻撃する陳独秀は、彼の私生活を理由にして反撃されていた。

北京大学をめぐる人事問題が大きく社会に報道されるようになったのは、1919年3月ころからだ。陳独秀を中心にして存在していた政治問題が拡大化した。

それより以前から、『新青年』において錢玄同と劉半農が捏造書簡によって旧派の代表として林紆を指名している。つまり、一方に陳独秀の政治問題があり、一方に林紆を中心とした言語思想問題が存在していた。

陳独秀は、自分に対する政治上の攻撃を逆手に取って、その対立を北京大学内の新旧思想の対立に押し広げた。これに林紆の小説、蔡元培あての手紙が公表されたのを文学革命派にたいする攻撃だと認定した。つまり、陳独秀は、林紆を巻き込んで政治運動化しようとした。新旧対立をより効果的に演出するために林紆を利用したのである。

林紆は、最初『新青年』集団、すなわち文学革命派からの攻撃を無視していた。しかし、教育に対する期待と愛情をすてきれなかった。古文を擁護し、旧思想を墨守する必要があるという信念を、北京大学校長蔡元培にあてた書簡というかたちにして述べた。また、短編小説を発表した。それを好機到来とばかりに、陳独秀らの『新青年』集団につかまれて実物の何倍にもふくらまされて強大な敵対者に仕立て上げられたのである。

文学革命派が自らの存在を証明するためには、強力な敵が必要だった。錢玄同、劉半農、陳独秀らによる林紆批判は、その結果として作り出されたものだ。文学革命派は結局勝利し、現在にいたっている。文学革命派からの視点でしか文学史が書かれなくなったという意味だ。当時の敵対者は、今も敵対者の位置にあって変化することはない。もしそれが動くようであれば、それ以前の歴史に対する見方が根底からくつがえってしまうからである^{*134}。

1919年当時、林紓は、六十八歳だった。彼は、意識としては清朝に生きている。白話をふくんだ文章を書き、詩を作り、外国小説を翻訳し、絵画制作に没頭する。古文を擁護し（白話に反対してはいない）、孔孟の教えを守ることが大事だと固く信じているただの老人である。すでに退職して久しい北京大学だったが、そこで行なわれている教育を心配し、関係する文章を発表したことはあった。また、モデルが推測できる小説も書いた。いまさらいうまでもなく、小説では何を書いてもかまわない。あくまでも文芸上、思想上のことである。政治的な行動にでることは、まったくない。

たとえば、こういうことがあった。1915年、皇帝になる野望をもった袁世凱の意を受けて、楊度が籌安会を組織し帝制を鼓吹した。嚴復、劉師培も参加している。この組織に林紓も参加するように内務部から要求されたが、彼は固辞している。翌1916年には、徐樹錚が使いになって高等顧問に招かれたが、これも固く辞退した*135。

『順天時報』（1919.1.16）に「林琴南之節高」という記事が掲載されている。某大物から秘書にとこわれたが、政治にはかかわるつもりがない、正志中学で国文の講義を担当するからと断わった。林氏のけだかい気風はこの世に多くはない、と紹介する。1915、16年のことをいったのかもしれない。だが、1919年の記事で、それらとは時間が経過しているから、あるいは別にあったことなのだろう。いずれにしても、林紓は、中華民国以後の政治には興味がなく、必然的に政界に対して影響力もない人物なのだ。

ところが、等身大の林紓では、陳独秀あるいは錢玄同、劉半農ら文学革命派が抵抗すべき強大な敵対者にはなりえない。彼らが切望したのは、文章を発表して大声で罵って攻撃してくる敵でなければならなかった。さらに軍閥を後ろからあやつり武力をちらつかせて恫喝を加える強力な敵がどうしても必要だった。これが、風説風聞を広め、それを林紓に関係があるように印象づけ、実際よりも数倍にふくらませ、軍閥と関係をもった林紓像が作られた理由である。

劉半農は、林訳シェイクスピア（底本はラム）について林紓を批判し、翻訳についてでたらめを行なう人物として当時の社会に印象づけた。これがはじまりだ。でたらめを行なう人物は、文学革命に反対してもおかしくはない。それどころか

積極的に攻撃をしかけてくる存在だと文学革命派は声を合わせて風説風聞を広めた。蔡元培にあてた林紓の書簡、および彼の著作である短編小説2篇が最大限利用された。そこに使われた語句が、敵としての悪辣さを示すものとして解釈され、改変され、引用され、誇張して伝えられたということになる。

その構造の単純さには、あきれるほかない。だからこそ、かえって現在まで容易にかつ固く維持されていると考えられる。

結局のところ、林紓批判そのものが文学革命派によって作り出された冤罪事件だった。

五四時期の林紓をめぐる略年表

- 1917 —————
- 2.1 林紓「論古文之不宜廢」天津『大公報』 轉載上海『民国日報』1917.2.8付
 - 5.1 胡適が林紓論文に触れる『新青年』第3巻第3号
- 1918 —————
- 1.19 蔡元培「北大進徳会旨趣書」『北京大学日刊』
 - 3.15 錢玄同(王敬軒)、劉半農「文学革命之反響」なれあいの手紙『新青年』第4巻第3号
 - 4.15 胡適「建設的文学革命論」『新青年』第4巻第4号
 - 6.15 張厚載「新文学及中国旧戯」『新青年』第4巻第6号
 - 10.15 張厚載「我的中国旧戯観」『新青年』第5巻第4号
 - 10.30-31 蔡元培「北京大学在専門以上各学校校長会提出討論之問題」『北京大学日刊』
- 1919 —————
- 1.1 羅家倫(志希)「今日中国之小説界」『新潮』第1巻第1号
 - 1.18-6.28 パリ講和会議
 - 2.15 陳独秀「編輯部啓事」『新青年』第6巻第2号
 - 2.17-18 林紓「荊生」『新申報』 轉載『每週評論』第12号1919.3.9
 - 2.22 蔡元培、北京大学の各科学長などを招集して会議
 - 2.26 張厚載(半谷通信)「学海要聞」『神州日報』

- 3.1 「文理科教務処組織法」が北京大学評議会で承認
- 3.2 陳独秀（隻眼）「旧党的罪惡」『每週評論』第11号「隨感錄」欄
- 3.3 張厚載（半谷通信）「学海要聞」『神州日報』
- 3.4 「文理科教務処組織法」『北京大学日刊』。公表。夏休み後実行予定
- 3.4 「北京電 北京大学有教員陳独秀胡適等四人驅逐出校聞与出版物有關（二日下午三鐘）」『申報』
- 3.4-5 李大釗（守常）「新旧思潮之激戰」『晨報』 轉載『每週評論』第12号1919.3.9
- 3.6 靜觀「北京大学新旧之暗潮」『申報』 盜用『公言報』1919.3.18
- 3.9 林琴南「荊生」（想用強權压倒公理の表示）『每週評論』第12号 轉載
- 3.9 李大釗（守常）「新旧思潮之激戰」『每週評論』第12号 轉載
- 3.9 張厚載（半谷通信）「学海要聞」『神州日報』
- 3.10 「北京大学謠言之無根」『晨報』
- 3.10 胡適「胡適教授致本日刊函」／胡適致張厚載君（半谷）信／張厚載君答胡適信『北京大学日刊』
- 3.11 胡適「胡適教授致本日刊函」／張厚載敬白『北京大学日刊』
- 3.16 「更正」『神州日報』
- 3.16 陳独秀（隻眼）「關於北京大学的謠言」『每週評論』第13号
- 3.16 二古「評林蛭廬最近所撰「荊生」短篇小説」『每週評論』第13号
- 3.18 「請看北京学界思潮變遷之近状」『公言報』 轉載『北京大学日刊』1919.3.21 轉載『新潮』第1卷第4号1919.4.1
- 3.18 林紓「林琴南致蔡鶴卿書」『公言報』 引車売漿之徒（蔡元培あて林紓書簡1）轉載『時報』3.21 『大公報』3.23-24 『新潮』第1卷第4号1919.4.1
「答大学堂校長蔡鶴卿太史書」『畏廬三集』1924
- 3.19 蔡元培「蔡元培致神州日報記者函」『北京大学日刊』
- 3.19-23 林紓「妖夢」『新申報』（3.18-22とするは誤り『林紓研究資料』85頁）
- 3.21 林紓「林琴南致蔡子民書」『時報』 轉載
- 3.21 蔡元培「（一）蔡校長致公言報函並附答林琴南君函」（3.18付）『北京大学日刊』／林琴南致蔡鶴卿書 引車売漿之徒 轉載『新潮』第1卷第4号1919.4.1
「蔡校長致公言報函並附答林琴南君函」
- 3.21 蔡元培「（二）蔡校長復張繆子君書」『北京大学日刊』／附録張繆子君函
- 3.23-24 林紓「林琴南与蔡子民書」『大公報』 轉載
- 3.24 林紓「林琴南再答蔡鶴卿書」『公言報』（蔡元培あて林紓書簡2） 轉載『大

- 公報』3.25
- 3.24 林琴南「母送児」(觀世白話新樂府)『公言報』 轉載天津『大公報』3.29
- 3.24 无妄「讀林氏書感言」『大公報』
- 3.25 蔡元培「蔡子民致公言報函」子民『新申報』
- 3.26 林紓「林琴南再答蔡鶴卿書」『新申報』『時報』
- 3.26 林琴南「日本江司令」(觀世白話新樂府)『公言報』
- 3.26 湯爾和の私宅において陳独秀の北京大学文科学長罷免を前倒して実行することに決める
- 3.26 魯迅「孔乙己」附記 『新青年』第6卷第4号1919.4.15(影印本の奥付は1919.9.1になっている)
- 3.26 傅增湘「傅增湘致蔡元培函」『蔡元培全集』第3卷285-286頁
- 3.28 林琴南「一見大吉」(觀世白話新樂府)『公言報』 轉載天津『大公報』3.30
- 3.30 陳独秀(隻眼)「林紓の留声機器」『每週評論』第15号「随感録」欄
- 3.30 魯迅(庚言)「敬告遺老」「孔教与皇帝」「旧戲的威力」『每週評論』第15号「随感録」欄
- 3.30 林紓、貴兼、鄭遂平「通訊」『每週評論』第15号
- 3.31 「本校布告」『北京大学日刊』 張厚載退学処分
- 4.1 蔡元培「蔡校長致公言報函並附答林琴南君函」『新潮』第1卷第4号 轉載
- 4.1 林紓「林琴南致蔡鶴卿書」『新潮』第1卷第4号 轉載
- 4.1 「關於北京学界思潮之辯論」『公言報』
- 4.1 「傳教育彈劾說之由来」『申報』
- 4.2 蔡元培「復傅增湘函」(傅斯年代撰)『蔡元培全集』第3卷284-285頁(3.26「傅增湘致蔡元培函」)
- 4.4 蔡元培らは、北京政府総統徐世昌によばれ北大新旧両派学者の衝突を調停するよう要望される。一説に政府は不干涉主義を言明した
- 4.5 林紓「腐解」『公言報』 轉載天津『大公報』4.8、10 『畏廬三集』
- 4.5 林紓「林琴南先生致包世傑君書」『新申報』
- 4.5 太上餘生投稿「新旧思潮」『順天時報』
- 4.6 陳独秀(隻眼)「婢学夫人」『每週評論』第16号「随感録」欄
- 4.8 北京大学教授会において、陳独秀の北京大学文科学長罷免を決定する(公式には大学改組)
- 4.10 「大学本科教務処成立紀事」『北京大学日刊』。大学による公式発表。前倒し

- 実行（北京大学教授会で陳独秀の1年間休暇が宣告されたというのが証拠資料はない）
- 4.12 「大学改組案提前実行」『申報』
- 4.12 林紓（畏廬）「贈張生厚載序」『公言報』 転載天津『大公報』4.13 『畏廬三集』
- 4.13 陳独秀（隻眼）「林琴南很可佩服」『每週評論』第17号「随感録」欄
- 4.13 特別附録 對於新旧思潮的輿論（1）『每週評論』第17号
 淵泉「警告守旧党」『晨報』[3.30] / 毋忘「最近新旧思潮衝突之雜感」『国民公報』 / 遺生「最近之學術新潮」『北京新報』 / 太上餘生投稿「新旧思潮」『順天時報』 [4.5] / 無記名「醞釀中之教育總長彈劾案」『順天時報』 / 冷眼投稿「新思想不宜遏抑」『順天時報』 / 隱塵「新旧思想衝突平議（一）」『民治日報』 / 住「新旧思潮平議（二）」『民治日報』 / 儀湖「林蔡評議」『民福報』 / 蘊巢「新旧之爭」北京『益世報』 / 無記名「論大学教員被擯事」『民国日報』 / 匡僧「為驅逐大学教員事鳴不平」『時事新報』 / 匡僧「大学教員無恙」『時事新報』 / 匡僧「威武不能屈」『時事新報』 / 裴山「新旧思潮之開始決闘」『神州日報』 / 平平「北京大学暗潮之感想」『浙江教育週報』第7年第5号
- 4.15 林紓（蠡叟）「父母唯其疾之憂」（勸孝白話道情）『公言報』
- 4.15 「北京大学与思潮問題」『順天時報』
- 4.23 林紓（蠡叟）「閔子騫蘆花故事」（勸孝白話道情）『公言報』
- 4.26 林紓（蠡叟）「曾皙事」（勸孝白話道情）『公言報』
- 4.27 特別附録 對於新旧思潮的輿論（2）『每週評論』第19号
 無記名「關北京大学新旧思潮之說」北京『国民公報』 / 無記名「社会的醒覺之曙光」北京『順天時報』 / 魯遜「学界新思想之潮流」北京『唯一日報』 / 遺生「時勢潮流中之新文學」『北京新報』 / 遺生「規勸林琴南先生」『北京新報』 / 蘊巢「再論新旧之爭」北京『益世報』 / 翰薊「學術与政治」北京『益世報』 / 志拯「思想革命中的北京大学」上海『中華新報』 / 志拯「誰的恥辱？」上海『中華新報』 / 祭安「遏止新思潮」上海『民国日報』 / 因明「对北京大学的憤言」成都『川報』
- 4 林紓「論古文白話之相消長」『文藝叢報』第1期

4.30 パリ講和會議。膠州湾租借地および山東省旧ドイツ權益の日本への譲渡を決定

5.4 北京の学生が山東問題に抗議し示威行動

-
- 6.11 陳独秀ピラをまいて逮捕
- 6.15 『毎週評論』の編集が胡適に交替。第26号は全部が「杜威講演録」第27号
(6.22)も同様
- 8.7-8 思孟「蔡元培伝」「息邪」欄『公言報』 父某, 以売漿為業。
- 8.12 魯迅(黄棘)「寸鉄」『国民公報』(原無標題) 思孟批判
- 8.12? 胡適(天風)「關謬与息邪」『毎週評論』第33号(表示は8.3) 思孟批判
- 11.1 魯迅(唐侯)「我們現在怎樣做父親?」『新青年』第6卷第6号
-

【注】

- 1) 林紓の経歴については、主として以下の文献による。張俊才「林紓年譜簡編」(薛綏之、張俊才編)『林紓研究資料』福州・福建人民出版社1983.6。以下、『研究資料』と称する。林薇「林紓伝」『林紓選集』(小説巻上)成都・四川人民出版社1985.12
- 2) 謝菊曾「《説部叢書》和《林訛小説》」(「涵芬楼往事」)『隨筆』第6集1980.2。鄭逸梅「林訛訳《茶花女遺事》及其他」(『書報話旧』上海・学林出版社1983.8)では、『林訛小説』第1集は59種、第2集は58種という(33頁)、100種をこえてしまい、奇妙だ。
- 3) 陳熙績「(歇洛克奇案開場)序」丁未(1907)冬月
- 4) 汲古書院の影印本では、なぜかしら第1巻第2号の奥付になっている。
- 5) 樽本「胡適は『老残遊記』をどう読んだか」で説明したことがある。『清末小説閑談』1983所収
- 6) 高平叔『蔡元培年譜長編』(上冊 北京・人民教育出版社1996.3。中冊1996.11)によると、蔡元培が北京大学校長に就任するよう発令されたのは、1916年12月26日だった(上冊629頁)。また、陳独秀の北京大学文科学長の発令は、1917年1月13日だ(中冊5頁)。それにともない、新青年雑誌社も北京に移転する。ただし、『新青年』奥付で「北京東安門内箭竿胡同九号/新青年雑誌編輯部」という表示に変わるのは第4巻第1号(1918.1.15)からである。藤田正典「新青年10年の歩み」(『新青年別巻』汲古書院1977.3)には、つぎのようにある。「彼(陳独秀)は1917年初め、北京大学校長蔡元培の招きにより北京大学文科学長になり、上海より北京へ移転した。これにともなって<新青年>の編集部も北京に移り、彼の周囲には進歩的知識分子が集まってきた。その1人に胡適がいた」2頁
- 7) 胡適「導言」『中国新文学大系』第1集建設理論集 上海良友圖書印刷公司1935.10.15/上

海文藝出版社影印2003.7。19頁

- 8) 鄭振鐸「導言」『中国新文学大系』第2集文学論争集 上海良友圖書印刷公司1935.10.15 / 上海文藝出版社影印2003.7。6頁
- 9) 張俊才「林紓年譜簡編」『研究資料』47頁、「林紓著訳系年」『研究資料』535頁
- 10) 楊聯芬『晚清至五四：中国文学現代性的發生』北京大学出版社2003.11。123頁。抄録改題『流動的瞬間 晚清与五四文学關係論』台湾・秀威資訊科技股份有限公司2006.6。66頁。張俊才『林紓評伝』（天津・南開大学出版社1992.3。249頁）は、1917年2月8日の上海『民国日報』だとする。しかし、題名の一部を「不当廢」と誤る。【総合版補記】本書所収「『林紓冤罪事件簿』」ができるまで、注3を参照のこと。
- 11) 史和、姚福申、葉翠娣編『中国近代報刊名録』福州・福建人民出版社1991.2。142頁
- 12) 齊藤少将とは、だれか。ひとつの手掛かりは杭州という地名だ。林紓が杭州に住んでいたのは、1898年から1900年にかけてのことだった。明治34 [1901] 年に少将となっている齊藤太郎がいる。林紓の杭州在住期間と時期的に少しズレがあるので、確定できない。その他の齊藤姓をみたが、該当する人物を探し当てることはできなかった。外山操編『陸海軍将官人事総覧（陸軍篇）』（芙蓉書房1981.9.1/1982.3.1第2刷）を参照した。中国社会科学院近代史研究所中国第二歴史档案馆史料編輯部編『五四愛国運動档案資料』（北京・中国社会科学出版社1980.2）に1917年10月付「日武齋藤為以砂易械及中日軍械統一致徐樹錚函」が収録されている。この齋藤少将と関係があるかどうかは不明。
- 13) 張元濟「東方圖書館概況・緣起（1926年）」『（1897-1992）商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1。21頁
- 14) 張樹年主編、柳和城、張人鳳、陳夢熊編著『張元濟年譜』北京・商務印書館1991.12。60頁。島田翰「韶宋楼蔵書源流考」（鄭元慶等『吳興蔵書録、韶宋楼蔵書源流考』上海・古典文学出版社1957.12）。なお、その金額は118,400元だとするものもある（徐雁『中国旧書業百年』北京・科学出版社2005.5。370頁）。
- 15) 洪越「五四文学革命的另一面 以林紓為中心」（『現代中国』第2輯2002.3。155頁）に初出の指摘があることに気づいた。林紓の該文は、天津『大公報』1917年2月1日付に掲載されている。注して、1917年2月8日付『民国日報』に転載しているが、転載の説明がない、とも。林紓の肖像を添えた「特別記載」だ。全文は、江中柱「《大公報》中林紓集外文三篇」（『文献』2006年第4期（総第110期）2006.10.13）にも収録されている。
- 16) 曾虛白主編『中国新聞史』台湾・国立政治大学新聞研究所1966.4初版未見 / 1977.3四版。275、325頁。方漢奇『中国近代報刊史』太原・山西教育出版社1981.6初版未見 / 1996.7四次印刷。714-716頁。方漢奇主編『中国新聞事業通史』第1巻北京・中国人民大学出版社1992.9。1057

- 頁。『中国近代報刊名録』が、これを採録しないのはなぜか。その理由は不明。
- 17) 方漢奇『中国近代報刊史』694頁
- 18) 鄭振鐸と商務印書館のかかわりについては次の論文がある。松村茂樹「王雲五と鄭振鐸 商務印書館史の一断面」『中国文化』漢文学会会報第52号1994.6.25
- 19) 魯迅「自序」『呐喊』新潮社1923.8影印本。 頁。魯迅と錢玄同の親しい交流は、姜德明「魯迅と錢玄同」(『書葉集』広州・花城出版社1981.5。143-176頁)に詳しい。
- 20) 北京魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅研究資料』9 天津人民出版社1982.1。102頁
- 21) 『每週評論』第4号1919.1.12影印本
- 22) 『錢玄同文集』第6巻書信 北京・中国人民大学出版社2000.8。18頁
- 23) 錢玄同「亡友劉半農先生」『世界日報・国語周刊』1934.7.21初出未見。沈永宝編『錢玄同五四時期言論集』上海・東方出版中心1998.10。378頁。また、『錢玄同文集』第2巻隨感錄及其他 北京・中国人民大学出版社1999.4。295頁
- 24) 魯迅「憶劉半農君」1934.8.1付。『青年界』第6巻第3期1934.10未見。『且介亭雜文』『魯迅全集』第6巻北京・人民文学出版社1981/1982北京第1次印刷所収による。71頁
- 25) 「趨時和復古」1934.8.13付(『申報』初出には日付なし)。『申報』「自由談」1934.8.15。『花邊文学』『魯迅全集』第5巻北京・人民文学出版社1981/1982北京第1次印刷所収。535頁。なお、参考までに嚴薇青著、沢本香子訳「劉半農と魯迅」(『中国文芸研究会会報』第161号1995.3.31)から引用する。「劉半農先生(1891-1934)が、上海からやってきて北京大学の予科で教えたのは、たぶん1916年のことだった。魯迅の回想によると、劉半農が北京大学に来たのは、彼が『新青年』に投稿したのが縁で、蔡元培あるいは陳独秀によって招かれたということらしい。彼は、北京到着後、授業を行なうほか積極的に『新青年』へ原稿を書いた。もっとも有名なのは、錢玄同が「王敬軒」という偽名で『新青年』に口語文を攻撃する手紙を書き、劉半農が痛烈に反駁するという「なれあいの手紙」である。これより陳独秀、錢玄同、李大釗、沈尹默、胡適などが交代で『新青年』の編集を担当した。／劉半農はかつて上海において鴛鴦蝴蝶派の『小説大觀』などの刊行物に「売花女侠」「鬚俠復讐記」「催租夫」などの小説を発表したことがある。使用した名前も上海派文人の色彩をおびた「伴儂」「半儂」であった。こちらはのちに「半農」とようやく改めたが、北京到着後もなお上海からひきずってきた才子佳人の思想をいくぶん持っていた」4頁
- 26) 沈尹默「魯迅生活中的一節」『文藝月報』1956年10月号(総第46期)1956.10.10。24頁。「我和北大」『文史資料選輯』61輯1979.4/1981.12第二次印刷/日本影印。朱洪『劉半農伝』40頁には香港『大公報』1951.12.20初出とする。張耀杰『歴史背後』は香港大公報1951.12.2とする。朱正「關於王敬軒」『魯迅回憶錄正誤(増訂本)』北京・人民文学出版社2006.10。

48-51頁。

同じく沈尹黙の回想「我和北大」(陳平原、夏曉虹編『北大旧事』北京・生活・讀書・新知三聯書店1998.1 / 2003.8北京第2次印刷。173頁)につぎのようにある。「『新青年』が北京で出版されたあと、かつてつぎのようなことがあった。錢玄同と劉半農は偽名で文章を『新青年』に発表し、林琴南の復古という謬論に反駁した。玄同と半農の筆鋒は鋭く、諷刺して嘲弄した(当時、儒教[孔家店]打倒のスローガンはすでに提出されていた)のだが、胡適は大反対で、「偽名でこの種の遊戯的文章を書くのは、まっとうな人がやることではない」と考えた。さらに半農が『新青年』をふたたび編集するのを許さず、彼がひとり編集しようとした。私は胡適にむかって「そんなことをやるな。やるなら私たちはみんな編集はしないし、いっそ独秀ひとりに編集させる」といった。周兄弟(樹人、作人)は胡適の態度に大いに反対して、「あなたが編集するなら、私たちは投稿しない」と胡適にいった。胡は手を引いた」。沈尹黙はこの出来事を紹介して胡適が梁啓超、林琴南の側についたと批判している。

- 27) 次の論文が参考になる。リディア・リウ著、中里見敬訳「『中国新文学大系』の成立」(九州大学大学院言語文化研究院言語研究会)『言語科学』第36号2001
- 28) (法)小仲馬著、林紓、王慶通訳『香鉤情眼』上下冊 上海・商務印書館1916.5 説部叢書3=5。デュマ フィス(ALEXANDRE DUMAS fils)の“ANTONINE”1849という。
- 29) その略歴を橋川時雄『中国文化界人物総鑑』(北京・中華法令編印館1940.10.25初版 / 名著普及会復刻1982.3.20。787頁)から引用する。「羅家倫 一八九五 - x 字は志希、浙江紹興の人。北京大学卒業後米国プリンストン大学、仏国パリー大学、独逸ベルリン大学、英国ロンドン大学に歴史及哲学を学ぶ。帰国後北京に於て月刊「文藝復興」の編輯長として白話文学に貢献、民国十五年に国立東南大学歴史教授、其の後国民政府中央法制委員会委員、中央党務学校副主任十七年に国立北京清華大学校長に任じ、二十年三月辞して国立武漢大学、中央政治学校等に教鞭を執り、国民党中央候補執行委員となり、二十一年八月南京中央大学長に任じ、牙齒専科学校長を兼任す、二十八年三月重慶第三回全国教育会議に出席。其の著書に「科学与玄学」(十六年商務印書館) 其の訳書に「平民政治的基本原理」(米P. S. Reinch 原著 十六年同上) 「思想自由史」(英 J. B. Buby 英原、著同上) など。また、以下の文章がある。劉敬坤「致力我国高等教育事業的羅家倫」宋嘉沛主編『民国著名人物伝』第4巻 北京・中国青年出版社1997.11。284-303頁
- 30) 「第7編旧小説的喪鐘」と題する項目に収録された。
- 31) ラインシュについては、以下の論文がある。藤岡喜久男「駐華米公使P.S.ラインシュ覚え書(一)」『北海学園大学法学会研究』第11巻第2号北海学園大学法学会1975.11.20。ただし、藤

岡論文は駐華公使時代についてのものだ。本稿とは直接には関係がない。

- 32) 「這種遺誤青年的書籍，這種陷害学子的機關，教育部能不從速取締嗎？」108頁。
- 33) 「政府也有干涉之說。民国五年范静生先生做教育總長的時候，曾經同內務部查禁這一類的雜誌小説數十種。我盼望現在各位当局留意点纔是」107-108頁
- 34) 梁容若「記范静生先生」(台湾『伝記文学』第1卷第6期1962.11.1)には、関係する記述はなかった。
- 35) 宋原放「近代出版大事記」宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3卷 武漢・湖北教育出版社2004.10。617頁
- 36) 劉再生『中国近代現代出版通史』第2卷 北京・華文出版社2002.1。97-101頁
- 37) 劉再生『中国近代現代出版通史』第2卷。1258-1264頁
- 38) 宋原放「近代出版大事記」。617頁。「[1916年]7月6日 北京政府內務部通知前已查禁的上海《民国日報》、《中華新報》、《民信日報》、《五七報》、《公論報》、《甲寅》雜誌、《正誼》雜誌、《愛國報》、《愛國晚報》、《救亡報》、《中国白話報》、《中華革新報》、《時事新報》、《共和新報》、《民意報》等報刊，予以解禁。」 / 「[1916年]7月16日 段祺瑞以大總統申令，廢止報紙条例」。また、沈渭濱主編『中国歴史大事年表・近代卷』上海辞書出版社1999.2。763頁。
- 39) 樽本「林訳小説冤罪事件の原点 鄭振鐸「林琴南先生」について」本書所収
- 40) 樽本「林訳スペンサー冤罪事件」本書所収
- 41) 樽本「林訳イプセン冤罪事件」、「林訳シェイクスピア冤罪事件」本書所収
- 42) 丸山松幸「解説」『清末民初政治評論集』中国古典文学大系第58巻 平凡社1971.8.30。529頁
- 43) 「(29) 民国改革の根本」『新支那』1916.6.30初出未見。小島麗逸編、藤原鎌兄著『革命揺籃期の北京 辛亥革命から山東出兵まで』社会思想社1974.10.30。94頁
- 44) 丸山松幸『五四運動』紀伊國屋新書1969.6.30。39-40頁
- 45) 中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編訳局研究室編『五四時期期刊紹介』第1集上冊 北京・生活・読書・新知三聯書店1978.11 / 1979.8北京第1次印刷。75頁。李大釗先生、魯迅先生と「先生(氏という意味)」をつける人々と、陳独秀、胡適、「桐城派的遺老」林紓というように呼び捨てにする人々に区別している。著者の下した評価がわかりやすい。そういう時代の著作物だ。
- 46) 前出『五四時期期刊紹介』第1集上冊。41頁
- 47) 陳独秀の地位については後述。李大釗は、1919年当時北京大学図書館主任だった。1920年、政治、経済学教授を兼任する。
- 48) 陳万雄『五四新文化的源流』三聯書店(香港)有限公司1992.5。31-42頁に北京大学教員一

覧がある。

- 49) 丸山昇「第3部中国文学」高橋徹、可知正孝、丸山昇著『世界の文学()』講座「文学・芸術の基礎理論」第3巻汐文社1974.7.1。192頁
- 50) 以上は、近代日中関係史年表編集委員会編『近代日中関係史年表』(岩波書店2006.1.25)による。
- 51) 宮尾正樹「林紓」『集英社世界文学大事典』4 集英社1997.7.25。735頁
- 52) 史和、姚福申、葉翠娣編『中国近代報刊名録』(福州・福建人民出版社1991.2。95-96頁)にある北京『公言報』は、1909年創刊のもの。
- 53) 以下のように説明されている。
- 方漢奇『中国近代報刊史』太原・山西教育出版社1981.6初版未見 / 1996.7四次印刷
268頁「(林白水)旋又自行辭職，改在袁世凱手下担任總統府秘書、參政院參政、直轄都督府秘書長等官職。繼而又恢復辦報。先後在北京創辦了《公言報》以及《新社会日報》」
744頁「1917至1918年他在北京創辦《公言^{ママ}日報》，自任主編」『公言日報』になっている。
- 方漢奇主編『中国新聞事業編年史』上 福州・福建人民出版社2000.9
810頁「(1916)9月1日 / 《公言報》在北京創刊。主筆林白水、王士澄、黃秋岳、梁鴻志等。該報鼓吹“武力統一”。是公認的安福系的言論機關」
905頁「(1920)7月8日 / 北京《公言報》刊載《請看曹錕謀叛之確拋》一文，指出近日政潮的焦點。又在將軍府會議未開前發表《段督辦之將軍閣大會議》消息，披露段祺瑞對時局的意見。8月9日被直系軍閥查封，該報原編撰人汪世澄被捕」
- 林慰君『我的父親林白水』北京・時事出版社1989.3
1916年『公言報』創刊。45頁
49頁「先父辦報，有兩個目的：一個是攻擊軍閥、貪官、汚吏与奸商，使他們的罪惡目的不能得逞。一個是代表人民，建議政府做對於人民有利的事，并代小民鳴不平」
51頁「他還是本着良心，對軍閥和政客，像当初抨擊清廷一樣的不客氣。因此在1920年7月，報館被軍閥派人砸毀，報紙也被迫停刊」
- 劉慶雲「林白水」『新聞界人物』4北京・新華出版社1984.8
- 54) 横山宏章「陳独秀」『近代中国人名辞典』霞山会1995.9.1。56頁。横山『中華民国 賢人支配の善政主義』(中央公論社1997.12.20中公新書1394)では次のように説明している。「陳独秀は北京軍閥政府にたいし、日本に屈して山東省利権を放棄しないこと、売国官僚の追放、集会・言論の自由の保障などを要求した「北京市民宣言」を用意し、みずから該場で「北京市民宣言」ピラを撒き、ついに警察に逮捕された。3か月の拘留後に釈放されたが、これを機に、北京大学の保守派は陳独秀を文科学長から解任した」(100頁)。基本的

な事実誤認があるようだ。陳独秀の北京大学文科学長解任は、逮捕前のことである。本文で「理解しやすい」と書いたが、これは私の誤解のようだ。

- 55) 「進徳会報告」(『北京大学日刊』1918.6.3)に「職員」として蔡元培、王建祖、温宗禹、夏元璠、陳独秀の名前があがっている。
- 56) 陳万雄『五四新文化的源流』31-32頁。なお、横山宏章『陳独秀』(朝日新聞社1983.5.20朝日選書116頁)に以下のような説明がある。「陳独秀は一九一七年十一月十三日に正式に北京大学文科学長に就任し、蔡元培の大学改革の片腕となった。文科学長であったが教授の肩書はなく、講演はおこなったが授業としての講義はしなかった。いわば行政職であった。北京大学には副校長のポストはなかったが、文科学長は校長の次のランクに相当し、事実上の副校長であった。大学評議会では、蔡元培が会長で、陳独秀は副会長であった。給与も、蔡元培が六〇〇円で最も高く、陳独秀は三〇〇元であった。図書館長の李大釗は二〇〇円で、図書館の補助員であった毛沢東はわずか八元であったというから、陳独秀がいかに知識人としては高いポストについていたかがわかる」。朱文華は、本文にあげた役職のほかに「北大学制改革機構負責人」を加える(『陳独秀評伝 終身的反対派』青島出版社2005.5第3版。71頁注4)。
- 57) 王楓「五四前後の林紓」(『中国現代文学研究叢刊』2000年第1期2000.2。249頁)は、「陳独秀を普通の教授にすることを決定した」と説明している。だが、ほかの文献と同じくその証拠を提出していない。
- 58) 山根幸夫『論集近代中国と日本』山川出版社1976.2.20。47頁
- 59) 北京・支那研究会編『最新支那官紳録』日本・富山房発売1918.8.20初版未見 / 1919.9.10三版。426頁
- 60) 劉寿林、万仁元、王玉文、孔慶泰編『民国職官年表』北京・中華書局1995.8 / 2006.11北京第2次印刷。173頁
- 61) 洪越「五四文学革命的另一面 以林紓為中心」164頁
- 62) 波多野乾一『現代支那』支那問題社、大阪屋号書店1921.1.30。93-94頁。同様のことを吉野作造が「北京大学学生騒擾事件に就て」(『新入』大正8年6月号1919.6.1。4頁)でのべている。
- 63) 石鍾揚『文人陳独秀 啓蒙的智慧』西安・陝西人民出版社2005.2。379頁
- 64) 周作人「一一二復辟前後(一)」『知堂回想録』上冊 香港・聴涛出版社1970.7。319頁
- 65) 小原正治「安徽派」『アジア歴史事典』第1巻(平凡社1984.4.1新装復刊)、小原「直隸派」同左第6巻、波多野善大『中国近代軍閥の研究』(河出書房新社1973.7.25) 狭間直樹『五運運動研究序説』(同朋舎出版1982.3.30)などを参照した。

- 66) 周作人「一一五蔡子民(一)」『知堂回想録』上331頁
- 67) 陳独秀「段派曹陸安福俱樂部」「隨感録(七三)」『新青年』第7卷第1号1919.12.1。それぞれ段祺瑞、曹汝霖、陸宗輿を指す。陳は彼らに反対であることをあからさまに書いている。五四以前から、またその後も反段祺瑞派の姿勢を堅持している。
- 68) 司馬長風『中国新文学史』上巻 香港・昭明出版社有限公司1975.1。54頁
- 69) 周作人「一二九每週評論(下)」『知堂回想録』下382頁
- 70) 周作人「一六六北大感旧録(十一)」『知堂回想録』下523頁
- 71) 周作人「一六六北大感旧録(十一)」『知堂回想録』下523頁
- 72) 『蔡元培年譜長編』中冊 北京・人民教育出版社1996.11。181頁。典拠の『湯爾和日記』は手稿という。
- 73) 沈尹默「我和北大」(陳平原、夏曉虹編『北大旧事』北京・生活・讀書・新知三聯書店1998.1/2003.8北京第2次印刷)がある。
- 74) 蔡元培「我在北京大学的經歷」『東方雜誌』第31卷第1号1934.1。陳平原、夏曉虹編『北大旧事』36頁
- 75) 沈尹默「我和北大」では、沈が蔡元培に陳独秀を紹介したことになっている。172頁。陳独秀と蔡元培の紹介については、陳万雄『五四新文化的源流』注20(48-50頁)がある。陳と蔡のふたりは、もともと知り合いだった。陳独秀は、つぎのように書いている。光緒末年のこと、爆弾テロを目的とした組織に加入して上海に住んでいたころ蔡元培もしょっちゅうやってきて爆弾の製造法を学んだ。陳独秀「蔡子民先生逝世後感言」蔡建國編『蔡元培先生紀念集』北京・中華書局1984.7。69頁
- 76) 『胡適全集』第24巻書信(1929-1943)合肥・安徽教育出版社2003.9。278頁
- 77) 『胡適全集』第24巻書信(1929-1943)281頁
- 78) 胡適の手紙を引用することで明らかにしている文献は次のとおり(網羅してはいない)。唐宝林、林茂生『陳独秀年譜』(上海人民出版社1988.12)96-97頁(姪女傷害には触れない)。しかし、黄艾仁「風雲变幻情不移 胡適と陳独秀の因縁際遇」(『胡適与中国名人』南京・江蘇教育出版社1993.5)では「些細なことに慎重でなく[不謹細行]」(66頁)と引用符を使用して意味ありげに、しかし極力筆を抑えて書いている。著者によっては、そのまま書くことがはばかれると感じたらしい。だが、数年後では違う。『蔡元培年譜長編』中冊181-182頁。任建樹『陳独秀大伝』(上海人民出版社1999.5)162-163頁(姪女傷害には触れない)。王楓「五四前後の林紓」『中国現代文学研究叢刊』249頁(姪女傷害には触れない)。石鍾揚『文人陳独秀 啓蒙の智慧』276-281頁(姪女傷害には触れない)。朱文華『陳独秀評伝 終身的反対派』109-111頁。朱洪『陳独秀与胡適』武漢・湖北長江出版集

団、湖北人民出版社2006.1。77-82頁（妓女傷害には触れない）。王福湘「陳独秀、魯迅家庭倫理及性愛道德的比較 “革命的前驅者”与“精神界之戰士”（之四）」ウェブサイト陳独秀研究 <http://www.chenduxiu.net>。張耀杰「北大進德会中の陳独秀」
[http://www.asiademo.org/gb/2001/](http://www.asiademo.org/gb/2001/11/20011124a.htm)

11/20011124a.htm。張耀杰は、陳独秀が妻の妹高君曼と同居し、故郷で非難がおこったことも書いている。張耀杰『魯迅と周作人』台湾・秀成資訊科技股份有限公司2008.1。傅国湧「改写歴史的1919年3月26日之夜」<http://boxun.com/hero/2006/fuguoyong/91.shtml>

79) 蔡元培「北大進德会旨趣書」『北京大学日刊』1918.1.19。「進德会啓事第四号」同7.6。高平叔編『蔡元培全集』第3巻北京・中華書局1984.9。124-128頁

80) 周作人「一六六北大感旧録（十一）」『知堂回想録』下525頁。周作人は、別の箇所と同様の文章を書いている。「一二二卯字号の名人二（二）」『知堂回想録』下356頁

81) 「進德会報告」『北京大学日刊』1918.6.3。『蔡元培年譜長編』中冊103頁

82) 夏浮筠はいつ理科学長をやめたのか。1919年3月はじめであったらしい。『蔡元培年譜長編』から関係の人名を引き抜く。1917年秋、北京大学に評議会が設立された。評議員は、校長蔡元培、文科学長陳独秀、理科学長夏元璫（浮筠）、法科学長王建祖、工科学長温宗禹、文本科胡適、章士釗、文預科沈尹默、周思敬、理本科秦汾、俞同奎、理預科張大椿、胡浚濟、法本科陶孟和、黄振声、法預科朱錫齡、韓述祖、工本科孫瑞林、陳世璫（『蔡元培年譜長編』中冊59頁）。1918年6月6日、蔡元培は、陳独秀、夏元璫、王建祖、温宗禹と連名で……（同上105頁）。4科学長のうちに夏浮筠がいる。11月5日、理科学長夏元璫が教授5年で国外考察の規程により外国へ（同上134頁）。『北京大学日刊』1918.12.3付に「夏元璫啓事」があり、パリに行くので郵便物はパリ中国使館へ転送してほしいという。同紙1919.1.15付に「夏学長告白」が掲げられ、理科学長の職務は秦景陽（秦汾の字）に代理してもらおうとある。代理だから正式な理科学長交代にはならないかもしれない。だが、夏は海外旅行中だから、秦は実質的な理科学長だろう。1919年3月4日、蔡元培は北京大学審計委員に推薦された教員に会議開催の通知を出している。朱錫齡、馬寅初、鄭寿仁、黄伯希、胡適、秦汾、張大椿らだ（『蔡元培年譜長編』中冊168頁）。ここには、当然ながら夏浮筠の名前が見えない。ただし、陳独秀の名前もないが彼は文科学長のままだ。4月8日、文理科各教授会主任および政治經濟門主任の会議を招集。参加者は、秦汾、俞同奎、沈尹默、陳啓修、陳大育、賀之才、何育杰、胡適ら。陳独秀は不参加（同上187頁）。もし、ここで秦汾が理科学長であったとすれば、この会議が文理科学長廃止だから、任期はせいぜい約3ヵ月ということになる。なお、“WHO'S WHO IN CHINA”Vol.3, p.89 の F. Chin（秦汾）の項目に、professor of mathematics and astronomy at the Government University at Peking

and also dean of the Science Department, 1915-19; とある。1915年からというのは教授のことで、理科学長は1919年を意味しているのか。詳細は不明。

- 83) 蔡元培「北京大学在専門以上各学校校長会提出討論之問題」『蔡元培全集』第3巻209-210頁。
『北京大学日刊』1918.10.30-31。『蔡元培年譜長編』中冊131-132頁
- 84) 「校長啓事」『北京大学日刊』1919.2.22。蔡元培「致北大各科学長教授会主任研究所主任函」『蔡元培全集』第3巻257-258頁。1919.2.21と誤る。『蔡元培年譜長編』中冊164頁
- 85) 陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典(全編増訂本)』杭州・浙江古籍出版社2005.1。620頁。王元化撰論、翁思再注跋「緒論：京劇と伝統文化」(翁思再主編『京劇叢談百年録』上 石家荘・河北教育出版社1999.12。20頁)注2に張厚載の略歴がある。なお、該書には『新青年』に掲載された張厚載の文章が収録されている。
- 86) 張厚載自身がそう書いている。蔡元培あて手紙。『北京大学日刊』1919.3.21付。また、五城学堂で林紆にならったことがある、と「林氏弟子表」10頁(朱義胄『林琴南先生学行譜記四種』台湾・世界書局1965.4再版(『林畏廬先生学行譜記四種』1949.4の影印))に見える。
- 87) 法科政治門張厚載「美与善」『北京大学日刊』1918.3.15-16、「希声室雑話」同紙4.9-11、13、15-16未完。
- 88) 張厚載の略歴と旧劇改良論争については以下の文章がある(網羅してはいない)。劉麗華「不愉快的師生論争 審視胡適与張厚載的一段公案」(『魯迅研究月刊』2005年第11期 2005.11.20)は、張厚載の意見は大体が正確であると評価する。波多野真矢「五四時期の伝統劇論争について」(『近代中国都市芸能に関する基礎的研究』平成9-11年度科学研究費基盤研究(C)成果報告論文集2001.3)。ウェブサイトで見える。宮尾正樹「新文化運動における張厚載と胡適 旧劇改良論争を中心に」(『日本中国学会報』第38集1986.10.1)は、張の著作に『聴歌想影録』(1941)を加えている(235頁。劉麗華は天津書局1940とする)。吉川榮一「五四時期の蔡元培」(東大中哲文学会『中哲文学会報』第9号1984.6.30)は、張を紹介して「張厚載は林紆の教え子であり(五城学堂時代)北京大学を攻撃した林紆に協力した、いわば内通者であった」(66頁)と書く。「内通者」とはスパイのこと。
- 89) 『錢玄同文集』第6巻書信。93-94頁。1919年2月の手紙だとしているが、1918年の誤りだろう。『新青年』第5巻第2号は、明日朝、陳独秀に送る。第3号(の原稿)は遅くとも9月15日には送付しなければならない、と書いているからだ。『胡適全集』第23巻書信(1907-1928)255頁に、この錢玄同書簡にあてた胡適の返答が収録される。これは1918年とする。
- 90) 『胡適全集』第23巻書信(1907-1928)271頁
- 91) 王楓「林紆 拼我殘年 極力衛道」陳平原、夏曉虹主編『觸摸歷史 五四人物与現代

中国』広州出版社1999.4。309頁による。王楓「五四前後の林紆」241頁

- 92) 『蔡元培年譜長編』中冊268頁。注7では、胡適の回憶によって1920年1月はじめだとする。胡適口述、唐徳剛注訳『胡適口述自伝』(合肥・安徽教育出版社1999.12)がある。陳独秀が文科学長をやめて、ピラまきで逮捕釈放後の状況を以下のように説明している(214-215頁)。胡適は華中のいくつかの大学で学術講演をするように依頼された。その時、デューイ教授が北京で講演するのに通訳をしなければならず、胡適は陳独秀を推薦してかわりに行ってもらう。陳独秀が武漢から北京にもどると、警察が訪問してきて保釈中の身だから北京を離れるばあいには警察に届けなければならないという。すきを見て陳独秀は北京を脱出し天津から上海へ逃亡した。「それより以後、陳独秀は私たち北大の同人とは別の道を歩むことになった。彼は上海で失業したので、私たちは彼に『新青年』の専任編集者になってもらった。この「編集」という仕事が、かれの唯一の職業になった」。王光遠編『陳独秀年譜』(重慶出版社1987.10)によると武漢での講演は1920年2月2日のこと。上旬に北京にもどり、中旬に天津へ。2月19日、上海に到着している(79、81頁)。胡適の説明では、彼の代理で陳独秀は武漢へ行ったという。陳が逮捕されたのは有名だから、武漢での講演時の肩書きは、「前北京大学文科学長」だったのだろうか。6月に陳独秀が逮捕されたとき、『晨報』(1919.6.13付)に「陳独秀被捕」と報道されている。肩書きは「前北京大学文科学長」だ(張重華、楊淑絹、王樹棣、李学文編『陳独秀被捕資料彙編』河南人民出版社1982.6。24頁)。
- 93) 『民国職官年表』40頁
- 94) 小島麗逸編、藤原鎌兄著『革命揺籃期の北京 辛亥革命から山東出兵まで』124頁。陳独秀の家産については、各論がある。ここでは、当時の藤原から見た陳独秀ということで、このままにする。
- 95) 『国故』社から『公言報』に抗議をしている。純粹に学生が発起したもので後ろに実力者がいるというのは事実と反する。その実力者と名指された劉師培も抗議をした。病気がちで客も断わっている。『国故』も文科の学生が発起したので、『新潮』雑誌と争ってなどいない(『蔡元培年譜長編』中冊177-178頁)。当事者は事実誤認だということかもしれないが、外から見れば新派と対立しているように見える。
- 96) とりあえず、以下に収録される(網羅してはいない)
- 「林琴南致蔡鶴卿書」北京『公言報』1919.3.18(初出未見)
 - 「林琴南致蔡鶴卿書」『北京大学日刊』1919.3.21
 - 「林琴南致蔡子民書」上海『時報』1919.3.21
 - 「林琴南与蔡子民書」天津『大公報』1919.3.23-24

- 「林琴南与蔡子民書」奉天『盛京時報』1919.3.27-28
- 「林琴南致蔡鶴卿書」『新潮』第1卷第4号1919.4.1 / 1919.12三版。721-724頁
- 「答大学堂校長蔡鶴卿太史書」林紓『畏廬三集』上海・商務印書館1924.7。26才-28才
- 「致蔡元培書」張若英『中国新文学運動史資料』上海・光明書局1934.4 / 上海書店1982.5影印
- 「附林琴南原書」『中国新文学大系』第1集建設理論集 上海良友圖書印刷公司1935.10.15 / 上海文藝出版社影印2003.7
- 「附林琴南氏致先生原函」孫德中編『蔡元培先生遺文類鈔』台湾・復興書局1966.8再版
- 「林琴南致蔡鶴卿書」石峻編『中国近代思想史資料 五四時期主要論文選』大安1968.4。9-12頁
- 日本語訳「林琴南書簡」『清末民国初政治評論集』中国古典文学大系第58卷平凡社1971.8.30。448-451頁
- 「致蔡鶴卿書」『文学運動史料選』上海教育出版社1979.5。139-142頁
- 「致蔡鶴卿書」『林紓研究資料』1982。86-89頁
- 「林琴南致蔡元培函」『蔡元培全集』第3卷1984。272-275頁
- 「附林琴南致蔡先生函」孫常煒『蔡元培先生年譜伝記』中冊 台湾・国史館1986.6。270-273頁
- 「致蔡元培書」周錦編著『中国現代文学史料術語大辞典』4 台湾・智燕出版社1988.10.19。3219-3225頁
- 「答大学堂校長蔡鶴卿太史書」『林紓選集』文詩詞卷1988。164-171頁
- 「致蔡鶴卿書」錢谷融主編『林琴南書話』杭州・浙江人民出版社1999.3。205-208頁
- 97) 『最近之五十年』上海書店影印1987.3 (出版説明に1922年2月初版本とあるが1923年の誤り) また、『晚清五十年来之中国』と改題影印した香港・龍門書店 (<1922年上海初版とする> 1968.9再版) 本がある。
- 98) 鄭振鐸「導言」『中国新文学大系』第2集文学論争集。7頁
- 99) 原文「哈徳」。これは「哈葛徳」の誤植。ハガードである。『蔡元培全集』第3卷270頁でも誤植のままになっている。丸山松幸は、スコットと翻訳する(ルビ省略。蔡元培、丸山松幸訳「『公言報』に呈し、あわせて林琴南氏に答える書簡」『清末民国初政治評論集』446頁。同氏訳「14林琴南氏に答える」西順蔵編『原典中国近代思想史』第4冊岩波書店1977.3.25。237頁)。「哈徳」ではスコットにはならない。勘違いだろう。
- 100) 『畏廬三集』を見ながら、林薇による注がついているので『林紓選集』文詩詞卷1988版を使用した。164頁。また、丸山松幸訳を参照した。以下同じ。

- 101) 李家驥、李茂肅、薛祥生整理『林紓詩文選』(北京・商務印書館1993.10. 3頁)の編者「前言」につぎのようにある。「林紓は白話文に反対していなかったばかりか、自分でも白話の詩詞を書いたことがあることがわかる。彼は、古文は廃止すべきではない、また古文と白話は併存して衝突しないことを強調した。白話文をうまく書くには、いくらかの古文の修養がどうしても必要だ。残念ながらこの観点は、当時のある人々[某些人]には重視されることがなく、彼について誤った認識を後の人にもたせることになった。これは実に悲劇である。五四新文化運動の時期に、形而上学的観点が、ある人々[某些人]の頭のなかで相当に嚴重であったことを説明している」3頁。2ヵ所に見える「ある人々[某些人]」に注目のこと。
- 102) 阮无名「八林琴南先生的白話文」『中国新文壇秘録』上海・南強書局1933.6影印本。該文には、胡適「林琴南先生的白話詩」(『晨報六周年紀念增刊』1924.12.1)を引用する。
- 103) 思孟「蔡元培伝」「息邪」欄『公言報』1919.8.7-8に「父某，以売漿為業」とあるらしい。つぎの文章を参照のこと。樽本「魯迅による林紓冤罪事件 「引車売漿者流」をめぐって」本書収録
- 104) 『蔡元培全集』第3巻268頁
- 105) 『蔡元培全集』第3巻271頁
- 106) 『蔡元培全集』第3巻212頁
- 107) 丸山松幸「14林琴南氏に答える 解題」(西順蔵編『原典中国近代思想史』第4冊。230頁)につぎのようにある。「この文章は、保守派からの攻撃に対して、あえて相手の土俵にのぼってこれを論破し、新文化運動のために一步も譲らぬ気概を示したものである」
- 108) 『蔡元培全集』第3巻271-272頁
- 109) 本稿執筆後、『大公報』掲載の全文が江中柱「《大公報》中林紓集外文三篇」(『文献』2006年第4期(総第110期)2006.10.13. 84頁)に掲載されていることを知った。
- 110) 『蔡元培年譜長編』中冊181頁に引用されている。ただし、少しの誤植と一部省略がある。
- 111) 金林祥『思想自由兼容并包 北京大学校長蔡元培』済南・山東教育出版社2004.11. 207頁
- 112) 任建樹『陳独秀伝 從秀才到総書記』上(上海人民出版社1989.9(下は唐宝林著)22頁)では「同父異母の妹妹」とある。また、王光遠編『陳独秀年譜』(満年齢表示。18頁)でも、高大衆の「同父異母妹」と書いてある。特にそう示すことには意味が込められているのだろう。
- 113) 鍾揚「《義門陳氏宗譜》中の陳独秀及其家族」光明網<http://kaoshi.gmw.cn/2007.4.10/31/content117177.htm>。朱文華『陳独秀評伝 終身的反対派』(1頁)では、『江州義門陳氏宗譜』と

- なっている。安慶図書館に所蔵されるという。
- 114) 清水安三「陳独秀」『支那当代新人物』大阪屋号書店1924.11.1。211頁
- 115) 王暘『簾卷西風：林琴南別伝』北京・華夏出版社1999.1。228頁に引用される。ただし、誤植がある。
- 116) 李家驥、李茂肅、薛祥生整理『林紵詩文選』。天津『大公報』に転載されている。3月29日付が「母送兒」、3月30日付が「一見大吉」である。なお、該書には、『公言報』に掲載された全体題名「勸孝白話道情」の4.15「父母唯其疾之憂」、4.23「閔子騫蘆花故事」を収録する。同じく4.16「曾皙事」があるというが未見。
- 117) 「5 “出乎意表之外”，這是模仿林琴南文章中的錯誤辭句，原作“出人^{ママ}意表之外”。当時林琴南和別出一些反对白話文的人，常說新文學者所以提倡白話是因為自己写不通古文的緣故，因而當時主張白話的人也常引用他們写的不通的古文句子，以諷刺他們的提倡古文。283頁」『魯迅全集』第1卷北京・人民文学出版社1958.10/1961.8北京第3次印刷。537頁
- 118) 孫常煒『蔡元培先生年譜伝記』中冊 台湾・国史館1986.6。283頁
- 119) 徐道鄰『徐樹錚先生文集年譜合刊』台湾商務印書館1962.6
- 120) 李宗一「徐樹錚」李新、孫思白主編『民国人物伝』第1卷 北京・中華書局1978.8。204-207頁を参照した。
- 121) 徐道鄰『徐樹錚先生文集年譜合刊』171頁
- 122) 徐樹錚を紹介し、林紵との関係を考察する論文に、劉克敵「晩年林紵与新文學運動」『文藝理論研究』（1996年第4期（総第87期）1996.7.25）がある。林が徐に要求して北京大学を迫害しようとしたとするのは、その証拠がなく軽率な見方だと書いている。
- 123) 周作人「一一七蔡子民（三）」『知堂回想録』上336頁。
- 124) 1919年3月5日付『晨报』による。2日にわけて掲載したものを『每週評論』第12号（1919.3.9）に再録。
- 125) 鄭振鐸「導言」『中国新文学大系』第2集文学論争集。7頁
- 126) 王楓「林紵 拼我残年 極力衛道」310頁につきのようにある。「これは「復王敬軒書」から発展させてきた戦法である」。王楓「五四前後的林紵」242頁
- 127) 周作人「一一七蔡子民（三）」『知堂回想録』上336-337頁
- 128) 石鍾揚『文人陳独秀 啓蒙的智慧』274頁
- 129) 繆子「畏廬師近事」『礼拜六』第153期1922.3.19。39頁
- 130) 張純「訪書偶記2」『清末小説から』第60号2001.1.1。16頁。李伯元の作品だと紹介がある。参考までに「元緒公」部分を引用する。「《老蟹老甲魚合傳》一文中提到的“老甲魚”，亦為上海地區的妓寮隱語。妓院中人稱妓女的男僕為“相幫”，為“龜奴”，為“鼈腿”，為“硬殼甲魚

”(或“硬殼魚”)或“十三塊”、或“胡椒眼”、或“橄欖頭”、或“元緒公”。“老甲魚”者，妓寮年老體弱之男僕也。這一稱呼在清末時期較為流行。《游戲報》曾經發表過一篇文章，名為《硬殼魚》，其文曰：“某大姐偕其母傭工於某妓房中。妓家有甲魚一頭，年甫弱冠而有宋朝之美。大姐垂涎已久，每欲竊一嚙而碍於耳目衆多，又有阿母管束，苦於無下箸處。遂日益憔悴，舉家咸莫喻其故……”可見其文中的“甲魚”，非甲魚也，實男僕也、相幫也。晚清妓寮隱語甚多，南北各派互不相同。此中人語，不足爲外人道」

- 131) 王楓「林紓 拼我殘年 極力衛道」(陳平原、夏曉虹主編『触摸歷史 五四人物与現代中国』314-315頁) 王楓「五四前後的林紓」(251頁)にもとづいた。劉麗華「不愉快的師生論争 審視胡適与張厚載的一段公案」(『魯迅研究月刊』2005年第11期2005.11.20。50頁)も同文。
- 132) 王楓「五四前後的林紓」251頁によると、上海『亦報』(1951.4.15)に掲載された余蒼「節録張謇子来信」だという。「節録」となっているが、実際は「転述」とも。
- 133) 周作人「林琴南的“蠡叟叢談”」「紅樓内外」の一部。『知堂乙酉文編』香港・三育圖書文具公司1962.3。99頁。陳平原、夏曉虹『北大旧事』392-393頁
- 134) 張俊才は、つぎのように書いている。「今にいたるまでの中国現代文学史の著作は、林紓および五四時期の新旧思潮の争いについての記述と評価については、すべて「書き直し」する必要がある。」「勝てば官軍、負ければ賊軍[勝王敗寇]」の論理で記述されているという意味だ。張俊才「“悠悠百年，自有能辨之者” 重評林紓及五四新旧思潮之争」『河北師範大学学报(哲学社会科学版)』2005年第28卷第4期(総第117期)2005.7.15
- 135) 1915、1916年に関しては、『林紓研究資料』42、43頁および『林琴南先生学行譜記四種』の「貞文先生年譜」巻2の20、23頁に見える。

林訳シェイクスピア冤罪事件

『清末小説』第30号(2007.12.1)に掲載。初出には、副題を「林紘を罵る快樂 番外編」とつけた。該論文を書いている途中で新しい発見をした。その部分を引き抜いたから「番外編」である。調べていくと別の事例も冤罪であった。かといって「番外編」を続けるわけにもいかない。副題をつけるのはこの1論文のみにした。本書収録にあたって副題を削除する。また、少しの文献を加筆している。類似の研究論文ばかりで、列挙するにしてもほとんどきりが無い。が、林訳に言及する文献で関係のありそうなものをあえて収録した。定説が長期間にわたり堅固に信じられたことを知るためには、量で示すのがわかりやすいからだ。【統合版補記】2007年以降の文献は基本的に言及していない。

林紘が漢訳したシェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)作品について、大きな「欠陥」があると今まで言われてきた。だが、それは事実無根である。ゆえに冤罪事件だ。私は、本稿において証拠を提出して論証する。

そもそも、林紘の冤罪事件など、読者は聞いたことがないはずだ。私が本稿ではじめて明らかにすることだからである。この冤罪事件は、研究者のだけひとりとして、いままで指摘したことがない。冤罪事件だという認識すらない。従来の林紘評価を、その根底から覆すものになるはずだ。

まず、順序として、林紘の翻訳に関して従来からある見方、認識について説明することからはじめる。

林紘は、外国語を理解しなかった。外国語ができる人物と組み、口述翻訳をもとにして林紘が古文で筆記する。共同作業で外国文学の翻訳を行なった。有名な

ことだ。翻訳形態のひとつだということができる。

ただし、林訳小説について研究者が説明するばあい、必ずといっていいほどあげる負の側面、いわゆる欠陥がある。彼の漢訳を最終的に正に評価するにせよ負に評価するにせよ、まず、前提として翻訳そのものに大きな欠陥があると認識するのだ。

林紓を研究する林薇がその著書『百年沈浮 林紓研究綜述』(1990)でまとめているから、それによって紹介しよう。

1 林訳小説の欠陥

欠陥は、箇条書きになっている。内容を要約して示す。

- 1．翻訳したものが一流の名著とは限らない。2 3流の、はなはだしくは価値のない多くの作品を翻訳した。恋愛、探偵などの通俗小説をいう。
- 2．小説と戯曲を混同した。たとえばシェイクスピア、イプセンの脚本(『ヘンリー4世[亨利第四]』、『幽霊[群鬼]』など)を小説の形式で出し、見る影もなく変えてしまった。
- 3．児童の読物を筆記小説にしてしまった。たとえば『詩人解頤語』、『秋灯譚屑』など。
- 4．原作を任意に削除した。たとえば『ドン・キホーテ』を『魔侠传』に、『九十三年』を『双雄義死録』に翻訳したが、薄い小冊子に変えてしまった。
- 5．誤訳が多い。^{*1}

1にいう価値のない作品とは、たとえばライダー・ハガード、コナン・ドイルの著作を指す。私がそうしているわけではない。中国では、従来からそういうことになっている。原作評価については、私にいわせれば意見が分かれるところだ。あくまでも、中国では、ということ念頭にお願いしたい。

2もよく知られている。林紓は、シェイクスピアの戯曲を小説に書きかえた。本稿は、これを取り上げて問題にする。これこそが、林紓の冤罪事件にほかなら

ない。

3と4は、原作内容の要約化とでも言いかえることができる。

5の誤訳は、翻訳にはつきものであり林訳だけとは限らない。

これらをひとまとめにして、林訳は、原作に忠実ではない、ということになる。

林薇は別の箇所において、『魔侠传』『梅孽』『双雄義死録』およびシェイクスピアの作品をわざわざ取り上げ、次のように書いている。

原本の選択がよくなく、書きかえが多く、省略も過多で、成功しているとはいえない。しかし、結局のところ国民にこれらの世界名著を最初に紹介したわけで、読者の目を十分に満足させたのである。^{*2}

林薇は、翻訳史上においてはたした林紘の役割をもとより高く評価している。だが、その彼女にして林訳の欠陥についての見解を紹介するだけで反対していない。また、異論を提出してもいない。それどころか、上に引用したように、専門家である林薇も、林訳の欠陥については認めているのだ。当然ながら、冤罪事件が存在するなどとはまったく考えてはいない。

林薇のこの著作が発表された1990年の中国において、欠陥についての認識は定説となっていた。現在も変わりはない。この定説が立論の前提にもなり、記述が展開していく。

長い年月を経て徐々に形成され定着した説かといえ、そうではない。1918年には、劉半農によって基本的な観点が、すでに提出されている。林訳小説の欠陥理由である。

劉半農による批判 提起

劉半農の林訳批判は、『新青年』第4巻第3号(1918.3.15)の「文学革命之反響」欄に掲載された。

劉半農と錢玄同のふたりで実行した「自作自演の論争」、俗にいえば「なれあい芝居」、私が見るところの「八百長試合」である。

文学革命派は批判をくりひろげていたが、相手側は誰も相手にしない。そこで、

林紘を古文派の首領と見定めた。彼らの攻撃目標に林紘が選ばれた、というだけのことだ。逆にいえば、林紘が外国文学を古文で翻訳して当時の文芸界に多大の影響力を持っていたことの証拠でもある。

林紘を誘い出すために一芝居打った。銭玄同が架空の王敬軒になりすまし、古文派の林紘を絶賛する。それが「王敬軒君来信」だ。劉半農が逐一反論して林紘批判をくりひろげる（もとは無題。「答覆王敬軒先生」とよんでおく）。そういう形になるように筋書きを定めた。文学革命派が理論的に勝利するよう、最初から仕組んである。

わざわざ文章を捏造し論争を演出しなければならなかったほどに、銭玄同、劉半農ら文学革命派は手詰まり状態だったことがわかる。

問題は、劉が行なった林訳批判の中身なのだ。

劉半農は、大要次のように述べる。

林紘が翻訳した小説は「娯楽本 [閑書]」である。少しの文学的意味もない。

理由1：原稿の選択がよくない。価値のない作品を翻訳している。

理由2：誤りが多すぎる。原本と対照すると削り改め原本の面目を失っている。

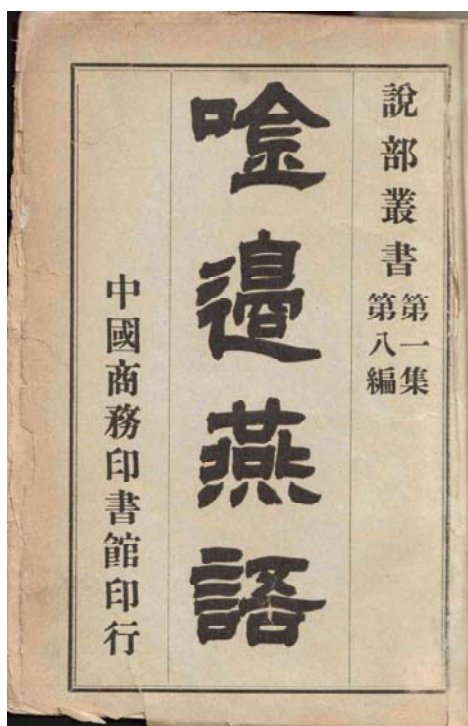
理由3：林氏がやっているのは「娯楽本」であって、文学的意味のあるものではない。著書と訳書は根本的に異なる。314-315頁

劉半農が林訳の欠陥理由としてあげたシェイクスピアに関する例は、あまりにも有名だろう。

すなわち、林訳『吟辺燕語』(1904)は、シェイクスピアの戯曲を小説に書きかえて翻訳してしまった。劉半農はこう指摘した。戯曲と小説の区別もつかないデタラメな翻訳だといっているのと同じことだ*3。

劉半農の林紘批判は、最初の時点で根本的なところで間違っている。ここではっきり書いておく。

劉が証拠としてあげた林紘+魏易訳『吟辺燕語』は、ラム姉弟の『シェイクスピア物語』が原作だ。その事実を劉半農は知らなかった。彼は、林紘が、シェイ



『吟邊燕語』各種

クスピアの原作から直接翻訳し、その際、戯曲を小説に変形させたと考えた。誤解だ。つまり、劉半農は間違いに基づいて林紘を批判したことになる。彼が、もし、原作がラム姉弟のものであると知ったうえで林紘を批判したとしたら、悪質である。

『吟辺燕語』について、林紘が脚本を小説化^{*4}したというのは確かに誤認だった。今から見れば、劉半農の批判は無効であるのは明らかだ。

だが、当時、それを指摘する人はいなかった。劉半農の誤りをいって林紘を弁護する人はあらわれなかったのだ。そればかりか、戯曲の小説化という部分のみがひとり歩きしはじめる。それを導いた人がいたからだ。シェイクスピアの戯曲全体に適用され、現在にいたるまで訂正されることがない。定説となっている。

銭玄同と劉半農が火をつけた林紘批判が、以後、継続して行なわれることになった。劉の文章は、文学革命の旗を掲げて旧文人を批判した代表的なものとしてのちの資料集に収録される。各種文学史においても言及されることになる。彼の論文が、ある種の権威をともなって読まれたのも無理はない。林訳作品に関する負の評価がついてまわるのだ。

総合的に負の評価に傾きながら、それでも、時折、正の方向にも振れていく。多くの欠陥を抱えてはいるが、当時の文芸界に与えた影響は無視できない。これが正の評価だ。いや、そうかもしれないが、林訳小説は根本のところ欠陥を抱えている。評価は簡単に負にもどる。正負のどちらかを重視するかによって、その評価は論者により微妙に変化する。この変形が現在にいたるまで継続されているといってもいい。その際、林訳の欠陥についての定説は、定説ゆえに揺れることがない。これが、林訳評価の基本構造である。

劉半農が指摘した林訳の欠陥は、彼の誤解にもとづいて提出されたものであった。しかし、『新青年』の次号に掲載された胡適の文章が、大筋において林訳の欠陥を追認した。

胡適による批判 追認

胡適は、西洋文学の翻訳状況について不満を感じ、新たな提案を行なった。そのなかのひとつが、白話を使えという主張だ。原作が韻文の戯曲であれ、白話の

散文に翻訳すべきだ、という。その理由は、古文で翻訳すると原文のよさは必ず失われるからだ、とのべる。その例を林紘の翻訳で示している。

胡適「建設的文学革命論」『新青年』第4巻第4号1918.4.15。305-306頁（該当頁数を示す。以下同じ）

「古文を用いて翻訳すると、必ず原文のよさを失ってしまう。たとえば林琴南の「其女珠，其母下之」というのは早くからお笑いぐさになっているから論じる必要もない。数日前、探偵小説『圓室案』を読むと、そこには探偵が「かっとなって大いに怒り、袖を払って立ち上がった[勃然大怒，払袖而起]」と書いてある。この探偵は、ケンブリッジ大学の広袖の制服を着ていたのであろうか！このように訳すなら、訳さない方がましだ。また、林琴南はシェイクスピアの戯曲を記述体の古文に翻訳している！これは、本当にシェイクスピアにとっての大罪人であり、その罪は『圓室案』の訳者を上回るものだ」

『圓室案』の訳者は、商務印書館編訳所となっている。林紘ではない。

胡適は、作中で外国人であるはずの探偵が中国人の立ち居振る舞いをすることに訳したのは間違いだ、と批判する。そうかもしれない。だが、訳者にしてみれば、決まり切った表現の方が、中国人読者には理解しやすいと考えたのではないか。小説の大筋に関係のない部分であれば、それに類することはありうる。

問題であるのは、林紘が訳して表現したという「其女珠，其母下之」の方だ。「お笑いぐさ」だと胡適は切って捨てる。だが、この断片を見て、どこがお笑いなのか、私にはわからない。だいたい、中国語の意味が伝わってこない。前後の文脈もなく、この7文字を見るだけでその意味するところを理解せよ、というのは無理ではないか。だが、胡適の書き方からすると、『新青年』の読者であれば、すぐに了解する事柄であるらしい。

さがせば、確かに先例がある。胡適の文章の1年前のことだ。同じ『新青年』に掲載された劉半儂「我之文学改良観」(第3巻第3号1917.5.1)にそれがある。胡適は、これを踏まえているから余分な説明をしていない。劉の原文を示す。

近人某氏訳西文小説、有『其女珠、其母下之』之句。以珠字代『胞珠』、

転作『孕』字解。以下字作『墮胎』解、吾恐無論何人、必不能不觀上下文而能明白其意者。……7頁

「近人某氏」とは、林紘を指す。なぜそれがわかるかといえば、引用した字句が彼の翻訳した『巴黎茶花女遺事』に見えるからだ。

劉半農は、つぎのように説明する。「珠」は「胞珠」から転じて「妊娠する」だし、「下」は「墮胎する」を意味する。そうすると、みなが物笑いにしたという箇所は「その娘は妊娠し、母親はそれを墮胎させた」という意味になるらしい。劉半農は、「誰でも上下の文章を見なければならず、そうしてこそその意味を理解することができるだろう」と書いている。「お笑いぐさ」だと表現したのは、前後関係がなければ、誰も理解できないことを意味するのだった。

当時、中国の知識人に大いに歓迎された漢訳『椿姫』の最初の部分に、その語句はある。小説の話し手が、今では年老いたある娼婦について説明する箇所だ。その娼婦の若いころに勝るとも劣らない器量よしの娘ルイズが身ごもり、母親の命令で墮胎の手術を受けたのち、結局、死亡してしまう。林紘の漢訳を見ると上に引用したそのままの箇所はなく、「女接所歡，媼，而其母下之」となっている。この下部4文字は、劉半農の書くとおりだ。しかし、上半分が異なる。林訳の「媼」が妊娠するという意味だ。この文字について、もしかすると劉半農が勘違いしたのかもしれない。そうであれば（林紘の原文と一致しないからそうに違いない）、誤解による批判になるのではなかろうか。少なくとも、あげた例文の上半分については、誤解だといっておく*5。

それはさておき、胡適が書いた「これは、本当にシェイクスピアにとっての大罪人〔這真是 Shakespeare 的大罪人〕であるという箇所に注目していただきたい。もとの戯曲を小説化した、といて林紘を「大罪人」だと断定している*6。

林訳シェイクスピアについて、劉半農が最初に批判して、胡適が追認した。

さらに後を追うのが鄭振鐸だ。彼は、劉半農の誤解をひそかに修正する。しかも、胡適の追認を背景にして、林訳がシェイクスピア戯曲を小説化したことを認めて批判を加えた。それを決定的なものとする。

鄭振鐸による批判 確定

劉半農の文章につづいて重要なのが鄭振鐸の論文だ。1924年10月9日に死去（享年七十三）した林紓を追悼し、林訳小説を解説して詳細だからである。

鄭振鐸の論点はふたつある。重要な意味をもった箇所だから少し長いが翻訳する。

鄭振鐸「林琴南先生」『小説月報』第15巻第11号1924.11.10。9頁（傍線省略）

「私たちはこの統計（注：林訳の原作者、原作名、と翻訳名を羅列したもの）を見たあとで、当然、林琴南氏にとっても感謝をする。なぜなら、これら多くの重要な世界名著を私たちに紹介してくれたからだ。その一方で、彼の労力の大半が空費されたことを残念に思わざるをえない。なぜなら、彼が翻訳した156種の作品のなかで、わずかに60、70種類が著名で（そのなかには、なおハガード、コナン・ドイルのふたりの2流の小説が27種も混ざっている。だから156種のうち重要な作品は3分の1にもならない）、そのほかの書はすべて2、3流の作品だから訳す必要もなかった。我們見了這個統計之後，一方面自然是非常的感謝林琴南先生，因為他介紹了這許多重要的世界名著給我們，但一方面却不免可惜他的勞力之大半歸於虛耗，因為他在所訳的一百五十六種的作品中，僅有這六七十種是著名的，（其中尚雜有哈葛德及科南道爾二人的第二等的小説二十七種，所以在一百五十六種中，重要的作品實尚占不到三分之一，）其他的書却都是第二三流的作品，可以不必訳的」

林紓の翻訳を、一応はもちあげる。だが、批判することも忘れない。文学革命派の人々は、ハガード、ドイルなどの大衆小説を嫌っていたとわかる。

つぎの文章が、本稿で問題にする箇所だ。

「もうひとつある。これも林氏は彼の口述翻訳者によって間違わされたのだろう。小説と演劇は、その性質はもともとまったく違う。しかし、林氏は、多くのとてもすばらしい脚本を小説に翻訳してしまった。多くの叙述を加え、多くの対話を削除し、原本とはまったく違う本に変えてしまったのだ。たとえばシェイクスピアの脚本『ヘンリー4世 [亨利^マ第四]』、『リチャード2世 [雷差得紀]』、『ヘンリー6世 [亨利^マ第六]』、『ジュリアス・シーザー [凱徹遺事]』およびイプセンの『幽霊 [群鬼 (梅孽)]』などすべて彼は翻訳して別の本に変えてしまっ

た 原文の美しさと風格、および重要な対話は完全に消滅してしまった。これはまったくチャールズ・ラムが『シェイクスピア物語』で行なったことになったもので、なぜ「原著者シェイクスピア」「原著者イプセン」と書かなくてはならないのか。林氏はたぶん小説と戯曲の区別があまりはっきりしていなかったのだろうが 中国の旧文人は小説と戯曲の区別をつけることができず、たとえば『小説考証』という本は、小説といいながら無数の伝奇をそのなかに含ませている。しかし、口述翻訳者は彼になぜいわなかったのだろうか。還有一件事，也是林先生為他的口訳者所誤的：小説与戯劇，性質本大不同。但林先生却把許多的極好的劇本，訳成了小説 添進了許多敘事，刪減了許多對話，簡直變成与原本完全不同的一部書了，如莎士比亞的劇本亨利第四^{ママ}雷差得紀亨利第六^{ママ}凱徹遺事以及易卜生的群鬼（梅孽）都是被他訳得變成了另外一部書了 原文的美与風格及重要的對話完全消滅不見，這簡直是步武却爾斯、蘭在做莎氏樂府本事又何必寫上了『原著者莎士比亞』及『原著者易卜生』呢？林先生大約是不大明白小説与戯曲的分別的 中国的旧文人本都不会分別小説与戯曲，如小説考証一書，名為小説，却包羅了無數的伝奇在內 但是口訳者何以不告訴他呢？」

林訳『吟辺燕語』の原作はラム姉弟の作品だ、と鄭振鐸は知っていた。ゆえに、『吟辺燕語』には触れず、そのほかの戯曲題名を掲げたと推測できる。つまり、鄭振鐸は、批判の根拠を部分的に修正したのである。彼は、また、そうすることによって劉半農をかばった。やり方は巧妙である、といわなければならない。

引用文の「チャールズ・ラムが『シェイクスピア物語』で行なったことになったもの」という書き方が、シェイクスピア作品を小説化したことを意味する。その大筋は変わらない。しかし、その根拠となるものを別の作品に差し替えた。これ以後、林訳批判にさいして『吟辺燕語』は具体例から外されることになった。

鄭振鐸らが林紘を批判する理由のひとつは、くりかえすが、シェイクスピア原作である「ヘンリー4世」ほかの戯曲を勝手に小説化したことだ。

鄭振鐸は、口述翻訳した共訳者の責任に少しは転嫁している。だが、これはいわば言葉のアヤである。いくら改組後の『小説月報』とはいえ、商務印書館の刊行物だ。商務印書館の営業に多大の貢献をした林紘の追悼文なのだから、それく

らのアイサツは鄭振鐸でもする。外国小説の翻訳シリーズ「説部叢書」に林訳は収められている。そればかりか、林訳だけを引き抜いて「林訳小説叢書」を2集で全100種も刊行しているくらいだ。商務印書館は利益を追求している会社である。売れなければそのような特別扱いはしない。

鄭振鐸は、後に「清末翻訳小説对新文学的影響」という文章で同じことを簡潔に書いている。その箇所を翻訳して示す。

林紘 字は琴南。本人は外国語を理解しなかったが、彼の複数の友人が外国語を理解し、口述翻訳によって林氏が記録した。当時、このようにして翻訳した作品は多かった。彼は「翻訳の王」と称せられ、『椿姫』よりはじまって全部で165種の小説を翻訳した。彼には大きな欠陥があって人に批判されたが、それはすなわち原作の内容および形式に頓着しなかった〔不顧原作的内容及形式〕ことである。彼が翻訳して比較的よいのは Scott と Dickens の作品であるが、関係のない作品も翻訳している。^{*7}

短文だからこそ、鄭振鐸の従来のが、それも彼が核心だと考える部分が、直截に露呈しているということができよう。「形式に頓着しなかった」というのが、戯曲を小説化したことを意味している。鄭振鐸は、林訳の欠陥はここにこそあると主張するのである。

林訳評価の方法には、ひとつの形がある。確認のためにその構造を再度書いておく。

すなわち、林訳にまわりつく戯曲の小説化という欠陥に関しては、研究者の全員がその事実があると認定している。これは研究者の共通認識である。林訳は、その根底に動かしがたい欠陥をかかえていると認めただうえで、最終的な評価について正と負の変化をつける、という構造なのだ。

戯曲の小説化に関して、これは冤罪事件だ、というのが私の見解である。だが、一般の研究者にはまったくその認識がない。長年にわたってその認識がないからこそ、これは大きな問題となる。

林紘批判の論拠、すなわち翻訳の欠陥について、その成立過程にひとつの筋道

があることが理解できるだろう。劉半農に源を発し、胡適が継承追認して鄭振鐸が決定的なものにした。これを把握しておけば、林薇をへて現在まで一直線につながっていることがわかる。

あとは、論拠を同じにした論文が、あげるだけでもわずらわしいくらいに大量生産された。今も書かれて発表されている。

時代によって林紘の評価が正負の間を揺れるのは、先に説明した通りだ。ただし、何度もいうように、前提となる林訳の欠陥、すなわち本稿で問題にする戯曲の小説化　林紘は戯曲と小説の区別もつかないほどに愚昧である、について研究者の認識は一致している。例外は、私の知る限り、ない。欠陥について触れない、という文献もある。それらについては、本稿では基本的にとりあげない。

発表される研究論文の多くは、林訳の欠陥のひとつである小説化について、先行論文をそのまま引用する。ことばを少し変えて追認する。研究界全体で、見解が統一されており、まことに気味が悪いくらいに見事というほかない。以下で、乱れぬ統一ぶりについて年を追って紹介する。私が見落としがあるにしても、ここにあげるのはかなりの量になる。あらかじめ書いておくが、いまから紹介する各論文について、私は批判しているのではない。事実として、そういう文章が発表されていることを見ておきたいだけだ。本稿が結論においてそれらとは違うことを示すためでもある。

のちの研究者が、定説をどのようにあつかったのか、私には興味がある。言及する文献にできるだけ当たった。引用をして確認しておきたい。だが、同じ記述がつづいて退屈に感じられる人がいるかもしれない。そう思われる読者は、「3 林訳シェイクスピア歴史劇の底本」に飛んでいただきたい。

2 定説がくり返される

林紘の漢訳を説明して、研究者はきまりきったようにその欠陥を指摘する。「外国語を理解しない翻訳者」という語句が論文名になるし、時には副題に添えられることもある。その呼称に林訳の評価を代弁させるのだ。つまり、でたらめな翻訳者、またその翻訳作品であるという意味を言外に込める。

林訳の欠陥を数え上げる多くの論文を紹介するまえに、阿英の記述について説明する必要があるだろう。なにしろ、『晩清小説史』という専門著作を、しかも1937年という早い時期に刊行している。劉半農、胡適、鄭振鐸らが行なった林紘批判のあとで、阿英が林訳をどのように評価しているかをまず見ておきたい。

阿英『晩清小説史』上海・商務印書館1937.5。277頁 / 北京・作家出版社1955.8。182頁。

「残念なことに、林氏本人は英語を理解せず、著書の選択から口訳まですべてを別の人に頼った。しかもその人は全面的に信頼できるわけではなく、ゆえに彼の翻訳には、原本の選択が妥当でないもの、原意を誤解しているという類の欠陥が生じている。しかし、それで彼の翻訳が作家と読者にあたえた広大な影響を隠すことができるものでは決してない。彼は中国の知識階級を西洋文学に接近させ、少なからぬ第1流の作家を認識させ、彼らを西洋文学から学習させるようにしたし、それで本国文学の発展を促進したのである」

これを見れば、阿英は、林訳の正の側面に重点をおいて解説していることがわかる。翻訳の欠陥については、わずかに原本の選択の不適當さ、誤訳しかあげていない。

劉半農、胡適、鄭振鐸らによる強烈な批判があることを、阿英が知らないわけがない。だが、清末小説について豊富な資料と知識を持っていた彼だからこそ、清末民初時期における林訳のはたした重要な役割を理解していた。阿英は、林訳の欠陥を前面に押し出すことはあえてしなかった、と私は解釈する。ただし、はたしてそれでよかったかどうかは評価がわかれるところだ。欠陥を認めて明記しながら、それでも林訳には価値があったという書き方も、当然できるからだ。

本稿で問題にするシェイクスピア作品の小説化については、阿英は言及しない。だいいち、該書第14章で解説する翻訳小説については、彼が「創作より翻訳のほうが多い」と主張するわりには紙幅の割き方が不足している。なによりも、当時あれほど盛んに出版されたコナン・ドイルのホームズ物語にはまるで興味を示さない。つまり、触れなくなかったらしい。林訳に関して詳細に説明する余裕もなかったと思われる。もっとも、本稿で主としてあつかう林訳シェイクスピアの歴

史劇は、発表が1916年だから『晩清小説史』の範囲外である。こちらの方が、阿英の言及がない理由なのだろう（【統合版補記】本書所収「阿英による林紘冤罪事件」を参照）。

シェイクスピア戯曲の小説化について阿英が言及しなかったことは、のちの論文に影響をあたえている。つまり、阿英『晩清小説史』に依拠して書かれた論文は、自動的にシェイクスピア戯曲の小説化に触れないということだ。本稿では取り上げなかったが、これは、かなりの数にのぼる。

清末小説研究には阿英の記述が不可欠だと考えるから、彼の林訳に関する該当箇所を紹介した。阿英だからこそ、清末小説における林訳の重要性を指摘することができた、とくり返す。その評価のしかたは、劉半農、胡適、鄭振鐸らに比較するとかなり慎重であったと私には思える。

だが、阿英ではない人々にとっては、林訳の欠陥は当たり前のようにして批判的になった。

順序が逆になったが、陳子展の文学史からはじめる。

陳子展『中国近代文学之變遷』上海・中華書局1929.4 / 1931.8再版上海書店影印1982.12。145頁 / 上海古籍出版社2000.12。87-88頁

「(著名作家を紹介したことは容易なことではなかった)しかし、多くの小説のなかでただ40、50種がすばらしい名著にすぎず、そのほかはみな23流の作品で多くの精力を費やして翻訳するものではなかった。ゆえに多くの人が彼のために残念があったのだ。彼自身は原文を理解せず、訳本の選択は口述翻訳者の考えに頼っており、ゆえに少なからずバカを見たのである。また、彼の訳本には原文を削除し、あるいはもとの意味を変更するなどしているが、この誤りはおそらく大半は口述翻訳者によるものであろう」

説明の口調は、どこかで見たことがあるような気がするだろう。それもそのはず、「本節は、鄭振鐸「林琴南先生」を参考にした」(146頁)とはっきり書いてある。シェイクスピア原作の小説化について陳子展はのべていない。だが、鄭振鐸の文章によっている限り、その考えから自由であるはずがない。それほどまでに鄭振鐸の指摘はのちの研究者に影響をあたえた、ということでもある。今後も、

同様の文章をくりかえし目にするようになるだろう。

譚正璧編『中国文学進化史』上海・光明書局1929.9.20。331頁

「林氏は原文を理解せず、自分で原本を選択することができなかったから、上にかかげた作品を除いては大部分が価値のない第23流の作品であった。多くの貴重な時間を浪費したのは、残念なことだ。また、林氏は小説と脚本の区別がわからず、多くのすばらしい脚本を小説に訳し 多くの説明を加え、多くの対話を削除し改め、原本とはまったく異なる書に変えてしまった」

林紓が翻訳した原著者、題名などを掲げる。紹介する内容は、鄭振鐸の文章をそのまま引き写しているといっている。

(曾)虚白編、蒲梢(徐調孚)修訂『漢訳東西洋文学作品編目』真美善書店1929.9.28。
94頁

該書は翻訳目録である。作品に編者が注をほどこすことは、原物で確認していることを証明するためだ。大きさ、頁数などの客観的な記述であれば、問題はない。だが、主観的な説明になるとやっかいになる。

「亨利第六遺事」、「亨利第四紀」、「雷差得紀」、「凱撤遺事」の4作品名のうしろに「文言改訳」と書いている。その意味は「改訳[為小説]」、小説に改訳したということだ。この小さな箇所にも、鄭振鐸による指摘が明らかに露呈している。注釈をつけ加えたのは徐調孚だと思われる。なぜなら、もとになった目録、すなわち(曾)虚白「中国繙訳欧美作品的成績」(『真美善』第2巻第6号1928.10.16)には、注などついていないからだ。徐調孚がやらなければならなかったのは、必要事項である発行年月日を調べて補筆することだったといわなければならない。説明は余計だった。

池田孝「林琴南先生と曼殊大師 中国文人の先覚者」『伝記』創刊号1934.10.1。
74-75頁

「2 小説と戯曲の混同……有名な戯曲を小説体に翻訳し、多くの叙事を付け加へたり、対話を削除したりして、原文と似てもつかないものにしてある場合が

ある。例へばセクスピアの『亨利第四』、『雷差得訳』、『亨利第六』、『凱撤遺事』及びイブセンの『梅葉[孽]』(群鬼)等が小説に近いものに訳出されてをるのは大に遺憾である。これ一にその錯誤の咎は口語[訳]者にあるのであつて、外国語は矢張り立派に出来たいものであると痛感せざるを得ない」

口述訳者の責任にしている。鄭振鐸の名前は出していないが、そのまま引用したとわかる。

次は、寒光の専門著作である。

寒光『林琴南』上海・中華書局1935.2。83-84頁

単行本で出版された最初の専門著作だと思う。林訳小説のはたした功績について力をこめて顕彰する。

だが、シェイクスピアの「亨利第四紀」「雷差得紀」「凱撤[徹]遺事」「亨利第六遺事」をかかげて「以上の4種はいずれも小説に改訳したもの」と注釈をつけている。口述訳者の陳家麟を紹介して、「シェイクスピアの脚本を小説に翻訳し、児童のための物語を筆記に翻訳したのもこの君の奇妙な業績だ！」(69頁)と「！」付で書く。林紓だけの責任ではないといいたいらしい。この部分は、寒光「近代中国繙訳家林琴南」(『新中華雑誌』第2巻第7期文学転号1934.4.10)においてすでに見えている。林紓を擁護する寒光ではあるが、戯曲の小説化については事実として認めざるをえなかったとわかる。

呉文祺「林紓翻訳の小説該給以怎樣的估価？」鄭振鐸、傅東華編『文学百題』

上海生活書店1935初出未見 / 香港・古文書局影印1961.6再版。447-448頁 / 上海書店影印1981.6。447-448頁

「3 脚本を小説に誤訳してしまった 林氏はシェイクスピアの「リチャード2世」、「ジュリアス・シーザー」、「ヘンリー4世」、「ヘンリー6世」およびイブセンの「幽霊」を完全に記述体の古文に翻訳した。おそらく、口述翻訳者が本の大意をのべただけで、戯曲と小説の違いを林氏に知らせなかったためであろう」

呉文祺も寒光と同様に、林訳を高く評価する。しかしながら、やはり欠陥があ

ることに言及しないではいられない。上に引用した小説化以外には、1に選択の不的確を指摘し、2に任意の削除をいう。いずれも、口述翻訳者の責任にしている。

その一方で、戯曲の小説化には触れない専門書も出版されている。

朱羲胄「春覚斎箸述記卷三」『林畏廬先生学行譜記四種』上海・世界書局1949.4初出
未見/改題『林琴南先生学行譜記四種』台湾・世界書局1965.4再版。之ニ20頁
シェイクスピア作品4点を項目に掲げる。

「雷差得紀 Richard II」、「亨利第四紀 Henry IV」、「亨利第六遺事 Henry the Sixth」、「凱徹遺事 Julius Caesar」だ。

いずれも、林紘が陳家麟と一緒に訳述したと説明する。さらに、掲載雑誌を『小説月報』あるいは商務印書館の単行本だと述べて詳しい。だが、奇妙なのは、著者名の漢字表記を「英国莎士比亞 W.Shakespeare」としておりすべて実際とは異なるのだ。このばあい「亜」はいらぬ。また、「亨利第五紀 Henry Ⅴ」の掲載は『小説世界』第12巻第13号と記すが、第9-10期が正しいのではないが。

朱羲胄が、これらのシェイクスピア作品について漢訳がどのようになっているのかを解説しない。『吟辺燕語』を説明し、原題を“Tales from Shakespeare”と表示しながら「原書はチャールズ・ラム著であり、シェイクスピアとするのは誤りであるともいう。詳細は不明」(之ニ32頁)と書いている。『吟辺燕語』を見ればラム姉弟の原作であることはすぐにわかるはずだが。

ふたたび、林紘は小説と戯曲の区別がつかない、とくり返す文章を紹介する。

宋雲彬著、小田嶽夫、吉田巖邨共訳『中国文学史』創元社1953.7.15。165頁

「林紘は詩歌は別とし、シェクスピアなどの西洋劇の脚本も翻訳している。しかし彼は小説と劇の区別がつかず、シェクスピアの「ヘンリー四世」、「リチャード二世」、「ヘンリー六世」や、イブセンの「幽霊」などをも、みな小説体に翻訳したので、戯曲の面白味は完全に抹殺されてしまった。またその当時は西洋の文学史を研究する人はまだ極めて少なく、林紘のために口訳する人も、西洋文学に対しては、十分に理解していなかつたのであつた。わが国の古い文学者たち

は、元来小説と戯曲の区別はつかずにいたのだが、これは時勢の然らしめるところで、われわれは必ずしも林紘を責めるにはあたらないのである」

翻訳のもとになった書籍は未見だ。日本で翻訳されているところからも、日本の学界にある程度の影響力があつたと思われる。

次に、ある書目に出会う。かすかといえ、ほんの注釈にすぎない。だが、こまかな箇所だからこそ定説がそ知らぬ顔をして露出する。

戚煥垣同志補充書目、蒲梢「漢訳東西洋文学作品編目 一九二九年三月止」
張静廬輯註『中国現代出版史料甲編』北京・中華書局股份有限公司1954.12上海初版。320頁

「亨利第五紀 莎士比亞著 林紘訳」のあとに「文言で散文体に改める[文言改為散文体]」と見える。

この『漢訳東西洋文学作品編目』は、張静廬が上記資料集に収録したときにある変更を意図的に加えた。もともと「虚白原編、蒲梢修訂」とあつた曾虚白の名前を削除したのだ(蒲梢は徐調孚のこと)*8。

そのことと上記のシェイクスピア原作についての補遺は、関係がない。わずか7文字の注釈がなにを表現しているか。いうまでもなく林紘による小説化を意味しているにほかならない。劉半農から胡適と鄭振鐸を経て確立されたこの考えは、こういう小さな箇所にも表現されている。

実藤恵秀、実藤遠共著『中国新文学発展略史』三一書房1955.10.30。51頁

「文学は林紘によって翻訳せられた。ほんやくとはいっても、留学がえりの青年の口訳をきいて、桐城派の名文につくったものである。だから劇も物語体になっていて、原文のスタイルはつたえてないが、とにかく、これによって、西洋にもすぐれた文学のあることを知らせたのであつた」

「劇も物語体になっていて」という箇所が本稿に関係する。シェイクスピアの戯曲を小説に書きかえたという意味だ。

復旦大学中文系1956級中国近代文学史編写小組編著『中国近代文学史稿』北

京・中華書局1960.5。采華書林影印1962.2.15。286頁

「ふたりが合作するというこの方法は、その数が少ないわけでもなく、当時の条件下では免れにくい奇形の翻訳方法だった。訳本は原作に比較して、遺漏、省略、加筆という現象が普通にあり、『ドン・キホーテ』のような大作が薄い小冊子に訳されるだけだったり、シェイクスピア、イプセンの戯曲（たとえば『ヘンリー4世』『幽霊』）が小説の形式で出現するなど、見る影もなく変えてしまった」

「ドン・キホーテ」をあげる最初になるか。言葉遣いからして先行論文を引用してすませている。

後には、まさか、と思うような記述も出てくるから奇妙だ。

孔立「林紓和“林訳小説”」『光明日報』1962.8.30初出未見。『中国近代文学論文集』（1949-1979）小説巻 中国社会科学出版社1983.4。641頁

「林紓は翻訳するのが速かった。嚴復のように慎重ではなかったから、いくつかの訳文も仔細に推敲することはなかった。ゆえに、少なくない誤解、遺漏、あるいは削除書きかえという欠点があった。ひどいになると戯曲を小説に翻訳したりした」

定説通りにこう書いたかと思うと、それがこうじて別のところではおかしなことを筆にのせる。すなわち、「林訳小説」のなかで当時影響の最も大きかったものに『巴黎茶花女遺事』があるが、これはフランスの作家小デュマの名著である。もとは脚本であった。林紓は最初に小説という形式で中国語に翻訳し中国の読者に紹介したのだ」（639頁）と説明する。たしかに小デュマは、自作を脚本にもした。だが、順序が逆なのだ。孔の説明には、首をひねらざるをえない。シェイクスピア作品にあるのだから小デュマ作品もそうだと思ったのか。孔立はなにか勘違いしている。

今泉潤太郎「林琴南 翻訳活動と評論活動を通して」『愛知大学文学論叢』第26輯1964.2.5。55頁

「文学史に多少とも知識があればこのような飛躍した考えはでてこないであろう。これが「亨利第四^マ」、「雷差得紀」においては、戯曲を全く別の小説として

訳しあげるといふ離れ技をやつてのけることにまでなる」

日本人の書いた専論としてはかなり早い時期のものに属する。副題にあるように、林紘の翻訳活動と文学革命期の評論活動に触れる。前者が進取的革新的で、後者が退嬰的保守的であるのを「清末啓蒙期知識人の一典型像を林琴南にみることができる」とむすぶ。林紘には西欧文学史に知識もなく、戯曲を小説にしてしまった。

戈宝権「莎士比亚的作品在中国」『世界文学』1964年5月号（総131期）1964.5.20。
140頁

「そのち林紘と陳家麟は、さらにシェイクスピアの戯曲5種類について、もとづいた事柄を文言を用いてまとめて述べた。その中の4種類、すなわち『リチャード2世 [雷差徳紀]』、『ヘンリー4世 [亨利第四紀]』、『ジュリアス・シーザー [凱徹遺事]』は1916年の『小説月報』第7巻第1-7期に発表され、『ヘンリー6世 [亨利第六遺事]』はその年の4月に単行本となり「説部叢書」のひとつにおさまった。『ヘンリー5世 [亨利第五紀]』は林氏の遺訳となって1925年第12巻第9-10期の『小説世界』に発表された。これら数種の訳文は、シェイクスピア原著の粗筋を保っているだけで、しかも小説の形式を採用したため、当然のことながらシェイクスピア戯劇作品の真の面目を見いだす手だてがなくなった」

やや複雑な書き方になっている。シェイクスピアの原著を小説化したと戈宝権も考えた。だから、シェイクスピア劇のもととなった物語を林紘らが再話したといたいわけだ。戈宝権ほどの人であっても定説を疑うことを知らない。

曾錦漳「林訳小説研究(上)」『新亞学報』第7巻第2期1966.8.1。243頁

「シェイクスピアの作品は、ジュリアス・シーザー、リチャード2世、ヘンリー4世、ヘンリー6世など数種を林紘は翻訳しているが、同じく、もとの詩劇形式を散文小説の形式に改めている。ゆえに、林紘はふたりの英国の大文豪（注：もうひとりにはスペンサー Edmund Spenser）を紹介しているが、彼の翻訳は原著をうわべだけ改めて、本来の風貌を失ったのである」

「林紘訳品表」（230頁）にも「原本為戯劇訳成小説体」と注釈をつける。林訳

研究の専門論文においてくり返し記述されると、定説であることを再確認するだけになる。

増田渉『中国文学史研究』岩波書店1967.7.25。214頁

「だがこのようなこと（注：戯曲を小説として訳した）は、口訳者の罪というよりは、林紘自身の翻訳家としての態度に係わる問題であったのではなかろうか。というのは彼の翻訳という行為の根底には、面白く読ませる、あるいは読物を提供するということが第一に考えられていたのであって（ハッガードの通俗的小説やコナン・ドイルの探偵小説が量的にみて一番多く紹介されていることでもそれは知られる）、彼ははじめから「文学」に対する忠実な態度をもっていたのではなかった。中国の小説に対して、これまで人々が抱いていた娯楽性の要求ということに焦点を合わせて、せいぜい在来の中国のものには殆んど見られなかったスケールで展開する西洋小説の伝奇性をもってこようとしただけで、基本的にはやはり在来の中国の小説家の態度を一步も出なかったことに帰せられる。このことは彼の翻訳した原作品とその作者を見ただけで、およそ見当はつくと思うが、そのような態度であったからこそ、原文の大幅な刪削や、甚しきに至っては戯曲を小説化するというようなことでも平然と行われたのだと考えられる」

増田渉のこの部分は、鄭振鐸の記述を紹介して書かれている。

「甚しきに至っては戯曲を小説化するというようなことでも平然と行われたのだと考えられる」と書くところに、林訳に関する増田の評価を読みとることができる。決してほめてはいない。林紘は戯曲を小説化した、と信じているのだ。

倉石武四郎『中国文学講話』岩波書店1968.11.20。岩波新書（青版）696。216頁

「いかにも林紘は西洋文学を紹介しましたが、それはまったく古文の形をもちいており、紹介とはいっても自分で原文がよめるわけではなく、英語やフランス語のよめる人をそばにおいて口頭で翻訳させ、それを古文になおしたため、内容もかなりかわっており、誤訳も相当あったのですが、こうした中途はんばな改革者がやがて反動化するという、おもしろい実例になったわけです」

「内容もかなりかわっており」という箇所が、戯曲の小説化を含んでいると判

断する。「中途はんぱな改革者」「反動化する」という表現にも、倉石の林紘に対する負の評価を見ることができよう。

細谷草子「新時代への啓示（翻訳小説の様相）」内田道夫編『中国小説の世界』評論社1970.12.10。282頁 / 1989.4.30三刷

「……実は林紘が翻訳した作品の大部分は、ハッガードやコナン・ドイルのような通俗作家の作品で占められている。したがって、林紘はこれほど多数の作品を訳したにもかかわらず、名作と言えるものは、わずか四十数種で全体の三分之一にすら満たない。／このようなことになった原因は何よりも、林紘自身が外国語ができず、共訳者の口訳に頼って訳述を進めねばならなかったことにあった。原文を読めない林紘は、翻訳すべき作品の選択をも共訳者にゆだねなければならなかったのだが、林紘に協力した共訳者の多くは、各国の文学史についての知識も、文学に対する理解力も十分でなく、たまたま目についておもしろそうだと感じた作品を翻訳していただけだった。はなはだしい場合には、児童むけの物語を一篇の小説として訳したり、西洋の戯曲と小説の相違を知らなかったためか、シェイクスピアの『ヘンリー四世』やイプセンの『幽霊』などの戯曲を小説の形で訳してしまったりしているという。／言うまでもないことだが、林紘の翻訳は原文に忠実な逐語訳ではない。ストーリーは変えていないけれども、細部の叙述はかなり大胆に省略したり、改めたりしている。それらの省略や改変によって、西洋の事情にうとかった当時の読者が作品に親しみやすくなるという効果はあっただろうが、林紘自身の西洋文学への理解が底の浅いものだったために、原作の味わいが失われ、ただストーリーだけが伝えられる結果となることも、往々にして避けられなかった」

中国の研究をそのまま下敷きにした記述だということができる。無理もない。林訳小説を原書で読むことは、当時の日本ではほとんど不可能であったからだ。該書は、漢訳された（内田道夫編、李慶訳『中国小説世界』上海古籍出版社1992.7）。

陳敬之「林紘」台湾『暢流』第44巻第1-4期1971.8.16-10.1初出未見。薛綏之、張俊才編『林紘研究資料』福州・福建人民出版社1983.6 中国現代文学史資料

彙編（乙種）。346頁

「1、翻訳は第1流の作品ばかりとは限らない。/ 2、小説と脚本を混同した。/ 3、児童読物を筆記小説と考えた。/ 4、訳文は原書と一致しているとは限らない」

言いまわしを少し変えただけで、従来 of 定説をくり返す。

任訪秋「林紓論」『開封師院学報』1978年第3期初出未見。薛綏之、張俊才編『林紓研究資料』376頁。任訪秋『中国近代文学作家論』鄭州・河南人民出版社1984.3。222-223頁

「林訳の最大の欠点は、彼が外国語を理解せず、他人が口述するのに頼ったため、原作にたいして十分には忠実でなかったことだ。内容からいえば削除が多いばかりではなく、作品の体裁においても改変をしている。脚本を小説に翻訳したように、原作との違いはさらに大きくなってしまった。たとえばシェイクスピアのいくつかの脚本、イブセンの『幽霊』（訳名『梅孽』）などは彼の翻訳によって、まったく別の本に変化してしまい、そのため原書の風格はほとんど完全に失われてしまった」

定説に従っているだけだが、ここまで批判すると、論文の後半部分で正の評価をくだすのは力業にならざるをえない。

曾憲輝「林紓伝」『福建師大学報』1981年第2期初出未見。複印報刊資料。薛綏之、張俊才編『林紓研究資料』6頁

「林紓は外国語を理解しなかったため、翻訳は別の人が口述するのに全面的に頼った。原著について厳格な選択を行なう方法がなかったから、23流の作品を多く翻訳し、少なくない貴重な時間を浪費したのである。訳文についての書きかえ、訳し間違い、はなはだしくは自分の文章をつけ加えたなど非難される箇所は非常に多く、ときにはすばらしい脚本を小説にして翻訳してしまったこともある」

これも林紓についての専門論文である、と強調しておく。脚本を小説化した、と確信をもって述べて疑うところがない。曾憲輝は、のちに専著を刊行した

(『林紓』瀋陽・春風文藝出版社1999.1。挿図本中国文学小叢書91)。こちらでは、小説と戯曲の区別をつけない(30頁)、と触れるにとどまる。

商務印書館編集部「出版説明」(英)蘭姆著、林紓、魏易訳『吟辺燕語』北京・商務印書館1981.10。1頁

「林紓本人は外国語を理解せず、他人の口述にたよって翻訳を進めたから、訳文は各種の欠点を免れなかったが、しかし、ひとりの古文家として、原著の風格を会得するのがうまく、訳筆は真に迫り流暢で、……」

1981年、商務印書館は、嚴復訳8種類と林紓の翻訳10種類を復刻した。ふたりの業績を顕彰するためであるのはいうまでもない。その解説の一部分を上を示した。

私が問題だと思うのは、顕彰を目的とする文章であるにもかかわらず、「訳文は各種の欠点を免れなかった」と記述せざるをえないという事実なのだ。商務印書館の編集部が、わざわざ戯曲の小説化を含んだ各種の欠点に言及するのは、それが学界の定説であるからだ。そうでなければ、誰が批判のこぼれを口にするとだろうか。

この新しい「林訳小説叢書」を編集したのは、潘安栄だと説明がある。その彼が、編集の過程で集めた大量の資料にもとづいて書いたのが「林訳小説及林紓其人」(『語文教学与研究』1982年第1期初出未見/宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第2巻武漢・湖北教育出版社2004.10。66-81頁)だ。林紓没後、彼についての評価が、あるものは比較的公平だし、あるものは批判だけ、またあるものは彼の業績についてかなり低いことをいう。

1924年から数えれば新しい「林訳小説叢書」の発行は57年目になる。半世紀以上も経過すれば、冷静に評価する必要があるという意識もでてこよう。該史料の編集担当である汪家熔は、この点を重視した。寒光、鄭振鐸、錢鍾書らの文章がすでにあるが、潘安栄の論文だけを特に収録した理由である。

潘は、林訳の優れた点と欠点をふたつともに取り上げる。公平に評価したいという意欲のあらわれだ。欠点として、誤訳、訳しもれ、削除などが相当に多いことをいう(76頁)。しかし、それは当時のおいてはしかたのないことだった、と弁

護する。そこまではよろしい。ただ、不思議なことに、鄭振鐸があれほど声をはりあげて批判した戯曲の小説化については、潘は無視するのである。正負ともに視野にいれながら、公平に評価することの必要性を指摘する潘安栄だ。その彼が、小説化という点については、無視して沈黙を守る。不自然である。戯曲の小説化については、弁護の余地がないと考えたか。説明がないからわからない。私には納得のいかない書き方である。公平な評価を心がけて、結果として公平にならなかった。なぜなら、問題を恣意的に取捨選択したからだ。

潘が故意に無視した戯曲の小説化であった。彼の論文が発表された以後も、従来通りそのことを指摘して林訳批判の理由にするのだ。

馬泰来「林紓翻訳作品全目」銭鍾書等著『林紓的翻訳』北京・商務印書館1981.11。67頁

目録であって論文ではない。だが、比類なき詳細さで圧倒するこの目録は、研究者にとっては基本資料のひとつである。ゆえに、大きな影響力をもっていると断言できる。たとえば、徐鵬緒、張俊才『中国近代文学研究概論』（天津教育出版社1992.5）において、馬泰来の目録は、高い評価を与えられている（440頁）。

その馬泰来が、シェイクスピアの林訳を5種類あげて「これと以下の4種は、実はシェイクスピアの脚本を元にした物語である」と注釈をつけた。原作が脚本であるのを小説に書き直した、と馬も考えているのだ。次の論文においても変化はない。

馬泰来「林訳閑談」『書林』1982年第1期1982。31頁

「林紓の翻訳について人々が言うとき、いつも彼はシェイクスピアの作品を翻訳したと説明する。このいい方は正しくはない。なぜなら、シェイクスピアが書いたのは戯曲であるが、林紓が翻訳したのは筋書き抜粋にすぎないからだ」「林紓と陳家麟が翻訳した『リチャード2世』、『ヘンリー4世』、『ヘンリー6世』、『ジュリアス・シーザー』および『ヘンリー5世』にいたっては、すべて筋書きを抜粋したものにすぎない」

馬泰来は、ここでは筋書き抜粋という表現に変えている。だが、その内容は脚

本の小説化に違いない。彼も定説の強化に協力しているといえることができる。

曹大澂「不懂外文的大翻譯家林紘」『文物天地』1983年第3期1983.5.31。35頁

「林紘が人に批判されているいくつかのシェイクスピアの翻訳、たとえば『リチャード2世』、『ヘンリー4世』、『ヘンリー6世』、『ジュリアス・シーザー』などは、訳文のなかにみだりに叙述を加え、対話を削除したばかりか、そのうえ蛇足をくわえシェイクスピアが書いていない内容を増加させて文壇の笑いものになった」

戯曲を小説化したのであるから文壇の笑いものである。研究者たちは、林紘を批判し笑いものにしていることが理解できよう。

俞久洪「林紘翻訳作品考索」薛綏之、張俊才編『林紘研究資料』福州・福建人民出版社1983.6。404頁

「林紘の翻訳の大部分は小説であり、原作が戯劇でも小説の形式で翻訳した。たとえばシェイクスピアの『リチャード2世』などはそうである。……」

林紘の翻訳目録につけた前言において上のようになっている。目録部分を見る。『吟辺燕語』をラム姉弟の項目に収録するのは、よった原作がそうだからだ。妥当な扱いだ、と私は考える。シェイクスピアの項目に「リチャード2世」など5作品をあげるのは、原作が戯曲であること疑っていない証拠である。これも林紘研究の専門書に掲載されたものだと指摘しておく。

馬祖毅『中国翻訳簡史 “五四”以前部分』北京・中国对外翻訳出版公司1984.7。305頁 / 増訂版1998.6、2001.5第2次。426頁

「しかし、これらの作品はすべて意識であり、あるものは省略が多く、『ドン・キホーテ』などは薄い『魔侠传』に訳しただけだし、またシェイクスピアの『ヘンリー5世』は小説に改訳してしまった」

馬祖毅『中国翻訳史(上巻)』(漢口・湖北教育出版社1999.9。742頁)においても、同じことを述べている。馬祖毅等『中国翻訳通史』古代部分(武漢・湖北教育出版社2006.12。503頁)も同文だ。

康来新『晚清小説理論研究』台湾・大安出版社1986.6。281頁

「さらに、林氏はシェイクスピア（W. Shakespeare）の雷差得紀（Richard^{ママ}）、凱撤^{ママ}[徹]遺事（Julius Caesar）、亨利第四紀（Henry）、亨利第六遺事（Henry）、およびイブセン（Ibsen）の梅孽（Ghosts）を完全に記述体に翻訳してしまった。これもたぶん口訳者が大意をのべただけで戯曲と小説の違いを林氏に話さなかったため、戯曲を小説に誤訳させてしまったのだろう」

口訳者の責任にしてしまったところ、あるいはシーザーの書名を間違っているところから、康来新は、寒光『林琴南』をそのまま利用したのかもしれない。

周振甫「林紘」『中国大百科全書・中国文学』北京・中国大百科全書出版社1986.11。432頁

「林紘は、外国語を理解しなかったので原本を選択する権利はすべてが口述翻訳者の手にゆだねられた。ゆえにいくつかの誤りも生産されたのである。たとえば名著を改編した、あるいは省略した児童読物を名著の原作そのものだとする、シェイクスピアとイブセンの脚本を小説にして翻訳する、イブセンの国籍をドイツと誤る、などである。そうではあっても、林紘はなお40種あまりの世界の名著を翻訳しており、これは中国では、現在にいたるまでも右に出るものはいなかった」

「イブセンの国籍をドイツと誤る」（最初に指摘したのは鄭振鐸）と書いて、林紘の文学的知識の不足を批判している。ならば、魯迅がジュール・ヴェルヌ作品を翻訳して著者をアメリカ人培倫（『月界旅行』）、イギリス人威男（『地底旅行』）と誤ったことも書くべきだろう。だが、こちらには知らん顔だ。もっとも、魯迅のばあいは拠った日本語の表記がそもそも間違っていた。また、項目の執筆者が異なるからしかたがないか。

周の書き方は、林訳の欠陥を認めたくえで正の評価を下す例のひとつの典型である。百科辞典にこう書かれては、といってもそれまでの定説をくり返しているだけだが、それ以降の記述はますます定説からはずれることはない。

李存焜「林琴南論」『文藝論叢』第23輯1986.12。184頁

「次に、各種文学体裁と種類を区別することができず、原著の雰囲気と風格を失ってしまった」

李の論文は林訳小説を正の方向で評価する。しかし、その欠点を5点にわたってかけざるをえない。上の引用以外では、無価値の作品を大量に翻訳した、任意に削除した、訳文中に自分の考えを挿入した、原文に忠実でない箇所が多すぎるなどである。

北京図書館編『民国時期総書目(1911-1949)』外国文学 北京・書目文献出版社 1987.4。50頁

『亨利第六遺事』の「説部叢書」第3集第1編、および「林訳小説叢書」第2集第15編の2種類を収録する。注釈をつけて「原著は脚本であるが、本書は改訳して小説にした」と説明する。目録に書かれたことだから、定説を支持しさらに堅固にしたといえることができる。

《中国翻訳家詞典》編写組『中国翻訳家詞典』北京・中国对外翻訳出版公司 1988.7。49頁(表紙は『中国翻訳家辞典』)

「翻訳には他人の口述に全面的に頼っており、原著について厳格な選択を行なうことができず、多くの第23流の作品を翻訳して少なくない貴重な時間を浪費した。訳文には削除、誤訳、はなはだしくは自分の筆を加えるなど非難すべき箇所がとて多く、ときにはすばらしい脚本を小説に翻訳してしまった」

「しかし」とつづいて、結局のところ彼の翻訳には価値があった、と評価は正にしてしめくくる。

王先霈、周偉民『明清小説理論批評史』広州・花城出版社1988.10。781頁

「これらの作品は絶対多数が小説で、すくない劇本も小説形式で訳出している」

これは「第二節林訳小説序跋与比較方法的運用」という比較的長い文章のなかの、わずか1行にすぎない。全体では林紘の翻訳を正の方向で高く評価する。し

かし、どうあっても戯曲を小説にかえて翻訳したと説明をせざるをえない。そう固く信じ込んでいるからだ。

任訪秋主編『中国近代文学史』開封・河南大学出版社1988.11。480頁 / 2000.8第3次印刷。462-463頁

「これらの致命的な欠陥（注：間違い、遺漏、省略、改訳などの現象）は、多く人々が批判するところだ。具体的には、その1、作品の体裁を改変した。シェイクスピアの戯劇『ヘンリー4世 [亨利第四^{ママ}]』、イブセンの脚本『幽霊』などは、小説に翻訳されてしまい全文の風格はまったくなくなってしまった。その2、原文を勝手に削除した。たとえばユゴーの『九十三年』（林訳『双雄義死録』）は原文にくらべて半分を削除し、セルバンテスの『ドン・キホーテ』は原文のわずかに3分の1でしかない」

任訪秋は2度目の登場だ。鄭振鐸の文章の誤植（亨利第四^{ママ}）を含めてそのまま引用している。「致命的な欠陥」という事実の認識に揺らぎはない。

連燕堂「近代翻訳的發展脈絡」中国社会科学院文学研究所《中国近代文学百題》編写組『中国近代文学百題』北京・中国国際広播出版社1989.4。359頁

「以前は外国の戯劇を翻訳するのに、劇の筋に重点を置いていたため、たとえば林紓がシェイクスピアを翻訳したように、多くが叙事体書き直したのである」

戯曲についての説明で林紓が引き合いにだされる。連燕堂の執筆になる「林紓和“林訳小説”」では、戯曲の小説化については触れていない。小さな箇所だからこそ、定説が疑いもなく出現するらしい。

レナート・ランドバーグ Lennart Lundberg 『翻訳家魯迅 Lu Xun as a Translator』, Stockholm University, 1989.10 p.18

「彼（林紓）は、シェイクスピアほかの戯曲を小説に変えたりもした」
林訳の欠陥は、世界的に有名である。

謝飄雲「文学領域放眼看世界的先駆 林紓小説翻訳評述」『語文輔導』1989年
年第3期初出未見 / 『中国近代文学評林』第4輯1991.7。279頁

「いくつかのとてもすばらしい脚本を小説と粗筋概要に訳してしまったのは、
たしかに小説と戯曲を分けなかったのである」*9

文章の内容は、論文名からもわかるように林訳小説を高く評価する。しかし、
避けることのできなかつた誤りといいながらこう書かざるをえないほどに定説な
のである。

劉波「林紓」呂慧鵬、劉波、盧達編『中国歴代著名文学家評伝』続編三 濟南
・山東教育出版社1989.12。664頁

「第2、彼（林紓）と合作者には必要な文学常識が欠けていたため、小説と脚
本を混同してしまった。多くのすばらしい脚本を小説に翻訳したのだ。多くの説
明を加え、多くの対話を削除し、原作の様子をまったく違ったものにしてしまっ
た。シェイクスピアの脚本『亨利四世^{ママ}』、『雷差得紀』、『亨利六世^{ママ}』、『凱撤遺
事』およびイプセンの『群鬼』などは、すべて彼によって別の作品に訳されてし
まい、原作の美しさと風格は完全に消失したのである」

論文全体は、林訳小説を高く評価する。しかし、最後にどうしても翻訳の欠陥
を数え上げなければ気がすまないらしい。定説である理由だ。

施蟄存「導言」『中国近代文学大系』第11集第26巻翻訳文学集1（施蟄存主編）
上海書店1990.10。21-22頁

「『十之九』はアンデルセン童話選集だ。『時諧』はグリム童話選集だ。『大食
故宮余載』はスペイン遊記だ。『吟辺燕語』はシェイクスピア脚本を散文で述べ
たもの。『荒唐言』の原作はスペンサーの長詩『妖精の女王』で、マクルホーズ
が散文で述べたものがある。林紓は散文本で訳出し「スペンサー著」と書いた。
これらはすべて小説ではないが、それぞれ「説部叢書」、「小本小説」、「小説彙
刊」などに編入し、すべて小説だと目されている。『吟辺燕語』にいたっては
「幻想小説[神怪小説]」と題されている。早期の文学翻訳者、あるいは出版社
の幼稚な一面をうかがうことができる」

施蛰存は、林紓が文学の類型を区別できなかった、と非難する。いうまでもなく、林紓が、詩あるいは脚本の原作を小説化した、と彼は考えている。

郭延礼 「“林訳小説”的総体評価及其影響」『社会科学戦線』1991年第3期（総第55期）1991.7.25。284-285頁 / のち、郭延礼 『中西文化碰撞与近代文学』（済南・山東教育出版社1999.4）所収。275頁

林訳小説がもつ多くの弱点を3件にまとめる。第1は、翻訳漏れ、誤訳および削除だ。「第2は、体裁の区分が厳格ではなく戯曲を小説に誤訳してしまった。たとえばシェイクスピアとイプセンの劇本を小説にし、また、スペンサーの長編寓言詩『荒唐言』（今は『仙后[妖精の女王]』と訳す）を散文物語体に訳した」。第3は、林紓と嚴復は文言を用いて翻訳した。

最初にいわなければならないのは、該論文において郭延礼は、林訳を正の方向で評価する。その彼ですら、林訳小説がもつ多くの弱点を事実として認定せざるをえない。弱点はあるが、総体でいえばその評価は正なのだ、という論法である。従来の枠組みの範囲内であるといえる。

また、同氏 『中国近代文学発展史』第2巻（済南・山東教育出版社1991.2 / 北京・高等教育出版社2001.7）は、林訳小説についてくわしく説明している。のちの『中国近代翻訳文学概論』（1998）にその内容がほぼ引き継がれているから、概論の方で取り上げることにしたい。

林紓は、分野を無視して結局のところ小説にしてしまった。先行論文が、例外なくそう書いている。後発の研究者が、そのままを受け入れるのもしかたがないだろう。反対する材料を持たないからなおさらだ。

葉子銘 主編 『中国現代小説史』第1巻（1917-1927） 南京大学出版社1991.10。
69-70頁（執筆は余斌、潘志强）

「林紓がイプセンをドイツ人にする、戯劇の体裁を小説に改める、およびその他の種々誤訳にいたっては、さらに多くが見られる」

研究者がみなそう書いているのだから、引き継いだけ。

相浦泉「『小説月報』の研究」『求索 中国文学語学』未来社1993.1.30。303-304頁*10

「林紘は外国語を知らなかったし、原本の選択もおのずから口訳者にたよらざるをえなかったから、彼の翻訳作品は必ずしも第一流の作品ばかりではなかったし、ハガードやコナン・ドイルの第二流、第三流の作品もその中にまじっていた。彼はまた翻訳に際して、ときには原文を任意に削除したり、つけ加えたり、あるいは、たとえば、シェイクスピアの戯曲を小説のように訳したりして、文学常識と文学史的知識に欠けるところがあったが、それらは鄭振鐸（「林琴南先生」『小説月報』15巻11号所載）が述べるように、口訳者に誤らされた、と言うべきであろう」

鄭振鐸の名前を出しているように、彼の説明をそのまま受け入れている。

賈植芳、俞元桂主編『中国現代文学総書目』福州・福建教育出版社1993.12。916頁

『亨利第六遺事』が商務印書館の「説部叢書」と「林訳小説叢書」に収録されていることが記録される。それに注して「原著は戯曲、小説に改訳された」とある。

この注釈は、定説に従っていると容易に理解できる。注釈者にすれば、それまでの研究成果を書き加えたただけだ。今後の研究に役立つと考えたにほかならない。研究熱心、あるいは親切心からでたものだと私は疑わない。だが、結果としては林紘批判にもなっているのだ。

同じ調子で林訳批判が続けば、読む方もいやになってくる。研究者であれば、なおさらだろう。林訳の欠陥にはひとまず触れず、正の方向で全面的に論を展開したいという人も出現する。その例をひとつだけあげておきたい。

熊月之『西学東漸与晚清社会』上海人民出版社1994.8。703頁

「林訳小説選集のよしあし、合作した翻訳者の素質の上下、訳文の誤り、文筆の優劣については、文学評論界ではすでに少なくない具体的な研究があるから、ここではもう引用して述べることはしない」

熊月之は、林訳についての欠陥を十分に知っている。承知した上で、こう書いたのである。研究界において、林訳の欠陥という考えが定着していることを逆に証明する解説にもなっている。

このあとも林訳批判が続く。途切れることはない。

宮尾正樹「林紓 外国語のできない翻訳者」『しにか』1995年3月号1995.3.1。
63頁

「訳す必要のない二流の作品を大量に訳した（特に辛亥革命以後）とか、誤訳が多い、原著のスタイルを勝手に変えたなどといった悪評も多いが、彼の訳した小説が同時代の文人の涙を誘い、また、後に新文学の担い手となった人々で、林訳小説によってはじめて西洋の小説に触れたと記している者は、魯迅、周作人、郭沫若、朱自清、謝冰心と枚挙にいとまがないほどである」

林訳を正の方向で評価する。だが、その根底に横たわる「二流」「誤訳」「スタイルを勝手に変えた」を否定するわけではない。

「原著のスタイルを勝手に変えた」が、つぎの文章では「シェイクスピアの戯曲などのリライト」と表現を変える。

宮尾正樹「林紓」『集英社世界文学大事典』4 集英社1997.7.25。735頁。また、1冊本の『集英社世界文学大事典』同社2002.2.26。1832頁

「シェイクスピアの戯曲などのリライトや大衆小説の類いが大半だったが、世界文学の名作も数多く含まれていた」

「戯曲などのリライト」は、以前の文章の流れから判断して戯曲の小説化をいっているのだと考える。定説のままをくり返しているにすぎない。

鄒振環「名著名訳与名作家 《撒克遜劫後英雄略》在中国」『影響中国近代社会的一百種訳作』北京・中国对外翻译出版公司1996.1。199頁

「林紓の多くの翻訳には大きな省略、増補あるいは解釈があり、あるものは形式と文体すら改めているものがある。しかし、この翻訳（注：撒克遜劫後英雄略）は、原文との違いはそれほど大きくはない」

ウォルター・スコット Walter Scott 『アイヴァンホー Ivanhoe』の林訳を紹介して上のように述べた。自分で確認した『アイヴァンホー』について林訳が原文からそれほどはずれていないと鄒振環は自信をもって説明している。その彼ですら、従来の定説「形式と文体すら改めている」、つまり、戯曲の小説化をあげざるをえないほどに、この定説はゆるぎなく定着しているとわかるのだ。

1991年の彼の論文「接受環境対翻訳原本選択的影響 林訳哈葛徳小説の一個分析」(『復旦学報(社会科学版)』1991年第3期1991.5.10)にさかのぼってみよう。

「彼ら(林紘の共訳者たち)の口訳がいかに誤謬百出であるかをあげ、また、彼らが小説と戯曲を混同しているのを指摘することのできる人もいるだろう。さらに訳本と原本を比較対照することによって、原文の風格と重要な対話がいかに変形されたか、またそれを根拠に彼らが外国文学の常識を欠いていたことの証拠にする」(42頁)。

鄒振環は、こう書くことによって定説を肯定する。ただ、私には彼が慎重に説明しているように見える。なぜなら、鄒は自分の意見だと明言するのではなく、他人の評言として紹介しているからだ。この部分につづけて、その種の削除と改作は当時の特徴であったと弁護する。正の評価をしていることがはっきりわかる。鄒振環が林訳を肯定する姿勢は明らかであるが、同時に、戯曲の小説化についての事実そのものを否定するにはいたっていない。

林煌天主編『中国翻訳詞典』武漢・湖北教育出版社1997.11。416頁

ふたつの項目で林訳の解説がある。該当部分のみを示す。

袁錦翔「林紘」

「(翻訳する)速度は人を驚かせるくらいはやく、ゆえに訳し間違い訳し漏れが少なくなく、時には笑いものになることもあった。たとえば、イブセンをドイツ人に訳したり、シェイクスピア劇を小説にしたりしたのだ。彼には原作を厳密に選択する方法がなく、結果として多くの23流の作品を翻訳した」

頼余「林紘的翻訳」

「でたらめ訳、改訳、加筆訳、訳し漏れ、誤訳の箇所が少なくない。林紘は、少なくない西洋文学の名著を翻訳したが、しかし、さらに少なくない西洋の23

流の作品を翻訳した。林紓は、いくらかの優秀な劇作、たとえばシェイクスピアの Henry 、Henry など記述体の文言小説『亨利第四紀』および『亨利第六遺事』（今は『亨利四世 [ヘンリー4世]』『亨利六世 [ヘンリー6世]』と訳す）に翻訳し、多くの描写を増加させ、多くの対話を削除した。彼はフランスのユゴーの Quatre-vingt-treize を訳して『双雄義死録』（今は『九三年 [九十三年]』と訳す）としたが、分厚い原著を薄っぺらな訳書に変えてしまった。当然、これも口述者が省略本に拠ったためであるという可能性もある。林紓が誤訳した箇所も少なくはない。時には、原書の作者の国籍を間違ったこともある。たとえば、ノルウェーのイブセンの国籍をドイツとした」

従来の定説をそのまま述べているにすぎない。このような大型辞書は、中国では権威を持つものとして重要視される。ゆえに、その記述は、定説を強固にするという意味において、研究者に対して少なくない影響を及ぼすと考えていい。

辞典類で「近代」を書名に冠しているものそのほかを、ここで少しまとめて紹介しておく。以下の辞典には、林紓の項目はあっても、林訳の欠陥については、基本的に触れていない。

黄霖「林紓」『中国古代小説百科全書』北京・中国大百科全書出版社1993.4。
296-297頁

執筆者名不記「林紓」「林訳小説」魏紹昌、管林、劉濟獻、鄭方沢主編『中国近代文学辞典』鄭州・河南教育出版社1993.8。271-272、276頁

林薇「林紓」孫文光主編『中国近代文学大辞典』合肥・黄山書社1995.12。
586-587頁

梁淑安「林紓」梁淑安主編『中国文学家大辞典・近代卷』北京・中華書局1997.2。272-273頁

著者名不記「林紓」錢仲聯ら主編『中国文学大辞典』上海辞書出版社1997.7。
1257頁。修訂本2冊2000.9 / 2001.8第2次印刷。1364頁

以上の辞典項目は、いずれも中国近代文学において林訳小説のはたした小さくない役割を認めている結果なのだと理解する。

易新鼎主編『二十世紀中国小説発展史』北京・首都師範大学出版社1997.12。42頁

「林訳には、(作品)選択が厳密でない、削除、誤訳、加筆、また高尚にして信頼できないという欠陥があるにしても(銭玄同と劉半農が『新青年』の「なれあいの手紙」のなかで、これについてかなり鋭い批判を行なった)、しかし林訳の名作は今にいたるまで人気があるのだ」

林訳小説は、当時、中国人の視界を外国に向け広げて影響力があった。該書は、林紘の功績を抹殺すべきではないと書いている。それを十分説明した上で、なおかつ銭玄同と劉半農を引用しながら、林訳の欠陥に触れざるをえない。しかも、例の「なれあいの手紙」については肯定しているとわかる。疑問を感じる必要がないほどの定説だからだろう。

孔慶茂『林紘伝』北京・団結出版社1998.2 中国文化巨人叢書・近代巻。93頁

「惜しいことに、林紘は該書(『英国詩人吟辺燕語』)の作者をシェイクスピアと間違い、常識上の大きな過ちをおかしたのである」

『吟辺燕語』の作者はラム姉弟であることは、すでに述べた。孔は、林紘が該作品にシェイクスピア著と書いたことを指摘して、それが違うという。だが、問題はそこにはない。シェイクスピアの戯曲を林紘は勝手に小説に改変して翻訳した、と批判したのが劉半農の根本的な誤りだった。これをいわなければならない。鄭振鐸がずいぶん前に『吟辺燕語』を批判の根拠から外した理由に気づいてほしかった。

郭延礼『中国近代翻訳文学概論』漢口・湖北教育出版社1998.3。296頁 / 修訂本

武漢・湖北教育出版社2005.7第2版第3次印刷。234頁

「第3、体裁区分が厳格ではなく、戯劇を誤訳して小説にした。シェイクスピア(W. Shakespeare, 1564-1616)の脚本『リチャード2世 [雷差得記]』(Richard ,今は『查理二世』と訳す)、『ヘンリー4世 [亨利第四紀]』(Henry ,今は『亨利四世』と訳す)、『ヘンリー6世 [亨利第六遺事]』(Henry ,今は『亨利六世』と訳す)、『ジュリアス・シーザー [凱徹遺事]』(Julius Caesar ,今は『裘利斯・凱撒』と訳す)、『ヘンリー5世 [亨利第五紀]』(Henry ,今は『亨利第五』と訳す)、およびイブセン [伊ト森] (Henrik Ibsen, 1828-1906,今は易ト生と訳す)の戯劇『幽霊 [梅孽]』(今は『群鬼』と訳す)

す)は、林紘はすべて小説にした」

「第3」とあるところからもわかるように、全部で5項目に分類している。何についての分類かといえば、林訳の欠陥なのだ。郭は「林訳小説の弱点と限界」と題し、6頁にわたって具体的に解説する(294-299頁。第2版232-236頁)。要点のみをかかげる。

第1、林紘は外国語を理解せず、多くの23流の作品を翻訳した。第2、「林訳小説」の主要な欠点は、翻訳漏れ、誤訳および削除である。例としてあげるのが、ユゴー『九十三年』、セルバンテス『ドン・キホーテ』、ディケンズ『デイヴィッド・コッパフィールド』だ。定説通りだといえる。そしてこの第3が、英文を補って充実した記述である。ただし、「查理」は誤植だろう。これを書くならば「理査」とするのが普通だ。勘違いだと思う(修訂本でも誤る)。どのみち、把握のしかたは従来通りのものであることは一目瞭然なのだ。第4は、文言を使用して翻訳したこと。第5、内容に封建要素を含んでいる。

これらの欠陥があるにもかかわらず、林訳小説は、中国の翻訳文学史および近代文学史において重要な地位を占める。これが郭延礼の結論である。

以上の内容は、同氏『中国近代文学発展史』第2巻(済南・山東教育出版社1991.2 / 北京・高等教育出版社2001.7)において、すでに述べられている。

のちの著作になるが、郭延礼のものだからここで触れておきたい。

郭延礼『20世紀中国近代文学研究學術史』南昌・江西高校出版社2004.12。218頁

郭の論調は、こちらでも変化はない。しいて言えば、林紘の功績部分をより高く強く評価する。だから、林訳の欠陥については、ごく控えめに述べるだけだ。

「たしかに、林訳作品の中には底本の選択がよくないもの(たとえばいくつかは児童の物語読本だったりした)、体裁の区別が誤っていた(たとえばシェイクスピアの戯劇を小説に翻訳した)、さらに若干の誤訳、訳しもれ、削除がある。そうではあるが、彼が外国文学紹介したという功績は中国近代文学史のうえでは消滅させることはできない」

欠陥については、わずかに3行にすぎない。あとは、称賛となる。私にいわせ

れば、それは程度の問題だ。林訳のいわゆる欠陥は事実として存在している、と把握しているのは認識構造としては同じである。

郭延礼は、さらに一步を進める。正の方向での評価を極端に推し進めているのが注目される。

林訳の評価について、郭は、発想の転換を提起するのだ。翻訳を再創造だと考え、原作の字句にはこだわる必要がないという。つまり、「訳文を中心とする」評価の勧めである（郭延礼『中国前現代文学的転型』済南・山東大学出版社2005.10でもくりかえしている）。だが、原作の存在を無視したこの提案は、翻訳研究とは無関係である。本稿の主題から離れるのでこれ以上は触れない。

林訳の欠陥があることは認めながら、それを無視する文章も出てきておもしろい。

馮奇『林紓 評伝・作品選』北京・中国文史出版社1998.6 清末民初文人叢書。26頁

「もし純粹に翻訳の観点から見れば、どんな人でも「林訳小説」の多くの欠陥を挙げるができる。同時代人と後の評論家はすでにこの点については証明をしている。これに関して私たちはいちいちくどく述べる必要はない」

林訳に欠陥があることを全面的に認める。そのあとでなにを言い出すかと思えば、本当の意義は翻訳そのものにはない、翻訳をとおして民智を啓蒙し文化建設に重要な貢献をしたと強調する。いかがなものか。

馮奇は、どうしても林訳を正の方向で評価したかった。それは、理解できないわけではない。だが、欠陥があるのであれば、それは欠陥にほかならない。馮奇が林訳の欠陥から目をそらすのは、私には極端な行為に見える。

周発祥、李岫主編『中外文学交流史』湖南教育出版社1999.1 / 1999.7第二次印刷。289頁

「林訳小説の歴史地位と歴史作用は巨大だが、しかし、林訳の限界性と誤りも存在している。彼の作品選択は、いつも手当たり次第にもってくるというもので、ある作家の代表作品ではなかった。翻訳するときは、また常に原作に対して任意

の加筆削除を行ない、はなはだしくは原作固有の体裁を改変した」

「原作固有の体裁を改変した」というのが、戯曲の小説化を指している。

該書は、林訳小説について高い評価を与える。紙幅も多く割いている。それはいっておかなければならない。だが、最後の部分で、それこそとってつけたように林訳の欠陥に触れざるをえなかった。定説の定説たる所以である。

湯哲声『中国現代通俗小説流変史』重慶出版社1999.1。51頁

「問題は、多くの翻訳家が中国読者の口に合わせて外国作品を中国小説のように変えたがったことだ。たとえば、林紘が翻訳したシェイクスピアの戯曲いくつかとイプセンの『幽霊 [『群鬼』(訳名は『梅孽』)]』は、全部を中国の物語に改めたのである」

戯曲を小説化したと直接は書いていない。中国化は小説化とは違うというのかもしれないが、同類としてあげておく。

王暘『簾卷西風：林琴南別伝』北京・華夏出版社1999.1。223頁

「なれあいの手紙」において、劉半農が『吟辺燕語』をあげて、本来はイギリスの戯曲であるのに林紘は「詩」と「戯」の区別がつかない、と批判をした。その部分を引用した後で「老先生は、このたびは本当にかんしゃくを起こしたけれども、沈黙を守るよりしかたがなかった」と説明する。劉半農の指摘が正しいから、林紘は黙るより方法がなかったといたいのだ。従来からある説を遵守するだけ。批判的に見るのができないらしい。

郭麗莎「林紘与哈葛徳小説的關係」『貴州社会科学』1999年第3期(総第159期) 1999.5.20。69頁

「林紘はハガードの小説を好んでいたから、翻訳する時も格別にまじめだった。周知のように、林紘は西洋の小説を翻訳して常に原著に対して削除を行なった。しかし、彼はハガードとディケンズの作品については、原著のかたちを極力保持しようとした」

郭麗莎にしてみれば、林訳の基本的欠陥については疑う必要もないことだった。

だから、ハガード作品の翻訳が原著に忠実であるのは、特別な理由によるものだとしか考えられなかったのだろう。

「ゆえに、彼の原著に対する忠実さというのは、ハガード小説についての好みとそれからくる作者にたいする尊敬の念からだと解釈するほかないのである」（同上）と書く。郭のいいかたにしたがえば、林紘はシェイクスピアを尊敬していなかったという結論になる。それは、言い過ぎだろう。ハガードについて林紘が忠実な翻訳を行なったというのであれば、シェイクスピアについても同様のはずだ、という発想でなければおかしい。その発想がでてくるのを阻害するほどだから、定説なのだ。

呉俊「林訳小説 世紀末的一个懸念」『作家』1999年第9期1999.9.1。103頁

「シェイクスピアの詩劇あるいは戯劇作品も、しばしば散文と小説の形式にして中国の読者に迎合した」

漢訳シェイクスピアだから中国演劇史研究の方面から言及があるのは当然だ。

瀬戸宏「中国のシェイクスピア受容略史」『シアターアーツ』11 2000年1号2000.1.31。99頁

「林紘はさらに、『ヘンリー四世』などを直接翻訳したが、これらはすべて小説体で訳されており、シェイクスピア作品の翻訳とは認められてはいない」

瀬戸宏は、「直接翻訳した」と書いて、林紘がシェイクスピアの原著にもとづいていることを強調し断言する。あたかも原物で検証したかのようだ。小説体に変えたといい、さらに推し進めて「シェイクスピア作品の翻訳とは認められてはいない」と説明する。奇妙な書き方だ。シェイクスピア原作は、原作だろう。シェイクスピア作品の翻訳とは認められないというのなら、何だというのだろうか。

また、「中国で最初にシェイクスピア作品の内容を具体的に紹介したのは、一九〇四年出版の林紘・魏易『吟辺燕語』であった」（98頁）と間違っただけを書く*11。

「中国のシェイクスピア受容略史」は題名からもわかるように、瀬戸宏の専門分野であるはずだ。瀬戸宏は、基礎的事実を誤って信じられないほど杜撰な説明をする。清末小説研究会編『清末民初小説目録』（1988）、樽本編『新編清末民初小

説目録』(1997)を見る時間を作って再考も三考もされるようお勧めしたい。

「世界のシェイクスピア」で中国を紹介する文章がある(伊勢村定雄執筆。荒井良雄ほか編集主幹『シェイクスピア大辞典』日本図書センター2002.10.25)。林紘の名前を出しておらず、こちらは論外だ(514頁)。

徐志嘯『近代中外文学関係(19世紀中葉 - 20世紀初葉)』上海・華東師範大学出版社2000.3。109頁

鄭振鐸「林琴南先生」からだとことわっている。みっつの欠陥を引用して、「2、小説と戯曲を区別しない、児童読物と筆記小説を区別しない、誤って戯曲を小説に訳した」と書く。林訳を高く評価しながら、欠陥についてはそのままを認めている。鄭振鐸の文章の影響力がいかに強いかが理解できるだろう。

馬春林『中国晚清文学革命史』瀋陽・遼寧大学出版社2000.4。269頁

「林紘はかつてシェイクスピア戯劇を小説に翻訳したが、シェイクスピアの訳者は林紘の小説を脚本に編成して上演した」

中国演劇界におけるシェイクスピア劇の上演について説明している。それが、ややこしい。なぜなら、早期の話劇では、シェイクスピアの原作から直接漢訳した脚本を使用していないのだ。林紘の『吟辺燕語』にもとづいて、あらためて脚本に書き直したことをいっている。馬春林は、戯曲の小説化についてまったく疑っていない。

聞少華「林紘」熊尚厚、嚴如平主編『民国人物伝』第11巻 北京・中華書局2002.7。324頁

「林紘は外国語がわからなかったために合作者の口述に頼るしかなく、原著について比較し選択することができなかった。そのため大量の精力を浪費して翻訳したのは少なからぬ西洋の23流の小説でしかなかった。はなはだしくはシェイクスピアとイプセンの脚本を小説に訳したばかりか、イプセンの国籍をドイツに誤るなどの誤謬を出現させたのだ」

著者の国籍を間違ふことは、翻訳がでたらめである証拠になるらしい。

高旭東『比較文学与二十世纪中国文学』北京・人民文学出版社2002.10。70頁

「胡適は林紘式の翻訳に不賛成でつぎのように書いている。「林琴南はシェイクスピアの戯曲を記述体の古文に翻訳している！これは、本当にシェイクスピアにとっての大罪人である」」

高旭東は、直接、戯曲の小説化について書いているわけではない。だが、胡適の文章を引用することで同意見であることを表明しているのである。

程翔章、邱鏑昌編著『中国近代文学』武昌・華中師範大学出版社2003.1。226頁

「翻訳にはつねに加筆削除、誤訳誤しもれおよび改訳という現象が出現した。たとえばシェイクスピア、イプセンの戯曲を小説に翻訳し、……」

全日制高等学校課程教材だとの表示がある。定説を織り込まなくてはならないのだと推測する。

王建開『五四以来我国英美文学作品訳介史』上海外語教育出版社2003.1。33頁

「しかし、加筆と削除が多すぎる、脚本を小説に翻訳した、文言を使用した、原作の選択が不適當だ」

林紘評価が、現在にいたるまで正負の両方で存続していることをのべる箇所だ。引用した前部分で、小説の地位を高めたところは彼の功績だと書く。戯曲の小説化については、説明の必要もない事実だという認識が王建開にはある。

宇野木洋「コンパクト・中国二〇世紀文学史」宇野木洋、松浦恆雄編『中国二〇世紀文学を学ぶ人のために』世界思想社2003.6.20。7頁

「また林紘（一八五二～一九二四）は、ユーゴー・バルザック・トルストイからディケンズ・徳富蘆花に至る多数の西欧（ここでは日本も含まれてくる）文学を「翻訳」（林紘は外国語ができず、協力者の口述訳を脚色しながら文章化した）し、中でも小デユマ「巴黎茶花女遺事（椿姫）」は話題を呼んだ」

コンパクトだから、説明が不十分であるのはしかたがない、との弁解も成り立つ。しかし、コンパクトだからこそ林紘の本質を凝縮したともいえる。短文で林

紵を紹介するにあたり、著者が考えて削ることのできない重要部分だけを厳選したということだ。「口述訳を脚色しながら文章化した」という「脚色しながら」の内容が不明である。林紵は、原作から自由に勝手に気ままに書き換えているような印象をあたえる記述だといわざるをえない。「脚色しながら」だから戯曲を小説化することも含まれているのだろう。どのみちほめてはいない。

林紵とイブセンの『幽霊 [梅孽]』を翻訳した毛文鍾がいる。彼に会ったことがある寧遠は、次のように証言していて貴重だ。

「かつて林氏となん冊かの本を共同で翻訳したことのある呉県毛文鍾（観慶）氏は私に語った。林氏自身は外国語を理解しなかったけれども、彼のいわゆる翻訳は、実際は小学生が作文をするように「聞き取り」方式を採用していた。ただし、彼の態度は相当にまじめで、少しでも疑わしいところがあれば口述翻訳者に最初からもういちど訳させた。ある時などは、何度もなんども訳し直させ、彼はようやく満足したのである。同時に、彼は、また十分に強情であって、中国語の原稿を書き上げてから口述翻訳者がなにか妥当ではない箇所を見つけて彼に訂正するようにいうと、それは天に登るよりもむつかしかった。原書の意味とはあわないという理由で彼と極力争うのだが、老先生のつむじ曲がり爆発して往々にして取りあってもらえなかった」（寧遠『小説新話』香港・上海書局1972.12再版。164頁）

林紵が外国文学を翻訳するにあたり厳密な態度を維持していることを証言してあますところがない。宇野木のいう「脚色しながら」とはほど遠い。

演劇関係ということで近頃出版されたレヴィスの著作を見る。

ムレイ・レヴィス Murray Levith 『中国におけるシェイクスピア SHAKESPEARE in China』CONTINUUM, 2004 / 2006。6頁

「さらに数年後、林は、今度は陳家麟とともに「リチャード2世」、「ヘンリー4世」1部2部を含んだ5篇の芝居物語 [play stories] を出した。林はまた「ヘンリー6世」を1916年に出版し、1924年の「ヘンリー5世」は遺作となったのだ。しかし、その時でさえ中国がシェイクスピアの脚本と出会うということについては、まだ明らかに不完全であった」

ここでレヴィスが書いているのは、林紵 + 陳家麟は脚本のままではなく小説化

して翻訳した、ということだ。

周晓明、王又平主編『現代中国文学史』武漢・湖北教育出版社2004.9。110頁

「翻訳には、書き足し削除、間違い訳しおれおよび改訳などの現象がよく出現した。たとえば、シェイクスピアやイプセンの戯曲を小説に翻訳してしまい、ユゴーの『九十三年』は半分を削除し、セルバンテスの『ドン・キホーテ』は原文のわずかに3分の1しか残らなかった、などなどである」

「林訳の意義」という箇所で説明しているのを部分的に引用した。先行する著作をそのまま取り入れている。こちら教科書だから、どうしてもこうなるという見本だ。

謝天振、查明建主編『中国現代翻訳文学史(1898-1949)』上海外語教育出版社2004.9。272頁

「林紓らは、物語と小説の形式でシェイクスピア劇を翻訳し、もとの戯劇形式からははなはだしく遠ざかってしまい、読者にシェイクスピア劇本来の姿を見せることができなかった」

類似の文献は、私が探すから出てくるのか、もともと書かれているから目につくのか。たぶん、その両方なのだろう。

インターネット上で論文を見つけたので発表時間順に配置して次に紹介する。

滕威「《堂吉訶徳》這樣来到中国 紀念《堂吉訶徳》初版四百周年」『中華読書報』2005.3.23 http://www.gmw.cn/01ds/2005-03/23/content_203520.htm

「ふたり(注:林紓と陳家麟)の合訳が最も多いとはいえ、人に深い印象をあたえるたくさんの過ちもまた彼らの合作成果のなかに比較的多く出現するのである。たとえば、シェイクスピアの戯劇をすべて小説に翻訳してしまった。また、翻訳した大部分は3流の作品である」

もともと林訳「ドン・キホーテ」について書かれた文章だ。林紓+陳家麟訳『魔侠传』は、滕威から見れば評価にあたいするところが皆無である漢訳でしかない。その流れで林訳シェイクスピアそのほかに言及している。林紓+陳家麟の漢訳作

品すべてをあっさりと否定して大丈夫なのか、と私は心配するほどだ。藤威の文章を読んで、定説の堅固さをあらためて認識する。

孟昭毅、李載道主編『中国翻訳文学史』北京大学出版社2005.7。57-58頁

「林訳小説は中国近現代文学史上において重要な文学現象であり、その功績は歴史的環境のなかにおいて考察しなければならない。彼は外国語を理解せず、晩年の思想は日に日に保守に傾いていったという多くの原因があり、後期翻訳の色彩が枯れて暗く、多くの翻訳に誤訳、遺漏、削除書きかえの箇所がすこぶる多く、体裁区分が厳格ではない　たとえばシェイクスピアの戯曲『查理二世』(林訳は『雷差得記[リチャード2世]』)を小説体で翻訳した。確かにこれらは彼が当時避けることができず、残念なことであった」

ここでもなぜだか『查理二世』と誤記する。郭延礼の表現をそのまま引用したということか。ただの偶然かもしれないが。

韓洪拳『林訳小説研究　兼論林紓自撰小説与伝奇』北京・中国社会科学出版社2005.7。125頁

「林紓は時に脚本を誤訳して小説にした。たとえばシェイクスピアの脚本『リチャード2世』、『ヘンリー4世』、『ヘンリー6世』、『ジュリアス・シーザー』、『ヘンリー5世』、イブセンの脚本『幽霊』を林紓はすべて小説に翻訳したのだ。このような状況が出現したのは、口述翻訳者が体裁について林紓にはっきりと説明しなかったか、あるいは口述翻訳者が外国の作家が書き改めた物語を訳したかであろう」

専門の著作だけあって林訳の欠陥を4点あげて記述は詳しい。上には、本稿に関係する部分のみを訳して掲げているので了解されたい。

欠陥についての定説が、従来通り固く支持され、かつまたくり返して述べられていることがわかるだろう。韓洪拳は、ある可能性に言及した。注目してよい。だが、彼はその可能性を自分で追求することはなかった。それが重要な問題であるという認識が韓洪拳にはなかったとわかる。残念なことだったといわなければならない。

謝曉霞 『《小説月報》1910-1920：商業、文化与未完成的現代性』上海三聯書店
2006.11。120-121頁

「この点について林紘も例外を免れることができなかった。彼は小説の概念について依然とあいまいだった。民初のすべての文人のように、小説と歴史の境界をはっきりさせることができず、歴史を小説と考えたばかりか、『小説月報』の翻訳において彼が小説と劇本の区別がはっきりしていないことを露呈してしまった。『小説月報』7巻1期に掲載した「雷差得紀」(今は「リチャード2世」と訳す)は、もとはシェイクスピアの劇本であるが、林紘はそれをなんと小説にして翻訳した。同様にシェイクスピアの「亨利第四紀」(今は「ヘンリー4世」と訳す)および「凱徹遺事」もみな林紘によって小説として翻訳され中国人に紹介されたのだ。シェイクスピアの戯劇は、人物の対話が構成するあの強烈な劇的な衝突が、林紘のこの改作によって、ほとんど面目が一変してしまい、作品全体もそれによって突然色を失った。翻訳についていうと、これは疑いなくきわめて大きな誤りである」

専門といえば、こちらも改組以前の『小説月報』について説明する専門書だ。林紘とは密接な関係があるから、上のような記述になる。それまでの記述から自らの説明を際立たせるためには、批判の度合いを強めるしか方法はない、と考えたのかもしれない。私は、謝曉霞を非難しているのではないから、注意してほしい。林紘が劇本を小説化したと、それまでの研究者は、全員がそう書いているのだ。それについて博士論文の段階で疑問を抱くことなど、無理にきまっている。指導教授を含めて、私は、同情している。

該書の「附録2 1910-1920年の《小説月報》大事年表」において、戯曲を小説に翻訳したのは文体の観念があいまいだったからだ、などと説明している(223-225頁)。重複するからここでは省略する。

馬祖毅等 『中国翻訳通史』現当代部分第2巻(「外国文学在中国篇」第5章「英国文学」) 武漢・湖北教育出版社2006.12。233頁

林紘と陳家麟が、シェイクスピアの劇本5種類の物語を文言文で述べた、と書く。「復述」という単語は英語でいえば、まさに retell なのだ。日本語では「再

話」にあたる。つまり、書き直しているという理解があるからこの表現になる。

「これらの訳文（注：『小説月報』に掲載されたシェイクスピア作品など）は、シェイクスピア原著の梗概をとどめているだけで、小説の形式を採用したためシェイクスピア戯劇作品のもとの様子を見いだすことができない」

これら以外にも林訳について述べた著作、論文は多い。だが、翻訳の欠陥に言及がないもの、あるいは欠陥について説明するがシェイクスピア原作の小説化について解説しないものは基本的にはぶいたからこうなった。あげるべき文献はまだほかにもあるだろう。論文名はわかっているが、日本では入手できないものはしかたがない。きりがないのでこれくらいでやめておく。

この部分の締めくくりとして、中国のシェイクスピア研究家がどのように書いているかをふたつだけ紹介する。

張泗洋主編『莎士比亞大辞典』北京・商務印書館2001.1

各項目は、無署名だ。大項目「六、莎士比亞在中国」のなかの「1. 中国莎学綜述」 - 「中国莎学発展史概述」では、孫引きして「これら数種の翻訳（注：リチャード2世、ヘンリー4世、ジュリアス・シーザー、ヘンリー5世）は、シェイクスピア原著の物語の梗概を保っているだけで、小説の形式を採用しており、ゆえにシェイクスピア作品の真面目は見いだしがたくなってしまった」（1256頁）と書く。

「莎士比亞作品的中文翻訳」では、林紓の『吟辺燕語』、『リチャード2世』以下の翻訳名をあげるだけ。林訳の欠陥については触れない（1279頁）。

また、「7. 中国莎学学社簡介」に「林紓」を収録するのはいい。『英国詩人吟辺燕語』および「雷差徳紀」「亨利第四紀」「亨利第六遺事」「凱徹遺事」「亨利第五紀」をあげて、当時、大きな影響を与えた（1401頁）と書くのも理解できる。ところが、「2. 莎士比亞作品中文訳本」において、『英国詩人吟辺燕語』を取り上げているにもかかわらず、林訳「雷差得紀」以下の5作品にはまったく言及していない。つまり、この大辞典は、「雷差得紀」以下の林訳5作品を無視している。小説に変形されているとの認識が強いからだろうか。脚本をそのまま漢訳したのでなければ、紹介する価値もないといわんばかりだ。

裘克安『莎士比亞評文集』北京・商務印書館2006.4。45-46頁

「1903年、すなわち清光緒23[29]年、上海達文社が最初に英国散文家チャールズ・ラムおよびその姉メアリが書いた『シェイクスピア物語』のなかから10篇の物語を文言文を用いて翻訳して出版した。題名を『英国索士比亞著海外奇譚』といい、訳者名は書いていない。翌年、商務印書館は、林紘と魏易の共訳で同書の全20篇を出版し、題名を『英国詩人吟辺燕語』という。林紘は、それを幻想[神怪]小説と見なした。しかし、この本は中国人にシェイクスピアを紹介して大きな作用があったのだ。たとえば郭沫若は、彼が少年のとき該書を読み、「無上の興味を感じ、それはいつのまにか私に大きな影響を与えたのだ」と説明している。その他の近代中国の文豪、魯迅、巴金などの身にも類似の影響を見ることができる。林紘は、以後、『ジュリアス・シーザー』および『リチャード2世』、ヘンリー4、5、6世などの英国歴史劇の物語を『小説月報』誌上に掲載した」

英文学研究者は、本業だけで忙しい。中国でどのような漢訳が出版されたのかについては、興味がなさそうだ。上に見るくらいの説明しかない。林訳の内容にまで踏み込む考えはないとわかる。ただし、私が知らないだけで、この分野では詳細な論文が発表されている可能性を否定しない。

中国文学研究者は、林訳小説評価の枠組みの範囲内で、先行論文を大事に守り長く利用しつづけていること、以上に紹介した通りである。私は批判しているわけではない。あくまでも事実を述べているだけだ。誤解のないようお願いしたい。

それにしても、例外のひとつもなく林訳の欠陥を言い立てる文章群をながめると、その評価の揺るがないところに、私はある種の感動さえおぼえるほどだ。定説として鉄壁であり微動だにしない。冤罪事件だという認識は、露ほども存在しない。

3 林訳シェイクスピア歴史劇の底本

林紘は、シェイクスピア原作の戯曲を小説に書き直した。こう批判したのは劉

半農だ。ただし、その際、彼が根拠としてあげた『吟辺燕語』は、実はラム姉弟原作の、すなわち戯曲を小説化した『シェイクスピア物語』だった。もとの散文なのだから、劉半農が提出した批判の論拠は失われる。劉は林に濡れ衣を着せた、ということもすでに指摘した。

『吟辺燕語』は劉の誤解だ。しかし、鄭振鐸は、それ以外のシェイクスピア作品を林紓が漢訳して、もとの戯曲を小説化しているという。しつこくくりかえして申し訳ない。この部分が、定説になっている。だからこそ冤罪事件となるのだ。さて、問題になっている林訳シェイクスピアの作品を発表順にあげておく。

1. 原作不明

「欧史遺聞」(英) 莎士比亞原著、林紓、陳家麟同訳 『上海亞細亞報』1915.9.10-10.3 (未見)*¹²

2. 「リチャード2世 RICHARD」

「雷差得紀」(英) 莎士比亞原著 林紓、陳家麟同訳 『小説月報』第7巻第1号 1916.1.25

3. 「ヘンリー4世 HENRY」

「亨利第四紀」(英) 莎士比亞原著 林紓、陳家麟同訳 『小説月報』第7巻第2-4号 1916.2.25-4.25

4. 「ヘンリー6世 HENRY」

『亨利第六遺事』(英) 莎士比亞原著 林紓、陳家麟同訳 上海商務印書館1916.4
説部叢書第3集第1編 / 上海商務印書館 林訳小説叢書第2集第15編

5. 「ジュリアス・シーザー JULIUS CAESAR」

「凱徹遺事」(英) 莎士比亞原著 林紓、陳家麟同訳 『小説月報』第7巻5-7号 1916.5.25-7.25

6. 「ヘンリー5世 HENRY」

「亨利第五紀」(英) 莎士比亞原著 林琴南(林紓)遺稿(陳家麟同訳?) 『小説世界』第12巻第9-10期 1925.11.27-12.4 (未見)

未見の1「欧史遺聞」は、最近、シェイクスピア原作、林紓、陳家麟訳だとい

雷差得紀

英國史上此書

英王奈差得第三子王亞達爾皇太子奈差得即
 黑太子之子太子以英武之姿年即舉國痛惜
 前星之殞故擢太孫年十一歲民以悼念
 東宮之故感誠於太孫加冕之時倫敦人庶歡騰
 無極巨商投機於公局易發泉為酒流成池恣人
 泣飲以希理言英理之父或英理之兄乃不爾
 父老因夫使人既在府或本諸天任實亦教育使
 然時侍從人多黨羅羅進諂語者錯出其間即自好
 之士亦圖營己私無心於為國王長策宮中逸樂而
 縱恣甘言易入故奈差得小為緣聞既淺為近習
 所惑引官匪弗特從大臣十二人向者族文三人
 亦在侍中之列一為蘭卡司公一為要克公一為
 格老西司公此三人中以玉璽立支極力輔政而
 格老西司公獨執第一時政府人稱之曰佐政

小 說 月 報 第七卷 第一號 雷差得紀

亨利第四紀

英國史上此書

亨利第四即卜林不魯克之自名既即位而心誠不
 懼自知得自非分動息頗不自寧奈差得雖死而
 亨利第四之序次仍不立當立者為少年勳得毛
 持毛持毛為馬爾伯爵之文孫馬爾伯爵娶費利
 巴為妻費利巴為奈差得之次女安那為奈差得
 得第三子卜林不魯克為奈差得之孫而其父蘭
 卡司公次在第四以序次論雷差得行二種既無
 嗣則叔當立卜林不魯克為序李也李何當立則五
 立馬爾伯爵之孫並其母之序在第三為次長於
 卡司公也以此玉璽言毛持毛則卜林不魯克之
 立實非正顧為百姓所愛戴不能不即大贊於是
 結人心以遂其謀此輩人所知者且隨地演說以
 甘言於是衆心皆屬亨利第四既為平民所舉一朝
 爵親大政要在收拾人心既屬民心勢不能不結怨

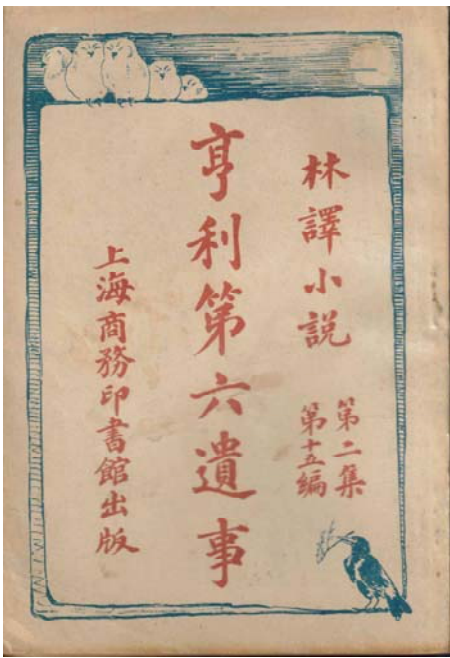
小 說 月 報 第七卷 第二號 亨利第四紀

「雷差得紀」

「亨利第四紀」



『亨利第六遺事』





「凱撤遺事」

う指摘があった。いままで、該作品に言及した論文はない(【統合版補記】César Guardé-Pasが底本を指摘している[古二徳15]WILLIAM SHAKESPEARE, “CORIOLANUS.”)。

6「亨利第五紀」も、今、見る事ができないから、本稿では触れない。なお、鄭振鐸の批判文には、この作品は挙げられていない。なぜなら、鄭振鐸の批判文が発表されたあとに公表された作品のひとつであるからだ。

上にかかげた作品名を見ると、いうまでもなくシェイクスピアの歴史劇である。ラム姉弟『シェイクスピア物語』(林訳の題名は『吟辺燕語』)に収録した以外の作品であることがわかる。作品の重複を林紓が避けたことは明らかだ。

従来 of 文章は、いずれも林紓が戯曲を小説化したと批判する。では、どのように小説化したのか。普通、研究者であれば、その過程を検討するだろう。それが、奇妙なことに、誰ひとりとして具体的に説明してはいない。これは、何だろうか。検証する必要もないほどに自明なことなのか。

「ジュリアス・シーザー」を例にとろう。

シェイクスピアの原文と林訳を並置する*13。参考までに、日本語訳は坪内逍

遙の訳文を使用する。

FLAVIUS

Hence, home, you idle creatures, get you home!

Is this a holiday? What, know you not,

Being mechanical, you ought not walk

Upon a labouring day without the sign

Of your profession? Speak, what trade art thou?

フレー（ピヤス）

さアさア、帰れ帰れ。懶惰漢め、家へ帰れ。やい、今日は休業日か？え
ッ？職人の癖に、知らんか？仕事日にゃ、職業の目標を附けんで、出歩いち
ゃならん筈だぞ。汝の商売は何だ？

これが林訳では以下のようにになっている。

【林訳】羅馬立国。可四百五十年。此四百五十年中。幾欲一統欧西。可云盛
矣。惟貴族平民之乖忤。終未臻於和平。以羅馬發祥。特一小城。已而統攝全
欧。拓地既広。殖民亦衆。民衆則智識日諳。意氣激昂。万不能屈服於貴顯大
臣之下。1頁

ローマが建国してまさに450年になる。この450年間にヨーロッパを統一し
ようと旺盛であるといえる。ただ、貴族と平民が離反し、平和状態にはいた
っていない。ローマは、特に小さな都市から発祥し全ヨーロッパを統一して
しまった。領土の拡張はひろく、殖民も増加した。そのため、民衆は日々知
識にたけてきており意気は軒昂にして、高位高官重臣に決して屈服しようと
はしなかった。

戯曲を小説化したというのが従来からの定説である。それにしても、上に示し
たように両者の内容は、かけ離れてはなはだしい。見ればわかる。シェイクスピア
原作冒頭のどこにローマ建国450年があるというのか。林訳は、歴史背景を説

明しているのだから、独自に調べて創作したというか。林紘のばあい、常識的に考えて、それはありえない。

逆にいえば、この冒頭部分を見て、戯曲を小説化したという説明の方が奇妙であることに気づかなければおかしい。単純な疑問がわきあがる。研究者たちは、英文と林訳を比較対照したことがあるのだろうか。両者を見たうえで、林紘はもとの戯曲を小説に変えたと考えているのか。私には、不思議に思われてしかたがない。林訳を見ていれば、小説化などありえないとわかる。まったくの別物であることは、誰の目にもはっきりしている。自分で比較対照したうえで小説化だと考えたのであれば、鄭振鐸が行なった林訳批判に呪縛されている。

私がいだいたのは、簡単な疑問である。着想といってもいい。

ラム姉弟の『シェイクスピア物語』を原著者シェイクスピアと表示して漢訳したのならば、そのほかの作品も同様ではなからうか。つまり、シェイクスピア原作の歴史劇を小説化した英文原作がもともと存在していたのではないか、という推測である。原作と林訳を対照すれば、そのあまりの隔たりから当然のように思い至るはずだ。

小説化されたシェイクスピア作品について知りたいと思った。大部な『研究社シェイクスピア辞典』（研究社出版株式会社2000.11.10）を見る。しかし、チャールズ・ラムの項目はあっても、ほかにそれらしいものはない。『シェイクスピア大辞典』（2002）も同様だ。

あるところに、「ラムの「シェイクスピア物語」というと全く少年・少女のよみものと考え、これを馬鹿にする風が少しばかり英文学をかじったものの中に見いだされるけれどもこれはとんだ誤りであると云はなければならない」*14と書いてある。まとまった説明がない理由がわかったような気がする。書きかえ、小説化という作業に関しては、日本の研究者は興味をもたないらしい。児童用を意図した書物を取り上げるのは専門家としての沽券にかかわるのだろうか。そうであるならば、中国でも同じ状況だと思われる。（だが、児童文学の専門書では様子が違う。あとで触れたい）

参考にできるものがなければ、独自に調べるほかない。いつものように手探りではじめる。

以下に示すのは、いずれも戯曲を小説化した英文原作である。これでもまだ不十分だろう。とりあえず入手した書物から検討する。出版年を限定して集めた。その全部が、林紓+陳家麟が漢訳する際の底本となった可能性を持つ。

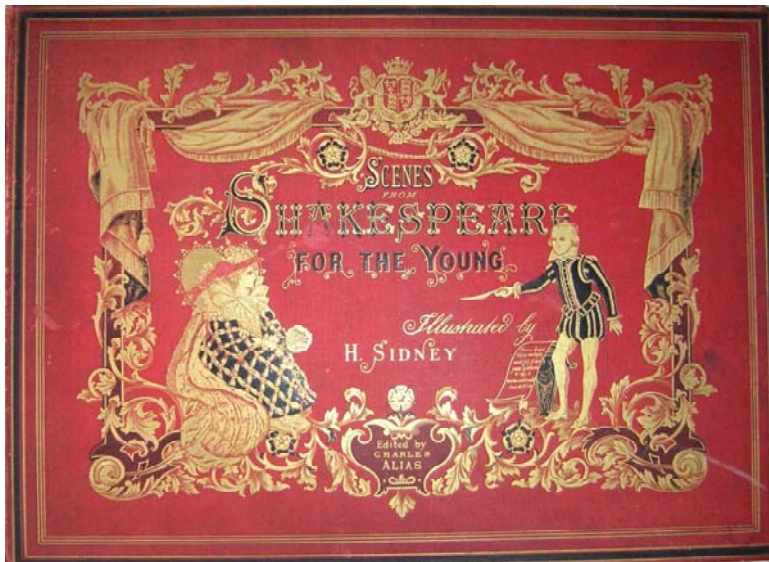
小説化本のいくつか 第1段階

底本探索は、原本を手元におかなければはじまらない。個人で収集するには限度がある。少数しか入手できなかった。集めたいいくつかの書籍を発行順に配列する。便宜的に1から7までの番号をふった。

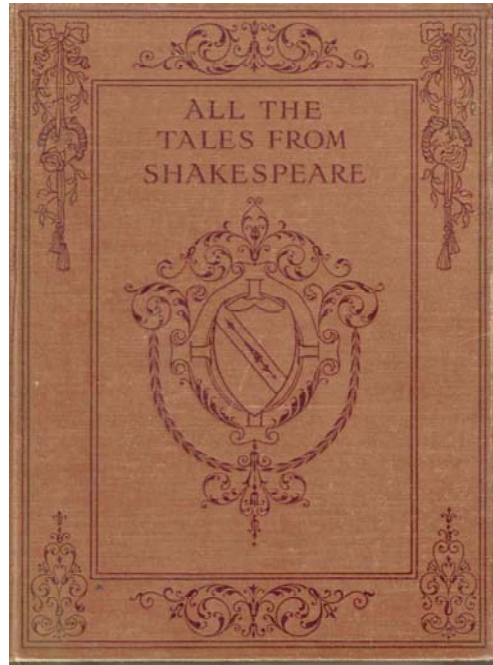
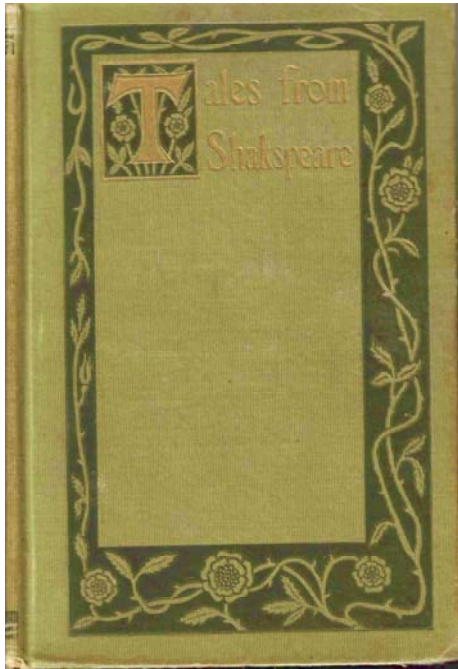
結論から先にのべる。以下の7種類は、私が調査した結果、林訳の底本ではないことが判明した。これだけ集めるにも少なくない労力が必要とされた。せっかくだから、少し説明をしておきたい。

- 1 チャールズ・エイリアス Charles Alias (editor) 編集 & ハーバート・シドニー Herbert Sidney (illustrator) 挿絵 『青年向けシェイクスピアの風景 Scenes from Shakespeare for the Young』 Ent. Sta. Hall, London, 1885

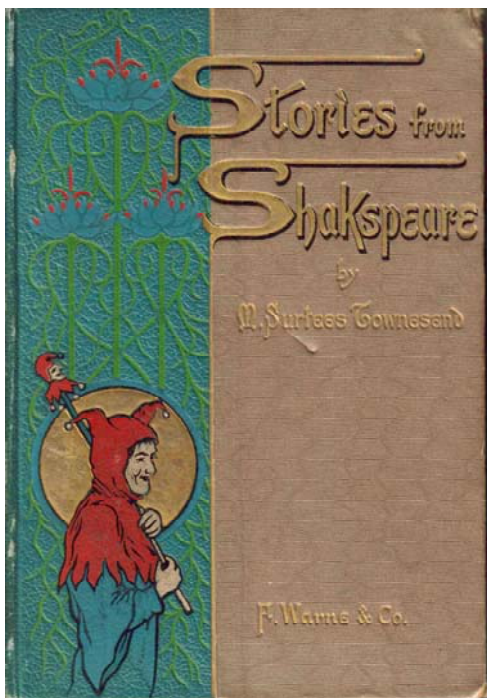
「前言 Preface」は、ブランチャード E. L. Blanchard の執筆になる。大判。見開き左に作品要約をかかげ、右に彩色絵図を配置する。収録しているのは「ハムレット」など全14作品だ。ただし、梗概のみ。



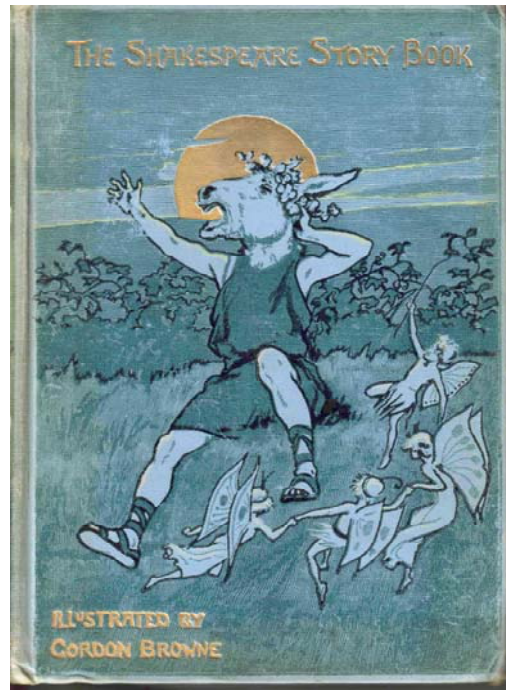
1 : Alias “Scenes from Shakespeare for the Young”



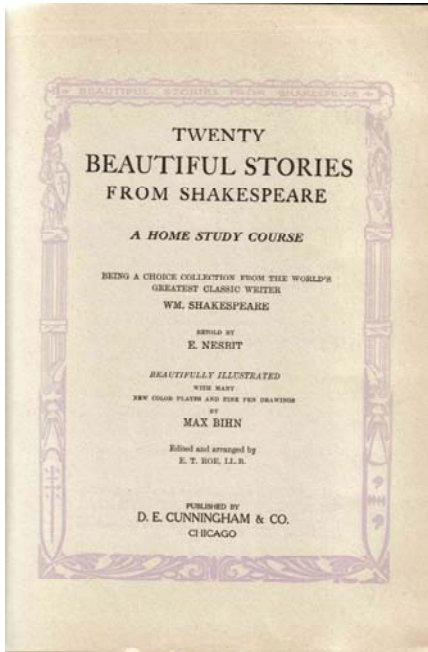
2 : Morris “(All the) Tales from Shakespeare” 1896 / 1912



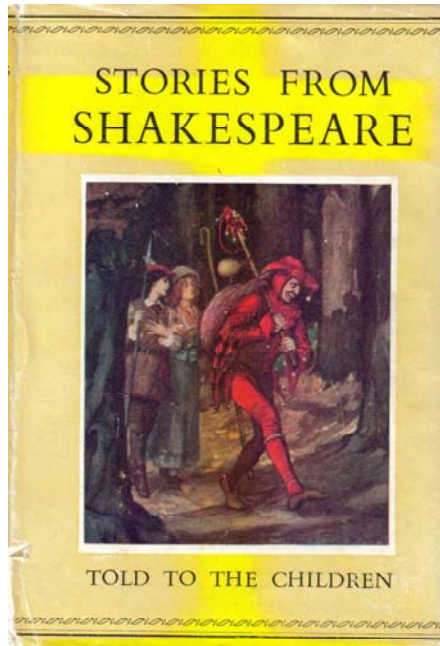
3 : Townesend “Stories from Shakespeare”



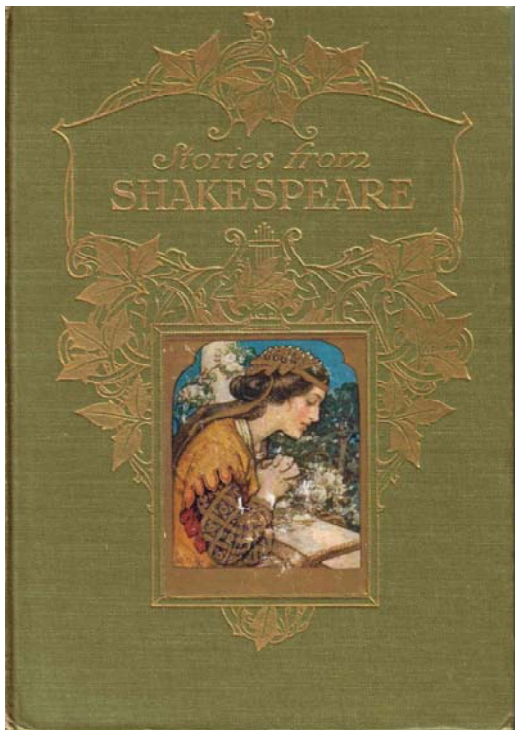
4 : Macleod “The Shakespeare Story-Book”



5 : Nesbit “Twenty Beautiful Stories From Shakespeare”



6 : Lang “Stories From Shakespeare, Told to the children”



7 : Carter “Stories from Shakespeare”

2 ハリソン・S・モリス Harrison S. Morris 『シェイクスピア物語 (All the) Tales from Shakespeare』 J. B. Lippincott Company, Philadelphia, 1896

“TWO VOLUMES IN ONE”と表示がある。ラム姉弟のものと同冊するアメリカ初版(1893)があるというが、未見。1912年の(ロンドン) William Heinemann 社版は、2冊本だ。第1冊がラム姉弟、第2冊がモリスの小説化作品を収録する。

3 M・サーティーズ・タウンゼンド M. Surtees Townesend 『シェイクスピア物語 Stories from Shakespeare』 Frederick Warne & Co. and New York, 1899

4 メアリ・マクラウド Mary Macleod 『シェイクスピア物語 The Shakespeare Story-Book』 1902

5 イーディス・ネズビット Edith Nesbit 『20のシェイクスピア物語 Twenty Beautiful Stories From Shakespeare』 D.E.Cunningham & Co., Chicago, 1907

同氏“Beautiful Stories From Shakespeare For Children”(1907)は未見。

6 ジーニィ・ラング Jeanie Lang 『児童向けシェイクスピア物語 Stories From Shakespeare, Told to the children』 Thomas Nelson and Sons LTD, London and Edinburgh, 1909

7 トーマス・カーター Thomas Carter 『シェイクスピア物語 Stories from Shakespeare』 George G.Harrap, London, 1911

書名を日本語になおせば、みな『シェイクスピア物語』になってしまう。英文の微妙な違いを書き分けるのはむづかしい。

別に掲げた一覧表1は、ラム姉弟『シェイクスピア物語』所収の作品だ。ラム以外の小説化本たちとどの作品で重複するのかを記入した。「澁外」は『澁外奇譚』(達文社 光緒二十九(1903)。書影による。澁は海の意)を示す。数字は、上記の各版本を意味する。x印は、該当版本に作品が収録されていないことを示す。

一覧表2は、本稿で問題にしている林訳シェイクスピア歴史劇と小説化本の対照をかかげる。

一覧表 1 ラム姉弟『シェイクスピア物語』作品対照表

作品の日本語訳は、チャールズ+メアリ・ラム著、大場建治訳『シェイクスピア物語』(沖積舎2000.11.25)によった。ラム姉弟版を除いた諸版には、掲げた作品以外にも小説化したものがある。しかし、本稿には直接関係しないので該当しないものは記入していない。

The Tempest あらし	/ 1 / x / 3 / 4 / 5 / 6 / 7 / 8 / 9 / x / 11
A Midsummer Night's Dream 真夏の夜の夢	/ 1 / x / 3 / 4 / 5 / 6 / 7 / 8 / 9 / x / 11
The Winter's Tale 冬の夜ばなし	/ 解外 / 1 / x / 3 / 4 / 5 / 6 / 7 / 8 / x / x / 11
Much Ado about Nothing から騒ぎ	/ 1 / x / x / 4 / 5 / x / x / 8 / 9 / x / 11
As You Like It お気に召すまま	/ 1 / x / 3 / 4 / 5 / 6 / 7 / 8 / x / x / 11
The Two Gentlemen of Verona ヴェローナの二紳士	/ 解外 / x / x / x / 4 / 5 / x / x / 8 / x / x / 11
The Merchant of Venice ヴェニス商人	/ 解外 / 1 / x / 3 / 4 / 5 / 6 / 7 / 8 / 9 / x / 11
Cymbeline シンベリン	/ 解外 / x / x / 3 / 4 / 5 / x / x / 8 / 9 / x / 11
King Lear リア王	/ 1 / x / x / 4 / 5 / x / 7 / 8 / 9 / x / 11
Macbeth マクベス	/ 1 / x / 3 / 4 / 5 / x / 7 / 8 / 9 / x / 11
All's Well that Ends Well 終わりよければすべてよし	/ 解外 / x / x / x / x / 5 / x / x / 8 / x / x / 11
The Taming of the Shrew じゃじゃ馬ならし	/ 解外 / x / x / x / 4 / 5 / 6 / x / 8 / x / x / 11
The Comedy of Errors まちがいの喜劇	/ 解外 / 1 / x / x / 4 / 5 / x / 7 / 8 / x / x / 11
Measure for Measure 尺には尺を	/ 解外 / x / x / x / x / 5 / x / x / 8 / x / x / 11
Twelfth Night; or, What you Will 十二夜	

	/ 海外 / 1 / x / x / 4 / 5 / x / x / 8 / x / x / 11
Timon of Athens アテネのタイモン	
	/ x / x / x / x / 5 / x / x / 8 / 9 / x / 11
Romeo and Juliet ロミオとジュリエット	
	/ 1 / x / x / 4 / 5 / x / 7 / 8 / 9 / x / 11
Hamlet, Prince of Denmark ハムレット	
	/ 海外 / 1 / x / 3 / 4 / 5 / x / 7 / 8 / 9 / x / 11
Othello オセロー	
	/ 1 / x / x / 4 / 5 / x / x / 8 / 9 / x / 11
Pericles, Prince of Tyre ペリクリーズ	
	/ x / x / x / x / 5 / x / x / 8 / x / x / 11

一覧表2 林訳シェイクスピア歴史劇

Richard II リチャード2世[雷差得紀]	
	/ x / 2 / x / x / x / x / x / 8 / x / 10 / 11
Henry IV ヘンリー4世[亨利第四紀]	
	/ x / 2 / 3 / x / x / x / x / 8 / x / 10 / 11
Henry VI ヘンリー6世[亨利第六遺事]	
	/ 1 / 2 / x / x / x / x / x / 8 / x / 10 / 11
Julius Caesar ジュリアス・シーザー[凱徹遺事]	
	/ x / 2 / x / x / x / x / 7 / 8 / 9 / 10 / 11
【参考】	
Henry ヘンリー5世[亨利第五紀]	
	/ x / 2 / 3 / x / x / x / x / 8 / x / 10 / 11

一覧表を見て次のことがわかる。

児童向け（といっても外国人にとっては一概に易しいというわけではない）に、複数の著者が原作を書きかえて小説化した作品は、ラム姉弟のものと重複することが多い。推察すると、ラム姉弟で有名になった作品について、後の著者たちが独自の筆で小説化することが流行した。

例外は、当然ながらある。ラム姉弟とは異なる作品を意識的に小説化しているものだ。「リチャード2世」ほかの歴史劇を対象とする。これらが、林紘の翻訳作品と共通している。だからこそ、その可能性を、今、私は追求しているのだ。

2のモリス版がさがしているものに該当する(らしい)。こちらは、さらに、ラム姉弟版と合冊にしている版本があることはすでに述べた。

原本を入手するまでは、私は、これに期待した。シェイクスピア作品を互いに補うかたちになっているからだ。林紘がラム姉弟の『シェイクスピア物語』を漢訳して『吟辺燕語』を作ったのであれば、それと合訂してある別の作品に基づいてさらに漢語に翻訳した可能性が高いと考えた。まことに理解しやすいではないか。

理解しやすいのは、確かにそうなのだ。ただし、説明のつかないことがある。『吟辺燕語』の発行が1904年であるにもかかわらず「雷差得紀」ほかの発表が1916年と遅れる。合冊になっているならば、林訳の公開は同時であってもいいはずだ。12年間の時間差を説明することができない。

原本が手元にとどく。原文を比較対照したところ林訳の底本ではなかった。そうやすやすとは問題解決にはいたらない。簡単なことならば、誰かほかの研究者がとうの昔にやっている。

しかし、モリス版の存在は、ほかにも同類の書籍が出版されている可能性を示唆しているように私には思われた。さらに探索を続ける。

小説化本のいくつか 問題解決

調べてみると、シェイクスピア作品を児童向けに小説化する作家は、多数存在することがわかった。上記の著者たちを除いて、現代まで含めると、ざっと10人以上を数えることができる。実際は、この数倍もいるのではないか。ラム姉弟だけではなかったのだ。別のいい方をすれば、ラム姉弟が行なったと同様の試みは現在も継続されている。時間の推移により言葉づかいも変わってくる。新しい翻訳がたえず世に問われるはずである。

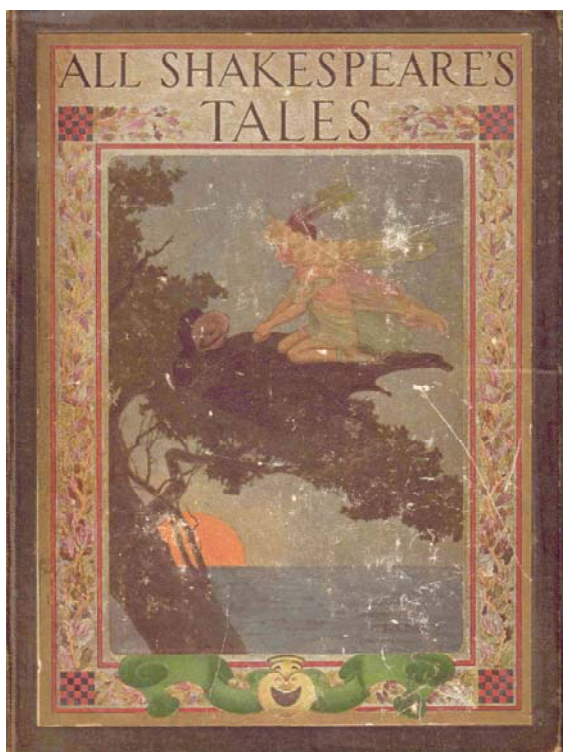
もうひとつ、シェイクスピアの小説化本は、どうやら図書館に所蔵されるというよりも人々のあいだに流通する性質のものらしい。なるほど、研究されない理

由だろう。

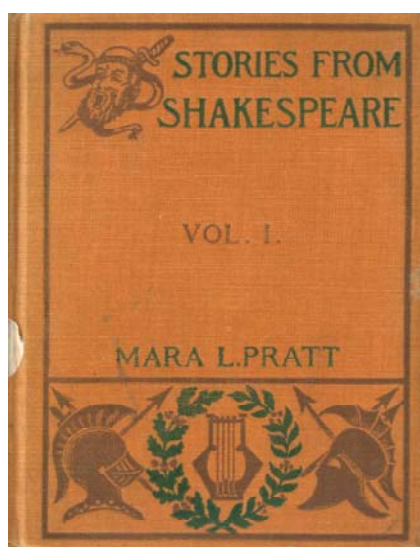
林訳シェイクスピアの歴史劇が雑誌に掲載されるのは、1916年が主となる。ゆえに、英文原作はそれ以前に出版されていない。必然的に数は限られてくる。とはいえ、改訳者の名前も、また書名も不明のままに探索するのは、まさに雲をつかむような話である。なんとか手元にたぐり寄せたのが、以下の小説化本だ。番号を上から継続させて示す。

8 ウィンストン・ストークス Winston Stokes 『全シェイクスピア物語 All Shakespeare's Tales』 Frederick. A. Stokes Company, New York, 1911

扉には TALES FROM SHAKESPEARE BY CHARLES AND MARY LAMB / AND / TALES FROM SHAKESPEARE BY WINSTON STOKES とある。色彩挿絵は、カーク Maria L.Kirk だ。前半はラム姉弟版そのままを、後半にストークスのも



8 : Stokes "All Shakespeare's Tales"



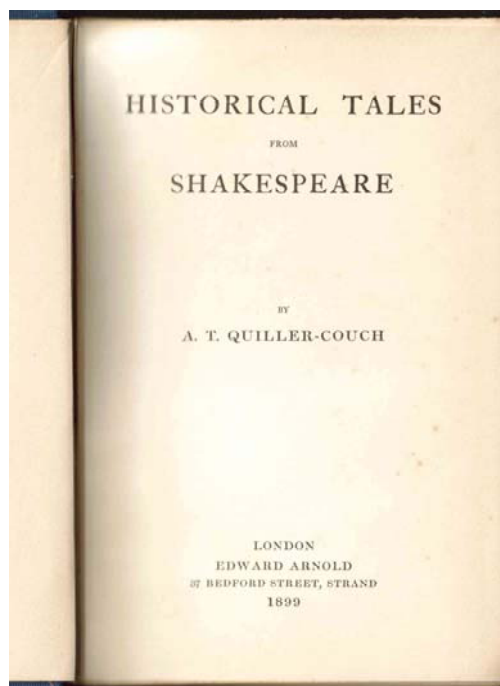
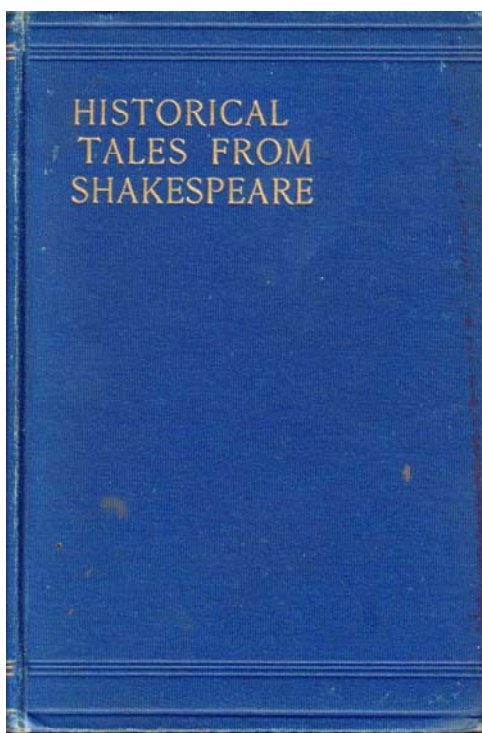
9 : Pratt "Stories from Shakespeare"

のを収録している。両者ともに『シェイクスピア物語』と称し、それを合訂させているから『全シェイクスピア物語』となる。

ストークスも、モリスとおなじく歴史劇を小説化する（一覧表に数字8で示した）。両者は独自に小説化しているから、それぞれの英文は、当然のことながら異なる。林訳と見比べると、こちらも底本ではないことがわかった。

9 マラ・ルイス・プラット Mara Louise Pratt 『シェイクスピア物語 Stories from Shakespeare』 vol. , Educational Publishing Company, Boston, 1890 / vol. , 1891 第3冊まで出版されているらしい。第1、2冊を見た。これに収録されているジュリアス・シーザーは、林訳の底本ではない。

いま、私は、探索した順序にしたがって紹介している。的は絞られてきているといえるだろう。



10初版：Quiller-Couch “Historical Tales From Shakespeare” 1899

10 A・T・クイラー=クーチ A. T. Quiller-Couch 『シェイクスピア歴史物語』

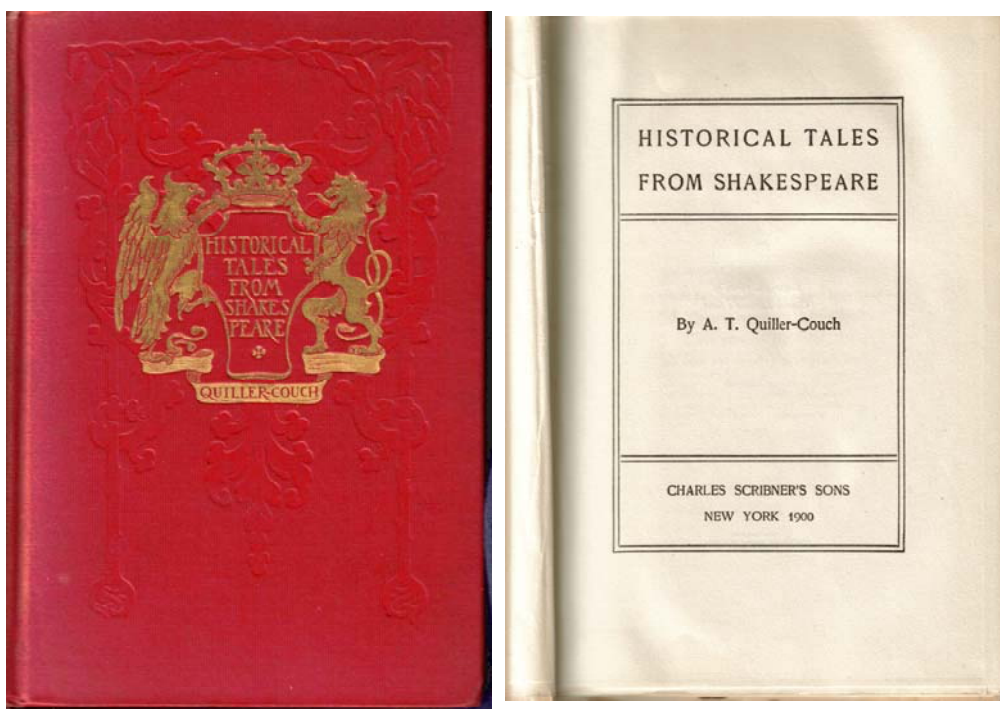
Historical Tales From Shakespeare』 Edward Arnold, London, 1899

こちらには、重版がある。Charles Scribner's Sons, New York, 1900 だ。ふたつともに書影を掲げる。説明は、初版にもとづいて行なう。

著者の名前は、Arthur Thomas Quiller-Couch という。

序文 (PREFACE) が 6 頁、本文は附録を含めて368頁である。巻末には書店の広告が32頁もついている (重版はクイラー=クーチが「Q」の署名で発表した小説の広告)。

収録作品は以下のとおり。林訳と重なるものに 印をつける。(一覧表2には、番号「10」を記入した)



10重版：Quiller-Couch “Historical Tales From Shakespeare” 1900

Coriolanus コリオレイナス pp.1-37

Julius Caesar ジュリアス・シーザー pp.38-77 (注：原文はCaesar)

King John ジョン王 pp.78-104

King Richard the Second リチャード 2 世 pp.105-134

King Henry the Fourth ヘンリー 4 世 pp.135-218

King Henry the Fifth ヘンリー 5 世 pp.219-256

King Henry the Sixth ヘンリー 6 世 pp.257-312

King Richard the Third リチャード 3 世 pp.313-364

Appendix pp.365-368

「ジュリアス・シーザー」の冒頭部分を引用して日本語をつける。これと比較対照するために、林訳をふたたび示す。

Four hundred and fifty years had passed and the Rome of Coriolanus had become the mistress of the world. But all these years had not healed the quarrel between the patricians and plebeians; for as the city increased in size and dignity and empire, so her citizens increased in numbers and grew less and less inclined to submit to the rule of a few noble and privileged families. p.38

450年が経過し、コリオレイナス（注：紀元前ローマの伝説的勇士）のローマは世界の覇者となった。しかし、それらの年月は貴族と平民のあいだの紛争をなくすことはなかった。なぜなら帝国が領土と威厳を増すにつれ、市民は数を増加させて、だんだんと少数の特権階級に服従したくなる気持ちを減少させたからである。

【林訳】羅馬立国。可四百五十年。此四百五十年中。幾欲一統欧西。可云盛矣。惟貴族平民之乖忤。終未臻於和平。以羅馬發祥。特一小城。已而統攝全欧。拓地既広。殖民亦衆。民衆則智識日諳。意气激昂。万不能屈服於貴顕大臣之下。1頁

ローマが建国してまさに450年になる。この450年間にヨーロッパを統一しようと旺盛であるといえる。ただ、貴族と平民が離反し、平和状態にはいたっていない。ローマは、特に小さな都市から発祥し全ヨーロッパを統一してしまった。領土の拡張はひろく、殖民も増加した。そのため、民衆は日々知

識にたけてきており意気は軒昂にして、高位高官重臣に決して屈服しようとはしなかった。

林訳は、英文原作に一字一句が忠実であるわけではない。だが、原文の意味するところを基本において十分にすくい取っている。

そのほか、「リチャード2世」「ヘンリー4世」「ヘンリー6世」などの林訳もクイラー=クーチ版によっていることを確認した。

ここで結論である。林訳シェイクスピア歴史劇の底本は、クイラー=クーチの小説化本であると断定する。

クイラー=クーチについて

底本がクイラー=クーチ版だとわかると、周囲の状況が変わってくる。つまり、彼についての事柄を探索することができるようになったという意味だ。

『研究社シェイクスピア辞典』には、「クウィラ=クーチ」の項目(193頁)で、『集英社世界文学大事典』第1巻には、「クイラー=クーチ」(856頁)で紹介がある。『シェイクスピア大辞典』では項目を立てない。

それらによると、クイラー=クーチ(1863-1944)は、オックスフォード大学卒業後、故郷で小説、詩などを発表していた。1912年、ケンブリッジ大学の初代英文学教授に就任する。筆名Qを使用する小説家でもあり、ドーヴァー・ウィルソンとともに第2ケンブリッジ版シェイクスピアの監修にあたったともある。シェイクスピア研究の専門家だとわかるのだ。だが、辞典の説明では、シェイクスピアの歴史劇を改編のうえ小説化していることへの言及がない。彼の生涯においては、記述を省略してもいい事柄であるらしい。

ただし、児童文学ではあつかいが異なる。

ハンフリー・カーペンター、マリ・プリチャード著、神宮輝夫監訳『オックスフォード世界児童文学百科』(原書房1999.2.10 / 1999.3.3第二刷)には、「クイラー=クーチ,アーサー(・トマス)」(217頁)の項目がある。こちらにもシェイクスピア作品には言及がない。あつかいが異なると私がいうのは、別項目に「シェイクスピア劇」(316-317頁)があって詳しいからだ。児童のために再話された作品として、

以下の名前をあげている。関係のありそうな名前だけを抜き出す。

ウィリアム・ドッド（1752年版）、エンフィールド（1774年版）、ラム姉弟（1807年版）、トマス・バウドラー（1818年版）、メアリ・カウデン・クラーク（1850-2年版）、メアリ・シーモア（1883年版）、E・ネズビット（1897年版）、メアリ・マクラウド（1902年版）など。ここに「アーサー・クイラー・クーチ卿の『シェイクスピアの歴史物語』（*Historical Tales from Shakespeare*, 1899）は、ラム姉弟が省いた数作の歴史劇の再話を収めている」（316頁）と説明がある。

いま、クイラー＝クーチだとわかっているから納得のいく記述だと思う。最初にこの解説を読んでいれば、一直線にクイラー＝クーチにたどり着いていたかという、やはり、そうはいかなかったらう。ラム姉弟以外に多くの小説化本が出版されているのが明らかだからだ。

クイラー＝クーチ版原文の一部が日本語注釈付で出版されている*15。

中国の『莎士比亞大辞典』には、「奎勒庫奇爵士」という表記で記載される（842-843頁）。サーの称号を持つから「爵士」である。辞書だから詳細な記述がないのもしかたがない。ただ、この辞典は、クイラー＝クーチの歴史劇が漢訳されていることを述べているのが役立つ（1349-1350頁）。湯真訳『莎士比亞歴史劇故事集』（中国青年出版社1981）である。説明によると、クイラー＝クーチが改編したシェイクスピアの歴史劇は、ラム姉弟版の姉妹編だと称されているという。残念ながら、それだけの説明しかしない。林訳についての言及はないのだ。辞典の執筆者は、重要な事実を見逃したらしい。それとも、湯真の方が。

クイラー＝クーチ版を翻訳した湯真の説明をさがしだして読む。

「訳者前言」には、クイラー＝クーチの略歴について、また彼が書きかえたシェイクスピアの歴史劇について解説している。その最後部分に、蕭乾より原書を贈られた*16とする。

蕭乾は、ラム姉弟の原作を漢訳しているのだ。（英）査爾斯・蘭姆、瑪麗・蘭姆改写、蕭乾訳『莎士比亞戲劇故事集』（原名『莎士比亞故事集』1956.7初版未見。西安・太白文藝出版社2005.1）がある。蕭乾は、その「訳者前言」でラム姉弟の物語についてクイラー＝クーチが歴史劇を物語にした、と説明する。これが、湯真に贈られた原本だろう。

以上を見ると、蕭乾も湯真も、驚いたことに林紓の翻訳にはまったく言及しない。つまり、ふたりとも、林訳がクイラー＝クーチ版にもとづいているとは夢にも思わなかったのだろう。林紓はシェイクスピアの歴史劇から直接小説に変形させた、というのが定説だ。この定説のために彼らの思考が束縛されていたと考えられる。

クイラー＝クーチ版を所有していた、あるいはそれを翻訳した人でさえ、林訳との関係には気づかなかったことになる。それほど林訳にまつわる定説は強固で揺るぎないものだった。

結論を出したところで版本を追加するというのも具合が悪い。悪いが、別の版本も入手するよう努力しました、ということで説明しておく。

11 クレイトン・エドワーズ Clayton Edwards 『全シェイクスピア物語 All Shakespeare's Tales』The Hampton Publishing Company, New York, 1911

こちらも前半がラム姉弟版で、後半がエドワーズ版だ。色彩挿絵もカークである。

表紙を見て奇妙な感じを受けた。どこかで見たことがある。よく見なくてもわかる。8のストークス版と本文の頁数まで同じだ。表紙絵、判型もまったく同じ。表紙をくるむ布色、色彩挿絵の数と配置頁が違うだけ。

扉のうらに“Copyright, MCMXI, by / Frederick.A.Stokes Company”とある。8のストークス版をもとに焼き直したものか。本文が同じなのだから、エドワーズはストークスの変名なのだろうか。詳細は不明だ。

4 結 論

版本の追加説明で本稿最後の締めがゆるくなってしまった。追跡の過程を時間順にのべた結果である。

林訳シェイクスピア歴史劇の底本は、クイラー＝クーチの小説化本『シェイクスピア歴史物語』だと再度確認しておきたい。この瞬間に、林訳についての鄭振鐸の批判は、事実無根であると判明する。定説そのものが、林訳シェイクスピア冤罪事件であったのだ。

林紓 + 陳家麟は、小説化された英文原作にもとづき漢訳した。だが、その書きかえた人物の名前を明らかにしなかった。単にシェイクスピア原著と表記したのは、林紓の間違いになるのだろうか。

もし、林紓の間違いであると主張する研究者がいれば、以下の魯迅も間違いであったと批判してほしい。

(法) 囂俄著、庚辰(魯迅)訳「哀塵」『浙江潮』第5期 光緒29.5.20(1903.6.15)

ユゴー Victor Hugo 著だが、魯迅がよったのは、ウヰクトル、ユーゴー著、森田文蔵訳「フハンティーンFantineのもと(一千八百四十一年)」である。

(美) ^{ママ}培倫著、中国教育普及社(魯迅)訳印『(科学小説)月界旅行』東京・進化社 光緒二十九年十月(1903)

原作は、ジュール・ヴェルヌ Jules Verne“DE LA TERRE A LA LUNE”1865 だ。魯迅が底本としたのは、井上勤訳『(九十七時二十分間)月世界旅行』(三木佐助発行1886.9)である。

(英) ^{ママ}威男著、之江索子(魯迅)訳「地底旅行」『浙江潮』第10期 光緒二十九年十月二十日(1903.12.8)

同じく、ヴェルヌの“VOYAGE AU CENTRE DE LA TERRE”1864 だ。三木愛花、高須治助訳『拍案驚奇 地底旅行』(九春社1885.2)によって魯迅は漢訳した。

魯迅の漢訳は日本語にもとづいているが、彼はそれを明記していない。

「莎士比[シェイクスピア]原著、奎勒庫奇[クイラー=クーチ]改写、林紓、陳家麟同訳」と書けば、より正確だったということはできる。だが、現在から見れば、という話だ。しかし、当時、林紓らは、そのように表記しなかった。それだけのことにすぎない。

林紓 + 陳家麟が、クイラー=クーチ版シェイクスピアにもとづいて漢訳したのであれば、勝手に小説化したといういままでの批判は、根本から成立しない。だから、冤罪だというのだ。私はこれを「林訳シェイクスピア冤罪事件」だと命名する。冤罪なのだから林紓 + 陳家麟には責任の発生する余地がない。

冤罪事件になったのは、それを誘導した人物がいたからだ。

最初は、劉半農だ。それを追認した胡適にも責任がないわけではない。

だが、最大の責任者は、「ヘンリー 4 世」などの作品名を具体的に掲げて批判

した鄭振鐸ということになる。今後、鄭振鐸は、林紘に無実の罪をきせた責任を追及されることになる。

研究者たちの過去の記述については、すでに十分すぎるほど紹介した。多くの研究者が、シェイクスピア原作を小説化したことが林訳の欠陥だ、と指摘しつづけ、批判し続けてきた。定説を踏襲し、それをくりかえすことによってさらに強化し、長年にわたってあきもせず林紘を罵倒してきた。林訳についての最終的な評価をたとえ正にしようとも、翻訳に欠陥があると書くことは、林紘に対しての大きな罵りになる。だが、林紘が反論してくる心配はまったくなかった。また、ほかの研究者から批判されることもない。先行論文のどれもが、説明不要の定説だと認定している。だから誤っているはずがない。例外はない。自分がそれに追随してどこが悪いのか。研究者自身は絶対的安全地帯に身を置きながら、林紘に濡れ衣を着せつづけ、林紘をむち打つ行列に心おきなく並んだというわけだ。ゆえに、私はこれを「林紘を罵る快樂」と称するのである。

林訳シェイクスピア歴史劇については、小説化という行為そのものが林紘+陳家麟には存在しなかった。根拠がないのだから、林訳に向けられた批判は成立しない。加えるに、理由のない批判が長い期間にわたって継続され、これに加担した研究者は多数にのぼる。

事実無根、長期間、大規模というみつつの理由から見ても、これは、中国翻訳研究史上まれに見る一大冤罪事件なのである。

まさか、林紘+陳家麟の冤罪を、しかも日本において晴らすことができようとは、私は想像したこともない。

林紘生誕の1852年から数えて155年目、1916年シェイクスピア歴史劇クイラー＝クーチ版小説化本の林訳発表から91年目、1924年の林紘逝去、鄭振鐸の論文から83年目にあたる。私は林紘にむけてグラスを挙げ、無言で冷たいカルピスを口にしたのだった。

【注】

- 1) 林薇『百年沈浮 林紘研究綜述』天津教育出版社1990.10。166-167頁

- 2) 林薇『百年沈浮 林紘研究綜述』196-197頁
- 3) 樽本「林紘を罵る快樂(2)」『清末小説』第28号2006.12.1
- 4) リライト rewrite、リテル retell などという。日本語では、改作、書き直し、書きかえ、再話(児童向けにわかりやすく書き直すこと)などのことばを当てる。リライトとそのままいってもいいかもしれない。また、原作を書き直す、の変形として翻案、要約(ダイジェスト)といってもいいかもしれない。ただ、本稿では、戯曲を小説に書きかえたという意味に限定して「小説化」を使う。ノベライズ novelize ということだ。
- 5) 錢鍾書『林紘的翻譯』に言及がある。錢鍾書等『林紘的翻譯』北京・商務印書館1981.11。42-43頁。なお、錢鍾書『七綴集(修訂本)』(上海古籍出版社1985.12初版未見/1996.2第4次印刷)所収の該文とは、文章と注の一部が異なる(98-99頁)。
- 6) 胡適は、ここで林紘を大罪人にしてしまったが、5年後の評価はといえば、正の方面に重点を移した。「彼(注:林紘)の大きな欠陥は原文を読むことができないというところにあった。しかし、彼は結局のところ、少しばかり文学的天才のある人であった。ゆえに、もしよい助手がいれば、彼の原書を理解する文学趣味は、原文をおおざっぱにしか読むことのできない現在の多くの人たちにくらべても、往々にしてとても高かった。現在、多くの人は原書について完全に理解しているとはいえないばかりか、彼らの白話を運用する能力はまた林紘が古文を運用する能力に遠く及ばないのだ。彼らも林訳を批判するというのであれば、それは林紘に罪をなすりつけることになる」(胡適「五十年来中国之文学」『最近之五十年』上海・申報社1923.2初版/上海書店影印1987.3(出版説明に1922年2月初版本とあるが1923年の誤り)また、『晚清五十年来之中国』と改題影印した香港・龍門書店(<1922年上海初版とする>1968.9再版)本がある。6頁)。大罪人発言については、胡適はすっかり忘れてしまったらしい。
- 7) 鄭振鐸「清末翻譯小説对新文学的影響」『今代文藝』第1号1936.7.20。116頁
- 8) 樽本「『漢訳東西洋文学作品編目』とその編者」『清末小説から』第80号2006.1.1。
- 9) この部分は引用符をつけていない。ところが、あたかも林紘「小説雜考」からのように文章名を明記している。林紘の該文を読んでも該当する部分はない。謝飄雲の意図が不明だ。
- 10) 相浦晃『考証・比較・鑑賞 二十世紀中国文学研究論集』(北京大学出版社1996.8)には該論文を全文は翻訳収録していない。該当部分は、未訳である。
- 11) 瀬戸宏『中国話劇成立史研究』(東方書店2005.2.25。127頁)でも間違ったままだ。
- 12) 未見。孟兆臣『中国近代小報史』北京・社会科学文献出版社2005.10。284頁
- 13) William Shakespeare, Wells and Taylor (ed.) "THE COMPLETE WORKS", Oxford University Press. 1988. 601頁。日本語訳は、次のものによった。シェイクスピア著、坪内逍遙訳「チ

ユーリヤス・シーザー』『ザ・シェイクスピア』第三書館2002.8.15。697頁。くり返し記号は文字になおす。

14) 村岡勇訳『シェイクスピア物語』角川文庫1952.7.30 / 1966.8.30二十四版。398-399頁

15) 長澤英一郎注釈『ジュリアス・シーザー物語』研究社印刷株式会社1950.6.25 研究社小英文叢書67

16) 奎勒-庫奇改写、湯真訳『莎士比亞歴史劇故事集』北京・中国青年出版社1981.3。8頁

林訳イブセン冤罪事件

『清末小説から』第86号(2007.7.1)に掲載。林訳イブセンも林紘冤罪事件のなかのひとつである。冒頭にシェイクスピアが出てくるのは、探索の過程を説明するとどうしてもそういう順序になるのだ。林紘は、やってもいないことを理由に長年にわたって批判され罵倒され続けてきた。それに比較すれば、彼の無実を私が説明してくり返すことなど、なにほどのことがあるうか。林紘の冤罪を、今後も私は主張する。

林訳には、大きな欠陥がある。そのひとつは、もとの戯曲を小説体書き改めたことだ。こう指摘され、批判されてきた。関連論文を書いた研究者の多くがその見解を支持している。だから、これが学界の定説であり通説でもある。

1 シェイクスピアのばあい

代表的な例は、林訳シェイクスピアだ。といっても『吟辺燕語』では、ない。この底本は、ラム姉弟の『シェイクスピア物語』だとわかっている。ゆえに、ここでは述べない。戯曲を小説化したと批判されるのが、以下の歴史劇についてなのだ。

林紘が陳家麟と共訳して1916年刊行の『小説月報』に掲載したのが、「リチャード2世 RICHARD II [雷差得紀]」、「ヘンリー4世 HENRY IV [亨利第四紀]」および「ジュリアス・シーザー JULIUS CAESAR [凱徹遺事]」だった。また、単行本の『ヘンリー6世 HENRY VI [亨利第六遺事]』(上海商務印書館1916.4 説部

叢書第3集第1編/上海商務印書館 林訳小説叢書第2集第15編) などもある。

英国シェイクスピア [莎士比] 原著とだけしか書かれていない。林紘 + 陳家麟の漢訳を見れば、それが小説体になっている。だから、鄭振鐸は、もとの戯曲を翻訳して小説化したと断定した。作品の体裁を変更するという恣意的なその翻訳態度を批判したので。

だが、事実は異なる。

林訳シェイクスピアには小説化本があった。もとの劇本をイギリス人作家が小説化したものだ。何かといえば、クイラー=クーチ A. T. Quiller-Couch 『シェイクスピア歴史物語 Historical Tales From Shakespeare』(Edward Arnold, 1899) である。

この新発見は重要な意味をもつ。

林紘は、シェイクスピアの原作にもとづき、そこから直接翻訳して小説化した、といままでは考えられてきた。だから、批判はそこに集中した。くりかえして申し訳ない。1924年の鄭振鐸にはじまる。これが、間違っていたことが証明されたのである。

ことばをかえれば、シェイクスピア原作と林訳のあいだには、もう1種類の英文原作がはさまっていた。すなわち、林訳は、シェイクスピア原作に直接もとづいたのではなく、それを小説化したクイラー=クーチ版を翻訳した。もとが小説化本なのだから、漢訳が結果として散文になるのは当然のことだ。

林紘は戯曲と小説の区別がつかなかった、と批判した鄭振鐸の方が誤っていたことになる。林紘にとってみればとんでもない濡れ衣だし、まったくの冤罪だった。学界に定説として存在していた従来の林紘批判は、根底からくつがえる。

鄭振鐸は、林訳シェイクスピアのみならず、林訳イブセンについても同様の批判を行なっている。

2 イブセンのばあい

ヘンリック・イブセン (Henrik Ibsen, 1828-1906) は、説明するまでもなくノルウェーの劇作家、詩人である。

本稿の主題は、林紘が翻訳したイブセン作品についてだ。原作は「幽霊」、漢

訳名を『梅孽』という。

鄭振鐸は、林訳の欠陥をあげてシェイクスピアとイブセンを併記した。ゆえに、その批判は同じ場所に出てくる。

鄭振鐸「林琴南先生」(『小説月報』第15巻第11号1924.11.10。傍線省略)からイブセンの部分だけを引用する。

イブセンの『幽霊 [群鬼 (梅孽)]』などすべて彼は翻訳して別の本に変えてしまった 原文の美しさと風格、および重要な対話は完全に消滅してしまった。これはまったくチャールズ・ラムが『シェイクスピア物語』で行なったことになったもので、なぜ「原著者シェイクスピア」「原著者イブセン」と書かなくてはならないのか。林氏はたぶん小説と戯曲の区別があまりはっきりしていなかったのだろうが 中国の旧文人は小説と戯曲の区別をつけることができず、たとえば『小説考証』という本は、小説といいながら無数の伝奇をそのなかに含ませている しかし、口述翻訳者は彼になぜいわなかったのだろうか。易卜生的群鬼 (梅孽) 都是被他訳得变成了另外一部書了 原文的美与風格及重要的對話完全消滅不見，這簡直是步武却爾斯、蘭在做莎氏樂府本事又何必写上了『原著者莎士比亞』及『原著者易卜生』呢？林先生大約是不大明白小説与戯曲的分別的 中国的旧文人本都不会分別小説与戯曲，如小説考証一書，名為小説，却包羅了無數的伝奇在內 但是口訳者何以不告訴他呢？ 9頁

上の記述が、まさか誤りだとは、のちの研究者全員は想像することすらしなかった。検証を試みた人がいなかったとは思わない。だが、結果として誰も異論を提出していない。研究者は、鄭振鐸の意見は正しいものと認めたのだろう。そう考えて間違いはない。鄭の賛同者は現在にいたるまで多数にのぼる。

鄭振鐸の批判をそのまま受け入れた実例を示せば、(曾)虚白編、蒲梢(徐調孚)修訂『漢訳東西洋文学作品編目』(真美善書店1929.9.28)がある。翻訳文学の目録だ。詳しい説明があるわけではない。だが、断片にこそ定説が凝縮されて出現する。その43頁に「梅孽(文言,改訳為小説) / (Ghosts) 林紓 商務」と書いてある。

カッコのなかにわざわざ「文言、小説に改訳した」と説明を加えたのは、徐調孚だと考えられる。なぜならば、この目録のもとになった(曾)虚白「中国繙訳欧美作品的成績」(『真美善』第2巻第6号1928.10.16。19頁)には、上に見える説明はついていないからだ。徐調孚が鄭振鐸の説明を取り入れたのは、研究の成果だ。しかも、読者の便宜を考えてことばを加えた。

寒光の『林琴南』(上海・中華書局1935.2)は専著だから、当然、『梅孽』にも言及がある。説明して「劇本を小説にあらためた」(109頁)という。寒光も鄭振鐸の説を受けいれているのは明白だ。

阿英は、イブセンに関しては次のように書く。

当時の名翻訳家林紓も『幽霊[群鬼]』を『梅孽』に改訳して[改訳成]出版した。^{*1}

表現に注意してほしい。「翻訳して[訳成]」ではなく「改訳して[改訳成]」なのだ。この小さな箇所から、鄭振鐸と同様に阿英も戯曲の小説化を認めていると理解できる。

そのほかは以下ようになる。わずらわしいから著者とその文章名だけを示す。林訳シェイクスピア冤罪事件と多くの部分で共通するのはいうまでもない。だが、数はそれに比べて減少している。言及する余裕がなかったのか、気がつかなかったのか、そこまではわからない。

呉文祺「林紓翻訳の小説該給以怎樣的估價？」鄭振鐸、傅東華編『文学百題』上海生活書店1935初出未見 / 香港・古文書局影印1961.6再版 / 上海書店影印1981.6。447-448頁

宋雲彬著、小田嶽夫、吉田巖邨共訳『中国文学史』創元社1953.7.15。165頁
蒲梢(徐調孚)「漢訳東西洋文学作品編目 一九二九年三月止」張静廬輯註『中国現代出版史料甲編』北京・中華書局股份有限公司1954.12上海初版。289頁

復旦大学中文系1956級中国近代文学史編写小組編著『中国近代文学史稿』北京

- ・中華書局1960.5。采華書林影印1962.2.15。286頁
- 曾錦漳「林訖小説研究(上)」『新亞學報』第7卷第2期1966.8.1。234、249頁
- 細谷草子「新時代への啓示(翻譯小説の様相)」内田道夫編『中国小説の世界』評論社1970.12.10。282頁 / 1989.4.30三刷
- 任訪秋「林紓論」『開封師院學報』1978年第3期初出未見。薛綏之、張俊才編『林紓研究資料』福州・福建人民出版社1983.6 中国現代文學史資料彙編(乙種)。376頁
- 康來新『晚清小説理論研究』台湾・大安出版社1986.6。281頁
- 周振甫「林紓」『中国大百科全書・中国文學』北京・中国大百科全書出版社1986.11。432頁
- 北京圖書館編『民国時期總書目(1911-1949)』外国文學 北京・書目文獻出版社1987.4。311頁
- 任訪秋主編『中国近代文學史』開封・河南大學出版社1988.11。480頁 / 2000.8第3次印刷。462-463頁
- 劉波「林紓」呂慧鵬、劉波、盧達編『中国歷代著名文學家評伝』続編三 濟南・山東教育出版社1989.12。664頁
- 郭延礼「“林訖小説”的總體評價及其影響」『社会科学戰線』1991年第3期(總第55期)1991.7.25。284-285頁。のち、郭延礼『中西文化碰撞与近代文學』(濟南・山東教育出版社1999.4)所収。275頁
- 賈植芳、俞元桂主編『中国現代文學總書目』福州・福建教育出版社1993.12。685頁
- 郭延礼『中国近代翻譯文學概論』漢口・湖北教育出版社1998.3。296頁 / 修訂本 武漢・湖北教育出版社2005.7第2版第3次印刷。234頁
- 閻少華「林紓」熊尚厚、嚴如平主編『民国人物伝』第11卷 北京・中華書局2002.7。324頁
- 程翔章、邱鏄昌編著『中国近代文學』武昌・華中師範大學出版社2003.1。226頁
- 周曉明、王又平主編『現代中国文學史』武漢・湖北教育出版社2004.9。110頁
- 韓洪拳『林訖小説研究 兼論林紓自撰小説与伝奇』北京・中国社会科学出版社2005.7。125頁

以上は、主として中国近代文学研究者の見解である。外国文学研究者の意見をひとつ紹介しておく。

王寧、葛桂録等著『神奇的想像 南北欧作家与中国文化』銀川・寧夏人民出版社2005.12。97頁

「林紓が人と合作してイブセンの脚本『幽霊 [群鬼]』を小説『梅孽』(1921)に改編した」

これは「中国におけるイブセン [易ト生在中国]」という章のなかで述べられた文章だ。中国近代文学研究の成果を取り入れていると理解できる。

もうひとつ、演劇研究で、しかも中国におけるイブセンを研究する専門書からも引用する。

譚国根 Kwok-kan Tam“中国におけるイブセン Ibsen in China 1908-1997: A Critical-Annotated Bibliography of Criticism, Translation and Performance” The Chinese University Press, Hong Kong, 2001. p.182

「これ(梅孽)は、幽霊の優美な古文による翻案 adaptation である」「林自身は西洋のいかなる言語も知らなかったから、彼の翻訳はすべて協力者が彼に話すことにもとづいている。幽霊は毛文鍾の助力により林が小説に翻案したもので、林は原作の構造を追わず、彼自身の理解によって物語に改作している」

問題だと私が思うのは、林紓研究あるいは翻訳研究の専門家たちが林訳批判に参加し加担していることだ。結論が林訳を正の方向で評価するものであっても、戯曲の小説化をいえば、それがそのまま批判になる。

自分なりに考えて鄭振鐸と見解が同じになったのであれば、しかたがない。だが、戯曲を小説化したというならば、少なくともその詳細を明らかにしてもよかったのではないか。原文から漢訳がどのように作られたか、という経過を説明するそのことをいっている。

鄭振鐸は主唱者だから別にしても、とって責任を逃れることはできないが、後の研究者はひとりとして検証し説明しようとはしない。原文と訳文を引用することすらしていない。論文を読んでも、漢訳の検討をしたと具体的にわかるものがない。大いに不満である。



林紓、毛文鍾同訳『梅孽』

3 林訳イブセン

手元にある林訳本を見る。

『梅孽』全17章

マ
マ
德国伊ト森原著 林紓、毛文鍾同訳

上海商務印書館1921.11 說部叢書第4集第13編。60頁

イブセン Henrik Ibsen の “Gengangere”(1881)、英訳名“Ghosts [幽霊]”である。国名をドイツと誤ったことも批判の理由になっている。戯曲を小説化したばかりか、原著者の国籍も間違うほどのデタラメぶりだ、と鄭振鐸は言いたいのだ。

漢訳名の『梅孽』は、日本語でいえば『梅の罪』となろう。梅は、梅毒を意味する。原作の内容からつけられた翻訳題名だと理解できる。

林訳巻末には、次のような説明がある。

此書曾由潘家洵先生編為戲劇名曰群鬼然該書係用語体本書則為文言互相參看獲益良多 校者誌。59-60頁

ここに出てくる潘家洵の「群鬼」とは、易卜生著として『新潮』第1巻第5号(1919.12三版。影印本)に掲載されている漢訳を指す。胡適が翻訳に着手し中断していたのを潘家洵が完成したと「群鬼」前言にある(1919.4.24付)。前年の1918年には『新青年』(第4巻第6号1918.6.15)で「イブセン特集[易卜生号]」があった。それに『新潮』が呼応した形になっている。

『梅孽』は、イブセンの「幽霊」だ。しかし、同一作品の漢訳「群鬼」が先行している。すでに2年前に翻訳が発表されてはいるが、使用しているのは白話(口語による書面語)だ。そこで文言によって翻訳したから互いに参照すればよいという。文言での翻訳の方にも需要がある、と出版元商務印書館は判断したのだろう。時代の波に乗ろうという意欲があったと見るべきか。

白話と文言の違いはわかる。だが、以上の記述では、潘家洵の翻訳が戯曲のままであり、林訳が散文であることは理解できない。林訳しか読まない人にとっては、特にそうだ。上の注釈をつけた人物は、戯曲と小説の区別をつけなかった、とっていいかもしれない。

鄭振鐸の指摘と批判がなされて以来のことだ。林訳によるイブセン戯曲の小説化について、これが定説になっていることは、上に示した研究者たちの文章を見ればわかる。

4 イブセン「幽霊」の英訳

イブセンのノルウェー語原作は、当時すぐさま英語、ドイツ語、フランス語に翻訳されたという。林紘の共訳者毛文鍾*2が理解したのは英語だ。ゆえに、林紘+毛文鍾が漢訳のさいに底本としたのは英訳本だろうと予想がつく。

馬泰来は、「原為話劇，訳為小説。疑拋英訳本重訳。又林訳誤以伊卜森為德

人」*3だと書いた。もとの戯曲を翻訳して小説にした、と彼も断定している。

イブセン原作の第1幕冒頭の場面を英語訳と日本語訳で引用する。

REGINA (*in a low voice*). What do you want? Stop where you are. You are positively dripping.

ENGSTRAND. It's the Lord's own rain, my girl.

REGINA It's the devil's rain, I say. *4

レギーネ (声を抑えたまま) 何の用? そこにじっとして。ずぶ濡れじゃないの。

エングストラン ありがたいお湿りじゃねえか。おめえ。

レギーネ 悪魔の雨でしょう。*5

林訳『梅孽』に先行する潘家洵訳「群鬼」の同じ箇所に訳語をつける。

レギーネ [瑞琴] (声を抑えていう [低声説]) なんの用なの。止まって、動いちゃダメ。ほら、身体の雨水がしたっているじゃない。你要什麼? 站住了, 不要動。你瞧你身上的雨水直滴下来。

エングストラン [安司強] 大工 [木匠] おまえ、こりゃ神さんからの恵みの雨じゃ。我的孩子, 這是上帝的好雨。

レギーネ ほんとに悪魔の雨よ。這檢直是魔鬼的雨! *6

原文通りの白話訳になっていることがわかる。セリフはせりふのみである。翻訳だから当たり前なことだといわれるかもしれない。だが、のちの林訳を見るとき、どれだけ異なっているのか驚くはずだ。

原作の舞台はノルウェー、大きな峡湾にのぞむ屋敷内で物語ははじまる。

劇の大筋を紹介しよう。謎が徐々に明らかになっていく運びだが、ここでは要点だけを述べたい。

冒頭に登場するレギーネは小間使いで、大工エングストランの娘だ。ふたりの主人は、アルヴィング夫人である。彼女の設立した孤児院が明日の開院をむかえることになっている。その地方では名士であった亡き夫の名前を冠して「陸軍大

尉アルヴィング記念ホーム」という。孤児院設立に協力したのが牧師マンデルスで、アルヴィング夫人とは、昔親しい間柄だったことがある。夫人は、なんとか表面をとりつくろってはいたが、夫のアルヴィングは放蕩者で人生の落伍者だった。自家の小間使いに生ませたのが先ほどのレギーネだ。身重の小間使いをエングストランに押しつけた。だからレギーネにとっては義理の父親ということになる。そういうことを行なった放蕩者の夫を嫌い、子供を遠ざけるため、夫人は息子オスヴァルをパリに遣っていた。夫の生存中は、息子を会わせようとはしなかったほどだ。そのオスヴァルが画家となってパリからちよどもどってきている。異母兄妹のレギーネと恋仲で、しかも父から梅毒をもらった身体であることが判明する。保険をかけていない孤児院は開院を目前にして火災にあい、病気の末期症状があらわれたオスヴァルは、「太陽」といって倒れ込む。

以上の物語が、3幕にわけられ同じ部屋でくりひろげられる。

戯曲が出版されると、全北欧では非難の声がまきおこったという。性病、近親相姦がでてくる側面に批判の目が向けられたのだ。そういう時代だった。

林紓＋毛文鍾の『梅孽』が出版されたのは、イブセン原作の発表から40年後になる。

5 林訖『梅孽』

林訖を見てみよう。戯曲を小説化するとどうなるのか。興味のあるところだ。以下のようにはじまっている。

【林訖】巴黎中有老屋。名曰琵琶室。為一老画師所寓。近有四画師。同居其中。老画師曰和尼。已大有名於巴黎中。和尼藝高名重。本宜別居夏屋。顧恋戀故人。仍濡滯於此。三画師中。一為山特阿。一曰蘭伯潭。一曰保羅。實則和尼之居此屋。亦不專為三友。中有一女子。名曰伯金尼。亦僑寓其中。1頁
パリに古い家屋があって、その名を琵琶屋敷という。ひとりの老画家が住んでいたが、最近、画家4人で同居するようになった。その老画家は和尼といい、パリではすでに有名であった。和尼は腕が立つし有名でもあり、本来

は夏の屋敷にいるべきだったが、友人に恋々として、ここにぐずぐずしていた。3人の画家のうちのひとり山特阿である。ひとは蘭伯潭といい、もうひとは保羅である。実をいえば、和尼がこの屋敷にいるのはもっぱらこの3人のためというわけではなく、なかに女性がいて、名前を伯金尼といい、彼女もここに居住しているのだ。

これは、どういうことか。イブセン原作を知っている人がこの冒頭を読めば、狐につままれた気がするに違いない。ありえない、というか。

イブセン原作の舞台はノルウェーだ。パリはことばの上で出てくるにすぎない。オスヴァルは、パリに長く住んで遊んでいた。しかし、その頃の具体的な描写があるわけではない。ましてや、パリ時代の友人が登場することもない。

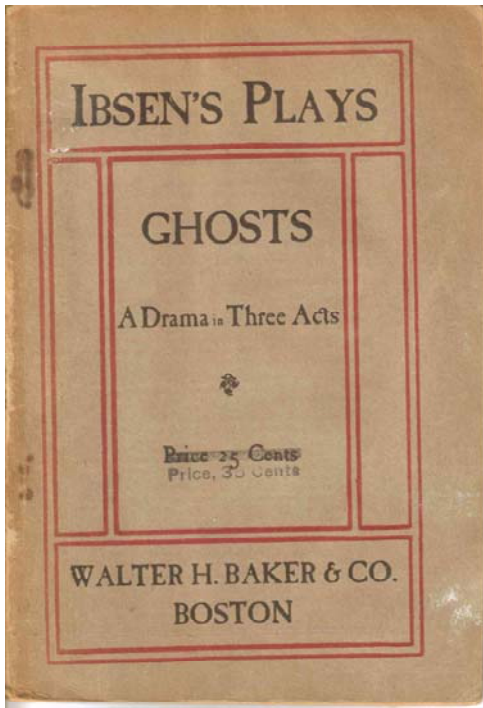
ところが、漢訳ではパリを舞台にして物語がはじまる。「巴黎」くらいのことばは、日本語になおすことができる。だが、「琵琶室」あるいは「和尼」「山特阿」「蘭伯潭」「保羅」「伯金尼」といった人名になると私にはまったく見当がつかない。イブセンの原作には出てこない単語だからだ。

これが同一作品の翻訳か、と疑うのが普通の反応だろう。

鄭振鐸は、その狐につままれた人のひとりだったと想像する。原作と林訳は、かけ離れている。だから、彼は、林紘たちがもとの戯曲を勝手に小説化した、と考えた。シェイクスピア原作を小説化したのと同じだと断定したわけだ。鄭振鐸は、自分が判断した経過をこまごまと説明しているわけではない。説明もなにも、小説化についてはひとことのもとに切って捨てた。

だが、戯曲を漢訳して以上のようになるだろうか。なると考える方がおかしいといわなければならない。原作と漢訳とでは、まったくの別物である。違う筋立てと登場人物を考えるくらいなら、もとの戯曲のままに翻訳する方がよほど簡単だ。手間ヒマかけるまでもない。

翻訳の原作が不明のばあい、中国の研究者は、通常、これは再創作、再創造の作品であると言いはじめる。過去においては、類似の例として吳趸人「電術奇談」とか、魯迅「造人術」がすぐに思い浮かぶ。私は、彼らがよった原作を示し、再創作説、再創造説が誤りであることを証明したことがある。



ウィリアム・アーチャー訳本

だが、林訳のばあい、原作は明らかなのである。それにもかかわらず、林紘の翻訳についても、同様のことを言う研究者が出てきた。郭延礼『20世紀中国近代文学研究学術史』（南昌・江西高校出版社2004.12）だ。同じ文章を『中国前現代文学的転型』（済南・山東大学出版社2005.10）に使用している。よほど強調したいことらしい。

「林紘の翻訳は、原著に対する再創造である」（前者234頁。後者189頁）

郭延礼の説は、林訳イブセンに限定しているわけではない。林訳全体が、再創造だというのだ。これは、すでに翻訳研究の範囲を逸脱していると私には思われる。

私は、郭延礼の考えに賛成しない。なぜなら、林訳が底本とした作品のいくつかについて、探求がまだ不十分だと考えているからだ。

なすべき探求が行なわれていない。行なわれていないから、林訳シェイクスピアの例に見たように、鄭振鐸の誤りをただすことができなかった。林紘に濡れ衣を着せ続ける結果となったのである。

イブセンの作品は、多数の人々によって英訳されている。「幽霊」の翻訳者としてウイリアム・アーチャー William Archer とか、R・ファーカースン・シャープ R. Farquharson Sharp などを出しても、これでは名前を挙げたうちには入らない。それくらい英訳者は多い。

だが、本稿で追求している英訳「幽霊」は、彼らが英訳したような戯曲そのままではない。小説化して英訳した版本があるのではないか。林紓+陳家麟がシェイクスピアの漢訳で行なったと同じことがイブセンのばあいにも存在しているだろう、という予測のもとに作業を続けている。そう考えないかぎり、原作と漢訳の隔たりが説明できないからだ。

イブセン戯曲の小説化についてとなると、突然に視界が悪くなる。これを紹介する文章には、私は最後まで遭遇しなかった。シェイクスピア原作の小説化問題を追求した時に、同様の体験をしたことがある。原作についての研究こそが重要だ、書きかえ作品など論外、というのだろう。専門家にとって、小説化された英文原作については探索する意欲がわかないと見える。もしかすると、そのような本があることすら「意表之外」にあるのか。

ひとりで努力するほかない。

そうして見つけたのがつぎの英訳本だ。

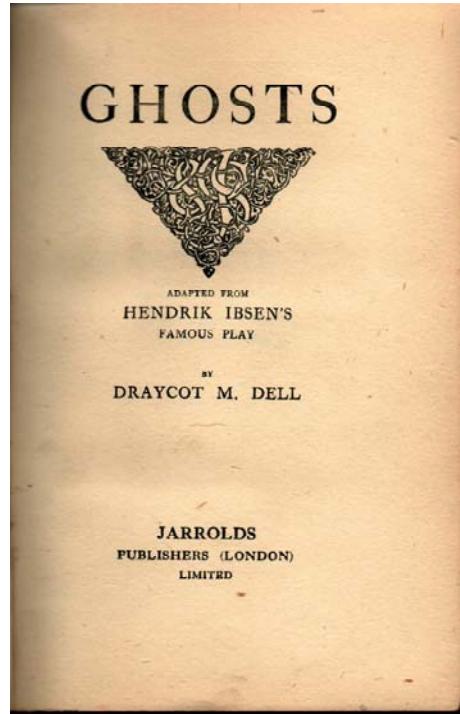
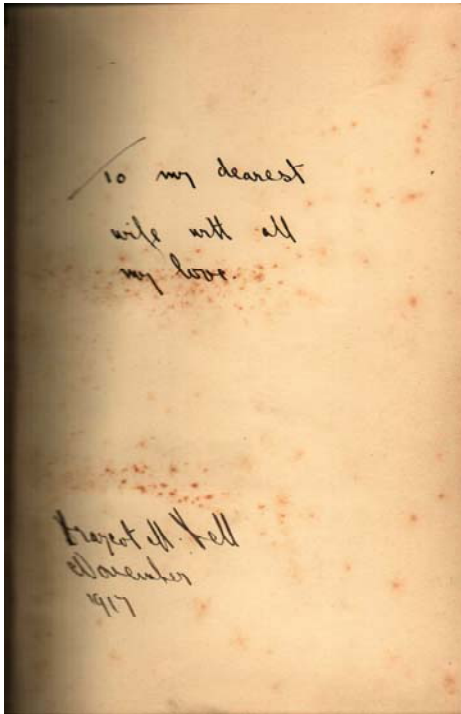
6 イブセン戯曲の英文小説化本 デル版『幽霊』

ドレイコット・M・デル Draycot M. Dell 著『イブセンの「幽霊」物語 IBSEN'S "GHOSTS" Adapted as a Story』LONDON: JARROLDS, 刊年不記(1917)である。

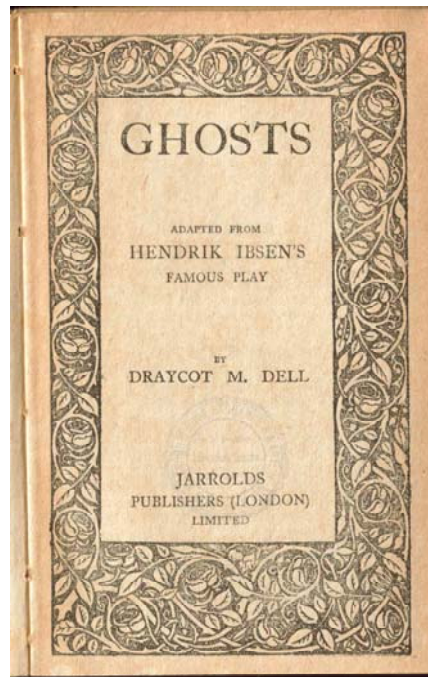
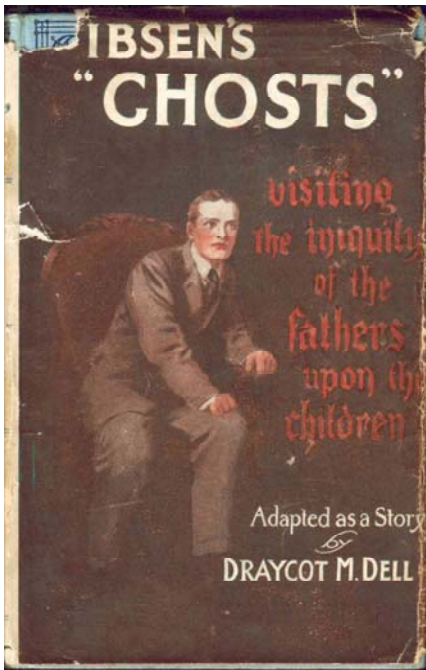
表紙の題名にあるとおり物語に翻案 Adapted as a Story した英訳本にほかならない。著者は、Draycot Montagu Dell (1888-1940) だ。

扉には“GHOSTS / ADAPTED FROM / HENDRIK IBSEN'S / FAMOUS PLAY / BY / DRAYCOT M. DELL”と表示しており、刊年は記載がない。著者デルの署名本には1917年という記述がある。今、刊年はそれに従う。

小型本だが「序幕 PROLOGUE」6章、「劇の内容 THE STORY OF THE PLAY」11章の2部構成になっており190頁もある。



デル署名の別版



デル訳 IBSEN'S "GHOSTS" Adapted as a Story 表紙と扉

デル版『幽霊』から少し引用したい。

【デル版】 Of these four, Florentin de Vernet had perhaps done most to achieve repute; for in Paris his pictures were highly spoken of, and fetched a good price. / He could have had other quarters, more sumptuous in surroundings, a little less reminiscent of those days of poverty, but he preferred the House of the Harp, and chose to remain in those dear, dusty old rooms of his first dreams, with Jean Sentier, Anatole Lambertain and Paul Borez. / But there was another consideration also Virgine Dormeuil and perhaps of all consideration Virginie was the chief. p.2

4人のなかでは、フロレンタン・ド・ヴェルネが、たぶんもっとも成功しているといえる。なぜなら、パリで彼の絵は好評を博し、いい値段で売れるからである。/彼は、貧困の当時を思い出させるくらい、もう少し贅沢な環境でほかの部屋をもつこともできたが、しかし、彼は「ハーブの家」を好み、ジーン・センチエ、アナトール・ランバートン、ポール・ボレスらと、彼の最初の夢だった、あの大切なほこりっぽい古い部屋にとどまる方を選択した。/しかし、別の動機　ヴァージニ・ドームル　もあって、すべての動機の中でヴァージニが最も重要だった。

ここを読めば、先に引用した林訳で不明だった固有名詞がすべて解決する。すなわち、以下のように対応している（漢訳に該当する個所に下線をほどこす）。

琵琶室 the House of the Harp ハーブの家
和 尼 Florentin de Vernet フロレンタン・ド・ヴェルネ
山特阿 Jean Sentier ジーン・センチエ
蘭伯潭 Anatole Lambertain アナトール・ランバートン
保 羅 Paul Borez ポール・ボレス
伯金尼 Virgine Dormeuil ヴァージニ・ドームル

4人の画家たちにとって、ヴァージニは女王のようだった。彼女を中心にしての共同生活が営まれていたところに、ノルウェー人の画家オスヴァル・アルヴィングが登場する。デル版英文と林訳を並置してみる。

【デル版】It was upon such a scene that Oswald Alving, a young Norwegian artist, was ushered by de Vernet, one evening in late summer. p.5

そんな時だった。晩夏のある夕方、ノルウェー人の若い芸術家オスヴァル・アルヴィングがド・ヴェルネに案内されてきた。

【林訳】一日和尼引一脳威画師垂丁至。2頁

ある日、ヴェルネがひとりのノルウェーの画家アルヴィングを連れてきた。

林訳は、デル版英文をかなり圧縮していることがわかるだろう。

7 デル版原作と林訳

ハーブの家にオスヴァルが加わる。彼はヴァージニと仲良くなるが、病気が悪化し、置き手紙を残してひとり故郷ノルウェーにもどっていった。

ここまでがデル版の「序幕」第6章だ。全190頁のうちの34頁を占める。林訳も同じく第6章だが、全60頁のうちの16頁を費やしている。第6章までの分量を比較すれば、デル版約18%対林訳約27%になる。数字の違いは、林訳はデル版を省略していることを意味している。

つぎに「劇の内容」第1章の冒頭と対応する林訳の部分を引用しよう。

【デル版】IT was at evening time that a surprise had come to the dwellers in this house beside the fiord. / Mrs. Alving had been roused by the excited utterances of Regina, her maid, and the next moment was clasping Oswald in her arms, (後略) p.35

峡湾の近くにある家の住人にある驚きをもたらされたのは、夕方であった。/アルヴィング夫人は、小間使いのレギーネの興奮したことばで目を覚まさ

れた。次の瞬間、オスヴァルが彼女の腕の中にいだかれており、(後略)

【林訳】一日黄昏中。亜丁之母方晏坐。女僕雷迦茵。忽倉皇入言曰。亜丁帰矣。亜丁見母。力抱其身。16頁

ある日の黄昏に、アルヴィングの母はちょうど安らかに座っていると、小間使いのレギーネがあわてふためいて入ってきて言った。アルヴィング様がお帰りになりました。アルヴィングは母を見ると、力をこめて抱きしめた。

林訳は、デル版と完全に一致しているわけではない。ゆえに、文章の区切りも中途半端になってしまった。オスヴァルのことを林訳では、亜丁と表示する。レギーネがアルヴィングと呼ぶのは具合が悪い。そこは、オスヴァルとすべきところだ。といっても、林訳は亜丁ではじめたから、母親の方を「母」「夫人」と表示して区別する。これも、ひとつの工夫である。Regina に雷迦茵という漢字を当てている。この漢字を見ると林訳のあの有名な『迦茵小伝』(Joan Haste)を連想してしまう。ここでは、それとはまったく関係がないのだが、思い浮かぶのだからしかたがない。

つぎの箇所からイブセン原作と重なる。デル版と林訳の両者を引用する。

【デル版】 Regina frowned as she saw him, and / “What do you want?” she said in low tones. “Stop where you are, you are positively dripping.” / Jacob Engstrand darted a semi-reproachful glance at Regina. / “It's the Lord's own rain, my girl,” he said sententiously. / “It's the devil's rain, I say” was the abrupt reply. p.36

レギーネは、彼をみつけたとき顔をしかめ、 / 「何の用？」と低い声でいった。「そこにじっとして。ずぶ濡れじゃないの」 / ヤコブ・エングストランは、半分叱るような一瞥をレギーネになげかけた。 / 「ありがたいお湿りじゃねえか。おめえ」と、彼は説教めかしていう。 / 「悪魔の雨でしょう」とぶっきらぼうな返答だった。

【林訳】木匠名驚司^{ママ}專。竟冒雨至亜丁家。雷迦茵曰。翁一身為雨所淋。幸勿霑湿夫人之室。木匠曰。此雨為救主所賜。女曰。鬼雨也。17頁

大工の名前はエングストランという。雨についてアルヴィング家にやってきた。ずぶ濡れじゃないの、奥様の部屋をぬらしちゃダメよ、とレギーネがいう。大工が、この雨は救い主からの賜いものだというと、娘は、幽霊雨よと答えた。

細かいところから。エングストランを漢訳して鷺司専では、おさまりが悪い。ただし、「専」が「崋」のつもりだったら、これでよしい。

デル版が、そのせりふ部分にアーチャーの英訳を生かしていることがよくわかる。その扉に、アーチャーの許可を得て訳文を利用した、と明記してあるとおりだ*7。

イブセン原作は、ここからはじまる。つまり、これより前の部分はデルの創作になる。帰郷するまでのオスヴァルがパリでどのような生活を送っていたか、そこで病気の発症にみまわれたことを時間順に説明するためである。劇中においてオスヴァルがせりふでいうかわりの措置になる。だからこそデルは「序幕」と題して区別した。

デル版は、「序幕」が6章、「劇の内容」が11章だと述べた。合計すると17章になる。林訳は、通して17章にしている。省略が多いとはいえ、内容はデル版であるのにはかわりはない。

8 結 論

本稿の目的は、イブセンの戯曲を小説化した英文原作があることを指摘することだ。林訳『梅孽』が底本としたのは、イブセン戯曲そのものではないということになる。

探索の結果、デル版、すなわち、イブセンの原作を小説化した英文本の存在が明らかになった。本文を比較対照して内容が同じであることも確認した。

「璫威伊ト森原著、徳爾[デル]改写、林紓、毛文鍾同訳」と書くべきだったのか。いや、正確に表記しなかったからといって、林紓+毛文鍾を責めることはできないだろう。それをいうなら、潘家洵訳「群鬼」も同類だ。たしかに戯曲の

ままだに漢訳してはいるが、もとづいた英訳については何も記していない。

問わなければならないのは、そのことを見抜くことができなかつた鄭振鐸の責任の方である。のちの研究者も、鄭振鐸に追隨しただけで検証しようとはしていない。

そこで結論である。

イブセンの戯曲を小説化したと批判した鄭振鐸のほうが間違っていた。林紘 + 毛文鍾は、無実である。ゆえに、これを林紘冤罪事件のひとつとして認定する。

【注】

- 1) 阿英「易卜生的作品在中国」『文藝報』1956年第17期初出未見。吳泰昌編『阿英文集』北京・三聯書店1981.11。740頁
- 2) 瀬戸宏『中国話劇成立史研究』(東方書店2005.2.25。236頁)において「林紘、毛文鍾^{ママ}訳『幽霊』(《梅孽》上海商務印書館)」と書いている。毛文鍾の名前を誤っており、原物で確認していないことが判明する。
- 3) 馬泰来「林紘翻訳作品全目」錢鍾書等著『林紘的翻譯』北京・商務印書館1981.11。95頁
- 4) HENRIK IBSEN "GHOSTS", TRANSLATED BY WILLIAM ARCHER, Copyright, 1890, by JOHN W. LVELL CO. WALTER H. BAKER & CO. BOSTON. p. 4
- 5) 原千代海訳『イブセン 幽霊』岩波文庫1996.6.17。9-10頁。ノルウェー語原作を底本に英訳本を参照したと説明がある。
- 6) 『新潮』第1巻第5号1919.12三版。影印本823頁
- 7) 原文は次のとおり。The dialogue of Mr. William Archer's first translation of Ibsen's play has been drawn on for the purpose of this story by permission, and the Author desires to express his thanks to Mr. Archer for this courtesy.

林訳スペンサー 冤罪事件

未発表。林紓が採用した翻訳方法にひとつの傾向がある。外国の詩、あるいは戯曲が原作のばあい、散文に書き換えた本、すなわち英文小説化本を底本にするのである。このスペンサー作品が参考例だ。

林訳スペンサーは、林紓冤罪事件のひとつだ。ただし、ほかのばあいとは異なる。事実誤認が、最初からあったわけではない。

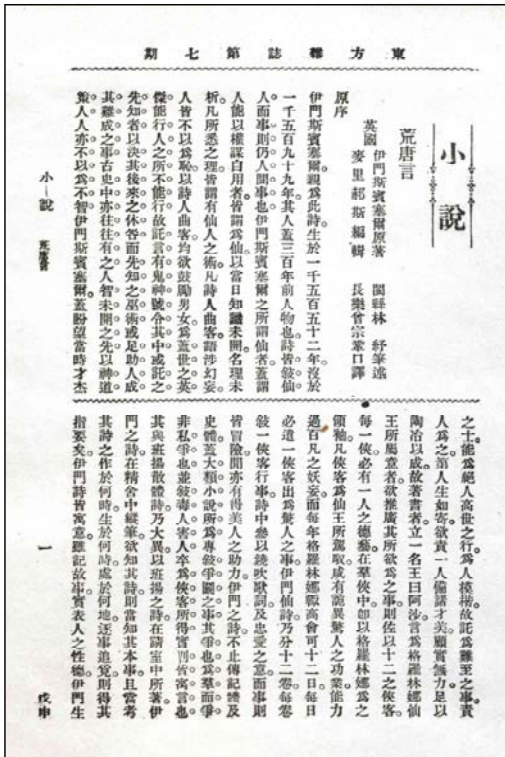
林紓 + 曾宗鞏が翻訳したスペンサー作品について、初出の雑誌掲載時には正しく記述されていた。原物を見ていれば間違いようのない事実である。

のちの一時期、誤認されることになる。それでも、あとで正しい記述が出てきている。私は訂正されたものだとばかり考えていた。ところが、高名な近代翻訳文学研究者によって、再度、濡れ衣をきせられている。つまり、冤罪事件として新しく成立しているのだ。正誤がくり返される。奇妙な現象である。同時に、これは、大きな問題であるといわなければならない。

1 林訳スペンサー

エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser, 1552?-99) は、イギリスの詩人である。代表作は、韻文形式の「妖精の女王 Faerie Queene」(1590-未完)だ。

林訳は、『東方雑誌』第5年第7-9期(光緒三十四年七月二十五日 - 九月二十五日(1908.8.21-10.19))の「小説」欄に連載された。



『東方雜誌』掲載「荒唐言」

こう説明するとすぐさま指摘する研究者がいるだろう。おかしいではないか。スペンサーは詩人であり、その作品は韻文形式のはずだ。林訳は雑誌の「小説」欄に掲載してある。ということは、林紓は、もとの詩をここでも小説化したのか。あわてないでほしい。説明する。初出の著者名、訳者名は、つぎのように示されている。

荒唐言 英国 伊門斯賓塞爾原著 閩縣林紓筆述
 麦里郝斯編輯 長樂曾宗鞏口訳

重要であるのは、スペンサー原著と表示すると同時に、「麦里郝斯」と明記している点だ。すなわち、ソフィア・H・マクルホーズ Sophia H. Macle hose の名前を漢訳して示している。ただし、この時点でマクルホーズを理解する人ばかりとは限らない。のちの推移を見ると、認識されるまで時間がかかっている。

雑誌連載のはじめに「原序」がついている。スペンサーについての紹介だ。マクルホーズの筆になる。漢訳で3頁近いから短くはない。

つづいて本文を見れば、散文である。林紓+曾宗鞏が漢訳するに際して底本としたのは、スペンサーの原詩そのものではない。9行連の原詩をマクルホーズが散文に英訳したものがあり、林訳はこれを底本にしたと理解できる。発表時間の順序にしたがえば、同様のことを、のちに林訳シェイクスピア、林訳イブセンでもくり返して行なっている。ただ、シェイクスピアとイブセンについては、林紓は、英文小説化本を明示しなかつただけのことだ。

『東方雑誌』を見れば、マクルホーズの存在があることは確かだ。のちの研究者がそれに触れているのは、当たり前である。誤解の原因になったとすれば、「麦里郝斯編輯」と記述されているところから「編輯」ものにしてしまったことだろう。ただし、英文原作にそう表示されていれば、漢訳もそれに従ったまでのことだ。

2 研究者の言及

いくつかの例を示す。

寒光『林琴南』上海・中華書局1935.2。83頁

伊門・斯賓塞爾 (Edmund Spencer, 1552?-1599) 原作：

荒虞言一冊 (Faerie Queene) (這書實為麦里・郝斯所演詩中的本事，並不是原著的詩。内凡八篇，包含三個故事。)

寒光がカッコ内に注釈をつけている通りだ。スペンサーの原詩ではなく、詩がもとづいた事柄を「麦里・郝斯」が記述する。正しく認識しているように思う。ただ、「麦里・郝斯」とわざわざナカグロで区切ったところを見ると、マクルホーズという人名だとは知らなかったものかと推測する。

この記述は次の文章に影響をあたえた。

朱義胄「春覚斎著述記卷三」『林畏廬先生学行譜記四種』上海・世界書局
1949.4初出未見 / 改題『林琴南先生学行譜記四種』台湾・世界書局1965.4再版。
之二35頁

「あるいは、これはもとの詩ではなく、詩がもとづいた事柄を麦里・郝斯が記述したともいう [或曰此非原詩。蓋麦里・郝斯所演詩之本事]」

麦里・郝斯のようにナカグロで区切るところを含めて、ここは寒光の記述をそのまま引用した。

後の研究者がこれに追従すれば、問題はなかった。残された課題としてやらなければならなかったのは、「麦里郝斯」が誰なのか、その作品は何かを探求することだ。

ところが、奇妙なものが出てくる。

蒲梢（徐調孚）「漢訳東西洋文学作品編目 一九二九年三月止」張静廬輯註『中国現代出版史料甲編』北京・中華書局股份有限公司1954.12上海初版。309頁
翻訳目録である。つぎのように書かれている。

史本塞 (E. Spencer, 1552-1599)

荒唐言 (Faerie Queen) (文言, 節訳)

漢訳作品を説明して「節訳」というのは、抄訳という意味だ。全訳ではない。原詩を削除して翻訳した、と理解している。少しズレているように思う。

少しズレると、あとは研究者によって理解のゆれが大きくなる。

曾錦璋「林訳小説研究(上)」『新亞学報』第7巻第2期1966.8.1。243頁

「スペンサーは、英国文学の父チョーサー Chaucer の継承人であり、「詩人のなかの詩人 (Poet of Poets)」(註三)と称される。彼は英国でもっとも偉大な詩人のひとりである。彼の作品は、しかし読者は少ない。林紓が翻訳した荒唐言 The Faerie Queene は、まさに彼の代表作であって、英国文学史上における有数の巨

著のひとつだ。おいしいことに原著は長編の寓言詩なのだが、林氏は散文の小説体にしてしまい、不思議なことを述べた部分のみが残るだけで、原詩の精神は失われてしまった。春覚斎著述記では、「あるいは、これはもとの詩ではなく、詩がもつづいた事柄を麦里郝斯が記述したともいう」(註四)と書いている。林訳が麦の著作にもつづいたものかどうか、検討を待つ」

春覚斎著述記を引用しながら、麦里郝斯にはナカグロをつけない。かといってマクルホーズであるとも気づいていない。問題であるのは、林紘が原作を小説体に変えた、と述べていることだ。林訳が掲載された『東方雑誌』を見れば、誤解するはずがない。ところが、曾錦漳は、詩を小説化したと断定している。なににもつづいたのかしらない。だが、明らかに誤認である。

林訳小説を主題とする専門論文でありながら、この部分は不十分だ。追求が甘いというよりも、誤解をふりまいたと批判されてもしかたがなかりう。

つぎに馬泰来が登場する。

3 底本の提示

林訳の原作を探索して、彼の右に出るものはいない。私は、馬泰来の記述を信頼している。彼の作成した目録は、林訳小説を研究するばあいの基本文献のひとつだと私は信じて疑わない。

馬泰来「林紘翻訳作品全目」銭鍾書等著『林紘的翻訳』北京・商務印書館1981.11。

74頁

彼は、それまで麦里郝斯とのみ書かれていたものを、Sophia H. Macle hose だと明確に判定した。その著作は、Tales from Spenser, Chosen from the Faerie Queene (1890) であるとも書いている。日本語になおせば『スペンサー物語 妖精の女王』だ。漢訳8篇に対応する英文原題を明らかにし、しかも、原著は11篇あって3篇が未訳だとも説明する。

親切この上もない記述だと考える。原書で確認しなければ、ここまで詳細に書

くことはできない。だからこそ私が馬泰来の目録を信頼する理由になっている。

馬泰来の説明に尽きている。林訳は、マクルホーズの作品を底本としているとわかる。正確な記述だから、雑誌初出とあわせて見れば、誰の目にも明らかだ。

施蛰存も次のように正しく述べている。

施蛰存「導言」『中国近代文学大系』第11集第26巻翻訳文学集1（施蛰存主編）
上海書店1990.10。22頁

「『荒唐言』の原作はスペンサーの長詩『妖精の女王』で、マクルホーズが散文で述べたものがある。林紘は散文本で訳出し「スペンサー著」と書いた。これらはすべて小説ではないが、それぞれ「説部叢書」、「小本小説」、「小説彙刊」などに編入し、すべて小説だと目されている」

施蛰存がいいたいのは、当時の翻訳者が、詩と小説の区別がつかないほど幼稚であったということらしい。それはそれとして、『荒唐言』がマクルホーズ版を原作としていると書くのは、正しい。

ところが、突然、流れが逆転する。すでに判明している事実であるにもかかわらず、それを無視する人が出てくるのである。近代翻訳研究の大家だから、私は困惑せざるをえない。

4 あらたな冤罪事件

近代文学研究で著名な郭延礼である。翻訳研究でも専著を出しているからよく知られた存在だろう。

彼の文章に次のものがある。

郭延礼「“林訳小説”的総体評価及其影響」『社会科学戦線』1991年第3期（総第55期）1991.7.25。284-285頁

郭延礼は、林訳小説の弱点を3件にまとめた。

第1は、翻訳漏れ、誤訳および削除だ。

第2については、つぎのように書いている。「体裁の区分が厳格ではなく戯曲を小説に誤訳してしまった。たとえばシェイクスピアとイブセンの劇本を小説にし、また、スペンサーの長編寓言詩『荒唐言』（今は『仙后〔妖精の女王〕』と訳す）を散文物語体に訳した」

シェイクスピアとイブセンについて、もとの戯曲を小説化したと林紓は批判されつづけてきている。それが学界の定説である。郭延礼が、定説を疑わなかったとしても、それはしかたがない。

ところが、郭延礼は、それらにスペンサーをわざわざ加えた。

林紓+曾宗鞏は、雑誌初出から「麦里郝斯」の名前を出している。曾錦漳は間違った。しかし、馬泰来が、それはマクルホーズであると明らかにしてもいる。ところが、ここに至って郭延礼は、林紓がもとの長編寓言詩を散文物語体に訳した、と記述するのである。なぜ、こういうことになってしまうのか。ありえない事だと思う。私が驚くのも無理はなかろう。研究界の権威がそのように誤ったことを書くのだ。私には理解するのがむづかしい。

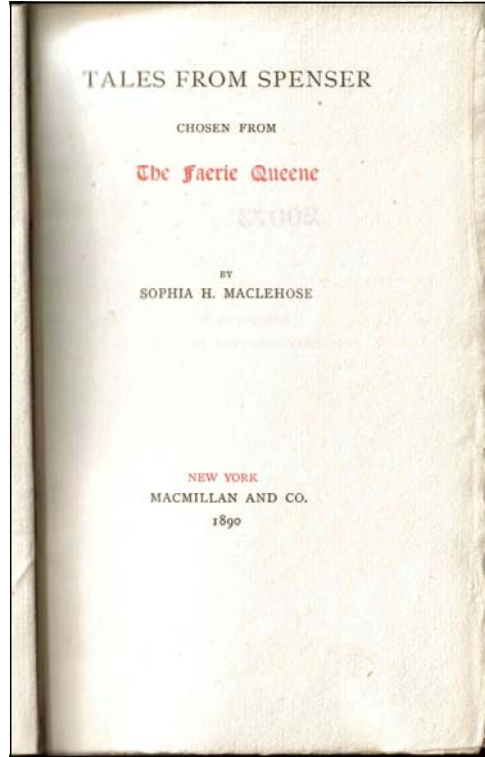
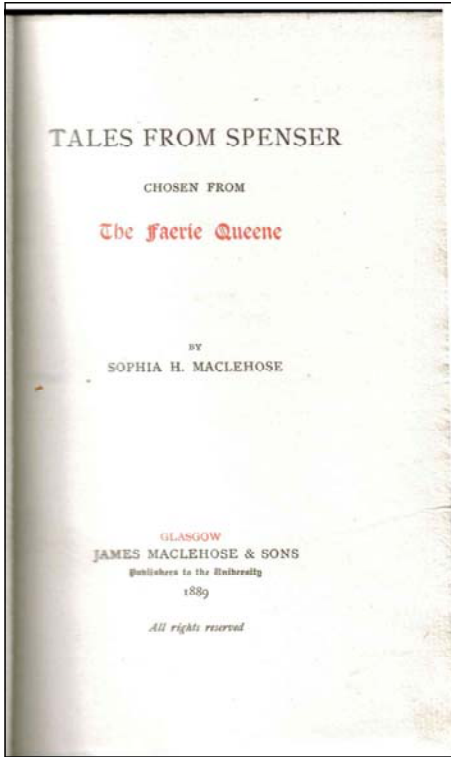
郭延礼のちょっとした勘違いなのだろうか。彼にとっては小さな勘違いであったかもしれない。しかし、その結果は郭が想像するよりも大きなものになっている。すなわち、『東方雑誌』に掲載された翻訳それ自身とのちの正しい研究のすべてを否定するからである。ゆえに、研究界にあたえる意味は小さくない。林訳小説が、シェイクスピアで行ない、イブセンでくり返し、さかのぼってスペンサーでもデタラメを実行していたことになるのだ。定説となっている戯曲の小説化に加えて詩の小説化を強調する結果になる。

こののち郭延礼は、該論文を『中西文化碰撞与近代文学』（済南・山東教育出版社1999.4）に収録して訂正をしていない（275頁）。今もそう考えているのだろう。

林訳スペンサー冤罪事件は、いうまでもなく翻訳者であった林紓たちに責任があって発生したものではない。のちの研究者があらたに作り上げた冤罪事件なのだ。スペンサーのばあいは、比較的新しいから特異だというのである。

現在は、どうなっているか。

比較的新しい韓洪拳『林訳小説研究 兼論林紓自撰小説与伝奇』（北京・中国社会科学出版社2005.7）をあげて代表とする。



マクルホーズの小説化英文原作 1889年版 1890年版

その「附録 林紓文学活動年表」の光緒三十四年七月の箇所に『荒唐言』を記入する。

「林紓はマクルホーズの散文物語本にもとづいて訳出した [林紓拋馬克爾赫斯的散文演述本訳出]」(339頁)

ここに正しい記述を見ることができる。ただし、郭延礼の誤記については触れていない。

5 マクルホーズの小説化英文原作

林訳スペンサーと本稿では表現している。もういちど雑誌初出の記載を示す。

荒唐言 英国 伊門斯賓塞爾原著 閩県林紓筆述

麦里郝斯編輯

長樂曾宗鞏口訳

私の見ているマクルホーズの原作は、以下の2冊、1889年版と1890年版である。

SOPHIA H. MACLEHOSE“TALES FROM SPENSER / CHOSEN FROM / THE
FAERIE QUEENE”JAMES MACLEHOSE & SONS, GLASGOW, 1889 /
MACMILLAN AND CO. NEW YORK, 1890

1889年版は初版だ。最初は、これを見れば十分だと考えた。

1889年版にある「前言 PREFACE.」は、原作の簡単な紹介にすぎない。ところが、『東方雑誌』掲載の漢訳「原序」は、かなり長くスペンサーについて紹介している。ということは、林紓+曾宗鞏が底本としたのは、初版ではない。

馬泰来がその目録に掲げたのは、1890年版だ。私の見ている初版にない説明文が、再版でつけ加えられたのかもしれない。馬泰来は、1889年ではなくわざわざ1890年と書いている。何か特別な意味があるはずだ。1890年版には、長い序が加えられたに違いない。私は、そう考えた。

入手したのが、1890年ニューヨーク版だ。表示はないがたぶん第2版だろう。初版と見比べると、装丁および扉の出版社と出版年が違うだけ。本文は全195頁で同じだ。ところが、こちらにも漢訳に見える紹介文は、ない。なぜこのことを馬泰来は注記していないのか。それとも1890年版には別物があるのだろうか。

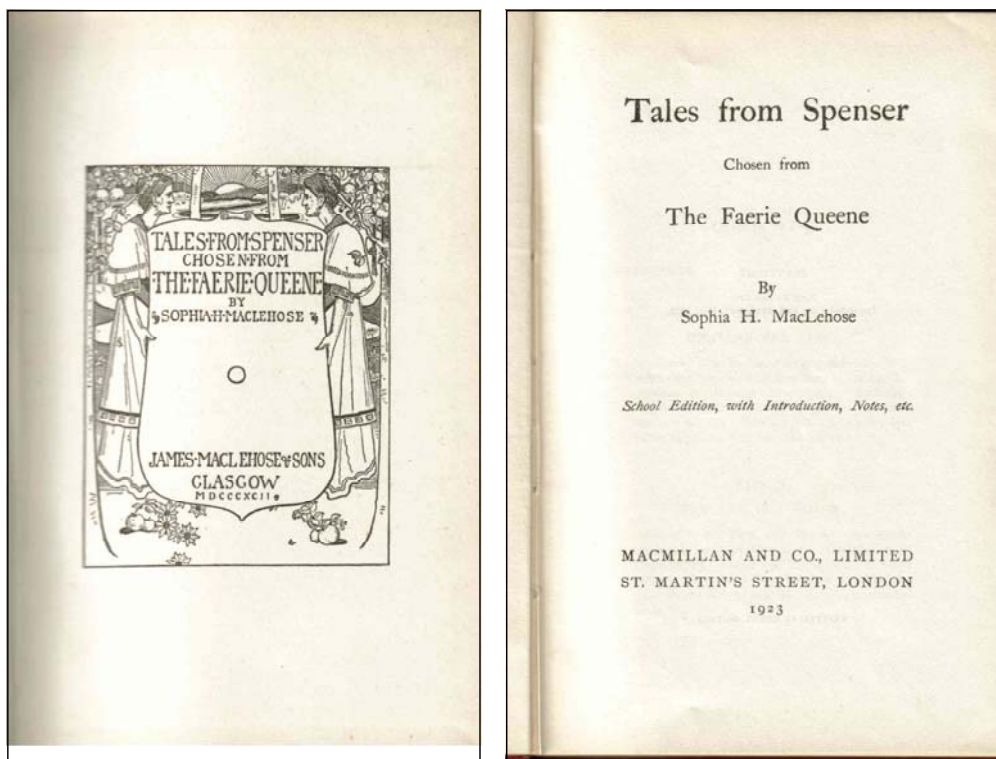
ここまでくれば、ほかの版を見るしかない。第3版と第4版を取り寄せることにした。ついでだから、1923年版という年代はあわない影印本1冊も注文する。

届いた各版について説明する。

第3版は、JAMES MACLEHOSE & SONS, GLASGOW, 1893 とある。ただし、扉のローマ数字表記では1892年だ。表紙に挿絵をあしらっているのが目新しい。この第3版も、初版、再版と同じく長い「序」はついていない。

第4版も第3版とまったく同じであった。出版年が1894年となっているだけのこと。

そうなると、馬泰来が1890年版を底本だと指摘したのが怪しくなる。これは意



マクルホーズの小説化英文原作 1923年版 学生版

外な展開となってしまった。

6 マクルホーズ版の底本

期待をしていなかった1923年版が、手元に届いた。見てよるこぶ。これこそが、林訳の底本だったからだ。「原序」などのいくつかの疑問も、この版本により解決する。

マクルホーズの小説化本であることには違いがない。どこが異なるかといえば、こちらの扉には「学生版、序および注釈つき *School Edition, with Introduction, Notes, etc.*」という表示がある。出版社は、MACMILLAN AND CO., LIMITED, LONDON 1923 だ。ただし、初版は1905年だと明記している。1907、1908、1912、1917、1920、1923年に重版するくらいだから普及した版本なのだろう。林訳の雑

誌発表が1908年だから、1905年版あるいは1907年版が漢訳の際に使用されたと推測できる。

馬泰来は、「原著は11篇あって3篇が未訳だ」と説明をしている。だから、私は、林紘らが原文から選択して漢訳したのだらうと理解した。しかし、学生版の目次を見て、林訳がなぜ8篇なのかわかった。学生版は、8篇しか収録していないのである。ここは忠実な林訳だということができる。

林訳の訳題と原文を対照する（英文原作目次の表題は省略されているから、本文の英文を示す）。

『東方雑誌』第5年第7期 光緒三十四年七月二十五日（1908.8.21）—————

原序 INTRODUCTION. [序]

安娜遇獅

Una and the Lion. [ユーナとライオン]

名王阿沙随安娜尋紅十字侠客

Prince Arthur helps Una to find the Red-cross Knight. [アーサー王は、ユーナが赤十字の騎士を捜すのを手助けする]

『東方雑誌』第5年第8期 光緒三十四年八月二十五日（1908.9.20）—————

記紅十字侠客屠龍

How the Red-cross Knight slew the Dragon. [赤十字の騎士はいかにしてドラゴンを殺したか]

布立東馬及宝鏡

Britomart and the Magic Mirror. [ブリトマートと魔法の鏡]

叙布立東馬見安摩勒

Britomart and Amoret. [ブリトマートとアモレット]

漢訳なし / 学生版には未収録 The Story of Marinell and Florimell.

『東方雑誌』第5年第9期 光緒三十四年九月二十五日（1908.10.19）—————

叙偽侠布加度瑾

Braggadocchio. [ブラガトッチオー]

叙布立東馬得阿沢高

How Britomart found Artegall. [ブリトマートはいかにしてアーテガルを見つけたか]

漢訳なし / 学生版には未収録 Cambello and Triamond.

漢訳なし / 学生版には未収録 The Story of Timias.

葛立多及巴斯多利亞

Calidore and Pastorella. [キャリドアとパストレラ]

冒頭部分について、林訳「原序」と原文のふたつを示す。

伊門斯賓塞爾。親為此詩。生於一千五百五十二年。沒於一千五百九十九年。其人蓋三百年前人物也。詩皆叙仙人。而事則仍人間事也。斯賓塞爾之所謂仙者。蓋謂人能以權謀自用者。皆謂為仙。以當日知識未開。名理未析。凡所悉之理。皆謂有仙人之術。

エドモンド・スペンサーがこの詩をつくった。1552年に生まれ1599年に死去している。その人は、おおよそ300年前の人物である。詩はすべて妖精について述べているが、これはまたこの世のことでもある。スペンサーのいう妖精とは、人が間に合わせに使うことのできるもので、それを妖精といった。当時は知識も開けておらず、論理がはっきりしていなかったから、理解する全部の道理は、すべて妖精のせいにした。

The *Faerie Queene*, written by Edmund Spenser more than three hundred years ago, is not a poem about fairies. By 'faery' Spenser means anything that has to do with magical powers. In his day men knew far less about the laws of nature than we do, and what they did not understand they said was worked by magical or 'faery' power.

300年以上も前にエドモンド・スペンサーによって書かれた「妖精の女王」は、妖精についての詩ではない。スペンサーのいう「妖精」は、不思議な力

で行なわれるすべてのことを意味する。当時、自然の法則についての知識は私たちよりもはるかに少なく、理解できないものは、魔術の、あるいは「妖精」の力で動いているのだった。

林訳は、原作の逐語訳ではない。曾宗鞏が口述翻訳するのを林紘は聞きながら古文で筆記する。逐語訳にはならないのは当然だ。だからといって、上に見る林紘の妖精についての理解は、それとも微妙に違う。原作者の考えとは異なる記述になっているが、その責任はどちらにあるのか不明である。曾宗鞏が誤訳したのか、あるいは、林紘が勝手に理解したのか。

また、原作にはないスペンサーの生没年が加筆されている。別の資料に当たって調べたわけではない。この学生版には、スペンサーのごく簡単な年譜がついており(150頁)、それに生没年が書いてある。ここから引き抜いて原序に組み込んだだけだ。

ひとつだけ疑問をしるして終わりとする。

学生版の「序」には、署名がない。この版本のためにだけ書かれた可能性が高い。ゆえに、林訳の「原序」に「麦里郝斯叙」と明記するのは、林紘の勇み足ではなかろうか。

林訳セルバンテス冤罪事件

未発表。林訳セルバンテスと題したが、林紘らは「ドン・キホーテ」しか翻訳していない。「ドン・キホーテ」の漢訳は林紘に先行する抄訳がある。にもかかわらず、林訳ドン・キホーテが最初の漢訳だとされるのはなぜか。清末民初翻訳小説研究の必要性が強調されてもいい。

ミゲル・デ・セルバンテス(・サーベドラ)(Miguel de Cervantes (Saavedra), 1547-1616)は、スペインの小説家であるのはあらためていうまでもない。その作品「ドン・キホーテ」は、前編52章(1605年刊)、後編74章(1615年刊)からなる大著だ。

林訳セルバンテス、すなわち林訳「ドン・キホーテ」(漢訳名『魔侠传』)は、これも、一連の林紘冤罪事件のひとつである。

林訳の冤罪とはなにか。根拠がないにもかかわらず、濡れ衣をきせられ批判が加えられることをいう。

林紘の翻訳がでたらめである理由は、戯曲を小説化したところにある。これが林訳の欠陥のひとつだ。長らく定説となっていた。もうひとつの理由として、原作を任意にしかも大幅に削除して翻訳したことがあげられる。

林訳セルバンテスは、後者の大幅削除にかかわる。なにしろ原作が前編と後編にわかれる大作だという知識が誰にでもある。出てきた漢訳が相応のものでなかったばあい、不満が生じるのは当たり前かも知れない。

1 大幅削除説

林薇は、『百年沈浮 林紓研究綜述』（天津教育出版社1990.10）において、つぎのように説明する。「たとえば『ドン・キホーテ』を『魔侠传』に、『九十三年』を『双雄義死録』に翻訳したが、ほんの薄い1冊の小冊子〔薄薄的一本小冊子〕に変えてしまった」（167頁）。林訳の欠陥は、原作を大幅に削除したことだといっている。林薇は1冊と書いて誤る。事實は上下2冊だ。

林薇の文章から引用するのは、これが従来の林紓評価をとりまとめており閲覧に便利だから。

上の引用は、原作を大幅に削除したという批判を紹介しているにすぎない。

たしかに現在はこのように非難されるのが普通だ。確認しておく、ユゴーの「九十三年」と併記してセルバンテスの「ドン・キホーテ」がある。

林薇は、カッコの中で注釈風に説明をつけ加えた。すなわち、「これは、児童が読むように改編し提供した省略本を、合作者（注：口述翻訳者）が誤って採用したためであって、林紓が故意に省略したのではない」と書いて従来からある説をくりかえしている。林紓を弁護しているように見える。

林訳について、児童用に改作されたものを漢訳したと批判するのをよく目にする。私は、そこにひっかかる。なぜなら、書いている本人には、児童用の書籍を軽蔑しているという意識が欠落しているからだ。

いまここでは、林薇が「九十三年」と「ドン・キホーテ」について述べていることを頭に置いてほしい。

林薇の説明は奇妙だ、と私は思う。林紓らがよった底本がもともと省略本であるならば、結果として漢訳が省略本になるのは当然だろう。林紓の責任ではない。

もう少し説明しよう。スペイン語の原作があり、それを改作（または省略）した英語原作が出版される。林紓らはその英文改作本を底本にしたと理解すべきだ。いわば原作と漢訳の間にはさまれた英文改作本が存在している。それを、原作から直接、しかも勝手に省略したと考える研究者のほうが間違っている。林訳小

説はでたらめである、という先入観があるのではないか。

研究者がやるべき仕事は、林紓らが使用した底本を探索することだ。底本の特定ができたあとに、林紓らがそれをどのように翻訳したかの検討がはじまる。翻訳の質についての結論を出すのは、ふむべき手順を踏んだあとのことだ。翻訳文学であるならば、これがごく普通の研究方法である。わざわざ説明するまでもない。

従来の研究状況を見ると、論者は、底本もさがさず、検討することも抜きにしている印象を受ける。にもかかわらず、原作を省略して翻訳したと結論だけが先に存在するのである。それで林訳批判をくり返すのは、研究としてはあってはならない。あってはならない事態が、中国では長年にわたって継続している、といえば言い過ぎか。

大幅削除とか「薄い1冊の小冊子に変えてしまった」と一口にいうが、単純ではない。

戯曲を小説化したというのであれば、その底本を指摘することによって事実かどうかは証明できる。だが、分量の問題は、主観に左右される。しかも、ここでいう大幅削除は、何にもとづいて言っているのかも不明なのだ。自明のこととして発言している研究者がほとんどである。そこに問題が存在しているという認識もない。

スペイン語の原作にもとづいて比較をするのはいうまでもない、というつもりか。

上に紹介した林薇の説明を見てほしい。原作を大幅に削除したと書いたかと思えば、児童用に改作した省略本を底本にしたともいう。底本は、スペイン語原作なのかそれとも別の言語で翻訳された改作省略本なのか。林薇には、それすらも明確に区別ができていないように見える。偶然、林薇の名前があがっているにすぎない。彼女に限ったことではないから根が深いという。

以上、問題を指摘したところで、まず、林訳「ドン・キホーテ」について評価がどのように変化しているのかを明らかにしておきたい。

2 鄭振鐸のばあい

林訳批判は、さかのぼれば鄭振鐸の文章に行き着く。それもそのはずで、具体

的な作品名をあげて実質的な林紘批判をはじめたのが1924年の鄭振鐸であるからだ。のちの研究者は、林訳の欠陥を無視する人は別にして、全員が鄭振鐸の批判を支持し、飽きることなく反復して引用する。ゆえに、定説になっている。

関係部分について、鄭振鐸「林琴南先生」(『小説月報』第15巻第11号1924.11.10。傍線省略)は、つぎのように解説している。少し長いが翻訳して引用しよう。

林氏の翻訳には、またよいとは思えないことがある。すなわち随意に原文を省略するのである。たとえばフランスのユゴー『九十三年 [九十三]』(Ninety-three)を林氏は『双雄義死録』に翻訳したが、原文と照合してみるとどれくらい削除したものかわからないくらいだ。私たち [我們] は驚き怪しんだ。原文は厚い本であるのに、漢語に翻訳するとなぜ薄いものになってしまうのか。中国の以前の翻訳者は、多くが原文を省略するのを好んだ。たとえば某君の訳したトルストイの『復活』(心獄と改題)は原文の3分の1、4分の1にもならない。魏易が訳したディケンズの『二都物語 [二城記^{ママ}故事]』(Tale of Two Cities)も原文の3分の1でしかない。これはなぜか。考えるに、その過ちはたぶん口述翻訳者にあるだろう。たとえば『九十三年』は、口述翻訳者は全文を見ておらず、出版社が児童用に改編し提供した省略本を誤ってとりあげ林氏に訳して聞かせた。すなわち、林氏は故意に省略したかということについていえば、おそらくそういうことはなかった。幸いなことに林氏のこの種の翻訳は、多くはない。その他各種訳文について12の字句の省略および小さな誤りならば、随所にある。いちいち挙げることはできない。また、イブセンの国籍ノルウェーをドイツにかえるなどの類は、[口述]翻訳者の過ちであって林氏の誤りではない。10頁

鄭振鐸は、誤りの責任を林紘ではなく彼の共訳者に押しつけた。さきに林薇の説明を紹介したが、その起源は鄭振鐸の文章にあることがわかるだろう。原作を削除したといいながら、児童用に改編した省略本であると説明するのだ。矛盾は、最初から存在していた。引用者は、自分で考えずにそのままひき写したということだ。

ユゴーの「九十三年」について、漢訳は大きく省略してあるという。しかし、大幅削除が行なわれた作品は少ないとの指摘にも注目しておこう。鄭振鐸があげた例を見れば、「九十三年」くらいのものだ。驚き怪しんだ「私たち」とは、複数で表現しているから、当時、林訳を読んだ人たち全般を指しているのだと理解する。

トルストイの漢訳『心獄』は馬君武の訳筆になる。鄭振鐸が、なぜ「某君」としたのかは不明だ。名前を出したくなかった理由があるのかもしれない。

ここに引用した鄭振鐸の文章には、「ドン・キホーテ」という書名があげられていないことに読者はお気づきのはずだ。大幅削除については、ユゴーの「九十三年」を出してはいる。だが、「ドン・キホーテ」には触れない。

ところが、鄭振鐸は別の箇所「ドン・キホーテ」に言及している。ここが重要な点だ。

比較のみごとであるということのできる40種あまりの翻訳のなかで、たとえばセルバンテス [西万提司] の『ドン・キホーテ [魔侠传]』、ディケンズ [狄更司] の『オリヴァー・ツイスト [賊史]』、『骨董屋 [孝女耐而伝]』など、スコット [史格得] の『アイヴァンホー [撒克遜劫後英雄略]』などはよい翻訳本に数えることができる。10頁

鄭振鐸が高く評価する作品のなかに『魔侠传』すなわち「ドン・キホーテ」を入れている。これは、どういうことか。現在では、林訳の『魔侠传』も省略本のひとつとして批判の根拠になっているではないか。林薇の説明をもう1度見てほしい。「九十三年」と「ドン・キホーテ」が掲げられる。しかし、鄭振鐸本人は、『魔侠传』はみごとな翻訳だ、とほめている。現在行なわれている批判と比較すれば大きな矛盾だといわざるをえない。

鄭振鐸は、省略本のなかには数えなかった「ドン・キホーテ」だった。だが、追跡してみてわかったのは、扱いに変化がおこっていることだ。のちに注目されることになり「九十三年」と同類にされてしまった。

3 周作人のばあい

鄭振鐸は、「ドン・キホーテ」をみごとな翻訳のうちに入れていた。だから、当初は問題にもならなかった、ということにはならない。批判は、それよりも前にあった。周作人なのだ。

1922年に周作人が発表した「十八「魔侠传」」*¹である。1924年の鄭振鐸論文より2年も先行している。

表題からわかるように林訳『魔侠传』を読んでの文章だ。林紘の漢訳が出版されてすぐに書いた文章だとわかる。

周作人は、前半で、といってもそれほど長い文章ではないが、著者セルバンテスと彼の作品について簡単に紹介する。さらに、原作が世界の名著であることをいったあとで、漢訳に言及してつぎのように書いている。「中国にもなんと訳本がある。ただし、私たちの期待があまりにも大きいものだから、訳本についての失望もまたはなはだしいのだ　もし原本が「ブースビイ [白髭拜 Guy Boothby]」といった人の著作であれば、当然、惜しいなどということはない」

林訳『魔侠传』よりも先んじて別の翻訳が出ているのだが、周作人は、それには触れていない。無視したか忘れたか。今、それは問わないことにする。彼は、林訳『魔侠传』に対してここで失望の感情をあからさまに表明した。引き合いに出されたブースビイこそいい迷惑だろう。周作人は、なぜそれほどまでに落胆したか。彼は辛亥革命以前に該書を読んでいた。お気に入り作品のなかのひとつだったからだ。その後も時々拾い読みをつづけていたという*²。

つづけて、原作が前編後編とあるのを前編だけにしたのは了解の範囲内だと述べる。この後が問題だ。

「林君の古文は滑稽味を伝えることのできる力量をおおいに持っている。これは簡単に得られるものではない。ただし、時には大失敗をしている。たとえば、アーヴィング [欧文] の『スケッチ・ブック [拊掌録]』の訳文にひどい部分が多いように、この『魔侠传』もそれを免れなかった」

ここで出てくる『拊掌録 THE SKETCH BOOK OF GEOFFREY CRAYON, GENT.』(1907)は、(美)華盛頓欧文 Washington Irving 著、林紓+魏易訳である。

訳文のひどい部分について、周作人は具体的に指摘しているからそれを見る。最初に述べておくが、周作人がここで訳文の比較に使用しているのは「スミス1914年[ス密士1914板]英訳本」だ*3。彼は、全108章だと書いている。原作は前後編全126章だから、それにくらべれば省略本となる。

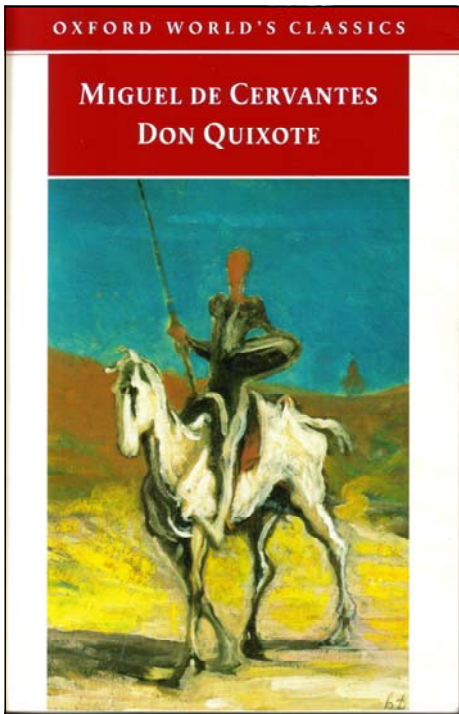
周作人は、原作第16章の2ヵ所について指摘する。ひとつは、林訳「第^マ二[三]段第二章」にある。もうひとつも「林訳本^マ二[三]之二」だ(なぜか段数を誤植する)。

後者の比較的短い方が漢訳の特徴をよく表わしているように思う。

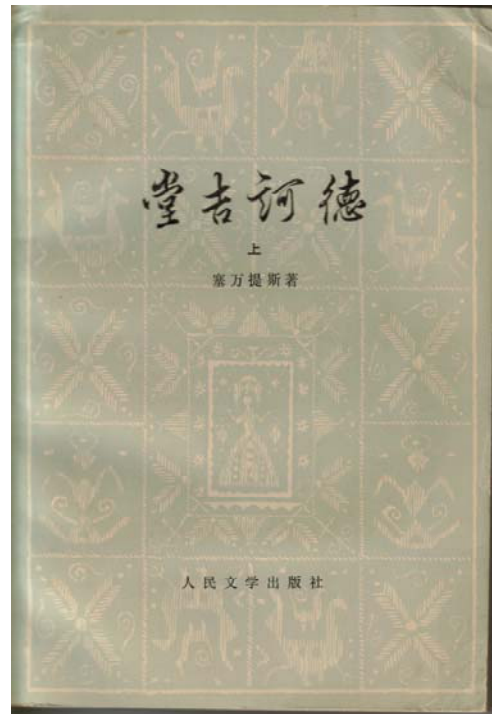
馬方の集団に叩きのめされたドン・キホーテとサンチョは、街道宿にたどりつく。ドン・キホーテがそれを城塞だと思いこむのは、彼の頭が騎士道物語漬けになっているからだ。宿の亭主夫妻に娘、それに使用人がいた。それを描写してスペイン語原作(の日本語訳)は、次のようになっている。

【永田】街道宿にはまた、アストゥーリアス生まれの若い女中がいた。顔が大きく、えり足が短く、鼻がべしゃんこで、片目はつぶれ、残った目もあまり健全でない女だった。もっとも、からだのりっぱさはほかの欠点をおぎなったことも確かながら、足から頭まで百五十センチにも達せず、おまけに、だいが屈みこんだ背中中は、当人が望む以上に地面を見させたものだ。*4

宿の女使用人についての描写である。差別的な表現があるが(日本語訳は抑制している)、17世紀の作品(前編は1605年の出版)であるからご了承いただきたい。「からだのりっぱさ」という箇所は、新しい日本語訳(牛島)では「彼女のいかにも愛敬のあるしぐさ」*5となっている。参考までに、チャールズ・ジャーヴィス Charles Jarvis 英訳本(1742年初版。復刻本 OXFORD WORLD'S CLASSICS で見ると)では「彼女の身体の動き the activity of her body」(p.111)としている。注をつけて「優雅さ gracefulness」と説明する。「からだのりっぱさ」は「愛敬のあるしぐさ」を含んでいるという意味なのだろう。ついでだから、塞万提斯著、楊絳訳『堂



Jarvis 英訳



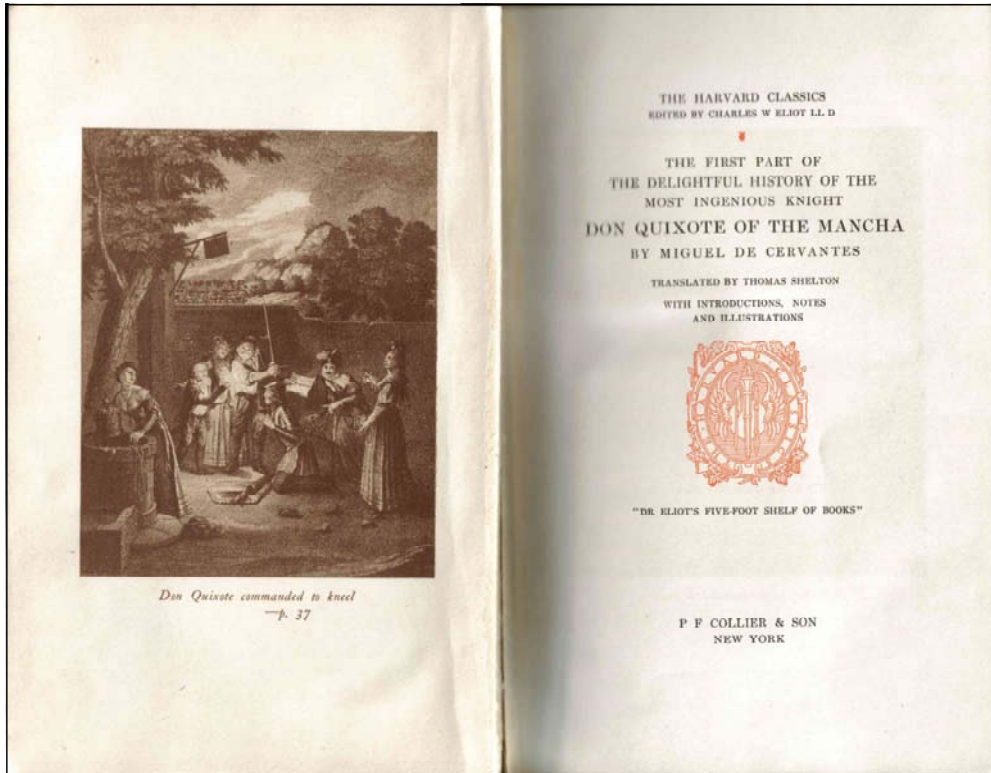
楊絳漢訳

『堂吉訶德』上冊（北京・人民文学出版社1978.3）の該当部分を見ると、「彼女の容姿は風雅であり〔她体态風流〕」（112頁）となっている。

この箇所を周作人は取り上げる。彼は、英訳スミス版によって自分で漢訳した。それを私が日本語にして示す。ややこしくて申し訳ない。

【周作人】この宿の唯一の使用人はアストゥーリアス地方の娘で、顔が大きく、後頭部は扁平、獅子鼻、片目は斜視でもう片方も正常ではなかった。身体が柔らかくて〔她的身体的柔軟〕それらの欠点を隠してはいたが、彼女の身長は7ハンド〔掌〕たらず（およそ4尺半）で両肩は肉付きがよく、ひとりでに地面を見させないわけでもなかった。

「ハンド」と私が訳したのは長さの単位だ。“hand”であるが、“palm”の可能性もある。周作人は「掌」と漢訳している。辞書によると「ハンド」は馬の高さを



Shelton 英訳

はかる単位で掌の幅（4インチ）だそうだ。4インチだと約10センチにしかならない。ならば、70センチの背丈の女性だ。ジャーヴィス版では、次のようになっている。“She was not seven hands high from her feet to her head;” p.111.

「パーム」のほうは、長さ18-25センチというもいう。トマス・シェルトン Thomas Shelton 英訳本（1612初版。ハーバード・クラシックス THE HARVARD CLASSICS。出版社は P F COLLIER & SON, NEW YORK,1909で見ると）には、次のようにある。“She was not seven palms long from her feet unto her head;” p.127

永田寛定訳『ドン・キホーテ』正編2の訳注において、長さの単位をふたつ説明する。ひとつ（329頁注189）「一こぶしとは、人さしゆび以下の四本を握り、母指をその上へ立てた高さ。まず、十五センチぐらい」。もうひとつ（同上注190）「一ひらきとは、開き切った手の母指の先から小指の先まで。まず、二十一セン

ちぐらい」

楊絳訳『堂吉訶徳』上冊112頁には注がついている。「拵」手を開いて親指から小指までの長さだと説明する。永田訳注の「一ひらき」に該当するようだ。

長さについては以上のように各説ある。注によると約150センチになる。周作人が示したもとになっている英訳は、ほぼスペイン語原作と同じであると考えてもよい。つぎが林訳だ。

【林訳】此外尚有一老嫗。広額而豊頤。眇其一目。然頗趨捷。蓋自頂及踵。不過三尺。肩博而厚。似有肉疾自累其身。(上3-2:7頁)

そのほかに老婆がひとりいた。額は広くあごがはり、片目は見えないが身軽である。頭からかかとまで3尺たらず。肩は広くあつく、病気持ちのように身体を折り曲げている。

女使用人を老婆と漢訳したのは、どういうことか。そのような批判がでてくるはずだ。背丈が3尺というのも違う。原作の「7」を「3」に間違ふほどいいかげんだ、と判断されてもおかしくない。たしかに、あとに続く話の展開からすると老婆では具合が悪いように思う。なにしろ、宿の別の客から夜伽によばれたその女使用人が、ドン・キホーテとサンチョを巻き込んで大騒動をおこすのだ。だが、それ以外は周作人が非難するほどの省略になるだろうか。私は周作人の判断に対して疑問符をつけたい。そればかりか、3尺という小さな部分に、私はある可能性を感じないわけでもない。私は、林訳小説冤罪事件をいくつか見てきた。その経験からいえば、林絳が3尺と漢訳しているのであれば、そうしている原本があるのではないかと考えるからだ。

周作人の説明をつづける。

彼は、口述訳者の責任にして林絳をすこし弁護する。翻訳に使用した原本があまりよくなく、たぶん省略本であったのだろうともいう。こういう説明が、誤解をまねく。つまり、林絳がよった底本を特定することなく、原本を大幅に省略しただけの、省略本にもとづいたから漢訳が不十分だのという。林訳批判の基準があやふやなのだ。周作人も、林訳の底本を確認するつもりがないらしい。

それでは、英訳本について知らん顔かといえば、そうでもない。

（「ドン・キホーテ」の）英訳本は17世紀以来、種類はとても多いが、よいものは少ない。19世紀末のオームズビー [阿斯比 Ormsby] の4巻本、ワッツ [華支 Watts] の5巻本、および最近のスミス [斯密士 Smith] の1巻本などが信頼できる。ただ、ドレ [陀勒 Dore] の挿絵がついていないのが惜しいだけだ。セルバンテスを愛する人は、外国語ができる人は適当な翻訳本（日本にも全訳がある）を見つけることができるだろう。

英訳の数種類を周作人はあげている。世界における林訳の位置を知るために、当時、諸外国の翻訳状況はどうなっていたか紹介しておきたい。林訳『魔侠传』は1922年の発行であることを念頭においてほしい。以下の引用は、ポール・アザールの著述からだ。

ノルウェーのようにこれまで自国語の『ドン・キホーテ』をもたなかった国々もいまそれを所有することを誇りにしている（一九一六-一九一八）。フランスでは二つの新訳がでた、一九二三年から一九二七年にかけて出版されたものと、一九二九年の版とである。最良の英訳はオームズビーのもので、一九〇一年上梓である。一九〇五年にはブラウンフェルスの独訳（一八八四）が改訂版として出版された。一九二三年にはL・ジャンニーニのイタリア語訳が公刊されはじめた。^{*6}

これを見ると林訳『魔侠传』は英語からの重訳にせよ、イタリア語訳よりも先行することになる。世界の潮流から中国だけが取り残されている、という評価が下されるのをかろうじて免れているのは、林訳があるからだ。この点にも注目してもらいたい。

さて、周作人の文章にもどろう。

（外国語が）できない人はこの『魔侠传』を読むよりしかたがないが、そ

れでもその一斑を知ることはできる。なぜなら原作の味わいが大いに濃厚であるからだ。ワッツが「セルバンテス評伝」のなかで述べているように、どうしようもない翻訳、たとえばモトゥー [莫妥^{ママ} Motieux] の雑な訳本でも、彼のよいところは完全には失われておらず、だから、『魔侠传』もまったく無用であるというわけでは決してないのだ。

周作人は、モトゥー版を雑な訳本の部類に入れる。周作人による独自の判断ではない。

モトゥー版は、1701年に出版されたという。2世紀近く経過したあとにオームズビー版(1885年)がでた。彼はその序文にモトゥー版について「無価値よりも一層悪い worse than worthless」と書いているのが有名だ。それ以来、モトゥー版にはそのような評価しかあたえられていない。

では、上記の宿の使用人(名前はマリトルネス)についてモトゥー版は、どのように英訳しているかを見てみよう。

私が見ているのは、ニューヨークで出版された刊年不記本だ。これについてはあとで説明する。

とりあえず該当箇所(第15章72頁)を見て私は正直に言って驚いた。なんと、「マリトルネスという彼らの使用人 their servant Maritornes」とだけしか英訳していない。セルバンテスがあれほど筆を費やして彼女の特徴ある容姿について描写したにもかかわらず、あっさりとして省略している。ここらあたりをさして、周作人が「雑な訳本」とする理由になるのだろう、と書きそうになる。だが、これには複雑な理由がある(後述)。この部分だけを見ると、林訳とも異なるということだ。

だからこそ、「原作者を侮辱しない全訳が中国に出現することを望む」と周はいつてもいる。

もうひとつ、文章の最後に、周作人が林訳について苦言を呈している箇所があるから紹介する。のちのち問題になる。

原作第4章でドン・キホーテは、木にくくられて折檻されている少年アンドレスを助けたことがあった。羊を失った罰を主人から受けていたのだ。殴るのをや

めさせ、給料を支払うよう百姓に誓わせる。そのとおりにするという彼のことを信じてドン・キホーテは、その場をあとにする。姿が見えなくなると、主人が少年を半殺しの目にあわせたのはいかにもありそうなことだ。中途半端な助け方をした、というようなものではない。ドン・キホーテはいらぬおせっかいをしてかえって少年をひどい目にあわせたということが出来る。そのアンドレスが第31章でふたたび登場する。ただではすまない。

アンドレスは、ドン・キホーテを罵って言い放つ。周作人の漢訳を、まず示す。

【周作人】神様が旦那とこの世に生まれたあらゆる騎士をひどい目にあわせるよう願っているだ。

これだけで十分わかると思う。念のため、永田訳も添えておこう。「そうよ、殿様も、この世に生まれた遍歴の騎士ちゅう騎士と一しょに、神様にのろわれるがいゝだ」*7

ジャーヴィス版では、「神様の呪いがふりかかることを、この世に生まれたすべての遍歴の騎士の上にも。may the curse of God light upon , and upon all the knights-errant that ever were born in the world.」(272頁)とある。モトゥー版第26章ではどうか。「あばよ、あんたと今まで生まれたすべての遍歴の騎士に災いがふりかからんことを！and so fare you well, with a plague upon you and all the knights-errant that ever were born!」(165頁)

にたようなものだ。それが林訳では次のようになる。

【林訳】似此等侠客。在法宜駢首而誅。不留一人。以害社会。/[割注]吾於党人亦然

こんな騎士は、掟によって首をならべて殺されればいいだ。ひとり残さずな。世のためになんねい。/[割注]革命党人について私も同様である。43頁*8

漢訳そのものは、英訳とほとんど同じだ。周作人が問題にするのは、林紘がどこした割注の方である。わずかに漢字6文字にすぎない。訳をくりかえす。

「革命党人について私も同様である」。私は、林訳の「党人」を「革命党人」と翻訳した。なぜなら、林紘が、文学革命の陣営から旧文人の代表として攻撃されていた事実があるからだ。そのことへの思いが、この割注になってあらわれた。林紘が、翻訳のなかで革命党人に対する自らの感情を吐露した箇所にはほかならない。説明するまでもなく、林紘は、自分を批判した人々を罵ったのである。そこを周作人は、敏感にすくい取った。周作人は、これについてなんと書いたか。「この訳文、この注釈には、私は本当に驚いた。それ以外には何もいうことはない」

周作人は、スペインの、それもはるか昔の騎士道物語のパロディだとばかり思っていて読んでいた。ところが、訳文に突然、林紘ご本人が出てきた。そればかりか、彼は革命党人について「掟によって首をならべて殺されればいいだ。ひとり残さずな。世のためになんねい」と言っている。思わず周作人は現実には引き戻されたというわけだ。周作人の感想を私はそのように読みとった。わざわざ言及したところから、私は、周作人の驚きと同時に違和感、あるいは反発する気持ちを感じる。つまり、彼は、「何もいうことはない」と書いて、この部分を取り上げたことに意味を持たせている。決して同意していない。

見落としそうな小さな箇所である。だが、周作人はそこに注目した。「党人」という単語に反応したのだ。しかも、言葉の底に批判の意味を込めている。こういう指摘がなされていれば、中国ののちの研究者が林訳に対してよい印象を持たないのも自然のなりゆきだろう。林紘は保守派の代表として文学革命に反対したばかりか、訳文の中でも革命党人を罵った。反動派の人物だからこそ書くことのできた注釈だ、と受け取られた。だから、ここを取り上げて批判を行なう人も出てくる。現在における『魔侠传』評価についてはあとで触れるつもりだ。

周作人は、原作のすばらしさを英訳によって知っている。彼が英訳のいくつかをあげているところからそう推測できる。林訳『魔侠传』がモトウーの英訳版と同じように雑であるならば、周作人自身が信頼できる英訳にもとづいて漢訳すればよかったのに、と私なら考える*9。

だが、評論文というのは、問題を指摘するだけにすぎない。解決するつもりはなかったのだろう。

英訳本を数種類あげていながら、周作人は、林訳がもとづいた版本について説明しない。漢訳の底本がモトゥー版であるとも彼は書いていないのだ。

林訳の底本は不明にしたまま、周作人は、翻訳の具体例をあげて批判をしている。林訳『魔侠传』がひどい訳本だという印象を与える彼の文章であると重ねていう。『魔侠传』が林訳批判の根拠となりはじめるのは、ここらあたりかと思う。

鄭振鐸の文章「林琴南先生」が発表されたのは、その2年後の1924年だ。彼は、周作人が指摘した「党人」については何も書いていない。知らないはずはないから、無視したことになる。

該論において鄭振鐸が『魔侠传』を称賛していたことは、すでに述べた。ところが、鄭の文章から翌年発行の『小説月報』第16巻第1号(1925.1.10)に、周作人の「魔侠传」が部分的に、つまり林訳を否定した部分を含んで再録される。

これは、どういうことなのか。別の雑誌に林訳「ドン・キホーテ」批判が掲載されるのであれば、まだしも理解できる。だが、鄭振鐸がよい翻訳だと認定した『魔侠传』が、時期は違うとはいえ同じ『小説月報』誌上で、周作人によってふたたび否定されている。おまけに、当時の『小説月報』主編は、鄭振鐸その人にほかならない。

周作人の文章は、抄録であり掲載誌のわずかに1頁にも足りない短文になっている。その掲載場所を見れば、該誌同号の傅東華「西万提司評伝」の末尾に、まるで埋め草のように配置されているとわかる。

主要論文は、傅東華の方である。

4 傅東華のばあい

傅東華「西万提司評伝」(『小説月報』の第16巻第1号1925.1.10)を紹介しよう。

傅東華(1893-1971)は、中華書局に勤めた後、中学の英語教師から上海復旦大学中文系の教授(1929)になる人物だ。翻訳家としても有名である。「ドン・キホーテ」も彼の翻訳のひとつとして後に発行される。

塞万提斯著、傅東華訳『吉訶徳先生伝』上下冊(長沙・商務印書館1939.4未見)がそれである。西万提司、塞万提斯の両者ともセルバンテスの音訳だ。同一人物に

もかわらず「西」を「塞」に違える理由をしらない。漢訳は、前編のみで英訳からの重訳だという。傅東華の該論文は、「ドン・キホーテ」の翻訳に従事していた頃か、あるいはそれに取りかかる前に書かれたと推測される。彼が「ドン・キホーテ」の翻訳を志すのであれば、先行する林訳を検討するのは当然だろう。林訳に触れる箇所がいくつかある。

セルバンテスの経歴を紹介する中に、林訳が出てくる。

たとえば、「ドン・キホーテ」のなかで自著「ラ・ガラテア」を出している箇所を抜き出す。ここを説明して「林訳はこの章を少なからず削除している。この部分もまた存在していない」(4頁)と書く。林訳上巻第1段第6章の28頁がその箇所だが、たしかに訳文には存在していない。

さらには、次のようにも書いている。

私たちは、現在、林紘の精密という点ではひどい訳本を読んだとしても、手放すには忍びないと感じるのは、これは、当然、原書がたしかに偉大な力をもっていくことによるのである。6頁

傅東華は、林訳に対してかなり厳しい評価を下しているとわかる。これに加えて周作人の文章も部分再録された。しかも、それは林訳を否定する内容なのだ。「ドン・キホーテ」が林訳批判の根拠のひとつにあげられるようになるのは、周作人と傅東華以後であると考えてもいいだろう。その後、鄭振鐸による正の評価は、無視されることになった。

5 林訳否定の方向へ

林訳作品が翻訳目録に収録されるのは当たり前だ。その時、编者によっては注をつけたりする。たとえば、(曾)虚白編、蒲梢(徐調孚)修訂『漢訳東西洋文学作品編目』(真美善書店1929.9.28。84頁)に「魔侠传(文言節訳)/Don Quixote 林紘商務」とある。カッコ部分が省略本であることを表示して、これが注なのだ。寒光『林琴南』(上海・中華書局1935.2)において「魔侠传 二冊」を説明して

「本書は口述者の巻き添えを大いにくって、翻訳は不完全なものにしかならなかった」(108頁)と記述する。おまけに「この書は大失敗であり『スケッチ・ブック』とくらべものにもならない」とも書く。周作人の文章をそのまま利用して、林訳『魔侠传』についての評価はきわめて低いといえることができる。

林紓の専門書であるという点が重い。それだけ影響力が大きい。

寒光も、林訳「ドン・キホーテ」の底本について言及していない。それにもかかわらず「大失敗」だというのはわけがわからない。寒光は、スペイン語原作を頭において比較しているからだろう。幻を基準にして批判しているのだから奇妙なことだと私は思う。林訳の底本を明らかにしないのは、周作人も傅東華も同様であった。

蒲梢(徐調孚)「漢訳東西洋文学作品編目 一九二九年三月止」(張静廬輯註『中国現代出版史料甲編』北京・中華書局股份有限公司1954.12上海初版。304頁)がある。

西万提斯(M. Cervantes, 1547-1616) / 魔侠传(Don Quixote)(文言節訳)林紓 商務

これは、1929年版を資料集に収録したものだ。「文言節訳」が編者の注記であることにはかわりはない。しかし、一方で、鄭振鐸がやり玉にあげた「九十三年」の林訳『双雄義死録』については「文言」とだけ注記して「節訳」とは書いていない(298頁)。

批判の根拠として定着するのは、文学史にとり入れられてからになる。いうまでもなく寒光らの専門書の説明にしたがっているにすぎない。

復旦大学中文系1956級中国近代文学史編写小組編著『中国近代文学史稿』(北京・中華書局1960.5。采華書林影印1962.2.15)に見ることができる。

ふたりが合作するというこの方法は、その数が少ないわけでもなく、当時の条件下では免れにくい奇形の翻訳方法だった。訳本は原作に比較して、遺漏、省略、加筆という現象が普通にあり、『ドン・キホーテ』のような大作が薄い小冊子に訳されるだけだったり、シェイクスピア、イブセンの戯曲

(たとえば『ヘンリー4世』『幽霊』)が小説の形式で出現するなど、見る影もなく変えてしまった。286頁

林紓がシェイクスピアとイプセンの戯曲を小説化したというのは、冤罪である。私はすでに彼の無実を証明している。もっとも、1960年の時点で、また、その後半世紀近くも戯曲の小説化が定説になっていたのだから、そう記述するのもしかたがない。

あとは、林訳批判の根拠のひとつとして決まってあげられるようになる。林薇が紹介するとおりだ。

姚錫佩「周氏兄弟の堂吉訶德観：源流及変異 關於理想和人道的思考之一」(北京魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅研究資料』22 北京・中国文聯出版公司1989.10)がある。林紓が書き加えた「党人」部分を指摘して次のように書く。「革命党人に対して骨身に刻んだ憎悪を強烈に表現し、彼の頑固で封建道徳を擁護する立場を反映している」(325頁)

張全之『突圍与变革 二十世紀初期文化交流与中国文学変遷』(西安・西北大学出版社1997.9. 92頁)は、林訳小説について卓越した翻訳活動だと高く評価する。それでも、欠点として誤訳と削除改作について指摘せざるをえない。「彼は時に意図的に小説の字数を削減し、たとえばセルバンテスの「ドン・キホーテ」(第1部)は、林訳では字数のうえで3分の2を削除した」。これを見れば、それほど縮小してしまったのか、と驚くはずだ。林紓は、それでよく翻訳したというのとあきれるのが普通の受け止め方だと考える。

だが、林訳『魔侠伝』について張のように「3分の2を削除した」と具体的に書いた文章は、それまではなかった。なににもとづいて、そういうのか。「字数のうえで」と書くからには比較対照したのか。それにしても底本を明らかにしていないのだから、数字を提出することはできないはずなのだ。

そこで思いあたるのは、鄭振鐸が、かつて「トルストイの『復活』(心獄と改題)は原文の3分の1、4分の1にもならない。魏易が訳したディケンズの『二都物語[二城記^{ママ}故事]』(Tale of Two Cities)も原文の3分の1でしかない」と述べたことだ。鄭振鐸のこの説明は、林訳とはなんの関係もない。しかし、数字が

結果として一致するところから、張全之は、影響されて誤解したのだろうと私は思う。でたらめなことをする林紘のことだから、という先入観によるものと推測できる。事実にもとづかない林訳批判は深いところで継続されていると考えたほうがよい。

もうひとつ例として、近代翻訳文学研究に多くの成果をあげている郭延礼の文章を紹介しておきたい。

郭延礼『中国近代翻訳文学概論』（漢口・湖北教育出版社1998.3 / 修訂本 武漢・湖北教育出版社2005.7第2版第3次印刷）は、修訂本もでている。その表紙には「研究生教学用書 / 教育部研究生工作辦公室推薦」と印刷される。さらには、「本書是 / 国家社会科学 / “九五”規劃研究項目 / （獲第十二屆中國圖書獎）」と掲げてある。学界から高い評価を得た研究書だと理解する。

「林訳小説」は原著について省略が多すぎる。たとえばフランスのユゴー（〔雨果〕V. Hugo, 1802-1885、林訳では預勾とする）の「九十三年」(*Quatre-vingt-treize*)を林紘は訳して「双雄義死録」としたが、紙幅を大いに減らした。これは、出版社が改編して児童の閲読用に供した省略本を、おそらく口述翻訳者が林紘に訳して聞かせたためだろう。296頁 / 修訂本233-234頁

ユゴー作品についての郭延礼の説明は、鄭振鐸が書いた文章のままである。ただ、「九十三年」の原作名をフランス語で注記しているのが異なる。なぜそのように私が指摘するのか説明しよう。鄭振鐸の該文は、後にいくつかの資料集に収録されている。その時、初出の英語表記をフランス語に編者が書き直しているものがある。たとえば、錢鍾書等著『林紘的翻譯』（北京・商務印書館1981.11）だ。フランス語で書くほうが正確だという判断があったのだろう。だが、それはよけいな操作であった。なぜならば、林訳ユゴーは、フランス語から直接漢訳されたわけではなく、英語訳にもとづいているからだ。郭延礼が見た鄭振鐸の文章は、初出ではないからだと推測できる。

次が、セルバンテスだ。

セルバンテス ([塞万提斯] Miguel de Cervantes Saavedra, 1547-1616) の『ドン・キホーテ』(第1部)は、分厚い大著だが、林訳ではほんの薄い小さな1冊の[薄薄的一小本]『魔侠传』にかえてしまった。296頁/修訂本234頁

「ほんの薄い小さな1冊」という表現は、林訳の使用したことばに共通している。だが、郭延礼は、「ドン・キホーテ」については児童用云々を書かない。林訳は独自に、しかもスペイン語原作を大幅に削除して翻訳したと考えているのではないか。もとが「分厚い大著」だと説明しているのがその証拠だ。

商務印書館の「説部叢書」の中には、たしかに小冊子のものがある。ざっと見て、各冊は、100頁から200頁余、平均約150頁くらいのものだ。郭延礼の説明から受ける印象は、1冊本の200頁にも足りない頁数を想像してしまう。原作の「ドン・キホーテ」は長編だから、なぜそれが小冊子になるのか、普通は疑問に感じるはずだ。だから、郭延礼は原作に大蛇を振るったと考えた。

郭延礼は、周作人が指摘した「党人」の箇所に対して鋭く反応する。「後期の訳作は日に日に見劣りがし、前期の翻訳の色つやを失ってしまった。思想の退化ははなはだしく、彼が後期に訳したセルバンテスの『魔侠传』のなかには革命党人を攻撃することばさえ出現する。この種の思想上の退化は、林紘が当時清朝皇室をなつかしく思っていた政治立場と無関係ではない」(294-295頁/修訂本233頁)。林紘の政治立場に直結させてしまうのである。ここには、鄭振鐸が正の方向で高く評価した『魔侠传』は、あとかたもなく消失してしまっている。

否定的評価が揺れることなく定まっていると私が思うのは、つぎの文章をインターネット上で見つけたからだ。

滕威「《堂吉訶德》這樣来到中国 紀念《堂吉訶德》初版四百周年」(『中華読書報』2005.3.23 http://www.gmw.cn/01ds/2005-03/23/content_203520.htm)

副題にあるように、「ドン・キホーテ」初版発行400周年を記念して、該作品の中国への伝来を紹介する文章だ。

漢訳「ドン・キホーテ」について書かれた専門の文章でありながら、林訳『魔侠传』を最初の翻訳だと誤認している。『魔侠传』は2番目の漢訳だという事実は、意外に知られていないらしい。

滕威は、林訳『魔侠传』が発表された当時、なんの反響も引き起こさなかった、とまずのべる。その理由は、前半部分のみの翻訳であったこと、英訳からの重訳であったこと、さらには外国語を理解しない林紘と口述翻訳者が合作で翻訳したことをあげる。

冒頭部分において、林紘をめぐる定説が頑強に根をおろしていることがわかる。「外国語を理解しない」林紘が翻訳したもののどこに見るべきところがあるのか、という否定的姿勢を著者自身が宣言しているようなものだ。反響がなかったというが、林訳が刊行された直後に周作人が発言しているではないか。鄭振鐸は称賛したし、傅東華も否定的にはあるが文章で触れている。その事実を知らないのだろうか。

前述のように傅東華訳『吉訶徳先生伝』が英語からの重訳で発行されるのは1939年のことだ。しかも、前編だという。林訳から17年を経て、なお中国では原作前半の重訳本が出てくる。その傅東華訳本にしても長い間読者に愛された。滕威の説明は、「ドン・キホーテ」漢訳の歴史を無視しているように見える。これでは中国伝来の説明にならないではないか。私は首をひねるのだ。

つづいて滕威は、『魔侠传』の問題を4点あげる。

前編のみの翻訳だから、人文主義あるいは理想主義の精神の存在がない。セルバンテスの叙事手法を見いだすことができない。主僕のあいだにあるおもしろい対話をすべて第三人称の叙述に変えた。そうして、最後は、周作人が指摘し、郭延礼が反復するあの「党人」を取り上げる。削除をしたほかに林訳では随意に自己の観点を加筆する、と非難するのだ。

滕威は、林訳の底本はモトゥーの「雑な訳本 [雑訳本]」である可能性がとても高いと考えている。

『魔侠传』が読者の反響をよばなかったと述べて、つぎのように説明する。「当然、1922年の林紘は新文化運動が席卷した文化思想界において、すでにひとりの耄碌して落後した人物だと見なされており、白話翻訳小説がすでに主流となっていたから、外国語をまったく理解しない「翻訳家」が文言で訳した「骨董」を誰が読もうとするだろうか？」

滕威の文章は、林訳『魔侠传』を全面的に否定するものになっている。ため息

が出そうだ。なぜなら、彼女のこの文章には、過去における林訳小説否定の要素が凝縮しているように私は思うからだ。要素とはなにか。林訳否定の根拠を自分で検証することなくそのまま認定してしまうことだ。滕威も、林紓+陳家麟がシェイクスピア戯劇を小説化して漢訳したと批判する。まったく疑うところがない。

シェイクスピア作品、イブセン作品が、林紓によって小説化されたという事実は存在しないことを私は知っている。だからこそ、滕威の林訳『魔侠传』についての否定的論調に違和感をおぼえるのかもしれない。

それにしても、滕威の論文を読んで気分が重くなるのは事実なのだ。価値がない遺産しか中国人は受け継ぐことができなかった。中国にもたらされた「ドン・キホーテ」を紹介して、そういっているのと変わらない。『魔侠传』がそれほど悪い翻訳であるならば、それを長年読みついできた中国の読者たちはどうなる。あの鄭振鐸でさえ、すばらしい翻訳のなかに数えていた事実をどのように評価するのか。疑問がでてきて当然だと思う。

林訳の底本は、本当にモトゥー版なのかどうか、確認をしたのか。それをしてから結論を出しても遅くはないだろう。先に林訳を否定するという結論があって、滕威は文章を書きはじめたのではないかと私は疑うのである。逆にいえば、滕威にそのような筆をとらせた林訳にまつわる定説の強固さをここにも見るのだ。

もうひとつ、林訳の専門研究書である韓洪拳『林訳小説研究 兼論林紓自撰小説与伝奇』（北京・中国社会科学出版社2005.7。126-127頁）の説明に目を向けよう。

林紓が採用した意識という方法は、原作について削除書き換えがかなり多く、これは「林訳小説」の最大の欠陥である。（中略）たとえばセルバンテスの長編巨著『ドン・キホーテ』（第1部）は、林訳『魔侠传』では1冊の薄^{ママ}い小冊子になってしまった。フランスの名著作家ユゴーの『九十三年』は、林紓は訳して『双雄義死録』としたが、紙幅は大幅に減少してしまった。

前述のとおり、鄭振鐸は、大幅削除の原因を児童用に改編したものを口述翻訳者が誤って採用したからだろう、と推測した。韓洪拳は、それを紹介してそれなりの根拠がある、と賛成するのである。

韓洪拳は、ユゴー「九十三年」で行なわれたことを「ドン・キホーテ」に適用した。しかも、上下2冊の『魔侠传』が1冊であると誤解している。林薇と同じだ。さらに、鄭振鐸が林訳「ドン・キホーテ」を称賛していたことを無視する。

戯曲を小説化したという定説のばあいと同じく、大規模な削除についても、定説化に韓洪拳は協力していると理解できる。

6 林訳「ドン・キホーテ」

セルバンテスの「ドン・キホーテ」(前編52章、後編74章)は、前編だけでもたしかに長編に違いない。

誰も指摘していない、というよりもだれもが理解しているようにと言い直した方がよいが、ここには使用外国語の問題が横たわっている。

セルバンテスの原作は、いうまでもなくスペイン語だ。スペイン語の原作は長大であって、その全訳が翻訳されるのには時間がかかる。といっても、1612年にはやくもトマス・シェルトン Thomas Shelton の英訳本がでたという(1909年版の書影をにかけておいた)。しかし、普通、世界に流布しているのは、抄訳の方であろう。児童用に改作要約した本を考えれば、どれくらいの種類が出たのか想像もつかない。

林訳「ドン・キホーテ」、すなわち『魔侠传』2冊本がどのような状態であるのかを紹介しておく。

西班牙西万提司原著、閩県林紓、静海陳家麟同訳『魔侠传』卷上下(2冊)

上海商務印書館1922.3*10 説部叢書第4集第18編

卷上 第1段 1-8章 41頁(42頁は空白)

第2段 1-6章 29頁(30頁は空白)

第3段 1-13章 117頁(118頁は空白)

卷下 第4段 1-25章 204頁

上巻は合計して187頁だ。下巻が204頁だから、2冊あわせると全52章391頁に



林紓+陳家麟漢訳

なる。段ごとに章数たてられ、通しの数字にはなっていない。

研究者の多くが「薄い1冊の小冊子」だと書いている。まず「1冊」というのが違う。2冊本が正しい。さらに、2冊本391頁のどこが小冊子だというのだろうか。大いに疑問である。ただ、これは、あくまでも比較の問題であるからそのつもりでご覧いただきたい。

共訳者の陳家麟といえば、あのシェイクスピア作品のほか、ハガード、ボールドウィン、バルザック、トルストイ、ヴィースなどを翻訳している。彼は英語ができた。だから、バルザックにしるトルストイにしる、それらは英訳本に拠っていると考えたほうがよい。

そうであるならば、林紓+陳家麟がもつづいた原作「ドン・キホーテ」は英訳本に違いない。英訳本であれば、抄訳本はいくらでも発行されているだろうと推測ができる。

こうして「ドン・キホーテ」についても、林訳がもつづいた英語訳本の探索が

はじまるのだ。

7 「ドン・キホーテ」の英訳本

英語訳本の探索をはじめるといっても「ドン・キホーテ」のばあいは、シェイクスピア、イブセンとは事情が異なる。このふたりの作品については、林訳の底本を探そうにもなんの手がかりもなかった。だが、「ドン・キホーテ」には、馬泰来による指摘がすでにある。

馬泰来「林紘翻訳作品全目」銭鍾書等著『林紘的翻訳』北京・商務印書館1981.11。
95頁

「疑拠 P. Motteux 英訳（有 Everyman's Library 本）重訳。林訳分四段，章次独立，与 Motteux 本同。所見其他英訳本，雖亦分四段，但章次連続」

モトゥーは、Peter Anthony Motteaux (1660-1718) と綴るものがある。

馬泰来は、林訳の底本について先行論文がおかした多くの誤りを指摘して訂正した。その業績は、研究界において高く評価されている。私もこれに同意することにいささかの躊躇もしない。全面的に賛成する。

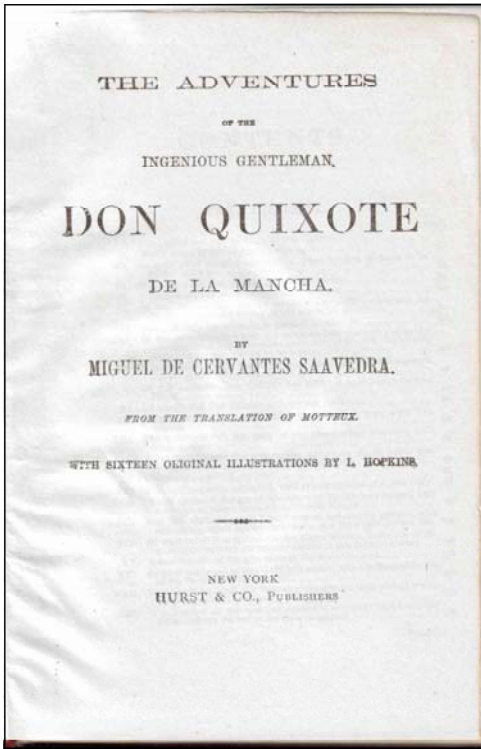
馬泰来の説明は次のとおり。林訳は4段に分けられており章も独立し、モトゥー版も同じだ（これがエブリマンズ・ライブラリ版のことらしい）。そのほかの英訳本は、4段で章は連続している。だから、モトゥー版だろう、と馬泰来は判断した。（ただし、シェルトン版も林訳と同じく4段にわけてある）

モトゥーの英訳本だと明らかにされている。調べるのは簡単だと私は考えた。

たしかに、英訳本を入手するのに手間はかからなかった。モトゥー版であればどれでもよかった。モトゥー訳と表示のある本を選んで適当に注文したのは、馬泰来の説明を確認するためだけに必要だったからだ。

ところが、手元に届いたモトゥー版は、馬泰来の説明するものと異なっている。エブリマンズ・ライブラリ版ではないからなのか。これは意外だった。今から考えれば、手軽に注文したこの版本が問題を複雑にしまう原因だった。

『奇想驚くべき郷土ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャの冒険 THE ADVENTURES



Motteux 英訳



日本松居抄訳

OF THE INGENIOUS GENTLEMAN DON QUIXOTE DE LA MANCHA』と扉には題している。ハースト社 HURST & CO. の発行だが刊年が印刷されていない。1冊本で610頁あり、第1部（すなわち前編全41章）と第2部（後編）に分かれる。章は通して100章を数える。

ふたたび説明すれば、『魔侠伝』は前編のみの漢訳だ。4段に分かれて章数は通しの数字ではない。合計すれば52章になる。ところが、手元のモトウ版は、前編は通し番号で41章なのである。4段に分かれていない。両者は、もうそれだけで馬泰来の説明と違っている。しかも、街道宿の女使用人について、林訳とモトウ版では字句が異なっていた。どこかおかしい。手元の版本はモトウ版だとばかり思っていた。だが、よく見ると扉には「モトウの翻訳から FROM THE TRANSLATION OF MOTTEUX」とあるではないか。あやしい。モトウ版にもとづいてさらに書き直したと読める。しかも、本文冒頭の題名は「ドン・キ

ホーテ・デ・ラ・マンチャの生涯と偉業 THE LIFE AND ACHIEVEMENTS OF DON QUIXOTE DE LA MANCHA」とあって表紙とは違えてある。こういうやり方が普通のことなのかどうかはわからない。

モトゥー版といっても、出版社によって異なっているかもしれないと思う。こうしていくつかの版本を集めることになった。

別版が届くのを待つ間に、日本語翻訳本を1冊入手したので紹介しておきたい。

8 日本松居松葉抄訳版

西班牙セルバンテス原著、日本松居松葉抄訳『鈍機翁冒険譚』上下巻1冊（博文館1896.11.23）だ。ロシナンテにまたがり槍をかざしたドン・キホーテが、表紙に描かれている。

4編に分けてあり、章数は通し番号で43だ。前編の抄訳だとわかる。ただし、底本については説明がない。その冒頭を引用してみる（総ルビはバラルビに改めた）。参考のために永田訳も添える。

【松居】近きほどのことなりき。驪慢呵村らまんかむらの片ほとりに一人の紳士ありけり。この人また彼の常住坐臥じやうじうざくわ、架上に鎗をかけ、古代風の楯、瘦こけし馬匹うま、敏捷き獵犬すばやかりいぬなどをば蓄へ置く方の一人にて、その収入の四分の三は、嗜好たしなみの料理のために消費去り、残る一分は絹布の上着、天鷲絨びらうどの股引、さては日常その身を装ふ手織木綿の料となしたり。1頁

【永田】ラ・マンチャ県のさる村、名は思い出したくない村に、さほど前のことでもなく、槍かけに槍、古びた楯、ひよろひよろ馬にはしっこい狩犬をそろえた、型のごとき郷土が住んでいた。昼は羊肉よりも牛の勝った煮込み、たいていの晩は昼の残り肉へ玉ねぎなど刻みこんだサラダ、土曜日に塩豚の玉子あえ、金曜日にレンズ豆、日曜だと小鳩の一皿ぐらいそえて、それだけに収入の四分の三が消えた。残るところは、厚羅紗の長マント、物日用びろうどのズボン、同じ布の沓カバーにつかい、週のふだんの日には、極上のペリヨリ織ですましていた。*11

スペイン語原文にもとづいた日記に比較すれば、松居訳は、たしかに「抄訳」である。松居自身が「われこの小伝を記し了りて、単に長大息せずばあらず。われ学浅く筆鈍く、加ふるに僅に三百頁内外の紙幅をもつてかの大作を抄訳す、ために原著の『美』を殺し、その趣味を塗抹し去んぬ」と書くとおりだ。その訳語注釈を見れば、底本が英語であることがわかる。ということは、英語原作が何であるかによってその抄訳ぶりが判断されなければならない。多種多様に発行されている英訳の中から底本1冊を探し出すことを意味する。ここでは松居訳について述べていると同時に、林訳についても同様の状況があることを私は説明している。

以上のことを頭において、林訳の冒頭を見てみよう。

【林訳】在拉曼叉中。有一村莊。莊名可勿叙矣。其地半拋垂拉更。半拋卡司提落。莊中有守旧之故家。其人好用矛及盾。与駿馬獵犬。二者皆旧時之兵械。其人尚古。故用之不去手。食多用牛而屏羊。且食品。排日而定。不相淆混。歳入非少。然以劃其四分之三。耗之食品。餘其一。則用以製衣。衣恒用絨。下裳及履。無一不絨。家居則用自織之布。

ラ・マンチャに、ある村があったが、その名前はいいたくない。そこは、半ばがアラゴンに半ばはカスティーリャに接している。村に旧習を守った旧家があった。その人は矛と盾、駿馬と獵犬を好んで用いていた。そのふたつともに昔の武器である。古を尊んだがゆえにそれを手から放そうともしない。多くは牛を食し羊を排除した。献立は日によって定まっておリ乱れることはない。収入は少ないというわけではないが、4分の3は食品に消えた。のこりは、衣裳を作るのに使った。衣は常にピロードを用い、ズボンとクツもピロードでないものはない。家にいるときは、手織りの布を使った。

村の名前をいいたくないのには、理由がある。著者のセルバンテスが公金費消の罪に問われて入獄していたのが、アルガマシーリャ・デ・アルバという村だったという。そこまでは、いい。林訳のつづきを見てほしい。アラゴン〔垂拉更〕

とカスティーリャ [カ司提落] という地名がでてきている。

カスティーリャ・ラ・マンチャ州は、カスティーリャ・レオン州とアラゴン州などと接しているのは事実なのだ。

だが、原作には、出てこない地名である。どこから取り出してきたのか。不思議でならない。原作にないから、林紓 + 陳家麟は、独自に調べて挿入したとでもいうのだろうか。そう考える方が、非現実的である。

林訳シェイクスピア、あるいは林訳イブセンを思い出してほしい (知らない人は拙論を読みたい)。林紓はもとの戯曲から、直接、小説化した。これが、中国学界の定説であった。だが、別の筋立てを創作する方が、もっと労力がかかるだろう。私は、この常識的な判断に従ったのだ。そうして、両者ともに小説化した英文原作を探し当てた。

林訳セルバンテスにも似たようなことがあるのではないか。もとづいた英文原作に、アラゴンとカスティーリャが出ているからこそ、そのまま漢訳しただろう。

そこで、とりあえず手元のモトウー版 (この段階では疑問符をつけざるをえない。以下、?付で示す) を見ることとする。

【モトウー?】 IN a certain village in La Mancha,* of which I cannot remember the name, there lived not long ago one of those old-fashioned gentlemen, who are never without a lance upon a rack, an old target, a lean horse, and a greyhound. His diet consisted more of beef†than mutton; and , with minced meat on most nights, lentils on Fridays, and a pigeon extraordinary on Sundays, he consumed three quarters of his revenue; the rest was laid out in a plush coat, velvet breeches, with slippers of the same, for holidays; and a suit of the very best homespun cloth, which he bestowed on himself for working days.

ラ・マンチャ*のある村、その名前を私は思い出せないが、それほど昔ではないころ、そこに古風な郷士のひとりが住んでいた。棚には槍、古い楯、痩せた馬、そして獵犬なしには決していなかった。彼の食習慣は、羊肉よりも牛肉‡によって成り立っており、たいていの夜はミンチ肉で、金曜日はレンズ豆、そしてごくまれに日曜日に鳩で、彼の収入の4分の3を消費した。

残りは、休日用にフラシ天のコート、ピロードのズボン、同じくピロードの靴を、仕事日用に極上の手織り布の衣服を整えるのに使った。

モトゥー版(?)は、ここにふたつの注をつけている。

ひとつは、ラ・マンチャについてだ。「ある部分はアラゴンに、ある部分はカスティーリャに属している。* Partly in Aragon, partly in Castile.」

この注を林訳は本文に取り入れたのだろうか。

もうひとつの注、「貧困の象徴。スペインにおいて牛肉は羊肉よりも安かった。

† A mark of poverty. Beef was cheaper in Spain than mutton.」については、林紓 + 陳家麟は採用しなかったか。

林訳は、モトゥー版(?)を底本としているようにも見える。だが、モトゥー版(?)に見える注については、本文に織り込んだ英訳本が別にあるような気もする。

ここでも私は少し不安をおぼえる。周作人はモトゥー版が雑な英訳本だと指摘していた。しかも、街道宿の使用人、名前はマリトルネスについてモトゥー版(?)が「マリトルネスという彼らの使用人 their servant Maritornes」とだけしか英訳していないことは紹介した。この箇所については、林訳『魔侠传』とは異なっているのは明らかなのだ。

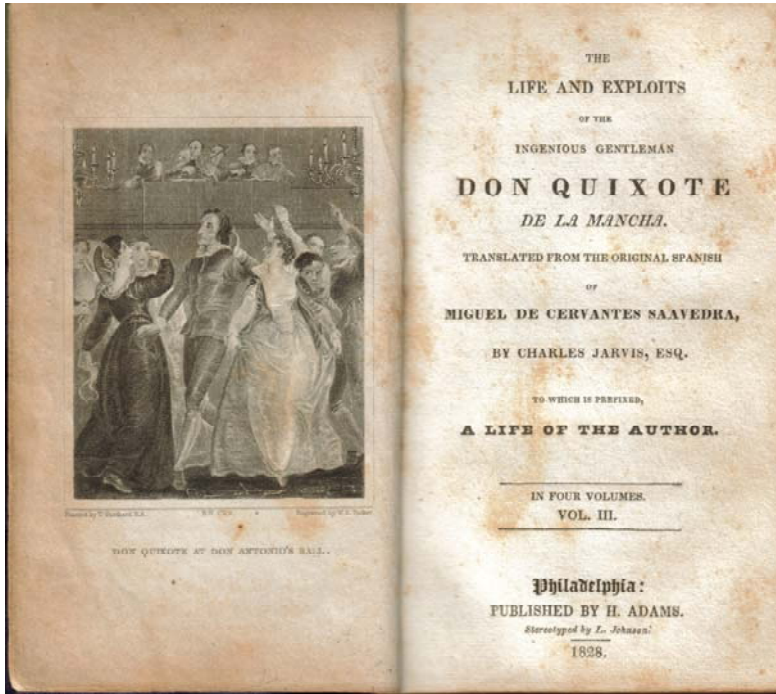
前述のように、章数の数えかた、4段に分けるなどについては手元のものとは一致しない。

モトゥー版と同時に、別の版本もいくつか探してみる。林訳は前編だけの翻訳だ。だから、1冊本であることを条件にした。といっても、すぐには適当なものが見つからない。いつものことである。

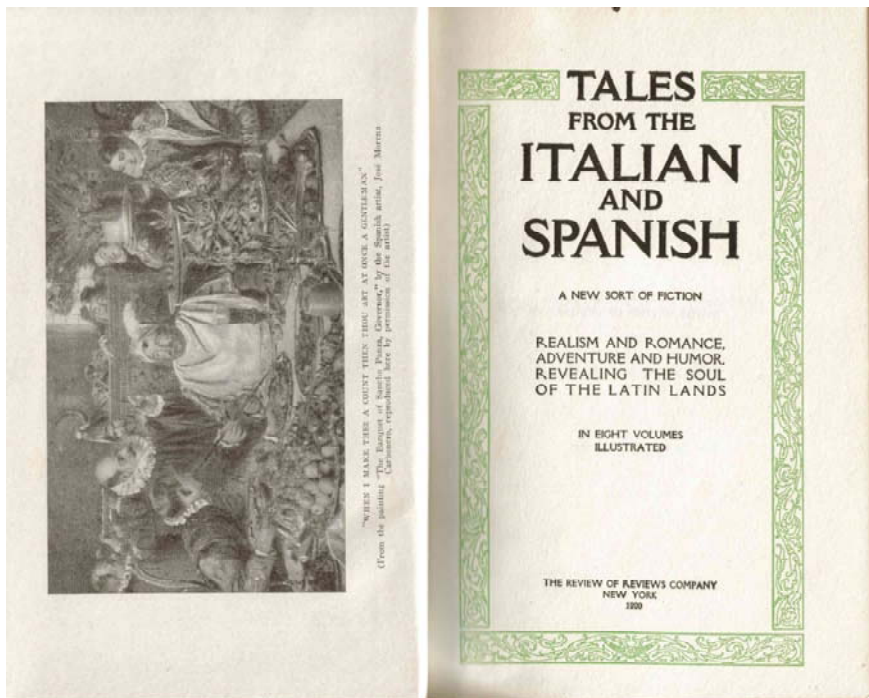
9 モトゥー版以外の版本

1冊が届いた。

チャールズ・ジャーヴィス訳『奇想驚くべき郷土ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャの生涯と功績 THE LIFE AND EXPLOITS OF THE INGENIOUS GENTLEMAN



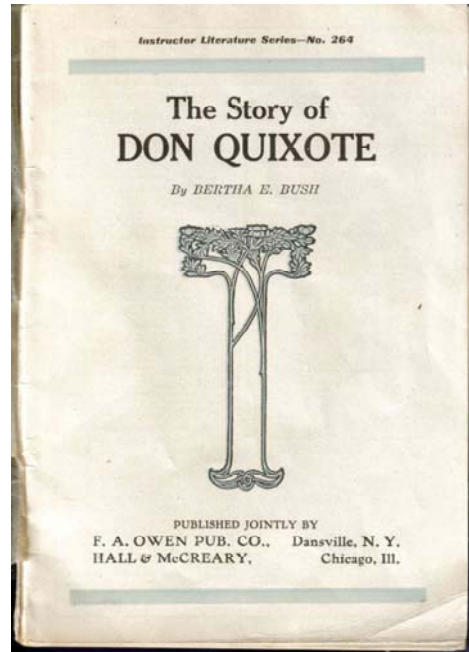
Jarvis 英訳



訳者名不記1920



Paulson, Edwards 英訳



Bush 英訳

『DON QUIXOTE DE LA MANCHA』 translate from the original Spanish of MIGUEL DE CERVANTES ASSVEDRA, BY CHARLES JARVIS, ESQ. VOL. . H. ADAMS. PHILADELPHIA, 1828

小型本、本文269頁。古いため表紙がはずれている。モトウー版(?)とは違う本だ。見れば、なんのことはない。4冊本のなかの第3巻、しかも、後編35章である。書店の説明にはそのようなことは書いてなかった。書名だけで注文するから中身がわからない。よくあることだ。ジャーヴィス版は、現在は紙表紙本で簡単に入手できる。本稿では、すでに該本から引用しておいた。

書店に発注する時、書名にたよるほかない。英訳、しかも改作された「ドン・キホーテ」について専門家に質問しても、たぶん回答はないだろう。「ドン・キホーテ」を専門に研究する人は、改作された作品は探求の対象にはしていないと思う。

アーヴィッド・ポールスン、クレイトン・エドワーズ訳 『ドン・キホーテ物語 THE STORY OF DON QUIXOTE』 BY ARVID PAULSON AND CLAYTON

EDWARDS, FREDERICK A. STOKES COMPANY, NEW YORK, 1922

前編後編を1冊に圧縮したもの。クレイトン・エドワーズといえば、『全シェイクスピア物語 All Shakespeare's Tales』(The Hampton Publishing Company, New York, 1911)の作者として登場していた。古典を児童むけに改編することを得意としたらしい。

訳者の名前を明記しない版本も出版されている。精装本にもかかわらずだ。

訳者名不記『ラ・マンチャのドン・キホーテ TALES FROM THE SPANISH / DON QUIXOTE OF LA MANCHA』THE REVIEW OF REVIEWS COMPANY, NEW YORK, 1920

イタリアとスペインの作品を8冊に叢書化したうちの1冊だ。前編のみで38章に圧縮している。林訳とは関係がない。

バーサ・E・ブッシュ英訳『ドン・キホーテ物語 The Story of DON QUIXOTE』
by BERTHA E. BUSH, F. A. OWEN PUB. CO. 1914

32頁しかなく、まさしく文字通りの小冊子である。児童用とよぶにふさわしい。

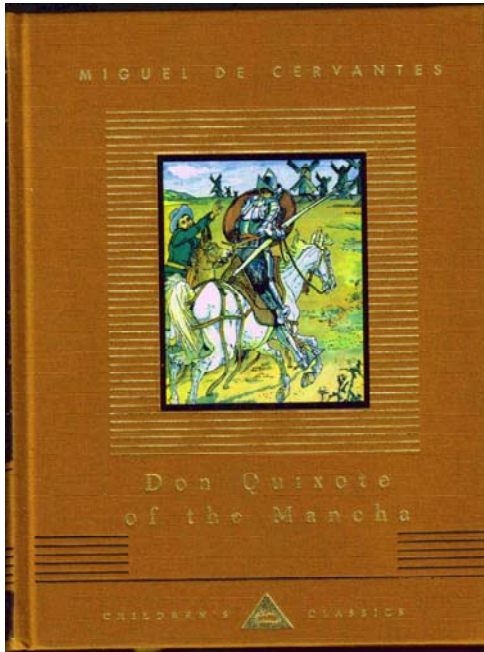
ジャッジ・パリー改作『マンチャのドン・キホーテ Don Quixote of the Mancha』
Retold by Judge Parry and illustrated by Walter Crane, 1900 / EVERYMAN'S LIBRARY CHILDREN'S CLASSICS, 1999

エブリマンズ・ライブラリ版とはいえ、児童用古典という叢書の1冊だ。前編を30章に圧縮する。

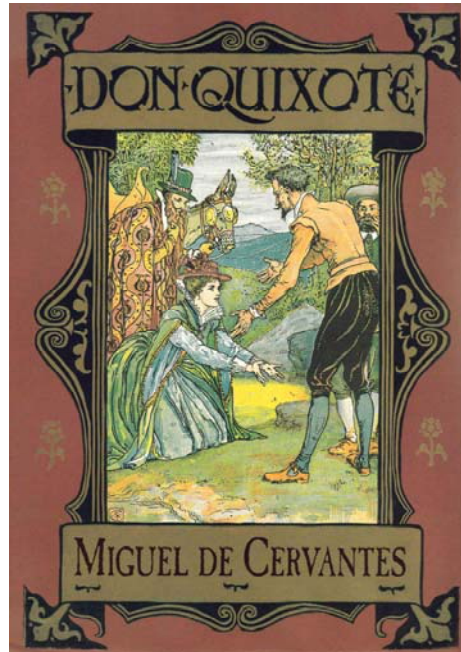
ジャッジ・パリー改作『ドン・キホーテ Don Quixote』Retold by Judge Parry and illustrated by Walter Crane, Konecky & Konecky 刊年不記

パリー改作版は、その挿絵とともに有名らしい。内容は同じだが書名と判型を変えて出版されているところからわかる。書店の書目には、詳しい説明がないから、このように同種類の書物を注文してしまうことになる。これは、しかたのないことだ。

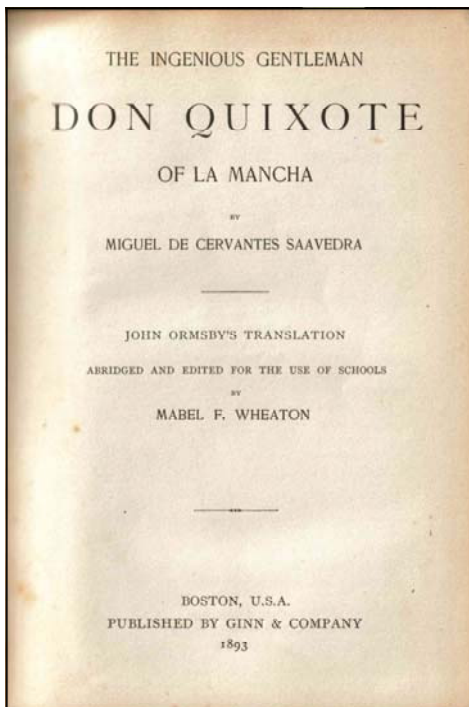
ジョン・オームズビー訳、メイベル・F・ウィートン要約『奇想驚くべき郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ THE INGENIOUS GENTLEMAN DON QUIXOTE DE LA MANCHA』JOHN ORMSBY'S TRANSLATION ABRIDGED AND EDITED FOR THE USE OF SCHOOLS BY MABEL F. WHEATON, GINN &



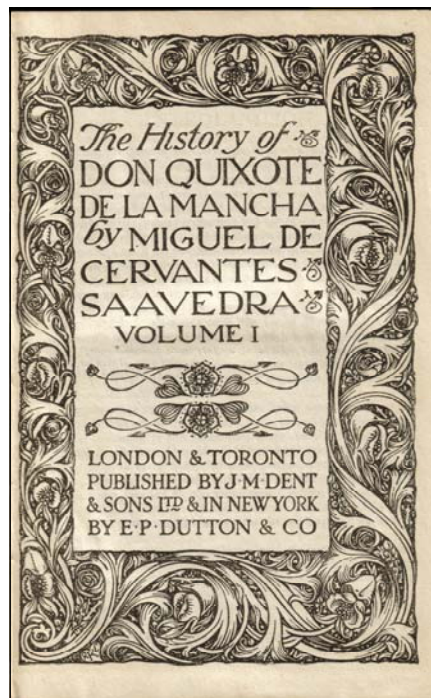
Parry改作英訳1900



Parry改作英訳刊年不記



Wheaton要約版1893



エブリ1 / エブリマンズ・ライブラリ1919年版

COMPANY, BOSTON, 1893

書目にはオームズビー訳という表示があったから注文した。実は、それにもとづいてウィートンがさらに内容を要約した本だった。

以上はすべて林訳の底本ではないことがわかる。

注文するから本は配達されてくる。だが、なかなかそれらしい、つまり、林訳の底本になった可能性のある版本には遭遇しない。しかし、この作業をしない限り目標には到達しない。やっかいといえば、たしかにそうだが、やらないわけにはいかない。

10 エブリマンズ・ライブラリ版

エブリマンズ・ライブラリ版（以下、エブリ1と略称）が手元に届いた。くりかえす。馬泰来は、「モトゥーの英訳本（エブリマンズ・ライブラリ本がある）によって重訳したのではなからうか [疑抛 P.Motteux 英訳（有 Everyman's Library 本）重訳]」と説明していた。この記述があったから、上述したように、彼の指摘するモトゥー版とは別のものがあるのではないかと私は推測したのだ。手元のモトゥー版（？）と林訳を比較すれば文章が異なるから、当然の筋道だと思う。

ところが、こちらも少しややこしい。

訳者名不記『ドン・キホーテ・ラ・マンチャの歴史 The History of DON QUIXOTE DE LA MANCHA』LONDON, J. M. DENT & SONS LTD AND IN NEW YORK BY E. P. DUTTON & CO. 1906; 1913

全2冊本。1906年、1909年初版の重版本だ。初版第1冊は1913年発行のものと、別の版本で出版地にトロントを加えて表示した1919年のものもある。第2冊は、出版地にトロントをも表示する1916年重版本だ。

今、問題にしているのが前編だから第1冊について説明しよう。

奇妙なことなのだが、英訳者の名前が記載されていない。その理由は知らない。ジョン・ギブソン・ロックハート John Gibson Lockhart 「序文 INTRODUCTION」が巻頭にある。

ロックハート（1794-1854）は、モトゥー版を編集してセルバンテス伝を書いて

いる。ということは、このエブリ1はモトゥー英訳ということになるのだろうか。

前編目次には、1巻1-8章、2巻1-6章、3巻1-13章および4巻1-25章が見える。林訳『魔侠传』と同じ構成だ。

本文冒頭にかかげる題名が扉とは異なる。「名高いドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャの生涯と偉業 THE LIFE AND ACHIEVEMENTS OF THE RENOWNED DON QUIXOTE DE LA MANCHA」

冒頭部分を見てみよう。

【エブリ1】 AT a certain village in La Mancha,¹ which I shall not name, there lived not long ago one of those old-fashioned gentlemen who are never without a lance upon a rack, an old target, a lean horse, and a greyhound. His diet consisted more of beef than mutton; and , with minced meat on most nights, lentils on Fridays, griefs and groans on Saturdays, and a pigeon extraordinary on Sundays, he consumed three quarters of his revenue; the rest was laid out in a plush coat, velvet breeches, with slippers of the same, for holidays; and a suit of the very best homespun cloth, which he bestowed on himself for working days. p. 7

ラ・マンチャ¹のある村、その名前を私はいうつもりはないが、それほど昔ではないころ、そこに古風な郷土のひとりが住んでいた。棚には槍、古い楯、瘦せた馬、そして猟犬なしには決していなかった。彼の食習慣は、羊肉よりも牛肉によって成り立っており、たいていの夜はミンチ肉で、金曜日はレンズ豆、土曜日に卵とベーコン、そしてごくまれに日曜日に鳩で、彼の収入の4分の3を消費した。残りは、休日用にフラシ天のコート、ピロードのズボン、同じくピロードの靴を、仕事日用に極上の手織り布の衣服を整えるのに使った。

土曜日の献立を「卵とベーコン（原文は griefs and groans。悲嘆と不平の意）」と訳したのは、ジャーヴィス注に「たぶん卵とベーコン」とあるのによる（ジャーヴィスは本文では「オムレツ omelet」とする。シェルトン版は「薄い肉片と卵 collops and eggs」）。前者は「悲嘆」だし、後者は「ぶーぶー言う不平の声」というのがその意味だ。

「ぶーぶー」が豚なら、悲嘆から卵というなにか判じ物のような英訳である。

ラ・マンチャに注がついて「狭い地域で、部分的にアラゴン王国に、ある部分
はカスティーリャに属している A small territory, partly in the kingdom of Arragon,
and partly in Castile」と説明がある。こちらには牛肉に関して、つまり貧困の象
徴であるとはいわない。これらを考慮すると、林訳『魔侠传』は、英訳版にある
日々の献立を省略しただけのように思われる。たしかに、この版本は底本となっ
ている可能性があるようだ。

では、例の街道宿の女使用人についてはどうか。

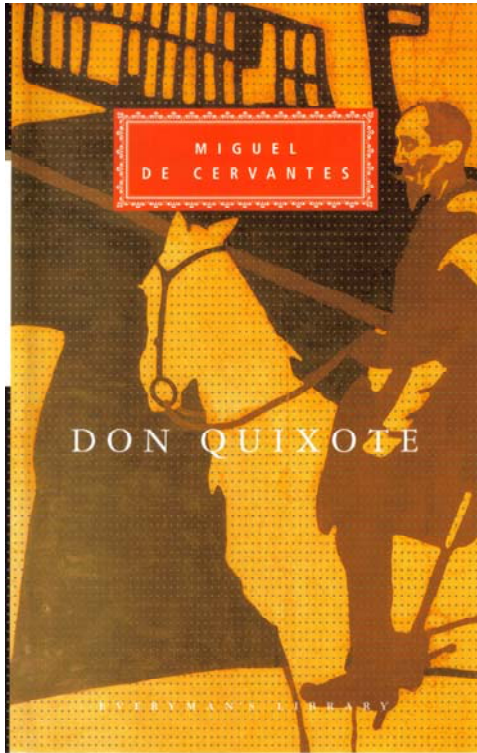
【エブリ1】One of the servants in the inn was an Asturian wench, a
broad-faced, flat-headed, saddle-nosed dowdy, blind of one eye, and the other
almost out. However, the activity of her body supplied all other defects. She was
not above three feet high from her heels to her head; and her shoulders, which
somewhat loaded her, as having too much flesh upon them, made her look
downwards oftener than she could have wished. pp.95-96

宿の使用人のひとは、アストゥーリアス人で、顔が大きく、平頭で、鼻
がべしゃんこでむさくるしく、片目はつぶれ、残った目もあまり健全ではな
い女中だった。もっとも、からだの動きがほかの欠点をおぎなった。彼女は、
足から頭まで3フィートにも達せず、おまけに、多すぎる肉がついた肩は、
当人が望む以上に下方を見させたものだ。

女中と訳した英語の wench には、売春婦という意味もある。訳語としては適
切であって、これはシェルトン版およびジャーヴィス版がすでに採用している。
比較するために、再度、林訳を引用する。

【林訳】此外尚有一老嫗。広額而豊頤。眇其一目。然頗趨捷。蓋自頂及踵。
不過三尺。肩博而厚。似有肉疾自累其身。(上3-2:7頁)

そのほかに老婆がひとりいた。額は広くあごがはり、片目は見えないが身
軽である。頭からかかとまで3尺たらず。肩は広くあつく、病气持ちのよう



エブリ2 / エブリマンズ・ライブラリ

1909年版影印

に身体を折り曲げている。

注目してほしいのは、「3尺たらず」と漢訳している箇所だ。エブリ1の「3フィートにも達せず」そのままである。

ここでもう1冊のエブリマンズ・ライブラリ版が届いた（こちらをエブリ2とよぶ）。扉には、「P・A・モトゥーによりスペイン語版から翻訳された TRANSLATED FROM THE SPANISH BY P.A.MOTTEUX」と明記されている。まちがいない。初版が1906年というのも、今まで見てきた版本と同じだ。前後編を1冊に合訂した1991年の新装版である。アルフレッド・A・クノッフ ALFRED A.KNOPF が出版したボルゾイ・ブック A BORZOI BOOK だとも表示される。原本をそのまま影印したのだと思う。活字と組版の様子が、かなり古い印象をうける。ただ、これまた意外なことに「序」がA・J・クロウズ A. J. Close 著であるのが異なる。ロックハートではない。

4巻に分けられ章数が独立しているところは、別版と同じ。

困惑するのは、こまかく相違する部分があるからだ。同じエブリマンズ・ライブラリ版でモトゥー訳文なのだから本文も当然同一だろうと普通は考える。しかし、そうではないから不思議に思う。

地名ラ・マンチャに注をつけて、少し詳しい。

牛肉が羊肉よりも安い、とも説明する。これはエブリ1では、削除していた。

問題は、土曜日の献立だ。「卵とベーコン」としたエブリ1の原文は「悲嘆と不平 *griefs and groans on Saturdays*」だ。ところが、エブリ2にはそのまま「卵とベーコン *Eggs and Bacon*」になっている。なんでもないとこに大文字を使用して、だから古い印象を受ける。さらに、長い注がつけられている。各種翻訳を引用して説明する。それはいいにしても、エブリマンズ・ライブラリ版1と2では訳語そのものが異なるのが気になる。

エブリマンズ・ライブラリ版、つまりモトゥー版といってもまったくの同一であるわけではないらしい。これに似た体験をしたことがある。アラビアン・ナイトの英訳本について各種が微妙に違っていた。集めれば集めるほど異版が出現して驚いたものだ。「ドン・キホーテ」は、それにくらべればまだましな方か。

どちらにしても、林訳ではこの部分を省略したから底本探索の手がかりにはなりはしない。ただ、かりにエブリマンズ・ライブラリ版を底本にしたとして、改作本そのものの意味不明箇所について林紵らが無視したというのであれば、かえってわかりやすい。

では街道宿の女使用人はどうか。こちらは、両者ともに同文だ。しかし、単語のつづりが昔風になっている。たとえば、*a broad-faced* を *a Broad-fac'd* に、*saddle-nosed* を *Saddle-nos'd* に、*and the other* を *and t'other* などと書いている。

ということは、エブリ2(の原書)が元版であり、エブリ1は、つづりなどを一般向けに書き直し、会話文にはカッコをつけるなどの工夫をほどこしたもののように見える。その時、詳しい注釈については取捨選択して省略化したようだ。読みやすく普及版に編集しなおしたように見える。だから、エブリ1では訳者モトゥーの名前をかがげなかったのかと考える。別に理由があるのかもしれないが、今、そういうことにしておく。

「卵とベーコン」を書き改めて「悲嘆と不平」では、かえってむつかしくなっているのではないか、と言われれば、そうだと認めるしかない。

エブリマンズ・ライブラリ版の初版が1909年として、モトゥー版は、もとをたどれば1701年に出版された書籍である。こちらも2世紀以上が経過して収録されたことになる。長期間を経た英語がそのまま通用するとも思えない。だからこそ、数年たたないうちに改訂版（たとえばエブリ1）が出ている。さらに、モトゥー版を下敷きにした簡略版が作成されてもいる。こうした古典では、普通に見られる現象である。

ゆえに、林紓が大幅に省略して漢訳したと批判するばあい、そのよった底本を明白する必要があるというのだ。幻のスペイン語原作を根拠にして、大幅削除うんぬんをいってもしかたがないではないか。林訳「ドン・キホーテ」は、スペイン語原作とは直接の関係はない。英語訳にしても多種類が刊行されている。モトゥー版ひとつとっても、上に述べたように初版と改訂版がある。底本さがしは、よほどのことがない限り基本的にすっきりとは行かないと考えてよい。

【注】

- 1) 署名は仲密。「自己的園地」の題名で連載されている。『晨报副鐫』1922.9.4。『自己的園地』北京・晨報社1923.9初出未見。長沙・岳麓書社1987.7。こちらは「20.《魔侠传》」となっており初出の『晨报副鐫』とは表題の数字が異なる。71-75頁
- 2) 周作人「塞文狄斯」『自己的園地』岳麓書社版。167頁
- 3) あるいは、オームズビー英訳本かワッツ英訳本のスミス社版かもしれない。目録で見るとオームズビー John Ormsby の訳本がスミス、エルダー社 Smith, Elder & Co. (London, 1885) から出ている。一方のワッツ Henry Edward Watts については、スミス社版は見当たらない。スミスという人物が英訳本を書いたとしても、あまりに普通の名前だから探し当てることができなかった。
- 4) セルバンテス作、永田寛定訳『ドン・キホーテ』正編2 岩波文庫1949.8.15 / 1974.3.30第22刷。20-21頁。
- 5) 牛島信明訳『ドン・キホーテ』前篇1 岩波文庫2001.1.16 / 2006.5.25第8刷。276頁
- 6) ポール・アザール著、円子千代訳『ドン・キホーテ頌』法政大学出版局1988.3.30。299頁

- 7) 永田訳『ドン・キホーテ』正編2。305頁
- 8) 周作人は、「林訳本三^{ママ}[四]之四」とここでも段数を誤記している。
- 9) 謝天振、查明建主編『中国現代翻訳文学史(1898-1949)』(上海外語教育出版社2004.9。564頁)に次のように書かれている。「ほどなく、周作人は核心をつくように『ドン・キホーテ』のいく段かを『魔俠伝』選録と名付けて1925年の『小説月報』第1^{ママ}期(第16巻第1^{ママ}期)に発表した。周作人は、翻訳などしていない。謝らは、目録に見える「選録」という表記から誤解したのではないか。該文は周作人の評論文、しかも部分の再録だから「選録」なのだ。

- 10) こまかいことだが、発行年月を2月と誤るものがある。原本を見れば「中華民國十一年三月初版」となっている。その「三」という活字が、どういうわけか印刷が不鮮明で「二」に見える。これが誤解の原因である。実物が手元にあるならば、よく見てほしい。

正しく3月とするもの。

上海図書館編『中国近代現代叢書目録』香港・商務印書館分館1980.2。789頁

×誤って2月とするもの。

馬泰来「林紓翻訳作品全目」『林紓的翻訳』北京・商務印書館1981.11。95頁

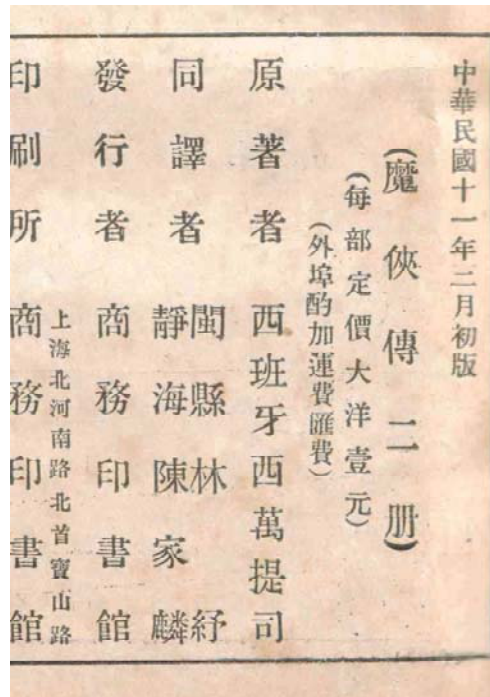
薛綏之、張俊才編『林紓研究資料』福州・福建人民出版社1983.6 中国現代文学史資料彙編(乙種)。563頁

北京図書館編『民国時期総書目(1911-1949)』外国文学 北京・書目文献出版社1987.4。325頁

賈植芳、俞元桂主編『中国現代文学総書目』福州・福建教育出版社1993.12。686頁

林煌天主編『中国翻訳詞典』武漢・湖北教育出版社1997.11。571頁

- 11) 永田訳『ドン・キホーテ』正編1 岩波文庫1948.6.20 / 1974.1.20第25刷。111頁。くりかえし記号は文字になおした。



林 訥 小 説 冤 罪 事 件 の 原 点

鄭 振 鐸 「 林 琴 南 先 生 」 に つ い て

未発表。鄭振鐸は、林紓死後に彼を「公正に判定できるようになった」と書いている。鄭はことば通りに実行した、と信じる研究者がいる。その繊細さには驚く。林紓に対しての視角が固定しているということに気づいていないようなのだ。

1924年10月9日、林紓は、北京で死去した。享年七十三。

約1ヵ月後、鄭振鐸「林琴南先生」が、『小説月報』（第15巻第11号1924.11.10。1-12頁。論文ごとの頁だて）に掲載される。林紓死後、比較的早く公表された評論文だということができる。

鄭振鐸は、林訥小説をどのように評価したのか。検討した結果、私は、鄭振鐸の該論文は、その後の研究の方向を定めた画期的な論文だと判断した。どういう意味で画期的であるのか、本稿の論題を見ていただければおおよそがわかると思う。以下において説明する。

鄭振鐸の該論文には、本文に組み込む形で林紓の肖像写真が掲げられる。それには「畏廬先生五十八象 受業陳希彭謹題」とある。もうひとつは、「己未十二月畏廬老人記」と署名する手稿1葉だ。文章全体を見れば、追悼文らしい扱いになっている。

こまかいことだが、日付について説明しておきたい。鄭振鐸の該文末尾に記されているのは「十三年，十一月，十一日。」という日付である。1924年に該当する。掲載した『小説月報』は、同年11月10日付で発行されたはずだ。だが、発行日より1日遅れて執筆された文章が載っているからには、実際の刊行はこれより

も少し遅れたらろう*1。雑誌の発行をわざわざ延期するほどに重要な鄭振鐸の文章だったという見方も成り立つ。

鄭振鐸は、1923年1月から1927年5月まで『小説月報』の主編をつとめていた*2。自分が主編であった雑誌に自分の論文を掲載する。発行を遅らせることができる地位にあったということだ。

「林琴南先生」という論文表題は、漢語のままを使用しているからご了解いただきたい。日本語訳では「林琴南氏」とする。

数字をつけて4章にわかれるのでそれに従って紹介していく。各章の内容を私なりにまとめて副題として表示した。原文についているものではないからご注意いただきたい。

1 第1章 林紓に敵対したことを明示する

文章の冒頭だから、論文主旨を説明していると考えていいだろう。はじめから引用してみる。

林琴南氏は、翻訳家および古文家として中国の最近30、40年の文壇において著名である。欧州大戦がはじめて停止したとき、中国の知識階級は、ある新しい覚醒を得て中国伝統の道德および文学に対して総攻撃をしかけた。林琴南はその時北京にあって古い礼教および文学のために力を尽して弁護し、この新しい運動にまったく不満であった。そこで多くの学者たちは、彼を古い伝統の側の代表と見なし、彼の道德見解、彼の古文、および彼の翻訳について、多くの誤りがあることを指摘し、彼の保守、道德、および文学の見解を徹底的に打倒しようと考えた。この時以後の林琴南は、一般の若者から見れば彼の中国文壇における地位は完全に揺らいだようだった。1頁

林紓の文壇における評価激変のありさまが、わかりやすく述べられている。

翻訳家、古文家として著名であったにもかかわらず、五四時期を境にして、古い側の文人代表として中国の「知識階級」から総攻撃をうけ徹底的に打倒された。

攻撃の際目標とされたのが、彼の道徳見解、古文、翻訳だったのだ。林訢という人物の思想、およびその仕事、つまりことばをかえていけばまさに文人としての存在を全否定した。それを行なったのは「中国の知識階級」であり「多くの学者」であった。1918年のことだ。

林訢批判をはじめた人々は、具体的に名前をあげると、「なれあいの手紙」を捏造した銭玄同と劉半農、追認した胡適、外国人の論文を曲解のうえ引用してまでも林訢批判に加わった羅家倫らだ。もう少し幅をひろげると、陳独秀がいて、蔡元培を含めることもできるかもしれない。彼らを中核にしてひろく「知識階級」の「多くの学者」が取り巻いているという図式になる。ことばは悪いが「袋叩き」というのに等しい。なぜなら、林訢が旧文人の代表に指定されてから、林訢を弁護する人は出てこなかった。さらに、保守派第2の代表者は出現しなかったからだ。というよりも文学革命派から指名されなかったといった方がいい。林訢が唯一の目標になり、攻撃されつづけたということである。

鄭振鐸のこの文章は、事実を客観的に記述しているように表面上は見える。なにげなく読み流してしまう。だが、注意深く読めば、「知識階級」という用語を使用するところに左翼の立場が表われている*3。現代中国では普通の用語でありすぎるから、ここに注目する人はいないだろう。

中国では鄭振鐸をどのように位置づけているのか、簡単に触れておく。それを知るためには、中国で刊行されている人名辞典を見るのがわかりやすい。小型であればあるほど、現代の著者編集者が重要だと考える事項が選択記述されると考えるからだ。

蔡開松、于信鳳主編『二十世紀中国名人辞典』（瀋陽・遼寧人民出版社1991.3。902-903頁）には、以下のように書かれている。翻訳する。

鄭振鐸（1898-1958） 筆名西滄^{ママ} [諦] 郭源新。原籍福建長樂、浙江温州に生まれる。中国科学院学部委員。五四時期、北京で学生運動に参加した。1921年、沈雁冰、王統照らと文学研究会を組織する。1923年より『小説月報』を主編、1931年から上海、北平の各大学教授となり学術研究に力をそそぎ文学刊行物を編集した。1949年より文化部副部長、中国科学院哲学社会科学部委員にな

った。『取火者之逮捕』、『挿図本中国文学史』、『中国通俗文学史』などの著作があり、『中国版画史図録』などを編集した。

鄭振鐸は、五四時期より一貫して左翼陣営に属し、中華人民共和国成立後は政府の要職にあったことが理解できる。そういう立場の人物だ。

さて、鄭振鐸論文冒頭の部分には、林紓に対して同情するという気持ちはかけらも存在していない。だからこそその文学革命であった。

この「中国の知識階級」には、鄭振鐸自身も含まれている。ゆえに、次のような文章になる。

しかし、彼の主張はひとつの事柄であり、かれの中国文壇における地位というのもまた別の事柄である。彼の一時的な保守の主張によって彼の文壇上の地位を完全に打倒すること、すなわち彼の数十年にわたる苦勞の仕事に完全にうずもれさせることは、それほど公平だとはいえないだろう。しかし、当時は、主張が違うから、私たちは公平などということは言い出さなかったのである〔但那時為了主張的不同，我們却不便出來說什麼公道話〕。1頁

林紓の主張とその仕事は分けて考えるべきだ、という。ここも一見公正に見える。問題は、うしろの部分なのだ。

主張が異なる相手には、公平である必要はない。勝利を得るまでは、なにがなんでも攻撃を継続して完遂しなければならない。そう鄭振鐸は考えていたと自らが告白している。本当にあからさまな鄭振鐸の言説だと私は思う。これを読めば、「私たち〔我們〕」という単語を使って、鄭振鐸が「知識階級」に属した「多くの学者」の陣営に参加していた、あるいは考え方を同じくしていたことが明白である。

林紓を旧文人の代表者に指定し、それに対して総攻撃をかけた文学革命陣営のひとりであった鄭振鐸が、なにを言い出すのか。次の箇所が、興味深い。原文も掲げておく。

現在、この中国の老文学家は、すでに本年10月9日、北京の寓居において逝去している。[現在、私たちは彼に関する話をいくつかしてもいいだろう。「死」は本来が奇異な黒い衝立であって、それはもともと親しい者に最も近い人を遠ざけることができると同時に、仇敵にその敵をさらにはっきりと、さらに公正に見させることができるのである。常のことながら、敵として彼らの相手を攻撃する時、相手のどんなよいところも彼らには見ることができず、彼らが見るのは相手の悪いところと罪悪だけなのだ。しかし、「死神」がやってきて相手を連れて行ってしまった時、彼らはかえって気を落ち着けて相手のよいところと偉大さを認識しはじめるのである。ゆえに、/現在，我們可以出來說幾句關於他的話了。「死」原是一片片奇異的黒屏障，他固能使親者把他們的最接近的人疎淡了，同時却也能使仇者把他們的敵人看得更清楚些、更公允些。常常的，當一個敵人攻擊他們的对方時，對方的什麼好處他們都看不見，他們所見的只有對方的壞處和罪惡，但當「死神」來了，把对方帶了去時，他們却開始平心靜氣的認識了對方的好處和偉大了。所以] 1頁

ここに出てくる「死神」に私は注目する。左翼思想の持ち主である鄭振鐸が、わざわざ使用しなくてはならないことばだろうか。死神の存在を鄭振鐸が信じているように見える。普通に「死」を使えばいい箇所だと私は感じる。

この部分を読んで、鄭振鐸はそのようなことを書いていたか、と疑問に思われた読者がいるはずだ。[]でくくった部分だ。一般に流布し読むことのできる文章とは異なる。

論文「林琴南先生」は、のちに鄭振鐸『中国文学研究』（北京・作家出版社1957.12）に収録されるが、その時、部分的に書きかえられた。上に引用した「死」「死神」「敵人」などにまつわる[]で示した箇所がすべて削除されている。さらに、のちの資料集*4は、初出の『小説月報』からではなく、書き換えた部分のある1957年版『中国文学研究』から転載している。初出を無視する理由があるのだろう。

鄭振鐸のことばは、きわめて露骨である。敵を攻撃する時は、悪いところのみを見ている。敵が死んでから、安心してそのよいところを認識できる。ここで言

っている敵とは、林紘にほかならない。林紘を敵だと表現しているのだから、鄭振鐸はその相手である。

鄭振鐸は、なぜ、この部分を削除したのか。确实なところはわからないが、推測することはできる。

文章は、発表してからすでに30年以上が経過している。中華人民共和国成立後、林紘についてことさらに「敵人」などと表現する必要はなくなった。彼は、そう判断したのではないか。これは好意的な見方だ。鄭振鐸が完全な勝者であるからには、記述を読み直し表現をゆるめる余裕もでてくる。だからこそその削除がもしれない。

もうひとつの見方。死神という考えは、旧中国のものであって中華人民共和国にはそぐわない。とりわけ鄭振鐸自身にしてみれば思想上の問題になりかねない。ゆえに迷信部分を削除した、と考えた方が合理的かと思いはする。

この削除は、いかなる結果をもたらしたかといえ、まず鄭振鐸自身の保身である。死神を信じていた自分の過去を抹殺した。左翼思想を持ちながら死神はないだろう。

もうひとつある。

林紘は、生前、鄭振鐸らにとっては眼前に立ちふさがった巨大な壁であった。その壁を取り除いたのは、ほかでもなく自然を超越する死神だった。死神だからこそできたほどに強敵だったといえる。林紘を敵にまわして文学革命派は力いっぱい闘争した。初出の文章ならば、鄭振鐸らの艱難辛苦ぶりが自然に伝わってくる。しかし、これは同時に裏読みされる危険性をはらんでいる。敵を除去したのは死神であって、文学革命派が自らの実力で林紘を打倒したことにはならない。削除することにより、そう読まれることを回避したのである。

つぎが第1章の締めくくり部分だ。

林琴南氏の逝去は、私たちにははじめて公正に彼のことを認識し、彼を評論させるひとつの機会となった。現在、すでに彼の頑固な言論をふたたび私たちに聞かせることはできなくなったし、私たちにあるのは彼の30年余にわたる努力の成果である。「人の真価は死後に決まる [蓋棺論定]」というよう

に、私たちは、現在、彼のことを公正に判定できるようになった。1頁

鄭振鐸は、林紘の敵対者であったと自らが認めている。その鄭振鐸が、昨日までは敵であった林紘を、特にその業績（ここでは翻訳）について「公正に判定」するというのである。意識としては公正であろうとしても、はたして実際も公正に判定できるものなのか。

評価を下す論文の執筆者は、林紘にとって敵方陣営に属する鄭振鐸なのである。林紘にしてみれば、この人間だけには書いてもらいたくなかった、という種類の文章ではないのか。そういう気がする。だが、死んでしまった林紘には、残念ながら執筆者を選ぶことができない。生前に書かれることがあれば、反論の機会がまったくないわけではなかるう。だが、死後のことについては、もとより口の出しようがない。このことについて、私は林紘に同情する気持ちが少しばかりある。

2 第2章 林紘の性格と翻訳方法

鄭振鐸の「林琴南先生」は、林紘の死後に書かれたものだから、いくぶんかは追悼じみた意味合いも持たされていることについては触れた。だから、第2章では、林紘の生年、本籍、名前、家庭の状況などをまず簡単に記述している。

鄭振鐸は、林紘の性格について「彼の気性は強くよく怒り」という。多くの人がそれで離れていった。しかし、その一方で熱意の人でもあり、困難におちいった人を助けるために奔走するのを惜しまなかった。多くの文章から、林紘が熱心な愛国者であることがわかるし、その情熱は七十歳すぎという高齢にいたるまで衰えなかった。「彼が新思潮、新文学を攻撃したのも、彼のこの情熱から出てきたものだ」3頁

第2章の最後部分に林紘の性格を説明する部分がある。順序を入れ換えて先にそこを紹介しておきたい。

晩年は、絵画に没頭し画卓の前に1日67時間も立ったまま休まずに筆を使ったと述べる。その次だ。

彼（注：林紓）は勞せず得ることはいかなることもしないし、やる必要もないことで得ることができるいかなる金銭も取らない。この点について、彼は実に人を最も感服させる清廉の学者だということができる。この種の人は、まったく容易にお目にかかることのできないものなのだ。3頁

林紓の性格をひとことでいえば、頑固一徹、清廉にして情熱家ということになる。たしかに、この種の人を敵にまわすと恐ろしい。当時の中国文学界においてその圧倒的な翻訳量によって君臨していた林紓である。文学革命派が旧文人の代表者として林紓を選んだのは、たしかに目の付け所がよかった。しかし、彼に対して攻撃を仕掛けようとするからには、勝つための準備が必要だ。あらかじめ弱点を見定めなければならない。ただ、林紓の思想がふるいというだけなら、少しの効果はあったとしても決定的な説得力にはならない。彼の生活態度にしても攻撃目標になる要素はみつからないようだ。鄭振鐸が林紓を「清廉の学者」だと表現しているところから理解できる。文学革命を推し進めようとする「知識階級」に属する人々は、林紓個人についてそれくらいのことは先刻承知である。そこでねらいを定めたのが林紓の翻訳なのである。

林紓と外国語の関係、彼の翻訳方法について鄭振鐸はつぎのように説明する。

彼はいかなる外国語も理解しなかった〔他不懂得任何的 foreign language〕。彼の翻訳は、原文を理解する訳者が、口訳して彼に聞かせ、彼が口述訳者のことばを中国語で書いた。彼は書くのが非常に速く、彼は自分でいっているが、毎日4時間の仕事をして、1時間に1千5百語を翻訳することができた。往々にして口述訳者がまだ言い終わらないうちに、彼の訳文はすでに書き終わっていた。彼の訳文の誤りは常に免れることはできなかった。3頁

これが有名な「外国語を理解しない訳者」という文句の初出である。のちのちまで語りつがれた。その翻訳は信用できない、という意味を込めることが多い。外国語を理解しないで、どうして翻訳ができるのか、だ。林紓は、それを隠したわけではない。逆に、彼は積極的に公表している。

林紓 + 魏易訳『西利亞郡主別伝』(1908)の附記で外国語を知らない[鄙人不審西文]と林紓は述べているとおりだ。また、彼は、1日翻訳して6千語になるとも紹介する。林紓 + 魏易訳『孝女耐児伝』(1908)序においても同様に、外国語ができないこと、翻訳者が訳すのを耳で受けて手で追う(筆記するという意味)、声がやむと筆も止まる、筆記4時間で6千語だと明らかにしている。

外国語はできなかったが、口述翻訳者よりも速くに筆述しおわる。そう鄭振鐸は書いている。まるで手品のような超越技ではないか。

彼が原文を理解しなかったのが、彼のもっともばかをみたところだ。たぶん、訳文の大部分の誤りは、すべて口述翻訳のせいにちがいない。3頁

鄭振鐸の書き方からすればいかにも林紓を弁護しているように見える。悪いのは、林紓ではなく共訳者の方だといっている。

原文の1語1句のこまかな部分については、誤訳はありうる。だが、文章の流れを把握していれば、それほど大きくはずれることはないだろう。原作を省略して、あるいは刈り込んで翻訳するのも林紓の判断によったものだと考える。当時の中国の読者には、わずらわしいと考えられた部分は、省略の対象になった可能性は高い。翻訳方法によるのだ。翻訳は逐語訳でなければならぬと考える人にとっては、林紓のやり方は、あってはならない。しかし、外国の原作を1字1句忠実に置き換えて翻訳することは不可能だと判断すれば、原作の大筋を漢語に移すだけで十分だという考え方も成立する。程度問題だろう。これは、従来から存在する論争点でもある。

鄭振鐸は、誤訳の責任を口述翻訳者、つまり共訳者に押しつけた。これもいがか。先走りして書いておくと、当時、攻撃目標は林紓だけであり、共訳者は対象ではなかった。

外国語を理解しないという箇所は、あとで林訳を批判するための伏線になっている。

3 第3章 創作小説、戯曲および林紓の「変化」

林紓は、創作小説を多数書いている。それらが成功しているとは鄭振鐸は認めていない。だが、その成果をふたつにまとめた。

第1、中国の「章回小説」の伝統的体裁は、彼によってはじめて打破された。

第2、時事を描写して価値がある。

次は、彼の伝奇（戯曲）そのほかにも言及する。その内容は、当時の先進的維新党のものであったが、その後彼の思想は停滞してしまったという。

最近の45年で、彼は反対に保守党の指導者になってしまった。これはたぶん彼の環境と関係があって、戊戌の前は、彼は常に当時の新派の友人と一緒にいたため思想上知らずしらずのうちに彼らの影響を受けた。のちに清朝が滅んで共和になってから人民も自由な幸福をもつことができず、そこで彼は憤慨して徐々に頑固な保守者と変化したのだ。7頁

鄭振鐸は、林紓が「保守党の指導者」になった原因をどこに求めたか。林紓をとりまく環境だ。進歩派とのつき合いがあった時期は、その影響を受けて思想上も進歩的だったという。それが、清朝から中華民国になって環境が変わった。そこで頑固な保守派に変化した。

鄭振鐸は、林紓が「保守党の指導者」になったのは彼の個人的な必然であったかのように説明する。公正な評価を鄭振鐸が下したように見えるかも知れない。だが、あきれるとはこのことだ。これを私はすり替えという。なぜなら、「最近の45年」というのはまさに1918年以降のことをさしており、そのきっかけとなったのは例の銭玄同+劉半農の共同作業による「なれあいの手紙」、すなわち捏造論文であるからだ。

『新青年』第4巻第3号（1918.3.15）の「文学革命之反響」欄に掲載された王敬軒名義（銭玄同）の捏造論文とそれに答えた劉半農の文章である。王敬軒が林紓を称賛し、劉半農が逐一反論して林紓を罵倒する。ふたりが事前にしめしあわせて作文したから捏造書簡、捏造論文だと私は知っている。それによって林紓を「保守党の指導者」にムリヤリ仕立てあげた。本来が文学革命側の策略なのだ。

それについて一言も説明をせず、あたかも林紘が時代の推移にあわせて自然と保守者に变化したようにいうのは、公正ではない。それどころか、これも銭玄同＋劉半農らの行為に劣らない捏造に近いものだ。

このような箇所を見ると、私は次のように言わざるをえない。林紘の敵であった鄭振鐸が、表面上はいくら公正になろうとしても、その深いところでは公正たり得ない。

4 第4章 翻訳小説を検討する

林紘の翻訳小説について評価を下そうというこの第4章が、鄭振鐸論文の主要部分である。量的にも十分に紙幅がさいてある。

林紘の翻訳作品を数えて詳細だ。彼の『巴黎茶花女遺事』（小デュマ『椿姫』）からはじまって単行本になったのは156種あるという。現在では、馬泰来の探索によって作品数はさらに多いことが判明している。だが、1924年という時点で、翻訳作品の数字を具体的にあげたのは珍しいというべきだろう。また、原作者、原作名を英語で表示してくわしい。1頁以上にわたって作者名と作品のいくつかを羅列されるのを見れば、その資料の豊富さに読者は圧倒されたはずだ。鄭振鐸は、当時、商務印書館に勤務していたからこそ作品と作者を列挙することができた、と容易に想像がつく。林訳小説は、そのほとんどが上海の商務印書館から刊行されているのだ。最初は単行本で発行される。ついで「説部叢書」に収録される。その中から林訳小説だけを抜き出して「林訳小説叢書」としてあらためて出版されたほど人気があった。

「私たちはこの統計（注：林訳の原作者、原作名、と翻訳名を羅列したもの）を見たあとで、当然、林琴南氏にとっても感謝をする。なぜなら、これら多くの重要な世界名著を私たちに紹介してくれたからだ」とはじめる。

ところが、そのあとで林訳小説の不足を大声で言い立てる。これが、のちのち引用され続けて定着するようになる。大要を示す。

- 1．彼の労力の大半が空費された。彼が翻訳した156種の作品のなかで、わ

ずかに60、70種類が著名で（そのなかには、なおハガード、コナン・ドイルのふたりの2流の小説が27種も混入している。だから156種のうち重要な作品は3分の1にもならない）、そのほかの書はすべて23流の作品だから訳す必要もなかった。

2．林紘は、いかなる外国の文字も理解しなかった。原本を選択する権利は口述訳者の手にあったから23流の無価値な作品を選択してしまった。

3．林訳小説のなかには無価値な作家の作品が大量に混入しているばかりか、児童用の物語読本の類がまじっている。

4．林氏は、多くのとてすばらしい脚本を小説に翻訳してしまった。多くの叙述を加え、多くの対話を削除し、原本とはまったく違う本に変えてしまったのだ。たとえばシェイクスピアの脚本『ヘンリー4世 [亨利第四]』、『リチャード2世 [雷差得紀]』、『ヘンリー6世 [亨利第六]』、『ジュリアス・シーザー [凱徹遺事]』およびイプセンの『幽霊 [群鬼 (梅孽)]』などすべて彼は翻訳して別の本に変えてしまった。原文の美しさと風格、および重要な対話は完全に消滅してしまった。（以上9頁）

5．随意に原文を省略する。たとえばフランスのユゴー『九十三年 [九十三]』(Ninety-three)を林氏は『双雄義死録』に翻訳したが、大幅に削除した。

6．誤訳が多い。字句の省略および小さな誤りならば、随所にある。また、イプセンの国籍ノルウェーをドイツに誤る。

7．口述訳者は、児童用に改編し提供した省略本を誤ってとりあげ林氏に訳して聞かせた。（以上10頁）

内容に重複する部分がある。のちには、もう少し整理されて林訳小説の欠点として掲げられるのは周知の事実であろう。多くの研究論文において、林訳の欠点は、まるで、儀式であるかのように言及される。鄭振鐸の指摘は、それら追隨論文の手本、原点になっていることがわかる。

鄭振鐸の批判について、私の考えを簡単にのべておく。

ハガード、ドイルの「2流」を含めて23流の作品をむだに翻訳したことについて、中国では、この記述がくり返し引用される。よほど「世界基準」がお好みようだ。小説の世界に、自分の知らない「世界基準」あるいは1流の基準があ

ると考えているのだろう。だが、小説に対する基準は世界各国にそれぞれ別に存在するだけだ。イギリスでは忘れられた作品であろうと中国で人気があれば、それは中国の基準でいえば重要な小説である。そこが理解できないのは、まことに不幸だとしかいいようがない。外国語を理解しなくても、翻訳方法のひとつとして共同翻訳はありうる。無価値な作家の作品と決めつける根拠が不明確だ。児童用の物語読本を軽蔑しているのではないか。児童文学には造詣の深いはずの鄭振鐸のことはとも思えない。シェイクスピアおよびイブセンの戯曲を林紘が勝手に小説化した事実はない。鄭振鐸は、林紘に濡れ衣を着せたのである。原文の大幅削除についても、論拠が不明確だ。ユゴーの作品を例に出しているが、林紘が使用した底本について何も書いていない。もともとが省略本であったならば、林訳も省略した形になる可能性がある。誤訳は翻訳につきものだ。原作者の国籍を誤るのは、林紘に限らない。魯迅にもその例がある。

少し考えれば、不審点の多い鄭振鐸の論拠であるといわざるをえない。中国ではこれがなぜ定説になるのか。後の研究者から疑問、あるいは反論が提出されたことがないのが、私にいわせれば不可解である。

以上に掲げた林訳の欠陥は、鄭振鐸が見るところ林紘自身の責任ではない。協力者である口述翻訳者が悪い。

これらの大きな間違いは、たぶんあの口述翻訳者が「文学史」を読まず、文学の常識がないところからもたらされたものであろう。彼らは「娯楽本 [閑書]」を翻訳する態度で文学作品を翻訳することを知っているだけで、文学の種類が同じかどうかには無関心であり、作者と作品には確かに不朽の価値があるかどうかについても無関心だった。彼らはただ随意に、1冊の本をとりあげてちょっと読み「この本は内容がよい」と感じるとすぐさま口述翻訳をして林氏に聞かせ、林氏はそのまま筆記したということにすぎない。ゆえに、彼は3分の2の力をむだに消耗して無価値な作品を翻訳し、また戯劇を小説にしてしまうことになったのも、完全にこれが原因なのである。10頁

鄭振鐸は「閑書」と引用符を使って特別な意味を持たせている。すなわち娯楽

本を翻訳したことをもって林訳小説批判の根拠とした人が彼の前にいた。あの「なれあいの手紙」において、劉半農が指摘したことにほかならない。鄭振鐸は、劉半農にならって林訳小説批判の根拠を共有しているのである。

消耗した力が「3分の2」というのは、全翻訳作品のうち重要な作品は3分の1にすぎないと判断したところからきている。

鄭振鐸にここまで書かれてしまうと、客観的に見て林訳小説の価値はおのずと大幅に低下する。致命的なのは、シェイクスピアとイブセンの戯曲を小説化してしまったと判定されたことだ。原作と林訳を対照すれば、誰の目にも容易にわかる。原作は劇本だし、林訳は小説になっている。戯曲と小説の区別がつかない、と指摘されたばあい、読者の普通の反応は、林訳はデタラメであるとの印象を持つだろう。それに加えて大幅削除だ、誤訳だ、翻訳する価値のない作品を選択したとたたみかけている。よいところがまるでないように思う人がでてきてもおかしくない。

該論文の最後部分に林訳小説の功績があげられてはいる。だが、はじめに欠陥が指摘されたのが悪印象を定着させた。その記述の順序も鄭振鐸によってあらかじめ決められていたのだろう。そのような効果をねらっていた、ということができる。事実、鄭振鐸が提出した林訳の欠陥は、現在に至るまでとぎれることなく指摘されつづけている。異論がまったく出てきていないのが、かえって不気味でさえある。林訳の欠陥は、鄭振鐸以来の定説だ、と何度でもくりかえす。

しかし、私は考える。林訳小説のうち著名で重要な作品は、鄭振鐸の計算によっても、約40から50作品になる。これのどこが少数だというのだろうか。全体が156種類という数字と比較するから少ないように見えるだけだ。重要作品で、それもすばらしい翻訳であれば、たとえ1、2種類であっても称賛されていい価値のある仕事ではないか。翻訳というのはそれほど骨が折れる種類のものである。林訳のうち40、50作品が重要というのであれば、文句なしに十分にこれ以上ないくらい、さらには驚異的に豊富であるということができる。それにもかかわらず、林訳というだけで攻撃の理由になる。理不尽である。重要だからくりかえす。林紓の名前で40、50の重要翻訳作品が刊行されたのは、常識を越えているくらいにすばらしい。これのどこが悪いのか。研究者全員が、鄭振鐸の提示した数

字の魔術にまどわされているのではないかと疑うのだ。

鄭振鐸は、林訳の各種誤りを口述翻訳者の責任に帰した。林紓に責任はない、と公正に評価を下したつもりだろうか。

これも、私には問題のすりかえに見える。なぜなら、文学革命派が攻撃したのは、翻訳そのものの欠点であるからだ。その欠点は、ほかならぬ林紓に全責任があるものとして批判を実行継続していたのだ。当時、口述翻訳者については批判者からひとことも口の端にのぼらなかった。林紓は、翻訳する価値のない娯楽書を一生懸命に翻訳して、しかも欠陥だらけではないか。それを行なった林紓その人を罵倒し非難したのである。いくら林紓の死後とはいえ、彼には責任がなかったなどというのは、ごまかしの言説である。

鄭振鐸は、最後に林訳小説の評価すべき点をいくつかあげる。

しかし、どのようであれ、林氏の翻訳を総計して、かなりすばらしいといえることができる作品が40種あまりもある。中国において、40種余の世界名著を翻訳した人物は、たぶん林氏を除いては、現在にいたるまでひとりもいたことがないだろう。ゆえに私たちは、林氏が苦勞したこの仕事に対して十二分に敬意を払わなくてはならない。10頁

林紓に対して、どうして生前このことばが捧げられなかったのか、と思う方が間違っている。敵をほめてどうするか、といわれて終わりだ。

比較のみごとであるということのできる40種あまりの翻訳のなかで、たとえばセルバンテス [西万提司] の『ドン・キホーテ [魔侠伝]』、ディケンズ [狄更司] の『オリヴァー・ツイスト [賊史]』、『骨董屋 [孝女耐而伝]』など、スコット [史格得] の『アイヴァンホー [撒克遜劫後英雄略]』などはよい翻訳本に数えることができる。10頁

なるほど、これらが鄭振鐸の考える一流の作品であるらしい。「ドン・キホーテ」すなわち、林訳『魔侠伝』がよい翻訳のうちに数えられていることをご記憶

ねがいたい。

現在の中国では、『魔侠传』は原作を大幅に削除したと批判されている作品のひとつなのだ。時間が経過する途中で評価がねじれた。鄭振鐸以外の人によって否定されており、そのまま定着した。否定の評価が林訳全体に適應されたものらしい。林紓の翻訳するものは、価値のない欠陥品だと判定される。当時の読者が大歓迎した事実を無視する。それが、歓迎したその読者たちを侮蔑することにつながっていることに気がつかない。

鄭振鐸は、林訳のすばらしい理由を述べているからそれを見る。

彼の訳文と原文を1字1字対照させて1字も違っていないとは考えることができないにしても、一気に原文を読んで、それから訳文を読むと、作者の情緒は少しも変えられていないことがわかる。また、時には訳文に反映するのが最もむづかしい「ユーモア」にしても、林氏の訳文中には表現されているし、時には原文の巧みなことば使いについてもそのように訳出できている。

11頁

鄭振鐸は、さきに林訳の欠点を数え上げていた。いわく、誤訳が多い。いわく、大幅削除を行なっている。その指摘と、ここに引用したような林訳のすばらしさとは矛盾があるように思う。翻訳のある部分ではダメで、ある部分は原文をよく反映しているという意味であろうか。

中国では数年前の大部分の訳者は、それほど信用できるものではなく、特にいわゆる上海の翻訳家はそうだった。彼らはある作品を翻訳しても作者の姓名すら注記せず、ときには原文の人名地名を任意に書き改め彼ら書いたかのように変えた。あるものは、作者を注記することは知っていたが、原文を削除改変したところは、林氏よりも万倍も大胆であった。林氏はこういう風潮のなかであって、彼らの悪習にまったく染まることなく、まったく無名の作品を訳しても作家の名を出さばかりか、書中の人名地名も絶対に1音も変更しようとはしなかった。この種の忠実な訳者は、当時ではまったく簡単

に見つけることのできないものだった。11頁

外国小説の翻訳者として、林紘は信用することのできる存在であった。ここで、鄭振鐸はほとんど絶賛に近いことばを捧げている。

該論の締めくくりは、当時における林訳の影響と功績である。箇条書きにする。

1．中国人の目を世界に向けさせた。

知識階級は林訳小説を読むことによって、中国と外国では、それほど異なっているものではないことを認識した。

2．司馬遷に比肩しうる作家が外国にもいることを知らしめた。

中国人は、欧米人との戦いに敗れてから、科学技術および政治組織の改革が必要だと考えた。だが、中国文学は世界最高だとの認識を変えなかった。それが林訳小説によって、たとえばスコットは司馬遷よりも下ではないことを知ったのである。

3．小説の地位を高めた。

中国の文人は小説について「取るに足らないもの [小道]」だと見なしていた。林訳小説によってそうではないことを知った。

最後の締めくくりを引用しておきたい。

ゆえに私たちが林氏の翻訳についてどのように不満であったとしても、林氏のこれらの功績は私たちは永遠に忘れることはできないのだ。中国近代文学史を編述する人は、林氏についてもある程度の説明をしないわけにはいかないはずだ。12頁

林紘の翻訳についてその功績を以上のように鄭振鐸は認めている。

鄭振鐸のいう公正な評価というのは、だから、林訳の欠点、短所をあげ、同時に評価すべき箇所、美点を併記するという意味であると考えていいだろう。

問題は、林訳の欠点の方だ。欠点は欠点であってその事実を否定することはで

きない。そういう印象を与えるように文章が書かれている。しかも、欠点のひとつひとつがなまなましい。

林紓は、外国語を理解しなかった。無価値な作品を大量に翻訳した。脚本を小説にかえて翻訳してしまった。原作を大幅削除する。誤訳が多い。原作者の国籍を誤る。

一見すると、どれもが否定することのできない事実と思われる。私は、それらについて簡単に反論しておいたが、中国では違った。あくまでも事実として長年にわたり引用され続けている。事実だと判断したから引用したのか、先行論文に引用があるから間違いのない事実だと思ったのか、それすらもアイマイになるほどに慣れ親しんだ言辞となった。

5 結 論 謬論が死後に決まる

以上を総括すると、鄭振鐸の論文「林琴南先生」は、のちの林訳小説評価の原型になったことがわかる。

すなわち、鄭振鐸が指摘した林訳小説の欠点は、否定することができないものとして論拠の根底に据えられた。この欠点があることを前提として、結果としての評価が正になり負になる。欠点があるから林訳小説はよいと評価することができない。いや、欠点があるにしても中国文学界におよぼした影響が大きいから高く評価すべきだ。この2種類に分かれるのである。

この評価の型を最初に提出したという意味において画期的な論文である。

鄭振鐸が行なった林訳についての欠点部分には、承伏しがたいところが多い。それどころか、最大の欠点だと認められるシェイクスピアとイプセンの戯曲を小説化したという批判は、鄭振鐸の誤認にもとづくものであった。この事実がもたらす意味は大きい。くり返して申し訳ない。誰もが納得した林訳の最大の欠陥が、存在しなかったということなのだ。

鄭振鐸は、「林琴南先生」を書くにあたって、「人の真価は死後に決まる [蓋棺論定]」だと記した。私に言わせれば、鄭振鐸による林紓についての文章は「謬論が死後に決まる [蓋棺謬論定]」ものであった。

新しい発見がなされた今、私はつぎのように結論する。

鄭振鐸「林琴南先生」は、評価の公正を標榜しながら根本から公正ではなかった。林訳小説冤罪事件の原点になる論文である。

【注】

- 1) 発行が延期になった(衍期出版)とある。陳福康編著『鄭振鐸年譜』北京・書目文献出版社1988.3。99頁
- 2) 高君箴「鄭振鐸と《小説月報》の変遷」『鄭振鐸選集』下冊 福州・福建人民出版社1984.1。1305頁。陳福康『鄭振鐸年譜』81、137頁
- 3) 「左翼作家連盟」(略称左連)の結成は1930年である。鄭振鐸は、左連に参加していない。だが、その成員であるのと同じであった。息子の鄭爾康が母親に聞いたと次のように証言している。「ご質問[左連加入問題について呉泰昌から]のことについて、母の回憶によりますと、父[鄭振鐸]から確かに聞いたことがあるということです。当時の「左連」は、名称からも、その構成員にしても、すべて赤色であり、中間あるいは右よりの作家を団結させるために、[中国共産]党の統一戦線政策にもとづいて、父のような進歩的で一定の影響のある、しかし表面から見れば十分には赤くはない作家が必要だった。「左連」の身分ではなく活動を進めるのが絶対多数の作家を革命陣営の周囲に団結させるのに便利だったのです。」「大局の需要であり、党のひとつの策略でした。」(呉泰昌「從鄭振鐸、葉聖陶沒有參加“左聯”談起」『藝文軼話』安徽人民出版社1981.5。62-63頁)。1924年当時とは関係がなさそうに見えるかも知れない。しかし、人の考え方は急には変化するものではない。
- 4) たとえば、ほかには以下のものに収録される。いずれも省略がある。

錢鍾書等著『林紘的翻譯』北京・商務印書館1981.11

薛綏之、張俊才編『林紘研究資料』福州・福建人民出版社1983.6

王俊年編『中国近代文学論文集』(1919-1949)小説巻 中国社会科学出版社1988.5

鄭振鐸『中国文学研究』下冊 北京・人民文学出版社2000.1。

特に最後のものは、初出雑誌のみを示す。作家出版社1957年版のものを再録したとは書いていない。初出の文章だと誤解をあたえる可能性が大きい。書き換えの事実が消失してしまう。

魯迅による林紓冤罪事件

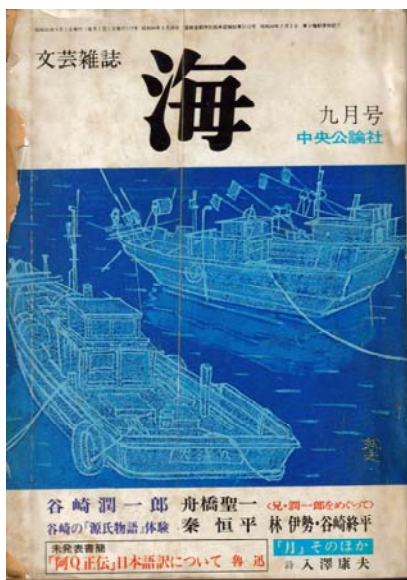
「引車売漿者流」をめぐる

『清末小説から』第87号(2007.10.1)に掲載。雑誌『海』1975年9月号は、発売当時、興味をおぼえて購入したものだ。その後、数回の移転をしたが、紛失しなかった。また、すぐに取り出せる場所に置いてあったのが、自分でいうのもおかしいが不思議だ。ものによっては書棚の後ろに紛れ込んだまま見つからず、複写を取り寄せることがあるのに比較してということ。それが、こうして役に立っている。捨てて整理することの有効性は、頭では理解するが実行できない。それは、必要になる事態がいつ発生するかわからないからである。それにしても、中国と日本の関連する論文を読んで、魯迅の権威が絶大であることをあらためて知ることになった。別の表現をすれば、林紓評価については、研究者の多くが魯迅に呪縛されている。

魯迅から山上正義にあてた日本語の手紙(1931年3月3日付)がある。「阿Q正伝」について魯迅自らが注をつけたものだ。珍しいし、なによりもその注釈が詳しい。発掘者である丸山昇の解説がついて日本で公表された時は話題になった。魯迅著、丸山昇解説「《未発表書簡》『阿Q正伝』日本語訳について」(『海』1975年9月号1975.9.1)という。

今、その雑誌を取り出してみる。発行年月日に目をやれば、中国では「文化大革命」がまだ継続中のころである。雑誌の周囲が黄ばんで経年ヤケというのが、30年以上もたっていることにいまさらながら驚く。

その「引車売漿者流」についての魯迅自身による説明は、研究者には従来知られていない事柄だった。今でも私はおぼえている。その手紙について話をしてい



『海』1975年9月号

た時、ひとりが、批判するにも父親の職業を持ち出すかね、エゲツない林紵やねえ、と発言した。私も含めて、皆が賛同したものだ。

林紵に関係する魯迅の自注は、2ヵ所ある。「阿Q正伝」の冒頭部分にでてくる。

1 『博徒別伝』の誤解

雑誌の紙面上に魯迅の手紙（日本語）原文があり、下に丸山の解説がつく。引用する。（↑はコトに書き換えた）

3 .(林琴南氏八嘗テコナン・ドイルノ小説ヲ訳シテ『博徒別伝』ト云フ名ヲツケタ、ココニハ、ソノコトヲ諷刺シテ居ル。ヂッケンスト有ルハ、作者ノ誤。)*1

「ここは疑問の残るところである」と丸山は書いている。「コナン・ドイルの Rodney Stone 『博徒別伝』は商務印書館出版の「説部叢書」の一冊で、陳大鐙^{ママ}訳、という。林琴南が『博徒別伝』と訳したという魯迅の言葉は何によったものか」*2 丸山の疑問も当然である。



『博徒別伝』

『(社会小説) 博徒別伝』巻上下全21章 1冊には、(英) 柯南達利原著、陳大燈、陳家麟同訳だと明記してある。上海商務印書館(戊申九月十四日(1908.10.8)/ 1915.10.18再版)から出版された「説部叢書」2集第59編の表示もある。林紘の訳では、ない。

丸山は、「魯迅の思いちがいということも考えられる。もしそうだとすれば、魯迅の林琴南に対する気持ちのなせるわざかも知れない」と説明する。

1924年に林紘は死去した。山上あての手紙は、それから数えて7年後のことだ。『博徒別伝』の発行が1908年だから、それからすればもっと時間が経過している。だから勘違いしたのか。あるいは、それくらいの時間の経過はなにほどのこともなく、林紘に対して、諷刺する考えが魯迅に持続していたか。その両方だろう。それが、丸山のいう「魯迅の林琴南に対する気持ちのなせるわざかも知れない」の内容だと思う。平たくいえば、魯迅は林紘を批判的に見ていたということだ。その見方も、長期間にわたって続いている。



魯迅著、林守仁訳『支那小説集阿Q正伝』

しかし、該翻訳書は、林紘の翻訳ではないし、また、ディケンズの著作とも違う。いくら林紘を嫌っていたからといって、二重の勘違いでは諷刺にはならない。魯迅は、間違っていると認めているが、それはディケンズの部分だけであるところに注目されたい。林紘の翻訳だと思いこんでおり、こちらを訂正することには気づいていない。

魯迅から教えられた山上正義は、該当部分を以下のように翻訳している。関係する注もあげておく。

コナンドイルは博徒別伝註^一なる一書を著してゐるといふ様な例がないでもない。^{*3}

註一 この小説発表当時、林琴南氏がコナンドイルの某探偵小説を訳して『博徒列伝』としたのを皮肉つたもの。原著にはヂッケンスとなつてゐるが、これは作者の間違ひで後日訂正した。^{*4}

著者が直接書いてきたことだから山上は自分で調べようとはしなかった。だから、林紘の翻訳だと記し、さらに書名を『博徒^{ママ}列伝』と誤記している。ただし、書名については本文の方の表記は正しいから、単なる誤植かもしれない。さらに、「コナンドイルの某探偵小説」と書いて、これまた間違う。ドイルならシャーロック・ホームズものだと想像してもおかしくはないにしてもだ。

なにしろ、もとが林紘の翻訳ではないのだから、これでは注釈にはならない。知っている人が見れば、どこが林紘諷刺かと怪訝に思うだろう。

つぎが例の「引車売漿者流」に関する興味深い注釈だ。

2 「引車売漿者流」についての魯迅自注

小説「阿Q正伝」において、著者が阿Qの伝記を書くことになった経緯を説明する。自分の文章についてこう記す。

但從我的文章着想，因為文体卑下，是「引車売漿者流」所用的話
然し私の文章から見れば、文体が下等で「引車売漿者流^{いんしゃばいしょうしやりう}」の使用する言葉
である。^{*5}

上の日本語訳は増田渉である。特に増田訳をあげたのは、周知のように彼は魯迅に直接教えを受けているからだ。ただ、肝心の「引車売漿者流」は、原文のままですまして注釈もない。最初は原文を理解しなかった可能性もある。のちの翻訳には手を加えている。

しかし私の文章から考えて、文体が下品で「車を引っぱって味噌を売り歩く手あい」の使用する言葉（割注：当時、口語体の文章を悪罵して文語体の文章を上等なものとする一派がそういった）であるから^{*6}

漢語の「漿」を「味噌」と意識したのは、豆乳では日本人にはなじみがないと

思ったのか。あるいは同音の「醬」と勘違いしたのかもしれない。その増田にして「一派」というだけで林紵の名前をださない。一般読者を対象とした出版物だから不必要だと判断したものかどうかまではわからない。

ついでだから1937年の日本語訳と注を見る。

しかし、私の文章から見ると、文体が下卑てみて、ポテ〔註二〕売などの使ひさうな言葉だから

〔註二〕原文「引車売漿者流」む古文の大家林琴南が、民国八年三月北京大学校長蔡元培に宛て、白話反対の手紙を書いた。その中に用ゐられた句。^{*7}

「ポテ売」は、現在では死語になっている。辞書を見れば「ぼて振り〔棒手振〕」があって、てんびん棒でかついで売り歩く人だと説明する。「ポテ売」はここから来ているとわかる。なにを売るのが問題ではなく、店舗をかまえることのできない零細な商売の形態であるという理解による。注では、蔡元培あての手紙に見える林紵の使用した句だと説明するのが、この時点で新しい。それを示すため原文に引用符を使用している。

従来は、林紵が書いたものを魯迅は逆利用して皮肉った、と説明するのが普通であった。それ以上の意味が込められていようとは、思いもしない。ましてや、蔡元培の父親に関係するとは「意表之外」である。だから1975年に出現した魯迅の自注は研究者の注目をあつめた。

丸山の注とともに引用する。

4 . (コンナコトハ林琴南氏ガ白話ヲ攻撃シタ時ノ文章中ニ有ル話シ。)
(『引車売漿』トハ、車ヲ引イキ豆腐漿ヲ売ルコト、蔡元培氏ノ父ヲ指ス。
アノ時、蔡氏ハ北京大学校長デ矢張白話ヲ主張シター人デ、故ニ、矢張、攻撃ノ矢ヲ受ケル。)

4 . 山上氏宅で私が初めてこの「注」を見た時、最初に驚いたのはこの一条だった。この言葉はここにもあるように、文学革命当時、蔡元培にあてた手

紙の中にある言葉で、魯迅がそれを逆手にとったものであることは周知のことだったが、林琴南がそれをいった時、一般的に庶民の言葉である白話を軽蔑して使っただけでなく、「蔡元培氏の父」にあてこすっていたこと、少なくとも魯迅がそう受け取っていたことはまったく新しく知った事実である。しかし、進士で翰林院にも入った蔡元培の父親がまさか「引車売漿」そのものではあるまいと思って調べてみると、父親は錢莊（昔の金融機関）の「經理」（支配人）で、二叔も呉服屋の經理、四叔、五叔、七叔もみな同様に、一族がほとんど商業に従事している。六叔が科挙に合格したのが最初で、それまでは科挙の合格者は一族から出ていない。林琴南はそういう蔡元培の「家柄」をあてこすったのだということになる。たがいにそこまで知り、意識して論争していたのが当時の中国の文化界の空気だったわけで、すさまじいとしかしいようがない。（後略）

丸山の感じた驚きが伝わってくる文章だと私は思う。魯迅の説明を読んだ人は、「引車売漿」ということばに蔡元培の父親をあてこすった林紘の底意地の悪さを同時に理解したはずだ。人身攻撃だという中国の研究者もいる*8。

一方で、魯迅から注釈の手紙をもらった山上の翻訳はどうかと見れば、「私の文章から見ると、この文体の卑俗なことは、恰も八百屋の小僧か酒屋の御用聞きでも使ひさうな言葉ばかりであつて」（12頁）となる。注すらなく、ここには林紘も蔡元培も出てこない。なにか肩すかしをくったような気がする。

さて、丸山によってこの手紙が公表されて以後、「引車売漿者流」についての解釈は、魯迅自身による注釈が定着することになった。すなわち、「引車売漿者流」は、蔡元培の父親をあてこすり、皮肉るために林紘が使用したことばである、ということだ。なにを当たり前のことを説明しているか、と思われるだろう。だが、このなんでもないように見える箇所に理解の分かれ目がある。すなわち、魯迅の理解は、そのまま林紘が意図したことになるのか、というごく当たり前の疑問だ。

丸山は、彼自身の翻訳では「阿Q正伝」の該当部分を、「私の文章から考えると、文体が卑しく、「車を引いて豆乳を売り歩くやから*」の使う言葉だから」

と訳している。その注に次のように書く。

「車を引いて豆乳を売り歩くやから」 原文「引車売漿者流」、これについて、魯迅は「手紙」(解説参照)でこう書いている。「こんなことは林琴南氏が白話(口語)を攻撃した時の文章中にある話。『引車売漿』とは、車を引いて豆腐漿を売ること、蔡元培氏の父を指す。あの時、蔡氏は北京大学校長で矢張白話を主張した一人で、故に、やはり、攻撃の矢を受ける」。これにあるように、文学革命当時、保守派の文人林琴南が蔡元培を非難した手紙に出てくる言葉であることは、従来も知られていたが、林琴南の言葉が、蔡元培の父をあてこすったものであったことは、魯迅の「手紙」によって初めて明らかになった。蔡元培の父は錢莊(昔の金融業)の支配人で、一族も多くが商業にたずさわっていた。林琴南は蔡元培が学者としては「家柄」がよくないことをあてこすっていたわけである。^{*9}

丸山は、「林琴南は蔡元培が学者としては「家柄」がよくないことをあてこすっていた」と重ねて説明する。「家柄」の前に「学者としては」と新しくつけ加えたのには理由がある(後述)。魯迅の自注を手がかりにして文章を読み解くという丸山の姿勢に変化はない。ただ、「少なくとも魯迅がそう受け取っていた」は省略した。この丸山の説明に彼の慎重さが表われているのだが、解説文では必要がないと判断されたのかもしれない。しかし、ここが先に私が触れた問題に連なる重要な部分なのだ。

その後の注釈をいちいち引用するのはわずらわしい。竹内好と1982年版『魯迅全集』のふたつで代表させたい。

3 ふたつの注釈

まず竹内好から。注釈の関係する箇所のみを引用する。

(4) 原文は「引車売漿者流」一九一九年、文学革命に反対して林紵が蔡元

培あてに詰問状を書き、蔡がこれに答える一幕があった。そのとき林が口語文のことを「引車売漿之徒」のあやつるものと嘲弄した。車を引いて豆乳を売る（旧訳に車ひきや行商人としたのは誤り）小商人の意で、蔡元培の家系が商人であることへの当てこすりだと魯迅は林守仁（山上正義）の問いに答えている。（後略）*10

竹内の注が魯迅の山上正義あての手紙によっていることが明示されている。だから、竹内は自らの旧訳もここで訂正したわけだ。魯迅本人がそう説明しているのだから無視するわけにはいかない。「蔡元培の家系が商人」の部分は丸山昇の説明を取り入れたとわかる。そういう経緯で上のような注釈になる。

中国の1982年版『魯迅全集』の注にはこうある。翻訳する（訳者名のあるもの以外は樽本訳）。

〔 8 〕“引車売漿者流” これは当時林琴南が白話文を攻撃した用語である。本巻190頁注〔 27 〕を参照のこと。1931年3月3日に作者が日本の山上正義にあてた注釈の中で「『引車売漿』とは、車を引いて豆腐漿を売ること、蔡元培氏の父を指す。あの時、蔡氏は北京大学校長で矢張白話を主張した一人で、故に、矢張、攻撃の矢を受ける」と書いている。*11

そこで190頁注〔 27 〕を見る。「論照相之類」（1925発表）にも同じ語句が出てくる。

〔 27 〕“引車売漿者流”之文字 林琴南が1919年3月に蔡元培にあてた手紙のなかで白話文を攻撃してつぎのようにいっている。「もしすべての古書を廃し、卑俗なことばを用いて文章を作るならば、北京の車を引いて豆乳を売る輩が操っていることばはいずれも文法がありますから、……^マ^マ そうであれば、北京天津の小商人はだれでも教授に採用できることになります」*12

こちらには、蔡元培の父親はでてこない。だが、全集注釈の説明を見れば、両

者は一体のものとして理解できる。

魯迅の山上あて自注、およびそれ以後の注釈を読んで次のことがわかる。林紘が蔡元培の父親を引き合いにだして、蔡を批判、あるいは諷刺、当てこすっている事実がある。現在、そのように理解されている。

4 魯迅から見た林紘

『博徒別伝』は林紘の翻訳ではないにもかかわらず、また原著者を間違っているにもかかわらず、魯迅はわざわざ持ち出して林紘を諷刺する意図だと説明している。明らかに魯迅の思い違いである。林紘にしてみれば、自分の翻訳ではないのだから唐突につきつけられた言いがかりにほかならない。

林紘が蔡元培にあてた手紙に「引車売漿」とあるのを取り出して、魯迅は、林紘が蔡元培の父親を指すと注釈をつける。魯迅が学生時代、出版されると購入して読んだ林訳小説の著者林紘の姿は、ここにはどこにも存在しない。もっとも、翻訳本とその翻訳者は直接の関係がないといえばそうだ。文学革命の反対者として出現した林紘を、魯迅は批判的に見るようになったということなのだろう。

その林訳小説にしても、のちに魯迅が回想するところでは、評価は高くない。

増田渉あて魯迅の手紙（1932.1.16付）

……『域外小説集』の発行は一九〇七年か八年で私と周作人が日本の東京に居たときです。そのとき支那では林琴南氏の古文訳の外国小説が流行で文章は成程うまいが誤訳が大変多いから私共はこの点について不満を感じ矯正したいと思つてやり出したのです。しかし、大失敗でありました。第一集（千冊印刷した）を売りだしたら半ヶ年たつて兎（に）角二十冊売れました。第二冊（集）を印刷するときには小さく（少なく）なつて五百冊しか印刷しなかつたが、これも遂に二十冊しかうれなかつた。それで、お仕舞、兎（に）角その年（一九〇七か八）から始まりその年に終つたので、薄ぺらい二冊だけです。その残本 殆んど全部である処の残本 は上海で書店と一所に焼失しました、だから、今にあるものはも一珍本です、誰も珍らしくないけれど

も。内容を言へば、皆な短篇で米のアラン・ポー、露のガルシン、アンドレエフ、波蘭のシェンキヴィッチ（Henrik Sienkiewicz^{ママ}）、仏のモーパッサン、英のワイルド等の作品で訳文は大変むつかしい。^{*13}

魯迅の日本語の手紙だから、カッコを使って増田が小活字でことばを補っている。周兄弟が出版した翻訳書は、さっぱり売れなかったというこれまた有名な話だ。ここには、林訳小説について魯迅が不満を感じていた事実が明らかにされている。

1919年3月26日付のある「孔乙己」附記にも林紵に関係すると考えられる箇所がある。

この拙い小説は、昨年冬には書き上げていた。その時の考えは、社会のある生活を描いて読者に読んでもらいたいだけで、別に深い意味があったわけでは決してない。しかし、活字に組んで発表しようという、ちょうどその時に

突然ある人が小説を用いて人身攻撃をさかに行なったのだ。たぶん著者は裏道に入り込み、読者の考えをことごとく彼と一緒に墮落させることになるのだろう。すなわち、小説は汚水をまき散らす道具であり、なかで侮辱しているは誰なのか、と考えさせるのだ。これは実に嘆かわしくかわいそうな事である。そこで私は、推測して読者の人格を損なわないように、とここに声明する。一九一九年三月廿六日記す。^{*14}

3月26日という附記の日付を、林紵「荊生」（『新申報』1919.2.17-18）および「妖夢」（『新申報』3.19-23。一説に3.18-22とするは誤り）の掲載日付と照らし合わせれば、確かにそうなのだ。「ある人」とは、林紵を指すであろう。林紵の小説を指して「人身攻撃」だと後の研究者がいうのは、この魯迅の記述をふまえている。

この附記を見れば、魯迅は、「孔乙己」が林紵流の小説だと勘ぐられないように予防線をはったとわかる。

古文を尊び白話を攻撃する人がいる。白話を主張する文学革命派に対して旧文人の抵抗がある。「現在の空気を吸いながら、陳腐な儒教、死にかけた言語を押

しつけて現在を侮蔑している。これこそ「現在の屠殺者」である。「現在」を殺せば「将来」も殺すことになる」*15。

魯迅は、白話の側に立つ。ここでいう「現在の屠殺者」は、名指しこそされてはいないが林紘を指すと一般には考えられている。「(『新青年』では)その後、口語の試作が次第にふえ、一九一八年ころから全誌が口語化され、それに伴って外部からの攻撃が加わった。その筆頭格が林紘であり、ここも主として林紘を指すと思われる」*16と竹内好が説明しているとおりだ。

同じく、名前を伏せて林紘を批判するのが、唐俟名義で発表した「私たちは今どのように父親になるか [我們現在怎樣做父親?]」(『新青年』第6巻第6号1919.11.1)である。文中には「聖人之徒」と引用符を使ったことばが数回出てくる。これは、本稿で問題にしている林紘の「引車売漿之徒」を魯迅が強く意識しているのはいうまでもない。

林紘の名前をだして揶揄している魯迅の文章もある。さきに全集の注で少し触れた「写真について [論照相之類]」(『語絲』第9期1925.1.2)だ。写真にまつわる迷信、二重写しでひとり二役の主従を演じる写真の流行だとか、梅蘭芳、トルストイほか外国の名士に悲哀と苦悩の表情を見ている。林紘に関する部分を紹介したい。

林琴南翁は、あれほど有名ではあるが、「知り合いになりたがる [識荊：李白の語]」のに熱心な人は天下にはそれほどいないらしく、私はかつて薬店の宣伝ビラで彼のお写真を見たことがあるけれども、しかしそれは彼のお妾さんにかわって丸薬がよく効いたことを手紙で感謝したもので、印刷されたのは、彼の文章だからというわけではなかった。「車を引いて豆乳をうる輩」の文字を用いて文章をつくる諸君についていうと、南亭亭長 [李伯元]、我仏山人 [吳趸人] はすでになく、省略する。

魯迅は、林紘には「お妾さん [如夫人]」がいると思っていた。事実かどうかはわからない*17。1869年、林紘は劉瓊姿と結婚し、1897年に夫人と死別している。翌年、楊郁を妻とした。7男を得、六十八歳で5女に恵まれているのは事実

だ。

それにしても、魯迅によって描かれた林紵の姿はみすばらしい。執筆したのが1924年11月11日であり、林紵の死去が同年10月5日だったから、なんらかの連想がわいたものだろう。林紵が以前に書いた「車を引いて豆乳をうる輩 [引車売漿者流]」を引用するほどだから魯迅の印象に強く残っていたとみえる。

発表順に、もうすこし魯迅の林紵に関する言及を紹介する*¹⁸。

1928年4月20日付「私の態度、度量と年齢 [我的態度気量和年紀]」は、青年から批判された魯迅からの反論である。魯迅は、批判する青年の文章をまず引用した。その中に「われわれは五四の時の林琴南氏を思い出さざるをえないのである！」*¹⁹と書かれている。魯迅が批判した老人林紵であった。保守派の代表者として文学革命陣の前に立ちはだかった人物だ。だが、現在、青年から見れば、魯迅は、五四時期の林紵とかわらない位置にあり、林紵と同じことをやっている。そういう批判である。

魯迅は、それに対して以下のように述べる。

若者が老成するからには、老人は当然年をとる。林琴南氏のことを確かに思い出さなくてはならない。彼は後に本当に老いさらばえてしまい、白話に反対したが論戦はできなかったために、横合いからモデル小説を書いてひとりの武人に改革者を痛めつけさせた　すこし「綺麗」に言えば、「武器の文芸」に恍惚としたのである。古いものと新しいものは、往々にしてまったく同じな点がある　たとえば、個人主義者と社会主義者は往々にして資産階級に反対するし、保守者と改革者は往々にして人生のための藝術を主張して暗黒について言うのをいやがり、ファシスト [棒喝主義者] と共産主義者は人道主義を嫌うなどだが　林琴南氏の事もまさにその証明なのである。だめな理由については、そのカギはまったく彼が早く生まれすぎて、その階級が「アウフヘーベン [奥服赫変]」されるのだから、早めに計画を変えろということを知らず、そのため結局のところ、はっきりとファシスト [Fascist] の本性をあらわしたということだ。しかし、私は、「じじい」がそうであっても、心配にはおよばないと考えている。どうせ若者よりも先に

死ぬ。林琴南氏は、すでに死んでしまった。恐ろしいのは、将来の柱石になる若者が、彼〔林琴南〕のようにでまかせにしゃべることなのだ。^{*20}

林紘が発表した「モデル小説」というのは、前述した1919年2月の「荊生」、3月の「妖夢」を指しているのは明白だ。

魯迅に「ファシスト」と断定され批判された林紘は、もはや現代中国では生きてはいけない。なにしろ林紘は、こともあろうに「ファシスト」なのである。魯迅の林紘に対する見方は、1928年の時期においてすでに極端な地点にまで到達しているといわなければならない。

その魯迅が1932年に書いた「罵倒と威嚇は戦闘では決してない〔辱罵和恐嚇決不是戦闘〕」^{*21}のなかで、ある詩を評してつぎのようにいう。「罵倒があり、威嚇があり、さらには軽はずみな攻撃があります。その実、まったく書く必要のないものです」(451頁)。自分が林紘を罵ったことは、魯迅にすれば罵倒のうちに入らないということらしい。

1933年8月10日付の旅隼名義「“中国文壇的悲観”」には、「私たちが考えてみるに、林琴南が文学革命を攻撃した小説は、まだそれほど昔でもないのに、現在はどこへ行ってしまったのか」^{*22}と書く。林紘を「ファシスト」と呼んだのに比較すれば、普通に冷静な発言に見えてしまう。

1935年6月10日「“題未定”草(1-3)」では、「すでに名の聞こえた」スコット、ディケンズ、デフォー、スウィフト……を紹介したのは、結局漢文しか知らなかった林紘であり、最大の「すでに名の聞こえた」シェイクスピアの脚本いくつかを紹介するのさえ、決して英語を専攻したわけではない田漢を待ったのである」^{*23}という。林紘は早くからシェイクスピアの関連作品を翻訳しているが、魯迅はこれを無視した。

五四時期を境にして魯迅は林紘に対して厳しい評価を下していることがわかる。その流れの中に、山上正義あて「阿Q正伝」自注を置けば、魯迅の反林紘の姿勢が明らかである。

一方で、林紘が手紙を出した相手の蔡元培は、魯迅にとってはどういう人物だったのか。

5 魯迅と蔡元培

蔡元培は、1868年、浙江省紹興に生まれた。魯迅は、1881年に同じく紹興に生まれている。そのころ、蔡元培は私塾で勉強を続けていた。魯迅とは同郷人だ。その魯迅が、蔡元培の家柄を知らないはずがない。

1912年、南京臨時政府教育部が成立し、蔡元培が教育総長になる。魯迅の友人許寿裳が蔡元培に推薦してくれ、紹興にいた魯迅は、南京臨時政府教育部に就職した。

南京では、こういうことがあった。許寿裳が次のように書いている。

のちに蔡（元培）氏は命じられて北上し袁世凱を迎えに行った。次官（注：現在の副部長）の景耀月がやってきて（教育）部の仕事を代理することになった。この人物は手柄を立てたがっており、自分の勢力を拡大することを知りだけで、自分の縁故者を任用し、突然に会議を開いて雑誌を創刊するといひだした。魯迅は彼をそれほど相手にしてはいなかったし、彼の方はまったく人を知るところがなく、聞くところによると、こっそりと名簿を作って大總統府に送り任命してもらおうよう希望したが、周樹人の名前は理由もなく削除された。幸いに蔡氏がもどってきて、すばやくこの事を取り消した。そうでなければ大笑いの種になるところだった。^{*24}

許寿裳の描く景耀月は悪人だ。ここで紹介されたのは、どのみち「そうでなければ大笑いの種になるところだった [否則鬧成大笑話了]」と書いているくらいだから軽い事柄なのだろう。それにしても、雑誌創刊だの、名簿に名前がないだのとわかったようなそうでないような、結局は不明瞭な内容である。だいいち、袁世凱を迎えに行くとはどういう意味か、説明がないからすでにここからわからない。細かいところは無視して、蔡元培の指導力が発揮され魯迅の首が繋がった、とだけ受け取ればいい話かもしれない。ただ、魯迅が教育部の勤務に満足していた、という前提はあるにしてもだ。

高平叔『蔡元培年譜長編』上冊（北京・人民教育出版社1996.3。407-425頁）から要約してその当時の事情を説明する。

南京臨時政府の教育部は、30人余にすぎなかった。複数の人は、蔡元培となんらかの関係がある。蔡と一緒に中国教育会、愛国学社、愛国女学で活動をしていた鍾觀光、蔣維喬、王小徐ら。ドイツで一緒に学んでいた俞大純、錢方度など。教育と文学に成績のある留日学生の許寿裳、魯迅など。あるいは、教育に情熱をもっている王雲五、謝冰などである。高平叔は、才能があれば用いるというのが蔡元培の態度であるという。人事に対する彼の態度は、北京大学校長に就任したときにも発揮されたであろう。

蔡元培一行が北上して袁世凱を迎えに出発したのは1912年2月18日だった。そもそも袁世凱をなぜ南京に呼ばなければならなかったのか。

清朝を崩壊させるには、袁世凱の力が必要だった。ゆえに、袁が清朝を倒すことができれば、孫文は譲位して袁を総統の唯一候補者として推薦することを声明する。これを提案したのが蔡元培だという。そのとおりに実行された。ただし、臨時政府は南京に置く、袁世凱は南京で任命を受ける、袁は法律を遵守する必要があることを条件とした。南京にこだわったのには理由がある。あくまでも革命政府の系統であることを示す必要があった。清朝が袁世凱に禅譲した印象を与えないためには、南京でなければならなかった。というわけで蔡元培一行が派遣されたのである。

2月19日、景耀月が南京にやってきて蔣維喬と教育部の終結工作について相談をする。これが、名簿問題にかかわる。孫文から袁世凱に交替するから、教育部の仕事、組織も整えなければならず、そのために人選をする必要があったということらしい（409頁）。

北京での蔡元培一行の任務は、結局のところ失敗した。3月21日、南京にもどっていた蔡元培は蔣維喬と教育部終結についての方法を相談している。翌22日、全員を集めて新しい臨時政府は北京で成立するだろう、南京の教育部はしばらく解散となる旨を宣告した。そこであの人選問題が出てくる。景耀月の考えでは、部員のなかの文学家、非教育家は除外したかった。しかし、蔡元培がそれに反対したということだ。

教育部が北京に移ることになりそれとともに魯迅も移動した。魯迅と蔡元培の交際の様子は、『魯迅日記』に記録がある。手紙を出した、もらった、会ったなどの簡単な記述だ。内容までは書いていないが、長い交流があったことがわかる。

簡単にいってしまえば、魯迅にとって蔡元培は同郷でもあり親しい人であった。しかし、福建の林紘個人とはまったく接点がない。魯迅は北京で林紘に会おうと思えば、その可能性は皆無ではなかっただろう。そうしなただけだ。魯迅は、林紘小説は読んだが、翻訳者である林紘とは知り合いでもない。

銭玄同と劉半農の「なれあいの手紙」によりムリヤリ旧文人の代表者にされた林紘ではあったが、「モデル小説」を発表してからは、誰の目にも保守派の指導者になってしまった。胡適は「なれあいの手紙」については反対した。偽名でそのような文章を書くのはまっとうな人がやることではないと考え、『新青年』の編集を自分ひとりでやるといった。すると魯迅は周作人と一緒になって、そうするなら投稿しないと胡適に刃向かったというのである。^{*25}

魯迅は、偽名論文で林紘を攻撃するのを当然だと考えていたことがわかる。そこまで林紘を嫌っていた。

その林紘が、魯迅にとっては親しい蔡元培にむかって「引車売漿者流」ということばを使った手紙を送った、あるいは公開した。

以上の人的関係を見ていけば、林紘書簡に対する魯迅の姿勢は最初から定まっていることが理解できる。

6 「引車売漿者流」についての魯迅理解と林紘の意図

私の疑問をくりかえす。魯迅の理解は、そのまま林紘の意図したことになるのか。

「引車売漿者流」については区別して考える必要がある。なにを区別するというのか。魯迅の受け止め方と林紘の意図である。丸山昇は、「少なくとも魯迅がそう受け取っていた」と注意深く説明していた。

しかし、多くは、魯迅の理解がすなわち林紘の考えだ、と認識している。混同している、あるいは短絡していると私はいう。また、丸山も結局のところ両者を

同一視したのである。

魯迅は、「引車売漿者流」について、蔡元培の父親を指すと理解した。それは、山上正義あての手紙に魯迅自身が書いているから間違いない。魯迅は、そのように把握した。それは、いい。私がいいたいののは、林紘自身の考えはどうだったのか。魯迅がいうように「引車売漿者流」と書いて蔡元培の父親を指す、と林紘は最初から意図していたのか。それは事実か、ということだ。

魯迅は「蔡元培氏ノ父ヲ指ス」と説明した。丸山昇は、その箇所に鋭く反応している。蔡元培の父がまさか「引車売漿之徒」ではあるまいと考えて調べた。その結果、「父親は錢莊（昔の金融機関）の「経理」（支配人）で」あることを明らかにした。さすがだと私は思う。事実をゆるがせにしていない。だが、「一族がほとんど商業に従事している」ことをもって「引車売漿者流」だと考えた。

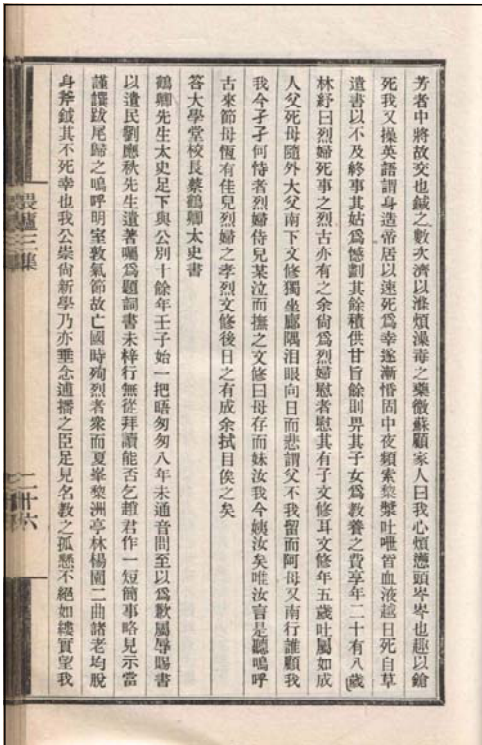
私はここを見て、丸山は、従来から存在する林紘批判に引きずられたと判断する。ことばをかえれば、魯迅を中心にして林紘を見ている。

悪名高い林紘のことだ、蔡元培の家柄までも引き合いに出して攻撃するくらいのことは平気でやるし当たり前だろう。こう考えたとしても不思議ではない。

丸山は、魯迅が書いたことを基礎にして、まわりの現象を解釈している。せめて、評価の基準を魯迅から離し、林紘との中間にでも移動すれば、見え方も違ったものになったのではないか。私は、批判をしているのではない。日本の研究者にまで林紘批判は浸透している証拠だと思うだけだ。

蔡元培の父宝煜は、丸山が調べたように錢莊の支配人であった。1877年に逝去し、その時わずかに四十歳という。錢莊の支配人のどこが「車を引いて豆乳を売るやから〔引車売漿者流〕」だというのだろうか。あとで示すが林紘は、別のことばで「小商人〔稗販〕」といている。だが、錢莊の支配人は、てんびん棒で物を売り歩く小商人とは根本的に違う。

錢莊の支配人と車を引いて豆乳を売る小商人は、読み書きを基準にすれば、まったく異なる。その異なるものを矛盾なく、魯迅が自注で示したように理解するためには、「商業」ということばで括る以外には方法がない。そうしなければ魯迅の注釈は了解できないと丸山は考えたのだろう。



林紘「答大学堂校長蔡鶴卿太史書」

これがのちに「学者としては「家柄」がよくない」とことばを補足した理由である。「商業」に対比させるためには「学者」が必要だったとわかる。その意味では用意周到に考えている。

だが、読み書き、それも古文ができるかできないか、これが分かれ目だ。両者は、厳然と区別してある。林紘にとっては、説明する必要もない事柄だ。当時の中国人も皆そうだと理解していたのではないか。錢莊の支配人と小商人を同一視する人はいない。それをいくら魯迅が書いているからといって蔡元培の父親を「車を引いて豆乳を売る輩」、小商人と同じだと考えるのは間違っている。

蔡元培にあてた林紘の手紙から該当部分を引用する。

若尽廢古書，行用土語為文字，則都下引車売漿之徒，所操之語，按之皆有文法，不類閩廣人為無文法之啾啾，拋此則凡京津之稗販，均可用為教授矣。
もしすべての古書を廃し、卑俗なことばを用いて文章を作るならば、北京の車を引いて豆乳を売る輩が操っていることばはいずれも文法がありますから、

福建広州人の文法もない鳥の鳴き声とは違い、そうであれば、北京天津の小商人はだれでも教授に採用できることになります。^{*26}

すこし結論めいたことを書いておこう。手紙の題名は「答大学堂校長蔡鶴卿太史書」という。手紙だから題名などあるはずがない。それがなぜあるかといえば、林紘が自分の著書に収録したときそう命名したからだ。その題名に注目する必要がある。「太史」という官名を使っているところだ。蔡元培が清朝の進士であり、翰林院編修であったからにほかならない。年齢からいえば林紘の方がはるかに年上だが、彼は挙人にすぎなかった。だから、太史を使用して敬意を表したというわけ。その手紙に蔡元培を罵る語句があると考えるほうが、基本的におかしい。

林紘が問題にしているのは、一般論として口語で文章を作ることができるか、ということだ。しゃべりことばであることが重要である。しかも、同じ口語でも福建広州は（文法がない、というのは行き過ぎだが）不可なのだ。ということで、北京天津に限られる。北京人天津人であれば、すべて教授になることができる。

林紘が福建の人間であることを思いだしてほしい。林紘の文章では、福建人と広州人は、対象外になっている。しかし、福建人である林紘が、なぜ京師大学堂（後の北京大学）の教員になることができたか^{*27}。いうまでもなく古文を使用する能力をそなえているからである。林紘が説明しているのは、こうだ。

口語を前面にだして強く主張すると、文字を知らない小商人でも北京天津人であれば、教授になる可能性ができてきますよ、と少し皮肉をまじえて指摘しただけだ。林紘はそのように白話をとらえていた。だから、当時提唱されていた白話使用を安易な考え方だと判断し、それに対して疑問を提出したにすぎない。ここには、蔡元培の家柄に対するあてこすりなど存在する余地はない。林紘は、もともと蔡元培の家柄、あるいは彼の父親のことなどは考えていないのである。

そもそも、林紘の家は貧しく、彼の父親も商売をしていた「家柄」だ。その林紘が、仮に商売をしていた蔡元培の父親を引き合いにだして「蔡元培が学者としては「家柄」がよくないことをあてこすっていた」というのは、矛盾する。蔡元培の「家柄」が悪いというのであれば、林紘自身も同様に「家柄」は悪い。他人を批判して自らも傷つくことを書くだろうか。奇妙なことだといわざるをえない。

どうやら、丸山は、林紘よりも魯迅の理解の方を重視した。「少なくとも魯迅がそう受け取っていた」と厳密に考えていたようだが、林紘については追求していない。結局のところ、魯迅の理解は、すなわちそのまま林紘が考えていたことになり、これが普及してしまった。

だが、魯迅は魯迅だし、林紘は林紘なのだ。ふたりは別人である。

魯迅が林紘の文章から読みとったことは、林紘とは直接の関係がない。林紘の意図とは別に魯迅が勝手に解釈したことをいっている。

問題は、魯迅の方に存在すると考えるしかないだろう。

魯迅と蔡元培は、同郷である。魯迅は蔡元培の父親が錢莊の支配人であったことを知らないはずがない*28。知っていてわざと「蔡元培氏ノ父ヲ指ス」と書いた。「引車売漿者流」と蔡元培の父親を結びつけることによって、魯迅は林紘に濡れ衣を着せたのである。林紘は、魯迅によれば「ファシスト」である。「ファシスト」に対しては何をしても、なにをいってもいい。遠慮することはない。濡れ衣を着せたという意識は、魯迅にはなかったであろう。

7 2005年版『魯迅全集』の注

1982年版『魯迅全集』の注は上に紹介した。念のため2005年版『魯迅全集』の注を見てすこし驚いた。「引車売漿者流」について説明が加筆されているからだ。

山上正義あて魯迅の手紙が引用されている部分までは同文である。以下が新しい。

考えるに蔡元培の父親はかつて錢莊の支配人をしたことがあったが、「豆乳売りを生業にしていた[以売漿為業]」のでは決して、ない。このデマは思孟の「息邪」(一名「北京大学鑄鼎録」)のなかの「蔡元培伝」(1919年8月7日、8日の『公言報』に掲載)から出ている。文中で、蔡元培の「父某は、豆乳売りを生業にしていた。しばしば侮られ、その子につぎのように言った。「わしは賤業によって軽んじられたが、おまえは学問に励んで恥をそそがなければ、わしの子ではないぞ」と」。魯迅は当時書いた「寸鉄」(『集外集拾遺補編』)の

なかで攻撃をくわえ、それが「陰でこそこそとした事をちょっと行なった」だけの「小さな邪悪」にすぎず、「デマをとばし罪に落とし中傷するのは中国の主要な国粹でもある」と言った。^{*29}

この注釈は、『公言報』に掲載された思孟「蔡元培伝」を紹介した箇所が以前のものとは異なる。しかも、思孟の文章を魯迅が読んでいたことも指摘している。重要である^{*30}。

思孟の文章は、文学革命陣営に属する人々を批判するものであった。『公言報』に連載されたのは、1919年8月6日から13日まで。内容は、序言、蔡元培伝、沈尹黙伝、陳独秀伝、胡適伝、錢玄同伝、徐宝璜劉復合伝だという。

当時、それを読んだ胡適は、『毎週評論』第33号(1919.8.3)^{*31}に筆名天風で「關謬与息邪」を発表した。蔡元培に関係するので紹介する。

北京大学を退職した教員で宜興の徐某は、数ヵ月前「關謬」を書いて蔡子民(元培)を痛罵した。近頃また「息邪」を書いて蔡子民、陳独秀、胡適之、沈尹黙らを悪罵した。ここでは蔡氏について「ドイツに5年居住しながら百余の言葉しか知らず、フランスに3年逃亡しながら10余の言葉しか知らない」と書く。さらに陳沈諸君が外国語に通じていないと嘲笑し、胡適が「英語は精通しているに近いが、知っている言葉は多くはない」という。私たちははじめ見たとき、この徐氏は外国語に精通しているはずだと考えた。ところが第1頁を開いてみると、Marx を Marks と綴っている。この「誤り[謬]」も「うち消[關]」さなければならない。

思孟は、北京大学の、といってもすでに退職しているらしいが、徐某だという。徐某については詳細がわからない。北京大学内に複雑な対立があったことを推測させる。蔡元培が北京大学校長になったとき新進の教授を多く招聘した。ということはクビになった教授もいることを意味する。ならば、蔡校長に恨みを抱いていたとしても不思議ではない。8月といえばあの五四事件の直後だから混乱状況が続いていたということだろうか。

重要なのは、魯迅が思孟「蔡元培伝」を読んでいることだ。蔡元培の父が豆乳売りをしていたと思孟が書いている。しかし、いまさらくり返すまでもなく、蔡元培と同郷の魯迅にとって、それが中傷であることは瞬時に見抜いていただろう。

では、その中傷と林紓はどう関係しているのか。ここは、時間順に発表された文章を並べるとわかりやすい。(私が見て重要文献にをつける)

1919

-
- 2.17-18 林紓「荊生」『新申報』
 - 3.18 林紓「林琴南致蔡鶴脚書」『公言報』 引車売漿之徒
 - 3.19-23 林紓「妖夢」『新申報』(85頁で3.18-22とするは誤り。『林紓研究資料』544頁)
 - 3.21 蔡元培「答林君琴南函」(3.18付)『北京大学日刊』 林紓書簡を収録
/ 引車売漿之徒
 - 3.24 林紓「林琴南再答蔡子民書」『公言報』
 - 3.26 林紓「林琴南再答蔡子民書」『新申報』『時報』
 - 3.26 魯迅「孔乙己」附記 『新青年』第6巻第4号1919.4.15
 - 4月 林紓「論古文白話之相消長」『文藝叢報』第1期
- 5.4 北京学生之示威運動
-
- 8.7-8 思孟「蔡元培伝」「息邪」欄『公言報』 父某，以売漿為業。
 - 8.12 魯迅(黄棘)「寸鉄」『国民公報』(原無標題) 思孟批判
 - 8.12? 胡適(天風)「關謬与息邪」『每週評論』第33号(表示は8.3) 思孟批判

2月から3月にかけては、林紓の公表した小説、および蔡元培あての手紙をめぐる応酬があった。これに呼応するかのように北京大学へ思想弾圧が加えられているという風説風聞流言飛語が報道されている。風説風聞流言飛語だから事実とはかぎらない。文学革命派が大いに騒いでいるちょうどその時だった。5月4日、北京において学生デモが実行され傷害事件が起こった。話題はそちらに移動したのだ。

蔡元培がふたたび話題にされるのは、それから約3ヵ月後のことになる。

問題を解決する鍵は、8月に発表された思孟「蔡元培伝」という中傷文章だ。思孟は、該文において蔡元培の父親が豆乳売りだ[父某，以売漿為業]とウソを

書いた。林紘の蔡元培あて手紙よりも遅れて約4ヵ月半後のことである。逆にいえば、林紘の蔡元培あて手紙は、中傷とは関係なくそれよりもずっと前に書かれている。

これは、なにを意味するか。簡単なことだ。林紘が手紙に書いた「引車売漿之徒」というのは、蔡元培の父親とは無関係であることを示している。

蔡元培の父親が「車を引いて豆乳を売る輩」は、もとが中傷であった。しかも、その中傷を流したのは林紘ではなく北京大学元教授徐某（筆名思孟）のしわざである。林紘とは、関係がないことを重ねていっておく。

蔡元培の教え子で、後に招かれて北京大学の教授に就任（のち北京大学校長）した蒋夢麟は、蔡を追悼してつぎのように書いている。

「氏は、日頃性情はおだやか、まるで冬の日のように敬愛すべきで、ことは厳しく顔をしかめるということはなかった。事を処理し人と交際するのは、恬淡としてゆったりとしていた。高官高位の人であろうと、車を引いて豆乳を売る輩〔引車売漿之流〕であろうと、会えば態度は変わらない。しかし、ひとたび大事にあえば、激しい気性がたちまちあらわれ発言し文章を作り、いいかげんに同調するということがなかった」*32

蒋夢麟は蔡元培を顕彰するために文章を書いている。「引車売漿之流」が蔡元培の父親を中傷する文句であれば、追悼文にはならないだろう。蒋がその文章の中で使用するわけもないのだ。もとが中傷を含む表現ではない。当時、それが普通にみられる受け取り方だとわかる。

魯迅は、その事情を明らかに理解していた。林紘とは無関係であることもだ。にもかかわらず、魯迅は、なにも知らない日本人の山上正義に、あたかも林紘が行なったかのようにその中傷を吹き込んだのである。中傷を伝えてしまったのは魯迅の勘違いで不注意だった、と擁護する人がたとえいたとしても、手紙に書いた事実は否定することができない。

これは、魯迅によって引き起こされた林紘冤罪事件にほかならない。

【注】

- 1) 魯迅著、丸山昇解説「『阿Q正伝』日本語訳について」『海』1975年9月号1975.9.1。249頁

- 2) 1982年版『魯迅全集』第1巻(北京・人民文学出版社1981/1982。1981年初版だが、手元のものが82年重版だから1982年版という)の注は「陳大澄等^{ママ}訳」と誤り、また、林紵訳ではないことを指摘していない。528頁。2005年版『魯迅全集』も同様。
- 3) 魯迅著、林守仁訳『支那小説集阿Q正伝』四六書院1931.10.5 国際プロレタリア文学選集。12頁
- 4) 魯迅著、林守仁訳『支那小説集阿Q正伝』17頁
- 5) 佐藤春夫、増田渉訳『魯迅選集』岩波文庫。1935.6.15/1937.6.10五刷。47頁。次も同文。増田訳『魯迅作品集1 阿Q正伝』東西出版社1946.10.30。15頁。
- 6) 魯迅著、増田渉訳『阿Q正伝』角川文庫1961.4.5/1971.1.30二十八版。49頁
- 7) 井上紅梅、松枝茂夫、山上正義、増田渉、佐藤春夫訳『大魯迅全集』第1巻 改造社1937.2.14。130、135頁
- 8) 房向東「“国粹”：“額上腫出一顆瘡” 魯迅与林琴南」『魯迅与他“罵”過的人』上海書店出版社1996.12。295頁。「人身攻撃」ということばは、姜徳明「魯迅与錢玄同」(『書葉集』廣州・花城出版社1981.5。145頁)においても、林紵の「モデル小説」を評して使われている。
- 9) 魯迅著、丸山昇訳『阿Q正伝』新日本出版社1975.11.20。169頁
- 10) 竹内好訳『魯迅文集』第1巻 筑摩書房1976.10.8。414頁
- 11) 『魯迅全集』第1巻528頁
- 12) 『魯迅全集』第1巻190頁
- 13) 増田渉『魯迅の印象』角川書店1970.12.20。147-148頁
- 14) この附記はのちに魯迅によって削除された。『新青年』第6巻第4号1919.4.15。扉にそう表示される。影印本の奥付は1919.9.1になっている。
- 15) 「随感録(57) 現在的屠殺者」『新青年』第6巻第5号1919.5
- 16) 竹内『魯迅文集』第3巻 筑摩書房1977.3.15。370頁
- 17) 林紵に会ったことのある今関天彭は次のように紹介している(くり返し記号は文字に直す)。「林琴南もこの一派(注:北京の風流人)で、琉璃廠に近い所に住んでみました。進士[拳人]^{ママ}ではあるが役人にならず、金がないために翻訳をやつてみました。尤も英語は出来なかつた、人に読んで意味をとつてもらつてみたのです。一向風采の上らぬ男で、陳(衡恪)さんの所へ来ても廊下にひよこんと立つてみました。桐城派の文章家で、当時支那随一といはれてみました。書くのが実に早い。ある時、陳さんの所へ行つたところが、林琴南も来てみて、詩を作らうといふことになつたが、彼は手がふるえるからといって、連れて来た二太太 これが又うす汚い婆さんでした それに書かせ、自分は頭を振り振りぶつぶつ云ひながら三[二]時間余りのうちに三十いくつ作りました。然し詩は

さうまいとは云へません。陳石遺 清末有数の詩論家で石遺室詩話を書いた人で、鄭孝胥にも指導したといはれる人ですが この人が、林の詩はなつとらんと云つたら、先生大へん怒つたそうです。画も上手でした。当時は大したものぢやないと思ひましたが、今では相当の値になつてみます。今関天彭「民国初年の文人たち」『中国文学』第70号1941.3.1（影印本）のち『中国文化入門』（元々社1955.12.1。98-99頁）所収。字句の一部に変更がある。[]で示した。

- 18) 姜徳明「魯迅と林琴南」(『活的魯迅』上海文藝出版社1986.8)がある。
- 19) 『語絲』第4巻第19期1928.5.7。1982年版『魯迅全集』第4巻108-109頁
- 20) 『語絲』第4巻第19期1928.5.7。31頁。初出では、捧喝主義者、Facistist^{ママ}と誤植している。両者ともファシストの意味。1982年版『魯迅全集』第4巻111-112頁
- 21) 1982年版『魯迅全集』第4巻所収
- 22) 1982年版『魯迅全集』第5巻248頁
- 23) 1982年版『魯迅全集』第6巻357頁
- 24) 許寿裳「10入京和北上」『亡友魯迅印象記』北京・人民文学出版社1953.6 / 1955.9北京第三次印刷。影印本。35頁
- 25) 沈尹黙「我和北大」陳平原、夏曉虹編『北大旧事』北京・生活・読書・新知三聯書店1998.1 / 2003.8北京第2次印刷。173頁
- 26) 林紵「答大学堂校長蔡鶴卿太史書」林薇選注『林紵選集』文詩詞巻 成都・四川人民出版社。166頁。林紵『畏廬三集』上海・商務印書館1924.7。26才-28ウ。林紵は、自分の著書に収録して「答大学堂校長蔡鶴卿太史書」と名付けている。『公言報』（初出未見）には「林琴南致蔡鶴卿書」と題されており、のちに収録した『新潮』もそうになっている。もともと手紙だから、こちらはいずれも便宜的に表題をつけただけ。
- 27) 1903年、京師大学堂訳書局に勤務しはじめる。1906年、同校予科および師範館の經学教員、1910年、大学經文科を教える。1913年に辞職した。
- 28) 本稿を書いてから同じ表現をしている日本の論文があることを知った。「実際には蔡元培の父親は両替商の支配人であり、豆乳売りだったというのは事実ではない。このことは蔡元培と親しかった同郷の魯迅が知らぬはずはなく、「車を引いて豆乳を売る商人」と書いて蔡元培の父を貶めている林紵の意図を暴露しているのであろう。吉川榮一「林紵と「文学革命」」熊本大学文学会『文学部論叢』第67号2000.3.20。85頁。注釈番号は省略した。「魯迅が知らぬはずはなく」という表現が似ているだけで、本稿における私の考えは、いうまでもなく該文とは異なっている。
- 29) 『魯迅全集』第1巻北京・人民文学出版社2005.11。554頁

- 30) 思孟の文章を紹介する文章がある。王永昌「“引車売漿者流”指的是誰？」『魯迅研究百題』長沙・湖南人民出版社1981.11。117-120頁。これによると、『公言報』の文章を発見したのは孫玉石らという。119頁
- 31) 『毎週評論』第33号の発行は、日付よりも遅れていたとわかる。「蔡元培伝」(掲載はたぶん8月11日)について書いているので、『毎週評論』第33号の発行日は、8月12日以後のことになる。
- 32) 蒋夢麟「試為蔡先生写一筆簡照」蔡建国編『蔡元培先生紀念集』北京・中華書局1984.7。76頁。初出は重慶『中央日報』1940.3.24だという。

魯迅「出乎意表之外」の意表外

『清末小説から』第84号(2007.1.1)に掲載。本稿は、林紓批判に關係して出てきたから本書に収録した。

古文の大家林紓が誤用したのを魯迅が皮肉って使用した。そう注釈には書いてある。私は、そうなのだとはばかり思っていた。表題に示した「出乎意表之外」のことだ。

意表の外に出る。一見どこが間違っているのかわかりにくい。日本語では通用するような気がする。だが、すべての注釈が、それは誤用だと説明しているのだ。私の漢語に関する感覚が悪いに違いない。

人の意表をつく、意表に出る、思いもおよばないこと、だ。漢語では「出人意表」と表わすのが普通である。同じ意味で「出人意料之外」がある。「意料」を「意表」に置き換えれば可能なような気もする。しかし、そうはならない。「意表」の「表」が「外」を意味し、それだけで「意料之外」となる。それに「之外」をつけるとさらにその外になる、という理屈だ。

漢語辞典には、「出乎意表」「出乎意料」と並べて「出乎意外」がある。それらはすべて同じく「出於意料之外」なのだ。従来解釈通りになる。

日本語の説明でも「意表」は「意外」となっている。しかし、同時に「意表外」ということばも収録しており、そうならばこちらは「意外外」ではなからうか。外の外は、内側だ。

中日大辞典は、当然ながら「出人意表」を掲載する。しかも、「出乎意表之外」

を収録している。いずれもが「意表外に出る、予想外なことになる」だと説明している。ここでは、もはや誤用ではない。

以上を見ると、誤用が多用されて常識になった、という判断なのかとも思いますが。だから収録したか。

もとが誤用であるというのは、そうなのだろう。だが、魯迅が林紓の誤用を皮肉ったのだという説明には、今の私は納得しないのだ。別の解釈が成立すると考えるからである。

1 魯迅の文章

問題にするのは、魯迅「ヒゲについて [説胡鬚]」(『語絲』第5期1924.12.15影印本のち、『墳』所収)だ。

関係する部分だけを説明する。

魯迅が旅行先の西安で歴代皇帝像の印刷物を見た。ある人がその中の1枚について、日本人の贋造だと断言したという。日本人が中国皇帝の画像を贋造したとき、自分のはねあげたヒゲを手本にして描いたから中国の皇帝であるにもかかわらずヒゲが上をむいている、というのが理由だ。日本人のその手段と考への突飛さが、「意表の外に出る」という。原文で示すと「真可謂「出乎意表之外」了」とカッコでくくっている。あくまでも冗談にまぶしているのご了解いただきたい。

魯迅は、のちに「「意表之外」」(『隨感錄』69『語絲』第154期1927.10.22影印本。『而已集』北新書局1928.10影印本)と題する文章も発表している。従来の説明を適用すれば、よほど林紓の誤用が気にくわなかった(逆にいえば気に入っていた)、あるいは諷刺せずにはいられなかった、ということになる。

カッコでくくっているから魯迅は特別の意味を持たせた、と誰でも考える。その典拠を探すのが研究者の仕事のひとつとなったのも当然のことだ。

以下に、今までの記述を示して番号を振る。説明をしていないものもひとつあげる。時間の推移による変化をたどるためである。

2 林紓誤用説の発生

手元にあるものを見ると鹿地亘訳がある。

1. 鹿地亘訳、胡風選「鬚を語る」『大魯迅全集』第3巻 改造社1937.3.20

「その手段と思想の奇怪なことまことにいはゆる『意表の外に出でたり』だ」
78頁

これよりほかにも日本語訳があるかもしれない。ただ、これを見る限り注釈はついていない。

注釈は、1950年代になってからほどこされるようになる。

2. 松枝茂夫訳「鬚の話」『魯迅選集』第5巻 岩波書店1956.5.22

「その手段と思想の奇抜なことたるや、実に「意表の外に出ている」(割注：「意表に^{ママ}いず」又は「意外にいず」といえばいいのに、わざとこういったのは、林琴南の誤用を踏襲してふざけたのである)というべきだ」148頁

ここではじめて林紓の名前が出てきた。林紓の誤用であり、しかも魯迅がふざけた、と説明している。

年代順に並べると、次は中国で出版された全集になる。

3. 『魯迅全集』第1巻 北京・人民文学出版社1958.10/1961.8北京第3次印刷

「5“出乎意表之外”，這是模仿林琴南文章中的錯誤辭句，原作“出人^{ママ}意表之外”。當時林琴南和別出一些反對白話文的人，常說新文學者所以提倡白話是因為自己寫不通古文的緣故，因而當時主張白話的人也常引用他們寫的不通的古文句子，以諷刺他們的提倡古文。 283頁」537頁

「5」は注釈番号だ。林紓が間違った語句を魯迅がまねたと説明する。林紓らは白話文に反対して、古文に通じないがために白話を提唱するのだといていた。ゆえに、白話提唱者は通じない古文の文章を引用して諷刺したのだという。

古文の大家として著名な林紓が誤用した。その程度の大家である、という軽蔑の気持ちが込められていると考えてよい。

4. 竹内好訳「ひげの話」『魯迅文集』第3巻 筑摩書房1977.3.15

「方法も思いつきもまことに奇想天外、これぞ「意表の外に出る⁽³⁾」というや

つではあるまいか」102頁

「(3) 意外の意味で人の意表に出る(出人意表)というが、意表の外に出る(出乎意表之外)とはいわない。たまたま口語反対の急先鋒の林紓がこの書き誤りをした。これ幸い文語反対者が好んで逆用した」379頁

「文語反対者」には、当然ながら魯迅が含まれている。

5. 『魯迅全集』第1巻 北京・人民文学出版社1981/1982北京第1次印刷

次の北岡正子訳があるから、省略する。

6. 北岡正子訳「ひげの話」『魯迅全集』1 学習研究社1984.11.22

「その手段、思いつきの奇抜さたるや、まさに「意表の外に出る^[6]」というものだ」239頁

「[6]「意表の外に出る」[原文「出乎意表之外」]。これは林琴南^{リンチンナン}の文章の中の、意味の通らぬ語句。当時、林琴南らは、新文学の作者が白話文を提唱するのは、自分が古文に通じぬゆえであると、攻撃していた。そこで白話文を主張する人たちは、よく彼らのこのような意味の通らぬ古文の語句[「人の意表に出る」(「出人意表」)をこのように書き誤ったもの]を引用して、諷刺^{ふうし}のタネとしたのである」244頁

この部分については、訳者の注釈はない。人民文学出版社版のままでよい、という判断があるものと思う。

念のため、2005年版『魯迅全集』第1巻(北京・人民文学出版社2005.11)も参照したが、以前と同じ注釈であった。

以上を見れば、魯迅研究の専門家全員が、林紓を諷刺して魯迅が使用したと認定しているとわかる。例外は、ない。

だが、おかしくはないか。

3 注釈についての疑問

林紓が誤使用した、という指摘が専門家によってなされている。

私が感じる疑問というのは、こうだ。

研究者が注釈においてそう書くならば、林紓がどういう文章で使用したのか具

体的に説明すべきだろう。しかし、その説明がない。ただ単に林紓が誤用したというだけ。前の注釈をおうむ返しに引用するのみだ。林紓批判を継承してそれに加担する結果となっている。

奇妙である。人の文章を批判してその根拠を示さないのは不公平だ。それとも根拠を示す必要がないほどに林紓の誤用は明確であるのか。魯迅と同時代の人にとってはわざわざ説明する必要のないことはわかる。だが、のちの研究者は、せめて林紓のどの翻訳作品、あるいはいかなる文章で誤用をしたのか、該当個所を示す責任があるのではないか。古文の大家である林紓が誤用したというのなら、それくらいのことは説明してほしい。当然の疑問だと思う。だが、魯迅研究者の誰もそれを実行しようとはしない。罵ったままで知らん顔だ。

私がここで提出するのは、銭玄同の文章である。別に珍しいというものではない。

4 銭玄同のばあい

それは、銭玄同「“出人意表之外”的事」(『農報副刊』1923.1.5*¹)という。

商務印書館が『小説月報』を発行しているにもかかわらず、加えて『小説世界』を新たに出している。銭はこれを見つけて話題にする。『小説世界』の執筆者たちの名前をあげ、包天笑、李涵秋、何海鳴、胡寄塵、徐卓呆、趙荅狂および林琴南である。この林紓(琴南)部分に「……林琴南(就是做“出人意表之外”這句妙文的人)等輩」と書いている。「出人意表之外」という奇妙な句は林紓の作になる、とここで指摘した。松枝茂夫以下、中国の研究者も銭の文章によって注釈を書いたのだらうと推測できる。

では、のちの注釈者は、銭玄同の該文が根拠だとなぜ明記しないのか。

銭玄同がこの文章で「人の意表外に出る」ことだと述べるのは、『小説世界』に沈雁冰(茅盾)と王統照の名前を見つけたからだ。

雑誌目録によると、『小説世界』第1巻第1期(1923.1.10)に、王統照「夜談」と(匈)斐[裴]都菲著、沈雁冰重訳「私奔」が掲載されている。雑誌の発行月日は、実際とはズレているらしい。この『小説世界』は、中国においてはあの唾

棄すべき「鴛鴦蝴蝶派」文人たちの巢窟だと認定されている雑誌だ。

茅盾と王統照が、敵対する陣営の刊行物に作品を発表している。これは裏切り行為にはかならない。ゆえに、銭はふたりに向かって「名声を大事にしてほしい」と希望する。魯迅の詩「他們的花園」を引用して版元である商務印書館にも苦言を呈した。

つまり、くりかえすまでもなく、銭玄同は茅盾と王統照を批判しているのである。

魯迅全集の注釈に銭玄同の文章が根拠だと明記しない理由は、茅盾批判が行なわれているからだろう。

銭玄同の文章が発表されたのち、それを読んだ王統照は茅盾に質問の手紙を出した。茅盾は「我的説明」を書いて翻訳「私奔」を『小説世界』に発表した経緯を説明せざるをえなかった。それは『時事新報・学灯』に発表されている*2。

茅盾は「我的説明」で次のように弁明した。

新しい雑誌に王統照と茅盾自身の原稿を渡した。しかし、それに「礼拝六派」すなわち鴛鴦蝴蝶派の作品を収録するとは知らなかった、というものだ*3。

わざわざ説明をしなければならぬほどに重要な問題だった。考え方がかけ離れた両陣営だったということだ。

興味深いことに魯迅も銭玄同の該文を読んで文章を発表している。「關於《小説世界》」という*4。

銭玄同の「“出人意表之外”的事」は、当時から魯迅の視野に入っていた事実を確認しておきたい。ただ、その時点では語句をそのまま引用はしていないことも見ておく。

さて、林紘の誤用だと銭玄同が指摘していることは、わかった。だが、林紘がどの作品で誤用したのかまでは銭玄同も説明しない。これについての疑問は解決していない。

銭玄同「“出人意表之外”的事」を引用したのは、時間的にみると魯迅「説胡鬚」よりも周作人の方が先だ。

周作人は、1924年7月17日付の文章「苦雨」において「意表之外」(周作人『晨报副鐫』1924.7.22。初出未見。『雨天的書』北京・北新書局1925.12。影印本。6頁)とカッコ

をつけて使用している*⁵。このカッコはあきらかに有意である。

私が問題にしているのは、林紓の誤用そのものではないのだ。

魯迅が林紓を諷刺するためだとすれば、前後の脈絡がなにもない。なぜ、林紓諷刺が突然あらわれるのか。諷刺をするのに文脈など関係ないといってしまうば身も蓋もない。要は、読みの問題である。

魯迅が錢玄同の「“出人意表之外”的事」を引用して自分の文章のなかに「出乎意表之外」と書いたのは時間の経過を見れば確かだと考える。その意図は、どこにあったのか。魯迅がこれを使用したのは、林紓批判、林紓諷刺を主目的としていない、と私は思うのだ。

5 林紓諷刺ではなく錢玄同に向けたもの

魯迅の文章の構造に注目しなければならない。構造といったところで大げさなことではない。文脈を指している。

「出乎意表之外」が使われるのは、日本人による贋造を述べる部分だ。中国皇帝の肖像を日本人自らのヒゲを手本にして偽造したというこの文脈に注目してほしい。何が「出乎意表之外」かといえは、「その手段と考えの突飛さ [其手段和思想之離奇]」なのである。

日本人が肖像を贋造した、という文章の流れに林紓の誤用を置いても、唐突すぎて林紓諷刺にはならないではないか。林紓と偽造のあいだに関係が見いだせないからだ。読みが浅い。単純に私はそう感じる。

ここは、魯迅が錢玄同の文章「“出人意表之外”的事」を踏まえて、言外になにを含ませたかを考える必要がある。

かつて錢玄同は、日本留学から帰国したというふれこみの王敬軒を偽造し、林紓を擁護する手紙を捏造して書いたことがある。王の名前で林紓を擁護してみせ、劉半農と組んで林紓を批判するという手の込んだ策略をめぐるせたのはあまりにも有名な話であろう。

文学革命派が仕組んだあの捏造論文事件である。敵が姿をあらわさないから手紙を捏造して林紓を誘い出した。文学革命派が勝利を収めたことになっている現

在では、誰もその正当性を疑わない。だが、普通に考えて、文学革命派の自慢にもならない愚劣な謀略である。よく考えてほしい。本質は捏造論文なのだ。捏造することがそんなに誇らしいことなのか*6。普通の神経では、とても理解しにくい行為である。もっとも、革命だから何でもあり、というならそれはそれで納得する。

日本人が中国皇帝の肖像を贋造するという話から、日本に留学した旧知の銭玄同が王敬軒名の論文を捏造した事実を連想する。事実かどうかは定かではない肖像の贋造と、これは事実であった論文の捏造が、贋造と捏造の言葉でびたりと一致するのである。そういう捏造をしたことのあるご本人が「“出人意表之外”的事」と題する文章を公表した。それを拝借して魯迅は自分の文章に「出乎意表之外」と引用したのだ。論文捏造の事情を知っている魯迅が、銭玄同本人にしか理解できない楽屋オチの部類に属するおふざけを発信したのである。

魯迅は忘れているかもしれないが、王敬軒すなわち銭玄同は例の捏造論文のなかで「真出人意外」（『新青年』第4巻第3号1918.3.15。308頁）という語句を1カ所に使用している。もっとも、こちらは本来の正しい使用例ではあるが。

従来の注釈で説明されている林紓諷刺ではなく、銭玄同ひとりに向けた魯迅の合図だと私は考える。魯迅の「その手段と考えの突飛さは、実に「意表の外にでる」ということができる」

【注】

- 1) 銭玄同「“出人意表之外”的事」初出未見。沈永宝編『銭玄同五四時期言論集』上海・東方出版中心1998.10。271頁 / 『銭玄同文集』第2巻随感録及其他 北京・中国人民大学出版社1999.4。47頁
- 2) 以上の説明は「茅盾生平著訳年表」（『茅盾全集』附集 北京・人民文学出版社2001。45頁）にある。ただし、『時事新報・学灯』についてその発行年月日を明示しない。
- 3) 茅盾「我的説明」『時事新報・学灯』1923.1.15初出未見。『茅盾全集』第18巻 北京・人民文学出版社1989。340-341頁。「王統照給沈雁冰的信」も収録してある。
- 4) 1923年1月15日付『晨报副刊』通信欄に掲載。初出未見。今、2005年版『魯迅全集』第8

卷（北京・人民文学出版社2005.11。137-140頁）による。ゆえに、全集のままに《 》を使用した。

- 5) ついでにいうと、同書215頁に見える「山中雜信」6にこちらもカッコつきで「出於意表之外」がある。ところが、この文章は1921年9月3日付だ（掲載は『晨报・副刊』1921.9.6）ということは、錢玄同の文章よりも早くなる。ここでひとつの可能性が発生する。最初は、用法が間違っているという意味を込めて周作人が「出於意表之外」を使った。この段階では林紓とは関係がない。それを見ていた錢玄同が引用し林紓の誤りだと書き付けた。さらにそれを魯迅が引用した、という流れだ。さらにつけ加える。周作人（仲密）「前門遇馬隊記」（『每週評論』第25期1919.6.8）に「出人意表之外」と引用符付で出てくる。時間順に見ると、周作人（1919、1921） 錢玄同（1923） 周作人（1924） 魯迅（1924）になる。
- 6) 別に文章を書いた。樽本「林紓を罵る快樂（2）」『清末小説』第29号2006.12.1

林 訳小説評価の最近

ある不安な新展開

『清末小説から』第85号(2007.4.1)に掲載。とくに中国近代翻訳文学研究に功績のある郭延礼氏である。めざましい業績をあげているのは周知の事実だ。しかし、ある箇所に疑問を感じたからこういう文章になった。私は、氏の学識を疑っているわけでは決して、ない。あらかじめご承知いただきたい。

林 紓が発表した多くの外国小説翻訳をどのように評価するのか。研究界では評価の方法にひとつの構造が、従来からある。枠組みといってもいい。

1 林 訳小説評価の構造

評価の結論は、単純にふたつある。すなわち、林 訳には欠陥があり、だからダメだ、という負の評価を下す。もうひとつは、欠陥があるにしても、当時の文芸界にはたした役割は小さくないから、よろしい、と正の評価になる。

林 訳小説の欠陥とは何か。

林 紓は外国語を理解しなかった。彼は、共訳者の口述翻訳を聞きながら古文を用いて筆記した。これが林 紓の翻訳方法だ。その結果はどうなるか。

林 紓は他人に原著の選択をまかせたため、多くの23流の作品を翻訳して貴重な時間を浪費した。その訳文には多くの削除、誤訳、加筆などが行なわれている。ときには、もとのすばらしい脚本を小説に翻訳してしまった。有名な例は、シェイクスピアあるいはイプセンの戯曲を小説化したことだ。

これが、研究者のだれもが認める林訳の欠陥である。

その評価が、結果的に正になるにせよ、負になるにせよ、林訳に以上の欠陥があることを認めるのが前提となっている。逆にいえば、事実として欠陥があると把握したうえで、正負に評価を定める。これが林訳評価の基本的な構造である。

林訳小説に欠陥があることは、1910年代に劉半農が指摘し、胡適が追認した。林紘批判のひとつだ。彼の存命中である。1920年代、林紘の死後、鄭振鐸がそれを確定して決定的なものにした。

以後、林訳評価の構造 = 枠組みは、例外のひとつもなく維持され続けて現在にいたっている。

いま、林訳評価の枠組みはもとのままで、評価を正の方向に極端に推し進めた論文が出現した。郭延礼は、林訳小説評価についての新しい視角を提案するのだ。本稿では、彼の論文をとりあげて紹介する。

2 郭延礼の提案

林訳小説について、郭延礼は、従来から一貫して正の側面に重点をおいて高く評価している。林訳に欠陥はあるにしても、結局は価値のある翻訳だと認めているのだ。

たとえば、「“林訳小説”的総体評価及其影響」(『社会科学戦線』1991年第3期(総第55期)1991.7.25。のち、『中西文化碰撞与近代文学』済南・山東教育出版社1999.4所収)、あるいは『中国近代文学発展史』第2巻(済南・山東教育出版社1991.2/北京・高等教育出版社2001.7)がある。さらに、翻訳研究の専門書である『中国近代翻訳文学概論』(漢口・湖北教育出版社1998.3/修訂本 武漢・湖北教育出版社2005.7第2版第3次印刷)などである。

大部の著作を世に問い続け、林訳小説のはたした役割に高い評価をゆらぐことなくあたえているのは、まさに注目にあたいする。

ところが、郭延礼は、それだけでは不十分だと感じたらしい。正の方向での評価を極端に推し進めたのが、『20世紀中国近代文学研究學術史』(南昌・江西高校出版社2004.12)だ。同じ文章を『中国前現代文学的轉型』(済南・山東大学出版社

2005.10) に流用している。それほど強調したいことだと私は理解した。本稿では、後者にもとづいて述べる。

該書の「第十一章 福建人文与中西文化交流」において、郭は、翻訳界の巨星ふたりを取り上げる。嚴復と林紘だ。両者ともに福建人である。片方の林訳小説に関して、以下のように説明している。

「林紘翻訳の評価について、過去において私たちは原文と対照すること、すなわち原文への忠実さに拘泥しすぎた。人々は往々にして林紘の翻訳に誤りと削除があることをもってその主要な欠点とし、はなはだしくはそれにより軽率にも林紘の翻訳を否定する人もいた」188頁

林訳を評価するとき、原文と対照することに拘泥しすぎた、と郭延礼はいう。林訳に誤訳、削除などがあることを認めるのは従来通りだ。だが、今回は、発想の転換を提起する。これが新しい。

「その実、林紘の翻訳については、私たちは視角の転換を行なってさしつかえない。すなわち「原著中心論」の束縛を打破しなければならない。いわゆる「原著中心論」とは、翻訳を原著の複製品だと見なすことだ。翻訳を受け身の、副次的な、創造性のない執筆活動だと見なすことだ。ゆえに過去において、人々は往々にして原著のなかのある文章、はなはだしきに至ってはある単語、ある字について細かく比較して訳し間違いだといい、また、それによって翻訳の善し悪しを判定した。これは非常に時代遅れの見方である。20世紀全体において、林紘の翻訳に対する批判は、基本的にこの観点から出発してもたらされたものだった。/ 今日、私たちは新しい視角に変え、新しい翻訳批評の基準を導入しなければならない。これこそが「訳文を中心とする」という翻訳観である。いわゆる「訳文を中心とする」とは、翻訳を主体的な、独立した、創造性の仕事だとみなすことだ」189頁

「林紘の翻訳は、原著に対するある種の再創造なのである」同頁

「……林紘の翻訳には確かに削除、加筆があることを私たちは承知している。しかし、林紘の削除、加筆は随意にでたらめに行なわれたものではなく、彼の原文の削除には目的があった。すなわち、清末の伝統的な鑑賞習慣にあわせるためであり、さらに多くの中国人読者に受け入れやすくするためであったことを説明

しなければならない」190頁。

郭延礼が提起しているのは、翻訳はすなわち再創造である、という新しい視角だ。ヴァルター・ベンヤミンとデリダの名前をあげて、それらの著作からの導入を表示する。

郭は林紓の名前しか掲げていない。しかし、それだけにはとどまらない。翻訳研究全体にかかわってくる。

翻訳者の使命という課題を考えるとしよう。原作と翻訳をオリジナルとコピーの関係である、と見なさない。ここまでは、わかる。郭延礼が説明する次の部分が問題だ。すなわち、「訳文を中心とする」と書いて翻訳を原作から切り離す。はたして、それは妥当なのか。この部分の解説がないから理解するのがむづかしい。

郭延礼は、上に引用した以上に詳しく説明しているわけではない。すぐれた翻訳の例をいくつか紹介してその根拠にする。たとえば、ハガードの英文よりも林訳が優れているという銭鍾書の説明とか、ディケンズの原文よりも林訳がよいという謝冰心の文章を紹介する。あるいは、島田健次〔謹二〕が森欧〔鷗〕外の翻訳したアンデルセン『即興詩人』について原文に手を加えていることをいう（固有名詞をなぜか間違ふ。単なる誤植だろうが、大丈夫かと心配になる）。それだけだ。

正直なところ、私は驚いた。同時に、ある違和感をいだき、また不安を感じる。郭延礼が、林訳を正の方向で今までより強力に評価したいがため、従来の翻訳研究を否定しているように読みとれるからだ。

3 再創造ということ

郭延礼は、翻訳は再創造だと書く。再創造という視角で林訳小説を評価しろという。

私がいだく違和感は、たぐっていくと「再創造」ということばから発生している。

あの著名な「電術奇談」について、「再創作」ということばをいまだに使用する研究者がいる。それを連想するから、私はなにかうさんくさいものを感じる。

菊池幽芳氏原著、方慶周訳述、我仏山人（呉趼人）衍義、知新主人（周桂笙）評点「電術奇談」24回という作品がある。『新小説』第8号-第2年第6号(第18号)（光緒29.8.15-刊年不記[光緒31.6]（1903.10.5-[1905.7]））に連載された。探偵が登場する恋愛小説だ。発表されると、中国では大きな評判をよんだ。単行本が複数出版されるばかりか映画にまでなっている。

菊池幽芳原作と表示がある。だが、長い間、中国ではその原作を特定することができなかった。日本人の原作だから調査の手がおよばなかったのだろう。その結果、中国の研究者はなにをいいはじめたか。呉趼人が「再創作」したものではないか。いや、そうに違いない。実は呉趼人が再創作した作品なのである、という結論にしてしまった。原作が不明だから、想像はふくらむばかりだ。

私が菊池幽芳「新聞賣子」75回を新聞紙上に探しあてたのは1985年のことだった。日本文と漢訳を比較検討すると、少しの加筆はほどこしているが原作の大筋に忠実な作品であることが明らかになった。しかし、中国では現在にいたるまで呉趼人の再創作だと説明するものがある。「実は創作であり、翻訳と見ることはできない」などと書く文献が公表されるしまつた。では、再創作の中身を考察した論文が発表されるかといえば、それもなし。論証ぬきで結論だけが下される。

日本で発表された原作を中国で調査することは困難かもしれない。しかし、その努力はすべきだった*1。詳細は知らないが、収穫がなかったのは確かだ。その結果、いとも簡単に「再創作」と断定した。今でも変わらない。それこそ、原作から切り離れた「訳文を中心とする」評価方法の先例となるのではなからうか。

私が不安を感じるのは、林訳小説についても同じことにならないか、と思うからだ。原作との関係を検討することなく、翻訳作品だけを中心に研究すればよいということになりかねない。これははたして翻訳研究といえるだろうか。

4 結 論

翻訳を再創造だと郭延礼が考えるのはかまわない。だが、くり返すが、そのばあい翻訳と原作の関係を断ち切っているのではないかと私は疑うのだ。ここは研究の問題になる。

翻訳と研究というふたつのものを郭延礼は同一視しているのではないかと危惧する。なにしろ彼の文章には、研究者の使命は書かれてはいないのだ。

翻訳は、再創造、再創作だという。「訳文を中心とする」ことを強調することによって、もとの拠った原著との関係を極めて希薄なものにしてしまう。原著はヒントを与えただけの存在になりかねない、と想像もする。推し進めていくと、原作についての考察は必要でなくなる。あるいは原作不明の翻訳については、原作探求は重要ではない、必要ではない、と短絡する恐れがある。これが中国における翻訳研究の将来について私が感じる不安なのだ。

翻訳の際に底本とした版本の特定をする意味も価値も必要もないことになるでしょう。すると、原作の外国語に言及する理由もなくなる。再創造なのだから、今目の前にある作品そのものだけを研究すればよい。従来の翻訳研究にまわりついていた外国語という大きな障壁を無視してよろしいという提案にほかならない。漢語だけを読んでいればいい。私にいわせれば、これはもはや翻訳研究ではない。

林訳小説は、まだましな方だ。清末民初時期に出現した膨大な翻訳作品のなかには、原作名、原作者名を明記しないものも多い。そのようなことはないと思うが、郭延礼は、ひとつひとつの作品について、それらの原作を探索することに疲れてしまったのか。それとも、最初からその興味がなかったのか。だから、外国の理論に飛びついたのか。それがそのまま中国の近代翻訳小説研究にも適用できると考えたのか。とても、『中国近代翻訳文学概論』という大著を執筆した人とも思えないほどの、極端でいかがかと思われる提案だと私は思う。少なくとも、研究者の役割について詳しく説明する必要があるのではないかと、ともつけ加えたい。

【注】

- 1) 「電術奇談」の原作「新聞賣子」について、私に直接、問い合わせてきた人数を示せば、関心がほとんどないことが理解できる。すなわち、今までの約20年間に、複写を求めた研究者は韓国と中国からひとりずつ、合計ふたりだけだ。日本語で書かれているのが問題なの

林訳小説評価の最近

かもしれない。ここに翻訳研究のむつかしさがある。【統合版補記】現在では国立国会図書館近代デジタルライブラリーに収録されている。誰でも読むことができる。

阿英による林紘冤罪事件

『吟辺燕語』序をめぐる

『清末小説』第31号(2008.12.1)に掲載。いくつか訂正した。林紘は、ラム姉弟『シェイクスピア物語』を翻訳した。その『吟辺燕語』につけられた「序」が問題である。シェイクスピア戯曲と『シェイクスピア物語』を並置したのだ。両者の関係を説明していない。これを根拠に阿英がつぎのように説明している。原本が『シェイクスピア物語』だと林紘は誤解していた。つまり、林紘は、シェイクスピア戯曲の存在を知らなかった、という意味だ。強引な結論でしかない。林序を読めば、林紘がシェイクスピア戯曲とラム『シェイクスピア物語』を厳密に区別していることがわかる。林紘は、戯曲と小説の「区別がつかない」と批判される。これはまったくの誤りである。阿英によるこの間違った断定が、現在の研究者にまで影響を及ぼしていることを説明する。

阿英は、林紘+魏易共訳『吟辺燕語』について何を書いたか。

本稿は、阿英が行なったその説明を問題にする。それは、林紘がシェイクスピア戯曲とラム小説をどう把握していたかについて考えることになる。

阿英が、林訳について説明したわずかな語句にすぎない。だが、林紘のシェイクスピア理解の根幹にふれるものなのだ。

阿英の記述は、林紘に関連する別の誤解を生みだした。のちの研究者は、学界の権威阿英の文章に思考が束縛されてしまう。誤りが阿英からはじまり、現在に継承される。

林紘に関する阿英の誤解は、どういう文脈から生まれたのか。過去を追究していくと、阿英の前にいる人が必然的に姿をあらわす。彼らは、いかにして林紘に

濡れ衣をきせたのか。そこに行きつく。

本稿で扱うのは、『吟辺燕語』の林序そのもの、および阿英の短い説明が主となる。あわせて、劉半農、鄭振鐸による有名なある断言を検討し、『澥外奇譚』の叙例、王国維の論文などに言及する。

ラム姉弟作品の漢訳2種類から話をはじめよう。

青少年のためにシェイクスピア原作の戯曲を小説に書き直したものがある。ラム姉弟(Charles Lamb, Mary Lamb)『シェイクスピア物語 TALES FROM SHAKESPEARE』(1807)は、そのなかのひとつだ。あまりにも当たり前のことを書いているように思われるだろう。「そのなかのひとつ」という箇所にご留意いただきたい。

中国におけるラム版最初の漢訳は、『澥外奇譚』(達文社1903)をあげなければならない。私は、説明を必要としない周知の事実だと思っていた。だが、中国話劇研究を専門にする日本の研究者でそれを知らない人(統合版注:瀬戸博士を指す)がいることを知って少し驚いた。当時の中国で、いくら普及しなかった翻訳だったとはいえ、それを現代の研究者が知らないでいい理由にすることはできない。該書に言及する目録、翻訳文学史が、普通に刊行されているからだ。

ラム版の全訳は、林紘が魏易と共同で漢訳した『吟辺燕語』(1904)である。

今では常識となっている事実だ。しかし、林訳が発表された当時の中国では、ラムの原作だとは必ずしも認識されてはいなかった。1904年当時どころか1927年の序がついている『訳書経眼録』*1(出版は1934年)は、『吟辺燕語』を紹介しながらラムの存在にはまったく触れないのである。

林訳そのものを見ても、ラムは出てこない。林紘は、明記しなかった。シェイクスピア作品だといいいながら、翻訳は小説体になっている。これが文学革命派によって林紘批判の根拠とされた。

今からはるか昔にさかのぼらなくてはならない。しかも、それに加えて阿英によってある断定がなされた(本稿の主題だ)。

その結果、林紘はシェイクスピアについて何も知らない、と今も非難の声が続いている。林紘は、200種をこえる翻訳書を刊行した中国の知識人だ。その林紘が、シェイクスピア戯曲を知らないとは信じがたい。だが、阿英はそう主張して林紘を罵るのである。

1 林訳批判のきっかけ

文学革命が提唱される過程において、林紘の姿はもともとほとんど影も形もなかった。

1917年、胡適は、林紘が書いた論文に言及した。だが、その内容には大いに失望したことを表明している。つまり、敵としては資格が十分ではないと林紘について胡適は判断したのだ。ところが、それから1年足らずして、突然、林紘は文学革命派から反対派の代表として名指しされ痛罵されることになる。

1918年、林紘を「旧文人」の代表者に指名して批判を加えたのが、銭玄同と劉半農のふたりだった。文学革命派がしかけた「なれあいの芝居(手紙)」である。銭玄同が変装して登場し、劉半農がそれをやり込めるという配役だ。

銭玄同は、王敬軒という偽名を使い、林紘を擁護する風を装って『新青年』に手紙を寄せた(形にする)。該誌第4巻第3号(1918.3.15)の「文学革命之反響」欄に掲載された。それに対して劉半農がいちいち反論する。これが筋立てである。題名は、最初つけられていないから「答覆王敬軒先生」などとよばれる。

偽名の書簡を捏造したのには理由があった。有名な話で、しかも誰も疑わない。

胡適、陳独秀あるいは銭玄同らが主張する文学革命に対して、言論界ではなんの反応もなかった。仲間内の雑誌では文学革命を主張し威勢のいい論文が発表される。だが、それに対してもとからの文人たちは無視して反論してこない。文学革命派はしびれを切らしてひと芝居うった。これが実際にあったいきさつである。

銭玄同は、守旧派であればこう主張するだろうと考える論理を勝手に組み立てた。主張する人間の実態が存在しない。問いただされたばあいは答えようがない。ゆえに、実名で発表するわけにはいかないから王敬軒をでっち上げた。私は、これを指して捏造論文、あるいは捏造書簡と表現している。普通に考えて正々堂々と胸を張って言明できる種類の文章ではありえない。事実、銭玄同は、王敬軒が自分であると公的に認めたことはないのだ。ただし、のちの中国現代文学史では、称賛すべき行為だという評価で一致している。後世の研究者は当事者ではないか

ら当たり前前にせよ、捏造論文だという後ろめたさは、誰も感じていない(別稿参照)。

銭玄同と劉半農は、守旧派を挑発することを目的にして文章を書いた。事前に打ち合わせている。具体的に批判をするために守旧派の代表者として林紘を特に指名した。王敬軒(銭玄同)は、林紘を「現代の文豪[当代文豪]」と持ち上げてみせる。示した作品のひとつが漢訳の『吟辺燕語』だった。

劉半農は、それに反論する。林紘がそれまで行なっていた外国文学の翻訳という仕事を批判して、価値がないという。林紘らが翻訳した『吟辺燕語』について、劉は何をいったか。

本来はイギリスの戯曲だが、林紘は「詩」と「戯」を識別していない、と劉半農は批判した。

その意味は次のようになる。すなわち、『吟辺燕語』は、シェイクスピア(英国莎士比)著と示してあるにもかかわらず、漢訳を見ればそれが小説体である。ゆえに、もとのシェイクスピア戯曲を勝手に改変したと断定した。「豆と麦の区別もつかない」と常套句を使って林紘を罵る。いうまでもなく、戯曲と小説の区別がつかないという意味だ(以下、「区別がつかない論」と略称)。それほどに林紘は無知蒙昧、愚昧だと批判する。

ところが、この林訳が底本としたのは、ラム姉弟の『シェイクスピア物語』である。戯曲が書き換えられてすでに小説になっている。小説化された原作をそのまま翻訳して『吟辺燕語』が成ったというだけのことだ。林訳が小説体であるのは当然のこと。非難される理由にはならない。

劉半農が、その事実を知らずに林紘を批判する根拠としたのは、どう考えても軽率だった。事前に銭玄同と相談しているから銭もおなじだ。林訳は、原作者を表示してシェイクスピアだとしている。しかし、林紘はラム姉弟の名前をだしていない。これらがからまって非難のうまれる原因であった、ということ是可以する。だが、おかしいことだと私は思う。劉半農の間違いを指摘する人がいない。文学革命派を批判することは、中国においては現在も許されないのだろう。

それとは別に生じる不可解なことは、ラム原作に関する劉半農らの理解なのである。

『吟辺燕語』の刊行は1904年だ。劉が林訳批判の根拠として該作品をあげた

のは、1918年のことだった。14年後である。14年という時間は長すぎはしないか。ラム姉弟の原作であることをその間ずっと劉半農は知らなかったのか。

劉は、翻訳家だし当時は北京大学法科預科教授でもある。その彼がラムについて無知であったとは、信じがたい。だいいちラムの原作だと明記している『滌外奇譚』が1903年に刊行されているではないか。それにも気づかなかったのか。

知っていたのであれば、劉半農は、わざと無視した。林紘がラム版を底本に使ったとはわかっていたが、ラムの名前を出していないことを逆手にとった。劉半農は、それを林紘がシェイクスピアとラムの区別がつかない根拠とした。そうであれば、劉は確信犯だ。そこがはっきりしない。

見る人がみれば、『吟辺燕語』の原作がなにであるかは容易に理解する。ラムの名前がなかろうが、知っている人は知っているのだ。しかも、はるか以前に。それを証明する事実がある。中国に知識人は多い。

2 『吟辺燕語』の原作

吳宓(1894-1978)は、1911年当時数えて十八歳の学生である。日記の「自修課程」に「Tales from Shakespeare “Tempest”」と記入し、さらに「商務印書館説部叢書の『英国詩人吟辺燕語』は、たぶんこの書を翻訳したものだろう」*2と書いている。

吳宓は、自分の日記にそう記しただけで公表するわけではない。だから、劉半農が『吟辺燕語』の原作をラム姉弟の小説本だと気づかなかったのはしかたがなかった、とはならない。なぜなら、シェイクスピア戯曲について評論文が別に書かれており、林訳『吟辺燕語』を紹介しているからだ。こちらも、劉半農の文章より早く公表されている。

東潤「莎氏楽府談」全4章(『太平洋』第1巻第5、6、8、9号1917.7.15、8.15、11.15、1918.1)である。東潤は朱世溱(1896-1988。武漢大学のちに復旦大学教授*3)のこと。吳宓よりもさらに若い。

表題の「莎氏」はシェイクスピアを、「楽府」は戯曲を、「談」は評論を意味する。

朱東潤は、シェイクスピア戯曲を紹介するこの長編評論のなかで次のように書いている。

のちにラム氏がそのあらましを述べて『シェイクスピア物語』とした。わが国の林琴南がそれを翻訳して『吟辺燕語』と称している〔後有林氏述其事迹為莎氏楽府本事。吾国林琴南訳之。則稱為吟辺燕語〕。1: 2頁

林氏の『吟辺燕語』は、イギリス人ラムの『シェイクスピア物語』という原書から翻訳したものだ〔林氏吟辺燕語訳自英人林穆之莎氏楽府本事原書〕。2: 1頁

「莎氏楽府」は、シェイクスピア戯曲を指している。「本事」とは、辞書的にいえばもとの事跡、事柄を意味する。物語と考えればよい。ここで使われている「莎氏楽府本事」は、すなわちラムの『シェイクスピア物語』である。

朱東潤論文は、1917年に発表された。1918年の劉半農によるいわゆる「なれあい芝居」「自作自演の論争」よりも前に読むことのできる文章なのだ。

劉半農らは、そのことを知らなかったのか。それとも知らぬ顔をしたか。どうしても話がそこに行く。

もし、わざと無視したのであれば、なにがなんでも林紘を引っ張り出して批判の矢面に立たせたかった、ということだ。事実、そうだった。林訳は、シェイクスピア戯曲を勝手に小説化して翻訳した。多くの研究者たちはそう書いて林紘の無知を物笑いにし続ける。劉半農の誤りを指摘して林紘が冤罪であることをいう研究者は、私を除いて今にいたるまで出現していない。

いうまでもなく、劉半農の林訳批判は、間違った根拠のうえに構築されている。『吟辺燕語』を論拠にした劉の林紘批判は、本来が正しくない。ゆえに、それから6年後の鄭振鐸は、そのことにわざと触れない。

鄭は、『吟辺燕語』をあげるかぎり林訳批判が成立しないことを理解していたと思われる。彼は、「却爾斯、蘭為吟辺燕語（Tales from Shakespeare）」と説明してラムと原作を明記し、自分の論文では別の場所に移動させた。これがその証拠だ。

鄭振鐸は、そのかわりになにをしたか。鄭はそ知らぬ顔をし、ひとことの説明



『英国詩人吟邊燕語』

説部叢書の表記がない（刊年不明。実物未見）。

上海図書館編『中国近現代話劇図誌』（上海科学技術文献出版社2008.1）所収。戈宝権の論文「莎士比亞の作品在中国」にも書影が掲げられる。ほかの版本は、『林紘冤罪事件簿』に書影をかかげた。

も訂正もせず『吟邊燕語』をおろし「凱徹遺事（ジュリアス・シーザー）」など別の林訳シェイクスピア作品にすり替えた。さらに林訳イプセンを掲げる。林紘は原文のすばらしさと風格および重要な対話を完全に消滅させ、まったく別の本にかえてしまった、と批判するのだ。さらに、林紘は小説と戯曲の区別がつかない、と書いて鄭振鐸は林を罵る（「区別がつかない論」である。後述）。驚くほかはない。これを巧妙といわずして何といえがいいのか。その手際があまりにもあざやかだから、私は感心するたびに同じことが書きたくなり、今もそうしている。今後もそうするだろう。

鄭振鐸が行なった指摘、すなわち「区別がつかない論」は、のちの研究者によって広く認められ支持された。認められた、といっても検証を経ているわけではない。内容を検討した結果、鄭の説に賛成すると書いた研究者はいないのだ。だから、皆は、なにも調べずなにも知らないまま鄭の断定を受け入れた、といわざるをえない。無責任といえば書きすぎか。ともかくその結果、現在も林紘は批判されつづけている。シェイクスピア戯曲を小説化し、戯曲と小説の「区別がつかない」というのが、その大きな理由のひとつだ。

しかし、その批判には根拠がない。英文小説化本が存在していたのだ。林紘ら

は、それを底本にして漢訳しただけ。鄭振鐸は林紘に濡れ衣をきせた。これが冤罪事件であることは、明白な事実だ。

以上が、阿英が文章を書く前に発生している事柄である。

3 『吟辺燕語』のこと

『吟辺燕語』の諸版について簡単にのべる。

説部叢書に収録された版本がもとになる。以下のとおり。

『吟辺燕語』 英国莎士比著 林紘、魏易同訳 上海・中国商務印書館 説部叢書第一集第八編 光緒三十(1904)年七月首版 / 光緒三十二(1906)年四月三版

シェイクスピアの名前だけがある。ラム姉弟の姿は、ない。問題が発生する原因である。

目次と本文には「英国詩人吟辺燕語」と表示される。また「吟」についても表紙は「唸」であるが、本稿では『吟辺燕語』を使用する。

表紙に「神怪小説」とつけ加えられるのは、改組された説部叢書初集以降だ。日本語でいえば「幻想小説」である。中国の研究者のなかには、該訳書が「神怪小説」と称したことをあたかも誤読したかのようにいう人がいる。なにか先入観があるのではないか。私は林紘が誤読したとは思わない。亡霊、幽霊、妖精が出現する作品もある。角書をつけたのが林紘でなければ、版元の商務印書館になるが、幻想小説だと考えたのは不思議ではないのだ。

当時の新聞『中外日報』に上海商務印書館が出版した新書広告が掲載されている。「説部叢書」を大書し、『案中案』『環遊月球』とともに『吟辺燕語』を説明しているのでその部分を引用する。

『中外日報』光緒三十年八月十三日(1904.9.22)(記号は樽本がつけた)

説部叢書 / 英国詩人吟辺燕語 / 閩中林琴南先生善訳小説膾炙人口毋待贅言。

今又訳英詩人莎士比筆記。莎為歐洲詩聖其所著述梨園演唱至今勿衰。此為其詩之紀事二凡十則。先生一一為製新名。其目如下。肉券、馴悍、^マ學悞〔誤〕、鏄情、仇金、神合、^マ蠱微、医諧、獄配、鬼詔、環証、女変、林集、礼関〔哄〕、仙猶、珠還、黒贅、婚詭、情感、颺引。洋装一冊。售價大洋三角五分。

林紘が「イギリス戯曲家シェイクスピア物語〔英詩人莎士比筆記〕」を翻訳した。シェイクスピアは、ヨーロッパのすぐれた戯曲家〔詩聖〕でありその著述は梨園で演じられ今に至るまで衰えない。該書は、その戯曲〔詩〕の物語〔紀事〕20則である、などなど。

原文の「詩人」は今でいう戯曲家だ。ここに見える「紀事」は、「筆記」「記事」と書いても同じ。物語を意味する。戯曲をもとにして書かれた物語だから『シェイクスピア物語』にほかならない。林紘の「序」に基づいて作られた広告文だとわかる。

この広告を読んだ一般読者は、ラム姉弟の原作であるとは理解しないだろう。シェイクスピアは出てくるが、ラムの名前がないからだ。シェイクスピアの作品そのものだと誤解してもしょうがない。これはあくまでも読者の側の問題である。林紘とは関係がないことにご注意いただきたい。

2日後の『中外日報』光緒三十年八月十五日(1904.9.24)に受贈書籍の記事が掲載されている。上記の広告と内容はほとんど同じだが、出版記録資料として引用する。

恵書誌謝 昨承商務印書館惠贈新印説部叢書第一集第八編。英国詩人吟辺燕語一冊。按是書為英詩聖^マ荷〔莎〕士比筆記。凡二十則。情節奇幻。歐洲各国皆演為伝奇。風行遐邇。訳者為閩中林君琴南。林君素以訳小説著名。則是書之声價。不待言矣。書此鳴謝。

「説部叢書」は、最初第一-十集と称していた。のちに改組されて初集という呼称に変更されている。『吟辺燕語』はこれにも組み込まれ、のちには「林訳小

説叢書」に収録された。

上海・商務印書館 説部叢書初集第8編 甲辰(1904)年十月初版/1913.6
四版
上海・商務印書館 林訳小説叢書第1編 1914.6

本文は、以上の3種類ともに同一である。組版がまったく同じだから紙型を使用したと理解する。初集第8編では初版を「十月」としている。もとの「七月」とは異なる。重版の際に記述がぶれたらしい。「説部叢書」ではよくあることだ。そのほか、小本小説版、国難後版などという形で出版されたという(未見)。のちに阿英編『晚清文学叢鈔』域外文学訳文巻(北京・中華書局1961.9)に収録されている。

ただし、阿英は「(英)蘭姆^{ラム}著 林紘魏易同訳」と書いて著者名の表示を変えた。つまり、原書の「英国莎士比著」を独自の判断で削除してしまったのだ。なぜこういう勝手なことをするのだろうか。研究者であれば、ここは注をつけるべき箇所である。だが、阿英は、そうしていない。勝手な改変が、のちの誤解を生む原因になる。

記載がそのように変化したのは、阿英「晚清小説目」(『晚清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社1954.8/増補版 上海・古典文学出版社1957.9、北京・中華書局1959.5。124頁)にさかのぼる。この阿英目録から「英国莎士比著」がなくなり、「蘭姆」に変更された。阿英にしてみれば、ラムを表示するほうが正確であると考えたのだろう。しかし、実物には存在しないこの記述は不正確である、といわなければならない。

ここでも誤記のはじまりは、阿英だ。

阿英の「晚清小説目」は、長年にわたって研究者に利用され続けてきた。もとの目録が誤っていれば、誤解が訂正されないままになるのもしかたがない。なにしろ清末小説資料については、利用できるものは限られていると信じられてきたからだ。阿英が整理した資料に依拠せざるをえなかった。

『吟辺燕語』は、1981年に「林訳小説叢書」10種の1冊として北京・商務印

書館から復刻刊行される。ここでも「蘭姆」だけがあって、シェイクスピアはない。表紙、扉、奥付（英文併記）のすべてが「[英]蘭姆著」と書かれている。原本の記載とは異なった説明が行なわれた。また、『中国近代文学大系』11集28巻翻訳文学集三（上海書店1991.4）に採録されたのは、全20篇のうちの3篇だ。同じく「蘭姆」とだけ表示する。

林訳では存在しなかったラムが表にでてくるのは、阿英目録の記述からはじまった。彼に権威があることを私たちに見せつけている。その例のひとつだ。

気の毒にも、1981年復刻版の誤った記述を鵜呑みにした研究者がいる。

莊浩然是、「閩籍近代学者与莎士比亚」（『福建師範大学学报（哲学社会科学版）』2005年第3期（総第132期）2005.5.28）において、次のように説明する。

「林訳本は、ラム氏ふたりの『シェイクスピア物語 [“Tales from Shakespeare (莎氏楽府本事)”]』を翻訳したと明記し」（74頁）ている、と。

澥外版の訳者がラム版との区別をつけていないと罵り、それと対比させて林紘が正確に記述しているとほめてきわだたせたつもりだ。だが、林訳には、もともとラムの名前は掲載されていない。莊浩然是、1981年復刻版の記載によっている。『吟辺燕語』の実物を見ずに論文を書いた。実物にはラムを明記していないことを知らなかった。莊は林紘を擁護するために該文を書いたが、結果としてそうはならない。立論を急ぐあまり資料の吟味まで手が回らなかったとみえる。

収録作品の林訳名と原題、日本語訳を以下に示す。印は、『澥外奇譚』に収録された作品だ（翻訳題名は異なる。別稿で示す）。この先行漢訳は原書の半分しか翻訳していない。しかし、林訳は全訳である。題名を漢字2字に統一したのも工夫のひとつだ。

肉券 The Merchant of Venice	ヴェニス商人
馴悍 The Taming of the Shrew	じゃじゃ馬ならし
變誤 The Comedy of Errors	まちがいの喜劇
鑄情 Romeo and Juliet	ロミオとジュリエット
仇金 Timon of Athens	アテネのタイモン
神合 Pericles, Prince of Tyre	ペリクリーズ

蠱徴	Macbeth	マクベス
医諧	All's Well that Ends Well	終わりよければすべてよし
獄配	Measure for Measure	尺には尺を
鬼詔	Hamlet, Prince of Denmark	ハムレット
環証	Cymbeline	シンベリン
女変	King Lear	リア王
林集	As You Like It	お気に召すまま
礼哄	Much Ado about Nothing	から騒ぎ
仙猶	A Midsummer Night's Dream	真夏の夜の夢
珠還	The Winter's Tale	冬の夜ばなし
黒瞽	Othello	オセロー
婚詭	Twelfth Night; or, What you Will	十二夜
情感	The Two Gentlemen of Verona	ヴェローナの二紳士
颯引	The Tempest	あらし

林訳には、ラムの「序 PREFACE」は漢訳されていない。

ラム序を翻訳掲載しなかったから彼の存在がわからなくなってしまった。中国の読者にとっては、そうだ。だが、林紘自身は、ラムの原作であることは知っていた。底本はラム版なのだからラムが著者であるのは当然だろう。しかも、ラム版書名の意味は「シェイクスピア作品にもとづく物語」なのだ。共訳者の魏易から解説があったと考えるのが普通である。

また、1冊20作品のすべてを翻訳しながら、「序」があることに気づかなかったとは考えられない。いくら共同訳者の魏易が原文を握っていようが、原書にある「序」について解説がなかったわけでもなからう。クイラー＝クーチ『シェイクスピア歴史物語』を林紘が漢訳したときと同じことである。林紘は、その「序」を掲げなかった。示したのは、「英国莎士比原著」である。クイラー＝クーチの名前をださなかった。

林紘は、シェイクスピア戯曲からラムの著作が作られたことを理解している。普通に考えれば当たり前のことだ。ただ、彼はラムの名前を出さなかった。

ところが、林紘に対する先入観があるのだろう、彼は無知だと主張する研究者がいる。林紘の「序」(以下、林序と略称)が問題になるのである。

4 林序について

林紘は誤解をしていると説明し、その結果として林を罵るのが、謝天振、查明建主編『中国現代翻訳文学史(1898-1949)』(上海外語教育出版社2004.9)だ。

謝天振らのいうところを紹介する。

チャールズ・ラム姉弟の『シェイクスピア物語』を底本にし、シェイクスピアの原著を翻訳の底本にしなかったのは、ラム姉弟の『シェイクスピア物語』はシェイクスピアの戯曲物語にもとづいて書き換えたことを林紘が知らず、シェイクスピア詩歌創作の「もとの事柄」だと考えたからだ[以為是莎氏詩歌創作的“本事”]。271頁

謝天振らは、引用符号を使用して「本事」だと書いている。しかし、林序において「筆記」「記事」「紀事」という単語は使われているが「本事」は見当たらない。謝天振らは、原文を厳密に読んではいないとわかる。

「シェイクスピアの戯曲物語にもとづいて書き換えた」と日本語訳をつけた部分の漢語原文はつぎのとおり。「……是根拠莎氏戲劇故事改写的」。「莎氏戲劇」ならまだ理解できる。ラムが「シェイクスピア戯曲にもとづいて」書き換えたのは事実だ。だが、「莎氏戲劇故事(シェイクスピアの戯曲物語)」となるとなにを指しているのかわからない。しいて言えば『シェイクスピア物語』だ。そうなると、「ラム姉弟の『シェイクスピア物語』は『シェイクスピア物語』にもとづいて書き換えた」、とならざるをえない。説明になっていないのだ。彼らの勘違い、あるいは誤植だろう。

ラムの著作が先にあり、そこからシェイクスピアが詩作した(つまり劇化した)。謝天振らによると、林紘はそう考えていた。だから、制作の順序が逆だ、と謝らは非難する。無知な林紘だ、そんなことも知らないのか、と。「林紘は『瀕外奇

博其趣。此東坡所謂久譽膏粱。反思螺蛤者也。蓋政教兩事。與文章無屬。政教既美。宜澤以文章。文章徒美。無益於政教。故西人惟政教是務。贖國利兵。外侮不乘。始以餘閒用文章家娛悅其心目。雖哈氏莎氏。思想之舊。神怪之託。而文明之士。坦然不以爲病也。余老矣。既無哈莎之通涉。特喜譯哈莎之書。擊友仁和。魏君春叔。年少英博。淹通西文。長沙張尙書。既領譯事於京師。余與魏君適厠譯席。魏君口述。余則叙致爲文章。計二年以來。予二人所分譯者。得三四種。拿破崙本紀爲最鉅本。秋初可以畢業。突夜中餘閒。魏君偶舉莎士比筆記一二則。余就燈起草。積二十日書成。其文均莎詩之記事也。嗟夫。英人固以新爲政者也。而不廢莎氏之詩。余今譯莎詩紀事。或不爲吾國新學家之所屏乎。莎詩紀事。傳本至夥。互校頗有同異。且有去取。此本所收僅二十則。余一一製爲新名。以標其目。

光緒三十年五月閩縣林紘序

歐人之傾我國也。必曰識見局。思想舊。泥古駭今。好言神怪。因之日就論。弱漸即頹運。而吾國少年強濟之士。遂一力求新。醜詆其故。老放棄其前。載惟新之從。余謂從之誠是也。願必謂西人之夙行夙言。悉新於中國者。則亦譽人增其義。毀人益其惡。耳。英文家之哈葛得。詩家之莎士比。非文明大國英特之士耶。願吾嘗譯哈氏之書。矣。禁蛇役鬼。累累而見。莎氏之詩。直抗吾國之杜甫。乃立義遣詞。往往託象於神怪。西人而果文明。則宜焚棄禁絕。不令滯世知識。然證以吾之所聞。彼中名輩。就莎氏之詩者。家絃戶誦。而又不已。則付之梨園。用爲院本。士女聯轡。而聽歡。歡感涕。竟無一斥爲思想之舊。而怒其好言神怪者。又何以故。夫彝鼎罇彝。古綠瑗。且復累重。此至不適於用者也。而名閩望。母吝千金。必欲得而陳之。亦以羅綺芻豢。生事所宜有者。已備足而無所願。於是追躡古踪。用以自

『吟邊燕語』林序

譚』の訳者と同じく、シェイクスピアの生涯と、創作について本当に理解しているわけでは決してない」（同上）と記述しているところからも明らかだ。林訳に先行する『海外奇譚』の訳者とあわせて林紘を罵倒している。

これを読んで、私はおかしな説明だと思う。

謝天振らの記述をつきつめれば、シェイクスピア戯曲よりも前にラムが存在していることになる。ラム『シェイクスピア物語』にもとづいてシェイクスピアが劇化したと林紘は誤解していた。謝らは、そう主張するのだ。

よく見てほしい。書名からして変な関係になるではないか。シェイクスピアが、自分の名前を冠した書物にもとづいて戯曲化した。まさか。普通に考えてありえない。中国の知識人林紘が、そのように誤解するだろうか。なにか別に根拠がなければ、謝らの説明にはならないはずだ（伏線1）。

謝天振らがそう主張するひとつの根拠は、『吟邊燕語』につけられた林序である。

関係部分を検討する*4。

林序は、ふたつの部分にわかれる。前半は、シェイクスピア戯曲について説明し、後半はラム『シェイクスピア物語』について記述する。ご注意いただきたい。この簡単な事実に気づかない研究者がいるとすれば、その人はまじめに林序を読んでいないことになる。末尾に「光緒三十年五月閩県林紘序」とある。

林序の冒頭は、こうだ。

西洋人が中国を軽んじて、思想が古く神仙妖怪のことを好んで話すから日増しに頹廢に向かったという。しかし、「イギリスの文学家〔文家〕ハガード、「詩家」シェイクスピアは、文明大国の傑出した人物ではないのか」。そのふたりは、迷信行為、神仙妖怪に多く言及している。それにもかかわらず、彼らの作品は好まれており、誰も思想が古いなどとはいわない、という話の運びになる。

原文「詩家」は、今はカッコをつけて原文のままにしておく。ここが理解の分かれ目だからだ。字面を見てそのまま「詩人」と考える人がいても不思議ではない。不思議ではないどころか、ほとんどの研究者がそうである。私が先走って説明すると、この「詩」を今の詩だと考えると間違う。

問題は、つぎの箇所だ。

名望のある年輩者のなかでシェイクスピアの「詩」をとくに好む者は、どこの家でもだれもが朗誦し、しかもそれで終わらず劇場にかけて用いて脚本とした〔彼中名輩。耽莎氏之詩者。家絃戸誦。而又不已。則付之梨園。用為院本〕。

原文の「莎氏之詩」はそのままに「シェイクスピアの詩」と訳しておいた。

これと前部分の「詩家」とあわせ考えると、シェイクスピアの詩がのちに戯曲となったように読める。ゆえに、劉半農の判断になる。つまり、林紘は「詩」と「戯曲〔戲〕」を識別していない、と。劉半農は、その「詩」を書いてあるままの詩だと考えた。なんの疑問も感じなかったのだ。それが現在にまで影響をおよぼしている。林紘はシェイクスピア劇の制作過程についてなにも知らない。謝天振らは、そう判断した。

だが、「莎氏之詩」は「シェイクスピアの戯曲」が本来の意味だ。私は、その解釈しかないと考えている（後述）。上の部分は、シェイクスピア戯曲が家庭から劇場に普及したように書いているだけだ。

ラムはその序において、シェイクスピア戯曲がどのようにできたのかを説明していない。その成立について林紘に解説した人は、共訳者の魏易であった可能性が高い。シェイクスピア劇は、昔のイギリスにおいてなによりも芝居として歓迎された。わざわざいうまでもない。脚本が印刷物になるのは、かなり後のことだ。ゆえに、上に見るように家庭から劇場というのはシェイクスピア戯曲そのものではなく「院本」に形をかえて伝播したことを述べているだけ。

私は次のように考える。上に引用した原文「詩家」には、日本語に翻訳するとすれば「戯曲家」を当てなければならぬ。無韻詩によって戯曲が書かれているのだからそうだ。つまり、ここでいう「詩」が示しているのは、戯曲にほかならない。それが別のかたちになって当時の観客から歓迎されていたことをいっているにすぎない。

だいいち、林序のこの部分はラムの小説化本とは無関係である。シェイクスピア戯曲について述べているだけだ。それを謝天振らはむりやりラムと関連づけて制作の順序が逆だと批判する。そのようなことは、ここには書かれていない。にもかかわらず関係するように受け取ったのには、もとづいた別の何かがあるはずだ（伏線2）。

つづけて林紘は、共訳者の魏易に言及する。翻訳過程を説明したとして広く知られている箇所だ。ここに登場するのがラム『シェイクスピア物語』である。林序の後半になる。

京師大学堂（のちの北京大学）において林と魏のふたりは知りあった。共同作業がはじまる。魏が口述翻訳し、林が筆記する。2年で3、4種ができた。『拿破侖^{ナポレオン}破命本紀』が最も巨冊でこの秋には終りそうだ。

夜のあいた時に、魏君が『シェイクスピア物語』のひとつふたつを差し出した。私は灯火に身をよせ書きはじめ、20日にして書が成った。それらはすべてシェイクスピア戯曲の物語（『シェイクスピア物語』）である〔夜中餘

閑。魏君偶拳莎士比筆記一二則。余就灯起草。積二十日書成。其文均莎詩之記事也]。

林訳について、意図して誤解するものがいくつかある。そのひとつは、林紘らがまるで偶然のように作品を選んで漢訳したと受け取る人がいる。上記引用部分が、その根拠になったと推測される。

鄭振鐸は「林琴南先生」（『小説月報』第15巻第11号1924.11.10）において次のように書く。「彼らはただ随意に、1冊の本をとりあげてちょっと読み「この本は内容がよい」と感じるとすぐさま口述翻訳をして林氏に聞かせ、林氏はそのまま筆記したということにすぎない」

鄭振鐸は、『吟辺燕語』林序に出てくるわずかな部分にもとづき、それを拡大解釈して林訳全体の評価をおとしめるのに利用した。

林序文中の「莎士比筆記」「莎詩之記事」を見てほしい。前者は『シェイクスピア物語』だ。後者の「莎詩」はシェイクスピアの戯曲であり、その「記事」は物語を意味する。表記は異なるが、こちらも『シェイクスピア物語』なのである。20作品を20日で漢訳したのであれば、1日1作品という勘定になる。翻訳する速度は、相当にはやいということができよう。20作品という数も『シェイクスピア物語』そのものだ。ラムの小説化本である。

ところが、林紘は上につづけてこう述べる。

ああ、イギリス人はもとより新しいものを政策にするが、しかしシェイクスピアの戯曲を捨ててはいない。私が今『シェイクスピア物語』を翻訳するのは、わが国の新学家も排斥しないだろう[嗟夫。英人固以新為政者也。而不廢莎氏之詩。余今訳莎詩紀事。或不為吾国新学家之所屏乎]。

林紘は、シェイクスピアの戯曲といいながら『シェイクスピア物語』を翻訳すると書いた。ここが誤解を生むもうひとつの原因である。

研究の権威である阿英は、この部分をつかまえた。ここを根拠にして阿英はどう説明したか。

5 阿英の林紘批判 もうひとつの冤罪事件

阿英「翻訳史話」第4回（『小説四談』上海古籍出版社1981.12。該文の執筆は「1938年」）である。

林紘が20日で訳し終えたことを訳筆旺盛だと阿英は称賛する。それは、よい。問題となる阿英の文章はその次だ。

しかし原本が『シェイクスピア物語』だと誤解し、これは達文本が「絶世の名優」としたのに匹敵する。だが、この責任は魏易にあり、林氏はもとより知ることはできなかった〔但誤原本為《沙氏筆記》，与達文本之《絶世名優》，可為匹対，不過，此責任在魏易，林氏初不能知也〕。244頁

うしろ部分の「達文本が「絶世の名優」とした」とは、ラム版最初の漢訳『瀕外奇譚』の「叙例」に説明して「絶世名優」とあることを指す。阿英は、名優について誤りだと思いこんでいる。しかし、シェイクスピアが俳優を兼ねた座付き作家であったことは事実だ。阿英がそれを知らなかつただけのこと。『瀕外奇譚』の記者は、誤解もしていないし誤記もしてはいない。批判する阿英の方に知識がなかつた。

私が注目するのは、その前の部分だ。原文の漢字にしてわずかに8文字。だが、文字数に関係なく、これこそが重要である。のちの研究者に大きな影響をあたえることになるからだ。

阿英がいうには、林紘は「原本が『シェイクスピア物語』だと誤解し〔誤原本為《沙氏筆記》〕」ていた。これはどういう意味か。

「誤解し」だから、林紘は間違っ理解していたことになる。林紘は、なにをどう誤解したのか。

林紘は、シェイクスピアの戯曲がラムの『シェイクスピア物語〔沙氏筆記〕』だと誤解していた。

阿英がそう判断する根拠は、まさに林序の上記部分にある。シェイクスピア戯

曲だといいいながら『シェイクスピア物語』を翻訳する、というあの箇所だ。

阿英説に従い、私が補足説明すれば、林紘はシェイクスピア戯曲そのものを知らない、ということになる。シェイクスピア戯曲を知らないとは、林紘は戯曲そのものを読んだことがない、といっているのと同じことだ。周知のとおり林紘は外国語ができなかった。ここの「読んだことがない」とは、共訳者がシェイクスピア戯曲を口述翻訳したのを聞いたことがないという意味である。

林紘は「原本が『シェイクスピア物語』だと誤解し」ていた。阿英がそう考えるにいたった背景には、どのような評論の流れがあるのか。もういちど思い出してほしい。

劉半農が錢玄同と一緒に口火を切り、鄭振鐸がそれを発展させ、林紘は戯曲を小説体になおして翻訳した、と批判した。林紘は戯曲と小説の「区別がつかない」という論を提出し定着させた人物は、劉半農と鄭振鐸のふたりなのである。

阿英は、劉鄭の林訳批判を受け入れた。これがひとつ。もうひとつは、林序にシェイクスピアはあってもラム姉弟の名前がない。林紘が説明をしていないことが理由になる。

阿英の考えによると、ラム『シェイクスピア物語』そのものがシェイクスピアの作品だと林紘は誤解していた。こうなると、阿英は劉半農、鄭振鐸よりも林紘を痛罵してその程度をさらに強めている。

謝天振らは、阿英が述べるこの漢字8文字にとびついた。

彼らが根拠としたのは、阿英によるこの指摘にほかならない。しかし、そのままを取り入れず、ラム作品からシェイクスピアが戯曲化したと補足したつもりだ。それではかえって説得力のない説明になってしまった。だからこそ、林紘は何も知らないという罵りを強調することにつながる。

そう考えるのは、謝天振らだけではない。

韓洪拳もその著書『林訳小説研究 兼論林紘自撰小説と伝奇』（北京・中国社会科学出版社2005.7。125頁）において次のように書いている。「ラム姉弟がシェイクスピア戯曲にもとづいて書き換えた散文物語（Tales from Shakespear^{ママ}）をシェイクスピアの作品だと誤解していた」

「ママ」とつけたが、ラム版初版本にはそういう綴りが使っているので誤りで

はない。だが、林紘が誤解をしていたという箇所は、阿英の記述をそのまま受け入れてくり返しているだけ。この最近の専門書でも阿英の説明が正しいと認めている。すなわち、林紘はシェイクスピア戯曲について無知である、という。韓洪拳も阿英説を支持し、結局のところ「区別がつかない論」を承認して林紘を批判しているのだ。

これほど長年にわたって林紘非難が継承されている。その根が深い。

はたして、林紘はシェイクスピア戯曲それ自体を知らなかったのか。林紘らは、シェイクスピア戯曲そのものを見たことがあるのかないのか。これが問題の焦点である。

その答えは簡単だ。

林紘らは、シェイクスピア戯曲を読んでいた。林紘についていえば、共訳者が翻訳するのを聞いていたという意味だ。

林紘らが漢訳した「十二夜〔婚詭〕」を見れば、シェイクスピアの原作を知らなければ書けない部分が存在している（別稿参照）。林訳「ジュリアス・シーザー〔凱徹遺事〕」でいえば、全体の3分の2はシェイクスピア戯曲そのままである（別稿参照）。

阿英の指摘は間違っている。彼も林紘に濡れ衣を着せたから、これは阿英がつくりだしたもうひとつの冤罪事件である。これも私のいう「阿英問題」のひとつになる。

林紘は、戯曲と小説が別物であることを認識しながら、シェイクスピアという名前で一括りにしたにすぎない。これについてももう少し説明を続ける。

6 戯曲と小説

すでに触れた林序の前部分に「莎氏之詩」とある。これは、シェイクスピアの戯曲を意味している。

上に見た朱東潤の文章では「莎氏楽府本事」と表示される。これは林紘の表記でいうと「莎詩紀事」に該当する。いうまでもなく「莎」は「莎氏」に、「詩」は「楽府」に、「紀事」は「本事」にそれぞれ対応している。

『吟辺燕語』の林序にでてくる関連語句を列挙し、日本語訳をつけておく。原文の「詩」は戯曲に置き換えるのが正しい。

詩家之莎士比	戯曲家のシェイクスピア
莎氏之詩	シェイクスピアの戯曲
莎士比筆記	『シェイクスピア物語』
莎詩之記事	シェイクスピア戯曲の物語、すなわち『シェイクスピア物語』
莎詩紀事	シェイクスピア戯曲物語、すなわち『シェイクスピア物語』

これを見れば、林紘は、シェイクスピアの戯曲とラム『シェイクスピア物語』を厳密に分けていることがわかる。かりに、シェイクスピア戯曲について林紘が無知であるとすれば、このように書き分ける必然性がない。

「原本が『シェイクスピア物語』だと誤解し[誤原本為《沙氏筆記》]」と阿英が断定した根拠をもういちど思いだしてほしい。林紘はシェイクスピア戯曲と並べて『シェイクスピア物語』を置いた。両者の関係について書いていない。これにつきる。説明していないから、林紘が誤解しているという阿英の判定になった。だが、説明していないことは、知らないことを意味するわけではないのだ。

林序と同じ表現が、林紘より前に登場していることを指摘したい。

さきにあげた『瀕外奇譚』である。『吟辺燕語』よりも1年早く刊行されていることは述べた。

その「叙例」*5冒頭で、該書の著者はシェイクスピアだと書く。しかも、以下のように説明する。関係部分のみを引用する。

しかし、わが国の最近の学界では、『シェイクスピア物語』[詩詞小説]についていう人はいつもシェイクスピア氏を称賛するのだが、その書はこれまで読むことができなかった。私はそれをひそかに残念に思っていた。そこで本書をただちに翻訳し、小説界に異彩を添えようと思う[而吾国近今学界，言詩詞小説者，亦輒嘖嘖称索氏，然其書向未得読，僕竊恨之，因亟訳述是編，冀為小説界上増一異彩]。317頁

『澥外奇譚』を漢訳した氏名不詳の人物は、翻訳して小説界に投じるというのだ。すなわち、翻訳したのはラム姉弟の『シェイクスピア物語』である。

上の部分だけを読むと、その訳者には戯曲と小説の区別がついていない印象を受ける可能性がある。

原因のひとつは、原文の「詩詞小説」だ。現代の研究者は、これを見ると「詩詞」と「小説」にわけず、使用されている語句の意味を詮索しない。だから、シェイクスピアが小説を書いたと受け取る。シェイクスピアが小説を書いた事実はない。ゆえに、そのように説明する訳者が間違っている、知識がない、となる。もうひとつは、翻訳が小説体だから、シェイクスピアとラムの区別がついていないという。

そのように説明する研究者があとをたたない。

だが、『澥外奇譚』の訳者がつづけて書いているところに注目してほしい。

本書は、もとは戯曲体であり、イギリスの学者ラムが散文になおし題名を『シェイクスピア物語』という。ここに最もよいもの10章を選び翻訳して以下の題名にする〔是書原系詩体，経英儒蘭ト行以散文，定名曰《Tales From Shakespeare》^{マ マ}，茲選訳其最佳者十章，命以今名〕。317頁

シェイクスピア戯曲からラムの『シェイクスピア物語』が作成されたと明解に説明している。佚名訳者は混同してはいない。シェイクスピア戯曲を話題にしたあとにつづけて、関連あるものとして「（シェイクスピア戯曲にもとづいた）本書（シェイクスピア物語）を翻訳し」となったのである。

かの訳者は、事情を知ったうえでシェイクスピア戯曲に言及し『シェイクスピア物語』を掲げた。両者が別物であることをわかっている。ただ、シェイクスピアの名前でくくっただけ。

林紘も同じことだ。ラムの小説化本ができた経緯を理解したうえで、その説明をしなかったにすぎない。

林紘が『澥外奇譚』を読んでいたかどうかは不明だ。その箇所の説明について

偶然の一致なのかどうか、判断できる資料を私は持たない。

シェイクスピア戯曲とラム『シェイクスピア物語』を一括りにした例をもうひとつあげよう。紅樓夢評論、戯曲史研究でも有名な王国維だ。

王国維「シェイクスピア伝〔莎士比伝〕」（『教育世界』第159号1907.10初出未見。姚淦銘、王燕編『王国維文集』第3巻 北京・中国文史出版社1997.5。392-397頁）である。

王国維の該文は、林紘らの『吟辺燕語』より公表された年は遅い。だが、1907年というかなり早い時期の研究論文だ。林紘とほとんど同時期だといってよい。しかも、比較的詳しい伝記である。王国維が書いたシェイクスピア伝に私は注目する。

興味深い一覧表がある。「劇詩」すなわち戯曲のことだが、その題名を掲げて喜劇、史劇、悲劇などと注記したものだ。

1例をあげよう。

「“The Comedy of Errors.” 閩県林紘訳作《學誤》一五九一年」と表示する（カッコをあてがったのは文集編集者だろう）。

この一覧表には、同じくシェイクスピア作品の英文原題に添えて『吟辺燕語』に収録してある20作品をすべて掲げる。

解説して「この表のなかの『鬼詔』『黒瞽』『蠱徴』『女変』など4篇は、通例「4大悲劇」と称せられる」（397頁）と書く。シェイクスピア戯曲を説明するために、林訳ラムの題名を利用するのだ。しかも、この4篇だけではこの「大詩人」の蘊奥を窺うのは不足する、という。劇作家ということばのなかった時代のイギリスでは、シェイクスピアを詩人と呼んでいた事実をふまえている。

戯曲についてよく理解している王国維が、小説化本のラム、それも林訳を併用してシェイクスピア名で一括りにしている。

本来ならば、中国の研究者は、王国維も戯曲と小説の区別をつけていないと批判しなければならないところだ。

だが、林紘は批判するが、林と同じことをした王国維は批判しない。これを普通は評価の二重基準という。つまり、中国の学界において林紘批判は公認となっている。林紘については、どのように罵ろうが許されるのだ。

当時の中国では、戯曲と小説を区別しないことがあった。たとえば、「伝奇小

説」と角書があって実態は戯曲という例を多く見ることができる*6。

林紘を批判した鄭振鐸自身が、当時、小説と戯曲が区別されていなかった事実があることを書いている。

彼の前出論文「林琴南先生」にこうある。

中国の旧文人は小説と戯曲の区別をつけることができず、たとえば『小説考証』という本は、小説といいながら無数の伝奇をそのなかに含ませている。

上記は、蔣瑞藻『小説考証』（上海・商務印書館1919.9 / 1935.5国難後第1版）についていっている。

当時の一部では、小説と戯曲を区別しなかった。しかし、それは林紘とは関係がない。鄭振鐸は、それをよく理解していた。だが、彼がここでも巧妙なのは、その事実を本来は関係のない林紘に適用したことだ。林訳否定の根拠に利用した。鄭は、林紘を含めた昔からの文人に、いかにも知識がなかったように説明した。新しい感覚を基準にすえて古い認識を切って捨てた。これこそが文学革命派の思考方法である。

以上の例を見れば、シェイクスピアとラムをめぐる林紘の把握のしかたはあきらかだ。

林紘は、シェイクスピア戯曲と『シェイクスピア物語』の違いを認識したうえで、後者を翻訳の底本に選択した。当時の中国人読者にはその方が理解しやすい、適切だという判断が働いたものだろう。劉半農、胡適、鄭振鐸がというような、林紘は無知愚昧だから戯曲と小説の区別をつけることができなかった、というわけでは決してないのである。

7 「区別がつかない論」は成立するか

そもそも、林紘は「戯曲と小説の区別をつけることができなかった」とは、何を説明しているのだろうか。あるいは、戯曲とは異なる小説を並べて、林紘は両者の区別がつかなかった、となぜいうことができるのか。

劉半農がいいはじめ、胡適が修正し、鄭振鐸が決定づけた「区別がつかない論」を簡単に検討しておく。

劉胡鄭の三人が行なったこの有名な断定について、いままで異議を提出した人がいるとは聞いたことがない。それが定説であるからだ。定説だから、内容の検討は行なわれない、という循環論だ。林紘は「戯曲と小説の区別をつけることができなかつた」と書けば、それがそのまま無条件で林紘批判になる。

再度いう。「区別がつかない」とは何を言っているのか。

林紘は無知だから戯曲と小説の区別がつかなかつた。いかにもありそうな話だ。古くからの文人で、外国語を理解せず、外国文学についての知識もない。そういう人物が口述翻訳を筆記している。翻訳の内容はデタラメに決まっている。シェイクスピアの戯曲、イプセンの戯曲を小説体にかえて翻訳した。呈示されるのは、いつもこういう思考の流れなのだ。

だからこそ、研究者は「区別がつかない」と書いて林紘を批判し、それで説明したつもりだ。より詳しく解説する人は誰もいない。

林紘批判の理由にされているのはわかる。だが考えれば、その内容はあやふやで、はっきりしない。検討する必要がある。

最初に登場した劉半農は、林紘を批判してこう書いた（前出「文学革命之反響」。傍線省略。以下同じ）。

『吟辺燕語』は本来はイギリスの戯曲だが、林氏は「詩」と「戯」のふたつについて、明確には識別していない[吟辺燕語本来是部英国的戲考，林先生於『詩』『戯』兩項，尚未辨明]。

劉半農は、林序にでてくる「詩」をそのままの詩だと理解した。まったく疑問を感じていない。「詩」と「戯」を対比しているところからそうとわかる。

だが、ここの「詩」は、上述のように戯曲を意味する。劉の説明をあらためて日本語に翻訳すれば、林紘は「戯曲[詩]」と「戯曲[戯]」の区別がつかない、ということになる。これでは論理が成立しない。劉半農は、林序を読んだが内容を理解していないのである。理解せずに林紘を批判した（つもりだ）。私にいわ

せれば、批判になっていない。

だからこそ、胡適はただちに「戯曲」と「記叙体」すなわち散文（小説）に修正した。

一方の鄭振鐸は、どうか。

鄭振鐸は、林紘を痛罵してつぎのように書く。あまりにも有名な記述だ。のちの研究者の多くは、鄭論文のこの部分にもとづいて林紘批判をくり返すのである。前出「林琴南先生」から、すこし長いが引用して翻訳する。

またもうひとつ、たぶん林氏は彼の口述翻訳者によって誤らされたのだろう。小説と脚本〔戯劇〕は、性質はもとよりまったく異なっている。しかし、林氏は、多くのとてもすばらしい脚本〔劇本〕を小説に翻訳してしまった。多くの叙述を加え、多くの対話を削除し、原本とはまったく違う本に変えてしまったのだ。たとえばシェイクスピアの脚本『ヘンリー4世〔亨利第四^四〕』、『リチャード2世〔雷差得紀〕』、『ヘンリー6世〔亨利第六^六〕』、『ジュリアス・シーザー〔凱徹遺事〕』およびイプセンの『幽霊〔群鬼（梅孽）〕』などすべて彼により翻訳されて別の本に変えられてしまった。原文の美しさと風格、および重要な対話は完全に消滅してしまった。これはまったくチャールズ・ラムが『シェイクスピア物語』で行なったことをまねしたもので、なぜ「原著者シェイクスピア」「原著者イプセン」と書かねばならないのか。林氏はたぶん小説と戯曲の区別がそれほどわかっていなかったのだろう〔這簡直是步武却爾斯、蘭在做莎氏樂府本事又何必写上『原著者莎士比亞』及『原著者易卜生』呢？林先生大約是不大明白小説与戯曲的分別的〕。

漢語原文の「分別」は、日本語で「区別」と訳しておいた。「違い」と置き換えても同じだ。林紘は、「小説と戯曲の違いがそれほどわかっていなかった」。

鄭振鐸は、この文章を自分で書きながら内容を理解していたのであろうか。自分ではわかっていると考えているから発表したに違いない。鄭は、後に該文を自らの論文集に収録したが、この部分は書き換えてはいない（私がわざわざこう書くのは、初出のある部分を鄭は後に削除しているからだ）。変更の必要はないという鄭

の判断だろう。しかし、どう考えても奇妙な論理である。

林紘は戯曲を小説に書き換えた。クイラー＝クーチ、デルの原本を知らなかった鄭振鐸だからそう断定した。

チャールズ・ラムを出してきた。ラムはなにをしたか。シェイクスピア戯曲を小説に書き換えた。それも事実だからかまわない。そこで筆を止めておけばよかった。しかし、それだけでは林紘批判としては弱い、と鄭振鐸は考えたらしい。問題は、つぎだ。

鄭振鐸は、そこから飛躍して、林紘には戯曲と小説の区別がついていない、と罵った。劉半農がいはじめた「区別がつかない論」を、鄭振鐸は忠実に継承した。この部分が、まさに鄭振鐸の立論を破壊したのだ。自分で行なったから、これは自滅である。

よく考えてほしい。戯曲を小説に書き換えた林紘に、戯曲と小説の区別がついていないのであれば、ここで名前を出しているラムも同様ではないか。ラムも戯曲と小説の区別をつけることができなかった。鄭振鐸は、そう言明しているのとかわらない。

よりによって、シェイクスピア戯曲について詳しいラムをつかまえて、戯曲と小説の区別がついていない、と鄭振鐸はよくもいったものだ。ラム姉弟は、区別がついているから戯曲を小説に書き換えたのだ。

不思議な鄭の説明になる。鄭振鐸が、そんなことは書いていないと主張しようが、彼の文章を読めば、文脈からしてそうならざるをえない。だから、私は、鄭は自分で書いてその内容を理解しているのかと疑問を提出した。

林紘を罵ることはラムを批判することになる、となぜ鄭振鐸は気づかなかったのか。また、のちの研究者は、なぜそうなることを考えなかったのか。

これが奇妙でなくてなんであろう。この部分について、論理を組み立てる能力はあるのか、と疑われてもしかたがない。

クイラー＝クーチ、デルの原作が存在していることは、鄭振鐸の林紘批判が根本的に間違っていることを証明した。しかし、「区別がつかない論」は、それ自体が論理として最初から破綻している。

以上をまとめるとこうなる。

林紘の死後、鄭振鐸は論文「林琴南先生」を發表して林紘批判を決定づけた。林訳シェイクスピアに関して、林紘は戯曲と小説の「区別がつかない」、と鄭は書き添えた。勝者の驕りからだろう、林紘を批判するためにより強い言辞を文章にどうしても盛り込みたかった。先行する劉半農の断言を承認して継承したのだ。まことに不用意であった。先にラムの名前があげてある。両者が出そろったその瞬間に、「区別がつかない論」そのものが最初から論理破綻していることに光が当たった。

いってみれば、林紘を標的にして引き絞った矢は、放たれるやラムのところで反転し劉半農胡適鄭振鐸自身を襲うことになったのである。知らないのは劉胡鄭らご本人ばかりだ。

いや、のちの研究者も同様だといわなくてはならない。

研究者は、「区別がつかない論」を疑うことなく受け入れ支持し引用し振りかざして林紘を罵ったつもりだ。だが、「区別がつかない論」を使って林紘を罵倒すると、批判の矢は林を素通りして劉半農、胡適、鄭振鐸らを射て確実につらぬく。それと同時に、引用した人が致命傷を受ける。「区別がつかない論」が成立しないことを、引用した本人が理解していない。みずからの無知をさらけ出す結果になるからだ。研究者にとっては自殺行為なのである。林紘を批判しているつもりの人たちには、その自覚がまったく、ない。

中国現代文学研究の学界では、80年をこえてこういう状況が続いているのだ。まるで悪い冗談ではないか。これほどの皮肉を私は見たことがない。

劉半農と鄭振鐸が提出したこの論理とも呼べないものを、どうして研究者たちは容認したのだろうか。定説だからだというよりほかになさそうだ。現在もそう主張して林紘を罵る研究者がいる*7。私にはその方が珍妙に思われる。

林紘批判は決まった方針だ。なにをどう言っても許される。ゆえに、攻撃する側の論理には整合性を必要としなかった。そうとしか考えられない。

8 複数の版本

ふたたび、林序にもどる。

林紘らが『シェイクスピア物語』については複数の版本を手元においていたところに目を向けていただきたい。

林紘と魏易は、『拿破侖本紀』の翻訳に従事し、時には夜にまで至ったものか。一休みしている時、このようなものがあります、と魏易が差し出したのがラム姉弟の『シェイクスピア物語』だった。

林紘の説明を読んで、もしかりに以上のような情景が目には浮かぶとすれば、それは彼の筆のうまさだろう。あるいは、誰もが引用言及するその部分だけしか読まないからだ。

林紘らは、ラム版『シェイクスピア物語』1本のみを偶然に翻訳したわけではない。準備をしたうえで実行している。次を見てもらえばわかる。

林序の末尾はこうだ。

『シェイクスピア物語』は、伝本がきわめて多い。比較すると異同がはなはだ多く、取捨選択している。この本は20作を収録しているだけだ。私はそれらに新しい名をつけて題目とする〔莎詩紀事。伝本至夥。互校頗有同異。且有去取。此本所収僅二十則。余一一製為新名。以標其目〕。

理解するための手がかりがここにある。

「莎詩紀事」と明示してあるところを見てほしい。なんともいうように「莎詩」はシェイクスピア戯曲だし、「紀事」とはそれをもとにした物語だ。『シェイクスピア物語』そのものを指す。これについて「伝本がきわめて多い」と説明している。

林紘らはラム版だけをたまたま1冊入手し、適当に翻訳したのではない。林紘は「序」においていかにも偶然に訳しはじめたように書いているが、これはことばのアヤである。

見てほしいのは、伝本が多く異同もある、と説明しているこの箇所なのだ。林紘らは、ラム版を含んだ小説化本複数を手元においてそれらと比較していることがわかる。

林紘は、1903年より京師大学堂訳書局において働いている。林訳の原本は、

その蔵書なのか。購入していたとすれば、それは林紘よりも共訳者と考えたほうがいいか。外国の書籍は、北京のどの書店から購入できたのか。それとも上海の書店からか。林は、別のところで魏易が「ディケンズ全集」を購入していると書いてはいる。だが、林訳の底本になったラム版の入手経路については、まだ誰も追究していないようだ。中国の学界では林紘を批判するのに忙しい。論じることにかまけて、地道な研究には力がはいらないと見える。

林紘のいう「伝本がきわめて多い」というその伝本は、どういう書籍だったのか。私は調べる価値のある問題だと思うのだが、それすら明らかにはされていない。すでに100年が経過している。林紘の蔵書がどうなったのかを説明した文章を私は知らない。今にいたるまで罵り続けているのだから、跡形もないのだろう。それとも福建の林紘故居には保存されているのだろうか。あるとも聞かないが。

『張元濟全集』第1-3巻書信（北京・商務印書館2007.9）が刊行された。上海・商務印書館は、林訳小説をあれだけ多数刊行したにもかかわらず、林紘の書簡は1通も収録していない。問い合わせてみれば、事実として1通も存在していないという。意図的に隠滅しなければありえない事であろう。関連して触れたのは、林紘関係資料、特に翻訳の底本はまったく保存されていないらしいことをいいたいからだ。私の誤りであればいいと思う。

そもそも、『シェイクスピア物語』を作ったのはラム姉弟しかいなかったわけではない。林紘たちが漢訳の底本にした可能性を持つ英文小説化本をさがした経験が私にはある。1904年以前という時間を限定しただけで、ラム版のほかによくはた書名で10種前後の版本が刊行されていることを別稿で報告した。ラムではない別人が、シェイクスピア戯曲の小説化にそれだけ情熱を傾けている。私が短期間に収集してその数にのぼる。

林紘は、のちに陳家麟と共同でシェイクスピア歴史劇を漢訳する。その時の底本はクイラー＝クーチの『シェイクスピア歴史物語 HISTORICAL TALES FROM SHAKESPEARE』である。林序に見える「伝本がきわめて多い」という中に、クイラー＝クーチ版は含まれていたのかどうか。共訳者が異なることを考えれば別かもしれない。詳細は不明だ。

研究者は、上に示した林序の重要部分をなぜ無視するのか。

よく読んでほしい。林紘らは、漢訳に際して複数の版本を集めて十分に準備をしている。ラム版がシェイクスピア戯曲そのものとは異なることを、当然、理解している。また、彼らはシェイクスピア戯曲も手元において漢訳に利用していた。

9 結 論

以上をまとめる。

『吟辺燕語』林序を読めば、彼はシェイクスピア戯曲とラム『シェイクスピア物語』を並置するだけで両者の関係を説明していないことがわかる。しかも、ラムの名前をだしていない。

そこからふたつの解釈が生まれる可能性がでてくる。

ひとつはこうだ。

説明がないから、林紘は戯曲を勝手に小説にかえて翻訳した、と判断した。

「区別がつかない論」をかざして最初に批判したのは、劉半農である。

しかし、劉半農自身がラムの存在を知らなかった。あるいは知らないふりをした。その延長線上に鄭振鐸がいる。彼のばあいはシェイクスピア歴史劇に小説化本があるとは知らなかった。彼らの林紘批判は間違っていたのだ。

鄭振鐸は、「戯曲と小説の区別がつかない」と書いて林紘を罵倒した。劉半農のいう「区別がつかない論」そのものが破綻していることに気づいていない。

そもそも林序にでてくる「詩」が戯曲を意味していることを彼らは知らない。林紘が戯曲と小説を区別していた事実など、劉胡鄭にはどうでもよかったのだ。はじめから林紘批判を決定していた。

この事実を知れば、従来からの解釈、すなわち林紘無知説、「区別がつかない論」に賛成できるはずがない。

もうひとつの解釈は、こうだ。

シェイクスピア戯曲は、あくまでもシェイクスピアの作品である。それをもとにして小説化した『シェイクスピア物語』は、ラムの作品であるのはいうまでもない。林紘は、そう正しく認識している。林にしてみれば、シェイクスピア戯曲をラムが小説化したことは明らかだ。ただ、知ってはいたが説明しなかった。

私は、こちらの見方を提出する。

「シェイクスピア著、ラム改作、林紘 + 魏易共訳」と表示すれば問題はなかったかもしれない。ただ、「ラム改作」を省略した。クイラー＝クーチ（またはデル）の原作を漢訳した時も同様である。

もともとシェイクスピア作品なのだからシェイクスピアといえば十分だ。シェイクスピア戯曲を知っていた林紘はそう考えた。

シェイクスピアという名称でくくったから表面上は両者の区別がついていないように見える。しかし、そう見えるだけのこと。林紘以外では『澗外奇譚』の訳者も、王国維も理解したうえで同じことをしている。

劉半農と鄭振鐸のふたりは、林紘がシェイクスピア戯曲から直接小説化したと考えた。林紘はシェイクスピア戯曲を知っていたことになる。林紘は戯曲の存在を知っていて、戯曲と小説の区別がつかない、と劉鄭は説明する。論理が矛盾しておりもともと成立しない。

劉胡鄭の林紘批判を受け継いだ阿英は、彼らよりも非難の度合いを強めた。阿英は、林紘がシェイクスピア戯曲そのものを知らないと断定したのだ。ところが、林訳には、シェイクスピア戯曲から直接取り入れた部分がある。その事実が、阿英の下した断定を否定する。

今も「区別がつかない論」、阿英説をくりかえす研究者が絶えない。いずれもが成立しない論理に目をつむったままであるのが私には不思議に思われる。

林紘を非難する根拠は、ないのだ。にもかかわらず有無をいわず痛罵する。私にいわせれば「林紘を罵る快樂」である。

林紘批判があらかじめ設定されている。ゆえに、阿英は、林序に書かれた文章の字面だけを見て欠点だと思われる部分を探す。林紘がシェイクスピア戯曲と『シェイクスピア物語』の関係を説明していないところのみをつかまえる。その結果、もとの戯曲そのものを知らない、という誤った断定に短絡した。

阿英の引き起こしたもうひとつの林紘冤罪事件が存在するのは、以上の事情による。

【注】

- 1) 顧燮光「小説経眼録」原載『訳書経眼録』1927 / 『晚清文学叢鈔』小説戯曲研究巻。539頁 / 顧燮光『訳書経眼録』杭州・金佳石好楼 甲戌(1934)夏五月。王韜、顧燮光等編『近代訳書目』北京図書館出版社2003.10影印本所収。614頁。「吟辺燕語一卷 商務印書館洋装本 / 英莎士比著, 林紘、魏易同訳。書凡二十則, 記泰西曩時各佚事, 如吾華《聊齋志異》《閱微草堂》之類。作者莎士, 為英之大詩家, 故多瑰奇陸麗之譚。訳筆復雅馴雋暢, 遂覺豁人心目。然則此書殆海外《搜神》, 歐西述異之作也夫」。また、熊月之主編『晚清新学書目提要』(上海世紀出版股份有限公司、上海書店出版社2007.12) に収録されている。
- 2) 吳宓著、吳学昭整理注釈『吳宓日記』第1冊(1910-1915) 北京・生活・読書・新知三聯書店1998.3。123頁
3) 朱東潤「自伝」『中国当代社会科学家』第1輯 北京・書目文献出版社1982.5
- 4) 以下を参照した。林薇選注『林紘選集』文詩詞巻 成都・四川人民出版社1988.7。許桂亭選注『林紘文選【注釈本】』天津・百花文藝出版社2006.10
- 5) 「海[澗]外奇譚」『中国近代文学大系』第11集第28巻翻訳文学集三 上海書店1991.4。
2008年6月15日の報告会で瀬戸宏が配付した資料に『澗外奇譚』表紙、叙例、目次、本文1頁の影印があった。本稿を書いたあとに入手したので引用文は大系版によっている。
【統合版補記】影印本を入手した。
- 6) 左鵬軍は、樽本編『新編増補清末民初小説目録』(済南・齊魯書社2002.4) について「不備」があることをたびたび指摘している。
左鵬軍の文章は、以下の3本である。
「《新編増補清末民初小説目録》所録伝奇雜劇補述」『清末小説から』第69号 2003.4.1
「《新編増補清末民初小説目録》補正」中国近代小説研討会論文 2007.10天津
「《新編増補清末民初小説目録》匡補」『明清小説研究』2007年第4期(総第86期)
2007発行月日不記
小説目録とうたいながら、戯曲、伝奇、雜劇が混入している、と左鵬軍はいう。樽本が不注意で区別していないと左鵬軍は考えているらしい。私が意図的に混入させていることを理解しない。なぜわざと混入させているかといえ、当時は戯曲と小説を区別しないばあいもあったからだ。ゆえに、「小説」と表示している作品は、私の目につく限り目録に収録した。
左鵬軍の指摘は、そのまま目録に追記して反映させている。戯曲、伝奇であっても私は目録から削除しない。当時の状況がわかるような目録になるように工夫しているからだ。

そればかりか、収録範囲を拡大し戯曲も追加している。小説を戯曲化する状況がわかるようになれば、これも興味深いと考える。

- 7) 林紘研究の専門書が「区別がつかない論」をくりかえしているのは、かえって問題が大きい。

林薇『百年沈浮 林紘研究綜述』(天津教育出版社1990.10)がある。定型のようにして、林訳の欠点をいくつか掲げている。そのひとつが、「小説と脚本を混同した」(167頁)だ。林薇は、そうと紹介するだけで反論していない。ということは、林薇も「区別がつかない論」を認めているのだ。林紘は中国翻訳文学の基礎を築いた人物だ、とべつの場所ですら賞賛しても、基本の部分で罵倒しては評価したことにはならない。

前出の韓洪拳『林訳小説研究 兼論林紘自撰小説与伝奇』がある。「林紘は時に脚本を誤訳して小説にした」(125頁)とのべて「ジュリアス・シーザー」などをあげる。「このような状況が出現したのは、口述翻訳者が体裁について林紘にはっきりと説明しなかったか、あるいは口述翻訳者が外国の作家が書き改めた物語を訳したかであろう」。鄭振鐸の「区別がつかない論」をなぞっている。林紘ではなく共訳者の責任にしたのも、鄭説を取り入れた結果だ。

李偉民は、『中国莎士比亞批評史』(北京・中国戯劇出版社2006.6。14頁)において鄭振鐸の当該文章を引用している(ただし、「区別がつかない」部分の直前まで)。李も異議をとなえていない。李偉民は、鄭説に賛成しているとわかる。

林 訳「ハムレット」

『吟辺燕語』から

未発表。林訳『吟辺燕語』に収録された「ハムレット」をラム版にもとづいて検討する。ほぼ原文に忠実ながら、いくつかの簡略化がほどこされている。

林紓と魏易の共訳になる『吟辺燕語』（1904）がある。

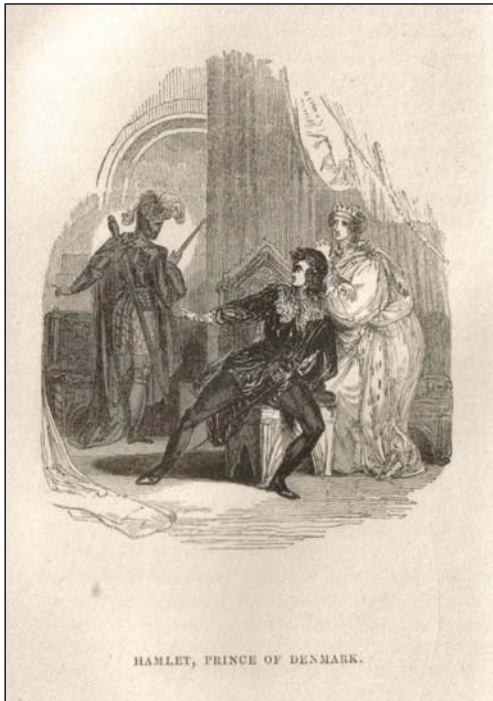
底本は、ラム姉弟『シェイクスピア物語 TALES FROM SHAKESPEARE』（1807）の全20話だ。今では周知の事実には属する。しかし、刊行された当時では明らかではなかった。「英国莎士比（シェイクスピア）著」と示しただけ。ラムの名前が掲げられていない。シェイクスピア作品であれば戯曲だと誰でもが思う。しかし、林訳『吟辺燕語』は、見れば小説体になっている。だから、林紓は漢訳するにあたり戯曲を勝手に小説にかえた、と批判されて現在に至っている。事実ではない。ゆえに、これが私のいう林紓冤罪事件である。

林紓批判が続けば、作品そのものが研究の対象からははずれる。どういうことかといえば、林紓批判がくりかえされるだけで漢訳そのものの検討が行なわれなくなったのである。部分的に引用することがあるかもしれない。それは林紓らの漢訳がデタラメであるという証拠に利用するのが目的だ。

しかし、林訳は、銭玄同、劉半農、鄭振鐸、阿英ら文学革命派が非難するようならずんな翻訳ではない。

1 林訳「ハムレット」

『吟辺燕語』には、林紓による序が2頁、目次が2頁ある。本文は156頁だ。20



ボーン社ラム版「ハムレット」

作品を収録しているから1作品は平均7.8頁にすぎない。文言で翻訳されているにしてもいくらかは圧縮されていると考えてよい。

これらのなかから特に「ハムレット[鬼詔]」を選んで林訳を検討する。

選択する理由は、題材が興味深いからだ。つまり、ハムレットの母は、夫を殺した弟王と結婚し、王の亡霊が出現する。守旧派の代表者と目された林紘である。結婚、亡霊ともに中国の礼教にかかわる。このふたつの話題をどのように漢訳したか。彼の翻訳方法をさぐるためには有効な材料になる。

使用する版本について説明しておく。

記号は【林訳】。林訳は、「説部叢書」版を使う。以下のとおり。

『吟辺燕語』 英国莎士比著 林紘、魏易同訳 上海・中国商務印書館 説部叢書第一集第八編 光緒三十(1904)年七月首版 / 光緒三十二(1906)年四月三版

これに収録された「ハムレット」の漢訳題名は「鬼詔」という。亡霊のお告げ

とか教えを意味する。ハムレットの父が亡霊となって出現するというその内容からの命名だ。

記号は【ラム】。ラム版は、ボーン社第7版（HENRY G. BOHN, LONDON, 1843）を使用する。

記号は【小松】。日本語訳としてチャールズ、ラム著、小松武治訳『沙翁物語集』（日高有倫堂1904.6.12 / 1906.2.5訂正六版）を選んだ。林訳と同年刊行だからふさわしい（変体仮名は引用に際して書き直す）。また、チャールズ+メアリ・ラム著、大場建治訳『シェイクスピア物語』（沖積舎2000.11.25）を参照する。

冒頭から紹介しよう。

【ラム】 GERTERUDE, queen of Denmark, becoming a widow by the sudden death of King Hamlet, in less than two months after his death married his brother Claudius, which was noted by all people at the time for a strange act of indiscretion, or unfeelingness, or worse: p.313

【小松】丁抹の女王ガートルードは、ハムレット王遽かに崩御し給ひしによりて、寡婦の身となりけるが、其後二箇月も経ざるに王の弟クローディアスと再婚するに至りたるを以て、上下挙つて奇怪の至り不倫の極みぞと言ひ罵らぬはなかりき。144頁

小松のは明治時代の日本語訳だから、丁抹はデンマークのこと。「奇怪の至り不倫の極み」とある箇所は、大場訳では「分別を欠いた、人情にもとる、いやそれよりももっとひどい常軌を逸した行為」(230頁)となっている。いうまでもなく、こちらの方が原文のままだ。

【林訳】丹麦王后杰德魯新喪其王漢姆来德未二月。即下嫁王弟克老丟。国人咸謂后之侍王未有情愫也。63頁

デンマーク女王ガートルードは、その王ハムレットを失ってまだ2ヵ月もたたないうちに弟王クローディアスに嫁いだ。国民のみなは、后が王につかえての誠意というものはないのかといった。

林訳が逐語訳ではないのには理由がある。

周知のとおり、林紘は外国語ができなかった。『吟辺燕語』のばあいは、魏易が口述翻訳するのを聞きながら文言で筆記したのだ。ゆえに、原文の大意をすくい取るだけで、表現の細かいところまでは翻訳していない。しかし、基本的にいつて大きくはずれることはない。固有名詞ひとつとっても、中国風に書き改めていないところを見てほしい。

林訳について誤解が広くあるように私は思う。すなわち、原文を理解しなかった、即、誤訳が多く自在に意識をおこなった、と短絡して林訳を否定する研究者が大勢いるのだ。林訳についての偏見が先行していると考える。

あれほど父王を愛していたはずの母が、こともあろうに弟王とそれも2ヵ月という短期間に再婚したのはハムレットにとっては、あまりに衝撃的な出来事だった。

【ラム】and now within two months, or as it seemed to young Hamlet, less than two months, she had married again, married his uncle, her dead husband's brother, in itself a highly improper and unlawful marriage, from the nearness of relationship, (後略) p.314

【小松】あゝ二箇月も過ぎじと思ふ今の有様の浅ましさ、見よ廉恥を破り貞操を汚して、亡き人の弟と再婚するに至れるならずや。かくも近き血族と婚せる一事だにあるまじき所業なるに、(後略) 146頁

母と弟王の再婚は、当時のイギリスでいえば近親相姦になる。清末の中国知識人も、それは唾棄すべき行為だという認識を当然ながらもっていた。意識のうえで礼教に縛られている人は、その種の文面に直面するとどういう態度を取るか。無視して翻訳しないか、別の事柄に置き換え書きかえるか。林紘はどうか。

【林訳】蓋自念先王盛徳。乃不能得於其母。冒新喪而嫁。而又越礼。即使不安於室。亦宜有所擇。不応耦此僉壬。64頁

亡き父の厚情を思うにつけ、その母には満足することができなかった。亡くしたばかりにもかかわらず嫁いだことは常軌を逸していたからだし、たとえ家庭にじっとしていることができなくても選びようがあっただろう。あの姦夫とは結婚してはならなかったのだ。

林紓は、原文の意味するところを改変することなく漢訳している。

2 林紓と周作人

私がこの部分に注目するのは、周作人が翻訳したアリ・ババを知っているからだ。しかも偶然の一致だが、周作人の翻訳は林紓と同年に発表されている。

ハムレットとアリ・ババでは、不思議な組み合わせだと思われることだろう。内容はもとより別物ながら、ひとつだけ共通する箇所がある。

周作人は、「アリ・ババと40人の盗賊」を漢訳して「侠女奴」(1904年雑誌連載)と題した。

翻訳には周が改変した箇所がある。アリ・ババの兄が強欲のあまり盗賊に殺される結果になる。原作では、アリ・ババは寡婦となった兄嫁を娶る。それを周作人は「同居」に書き換えた。作人の回想では、礼教にあわないので削除したとしている。だが、削除はしておらず同居することに改変したのが事実だ*1。

ふたりがそれぞれを翻訳した1904年当時、林紓は五十三歳だった。若い周作人は、わずか二十歳にすぎない。

ハムレットの母は、夫の弟王と再婚する。アリ・ババは、亡き兄の妻を娶る。ほぼ同じ内容の箇所を、老人林紓と若者周作人はそれぞれ翻訳して上述のような結果である。林紓は原文のままに翻訳し、周作人は書き換えた。

年輩の林紓は、礼教にもとづいて説教をたれるわけでもない。守旧派の代表者だと林紓を考えれば、ここは割注にしてでも訳文に林自身がしゃしゃり出てくるはず、礼教をたてにして批判するはずだ、と予想する箇所だろう。だが、彼は原文の意味を的確に漢訳するのみ。一方、若い周作人のほうが、同様の箇所に出会って書き換えを行なった。その理由は、礼教に合わないという判断からだ。周自

身がそう回想している。つまり、礼教に拘泥していたのは林紘ではなく周作人の方なのだ。年齢的に若い作人は、林紘に比較して思想上は保守的だった。

もうひとつ指摘するならば、翻訳に対する考えの違いから生じたように思われる。外国作品が自分の考えと異なることを説明しているばあい、それに直面した翻訳者の態度が問題になる。林紘のようにそのままに翻訳するか、周作人のように書きかえるか。別のいい方をすれば、林紘は小説という虚構と現実の区別ができており、周作人はそれができていなかった。

その林紘は、のちに文学革命に反対する代表人物に仕立てあげられる。文学革命派のひとりである周作人が、そういう林紘を批判するのである。どこか倒錯していると私には思われる。

3 林訳「ハムレット」のつづき

ハムレットは、父を悼むあまり喪服を着たままですごすようになった。彼は、母が結婚する日にもそれを脱ごうとせず、結婚の行事には出席しようとしな

【ラム】In vain was all that his mother Gertrude or the king could do to contrive to divert him; he still appeared in court in a suit of deep black, as mourning for the king his father's death, which mode of dress he had never laid aside, not even in compliment to his mother upon the day she was married, nor could he be brought to join in any of the festivities or rejoicings of that (as appeared to him) disgraceful day. pp.314-315

【小松】母と叔父なる新王とは百方王子が心を慰めんと勉めしも其甲斐なし。王子は宮廷に伺候するにも尚ほ父の喪中なればとて、片時も黒衣を離さず、母が芽出度きふるまひ婚筵を嘗みし其日も列席せず、凶日とのみ思はれける此日の饗宴には一度も臨みしことあらざりき。146-147頁

ハムレットの父を思う気持ちの強さを表現していると同時に、その裏返しとして母と弟王に対する不信をのべるくだりだ。ハムレットは、母の婚礼にも出席し

ようとはしない。

【林訳】而杰德魯与克老丟日加撫慰。終不能奪。蓋太子摯孝之心。実根天性。長年黒衣。用志哀慕、王后与克老丟行礼之日。太子屏居弗出。64頁

ガートルードとクローディアスは、毎日のように慰めたが、どうしてもまくいかなかった。王子の誠実な孝に対する心は実に天性のもので、ながく黒衣をきて哀慕の気持ちをつくし、母とクローディアスの婚礼の当日には、王子は部屋にいて出ようとはしなかった。

なんどもいって申し訳ないが、林紓は口述翻訳を聞きながら筆記している。原文の通り、つまり逐語訳にはなりえない。この林訳を見れば、それが理解できるだろう。原作を大幅に書き換えたとよくいわれる。上の箇所はどうだろうか。林紓が「孝」を取り出して翻訳している。これこそが原文から離れたものだという人はいるだろう。だが、私から見ればそれは許容範囲内におさまる。「孝」を使えば、ハムレットが喪服でとおし母の婚礼にも出席しなかった彼の心情を中国の読者は一瞬にして理解するだろう。林紓は慎重かつ大胆に漢訳した。私は、原意をすくい取って簡潔に翻訳していると判断する。

そのころ、ハムレットは亡き父王の幽霊が出現するというウワサを聞いた。幽霊は、ラムによって apparition、ghost、spirit と表現されているのを、林紓は、霊、神、鬼で対応させる。こまかな配慮である。

父王の亡霊は、弟王に耳から毒を入れられて殺害されたと告げ、自分の仇を討つことをハムレットに命じた。それ以来、弟王を警戒させないためにもハムレットは狂人を装うことにしたのだ。オフィーリアは、重臣ポローニアスの娘でハムレットの恋人である。母はオフィーリアがハムレット乱心の原因であると考えた。

【ラム】for so she hoped that her virtues might happily restore him to his accustomed way again, to both their honours. p.321

【小松】母なる后はオフィーリヤが高尚かき貞操の徳によりて、皇子の狂気も治まり、二人が行末幸福多かる可きを欲ひてければ寧ろかくあれかしと祈

りぬ。156頁

【林訳】（果以為太子之狂。誠為倭斐立也）立促有司為太子具礼。66頁

（はたせるかな王子の狂気は、まことにオフィーリアのためなのかと考え）役人をただちに促し王子のために縁談をもちだした。

ラムの原文には、ハムレットを正気にもどすためにはオフィーリアの存在が有効だと考える母がいる。

問題は、to both their honours 部分の解釈だ。一般には、双方の面目をたてるとか、両人のためだ、と日本語訳があたえられるだろう。どういう意味か。オフィーリアによってハムレットが狂気より立ち直るというのであれば、それは結婚に結びついてもおかしくはない。小松はそれを「二人が行末幸福多かる可き」と訳した。大場はもっと直截に「二人は晴れて結婚するというふうにことを運びたいものだと思った」(237頁)と翻訳している。そうであれば、林紘がそれを縁談にまで話を持っていったというのは、訳しすぎということにはならない。ここが、林訳の後の伏線となる。

迷いの生じたハムレットは、弟王を討つ決心がつかない。そこにひいきの役者が訪れた。いつもの朗誦、つまりトロイの老王プライアム old Priam, king of Troy が殺害され、王妃ヘキュバ Hecuba, his queen が嘆くひとさわりを聞いて思いつく。父王と弟王を彷彿させる人物が登場する劇を演じさせ、弟王の反応を確かめようとするのだ。場所はウィーン Vienna、殺害された公爵はゴンザーゴ Gonzago、妻はバプティスタ Baptista、下手人はルシアーナス Lucianus とする。

林訳では、ここらあたりは粗筋だけを大づかみにしているだけで詳しくは漢訳していない。プライアム、ヘキュバも省略してトロイ [椎羅] 王と王后のみだ。しかし、維也 Vienna、貢薩古 Gonzago、抜鉄司塔 Baptista、羅西愛納司 Lucianus と翻訳しているのが律儀なことだと感心する。劇中劇の固有名詞だから省略してもいいようにも思うからである。

林訳には、律儀と粗雑が入り交じっているとってよいか。上のように名詞を大事にしてはいるが、こまかなところで引っかかる。

たとえば、公爵毒殺の芝居を見せつけ、弟王が急遽退出するという直截な反応

を目にしてハムレットは弟王が犯人であるとの確証を得る。その場面だ。

弟王が部屋へ行ったのだから劇も中断する。「The king being departed, the play was given over. / 己が寝室へと立ち去りぬ。されば劇も自ら中止することになりけるが」(p.324 / 161頁)という部分は、林訳では「遂命侍者以燈導入寝室臥。俳優演竟。召使いに灯火を寝室へ運ぶように命じた。役者は演じ終わった」(67頁)となっている。微妙な翻訳のしかただと思う。芝居を最後までやり終えたのではなく、演じていた役者のところでおわったと考えればよいか。それならば、許容範囲内であろう。

母はハムレットをよんで叱責し、ふたりの口論がはじまる。ハムレットが壁掛けの後ろにひそんでいた重臣ポローニアスを誤って殺してしまったあとのことだ。母になじられてハムレットは、父王を殺しその弟と結婚したその母を責めるのである。その根拠をラムは次のように説明する。

【ラム】And though the faults of parents are to be tenderly treated by their children, yet in the case of great crimes the son may have leave to speak even to his own mother with some harshness, so as that harshness is meant for her good, and to turn her from her wicked ways, and not done for the purpose of upbraiding. And now this virtuous prince did in moving terms represent to the queen the heinousness of her offence, (略) p.326

【小松】親過失ありとも飽くまで忍ばんは子の責なるが、而かも若し非常の罪過を犯かし、人道を阻害する如き事あるに至らば、たとへ恩愛深き母に対してなりとも、いかで善き方に導かんとの真情より出でたるものならんには、亦強ち咎むべきことにはあらず。かくてハムレットは似げなくも過激なる言葉もて、いたく母が忘恩無情なるを責めて(略) 165頁

ところが林紓は、この部分には不満を感じたようだ。

【林訳】語出。自省其過。復変其詞。以為母之所為。……(略) 67-68頁

言い終わると、その過激であるのを反省し、またことばを変えて、母の行

なったことは……（略）

虚構と現実の区別がついているはずの林紘であったが、息子が母親を強く責めることには同意できなかつたらしい。該当する部分をあっさり削除し表現を緩和した。

4 林紘の誤訳

前に林訳がハムレットとオフィーリアの縁談にした箇所を指摘しておいた。その関連で林紘が誤訳をしているといわれる箇所を紹介する。

母を責めたハムレットは、ようやく自らが手を下した被害者を見るとそれは恋人オフィーリアの父ポローニアスだった（when he came to see that it was Polonius, the father of the lady Ophelia, whom he so dearly loved,……）。彼は悲しんで泣いた。

【林訳】自咎開罪於其妻。乃大哭。68頁

その妻に罪なことをしてしまったと自らをとがめ、大いに泣いた。

林訳では、オフィーリアを妻にしてしまった。原作はそうではない。林紘の誤訳であることは明らかなだ。ここを掴んで、次のように書く研究者がいる。ハムレットは、妻の父、すなわち彼にとっては岳父を殺したことになる。これは父親殺しと同じくらいに重い罪である*2。

原作ではハムレットとオフィーリアは結婚していない。だから、その研究者は誤訳だと責める。しかし、林紘にしてみれば、ラム版では前の段階で縁談話がでている。ふたりが結婚していても不思議ではない。ゆえに、林訳ではオフィーリアを「妻」とした。しかも、ハムレットが誤って殺害したのが岳父であれば、その悲劇性は原作をうわまわってより効果的であるということが出来る。林紘の誤訳であることを認めただうえで、私はそう考える。

もう少し林訳の「妻」について説明したい。

ラム版には、「ハムレットの妻 Hamlet's wife」という表現が存在する。

ポローニラス殺害によりハムレットは国外追放となった。彼はイギリスへ送られる途中で海賊に襲われる。海賊の捕虜から解放されてデンマークに帰ってきたハムレットは、オフィーリアの葬儀に遭遇する。林訳は、詳細を省略して粗筋だけを述べる。

王妃が墓に花をまきながらいう。

【ラム】Sweets to the sweet! I thought to have decked thy bride-bed, sweet maid, not to have strewed thy grave. Thou shouldst have been my Hamlet's wife.
p.331

【小松】良き娘故良き物参らせん。我身はそもじの新床を飾るべく花撒かんと思ひしに、今は新墓を飾るに至りし悲しさよ。げにそもじは我が愛子ハムレットが妻となるべき身なりしものを。172頁

妻となるはずだった、だがならなかった、というのが原文である。仮定の話だから、事実は結婚していない。婚礼の床に撒くはずだった花だともいっている。しかし、林紓は次のように省略した。

【林訳】吾始意以花為汝撒新榻也。今乃為汝置此柩上耶。69頁

私は花をお前の新床に撒こうと考えていたのに。今はお前のためにこの柩のうえに置いている。

墓 grave を柩と誤った。しかも、ハムレットの妻となるはずだった、という箇所を削除した。だいいち「私は花をお前の新床に撒こうと考えていたのに」というのはラムの原文通りだから、「妻」となっていては話が矛盾する。そこには気づかなかっただろう。

結末までは駆け足だ。私ではない。林紓らが走るのだ。オフィーリアの兄レアーティーズとフェンシングの試合をする。毒を塗った剣で傷ついたレアーティーズは死ぬ。また、毒入りの酒を誤飲した母も死ぬ。ハムレットもまた毒のまわった身体でありながら、弟王クロードィアスを剣で刺して父の仇をとる。

林紘は口述翻訳者が訳し終わる前に記述の筆を止めていたという*3。広く伝わっている逸話だ。魔術のように驚くべき速度であると感心するのが普通だろう。しかし、林訳「ハムレット」の結末部分に見るような大筋だけを追う漢訳を目の前におけば、見方が変わる。すなわち、共訳者がいくら原文に忠実に口述しようが、林紘の判断次第だ。彼が聞きながら基本だけを把握してあとは取捨選択しているとすれば、その魔術も可能になるのではなかろうか。

5 結 論

恋人オフィーリアを妻にしてしまった。今から見れば林訳の間違いである。オフィーリアの兄レアーティーズを「弟」にもしている。ラム版が brother となっているのが原因だろう。これだけでは兄か弟か判別できない。林訳には、ほかにもいくつか誤訳はたしかに存在する。しかし、そこを強調して非難すべきではない。

1904年という時期を考慮する必要がある。先行する翻訳はあったが、林紘たちが参考にしたかどうかはわからない。見ていたとしても、共同翻訳者と作品に専念するのが林紘のやり方だ。中国においてシェイクスピア研究がほとんど存在しない時代だった*4。原作の作品そのものに集中する以外に方法はない。それを実行したのが林紘とその共同翻訳者であった。

ラム版の原文と林訳を比較対照した私の結論は、以下のとおりである。

『吟辺燕語』の林序によると、複数の版本を集めるなど十分に準備をして漢訳は行なわれた。その翻訳は、省略と少しの誤訳はあるにしても、ラムの原文にそったものになっている。大きくはずれてはいない。もし、林訳は原文をはなれて勝手に随意に意識したと考えるならば、それは誤りである。

【注】

- 1) 樽本「周作人漢訳アリ・ババ「侠女奴」物語」『漢訳アラビアン・ナイト論集』所収
- 2) 彭鏡禧「百年回顧《哈姆雷》」『中外文学』第33巻第4期2004.9電字版。123頁

- 3) 鄭逸梅「林紘訳《茶花女遺事》及其他」(『書報話旧』上海・学林出版社1983.8)によっても広く知られるようになったものか。頼余「林紘的翻譯」《中国翻譯家詞典》編写組『中国翻譯家詞典』北京・中国对外翻譯出版公司1988.7(表紙は『中国翻譯家辞典』)416頁
- 4) シェイクスピアの名前だけならあげる文献は、以前からあった。しかし、『瀕外奇譚』(光緒二十九年(1903)実物未見【統合版補記】影印本を入手)、『吟辺燕語』(光緒三十(1904)年七月)が出版される前にシェイクスピアを詳しく紹介する文章は中国では公表されていないらしい。「英国大戯曲家希哀苦皮阿伝」(『大陸報』第2年第10号1904.11.26未見)があるという。だが、刊行の日付を見れば、林訳よりもあとのことだ。同じく林紘よりも遅れるが次の文章がある。觀雲(蒋智由)「中国之演劇界」(『新民叢報』第3年第17号(総第65号)1905.3.20)。資料として関係部分を引用する。「今欧洲各国。最重沙翁之曲。至称为惟神能造人心。惟沙翁能道人心。而沙翁著名之曲。皆悲劇也」。もうひとつ、王国維の文章も比較的早いものに属する。王国維「莎士比伝」(『教育世界』第159号1907.10初出未見。姚淦銘、王燕編『王国維文集』第3巻 北京・中国文史出版社1997.5)

ラム版『シェイクスピア物語』最初の漢訳と林訳

「十二夜」を中心に

未発表。ラム「シェイクスピア物語」が最初に漢訳されたのは『澥外奇譚』である。1年遅れで刊行された林訳『吟辺燕語』と訳文を比較するために「十二夜」を取り上げる。前者には、加筆傾向があり、後者には簡略化の傾向がある。『澥外奇譚』影印本を入手する前の執筆。本稿で使用したのは『中国近代文学大系』本である。いくつか訂正をした。

ラム版『シェイクスピア物語』の漢訳は、『澥外奇譚』(1903)が最初になる。ただし、今この原本を見ることは困難だ。私には手にとる機会もない(中国の研究者がその論文に該書目次をかかっている。見たのか、とたずねた。見ていないという返答だった)。翌1904年に発行された林紘と魏易が共訳した『吟辺燕語』が有名で、数種類の版本があるのとは異なる。

本稿では、『澥外奇譚』と『吟辺燕語』に共通する作品を選んで両者の訳文を比較対照し検討する。

まず『澥外奇譚』について説明することからはじめよう。

1 阿英の説明

『澥外奇譚』の存在に言及して早い文献は、澤田瑞穂「清末の小説」(『中国の文学』日本・学徒援護会1948.9.5。『清末小説研究』第1号1977.10.1再録。澤田『宋明清小説叢考』研文出版1982.2.10 / 研文選書66 1996.7.10所収)がある。

清末の翻訳小説について説明する箇所だ。

芸術として訳するのではない、小説の筋と事実の興味のために訳するといふのも清末翻訳小説の一つの特色であつた。たとへばシェイクスピアの戯曲も決して戯曲として訳されたことはない。『海外奇譚』といふのを見たことがあるが、これは英国沙士比亞原作と銘打つてゐても実はラムの沙翁劇梗概の訳であつた。林琴南もやはりこの手で『ジュリアスシーザ』『リチャード二世』『ヘンリー四世』『ヘンリー六世』等を訳してゐる。121-122頁

詳しい説明はない。だが、『海外奇譚』という書名をだし、それがラムの翻訳であることを指摘しているのが珍しい。阿英の目録よりも以前の言及だといへば、その重要性をご理解いただけるだろう。

広く知られるようになったのは、阿英「晚清小説目」（『晚清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社1954.8 / 増補版 上海・古典文学出版社1957.9、北京・中華書局1959.5。138頁）に収録されたからだ。ただし、『海外奇談』という書名になっていることを指摘しておく。細かいことだが、その書名をもつ書物は存在しない。いうまでもなく「解」と「海」、「譚」と「談」は異なる。

間違った書名だが、とりあえず、阿英目録から該当個所を引用する（傍線は省略）。便宜のためにラム版原名を添える。目録に英文題名はついていないから誤解のないように。

海外奇談 英^{ママ}沙士比亞著。光緒二十九年（一九〇三）達文社訳印。実為蘭姆沙士比亞樂府本事之最早中訳。収十種。用回目名篇：

- | | |
|--|----------------------------------|
| （一）蒲魯薩貪色皆 ^{ママ} [背]良朋 | The Two Gentlemen of Verona |
| （二）燕敦里借債約割肉 | The Merchant of Venice |
| （三）武歷維錯愛孿生女 | Twelfth Night; or, What you Will |
| （四）畢楚里馴服惡癖娘 | The Taming of the Shrew |
| （五）錯中錯埃国出奇聞 | The Comedy of Errors |
| （六）計上計情妻偷戒指 | All's Well that Ends Well |
| （七）冒險尋夫 ^{ママ} 絡 ^{ママ} [終]偕 ^{ママ} [諧]伉儷 | Cymbeline |

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| (八) 苦心救弟堅守貞操 | Measure for Measure |
| (九) 恒 ^{ママ} [懐]妬心李安德棄妻 | The Winter's Tale |
| (十) 報大仇韓利徳殺叔 | Hamlet, Prince of Denmark 138頁 |

『澥外奇譚』の「澥」は「海」と発音は異なる。しかし、意味するところは同じだ。それ以後も『海外奇譚』と表示する文献はほかにもある。ただし、『海外奇談^{ママ}』は阿英目録だけに出てくる。李偉民『中国莎士比亞批評史』(北京・中国戯劇出版社2006.6. 319頁の注3)を見れば、その誤りを踏襲している文献が複数あることがわかる。実物で確認せず論文に書名を掲げた。李偉民はそう指摘したいのだ。

原書については、阿英が簡潔に解説している。蘭姆[ラム]「莎士比亞樂府本事」の最も早い中国語翻訳だ、と。

「莎士比亞樂府」は、シェイクスピア戯曲を意味する。「本事」とは、そのもとになる事柄だ。すなわち戯曲にもとづいた物語だから、該書は日本語でいう『シェイクスピア物語』になる。

ラム版は、シェイクスピア劇を小説化して20作品を収録する。『澥外奇譚』は、その半分の漢訳にすぎない。

上の題名に[]で示したのは、阿英がのちに紹介した文章(「翻訳史話」第4回*1)の記述だ。つまり、阿英の紹介によると書名と題名の一部が一致しない。単なる誤植だろう(誤植は「ママ」と示す)。

阿英は、論文「翻訳史話」で「叙例」があることに言及する。シェイクスピアを紹介して「絶世名優」と書いている。阿英は、そこを指して「奇妙であるのを免れない」(243頁)という。

シェイクスピアは役者もしていた。事実だから間違いではない。シェイクスピアが役者兼座付き作家であることを阿英は知らなかったらしい。しかも、それに続けて「文言を用いて翻訳し、林訳には及ばない」と否定的な評価を下した。研究界の権威が否定的に紹介したから影響力が大きい。『澥外奇譚』の翻訳は、林紘の『吟辺燕語』よりも劣る、という評価が定着することになる。林訳についての評価は、一般にいつてもとからそれほど高いものではない。それに比較して劣

ると阿英はいうのだ。後の研究者が、『澥外奇譚』についてよい印象を持つはずもない。

書名と収録作品名がわかるだけで原本を見ることができないままだった。ところが、10篇のうちの2篇が『中国近代文学大系』第11集第28巻翻訳文学集三（上海書店1991.4）に収録された。2篇だけでも翻訳作品を読むことができるようになったのは、研究上の大きな前進だといえる。

2 大系版『澥外奇譚』

大系版に掲げられた書影を見ると、書名はまぎれもなく『澥外奇譚』である。しかし、復刻した本文ではやはり「海外」と表記する。

原書の表紙以外でも「澥外奇譚」なのかどうか、大系版を見る限り詳細がわからない。

写真では別の本がかぶさっていて見えにくい「英国索士比亜」とかろうじて読める（あとで触れる戈宝権論文に掲載された書影では、はっきりと読める）。阿英目録は「莎士比亜」と記述していた。だから、「莎」の1字が誤記ということだ。表紙を見るだけでは、シェイクスピアの原作だとわかるのみ。

大系版の本文には「[英]蘭ト作ノ佚名訳」と記されている。ラムと表示しているのはよい。だが、本文に「佚名訳」とは書かないはずだ。ラムだけ掲げ、訳者名を明示していない可能性が高い。これが（あったとして）奥付の表示であろうか。扉か、あるいは漢訳本文の冒頭にそう書いてあるかもしれない。原本の扉、訳文の写真は掲げられておらず、大系版の編者も説明しないから確認できない。

訳者の「叙例」がある。それには、原本を説明して次のようにいう。私がことばを補って訳す。

本書（『澥外奇譚』＝ラム『シェイクスピア物語』）はもとをたどるとシェイクスピア（Shakespeare、1564年生、1616年没）が書いたものだ。氏は絶世の名優〔絶世名優〕であり、詩詞にすぐれている。（シェイクスピア戯曲にもとづ

いて) 編纂した「戯本小説(シェイクスピア物語)」は一世を風靡し、英国空前の大家として知られている。その翻訳はフランス、ドイツ、ロシア、イタリアなどに行き渡り、読まない人はほとんどいないくらいである。しかし、わが国の最近の学界では、「詩詞小説(シェイクスピア物語)」についていう人はいつもシェイクスピア氏を称賛するのだが、その書はこれまで読むことができなかった。私はそれをひそかに残念に思っていた。そこで本書をただちに翻訳し、小説界に異彩を添えようと思う。317頁

問題は、原文の「戯本小説」「詩詞小説」をどう考えるかだ。私は両者とも「シェイクスピア物語」と翻訳しておいた。もうひとつ、原文の「小説界」は、そのままにしてある。

林紓の時代の中国では、一部では小説と戯曲を区別しなかった(別稿参照)。「伝奇小説」と角書があってもそれが小説とは限らない。中身は戯曲という例があるのだ。

だが、その事実を知らず「戯本小説」「詩詞小説」をそのまま現在の感覚で解釈するとどうなるか。

シェイクスピアが書いたのは小説だと読む人がいる。そう考えれば、ここは間違っている。しかも、シェイクスピアの著作だといいいながら、翻訳しているのはラムの小説化本なのだ。この部分だけを見ると、名前の伝わっていない漢訳者は勘違いしている。

そう批判するのは、馬祖毅『中国翻訳史』(上巻 漢口・湖北教育出版社1999.9)である。

冒頭の「本書は、シェイクスピアの著作である[是書為英国索士比亞(Shakespeare, 千五百六十四年生, 千六百一十六年卒)所著]」とあわせつかまえて、その漢訳者は誤解をしている、と馬祖毅は主張するのだ。

馬は非難して、「見たところ、本書の訳者は、劇作家シェイクスピアと『シェイクスピア戯曲』の作者ラムを混同しているらしい[看来此書訳者把劇作家莎士比亚与《莎氏楽府》作者蘭姆給混淆了]*²という。

最初にいっておかなければならない。馬祖毅が書いている「莎氏楽府」は、シ

エイクスピアの戯曲そのものを指す。『シェイクスピア物語』といたいならば「本事」を加えて「莎氏楽府本事」と表記するのが普通のやり方だ。ところが、馬祖毅は、「莎氏楽府」と書く（1984年初版296頁において勘違いし、2001年増訂版416頁でも訂正できないままを引きずっている）。ならば、シェイクスピア戯曲の作者がラムということになるではないか。混乱しているのは馬祖毅の方なのだ。

原作はシェイクスピアだといいいながら、中身がラムの翻訳だから「混同している」という馬祖毅の結論になった。

馬祖毅ばかりではなく、ほかにも謝天振らがいる。

謝天振、查明建主編『中国現代翻訳文学史（1898-1949）』（上海外語教育出版社2004.9）である。謝天振らも「叙例」を問題にする。「叙例」のなかでシェイクスピアが「絶世の名優であり、詩詞にすぐれており」というのは、まったくの間違いではない。しかし、シェイクスピアの創作したものが「戯本小説」というのであれば、ラムのこの戯曲物語集〔戯劇故事集〕からくる当て推量であり、訳者がシェイクスピアの創作状況についてまったく理解していないことを説明している」（270頁）

「絶世の名優」については、阿英の説明を修正して少し進歩している。

「戯本小説」は原文のままだ。つまり、漢訳者はシェイクスピアが小説を書いたと勘違いしている、と謝天振らは判断した。馬祖毅とほとんどかわらない。

さらに同様のことがある。莊浩然「閩籍近代学者与莎士比亚」（『福建師範大学学报（哲学社会科学版）』2005年第3期（総第132期）2005.5.28。74頁）だ。「佚名が“劇本小説”と混同したのとは違う」。つまり、『吟辺燕語』はラムの『シェイクスピア物語』だと林紘は正しく認識しているといいたいのだ。そのためだけに、海外版の佚名訳者をおとしめて取り出した。

前出の李偉民『中国莎士比亚批評史』（2006）も、「叙例」を引用（李は戈宝権からの孫引きだと明記する）し次のように解説している。

訳者はシェイクスピアが脚本を編纂しただけでなく小説を創作したと考えた。訳者が該書を訳述する前に、中国ではすでに少なからぬ文人、学者がシェイクスピアについて理解をしており、そればかりかシェイクスピア作品を

詩詞小説の模範としていた。309頁

李偉民は、原文の「劇本小説」を「劇本」と「小説」に分解してしまった。だから、シェイクスピアが脚本と小説を書いた、と李は誤解する。『澥外奇譚』において、「戯本小説」「詩詞小説」はともにラム『シェイクスピア物語』であるという認識が、彼ら現代の研究者にはないことのほうが私には珍妙に思える。

『澥外奇譚』「叙例」の次の部分にもっと興味深いことが書いてある。馬祖毅、謝天振ら、莊浩然、李偉民は、なぜそれを無視するのか。

本書はもともと詩の形式である。英国の学者ラムによって散文にされ、書名をつけて『シェイクスピア物語』という。ここに最もよいもの10章を選び翻訳して以下の題名にする[是書原系詩体，経英儒蘭ト行以散文，定名曰《Tales From Shakespeare^マ》]，茲選訳其最佳者十章，命以今名]。317頁

当時、シェイクスピアの「詩」といえば戯曲を意味していた(別稿参照)。だから、原文「詩体」は、詩の形式と訳すのがよろしい。ここでは、シェイクスピアの戯曲をラムが散文に書き直したと明記している。訳者は、小説化の状況を正しく把握しているということができる。

いうまでもなくラム版の英文原題は、「シェイクスピア作品にもとづく物語」という意味だ。この氏名不明の漢訳者は、シェイクスピア原作とラム小説化の關係を取り違えてはいない。

誤解をしていると批判する研究者のほうが、誤解している。

「戯本小説」の字面だけをとらえて現在の考えで解釈しているからそうなった。これが誤りのひとつ。もうひとつの間違ひは、原作の戯曲をラムが散文に書き直した、と漢訳者が正しく記述しているにもかかわらずそれを無視していることだ。というよりも、そういう文章、つまり「叙例」が存在していることを知らないのだろう。

謝天振ら、莊浩然、および李偉民は、馬祖毅の説明、それも誤った記述をくり返しているだけ。

最近の研究者がそろって誤解し誤記しているのは、なぜなのか。

その原因はこれかもしれない、と推測できるものがある。

戈宝権「莎士比亚的作品在中国」(『世界文学』1964年5月号(総131期)1964.5.20)だ。

ご注意いただきたい。戈宝権が間違っているという意味ではない。彼が自分の論文に引用した資料がある。それを利用する研究者の問題なのだ。戈に責任はない。

戈宝権論文は、中国でシェイクスピア作品がどのように紹介されたかを概説する。のちの研究者でシェイクスピア受容史に触れるものは、ほとんどが戈論文にもとづいているのではないかと思う。ただし、戈宝権の名前を出さないから、参照しただけなのか、独自に調べたものか、見分けがつきにくい。

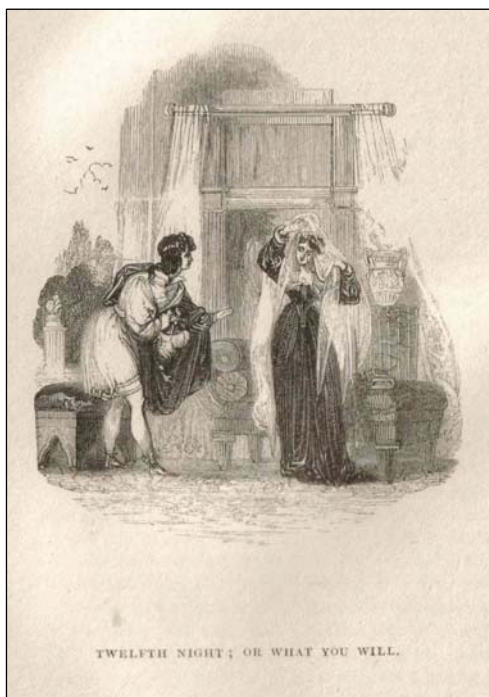
戈宝権は、『澥外奇譚』の書影をかがげ、「叙例」の冒頭部分(上に示した)のみを引用した。つづく部分、しかも重要な文章(私が大系版にもとづいて上に引用した)は省略して示さなかったのだ。

馬祖毅、謝天振ら、莊浩然、李偉民は、戈宝権が引用した部分だけを読んだ。その結果、漢訳者は誤解している、と判断したらしい。「叙例」の全部は、1991年に刊行された大系本に収録されているにもかかわらず、こちらには気づかなかった。資料に重要部分が存在していることを知らないで非難するのだ。あきれる。馬祖毅らは、あたかも原本を読んでいるように書いている。戈宝権から孫引きしたと説明すればいいのに、と思う。

中国の学界では、阿英を頭として、先行する翻訳を軽んじる傾向があるのではないかと私も疑う。「私も」というのは、郭延礼がそう指摘しているからだ。清末にはすでに翻訳があるにもかかわらず、現代の研究者はそれらを知らない。ゆえに、清末翻訳小説研究に力を入れるように、と彼がくりかえしているのを見てほしい*3。研究者が誤解するその根は同じことだ。

関連するのは、以前からある林訳シェイクスピア批判だった。

林紘は、原作の戯曲を勝手に小説化したでたらめな翻訳だ。そう主張したのは、劉半農、胡適、鄭振鐸たちである。それが定説となった。阿英は、それを踏襲し思考が呪縛されている。林紘はシェイクスピアの戯曲について何も知らない、と先入観をもって文献を読んだ。その延長線上に『澥外奇譚』を置いている。林紘



ポーン社ラム版「十二夜」

がデタラメだから、氏名不明のこちらの訳者もデタラメに違いないと考えたらしい。根拠のない断定である。馬祖毅、謝天振ら、莊浩然、李偉民は、それをなぞっているだけだ。誤解を継承し、誤りを再生産している。

3 ラム版「十二夜」の漢訳2種

さて、中国近代文学大系版に収められたその2篇というのは、以下の通り。

武歴維錯愛戀生女 Twelfth Night; or, What you Will 十二夜

林訳では「婚詭」

畢楚里馴服惡癖娘 The Taming of the Shrew じゃじゃ馬ならし

林訳では「馴悍」

本稿では、前者の「十二夜」を取りあげる。

双生児と変装を効果的に使って人違いのおもしろさをくりひろげる作品だ。ラムが小説化したこの恋愛喜劇を『澥外奇譚』と林訳は、それぞれどのように漢訳したか。

使用する各版本を記号によって示す。

【ラム】“Twelfth Night; or, What you Will” ラム姉弟 (Charles Lamb, Mary Lamb) 『シェイクスピア物語 TALES FROM SHAKESPEARE』ポーン社第7版 (HENRY G. BOHN, LONDON, 1843)

【小松】「十二夜物語」チャールズ、ラム著、小松武治訳『沙翁物語集』(日高有倫堂1904.6.12 / 1906.2.5訂正六版)。変体仮名は引用に際して書き直す。チャールズ+メアリ・ラム著、大場建治訳『シェイクスピア物語』(沖積舎2000.11.25)を参照した。

【澥外】「武歴維錯愛孿生女」前出大系版『澥外奇譚』。句読点などは、大系版の編者がほどこしたまを引用する。

【林訳】「婚詭」英国莎士比著 林紓、魏易同訳『吟辺燕語』上海・中国商務印書館 説部叢書第一集第八編 光緒三十(1904)年七月首版 / 光緒三十二(1906)年四月三版

原題の「十二夜」は、クリスマスから新年につづく祭りの最終日だという。劇の内容とは無関係につけられた。だから『澥外奇譚』が「オリヴィアが双生児の女性を間違っ愛する」としたのも、林訳が「奇妙な縁組み」と題したのも、いずれもが内容に沿う形の命名である。原題のままであるよりも、そうすることが中国の読者には親切だという発想だろう。漢訳題名の付け方が、見ただけで両者の傾向を示している。

冒頭は、こうなっている。

【ラム】SEBASTIAN and his sister Viola, a young gentleman and lady of Messaline, were twins, and (which was accounted a great wonder) from their birth they so much resembled each other, that, but for the difference in their

dress, they could not be known apart. p.253

【小松】セバスティアンと其の妹ヴァイオラとはメッサリナ生れの双生児の紳士令嬢でありました。そして（これは大変不思議なこととせられてゐたのですが）生れたてから二人大層酷く肖て居て、服装が違つてゐなかつたら、区別がつかないほどでした。225頁

セバスチャンとヴァイオラは、今でいえば二卵性双生児である。本来は必ずしも瓜ふたつになるとは限らない。だが、もとのシェイクスピア劇、ここではラム版の設定ではそういうことになっているとご理解いただきたい。ただの双生児では同性にしかならない。よく似たふたりで、しかも異性というのがこの作品の要なのだ。また、同時に生まれたのだから兄妹とはかぎらない。姉弟でもいい。今、習慣に従い兄妹とする。

小松の日本語訳は、ラム版の忠実な翻訳になっていることがわかる。林訳と澁外版は、それぞれどう漢訳しているか。

【澁外】薛伯純与菲烈兄妹二人，孿而生者也。籍隸美西林，父母早逝，兄妹合力自支撑門戶。二人生既同时，且骨格形容極其相似，所可別者，頼有男女之装，否則人見之者，将曰是一而二，二而一也。318頁

セバスチャンとヴァイオラの兄妹ふたりは、双生児で生まれた。メッサリナの人で、父母は早くに亡くなり、兄妹で力を合わせて家柄を支えていた。ふたりが生まれたのは同時であり、また骨格容貌がとても似ていたから、区別できるのは男女の服装によるしかなく、そうでなければ見る人はどっちもどっちということになる。

父母が早くに亡くなっている、とラム版にはない語句をつけ加えた。ただし、シェイクスピアの戯曲はそういう設定なのだ。ということは、澁外版の訳者は、シェイクスピア原作を読んでいることになる。ここは重要だ。それ以外は、ほぼ原文のままの漢訳だといっている。登場人物名を薛伯純（セバスチャン）、菲烈（ヴァイオラ）と3文字以内に表記する工夫をしているところにもご注目。これ

を中国化したと批判する研究者もいる。だが、当時の読者にしてみれば工夫されたほうが読みやすいに決まっている。

では、林紘はどう漢訳したか。

【林訳】西拔司勳者及其女弟微瑚拉為来賽林人。131頁

セバスチャンとその妹ヴァイオラはメッサリナの人である。

肝心の双生児、また容姿がうりふたつという説明もない。林紘は、えらく省略したものだ。もっとも、双生児であることは次の部分には出てくるから誤りというわけではない。物語のはじまりとなる船の遭難と妹ヴァイオラが助かった場面を林訳から見てみる。

【林訳】二人孿同時。被難亦同時。蓋行舟舟碎於意律立埃也。舟客多死。舟人以小艘載微瑚拉登岸。131頁

ふたりは同時に生まれ、また難にあうのも同時だった。船に乗っていてイリアでその船が砕けたのである。船客は多くが死んだ。船員は小船にヴァイオラを乗せて岸にたどりついた。

船の遭難で妹のヴァイオラだけが助かった。簡潔すぎるくらいに漢訳している。骨格だけを残している。そう私が思うのは、ラム版はもう少し詳しく説明しているからだ。

【ラム】They were both born in one hour, and in one hour they were both in danger of perishing, for they were shipwrecked on the coast of Illyria, as they were making a sea-voyage together. The ship, on board of which they were, split on a rock in a violent storm, and a very small number of the ship's company escaped with their lives. The captain of the vessel, with a few of the sailors that were saved, got to land in a small boat, and with them they brought Viola safe on shore, (後略) p.253

【小松】二人とも同時に生れて、二人とも同時に危なく死なうとしたので、といふのは此二人が一緒に航海をしてみたときイリ、ヤ近海で難船に逢つたのであります。自分たちの乗つてみた船が大あらしのために岩に打ち当てられたので同船してみた者で命を助かつたのは極少なかつたのです。船長は命拾ひした数人の水夫と小舟で陸に漕ぎつけましたが其人達と一緒にヴァイオラも無事上陸いたしました。（後略）225頁

林紘が翻訳したように、船が砕けたといえば嵐にあってのことだろうと想像できる。大嵐について説明するまでもない、という林の判断かもしれない。だが、林訳は省略しすぎだ、と言われてもおかしくはない。では澥外版はどうか。

【澥外】一日、薛伯純有海外行，收拾行滕，挈其妹趁舟而渡。時山青水白，紅日在天，舟傍岸行，鼓槳而進。既到洋心，忽見西北雲生，天色變黑，舟上人方相顧驚愕。無何狂風大作，水波相擊如戰。只聞吼聲過處，桅折帆傾，船身不能自主，為怒浪漂至易利里亞海岸，砰然一響，舟撞破於暗礁而沒，可憐無數男女，半葬魚腹。正絕望間，岸邊忽來一小艇，大呼救人。船主某因與三五水手，得濟彼岸，而菲烈以盈盈弱質女，得衆人憐救，極力援之入舟。318頁

ある日、セバスチャンは海外に行くことになり荷物をまとめてその妹をともない船にのって出発した。山水の景色はすばらしく赤い太陽は天にあって、船は岸にそって櫂をふるって進んだ。海原の中心にまでくると突然西北に雲を生じ、空は黒色に変わったから船上の人々は驚いた。間もなく強風がまきおこり、波が戦のように襲ってくる。いたるところで叫び声が聞こえ、帆柱は折れ帆は傾き船は思うにまかせない。大波によってイリリア海岸に流れつき、ドシンと大きく響いたかと思うと船は暗礁に激突して沈没してしまった。かわいそうに無数の男女が魚の餌食となったのだ。絶望しているとき、岸邊から小舟が現われ、救いにきたと大声でよばわる。船主の某は45人の水夫と岸につけば助かるというので虚弱なヴァイオラは皆に助けられ小舟にのせられた。

こちらは反対に加筆が多い。船旅における周囲の景色から天候から、その急変で嵐に巻き込まれて難破するまでを書き込む。ラム版では簡素すぎるという訳者の考えによるものだろう。小舟を出したのは船長だが、変更して岸からの救助になっている。

林訳がほとんど1行ですませたのに比較すれば、澁外版は饒舌であるということが出来る。両者ともにラム版の忠実な漢訳とはなっていないところは共通するものの、その方向は正反対なのである。先行する澁外版は、加筆して説明が詳しい。後発の林訳は、省略して簡潔になった。

イリリアを治めるのはオーシーノ公爵で、伯爵の娘オリヴィア姫に縁談を申し込んでいた。だが、姫の父は亡くなり、その兄も逝去したため姫は悲嘆のあまり男とは会わないという。ヴァイオラにそう説明するのは船長である。

【ラム】Orsino sought the love of fair Olivia, a virtuous maid, the daughter of a count who died twelve months ago, leaving Olivia to the protection of her brother, who shortly after died also; and for the love of this dear brother, they say, she has abjured the sight and company of men. p.254

【小松】オルシノ公爵は綺麗なオリヴィアといふ叔徳のある伯爵家の令嬢に縁談をお申込になつた、そして其父伯爵は一年前にお亡くなりになつたが其時、令嬢の世話をその兄様にお託しなすつた。ところが此兄様も亦間もなくお死になすつたさうでございます。それで此お仲善しの兄様の事をお忘れなさらしないで、其令嬢は男性の方に会つたり交際たりは決して為さらないと衆が話してをりました。227頁

小松の日本語訳は、削除しないし加筆もしない。原文を忠実になぞった逐語訳となっている。小松訳は、澁外版からわずかに1年遅れ、林訳とは同年の出版物なのだ。日本と中国でほとんど同時であるにもかかわらず、翻訳の姿勢がこうも違っている。

【澁外】曾聞居民云：‘公爵愛悦某伯爵女，女名武歴維，才学兼備，徳色俱

佳。但一年前、伯爵棄養、女依兄而居、尋兄亦逝。女感兄撫愛恩、哀痛非常、至杜門謝客、誓不適人。’ 318-319頁

住民に聞いたところ「公爵はある伯爵の娘を愛して、その娘はオリヴィアといいますが、才学兼備にして徳も容姿もともにすぐれていました。しかし、1年前、伯爵に死なれて兄に頼って暮らしていたのですが、ついでその兄もまた亡くなりました。娘は兄の慈しみと愛の恩に感じて、その悲しみは非常でありまして、門を閉めて面会を謝絶し、嫁がないと誓いました」というのです。

最後の「嫁がない[不適人]」は訳しすぎた。そのほかは、ほぼ原文通りだといつてよいだろう。

一方の林訳は、2カ所で誤訳をする。

【林訳】公方求繫於倭立微亜子爵。子爵逝経歳矣。所遺者女公子。及其穉弟。聞其穉弟亦殤。遂屏居弗欲面人。131頁

大公はオリヴィア子爵に求愛しておりましたが、子爵が亡くなって1年が経ちます。残されたのは姫とその幼い弟でした。その幼い弟もまた亡くなり、ついに蟄居して人とは会いたくないと聞いています。

オリヴィア姫なのだから「オリヴィア子爵」はおかしい。意味が通じない。誤訳ではなく誤植だと思う。「ママ」とした。その父が子爵だとするの、どこから出てきたものか不明。原文では count となっていて明らかに伯爵だからだ。brother だけでは兄弟のどちらかは判別できない。ならば誤訳2カ所ではなく1個半だとしてもいい。

兄を亡くして境遇が同じだと考えたヴァイオラはオリヴィア姫に仕えたいと思った。だが、船長が答えるには、オーシーノ公爵でさえ会えないのだからそれはできない、と。彼女が考えついたのが突拍子もない計画だ。男装をして公爵に仕える、とヴァイオラはいい出す。原作の戯曲が、そういうことになっている。観客は、疑問を感じる必要はなく「そうですか」と見守るだけだ。ヴァイオラの男

装は兄セバスチャンとうりふたつというのが、伏線となる。

ラム版では、その奇妙ないきさつをいくらか筋立てて説明する。読者の理解を助けるためには、そうする必要がありと考へたらしい。

【ラム】 Then Viola formed another project in her mind, which was, in a man's habit, to serve the duke Orsino as a page. It was a strange fancy in a young lady to put on male attire, and pass for a boy; but the forlorn and unprotected state of Viola, who was young and of uncommon beauty, alone, and in a foreign land, must plead her excuse. p.254

【小松】そこでヴァイオラは心中に一つの計画をえたのです、即ち男子の装束をして、扈従になつてオルシノ公爵に仕へんとしました。男の装束を著けて男の子に成る、といふのは、若い女には奇態な考へでしたが、併し妙齡で非常の美人で唯一人他国の空に見棄てられてゐる倚親の無いヴァイオラの此有様では道理せめたことと思はねばなりません。228頁

若い女性が見知らぬ土地で生き抜くための奇策だ、と理由付をした。

【澁外】菲烈愁緒正多，狂思忽作，呼曰：“吾不為武歷維婢，當為公爵僕。”船主微哂曰：“貴娘何出此戲言？”女曰：“戲言乎？吾當戴男冠，披男衣，現一種鬚眉氣，得侍公爵左右，以求保全吾身。” / 噫嘻！青年麗質，流落他鄉，得托高門，實為妙計。菲烈此等思想，雖足怪異，然亦情勢所不得已也。319頁

ヴァイオラは愁いに満ちて奇態な考へを思いついた。「私はオリヴィアの下女にはなりません。公爵の下男になります」。船主は微笑する。「ご冗談でしょう」。「冗談ですって。私は男装をし、堂々たる男子として公爵のそばに仕えて我が身の保全を求めなければならないのです」 / ああ！若者が美貌で他郷に流浪すれば富貴の家に頼らなければならず、実に妙案である。ヴァイオラのこの考へは、まことに奇怪であるとはいへ、情勢によればやむを得ないことだった。

原文に引用符、疑問符その他の記号は、使用されていないはずだ。大系版の編者がほどこしたのだろう。その分、読みやすくなっている。

それにしてもこれは驚いた。澁外版は、会話に書き直し、原文のラム版よりもいきいきとした翻訳になっているではないか。「下女[婢]」と「下男[僕]」を使い、漢語ならではの区別を利用したところなど、まさにあざやかといってよい。氏名不明のその訳者は、相当な英語の知識と漢語の表現能力を持っていると理解できる。

【林訳】微瑚拉遂変計矯装為男。進事奥昔奴。131頁

ヴァイオラは、ただちに計画を変更し服装を改めて男となりオーシーノに仕えることにした。

林訳は、ここでも大きく省略している。引き続く場面で、男装すると兄セバスチャンと見分けがつかなくなった、名前をシーザリオ[賽里倭]とかえてオーシーノに仕えることになった、という。大筋ではラム版をはずれるところはない。だが、澁外版はシーザリオに「薛沙里」と漢語を当てているのだ。兄のセバスチャンを「薛伯純」にしたから妹も「薛」で統一したとわかる。そこまでやる必要があるのか、と思わないでもない。だが、ここは芸がこまかいとほめるべき箇所だ。

男装したヴァイオラは、オーシーノ公爵に仕えて気に入られ、しかも公爵を好きになる。小姓だから告白することもできず、自分の苦しい胸の内を他人事に託して話す場面だ。

【ラム】“A blank, may lord,” replied Viola: “she never told her love, but let concealment, like a worm in the bud, prey on her damask cheek. She pined in thought, and with a green and yellow melancholy, she sat like Patience on a monument, smiling at grief.” p.257

【小松】申し上げるほどのことではござりませぬが殿様彼女は決して其の恋をうちあけませず、ひた秘しに致しをりますゆゑ、虫の蝕ひ入る蒼の薔薇の

華かなりし顔色褪せて胸の思ひを徒爾に我が身世に経る眺めくらしてをりました。233頁

この部分は、ラムはシェイクスピア原作から台詞をほぼそのまま引用している。小松の日訳は、最後部分を和歌にことよせてやや意識に傾いた。大場訳では「悩み、青ざめ、憂いにやつれはて、それでも石にきざんだ忍耐の像のように、ほほえみながらその苦しみに耐えておりました」(210頁)となる。

【澹外】但彼私心情緒，終不為人道，而一片相思之苦，遂固結腦筋，情不得通，願莫能遂。繼而花容漸瘦，臉色青黃，自恨恨人，終日兀坐，已奄奄然如衰病人矣。320頁

彼女は自分の気持をとうとう人には語りませず、思う心の苦しさにつつまれて、ついに頭は働かず、感情も通じなくなって、願いはかなわないのでした。ついで花のかんばせは次第に衰え、顔色は青ざめ、自分を恨み人を恨み、終日端座して息絶え絶えの病人のようになってしまいました。

ラム版をほぼ忠実に漢訳しているといっている。では、林訳はどうだろうか。

【林訳】彼外黙中沸。猶之蠹花小虫。鑽蝕花心。心為空矣。彼今顛倒是人。容光亦已大減。縱有言笑。殆苦中覓趣。即亦非樂。133頁

彼女は外面は沈黙しておりましたが心中ではたぎっておりました。まるで花を蝕む小虫が花心をうがち心は空しくなるように。今、彼女はわけがわからず、容貌は大いに衰え、たとえ話しほほえむことがあろうとも、ほとんど苦しみのなかにおもしろさをさがすわけで、また楽しいものではないのです。

「花心を蝕む小虫」あたりがラム版を反映しているくらいで、あとはほとんど意識といっているだろう。だが、原文を大きくはずれているというわけでもない。オリヴィア姫のもとに遣った使いがもどってきて、姫は亡き兄を思って今後7年間は誰にも会わないと答えた。オーシーノ公爵は、つぎのように言う。

【ラム】 O she that has a heart of this fine frame, to pay this debt of love to a dead brother, how will she love, when the rich golden shaft has touched her heart! p.257

【小松】噫、死んだ兄御への友誼を報ゆるに斯程まで優しい情緒を保てる令嬢、恋の稚児の矢がその胸にたつたら、どれほど愛著の念を起すだらうか。
234頁

小松は、the rich golden shaft を「恋の稚児の矢」と訳した。恋愛の神キューピッドが放つ黄金の矢に当れば恋におちいる、という。正しく認識している。姫が面会謝絶をするほどに兄を思っているとは、それほどの愛情を心の奥底に持っている証拠にほかならない。対象が自分すなわちオーシーノ公爵に向かえば深く愛してくれるはず、という考えがそのことばになった。

漢訳2種類は、それをどうしたか。

【澁外】休矣！休矣！此女謬托守制，必別有所鍾情。320頁

やめろ、やめろ。彼女は間違っただけで、別に愛情を傾けているところがあるはずだ。

キューピッドの黄金の矢がでてこない。それに関連して、この部分については理解が届かなかったように見える。澁外版は、基本的によくできた翻訳だから、意外な気が少しする。一方の林訳はつぎのようになる。

【林訳】是人偶殤一弟。而哀憚至此。若歸我者。情款更当如何。133頁

彼女はたまたま弟を早くに亡くして、そこまで悲しみはばかっている。もし私のものになれば、親しみの心はいかばかりになるうか。

弟とした誤解をひきずっている。ただ、キューピッドこそ姿を消してしまったが、原文の意味するところは正しく理解しているといえよう。林訳は省略が多い

とはいえ、大筋に変更を加えるものではない。逆に林訳が省略せず、澁外版がはぶいた箇所もあるのだ。オーシーノ公爵から恋の使いを命じられたヴァイオラ（シーザリオ）の胸の内をのべるくだりである。

【ラム】 Away then went Viola; but not willingly did she undertake this courtship, for she was to woo a lady to become a wife to him she wished to marry: p.258

【小松】そこでヴァイオラは出かけて行きました、が併し自分が所天としたいと思つてゐる人の女房に為れと令嬢を口説くのでありますから、此恋の取持をするのは嬉しくありません。235頁

【林訳】賽里倭行殊快快。計彼事成。則己事敗矣。133頁

シーザリオは、行くのはことのほかおもしろくはなかつた。それが成功すれば自分のことは失敗になるからである。

ヴァイオラがシーザリオと変名を使ってしかも男装である。原文はもとの女性名ヴァイオラを使用しているが、林紘は変名に差し替えた。確かに、男装で登場しているのだからその方が理にかなっているといえる。公爵の取り持ちをして成功すれば、そのことはすなわち自分の公爵への愛が成就しないことを意味するのだ。ラム版の原意をうまくまとめている。

林訳が簡潔にまとめたこの部分は、澁外版には見る事ができない。加筆傾向を持つ澁外版では珍しい。

もうひとつ例をあげよう。ただし、澁外版と林訳は、ともにズレている。

オリヴィア姫にお目通りがかなったヴァイオラ（シーザリオ）との会話である。

【ラム】 “Whence come you, sir?” said Olivia. “I can say little more than I have studied,” replied Viola; “and that question is out of my part.” - “Are you a comedian?” said Olivia. “No,” replied Viola; “and yet I am not that which I play;” meaning, that she, being a woman, feigned herself to be a man. p.259

【小松】オリヴィア『何処から貴君はおいでなされました?』。ヴァイオラ

『私記憶えただけより以上得申し上げませぬ。其尋問の御返事は私の書抜にはございませぬ。』オリヴィア『其方喜劇の俳優かや?』『さやうではござりませぬ、さりながら私は適当ぬ役を演してをります。』とヴァイオラは言ひましたが、これは自分は女であるのに佯つて男になつてゐる心意を利したのであります。237頁

公爵からあたえられた台詞だけを伝えている、というヴァイオラ(シーザリオ)の返答である。心にそまぬ仕事であるから自然とそういう気持ちになった。ふたりのやりとりを会話で浮き彫りにする。劇中でさらに喜劇俳優を演じるとするのこみ入っていておもしろいではないか。ラムは、男装の麗人に心の内側を説明して見せた。シェイクスピアの戯曲にそういう説明があるわけではない。ここは若い読者に理解させるためのラムによる工夫なのだ。

【澥外】武歴維曰：“君自何来？”答曰：“自公爵宮中。請姑娘容余一睹顔色。”321頁

オリヴィア「どこからおいでに」。「公爵の屋敷からでございます。顔をお見せくださいませ」

説明を加えたくなるはずの箇所だが、加筆どころか原文に忠実でもない。澥外版としては、あっさりとすませた。

【林訳】倭立微垂曰。使者胡来。賽里倭曰。吾来処主人不令告女公子。故使者勿言。究竟是倭立微垂自湧現其法身否。請以明告使者。134頁

オリヴィア「どこからおいでに」。シーザリオ「私がどこから来たかは、主人が言ってはならぬというのでお答えしません。オリヴィアさま御身からお出ましになっていますでしょうか。私にお教えてくださいませ」

こちら喜劇俳優については省略してしまった。余分な台詞だと判断されたい。

オリヴィア姫が、ヴァイオラ（シーザリオ）を一目で好きになった場面である。文章の途中から引用する。

【ラム】 at first sight conceived a passion for the supposed page, the humble Cesario. p.259

【小松】一目見るとから、セザリオといふ卑しい扈從に化けてゐる者につままれたものであります。238頁

小松訳は、原文からすこしはずれる。「見せかけの小姓 the supposed page」とあるのを「化けてゐる者」と訳したから、「化かされる」から「(狐に)つままれる」と連想が働いたらしい。「一目で恋心を抱いてしまった at first sight conceived a passion for」と素直に理解したい箇所である。

【澁外】頻以目視菲烈，心中恍有所感，…… 321頁

ヴァイオラを一目見て心中にうっとりと感じるものがあり、……

【林訳】而甚悦使者之風流。赫然動容。…… 134頁

しかし、使者の風雅がとても気に入りに、ふと表情を変え、……

林訳の「風流」は、男女間の愛情を表現する常套句だ。それを示すだけで中国の読者は、オリヴィア姫にヴァイオラ（シーザリオ）への愛情が芽生えたことを理解するだろう。林訳の巧みな箇所だ。

ヴァイオラは、オーシーノ公爵のもとにもどって事の不成功を報告する。彼はそれでもあきらめない。翌日もオリヴィア姫を訪問するように命じた。そこで、詩がでてくる。片思いの切なさを歌う昔のものだとの説明がある。ラムは、シェイクスピア戯曲の原文そのままを引用した。漢訳の方法を見るためだから、一部分だけを示す。

【ラム】 Fly away, fly away, breath, / I am slain by a fair cruel maid. p.262

【小松】いざ絶えよ、はやも魂の緒 / 無情の美しき乙女われを殺めぬ。244-

245頁

原文の「息よ飛びされ」という表現は、自らの死亡、といっても肉体ではなく精神的な死を意味する。無情で美しい乙女に殺された、とあわせて読めばむくわれない恋に落ちることを表現しているとわかる。

解外版は、この箇所については原文から離れる。娘たちが日向で糸を紡いだり、編み物をしながら歌うのが原文だが、月光のもとでの行為にした。そして、上記引用部分は次のようになる。

【解外】搗碎幽愁兮，心緒如麻。323頁

搗き碎かれ憂いに沈み、心は千々に乱れる。

まったくのはずれではないが、すこし遠い。それに比較すれば、林訳は原文の意味をくんでより近い。

【林訳】魂去。魂去。吾殆為美人陷而死。136頁

魂よいけ。魂よいけ。私は美しい人に陥れられて死んだ。

翌日、ヴァイオラ（シーザリオ）がオリヴィア姫をたずねると、姫は愛を告白した。それを受け入れるわけにはいかない。退出した彼（女）に災難がふりかかってくる。姫に懸想した男が、恋敵とばかりにヴァイオラ（シーザリオ）に決闘を申し入れてきたのだ。男装をただけの中身は女性だから危機である。困難に直面したところで別の男がでてきて助けてくれた。その男はアントーニオといい、セバスチャンを助けた船長である。船長は、ヴァイオラ（シーザリオ）を窮地から救ってくれたばかりか親しげな様子で財布を返せという。彼はお尋ね者らしく役人に引立てられる時、セバスチャンの名前を出した。それを聞いたヴァイオラ（シーザリオ）は事情を理解したのだ。船の難破で死んだと思った兄セバスチャンは生きている。男装をしている自分を兄だと見間違えたのだ。

この箇所をラム版と日訳、漢訳で比較対照してみよう。

【ラム】 When Viola heard herself called Sebastian, though the stranger was taken away too hastily for her to ask an explanation, she conjectured that this seeming mystery might arise from her being mistaken for her brother; p.265

【小松】 ヴァイオラはセバスティアンと呼ばれたので、男は大急ぎに引立てられましたから、其仔細は聞かれませんでした。一寸不思議と思はれるこの事は、自分の兄と見間違へられたために起つたのかも知れないと思ひついたのであります。251頁

うりふたつの兄妹で、しかも妹は男装している。そこからくる人違いのおもしろさを演出する箇所であるのはいうまでもない。

【澥外】 正在搖頭懊惱間，忽聞客自遠反顧，大呼：“薛伯純忘恩負義，余死不甘心！”菲烈恍然曰：“是非吾兄之名乎？客殆誤吾為薛伯純乎？誠是，則吾兄必未死矣。今且從而問踪跡焉。” 325頁

頭を悩ませているところに、男が「セバスチャンめ、恩を忘れ義を忘れ、死んでも許さんぞ」とどなったのが聞こえた。ヴァイオラは、はたと思いつき「私の兄の名前ではないでしょうか。あの人は私をセバスチャンと間違えたのでしょうか。まことにそうならば、私の兄は死んだとはかぎらないのですね。今からそれをたずねましょう」という。

ヴァイオラの考え事を澥外版では独り言に変更した。原文よりもいくらか詳しくなっていることがわかるだろう。

【林訳】 其人曰。西拔司勳爾忘恩負友。賽里倭忽大悟。其人為兄友。以矯裝之故。誤而為吾兄耳。137頁

その人は「セバスチャン、お前は恩を忘れ友にそむいたのだぞ」という。シーザリオは、たちまち大いに悟った。その人は兄の友で、私が変装しているために兄と間違っただろう。

林訳のこの箇所は、ラムの原文とは異なる。台詞に漢訳していることにご注目いただきたい。

シェイクスピア原文は、“Thou hast, Sebastian, done good feature shame. / In nature there's no blemish but the mind.”(3幕4場)だ。坪内逍遙訳では、「セバスチャン、君は其上品な容貌を侮辱したのだぞ。自然物中の出来ぞこなひは人間の料簡ばかりだ」(545頁)となる。そうであれば、林紓らはシェイクスピアの原作を参照している。

ヴァイオラ(シーザリオ)が帰っていったあとのことだ。兄セバスチャンがやってきた。オリヴィア姫は、彼をヴァイオラ(シーザリオ)だと思って求婚し、そのまま結婚までしてしまう。唐突な結婚ではあるが、原作がそうなっている。

双子の兄妹が服装を同じにしたために誤解が生じた。全部の事情が明らかとなって、オリヴィア姫は兄セバスチャンと、オーシーノ公爵はヴァイオラと結ばれる。これが大団円だ。

結末部分を示す。漢訳2種類はここでもラム版とは異なった記述になっているから興味深い。

【ラム】Viola was the wife of Orsino, the duke of Illyria, and Sebastian the husband of the rich and noble countess, the Lady Olivia. p.270

【小松】妹ヴァイオラはイリ、ヤ国の公爵夫人、又兄セバスティアンは門地財産立派な伯爵オリヴィア姫の所天となつたのであります。

ここには、船長アントーニオなどどこにも登場しない。ラム版では船長を放置してしまった。ところが、漢訳はふたつとも違うのだ。

【澁外】公爵憶及燕敦里，知為妻兄之恩人，即召之来，不特旧怨冰积，且賜賚有加焉。328頁

公爵はアントーニオのことを思いだした。妻の兄の恩人であることを知ってすぐさま来させ、昔の怨みを解いたばかりか、褒美をもあたえたのだった。

【林訳】安凍尼旋亦得釈寧家。140頁

アントーニオはただちに許され家に帰った。

船長アントーニオがオーシーノ公爵に逮捕されたのは、昔の海戦で公爵の甥に重傷を負わせたのが理由だ（林訳では殺したことにしている〔曾殊其兄子〕）。ラム版では船長は逮捕されたままで始末をつけていない。シェイクスピア原作では、5幕1場においてオリヴィア姫に「すぐ釈放させましょう He shall enlarge him.」といわせている。enlarge が古語で放免するという意味だ。ということは、漢訳2種類は、ともにシェイクスピア原作にもとづいてラム版の最後部分を補ったことになる。用意周到であるといわなければならない。

4 結 論

清末において、ラム『シェイクスピア物語』を漢訳する2種類があった。

先に刊行された訳者名不記の『澥外奇譚』と1年後の林紘+魏易共訳『吟辺燕語』である。

前者は、ラム版の半分を、後者は全部を翻訳している。翻訳の内容をいえば、両者ともに原文を逐語訳してはいない。

「十二夜」を例にとると、澥外版は言葉を加えて饒舌であるからその翻訳は説明的になった。もうひとつの林訳は、省略を基本にしたから結果として大筋をつかまえて簡潔な翻訳になった。

両者の翻訳姿勢をひとことで表現すれば、饒舌と簡潔の正反対である。つまり、逐語訳ではない点で一致している。しかし、いくつかの誤解があるとはいえ、決して多いわけではない。原文を無視することもなければ、大きくはずして訳者が勝手に勝手気ままに漢訳しているわけでもない。しかも、シェイクスピアの原作戯曲を頭に入れている。すなわち、シェイクスピア劇を知ったうえでラム版を翻訳しているのだ。この点に注目すべきだと私は考える。もう一度、結末部分で確認してほしい。2種類ともにそれぞれが真摯に翻訳している。いくら強調しても強調しすぎることはない。

林訳についていえば、デタラメな漢訳だという印象が広まって定着しているのではなかろうか。

たとえば、次のように説明する日本の研究者佐藤一郎がいる。

「『巴黎茶花女遺事』以外でひろく読まれたのは『アンクル・トムス・ケビン』の「黒奴籲<ゆ>天録」、『アイヴァンホー』の「撒克遜(サクソン)劫後英雄略」であり、本格的な古文家が西洋文学の価値を認め紹介したのものとして、小説の地位の向上に大いに功績があった。ただし外国語のできないかれの翻訳は、すべて口訳者との共同作業の結果であり、作品の選択は必ずしも妥当とはいえず、伝奇的要素の豊富なものが多く選ばれている。文学革命に際しては、口語運動の反対者となり、時代から取り残された」*4。この部分は、中国での評価をそのまま流用しているだけ。問題は、そのつぎなのだ。

「林紘の翻訳は今日の水準からすれば翻訳とはいいい切れないかもしれないが、それが行なわれたこと自体が清末文学界の反映でもあった」

「翻訳とはいいい切れないかもしれない」と書いている。翻訳でなければ、なにか。文面から見ると、原作を勝手気ままに改作した翻案だと考えているらしい。竹内好が林訳を評して「厳密な翻訳とはいえない」(『魯迅』世界評論社1948.10.10)と述べたことがある。それに影響を受けたか。それとも、単なる偶然の一致か。

また、別の研究者はこう書く。

「外国語に通じなかったが、口訳するのを聞いて桐城派の美文でそれを著した。そのため、誤訳の類は免れず、むしろ翻案に近いものも多かったが、林訳小説と呼ばれ、近代西欧文学の紹介に果たした役割は大きい」*5

外国文学を紹介した功績は評価する。だが、「翻案に近い」と書いて翻訳の質については負の評価を下している。

林訳は翻訳でもないし、翻案に近い、か。これらは無責任な説明だと私は考える。林訳の実物を少しでも見ていれば、書けるはずのない説明であるからだ。

【注】

1) 阿英「翻訳史話」第4回(1938年とある)。ここでは『海外奇譚』とする。『小説四

談』上海古籍出版社1981.12。242-244頁。

本稿を書いたあとの2008年6月15日、報告会で瀬戸宏が配付した資料に『澥外奇譚』表紙、叙例、目次、本文1頁の影印があった。作品名の一部を該影印目次によって訂正した。また、「叙例」では、Shakspere^{ママ}と表記する。そういう綴りもあって誤植ではない。本稿の引用文は、それぞれの文献にある訂正されたものを示した。

- 2) 馬祖毅『中国翻訳史』上巻 漢口・湖北教育出版社1999.9。725頁。馬の誤解は、注1に示した阿英の文章の影響を受けたのだろう。阿英は林紘の『吟辺燕語』を説明して「原本が「沙氏筆記[シェイクスピア物語]」だと誤解し[誤原本為《沙氏筆記》]」(244頁)と書いているからだ。馬は、林訳を説明したこの阿英の記述を『澥外奇譚』にも適用した。
- 3) 郭延礼「応加強翻訳文学史溯源的研究 読《中国翻訳詞典》所想到的」『文藝報』第107期2000.9.12。「応加強翻訳文学史溯源的研究」と改題して『自西徂東：先哲的文化之旅』(長沙・湖南人民出版社2001.4)および『文学經典的翻譯与解讀 西方先哲的文化之旅』(済南・山東教育出版社2007.9)に収録。
- 4) 佐藤一郎『中国文学史』下 高文堂出版社1983.2.25。93頁
- 5) 前山^{ママ}(前田利昭)「りんじょ[林紘]」丸山昇、伊藤虎丸、新村徹編『中国現代文学事典』東京堂出版1985.9.30。307-308頁。なお、同内容のものがある。「外国語を習得しておらず他人が口述したものを桐城派の擬古文に翻案したため誤訳も多かったが、当時の青年読者に近代ヨーロッパの文化を理解させた意義は大きい」『中国20世紀史』東京大学出版会1993.7.10。68頁の注1。

林訳シェイクスピア

クイラー＝クーチ版「ジュリアス・シーザー」

未発表。シェイクスピアの「ジュリアス・シーザー」について、底本のクイラー＝クーチ版と林訳を検討する。その結果は驚くべきものだった。前部の3分の1がクイラー＝クーチ版そのままであり、残りの3分の2がシェイクスピア戯曲によっているのである。

批判の大波は、2度にわたって林紘を襲った。1918年と1924年だ。

林紘はシェイクスピアについて詩と戯曲の区別ができない、と劉半農はいう。その根拠として『吟辺燕語』が示された。林訳批判のはじまりだ。劉がそれを指摘したのは1918年である。錢玄同が王敬軒名義で捏造論文を書き、林紘を称賛する。劉半農がそれに答えて林紘を批判する、という文学革命派による手のこんだ策略だった。これが最初だ。その直後、胡適は、劉半農の使った用語が適切ではないと理解して「戯曲」と「記叙体」に修正した。

6年後、林紘には2度目の災難がふりかかる。林が逝去した1924年である。鄭振鐸が登場する。シェイクスピア戯曲を小説化して漢訳した、という。原作の戯曲のすばらしさをだいなしにした、と林紘を批判した。鄭は、『吟辺燕語』には触れず、かわりに「凱徹遺事（ジュリアス・シーザー）」などを証拠にあげた。

以上が定説となって現在にいたっている。

だが、林紘はシェイクスピアの原作を直接翻訳したのではない。劉半農、鄭振鐸の方が間違っていた。

シェイクスピアの戯曲は、多数の人々によって小説化されている。そのなかで著名なのはラム姉弟だ。このラム版が『吟辺燕語』の底本だった。林紘の漢訳が

小説体であるのはなんの不思議もない。

シェイクスピア戯曲の小説化に手を染めたのは彼らしかいなかったわけではない。ラム姉弟が選択した作品20作のなかからあらためて独自に小説化した人もいる。時間がたてばことは使いに変化が生じる。それに応じた小説化があるのは自然なことだ。

また、ラム姉弟が選んだ以外の作品、とくに歴史劇のいくつかを小説化した英国人もいる。クイラー＝クーチ（彼の筆名Qにちなみ、以下Qと称す）がそのひとりだ。林紓は、Qの英文小説化本を翻訳の底本に使用した。ゆえに、その結果が小説になるのは当たり前だ。その点について、鄭振鐸は林紓に濡れ衣を着せた。劉半農につづく2度目の批判だが、いずれも間違っただけだ。自分たちの敵対者として林紓を際立たせて批判するためには、林の逝去後であっても鄭にはそうすることが必要だった。

シェイクスピア歴史劇について、Qの小説化本があるという事実を鄭振鐸は本当に知らなかったのだろうか。無知によるものであれば研究者としていかがかと思う。知ってやったのであれば、悪意が露骨である。のちの研究者も気づかなかったことだ。鄭振鐸は、たぶん何の知識も持たなかったのだろう。いずれにしても、林紓に対してはひどい仕打ちだったと私は感じる。

林紓は、濡れ衣を着せられたままだ。

林訳の歴史的な価値を認める研究者がいるのは事実である。だが一方で、それをはるかにうわまわる多くの研究者によって林紓の翻訳はデタラメだと批判されつづけている。その大きな根拠になっているのが戯曲の小説化なのだ。ゆえに、Qの英文小説化本を特定したことは、とりもなおさず林紓の無実を証明したことになる。

鄭振鐸がかかげた「凱撤遺事」などの林訳について、その取り扱い、あるいは説明にまつわる疑問を払拭することができない。

Qの小説化本が存在することを知らなかったのは、しかたがないでしょう。それにしても、林訳シェイクスピア歴史劇について検討した文章は、現在まで書かれていないように思う。信じられないことだ。シェイクスピア原文の冒頭と林訳のはじめを比較対照することもしない。その違いはあまりにも明らかではあるが、

説明するくらいはしてもいいのではないか。原文の戯曲が林訳では小説体になって、これほどに異なっている、と解説するのが普通だろう。結果として林訳批判になるうとも、それが研究の手順というものだ。それがまったくない。鄭振鐸が批判した林訳シェイクスピアだから、訳文について検討する必要はない、という判断だと思う。罵るだけ。しかし、痛罵することが研究だろうか。

そういう経緯があるから、林訳の質を知るためには、底本となったQの原文との比較対照が必要となる。

ひとつの例として林訳「凱徹遺事」をとりあげる。林紘はQ版「ジュリアス・シーザー」をどのように漢訳したのか。

1 Qの英文小説化本

林訳の底本は、『シェイクスピア歴史物語 Historical Tales From Shakespeare』(Edward Arnold, London, 1899)である(本稿で使用する記号は【Q版】)。著者は、前述したようにアーサー・トマス・クイラー＝クーチ(Arthur Thomas Quiller-Couch, 1863-1944)という。ナイト爵に叙せられている。該書は、シェイクスピア歴史劇を小説化した作品集だ。架蔵のもう1冊は重版。Charles Scribner's Sons, New York, 1900となっている。両者は、装丁とページ数が違うだけ。本文に異同はない。これ以後も重版がくりかえされているらしく、知る人は知っている。

序文(PREFACE)が6頁、本文は附録を含めて368頁ある。

収録作品は以下のとおり。林訳の漢訳名をあげる(林訳「亨利第五紀」は未見)。

	Coriolanus pp.1-37	コリオレイナス
凱徹遺事	Julius Caesar pp.38-77 (原文はCaesar)	ジュリアス・シーザー
	King John pp.78-104	ジョン王
雷差得紀	King Richard the Second pp.105-134	リチャード2世
亨利第四紀	King Henry the Fourth pp.135-218	ヘンリー4世
亨利第五紀	King Henry the Fifth pp.219-256	ヘンリー5世

亨利第六遺事 King Henry the Sixth pp.257-312 ヘンリー 6 世
King Richard the Third pp.313-364 リチャード 3 世
Appendix pp.365-368

本稿では、その「ジュリアス・シーザー」、漢訳名「凱徹遺事」を検討する。
『小説月報』に連載された。以下のように表示がある（記号は【林訳】）。

「凱徹遺事」 英国莎士比原著 閩県林紘 / 静海陳家麟同訳
『小説月報』第 7 卷第 5 - 7 号1916.5.25-7.25

これを見れば、雑誌連載では、「英国シェイクスピア原著[英国莎士比原著]」
とのみ表示されたことがわかる。底本としたQ版の名前は出していない。

今から見れば、正確ではないという人もいるだろう。だが、当時の外国文学翻
訳には、普通に見られる書き方だ。林紘にすれば、シェイクスピアという名前で
くっただけだ。それを鄭振鐸が誤解した。林紘はシェイクスピアの戯曲を勝手に
小説体で翻訳した、と指摘したのだ。戯曲と小説の区別もつかないと罵った。
罵るだけだから、その「区別がつかない論」そのものが成立しないことに気づか
ない（別稿参照）。

のちの研究者が、鄭の指摘を検証することなく全員が支持した。定説となった
のは、1924年に鄭振鐸が書いた論文「林琴南先生」（『小説月報』第15巻第11号1924.
11.10）以来のことである。鄭の文章は、同年、林紘の死去に際して書かれた。林
紘には反論のしようがない。もっとも、生前であっても彼にはその考えはなかつ
たであろう。前述のように、以前にも同じことが銭玄同と組んだ劉半農によって
行なわれている。だが、林紘は無視した。文学革命派は相手にしないというのが
彼の基本姿勢だ。

研究者の誰も、鄭の誤りを訂正しなかった。そればかりか、林紘罵倒の列に参
加しつづけた。80年以上にわたるその時間の長さは、ほとんど私の理解を超え
る。ため息がでそうになる。

林紘の翻訳は、Q版「ジュリアス・シーザー」を底本として雑誌 3 期に連載さ

れた。1回の掲載量はほぼ10頁、全体で32頁という分量は、Q版よりも圧縮されているようにも見える。だが、改行も空白もない。活字が詰まった印刷だからそのような印象が生まれるだけだ。

本稿では雑誌掲載にあわせ、便宜的に第1-3回と呼ぶことにする。

漢訳の本文とQ版を対照していくと、奇妙な現象にぶつかる。両者が一致しない部分が出現する。前半はQ版なのだが、後半が興味深い。どういうことか。順を追って説明する。

2 第1回(1-10頁) 『小説月報』第7巻第5号1916.5.25

冒頭部分は、別稿においてすでに紹介した。だが、林訳がQ版を底本としていることを確認するためにあえて引用しておきたい。

Four hundred and fifty years had passed and the Rome of Coriolanus had become the mistress of the world. But all these years had not healed the quarrel between the patricians and plebeians; for as the city increased in size and dignity and empire, so her citizens increased in numbers and grew less and less inclined to submit to the rule of a few noble and privileged families. p.38

450年が経過し、コリオレイナス(注:紀元前ローマの伝説的勇士)のローマは世界の覇者となった。しかし、それらの年月は貴族と平民のあいだの紛争をなくすことはなかった。なぜなら帝国が領土と威厳を増すにつれ、市民は数を増加させて、だんだんと少数の特権階級に服従したくなる気持ちを減少させたからである。

【林訳】羅馬立国。可四百五十年。此四百五十年中。幾欲一統欧西。可云盛矣。惟貴族平民之乖忤。終未臻於和平。以羅馬發祥。特一小城。已而統攝全欧。拓地既広。殖民亦衆。民衆則智識日諳。意氣激昂。万不能屈服於貴顯大臣之下。1頁

ローマが建国してまさに450年になる。この450年間にヨーロッパを統一しようと旺盛であるといえる。ただ、貴族と平民が離反し、平和状態にはい

たっていない。ローマは、特に小さな都市から発祥し全ヨーロッパを統一してしまった。領土の拡張はひろく、殖民も増加した。そのため、民衆は日々知識にたけてきており意気は軒昂にして、高位高官重臣に決して屈服しようとはしなかった。

Qが小説化にあたって以上のように書き加えたのは、物語の歴史背景を説明するためであるのはいうまでもない。シェイクスピアの戯曲だと思って林訳を読めば、確かに頭が混乱する。ト書きで時代背景を説明する手法であろうか。それにしてもシェイクスピアの原文からまったく離れている。外国語を理解しない林紘のことだから、いいかげんな翻訳をしたに違いない。鄭振鐸は、そう考えた。そうでなければ、底本を探索する努力くらいはするだろう。いや、やはりシェイクスピア戯曲そのものを翻訳の底本にしたと鄭は信じていたのか。ゆえに小説に書き換えて漢訳したと非難した。あるいは、最初から林紘批判をするつもりで文章を書いた。調査する気はもたらなかったのだ。現在では、鄭の思考がどうだったのか、もはや知ることはできない。結果として、鄭の指摘が間違っていたという事実が残るだけだ。

本稿で使用する原本、訳本などを紹介しておく。

シェイクスピア原本は、William Shakespeare, Wells and Taylor (ed.) *THE COMPLETE WORKS*, (Oxford University Press, 1988) を使用する。

日本語訳は、シェイクスピア著、坪内逍遙訳「ヂューリヤス・シーザー」(『ザ・シェイクスピア』第三書館2002.8.15)だ。日本では歴史的な翻訳だし、林訳と対照させるには坪内訳が適当だろう。記号は【坪内】だ。引用にあたってルビは省略する。

Q版の現代漢語訳がある。奎勒-庫奇改写、湯真訳「裘力ス・凱撤」(『莎士比亞歴史劇故事集』北京・中国青年出版社1981.3)だ。こちらにも必要に応じて参照する。記号は【湯真】。

くりかえすと、【Q版】はクイラー=クーチの英文小説化本を、【林訳】はその漢訳のそれぞれを表わす記号である。

ポンペイの息子たちを倒したシーザーが凱旋してくる。ポンペイの治世ではポ

ンペイを、勝利者がシーザーであればシーザーを、とその時々^々の権力者を賛美するローマ市民を説明して、その日がルペルカリアの祭日だ。

1幕1場

You know it is the Feast of Lupercal. p.601

【坪内】今日はリューパーカルの祭日だが。697頁

戯曲だから坪内の日本語訳は原文のままだ。当たり前である。だが、Q版は、そこに説明を加える。説明が長いので短く引用する。

【Q版】There was an annual festival at Rome called the Lupercalia, held on the 15th of February, at the foot of the Aventine Hill, where Romulus and Remus, the founders of the city, had been discovered as infants with a she-wolf for their nurse. p.40

ローマにはルペルカリアと呼ばれる毎年恒例の祭があった。2月15日、アヴェンティヌスの丘の麓で催されたが、そこは町の創設者ロムルスとレムスが幼児のとき授乳した雌狼とともに発見された場所だった。

【林訳】時羅馬有佳節名曰留批卡利亞節。在二月十五日。国人大集於亞文汀山之下。在古史中。載羅馬鼻祖為兩小兒。一名曰羅密歐拉司。一名雷麻司。生時無母。母狼乳之以長。2頁

当時のローマにはルペルカリアと呼ばれる祭があった。2月15日にアヴェンティヌス山の麓に国民は大勢集まる。古代史においてローマの鼻祖はふたりの幼児だとされる。ひとはロムルスといい、もうひとはレムスといった。生まれたとき母がおらず、雌狼が授乳して育てた。

【湯真】羅馬有個節日，叫做盧柏克節，每年^マ三月十五日都在艾文蒂尼山麓慶祝這個節日；因為羅馬城的建造者羅米拉斯和雷馬斯嬰孩時由一只母狼哺養，人們是在那里發現他倆的。36頁

ローマに祭があり、ルペルカリア祭といい、毎年^マ3月15日にアヴェンティヌス山麓においてこの祭を祝った。なぜならローマの創設者ロムルスとレ

ムスは幼児の時雌狼に育てられ、人々が彼らふたりを発見したのはその場所だったからである。

Q版の原文が2月になっているのに、湯真が3月に誤訳したように見える。これは単なる誤植だろう。

この部分からもわかる。林訳がQ版を底本にしているのはまぎれもない事実だ。この日から1ヵ月後の3月15日に事件はおこると予告された。シーザー殺害である。ブルータスたちの共謀だ。殺害の場面で、あの有名なセリフ「ブルータス、お前もか」がシーザーの口から発せられる。

3幕1場（ト書きの部分から引用する）

They stab Caesar, 「Casca first, Brutus last」

CAESAR *Et tu, Bruté?* Then fall Caesar. p.612

【坪内】カスカ真先に一撃を下す。つゞいて一同競ひ起ってシーザーを襲ふ。暫く立廻り。とど、ブルータスがシーザーを刺す。

シーザ や、ブルータス、お前までが！ぢゃ、もう！ 707頁

【Q版】He turned at bay, but only to take the blow from the man he most trusted, and to look him in the eyes / ‘Thou too, Brutus?’ p.56

彼は追いつめられ、結果は最も信頼する人物からの一刺しを受けると彼の目をのぞき込んだ。/ 「お前もか、ブルータス？」

【林訳】凱徹極力与格。忽見一人為生平莫逆之交。亦操短剣而前。凱徹呼曰。不魯他司。汝亦為此状耶。9頁

シーザーは極力闘った。ふと平生最も親しいひとりが短剣を握って来るのが見えた。シーザーはいった。ブルータス、お前もそうするか。

【湯真】他想負隅頑抗，結果只是挨了他最信任的一刀，他直望着他的眼睛說：/ “勃魯托斯，你在内嗎？” 49頁

彼は頑強に抵抗しようとしたが、その結果は彼の最も信任するものからの一刀を受けただけで、彼の目を真っ直ぐ見ていった。/ 「ブルータス、お前も仲間か？」

林訳は、Q版をほぼ忠実に翻訳している。以上を見ても理解できるだろう。

at bay が出てきた。日本での翻訳にまつわるひとつの出来事がひろく知られている。今、なんとなく私が思いだしたくらいに、日本翻訳史上の逸話としては有名なのだ。

明治時代に原抱一庵が a lion at bay を「湾頭に吼えるライオン」と訳した。それを山縣五十雄から誤訳だとなじられた、というもの*¹。誤訳の例として名高い。作者と作品は異なるが、本稿のこの箇所に関係している。

山縣の指摘を紹介しよう。

マーク・トウェイン著、山縣五十雄訳「該撤殺害 THE KILLING OF JULIUS CAESAR “LOCALIZED.”」*²である。訳文の「該撤」はカエサルだから「シーザー殺害」となる。抱一庵との論争について山縣は長文を書いている。「トウエーン論 抱一庵氏と余との論戦」という。マーク・トウェインの作品そのものが、シーザー殺害を新聞記事にしたらどうなるか、そういう発想で書かれている。殺害の瞬間、すなわち上記のQ版でいえば「彼は追いつめられ He turned at bay」に該当する箇所だ。

以下は、山縣の文章である。

(八) 原文第百五十九行以下第百九十四行に至る該撤殺害の光景を写せる所は氏も力を極めて訳せられしと見え、文章頗る巧妙なり、然し、氏は一つ頗る滑稽なる誤訳をなされたり、原文第百八十一行より第百八十二行に至る great Caesar stood with his back against the statue, *like a lion at bay* なる句を氏は『該撤は湾頭に踞する獅子の如く、依然ポンペー像下に髪逆立てゝ起てり』と訳されしは面白し。274-275頁

「八」というのは、誤訳を数え上げてそのなかのひとつだ。現在までひろまっている「湾頭に吼える」ではなく「湾頭に踞する」がもとの文章らしい。注目点は「湾頭に」だからどちらでもかまわない。日本語に訳すとすれば「追いつめられたライオンのように」くらいになる。bay には湾頭という意味はある。そのほ

かに獵犬の吼え声、あるいは窮地をもあらわす。だから追いつめられるということになる。辞書にはそう説明があるのだが、抱一庵はそれを知らなかった。

しかし、誤訳をやってきた私としては、今後も誤訳するだろうと考えて、抱一庵を笑う気にはとてなれない。

3 第2回(11-20頁) 『小説月報』第7巻第6号1916.6.25

問題は、この第2回からなのである。

林訳は、ある部分でQ版を離れるのだ。離れてどうしたか。シェイクスピアの原文にもどっていく。

シーザーの亡骸を引き取ったマーカス・アントーニウス(マーク・アントニー)である。Q版はアントニーの台詞を省略して次のように簡潔化した。

【Q版】 Sinking on his knees beside it, he begged its dumb forgiveness that he must behave so meekly and gently with 'these butchers.' Then after prophetic promise of the curse this murder should bring upon Rome and Italy, he rose, despatched a messenger to Octavius, Caesar's adopted son, and lifting the body, bore it out to the market-place. p.59

亡骸のそばにひざまずき、自分が「あれら屠殺者たち」におとなしくまた穏やかに振る舞わなくてはならなかったことを無言の死者にわびた。この殺害がローマとイタリアに呪いをもたらすと予言したあと、彼(アントニー)は立ちあがり、シーザーの養子オクティヴィアスに使者を急送すると、亡骸をかかげて市場に運んだ。

湯真の現代語訳は、Q版を忠実に翻訳する。見てほしい。

【湯真】安東尼跪在屍体旁边，請求他的無言的寬恕，恕他不得不跟“這些屠夫”曲意周旋。他預言由於這次謀殺，呪詛将要降臨到羅馬，降臨到意大利。然後，他站起身來，派人帶了個口信給凱撒的養子奧克泰維新，他就擡起屍體，

把它搬到市場上去了。52頁

アントニーは、亡骸のそばにひざまずき、彼が「あれら屠殺者」に心ならずも迎合せざるをえなかったことをわび、彼の無言の許しを求めた。この殺害により、呪いがローマに降りかかるであろう、イタリアに降りかかるであろうことを予言した。その後、彼は立ちあがりシーザーの養子オクティヴィアスに知らせを持たせた人をやると、亡骸をかかげて市場に運んだ。

だが、林訳はこれとは異なる。Q版にはないアントニーの台詞が、出現する。

【林訳】驚呑礼独留守凱徹之尸。跪諸尸側祝曰。我对此一群蛮野之夫。不能不下其氣。公英靈勿当怪我。公為互古之偉人。今但餘殘骸在此。然此英雄之尸体。実為古今所創見之一人。至可宝貴。凡殺公而使公流血者。其人当被天誅。(後略) 12頁

アントニーはひとり残ってシーザーの亡骸を守り、そばにひざまずいて言った。あの野蛮なやつらに対して俺は気持ちを抑えざるをえない。あなた、英霊よ俺を責めないでくれ。あなたは古今にわたっての偉人だ。今ここに遺骸がある。しかし、この英雄の亡骸は、実に古今を通じて未曾有のひとりでもっとも貴い。あなたを殺し血を流させた者には、当然天罰が下される。(後略)

林訳では、このあともまだアントニーの独白が長々と続く。よっているQ版にはもともと存在しない部分だ。では、林紘が勝手に作り上げて挿入したのか。いや、違う。この部分の来源は、シェイクスピアの原文なのだ。

3幕2場

ANTONY

O pardon me, thou bleeding pice of earth,
That I am meek and gentle with these butchers.
Thou art the ruins of the noblest man

That ever lived in the tide of times,
Woe to the hand shed this costly blood!

Over thy wounds now do I prophesy (後略) p.614

【坪内】おゝ！赦して下さい。血に塗れた土塊となり果てたシーザーよ、俺が汝を屠ひ殺した奴等と睦じさうにしてゐるのを堪忍して下さい。あゝ、汝は涼々として休むこと無き時の潮流中に生存した人間中の、最も高い、最も偉いなる者の遺骸だ、かういふ貴い血をむざむざと流しをった奴等め、今に思い知りをらう。(後略) 708頁

林訳がほぼシェイクスピア戯曲を底本にするのは、ここらあたりからになる。別のいい方をして同じだ。林訳は、Q版から離れてしまう。

ただし、Q版はシェイクスピア戯曲の台詞を残してうまく利用している。だから、林訳がその部分に関してQ版によったのか、シェイクスピアの原文によったのか見分けがつきにくい。

同じく3幕2場。シーザーの亡骸とともにアントニーが登場し、演説をするこれも有名な場面だ。

アントニーは、ブルータスのことを「高潔な人 an honourable man」だという。Q版では a man of honour と表現する。ブルータスについて、冒頭で合計4回もくり返せば聴衆は奇妙な感じにつつまれる。ほかならぬその高潔な人が、シーザーを集団で殺した。その後も、幾度となくくり返される。その結果それまでの評価は逆転し、ローマ市民は打倒ブルータスを大合唱しはじめた、という運びになる。

林訳では「^{ブルータス}不魯他司(為世)偉人」(14-15頁)という語句で冒頭部分に3回でてくる。ほぼシェイクスピアの原文通りだ。Q版でも該当箇所はシェイクスピア戯曲のままだから判別がむづかしい。

細かなところに手がかりがある。

アントニーは、朗読することはできないといいながらシーザーの遺言状をわざと取り出す。内容を知れば、シーザーに感謝し彼の血を布にひたし髪の一筋も形見に求めて家の宝として子孫に残すだろう。ブルータスをほめて、巧みに評価を

逆転させる。遺言状の内容をほのめかして市民の関心を呼びおこす。アントニーの巧みな話術を劇場の観客が堪能する場面である。

Q版は、血をひたし、と言いよどみそのまま中断する。家の宝という部分は、小説化にあたって採用していない。だが、林訳では「子孫に伝えて伝家の宝とするだろう [並欲伝之孫曾。用為伝家之宝] 」(15頁) までである。明らかにシェイクスピアの原文にもとづいて翻訳している。

アントニーの復讐は実を結んだ。ブルータスとキャシアスは狂人のように町から逃亡した [不魯他司。及卡司也司。如風 [瘋] 病之人。狂奔出城而遁] (18頁)。

3幕3場は詩人のシナ (Cinna 西那) が登場する。

シーザー殺害の共謀者のなかにも同名の人物がいる。詩人は、彼と間違えられる。暴徒たちは、詩人シナに襲いかかった。Q版はこの部分を全面的に削除する。だが、林訳は、原作戯曲のとおり漢訳している。

これ以降、そのままシェイクスピア戯曲を底本にして漢訳したのかと思えば、そうではない。状況を説明するにはQ版が便利だと考えたのだろう、必要に応じて取り込む。

シーザーの縁者 (姉の子といわれる) オクティヴィアスは、アントニーと組んで殺害者追討軍を組織する。4幕1場は、そのオクティヴィアスとアントニーらが処刑名簿を作成するところからはじまる。Q版ではその前に解説がつく。長いから引用は一部分にとどめたい。

【Q版】 Between these two parties - Antony and the mob on one side, and the majority of the senate on the other - stood the young Octavius, Caesar's grand-nephew and heir, with an army at his back; a young man, not yet twenty, but wiser than other young men,..... (後略) p.65

両派 アントニーと群衆の1派および大多数の元老派の1派 のあいだに、年若いオクティヴィアスが位置し、彼はシーザーの大甥でしかも後継者であり軍隊が背後に控えていた。まだ二十歳にもなっていない若者だが、ほかの若者よりも賢く、..... (後略)

【林訳】 此時羅馬城中。分為二隊。一為鷲吞礼所領聽講之民。一為元老院中

之老輩。二党未洽。而阿克忒米垂司出而聯絡之。成為水乳。阿克忒米垂司者為凱徹之族孫。以武達司兵柄。年甫二十。聰明貫徹。超軼流輩。(後略) 18頁

この時ローマは2派に分かれており、ひとつはアントニーが率いる民であり、もうひとつは元老院の老人たちだ。2派はうち解けなかった。しかし、オクティヴィアスが連絡をとって水と乳のように溶け合った。オクティヴィアスはシーザーの兄弟孫で兵権を司ることに通じており、歳はやっと二十だが聡明このうえもなく同輩をはるかに超えていた。(後略)

これは、シェイクスピアの原文にはない。林訳がQ版から取り入れたのは、確かだ。

林訳は、その時々でどちらを底本にしたか。すなわち、シェイクスピア戯曲とQ版をどのように判別するか。

ひとつの手がかりは、「曰」という漢字1文字だ。林訳が人物名のあとに「曰」を使って台詞であることを明示している箇所に注目する。「不魯他司曰 [ブルータスは次のようにいった]」というように表示される。説明の部分が少なく、「曰」が頻出するところは、その目で見れば目立つ。逆のいい方をすると、改行して台詞を示さないから、一見ただけでは散文と区別がつかない。ひとつの落とし穴だということができる。

もうひとつは、Q版では省略されているが林訳では翻訳がある部分だ。これを見れば林訳がシェイクスピアの原文にもとづいて漢訳していることがわかる。上にいくつかを示したからご理解いただけるだろう。当然、その逆もある。

4 第3回(21-32頁) 『小説月報』第7巻第7号1916.7.25

4幕2場から最後の5幕5場で完了する。

出だしにルーシアス・ペラの名前があるというのは、Q版から説明を取り込んだからだ。シェイクスピア原作ではそうならない。

【Q版】And in the East Brutus was beginning to learn that the philosophy

found in books will not carry a man through the business of statecraft, especially when one is conducting a revolution. He wanted money, and pressed Cassius for money. He would have no unjust tolls levied in his own province, and disgraced his subordinate, Lucius Pella, on finding him guilty of pilfering the inhabitants of Sardis. (後略) p.67

東方においてブルータスは学びはじめていた。すなわち、書物のなかの哲学は治国という仕事を人にやり遂げさせないだろう、特に革命を指揮している時において、ということ。彼は資金を必要としていた。そこでキャシアスに資金を求めて強いた。彼は自分の地方で不正な税金を課すつもりはなかったから、部下のルーシアス・ペラがサルデイスの住民から横領したという罪を犯したことで彼を侮辱したのだった。(後略)

【林訳】此時不魯他司避居東方。忽大悟治国当独出心裁。若恃前聞守旧律。匪不敗者。今欲練兵復仇。乃無糧儲。即令卡司也司為之籌款。不魯他司所居地。為沙地司。據羅馬之東。不魯他司意不欲取諸平民。而秘書貝拉則進聚斂之策。不魯他司不以為可。(後略) 21頁

その時ブルータスは東方に避けており、治国には独自の構想を出さなくてはならないことを、はたと大いに理解した。もし、旧聞旧律を頼りにすれば、敗れないわけがない。今は兵を訓練して復讐したかった。だが、給料の蓄えがない。そこでキャシアスに金策を命じた。ブルータスのいる場所はサルデイスでローマの東にある。ブルータスは、平民から取り立てたくはなかった。そこで秘書のペラが集める方策を呈上したが、ブルータスはよしとしなかった。(後略)

ブルータスが治国の困難さを悟る背景には、シーザー殺害後に彼がとった優柔不断な行動がある。アントニーを殺さず、彼に追悼演説をすることを許した。その結果が、市民による評価の逆転になり自らの逃亡につながった。

林訳は、Q版の逐語訳にはなっていない。なぜなら、口述翻訳者の訳を聞きながら文言で筆記するのが林紘の方法だからだ。Q版に見える「革命 revolution」については、林紘は無視した。というように、一致しているわけではない。Q版

がペラについて説明する内容は、林訳では違うものになっている。しかし、底本の内容はほぼすくい取っていると私は判断する。

ブルータスとキャシアスが激しく口論する。そこに割って入ったのが詩人だった。これをきっかけにしてふたりが急に和解する場面だ。Q版ではその詩人に名前をあたえている。

【Q版】 They had come thus near to being reconciled when a noise at the tent-door interrupted them, and in broke a crazy follower of Brutus, one Marcus Phaonius, who set up to be a philosopher, but from his eccentric behaviour was more often regarded as a fool. This fellow had heard that the two generals were quarrelling; and, pushing past the guards, he struck an attitude and began to recite certain verses of Homer, full of wise counsel, but with such extravagant gestures (後略) p.70

このように彼らが仲直りしそうになった時、テントの入り口で騒音がして彼らを妨げた。飛び込んできたのはブルータスの気の狂った従者で、マーカス・ファオニアスという。哲学者をきどっているがその突飛な行動によって愚者だと見なされている。この従者は、ふたりの将軍が口論をしていると聞いた。そこで衛兵を押しつけ威張った態度でホーマーの詩の賢明で忠告することばでいっぱいのある一節を朗読しはじめた。ただし度を越した身振りだったものだから..... (後略)

【林訳】 即有一人。名曰浮納司。侍不魯他司來者。自命有學。然人之視之者。爭目之為書癡。聞二人憤爭。則狂奔而入。而守門者不聽入。浮納司曰。二帥憤爭。非吾軍之利。吾當解釋其仇。(後略) 24頁

そこにファオニアスという名前のブルータスに仕えるものがいた。自分では学があると思っているが他人から見ると本の虫にすぎない。ふたりが口論をしていると聞いて乱入しようとしたが門番がゆるさない。ファオニアスはいった。将軍ふたりが口論しているのは、わが軍にとって利にはならない。わしがその恨みを解いてやろう。(後略)

林訳ではホーマーをださずに、ファオニアスの説得に改変した。その方が読者には理解しやすいという判断だろう。ここは、Q版によりながらも、林紓は少しばかり自由に解釈して翻訳したことになる。

最後に、Q版では説明文にしてあるが、林訳では戯曲のままに翻訳している場面を紹介しよう。ブルータスの妻ポーシャが自殺したことをキャシアスに告げたあとだ。

【Q版】‘Speak no more of her,’ he said, as the boy Lucius enterd with the wine. The two friends drank to their love before admitting the captains to consider with them the plan of campaign. p.71

「彼女のことはこれ以上いわないでくれ」と彼はいった。その時、ルーシアスがワインを持って入ってきた。司令官たちと作戦計画を検討するまえに、ふたりの友人は彼らの友情のために乾杯した。

林訳については、台詞だとわかるように改行して示す。

【林訳】此時柳下司將酒及灯入帳。

不魯他司曰 今不必言吾妻。且飲此酒。蓋盪滌適間憤懣之言。使之同逝。

卡司也司曰 吾亦同飲。示深愛吾友之心。並湔滌其旧染。

柳下司出。25頁

この時、ルーシアスが酒と灯をもってテントに入ってくる。

ブルータス もうおれの妻のことは言ってくれるな。この酒を飲もう。いましがたの恨み言を同時に流してしまおう。

キャシアス おれも飲もう。深い友情を示すために。古い習わしも洗い流そう。

ルーシアスが出ていく。

ここに対応するシェイクスピア原文と坪内訳もどうぞ。

4幕3場（オックスフォード版では4幕2場）

enter Lucius, with wine and tapers

BURTUS

Speak no more of her. (*To Lucius*) Give me a bowl of wine.

(*To Cassius*) In this I bury all unkindness, Cassius.

He drinks

CASSIUS

My heart is thirsty for that noble pledge.

Full, Lucius, till the wine o'erswell the cup.

I cannot drink too much of Brutus' love. p.620

【坪内】（くり返し記号は文字になおした）

リュースヤス酒と蠟燭を持って出る。

ブルー 妻の事はもう言はんことにして下さい。……酒盃をくれ。此中へ一切の不快や無情を葬ってしまふ。

カシヤ 其御誓約の酒盃を、真実ありがたくいただきますぞ。……リュースヤス、注いでくれ、なみなみと溢れるほど。ブルータスの愛の盃は幾ら飲んでも足りないばかりだ。714頁

林訳がシェイクスピア原作と一致しないのはしかたがない、と再度いう。だが、改行すればそのままシェイクスピアになる。この箇所の林訳は、明らかにQ版から離れている。

ブルータスがシーザーの亡霊を見る場面を紹介する。林訳は台詞とわかるように改行して示す。

【Q版】 Minutes passed; by and by - was the taper burning ill, or was there a shadow deepening beyond it? He looked up. It was a shadow, but it had shape - likeness; it was dead Caesar standing there! Brutus' blood ran cold as he stared at the apparition. It seemed to him that he found voice to challenge it. 'Speak - what art thou?'

‘Thy evil spirit, Brutus.’

‘Why comest thou?’

‘To warn thee thou shalt see me again - at Philippi.’ pp.72-73

数分がたった。ほどなくロウソクの火が尽きかけたのか、あるいは影がおおいかぶさったのか。彼は見上げた。それは影だったが、しかし姿形をもっている。死んだシーザーがそこに立っているのだ。ブルータスは亡霊を見ると彼の血は凍りついた。彼はそれにむかって咎めるように声を出していたようだ。「いえ、お前はなんだ」

「汝の悪霊だ、ブルータス」

「なぜ来た」

「ふたたびフィリッピで会うことを知らせに」

【林訳】忽爾灯光縮。作深緑之色。不魯他司心覺其異。猝爾挙首。有怪物卓立其前。

不魯他司咤曰 爾神耶鬼耶。抑為何物。此時毛髮盡豎。陰風颯然。

物忽作声曰 不魯他司。余来趣爾命。

不魯他司曰 何由至此。

物曰 其来也告爾。明日在斐利靡中。仍当見我。26頁

ふと灯火のあかりが暗くなった。ブルータスは奇妙に感じて見上げると物の怪が目の前に立っている。

ブルータス おまえは神か幽霊か。しかし何物であれ、髪の毛は逆立ち、気味の悪い風が突然ふいてきたぞ。

亡霊 ブルータス、お前を滅ぼすために来た。

ブルータス なんのために。

亡霊 明日、フィリッピで会うことになる。それをお前に告げに来た。

Q版は、シェイクスピアの原作戯曲をうまく取り込んでいる。会話部分がそうだ。

ただし、ブルータスの台詞にある「おまえは神か幽霊か [爾神耶鬼耶] 」は、原作戯曲の「お前は、神か、天使か、悪霊か Art thou some god, some angel, or

some devil」に基づいている。

わざわざこの場面を引用したのは亡霊が出現するからだ。林紘が亡霊について否定的な考えをもっているならば、当然削除してもいい箇所だと思う。それを林紘はしていない。ほかの翻訳との関係から指摘しておきたい。

5 結 論

林訳「ジュリアス・シーザー」は、前3分の1がQ版を底本とし、残り3分の2がシェイクスピア原作をそのままに、つまり戯曲を底本にすえて翻訳した作品である。ただし、情況説明のために林紘らはQ版から文章を適宜取り入れた。つまり、シェイクスピア原作とQ版の2種類を手元において、相互に参照しながら漢訳したことが理解できる。

林紘たちの翻訳は、慎重にしてかつ周到である。読者が理解しやすいように工夫をほどこした。Q版にもとづいているのがそのひとつだ。しかも、シェイクスピア戯曲の原文を生かして翻訳している点には注目してよい。

林訳について、日本で一般に言われているのは、こうだ。

林紘は脚色しながら文章化した。あるいは、戯曲と小説の相違を知らなかったため小説の形で訳してしまい、原作の味わいが失われ、ただストーリーだけが伝えられる。さらには、誤訳が多い、原著のスタイルを勝手に変えた、シェイクスピアの戯曲などのリライト、などなど。林紘がいかにもでたらめに、原作とは無関係に、恣意的に、好き勝手に漢訳したかのように説明しているではないか。中国の小説界において林訳がはたした歴史的功績を称賛していても、林訳そのものについての評価は必ずしも高くはない。

林訳「ジュリアス・シーザー」は、そのいずれでもない。上にみるそれらの批判は、この作品についていえば、的はずれている。林紘らは、時代背景が理解できるように、さらには原作の味わいが残るように工夫して漢訳した。勝手な脚色ではない。それぞれに根拠とする英文原書が存在している。1910年代という早い時期の漢訳であることを考慮しなければならない。

それでは、林訳が不正確だと批判した人々は、みずから乗り出してきてシェイ

クスピア原作からそのまま漢訳して発表したか。ものの本によると1925年によ
うやく別訳が出版されている。林訳に遅れること約9年だ。研究評論と翻訳は、
別物であるのは当然のことだ。だが、罵ることだけが研究評論でもなからう。

林紓らがこの翻訳「凱徹遺事」で示した力量は、高く評価されるべきものだと
私は結論する。

鄭振鐸は、林訳を検討してはいない。いや、冒頭部分だけを読んで、シェイク
スピアの原作ではない、すなわち小説化した、と断定したのだろう。まさか、後
半部分がシェイクスピア戯曲そのものであるとは想像もしなかった。

林訳が改行をしないのは、それが中国の文人の習慣だからだ。改行をしていな
いといって責める必要もない。

ただ、改行がなければ見た印象が小説体である。鄭振鐸は、原作の劇本であれ
ば改行して台詞であることをわからせるはずだ、あるいは記号などを使用するは
ずだと勘違いしたのではないか。一方、林訳は、漢字1字「曰」を使用してセリ
フであることを表現したつもりかもしれない。しかし、注意深く読まなければ気
つかない。鄭振鐸は、林紓にたいしてそれほど親切でも熱心でもなかったとい
うことになる。

林紓は、鄭振鐸にしてみれば文学革命に反対した人物としての意味しかもたな
い存在だ。そういう人物がやった翻訳など、最初からまじめに検討する考えはな
かった。鄭振鐸は、林紓を批判するために論文「林琴南先生」を書いたのだから。

どうい理由があったにせよ、林紓は原作の戯曲を勝手に小説化したと罵った
鄭振鐸の方が間違っていたのである。

【注】

- 1) 吉武好孝『翻訳事始』早川書房1967.5.15 / 1995.9.30再版。168頁
- 2) 『英文学研究』全6冊合本 内外出版協会1905.6.10

【参考】

クヰラ・クウチ氏原著、通俗図書刊行会著『シェイクスピア史劇物語』大盛堂書店1927.10.

15 (表紙は「全訳シェクスピア物語」)。本稿を書き上げたのちに入手した。翻訳にこちらを利用してもよかった。だが、せっかく自分で日本語になおしたのだから参照するにとどめた。書影は、樽本「『林紓冤罪事件簿』ができるまで」に掲げている。長澤英一郎注釈『ジュリアス・シーザー物語』研究社印刷株式会社1950.6.25 研究社小英文叢書67。注釈がほどこされているだけ。本文はQの英文そのもの。

林訳チヨ－サー

未発表。チヨ－サーの原作を小説化したクラーク版を林紓らは底本とした。漢訳の具体例を「死口能歌」に見る。話し手の「前説」は省略して漢訳している。

チヨ－サー（Geoffrey Chaucer, 1340頃-1400）は、イギリスの詩人である。『カ
ンタベリー物語 The Canterbury Tales』は、彼の代表作として有名だ。

巡礼の参加者たちが、道中に物語をかたりあうという趣向の物語集である。主
として韻文で書かれ、形式上は未完のままで終わった。物語によっては中断した
ままのものが、たしかにある。

林紓と陳家麟が漢訳の際に使用したのは、これも英文小説化本である。「これ
も」というのは、林紓とその口述訳者が漢訳したスペンサー、シェイクスピア、
イブセンなどにも英文小説化本があるからだ。

1 馬泰来の指摘

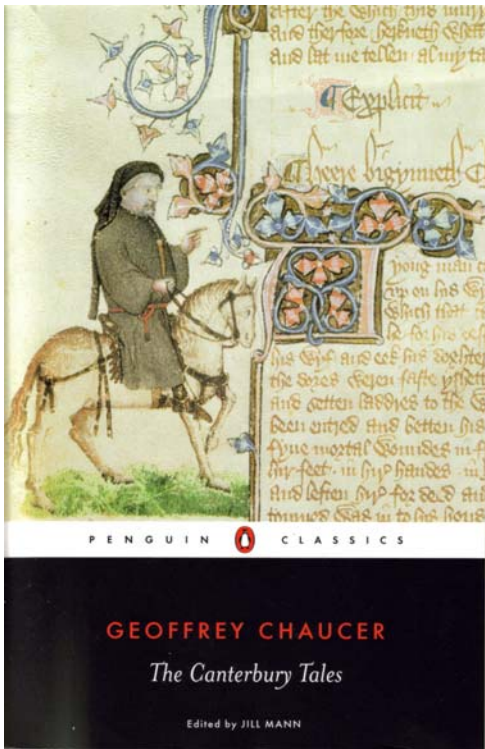
底本については、馬泰来*1が的確に説明している。クラークの項目において次
のように書く。チヨ－サーとしないのには理由がある。関係部分を引用する。

Charles Cowden Clarke (1787-1877) 一種

087. () Tales from Chaucer in Prose (2nd ed. 1870)

曹西爾 (Geoffrey Chaucer, 約1340-1400) 原著。陳家麟同訳。

《坎特伯雷故事》九篇。八篇刊《小説月報》：(略)八篇中原僅《林妖》



ペンギン・クラシックス2005年版

一篇署：“曹西爾原著”。（略）原著包括故事十篇，僅一篇未訳。

「（ ）」は、漢訳作品名を示すべき箇所だ。しかし、統一題目がないため、作品ごとの題名であることを意味している。私が「(略)」としたところに具体的な漢訳名が掲げられる。

チョーサー原作『カンタベリー物語』だと記述して、しかもそれだけでは終わらない。上の記述のどこが的確かというと、底本にクラークの小説化本をあげているところだ。

前述のとおり馬泰来は、目録において漢訳本をチョーサーの項目に配置していない。クラークの項目をたてたのは、底本の方を優先させたからだ。シェイクスピアの一部をラム姉弟（71頁）に、スペンサーをマクルホーズ（74頁）に置いたのと同じ扱いである。ただし、シェイクスピアの歴史劇をクイラー=クーチに配置していない。また、イブセンについては、デル版の存在に気づかなかった。これはしかたがない。馬泰来の探索力をもってしても、不明にしなければならない

部分がまだある。それほど調査のむづかしい分野であるのご理解いただきたい。

『小説月報』連載の8篇を見れば、そのなかの1篇「林妖」のみに「英国曹西爾原著」と書かれている。ここから原作者がチヨースーだと理解できる人は多くはないと思う。現在では「喬叟」と表記する。普通は、チヨースーだとわかればこれで調査を終了した気になるのではないか。まさか、チヨースーの原作を小説化した本が書かれているとは思わない。林紓は底本について何も記述していないのだ。

馬泰来は、そこを一步進めている。クラークの小説化本『チヨースー物語』だと指摘した。「散文体 in Prose」だと書名にうたっている。原作が韻文であるからわざわざそう表記して区別したとわかる。これこそが彼の探し出したものだ。その努力は敬服に値する。

この記述を見ても、ハアといったまま反応を示さない人がいるだろう。それがどうした、というかもしれない。だが、私はここにこそ馬泰来が手間と時間をかけていることを理解する。なぜなら、少し調べればチヨースーの作品を小説化したのはクラークだけではないと知るからだ。

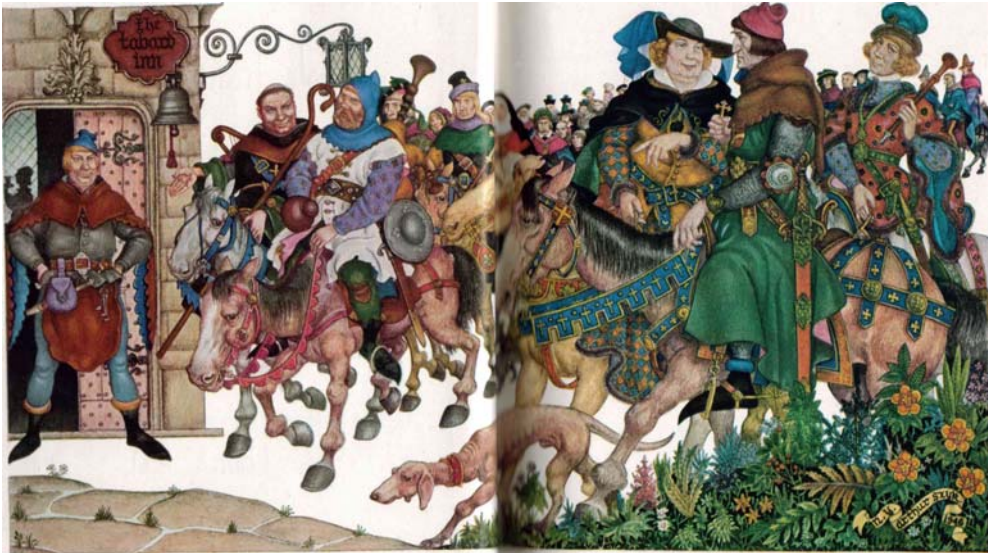
スキート Walter William Skeat、ポラード Alfred William Pollard、ジョンソン R. Brimley Johnson、マクスパッデン J. Walker McSpadden などなどがいる。

といっても、スキートは、チヨースーの全集を編集した人物だ。小説化本の著者にはならない。私が必要に迫られて少し調べただけだから不確実な情報も含まれる。原本を手にしてようやく判明するという順序である。

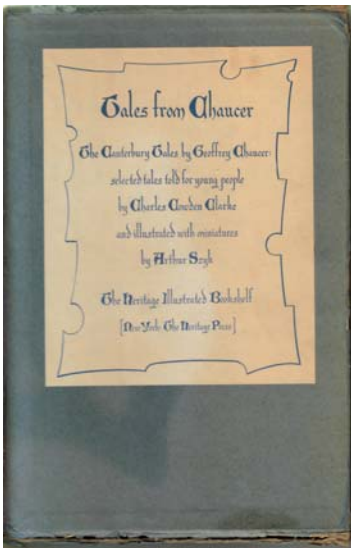
林紓が底本にした可能性のある小説化本についてあらためて探せば、現代にまで手を広げると何人いるかわからないくらい多い。「アラビアン・ナイト」やシェイクスピア作品のばあいと同じである。馬泰来の指摘が重要であることが理解できるだろう。

2 クラーク1947年版のばあい

予備調査のつもりで出版年に関係なくクラーク小説化本を入手した。つぎがそれだ。



クラーク1947年版挿絵



クラーク1947年版箱

Tales from Chaucer

The Canterbury Tales by Geoffrey Chaucer: / selected tales told for young people / by Charles Cowden Clarke / and illustrated with miniatures / by Arthur Szyk / The Heritage Press, New York(1947)

こちらは、彩色挿絵を収録しており1947年版の重版らしい。挿絵はポーラン

ド生まれの画家シック Szyk (1894-1951) の手になるから、その時代の新しい書籍だということはできる。若者、成人むけの前言それぞれ1篇とチヨ－サーについての紹介文をかかげ、本文は序文を含めて10篇を選択し182頁にまとめている。

馬泰来の説明にある9篇というのは、序文 The Prologue を除けばそうなる(後述)。馬が掲げるのは、再版といってもかなり古い1870年版だ。そこだけを見ても、クラーク小説化本は重版をくりかえしていると理解できる。

林紓がクラーク1870年版を直接の底本にしたかどうかは、とりあえず不明としておく。後年に出版された別の版本である可能性もあるのではないか。確かめようにも私の手元にそれがない。入手できる版本から見てみようというので手近な1947年版になった次第。この種の作業は、試行錯誤を重ねるしか方法がないのだ。

林訳の題名(便宜のために番号をふる)と掲載誌を掲げ、それに対応するクラーク版の原題を示す。

いうまでもないことだが、1947年版は林紓が使用した底本ではありえない。あくまでも予備調査であることをご了解いただきたい。

原題(ペンギン・クラシックス2005年版)を示す(記号:原)。参考のためにチヨ－サー原本の日本語訳2種類*2をかかげ、馬泰来の記述(記号:馬)を先に、その下に1947年版の題名(記号:47)を置く。注として私の覚書をつける。

1 「鶏談」 『小説月報』第7巻第12号1916.12.25

原: THE NUN'S PRIEST'S TALE(p.599) / 尼院侍僧の話 / 尼僧付の僧の物語

馬: The Nun's Priest's Tale: The Cock and the Fox

47: The Nun's Priest's Tale(p.136)

注: 同じクラーク版であるはずだが、作品題名に副題が掲げられていない。いやな予感がする。馬泰来の記述を確認するためだけのつもりが、版本の違いを引き出しかけているからだ。

2 「三少年遇死神」 『小説月報』第7巻第12号1916.12.25

原: THE PARDONER'S TALE(p.456) / 赦罪状売りの話 / 免罪符売りの話

馬: The Pardoner's Tale: The Death-slayers



「鶏談」

47 : The Pardoner's Tale(p.128)

3 「格雷西達」 『小説月報』第8巻第2号1917.2.25

原 : THE CLERK'S TALE(p.295) / 学僧の話 / 学僧の物語

馬 : The Clerk's Tale: Griselda

47 : The Student's Tale / THE STORY OF THE MARQUIS OF SALUZZO AND HIS WIFE GRISELDA(p.74)

注 : 表題が一致していない。クラーク版は、版によって表題が異なるのか。

4 「林妖」 『小説月報』第8巻第3号1917.3.25

原 : THE WIFE OF BATH'S TALE(p.241) / パースの女房の話 / 同左

馬 : The Wife of Bath's Tale: The Court of King Arthur

47 : The Wife of Bath's Tale(p.97)

注 : 林紓は、この翻訳にのみ「英国曹西爾原著」と明記する。

5 「公主遇難」 『小説月報』第8巻第6号1917.6.25

原：THE MAN OF LAW'S TALE(p.169) / 法律家の話 / 弁護士のお物語

馬：The Man of Law's Tale: The Lady Constance

47：The Lawyer's Tale / THE STORY OF THE LADY CONSTANCE(p.55)

注：クラーク版は、版によって表題が異なるのか。どうもそうらしい。

6 「死口能歌」 『小説月報』第8巻第6号1917.6.25

原：THE PRIORESS'S TALE(p.492) / 尼寺の長の話 / 尼僧院長のお物語

馬：The Prioress's Tale: The Murdered Child

47：×

注：1947年版には収録していない。クラーク版は版によって収録作品が異なることがこれで明らかになる。

7 「魂霊附体」 『小説月報』第8巻第7号1917.7.25

原：THE SQUIRE'S TALE(p.382) / 騎士の従者の話 / 近習のお物語

馬：The Squire's Tale: Cambuscan

47：The Squire's Tale(p.114)

注：クラーク版には加筆がある。林紓はそれをそのまま漢訳している。

8 「決闘得妻」 『小説月報』第8巻第10号1917.10.25

原：THE KNIGHT'S TALE(p.35) / 騎士の話 / 騎士のお物語

馬：The Knight's Tale: Palamon and Arcite

47：The Knight's Tale(p.21)

9 「加木林」 『小説世界』第12巻第13号1925.12.25未見

原：×

馬：The Cook's Tale: Gamelin

47：The Cook's Tale of Gamelin(p.148)

注：『小説世界』は見えない。ゆえに未確認である。馬泰来は、これについて「『カンタベリー物語』のなかの「料理人の話」[《坎特伯雷故事》中の《厨子のお物語》]である」*3と説明する。勘違いがあるのではないか。この作品はチョーサーのものではない。少しだけ説明をする。

『カンタベリー物語』に「料理人の話 THE COOK'S TALE」はある。食料品屋の徒弟でパーキンという放蕩者が主人公だ。ところが、この物語は最

初部分のみで中断している。つまり未完のまま。クラーク版に登場する人物は、ガメリンであってパーキンではない。ゆえに物語もまったく別物になっている。簡単なことで、まず中世イギリスの「ガメリン GAMELYN」*4が存在していた。それをクラークが小説化し『カンタベリー物語』に挿入したと考えられる。参考までにつけ加えれば、スキート編『チヨースー全集 THE COMPLETE WORKS OF GEOFFREY CHAUCER』第4巻(1894初版/1963)は、附録として収録している(The Tale of Gamelyn)。ただし、同じスキート編の1880年影印版『カンタベリー物語』には未収録。

結果として林紓未訳作品は、ふたつになる。

原：THE GENERAL PROLOGUE(p.3) / ぶろろぐ / 総序の歌

47：The Prologue(p.1)

原：THE CANON'S YEOMAN'S TALE(p.649) / 僧の従者の話 / 錬金術師の徒弟の話

47：The Canon's Yeoman's Tale(p.172)

原作もクラーク版も語り手の「序」(前口上といってもいい)があって物語がはじまる。林訳では、その「序」部分を省略する。つまり林紓らは独自に編集したものか。漢訳では物語が直接はじまっており、誰が話し手であるかはわからなくなった。ゆえに漢訳題名がそれぞれの内容を示しているのだ。物語部分だけで十分だという判断かもしれない。確かに馬泰来はクラーク版が底本だと書いている。だが、同じクラーク版でも異版が存在する可能性も考える必要がある。スペンサーのマクルホーズ版の例があったではないか。あの時は、馬泰来が指摘した版本ではなく、別版が底本だった。

さて、題名などをくらべて見ただけでいくつかの疑問がでてくる。

英文題名が微妙に異なるものがある(3と5)。同じクラーク版であっても後の版本には他人による書きかえがある可能性もでてくる。

不思議なのは、6「尼寺の長の話」が手元の1947年版には収録されていない

ことなのだ。

予備調査は、やはり予備でしかない。馬泰来の記述を確認するためだけに求めた版本は、確認する役に立たなかったということになるか。いや、それはいいすぎだ。こまかな相違があることが判明した。それだけでも予備調査の意味がある。

手元のクラーク1947年版が馬泰来の指摘と一致しない。こうなれば彼のあげる版、あるいはそれに近い版本、さらにそれ以外のいくつかを集めるよりしかたがない。

3 クラーク版以外

個人で集めるのだからそれほど多くにはならない。いくつかを紹介するが、あくまでも参考にとどまる。

ポラード版 *CHAUCER'S CANTERBURY TALES*

EDITED BY ALFRED W. POLLARD / KEGAN PAUL, TENCH & CO. / LONDON.
1886

REPRINTED FROM THE GLOBE EDITION / EDITED BY ALFRED W. POLLARD
/ MACMILAN AND CO., LIMITED / LONDON. 1902

編集版であって小説化したものではなかった。つまり、韻文のままである。書影は省略する。

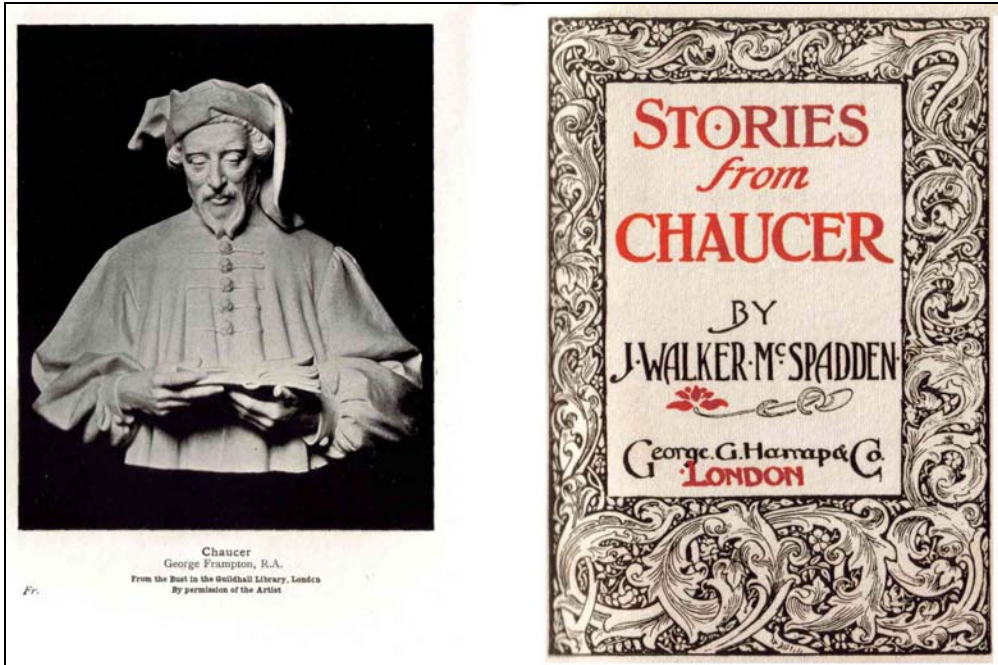
マクスパッデン版 *STORIES FROM CHAUCER*

RETOLED FROM THE CANTERBURY TALES / BY J. WALKER McSPADDEN
/ GEORGE G. HARRAP & COMPANY / LONDON, 1908

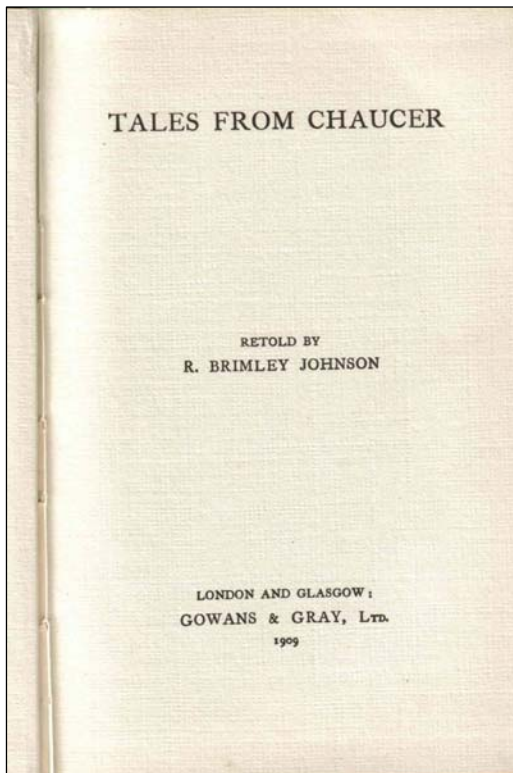
9話を収録する(番号で示せば8 1 2 5 4 a 3 b 9の順)。a bとしたのは、ほかの小説化本とは別の作品を収録しているからだ。

aは“托鉢僧の話 THE FRIAR'S TALE - The Wicked Summoner”だし、bは“郷土の物語 THE FRANKLIN'S TALE - Dorigen”である。

プロログとエピログのほかに、附録としてドライデン John Dryden が改訳す



マクスパッデン版チヨースー像と扉



ジョンスン版扉

る “ THE KNIGHT'S TALE - Palamon and Arcite ” がある。

マクスパッデン版は、林訳の底本ではない。

ジョンソン版 *TALES FROM CHAUCER*

RETOLED BY R. BRIMLEY JOHNSON / GOWANS & GRAY, LTS. / LONDON
AND GLASGOW, 1909

6話を収録する(番号で示せば8 5 1 2 4 3の順)。チヨースーについて説明する「序」および『カンタベリー物語』を紹介する「ノート」が書かれている。各人の口上はすべて省略されており物語がいきなりはじまる。林訳と同じやり方だ。といっても、収録作品が違う。ジョンソン版も林訳の底本ではないことを確認する。

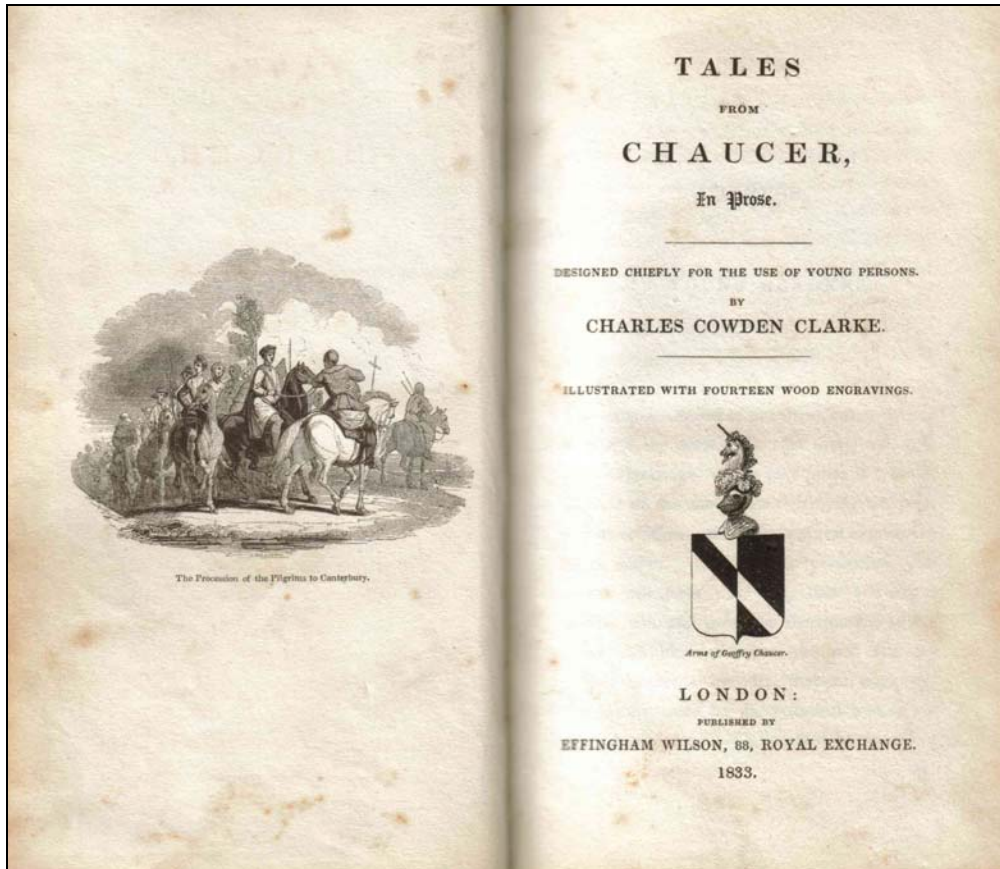
今、林紓たちが独自に編集したという前提で本文を見ている。クラーク版は、その構成は原作のままだ。くりかえせば、作中の各人が前口上を述べたあとに、物語がはじまる。その前口上部分が林訳では削除されている。だから、林紓たちが編集したと考える。

だがジョンソン版は、私に別の可能性を示唆する。すなわち、林訳の底本は物語だけを収録したものではないか。クラーク版といっても、異版があるらしい。前後のつながり部分を削除したバージョンがあってもおかしくはない。クラークの文章はそのままにして、後の編集者が手を加えている可能性を考えている。

これは話が複雑になってきた。

4 クラーク版のばあい

クラーク版といってもいくつかの種類があることがわかった。予想したとおりだ。小説化本として定評のあるものは、重版になるということを意味する。ただし、最初の形態を維持したまま重版されるかどうかは、また別の話になる。年月が経過すると、各人の前口上部分を削除して重版するものも出てくるのではないか。そのような予測でもたてなければ、林訳の底本を探ることがむづかしくなる。



クラーク1833年版扉

1833年版

手元に届いたのは1833年版だ。馬泰来の示す再版1870年よりもだいぶ以前の発行になる。内容目次を掲げ、林訳題名も示す。

TALES FROM CHAUCER, In Prose.

DESIGNED CHIEFLY FOR THE USE OF YOUNG PERSONS. / BY CHARLES COWDEN CLARKE. / ILLUSTRATED WITH FOURTEEN WOOD ENGRAVINGS. / LONDON: PUBLISHED BY EFFINGHAM WILSON, 88, ROYAL EXCHANGE. 1833.

ADDRESS TO MY YOUNG READERS.(-)

ADVERTISEMENT.(-)

CONTENTS.

A MEMORIAL OF GEOFFRY CHAUCER.(pp.1-50)

未訳 PROLOGUE, OR INTRODUCTION TO THE CANTERBURY TALES.(pp.51-79)

8 「決闘得妻」 THE KNIGHT'S TALE: THE STORY OF PALAMON AND ARCITE.(pp.81-125)

5 「公主遇難」 THE MAN OF LAW'S TALE. / PROLOGUE. / THE STORY OF THE LADY CONSTANCE.(pp.127-152)

4 「林妖」 THE WIFE OF BATH'S TALE: THE STORY OF THE COURT OF KING ARTHUR.(pp.153-165)

3 「格雷西達」 THE CLERK'S TALE. / PROLOGUE. / THE STORY OF THE MARQUIS OF SALUZZO AND HIS WIFE GRISELDA.(pp.167-199)

7 「魂霊附体」 THE SQUIRE'S TALE: THE STORY OF CAMBUSCAN.(pp.202-227)

2 「三少年遇死神」 THE PARDONER'S TALE: THE STORY OF THE DEATH SALYERS. / PROLOGUE.(pp.229-245)

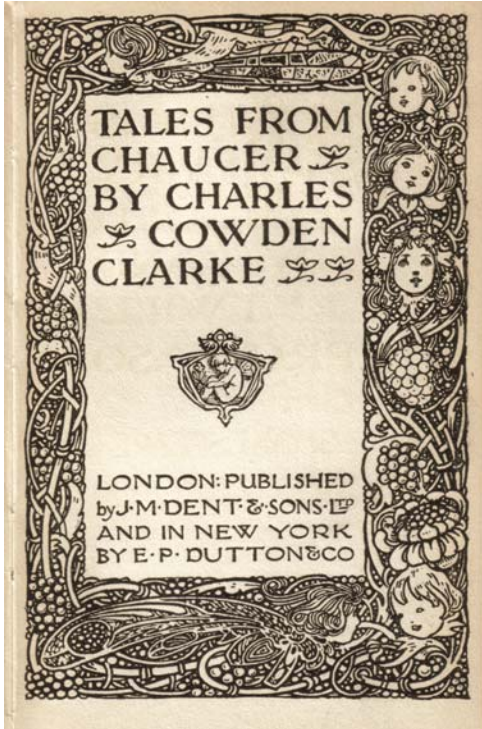
6 「死口能歌」 THE PRIORESS'S TALE: THE MIRACLE OF A CHRISTIAN'S CHILD MURDERED BY THE JEWS.(pp.247-255)

1 「鶏談」 THE NUN'S PRIEST'S TALE: THE COCK AND THE FOX. A fable.(pp.257-274)

未訳 THE CANON-YEOMAN'S TALE. THE STORY OF THE ALCHEMIST. / PROLOGUE. / THE CANON-YEOMAN'S TALE.(pp.275-294)

9 「加木林」 THE COOK'S TALE OF GAMELIN.(pp.295-323)

上に示した副題は、本文についているものだ。目次とは異なる。馬泰来が彼の目録に採取したのはクラーク版の目次からのものらしい。間違っているわけではない。ご注意ください。それとも1870年版とは異なるのか。そこまではわからない。



エブリマンズ・ライブラリ版

クラーク1833年版を見るかぎり、すなわちこれが漢訳の底本だとすれば、林訳ではいくつかの操作がなされていることが判明する。

林訳は、冒頭についているいわば「チョーサー伝」と全体の「総序」を省略した。すでに述べたが、各人の物語についている「序」つまり前口上もはぶいている。林紓たちがそれを最初から意図していたかどうかはわからない。『カンタベリー物語』全体を翻訳していたが、『小説月報』に連載するにあたっては省略した可能性もあるのではないか。いや、編集者が勝手には手を加えないだろう。すぐさま、否定的な気持ちになる。

「総序」をいれると11篇、それを除けば10篇の物語がある。1947年版は1篇を削除したから物語数としては9篇だった。

エブリマンズ・ライブラリ版

扉がふたつある。

最初の扉には、活字体で EVERYMAN'S LIBRARY EDITED BY ERNEST PHYS

/ FOR YOUNG PEOPLE / TALES FROM CHAUCER WITH A MEMORIAL BY CHARLES COWDEN CLARKE とある。

リース Ernest Rhys が編集し、彼の簡単な序がついている。クラークの小説化本を編集したという意味だ。

ふたつ目の扉には次のように書かれている。

TALES FROM CHAUCER BY CHARLES COWDEN CLARKE

LONDON:PUBLISHED by J.M.DENT & SONS LTD AND IN NEW YORK BY E.P.DUTTON & CO 刊年不記。全233頁。

収録作品の順序、題名、副題ともに1833年版と変わりはない。ということは、こちらは普及版だから林訳の底本になった可能性が高い。馬泰来の掲げた1870年再版とも同一だろうと推測する。

やはり、クラーク版が林訳の底本だと考えてよい。いく種類かの異版を集めた結果である。しかも、「尼寺の長の話」は、林訳がクラーク版を使用した証拠のひとつになる。訳文を対比すると興味深い箇所があるのだ。

5 林訳の具体例「死口能歌」

クラーク1947年版からは削除されたその6「死口能歌」(原題：THE PRIORESS'S TALE 尼寺の長の話、あるいは尼僧院長の物語)を取り上げる。林訳について検討してみよう。

「ユダヤ人に殺害されたキリスト教徒のこどもの奇跡 THE MIRACLE OF A CHRISTIAN'S CHILD MURDERED BY THE JEWS.」という副題がおおよその内容を示している。林紓は、死者の口が歌をうたうことができる、と内容のままに訳して題名とした。

林訳では、尼僧院長が主と聖母マリアを礼賛する前口上は省略される。

冒頭を引用する。

【クラーク】 In the suburbs of a great city in Asia there was established in one quarter where the Christians dwelt, a Jewry,¹ which was maintained by a lord of

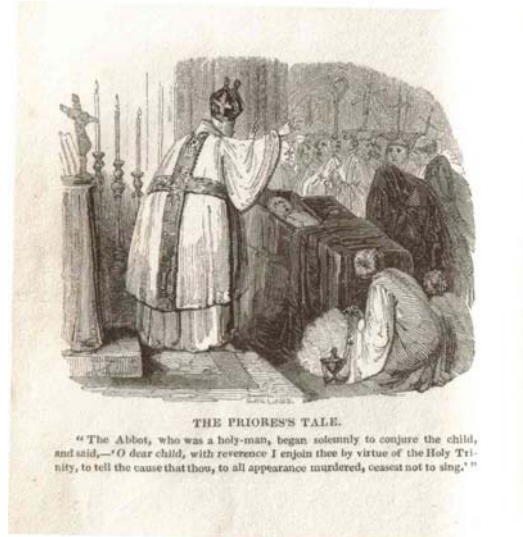
死口能歌

亞洲有名城近猶太城外有地多基督教人所居此外有一處則羣居猶太之人猶太人所居地基督教人謂之周雷猶太人既失國於是分處四方然每至爲人所輕而基督教人恨之尤甚且猶太雖富乃無國基又往往受處於基督教人之教人蓋上帝之律及生人之律咸欲滅其種人故猶太人無駐足之地不能置田而獲產長日但圖得金可以隨時遷徙因是之故受錢之心日甚直視性命爲重然而彼教之祖師初不知是之傳授以法律苛虐迫之使至於此耳然其得利之由則毋全生息假人百磅者還則增子金五磅按文明法律商務之國息不能過五分之五亦即爲犯法律所不道顯難如是而五分之息仍盛行於國中非猶太人亦冒爲猶太以取利此周雷之街另設一官以鎖之傳不得以重息欺吸人之膏

小説月報 第八卷 第六號 死口能歌

血街之盡處有小學校學生咸基督教人少時即學唱神絃之曲學生中有七歲學生則摹婦子也每日自家赴塾道中俾見聖母之象必跪而禱告亦母教使然語詞但云聖母萬壽萬壽童子無知之迷信易也此童子在校中讀書聞同學唱耶穌救世之歌乃亦不學而能以入耳熟故不期立脫諸口順歌詞熟而歌之意乃不丁一旦謂班長爲之講班長曰此歌之成乃使人敬愛聖母死後得聖母之助而已他亦吾所不解童子曰此歌因尊聖母吾即於耶穌誕之前盡熟此歌用爲迎神之曲已而同班長歸家路中班長沿途教授已乃爛熟不遺一字登調亦佳蓋每日二次自家至塾自塾課家必溫此歌願出入必過周雷之街高聲而誦猶太人不以爲然謂此小物乃放出吾都歌此舉非僅辱基督教則思

靜海縣林軒同譯



THE PRIOR'S TALE.

"The Abbot, who was a holy-man, began solemnly to conjure the child, and said,—O dear child, with reverence I enjoin thee by virtue of the Holy Trinity, to tell the cause that thou, to all appearance murdered, ceasest not to sing."

クラーク1833年版から

林訳「死口能歌」

that country for the hateful purpose of villainous lucre and usury. p.180

アジアにある大きな都市の郊外で、キリスト教徒が住んでいる区域にユダヤ人街がありました。そこはその国の領主によって保護されており、極悪非道の利益と法外な高利という憎むべき目的のためだったのです。

【林訳】亞洲有名城。近猶太。城外有地。多基督教人所居。此外有一處。則羣居猶太之人。猶太所居地。基督教人。謂之周雷。1頁

アジアに有名な都市があり、ユダヤに親しかった。郊外にキリスト教徒が多く住む場所があって、そのある区域にユダヤ人が群居しており、その地をキリスト教徒はジューリイ [周雷] と呼んでいました。

英文原書の説明はユダヤ人を差別していると読む人もいるかと思う。そういう時代の文章だと考えてほしい。

一方の林訳は、ユダヤ人街についての説明を省略したように見える。だが、そ

うではない。クラーク版では Jewry (ジューリイ) にほどこされた注釈を、林訳ではそのまま本文に組み込んだのだ。一部分を示す。

【クラーク】…… After the destruction of their native city, and that they had become scattered over the face of the earth, prejudice ran sorely against that people; above all, in Christian countries. They became literally “a bye-word, a taunt, and a curse.” They were sojourners in every place - not naturalised. They were rigorously punished for offences against the laws; and the laws of both God and man were constantly set aside to persecute them. (後略) p.180

彼らの生来の都市が破滅してのち、地球の表面に散らばると、偏見がその人々に痛ましいほどにぶつけられた。とりわけキリスト教徒の国々においてだ。彼らは文字通り「言い古されたことばである、あざけりと呪い」になった。彼らはどこでも短期滞在者であって 帰化させられはしなかった。彼らは法に逆らった不法行為によってきびしく罰せられ、彼らを迫害するために神と人間の両方の法が無視されたのである。(後略)

【林訳】猶太人既失国。於是分処四方。然每至為人所輕。而基督教人。恨之尤甚。且猶太雖富。乃無国基。又往往受虐於基督之教人。蓋上帝之律。及生人之律。咸欲夷滅其種人。(後略)

ユダヤ人は国を失い、そこで四方に分散しました。そこでいたるところで人に軽蔑され、キリスト教徒がとりわけひどく彼らを憎んだのです。ユダヤ人は富んではいましたが、国の基礎がないために、常にキリスト教徒から虐待されました。神の法および人間の法は、いずれもその種の人間を抹殺しようとしていたのです。(後略) 1頁

林訳は、尼僧院長の語りになっているから、そのように日本語訳をつけた。

クラーク版にある注釈を翻訳本文に取り入れているのだから、これが底本だ。

口述翻訳者のことばを聞きながら文言で筆記する。これが林紘の翻訳方法である。ゆえに、林訳は逐語訳にはならない。上の引用文を見れば、ことばは違っていているにせよ、内容はほぼ英文原作のままであることが理解できる。

この注釈は、読み方によればユダヤ人に対して同情的であるということができるかもしれない。そこはクラークの注釈だから、という説明はできる。だが、それを本文に取り込んだ林訳では、具合が悪いだろう。語り手の尼僧院長はキリスト教徒なのだから、それでは筋が通らなくなる。林訳としては、不都合な箇所である。

尼僧院長が語るのは、悲惨な話だ。キリスト教徒の7歳になる小学生を殺害するのは、その虐待されているはずのユダヤ人にほかならない。

子どもが、賛美歌をおぼえて歌う。学校の行き帰りに毎日2回、ユダヤ人街を通るときに歌う。それを聞きとがめたユダヤ人が子どものノドを切り裂いて殺した。子どもが帰宅しないのを心配した母親の寡婦は、さがしまわってようやくユダヤ人街へくる。そこの穴から歌声が聞こえてそれが息子だとわかった。死者の口が賛美歌を歌うのである。

町の長官は、子どもの殺害にかかわったユダヤ人たちを拷問にかけて処刑した。そこを林紓は次のように漢訳する。

【林訳】巡警官怒極。乃盡縊此猶太之人。以償童子之命。(酷哉)2頁

警官の怒りはすさまじく、そのユダヤ人をことごとく首吊りにし、それで童子の命を償ったのです。(残酷なことだ)

「残酷なことだ[酷哉]」というのは、林紓が加筆した。書き添えなければ気がすまなかったとわかる。物語そのものが悲惨であるからだ。

こういう部分が中国の研究者には評判が悪い。翻訳に林紓が勝手に出てきて加筆する、と批判するのである。林訳チョーサーを検討する文章は、中国ではたぶん書かれていないだろう。だから、実際にそういう指摘があるというのではない。だが、林訳について先入観を抱いている研究者ならば書きそうなことだから、先回りして説明した。

子どもは死してなお賛美歌を歌うのはなぜか。その子は、こう説明する。

【クラーク】and while I lifted up my voice, methought she laid a grain upon my

tongue. Wherefore I sing, and needs must sing, in honour of the Blessed Virgin till that grain is taken off my tongue. p.184

私が歌うと、彼女は私の舌のうえにタネを一粒置かれたように思われました。それゆえ、私は歌うのです。歌わなければなりません。あの聖なる気高い処女を崇めるために、私の舌からその粒が取り除かれるまで。

【林訳】聖母置一丸於吾之舌本。有此一粒。不能不歌。主教欲止吾声。可抉口去吾此粒。2頁

聖母さまが私の舌の根に一粒をお置きになり、この一粒があるために歌わずにはいられないのです。主教さまが私の声を止めたいのであれば、私のこの粒を取り除かれるように。

a grain とは、穀物、種子という意味だ（別の版本では真珠ともあるらしい）。林紓がそれを「丸」「粒」と訳したのは、それでいい。英文の原作は、簡潔に漢訳されていると私は判断する。

林訳チョーサーには、欠点があるという人はいるだろう。簡略化したのが問題といえは問題だ。しかし、もともと逐語訳になるはずのない林紓の翻訳方法なのである。それを批判してもはじまらない。私が見るところ、林訳は原作の文意をかなり忠実に翻訳している。

チョーサーの漢訳としては、林訳は比較的早いという点を評価すべきだ。目録を見れば、『カンタベリー物語』は方重訳『康特波雷故事』（上海・雲海出版社1946.5未見）があるという。出版年を見てほしい。林訳は、それよりも30年も先行している。この事実を無視していいものであろうか。

林訳チョーサーを否定する研究者がいるとすれば、その人は、世界文学から中国の読者が取り残されることを強要し、しかもそれでよいと判断していることになる。

方重の翻訳を待つとしても30年ほど遅れる。はたしてそれは正当で当然なことなのだろうか。私には大きな問題だと思える。研究者が批判すべきは、林訳ではない。非難すべきは、より原文に忠実な漢訳を刊行することができなかった当時の翻訳者とその出版環境だと考えるのだ。

【注】

- 1) 馬泰来「林紓翻訳作品全目」錢鍾書等著『林紓的翻訳』北京・商務印書館1981.11。79-80頁。また、馬泰来「林訳提要二十二則」黎樹添等編『馮平山図書館金禧紀念論文集』香港大学出版社1982。115-116頁
- 2) 西脇順三郎訳『カンタベリー物語』上下 ちくま文庫1987.4.23 / 1997.7.15十三刷、1987.5.27 / 1993.4.30八刷。および、榊井迪夫訳『カンタベリー物語』上中下 岩波文庫1995.1.16改訳 / 2003.6.5十二刷、1995.1.16改訳 / 2003.9.25十一刷、1995.1.16改訳 / 2003.6.5十二刷
- 3) 馬泰来「關於《林紓翻訳作品全目》」『読書』1982年第10号（総第43期）1982.10.10。140頁
- 4) チヨースーは、この物語を『カンタベリー物語』に収録しようと計画していたという。だが、現存する作品には収録されていないのだから計画だけだったのだろう。中世英国ロマンス研究会訳『中世英国ロマンス集』（篠崎書林1983.2.25）の「『ガメリン』について」は以下のように説明している。「『ガメリン』は、のちにトマス・ロッジ(Thomas Lodge)がその作『ロザリンド』(Rosalynde)で発展させ、更にそこからシェイクスピアの『お気に召すまま』(As You Like It)の中心モチーフとなって行く」(169頁)

林 訳 ユ ゴ ー

未発表。ユゴー「九十三年」を林紓らは漢訳して『双雄義死録』と題した。原作を大幅に省略したと林訳を批判する理由のひとつとなっている。しかし、その底本はメギー要約版であると特定できる。ただし、英訳ベネディクト版を参照して補った箇所がある。大幅省略説は、林紓冤罪事件のひとつだ。

ヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo, 1802-85) は、フランスの詩人、劇作家、小説家であり、しかも政治家だ。

本稿でとりあげる日本語訳名「九十三年」(1874) は、1793年のフランス革命を描いたユゴー晩年の大作である。書名の『九十三年』は、1793年のフランスでくりひろげられた出来事を題材にしていることによる。

該書を林紓が翻訳しており、またしても非難の声がつついている。林紓が原作に対して大幅な削除を行なった、とって研究者は罵るのだ。

結論を先にいっておこう。林訳ユゴーには、底本とした要約版がある。大幅削除の事実、基本的には存在しない。ゆえに、これも冤罪事件である可能性が高い。まず、林紓の翻訳について説明する。

1 林訳ユゴー

林訳ユゴー「九十三年」は、商務印書館が発行する「説部叢書」シリーズの1冊に収録された。該書に見える表示は以下の通り。



『双雄義死録』



『梅』

『双雄義死録』

法国預勾原著、閩県林紓、吳県毛文鍾同訳

上海商務印書館1921.10 説部叢書第4集第12編

1冊本で第1篇4章、第2篇2章、第3篇5章に分けてある。全116頁というページ数は、多くはない。しかも、組版が25字×11行となっていてゆったりとした印象を受ける。たとえば、同じ「説部叢書」にある彼の『吟辺燕語』が、32字×12行で詰まっているのに比較しても、そう感じる。

原作はユゴー著「九十三年」で間違いはない。

林訳で問題になるのは、底本の確定である。いうまでもないことだが、底本がわからなければ、翻訳の質を検証しようにもそれは不可能だ。その当たり前の作業をこれから私が行なう。逆にいえば、基本的な手順が従来はとられていなかった、まったく無視されていたということだ。手続きを抜きにして批判が先行しており、その誤りが正されていない。該訳書発行の1921年から数えれば、すでに

90年近くが経過している。その間、だれもやろうとはしなかった。

林訳小説の研究には、基本文献がある。馬泰来「林紓翻訳作品全目」(錢鍾書等著『林紓的翻譯』北京・商務印書館1981.11)だ。先行文献がおかした多くの誤りを訂正して現在もっとも完備した目録である。学界から高い評価を得ているのは周知のことだろう。それを見ることから始める。

番号138(91頁)に Victor Hugo の項目がもうけてあり、上記の林訳を収録する。

Victor Hugo (1802-1885) 一種

138. 《双雄義死録》 Ninety-three (原著: Quatre-vingt-treize ; 1874)

預勾原著。毛文鍾同訳。商務印書館, 民国十年(1921)

疑拋英訳本重訳。

馬泰来が説明して「英訳本による重訳ではなかろうか」と書いているのには、意味がある。

すなわち、馬の記述方法として、重訳は翻訳者の項目を別に立ててそちらに分類するからだ。たとえば、『吟辺燕語』(『シェイクスピア物語』)はラム Lamb(71-72頁)に、「荒唐言」(スペンサー『妖精の女王』)はマクルホーズ Maclehose(74頁)に配置するという具合である。

馬泰来の記述をくりかえす。林訳『双雄義死録』はユゴーの原作ではあるが、英訳を底本とした可能性を示唆する。それは、馬が原作名を Ninety-three と示し、同時に「原著: Quatre-vingt-treize ; 1874」だと書いているところからわかる。

つまり、その時点で底本の確定ができなかったことを私たちに教えてくれる。馬泰来の高度な調査力をもってしても不明な点が残る。それほどに困難がともなう研究分野だということができよう。

林紓らはユゴー原著だと書いてはいるが、その底本までは明記していない。それが当時における彼らのやり方であった。それをいうなら、現在でも底本が何かを書かない翻訳書はある*1。

馬泰来の目録にそう説明してあるものならば、のちの研究論文は底本を無視す

るだろう。該目録は、研究者が依拠する基礎文献だ。みなが同じなのは、不思議ではない。

底本はフランス語か英訳本であるのか、問題は小さくないと考える。翻訳研究は、そこが出発点である。常識からいっても、底本がフランス語と英語とでは異なるではないか。林紵の翻訳を検討するためには、どうしてもそこからはじめなければならない。なんどもくり返すのは、やるべきことを行なっていないと言いたいからだ。

中国では長年にわたって林訳を批判している。その激しさは、まさに注目にあたいする。

2 鄭振鐸の林訳批判

林訳について多くの論文が、原文に忠実ではない、大幅な削除を行なった、と罵倒する。本稿では、そう述べる先行文献を列挙することはしない。林訳シェイクスピア、林訳イブセンそのほかで十分すぎるくらいに行なった。文学史でも同じ状況がある。例外というものがない、と書けばそれでご理解いただけるだろう。

翻訳の底本を追求しようとするれば、『双雄義死録』のばあいは、共訳者が毛文鍾であることが手がかりになる。

例をあげよう。

林訳イブセン「幽霊」は、毛文鍾との共訳で『梅孽』（上海・商務印書館1921.11説部叢書第4集第13編）になった。底本は、原作の戯曲を小説化したドレイコット・M・デル Draycot M. Dell 著『イブセンの「幽霊」物語 IBSEN'S "GHOSTS" Adapted as a Story』（1920）だと私は確認した。

『双雄義死録』が説部叢書第4集第12編だから、両者はつづいて刊行されていることがわかる。組版も同じだし、表紙絵も似通っている。写真では鮮明さに欠けているが、西洋風の建物が炎上している光景が描かれる。上方のバルコニー風の場所には成人男女が正面を向いており、下方では群衆が棒をもってその建物に押し寄せる。男ばかりで全員が帽子をかぶっているのは兵士のつもりか。棒に見えるのは銃かもしれない。ユゴー原作の終盤では、城塞ラ・トゥールグが炎上

し3人の子どもが取り残される。『双雄義死録』では、それを絵にして洋風建築になってしまった。勘違いといえば、そうだ。『梅孽』の表紙も建物が炎上しかかっており、その筆致から同じ描き手だと推測できる。この2種類は、まったくの別物にもかかわらず、どうしても同類に見えるのだ。

『梅孽』といえば、くりかえすまでもなくイプセンの戯曲を勝手に小説化したとして非難の声があがっている作品だ。林紓冤罪事件のひとつである。両翻訳ともに毛文鍾の名前が見えるのが誤解の原因ではなからうか。つまり、戯曲を小説化する人物が協力した翻訳は、原作を大幅に削除しても不思議ではない。いや、そうに違いない、という憶測である。根拠のない勝手なものだと私は思う。

その発信元こそが鄭振鐸なのだ。彼が林訳批判を決定的なものにしてしまった。後の研究者は、それを鵜呑みにしただけ。

まず、鄭振鐸がどう説明しているのかを紹介しよう。

鄭振鐸「林琴南先生」(『小説月報』第15巻第11号1924.11.10)である。関連部分は長いので分割して引用し、私の説明を加える。

林氏の翻訳には、またよいとは思えないことがある。すなわち随意に原文を省略するのだ。たとえばフランスのユゴー『九十三』(Ninety-three)を林氏は『双雄義死録』に翻訳したが、原文と照合してみるとどれくらい削除したものかわからないくらいだ。私たちは驚き怪しんだ。原文は厚い本であるのに、漢語に翻訳するとなぜ薄いものになってしまうのか。

鄭振鐸は林訳と原文を照合したらしい。「九十三年」のばあい、原本とならべて見るだけで気づく。林紓の翻訳はかなり薄い。前述のように林訳は116頁にすぎない。厚い原本が薄い漢訳になったのは林紓が勝手に随意に省略したからだ。鄭はそう考えたのだろう。

鄭振鐸の批判は、その後定着する。影響力が大きいのだ。専門書においても、追認されることになった。たとえば、寒光『林琴南』(上海・中華書局1935.2。69-70頁)がある。前述の毛文鍾を紹介して次のように説明する。「呉県毛文鍾 英文の口述者。彼は最晩年の、合作も多いのだが、多くは出版されておらず、成功を

おさめてはいない。その中でユゴーの「双雄義死録」は、たぶん省略本を間違っ
て取りだしたのではないか。人々の非難を大いに受けている」。ここには、寒光
の毛文鍾に対する負の先入観が露呈している。

では、鄭振鐸が比較対照の際に利用した原文は何語のものか。手がかりは書名
に示した Ninety-three だ。フランス語原本から英語で重訳した版本を使用した
とわかる。

なんでもなさそうな記述ではあるが、ここは重要な部分なのだ。

鄭振鐸の該論文は、林紓評論としてきわめて著名である。雑誌掲載の初出を経
ていく度も論文集に収録された。学界で重要視されている証拠だ。しかし、初出
と後のものでは一部が異なる。のちの鄭は、自分の文章に部分的な削除を行なっ
た。知ってか知らずか、このことをいう人はいない。私はすでに別稿で指摘した
からここではくりかえさない。それ以外に小さな書きかえが、こんどは編集者によ
って行なわれている。本稿で関連する部分をいえば、まさにこの英文書名につ
いてなのだ。

鄭の該文は、銭鍾書等著『林紓的翻訳』（北京・商務印書館1981.11）にも収録さ
れた。もとづいたのは「作家出版社1957年版」だと明記してある。ところが、
編集者はそれを収録するにあたって細かな書きかえを行なった。原作の題名につ
いて、「九十三（Quatre-vingt-Treize）」（13頁）とフランス語原題に置き換えたのであ
る。『小説月報』の初出、あるいは『中国文学研究』（北京・作家出版社1957.12。
1225頁）がともに英語表示であるにもかかわらずだ。

林紓の書きかえを問題にしている鄭振鐸の文章を、勝手に書きかえるのはいか
がなものか。私は奇妙なことだと考える。フランス語書名に置き換えることによ
って、鄭の原文をねじ曲げた結果となった。編集者にしてみれば、親切心から出
たものだろう。だが、それは余計なことである。

すると、だまされる研究者が出てくる。そのままフランス語書名をあげるのだ。
『林紓的翻訳』収録の鄭論文によったものだろう。原書はもとがフランス語だか
ら、しいていえば間違いではない。だが、そうすると鄭振鐸がフランス語原書をも
とに判定したことになるだろう。さらにいえば、林紓たちがフランス語原書から
直接翻訳したようにも見えてくる。はたしてそうなのか。記述の正確さを私は

問題にしている。

こういう小さなことを書くと、必ずといっていいほど「細かいことはどうでもいい。大きなことを問題にしろ」という声が聞こえる。私にいわせれば、細かい部分をほったらかしにして無視したからこそ、大きなところで間違っただのである。林紵冤罪事件簿でそのことを証明した。

共訳者の存在が問題を解く手がかりになるように思う。林紵が毛文鍾と共同で翻訳したイブセン「幽霊」は、底本がデルの英文小説化本だった。ならば、こちらの『双雄義死録』も英訳本にもとづいたと考えられる。

私が集めて手元に置いて見ている英文重訳本は、いくつかある。以下に英訳者と頁数などを示す。

NINETY-THREE.

Frank Lee Benedict. Harper & Brothers, Publishers, New York, 1874. 356
頁 (背表紙の題名は“'93”)

同 上 同 上 2 段組143頁

Mrs. Aline Delano. Little, Brown, and company, Boston, 1888.
小型版。挿絵付。524頁

Helen B. Dole. Thomas Y. Crowell & Co., New York, 1888.
202頁+270頁。合計472頁

訳者名不記 A.L.Burt, Publisher, New York. 刊年不記。
372頁 (DOLE 版?)

Sir Gilbert Campbell. George Routledge & Sons, London. 刊年不記。
2 段組187頁

同 上 Ward, Lock & Co., Limited, London. 刊年不記。
2 段組187頁

訳者名不記 Edinburgh, and New York: Thomas Nelson and Sons,
London. 刊年不記。468頁

訳者名不記 (Frederic L. Slous, Mrs. Newton Crosland)

THE NOVELS OF VICTOR HUGO. VOLUME . P.

F. Collier, Publisher, New York, 刊年不記。TOILERS OF THE SEA と合冊。挿絵付、2段組。「九十三年」は223頁（本稿に示した挿絵は本書から）

これらは原本を取り寄せた。入手できなかった1種類は、図書館で閲覧した（後に別の図書館所蔵本から複写を入手）。

いずれも350頁をこえている。キャンベル Campbell 版は187頁だが2段組になっており、これも相当な量だ。原書が長編小説だから、英訳してもそれくらいの分量にはなる。それと比較して、大ぶりの活字でゆったりと組んだ林訳が全116頁というのは、文言を使用しているにしても翻訳書としてはやはり薄い。林訳を見れば、だれでも驚くだろう。分厚い英訳本が、これほどまでに凝縮されるものなのか。林紓たちは大鉈をふるって省略したに違いない、と鄭振鐸は考えた。

鄭はつづけて省略本の例をあげる。

中国の以前の翻訳者は、多くが原文を省略するのを好んだ。たとえば某君の訳したトルストイの『復活（心獄と改題）』は原文の3分の1、4分の1にもならない。魏易が訳したディケンズの『二城記 [故事]（Tale of Two Cities）』も原文の3分の1でしかない。

『心獄』は馬君武訳（上海・中華書局1914.9 / 1916.9三版 小説彙刊1）である。「二城故事」は魏易訳（『庸言』1巻13号-2巻1.2号合刊 1913.6.1-1914.2.15）だ。

鄭振鐸は、それらの2作品について訳者が原文を省略したと断言している。はたして事実なのかどうかはわからない。だいいち、この箇所は羅家倫が1919年に発表した文章にもとづいている。羅による5年前の断定を引っ張り出して寄りかかっているにすぎない。鄭振鐸が自分の目でその事実を確認しているかどうかは不明なのだ。なにしろシェイクスピアとイブセンについて、林紓たちに濡れ衣を着せたのが鄭振鐸本人だった。私は、鄭の記述をそのまま信じる気にはならない。上記2作品についても検証が別に必要となるだろう。

これはなぜか。考えるに、その過ちはたぶん口述翻訳者にあるだろう。たとえば『九十三』は、口述翻訳者は全文を見ておらず、出版社が児童用に改編し提供した省略本を誤ってとりあげ林氏に訳して聞かせた。すなわち、林氏は故意に省略したかということについていえば、おそらくそういうことはなかった。幸いなことに林氏のこの種の翻訳は、多くはない。その他各種訳文について1、2の字句の省略および小さな誤りならば、随所にある。いちいち挙げることはできない。また、イプセンの国籍ノルウェーをドイツにかえるなどの類は、訳者の過ちであって林氏の誤りではない。10頁

鄭振鐸は、原作の大幅削除について林紓本人ではなく彼の共訳者に責任を押しつけた。

林紓は、訳書に共訳者の名前を必ず併記している。しかし、研究者が批判をするとき、普段は共訳者を気にしない。あくまでも林紓の名前だけをあげる。結果として林紓批判になるのである。

注目していいのは、鄭がある可能性を述べている点だ。翻訳する時、児童用に改編した省略本を底本にした（以下、要約版と称する）。「誤って」かどうかは別にして、これこそが重要だ。もしそうであるならば、研究者がやらなければならなかった作業は、ひとつしかない。その要約版を探し出して特定することである。指摘した鄭振鐸の問題にもなる。そこまでわかっていながら、なぜ探さなかったのか。

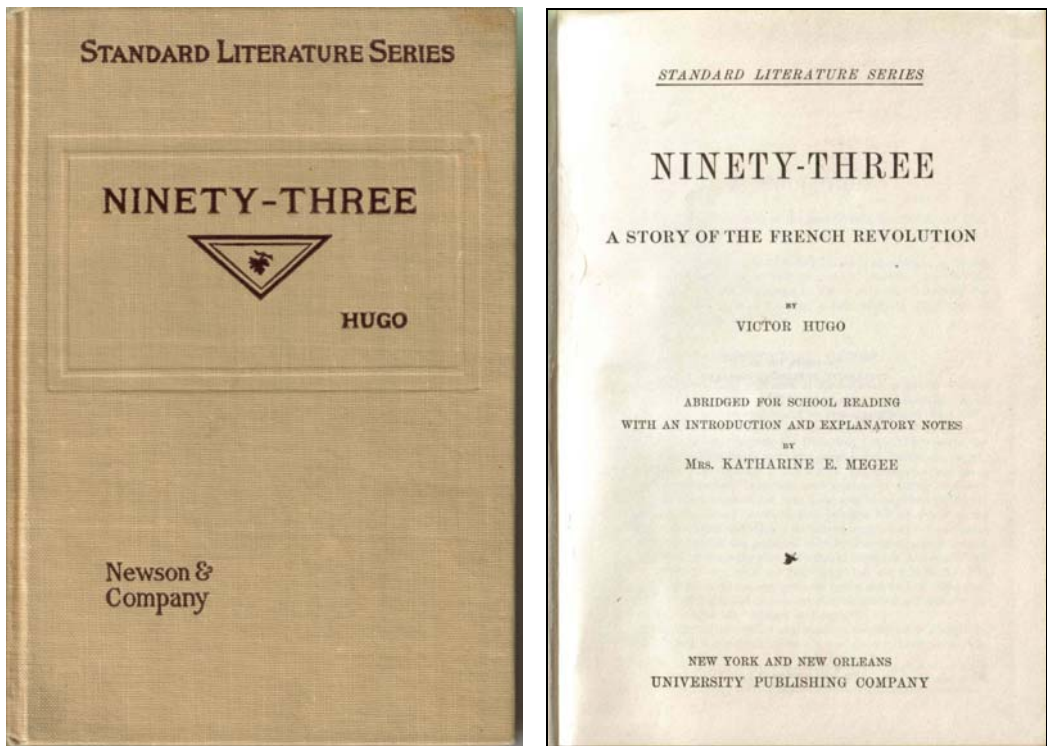
鄭振鐸は可能性を示しただけで問題に取り組みなかった。のちの研究者は、鄭の提出した手がかりを無視した。皆は、林訳がユゴー原作を大幅削除したとくり返して非難するのみ。学界は長期間にわたり林紓批判で基本的に統一されている。その流れにわざわざ逆らって林紓を擁護する必要はない。底本となったかもしれない要約版を探す苦勞より、尻馬に乗って「林紓を罵る快樂」の方を選んだ。そのほうが楽にきまっている。なによりもまして安全なのだ。非難しているのは自分だけではない、皆がやっていることだ。そう言い逃れることができる。言い過ぎかもしれないが、事実には違いなからう。

3 ユゴー英訳要約版の追求

鄭振鐸は、要約版があることの可能性を示した。だが、彼は林紘批判を打ち上げただけ。地道に底本を探索する気は、最初からなかった。

ユゴーの「レ・ミゼラブル」あるいは「ノートル＝ダム・ド・パリ」は、要約され改作されて現在も多種類が刊行されている。小説の枠をこえて広範囲に受け入れられている事実がある。「九十三年」でも同様に、青少年向けに簡約して書き換えた版本があるかもしれない。そう推測するのは、不自然ではないだろう。ただし、内容がフランス革命だから一抹の危惧は感じる。

躊躇していてもはじまらない。要約版があるかどうかは、実際に調査してみなければわからないだろう。



メギー版 表紙と扉

探せばやはり、ある。入手した1冊は、以下のとおり。

NINETY-THREE

Mrs. Katharine E. Megee. University Publishing Company, New York and New Orleans, 1897. 157頁

メギー Megee (McGee あるいは Magee ではないかという人がいるかも知れない。だが、扉には確かに「MEGEE」と書かれている。本稿では表示通りにしておく)が学校読書用に要約した ABRIDGED FOR SCHOOL READING と表示がある。副題は「フランス革命物語 A STORY OF FRENCH REVOLUTION」という。1897年初版と書かれているだけだ。ただし、手元にあるのは、初版そのものではない。1897年版によって後に印刷したものだと思われる。表紙には、Standard Literature Series (Vol.18)、ニュースン社 Newson & Company と記されている。叢書のなかの1冊とわかる。

彼女の「序 INTRODUCTION」があるが、底本については説明をしていない。だが、本文を対照してみて、いくつか先行する英訳の1種類、すなわちベネディクト Benedict 版にもとづいて要約していることがわかった。

ベネディクト版、メギー要約版、林訳について本文各章の章題を対照させた表を次に掲げる。

【対照表】

ベネディクト版 メギー要約版 林訳の順に示す。 印をつけたのは林訳の漢訳部分がどこかわかりやすくするためだ。

「CHAPTER I」のように表示するのはわずらわしいので、アラビア数字にかえた。「/」に原作の題名を日本語訳にもとづいて記入する。ただし、ほかの版本とは番号が異なっているので注意*2。

PART THE FIRST. AT SEA. / 第1部 海の上

BOOK THE FIRST. 第1編

BOOK THE FIRST.

THE WOOD OF LA SAUDRAIE. / ラ・ソードレの森 THE WOOD OF LA SAUDRAIE. 第1篇第1章

BOOK THE SECOND. THE CORVETTE "CLAYMORE." / 第2編コルヴェット艦クレイモア号

BOOK THE SECOND.

- | | |
|--|-----------------------------------|
| 1 ENGLAND AND FRANCE IN CONCERT. | 1 THE CORVETTE CLAYMORE. 第1篇第2章 |
| 2 NIGHT ON THE VESSEL AND WITH
THE PASSENGER. | 2 SILENCE AND SECRECY. 同上 |
| 3 NOBLE AND PLEBEIAN IN CONCERT. | 3 A MONSTER ON DECK. 同上 |
| 4 TRMENTUM BELL. | 同上 同上 |
| 5 VIS ET VIR. | 4 A STRANGE COMBAT. 同上 |
| 6 THE TWO ENDS OF THE SCALE. | 5 REWARD AND PUNISHMENT. 同上 |
| 7 HE WHO SETS SAIL PUTS INTO A LOTTERY. | 6 FACING THE ENEMY. 同上 |
| 8 9=380. | 同上 同上(メギー要約版と一致しない箇所がある) |
| 9 SOME ONE ESCAPES. | 同上 同上 |
| 10 DOES HE ESCAPE? | 7 OUT OF THE REACH OF BULLETS. 同上 |

BOOK THE THIRD. HALMALO. / 第3編アルマロ BOOK THE THIRD.

- | | |
|--|---------------------------|
| 1 SPEECH IS THE "WORD." | 1 HALMALO. 第1篇第3章 |
| 2 THE PEASANT'S MEMORY IS AS GOOG
AS THE CAPTAIN'S SCIENCE. | 2 A MARVELLOUS SEAMAN. 同上 |

BOOK THE FOURTH. TELLEMARCH. / 第4編テルマルク BOOK THE FOURTH.

- | | |
|--|-------------------------------------|
| 1 THE TOP OF THE DUNE. | 1 THE PLACARD ON THE DUNE. 第1篇第4章 |
| 2 AURES HABET, ET NON AUDIET. | 同上 同上 |
| 3 USEFULNESS OF BIG LETTERS. | 同上 同上 |
| 4 THE CAIMAND. | 2 THE BEGGAR. 同上(メギー要約版と一致しない箇所がある) |
| 5 SIGNED GAUVAIN. | 3 GAUVAIN - LONG LIVE THE KING! 同上 |
| 6 THE WHIRLIGIGS OF CIVIL WAR. | 同上 同上 |
| 7 "NO MERCY!" (WATCHWORD OF THE COMMUNE) - "NO QUARTER!" (WATCHWORD OF THE ROYAL PARTY). | 4 IF HE HAD KNOWN. 同上 |

PART THE SECOND. IN PARIS. / 第2部 パリ

BOOK THE FIRST. CIMOURDAIN. / 第1編シムールダン

BOOK THE FIFTH.

- | | |
|--------------------------------------|-----------------------|
| 1 THE STREETS OF PARIS AT THAT TIME. | 1 PARIS AT THAT TIME. |
| 2 CIMOURDAIN. | 2 CIMOURDAIN. |
| 3 A CORNER NOT DIPPED IN STYX. | 同上 |

BOOK THE SECOND. THE PUBLIC-HOUSE OF THE RUE DU PAON. / 第2編パン街の酒場

- | | |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 1 MINOS, ÆACUS, AND RHADAMANTHUS. | 3 THE MEETING IN THE CAFÉ. 第2篇第1章 |
| 2 MAGNA TESTANTUR VOCE PER UMBRAS. | 同上 同上(メギー要約版と一致しない箇所がある) |
| 3 A STIRRING OF THE INMOST NERVES. | 4 CIMOURDAIN GETS A COMMISSION. 同上 |

BOOK THE THIRD. THE CONVENTION. / 第3編国民公会

- | | |
|---|----|
| 1 | 省略 |
| 2 | 省略 |
| 3 | 省略 |

4	省略
5	省略
6	省略
7	省略
8	省略
9	省略
10	省略
11	省略
12	省略
13 MARAT IN THE GREEN-ROOM.	省略
BOOK THE FOURTH. / 第 4 編	BOOK THE SIXTH. (第 2 篇第 2 章 メギー要約版と は一致しない)
1 THE FORESTS.	1 THE BRETON PEASANT.
2 THE PEASANTS.	2 THE BOCAGE.
3 CONNIVANCE OF MEN AND FORESTS.	同上
4 LIFE UNDERGROUND.	3 THEIR LIFE IN WAR.
5 THEIR LIFE IN WARFARE.	同上
6 THE SPIRIT OF THE PLACE.	省略
7 BRITTANY THE REBEL.	省略

PART THE THIRD. IN VENDÉE. / 第 3 部 ヴァンデ	
BOOK THE FIRST. / 第 1 編	BOOK THE SEVENTH.
1 PLUSQUAN CIVILIA BELLA.	1 GRAND-UNCLE AGAINST GRAND-NEPHEW. 第 3 篇第 1 章 (メギー要約版と一致しない 箇所がある)
2 DOL.	2 A SURPRISE AT DOL. 同上
3 SMALL ARMIES AND GREAT BATTLES.	3 SMALL ARMIES - GREAT BATTLES. 同上
4 " IT IS THE SECOND TIME. "	同上 同上
5 THE DROP OF COLD WATER.	省略 同上 (メギー要約版では省略する)
6 A HEALED WOUND; A BLEEDING HEART.	4 THE SORROWING MOTHER. 同上
7 THE TWO POLES OF THE TRUTH.	省略 同上 (メギー要約版では省略する)
8 DOLOROSA.	4 に同じ 同上
9 A PROVINCIAL BASTILE.	5 THE TOWER GAUVAIN-LA TOURGUE.
10 THE BREACH.	同上
11 THE OUBLIETTE.	同上
12 THE BRIDGE-CASTLE.	同上 同上
13 THE IRON DOOR.	同上
14 THE LIBRARY.	同上
15 THE GRANARY.	同上
16 THE HOSTAGES.	6 THE HOSTAGES. 同上
17 TERRIBLE AS THE ANTIQUE.	7 WHAT THE MARQUIS AND IMÁNUS WERE DOING. 同上
18 POSSIBLE ESCAPE.	同上 同上

19 WHAT THE MARQUIS WAS DOING.	同上 同上
20 WHAT IMÂNUS WAS DOING.	同上
BOOK THE SECOND. / 第2編聖バルテルミーの大虐殺	
BOOK THE EIGHTHS.	
1 THE MASSACRE OF SAINT BARTHOLOMEW.	1 BREAKFAST IN THE LIBRARY. 第3篇第2章
2	2 GEORGETTE UNDERTAKES A JOURNEY.
3	3 DISCOVERIES.
4	同上
5	4 THE MASSACRE OF SAINT BARTHOROMEW. 同上(メ ギー要約版と一致しない箇所が ある)
6	同上
7	同上
BOOK THE THIRD. THE MOTHER. / 第3編母親	
BOOK THE NINTH.	
1 DEATH PASSES.	1 SHE MUST FIND IT OUT HERSELF. 第3篇第3章
2 DEATH SPEAKS.	同上 同上
3 MUTTERINGS AMONG THE PEASANTS.	同上 同上
4 A MISTAKE.	省略 同上(メギー要約版では省略する)
5 VOX IN DESERTO.	1 に同じ 同上
6 THE SITUATION.	2 SERGEANT RADOUB ASKS A FAVOR. 同上
7 PRELIMINARIES.	同上 同上
8 THE LAST OFFER.	3 THE WORD AND THE ROAR. 同上
9 TITANS AGAINST GIANTS.	4 GIANTS AGAINST GIANTS. 同上
10 RADOUB.	同上 同上
11 DESPERATE.	5 DELIVERANCE. 同上
12 DELIVERANCE.	同上 同上
13 THE EXECUTIONER.	6 IMÂNUS. 同上
14 IMÂNUS ALSO ESCAPES.	同上 同上
15 NEVER PUT A WATCH AND A KEY IN THE SAME POCKET.	同上 同上
BOOK THE FOURTH. IN DÆMONE DEUS. / 第4編悪魔の中に神がやどる	
1 FOUND, BUT LOST.	7 THE MARQUIS RETURNS. 第3篇第4章
2 FROM THE DOOR OF STONE TO THE IRON DOOR.	同上 同上
3 THE CHILDREN WAKE.	8 MOTHER AND CHILDREN. 同上
BOOK THE FIFTH. THE COMBAT AFTER THE VICTORY. / 第5編勝利ののちに戦いがおこる	
BOOK THE TENTH.	
1 LANTENAC TAKEN.	1 A CHANGE OF PRISONERS. 第3篇第5章
2 GAUVAIN'S SELF-QUESTIONING.	同上 同上
3 THE COMMANDANT'S MANTLE.	同上 同上
BOOK THE SIXTH. FEUDALITY AND REVOLUTION. / 第6編封建制度とフランス大革命	
1 THE ANCESTOR.	同上 同上
2 THE COURT-MARTIAL.	2 ONE IS CONDEMNED-TWO DIE. 同上

3 THE VOTES.	同上 同上
4 ATER CIMOURDAIN THE JUDGE COMES CIMOURDAIN THE MASTER.	省略
5 THE DUNGEON.	省略 同上 (メギー要約版では省略する)
6 WHEN THE SUN ROSE.	2 に同じ 同上

4 メギー要約版と林訳

メギーは、ベネディクト英訳版にもとづいて要約版を作成した。それも元版の約半分以下に、である。

対照表をご覧いただきたい。



従軍物売り女



ラントナック侯爵とアルマロ

章分けも独自にほどこし、改題していることがわかるだろう。訳文は原則としてそのままを使用し、大筋だけを抜き出した。半分以上に要約するのだから、第2部第3編「国民公会」については全部を省略した。つまり、政治と歴史に関する議論部分を基本的に取り除き、3人の登場人物に絞り込んで筋運びを明確にしたということができる。

主人公は、3人いる。

ヴァンデ軍の総指揮者ラントナック侯爵、彼に敵対するシムールダン、その旧知の若者ゴーヴァンである。彼らにまじって、母親ひとりと3人の子どもが重要な役割をはたす。

もう少しことばを加えれば、原作はふたつの勢力が対立し衝突する構造になっている。

地方と都市。君主政治と革命。王党軍と共和政府軍。老人ラントナック侯爵とシムールダン、若者ゴーヴァン。ラントナック侯爵の甥の子がゴーヴァン子爵であり、このゴーヴァンの家庭教師が元僧侶のシムールダンだ。しかも、共和派ゴーヴァンは寛大を、同じ共和派のシムールダンは恐怖を代表している。敵味方の間に複雑な人間関係があり、フランス革命を背景にして物語が進行する。海戦があり陸戦が起こる。まことに規模の大きい歴史小説だ。

林訳の『双雄義死録』という漢訳名は、ふたりの英雄が正義のために死ぬ物語という意味である。死亡するのはシムールダンとゴーヴァンだから、林訳でいうふたりはそうなる。するともう一方のラントナックの影が薄くなった。英雄3人では座りが悪いという林紘の判断かもしれない。

林訳は、一見すればベネディクト版ではなくメギー要約版を底本にした可能性が高い。林訳とメギー要約版は、ほぼ一致している。「ほぼ」と書くのは異なる部分があるからだ。だから、私は今の段階では林訳の底本だとは判定しない。

たとえば、海上における戦闘描写だ。

林訳の17頁には「船主心念四月二号有偵探来言革命軍之艦可十六。……」とある。すなわち、4月2日に敵の艦隊について情報がもたらされていることをいう。ここの「革命軍」は、共和政府軍を指す。つづけて、軍艦の名前を挙げながら大砲の数をかぞえて合計380門が敵側艦隊に装備されていることを説明する。

それらを相手にしてコルヴェット艦クレイモア号は破損している。ラントナック侯爵を乗せて圧倒的に不利な立場に追いつめられた。この部分は、メギー要約版では省略されている。底本にないものを漢訳することが可能だろうか。

たとえば、林訳33-34頁には、海から逃げ延びたラントナック侯爵とそれを助けた乞食の会話がある。

40年間乞食をしているとか、王様の鹿を盗んで罰せられた（原作は縛り首）男の話とか。これらはメギー要約版に見ることができない。だが、林紓は漢訳している。

たとえば、普通は「ヴァンデ」と称せられるベネディクト版では第4編である。

ブルターニュの森でおこった叛乱の歴史と状況を説明する。ベネディクト版は7章に翻訳し、メギー要約版は省略をまじえて3章に要約した。林訳は、わずかに1頁半434文字でしかない。

たとえば、林訳63-64頁にシムールダンがゴーファンの命を助けるために負傷したあとの状態を描写している。

ここは、メギー要約版は省略した部分なのだ（ベネディクト版 3-1-5 THE DROP OF COLD WATER.）。

たとえば、林訳109-115頁にシムールダンが軍法会議で死刑が決定したゴーファンとふたりだけで問答する部分がある。

ここもメギー要約版は省略している（ベネディクト版 3-6-5 THE DUNGEON.）。

メギー要約版にあって林訳がさらに省略するのは理解できる。その逆は、考えにくい。「対照表」においてそれらの箇所には「 同上（メギー要約版では省略する）」と注記しておいた。くどいようだが、念をいれた。

ただ、林紓らが複数の英訳本を手元においている可能性を私は考えないではない。シェイクスピア作品の漢訳にはその事実がある。だが、「九十三年」のばあいは、それができるほどの分量ではなさそうに感じる。詳細な描写と豊富な説明によって原作そのものが大部なのだ。林紓らは、メギー要約版に主としてよりつつも、ベネディクト版を参照した可能性があるのだろうか。断言することは、今、ひかえる。

対照表にはメギー要約版と林訳を掲げておいた。しかし、くりかえすが両者に

は一致しない箇所がある。林訳の底本をメギー要約版だと確定することを私は躊躇する。ゆえに、もう少し調査を継続することにした。

ひとつの手がかりにはなるかもしれない。すなわち、メギー要約版の存在は、別の要約版があることを予想させる。

5 要約版のさらなる追求

鍵語を「学校 school」に限定しなくてもよい。「要約」、「改編」あるいは「改作」でもかまわない。若者が読みやすいように書きかえることは、昔から普通に見られることだ。大筋をつかんで青少年に示し、彼らを作品の世界に導く。作品世界への入門を示すことができれば、成長後に自力で原作に到達することが可能になるだろう。なにがなんでも最初から原作そのものを提供しなければならない、というわけではもちろんない。古典と称せられる長編小説では、その傾向が特に顕著である。

「学校用に要約した adapted for use in schools」と表示する作品が別にあった。私が入手したのは以下の2種類だ。驚いたことに、両者ともにフランス語原題を書名にしている。英語の書名ではメギー要約版以外には見つけることができなかった理由であるらしい。さっそく入手した。

QUATRE-VINGT-TREIZE

J. (James) Boïelle. Edward Arnold, London, 1892再版。

本文187頁。注を含めて216頁

この版本は、フランス語学習用にボイルが編集した。英語で書かれた「序」「ユゴー略伝」「訳注」がある。ただし、本文はフランス語のままだ。フランス語の教科書だから当然か。11章にまとめている。

もう1冊ある。綴りの区切りが異なるが書名は同じくフランス語だ。

QUATRE-VINGT-TREIZE

C. Fontaine. D. C. Heath & Co., Publishers, Boston New York
Chicago, 1906. 本文193頁。注を含めて250頁

「序」があり、ユゴー肖像を巻頭に配置し全部で9枚の挿絵が収録されている。扉に表示されるのは「要約編集版。注と用語解説つき ABRIDGED AND EDITED WITH NOTES AND GLOSSARY」という文句だ。いうまでもなくこちらもフランス語教科書だ。原文を部分的に省略している。

というわけでフランス語原題を掲げる2冊は、ともに林訳の底本ではなさそうだ。私は少し気落ちした。

ところが、思いもかけぬ可能性が出てきた。数字の「'93」をそのまま書名にしている版本がある。

ベネディクト版は背表紙に「'93」と表示する。数字にするか文字にするかの違いにすぎない。だが、インターネットで検索するばあいは数字と文字では別物になる。機械のやることだから、というよりも人間の入力次第だが、そこがむづかしい。気がつかなければ探しようもない。

入手したのが以下の書籍である。

'93.

E. B. d'Espinville Picot. The Evening Telegraph, Philadelphia, 1874.
2 段組163頁

扉には、ピコット Picot が『イブニング・テレグラフ』紙のために特別に翻訳したと明記している。同紙に掲載したそのままを別に印刷して単行本に仕立てたものらしい。

2 段組で小活字を使用して、これもユゴー原作の全訳である。要約版とは違うから、林訳の底本ではない。

要約版を探索しているのに、全訳版が届いたのにはがっかりした。実物を手にして確かめたうえで購入するわけではない。ほとんど書名だけが選択の手がかりだから、そういうこともある。

こうして、林訳の底本探しは振り出しにもどった。

あらためて要約版『九十三年』を探すまえに、問題点、あるいは選択、探索の条件を整理し直すことにする。列挙すれば以下のようになる。

探索条件

書 名：英訳で *NINETY-THREE*、あるいは '93.

訳 者；上述以外の訳者

編 者：不明

出版社：不明

出版年：1920年以前

頁 数：160頁以内の可能性が高い

以上の条件は、あくまでも古書店の目録から探索する際のひとつの目安にするものだ。数種類の英訳本をすでに入手した経験から設定した。

すこし説明しよう。

林訳の底本は英訳だということが探索の前提になっている。毛文鍾という共訳者の存在がそれを示唆する。

英訳者は、明記されていないこともある。上記のようにベネディクトなどが訳者だが、要約版ではそれを明記しないのではなからうか。フランス語原文にもとづいて独自に要約するのではない。既訳のものによりかかって編集する、あるいは編者が抜粋しながら書き直しているかもしれない。メギー要約版にしても古書目録にはメギーの名前はあげられてはいなかった。入手してその編者を知ったのだ。

出版社もわからない書籍を探している。わかっていれば苦労はしない。ただ、すでに入手した以外の出版社が刊行したことを考慮にいれることができる。

1920年以前の出版だろうと考える理由は簡単で、林訳の刊行が1921年だからである。

頁数についていえば、メギー要約版が約160頁だ。私が探しているのは要約版だから頁数は多くはないだろう。当然、原本の2冊本などは探索の対象から除く

ことができる。ついでにいうと価格は、せいぜい15ドル前後のものではないか。メギー要約版は本体が12ドルだった。翻訳原本であれば、売値はその数倍する。ところが、要約版に関しては市場の需要はそれほどないらしいから、それ相応の安さに落ち着いている。

「要約された abridged」などの注記が書目に記載されていれば、それは大きな手がかりになる。だが、ウェブ古書店の目録にそこまで記載されているとは限らない。書誌についてはまちまちである。統一された形式で記載があるわけではない。

ユゴー「九十三年」は著名だから英訳本も多種類が出ていることはすでに説明した。上に探索条件をあげてみたものの、目録に詳細な記述があるとはかぎらない。やはり雲をつかむような頼りなさだ。なかなかむづかしい。

その後、私が入手した書籍は以下のとおりだ。

NINETY-THREE.

- | | |
|--------------------|---|
| Mrs. Aline Delano. | The Athenaeum Society, New York. 刊年不記。
扉裏に Little, Brown, and company, 1888 の表示あり。挿絵付。524 頁 |
| 訳者名不記 | H. M. Caldwell & Company, New York・Boston. 刊年不記。357頁 + 122頁。合計479頁。挿絵付 |
| 訳者名不記 | Dana Estes & Company, Boston. 刊年不記。357頁 + 122頁。挿絵付。BUG JARGAL および CLAUDE GUEUX と合冊。頁数からわかるように、本文の組版は上記とまったく同一だ。 |
| Helen B. Dole. | Thompson & Thomas, Chicago. 刊年不記。372頁 |
| Helen B. Dole. | M. A. Donohue & Company, Chicago. 刊年不記。372頁 |
| 訳者名不記 | Collins' Clear-Type Press, London & Glasgow. 刊年不記。小型版。422頁。挿絵付。Illustrated by A.A.Dixon. |
| 訳者名不記 | <i>WORKS OF VICTOR HUGO. VOLUME</i> . The
Chesterfield Society, London, New York. 刊年不記。 |

Things seen、Essays と合冊。「九十三年」は390頁。挿絵付。LUXEMBOURG EDITION DE LUXE と表示があり1千部限定だというのが限定番号は記載していない。

書目だけが注文する手がかりだ。記載がないから同じ訳者の本が送られてくればあいがある。書籍を手にして重複していることがわかる。しかたがない。

検索をくりかえした。古書店の目録に掲載されている書籍を見ていくと、どのような書店が該書の翻訳を発行したかがほぼわかるようになる。私のできる範囲内のことはやりつくした。原本では入手できないところまで来た。とうとう行き詰まってしまったということだ。

それにしても、林紘が、それほど入手しにくい版本を底本にしたとも思えないのだが。英文原本を購入したのは林紘ではなく共訳者と考えた方が妥当かもしれない。林紘は、自分で読むことのできない原書に興味は示さないだろう。どちらにせよ、当時の中国で入手できる種類の書物だから、特別な版本とは考えにくい。

しかし、探して見つからない。それとも、当時は普通に見られた英文要約本だったが、現在は珍しい部類の書籍になってしまったということなのか。そこまではわからない。

古書店に在庫していない種類の版本だと考えるしかないだろう。

別の方面から調査せざるをえない。すると、気になる版本が見つかった。簡単に紹介する。

6 チャンドラー要約版

古書店が販売していない版本は、入手するのが困難だ。そういう種類のものになる。表示された書誌をながめる。

Victor Hugo's NINETY-THREE; A Tragic and Historic Poem in Prose

Frank Randolph Chandler. Nation Advertising Co., Chicago. [1931] Abridged ed. 80p.

要約版で80頁というのは興味深い。2段組であれば80頁であっても私の想定した探索条件に合致しそうだ。

ただし、刊行年は1931年らしい。それでは林訳の1921年よりも後になる。いままで私が探索していた範囲外の刊行年だ。

よく見てみる。上の表示はカッコでかこんであるではないか。これは推測を意味するように思う。ふたたびいえば、前出のドレイコット・M・デルの『イプセンの「幽霊」物語 IBSEN'S "GHOSTS" Adapted as a Story』があった。原文と林訳を比較対照した結果、デル版が林訳『梅孽』(1921)の底本であるのは明らかだ。だが、こちらには刊年の記載はない。書店の目録にはデル版は1920年となっていたから、それを信じれば矛盾はない。ところが、インターネットで検索すると別の場所では該デル版の刊行を1930年と書いていることに気づいた。こういふばあいは、1930年とするその記述が間違っていると考えるべきだ。記述が正確に行なわれているという保証は、もとからない。

ということは、上のチャンドラー要約版『九十三年』についても、刊年に疑問を残しながら調査を進めるのがよいという判断になる。だいいち、それを見る以外に残された方法はなくなってしまった。

それにしても、書名のつけかたがデル版とよく似ている。日本語にして『ヴィクトル・ユゴーの「九十三年」物語』と書けば同じ趣向だ。つづく副題で「散文体による悲劇的で歴史的な詩」と説明をするところなど思考の回路がデル版そのものではないか。くりかえすが、要約して80頁だということだからますます興味がわいてくる。

該書については、結局のところ馬泰来氏(アメリカ在住)の手をわずらわせてしまった。

上記書名以外の記述を下にかかげる。

An Abridged Edition, Edited by Frank Chandler

Author of Indexes to the Bible, a Guide to the Scriptures

Dedicated to KATE STURGES BUCKINGHAM

ユゴーの肖像がある。その裏に“Copyright 1931 by F. R. Chandler”と書かれている。やはり、1931年の刊行だった。これでは林訳の底本にはなりえない。念のため内容をざっと対照したが、やはり別物であった。

こうして、林訳ユゴーについての底本探索は一応の終了をむかえたのである。私のできることは、やった。

7 林訳ユゴーの底本

林訳の底本となった可能性のありそうな「九十三年」の英訳本を探した。

私が調査したところ、メギー要約版が林訳の底本になった可能性が高いように考える。さらにつけ加えれば、林訳はメギー要約版を底本に使いながら、ベネディクト版から部分的に取り込んでいる。これを本稿の結論とする。

すなわち、林紓らはシェイクスピア作品の小説化本を漢訳した時と同じことをユゴーでもくり返したのだ。底本1種類を決めそれにもとづくのが基本となる。同時に別の版本を参照しながら、必要だと思った箇所を補足して漢訳した。

メギーあるいはチャンドラーとは別の要約版がある可能性を私は否定しない。ただ、現在のところそれを見つけだすことができなかった。

以上が、私の考えである。

8 要約版を底本にすることの是非

鄭振鐸は、林訳を批判して要約版を使用した可能性をあげる。だが、それは批判の論拠として正しいのであろうか。

なにがなんでも原書の一語一句をそのまま翻訳する必要がある。長編であろうとも要約せずに読者に提供しなければならない。これもひとつの見解である。だが、別にそうでなくてもいい、という考え方があってもいい。

林紓のばあい、原作の長大な「九十三年」を原文のとおり提供するよりも要約版のほうが読者を楽ませることができると判断したのではないか。そう考え

でもおかしくはないだろう。

「九十三年」が長編であるのは、ユゴーが歴史と議論を書き込んだからそうだった。そこが欠点だという指摘もある。「『九十三年』の欠点と見られるものは、他のユゴーの小説の場合と同じである。筋の展開に不必要なほどの描写がなされていることや、登場人物の間に大時代的な会話がたびたび行なわれること等である」*3

だからこそ学校用と称するいくつかの要約版が作られている。

つまり、どの水準の読者を想定するかの問題である。その点で林紘と鄭振鐸の見解が違えば、両者はかみ合わない。当然のことだ。

しかも、底本を無視して要約するのと、要約版によって漢訳するのとはそれぞれが異なっている。それを区別せず一方的に林紘を批判することに意味があるのであろうか。

鄭振鐸は、林紘を批判するために林訳を利用したにすぎない。最初から林紘批判という目的があって「林琴南先生」を執筆したのである。

だが、ほかの研究者は鄭振鐸とは別の見解をもっていてもおかしくはない。むしろ、一致しないのが当たり前ではないのか。ところが、中国の学界においてはその例外がなかったことのほうが、私にいわせれば奇妙なことなのだ。

最後に、本稿についてご意見を出されるばあいは以下のお願ひがある。

林訳ユゴーの底本は何か、その書籍を特定してほしい。これが最も重要なことだ。

本稿を否定して、これが違う、あれがちがう、あれかもしれない、こういう可能性もある、これは論文で取り上げるべきものではなかった、などということばは聞きたくない。批判するには新しい資料を提出することが重要だ。それがあってこそ、研究者の共有財産になる。今後の研究に突破口を切り開くことができる。

附記：チャンドラー要約版については馬泰来氏のお世話になりました。特に記して感謝します。

【注】

- 1) たまたま手元にあったというだけの理由でシェイクスピア関係書を2点をあげる。
 ひとつは、ラム姉弟の『シェイクスピア物語』だ。一峰訳『莎士比亞戯劇故事(新訳本)』(北京・京華出版社2006.5)は、ラム版についての出版情報を明示しない。
 (英) 莎士比亞原著、王漢梁訳『莎士比亞戯劇故事』(上海科学技術文献出版社2008.1)は、表紙と奥付にシェイクスピア原著だと表示する。しかし、原書の扉が掲げられているのを見るとネズビット E. NESBIT, *CHILDREN'S STORIES FROM SHAKESPEARE*, RAPHAEL TUCK & SONS.LTD. という要約本だ。原本は刊年不記。
 私は漢訳書名を見て注文したのだが、シェイクスピアの原著だと思った。どこにも注記はないのだ。漢訳ユゴーでは、雨果著、鄭永慧訳『九三年』(北京・人民文学出版社1957.5 / 1978.4吉林第1次印刷。また、同社1992.6北京第6次印刷)がある。こちらは、Victor Hugo. QUATREVINGT-TREIZE, Albin Michel, Paris と表示する。発行年は不記。底本を書かなかつたり示したり。中国では必ずしも定着している習慣ではない。日本でもそういう例は多い。ユーゴー著、早坂二郎訳『九十三年』(改造社1928.12.25 世界大衆文学全集第17巻)、ビクトル・ユウゴオ著、和田顕太郎訳『一七九三年』前後篇2冊(春陽堂1947.9.30 春陽世界文庫)などは底本について触れない。また、原作を少なからず書き換えた児童用の翻訳もある。ユーゴー著、柴田錬三郎訳『古城の虜 九十三年』(偕成社1953初版未見 / 1955.4.10 世界名作文庫22。なお、同社『嵐の九十三年』1967。少年少女世界の名作79は未見)、原作・ユーゴー、桜井成夫著『あらしの九十三年』(大日本雄弁会講談社1955.12.15 世界名作全集121)だ。これらも、底本を明らかにしない。
- 2) 日本語題名は以下のものによった。ヴィクトル・ユゴー著、榊原晃三訳『九十三年』上下 潮出版社 上1969.11.25 / 1978.4.10八刷、下1970.2.1 / 1978.4.10六刷。
- 3) 辻昶「解説」『九十三年』潮出版社2000.6.26 ヴィクトル・ユゴー文学館第6巻。
 385頁

中国現代文学史における林紵の位置

未発表。五四時期に林紵がとった行動について批判が集中している。中国現代文学史の記述を過去にさかのぼって調査したが、例外がない。中国大陸、香港、台湾、日本そのほかの地域を問わずである。すなわち、林紵は文学革命に反対した代表者であるというのだ。しかし、その説明は文学革命派である胡適、鄭振鐸らが判定したものにすぎない。彼らには林紵を批判する必要があった。自分たちの正統性を強調するためには、強力な敵が存在しなければならなかったからだ。その犠牲者が林紵である。しかし、後の研究者が同じ批判を行なうことは、はたして正しいものなのか。林紵の行動のひとつひとつについて検討を行なえば、批判にあたいするものはどこにも存在しないからこそ、中国現代文学史の記述が異様なものに見える。

本稿は、1919年の五四事件直前における林紵問題をあつかう。

中国現代文学史（一部の論文、事典を含む）は、当時の林紵をどのように説明しているのか。

とはいえ、周知のことだからはじめにまとめておこう。林紵が今にいたるまで批判される理由でもある。

林紵は文学革命に反対した代表者だ。

彼がいかに頑強かつ悪辣に反対し攻撃したかを述べる文学史がほとんどだ。なにしろ林紵は、短篇小説を書いて北京大学関係者（文学革命派の人々と重なる）にむけて人身攻撃を行なった人物にほかならない。蔡元培あての手紙を公表して攻撃もした。その彼が軍人の力をかりて新運動、あるいは北京大学（北大と略称するものもある）を抑圧しようとした、とすら書かれている。さらには、当時の北

京で発生した多くの風説風聞を具体的にあげる。北京大学をめぐるウワサだ。それらの背景に林紓が存在し、黒幕となって操っているかのようという。

多種多様な中国現代文学史が世界各地で刊行されているにもかかわらず、なぜこのように簡単にまとめることができるのか。五四時期の林紓については、精粗の差はありながら上記のように基本的な説明でほぼ一致しているからである。林紓には負の評価が下されており、その記述がブレない揺れない。つまり、例外がほとんど存在しない。

ところが、林紓のばあい、負の評価で統一されているのはそれ自体が怪しい。はたしてそれらは事実にもとづいた記述なのか。ほかの研究者はいざしらず、私にとっては当たり前の疑問がでてくる。なぜなら、林紓が翻訳したシェイクスピアとイプセンをめぐる専門家の全員が間違っただけの判断をくだしていた。その前例がある。文学史において、五四直前の林紓が全面否定されていることに対して、私は疑いの目で見してしまう。

五四時期の林紓に限定する。文学史に書かれた彼の位置を検証するのが本稿の目的である。また、文献によっては、林紓の翻訳に言及することもある。

寒光「文学界的論評」(『林琴南』上海・中華書局1935.2所収)が書かれているのをご存じの方もあろう。寒光は、林紓の翻訳が人々からどのように見られているのかを20篇余の文章をあげて説明した。本稿は、それとは異なる。あくまでも、五四事件直前の林紓に関する評価に重点をおいている。

文学史を現在から過去にさかのぼってひもとく。上にのべた周知の事実を確かめることになるはずだ。以下に紹介するのは、私が主要なものだと考える文学史である。また、林紓についての記述がなされているものだけをあつかう。著名ではあっても言及の少ないものは省いた。といいながら、いったんははずしながら、考え直して採録したものもある。そのため少し分量がふえてしまった。

中国大陸においてここ20年間に数多くの文学史が刊行された。それらは新しいある1冊で代表させる。1冊をあげるだけでほかを省略しても、説明に支障は生じないと私は考えたからだ。つまり、新しい見解は示されていないという意味でもある。

さらには、私の手元にはない文学史はあげることはできない。見落としもある

だろう。ゆえに網羅しているわけではないとことわっておく。

本稿は少し長いから、まず全体の構成を示す。

「1 林紓再評価の論文」で、文字通りの文章が複数書かれていることを紹介する。

最初にとりあげるのは、珍しい種類の論文であるからだ。ただし、新しい問題提起であって、まだ一般の文学史に反映されていない。林紓を再評価しようという提言である。それを見れば他の文学史がいかにか千篇一律であるかが、逆に理解できるだろう。

「2 文学史の記述」が本論だ。

文学史の記述について現在から時間をさかのぼって追跡する。主たる文学史の本文から引用するようにつとめた。また、事典なども含んでいる。項目を立てた数は、おおよそ次のとおり。台湾5種、香港4種、日本24種、アメリカ3種、中国大陸32種で合計68種だ。しかし、書名だけをあげたものを含めると100種近くになる。本稿冒頭でのべたように、それらの内容ははっきりいって大同小異だ。それらを私は批判しているのではない。これは、明確にしておく。林紓がどのように説明されているかを確認するためにすぎない。文学史を過去にむけてたどっていくのだから、定説の成立過程を知ることができる。私は、これらの記述について興味深いと感じる。ただし、同じ説明がつづくばかりで退屈だと思われる人もいるだろう。この項目の冒頭に最近の文学史における説明を掲げておいた。それを読めば、おおよその論調がわかる。あとはとばし読みされてもかまわない。

「3 風説風聞について」は復習をかねている。

五四直前の北京で流された風説風聞を簡単に説明する。林紓批判の根拠が存在しないことを証明するためだ。こちらを斜め読みで、どうぞ。

「4 結論」でまとめる。

以上の順序になる。最近の欧陽健論文から紹介したい。そこには、従来見ることのできなかつた主張がある。独自の見解が提起されていると私は考える。こう

いう例は珍しい。特別に紹介する理由だ。

1 林紓再評価の論文

欧陽健「福州近代文化巨人林紓在民国」(『閩江学院学報』第28巻第6期2007.12)である。同誌第4期(2007.8)掲載の「福州近代文化巨人林紓在晚清」と一組になっている。

論文の柱はふたつある。

ひとつは、林紓の創作作品を評価する。小説史では、民国元年から1918年の魯迅「狂人日記」まで、あたかも7年間の空白があるように説明している。だが、林紓が『庚辛劍腥録』(1913)、『金陵秋』(1914)などが刊行されているではないか。林紓らの創作を無視するから、文学史上の空白になっているにすぎない。

もうひとつは、林紓が「伝統文化を守る反潮流の英傑」であるという側面を評価する。論文「論古文之不宜廢」(論文名を正しく表記している)は、林紓の深い危惧を表わしている。林紓が得た蔡元培からの公開返書は、孔子の道を守り古文を擁護する林を満足させた。林紓の短篇小説「荊生」「妖夢」は、もとが錢玄同と劉半農が行なった「なれあいの芝居[双簧戯]」に端を発している。仕掛けられたからそれに反発した。そのどこが悪いか。林紓の短篇小説を新聞で紹介した張厚載に対して、「包容主義」(注:北京大学校長蔡元培が使った用語)を唱える北京大学が退学処分にした。大学の名誉を損なったという理由だ。これこそ中国学術史上極めて悪い先例となっており北京大学にとっては恥すべきことだ。

以上は、私が「林紓を罵る快樂」で述べたことと重なる。これは偶然の一致である。私にいわせれば、先入観を排して資料を冷静に読めば必然的に到達する結論にほかならない。

張俊才「“悠悠百年,自有能辨之者” 重評林紓及五四新旧思潮之爭」(『河北師範大学学報(哲学社会科学版)』2005年第28巻第4期(総第117期)2005.7.15. 106-112頁)である*1。

該論文の内容をひとことでいえば、林紓再評価が必要であることを提起する。

論文の題名「はるか百年もすれば、おのずから理解できる人もでてこよう」に

は、引用符が使用されている。記号を使用したのは、林紓が書いた論文からの字句であることを示すためだ。

張俊才はつぎのように説明する。五四時期の林紓は、文学史などの著作において「封建復古派」「国粹派」の名札をつけられて全否定される。林紓には少なくともみっつの罪状があると歴史家は認めている、と。

これがすなわち、中国の学界に定着している林紓についての一般的な評価だ。張俊才がまとめる林紓の3大罪状とは以下のとおり。翻訳して引用する。

- 1 新旧思潮の争いを積極的に引き起こし、さらに新文化陣営の重要人物に対して人身攻撃を行なった。
- 2 北洋軍閥の勢力を借りて新文化運動をたたきつぶそうとたくらんだ。
- 3 論争全体を通して頑強に封建復古派の立場にたち、当時の守旧勢力の代表だった。107頁 / 332頁

以上が、五四時期における林紓についての定説である。学界の定説だから誰も異議をさしはさまない。林紓評価は、負のまま微動だにしない。固定されている。

興味深いのは、張俊才がこの定説について次のような解説をしているところだ。

いわなくてはならないのは、上述の3大罪状は決して歴史家が史料を分析したのちに出した独立した説明ではなく、彼らは事実上ただ新文化陣営の重要人物が当時説明したことを祖述しただけなのだ。107頁 / 332-333頁

このような説明は、珍しい。従来定説に対して張が異議をとなえているのは明白である。すなわち、今までの研究者は、自分で史料を検討せず先行論文をただひき写しているだけ。ここまで書いた文章を私は読んだことがない。引用する価値が大いにあると判断した。

張俊才が述べるところをさらに見る。中国の歴史家による従来説明は、「勝てば官軍負ければ賊軍 [勝王敗寇] 」(107頁 / 333頁) の論理にもとづいた検証抜

きの一方的な決めつけにすぎない。

ここに林紘再評価の意図が明らかにされている。1918年に公表された王敬軒名義の捏造論文（樽本が使用する用語。捏造書簡といっても同じ。一般には「なれあいの手紙〔双簧信〕」とよばれる）が、林紘を批判するはじまりだ。それから数えれば、ほとんど90年ぶりの名誉回復につながる可能性がある。ただし、それが実現するだろうという意味ではない。

張俊才の見解について、私は基本的に賛成する。検証の経過はそれぞれ違うにしても、こちらが私が諸資料を検討して得た結論とほぼ重なるからだ。

たとえば、罪状1にあげられた人身攻撃とは、主として林紘が書いた短篇小説2篇についていわれている。先回りして私なりの考えをのべよう。虚構と現実とは別物だ。作品の登場人物にモデルがいるにしても、ただの当てこすり皮肉にすぎない（モデルについては、のちに説明する）。人身攻撃を行っていると非難するのは過剰反応である。

罪状2の北洋軍閥うんぬんは、具体的に軍人徐樹錚の名前があげられることがある。だが、軍人が出勤してきて運動をたたきつぶそうとしたなどは風聞であり、しかも林紘とは無関係だ。

罪状3にいう守旧勢力の代表とは、これまた文学革命派による決めつけではない。私が別稿で明らかにしたのは、錢玄同、劉半農、陳独秀らの文学革命派が、守旧勢力の代表という役割を林紘に押しつけたという事実だった。だから、従来いわれている、林紘の方から積極的に出てきて反対したという見解そのものが成立しない。

くりかえす。以上の3大罪状は、私の見るところ、罪状1に関連する部分、すなわち短篇小説を発表したことだけが事実だ。いうまでもなく、小説の内容は別問題としなければならない。切り離して検討する必要がある。罪状2の軍人は風説だし、罪状3の守旧派代表うんぬんは、文学革命派によって実行された悪意に満ちた決めつけにほかならない。

張俊才が自らの見解を発表しているのが2005年だ。そこに至るまで、林紘の3大罪状といわれて一貫して批判され続けている歴史的経過がある。

もうひとつ紹介しておく。郝嵐『林紘小説論稿』（天津社会科学院出版社2005.2）

である。

林紵について、次のように説明している。

「新文化運動中の林琴南は、その翻訳小説がすでに多年にわたり流行していたのだが、突然、新文化人からの大攻撃を受けてしまい、過去において最も重視された「文言」翻訳小説は、今となっては最も非難される点となってしまった」181頁

林紵にしてみれば、「突然」に受けた「大攻撃〔大肆攻撃〕」にほかならなかった。漢語の「肆」には、勝手気ままに、ほしいままに、という意味だ。文学革命派はやっきになって林紵を攻撃した、という説明に良い語感のあるわけがない。そういう文脈で郝嵐は使用していると私は考える。林紵からいえば、それが当時の状況であった。

寒光は、当時の林紵について次のように述べている。「哀れなことに当時の林氏は、無知な人々から頑固派、国故党などと罵られ、はなはだしくは林氏が苦心して紹介した外国文学でさえも種々の誤謬をでっちあげられて大攻撃されたのである！」(前出『林琴南』15頁)。郝嵐は、寒光の「大攻撃〔大肆攻撃〕」を引用したのかもしれない。そうであれば、寒光の林紵評価を70年が経過した2005年に復活させて提出したことになる。

林紵を再評価すべきだと主張する論文は、そのほかにも書かれてはいる。だが、点在するだけで大きな流れにはなっていないと思われる。それらとは別に、現代文学史の主流は、あくまでも林紵批判なのである。

私が別稿で指摘したのは、林紵は文学革命派から反対派の代表者に指名されたという事実だ。これを含んで中国の学界で林紵について全面的に再検討されるようになるかどうかは、今のところ不明のままにするほかない。

ということで、現代文学史において五四時期の林紵はどのように説明されているかを確認する作業にはいる。付随して彼の翻訳についての評価にも言及することがある。

林紵再評価が、将来、もし仮に実行されるとすれば、以下にかかげるそれらの説明はすべてが否定されることになる。これは簡単なことではない。見てもらえばわかる。

以下、文学史をいくつかあげる。林紵の位置説明についておおよその流れを見

る。網羅してはいないとくりかえす。また、私は文学史、そのほかの文章を執筆した研究者を批判しているのではない。そういう事実があると提示しているだけだ。くれぐれもご注意願いたい。2度もくりかえせば理解してもらえらると思う。

2 文学史の記述

私の所蔵する中国現代文学史のなかから比較的新しいものをひとつ紹介しよう。最新のものはほかにあるだろうが、欧陽健、張俊才の新しい観点にそったものが出てくるには時間がかかるだろう。あるいは出てこない可能性の方が高いかもしれない。つまり、従来通りの説明がくりかえされているということにほかならない。(事実、本稿を書いたあとに入手した曹万生主編『中国現代漢語文学史』(北京・中国人民大学出版社2007.9上巻47-48頁)は、通説を反復しているだけだ)

黄開発のばあい

劉勇編著『中国現代文学史』(北京・北京師範大学出版社2006.8)である。

「第2章 五四新文学の理論検討と創作実践」は黄開発の執筆だから、彼の名前をあげておく。従来からの見解を知るためにも、関係部分を少し長い翻訳引用する。

文学革命が提唱されたはじめには、情況はひっそりとしていた。あきらかに多くの反対者がいたが、しかしいかなる反対者も立ってきて発言するのを見ることができない。そこで、1918年3月の『新青年』は「なれあいの芝居 [双簧戯]」を演じた。錢玄同は、社会の反対意見各種を集めて「王敬軒」という偽名で『新青年』編集者に手紙を書き、劉半農が返答の手紙でそれに逐一反駁した。劉半農の手紙は、喜び笑い怒って罵るという痛快きわまりないものだった。2通の手紙は「文学革命の反響」と題され同時に発表されると、文学革命の影響を拡大した。／最初に立ち上がったのは林紵で、彼は「論古文之不当廢」^{ママ}、「致蔡鶴卿書」およびモデル小説「荊生」「妖夢」を発表した。新文化者を攻撃するその意見は主としてふたつある。ひとつは、

「孔孟を覆し、倫常を滅ぼす〔顛孔孟，鏟倫常〕」で、もうひとつは「古書をことごとく廃止して卑俗なことば〔土語〕をもちいて文章をつくる」だ。

「致蔡鶴卿書」において、彼は次のように言っている。「天下において真の学術、真の道徳があつてこそ、はじめて独自に一派を立て人を従わせることができるのです。もしすべての古書を廃し、卑俗なことば〔土語〕を用いて文章を作るならば、北京の車を引いて豆乳を売る輩が操っていることばはいずれも文法がありますから、福建広州人の文法もない鳥の鳴き声とは違い、そうであれば、北京天津の小商人はだれでも教授に採用できることになります」。「荊生」では田其美、狄莫、金心異（それぞれ陳独秀、胡適および錢玄同を当てこすっている）の3人が北京陶然亭に集まって孔教に反対し白話文を提唱している。小説は彼らの言論を狗の吼え声、禽獣のことばだという。話しているときに、「荊生」という「偉丈夫」が出てきて、彼らを大いに叱りつけ大いに腕力を使ったから3人はこの「偉丈夫」の面前で醜態をさらし、頭を抱えてこそこそと逃げだす。小説を書くことによって鬱憤をはらしているのは、作者の内心が虚弱であることを説明している。39-40頁

「最初に立ち上がったのは林紓で」という表現は、ほとんど定型となって使用されている。鍵になる語句と考えてよい。文学史をさかのぼれば、この字句を見ただけで定説通りの思考をしていることがすぐわかるほどだ。

「なれあいの芝居」は、私のいう捏造論文である。それについてなんら恥じるところがない、という態度が明白だ。私がそう指摘しても、指摘された意味を理解しないだろう。当然称賛されるべき手段だという認識が現在にまで継承されている。これが張俊才のいう「勝てば官軍」思考による文学史なのである。

「論古文之不当^{ママ}[宜]廃」は林紓の重要論文であるにもかかわらず題名を間違う。わずかに1字ではないか。意味は同じだから、論文の主旨には影響しない。執筆者のそういうことばが聞こえる。私が、過去において何度も経験したことだ。指摘が細かすぎると受け止められる。その重要性が理解できないらしい。字数の問題ではないのだ。たとえ1文字でも、文献名を間違っていることは、その論文を読んでいないことにつながる。読者は、同様の例を以下に多く見ることになる

だろう。

各種中国現代文学史で説明される林紓批判の内容が、どれもあまりにも似ている。引用文はとばし読みをされてもかまわない。

林紓が批判される材料、根拠は、主として蔡元培にあてた手紙と短篇小説2篇のみである。別の論文が挙げられることがあるにしても、林紓の「攻撃性」が認定されているのは、基本的に彼の手紙と小説なのだ。しかし、林紓よりも先に捏造論文を発表して林を挑発したのは、銭玄同ら文学革命派の側だった。その事実について文学史の著者たちはまったく疑問を感じていないからこそ、私はこれを含めて定説といっている。

上の文学史には軍人がでてこない。張俊才がまとめた定説にしたがえば2大罪状だ。

現在から過去に時間をさかのぼる。まとめた方がわかりやすいかと思い、台湾、香港、日本、アメリカで発行された文学史とそのほかの文献を紹介する。そのあとで、中国大陸にもどっていきたい。

まず、台湾で刊行された文学史からはじめよう。

楊昌年、皮述民のばあい

皮述民、邱燮友、馬森、楊昌年『二十世紀中国新文学史』(台湾・駱駝出版社1997.8)である。

ふたりの名前を項目にあげるのは、分担執筆だからだ。楊昌年は「第5章 国語運動と文言白話の争い」の「(1) 林紓の反対」において次のように述べる。

林紓が反対したのは、彼が訳述に文言を使用する習慣を改変することができなかったためである。1917年3月に「論古文之不当廢」を発表し「ああ！清朝の昔のことだ！文を論じるのは方苞、姚鼐だけだったため、彼らを攻撃するものがおびただしく出てきたが、包姚は、最後まで倒れることはなかった」とのべた。その意味は方苞、姚鼐らの古文家はなんども攻撃を受けたが、古文は終始屹立していた。すなわち胡適、陳独秀の反対も同様にうまくいくはずがないと暗示したのだ。文学革命に応じる人はますます多く、1918年

1月に中国新文学は誕生した。林紓は1919年3月18日に『公言報』紙上で北大校長蔡元培あての公開書簡を発表し、文学革命は「孔孟を覆し、倫常を滅ぼす」と攻撃した。(中略) / 林紓の意見は文学革命の同志たちの決心を動揺させることはできず、蔡元培は返書して反駁していった。(中略) / 林紓は1919年2、3月に上海の『新申報』に「荊生」と「妖夢」の小説2篇を発表し、蔡元培、陳独秀、胡適、錢玄同らを当てこすって誹謗したが、内容が下品なために有識者の反感をさらに招いてしまった。43-44頁

「ママ」と表示した箇所は「2月」だし「不宜」である。原物で確認しておらず孫引きしたのだろう。林紓の蔡元培あて書簡は、その内容が攻撃するものではないにもかかわらず、定説をうのみにしただけ。「文学革命の同志たちの決心を動揺させることはできず [林紓的意見不能動揺文学革命同志們的決心] 」という表現を見てほしい。筆者自身が文学革命の同志と一体化していると受け取ることができる。

「林紓の反対」という表題は従来のもを踏襲している。それを見ただけで、評価に値する部分は、林紓のためには最初から用意されていないことがわかる。

皮述民は「第9章 五四運動と文学革命」において林紓の手紙を紹介する(103-105頁)。蔡元培にあてた林の手紙に反対派の願望が見られるというもの。同じ内容だからここでは省略する。

尹雪曼のばあい

尹雪曼『中国新文学史論』(台湾・中央文物供应社1983.9)である。

「白話与文言之争」という章がもうけられており、ここに林紓が登場する。「最初に立ち上がって白話文運動に反対したのは、当時の古文大家林琴南であった」(62頁)とはじまる。定型句のようなものだ。

(翻訳については)彼のわが国文壇に対する貢献は、小さくないということが出来る。しかし、彼は古文大家であり、清末民初の文壇ですっと活躍していたから、胡適らが提唱する白話文運動について当然反感をいただくのを免れ

なかった。そこで彼は、1917年に白話文に反対する文章をまず書いた。題目は、「[論] 古文之不当廢^{ママ}」という。62-63頁

林紵の論文名を間違うところなど、ほかの文学史と異ならない。つづくのは、蔡元培あての手紙、2篇の短篇小説ということになる。ただ、違うといえば、こうか。短篇小説について林琴南を過度に責める必要はないこと、林が北洋政府の力をかりて胡適、陳独秀らに迫害を加えようとしたとはウワサであって事実とはならなかったこと。これらについては、ほかの研究者よりも冷静に見ているということができる。

陳敬之のばあい

陳敬之の本は複数が刊行されている。本稿では2冊をとりあげる。

ひとつは、『中国新文学的誕生』(台湾・成文出版社有限公司1980.6.15。中国現代文学研究叢刊14)である。

新文学の誕生を主題にしているから、それを阻害した勢力を述べて林紵が登場する。

文学革命運動が遂行される中、守旧派の林紵、梅光迪、章士釗らの激烈な反対に前後して遭遇したとはいえ、進化の鉄則にもとづき、新旧の争いというのは、例のごとく新しい者が勝ち古い者が負けたのだ。林紵らは長槍を持ち出して大立ち回りを演じたが、しかし、数回ももたずに、なりを静めたのだった。13頁

ここには具体的な説明がない。長槍を持ち出して、と抽象的に書くだけ。別の書物にまかせたつもりで紋切り型になったか。

陳は文学革命の立場にたつから、例の「なれあいの手紙」、私のいう捏造論文を説明してしどろもどろである。旧文人が文学革命を無視したと述べたあとに次のように書く。

この新旧双方に遅かれ早かれ必然的に発生する論戦は、結局のところ避けることができなかった。文学革命運動に従事している者は、力を集中して敵を攻撃するために、あらかじめ準備をしなければならなかったし、事実とるべきひとつの方法だったのだ。170頁

文革革命を推進している者がやらなければならなかったのは、捏造論文で林紓を誘い出すことだった。事実の流れを見れば、そうなる。語るに落ちるとは、こういうことをいう。陳が持ち出した進化の法則からして奇妙である。本来の進化論は、新しい者が古い者を攻撃して滅ぼすことではない。陳敬之がここで紹介しているのは、強国が弱国を侵略したとき、それを正当化するために利用した俗流社会進化論である。間違った悪しき進化論であることはいまでもない。そんなものを中国の文学革命に適用するのは、エセ進化論こそがふさわしいという逆説か。それほど高度な技術を使っているとは思えない。ここは単純に、文学革命側について大いに支持したつもりなのだ。

もう1冊は、『新文学運動的阻力』(台湾・成文出版社有限公司1980.7.10。中国現代文学研究叢刊24)である。同一人物が別の書物で違う見解を述べることはないだろう。説明の密度が異なるくらいで、同じ趣旨をくりかえしている。

書名を見れば該書の立場は明瞭だ。「新文学運動」に対する「抵抗[阻力]」がどのようなものであったかを説明している。当時の状況を「文言と白話の論争」という枠にはめる。抵抗勢力の動きを第1次から第3次に区分し、具体的な人物として林紓、吳宓、梅光迪、胡先驕、章士釗が登場するという順序だ。これも定型である。

「当時、最初に身をつきだしてきて、道を守ることを自任して新文学に反対したのは林紓であった」(1頁)とはじめる。あとは、林紓が2篇の短篇小説を書いて当てこすただの、蔡元培を名指して挑戦ただの、蔡元培がそれに応戦ただのと文字通り定型のままなのだ。最後は、「この種のドン・キホーテ式の反抗は、復古派による最後の悲しい叫びでしかなかった」(6頁)となる。最初から結論が述べられている。

林紓に1章を割いているくらいだから彼の経歴、翻訳などについても比較的詳

しい説明がある。こちらを見ると、冒頭に示された結論とは様子が少し異なることに気づく。すなわち、林紘の翻訳を激賞する。文言による外国小説の翻訳は、「彼個人の一生において奇蹟であるばかりか、同時に中国近代文芸史上の奇蹟でもある」(20頁)と書いている。

では、林紘の翻訳を称賛して一貫しているのかといえば、そうでもない。翻訳したのは一流の作品とは限らない、小説と劇本を混同した、児童読物を筆記小説と見なした、訳文は原書と一致しているわけではない(27頁)。鄭振鐸がおこなった批判をそっくり受け入れている。それら欠点の原因は、林紘が外国語を理解しなかったため避けることができない悲哀だと説明する。五四時期の林紘については、大筋は従来の定説を踏襲する。すなわち、蔡元培にあてた手紙で白話を痛罵する、短篇小説を発表して胡適らを悪罵する、偉丈夫の存在を希望して胸中の鬱憤をはらす、などいつもの説明になる。

この一群の新派人物は、もともとが目には目をというわけで、彼(林紘)のことを「桐城の魔物、文選学のろくでなし」と大いに罵ったばかりか、彼に対して集団で攻撃したときに、翻訳で彼があらわにしていた種々の過失は最適で最も有力な攻撃対象になった。当然のようにしてあら探しとからかいに全力をつくしたのである。46頁

王敬軒名義の捏造論文に出てくる「桐城派はろくでなし、文選学は魔物だと見なしている[目桐城為謬種。選学為妖孽]」を利用しているとわかる。文学革命派が林紘を攻撃したその原因は林紘にある、という認識に変わりはない。林紘の翻訳をカッコ付で称賛することとは別問題なのである。

呉文祺のばあい

呉文祺「五四運動与文学革命」(周策縦等編著『五四与中国』台湾・時報文化出版事業有限公司1979.5.15 / 1981.4.15四版)である。ただし、該文の執筆は1940年12月23日となっている。初出について記載がない。

最初の反響は五四運動以前にあって、突撃してきた大将は林紓である。

613頁

紋切り型ではじまるからそのような内容だと考えてよい。林紓は結局のところ30年前の老新党であり、短篇小説をいくつも書いて胡適、陳独秀らを痛罵した。蔡元培に手紙を書いて新文学運動に反対した、と。

林蔡の弁論から1ヵ月あまりして五四運動が発生し、新文学の伝播はますます広がった。林紓の反対論は効果を生しなかったばかりか、一般青年が物笑いにする資料となったのである。615頁

物笑いの資料にするほどの余裕が見られる。1940年の時点で、林紓批判が定着して微動もしないことがわかる。ついでながら、呉文祺は、「林紓翻訳の小説該給以怎樣的估価？」(鄭振鐸、傅東華編『文学百題』上海生活書店1935初出未見/香港・古文書局影印1961.6再版/上海書店影印1981.6)を書いている。前著で紹介した。

周錦のばあい

周錦『中国新文学史』(台湾・長歌出版社1977.1再版)である。

「第2章 中国新文学運動史」の「7新文学運動の逆流」にある。いきなり「逆流」だ。林紓を逆流と考えるのだから、周錦の執筆姿勢は明らかだ。ここでも林紓には否定的な役割しか与えられていない。

林紓は、新文学に反対した最も激烈なひとりで、新文学運動の逆流のなかで最初の潮流でもあった。この近代古文家は、桐城派の継承者で、自分のことを道を守る者だと完全に思いこんでおり、その行ないは本来ならば非常に正直でなくてはならないのだが、しかし表現したのは、醜悪な態度と卑劣な手段で、陰險悪辣に人を中傷するものだった。87-88頁

上記引用文を見れば、周錦はあきらかに林紓を罵倒している。周は、つづいて

短篇小説「妖夢」を紹介し登場人物にモデルがいることを述べ、該書の附録に作品そのものを収録する。古文の大家が書いた小説がどのような水準であるのかを示すのが目的だという。さらに「荊生」についても解説する。ここでも問題にするのが登場人物荊生のモデルだ。

ここから林紘の心理、すなわち荊生のようなひとりの偉丈夫が彼のために鬱憤を晴らし、彼にかわって乱を取り鎮めることを確かに望んでいた。実際には、当時の政治舞台の寵児は安福系の軍閥徐樹錚であって、林紘は彼を利用して「文字の獄」を引き起こし新文学運動を鎮圧し、新文学運動を提唱する人物を一網打尽にできるだろうと考えていた。その結果は、非常な失望であった。林紘はこの小説の末尾にしかたなく「附論」をつけて、「このように混濁した世界に、田生、狄生だけが十分に自ら誇っているだけで、どこに荊生がいるだろう！」と書いた。／荊生を求めて得られず、「論古文之不当廢」を書くしかなく、そのなかで次のような箇所がある。（後略）89頁

「論古文之不当廢」は題名を間違えている。多くの研究者と同じように、原文を見ないで批判しているだけだ。周錦『中国新文学簡史』（台湾・成文出版社有限公司1980.5.20。中国現代文学研究叢刊10）でも同文。

同じく台湾で発行された尹雪曼総編纂『中华民国文藝史』（台湾・正中書局1975.6。25-28頁）がある。林紘の蔡元培あて手紙と短篇小説2篇を発表して反対したと述べる。周錦と変わりはないから書名だけをあげるにとどめる。

台湾の研究者だからといって、大陸で刊行された専門書と記述が異なるということはない。

では香港の研究者は、どうか。

司馬長風のばあい

司馬長風『中国新文学史』上巻（香港・昭明出版有限公司1975.1）である。

「第4章 保守派の反対言論」に「林紘の反抗が最も激しい」と1項目をもうけている。司馬の考えは、こうだ。もしも文学革命が成功し、白話文が文言文を

淘汰することになると、それは林紵が20年の心血をそそいだ翻訳を埋葬することになり、彼の文壇における地位を打ち倒すものだ。ゆえに、文学革命に猛反対した。

林紵は、文学革命に反対するため前後して3篇の文章を書き、そのうえ憤憑をもらす2篇の小説を書いた。彼の最初の文章は「論古文之不当廢」で、胡適が「文学改良芻議」を発表したあとしばらくして、遅くとも1917年3月には書かれた。なぜなら、胡適が4月9日にアメリカから陳独秀へあてた手紙の中に「このごろ林琴南氏の新しい著作「古文は廢止すべきではないことを論じる[論古文之不当廢]」という一文をみて」ということばがあるからだ。当時、航空郵便はまだなく、船便では約3週間の時間がかかるから、林の文章は3月には発表されていなければならないと推測する。/「論古文之不当廢」という文章は、全文がないのでその詳細はわからない。胡適の手紙のなかで次のようなことばが引用されている。(後略) 53-54頁

発表時間を無視して作文する文章に比較すれば、司馬は資料をしっかりと把握している。胡適が引用する林論文を読んでいないと司馬は正直にのべているのが目を引く。ごまかしていないところがよい。「ママ」と注したように題名が1字間違っている。「論古文之不宜廢」が正しい。もとは胡適が誤記したか、あるいは『新青年』が誤植した。だからこそ研究者の多くが誤りを踏襲した。該文の初出は天津『大公報』の1917年2月1日付だった*2。司馬の推測は、それほど大きくはずれていない。

文学革命に呼応する人が多くなっていくにしたがい、1918年1月の新文学誕生をもって林琴南はついに我慢しきれなくなった。継続して激烈な反対行動をとったのである。最も脅しのきいた一手は1919年3月18日の『公言報』に発表した北大校長蔡元培へあてた公開書簡である。彼のこの一手はとても策略性のあるものだ。なぜなら文学革命を提唱した胡適、陳独秀、劉半農、錢玄同らは全員が北京大学の教授であり、蔡元培を集中攻撃するのは

「賊を捕らえるにはまずその頭を捕らえよ」だからだ。しかも当時はまさに南北分裂の時期であって蔡元培は昔からの革命党で南方政府と気脈を通じている人物だと見られており、北洋政府は彼に難癖をつける準備をたえずしていた。林紓の攻撃は、まさに彼らに蔡元培と北京大学に対処する口実をあたえた。しかもこの手紙は蔡元培には送られず、直接新聞に掲載された。計画的な攻撃であることを見せつけ下心は險悪であった。54頁

司馬の説明には、軍人徐樹錚は登場してこない。だが、文章を読めば、林紓が文学革命派に敵対して強大な存在であったことが強調されていると理解できる。

1918年1月が新文学誕生だと彼は書いている。魯迅「狂人日記」の発表は『新青年』第4巻第5号（奥付は1918.5.15）だが、それとは別のことを意味しているのか。

それにしても、「林琴南はついに我慢しきれなくなった〔林琴南終於隱忍不住了〕」と説明しながら、蔡元培に手紙を書いたのが1919年の3月だ。すでに1年も経過している。えらく長い間林紓は我慢したことになる。つじつまがあわない、ということだ。

香港で刊行された文学史をもうひとつ掲げる。

李輝英のばあい

李輝英『中国現代文学史』（香港・東亜書局1970.7。11-16頁）である。

「第1章 文学革命」の「第2節 新文学革命運動中の反対派」（目次では反動派）において林紓が登場する。李輝英があげるのは林紓だけではない。反対派に胡先驥、章士釗のふたりを加えている。時期的に前後するから、林が第1代、胡が第2代、章が第3代というあつかいだ。その先例は、阿英「序例」（『中国新文学大系』第10集史料・索引 上海良友圖書印刷公司1936.2.15 / 上海文藝出版社影印2003.7。4頁）に見ることができる。阿英といえば『晚清小説史』（1937）だが、題名からもわかるように五四時期は範囲外だ。ゆえに本稿では触れない。また、錢基博『現代中国文学史』（1933）もある。それらを参考にしたかもしれない。説明の内容は、大同小異だといっている。林紓の短篇小説2篇を説明し、蔡元培あての

書簡、魯迅から引用し、蔡元培は林紘への返書によって林の口を封じた、というもの。

小説のモデル問題から少し引用しよう。陳独秀、錢玄同、胡適がモデルになっていて荊生がそれを懲らしめるといふ部分だ。

これは林紘の心理上では、偉丈夫荊生型の人物が出てきて彼にかわって鬱憤を晴らし、彼にかわって乱を治めることを本当に希望していた。実際も当時の政治舞台で徐樹錚その人がいたし、彼を利用してあれら新文学革命を提唱する者を鎮圧しようとしたようだ。最もよいのは文字の獄を引き起こすことで、それでようやく願ったりかなったりだった。しかし、林紘がどのように幻想しようとも、また林紘がいかに卑劣な手段で文章を書いてあてこすろうとも、ついに挽回することはできなかった。13頁

徐樹錚の出勤は、明らかに「幻想」であった。だが、心理上の願望だと説明していかにそれが実在したかのように印象づける。このやり方は李輝英独自の発明ではない。胡適からはじまっている。歴史が長いのだ。願望にしてみれば、どんなことでもいうことができる。証明することが不可能であることに気づいていない。あるいは証明不要であることを理解してわざとそう書く。文学革命に反対した人物として林紘の地位は、まったく揺らいでいない。

韓迪厚のばあい

韓迪厚『近代翻訳史話』(香港・辰衝図書公司1969.2 翻訳理論叢書之二。24頁)である。

1966年、香港大学に提出した碩士論文「嚴復、林紘、傅東華翻訳検討」がもとになっているという。碩士論文が改題のうえそのまま出版されたのを見ると、その内容が高く評価されたからだろう。

林紘部分については、林訳の原本特定が主たる目的となっている。しかし、冒頭の「小伝」に次のような説明がある。「ただ彼は晩年に思想が保守に変化し、小説「荊生」を書いて新文学を攻撃した。また、当時の北京大学校長蔡元培に手

紙を書いて、旧文化を公然と擁護した」

従来の文学史をそのままひき写したとわかる。先行文献のすべてが一致してそう説明しているのだから、それに対して疑問を感じなかったのもしかたがない。

香港の出版物だから、趙聡も紹介する。

趙聡のばあい

趙聡『五四文壇点滴』（香港・友聯出版社有限公司1964.6 / 1973.11再版）である。

五四時期の文学に関する文章を集めたものだ。いくつかの箇所には林紵の名前が見える。そのなかの「陳独秀と新青年」において次のように説明する。

この刊行物（新青年）は北大の教授たちがやっていたから、北大校長蔡元培が新文化運動反対者の攻撃の対象となった。古文家の林琴南は、蔡氏に公開書簡を送ったほかに小説を書いて軍人の干渉を暗示したのは周知のことでありこれ以上いう必要はない。そのほかある「文通先生」が「新青年」数冊を持参して当時の大総統徐世昌に見せ「聖經を大いに乱し〔非聖乱経〕」「恐るべき厄災〔洪水猛獣〕」「邪説横行」などの評語を加えた。徐世昌はただちに教育部の審査にまわし、参議院議員張元奇は教育部総長を弾劾し北大校長を処罰する議案を提出したなどと謠言は大いにおこり都全体に広がった。3頁

「文通先生」は、傅斯年「新潮之回顧与前瞻」（『新潮』第2巻第1号1919.10.30）に出てくる。『馬氏文通』で有名な馬建忠の兄相伯を指す（後述）。ここからわかるように、傅斯年の文章を引用し、ウワサに関して通説をくり返しているのみ。また、「新文学的反对者」において、短篇小説を発表して北京大学教員を痛罵しただけ、蔡元培へ公開書簡を送っただけ、「論古文之不当廢」と「論古文白話之相消長」を書いて新文学に反対したがいかなる理由もいうことができなかったなどと説明する（22頁）。こちらも定説のままだ。

そのほかの2例を簡単に紹介しておく。

荊生は徐樹錚だとくりかえす馮明之編著『中国文学史話』下冊（香港・宏業書

局1962.11)がある。

「第16章 清末と近代の文学」のなかの「4 荊生の荒唐夢」において林紓の行動をかなり詳しく説明する。ただし、風聞風説をとりいれ特に新しいものはない。「荊」者「樹」也(601頁)という表記くらいか。馮明之は先入観をもって見るから、そう見えるのだろう。

香港出版の書物に曹聚仁『文壇五十年(正集)』(香港・新文化出版社 刊年不記*³)がある。出版は1950年代だから、後の文学史に影響をあたえているかもしれない。内容は、こちらも大同小異であるとくりかえす。

地域によって研究者の見解が統一されていると考える必要はない。結局のところ、研究者個人が文章を書くからだ。だが、台湾、香港には大陸とは違った独自の見方があってもよいと思うではないか。何をどのように書いてもよい自由があるだろう、と普通は考える。しかし、林紓に関してはその例外が、不思議なことにまったく存在しない。意外に思わないでもない。

日本で刊行された文学史を点検する。

林紓の蔡元培にあてた書簡に関連して『林紓冤罪事件簿』ですでに紹介したものは、今回は基本的にはぶいている。ただし、重複させたものもある。また、網羅しているわけでもない。同じことをいって申し訳ない。

井波律子ほかのばあい

井波律子「中国近代翻訳事情」(『文学における近代 転換期の諸相』国際日本文化研究センター共同研究報告 国際日本文化研究センター2001.3.30 日文研叢書22)である。文学史ではないが、中国近代翻訳について述べているので関係部分のみを引用する。

これ(注:梁啓超)に対し、優雅にして難解な古文を死守した巖復と、美文調に乗せた古文を華麗に操ることを旨とした林紓は、一九一七年に初めて提唱され、二年後の一九一九年の五・四運動を経て、大規模な展開をみせた文学革命(白話によって小説を書くことなどを主張する文学運動)の高まりのなかで、完全に保守反動化し、時代の動きから取り残された。136頁

「完全に保守反動化し」た林紘についての具体的な説明はない。だが、五四時期において林紘が負の存在であったことは、井波の文章によってよく理解できる。「艶麗でリズムカルな美文調がその身上だった。この魅力的な美文調のゆえに、原著から直接訳したわけではなく、誤訳やはなはだしい意識もしばしば見られるにもかかわらず、読者の圧倒的人気を得たのである」(同上)とのべて林紘の内実がデタラメであるとの印象を強める。これが現在にまで続いている一般的な林紘理解であろう。「時代の動きから取り残された」という説明に注目しておきたい。

にたような表現を使うものがある。

吉川榮一「林紘と「文学革命」」(熊本大学文学会『文学部論叢』第67号2000.3.20。74頁)である。「数多くの文学者に大きな影響を与えた林紘は、新しい文学運動が湧き起こる中で批判的的となっていた。林紘は1917年に始まる文学革命の中で真っ先に槍玉に挙げられ、やがて静かに歴史の舞台から退場していったのである」

鈴木将久「林紘」(天兒慧、石原享一、朱建栄、辻康吾、菱田雅晴、村田雄二郎編『岩波現代中国事典』岩波書店1999.5.20。1304頁)がある。「彼自身は外国語を解さず、口訳者の助けを借りての作業であったが、“林訳小説”と呼ばれ後世に大きな影響を残した。中国の近代文学者のほとんどは幼少時代に“林訳小説”に触れている。また古文での翻訳は、従来の古文のジャンルを大きく拡大する意義も持った。しかし五・四運動期に白話が提唱されると、古文を奉じる立場から、白話を下賤なことばと批判し、蔡元培らと激しい論争を行なった。そのため晩年は保守派と批判された」

林紘が「蔡元培らと激しい論争を行なった」ことにしてしまった。「そのため晩年は保守派と批判された」というのも、歴史的経過を逆転させている。中国における記述をそのまま受け入れたのであろう。

また、大木康「林紘」(山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会1995.9.1。480頁)がある。部分を引用する。「林紘は、自身英米をはじめとする外国文学についての

造詣が必ずしも深かったわけではなく、ためにその作品の選択については、欧米文学史上の評価からすれば、必ずしも至当といえないものも含まれている。（例えば、翻訳点数の最も多い英国のハガードは、英国では二流の作家であった）。しかし、これだけ広い範囲にわたる作品を翻訳したことは、中国における西洋文学受容にどれだけ多くの影響を与えたか、はかり知れないものがある」

ハガードを2流というのは、鄭振鐸説に従っているのだろう。林紵についての評価は、相当に高くなされていることがわかる。だが、文学革命になると一変する。「1917年文学革命がおこると、北京大学校長であった蔡元培に公開の詰問状を送って攻撃を加えたため、反動派の頭領と目された」

事實は、そうではない。文学革命派の方が、林紵を保守派の代表者に指名したのだ。しかし、事実とは異なるものが中国現代文学史の主流を占めている。それに影響されるのは日本の研究者としてはしかたがない。

また、佐藤一郎「林紵」(内山知也、佐藤一郎編著『中国小説小事典』高文堂出版社1990.3.25。148頁)がある。「本格的な古文作家が西洋文学の価値を認め紹介したものと、小説の地位の向上に果たした役割は大きい。ただし文学革命に際しては、口語運動の反対者となり、時流から取り残された」。さらに、佐藤一郎『中国文学史』下(高文堂出版社1983.2.25。93頁)も同様だ。「時代から取り残された」をくりかえす。

荘光茂樹「林紵について 欧米小説の翻訳と『致蔡元培書』」(『人間と創造 日本大学創立100周年記念論文』勁草書房1989.10.4。186頁)がある。「当時の中国新教育界新文化界をリードする実力者の蔡氏の釈明反論は、遂に林紵の保守反動を天下に晒し、林氏はとうとう歴史の巨流から置き去られた」

ここでも「巨流から置き去られた」だ。井波律子、佐藤一郎もそう述べていた。荘光茂樹とともに松枝茂夫、増田渉の語句を継承したものか(後述)。

発行年はだいぶさかのぼるが、一般的な林紵理解がどのようなものであるかを知るために小野和子の訳注もあげておく。

梁啓超『清代學術概論 中国のルネッサンス』(平凡社1974.1.28 東洋文庫245。313頁の注10)から。「林紵(一八五二~一九二四)、字は琴南、福建閩県の人。彼自身は外国語ができなかったが、協力者の口述を筆記して『巴黎茶花女遺事』

(デュマ『椿姫』一八九九、一九〇三)、『黒奴籲天録』(ストウ夫人『アンクル・トムズ・ケビン』一九〇五)などを翻訳、古文に書きあらためた。鄭振鐸らの統計によれば、合計百七十一部、二百七十冊を翻訳したという。その翻訳は、誤訳も多く、選択も必ずしも適当ではなかったが、当時の知識人がヨーロッパの文学に目をひらき、近代文学に接近するうえで、その果たした役割はきわめて大きい。五・四文学革命にさいしては、白話文学に反対し、蔡元培に論争をいどんだ」

鄭振鐸の名前が見えるように、彼の説に従っている。これが、あくまでも広く存在している林紘理解である。清末時期における翻訳の功績と民初時期での反動という位置づけだ。

宮尾正樹「林紘」(『集英社世界文学大事典』4 集英社1997.7.25)、高田昭二『中国近代文学論争史』(風間書房1990.1.15)は前著で紹介した。省略する。

中野美代子のばあい

中野美代子「林紘」(『世界大百科事典』29平凡社1988.4.28)である。

.....各国の小説170種余りを翻訳し、<林訳小説>として当時の社会と文壇に大きな影響を与えた。みずからは外国語を解せず、外国語のできる助手の口語訳をもとにしているため、翻訳する作品の選択は恣意的であるが、古文家が外国の小説を翻訳したということで、中国における小説の地位を高めたほか、海外の文学の紹介という啓蒙的な役割をも果たした。民国成立後、文学革命において口語運動を提唱した胡適などを非難したが、保守派文人として忘れ去られた。760頁

林訳が「中国における小説の地位を高めた」ところ、外国文学を紹介したところにその価値を認めている。

作品の選択が恣意的であるというのは、よくいわれる。これは、ハガード、ドイルなどを貶めているから出てくる表現であることを知らねばならない。当時から、中国では大衆小説を蔑視していたのだ。伊藤虎丸は「通俗的な興味本位に流れ」と書いている。中野にかぎらず、今にいたるまで、林訳の選択基準について

当時の知識人の尺度を使っているのはいかがなものか。別の角度からの評価があってもいいと考えるからだ。

林紵は、胡適を小説に登場させて皮肉っただけ。

「保守派文人として忘れ去られた」という説明を見て自分の目を疑う。「忘れ去られた」どころか、中野の執筆よりも前に商務印書館は「林訳小説叢書」10種を復刻出版している（1981）。逆のいいかたになるが、林紵は今でも現役をつとめている。文学革命の反対派代表としてその地位の高さは唯一最高である事実を見てほしい。誰でもが林紵を「罵る権利をもつ」（周作人）と宣言されたのは1924年、林紵が死去した直後だった。それ以来、林紵はひとときも「忘れ去られた」ことはない。研究者のほとんど全員が「林紵を罵る快楽」を享受しているのだ。林紵については、どんなにデタラメを書いても、またそれを引用しても許される。研究者がその公認の快楽を手放すはずがないではないか。

荘司格一らのばあい

荘司格一、小野四平、小川陽一、三宝政美『中国文学入門』（白帝社1987.6.20）である。

林紵は、「第5章近・現代の文学」において言及される。林訳小説（近代文学の前史）と五四直前の文学革命（文学革命と五四文学）の2カ所に出てくるのは、通説どおりだ。

林紵は初め北京で教師をしていたが、『天演論』が刊行された翌年（一八九九）に翻訳出版したデューマの『椿姫』（訳書名『巴黎茶花女遺事』）が大当たりをとると、翻訳業に転じた。彼も嚴復と同じく桐城派の古文の名手で、自身は外国語を解しなかったので、協力者に口述させて「翻訳」した。作品の選択は多分に興味本位で、ストウ夫人の『アンクル・トムズ・ケビン』をはじめシェークスピア、ディケンズ、セルバンテス、トルストイ等からコナン・ドイル、徳富蘆花までを含む、百五十種以上に及んだ。彼の翻訳物は、「林訳小説」と呼ばれ、郭沫若、丁玲など後の中国近代文学を担うに至った人々もこれによって西欧文学に目を開いた。232頁

林紵が王寿昌と共同で『巴黎茶花女遺事』を翻訳して刊行したのが1899年、福州で私家版木刻本だ。杭州をへて北京に転居したのが1901年のこと。上の説明では北京で教師をしていた時に「翻訳業に転じた」ように読める。「転じた」事実は、ない。教師をつとめながら翻訳もしていた。もうひとつ。丁玲はあやしい。それ以外は、伊藤虎丸（1975）と同じことを書いている。

王敬軒（錢玄同）の捏造書簡と劉半農の「なれあいの芝居」については、こうだ。

文学革命運動は当初なんの反響もなかった。やむなく世論を喚起するために、仲間うちでサクラを使い、錢玄同が口語文学反対論を書いて、劉半農がそれを駁論するという狂言まがいの手を打った。237頁

著者は、「やむなく」「まがい」と表現して文学革命派の立場で記述している。だから、彼らの攻撃目標にされた林紵には、なんの同情心もわからないのも当然だ。

文学革命の拡大深化は、必然的に反対派の攻撃をよびおこした。なかでも「林訳小説」で名声を馳せた林紵は、反対派の急先鋒をつとめ、蔡学長に公開質問状を発して、文学革命運動を「孔孟の教えを投げすて、人倫を踏みこじめるもの」ときめつけ、口語文学派の主張通りにすれば、卑しい人間でも大学教授になれるだろうと中傷を交えた非難を加えた。林紵のなりふりかまわぬ罵詈雑言は、逆に文学革命運動が反儒教の思想運動と一体化を遂げていることを証明するものだった。238-239頁

錢玄同と劉半農が「狂言まがいの手を打った」ことは中傷ではない。だが、蔡元培校長にあてた林紵の公開質問状は「中傷を交えた非難を加えた」ことになる。

伊藤虎丸のばあい

伊藤虎丸が書いた、近現代の文学論「概説」（伊藤虎丸、横山伊勢雄編『中国の文

学論』汲古書院1987.9)である。

「林紘(一八五二 - 一九二四)による『椿姫』(九九)など大量の西洋小説の翻訳紹介」(257頁)と触れたあとが「文学革命期」の説明になる。胡適「文学改良芻議」、陳独秀「文学革命論」、魯迅「狂人日記」、周作人「人間の文学」ときて林紘だ。

やがて起こった五四運動の昂揚の中で、各地に雑誌の創刊や文化サークルの結成があいつぎ、運動は知識青年の中に大きく影響を拡げていった。こうした風潮を憤った保守派の林紘が公開書簡を発表して「道徳を破壊する」口語文の禁止を要求し、『新青年』側は「罪はデモクラシーとサイエンスにある」と高言して譲らなかったという挿話からも知れるように、“文語と口語の争い”は、単なる表現の問題ではなく、反封建の思想闘争でもあったのである。258頁

五四運動は、その名の通り5月4日以降の運動だ。林紘が書簡を公表したのは、それより前の3月である。また、林書簡の内容は「口語文の禁止を要求し」たものでもない。蔡元培にあてた書簡だから、直接答えたのは蔡自身である。『新青年』に陳独秀がデモクラシーとサイエンス(「本誌罪案之答弁書」)を発表したのは1月だ。蔡元培にあてた林書簡よりも前のことになる。林紘とは直接の関係はないのだ。それらの点は正確ではない。しかし、伊藤は全体の流れをそのように把握して書いている、と私は判断する。つまり、林紘を反対派代表にすえて事態が動いているという把握だ。それが従来の見方である。

伊藤は、これ以前に少しだけ詳しく説明しているから引用しておく。伊藤虎丸『魯迅と日本人』(朝日新聞社1983.4.20)だ。「小説家魯迅の誕生」から。

当初はかばかしい反響もなく「寂寞」をかこちがちだった運動も、次第に力を得ていき、同時に保守派の反撃も強まった。その頃、林紘(琴南、清末に「林訳小説」と呼ばれる西洋小説の文語体翻訳を大量に手がけて、西洋文学の最初の紹介者として功績があった)が、蔡元培あての公開状を発表し、『新青年』に拠る北京大学の教授たちは、「古書を廃して口語を用い」「孔孟を覆して

道徳を乱している」と非難して処置を求めたのに対して、蔡元培が大学における「思想自由の原則」をとって断固反論したのは、有名なエピソードである。152頁

「非難して処置を求めた」という説明は、北京大学教授たちに対する「処置」を意味しているのだろう。林紘が北大教授のクビを要求した、というありもしない通説をふまえているだけ。

かさねていうが、清末の林紘は評価し、五四直前の林紘は批判するという形をくりかえす。前野直彬編『中国文学史』（東京大学出版会1975.6.25）で分担執筆した「第9章 近-現代」の「近代文学の胎動期」と「文学革命と五・四運動」である。関係部分を引用する。内容は重複するのだが、思考が深く定着している様子を知るためには必要だ。ルビは省略する（基本的に以下同じ）。

（1）翻訳小説　まず、量において創作をしのいだといわれる西洋小説の翻訳の最初は、『天演論』の翌年に刊行された林紘（琴南）の『巴黎茶花女遺事』（デューマ『椿姫』）だった。林紘は巖復と同門の桐城派古文の名手で、自身は外国語を解さず、協力者に口述させてそれを文章化したといわれる。作品選択の基準も通俗的な興味本位に流れ、原則性を欠くが、ストウ夫人の『アンクル・トムズ・ケビン』をはじめ、シェークスピア、セルバンテス、ディケンズ等々から徳富蘆花にまでおよぶ全部で一七〇種以上といわれる彼の翻訳は、“林訳小説”と呼ばれて、郭沫若・魯迅など後の現代文学の担い手たちの多くが、これによって広い世界の小説に目を開かれた経験を持っており、その功績は小さくない。274頁

以上が清末の林紘を評価した部分だ。一般論として「量において創作をしのいだといわれる」とは、阿英『清末小説史』にもとづいている。だが、その事実はなかった。ゆえに、先行文献を受け入れているだけだという。以下が伊藤による林紘批判である。

当初ははかばかしい反響もなかった＜文学革命＞の提唱はしだいに力を得ていったが、同時に保守派の反撃も強まった。そのころ、林紓が蔡元培宛の公開状を発表し、『新青年』に拠る大学教授たちが「古書を廃して口語を用い」「孔孟を覆^マえして道徳を乱している」と非難したのに対して、蔡元培が、大学における「思想自由の原則」をとって反論したのは有名な挿話である。

279頁

林紓が手紙を書いて蔡元培に質問したのは、北京大学における教育についてだった。だから、蔡元培が「大学における「思想自由の原則」をとって反論した」のは、当然だ。蔡元培が憤り深かったわけでも、論拠を万全にして林を批判したわけでもない。林が質問し蔡がそれに回答しただけのことだ。それをあたかも林紓が無理難題を吹きかけて非難したかのように説明している。保守派の代表として林紓を扱うのも中国でそのように説明されているからだろう。あるいは、林紓が非難し蔡元培が反論した、という表現の根本には竹内好がいるのかもしれない。

『中国現代文学事典』のばあい

丸山昇、伊藤虎丸、新村徹編『中国現代文学事典』（東京堂出版1985.9.30）である。「中国近・現代文学史概説」は、丸山と伊藤のふたりが書いている。ただし、分担がどうなっているのか該書を見ただけではわからない。そのなかに「林紓の翻訳小説」と章をたてる。

嚴復の翻訳がヨーロッパ近代の思想を中国にはじめて紹介したのとする、近代の小説をはじめて紹介したのは林紓（林琴南）だった。彼は嚴復と並び称された桐城派古文の名手だった。自身は外国語を解さなかったが、協力者に口述させてそれを文章にするのが彼の“翻訳”だった。（注：作品名は省略）作品選択の基準はたぶんに通俗的な興味本位に流れ、原則を欠いていたが、それが新しい世代に広い世界文学に眼を開かせ、小説への興趣を育てた功績は大きい。後の魯迅や郭沫若から丁玲に至る近代文学の作家たちの大部分が、若い時に“林訳小説”を愛読した思い出をもっている。17頁

林紵の正負両面をあわせてかけ、正の方向にやや重点を置いた記述になっている。清末における林紵の役割を評価し、五四時期の林紵を批判する。これが中国で行なわれている説明の定型である。というよりも竹内好の見解を継承しているといったほうがよいかもしい（後述）。そのどちらでも記述内容は同様ののだが、丁玲をあげているが、これは謝冰心の誤りではなからうか。

「『新青年』と文学革命」の章では次のようになる。

一九一七年に陳独秀は北京大学学長の蔡元培に招かれて同大学の文学部長となり、やがて胡適、李大釗、錢玄同ら四人の北京大学教授によって『新青年』編集委員会がつくられ、北京大学は文学革命のメッカの観を呈した。保守派の反発も強く、林紵はこれを非難する公開状を発表するなどしたが、蔡元培は思想の自由の原則を掲げてこれを退けた。22-23頁

林紵の蔡元培へあてた手紙で反対派の行動を代表させた。「これを非難する」の「これ」とは文学革命のように読める。林紵は文学革命を非難したか。いや、林紵が手紙を書いて蔡元培に直接問うたのは、北京大学における教育内容についてだった。「非難」したわけではない。通説をくりかえして林紵は悪者あつかいである。「メッカの観を呈した」。どこかで目にした表現だ。この部分は丸山昇の執筆か（後述）。

本稿では、文学史などの説明文を引用して林紵を取りまく状況をあわせて説明している。

丸尾常喜のばあい

丸尾常喜『魯迅 花のため腐草となる』（集英社1985.5.22 中国の人と思想12）である。

五四時期の歴史的背景を説明すれば、当然のように林紵が出てくる。

このような動向（注：『新青年』に代表される潮流）に、軍閥政府はしだい

に神経をとがらせるようになり、『新青年』や北京大学に対する風当たりもつよくなった。林訳小説を世に送り、「桐城派」古文の大家としても名高い林紘は、「荊生」「妖夢」の二小説をつくって、陳独秀・胡適・錢玄同らに人身攻撃を加え、また蔡元培に公開状を送って北京大学を非難した。「孔・孟の教えを転覆し、倫常を破壊し」、古書を廃し、「土語」を学問の府にひきいれるものであるとして、学長としての責任を問うたのである。蔡元培は林紘の論点に逐一反論するとともに、北京大学が「思想の自由」と「兼容併包主義」とを原則とすることを強調して、非難をしりぞけた。150頁

小説による「人身攻撃」、蔡元培あての公開状が「非難した」ものであるという認識は定説にそったものだ。

尾上兼英のばあい

尾上兼英「林紘」(『アジア歴史事典』第9巻平凡社1962.4.14 / 新装復刊1984.4.1)である。

事典項目だから説明は長くはない。それゆえか、林訳と文学革命に対する態度のふたつに焦点をしばって記述している。

93(光緒19)年、パリから帰国した王寿昌からフランス小説について教えられ、さっそく翻訳したのが<巴黎茶花女遺事>(デュマ A. Dumas <椿姫>)である。これによって一躍有名になり、民国成立後も上海の商務印書館の専属翻訳者となって160余种出版した。その中には<アイバンホー><ロビンソン・クルーソー><ガリバー旅行記><スケッチ・ブック><ドン・キホーテ><幽霊>(イブセン H. Ibsen)、<不如帰>(徳富蘆花)などがあって十数カ国にわっているが、彼自身は外国語ができず、16人の協力者の口述をその場で文語訳したので、誤訳も多いし、選択も人まかせでかならずしも妥当ではない。しかし、文学の視野を世界的にひろげ、小説の価値を高めた功績は、厳復訳<天演論>(ハックスリー T. H. Huxley <Evolution and Ethics>)が進化論を伝えた功績と双璧をなしている。324頁

林訳に対する評価は、非常に高い。にもかかわらず、尾上は、「選択も人まかせでかならずしも妥当ではない」と書かずにはいられない。例にあげた諸作品のどこが「妥当ではない」というのか。何も知らない人が読めば、そう感じるだろう。しかし、知っている人は、この裏にはハガード、ドイルを想定しているからだと理解する。鄭振鐸をひき写しているだけ。ハガード、ドイルのどこが「妥当ではない」のか、と反論される可能性もある。

「商務印書館の専属翻訳者となって」と説明している。陳衍（石遺）「林紵伝」（『国学専刊』第1巻第4期1927.10.2 / 台湾影印1970.2）にそうとも取れる表現がある（鳳謙創商務印書館。則約紵専訳小説。樽本注：高鳳謙（夢旦）は商務印書館を創設していない。陳の誤解だろう）。これに拠ったものか。それにしても、この書き方を見ると専属契約でもしたのかと思うではないか。多くの作品が商務印書館から刊行されているのは事実だ。しかし、それしかないというわけではない。林訳は、広智書局、文明書局から出ているし、限定をつけた「民国成立後も」中華書局、進歩書局から出版してもいる。不正確な説明だと思う。

つぎが文学革命だ。

清末の改良派に同調し封建的束縛からの女性解放を主張した彼も、1917年の文学革命によって陳独秀、胡適らの文体改革派が主流となると、桐城派古文の伝統に固執して北京大学校長蔡元培に公開状を送り、口語文運動を批判した。また〈妖夢〉〈荊生〉という短篇小説を作って非難し、反動派とみられるにいたった。324頁

参考文献のひとつに鄭振鐸「林琴南先生」があげられている。ゆえに鄭の主張にそった記述になった。蔡元培あてに手紙を書き短篇小説を発表しただけで、林紵がなぜ反動派になるのか考える必要はないのである。

尾上は、別の辞書項目で同様のことを書いている。『日本大百科全書』24（小学館1988.11.1）の「林紵」だ。民国以後の林紵についてはこうなる。

民国以後、胡適らの白話運動に反対して北京大学校長の蔡元培に非難の書簡を送ったり、『妖夢』『荊生』などの小説をつくったりして諷刺した。晩年は悠々自適の生活を送った。209頁

林紘の小説について「非難」が「諷刺」にかわった。責めとがめる、よりも当てこすりの方が軽くなったように思う。ただし、全体的に言えば、通説を受け入れているとわかる。

「晩年は悠々自適の生活」という説明は珍しい。なぜなら、落ちぶれたようにいう人の方が多いからだ。林紘は晩年に売画によって生活した、と范烟橋、近藤春雄、実藤恵秀らが推測にもとづいて説明している。それに比べればこの箇所は冷静に書いている。というよりも、ここも陳衍の該文に拠っているか。あるいは銭基博の文学史かもしれない。

当時の商務印書館において、林紘は最高の原稿料をとっていた。刊行点数が多いことをあわせて考えれば、絵画の制作に没頭できるだけの経済的余裕があったと考えるのが妥当なところだ。

興膳宏、丸山昇のばあい

河盛好蔵監修『ラールス世界文学事典』（角川書店1983.6.10）である。

古代から清末までは興膳宏、近代文学と現代文学は丸山昇の執筆になる。

林紘について清末と民初の評価が正と負に分かれていることは、すでに述べている。本事典でも同様だ。

「近代への苦惱 晩清の文学」に「林訳小説」の項目が立てられているのが目を引く。

林紘の作品選択はかなり興味本位なところがあって、訳ももちろん原典の意を忠実に伝えるものとはいいがたい。また彼の文学観に過去の遺制ともいうべき限界のあったことは、後年彼が「文学革命」の頑強な批判者として、時代の流れに逆行しようとしたことにも現れている。にもかかわらず、彼が西洋の近代文学をはじめて中国の読者に紹介して、文学の世界に新しい分野

を開拓したことは高く評価されてよい。魯迅や郭沫若など近代文学の第一世代を担った人々は、いずれも年少のころ林訳小説から大きな感化をこうむっている。249頁

林紵を文学革命の批判者としては負の方向で評価をくだす。ただし、林訳については限界を見ながら総体としては強く正の方向で評価していることがわかる。

「近代文学と現代文学」が丸山昇の執筆になる。「新青年」と文学革命」において、次のように説明する。

一九一七年に陳独秀は北京大学学長の蔡元培に招かれて同大学の文学部長となり、やがて胡適、李大釗、錢玄同ら四人の北京大学教授によって「新青年」編集委員会がつくられ、北京大学は文学革命のメッカの観を呈した。保守派の反発も強く、林紵はこれを非難する公開状を発表するなどしたが、蔡元培は思想の自由の原則を掲げてこれを退けた。251頁

「メッカの観を呈した」でわかる。この部分は、丸山が「第3部中国文学」（高橋徹、可知正孝、丸山昇著『世界の文学（ ）』講座「文学・芸術の基礎理論」第3巻汐文社1974.7.1。192頁）で書いたこととほぼ同文である。1983年のこのラールス、および1985年の『中国現代文学事典』でくり返した。私は、それが悪いといっているのではない。誤解のないように。熟慮して得た結果は、くり返して書くのが当然のことだからだ。「林紵はこれを非難する公開状を発表する」についてはすでに説明した。その事実はない。

同じく丸山には「林紵」（『国民百科事典』14平凡社1978.11.29。294頁）がある。

つぎに文学史ではないが、日本で刊行されているから触れておく。

中国近現代史のひとつが、姫田光義、阿部治平、笠原十九司、小島淑男、高橋孝助、前田利昭『中国近現代史』上巻（東京大学出版会1982.6.15）だ。林紵の翻訳小説は、清末時期において「西欧の文学世界にいざなった功績は大きかった」（132頁）と評価する。その彼が、中華民国になってから五四文学革命の「こうした動きに対して、反対の急先鋒となった」（261頁）と記述する。これも見てきた

とおりの定型である。相当に根が深い。

実藤恵秀ほかのばあい

実藤恵秀「林紓」(『世界大百科事典』32平凡社1981.4.20)である。内容は、主として翻訳と五四時期に分かれる。

林紓は嚴復のように外国語ができたわけではない。他人が外国の作品を訳すのをきいて、ただちにすぐれた中国文に訳したのである。(注:作品名は省略する)全翻訳156種のうちH.R.ハガードのものが20種、コナン・ドイルのものが7種もあるのは、選択が文学的にみて十分でないともいわれているが、現代文学のすぐれた作家、魯迅・郭沫若・謝冰心らの少年少女時代には、林紓の小説を愛読して、文学的情操を養われたことは、かくれもない事実である。31頁

林訳を説明して「全翻訳156種」「ハガードのものが20種」「ドイルのものが7種」と細かい。これらの数字は、すべて鄭振鐸が「林琴南先生」であげたものを借用した。林紓の翻訳については、現代作家の愛読書としての価値を認めた。定型のひとつだ。ところが、五四時期の林紓に筆が移ると、評価は急降下する。

ところが、文学革命がおこり、白話文学がとなえられるようになると、まっこうから反対したのは林紓と嚴復とであった。とくに林紓は反対派の主将ともいうべく、教授たちのなかで文学革命論者の多い北京大学総長蔡元培に公開状を寄せて、総長が白話文学者を擁護することを非難し、また《荊生》《妖夢》という風刺小説を作って陳独秀・胡適などをののしった。しかし、効果はなかった。晩年は書画をひさいで生活し、有力者にすぎるといってはなかった。31頁

いくつか注釈が必要だ。

林紓と嚴復が並べられている。しかし、嚴復は当時表面には出てこない。

林紓が蔡元培にあてた公開状で「白話文学者を擁護することを非難し」たことはない。北京大学における教育について質問しただけだ。通説によっているから、実藤は事実を把握しそこねた。

林紓は小説を書いたののしつたが「効果はなかった」。ここは、わかりにくい。小説には現実を直接に改変する力がある、と実藤が考えているからこそ生まれた表現だろう。短篇小说2篇にそのような魔法の力があると考えたことの方が奇妙だ。あるいは、陸侃如、馮沅君合著『中国文学史簡編』(1932)から単に引用しただけかもしれない。

それよりも、立場をかえれば、効果は大いにあったのである。つまり、2篇の小説をつかまれて林紓は文学革命派の反対者代表として高々と吊り上げられることになったのだ。陳独秀たち文学革命派にとっては「効果はなかった」どころの話ではない。彼らは、逆手にとって効果的に利用した。

「晩年は書画をひさいで生活し」という書き方からして、林紓が晩年に落ちぶれてしまったとの印象を濃くする。しかし、その事実はない。後でまた触れる。

「有力者にすぎるといふことはなかった」といふのは、どういう意味か。経済的援助を必要としていたが他人にはたよらなかつた、か。なぜ突然「有力者」がでてくるのかわかりにくい。そういう説明をする中国の文献はないからだ。これは連想によるものではないかと私は思う。すなわち、林紓は軍人徐樹錚にすぎつて北京大学を抑圧しようとした、という噂があつた。それからの発想だ。これも事実ではない。

1981年発行だから、倉石武四郎の説明もここで少しだけ引用する。「文学革命」(『世界大百科事典』27平凡社1981.4.20)である。

もちろん、こうした運動をよるこばぬものもあり、とくに林紓(しょ)のごとき古文家は極力これに反対し、白話は車夫馬丁の言葉だとののしつたほか、《荊生》と題する小説を書いて、胡適・陳独秀・錢玄同の3人を風刺し、さらには北京大学校長蔡元培にたいして、白話を禁ぜよと迫つたが、蔡元培は思想自由の原則をかかげてこれをしりぞけた。315頁

林紵は蔡元培に「白話を禁ぜよと迫った」事実はない。しかし、倉石はそう思いこんでいるからそれをくりかえす。くりかえして読めば、そうだったような気になるかもしれない。

倉石武四郎『中国文学史』（中央公論社1956.10.25 / 1968.3.9十三版）、『中国文学講話』（岩波書店1968.11.20。岩波新書青版696）を前著で紹介した。それと同じである。同一人物が書くのだから当たり前だ。

相浦泉のばあい

相浦泉『現代の中国文学』（日本放送出版協会1972.10.25 NHKブックス）である。

「第1章 現代と文学」「2 現代文学の成立と発展」のなかに「文学革命の提起」がある（ルビ、注番号は省略）。

「文学革命」の提起は、当時、実際には、あまり世間の反響を呼ばなかった。後に中国文を廃止して、エスペラントに改めるべきだ、とまで主張した銭玄同は、一七年三月の『新青年』に、王敬軒という変名を使って、わざと「口語文学反対論」をかき、桐城派の林紵を賞揚した。これに対して劉半農が反駁文をかき、論戦することによってその反響を期待した。／劉半農は林紵に対する激しい批判を加えたので、北京大学教授であった林紵は一九年二月、『新申報』に二編の短篇『妖夢』『荊生』をかいて、新文学派を痛罵し、三月には、北京大学校長・蔡元培に書簡を送って、旧来の倫理道徳を破るものとして、学内での言文一致を禁止するよう要求した。これに対して、蔡元培は、大学内部の思想の自由をたてとして、新文学派をまもった。ふつう、この事件は「新旧思想の衝突」という名でよばれている。43頁

従来からの定説をうけついで説明だ。王敬軒の「一七年」は「一八年」の、林紵が当時北京大学教授であったというのはいずれも勘違い。『新申報』に掲載された「荊生」は2月でよいが、「妖夢」は3月だ。

竹内実のばあい

竹内実「付録 現代中国論争年表」(菅沼正久、新島淳良、西順蔵、野原四郎編『講座現代中国』 中国革命 大修館書店1969.9.20 / 1972.3.20三版)である。

年表だ。事実のみが記載されていると普通は考える。だからこそ、こういう基礎的な仕事に自らの思考が表出する。

(1919.2) 新文化運動に反対の声さかん / 林紵「荊生」(小説、『新申報』)、「妖夢」そのなかで、陳独秀、錢玄同、胡適を罵る。軍閥(徐樹錚)による弾圧を予告したものとみられる。309頁

徐樹錚による弾圧を本当に「予告した」のか。あるいは、それは実現されたのか。だが、そのどちらの事実もなかった。林紵の短篇小説と軍閥を結びつけて考えるという通説を受け入れた記述だ。なお、竹内実編、京都大学人文科学研究所研究報告『中国近現代論争年表上(1895-1948)』(同朋舎出版1992.11.30)には、当該記事の記載がない。削除した。ただし、こちらには「林紵と蔡元培の報復書簡 文学革命をめぐる」があり、それぞれの書簡の内容を要約する(153-154頁)。

吉田富夫のばあい

吉田富夫「現代文学論」(鈴木修次、高木正一、前野直彬『文学史』中国文化叢書5 大修館書店1968.1.20)である。

こうして、運動が本格化してくると、必然的に敵側からの激しい反撃をよび起した。その急先鋒のひとりが、かつて清末に<林訳小説>で一定の啓蒙的役割をはたした林紵^{ママ}*4であったのは、歴史の皮肉である。かれは、1919年3月、文学革命派の拠点、北京大学の校長蔡元培に公開質問状を発し(『致蔡鶴卿太史書』)、文学革命運動を「孔孟のおしえをなげすて、人倫をふみにじって快しとするもの」と非難した。かれはまた、口語文学の主張にしたがえば、「しもじもの車ひきや物売りのやからのあやつっていることば」すらみな文法にかなっており、「都大路の小商人でも、なべてみな教授になれるではないか。」とののしった。林紵^{ママ}のこの手紙は、逆の面から、文学革命

のもつ客観的歴史的意義を見事に照しだしている。(中略)うち倒される林紘^{ママ}のほうは、追いつめられるものに特有の鋭い直観で、この運動が、本質的にやがておのれの階級的基礎をも掘りくずす内容をもつものとなることを、感じとっていたのである。362-363頁

吉田は、「敵側から」と書いてそのなかに林紘を配置している。林紘の蔡元培あて書簡にしか触れていない。概論だからしかたがないということもできる。

増田渉の論文を紹介する。増田は魯迅に直接教えを受けているから、その記述は興味深い。

増田渉のばあい

増田渉は、その著書『中国文学史研究』(岩波書店1967.7.25)において、2カ所で林紘を大きく取り上げる。「文学革命」について」と「林紘について」である。

まず、前者から引用する。表題からわかるように、「文学革命」全体を説明して反対派の代表者として林紘を位置づけている。少し長くなるのでふたつに分ける。

とくに文章家として知られ、西欧の文学作品を多数翻訳して著名であった林紘は、中国の文学伝統の継承者をもって任じていたから、あきらかに陳独秀、胡適、銭玄同を指していると分かる人物、田必^{ママ}[其]美、狄莫、金心異なるものの登場する小説『荊生』や北京大学の校長蔡元培、陳独秀、胡適を、元緒、田恒、秦二世の名で登場させた小説『妖夢』を新聞(上海の『新申報』)に発表して、文学革命運動の指導者、および彼等の後楯と見られる蔡元培に対して恣意的な侮辱を加えた。28頁

田必美と誤るのは、中国の文学史に先例が複数ある。林紘が小説で当てこすったとはいえ、虚構のことではないか。増田は、それを「恣意的な侮辱を加えた」という。まさに文学革命派の主張そのものである。次は、蔡元培にあてた林紘の

手紙だ。

このような小説だけでは足りず、一方また彼は蔡元培に対する公開的詰問状を新聞（北京の『公言報』）に発表して、北京大学の諸教員を攻撃侮辱し、校長の責任を詰った。彼等は「孔・孟をくつがえし、倫理を破壊して快とする」ものだといひ、また「古書を廃して土俗語で文章をかくというなら、都下の引車売漿の徒（車を曳いて味噌を売りあるく者）の操る言葉でも文法はあるのだから、北京・天津あたりのかつぎ売りの小商人はみな教授になれる」といった。28頁

「北京大学の諸教員を攻撃侮辱し」と増田は書いている。その事実は、ない。林紘の蔡元培あて公開状には、北京大学の教員の名前はあげていない。林紘のものではない別の文章と混同しているらしい。増田の勘違いだ。このあと、蔡元培の返答が紹介してあるが、ここでは省略する。

増田のもうひとつの論文は、「林紘について」である。

2カ所から引用する（注釈番号は省略）。

彼（林紘）は思想的な面では、ほとんど中国の歴史に寄与するところがない。かたは「文学革命」運動のときは、北京大学校長、蔡元培に公開的詰問状をおくって、北京大学文科教員を中心とするその運動を攻撃し、校長としての蔡の責任を問うた。一方また運動の指導者と見られた陳独秀、胡適、錢玄同を罵り侮辱する小説『妖夢』および『荊生』を書いた。そのため彼は反動の総帥と見られ、やがて起った「五・四」の狂瀾怒涛とともに歴史から置きざりにされてしまった。209頁

増田は、林紘の蔡元培にあてた手紙を「詰問状」といい、「運動を攻撃し、校長としての蔡の責任を問うた」と説明する。「詰問」ということばを使用するのは増田だが、蔡元培を批判非難したと考えるのは従来からの通説に従ったものである。

増田の書いた「歴史から置きざりにされてしまった」という表現に似たものが、松枝茂夫にある。

周作人著、松枝茂夫訳「魯迅に関しての二」（『瓜豆集』創元社1940.9.25）だ。

林琴南に注をつけて、次のように説明する。「林紓、字は琴南、清末の拳人（孝廉と同意）、海外名著の翻訳『林訳小説叢書』百数十種あり、清末民初の文壇に新しい空気を吹込んだ功績は没すべくもない。しかし彼の頭は依然古く、翻訳の目的主旨は全然間違つてゐたため、遂に時代に取り残された」（383頁）

松枝のいう「時代に取り残された」、あるいは増田の書く「歴史から置きざりにされてしまった」は、のちの莊光茂樹、佐藤一郎、井波律子らに引き継がれた。

いっておかなければならないのは、林紓が「荊生」「妖夢」を書いたから「反動の総帥と見られ」たのではないことだ。それ以前に、王敬軒名義の捏造論文によって文学革命派から「反動の総帥と見られ」ていた。「見られて」というよりも、林紓は反動の総帥に指名された、と書く方が正確だ。文学革命派が意識的に林紓を反動派代表に指名したのである。増田はその因果関係を無視する。

……「文学革命」の運動がはげしくなった一九一九年、すなわち「五・四」の起った年であるが、彼を首領とする古文派の文人たちは軍閥の徐樹錚（段祺瑞の下に陸軍次長や参謀総長をした）を動かして、武力によってそれに弾圧を加えようと策したのである。徐は軍人であったが、また桐城派文人の仲間の一人で、林紓の弟子（『文集』には徐のことをしばしば見る）でもあったからだ。218-219頁

「武力によってそれに弾圧を加えようと策した」と書いてそれが事実であったと増田は踏み込んで説明している。魯迅から直接聞いたことが根拠になっている。

武力で鎮圧しようとしたということは、（具体的な方法までは聞かなかったが）筆者（注：増田渉）は魯迅の口からも聞いた。軍人の圧力によって、という意味であろう。222頁

魯迅がそのように説明したのだから増田が疑うはずがない。だが、増田が書いているように、具体的にはどういうことが不明なのだ。しかも、それはウワサにすぎなかった。それ以外は、通説どおりの説明がなされている、とだけいう。

増田は、翻訳家としての林紵は比較的高く評価している。だが、文学革命時期の林紵に対する評価は相当に低い。その意味で従来からの型を踏襲している。増田の「『五・四』文学革命について」(『中国現代文学選集』第3巻五・四文学革命集 平凡社1963.3.5。346頁 / 『五・四文学革命集』中国の革命と文学2 平凡社1972.3.10。346頁)と題する解説には、より簡略に同趣旨のことを述べている。

増田渉は、これよりもずっと以前、すなわち1939年には「文学革命」を紹介する文章を発表している。そこで林紵に言及しているから引用しておく。

増田渉「文学革命」『アジア問題講座』第11巻思想・文化篇2(創元社1939.4.28)である。

(要約:「文学革命」運動が旧秩序の支配者である孔孟イデオロギーとの摩擦を起こした)だから古文の世界に生長し、古文を正統的なものとする観念に育てられた老文学者の中には、白話を主張する人々を憎悪し、古来の醇風美俗を破壊する異端の説として排斥し、政治的干渉の手さへのびるに至つた。中でも知名な反対派としてこれを攻撃したものは林琴南である。林琴南は清朝の末年から、欧米の文学的名作を大量的に古文を以て翻訳紹介し、読書界の人気を背負つてゐた。彼は北京大学がその異端邪説の中心部なりとして、同大学総長の蔡元培に公開状を送り、(一)孔孟を覆へし、倫常を破るものである、(二)古書を廃して俗語を用ゐて文章を書くといふのは不都合だ、といつて詰問した。蔡元培もまたこれに公開的な返事を送り、北京大学の教員たちにかつてそういふ事実がどこにあつたかといつて反問し、学説に対しては世界各大学の通例にならひ、「思想自由」の原則に従ふものだ、教員に対しては、学校の講義以外、校外の言動は自由にまかせてゐるといつて彼の総長としての立場を表明した。また北京大学が古書を盡く廃してゐる事実があるのかといひ、白話俗語を用ゐて文章を書くことは何も不都合なことではないと応酬した。/ 林琴南の翻訳した西洋の小説は道徳的なものとは限らなかつ

た。由来西洋の名作には姦通や背徳をもかまはず取り入れたものが多い。だから、彼の翻訳した小説が倫理学の教科書に使はれるものでもあるまいと突っこまれ、また彼の翻訳してある西洋の小説はいづれも原文はその国の白話（口語）で書かれたものである、ただ彼自身の翻訳文が支那の古文であるにすぎないのだ、と反駁されては明らかに林琴南の敗北であつた。この林琴南と蔡元培との論争が一九一九年三月のことであり、その翌々月、即ち五月の四日に所謂「五・四運動」が爆発したのである。354-356頁

「政治的干渉の手さへのびるに至つた」とは、軍人の出現、教育部の口出しなど、当時の北京に流れた噂を意味していると思われる。それらは証明できない性質のものだが、増田は事実だとかたく信じている。

「林琴南の翻訳した西洋の小説は道徳的なものとは限らなかつた」と書いているところに注目されたい。この部分は、後の文章では見ることができない。小説に道徳的なものを求めるのは1939年という時代だったのだろうか。

それとも、その後ろの「由来西洋の名作には姦通や背徳をもかまはず取り入れたものが多い。だから、彼の翻訳した小説が倫理学の教科書に使はれるものでもあるまいと突っこまれ」からのつながりなのか。増田の説明がはっきりしない。翻訳小説を倫理学の教科書に使う、となぜ突然にでてくるのかよくわからない。蔡元培の原文はつぎのようなものだ。

公（林紵）はかつて『[巴黎]茶花女[遺事]』『迦茵小伝』『紅礁画槳録』などの小説を翻訳されたことがあります。また、かつて各学校で古文および倫理学を教授されたことがあります。もし、公がこれらの小説の体裁で文学を講じ、芸者遊び、姦通、亭主持ちの婦人を争うなどで倫理を講じている、と中傷する人がいるとすれば、一笑にも値するでしょうか。

蔡元培が言っているのは、簡単なことだ。教員の学外における行動は大学とは無関係である。ただこれだけ。その文脈で上の部分を読まなくてはならない。すなわち、いわゆる不道徳な外国小説を翻訳しようともそれが学外における行為で

あるかぎり、学校での授業とは関係がない、という意味にほかならない。増田が説明するような、林紘の翻訳した小説が倫理学の教科書に使われるということではないのだ。

林紘が詰問し蔡元培が反撃した、と考えているから「明らかに林琴南の敗北であつた」と勝負事になってしまう。事實は、何度でもいうように林紘が北京大学の教育について質問し、蔡元培がそれに答えた。それだけのことだ。新旧思想の衝突という先入観があるから、ふたりのやりとりがそう見えるだけにすぎない。

増田渉の論文でいえば、林紘悪者説は1939年から後にいたるまで継続していることになる。

今泉潤太郎「林琴南 翻訳活動と評論活動を通して」(『愛知大学文学論叢』第26輯1964.2.5)については、前著で触れた。「むすび」部分から引用する。「有名な林訳小説の作家と文学革命の勇敢な反対論者という両極の中に清末啓蒙期知識人の一典型像を林琴南にみることができる」(63頁)。これを指して紋切り型という。

内田道夫のばあい

内田道夫「林琴南の文学評論」(東北大学文学部『集刊東洋学』第4号1960.10.1)である。中略をまじえながら、関係部分を引用する。

やがて一九一七年民国六年文学革命の主張が天下を聳動したとき、彼は「妖夢」「荊生」という短篇を草し、国語文学の主張にきびしく抗議した。/
「荊生」(中国新文学大系建設理論集所収)は北京の陶然亭に仮寓する青年荊生が、ある日ここに遊ぶ三少年の新学・白話を談ずるのを聞き、これを論破するという短篇小説に彼の意念を寓したものである。「妖夢」(中国新文学大系文学論争集)も彼の友人の夢に託して口語文の主張に攻撃を加えたものである。/(大きく中略)/彼は古文への確信と執着とから文学革命反対の急先鋒に立つ結果となつたのである。彼は当時の北京大学学長蔡元培に手紙を送り(建設理論集所収)大学の新思潮や新文学を批難したはげしい抗議を行なつている。14-16頁

林紵の「古文への確信と執着」という箇所は、それで正しい。古文を廃止することは適当ではない、と林紵はいつているにすぎない。「大学の新思潮や新文学を批難したはげしい抗議を行なっている」事実は存在しないから、通説によりかかって記述しているとしかいいようがない。使用している資料は、表示を見れば主として中国新文学大系だ。ここに立論が文学革命側に偏向する源がある(後述)。

実藤遠のばあい

実藤遠『中国近代文学史』上巻(淡路書房新社1960.8.30)である。

「五四運動前夜と近代文学の誕生」において「1「新青年」と文学革命」の「B 文学革命」に説明がある。胡適「文学改良芻議」と陳独秀「文学革命」を紹介したあと次のようにのべる。

この「文学革命」の叫びは、すぐに全中国にひびきわたったわけではない。保守派の旧文人たちは「新青年」などは問題にせず、「文学革命」論などは耳にもかさなかつた。読者も少く、社会への反響も小さかつたので、「新青年」第四卷第三号(一九一八年三月)に錢玄同は王敬軒という架空の名をつかつて「新青年編集者への書簡」という記事をのせて、旧文人の立場から文学革命に反対する意見をかいた。それと同時に同号に劉半農「王敬軒への返信」をのせて旧文人の立場に反論した。このような八百長をやってまで文学革命論を主張しつづけた「新青年」はまさに荒野をさまよう孤立無援の革命の士というようなありさまであつた。103頁

何度も出てくる捏造された王敬軒論文である。実藤は「八百長」と書いた。彼は魯迅のいう「寂寞」から連想して「荒野をさまよう孤立無援の革命の士」と思い込んだ。だが、別の角度から見れば捏造論文を提出してまでも自分たちに敵対する人物を必要としていたことにほかならない。私にいわせれば、「敵を求めて荒野をさまよう若者集団」である。

実藤は、魯迅が「狂人日記」を発表したと述べてつづける。

このように文学革命論が実践にうつされて運動が地についてくると、保守派もおどろきの声をあげ、「新青年」をののしりだした。一九一九年三月、「新青年」の保護育成者である北京大学校長・蔡元培にたいし、西洋文学を文語体で翻訳した清末の啓蒙家・林琴南（林紵）は書簡をおくってこういった。（後略）103頁

よく理解できないのは、「「新青年」をののしりだした」と書きながら蔡元培が出てくることだ。蔡元培は『新青年』の「保護育成者」だと苦しい説明をする。だが、林紵の蔡元培あて書簡は北京大学における教育に関する質問だから、『新青年』とは直接の関係がない。林紵の書簡については省略する。

少ししか言及のないものを取り上げるのは、いかななものかと思わないでもない。しかし、凝縮した部分にこそ通説が顔をだす、というのが私の見方である。

小野忍編『現代の中国文学』（毎日新聞社1958.5.1）、尾坂徳司『中国新文学運動史』（法政大学出版局1957.11.5）、倉石武四郎『中国文学史』（中央公論社1956.10.25 / 1968.3.9十三版）は前著で紹介した。省略する。

内田泉之助のばあい

内田泉之助『中国文学史』（明治書院1956.7.10 / 1976.2.10二十一版）である。「第8章 文学の革新」において先駆として言及があり、のちの文学革命部分でも出てくる。本文の割注はカッコにいった。

林紵は本来欧文に通ぜず、他人の口述によつて翻訳したのであるが、彼の文章力はよく原書の諧謔と情趣とを生かしたことは、そのディッケンスの作品の訳述等に之を認め得る。古文の応用に於て司馬遷以来の成果を収めたものとの評（胡適）ある所以である。かつて「桐城派」の文人の棄てて顧みなかつた小説が、却つてこの派の林紵や俞樾（前出）によつて採り上げられたことは、時代の文学概念に変化を来たしたことを意味するものである。468頁

……北京大学を中心とする文学革命の運動は、破壊より建設的方面に向つて、日々その勢を加へてきた。殊に当時文学界の権威者であつた北京大学長蔡元培及び梁啓超の兩人が、之に賛意を表はすに至つて運動は全国的となつてきた。ここに於て、旧文学を擁護しようとする学者と、青年学徒の主張する旧物破壊運動を快しとしなかつた北方軍閥とは相共に大学を非難して、蔡学長の責任を問題とするに至つた。中でも古文家林紘・嚴復は反対派の領袖であつた。前に西洋文学を紹介して革新の先驅をなしたこの兩大家が、今や革新阻止の陣營を護る将帥となつたことは奇観である。蓋し林・嚴兩人は古文の技巧を西人の作品翻訳に試みたのみで、深く西洋文芸の特色と、その思想の価値とを認識したものではなく、彼等自身は依然として、保守尚古の古文作家に過ぎなかつたのである。472頁

当時、嚴復が表立って反対に立ち上がったことはなかつた。内田は林紘との関係で無意識に並列したのだから。それにしても、嚴復にしてみれば迷惑なことだ。旧文学を擁護する学者と北方軍閥とが共同で北京大学を非難したという説明は、林紘をそのなかに必然的に含みこむ。林紘と軍閥徐樹錚が関係しているといわれる通説を無批判に取り入れた結果である。

清末の林訳小説を評価し、五四時期の林紘を批判するというおなじみの形である、とつけ加えてもよい。

足立原八束のばあい

足立原八束『中国文学小史』（昌平堂1952.3.15 / 1953.4.15再版）である。「十五、文学革命とその前後」において林紘がでてくる。

こうして、白話運動は、多数の賛同者を得て、順調に発展していったのであるが、その反面これに反対を表明する人もなくはなかつたのである。その最初の人、林紘であった。彼は、北京大学長の蔡元培に手紙を書いて、“大学は全国の師表となるべきものであるのに、土語を用いて文を書くとは何事であるか。それなら京津のつまらない商人でも大学教授になれるではな

いか”と抗議したり、「新申報」に小説を書いて、北京大学の進歩的教授たちを排撃した。166頁

通説をくりかえしているだけ。「白話運動は、多数の賛同者を得て、順調に発展していった」と述べて自分が文学革命派の立場にたっていることを表明している。

劉麟生著、魚返善雄訳『中国文学入門』（東京大学出版会1951.10.20 / 1967.2.25七刷）は前著で紹介した。省略する。

鹽谷温のばあい

鹽谷温『中国小説の研究』（弘道館1949.10.5）である。「附録文学革命」に説明がある。

民国以後、胡適と陳独秀の主張を紹介し「思ふに陳・胡兩人は誠に白話運動に於ける驍將であつた。而して雑誌新青年は之が中心となつた。兩者の主張する所、胡は漸進的であるのに、陳は飽くまで急進的であつた」（466頁）と述べる。北京大学が運動の「大本営」である箇所を引用する（注番号は省略）。

……陳^{ママ}徳[独]秀は新に雑誌「每週評論」を主宰し、北京大学の学生によつて「新潮」が発刊される等、北京大学は宛然白話運動の大本営たる觀があつた。是に於て大学は当然輿論界の注意を惹くに至り、古文擁護の立場から大学非難の聲が喧しく、軍閥の干渉と相俟つて、或は陳・胡諸教授を大学から追放すべしと唱へ、或は学長蔡元培の責任を問ふものも現れた。就中古文家林紓を以て反対党の領袖とする。彼は蔡元培に書を与へ、大学は全国の師表である。然るに土語を用ひて文学となすなら凡そ京津の稗^{こあきうど}販も皆教授たるべしと痛論し同時に上海新申報紙上「荊生」なる一篇を発表し、田^{ママ}必[其]美（陳^{ママ}徳秀）金心異（錢玄同）狄莫（胡適）の三人を仮定し、之に痛罵を加へた。467頁

大学非難の聲、学長の責任を問うことと、林紓が蔡元培に手紙を送ったことが

重なる。軍閥の干渉、陳胡の大学追放を含めて、すべて林紵が関係している印象をあたえる。それが当時からの把握のしかただとわかる。

鹽谷は「北京大学は宛然白話運動の大本営たる観があつた」と表現し、のちに丸山昇は「北京大学は文学革命のメッカの観を呈した」と書いた。「白話運動」が「文学革命」に、「大本営」が「メッカ」になっただけ。表現が似ている。両者に関連があるのかどうかは知らない。

「大本営」という単語は、鹽谷温よりもさかのぼって胡適が論文で使用している。

1935年、胡適は「紀念「五四」」(『独立評論』第149号1935.5.5。『胡適全集』第22巻合肥・安徽教育出版社2003.9。271頁)において次のように書いている。

(民国)8年(1919)の初春において、北京にはすでに「新旧思想の争い」が発生しており、北大はすでに新思想の大本営と認められていたのである。

「大本営」は、もとは日本語だろう。鹽谷温が使うのはおかしいとは思わない。だが、中国人である胡適の文章にそれを見るのは、なにか奇妙な感じがする。

竹内好のばあい

竹内好には、『魯迅入門』(東洋書館1953.6.10)がある。これは『魯迅』(世界評論社1948.10.10。世界文学はんどぶっく。ほかの出版社からも刊行されているがわずらわしいので書かない)にもとづいている。林紵関連は同文だから刊行をさかのぼって後者から引用する。5ヵ所に分散している。

当時、巖復以外に、もうひとつ魯迅に影響したものがある。それは林紵によるヨオロッパ文学の紹介である。林紵の翻訳は、全部で百数十種あり、多くの著名な近代作家(ことにイギリスが多い。シェークスピア、デフォー、スウィフト、ラム、ディッケンズ、スコットなど。他には、ユーゴー、デューマ、バルザック、イブセン、セルバンテス、トルストイ、徳富蘆花など。もつとも、数の一番多いのはハッガードであり、次はコナン・ドイルであつたが。)をふくむ。そのなかで一

番広く流布し、彼の翻訳の代表とされるものは、最初に訳した小デューマの『椿姫』（訳名は『巴黎茶花女遺事』¹⁾）であつた。『椿姫』で文名があがつて、それから多作がはじまつたわけであり、「林訳小説」という名で一世を風靡した。林紘は、文人的な気質の人で、早くから官界をあきらめて、市井にこもつた。自作の小説も書くし、詩や散文もあり、絵もよくするが、彼が文学史上に不朽の名を残したのは、翻訳小説によつてであつた。西洋にも小説があり、むしろ西洋の小説の方が面白いということは、一般読者には驚異であり、それを通じて、西洋の社会、風俗、習慣への興味が大衆に浸透した。もつとも林紘は、自分では外国語が読めず、人に翻訳を口述させて、その筋だけを取つて自分の文章として書くのだから、厳密な翻訳とはいえない。（正しい小説の翻訳は魯迅の『域外小説集』が最初である。）翻訳の態度も嚴復のように自覚的でない。しかし、それだけに大衆的な影響力は大きく、かつ、清末の政治小説の流行とも直接つながる関係にあつた。110-111頁

「外国語が読め」ない林紘の翻訳は、「厳密な翻訳とはいえない」と竹内好は断定している。だが、「大衆的な影響力は大きい」。

シェイクスピアとラムを別にあげている箇所に注目いただきたい。ここから、林紘がシェイクスピア戯曲を小説化した、と批判した鄭振鐸説を竹内好も信じていることがわかる。

文学革命時期の林紘になると、竹内好はより厳しい書き方をする。蔡元培を紹介する箇所だ。

後年、文学革命派の伝統破壊が激しくなり、旧派の代表的人物の一人である林紘から大学の責任を問われたとき、彼（注：蔡元培）は、学問の独立と言論の自由をもつてこれに答えている。123頁

竹内好にとって林紘は「旧派の代表的人物の一人である」のは自明の理である。それが中国での見方なのだから。林紘と蔡元培の手紙についても通説に従っているだけ。

嚴復、林紘、康有為、梁啓超、章炳麟らの、清末啓蒙期の代表者たちは、民国以後にも生きていて、惰性で仕事をしていたが、新しい文化を生むことはできなかつた。124頁

林紘は、「惰性で仕事をしていた」。竹内には、そう見えた。だが、林訳は、翻訳数からいえば民国になってからの方が多かったのである。

『新青年』が口語を提唱したとき、最初のうちは、狭い同人の内部だけの討論で、世間からは、賛成もされなければ、反対もされなかつた。ほとんど黙殺されていた。同人たちも、寂しさのあまり、王敬軒という架空の反対論者を誌上に登場させたほどであつた。しかし、革命の決定的な瞬間をへだてて、新旧の対立がはつきりすると、旧派からの反攻が猛然と起つた。林紘をはじめとして、清末啓蒙期の先駆者たちは、すべて反対者の側に立つた。128頁

「旧派の代表的人物の一人である」から林紘が例としてあげられた。王敬軒をでっちあげたことについて、竹内好は、文学革命派の側に立ってそれが正当な行為であると認めている。

一九一七年に文学革命運動がはじまり、一九一八年に魯迅の『狂人日記』が書かれ、一九一九年（つまり五四事件の年）には『新青年』の影響下に『新潮』雑誌が出、全国に口語の新聞が次々にうまれて、文学革命の勝利がはつきりしてきた。林紘が蔡元培に食つてかかり、蔡元培が堂堂とつづねた有名な公開論争もこの年にあつた。131頁

林紘が「食つてかかり」、蔡元培が「つづねた」。林紘に関する竹内好の見解は、後年の伊藤虎丸らに引き継がれているように思える。

竹内の著書をもう少しさかのぼって『魯迅』（日本評論社1944.12.20 / 1946.11.1第二

刷)から引用する。くりかえしになるのはしかたがない。

林紵(琴南)は最初のヨーロッパ文学の紹介者、その翻訳は無慮二百種に及ぶ。彼は外国語が読めず、翻訳といふも翻案に近く、従つて紹介の態度も嚴復のやうに自覚的でない。しかし及ぼした影響は大きかつた。「[巴黎]茶花女遺事」(小デュマ「椿姫」)は最も著名である。「黒太子南征録」はコナシンドイルの作、原題不詳)のちに「文学革命」に反対した。「冷血」は彼の号である。78-79頁

『黒太子南征録』は、ドイル“THE WHITE COMPANY”のこと。冷血は、陳景韓の筆名であつて林紵とは関係がない。松枝茂夫もそう誤解していた(別稿参照)。

時間は前後するが、中国文学研究会編『中国新文学事典』(河出書房1955.11.25。河出文庫)にも触れておく。

かれ(注:林紵)が文学史的に重要なのは、その翻訳小説によつてである。かれは西洋文学の最初の翻訳者であるばかりでなく、その量では今日でもかれの右に出るものはいないし、かれほど社会的影響を及ぼした翻訳者もいない。36頁

文学革命のときは、伝統固守の立場から新文化に反対して、蔡元培に抗議を申し込んだり、胡適や陳独秀を誹謗する小説を書いたりした。37頁

林紵の翻訳を高く評価し、五四時期の行動を批判する。定型であるという。それをいうなら『世界文藝辞典 東洋篇』(東京堂1950.4.20)もあげておく。似たようなものだからだ。

誤訳は勿論多いが啓蒙期における西洋文学紹介者としての功は否定できない。ただ西洋文学を理解せず古文の趣味に似たものを求めたに過ぎなかつたから、胡適等の文学革命の口語運動には嚴復と共に反対の急先鋒であつた。

535頁

何度もいうように、巖復は、当時表面には出てこなかった。松枝茂夫『中国の小説』(白晝書院1948.4.15)は前著で紹介した。省略する。

吉川幸次郎のばあい

吉川幸次郎「曾樸氏の翻訳論 フランス文学と中国」(『世界文学』1947年9月号1947.9.10。のち以下の書籍に収録。『中国散文論』弘文堂1949.6.30。『中国散文論』筑摩書房1966.1.10/1969.8.30第三刷。『吉川幸次郎全集』第16巻 筑摩書房1970.7.20)である。

論文名からもわかるように、曾孟樸についてのべた文章だ。そのなかに林紵が登場する(引用は筑摩書房『中国散文論』から)。

曾氏はさいしょスコットの作品何種かの林訳を手にし、吾が道孤ならずと狂喜した。しかし、そのうち、少し変だぞと感ずるようになり、北京旅行のついでを以て、林氏を訪問した。あつて見てわかつたことは、林紵、字は琴南、号は畏廬先生は、中国の擬古文の大家ではあつても、外国語は一字も読めないということであつた。また外国文学の歴史には、全然無智だということであつた。林先生の訳業は、助手の口述を基礎とした、勝手気儘な翻案であり、原作選択の権利さえも、助手の手中にあつた。237-238頁

林訳に関するこの説明をそのまま吉川の意見であると考えする必要はない。なぜなら、ここは曾孟樸の記述によつてゐるからだ。論文中で説明があるとおり『胡適文存』第3集巻8(上海・亜東図書館1930.9/1933.12五版)に収められた「論翻訳」と題する胡適と曾孟樸の往復書簡(1928)がもとになっている。曾の原文を示せば以下のようなになる。

あるとき、私は北京に行くときわざわざ彼をたずねていき、しばらく話しました。そこでわかつたのは畏廬(林紵)氏は中国の文豪ではあるが、外国語

はまったく理解せず、外国文学の起源と発展についてはさらに無知であるということでした。翻訳はほかの人が口述するのに全面的に頼っており、選択の権利も他人の手にあったのです。[有一回，我到北京特地去訪他，和他一談之下，方知道畏廬先生雖是中国的文豪，外国文是絲毫不懂的，外国文学源流，更是茫然，訳品全靠別人口述。連選択之権，也在他人手裏]

曾孟樸が書いたもとの書簡があるのだ（『真美善』第1巻第12号1928.4.16）。ここで述べられている林紓についての内容は、基本的に曾孟樸の考えだ。吉川は、曾のその意見に賛成している。反対の箇所があれば、そう書くだらう。異論を差しはさむわけでもなく、そのまま取り入れている。

ただし、吉川独自の考えを少し滑り込ませた箇所がある。原文にある「ほかの人[別人]」「他人」を「助手」にした。これにより、共訳者についての評価を下げる結果になる。助手だから外国語の能力が低いのではないか、という憶測を発生させたといえなくもない（ただし、林紓に關係して「助手」という単語を胡適も1922年の文章に使用している。一般的な見方であるといってもいい）。

もうひとつは、「勝手気儘な翻案であり」という字句を追加した。曾孟樸は、そのようなことは書いていない。吉川によるこの決めつけは、「助手」と相乗効果をあげて、後の林訳評価に負の影響をあたえたと考えられる。

では、文学革命についてはどうか。

文学革命の運動は、周知のごとく、これまでの文章の正統であった擬古文を、病的なものとして排撃し、それに代えるに、言文一致の口語文を以てすることを、中心の意識とするが、この口語文運動の根底には、三千年の光榮ある孤立を守って来た中国文学をして、世界文学の潮流に合流させようという意図を蔵すること、いう迄もない。革新派の総帥はすなわち胡適氏であり、守旧派の驍將は、かつての日の翻訳家、林紓氏であった。鬭争は十年を経て、この往復書簡の交された民国十七年には、革新派の勝利は、もはや決定的であった。曾氏長年の期待は、一応、むくいられたのである。238-239頁

「かつての日の翻訳家」と吉川はいう。吉川の把握では、1919年の五四時期の林紵は翻訳においてすでに過去の人であったようだ。林紵を見れば、1916年までに146件が公表され、1917年以後には67件が発表されている（分岐点を1912年におけば、民国以後の方が翻訳数は多い）。必ずしも過去の人ではないのだが、そう受け取られていたのであればしかたがない。

前出鹽谷温は、「白話運動に於ける驍将であつた」と書いた。吉川は「守旧派の驍将」と表現する。陳独秀、胡適と林紵は、敵対する陣営においてそれぞれが勇猛な将軍であったことになる。

林紵についての負の説明と、文学革命に反対した林紵を提出している。これを見れば、吉川は林紵に対して高い評価はあたえていないことがわかる。当事者である曾孟樸よりも、より厳しい判定になった。

長澤規矩也のばあい

内田泉之助、長澤規矩也共編『支那文学史綱要（新訂版）』（龍文書局1939.4.15 / 1945.11.1四版）である。その「序」に旧版は内田との共編で新訂版は長澤ひとりだと書いてあるからそうする。

「二三 文学の革新 民国の文学」において簡単に説明している。

……北京大学を中心とする文学革命の運動は、其勢侮るべからざるに至りたるを以て、文を以て道を載すべきものと確信したる林紵・嚴復等は大に其非を鳴らしたるも、西洋の学問思想に通じたる彼等に敵対するを得ず、彼等の末流が徒に旧物の根本的破壊を叫ぶに至つて、旧式の政客軍閥の実力によつて、纔に彼等を離校せしむるを得たり。104頁

「西洋の学問思想に通じたる彼等」とは胡適らを指す。林紵は外国文学の翻訳で、嚴復は外国の思想書の翻訳で著名だが、胡適らにはかなわなかった、と長澤は判断した。それにつづく箇所がわかりにくい。軍閥がでてきて「彼等を離校せしむる」とある。複数になっている。誰のことなのか。説明がないから詳細は不明だ。

布施知足のばあい

布施知足『「文学革命」の話』（東亜研究会1937.10.25 東亜研究講座第77輯）である。導言、新文学論の起原〔倡首〕〔 〕は目次の表記）、古典派との論戦、白話文学の理論、文学改良芻議、文学革命論、古文は死んだ、白話運動の発展、守旧派怒る、守旧派敗る、白話散文の見本、白話詩見本というのが章題だ。全75頁にわたって中国の「文学革命」について詳細に説明している。

ご賢察のとおり「守旧派怒る」において林紵が蔡元培にあてた手紙を説明し、「守旧派敗る」で蔡の返書を取りあげる。中国で説明されている大筋から外れた箇所は見られない。林紵の言動については「白話運動の発展」のなかで述べている。少し長いが引用する。

（白話運動が）軌道に載ると共に反対運動の車も廻り初めた。古文擁護派が垂死の古文の命脈を存すべく必死の活動を始めたのであつた。大学部内にも反対分子があり「国故」及び「国民」と云ふ二種の定期刊行物を発行して守旧派の気炎をあげると共に例により名を国民思想の擁護に借り校外の同志は旧派政客及軍人の集団なる安福倶楽部を動かして此運動を圧迫した。古文の作家で西洋小説の訳者なる林紵はお手のものゝ小説で北京大学の進歩分子を諷刺したが其中の一篇「妖夢」と云ふのは北京大学長の蔡元培と同じく教授の陳独秀、胡適の二人を罵つたものであつた〔。〕但し蔡は元緒陳は田恒胡は秦二世となつてゐる。又「荊生」と云ふのは田必〔其〕美。金心異。狄莫の三人を借りて陳独秀、錢玄同、胡適三人を罵倒したものである。両作ともつまらないもので独立の価値は無い。白話反対運動の歴史と關聯して話の種になる位のものである。国民思想擁護の守旧派は更に安福倶楽部に運動して国会に於て教育総長及び北京大学総長を弾劾しやうとした。流石にそれは成効しなかつた。47頁

安福倶楽部を動かして圧迫したのは「校外の同志」と説明して、林紵だとは明記していない。ただし、圧迫の事実が実在したとは考えている。小説の登場人物

について名前が間違っているところは、中国で先行する文学史の記述を踏襲した。

林紵の小説を説明して「両作ともつまらないもので独立の価値は無い。白話反対運動の歴史と関聯して話の種になる位のものである」という箇所は興味深い。なぜなら、「荊生」と「妖夢」は、北京大学の関係者をモデルにしているとはいえ、皮肉にすぎない。その程度の作品だと私は考えるからだ。布施が述べているのがごく普通の感覚だと思う。それを守旧派からの大攻撃だ人身攻撃だと意図的に大騒ぎしたのが、陳独秀らの文学革命派であった。

目加田誠のばあい

目加田誠「民国以来中国新文学」(九州文学会編輯兼発行『文学研究』第14輯1935.12.30)である。中国新文学は、民国にはいって白話の使用が提唱されて急激に発展したと説明をはじめ。それ以前は、発展していなかったという判断が前提にあるわけだ。当然のようにして林紵に言及がある。

大体清朝末期から、海外の文藝が林紵(琴南)等の手に依つて盛に翻訳され、創作には又蘇曼殊等の人々が従来の狭邪小説、黒幕小説から離れたものを書いたが、然しそれは皆文語体によつたもので、特に林紵は清朝桐城派の古文家として数へられ、其の有名な巴黎茶花女遺事(即ち椿姫)其他百数十種の翻訳は、何れも厳密な逐語訳では無く、彼自らは外国語を解せず、人に口訳させて、之を聞きながら、古文の筆を以て自由に綴り上げたものである。宣統二年に創刊され、後に中国新文藝の本陣となつた小説月報の如きも、始は矢張り所謂才子佳人鴛鴦蝴蝶派の小説が主で、林紵は此の雑誌に於て、当時最も活躍したものであつた。69頁

「厳密な逐語訳では無く、彼自らは外国語を解せず、人に口訳させて、之を聞きながら、古文の筆を以て自由に綴り上げたものである」と解説してあれば、林紵の翻訳がいかにも原文から自由に、つまりデタラメであると普通の読者は受け取るだろう。

かくして胡適は自ら白話の詩を作り、嘗試集と題して出版した。やがて彼が北京に帰つて後、白話運動は愈盛に、北京大学を中心とする人々が其の主なる主張者であり、又新青年の読者は全国的に此の運動を支持した。尤も一部には之に対して、文学を墮落させるものとして非難し、罵倒した人が有つたことは云ふ迄も無い。先に海外文藝の紹介者で、当時守旧派の人々から反対された林紵は、今度は自ら旧守派の人となつて、此の新進の運動に正面から論難攻撃したのであつた。而も已に大勢の向ふ所、如何とも為し得ず、却つて冷笑を受けて、一たまりも無く葬り去られたのである。71頁

林紵が「此の新進の運動に正面から論難攻撃した」と目加田はいう。だが、その具体的内容については説明する必要を認めなかったようだ。中国の文学革命派が説明していることと異なるところはない。

日本で刊行された中国現代文学史であげるべきものはほかにあるかもしれない。早い時期に、それでも布施よりは遅れるが、近藤春雄『現代支那の文学』（京都図書館1945.11.20）が出ている。「三 新文学運動の発端」の「4 文学革命の反対者」に「一林紵の反対」があることだけをいっておく。通説をそのまま取り入れているだけで、ここに引用するまでもないからだ。

五四時期の中国文学について同時期に書かれた文章がある。林紵をめぐる状況を詳しくは説明していないが、同時代の記述として貴重だ。青木正児の説明を少しだけ紹介して日本の部は終わりとしたい。

青木正児のばあい

有名な王敬軒名義の捏造論文について、当時の日本人研究者はどう見たか。青木「胡適を中心に渦いてゐる文学革命（三、完）」（『支那学』第1巻第3号1920.11.52頁。影印本による。『青木正児全集』第2巻春秋社1970.7.20。240頁。割注はカッコに入れた）である。

……併し逆流及び余波として茲に若干の事実を語らねばならぬ。先づ逆流として話は前に戻るが、彼等が盛んに白話詩文を鼓吹してゐた時に可なり激

昂的な反抗を叫んだ者がある。其れは王敬軒と云ふ男が向きになつて「新青年」社に寄せ来つた通信である。(第四卷三号)彼は古文小説家林紵の為に熱心なる辯護を試み、又選学家の駢文・桐城の古文を以て白話詩文と同日の比でないに尊崇し、「新青年」一派の新詩を西洋にもあるまじき突飛な新しみだと罵つた。国粹謳歌の為に腕を捲つた尊皇攘夷的慷慨の意気は愛す可きだが、惜むらくは頭が岩の苔蒸した如く堅く古かつた。多血質な「新青年」同人の事とて、黙つてみやう筈がない、劉半儂が応戦を引受けて盛んに揶揄熱罵を浴せかけた。

「逆流」をおこした王敬軒そのものが銭玄同なのだから、でっちあげられた「逆流」である。しかし、その真相が明らかになるのは、はるか後年のことだ。『新青年』に掲載された王敬軒の手紙を青木がそのまま事実だと受け取ったのは、当然のことだといわなければならない。それほどに、銭玄同ら文学革命派の仕掛けた罠は巧妙だったということでもある。当時の人々は、誰もそのカラクリに気づかなかつた。いうまでもなく当事者である文学革命派は除く。銭玄同の捏造論文を『新青年』に掲載するについて、編集部内で対立があつた。胡適は反対し、魯迅は掲載することを積極的に支持した。当事者である沈尹黙がそう証言している。

「逆流」につらなつて林紵がいる、という青木の認識である。ゆえに、林紵も「頭が岩の苔蒸した如く堅く古かつた」ことになる。青木が林紵をそのように見ていたのは疑いようがない。

中国の文学動向を同時代の日本の研究者が注目していた(歴史方面の吉野作造と波多野乾一については別稿「陳独秀の北京大学罷免」をご覧ください)。そういう事実がある。

通説はくりかえされるからそう呼ばれる。新しい見方が提出され承認されるのであれば、それはもはや通説ではない。だが、新しい見方は出現していない。日本で書かれた文学史、論文は、私が見た限り例外なく五四時期の林紵を悪者にしている。

台湾、香港、日本とつづいた。つぎは、アメリカのリディア・リウ Lydia H.

Liu (劉禾) の文章から少しだけ取り出す。

リディア・リウのばあい

Lydia H. Liu, “THE TRANSLATOR'S TURN: THE BIRTH OF MODERN CHINESE LANGUAGE AND FICTION”, *THE COLUMBIA HISTORY OF CHINESE LITERATURE*, Columbia University Press, 2001. である。

私が興味を感じたのは、次の部分だ。

新文化運動と五四運動（1919）において劇的な事件が展開するあいだに、
嚴復と林紵は、北京大学の『新青年』雑誌で活動する知識人集団の新しく急
進的な世代によって「保守派」の位置に格下げされてしまった [relegated
to the ranks of the “conservative”]。1066頁

劉の指摘は正しい。ただし、「格下げ」という表現では生ぬるいと私は考えて
いる。「格下げ」になっただけで、林紵批判が現在に至るまで80年以上にわた
ってなぜ継続されているのか。その理由が、説明できない。

夏志清のばあい

C. T. Hsia, *A History of MODERN CHINESE FICTION*, Indiana University Press,
1961 / 1999 3rd ed. である。

第1部の「第1章 文学革命」に少しだけ言及されている。

保守派文人のなかで、当時一流の古文の名文家であり疲れを知らない西洋
小説の翻訳家である林紵だけが、最初から懸念を示していた。しかし、よう
やく1919年3月になって労を惜しまず北京大学校長の蔡元培あてに公開書簡
を書き、儒教の道德と古典文学の伝統について大学の成員が激しく攻撃してい
るのを蔡が黙認しているとひどく嘆いたのだった [deploring his connivance
with.....]。5頁

わざわざ引用するほどのことではない、というご意見もあるかと思う。だが、林紓の蔡元培にあてた手紙は、増田渉が書くように通常は「詰問状」、あるいは詰問したなどと表現されることを思い出してほしい。それと比較すれば、夏志清は冷静に書いている。「嘆いた deploring」と表現している。これが事実に近い。だからここに引用する価値があるのだ。林紓の手紙を実際に読んでみれば、どこにも詰問する箇所はない。私はそう理解したから、自分なりの表現で林紓が「深く悲しんでいる」(『林紓冤罪事件簿』117頁)、「林紓の抱く深い悲しみ、憂い」(119頁)と説明した。林書簡を普通に読めば、同じ感慨を抱くはずだ。

ところが、夏志清の該当部分を漢訳した劉紹銘は(章によって訳者が異なる)、すこし原文を省略して以下のように翻訳した*5。日本語になおして示す。

伝統派の文人のなかで林紓ひとりだけがこの運動に対して最初から深く注目していた。1919年3月になると彼はようやく1通の公開書簡を北大校長の蔡元培に書いて、校内の教授が儒家の道德と古典文学の伝統に対して破壊している行為を彼が見てみないふりをしているといって非難した[指責他對校内教授破壊儒家道德与……]。2頁

劉紹銘は、原作の英文が意味する「ひどく嘆いた」を勝手にねじ曲げ、林紓が蔡を「非難[指責]」したと翻訳している。夏志清の原意から完全に離れてしまった。林紓に対する定説が、劉に色濃く影響している事実をここにも見ることができる。なにしろ訳者をして原文を無視させるのだから。

五四事件直前の林紓についていうならば、周策縦の著作が夏志清にすこし先行している。

周策縦のばあい

Chow Tse-tsung, *The May Fourth Movement: Intellectual Revolution in Modern China* 五四運動史, Harvard University Press, Massachusetts, 1960. である。

第3章の「反対の議論とその反応 The Opposition's Argument and the Rejoinder」で説明されている。

保守派の反抗は相当に消極的であって、林紓がそれに参加するのめかなり遅れた(65頁)、とのべる。

「林紓は新文学運動に対する反感を徐々に強めた Gradually Lin Shu intensified his opposition to the new literary movement.」(66頁)*6。それが『新申報』に発表した短篇小説だ。周は林紓の小説を紹介し、そのあとで林の蔡元培あての手紙を詳細に分析する。この手順はほかの論文とかわらない。錢玄同による王敬軒名義の文章と劉半農の反論、つまり「なれあいの手紙」が公表されてから約1年という時間が経過している。それを、「徐々に」というのは苦しい説明だ。だが、これが従来からの把握のしかたである。べつに新しいところは、ない。

中国大陸では、張俊才論文よりも約20年前に刊行された1冊の文学史がある。その間に出版された文学史は省略する。五四時期の林紓については、その評価が一致している。いちいちあげるまでもないからだ。では、それ以前の文学史に異なることが書かれているかといえば、そうでもない。いくつかを紹介していく。

錢理群のばあい

錢理群、呉福輝、温儒敏、王超冰『中国現代文学三十年』(上海文藝出版社1987.8)である。

第1編第2章の「3 封建復古派に対する闘争および新文学統一線の分化」から林紓に関する部分を抜き出す。1919年から1925年まで、封建復古派からの3回にわたる逆襲を粉碎したことを説明する箇所だ。用語からして著者の立場は明らかだ。ここでは林紓のみに注目するから「中略」「後略」を使い文章を簡略化して紹介する。

第1回は1919年のはじめに発生した。主として林紓を代表とする古株守旧分子に対する闘争である。1919年3月、北京大学の旧派の人物は『国故』雑誌を創刊し、新思潮と新文学に対する逆襲の陣地とした。当時、さらにある人物が安福系軍政当局に運動し新派人物を鎮圧しようとかわだて、一時流言がまきおこった。(中略)38頁

最初にとび出てきて反撃したのは林紓である。彼は近代外国翻訳小説の方

面において成績が顕著であったが、しかし結局のところ「桐城派」の直系弟子であり猛者だった。ついには「残りの年月をなげうって道を守ることに力をつくします〔拚我残年極力衛道〕」という悲劇の役柄をつとめたのである。彼は「論古文白話之相消長」「致蔡鶴卿太史書」を書いて、白話文に対して大いに討伐を加え、北京大学の新派人物が「孔孟を転覆し、倫常を滅ぼす」「まったく常軌をはずれて荒唐無稽な話をいいふらす〔尽反常軌，侈為不經之談〕」と攻撃した。（中略）38-39頁

林紘はさらに拙劣な文言小説「荊生」と「妖夢」を発表し、暗に人を中傷して文学革命の主導者と支持者を罵り、実権を握る「偉丈夫」が出てきて鎮圧に参与するように陰険にも暗示して、封建士大夫が世襲領地を喪失する時の恨みの心理をさらけ出したのだった。（後略）39頁

ここには、張俊才が林紘の3大罪状にまとめたほぼそのままが説明されている。林紘は、短篇小説を書き文学革命派に対して人身攻撃を行ない、軍閥による弾圧を期待する守旧派の代表である、といているのと変わらない。

補足説明をする。北京大学の旧派に林紘は含まれない。林紘は、前身の京師大学堂で教えたことがある。1903年から訳書局で職名は筆述、1906年からは預科と師範館において経学教員となり1913年に辞めた。ゆえに1919年当時、林紘は北京大学とは関係がない。学外にいる一般人、民間人のひとりにはすぎなかった。

「残りの年月をなげうって道を守ることに力をつくします」は、林紘が手紙のなかで使用した文句だ。林紘は蔡元培あての手紙を2度公表している。これは2度目の「林琴南再答蔡鶴卿書」（『公言報』1919.3.24付は未見。『公言報』は、今のところ日本では見ることができない。天津『大公報』1919.3.25付、および『時報』1919.3.26付で確認した。『新申報』3.26付に掲載されているのは「林琴南再答蔡子民書」と題される）に見える。「孔孟を転覆し」などの語句は、最初の手紙「答大学堂校長蔡鶴卿太史書」（1919.3.18）の中で使われた。研究論文においては、否定的に引用されるのが常である。

問題になっている林紘の短篇小説は2篇ある。「荊生」（『新申報』1919.2.17-18）および「妖夢」（同紙同年3.19-23。『林紘研究資料』85頁で連載を「3.18-22」とするのは

誤り)だ。全58篇で構成される「蠹叟叢談」のなかの2篇にすぎない。

以上の発表月日を見れば、銭理群は時間の流れに沿って厳密には記述していないことがわかる。立論の都合でそうになっているのだろう。

林紵についての銭理群の見解は、彼の独創ではない。それ以前から長年にわたって継承されているひとつの定まった評価なのだ。銭はそれを容認して取り入れた^{*7}。

銭理群とほぼ同時期に刊行された小説史がある。ただし、本来ならば本稿の対象にはならないはずなのだ。陳平原『二十世紀中国小説史』第1巻(1897年-1916年)(北京大学出版社1989.12。のち改題して『中国現代小説的起点 清末民初小説研究』北京大学出版社2005.9)である。該書が記述する下限は1916年までだから1919年の五四時期は含まれない。阿英『晚清小説史』と同じだ。林紵の翻訳は評価しているところはよい。五四時期の林紵には言及がないと思えば、「作家小伝」がついている。その「林紵」で説明して、1917年に胡適、陳独秀らが『新青年』で新文化運動を提唱してのち、林紵は文章を書いて反対し、さらに小説を作って当てこすり攻撃した、とある(271頁/283頁)。

かさねていっておきたい。以下に引用する文学史からの引用は、よく似たものがぞろぞろ出てくる。見分けがつかないかもしれない。つまり、型にはまった説明しかないということだ。張俊才が「祖述しただけ」と書いていることの証明になるだろう。銭理群からさかのぼって70年以上もくり返されている事実がある。

朱德発のばあい

朱德発『中国五四文学史』(済南・山東文藝出版社1986.11)である。

書名からもわかるように五四時期を中心にしているから詳細な説明がある。本稿に関係するのは「第1章 五四文学運動」の「第5節 文芸思想の論争」だ。これはさらにいくつかに分類されている。すなわち、折衷派、守旧派、「学衡派」、「甲寅派」らとの論争であり、最後は「国故整理」の問題になる。林紵は、このうちの守旧派に配置される。

朱は林紵の論文「論古文之不宜廢」を正しく表記している。注目してよい。それ以前は、「論古文之不当廢」と誤記するものがほとんどだった(後述)。それ

らに比べればよほどました。彼は、林紘が清末の文学改良運動に参加し、進歩的な小説理論を鼓吹し、大量の外国小説を翻訳したことを積極的に評価している。ただし、五四新文学運動における林紘の行動については否定する。定説を踏襲しているのだ。

しばらくの沈黙を経て林紘はふたたび立ち上がり、矢継ぎ早に新文学の陣営にむかって砲弾を発射し、新文学運動を一気に撲滅しようという勢いが大いにあった。1919年2、3月のあいだに、上海『新申報』で「妖夢」と「荊生」という2篇のモデル小説を連続して発表し、新文学運動の先駆者陳独秀、胡適、錢玄同らにむかってあらん限りの力で戯画化して中傷した。「俠客」の口を借りて「中国は4千年あまり、倫常によって立国してきた」と吹聴し、ひとりの「偉丈夫（実は安福系軍閥の徐樹錚をさしている）」が新文学運動の陳、胡、錢らの「妖怪」を殲滅することを幻想した。150頁

あとは林紘の北京大学校長蔡元培あての手紙を紹介して守旧派の攻撃だと説明する。型どおりだ。

朱は、林紘の論文「論古文之不宜廢」を読んでいるらしい。こう書くのは読まずに批判する研究者がほとんどだからだ。にもかかわらず、定説の思考法から抜け出すことができなかった。朱は該当論文について「胡適の白話文学の主張に反対し、古文の正統の地位を擁護する」（148頁）と説明する。後半部分は正しい。しかし、そのことがすなわち前半部分にも当てはまるかといえば、そうではない。林の文章には「胡適の白話文学の主張に反対する」と書いた箇所はないにもかかわらず、存在しない文章を読んでしまう。これが定説だからだ。

項目を立てるまでもないから、いくつかは簡単に触れるだけにしたい。

楊義『中国現代小説史』第1巻（北京・人民文学出版社1986.9）である。林紘の創作小説について説明している。ただし、林紘が「荊生」「妖夢」を書いて「五四」新文学運動の主導者と北京大学を罵って威嚇したというのは従来通り（42、92頁）。楊義、中井政喜、張中良『二十世紀中国文学図誌』上（台湾・業強出版社1995.1。北京・人民文学出版社1996.8は改題して『中国新文学図誌』）は、林紘の項目を

たてている*8。

唐弢主編『中国現代文学史』1（北京・人民文学出版社1979.6 / 1980.6北京第2次印刷）がある。林紓が、蔡元培あての手紙を書き、論文を発表して新派の人物を罵った。文言小説「荊生」「妖夢」で新文学の提唱者を当てこすり、「偉丈夫」が出てきて新文化運動を禁圧することを希望した（30頁）。紋切り型であるという。

周振甫のばあい

周振甫「林紓」（『中国大百科全書』中国文学 北京・中国大百科全書出版社1986.11）である。

前稿で紹介したが、くりかえす。

周の林訳に対する評価は高い。林紓が外国語を理解せず、シェイクスピアとイプセンの戯曲を小説に翻訳したことを確かに指摘している。鄭振鐸らの説に従ったのは明らかだ。ただし、「そうではあっても、林紓はなお40種あまりの世界の名著を翻訳しており、これは中国では、現在にいたるまでも右にでるものはいなかった」（432頁）と述べる。つまり、外国文学の翻訳において林紓は昔も今も最高であると書いている。その彼も、林紓が蔡元培に手紙を送ったことに触れ、「保守から「五四」新文化運動反対に変わった」（431頁）とひとことで切り捨てる。時間が少し前後する。

陳学超のばあい

周健、陳学超編写『中国現代文学七十題』（西安・西北大学出版社1985.1）である。問答形式で前半30題が陳の記述だとあるので彼の名前をだした。

そのなかの「8、「五四」時期新文学戦線は封建復古派にたいして何回の重大闘争を推し進めたか」が本稿に関係する。1919-1925年間に新文学戦線は前後して3回にわたり封建復古派の攻撃を粉碎したという。最初が林紓である（本書はすべて林紓^{マツ}に誤植する）。蔡元培への手紙、論文、文言小説で新派の人物を攻撃した。それに李大釗、蔡元培らが反駁し、新文学陣営の有力な打撃のもとに林紓らは氣息奄奄で失敗を宣言した。定説通りだ。学生向けの解説書だからしかたがない。

蕭超然のばあい

蕭超然『北京大学与五四運動』(北京大学出版社1995.12第二版)である。

初版は1986年というからここに置く。蕭は北京大学教授だとある。書名と出版社からしても、ここに書かれているのは北京大学からながめた林紘になる。第2章の「(5)北大における新旧思想の激戦」という題名を見ただけで、結論が想像できる。

胡適の「文学改良芻議」が1917年初に発表されるや、林紘(琴南)がとび出してきて鋭く対立する「論古文之不当廢」を書いた。しかし、これは理論根拠も十分ではなく内容も貧弱で、さらには個別の語句も通じない文章であった。151頁

「最初にとび出てきて」「最初に立ち上がった」などという紋切り型の表現がある。同類の語句を使用するところから、その思考方法は同一であるとわかる。林紘の文章は、胡適から1年の時間を経ているが、それを無視する。ただちにとび出してきたように書く。先行論文を引き写しただけ。

林紘の論文名を誤り、読んでいないことが明らかだ。錢玄同と劉半農の例の捏造論文を引用し詳しく説明する。林紘を批判する劉半農の文章についてこうもいう。「劉半農は旧派の新文学に対する種々の無知に力をこめて嘲笑し、巧みな筆使いはいきいきとしており人をふきださせるのだった」(153頁)

捏造論文をつくるのがやるべき種類のことであり、劉半農の林紘に対する嘲笑は当然であると考えている。

林紘が短篇小説を発表して、陳独秀、錢玄同、胡適らに対して人身攻撃をおこなった。北洋軍閥が新文化運動に武力鎮圧するようそそのかした。驚くのは、そそのかしのなかに陳独秀らを殺害する[殺害陳独秀等人]ことまで明記している(155頁)。蕭超然は、なにを根拠にこのようなことを書くのであろうか。林紘は反対者だから、殺人教唆の濡れ衣を着せることも許されるわけだ。これが北京大学当局の見解なのである。

蕭超然は、『北京大学校史（1898-1949）（増訂本）』（1988）においても同様に林紵と学生の張厚載を名指しして批判している（後述）。

瞿光熙のばあい

瞿光熙「反対新文学運動以前的林琴南」（『中国現代文学史札記』上海文藝出版社1984.1）である。

標題を見れば論文の内容は予想がつくのではなからうか。五四以前の林紵は、先進的な維新派であったことを述べるのが主題だ。だからからか、冒頭で五四期の林紵を否定してそれを強調してしまう。

現代文学史を読んだことのある人は、林琴南と聞いただけで彼が新文学運動の初期に保守派の代表であったと思うはずである。文学革命が提出されたはじめのころ、彼は新聞紙上に「妖夢」と「荊生」の小説2篇を発表し、新文学運動の提唱者を呪詛し、羅睺羅王（注：小説に登場する）あるいは偉丈夫が出てきて新文学運動というこの「妖魔」を撃破することを幻想した。さらに、「論古文白話之消長」などの論文を書いて、白話文に対して攻撃を行なった。そのうえ、北京大学校長蔡元培に手紙をだし、新文学運動の進展を阻止するよう希望もした。林琴南は当時は確かに保守派の主将であり新文学運動に反対する逆流を代表していたのである。ただし、それは後期の林琴南である。193頁

五四以前の林紵については高く評価し、五四時期の彼を貶めるという定型を継承している。これが学界における一般的な林紵評価であることはいうまでもない。

五四時期の陳独秀を肯定的に述べる文章では、必然的に林紵が反対者として登場する。呉泰昌「“五四”文学革命中の陳独秀」（孫玉石と共作。『藝文軼話』安徽人民出版社1981.5。270-271頁。増訂版（北京・中国工人出版社1991.7）には未収録）もそのひとつだ。

1980年前後には、複数の大学が合同して現代文学史を編集出版することがあった。九院校、十四院校などである。ここでは、ひとつだけを掲げる。

十四院校編写組のばあい

十四院校編写組編著『中国現代文学史』（昆明・雲南人民出版社1981.6。38-41頁）である。

嚴復と林紘を頑固派に分類している。林紘の論文を「論古文之不当廢^{ママ}」と誤り、蔡元培あての手紙、短篇小説をあげて新文化運動に反対したと述べる。そればかりか、デマをまき散らした本人が林紘だと決めつけている。文学革命問題で教育総長傅增湘を弾劾するように国会議員に運動した、北京大学校長蔡元培を辞職させなければ弾劾案を提出させる、などなど。証拠もないのにデマの発生源を林紘にした。「文化大革命」が終了したあとの文学史だ。しかし、それ以前の思考法を継承しているのは明らかである。

「文化大革命」終結後に編纂を開始して成った文学史がある。十四院校よりも前だ。中南七院校編『中国現代文学史』上下冊（長江文藝出版社1979.10）である。

第1編第1章の第2節「対以林紘為代表的封建復古派的鬭争」が該当する。林紘を代表する封建復古派に対する鬭争、という題名がその内容を示している。なにしろ、北洋軍閥の威勢を借りて『新青年』に凶悪な反撃を加えた、その代表人物が林紘だ、と決めつける（36頁）。林紘の書いた短編小説2篇は、実際はつぎのことを暴露したという。すなわち「封建復古派と封建軍閥が結託しており武力で新文化運動および文学革命を鎮圧しようとしてるといって陰險な下心」（38頁）。新しい見方は、ここには存在しない。

1966-1976年は「文化大革命」の政治運動があり学術研究活動は停止した。長い中断の前になる。といっても、林紘に関する記述はそれほど揺れない。負の方向で固定されたままだといってよい。

上海で活躍した作家が書いたものをひとつだけ紹介する。

范烟橋のばあい

范烟橋「民国旧派小説史略」（魏紹昌編『鴛鴦蝴蝶派研究資料』（史料部分）上海文藝出版社1962.10初版未見／日本大安影印1966.10／香港・生活・讀書・新知三聯書店香港分店影印1980.1／上巻史料部分 上海文藝出版社1984.7。今、1984年版による）である。

范烟橋『中国小説史』（蘇州・秋葉社1927.12）には民国部分がある。ただし、こちらはそれとはほとんど別物のように見える。新しく林紵に言及してはいるが詳しくはない。

林氏、字は琴南、別号を畏廬、また冷紅生と号す。福建侯官の人。絵がうまく、北京大学教授を多年にわたってつとめていたが、五四運動の時、校長蔡元培とうまくいかず、立腹して離職し、売文売画で生活するのに毎日長時間仕事をしなければならなかった。322頁

私が范烟橋の文章を特に引用するのは、彼が上海で筆を振った作家だからである。清末民初における文芸の中心地は上海だった。上海から北京の文学革命をながめるとどういった様相を呈するか。それが上の引用になる。

誤解が少なくない。たとえば、五四時期に林紵が北京大学教授であったかのようには説明している。1913年に大学を辞めているのが事実だ。1919年当時は、民間人であり北京大学とは関係がない。校長蔡元培とうまくいかず、というのは林紵が公表した蔡あての手紙を根拠にしているのだろう。林紵が蔡元培を詰問したなどと一般にいわれている。だが、くりかえすが北京大学における教育について質問したにすぎない。それに蔡元培が答え、林紵は感謝の手紙をあらためて公表しているくらいだ。攻撃、反攻、論争という種類のものであれば、林紵から感謝のことは出てこないだろう。范烟橋が書くような「立腹して離職」という情況はもとからなかった。売文売画の生活という表現は、いかにも落ちぶれた様子を想像させる。日本でもそのように説明する書物がある。その1例は、近藤春雄『中国学芸大事典』（大修館書館1978.10.20）だ。

民国初年の新文学運動のときには、これに反対して、北京大学校長蔡元培に詰問状（致蔡鶴卿太史書、一九一九、三）なおこれに対し蔡の覆林琴南書がある）を送り、また、妖夢・荊生という小説を発表して蔡元培・陳独秀・錢玄同・胡適を侮蔑したのは有名である。しかしこのため名声を失い、晩年は主に絵をえがいて生活の資とした。838頁

さかのぼると、河部利夫、中村義編『新版世界人名辞典東洋編』（東京堂出版1973.6.10 / 1974.4.30三版）がある。

晩年には「文学革命」に反対して、名声を失い、主に絵を描いて生活の資とし、北京で没した。429頁

事実は、違う。林紓の翻訳書は彼の晩年どころかその死後も出版されている。彼の原稿料は、当時の翻訳のなかでは特別に高額だった。絵画三昧というのは生活の余裕を表現していると考えるべきだ。尾上兼英のいう「晩年は悠々自適の生活」が正しい。文学革命の反対者と見られたところから、晩年は没落していて当然だという思い込みではなかろうか。林紓について昔からある偏見だと私はいいたい（別稿参照）。

復旦大学中文系のばあい

復旦大学中文系現代文学組学生集体編著『中国現代文学史(1919-1942)』（1959.7初版未見 / 上海文藝出版社1959.8二次影印本）である。

第1編が1919-1927年までを、第2編が1928-1942年を対象とする。林紓が登場するのは、その「第1章 無産階級指導のもと五四新文化運動」、「第5節 封建復古主義者との闘争」だ。題名を見るだけで理解できるだろう。林紓は、否定的に説明されている。

林紓が「道を守るもの」として登場する。「論古文之不当^{ママ}廢」と「論古文白話之相消長」を書いて白話に極力反対し、封建礼教と文言文を擁護したが、どのような道理も説明することができなかった。蔡元培に手紙を送って非難した。小説を発表して「彼は徐樹錚の力に頼って新文学運動というこの「妖怪[妖魔]」を取り除き、封建文学が永遠に続くことを希望した」61頁

定型通りの説明であるとしかいいようがない。論文題名を間違っ箇所までも通説のまま。それ以前から説明されていることをくりかえしただけ。

周作人のばあい

周啓明（作人）『魯迅的青年時代』（北京・中国思念出版社1957.3）である。

周作人は、林紵批判の当事者である。本来からいえば、1920年代のところで説明すべきだ。しかし、該文は、当時を回想して説明しているので参考までに紹介しておく。

「五四」の年になって、反動派文人は『新青年』の言論に対してひどく恨んでおり、林琴南を頭とする一群は徐樹錚に武力で鎮圧するように働きかけ、『大公報 [公言報]』に蔡子民あての書簡を発表したほか、「荊生」（徐を指す）、さらに「妖夢」という小説を書いて、醜悪な顔を暴露したから、その後魯迅はまったく歯牙にかけなくなってしまった。80頁

魯迅は若いころ、林紵の翻訳を好み出版されるたびに購入していた。だが、あきてしまい民国後は林紵とは関係を絶った、という説明につづく部分である。

周作人のこのような説明が、現在にいたるまで引き継がれていることがよくわかる。周作人も林紵の死後に批判の文章を発表しているのだから反林紵で一貫しているわけだ。

劉綬松のばあい

劉綬松『中国新文学史初稿』（北京・作家出版社1956.4影印本）である。

錢理群を約30年ばかりさかのぼる。張俊才から数えれば半世紀前だ。「第1編 五四運動時期の文学」のなかに「3 封建復古主義者との闘争」とあり、そのままの題名である。ここに林紵が登場するのもほかとかわらない。そういう枠組みに構成されている。少し説明すると、劉綬松が考える封建復古主義者は、林紵ひとりだけではない。嚴復、曾毅、方宗岳、黄侃らがいる。だが、彼らの名前は注釈の中にだけ出して林紵とは明らかに扱いを別にする。また、解説も詳細になっており林紵に守旧派を代表させている。

そのころ最初に身を挺して出てきたのは、道を守ることを自分の任務にし

て新文学に反対した林紓である。

こう切り出し以下約3頁半にわたって林紓の罪状を述べる。骨格だけを紹介する。

林紓（琴南）は、まず『新申報』に2篇の小説「妖夢」と「荊生」を発表しそのころ白話文学を提唱していた人を痛罵した。「荊生」では、荊生のようなひとりの「偉丈夫」が出現して武力で新文学運動を消滅できないものかと幻想したのだ。林紓がこの小説を書いたのには「深い意味が大いにあった」のである。小説の「偉丈夫」荊生は、当時の安福系軍閥徐樹錚を指しており、当時の封建軍閥が「文字の獄」を引き起こし新文学運動を提唱する人物を一網打尽にすることを希望した。封建復古主義者がいかに新文学運動を敵視したかを私たちはここから完全に見ることができる。/「荊生將軍」たちは、当時武力を持つてはいたが彼らも人民の力を恐れ、彼らのいわゆる「國務會議」は「新思想取り締まり」の議案を通過させたが、しかし新思想は非常な勢いで依然として拡大していた。これはまさに林紓の輩がひどく悲しみ恨むことだった。この小説の附論のなかで、彼は「このように混濁した世界に、田生、狄生だけが十分に自ら誇っているだけで、どこに荊生がいるだろう！」といった。荊生を得ることができなければ、林紓本人がみずから出馬せざるをえない。彼は先に「論古文之不当廢」を書いたことがあった。のちに「論古文白話之相消長」をまた書いたが、このふたつの文章はともにいかなる道理もだしてはいなかった。47-48頁

劉綬松は、短篇小説「荊生」に登場する偉丈夫は軍人の徐樹錚だと断言している。奇妙ではないか。林紓が「どこに荊生がいるだろう！」と書いているのを見てほしい。荊生はいないのだから徐樹錚であるわけがない。劉自身がその箇所をわざわざ引用しているにもかかわらず、すでに見えなくなっている。「國務會議」とか「新思想取り締まり」の議案とかは、当時そのようなウワサがあった。風説にすぎないものが、劉綬松の説明によると事実になっている。

小説に出てくる田其美は陳独秀を意味し、狄莫は胡適がモデルだというのが常識だ。周知の事実ではあるが、劉綬松はモデルとされるふたりの名前をださない。中華人民共和国成立後に発動された政治運動と無関係ではないと考える。50年代後半には、陳と胡は批判の対象になっていた。林紵がふたりを批判していたとなると政治運動からいえば「敵の敵は味方」だから、陳と胡は正しいことになる。林紵の敵を共有するからだ。それでは立論できない。つまり、最初から林紵を批判する目的で文章が書かれているという簡単な理屈である。ゆえに、立論に不都合で不必要な資料は採用しない。その資料にしたところで、厳密さを欠く。前述のように林紵の「論古文之不当廢」は、「ママ」で示した箇所が「宜」でなければならない。批判の対象になっている文章については間違っているが無頓着だ。原文を読まずに批判していることが明らかである。これは劉綬松だけのことではない。

つづいて林紵が蔡元培にあてた手紙を詳しく紹介し、蔡の返答も同様に解説している、とだけしておく。この説明のやり方も、ほかの文学史の多くが採用している。

張俊才がまとめているように、劉綬松も錢理群と同じ考えだ。いや、時間の順序からいえば逆になる。研究界では、劉綬松の見解もふくめて林紵についての定説が後の錢理群に受け継がれた。

張畢来のばあい

張畢来『新文学史綱』第1巻（北京・作家出版社1955.12 / 1956.4二次印刷）である。

第1巻だけを刊行して中断したらしい。書名を『二十年代新文学発軀史』に変更したものが出版されている（架蔵のものは香港影印本）。その「4『五四』前夜の新文学中の左派と右派および彼らの創作、理論闘争のなかに表現された異なる態度」に説明がある。

張畢来は、錢玄同が王敬軒名義で封建文学を弁護し「革命」に反対する理由をのべた手紙を書き、劉半農がそれに反駁したことから説明をはじめ。創作と理論には左派と右派の特徴があり、第1種は、「改良主義者の妥協して投降する態度」だという。

当時の林琴南は改良主義者の胡適よりもまだいくらか賢かった。なぜなら彼は新文化運動の反封建主義の思想内容とそれが下層にむけて普及する傾向を見いだしていたからだ。しかし胡適の『文学革命』観は依然として文字改革に限定されており、ただ『白話』を主張するだけだった。当時、林琴南は蔡元培に対して攻撃をし、蔡元培は彼に回答した。蔡元培は實際上、胡適、梁漱溟などの言行を論拠として弁護したのだ。22頁

胡適批判が背景にあるから、林紵をどのように評価するかが微妙に揺れている。胡適を批判すると、彼の敵対者であった林紵をすこし持ち上げなくてはならない。

第2種は、「革命的民主主義者の戦闘する態度」であって、魯迅と陳独秀に代表される。陳独秀については注釈がある。「『五四』以前は、陳独秀は急進的民主主義者であり思想方面では形式主義であった。『五四』以後、陳独秀はよくないマルクス主義者で、彼の形式主義を依然として継続していた」(24頁)。当時の政治的評価が文学史の記述に大きく影を落としていることがわかるだろう。

丁易のばあい

丁易『中国現代文学史略』(北京・作家出版社1955.7 / 1956.8三次印刷)である。

該書第1頁は「毛沢東同志が彼の名著「新民主主義論」のなかで……」と書きはじめる。そういう時代のそういう種類の文学史だ。先に主張があり、それにあわせて資料を集めて記述する、という意味にほかならない。

「第1章 五四運動と中国現代文学革命運動の勃興、発展および魯迅の貢献」のなかの「第4節 魯迅を頭とする文学革命陣営と封建文学および右翼資産階級文学との闘争」に「1 封建文学との闘争」がある。型どおりだともいえる。ここに林紵が出現する。表題が少し違うだけで出てくる場所にかわりはない。銭玄同が王敬軒の仮名を使用して、といつもの説明があって以下の記述になる。ほとんど同様の記述が続くと思われるだろう。これが事実だ。

これら封建古文家の反撃は林紵で代表させることができる。彼はかつて

「論古文之不当^マ廢」と「論古文白話之相消長」というふたつの文章を書いたことがあり、さらに当時の北京大学校長蔡元培に手紙を出した。それらはすべて封建礼教を擁護し白話文に反対するものだったが、いずれも正当な理由を出すことができず、ただ力つきことばに窮した叫びでしかなかった。蔡元培も彼に返信をおくり、道理正しくことばは厳格に反駁を加えた。林紓はどうすることもできず、そこでくだらない漫罵を行ないながら、封建軍閥を煽動して武力で白話文を制止しようと画策した。51頁

最初から林紓を反対派の代表にする考えだから、内容のないことばを重ねてウワサを彼に結びつけただけの文章である。それにしても「武力で白話文を制止しようと〔用武力来制止白話文了〕」した、というのは何か。丁易は自分で書きながら理解しているのだろうか。ことばを武力で制止できるものなのか。刊行物を発行禁止にする、というのならまだわかる。それにしたところが、事実ではない。具体的な内容がまるで不明であって、中国語であるにもかかわらず文章になっていないと私は思う。つまり、先に林紓批判という結論があってそれにあわせて文字を埋めているだけだと感じられるのだ。

丁易が書いているこのわけのわからない武力云々は、蔡儀の文学史を踏まえているように思われる。

蔡儀のばあい

蔡儀『中国新文学史講話』（上海・新文藝出版社1952.11）である。

「第4講 新文学運動の団結と闘争」のなかに「最初の団結とその封建文学に対する闘争」がある。嚴復と林紓が反したというのだが、ここでは林紓部分のみをとりあげる。

新文学運動をになった人々を「統一戦線」ということばで括る。みつつの革命階級で組織されており、無産階級で革命思想の知識分子（代表的人物は李大釗、陳独秀）、プチブル階級の徹底した革命思想の知識分子（魯迅）、ブルジョア階級で民主革命思想の知識分子（胡適）である。胡適批判以前の文学史だから、そう書くことが許されている。

……封建士大夫階級の頑固派も、墮落して戦闘能力をまったくなくしていた。そのためこの時立ち上がって新文学派に応戦したのは、士大夫階級の頑固派ではなく、士大夫階級の維新派、すなわち嚴復、林紵らの人だった。これらの人物は、前の段階において西洋ブルジョア階級の科学と文学を紹介したことがあった。つまり、彼らはブルジョア階級民主革命思想意識について宣伝しいささかの力を尽した、ということなのである。そのため、士大夫階級の頑固派がまったく墮落しており、歴史の舞台においてどんな役柄も演じることができないその時に、もともと正統の役柄を演じたことがあり、しかも士大夫階級に属している維新派が、舞台に出てきて道化役を演じざるをえなかった。（注：嚴復については省略）しかし、林琴南は論文「論古文白話之相消長」を発表したばかりか、そのうえ当時の北京大学校長蔡子民に手紙をだし、当てつけ小説「荊生」と「妖夢」を書いた。結局のところ新文学反対に老人の氣力をふりしぼったのだ。82頁

蔡儀は、階級わけして当時の動きを説明している。それが団結とか統一戦線という言葉になる。

林紵の論文は理論になっていないとし、蔡元培あての手紙をあげて行き詰まっていると評する。階級の視点から見た結論をあらかじめ出しているのだから、それにあわせてだけ。小説については、次のように説明する。

「荊生」というこの小説が表わしているのは、新文学運動について彼はずでにどうしようもなくなっており、封建軍閥徐樹錚を動かして武力を用いてそれを制止するしかなく、しかしそれが必ずしも可能ではないことを恐れて、小説で鬱憤をほらし、阿Q式の精神勝利を得ようとしたのだ。83頁

武力で新文学運動を制止しようとした、というのが蔡儀の考えである。具体的に何をやるのか説明しない。あるいは説明できない。どのみち、内容がないといわざるをえない。

前述のとおり胡適批判が発動される以前では、政治的判断からくる整合性を考慮する必要がない。つぎに王瑤の文学史を見る。彼の文学史は1951年という中華人民共和国成立直後に出版された。

王瑤のばあい

王瑤『中国新文学史稿』上冊（北京・開明書店1951.9初版未見 / 1951.12二版）である。

1950年5月に教育部が全国高等教育会議を招集し「高等学校文法両学院各系課程草案」が通過した。その規程に「中国新文学史」があって、それに沿う形でつくられたものらしい。「自序」にそう書いてある。

「第1編 偉大な開始と発展（1919-1927）」「第1章 文学革命から革命文学へ」の「2 思想闘争」で林紵が登場する。

はじめは、王敬軒名義の論文だ。王瑤は、「力を集中して敵を打ち倒すため」（33頁）だとはっきり記述している。銭玄同と劉半農が仕組んだ例の「なれあいの手紙」、すなわち私のいう捏造論文である。王瑤が「力を集中して敵を打ち倒すため」と書いた意味は、それが正当な行為であると認めているからだ。捏造でもかまわないと考えている。敵を倒すためであれば、なにをしてもいい。だからこそ「文学革命」という。その意志がなければ記すことのできない種類の表現だ。

北京大学内では新文化運動に反対して劉師培、黄侃らが『国故』『国民』という雑誌を創刊し、学外でも安福倶楽部の軍人が陳独秀らを追放すると盛んに伝えられていた（33頁）。王瑤は、ウワサとしてはじめは扱っている。あとで徐樹錚がでてくる。

そのころ古文家の林紵（琴南）は『新申報』で小説を書き、陳独秀、胡適らをモデルにして痛罵した。たとえば、「荊生」では、田其美（陳）、金心異（銭）、狄莫（胡）の3人が陶然亭に集まって話している。田生は孔子を大いに罵り、狄生は白話を主張する。隣から突然ひとりの偉丈夫（荊生）がやってきて、田狄を痛撃し金生をこらしめると去っていった。これは自己陶醉であるばかりか、実は荊生には指し示すものがあった。星雲堂が影印した劉半農蔵『初期白話詩稿』の編者序引に次のようにいっている。「黄侃氏は

ただでまかせに騒ぐだけだったが、道を守る林紓氏は、文章を作ってこれに反対したばかりか軍事力を借りようとした すなわち彼の「荊生將軍」、つまり私たちが小徐とよんでいた徐樹錚である。このような文字の獄という黒い影が、徐々に私たちの頭上を圧迫してきて、私たちは絶えず戦々恐々として危険と恐怖のなかで生活したのである」。そのころ、これらの反対者は安福（倶楽）部の国会に運動して教育総長と北京大学校長を弾劾しようとしたことがある。すべて成功はしなかったが、しかし先駆者たちの戦闘的苦難を知ることができる。林紓自身は「論古文白話之相消長」1篇を書き、歴史事実をあげて「古文というものは、白話の根底であり、古文がなければどうして白話があるだろうか。……^{ママ}吾輩はすでに年老い、その非を正すことはできない。はるか百年もすれば、おのずから理解できる人もでてこよう。諸君、待たれよ」と説明した。しかし、彼自身には百年を待つ辛抱強さがなく、1919年3月、彼は北大校長蔡元培に手紙を書き、蔡はこれに答えた。これが当時有名な「致蔡鶴卿太史書」と「覆林琴南書」である。ともに新文学建設中の重要文献である。33-34頁*9

林紓と蔡元培の両者がかわした手紙の内容について説明を続けているが、ここでは省略する。

こまかな点を指摘しておきたい。王瑤が題名をだして引用した「論古文白話之相消長」は、『文藝叢報』第1期（1919.4初出未見）に掲載された。ところが、林紓の蔡元培あての手紙は同年3月18日の公開なのだ。王の記述では、それが逆の順序に説明されている。依拠した文献がそうなっているから自分では検討せず、書いてあるままに従ったらしい。

王瑤に引用された劉半農の説明が、劉の心理を如実に表わしている。文学革命派は、強力な敵を必要としていた。もとは劉半農が錢玄同と仕組んで林紓を敵対者の代表に指名したのだ。自分から仕掛けておいて、林紓が軍人徐樹錚の力を借りようとしていたと考えた。方向が異なるだけで、願望していたという点では同じことをくりかえした。劉半農は自分がやったことを林紓に投影しているのが明らかだ。自らがやったことは、林紓がやらないはずがない。わかりやすいことこ

の上もない。ところが、王瑤は、劉半農のことば通りに受け取るだけ。疑わない。劉半農と同じ立場に立つからである。

林紘が書いた短篇小说、軍人徐樹錚へよせる期待、守旧派として蔡元培に手紙を書いたこと、いわゆる林紘の3大罪状の具体的内容はこの時点ですでに揃っている。徐樹錚の名前を出したのは、劉半農にほかならない。王瑤は、根拠を明らかにした。ここが新しい。注目しておきたい。

上下2冊というこれだけの文学史が、短期間に執筆できるはずはないだろう。中華人民共和国になるまえから準備されていたと考えるのが普通だ。そうするとそれ以前の中華民国時代にさかのぼる必要が生じる。

李何林のばあい

李何林『近二十年中国文藝思潮論』(1939.3生活書店 / 1945.10勝利後第1版影印本あり)である。

「第1編 五四前後の文学革命運動」の「第3章 反对者との論争」に林紘が登場する。19^{ママ}14年の『新青年』の創刊(1915年『青年雑誌』が正しい)から1917年にいたり胡適と陳独秀が古文に反対し白話文を提唱して以来のことだ、と書きはじめる。

封建文化勢力を代表して反対を表示したもののの中で最も著名だったのは当時の古文家林紘(琴南)であった。彼は先に『新申報』に小説を書いて北京大学の人間を痛罵した。たとえば「妖夢」だが、元緒は北大校長蔡元培を、陳恒は陳独秀を、胡亥は胡適を当てこすっていた。その内容は卑劣であり、学者としての度量を失っており今引用しないでもいいだろう。(中略)45頁

つづいて「荊生」に登場する人物名を田必^{ママ}[其]美と誤るのは、彼の著作よりも前に出ている霍衣仙の記述に影響されたのだろうか。書名もよく似ているが、これは偶然か。荊生については、「そのころ、古文家は誰かが出てきて荊生になることを渴望したが、しかし荊生はついに得ることができなかった。結果として林琴南自身が出馬した」(46頁)と説明する。さらに、論文「論古文白話之相消

長」を引用するのは後の周錦が取り入れた。「百年」を待つ必要もなく、林紵自身があせってしまい「その非を正す」ことになった(同上)部分は、鄭振鐸からの引用だし、これもまた王瑤に受け継がれる。つまり、研究者は先行論文を大いに参考にしている。林紵の蔡元培あての手紙、および蔡の返信についても同じだから省略する。

楊蔭深のばあい

楊蔭深『中国文学史大綱』(商務印書館1938.6)である。

「第30章 新文学運動のはじまり」において胡適らの文章が『新青年』に発表されたことを述べたあとにでてくる。

当時、反対した人も多かった。最も激烈なのは林紵ということになる。彼は上海の『新申報』に小説「荊生」を発表し、荊生のようなひとりの偉丈夫が田必美(陳独秀を指す)、金心異(錢玄同を指す)、狄莫(胡適を指す)を痛打することを希望しさえした。553-554頁

小説の登場人物のひとりを誤記するところなど、記述はほぼ定型通りとっていい。

霍衣仙のばあい

霍衣仙『最近二十年中国文学史綱』(広州・北新書局1936.8)である。

「第3章 新文学運動の経過」の「反対派の論調」において最初にあげられるのが「林紵の反対」だ。

(1) 林紵の反対: 当時、反対の最有力なものは古文家の林紵だった。彼は1篇の小説「荊生」を書いて新文学を提唱した人を痛罵した。今、その原文を抄録するから、彼が当時怒った心理を見てほしい。/(注: 原文は省略)
/ここの田必[其]美は陳独秀を、金心異は錢玄同を、狄莫は胡適を指す。
3人が陶然亭に集まって、田生は孔子を罵り、狄生は白話を主張する。隣か

ら突然ひとりの偉丈夫（林自身を暗示する）がやってきて彼らを痛罵する。このほかに「妖夢」1篇があり、元緒は蔡元培を、陳恒は陳独秀を、胡亥は胡適を当てこすっており、その内容は彼ら3人をそしるものだった。23-24頁

前半部分は、王瑤の文章とそっくりだ。あとは林紵の蔡元培あての手紙を紹介している。霍は、反対派として汪懋祖、嚴復らの名前をあげている。短篇小説と蔡あての手紙が実例として出てくるだけだから論調としてはおとなしい部類に属する。ただし、反対者の最有力者として林紵が登場するのは変わりがない。中華民国にさかのぼって、林紵は文学革命派にとっての敵として大きな存在であったと位置づけられる。注目してもいいのは、1936年の時点でも荊生を林紵だとまだ考えている点だ。すでに、劉半農が徐樹錚を暗示すると指摘しているが、それには気がつかなかっただけだ。

本稿では発行の時間をさかのぼって記述している。順番からいえば次は鄭振鐸になるが、当事者のひとりだから後まわしにする。

文学史ではないが、伝記で有名な著作から林紵部分を見ておきたい。

寒光のばあい

前述の寒光『林琴南』（上海・中華書局1935.2）である。

1930年代において、五四時期の林紵を擁護するほとんど唯一の文献ではなかろうか。

今、まず新旧衝突の話をしよう。この問題についてすでに長い時間がたっているとはいえ、しかし比較的公平な論断はくだされていない。私も個人としては新文化運動を極力擁護するものだが、林氏は現在にいたるまでなお無実の罪をきせられているのは、困ったことだ。もう一度検討する必要があると思う（胡適「五十年来中国之文学」から陳炳堃「最近三十年中国文学史」まで、すべて林氏を反新文化運動の代表にむりやりならせている）。12-13頁

本稿のはじめに紹介したが、再度引用する。

哀れなことに当時の林氏は、無知な人々から頑固派、国故党などと罵られ、はなはだしくは林氏が苦心して紹介した外国文学でさえも種々の誤謬をでっちあげられて大攻撃されたのである！ 15頁

寒光は、林紓を擁護した。だが、内容の詳細について説明しているわけではない。印象批評だと受け取られたのだろう。

王森然のばあい

王森然『近代二十家評伝』（北平・杏巖書屋1934.6.10）である。銭玄同が題字を書いている。

王は、林紓の翻訳について極めて重要な位置を占めると高く評価する。ただし、五四時期の彼に関しては批判する。これも通説と同じ。蔡元培あての手紙を引き、小説「荊生」「妖夢」をあげ、「論古文之不当廢」「論古文白話之相消長」を紹介する。林紓が、積極的にでてきて非難したと次のように説明する。

1918年に陳と胡のふたりが文学革命を提唱すると国内学术界を震撼させた。賛成と反対で輿論は入り乱れ多くの疑問が解かれない時、氏（林紓）はひとり出てきて非難をし、蔡元培あての手紙のなかで次のように述べた。
（後略）91頁

林紓の蔡元培あての手紙からはじめるから、反対派の代表として突然登場したように見える。銭玄同の捏造論文をわざと無視すればそういう結果になる。当時の林紓を否定的にとらえていることに違いはない。林訳は翻訳史において重要な位置を占めている、と認める王森然にしてもそうなのだ。

銭基博のばあい

銭基博『現代中国文学史』（上海・世界書局1933.9）である。

林紓については、「上編 古文学」の「（3）散文」において紙幅をとって説

明がある。林紓は文をどう考えているか。それを紹介するために翻訳につけた序文を引用する。その後、よく見るやり方は銭がはじめたらしい。

文学革命時に、北京大学教授の陳独秀、錢玄同たちが林紓を批判し、林はそれが不満で小説「妖夢」「荊生」を作って風刺し鬱憤を書いた(150頁)。蔡元培あてに手紙を出した、と全文を引用する。結論は、林紓は時勢の変化を理解しなかった(152頁)、ということになる。

陳独秀は文科学長であって教授ではない。しかし、一般にそう信じられているから銭基博もそう書いている。

私が興味を感じるのは、こまかい箇所だ。

たとえば、林紓と商務印書館の深いつながりの説明して以下のように書く。「はじめ林紓と長樂の高氏兄弟鳳岐、而謙はとても親しかった」(139頁)。銭基博は、説明をしていないが、彼らが親しいのは当然である。なぜなら、林紓と陳衍(尾上兼英のところで紹介した)およびこの高鳳岐は、同郷であり同期の拳人だからだ。それを知れば、前出陳衍の「林紓伝」に「鳳謙創商務印書館。則約紓專訳小説」とあるのに納得がいらず私は首をひねる。商務印書館を創立したのが高鳳謙(夢旦)だというのは当然間違いだ。彼は、創立者のひとりではない。そこではなく、別の誤りだと私が考えるのは、ここは高鳳岐であるほうが納得がいくからだ。

まぎらわしいかもしれない。高兄弟は3人いる。高鳳岐(嘯桐)、而謙、鳳謙(夢旦)である。そのうちの長男鳳岐と三男鳳謙が商務印書館に勤務した。名前を取り違える人がたまにいる。

林紓と商務印書館の深いつながりの説明して以下のように書く。

鳳謙が商務印書館の編訳を主宰していたから、欧米小説をもっぱら翻訳するよう林紓ととりきめた[既而鳳謙主幹商務印書館編訳事、則約紓專訳欧美小説]。139頁

銭基博は、この部分は陳衍の記述に基づいている。ただし、商務印書館創設ではなく、商務印書館の編訳を主宰していた、と訂正した。それはいい。だが、こ

この「鳳謙（夢旦）」は兄である「鳳岐」に直したほうがもっとよかったように私は考える。

「下編 新文学」の「（3）白話文」にあまり見かけない逸話がひとつ記載されている。こちら私の興味を少し引く。

例の王敬軒（^{ママ}銭は王静軒と誤記する。同音だから勘違いしているのだろう。傳道彬点校本（北京・中国人民大学出版社2004.10。432頁）も誤記したまま）に関してのものだ。すなわち、王敬軒と名乗る人物が林紵を弁護するから、林の弟子李濂鏗は彼を訪れ友人になろうとしたところ、名なしの権兵衛であった。李は嘆き林紵は憤激したがどうしようもなかった、というもの（441頁）。

李は、あるいは鏗堂（「林氏弟子表」）と同一人物かもしれない。林紵の弟子のひとりだというのは確からしい。ただし、実在する弟子だからといってこの逸話が実際にあったかどうかは不明だ。王敬軒が銭玄同による捏造人物であった事実を公表したのは、1935年の鄭振鐸だ。銭基博は、銭玄同の名前までは出していない。だが、鄭よりも前に王敬軒が架空の人物であることを暴露しているのがおもしろい。

王哲甫のばあい

王哲甫『中国新文学運動史』（北平・傑成印書局1933.9。題字は胡適 / 香港・遠東圖書公司1967.5再版）である。

林紵が北京大学関係者を痛罵する小説を書いたこと、蔡元培へ非難の手紙を出したことを述べる。定説のままだ。ほかと特別に変わったところはない。北京で当時多くのウワサが流れたことを説明しているからその部分だけを引用紹介する。

（北京大学）校外の反対者はずいには安福系の武人政客を利用しこの新運動を弾圧しようと考えたが、成功しなかった。民国8年2、3月の間に、北京では謠言がまき起こった。あるものは教育部が出てきてこの新運動に干渉するだろうといい、あるものは陳（独秀）胡（適）が北京から駆逐されるといった。これは根拠のない謠言ではあったが、当時の反対者の心理を理解することができる。44頁（大きく中略）

反対派は文学革命運動を猛烈に攻撃したが、ついに効果はなく、彼らはさらに安福系の国会が教育部長と北京大学校長を弾劾するように運動しようと考えた。しかし、これも失敗した。45頁

これらの風説風聞の間に林紓についての説明を挟みこむ。文章の流れからいえば、伝えられる多くの謠言の黒幕が林紓ではなかろうか、そうに違いない、と読めるようになっている。その文章の技巧もまた従来 of 文章を踏襲しているのだ。文学史をさかのぼれば、その先例をすぐに見つけることができる。引用を反復させるというやり方だ。

郁達夫の文章から一部分を紹介する。郁達夫「説翻訳和創作之類」(『論語』第8期1933.1.1)である。「翻訳は中国においては最も容易でどうということもないらしい。なぜなら外国語をまったく理解しない人が、中国では、ひねり回した古文を用いて翻訳してもいいし、また皆は彼の翻訳はうまいともいっているからだ」(258頁)。いうまでもなく林紓のことを指している。例の「外国語を理解しない翻訳家」と表現して林を侮辱しているのは明らかだ。林紓がどのように見られていたかを知るひとつの材料になるだろう。興味深いので紹介した。

陸侃如、馮沅君のばあい

陸侃如、馮沅君合著『中国文学史簡編』(上海・大江書鋪1932.10.15 大江百科文庫版。同名の修訂本(北京・作家出版社1957.7)とは別物)である。

「第20講 文学与革命」に言及がある。

しかし(白話に)反対する人も常に出てきた。はじめは林紓で、彼は北京大学校長蔡元培に手紙を書いて次のようにいった。「大学は全国の師表です」から、「卑俗なことばを用いて文章を作る」ことを主張するならば、「北京天津の小商人はだれでも教授に採用できることになります」と。これはとんでもないことだ。そこで彼は蔡元培に「国民のために方向を正」すよう要求した。彼は、そのうえ『新申報』に「荊生」1篇を発表しひとりの「偉丈夫」荊生が田必^{ママ}[其]美(陳独秀)金心異(錢玄同)狄莫(胡適)の3人を打ちす

えることを想像した。しかし、彼のこのおかしな論駁は、当然まったく効果はなかった。279-280頁

短篇小説の効果がなかった、と述べている。小説にそのような効果を求めるのは、基本的におかしい。ただし、文学革命派にとっては逆手にとることができたのだから効果はあったのだ。実藤恵秀のところすでに説明しておいた。

短篇小説に出てくる田其美を田必美と誤るのは、鹽谷温、布施知足、李何林、楊蔭深、霍衣仙らがいる。それらよりも早いのがこの陸侃如らの文学史だ。

引用した林紵の文章、および文字使い、誤植の一致点を見ると、前に引用した鹽谷温の文章は、陸侃如らの文学史をとり入れているとわかる。

周作人のばあい

周作人は、文学革命派のひとりであり、ゆえに当事者だ。あとでも言及するが、時間の順序からいうとここになるから紹介する。

周作人講校、鄧恭三記録『中国新文学的源流』（北平・人文書店1932.9 / 1934.3訂正再版。影印本による）である。「第4講 清代文学の反動（下）」と「第5講 文学革命運動」の2ヵ所に林紵が出てくる。松枝茂夫の日本語訳（『中国新文学的源流』東京・文求堂書店1939.2.15）があるので使用する（頁数は訂正再版原文 / 日本語訳の順番）。

林紵が小説を訳した功労は最も大きく、時から云つても最も早かつたのでありますが、その態度はこれまた非常に不正確なものでありました。彼が司各特（Scott）狄更司（Dickens）等の作品を訳したその理由は、彼等の小説が価値があつたためではなくして、彼等の筆法のある部分が太史公と似て居り、ある部分が韓愈と似て居つたからで、太史公の『史記』や韓愈の文章はすでに価値があるのでありますから、彼等のものも価値があるといふ理屈であつたのであります。こんな工合に、彼の訳述の事業は、一面では西洋に学問無しといふ中国人の旧見を打破し、一面では桐城派の「古文の体は小説を忌む」との主張を打破しましたけれども、その根本思想は依然として新文学と

同じくないものでありました。89頁 / 86頁

林訳小説についてその功績をある程度は認めている。だが、全面的に称賛するというわけではない。やはり、林紘を批判した当事者の説明ということなる。次が、五四時期の林紘についてだ。

このたびの文学革命運動に対し、起つて反対したものは、前回にすでに申し上げた嚴復や林紘といった人々であります。西洋の科学哲学及び文学は、元来彼等の紹介によつて始めて中国に輸入されたものであり、文学革命運動に参加した人々も、大抵みな彼等の影響を受けて居ります。当時林紘の訳した小説は、最も早い『[巴黎]茶花女遺事』(小ヂューマの『椿姫』)から後の『十字軍英雄記』(スコットの『タリスマン』)『黒太子南征録』(コナン・ドイルの小説)に至るまで、私は一つとして読まないものではありませんでした。では、彼等はなぜ又反動を起したのでせうか?それは彼等が載道の觀念を有してゐたが故であります。嚴・林は共に甚だ聡明で、文学運動の危険が將に文学方面の改革のみに限られず、その結果勢ひの趨くところ儒教思想を根本から動揺させずには止まないことを見て取りました。そこで非常に恐れて出でて反対したわけであります。林紘の蔡子民先生に宛てた非常に長い手紙は当時の『公言報』に登載されましたが、その手紙の中に彼はこのたびの文学運動がいまに中国人をして中国の古書が読めなくしてしまひ、中国の倫常道德を一斉に動揺せしめるであらう等の危険を説き、これが為に憂慮して居ります。102-103頁 / 99-100頁

嚴復は、この時「起つて反対した」わけではない。当事者のひとりである周作人がそういう誤記をする。後の研究者が間違ふのもしかたがない。林紘が蔡元培にあてた手紙について、「憂慮して居ります[為之担憂]」と周作人は表現しているではないか。注目してよい。ここには詰問も批判も、ない。前述したように、これが普通の感覚だと私は思うからだ。だが、その直前にある「そこで非常に恐れて出でて反対したわけであります」と結びつけられると、林紘は蔡元培に手紙

を書いて「反対した」ことにされてしまう。林紵は蔡元培に質問しただけ、と私がいくら説明しても、反対したという大合唱にかき消されるのが現状なのだ。

譚正璧のばあい

譚正璧『中国文学進化史』(上海・光明書局1929.9.20)である。

「12 新時代の文学」において当時の状況説明がなされている。

当時の状況は次のようだった。文学革命運動がはじまったのち、応じた者は当然多く、反対する者もことのほか猛烈だった。北京大学内部の反対分子は、『国故』『国民』を刊行し、いずれも古文学を擁護するものだ。校外の反対党は、安福(倶楽)部の武人政客を利用しこの新運動を圧制しようと考えた。(民国)8(1919)年の2、3月に外では謠言がまきおこり、あるものは教育部が出てきて干渉するといひ、あるものは陳、胡、錢などがすでに北京から放逐されたといった。この種の謠言は大半が不正確なものではあったが、しかし反対党の心理上の願望を代表させることができたのだ。そのころ、古文学家の林紵は、上海の『新申報』においてたくさんの小説を書いて北京大学の人間を痛罵した。彼らは安福倶楽部の国会に運動して教育総長と北京大学校長の蔡元培を弾劾しようと考えたが、のちにこれも失敗してしまった。林紵はさらに蔡元培に手紙を書き、新文学運動を攻撃したが、その大意は次の2点を出るものではなかった。1、孔孟の道を転覆し、倫理綱常を除き取る；2、古書をことごとく廃し、土語を用いて文章を書く。これは蔡元培によってひとつひとつ反駁された。338-339頁

林紵の短篇小説、軍人を利用、教育部の干渉、陳独秀、胡適、錢玄同などの放逐、林紵の国会への運動などなどが説明されている。この種の文章の特徴は、ひとくちにいえば事実と風説を混在させていることだ。「この種の謠言は大半が不正確なもの」と書きながら、わざと事実と謠言を区別しない。その結果は、ご賢察のとおりウワサが事実になってしまう。日本語訳がある。譚正璧著、立仙憲一郎訳『支那文学史』下巻(人文閣1931.7.25。支那文化叢書。256-257頁)。譚正璧『新

編中国文学史』(上海・光明書局1935.8 / 1936.2再版。429-430頁)も同様だ。

陳子展のばあい

陳子展『中国近代文学之變遷』(上海・中華書局1929.4 / 1931.8再版上海書店影印1982.12 / 上海古籍出版社2000.12(最近三十年中国文学史と合冊))*¹⁰である。

「9 10年以來の文学革命運動」から引用する。

陳独秀、胡適之、周作人らはみな北京大学の教授であり、傅斯年、羅家倫、俞平伯らは北京大学の学生だった。ゆえに国内学術界と言論界は北京大学に対して注目をし、彼らは北京大学を「文学革命軍」の大本営だとほとんど見なそうとしたのである。一時、北京大学に関する謠言がまきおこった。あるものは教育部が干渉するはずだといい、あるものは陳胡らの諸教授は北京から放逐されたといった。あるものは蔡元培校長は持ちこたえることができないといった。その実、この時一般の頑固守旧の反対党は、当時の安福系武人政客を利用してこの種の新運動を抑圧し、彼らに「過激党」という罪名を加えようと思わなかったわけでもない。古文家の林紓は、この時いつのまにかその反対党の首領になっていた。彼は、北京大学の新派を痛罵するいくつかの小説、たとえば「妖夢」「荊生」の類を書き上海の『新申報』に掲載した。彼はさらに北京大学校長の蔡元培に1通の長い手紙を送って次のように述べた。(後略)186-187頁

胡適と周作人は北京大学の教授だ。しかし、陳独秀は文科学長であっても教授ではない。北京大学では、校長と同じく職員あつかいなのだ。あまり知られていない事実らしい。陳独秀を教授とするこの誤解は昔からのものだったとわかる。当時の新聞でも区別せずに報道しているくらいだ。その後も広く長く伝わることになる。

譚正璧のところで説明した。陳子展も事実と風説を混在させている。

事実の部類に属するのは、五四事件の直前に陳独秀が文科学長を罷免されたことがひとつ。罷免といっても表面上は文科と理科を統合して組織から学長制を廃

止した。それにともなって陳は失職したことになる。ただし、これはあくまでも表面上の理由であり、これには背景があるのは別稿でもすでに指摘しておいた。新旧思想の衝突が原因ではないのだ。陳独秀の私生活にかかわるとだけいっておく。

事実として認定できるのは、林紓が短篇小説を書いて上海の『新申報』に掲載したこと、蔡元培あての手紙を公表したこと、および陳独秀の罷免、この3件だけだ。それ以外の、教育部の干渉、胡適の放逐、蔡元培が持ちこたえることができない、安福系の武人政客を利用しての抑圧などは、陳子展も謠言だといっている。風説風聞にすぎなかった。

該書が刊行された1929年といえば、林紓問題が発生した1919年から数えて10年が経過している。ここに説明される当時の状況が、虚実をあいまいにしたまま現在にいたるまでくり返されていることが理解できる。

さらにさかのぼれば、趙景深『中国文学小史』（上海・光華書局1928.1 / 1930.6八版。207頁）が「(33) 最近十年的中国文学」において、林紓が蔡元培に手紙を書いて攻撃したこと、短篇小説を公表して北京大学教授を当てこすったと述べる。それだけ。

あの曾孟樸は、林紓に会ったことがあるから同時代人だといえることができる。胡適との往復書簡を自分の雑誌に掲載している。

曾孟樸のばあい

病夫（曾孟樸）「復胡適的信」（「読者論壇」『真美善』第1巻第12号1928.4.16）である。

ただし、本稿では吉川幸次郎の箇所ですでに説明した。ひとつだけつけ加える。胡適にあてた書簡において、五四時期の林紓に言及している。「旧文学のなかでは、最初に命をかけて抵抗した者は畏廬（林紓）氏でありました〔在旧文学裏，第一個抵死对抗者是畏廬先生〕」。これに対比させて次のようにいう。新文学のなかでは、最初に決死隊の急先鋒になったのが胡適である。定型文として「最初に立ち上がったのは林紓で」という表現があると紹介しておいた。さかのぼるとこの曾孟樸書簡に行き当たった。

曾孟樸自身はフランス語ができたから、それをもとにして林紘を見ている。外国語を理解しないで翻訳ができるものか、という考えがあるから林紘に対する評価が厳しくなるのは当然だ。

胡適が自分の文集に収録して以来、曾孟樸の考えは広く伝えられた。外国語を理解せず翻訳することの不自然さと作品の選択権すら口述翻訳者に握られていたという説明である。林紘の独自性は否定される。

おかしな話だ。外国語ができなかったからこそあれほど大量の翻訳をすることが可能だった。フランス以外の世界の名作を多数翻訳しているにもかかわらず、まだ選択がどうのこうのと批判されるのか。ハガード、ドイルを2流3流の作品だというのが、それは曾孟樸を含めた当時の一部の人の意見でしかない。読者が必要としていたという視点が、なぜ出てこないのか。

ところが、べつのところでは、曾孟樸の林紘に対する評価はそれほど厳しくはなっていない。基本のところでは変化はないとはいえる。ただし、説明が少し異なると印象も違ってくる。これは、胡適あての書簡に比較しての話だが、すこし不思議だ。

曾孟樸に直接面会した人物がいて、彼の発言を記録している。

張若谷「初次見東亜病夫」(『張若谷集：異国情調』世界書局1929初出未見/上海・漢語大詞典出版社1996.4)である。

曾孟樸がユゴー戯曲集の全訳を志していることについて、張若谷が質問した。孟樸は、身体衰弱しており、短期間には完成するのはむづかしい、と答える。それにつらなって林紘の話になるのだ。すこし長いが、珍しいと考えるので引用する。

もしも、私(曾孟樸)に林琴南氏のような卓絶した天才と努力があるとしたならば、あるいはいくらかまだ希望があるかもしれません。林氏は、毎日朝から学校で授業を行ない、1時間もたないまえに筆をふるって23千語の翻訳を迅速にこなすことができ、平均して毎日45千語の翻訳するのが普通のことですが、しかし、残念ながら彼は白話文で書こうとはしませんでした。彼は頑固に中国古文家の頭にとりつかれ、世界文学のなかの小説の価値

と地位を理解せず、さらに白話文がわれわれの文学の古い領域を拡大できることを知らず、結果として古文式の大翻訳家になっただけなのです。しかも、原文を翻訳するといっても、人の話をうのみにするだけで、作品の優劣を選別することができないのですから、彼がばかをみたのもまさにここでした。ただし、私ははじめから終わりまで彼の卓越した文学の天才と忠実で率直な人格品性に感服しています。彼は毎年の著作で得る原稿料は、平均して1万元以上ありますが、人の緊急を救助し、貧しい子弟たちの学費を補助するのに使い果たしています。晩年は突然新文化運動からの重大な攻撃を受けてしまい、唯一の頼りとしていた北大教員という生活の手段も打ちこわされて、まるでるか空のかなたから深い淵の底に引きずり込まれたようで、逝去するまでそのまま再びはい上がることはなかった。私たちは彼のためにいくばくか同情しなければならず、そうするのが正しいのです。なぜなら、彼は大量の西洋文学作品を翻訳し中国にもたらした功績は、結局のところ一律に抹殺することはできないからです。156-157頁

以上が、曾孟樸の見る林紘像だ。

林紘には才能があるばかりか努力もしている。訳筆の早さに感嘆する。ここまでは、林紘にたいして正の評価が下されていると考える。ただし、林紘の文言を使用した点が曾孟樸には気に入らなかった。前出の胡適あてた曾孟樸書簡には、林紘へ提案をふたつ行なったことが書かれている。ひとつは、白話を使うこと、ふたつ目は翻訳の基準をつくり各時代、各国、各派の重要名作を選ぶこと。曾孟樸は、ハガード、コナン・ドイルの作品は翻訳する価値も意味もないとかたくなに信じている。それに照らせば、林訳に対する評価は下がる。

興味深いのは、新文学運動時期における林紘についての把握だ。林紘は、文学革命派から突然攻撃されてしまった。曾孟樸は、そう説明している。ここは、胡適に書き送った文面と異なる。胡適には、林紘のほうから攻撃してきたように表現した。私が見るところ、林紘の方が文学革命派から攻撃を受けたのだ。

林紘は北京大学教員をやめさせられて路頭に迷ったように、曾孟樸は考えている（范烟橋も同じようなことを書いていた）。林紘が北京大学をやめたのは1913年で

あって1919年よりも前だ。ゆえに、ここの部分は曾孟樸の記憶違いとなる。当時、北京大学を罷免されたのは陳独秀だけだ。曾孟樸はそれと混同したものか。同時代を生きただけであっても、記憶にズレが生じるのはしかたがない。

鄭振鐸のばあい

文学史を、完全に中立の立場から記述することは可能だろうか。そうでなくてはならない、というわけではない。それにしても、各種文学史が林紵について説明するのを見ても上に見てきてわかるのは、説明する視点がひとつだけなのだ。それらとは違った記述があってもいいと思うからわざと「中立の立場」と書いてみた。

中国現代文学史は、いうまでもなくその著者が文学革命についての見方を持ったうえで説明になるはずだ。ゆえに反対か賛成か、いずれかの態度が説明に露出する。そうはいても、五四時代の林紵を擁護する文学史は、今にいたるまで書かれてはいないように思う（論文は除く）。すべての文学史に目を通したわけではないから断言はしない。だが、少なくとも上に紹介した文学史は、すべてが文学革命派の側に立って説明している。ゆえに、例外なく林紵を批判していることはご覧のとおりだ。

時間の順番にしたがわず鄭振鐸の文章を後まわしにしたのは、彼こそが文学革命派の立場を鮮明にし、同時に林紵のことを敵だたと公的に認めているからである。まさに当事者のひとりなのだ。

何度でもくりかえす。鄭振鐸は、林紵の死後において、林のことを敵対者だたと公言している（後述）。事件の当事者でしかも林紵を敵だと考えていた彼が書いた文章は、当然、文学革命側の一方に偏向しているだろう。事実、前出の朱徳発は、鄭振鐸の「導言」を引用したあとつぎのように書いている。「これは、新文学陣営が敵対する勢力とのくりかえしの闘争の中から、文学革命の進行過程で鄭振鐸が見つけた規律性のある総括なのである」（143頁）。文学革命派の立場から見た総括であることを明らかにしている。

そういう鄭振鐸の文章だ。上で見てきたいくつかの文学史の記述とはどう関係しているのか。ここで検討する。

鄭振鐸「導言」（『中国新文学大系』第2集文学論争集 上海良友図書印刷公司1935.10.15

/ 上海文藝出版社影印2003.7)である。

『中国新文学大系』の書名からもわかるように、この叢書そのものが新文学派の文章を主として集めたものだ。収録対象は、1917年から1927年まで。当時も文学の有力地であった上海は無視する。そういう編集方針だった。「総序」は蔡元培が書いており、第1集「建設理論集」は胡適が編集している。第2集「文学論争集」の編集担当者が鄭振鐸だ。ついでにいえば、第4集「小説二集」は魯迅、第6集「散文一集」は周作人の編集になっている。まさに林紵を守旧派の代表に指名した人々が編集著作する叢書なのである。それを見ただけで文学史における林紵の居場所はおのずから決まっているとわかる。あくまでも文学革命に反対した人物、つまり新文学運動の敵対者にほかならない。

同じく大系の史料索引巻で、阿英は、林紵の小伝をかかげて「年長者のなかで新文学に反対して最も激烈であった者だ」と一言で切り捨てた(阿英「作家小伝」『中国新文学大系』第10集史料索引 上海良友図書印刷公司1936.2.15初出未見/上海文藝出版社影印2003.7. 213頁)。ところが、林紵の翻訳は、清末において作家と読者に広い影響をあたえた。これが阿英『晚清小説史』(1937)の説明である。つまり、阿英についていうと、1936年には五四時代の林紵を批判し、翌1937年に清末の林紵を一定程度評価するという変化を見せたことになる。周作人の文章とあわせて、後の記述の雛形が提出されたということもできよう。

鄭振鐸は、文学革命の提唱とその反応を記述して例の有名な捏造論文に言及する。旧派文人たちが文学革命派の主張を無視するため、錢玄同が偽名王敬軒を使用して投書するかたちにした。その内容は、旧派文人たちの見解をひとつにまとめたと説明している。捏造という行為について非難する気持ちは皆無である。やった本人ではないからそれはそうだ。だが、関係者として何か恥じるところはないのかとさがしても、それが見当たらない。当然やらなくてはならない種類のものだと考えている。なにしろ「文学革命」なのだから。この態度が現在まで継承されていることはすでにご理解いただいたものと思う。錢が挑発して劉半農が答える。「なれあいの手紙」だから、事前の打ち合わせ通り旧派文人を支持する王敬軒は論破される決まりだ。『新青年』第4巻第3号(1918.3.15)に掲載された。鄭振鐸は次のように説明する。

古文家の林紓が反対の第1弾を打ちはなした。彼は「論古文白話之相消長」1篇を書き、その重要な主張はこうだ。「古文というものは、白話の根底であり、古文がなければどうして白話があるだろうか！」「(中略)吾輩はすでに年老い、その非を正すことはできない。はるか百年もすれば、おのずから理解できる人もでてこよう。諸君、待たれよ」。/ 実のところ「百年」を待つこともなく、林紓自身が待ちきれずに自ら出馬して「その非を正」したのである。彼は、蔡元培に手紙を書き次のように述べた。(後略)6頁

読者は、これとそっくりな文章があることに気づかれたはずだ。王瑤の記述は、鄭のこの部分に依拠している。

鄭振鐸は、時間の流れを上のように把握しているが、事実は異なる。

捏造論文の発表は、1918年3月だ。林紓は、最初銭劉らの文章を無視した。論文「論古文白話之相消長」が『文藝叢報』第1期に掲載されたのは、捏造論文から1年以上も経過した1919年4月のことになる。また、林紓の蔡元培にあてた手紙はそれより少し前の1919年3月に公表された。これを見てわかるように、「百年」を待つ順序が逆転しているといわなければならない。事実関係に矛盾がある。この部分もそのままに王瑤は引用したことはさきに述べた。

鄭振鐸はいちいち事実を確認してこの文章を書いてはいない。ならべる事柄が時間の流れに沿っていないから因果関係が成立しない。鄭は当事者だから、自分の記憶に自信があるのだろう。だから、この部分は鄭の把握のしかたによれば、と注釈が必要になる。ところが、王瑤は、自分で検討もせず鄭振鐸の文章を信じ込んだ。

鄭振鐸の文章をつづける。

しかし彼(林紓)の道を守り文を「正す」という情熱は、別の方面に出口を見つけた。彼は新聞紙上につづけて2篇の小説を書いた。ひとつは「荊生」で、もうひとつは「妖夢」だが、ふたつとも意味は同じだった。侠客を望み、鬼神に託すというだけ。しかも彼はある「外力」が、この新しい運

動を制裁し屈服させることを望んでおり2篇ともに一致した精神なのである。罵りだけではならず、つづいて呪いになった！/同時に、北京大学でも別の守旧派の学生たちが月刊『国故』を出版し、古典文学擁護の運動を行なった。/当時は安福系が政権を握っていた。謠言は異常に多かったのである。しばしば、政治勢力が北京大学に干渉してくるとい話をまき散らす人がいたし、時に陳胡が北京を放逐されるという説があった。たぶんその謠言は実現する可能性があっただろう。「五四運動」が発生しなかったならば、だが。7頁

「外力」とだけ書いて具体的な名前はあげていない。それにしても「たぶんその謠言は実現する可能性があっただろう」とは何ということだろうか。過去を説明して可能性を盛り込むのだ。普通は、実現しなかったからウワサにすぎなかった、という説明になるのではないか。わざわざ可能性を書いたのは、鄭振鐸自身がそうあってほしいという願望を持っていたからだ。強力な敵の出現を渴望していた。客観的な記述をする考えは彼にはなかった。それ以外は、ほかの文学史とにたりよったり。というよりも、鄭振鐸の文章が以後の文学史に影響をあたえた。胡適からはじまり鄭に受け継がれた林紵評価が、のちに定着したということになる。

鄭振鐸「林琴南先生」(『小説月報』第15巻第11号1924.11.10)がある。

林紵の死去をきっかけに書かれた。主として林の創作と翻訳について述べる。林紵の翻訳を紹介するばかり、基本文献のひとつとなっている。だからこそ、林紵がシェイクスピアとイプセンの戯曲を小説体で翻訳したという彼の間違った指摘が、2007年にいたるまで訂正されることがなかった。林紵について論文を書いた研究者は、鄭振鐸の誤りを踏襲したのだ。それくらいに権威のある論文であるということができる。書き出しはこうだ。

林琴南氏は、翻訳家および古文家として中国の最近30、40年の文壇において著名である。欧州大戦がはじめ停止したとき、中国の知識階級は、ある新しい覚醒を得て中国伝統の道徳および文学に対して総攻撃をしかけた。林琴南はその時北京にあって古い礼教および文学のために力を尽して弁護し、

この新しい運動にまったく不満であった。そこで多くの学者たちは、彼を古い伝統の側の代表と見なし、彼の道德見解、彼の古文、および彼の翻訳について、多くの誤りがあることを指摘し、彼の保守、道德、および文学の見解を徹底的に打倒しようと考えた。この時以後の林琴南は、一般の若者から見れば彼の中国文壇における地位は完全に揺らいだようだった。1頁

よくもここまであからさまに書いたものだ、と私は思う。「中国の知識階級」および「多くの学者たち」とは、ほかならぬ文学革命派を指している。つまり、鄭振鐸たちは、林紘を「古い伝統の側の代表と見なし」と告白しているのだ。主導権は鄭らにあった、という把握である。林紘の死後は敵視する必要がなくよいところも認識できる、などと鄭はのべる。公平を装ってはいるが、その実、林紘の守旧派代表としての位置は変更しようとはしない。変更する意志が皆無である。林紘から見れば、鄭論文はきわめて悪質なものにほかならない。

ところが、だ。これについては、鄭振鐸が林紘を公平に評価した、と一般に研究者には受け止められている。書いてあることをそのまま信じるのか、そこまで無防備でいいのか、と私は心配するほどだ。私の心配が無用であるのはいうまでもない。そう信じたいという欲求があるからこそ信じる。ことほどさように文学革命派の思考は一般化している。

林紘に負としての位置と役割を押しつけて動かさないというなら、鄭振鐸だけでなく文学革命派に属するほかの人々も同様だった。

林紘の死後につづけて公表された文学革命派3人の文章がある。『語絲』に掲載された。

文学革命派3人による林紘批判

周作人の文章に対して仲間内から批判がなされ、結果として作人が自説を撤回するという経過をたどる。

きっかけになったのは周作人（開明）「林琴南与羅振玉」（『語絲』第3期1924.12.1）である。林の「荊生」は内容が卑劣ではあるが、外国文学を翻訳したことには功績があると評価した。

「文学革命」以後、人々はみな林氏を罵る権利をもつことになったが、しかし彼のように力をつくして外国文学を紹介し、世界の名著を何冊も翻訳した人がいるだろうか。

「人々はみな林氏を罵る権利をもつことになった[人人都有了罵林先生的權利]」。この表現の露骨さに私は一瞬目を見張り、そののち顔をそむけそうになる。だが、大多数の研究者にとっては、これが当然のあつかいになるのだ。周作人は、「罵る権利」だとはっきり書いている。それだけに、五四以後における林紓のおかれた位置を、私たちにこの上もなく明確に認識させてくれる。3大罪状をあげる必要もない。文学革命に反対した人物というだけで了解が得られることになる。「罵る権利をもつ」のだから林紓を罵ってどこが悪いか。聞こえてきそうなセリフだ。だからこそ林紓に関する定説である。林紓の人権などは最初から問題にもならない。現在でもそうだ。

しかし、部分的にはあるが林紓の功績をあえて表明した作人の文章は、仲間の神経を逆なでした。

劉半農（復）「巴黎通信」（『語絲』第20期1925.3.30）は、パリから周作人にあてた手紙だ。その一部で林紓に触れる。

あなた（周作人）が林琴南を批判するのは正しいのです。あなたによれば、以前先輩にあまりにも逆らったことを私たちに後悔させようというのですね。私たち後輩が先輩からちょっとばかり叱られるのはもとより珍しいことではありません。彼（林紓）の小言が正しいかどうかにかかわらずです。ただ、彼がもし道を守ることにについて不平をいうだけにとどめていれば、それだけのことだったのです。彼は荊生の力を借りようとしたから、これはどうしても許すことはできません。

驚くとはこのことだ。劉は、林紓が荊生（すなわち徐樹錚。ただし、この時点で指摘したわけではない）に援助を要請したと信じている。林紓が短篇小説を書いて荊

生を登場させたのが、その証拠になるらしい。劉も小説という虚構と現実を混同しているといわなければならない。しかも、彼自身が錢玄同の捏造論文に反論するという「なれあいの劇」を演じ、林紓を挑発し批判したことはまったく忘れていたかのようだから、私はあきれのた。劉は自分のことは棚にあげている。彼が林紓に対して行なったことに絶対的な自信と確信がなければ、このようなことを書くことはできないだろう。その意味で筋金入りの文学革命派ということができる。

筋金入りといえ、劉の共演者だった錢玄同もその部類に属する。その程度は劉半農をはるかに上まわる。

錢玄同「写在半農給啓明的信底後面」(同上)は、劉の来信につけくわえる形をとる。長文の中から林紓関係部分のみをいくつか紹介したい。

すでに死んだ「清室拳人」林蠡叟(なぜここでこのように彼を呼ぶのか。なぜならあの拳人は荊生に頼んで金心異を殴ろうとしたあの文章を蠡叟叢談に掲載しており、わたくし金心異は、他の人がこの典故を知らないだろうと思うから、このように彼を呼ぶのだ)についての半農のことばに、私は抗議を提出したい。もともと啓明のあの「林琴南与羅振玉」(第3期に見える)は、私もいささか不賛成である。私の意見はこうだ。今のいわゆる「遺老」は、それがかつて「若くして偽朝に仕えた」かいなかは問わず、一律に「亡国の卑しい人間であって、卑しさ限りなし」のやつなのだ。(後略)

拳人であった林紓を蠡叟と呼ぶことについて、錢玄同はしつこく説明している。林紓の短篇小説に登場する金心異が錢自身を指していたことを逆手にとっているのだ。啓明は周作人のこと。故人であろうと錢玄同は林紓批判の手をゆるめるつもりはまったくない。仲間の劉半農がとった態度がまだ生ぬるいと批判する。次の部分を見てほしい。劉半農が、後輩が先輩から教え諭されるのは珍しいことではない、と書いた箇所にかみつく。

このことばには、私は賛成しないばかりか反対したい。反対する点はふた

つある。 / 1、なぜ林紵を先輩と認めなくてはならないのか。もしも年齢がいくつか上の人を先輩と呼ぶのなら、では年齢が上の方はあまりにも多いではないか。それをすべて先輩と呼ばなくてはならないのか。この点については論じないことにしよう。私は林紵を先輩だとは認めたくはないが、半農はあるいは外国文学が好きのために、多くの外国小説を訳した林紵（彼はABCDを知らなかったが翻訳した）について、この一点から彼を先輩と呼びたいということもあるかもしれないからだ。そうであれば、当然に理由があることになり、ゆえに私はそれについて論じなくてもいい。 / 2、なぜ後輩は先輩に逆らってはならず、先輩は後輩を叱ってもいいのか。何の理由もなく人に逆らうのは、どんな人に対してもやってはならないし、先輩だけではない。しかし、もし先輩が先に後輩に逆らったのであれば、後輩は逆らうことで先輩に返礼するし、これこそが正当な対応なのだ。先輩の話が合理的ならば、当然彼に従わなくてはならないし、不合理ならば彼を正し、反対しなければならぬ、と私は考える。（後略）

銭玄同はやはり劉半農の共演者である。彼らが捏造論文によって反対派の代表者に林紵を指名し、引きずり出したことをまったく棚にあげて発言している。銭の文章には、林紵の方から批判をしかけてきたように書いていることからそれがわかる。

なさないのは周作人だ。劉半農と銭玄同の反論があると、即座に自説を修正した。

周作人（開明）「再説林琴南」（同上）である。林紵の功績は外国文学を紹介したところだけだという。

彼の功績はここにとどまるだけで、よいところなどとさらにいうのであれば、私は絶対に賛成することはできない。

こういう文章を見ると、いいわけをする必要が生じるほどに文学革命派の林紵観は固定している、と私は感じる。反林紵で凝り固まっている。鄭振鐸が公平を

装って、結局は林紵を批判したのは理由のないことではなかった。

つぎは、周作人が書いた文章の最後部分だ。

世間の人々の林琴南に対する称揚はあまりにも過分だと私は考える。がまんできないからさらにいくつかを半農と玄同の文章のあとにつけ加える。林琴南は確かにわれわれよりも数十歳年上であるが、しかし年寄りだからといってわれわれの尊敬を強要することはできない。もし尊敬できるところが別がないならば、私は彼が先輩だからといって特別に遠慮することはしない。

この最後の語句は、まさにとってつけたような、というのがふさわしい。

ここまでさかのぼると、あとは胡適に行きつくしかないだろう。なにしろ執筆の日付は1922年3月3日だ。五四事件の約3年後だが、まだ余熱が残っているような感じさえする。

胡適のばあい 当事者の文学史

胡適「五十年来中国之文学」（『最近之五十年』上海・申報社1923.2初版／上海書店影印1987.3（出版説明に1922年2月初版本とあるが1923年の誤り）また、『晚清五十年来之中国』と改題影印した香港・龍門書店（＜1922年上海初版とする＞1968.9再版）本がある）である。

「さて私たちはこの5、6年の文学革命運動について説明しなければならない」（18頁）とはじめる。関係部分のみを引用する。

しかし、（白話の文章に）応じた者は多かったが、反対する者はさらに猛烈だった。（北京）大学内部の反対分子も『国故』『国民』を刊行し、いずれも古文学を擁護するものだ。校外の反対党は、安福（倶楽）部の武人政客を利用してこの新運動を制圧しようと考えた。（民国）8（1919）年の2、3月に外では謠言がまきおこり、あるものは教育部が出てきて干渉するといひ、あるものは陳、胡、銭などがすでに北京から放逐されたといった。この種の謠言は大半が不正確なものではあったが、しかし反対党の心理上の願望を代表

させることができたのだ。そのころ、古文家の林紆は、『新申報』においてたくさんの小説を書いて北京大学の人間を痛罵した。21頁

どこかで見た文章だ。譚正璧である。彼は、胡適のままを引用してすませた。譚の文章には引用符号がついていないから盗用だと指摘されたらどう弁明するつもりだろう。王瑤にもそのようなことがあった。事実は誰が書いても同じになる、というか。

胡適は、上につづけて林紆の小説のモデルを詮索する。これはすでに紹介したから省略したい。

そのころ、古文家が待ち望んだのは誰かがでてきて荊生になることだった。しかし、荊生は結局のところ得ることはできなかった。彼らは、さらに安福倶楽部の国会に運動して教育総長と北京大学校長を弾劾しようと考えたが、のちにこれも失敗してしまった。 / 8年3月、林紆は蔡元培に手紙を書き、新文学運動を攻撃し、蔡元培も長い手紙で答えた。この2書は、そのころの「新旧の争い」を代表させることができるから、私たちはいくつかを引用する。21頁

譚正璧は、この部分も利用した。胡適自身が、事実と風説風聞を意識的に混在させている。こういうばあいには、有意という。気がついてみると混在していた、ということではない。意図的にそうしている。

胡が巧妙なのは、それらのウワサはすべて「反対党の心理上の願望 [反対党心理上の願望] 」だと説明したところだ。実現しなかったのだからウワサ風説風聞である。それにもかかわらず、ウワサそのものの存在が守旧派と関係づけられる。これこそ鮮やかな腕前と表現するのがふさわしい。ウワサの存在は文学革命派にとっては脅威であるという印象をあたえつつ、それを逆に利用してみずからの存在を誇示しているからだ。まさに陳独秀が『毎週評論』誌上において同時進行で展開したやり方にほかならない。

胡適が披露した敵側の心理を読み込む手法は、このうえもなく便利である。敵

対者が願望した、と書くだけですむ。事実であることを証明する必要もない。資料を提出することなく決めつけることができる。後に多くの研究者がそれを援用しているのは、すでに見てきた通りだ。

説明しておかなくてはならないのは、胡適の林訳に対する評価だ。胡適は、林訳を正確に評価していると指摘する研究者もいる。たとえば、最近では郭延礼が「胡適与中国近代文学研究」(『中国文学的変革：由古典走向現代』済南・齊魯書社2007. 7. 101頁)においてそう述べる。

郭が引用している胡適の文章は、次の部分だ。

林が翻訳した小説は往々にして彼自身の特色があった。彼は原書のユーモラス[詼諧]な風趣についてしばしば深く理解していたから、彼はその種の箇所について更に力を用いそれだけ精彩を放った。彼の大きな欠陥は原文を読むことができなかつたところにある。しかし、彼はつまりはいくらか文学の天才をもつ人だったから、もしもよい助手[原文も助手]がいたならば彼は原書の文学趣味を理解し、原文をぞんざいに読む現在の多くの人よりも往々にしてとてもすばらしかった。6頁

この胡適の説明を引いた郭延礼は、「これらの言説は、「五四」以後最初に林訳小説について正確に評価した文章であるばかりか、後の研究者にも啓示をあたえた。少なくない評論家が称賛する林訳ディケンズ小説のなかのユーモア[幽默]の情緒は、胡適が最初に指摘したものである」(101頁)と解説する。

たしかにこの部分だけを見ると、胡適は林訳を称賛している。そればかりか、彼の林訳賛美はさらにつづく。すなわち、「現在、多くの人は原書について完全に理解することができない。彼らは白話を運用する能力が林紘の古文を運用する能力にはるかに及ばず、彼らも林訳を批判するのは、まったく無実の罪を着せるものだといわざるをえない[那就未免太冤枉他了]」と書いている。

ほかの翻訳者をたしなめ批判して、いかにも林訳をほめているように見える。だが、胡適は、林紘が古文を用いて小説を翻訳するという試みは大きな成果をあげたというその同じ舌先で最終的にはつぎのように裁定する。「しかし、この成

果は失敗に終わったのである！」(7頁)と。よく見てほしい。感嘆符をつけて失敗だと断言しているではないか。なぜ失敗か。古文は結局のところすでに死んだ文字だからだ(但古文究竟是已死的文字)。

胡適のことばにだまされてはならない。林訳を評価しているように見せかけて、実のところそれらが失敗であったと結論し、その原因を自らの主張に結びつけている。胡適は、古文否定の持論を強調したいがために林訳を持ち上げたのである。鄭振鐸は、この胡適の方法をまねたらしい。

胡適の論文は全体の流れを見なければならない。彼の文章を部分的にすくいとり、胡適が林訳を評価しているなどと説明すべきではないのだ。

それにしても、胡適にはほとんどあきれれる。無実の罪を着せる、などと胡適はよくも書いたものだ。胡適自身が、林紓に無実の罪を着せたその張本人のひとりにほかならないからである。

傅斯年のばあい

傅斯年「新潮之回顧与前瞻」(『新潮』第2巻第1号1919.10.30)である。

北京大学学生の傅斯年が、雑誌『新潮』の創刊(1919.1.1)時を振り返って書いた文章だ。『新潮』が巻き起こした大波について説明している。

「文通先生」が、北大に1度ならず難癖をつけ慣れており、ある日2、3冊の『新潮』と幾冊かの『新青年』を最高地位の人に送った。それに「聖經を大いに乱し[非聖乱経]」、「恐るべき厄災[洪水猛獣]」、「邪説横行」などの評語を多く加え、その最高地位の人に北大およびわれわれを処罰するようにそそのかした。その最高地位の人は、教育総長傅沅叔に手渡して処理を検討させた。つづいて、いわゆる新参議院の張某が、蔡校長を調べて処罰し、傅総長を弾劾する議案を提出しようとした。さらにつづいて、林四娘が彼女の偉丈夫に運動した。老人たちは当局に騒ぎ立て、当局は蔡先生にむかって騒ぎ立てる。そうして謠言が大いに起こった。201頁

当事者がその時のことを説明しているから一見すると生々しい。事実がそうで

あったように受け取る人もいるだろう。

ただし、説明不足だ。彼にはなじみの名前だから読者にむかっては詳しく書く気にならないらしい。

「文通先生」とは、前に触れた馬相伯（建忠の兄）をいう。彼を名指しているのが珍しいといえる。ほかの報道資料では、名前をださずにあいまいにしているからである。たとえば、「国史館内の老人が進言した」と書いたのは静観「北京大学における新旧の隠れた流れ [北京大学新旧之暗潮]」（『申報』1919.3.6）だ。しかも、その事実はない、と否定している。あるいは、張元奇だという新聞報道もある（『申報』1919.4.1付）。時間的な順序からすれば、新聞でウワサが流れており、傅斯年はそれに自分の知っている実名を当てはめたことになる。

馬相伯をなぜ「文通先生」とよぶかといえば、『馬氏文通』の著者のひとりだからだ。該書は、馬兄弟の著作であり、刊行の際には弟の名前建忠だけを出したという*11。

傅斯年が馬相伯を指して「文通先生」と書いている。『馬氏文通』が馬兄弟の共著であると傅斯年たちは知っていたことになる。

その馬相伯が北京大学に難癖をつけ慣れているというのは、どういう意味か。傅斯年の書き方を見れば、よい印象は受けない。直接関係があるかどうかかわからないが、次のような解説もある。

前出の蕭超然等編著『北京大學校史（1898-1949）（増訂本）』（40頁）による。

1912年10月、嚴復は北京大學の校長を辞職した。その後任が章士釗だったが、事情があって着任できない。そこで教育部は馬良（相伯）を任命して校務を代行させた。1912年冬の休暇になろうというのに大学の経費が届かず、馬良はベルギー銀行から借金した。大学の不動産をその担保にしたから学生たちが聞きつけて反対運動をおこした、という。

馬相伯が章士釗の代理になったというのは、該書「附表」にも見える。章士釗の在任期間を1912年10月から12月までとしている。それに注をほどこして、馬良が校長を代理したとある（484頁）。

馬については「難癖をつけ慣れており」などと傅斯年は軽蔑を露わにして表現した。だから、蕭超然らが説明している馬相伯の行動が学生の反対運動を引き起

こしたことなども関連するのかと考える。だが、銀行うんぬんは1912年の出来事であり、『新潮』『新青年』については1919年のことだ。すでに7年の時間差がある。あるいは別の事情があったのかもしれない。それについての詳しい説明はない。

しかし、と私は思う。馬相伯が銀行から借金したことが事実だとしても、資金が届かなければ大学の責任者がやるべき当然の行為であろう。非難されるものではない。金策に走り回らなければならなかった苦境を説明してもいい箇所だ。蕭超然の該校史は、あとでも触れるが林紵、張厚載らを口汚く罵っている。そういう種類の書籍だと知る必要があるだろう。書いてあるとおりを信用してよいかどうか、私は疑問符をつけておく。

たしかに馬相伯は北京大学校長だったことがある（注11の張若谷『馬相伯先生年譜』では1913年とする）。傅斯年の記述を見ると、1919年当時に馬が北京に居住しているように思うではないか。だが、それより以前の1917年に彼は上海にもどった。1919年は八十歳の誕生を徐園で祝ってもらっている。馬相伯を名指しした傅斯年の記述は信頼性を失う。

「最高地位の人」は、大総統徐世昌を指す。傅斯年が名前を出すことを嫌ったのは、敵視し反対していることの意味表示である。

「いわゆる新参議院の張某」とは張元奇のこと。処理を検討させたものの、弾劾案を提出しようとしたものの、これらは当時の新聞が報道したウワサである。傅は、あたかも事実であるかのように説明した。

当時の新聞『申報』（1919.4.1）に「傅教育弾劾説之由来」が掲載されている。要約すると以下ようになる。

北京大学の教員学生らが発行している出版物に、新思潮からの主張が掲載されている。旧思想の者がそれに反対している。先日、張元奇が教育部におもむきこれらの出版物を教育総長が取り締まるようにいった。その時、『新青年』『新潮』などの雑誌を携えて証拠とした。制裁をしなければ新国会に教育総長弾劾案を提出するという。さらに校長蔡元培および文科学長陳独秀を糾弾した。大学では陳の辞職という説もあったが、全国最高学府は外部の干渉は受けてはならず、ゆえに陳の辞職もない。また、新国会で弾劾案を提出するには多数の議員の賛成が必

要だが、それはむつかしい。事實は、張元奇が傅総長に向けた警告は恫喝にすぎなかった。（要約終り）

よく見てほしい。こちらによると『新青年』『新潮』を持ち込んだのは張元奇である。傅斯年が書いている「文通先生」すなわち馬相伯ではないのだ。新聞報道と傅斯年の記述が異なっていることだけをいっておく。

林四娘は女將軍であるが、ここでは言うまでもなく林紓を意味している。彼の短篇小説「荊生」に登場する偉丈夫と関連づけている。林紓を女性扱いにして侮蔑したつもりだ。傅斯年自身の女性蔑視が露わになっている箇所である。

当事者の証言だと思ふから頭から信用する研究者もいるだろう。しかし、馬相伯に関しては疑問符がつく。また、あくまでも林紓を敵に指名した陣営に属する人物の証言だということを忘れてはならない。傅斯年は文学革命派なのだ。反林紓だから、林紓を弁護するわけがない。傅が回想したのは、当時の新聞が報道したウワサにすぎず、なんの根拠もない。

多くを引用した。もう十分だろう。

文学革命派から反対者、敵対者と名指しされた林紓である。現在にいたるまで研究界において、彼に対する負の評価には変化がない。この事實は厳然と明白に存在している。はじめから終わりまで（と行ってまだ終ってはいないが）、敵対者、反対者、抑圧者であり旧文人、守旧派の代表者、首領、総帥が林紓その人だ。

以下はこまかい話になる。林紓をめぐる風説風聞と事實関係を少し検証する。くり返しになるのは承知している。異なる人々が入れ替わり立ちかわり長年にわたって林紓を批判しつづけてきた。だから、私の説明が重複するのもしかたがない。これが私のいい分だ。

3 風説風聞について

荊生についてまず説明をする。

荊生は誰か

林紓の短篇小説「荊生」に登場する主人公の名前が荊生だ。

アメリカ帰りの若者3名が放談している。孔教を批判し、白話を主張する。荊生がそれを聞いて一喝するという内容だ。ただそれだけでしかない。

すでに触れたように、それぞれにモデルがいる。問題は、荊生その人である。誰を示唆しているのか。林紓は明らかにしていない。附論において「どこに荊生がいるだろう！」と述べただけ。自作について彼は、別の場所で解説もしなければ弁明も一切していない。そこに他人による推測の余地が生じる。

最初に言及するのは、『毎週評論』第12号(1919.3.9)の記者だ。短篇小说「荊生」を転載し、その前書きに、荊生は著者自身である、と書いている。つまり、荊生は林紓にほかならない。ただし、同時に別の見解も提出されている。

『毎週評論』の同じ号に新聞から再録された李大釗「新旧思潮之激戦」では、次のように指摘する。

人の背後に隠れ、偉丈夫の太い足にかじりつき(注:取り入るの意)、狂暴な勢力でお前たちに反対する人を圧倒して、それでお前たちは鬱憤晴らしをしようとする。あるいはたわごと妄想の小説を1篇書いてちょっと満足する。

林紓が「偉丈夫」の足にかじりつくのだ。こうなると荊生は林紓ではありえない。別の人物を想定している。見解が分かれているといえる。ただし、偉丈夫については、後に徐樹錚だといわれるだけで、李大釗の文章にその名前が具体的に掲げられるわけではない。

当時、林紓の小説と徐樹錚が関連づけられたことは、ない。それが、安福倶楽部の軍人徐樹錚を意味することになるのはいつからか。

ここでひとつの疑問が自然にでてくる。陳独秀は、荊生が徐樹錚だとなぜ書かなかったのか。陳は、当時安福倶楽部から反抗者の代表として目をつけられていた。荊生に徐樹錚の影を少しでもかぎつければ、陳は敏感に察知したに違いない。ところが、陳独秀が編集する『毎週評論』には、荊生は林紓自身だと書いているではないか。徐樹錚の影も見えないことに注目されたい。

陳独秀は、6月11日新世界においてピラ「北京市民宣言」をまいて逮捕される。そこで要求したことのひとつが徐樹錚の解職である。ただし、名指ししたの

は徐ひとりだけではない。曹汝霖（交通総長）、陸宗輿（前駐日公使）、章宗祥（駐日公使）らの名前もあげている*12。その曹、陸、章ら3人は五四事件後の6月10日に免職になっているそうだ。陳独秀は、それを知らずにピラを印刷したことになる。

自分で作ったピラに徐の名前をあげるくらいだから、陳独秀は、荊生が徐樹錚を意味すると指摘してもよいように思う。その可能性は高かった。ところが、そうはしていないのが不可解である。

さきの傅斯年「新潮之回顧与前瞻」（1919）では、「林四娘が彼女の偉丈夫に運動した」と書いていた。女將軍に關係しての偉丈夫は軍人を連想させる。だが、具体名は示されていない。

胡適は、前述のように「安福（倶楽）部の武人政客」と書くだけで徐樹錚の名前をださない。執筆は1922年で発表は1923年だ。当時は政治の圧力を感じたのだろうか。

劉半農「巴黎通信」（1925）でも「彼は荊生の力を借りようとした」とあっただけ。

中国で徐樹錚を指名して文章になったものをさかのぼって求めると、胡適「紀念「五四」」（『独立評論』第149号1935.5.5。徐樹錚は林紓の門下生だ、とも書いている）を経て前出の劉半農「《初期白話詩稿》序目」（1933）にたどり着く。

劉半農は、なん度もいうように林紓批判の契機となった捏造論文を錢玄同と仕組んだ人物だ。荊生は徐樹錚だと早くから仲間内では共通認識になっていたのだろう。それをあらためて公表したということになる。それにしても、1933年といえは1919年からすでに14年も経過している。時間がかかりすぎているのが奇妙だ。

その時間的空白を埋めるのが、1926年の文章である。

1925年12月、徐樹錚は殺害された。それを知った劉半農は、劉復名義で「悼『快絶一世の徐樹錚將軍』」（『語絲』第61期1926.1.11。傍点樽本）を公表している*13。

わざわざ「の」を造字して日本語を使用したのは理由がある。天津『天津日報』に掲載された日本語の記事「快絶一世の徐樹錚將軍」を引用したからだ。

「訃報が伝えられ、7年前に私たちと少しばかり渡り合ったことのある荊生將

軍が、不幸にも敵に暗殺されてしまった」

7年前といえば1919年だ。劉半農がのべる荊生とは、いまここで問題にしている林紓の描いた荊生である。つまり、荊生は実際に存在した徐樹錚だと劉半農は断言した。「渡り合ったことのある[小有周旋的]」と書いてはいるが、噂しただけのこと。実際行動があったという意味ではない。

刊行された文章には日本の波多野乾一『現代支那』(支那問題社、大阪屋号書店1921.1.30. 94頁)がある。「軍閥政治家の尤たる徐樹錚及び安福俱樂部」と明記している。こちらの方がずっと早い。これと劉半農の指摘が関係あるかどうかは不明だ。

軍人が出動するという風説があったというのはそうかもしれない。だが、たとえば徐樹錚が出てきてなにをするのか、よくわからない。北京大学抑圧などともいわれる。具体的にいえば、何をどうするのか。どうしたいのか。

「文字の獄」を引き起こし新文学運動を提唱する人物を一網打尽にすることを希望した、などと説明する人がいる。私が考えるに、軍閥政府なのだから、理由など必要とはしないだろう。さらには軍隊を出動させるまでもない。直接、北京大学校長あるいはおもだった教員を罷免すれば簡単にかたづけはずだ。軍閥政府ならば、それくらいのことはやるだろう。だが、それはなかった。そうすると説明ができないではないか。

言論の自由を封じるのも弾圧になる。そのばあいは雑誌などの発行停止というのがいちばんありそうでわかりやすい。発行停止、あるいは発売禁止を命令すればすむのではないか。だが、五四事件直前の当時であってそれも実行されていない。

劉半農も詳しくはいわない。結局のところ、北京政府の権力を握っている安福俱樂部が、大学に対して実力行使をするという発想そのものがすでに根柢がないといわざるをえない。事実、徐樹錚は動かなかった。林紓と面識があるというだけの徐樹錚が、荊生にされてしまっただけのことだ。

小説「荊生」「妖夢」がある。

両作品はともに林紓が北京大学関係者にたいして人身攻撃をしたという証拠にされる。私は、人身攻撃だとは思わないが、林紓が書いたモデル小説という側面

を考えてみよう。この小説の段階では、あくまでも言論問題、あるいは思想問題だ。しかるに軍閥の勢力を借りて、という箇所は政治問題ではないか。その両者をそなえて林紓が反対派代表として存在したということになる。しかし、どこか奇妙だ。

林紓が政治問題を抱え込んでいるというのが、私には腑に落ちない。林紓は、数多くの外国小説を翻訳して有名だ。小説、詩文も多く発表している。詩文に秀でてだけでなく絵画の方面でも著名な文人だ。その彼が軍閥と結託していたという。この点について私はなじまないものをどうしても感じる。文人にして政治家というのは中国では伝統的なものであろうとも、それと林紓は異なる。彼は、当時、政治とは無関係に民間で生活している。清朝の遺老を自称する老人でしかない。民国政府の関係者から数度にわたって政治参画の招請を受けたのをすべて断わっている。政治とは距離を置くというのが民国以後における林紓の姿勢であり態度だ。だから、ただの民間人が軍閥の力を借りるという発想が、はたして成立するのだろうかと疑問に思う。あり得ないと私は考える。

以上のいきさつを知った上で、荊生は林紓自身だ、とする最近の研究者がいる*¹⁴。ウワサの域から出ない徐樹錚を荊生と結びつける根拠のなさに気づいているのだろう。

以下は北京大学をめぐる風説風聞について検証する。

風説風聞の内容

ひとつは、守旧派が圧迫を加えて北京大学の教員4名（陳独秀、胡適、劉半農、錢玄同）を追放するというもの。4名とあるが記事によっては名前と人数が異なるばあいがある。つまり、確定したものではない。

北京大学学生の張厚載が『神州日報』1919年2月26日付でそのウワサがあると報道した。3月3日付同報で陳独秀の辞任は确实だと書いた。それは事実だからだ。ところが、この事実とウワサを混同するのである。

『申報』1919.3.4付

「北京電 北京大学の教員陳独秀胡適ら4人は放校となった。出版物に関係す

るといふ（2日午後3時）」

ひとりだけ確定している。陳独秀は罷免された。これは本当のことだ。だが、胡適らにはその事実がない。新聞報道それ自体が事実と風説を混在させたものといえる。この報道をとらえて陳独秀はなにを書いたか。

陳独秀（隻眼）「關於北京大学的謠言」『每週評論』第13号1919.3.16

「頑迷でかわいそうな国故党は、新青年雑誌に大学教師の文章がいくつか掲載されているのを見て、彼らは新青年に反対するため大学についての謠言を種々つくったが、その実影さえもなかったこの種の謠言は遠くまで伝えられ、みなは本当のことだと信じたため北京上海の各新聞は多くの批判を加えた。（注：新聞からの引用は省略）」

陳独秀自身、謠言風聞であると書きつつ、そのうらにデマを流す人物があると指摘する。中国人には「権勢をかさにきて〔倚靠権勢〕」「ひそかにデマをとばす〔暗地造謠〕」というふたつの悪い根性がある。私がそういうのではない。陳独秀がこの一般論を述べたあと、彼は具体的な人名を提出する。

「この国故党のなかで、現在私たちが知っているのは、新申報の「荊生」の著者林琴南および神州日報の通信記者張厚載のふたりである。林琴南が新青年を恨むのは、彼らが孔教と旧文学に反対しているからだ」

陳独秀は、デマ風説風聞の製造者として林琴南と張厚載（北京大学学生）のふたりを名指しした。この事実は動かしようがない。陳自身が北京大学を罷免されることは本当である。それに、わざとデマを混入して全体があたかも謠言であるかのように書く。その実、その謠言は事実であるかのように意味づけをするのだから、これは高等技術である。ただし、林と張がデマ製造者ということ自体がデマそのものだ。そのデマを流したのは陳独秀である。

後に研究者が引用する時、デマ製造者の部分がぬけおちる。そうすると林紆が北京大学教員の退陣を迫った、あるいは罷免を要求した張本人になってしまう。

ひとつに国会関係がある。参議員張元奇が教育総長傅增湘に要請して北京大学に干渉させようとしたというもの。新聞掲載の文章から引用する。

淵泉「警告守旧党」『晨報』1919.3.30付

「新聞報道によれば、参議員張元奇は傅增湘に会い北京大学の新潮運動に干渉するよう要請した。そうしなければ参議院で弾劾案を提出するぞ云々。これは北京大学の教員2、3の去就問題ではない」

あくまでも新聞報道があったということだ。事実がそうだったとは限らない。『晨報』の書き方を見ると、記事は別の新聞からの伝聞らしい。該紙以外にも同内容の報道がそれ以前にあったということだ。なぜなら、同日の発行日で、それを話題にする陳独秀の文章があるからだ。ただし、実際の発行日は記載のものとは異なる可能性も否定はできない。

陳独秀（隻眼）「林紓的留声機器」『每週評論』第15号1919.3.30「随感録」欄

「林紓は、もともと武力を借りて新派を圧倒しようと考えている人間である。あにはからんや、彼の偉丈夫が彼に替って処理してくれないというので、恥ずかしさのあまり逆に怒りだし、彼と同郷の国会議員に運動して国会で弾劾案を提出しようとしているらしい。教育総長と北京大学校長を弾劾するという」

これを見れば、『每週評論』第12号では偉丈夫荊生は林紓自身だと指摘していたのを別人に置き換えたことがわかる。李大釗の意見に従ったものか。

さらに国会議員だの弾劾案だのという風説を林紓に結びつけているのが陳独秀その人であることが明白だ。これも動かぬ証拠となる。

陳独秀のこの文章を傅斯年はそのまま自分の「新潮之回顧与前瞻」に盛り込んだ。こうしてウワサを事実にしてしまったのである。

北京大学の学生張厚載は、林紓のスパイだといわれる。陳独秀は、林紓と同時に名指ししてその意味を込めた。大学内部の情報を林紓に通報したと普通は理解されている。

周作人は、「張繆子も内側から応じた〔在內策応〕と疑われ、そこで学校は断固とした処置をくだし彼を除名した」*15と説明する。「策応」とは軍事用語で相呼応して作戦するという意味だそうだ。「内通者」と表現する日本人研究者もいる。このばあい、張厚載は北京大学内部にあって大学とは敵である林紓と通じている、という見立てになる。ゆえに、ひらたくいえば林紓のスパイだ。

周作人は、当時北京大学の教授だった。事情をよく知っているだろうという憶測がある。だから、のちの研究者は例外なく張厚載を周が説明したような人物だと考えた。だが、簡単にそう断言していいのだろうか。

たとえば、前出趙聡の「張厚載事件真相」（『五四文壇点滴』香港・友聯出版社有限公司1964.6 / 1973.11再版）を例にとろう。

1961年の香港『大公報』に「被蔡元培開除的一個学生」という文章が掲載されたのだそうだ。張厚載が京劇について蔡元培と論争をし、蔡は校長の地位でもって張の北大学籍を除名した。これは事実ではないと趙聡は書く。張が論争したのは胡適、陳独秀、劉半農、錢玄同、傅斯年の5人だった。しかも張が退学になった理由は、新聞にデマを書いて北京大学を攻撃したからだ。陳独秀の『新青年』（趙聡の誤記。『每週評論』が正しい）を引用し、陳が林琴南と張厚載を名指ししたことをいう。最後のしめくくりはつぎのようになっている。

考えてもみてほしい、学生がデマをながして教授を中傷し学校の名誉を傷つけた。町中のうわさにして全国は驚き怪しんだ。その人格の下卑たことはその通りで、それ以上退学になる条件が不足するというのだろうか。13-14頁

趙聡は周作人の記述をなぞっているだけだ。張厚載がなにを報道したのかを具体的に検討していない。調査もせず最初から退学になるのは当然だと決めつけている。あるいは、退学になったのは怪しいことをしたからに決まっている、という先入観がある。

張厚載は、陳独秀が北京大学を罷免されると『神州日報』に記事を書いた。

研究者は、張厚載がデマを流したと批判する。だが、陳独秀が罷免になったのは事実である。この点についての報道は、デマではない。蔡元培が先頭にたって北京大学の教授たちが陳の罷免を決定したのだ。つまり、もともと政治問題ではない。新旧思想の対立でもありえない。だが、新旧思想の対立の犠牲者という形にすることを陳独秀自身が強く要望した。政治活動を展開するために、そうすることが必要だったからだ。実際、彼はその方向で社会に向かっては発言した。しかし、事実は思想問題ではない。陳独秀の私生活が原因であったとくりかえして

いう。

あらためて問いたい。北京大学の何が秘密だったのだろうか。

秘密があったとして、それが大学を中傷する内容だったのか。だから張厚載は退学処分になったか。だが、その秘密について研究者の誰も指摘していないのが不可解である。ゆえに、張厚載がスパイだ、謠言をばらまいた、と批判する従来通説が奇妙だと私は考えるのだ。

理解の分かれ目は、陳独秀の罷免問題しかないだろう。北京大学校長蔡元培は、陳の罷免を隠しておきたかった。それが蔡にとっての秘密だった。そう考えると謎が解ける。

当時の北京大学をとりまいて緊迫した状況がある。北京大学文科学長の陳独秀が先頭にたつて北洋軍閥政府に敵対していた。陳独秀は校長蔡元培がわざわざ招聘した人物だ。政治的な圧力が陳独秀に加えられたとすれば、蔡は積極的に陳を擁護したであろう。蔡の主張は「思想の自由」と「包容主義」であったからだ。蔡元培は、左右新旧を区別せず思想の自由を堅持すると内外に宣言した。林紆あての公開返信にもそう書いている。

一方で、北京大学改革のひとつとして蔡元培が提唱したのは、道德意識の向上がある。学内に進徳会を組織した。会則は、女郎買いをしない〔不嫖〕、賭事をしない〔不賭〕、妾を囲わない〔不娶妾〕が基本になる。陳独秀も入会したし評議員にも選出されている。ところが、陳の妓楼通いが止まらない。話題になって新聞でも報道されたようだ。その政治的行動によってただでさえ目をつけられているのだから陳独秀は自覚すべきだった。しかし、蔡元培から見てもどうしようもない状態だったらしい。蔡元培が熟考のうえで採用したのが、陳独秀を罷免するが表立ってはそう悟られないように工夫するやり方だ。直接に陳の名前をださず、組織改革を前面に押し出した。文科と理科を統合し学長制を廃止する。文科学長は教員ではなく職員だ。教授に任用するためには、あらためて承認が必要となる*¹⁶。自然に陳独秀は職を失う。

時間をかけて準備をすすめた。ようやく北京大学評議会で承認されたのが1919年3月1日のことだ。3月4日付『申報』に「北京電 北京大学の教員陳独秀胡適ら4人は放校となった」と報道されたのは、このことをふまえている。

ただし、胡適らについては尾ひれがついた部分だ。誰が尾ひれをつけたのかは、わからない。

新聞報道では陳独秀の名前がでてしまった。これには経緯がある。

陳独秀を罷免することはすでに決まっていた。だが、北京大学においては細心の注意を払い陳独秀の名前をださないように努力していた。陳の名前を公表すれば政治圧力に屈服した印象をあたえる。それを避ける必要があった。『北京大学日刊』に組織改革についての経過を発表しているが、途中で1度も陳独秀の名前を出していない。それが最良の方法だと蔡元培は考えただろう。あくまでも改組を前面におしだした。それほど嚴重に内密に慎重に計画的に蔡元培はことを進めていた。

ところが、学生の張厚載が蔡元培を直接訪問して質問してきたのだ。蔡は言質をあたえなかったが、張は自分なりに考えて新聞記事にした。

学長制廃止は、表立っては文理科教務処組織法といいかえた。その実施は夏休み後であると公表したのは3月4日だ。ところが、陳独秀に関係してある事件が発生した。蔡元培をまじえて関係者が深夜まで会議を開いたのが3月26日だった。4月8日に北京大学の会議を急遽招集して改組の実施を前倒しすることを決定する。それを公表したのは『北京大学日刊』(1919.4.10付)である。あわただしく行動したことが理解できる。

「大学本科教務処成立紀事」

「理科学長秦汾君は、すでに教育部司長に任じられたため代理学長の職を辞去する。文科学長陳独秀君もまたある事請のため休暇をとり南に帰る〔適文科学長陳独秀君亦因事請假南歸〕。校長は特に本月8日に文理両科の各教授会主任および政治経済門主任の会議を招集した。当日の参会者は、秦汾、俞同奎、沈尹黙、陳啓修、陳大齊、賀之才、何育杰、胡適の8人である。参会した諸君の議決により3月4日に発表した文理科教務処組織法を前倒して実行し、施行細則を以下のように議決した：(下略)」

陳独秀は休暇を願いで南に帰ることにした。陳は実際に休暇願を出したかもしれない。文科学長が廃止される、つまり陳独秀が罷免されるのは夏休み後だと予

定されていた。それまでは、彼は文科学長に在職したままだ。ゆえに、南に帰るにしても休暇願を出す必要があったと考えれば納得できる。

大学当局は、それを利用した。休暇願をもって改組を前倒しして実施する理由とした。これは、はっきりいって虚偽である。しかし、蔡元培にしてみれば、それよりほかに説明の方法はなかったであろう。南に帰るはずの陳は、そのまま北京にとどまっている。これが事実だ。蔡元培は表面を取り繕っただけのことだ、といわれてもしかたがない。

以上が、陳独秀罷免のほぼ全貌だと思われる。

蔡元培は、陳独秀の罷免について表面上は隠しておきたかった。これが蔡の一貫した態度だ。しかし、張厚載はそれに気づかず、あるいは無視して事実を公表した。蔡元培が張にむけて怒りを爆発させた真の理由である。

だが、これが大学の内部情報であり秘密だろうか。組織改革を実行することは、陳独秀罷免につながるのあたり前だ。そのために改組を断行した。決定の経過は『北京大学日刊』において公表している。すこし注意深く観察していれば理解できる種類のものだ。だからこそ学生の張厚載は事実を察知して新聞記事を書いた。

いくら自分の思うとおりにならなかったといっても、蔡元培は学生である張厚載に対してやってはならないことを実行したと私は考える。蔡の主義は、「思想の自由」と「包容主義」ではなかったのか。学生がまじめに勉学に励んでいれば、学外でどのような活動をしようと自由にさせる。蔡の主張する主義にしたがえば、そうでなければならない。蔡元培自身がその主義を捨てて学生を退学処分にした。蔡にとっては行動上の大きな汚点であるといわざるをえない。私は、くりかえしてそう指摘する。

林紓に関して北京大学学生の張厚載までもが、無実の罪をきせられ退学処分となった。私から見れば、張厚載についても冤罪事件なのである。林紓とともに張もまた歴史の中では負の存在としてしか認知されていない。これがまぎれもない現実だ。

実例を示そう。前出の蕭超然等編著『北京大学校史(1898-1949)(増訂本)』である。

該書は李大釗に関連してつぎのように説明する。李が「新旧思潮之激戦」という文章において、林紆らの旧派が封建軍閥の手を借りて武力で新文化運動を鎮圧するという陰謀に対して、真っ向から対立し暴露と攻撃をおこなった（90頁）、と。これが背景説明だ。

北大が陳独秀、錢玄同らを駆逐するというデマを林紆らがまき散らしたのに対して、北大も真っ向から対立する措置をとった。まず蔡元培から新聞に声明を發表し、駆逐のことを否認した。つづいて蔡元培はあの林紆に頼って二セの通信を書いてデマを流した学生に手紙を書き教育をほどこし、彼が林紆の真面目を認識するよう手助けした。のちにこの学生が悔い改めることを知らないため学校は彼の強制退学を決定し、特につぎのような布告を出した。「学生張厚載は北京上海各新聞へのたびかさなる通信にて根拠のない風説を伝え本校の名誉を毀損した。大学規程第6章第46条第1項により退学を命ずる。右のとおり布告する」。こうして、林紆らが北大に反対し、新文化運動に反対する陰謀が全校教師学生の面前で完全に暴露され、それに厳重な打撃を加えたのである。91頁

北京大学にまつわるデマを流したのは林紆である、と断言している。気の毒なのは張厚載だ。70年後も実名をだされて退学処分になったと書かれている。

林紆と張厚載は、ともに濡れ衣を着せられたままなのだ。

該書は、いわば北京大学の公認歴史書と考えていいだろう。いくら定説とはいえ独自に事実を検証することもしない。いや、検証すれば蔡元培についての記述を変更せざるをえなくなる。結局のところ無視したいわけだ。

もうひとつ、公認の書籍として王学珍ら主編『北京大学紀事（1898-1997）』（北京大学出版社1998.4 / 2008.4二版）をあげておく。これも林琴南の名前をだし（87頁）、張厚載については「学生張××」とする（88頁）。ふたりについての扱いは、こちらも同様である。

それにしても、これらの公式記録において、実名を掲げて批判するという神経が私の理解をこえる。敵対者だと見定めると一方的に、かつ徹底的に攻撃する。

証拠をあげる必要もない。有無をいわせない。死者であろうと容赦はしない。長期にわたってそれが継続される。現代中国では人権という考え方が存在しない証拠である。あるいは、中国における「人権」はそういうものだという認識があるのだろう。

4 結 論

名前をあげると陳独秀、胡適、錢玄同、劉半農、鄭振鐸、さらに魯迅、周作人兄弟らの人々である。文学革命派の全員が一致して、しかも執拗で一貫した林紵批判を継続している。林紵の生前はおろか死後においても批判する態度に変化はない。

なぜか。

最初は無視されていたこれら文学革命派の人々にとって、反対者代表としての林紵が必要不可欠であったからだ。林紵批判の経過を追跡していくと、そうしか考えられない。

文学革命派という自分たちの立場をより明確にするためには、その敵対者が存在しなければならなかった。自分たちを攻撃する敵が必要だった。単に口先だけの反対者では不十分だ。もとの文人で保守派でしかも軍閥政府の軍人と旧知の間柄であり、武力を行使してでも北京大学関係者に圧力をかける可能性があること認定できる巨大で強力な人物だ。外国小説を多数翻訳し、著名このうえもない林紵である。彼がその条件を満たしていると認められ、反対派の代表に選ばれた。

文学革命派にとって都合だったのは、約1年の時間を必要としたが、林紵が小さな動きを示したことだ。北京大学の人々をモデルにしたとわかる短篇小説を書き、さらに蔡元培にあてた公開書簡を発表した。

林紵の短篇小説は、くりかえすが本来笑ってすませる程度のものだ。蔡へあてた林の手紙も、批判のことばなどはない。実は、北京大学において学問の伝統は守られているか、と林紵が心配する内容だ。いってみれば林紵の愛国心から発した老人の嘆きにすぎない。両者ともにそれだけのこと。普通であれば、そのまま見過ごしてよい内容だ。だが、陳独秀にとっては、待ちにまった絶好の機会だっ

た。北京大学校長蔡元培によって実行された陳に対する文科学長罷免の事実を、当時彼に加えられていた軍閥政府の圧力と結びつけ、政治問題へと強引に転換した。

陳独秀を中心とした文学革命派が、北京大学をとりまいて発生した多くの風説の実行者として数倍にふくらませた林紓を作り上げたのである。針小棒大を文字通りに実践した。

陳独秀を罷免した首謀者は、ほかならぬ蔡元培本人である。このことを隠蔽したかった関係者も、陳独秀罷免に関するすべての責任を林紓に押しつけた。蔡元培を守るためには林紓という犠牲者が必要とされたのだ。

林紓批判の基本構造を理解すれば、当時の風説風聞が林とは何の関係もないことが瞬時にして納得できる。ウワサが林紓と関係があるかのように見えるのは、従来の林紓批判構造から逆に類推するからだ。ありもしない関係を信じるから不合理で説明のできないことが続出する。

林紓は、文学革命派から反対派の代表に指名された。つまり、文学革命に反対して敗北した者という役割を押しつけられた。

以上が、五四事件直前に発生した林紓問題の実態である。

最後にひとことだけつけ加える。

当事者としての文学革命派は、林紓を敵対者代表に仕立て上げた。結局のところ林紓に敗者の烙印を押ししたのは、彼らにはそうすることが必要であったからだ。だが、そのことと後の文学史研究は、また別の問題である。

中国現代文学史を書くにあたって、なぜ研究者は文学革命派の立場にたたなければならないのか。私がそう感じるほどに、筆法が同じなのだ。

上に見たとおり従来の文学史を検討すると、文学革命派の立場から一方的に林紓を批判するという視角のみが存在する。例外がない。ここには、ある種の偏向が表出している。つまり、片方に肩入れするばかりで、全体の流れをながめる人がいない。

勝者が書く文学史においては、林紓の敗者としての位置が変更されることはありえない。後継者は、勝者の先行論文をひき写して今も文学史を書きついでいる。

中国現代文学史において文学革命派は、当然ながら存在する。それが歴史の事

実だからだ。しかし、それは全体の一部分であるにすぎない。文学革命派ですべてを代表させることは無理だ。だからこそ、范伯群による一連の中国近現代通俗文学史が書かれていると私は理解する。

附記：本稿は、2008、2009年度大阪経済大学特別研究費による成果である。

【注】

- 1) のちに張俊才『叩問現代的消息 中国近代文学專題研究』(北京・中国社会科学出版社2006.12. 330-346頁)に「第5章林紓篇」「第7節重評林紓及五四新旧思潮之爭」として収録。本文中で引用するときの頁数は、論文/単行本の順。
- 2) 原文の全文を影印で公表したのは、樽本「林紓を罵る快樂1」『清末小説』第28号(2005.12.1)が世界で最初になる。初出の天津『大公報』を影印で掲げたのは、沢本香子「樽本論文補遺3題」(『清末小説から』第85号2007.4.1)だ。樽本『林紓冤罪事件簿』に収録してある。中国では、該文を復刻して公開したものに江中柱「《大公報》中林紓集外文三篇」(『文献季刊』2006年第4期(総第110期)2006.10.13)がある。なお、林紓の「論古文之不宜廢」は、『胡適留学日記』に収録されていると程巍が指摘した。樽本「『林紓冤罪事件簿』ができるまで」の注1を参照のこと。また、林大文「後人心目中的林紓」(錢理群、嚴瑞芳主編『我的父輩与北京大学』北京大学出版社2006.11)が『大公報』から全文を引用している。ただし、出典について誤記がある。林大文は、林紓の孫。
- 3) 明記されていないから刊行年を確定できない。王宏志『歴史的偶然 從香港看中国現代文学史』(牛津大学出版社1997)は、初版を1955年発行とする(63頁)。正統を合せた1冊本が出た(上海・東方出版中心1997.6)。陳鳴樹「曹聚仁《文壇五十年》序」では、1954年出版とする。
- 4) 林紓を林紓とするのは単なる誤植かと思った。しかし、吉田『中国現代文学史』(朋友書店1996.4.1. 29頁)にも林紓と書いている。勘違いだろう。
- 5) 夏志清原著、劉紹銘等訳『中国現代小説史』香港・友聯出版社有限公司1979.7. 2頁。台湾・伝記文学出版社1985は未見。上海・復旦大学出版社2005.7. 4頁
- 6) 漢訳2種類を参照した。(美)周策縱著、周子平等訳『五四運動：現代中国的思想

- 革命』南京・江蘇人民出版社1999.6 / 2005.7第2次印刷。66-67頁。陳永明等訳『五四運動史』長沙・岳麓書社1999.8 / 2001.4第3次印刷。88-90頁
- 7) 修訂本が出ている。北京大学出版社1998.7 / 2006.12第24次印刷。著者は王超冰を除いた3名。執筆分担も交替している。林紵に関する部分は、分量が減少した。しかし、「林紵が代表した守旧派の新文学に対する逆襲は、理論の深さなども全くなく、人身攻撃と政治的脅迫のレベルにとどまるばかりで、かえって新文学陣営からの後へはひけない抗争を激発した」(8頁)という見方に変わりはない。その版数を見ればいかに広く読まれているかがわかる。林紵の評価が負のまま定着するのに大きな貢献をしているということができよう。
- 8) 日本語訳がある。森川<麦生>登美江、中井政喜「『二十世紀中国文学図誌』<11>(選訳)」『名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科言語文化論集』第22巻第1号2000
- 9) 劉半農「《初期白話詩稿》序目」『初期白話詩稿』(北平星雲堂書店1933影印版未見 / 鮑晶編『劉半農研究資料』天津人民出版社1985.2。242-243頁)を参照した。 / 北京出版社影印版2010.11
- 10) 陳子展には、陳炳堃『最近三十年中国文学史』(上海・太平洋書店1930.11初版未見 / 1930.12再版 / 1937上海書店影印1989.12 / 上海古籍出版社2000.12(中国近代文学之變遷と合冊))もある。
- 11) 張若谷『馬相伯先生年譜』商務印書館1939.12。199頁。婁献閣「馬相伯」李新、孫思白主編『民国人物伝』第1巻 北京・中華書局1978.8。362頁。廖梅「馬相伯生平簡表」(200頁)、方豪「馬相伯先生事略」(290頁)は、いずれも朱維錚等著『馬相伯伝略』(上海・復旦大学出版社2005.7)所収。
- 12) 張重華、楊淑絹、王樹棣、李学文編『陳独秀被捕資料彙編』河南人民出版社1982.6。28頁
- 13) 陳思和「徐樹錚与新文化運動 讀書札記二則」『中国現代文学研究叢刊』1996年第3期1996.8。陳は、264頁で劉半農の題名を《悼快絶一世的[の]徐樹錚將軍》と書く。漢語訳すればそうなる。
- 14) 王楓「林紵 拼我残年 極力衛道」陳平原、夏曉虹主編『触摸歷史 五四人物与現代中国』広州出版社1999.4所収。305頁
- 15) 周作人「林琴南的“蠹叟叢談”」「紅樓内外」の一部。『知堂乙酉文編』香港・三

育図書文具公司1962.3。99頁。陳平原、夏曉虹『北大旧事』北京・生活・読書・新知三聯書店1998.1 / 2003.8北京第2次印刷。392頁

- 16) 人事は大学評議会が決定した。王学珍ら主編『北京大学紀事(1898-1997)』北京大学出版社1998.4 / 2008.4二版。評議会を説明して「全校の最高立法機構および権力機構である」という。1917年3月17日の項目。64頁。また、李大釗のばあい「1920年7月8日、北大校評議会は特別会議を開催し、「図書館主任を教授に改める」ことを決定した」と説明される。蕭超然等編著『北京大学校史(1898-1949)(増訂本)』北京大学出版社1988.4。56頁。ただし、1919年3月1日の評議会で議決した「文理科教務処組織法」に「(二)(乙)教員之延聘及解約等一切接洽事宜」とある。

林紓落魄伝説

未発表。林紓は、晩年において長時間の絵画制作に従事せざるをえなかった。こう説明する人が複数いる。いかにも落魄したかのようだ。しかし、林紓の経済状況を検討すれば、窮乏した事実はない。文学革命に反対した人物は、落魄して当然だ、そうあってほしい、という願望が幻の落魄伝説をつくりあげたのである。

落魄とは、落ちぶれることをいう。零落、没落、凋落でも同じだ。

隆盛を誇り経済的にも恵まれ世評も高かった人物が、なにかの原因があって人生を転落し貧困のうちに生涯を終えた。そう説明される著名な清末小説家が何人かいる。呉趼人、李伯元、欧陽鉅源らである*1。

呉趼人はアヘンを好み、酒におぼれ、金を残さずに死去した。李伯元が死去すると、遺族には生活していく手段はなかった。友人だった役者の孫菊仙が援助して葬儀を行なうほどの経済状態だ。「官場現形記」の版權を譲渡することでようやく持ちこたえた。李伯元と親しかった欧陽鉅源は、私生活が極度に腐敗し上海の宿屋で零落していた。

いずれも根拠のない話だった。

小説家なのだから落魄するのが当然の報いだ、あるいはそうあってほしい、とのちの人が願望して作りあげた物語である。事実ではない。小説家に対する侮蔑があった時代における根も葉もない噂話にすぎない。だが、それを研究者が検討もせずに自分の文章に引用し語り継ぐ。結果として、あたかもその事実があったかのような印象を植えつけ、ひろげる。事実無根にしても記述が重なると錯覚する人もでてくる。ゆえに、私はこれを落魄伝説という。

今回、それに林紓をつけ加える。

1 林紓落魄説

林紓は、晩年に絵画を売って生活の助けにした、と説明する文章がある。いかにも落魄しているといわんばかりだ。

林紓は、200種をこえる外国小説を翻訳し、その多くが上海の商務印書館から出版されていた。当時では最高の原稿料を取っていたひとりであるのは有名な話だ。あれだけ有名な翻訳家で、詩人、文人にして書画をよくする人が、晩年は落ちぶれていたという。

たとえば、河部利夫、中村義編『新版世界人名辞典 東洋編』（東京堂出版1973.6.10 / 1974.4.30三版）だ。

晩年には「文学革命」に反対して、名声を失い、主に絵を描いて生活の資とし、北京で没した。429頁

あるいは、近藤春雄『中国学芸大事典』（大修館書館1978.10.20）である。

民国初年の新文学運動のときには、これに反対して、北京大学校長蔡元培に詰問状（致蔡鶴卿太史書、一九一九、三 なおこれに対し蔡の覆林琴南書がある）を送り、また、妖夢・荊生という小説を発表して蔡元培・陳独秀・錢玄同・胡適を侮蔑したのは有名である。しかしこのため名声を失い、晩年は主に絵をえがいて生活の資とした。838頁

著者は異なるのに、「名声を失い」および「主に絵を描いて生活の資とし」「主に絵をえがいて生活の資とした」と両者ともに同文であるのは奇妙な感じがする。もともなる文献があるのだろうか。

また、実藤恵秀『世界大百科事典』32（平凡社1981.4.20）である。

ところが、文学革命がおこり、白話文学がとなえられるようになると、まっこうから反対したのは林紓と嚴復とであった。とくに林紓は反対派の主将ともいうべく、教授たちのなかで文学革命論者の多い北京大学総長蔡元培に公開状を寄せて、総長が白話文学者を擁護することを非難し、また《荊生》《妖夢》という風刺小説を作って陳独秀・胡適などをののしった。しかし、効果はなかった。晩年は書画をひさいで生活し、有力者にすぎるといふことはなかった。31頁

ここでいう「有力者」とは誰のことを指すのかは不明だ。時の権力者という意味だろうか。「すぎるといふことばからは、軍人の徐樹錚を連想する。否定文だから人物を推測しても意味はないかもしれない。

「晩年は書画をひさいで生活し、有力者にすぎるといふことはなかった」という表現からなにを感じるか。「ひさぐ」は、売るといふ意味だ。負の語感はない。だが、「すぎるといふ」と一緒に使用されるとどこかうらびれた、みじめな感じをともなう。

外部からの援助を乞わず、書画を売ってかろうじて生計を立てた、といったところだ。苦行にも似た林紓の奮闘をつい想像したくもなる。いずれにせよ、林紓が落魄したかのような雰囲気をかもしだしている。

以上の文章がもとづいたものがあるのではなからうか。

そのままの文章ではないが関連するかもしれない、と私が思いつくのは、范烟橋の書いた小説史だ。

范烟橋「民国旧派小説史略」(魏紹昌編『鴛鴦蝴蝶派研究資料』(史料部分)上海文藝出版社1962.10初版未見/日本大安影印1966.10/香港・生活・読書・新知三聯書店香港分店影印1980.1/上巻史料部分 上海文藝出版社1984.7。今、1984年版による)である。

林氏、字は琴南、別号を畏廬、また冷紅生と号す。福建侯官の人。絵がうまく、北京大学教授を多年にわたってつとめていたが、五四運動の時、校長蔡元培とうまくいかず、立腹して離職し、売文売画で生活するのに毎日長時間仕事をしなければならなかった。322頁

上海にいる范烟橋から見ると、北京の林紓はそのような状態だった。

記述に誤りがある。林紓が北京大学を離職したのは、五四事件が発生した1919年ではない。それより前の1913年のことだ。ここは范の誤解になる。大学をやめた林紓は、定職を失ったのだから収入源がない。生活のために文章を書き、絵画を制作しなければならなかった。毎日それも長時間縛られていた、という。そういう文脈において見ると、苛酷な労働に従事せざるをえなかった林紓は落ちぶれはてている。

范烟橋がいう長時間労働という箇所をくりかえす文章も発表されている。

潘安荣「林紓小説及林紓其人」(『語文教学与研究』1982年第1期初出未見。宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第2巻 武漢・湖北教育出版社2004.10)である。

彼の生活の来源は自分の労働によるだけで、七十歳という高齡になりながら、なお1日に67時間も画卓の前に立って絵画を描くのだった。80頁

おなじように書く瞿光熙「林琴南的翻譯和繪画」(『中国現代文学史札記』上海文藝出版社1984.1)がある。

林琴南は晩年、翻譯以外に絵を売ることによって生活をした。七十歳をこえて一日中画卓の前に立って休みなく絵を描いた。197頁

私にいわせれば、林紓は高齡にもかかわらず長時間にわたって絵画制作に集中できる精神と肉体を持っていた。林紓は若いころに肺を病んでもいる。その彼が、七十歳をこえてよくそのような持続力があるものだ、と感心しても不思議ではない。

范烟橋、潘安荣、瞿光熙らは、みずからが書いた文章の出典を示していない。簡単なことで王森然『近代二十家評伝』(北平・杏巖書屋1934.6.10)にあるのを写したのだ。

晩年、書画をひさいで生活をした。七十歳になるまで、毎日、画卓の前に67時間も立ち、飽きることがなかった〔不厭倦也〕。87頁

実藤恵秀が「ひさいで」と書いたのは、この王森然の文章がもとになっているらしい。

「飽きることがなかった」を見れば、林紵が絵を描くことを楽しんでいたことがはっきりする。だが、范烟橋は、この部分を省略して使用した。だから、生活のために長時間の労働をせざるを得なかったような印象を残す結果となった。潘安栄、瞿光熙らは、范烟橋の文章を写しただけかもしれない。王森然の文章を歪めて伝えることになったのだ。

これとは別に林紵落魄をいう文章が、どこかにあるのだろう。それを根拠にして文章が書き継がれている。そうとでも考えなければ、同じような説明が存在する理由がわからない。

2 いくつの中傷

さかのぼると、沃丘仲子（費行簡）『当代名人小伝』がある*2。

その「林紵」だ。文学革命が唱えられた時期の林紵について以下のように説明している。

近ごろ大学生が欧米の文学に熱中し、謬論を作り出して白話を文章にしろと主張する。『新青年』という雑誌、『新潮』という大学月刊の類を刊行しているが、みな浅薄で俗悪なことはいふ必要もない。その中に林紵について批判するものが多く、林紵は「妖夢」という小説を書いた。かこつけて新文学を中傷しており、ことばはまったく軽薄である。陳独秀らが新文学を広めるには力不足だと力説する。すなわち、林紵もまた旧文学を守るには力不足であることを力説しているのだ。なぜならば、持論は違ふとはいえ浅薄俗悪であることは同じだからである。ただ、林紵の詩詞はみな清新ではなはだ優

秀だ。実に名人というのに恥じない。たまに書画をつくると風雅で仙人のような味わいがある。巻下172頁

文中で『新潮』を掲げている。該誌の創刊は1919年1月だ。そうすると『当代名人小伝』の発行が1918年だとする版元中国書店の説明はつじつまがあわない。調べると初版は1919年7月だという。別の説では1922年だ。また、北京図書館出版社の影印本奥付は1926.2二版となっている。そうならば納得する。

費行簡が見るところ、文学革命派と林紓はどっちもどっち、ということだ。ただし、林紓の詩詞と書画については評価が高い。ここからは林の落魄説はできそうもない。

ところが、費行簡は、つぎに奇妙なことを書いている。

賭博をこのみ月の収入はサイコロにつぎ込んだ。近ごろは書店が常に小説を書くように求めるのにその暇がない。そこで安価で他人の原稿を買い取りそれにあてたから精彩が次第に失われた。人に騙されやすく、軽薄な文士が常に弟子入りしその名声を求めた。彼の名誉はそのため大いに下がった〔好博。月俸皆以供樗蒲〔蒲〕。近以諸書館恒乞其為小説。已不暇給。則以賤價収他人稿充之。精采漸失。直實易為人欺。浮薄文士。恒投其門。仮以求名耳。譽因為之大減〕。巻下172-171頁

増田渉は「林紓について」(『中国文学史研究』岩波書店1967.7.25)において、上の箇所を紹介した。

すなわち、「事実かどうかよく分からないが、後期になると他人の翻訳を安く買い、自分のものとして書店に売ったから精采を失った(沃丘仲子『当代名人小伝』)のだという説さえある。あまり多量の訳書だから、そんな噂も出たのかと思われる」(219頁)、と

『関西大学増田渉文庫目録』には、『当代名人小伝』として「上海・崇文書局1921五版」が収録されている。これによって彼は上記引用部分を書いたことがわかる。

増田のいうとおり、林紵の翻訳は多量だった。200種をこえている。外から見るとほとんど超人技である。それが可能だったのは、林紵が採用した「翻訳工房」方式だったからだ。外国語のわかる共訳者が口述翻訳する。それを林紵が筆記する、というあの有名な翻訳法である。いうまでもなく、他人の原稿を安く買ったという費行簡の説明は、根拠がない。増田が噂だと書いたのも当然だった。

もうひとつの賭博については、増田は無視した。わざわざ取り上げる必要もないくらい荒唐無稽な話だ。そう彼は判断したのだと考える。私もそう思う。どのような資料を見ても、林紵とサイコロ賭博は結びつかないからだ。

ところが、文章というものは恐ろしい。真偽は別にして、書かれているという事実がある。その虚実を検討せず、後にそれを引っ張り出してきて紹介する人がいるのだ（後述）。

門弟となる人が集まったというのは、事実だろう。ただし、そのために林紵の名誉が傷ついたというのだが、具体的な内容が不明だ。大した人物がいなかった、という間接的な批判かと思う。

費行簡の林紵紹介には、中傷が含まれている。だが、晩年に落魄したとまでは書いていない。

つぎは、林紵が「造幣局 [造幣廠] 」だったという有名な話を紹介する。

人間をつかまえて「造幣局」というのだ。あまりほめたいいい方ではないように思う。たしかに、誤解をまねきやすい表現だといわざるをえない。

陳衍（石遺）「林紵伝」（『国学専刊』第1巻第4期1927.10.2。台湾影印1970.2）である。

その友陳衍は、かつて戯れにその部屋を「造幣局」とよんだことがある。動かせば金になるということだ。しかし、林紵は金銭にはまったく無頓着で、人の急場を助け救済するのに出し惜しみすることはなかった。中年で妻を失い、側室を置いた。男女を多く育て若者をつかわいがった。家の切り盛りがへたなところがあった [其友陳衍、嘗戯呼其室為造幣廠。謂動即得錢也。然紵頗疎財、遇人緩急、周之無吝色。中年喪妻、置一妾。多育男女、鍾愛少子。有不克家者]。94頁

自分の文章に自身が名のって登場しているのは、どこか不自然だ。それもそのはず、該原稿は、『福建通志』の一部として書かれたらしい。歴史書だから発言者の根拠を示したものとわかる。1916年に起筆し5年後に完成した。1938年に出版されたという。ならば、該当の文章は、一部分が単行本刊行前に発表されたことになる。

陳衍は、林紓と同郷だ。しかも、1882年、林紓、陳衍、高鳳岐、鄭孝胥らは同時に挙人となっている。同期合格者だから彼らは特別な間柄だと考えていい。その高鳳岐が、1902年に上海の商務印書館に入社し編訳所に勤務した。下の弟は而謙で三弟が高鳳謙（夢旦）だ。高鳳謙（夢旦）も1903年に商務印書館に入社することになった。鄭孝胥も、のちに商務印書館の理事だ。人的な結びつきから林紓と商務印書館の関係が生じたのは、自然である。

商務印書館が刊行した林訳は、1903年の『（希臘名士）伊索寓言』が最初らしい。高鳳岐の商務印書館入社と林訳の刊行は、時間的にみて関連がありそうに思う。

ところが、前出の陳衍は、「高鳳謙（夢旦）が商務印書館を創設したので、もっぱら小説を翻訳するようにとりきめた〔鳳謙創商務印書館。則約紓專訳小説〕」と明記しているではないか。

商務印書館の創設と高兄弟は関係がない。陳衍の誤解だ。また、高鳳岐と林紓との結びつきを考えれば、ここに三弟の高鳳謙（夢旦）が出てくる必然性もない。こちらも陳衍の書き誤りではなかろうか。林紓は、同期挙人である高鳳岐との約束があったとするほうが納得がいく。つまり、高鳳謙（夢旦）は誤植で、正しくは兄鳳岐だと考える。ついでにいえば、商務印書館創立者のひとは高鳳池（翰卿）だ。まぎらわしいかもしれない。同じ高姓だが、高鳳岐兄弟とは関係がない。

のちに、増田渉がこの部分に注目した。ただし、陳衍の文章を引用した錢基博著になる文学史の方だった。広く引用されるほど陳衍の書いた林紓伝は重視されたということだ。

前出の増田渉「林紓について」において、「いずれも彼と特殊の関係⁽⁶⁾にあった商務印書館から出版された」(210頁)と書いている。

その注(6)はこうだ。

「彼の同郷の親友、高夢旦(鳳謙)が商務印書館の編訳を主宰していたからだ
と銭基博は『現代中国文学史』にいている。高氏兄弟、鳳謙、而謙との友誼に
ついては林紓の『文集』にしばしば見る」220頁

陳衍が「鳳謙創商務印書館」と書いていたのとは違う表現になっている。

さかのぼって銭基博『現代中国文学史』(上海・世界書局1933.9)の該当部分は、
つぎのとおり。

鳳謙が商務印書館の編訳を主宰していたから、欧米小説をもっぱら翻訳す
るよう林紓ととりきめた[既而鳳謙主幹商務印書館編訳事、則約紓專訳歐美
小説]。139頁

高兄弟と商務印書館の創設が無関係であることを銭基博は知っていたのだろう。
だから、編訳の主宰だと書き換えた。ただし、高鳳謙(夢旦)は残した。私がす
でに説明したように、ここは兄の高鳳岐であるほうがよい。

陳衍の記述が公表されて以後、林紓は商務印書館の専属翻訳家のように受けと
られている。契約のようなものを結んでいたかどうかはわからない。私は、専属
ではなかったと考えている。少数にせよ商務印書館以外の出版社から刊行物を出
しているからだ。いくつかの例外はあるにしても、圧倒的に多数の林訳が商務印
書館から出版されている。また、林訳作品は、商務印書館が刊行していた小説雑
誌にも掲載されているのだ。また別に「林訳小説叢書」と特に銘打ってまとめて
100編を刊行した。それくらい両者には密接な関係がある。林紓と高鳳岐の個人
的な関係がもとになっていると考えてもいいだろう*3。

さて、引用した陳衍の「造幣局」うんぬん部分にもどる。

陳衍が説明している林紓のその広い部屋は、画室(アトリエ。工房)を兼ねてい
る。陳が「造幣局」と書いたのはまったくの冗談にすぎない。「戯呼」とわざわざ
書いているから文字通りだ。作れば売れる。動かせば金になる。表現は俗に流
れている。だが、林訳小説あるいは林紓の絵画などが人気を大いに博したことを
表わしたものだからわかりやすい。

陳衍自身は、親しい林紓の経済状態を説明するのにそれが適切な表現だと考えただろう。「造幣局」というのは「戯れに呼んだ〔戯呼〕」と明記しているうえに、林紓が金銭に無頓着だともつけ加えている。

この後こそ見落としてはならない箇所なのだ。「林紓は金銭にはまったく無頓着で、人の急場を助け救済するのに出し惜しみすることはなかった」。多くの人を養っていたのは、金のある場所に人々が群がるからだ。それが可能であるくらいに林紓の収入が豊かだったという証拠にもなる。寄ってたかって食いつぶす。昔の中国では普通のことだ。

陳がいう「造幣局」は、林紓が金に無頓着だったことと一組になっている。私は、ここを強調しておきたい。

これを見逃す、あるいは意図的に無視するとどうなるか。「造幣局」だけが独り歩きするのだ。その可能性を含んだ文章だった。今から見れば、陳衍は不用意な表現をしたことになる。もう少し慎重さが必要だった。

銭基博も同書で「造幣局」を紹介している。同時に、林紓が金銭のことは気にならなかった〔紓頗疎財〕(153頁)とのべて正しく把握している。

前出の増田「林紓について」において、彼も「造幣局」に言及する。それほど目を引くたとえだとわかる。

羅什や三蔵にも比べられる彼の多量の訳業は、確かに驚嘆に値^{ママ}いする。だが一方ではまたそれを金もうけ主義の商品生産だけのものであるとしか見ない人もあって、林紓の書齋を「造幣廠」と戯れに呼んだのは、彼の同郷の友人、陳衍（京師大学堂の文学教習をした）であった。208頁

「戯れに呼んだ」と陳のことばを引用してはいる。だが、「金もうけ主義の商品生産だけのものである」とまで踏み込んだ表現をするのは増田の書き過ぎである。陳衍は、そのような意味を込めているわけではない。増田の説明が問題であるのは、陳衍の表現一組の片方、すなわち金銭に無頓着という部分が無視したことだ。「造幣局」だけを強調することになった。そうなると、戯れではなくなる。鄭逸梅も「造幣局」ということばを見逃さなかった。

鄭逸梅「林琴南売画」(『鄭逸梅選集』第4巻 哈爾濱・黒龍江人民出版社2001.1)である。

北平(注:北京)に住んでいたとき、小説にせよ、誕生祝いの文また墓誌銘にせよ、大小の絵画にせよ求める人が多かったので収入はとても豊富だった。ある人がその部屋を造幣局とよんだが、実は収入のすべてで同族の人を救済したため、死ぬまで屋根瓦のひとつもふくことはなかった[当其寓居北平時,小説也、寿文墓志也、大小画件也,以求之者多,所入甚豊,某巨公因称其寓為造幣廠,実則悉以所獲周恤族人,至死無一瓦之覆,一壟之植也]。

120-121頁

「某巨公」は、いうまでもなく陳衍を指す。鄭逸梅は、陳衍の文章に拠ってこの文章を書いていることがわかる。それはそうだ。林紆のことを「造幣局」とよんだのは陳衍だったからだ。

「屋根瓦のひとつもふくことはなかった」。つまり、収入は一族の者を救済するのに使ってしまう住宅に金をまわす余裕がなかった、という意味だ。屋根瓦うんぬんという箇所は、歐陽脩の語句を引用した鄭逸梅の加筆である。人を救済し家の切り盛りがへただった、という原文を鄭なりに書き換えて説明した。増田渉に比較すると鄭逸梅のほうが原文を正確に把握している。

「造幣局」に関して、裏話を紹介する人がいる。

吳家瓊「林琴南生平及其思想」(『福建文史資料』第5輯 福州・福建人民出版社1981.7)である。大要は以下のとおり。

林紆と陳衍は同期の拳人で国内では有名だった。だが、ふたりの意見があわず、互いに論難していた。著者(吳家瓊)が何振岱(梅叟)のところで林紆の手紙1通13枚におよぶ長いものを見たが、そこには陳衍を批判することばが多くあった。林紆は刊行したその詩文集では陳衍をほめあげたが、陳の方はそれとは違って『福建通志』を書いて林紆伝をつくり、彼の画室が「造幣局」であって動かせば金になる、とあざけたのである(102-103頁)。

林紆と陳衍の仲は、表向きと内実は異なる、といたいらしい。

錢鍾書の紹介がある。林紓は、北京にやってきた陳衍と便宜坊で食事をしながら3時間も話し込んだ。林紓の詩について、それから1時間も言い争いになったという*4。

そういう部分だけを抜き出す、あるいはそこにだけ注目すれば、林紓と陳衍のふたりは深刻な対立をしているように見える。しかし、部分的な見解の相違があっただけかもしれない。

陳衍が「戯れにその部屋を「造幣局」とよんだことがある」と書いているのをもういちど見てほしい。はっきりと「戯れに」と説明している。つづいて「しかし、林紓は金銭にはまったく無頓着で、人の急場を助け救済するのに出し惜しみすることはなかった」とも書いているではないか。

ここは何度でも指摘する必要がある。重要な箇所だからだ。この後ろ部分を見れば、あたかも「あざけた」だけという印象しか残らない。著者の呉家瓊は、林紓を持ち上げるために陳衍を意図的におとしめたことになる。

案の定、この「造幣局」ということばだけを中心にしてあれこれ述べる文章が書かれている。

3 林紓へのあらたな中傷

呉十洲「“名士”乎？“造幣廠”乎？林紓（1852-1924）」（『民国人物綽号雑譚』天津・南開大学出版社1998.6。「林紓（一八五二 - 一九二四）「名士」乎？「造幣廠」乎？」『群星璀璨：民国文壇人物綽号雑譚』台湾・遠流出版事業股份有限公司2003.8.16）がある。

林紓の経歴と翻訳について短文で紹介している。文章の題名になっている「名士」については、次のように説明する。

林紓の一生でもっとも重大な過ちは、「五四」文学革命運動に対して攻撃をしたこと以上のものはない。それは彼に封建文化を擁護する「旧名士〔土名士〕」という汚名を結局のところ背負わせたのである。5頁

この説明を見ただけで著者の呉十洲は、従来の林紓批判を忠実に継承し無批判

に従っていることがわかる。

しかも、林紓の文章である「論古文之不宜廢」をわざわざ「論古文之不該廢」と特別な間違いかたをするのだ。普通、中国現代文学史では「不当」と誤る。その点で特別だ、と私はいう。「不宜」「不当」「不該」でも同じ意味だ、と呉十洲は主張するに決まっている。目に見えるようだ。しかし、どういおうとも呉十洲が原文を見もしないで論文を書いている事実を隠すことはできない。

そればかりか、呉十洲は「林老先生」といやみたつぷりに揶揄しながら、林が発表した小説について誤ったことを書く。

1919年2月17日から18日まで、また3月^{ママ}18日から^{ママ}22日まで、上海の『新申報』に林紓の「荊生」が発表された。5頁

この説明を読むと「荊生」は2月17日から3月22日まで連載されたと著者は考えている。だが、正確ではない。2月に発表したのが「荊生」であり、3月19-23日連載が「妖夢」だ。後者の日付については、『林紓研究資料』(85頁)が間違っているのをそのまま写したのだろう。

林紓には7男5女があり、前後して孤児が7、8人もいて多くの人が林紓の筆1本で生活していた。それも彼が「多産」であった理由である。あだ名の「造幣局」は、陳衍が彼の画室を「造幣局」だと戯れに呼んだことにちなむ、という(6頁)。

ここにある「多産」とは外国小説の翻訳を多く生産したという意味だ。もうひとつ、林紓には扶養家族が多いというのも、それにかけたものか。

呉十洲が参考資料にあげている張俊才『林紓評伝』には、林紓の財政状況をつぎのように説明している。大意は、こうだ。林紓は収入も多かったが他人をすすんで援助したから蓄財することがなかった、と(263頁)。張俊才は、陳衍の文章を正しく理解して引用している。しかし、この部分を呉十洲は無視する。無視して何を書いたか。

別にひとつの説明がある。林紓は性格が剛直で、賭博をこのみ月の収入は

サイコロにつぎ込んだから、生涯に翻訳した小説百余種も間に合わせでいいかげんな作品が少なくなかった〔生平所訳小説百余種亦不乏応付和草率之作〕。林晩年の訳書も「銭」のためだと疑う人もおり、そうであれば「造幣局」というのは名前も中身もともなっていたのだ。6頁

この箇所は、費行簡『当代名人小伝』からであることは明白だ。あるいは、影印本の『現代名人小伝』かもしれない。根拠を明示していないからどちらか不明だ。

驚いたことに、林訳そのものをいいかげんだと罵っている。なにを根拠にそう書くのか。

現在、林紓は文学革命に反対した代表者として負の評価しかあたえられていない。つまり、批判の対象として公認されているという意味だ。必然的に、林紓を誹謗中傷しても許されるという判断があることになる。根拠がなくても、林紓についての批判であれば何を書いてもいい。呉十洲の文章は、まさにこれに該当する。

4 林紓の原稿料あるいは経済的基盤

林紓落魄説は、上に紹介したようなものだ。少し考えればおかしいとわかる。

売文という表現から、細々としたものに見えるかもしれない。だが、林訳小説の原稿料は当時随一の高額だった。しかも、作品の多くは商務印書館の「説部叢書」に収録されている。それに加えて「林訳小説叢書」というシリーズが特別に刊行されてもいるのだ。読者から歓迎されなければ、つまり販売の目途がたたなければ、商務印書館が企画編集出版するはずがない。

ただし、商務印書館が大量に林訳を販売したとしても、林紓のところにとどれくらいの収入がもたらされていたかとなると別に検討しなければならない。

当時の原稿料については、いくつかの形態があった（詳しくは次を参照のこと。樽本「清末民初作家の原稿料」『清末小説論集』所収）。

主となるものは、ふたつだ。原稿買い取りと印税方式である。

原稿買い取りは、字数にもとづいて計算する。作家の側からいえば、売り切りだから出版社が増刷しようとその後のことは関係がなくなる。

林紓のばあい、高額だったというのは1千字で6元だからだ。商務印書館において、翻訳は創作と比較すると安価であり、最高でも1千字3元だったという。それを見れば林訳原稿は特別に高額だ。

商務印書館に勤務していた謝菊曾が、林紓の翻訳原稿について回想している。

高夢旦（鳳謙）に命じられ、林訳小説全部の字数を調べなおした。その結果わかったのは、字数計算がズサンで10余万字も少なかった。600余元を追加支払いしたという*5。ただし、林紓が共訳者とどれくらいの割合で受け取ったかの配分率まではわからない。（文末【統合版補記】を参照）

もうひとつは印税方式だ。同じく謝菊曾が説明している。

林紓のばあい翻訳以外の著書は印税方式だった。例として『韓柳文研究法』『畏廬文存』という書名があげられる。小説は一時の流行にすぎず、文集は後々まで伝わるだろうからだ、と謝は推測する。

林紓の絵画は有名であった。そればかりではなく著名人の追悼文を書けば収入にもなった。もっとも、気に入らない依頼は断わって引き受けなかったらしい。ということは、生活に余裕があったからこそ辞退できたとわかる。

『張元濟日記』の1916年8月10日に関係する記述がある。高夢旦からの報告だ。林琴南の小説は、正月から8月まで11種を受け取った。全部で57万2,496字、原稿料は3,209.08元だ*6。

実質7ヵ月として月平均約459元になる。ちなみに、1千字当りになおせば5.6元だ。一般にいわれている6元に近い。逆にいえば、約226元の支払い不足だ。

林紓自身が彼の翻訳について述べている。林のいう「答大学堂校長蔡鶴卿太史書」（一般では「林琴南致蔡鶴卿書」）である。

林紓が蔡元培へあてた公開書簡だ。1919年3月18日付『公言報』に掲載された。話題をよび、当時、新聞雑誌などに転載されて有名この上もない。文学革命派は、林紓を批判するために大いに利用した事実がある。

そのなかに、次のように説明する箇所があるのに注目しよう。

外国語は理解しませんが、十九年の筆述で翻訳は123種1,200万言になります [不解西文積十九年之筆述成訳著一百二十三種都一千二百万言]。

興味深い。

林紵の翻訳料が最初から1千字6元というわけではなかつたろう。最終的にその額まで上昇したと考えるのが適当だと思う。しかし、詳細が不明だから、とりあえず1千字6元で計算してみる。

「1,200万言」が字数だと考えれば、乗じて72,000元。これが19年だから、年平均約3,790元だ。月になおす。過去19年という。1919年3月の林紵書簡だから、おおまかに1900年から1918年までに区切る。中華民国以前は旧暦だから閏月があつて合計233ヵ月となる。すると1ヵ月平均約310元だ。

曾孟樸の証言を紹介しよう。

『孽海花』の著者としても有名な曾孟樸は、フランス語を理解した。デュマ作品を原書から漢訳している。林訳を見て喜び、北京に会いに行った。ところが、林紵は外国語を解せず、口述翻訳者のことばを写すだけだと知って落胆した。そう説明する手紙を胡適に書いたことは周知のことだ。

その曾孟樸に面会した人物がいる。

張若谷「初次見東亜病夫」(『張若谷集：異国情調』世界書局1929初出未見 / 上海・漢語大詞典出版社1996.4)である。関係部分だけを見る。

東亜病夫(曾孟樸)が語ったところによると、こうだ。「彼(林紵)が毎年の著作で得る原稿料は、平均して1万元以上ありますが、人の緊急を救助し、貧しい子弟たちの学費を補助するのに使い果たしています [他毎年著作所得稿費, 平均有一万元以上, 但終散發濟助人急, 及補助貧寒子弟們的学費]」157頁

曾孟樸がいう林紵の年平均1万元以上の所得も、やや大ざっぱだ。とりあえず12ヵ月で除すれば約833元となる。

一方に林紵書簡に見える年平均約3,790元が存在する。換算すれば月平均約310元だった。

当時の人々はどれくらいの収入を得ていたのか。それを知らなければ、林紵の月額約310元から約833元というのが高いのか低いのかわからない。

商務印書館の給料は、日本人の長尾雨山と加藤駒二が200元、技師長の木本勝太郎が180元だ*7。

1902年、商務印書館が張元済を迎えたとき月給は350元だったという。だが、1919年当時は昇給していたはずだ。

社会一般でいうと、1909年上海における実例が『民吁日報』に示されている。

店員夫婦で収入は15元。赤字が1.33元。教員夫婦（親ひとり、子どもふたり、下僕ひとり）の収入が40元。赤字は14.74元。ある役人（親ひとり、妻と妾、下僕3人、コック、車夫各ひとり）の収入は140元。赤字が104.17元。

下は15元で上は140元だから、所得格差が10倍に近い。この3例の収入をむりやり平均すると、65元になる。上海という大都会において1世帯あたりの月収が65元というのをひとつの目安にしてよいだろう。ただ、1909年当時の所得だから、10年後とは異なるだろうと思う。

5 北京大学図書館における毛沢東の給料

1917年、北京大学での給与は、蔡元培が校長で600元、陳独秀が文科学長で300元、李大釗が図書館長で200元だった。「図書館の補助員」であった毛沢東は「わずか」8元である。以上は、横山宏章『陳独秀』（朝日新聞社1983.5.20朝日選書。116頁）に書いてある。

ちなみに、北京大学の給与をまとめて紹介しておこう。等級にわけてある*8。

校 長	600、500、400元
学 長	450、400、350、300元
正 教 授	400、380、360、340、320、300元
本科教授	280、260、240、220、200、180元
預科教授	240、220、200、180、160、140元
助 教	120、100、80、70、60、50元
講 師	1時間につき2から5元

上の給与表を見るかぎり、毛沢東が月給8元だったとは安い。だいたい8元の該当する個所がない。ただ、別の文献では違う数字があげられているので紹介する。

蒋夢麟(1886-1964)がアメリカ留学で教育学を修め、哲学博士学位を取得し帰国したのちのことだ。上海の商務印書館で教育雑誌の編集にたずさわるなどしたあと、1920年、北京大学の教育学教授となる。蔡元培にかわって校長代理をつとめることもあった*9。

毛沢東が北京大学図書館に雇われたのは、自分が関係していると蒋夢麟は証言している。その文章は、蒋夢麟「談中国新文藝運動」(『伝記文学』第11巻第3期1967.9.1)だ。

蒋が北京大学校長代理をしていたとき、李大釗は校長室の秘書主任兼図書館主任だった。それで毎日顔をあわせていた。あるとき、李大釗が校長室にやってきて毛沢東が失職して食えなくなったという。図書館の仕事ではどうかと蒋が問えば、書記ならあると李が答えた。そこで、蒋夢麟は筆をとって「派毛沢東為図書館書記、月薪十七元」と書いた。これが蒋夢麟の回想だ。

この給料17元には複数の数字がある。羅家倫は、18元だという。のちの話では、李大釗が毛沢東を紹介したのは羅家倫の提案だったらしい。蒋夢麟が昆明にいたとき、毛沢東が延安から簡単な自伝を送ってきて、それには19元だと書いてあった、云々。

辞令を書いた蒋夢麟の回想ではあるが、時間があわない。すなわち、蒋が北京大学に就任したのは1919年だが、毛沢東が図書館に職を得たのは1918年ということになっているからだ*10。

そういう文献もあるというだけのこと。8元は低すぎる数字だ。17元から19元というのであれば、1909年上海における店員夫婦で収入が15元にくらべると、それくらいのもものかもしれない。

北京大学校長蔡元培の給料が、月額600元という。これと比較すれば、林紆の月額約310元から約820元というのは、それほど悪くはないように思う。

林紆は、1919年から死去の1924年まで(すなわち、死後に刊行されている作品を除く)、単行本を含んで約76種の作品を発表している。さらに、北京『公言報』、上海『新申報』といった新聞に詩詞、短文を多数掲載した。加えて追悼文などの

作成依頼もあったし、絵画の収入も勘定にいれなければならない。だが、詳細は不明のままだ。

6 林紓の揮毫料金

鄭逸梅「林琴南之耿介」(人物品藻録「梅庵談薈」『鄭逸梅選集』第4巻 哈爾濱・黒龍江人民出版社2001.1)がある。

鄭は、1921年における彼の揮毫料金を明らかにしている。以下に引用する。

1921 林紓

五尺堂幅 28元

五尺開大琴条四幅 56元

三尺開小琴条四幅 28元

斗方、紈折扇 それぞれ5元

单条 その倍

手巻点景は面談で

締切りなし、墨代金は1割上乘せ。北京永光寺街*11。林宅で手渡す。121頁

ここに示された林紓の揮毫料金がどれくらいの水準なのか、私にはわからない。高いのか安いのか。

揮毫料金を公表するのは、いくつかの目的、形態があったという。

当然、生活のためというのが主流だったであろう。そのほか、慈善事業をうたうものとか、集団で行なうのはいわゆる工房か。だが、鄭逸梅が書いているように、高値に設定して注文を断わるための口実にするという側面があったことを忘れてはならない*12。

書と画、あるいは篆刻などでも違うはずだ。上に示した林紓の例は、絵画のようだ。大きさによって値段が決められている。それと比較できるものをさがす。康有為の例を示そう。

1922年8月25日付『申報』に掲載されたという。「康南海先生減価鬻書百幅

助賑」と題されている。

潮汕災害での被災者を支援するために義捐金募集をした。揮毫料金を特別に半額と決めたのは、これが慈善事業だからだ。義捐金だから普通よりも高額に設定してもよかったと思わないでもない。ここは、広く募金したかったから減額したと理解する。

楹聯四尺10元 一尺ふえるごとに1元上乘せ
中堂四尺12元 三尺6元 一尺ふえるごとに1元上乘せ
琴條三尺5元 一尺ふえるごとに1元上乘せ
小横額三尺5元 一尺ふえるごとに1元上乘せ
為め書きは倍 墨代金は1割上乘せ
旅滬広東潮汕籌賑処啓*13

林紵が「五尺堂幅 28元」だ。康有為が「中堂四尺12元」だから、もし五尺とすれば13元。康は半額にしているから倍額では26元になる。

かなり高額であるという印象を私は持つ。ただし、厳密な比較にならないかもしれない。ふたりとも著名人だから、おおよそのところがわかったということにする。

ほかの人を見れば、料金はまさに上から下までである。そのなかで林紵、康有為らは上位にあるとっていいのではなかろうか。

揮毫料金がわかったところで、林紵がどれくらいの枚数を描いていたのか不明だ。林紵の経済状態を証明する資料は、今のところ存在しない。

林紵に師事して絵画をならった女性のひとりに王芝青がいる。林紵の様子を回想していて興味深い。

彼女の叔父が王寿昌だ。王寿昌が口述翻訳して林紵が筆記したのがあの『巴黎茶花女遺事』(小デュマ「椿姫」)である。

王芝青が林紵についたのは1913年のことだった。林は六十二歳になっている。彼は若いときに肺病をわずらっていたから、当時もセキをしていたし、くわえて慢性鼻炎でハンカチが手放せなかった。広い部屋に学生たちを集めて、林紵は大

きな机の上席に座り、両側の学生たちは絵を学ぶもの、字をならうもの、詩を勉強するもの、古文を学習するもの、とそれぞれだ。学生に絵を教える林紓の方法は、自分が描いているのを見せて会得させるというやりかただった。

林紓は揮毫料金（潤例）を定めていた。それは上に見たとおりだ。ほかの画家と異なるのは、料金前払いだった。彼の死後は、その画債は返済できないままとなる*14。

料金前払い、という部分だけを見れば、金に執着したと悪意をもっていう人が出てくる可能性がある。先取りして死亡だから、これはサギであるという人もいるだろう。見る人の立場によって、評価は違うのだ。

以上、ざっと説明した。詳細を把握できないから全貌は不明のままにするしかない。

しいていえば、晩年の林紓の所得は、少なくとも月額約310元から833元くらいはあっただろう。北京大学校長と同等、あるいはより高額だったといえるかもしれない。確実なのは、北京大学で教えていた時よりも収入は多かった。だから、大学をやめて生活の手段を失ったというものではない。

他人を経済的に援助するために惜しげもなく金銭を使ったという。まわりも林紓の経済力に依拠したし、それだけの経済的基盤が確立していた。入だけ出ていったということはあるかもしれない。だが、林紓は晩年において生活に困窮した事実はない、と私は判断する。

林紓は、文学革命に反対した代表者と見られている。現在でもそうだ。文学革命に反対した人物は、晩年は経済的に逼迫した状態におちいても当然だ。いや、そうでなければならない。偏見にもとづいて強く望む気持ちが、ありもしない落魄説をつくりあげるのである。

【注】

- 1) 樽本「清末小説家の落魄伝説」『清末小説探索』所収
- 2) 私が見ているのは、中国書店の影印本（1988.8）だ。崇文書局1918年版^{ママ}によって影印したと説明がある。この書物は、書名があやしい。表紙は、新しく作り直している

のだから違いはわからない。だが、本文の書名を『現代名人小伝』に変更している。手書きで「現」に書き換えているから明らかなのだ。活字を使う労を厭ったか。「当代」では現代中国で使用するものとまぎらわしいという判断だろう。しかし、1字でも改竄しては影印にはならない。中国書店も、書名を変更したとは説明していない。まったく、まぎらわしい。2008年、『近代名人小伝』と合冊影印した『近現代名人小伝』上下冊（北京図書館出版社2003.4）を入手した。書名は『当代名人小伝』のままになっている。はるか以前に、同じ著者の著書について「記述の曖昧なこと」が指摘されている。中島利郎「曾鏄と費行簡『近代名人小伝』のこと」『野草』第33号1984.2.10

- 3) 林紆と商務印書館について説明する文章がある。東爾「林紆和商務印書館」（『（1897-1987）商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1）だ。林紆と高兄弟の関係を認める。さらに、編訳所長が張元濟だったことをあげ彼の賛同があったから大量の出版が実現したと説明する(538頁)。なお、1898年、林紆は北京の李宣龔(抜可。のちに商務印書館勤務)のところで維新派林旭にあってい(530頁)。すなわち、林紆の知人の多くが、商務印書館に勤務したということだ。
- 4) 錢鍾書「林紆的翻譯」『旧文四篇』上海古籍出版社1979.9。94頁。『林紆的翻譯』北京・商務印書館1981.11。50頁。錢鍾書『七綴集（修訂本）』上海古籍出版社1985.12 / 1996.2第4次印刷。104-105頁。錢鍾書著、中島長文訳「林紆の翻譯（下）」『颯風』第42号2007.4.15がある。
- 5) 謝菊曾「林紆稿費的找補」「涵芬楼往事」『隨筆』第6集1980.2。82頁
- 6) 『張元濟日記』上下 北京・商務印書館1981.9。102頁。張元濟著、張人鳳整理『張元濟日記』上下 石家莊・河北教育出版社2001.1。135頁
- 7) 樽本『初期商務印書館研究（増補版）』387頁
- 8) 王学珍ら主編『北京大学紀事（1898-1997）』北京大学出版社1998.4 / 2008.4二版。65頁 宋宏「第3章 章 豈有文章驚天下：五四時期京滬知識分子的公共生活」（許紀霖主編『近代中国知識分子的公共交往（1895-1949）』上海人民出版社2008.4。116-117頁）も同様。本稿に關係する人物について、1918年9月における給料の額を抜き出す。文科学長陳独秀300元、文科本科教授胡適280元、文本科教授錢玄同240元、文預科教授劉半農200元、文科教授兼国史編纂処纂輯員周作人240元。
- 9) 宗志文「蔣夢麟」嚴如平、宗志文主編『民国人物伝』第5卷 北京・中華書局1986.7。142-148頁。蔭山雅博「蔣夢麟」山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会1995.9.1。

344頁。ほかに、蒋夢麟『蒋夢麟自伝』北京・団結出版社2004.10、同『西潮与新潮 蒋夢麟回憶録』北京・東方出版社2006.1（「談中国新文藝運動」を収録するが全文ではない）など。

- 10) 高平叔『蔡元培年譜長編』中巻 北京・人民教育出版社1996.11。123頁
- 11) 「永光寺街」は、現在の前青廠胡同（琉璃廠西街を西にのびた横町）。陳錦谷編輯『林紆研究資料選編』上冊（福建省文史研究館編2008.6）に写真がかかげられる。
- 12) 鄭逸梅「書画潤例漫談」『文苑花絮』中州書画社1983.12。60頁。なお次の論文を参照した。澤田雅弘「潤例の発生と展開 明・清における文人売芸家の自立」『書学書道史研究』第7号1997.9.30
- 13) 王中秀、茅子良、陳輝編著『近現代金石書画家潤例』上海画報出版社2004.7 / 2005.9 二次印刷。105頁
- 14) 王芝青口述、范文通整理「我的絵画老師林琴南」薛綬之、張俊才編『林紆研究資料』福州・福建人民出版社1983.6。123頁

【統合版補記】

江曙「論商務印書館対林紆小説的重要作用」（『清末小説から』第122号 2016.7.1）は、林紆と共訳者が翻訳報酬を6対4の割合で分けていたと指摘している。

陳独秀の北京大学罷免

『林紓冤罪事件簿』補遺

未発表。陳独秀が北京大学を罷免された経過を探求する。この件については、定説がある。すなわち、陳は政治的な圧力により北京大学を自ら辞職したと説明されるのだ。しかし、事実は異なる。北京大学校長の蔡元培がひそかに進めていたのが陳独秀罷免であった。その理由は、陳独秀の私生活にある。結果として、中国近代史の研究者が、事実にもとづかない定説を信じ込んでいることがわかる。それが現在にまで訂正されることなく伝えられていることを明らかにする。林紓の文章に陳独秀を皮肉る箇所があることを指摘した。それらに関して、2007年、北京の該当場所（陳独秀故居、八大胡同、驛馬市大街など）に足を運んだ報告書を兼ねている。

1 北京大学をめぐるウワサが事実になるとき

「事実になる」というのは、実現したという意味ではない。風説風聞でしかなかったものが、実際に起こったように、実在したかのように、いつのまにか説明される。そのことを指している。

林紓批判の事実を追跡していたときだ。林紓について調べていくと必然的に五四直前の北京大学をめぐる諸問題に到達する。林紓批判をはじめたのが、錢玄同、劉半農、胡適であり陳独秀らの『新青年』集団だったのだから当然だろう。

錢玄同、劉半農と胡適は、ともに北京大学教授である。北京大学文科学長の陳独秀は『新青年』を編集してもいた。陳独秀を北京大学に招聘したのは蔡元培だ。だから、『新青年』集団は北京大学のなかの新派と重なる。また、その校長は蔡

元培だ。ゆえに、外から見れば、ということは学外にいる林紘から見ればといっても同じだが、蔡元培、陳独秀らの新派が集団で北京大学において活発な言論活動を行なっていることになる。

陳独秀は、反段祺瑞の急先鋒として安福倶楽部と敵対していたのは周知の事実だ。こちらは政治運動である。新旧思想の対立を政治運動に巻き込むことになったのは、北京大学についての風説風聞が流布したからだ。逆にいえば、政治運動へと転換するために陳独秀がそれを積極的に利用したという側面があることを否定することはできない。さらに加えて、林紘と蔡元培の往復書簡が公開されて言語思想問題をめぐる対立が表面化したように見える。陳独秀は、意図的に政治運動と言語思想問題を一挙に同時に取り込んだ。新旧両派の対立は、五四事件の直前に頂点をむかえた観を呈する。こうして北京の言論界は大騒ぎになった。それに関するウワサが上海などの各地に伝えられた。

それらのウワサすなわち風説風聞が、あたかも実際に存在したように説明する文章が、のちに多く書かれることになった。はたして、ウワサで伝えられた事柄は、実現したのか。私は、『林紘冤罪事件簿』において概略を説明しておいた。重複する箇所もあるが、もう少し補ってのべる。

北京大学をめぐる風説風聞

1919年の五四事件直前のことだ。北京大学をめぐって多くのウワサが流れた。よく知られている。林紘と北京大學校長蔡元培がかわした書簡も、それに関連して有名である。

問題は、北京大学をとりまく風説風聞と事実の区別がアイマイになっている点なのだ。伝えられる事柄のひとつひとつについて、事実かどうかを検討する必要がある。別に困難なことではない。実現しなかったものは、風説風聞である。実現したウワサは、その瞬間に事実となる。私はそのように区別している。

ところが、この簡単な確認作業が、現在にいたるまで実行されていない。

私から見れば、ウワサと事実の関係をわざとあいまいにしている。検証していないのではないかと疑う。多くの論文が、風説風聞をあたかも事実であったかのように記述していることをいっている。

研究者は、両者を混同してなにをしたか。結局のところ、風説風聞つまりウワサが事実であるようにあつかい、しかもその発信源、あるいは責任を林紘に押しつける。事実ではないと認識する人は、林紘らの守旧派が希望していたことだと説明する。他人の希望を云々するのは、あまりにも強引ではないか。それらは、証明できる性質のものではないからだ。

その代表が胡適だ。なにしろ当事者のひとりがそう証言しているから影響力が大きい。

校外の反対党は、安福部の軍人政客を利用してこの新しい運動を掣肘しようとした。1919年2-3月の間に外では風説があふれ、教育部がでてきて干渉するというものがあり、また陳胡銭らはすでに北京を追い払われたというものもいた。この種の風説は大半が不確かであったが、しかし反対党が心理で願望していることを明らかに示していた。^{*1}

文中に見える「陳胡銭」は、陳独秀、胡適、銭玄同を指す。

胡適は、反対党と書いている。だが、当時表面に出てきていたのは林紘ひとりなのだ。当然ながら反対党は林紘になってしまう。ここで胡適は、反対党、すなわち林紘の心理までを読み込んでいる。林紘がそう願望していた、と胡適は勝手に信じているだけだ。

胡適のいう「安福部の軍人政客」とは徐樹錚を指す。その息子徐道鄰は、『徐樹錚先生文集年譜合刊』（台湾商務印書館1962.6. 263頁）において次のように書いている。「林琴南氏は守旧派の中心人物で、父（注：徐樹錚）は当時思想上では守旧派に接近していた。ゆえに、林氏は父に政治上の力を運用して新思潮の人物を攻撃するよう希望していた」

驚くとはこのことだ。林紘、すなわち守旧派の希望していたことだという。親族の証言だから、と信じ込む人もいるだろう。だが、それが事実だとどうやって証明するのだろうか。証拠はあるのか。ここまでくると、先に結論があって立論しているとしか考えられない。文学革命を主張する新派に対して、武力を背景にして抑圧をしかける旧派の林紘という存在を印象づけようとしている。

実物以上にふくらませた林紓像が、陳独秀らの文学革命派によって作りあげられた。これが、わたしの到達した結論であった。

北京大学のウワサは、中国で広まっただけでなく日本にも伝えられた。同時代の日本人研究者が記録している。

日本の研究者が記録した当時の事情は、どのような資料にもとづいたものなのか。

情報源を探ることによってそれらの記録が事実をどの程度反映しているかを検討してみたい。

早い時期に北京大学の変化に注目した日本人は、ふたりいる。ひとりには吉野作造であり、もうひとりには波多野乾一だ。

ここでは、ふたりの論文だけに注目する。のちの研究に大きな影響をあたえたと判断するからである。彼らの見方が、のちのちまでも引き継がれている。つまり、事実だと受け取られているのだ。

吉野作造のばあい

1906年、吉野は袁世凱長男の家庭教師として天津におもむいた。のちに北洋監練処翻訳官として国際法を講義している。一時帰国することもあったが、中国から帰ったのは1909年だ*2。その経歴からすれば、当時の中国における政治思想問題について詳しいだろうという予測が生まれても不思議ではない。

五四事件の直後に発表された彼の文章に、北京大学をめぐる状況について述べる箇所がある。文学革命という呼称を使って説明している部分だ。発表の時期を見れば、同時代に生きた人の証言になっていることがわかる。研究者が注目するのも当然だろう。だからこそ、後に文集にも収録されている。それほど有名な文章だ。

吉野作造「北京大学学生騒擾事件に就て」『新人』大正8年6月号1919.6.1。

3-4頁

「一体兩三年來の北京大学に於ける新思想の勃興は実に著しいものがあつた、総長の蔡元培君の采配の下に欧米の新空氣が極めて濃厚に漂ふて居た。而して最

近は、「新潮」或は、「新青年」と云ふ様な雑誌を発行して盛に新思想新文学を鼓吹して居る。而して彼等は之を「文学革命」と云つて居る、此の新運動の陣頭に立つて花々しい武者振を示した闘將に、陳^{ママ}徳秀君胡適之君あり、錢玄同君あり、傅斯年君ありて、或は孔孟の教の時世に適せざるを説いたり、或は言文一致の文体を鼓吹し、甚しきは、エスペラントを公用語とすべしと説くものさへあつた。此処に於て旧派の学者は愕然として驚ろき、今年の春以来非常に反対者をいぢめ上げて居る、而して此の派の云ふ処は即国粹保存と、礼教維持とである、最近林琴南が蔡総長に猛烈な手紙をやつた事が八釜しい問題になつて、所謂新旧思想是非の論が非常に沸騰した、而して、つい先頃新運動の陣頭に立てる前記の四教授が免職せらるに及んで、学生の憤慨が其の極に達した、而も此の免職が北京に於ける旧派のなす所なりと聞いて彼等は、更に勇を鼓して思想上の革命を起さずんば已まずとするの決心をして居る。之を要するに北京大学教授学生を通じて一には世界的思想の影響にも依るが、最近著しき進歩を示して居るのは我々の見逃す事の出来ない現象である」

当時の北京においては、いわゆる新旧思想問題が沸騰し、それに北京大学の人事問題がからんでいる。このことが、吉野の説明によって理解できる。

上文から関係部分を私なりに箇条書きにすると以下ようになる。

- 1 . 北京大学で蔡元培采配のもとに陳独秀、胡適之、錢玄同、傅斯年らの闘將がいる。
- 2 . 『新潮』『新青年』を発行して新思想新文学を鼓吹する。
- 3 . 「文学革命」と称し、孔孟の教えに反対し、言文一致文体を鼓吹し、エスペラントを公用語にと主張する。
- 4 . 旧派学者が反対者をいぢめ上げる。
- 5 . 旧派は、国粹保存、礼教維持を主張する。
- 6 . 林紓は蔡元培に猛烈な手紙をやつた。
- 7 . 教授4人が免職された。

1 にあげられた人々は北京大学の新派ということになる。校長が蔡元培、文科

学長が陳独秀だ。胡適と錢玄同は教授であり、傅斯年是学生である。ただし、吉野はそのように細かくは区別していない。

2の刊行物に『毎週評論』(1918.12.22創刊)をあげない理由は不明。

3は新派の主張を紹介して正しい。孔孟の教えは思想問題に、言文一致、エスペラントは文言との関係があるから言語問題となる。

4の「反対者をいじめ上げる」は内容が明らかではない。旧派学者の主張を具体的に紹介していないからだ。6の林紓書簡を指しているとも読める。

5は、旧派の思想を説明する。ここには言語問題は書かれてはいないが、文言と連動していると思っていいだろう。

6は、林紓が蔡元培へあてた書簡を指す。吉野は「猛烈な」と書いている。当時からそのような見方があったらしい。私信だから普通は表面にはでてこない。だが、この時は新聞『公言報』に公表されたから「猛烈な」印象をあたえたものか。だが、内容をよく検討すればどこにも「猛烈な」言辞は見えないとわかるはずなのだ。

7もよくいわれる。教授4人の免職と書いている。吉野があげている人名は、陳独秀、胡適、錢玄同、傅斯年だ。彼らの北京大学における当時の地位をくりかえせば、陳独秀は文科学長であって教授ではない。北京大学においては、文科学長は職員なのである。傅斯年は学生だ。つまり、教授は胡適と錢玄同のふたりにすぎない。ましてや蔡元培は校長であってこれも北京大学の職員である。だいいち4教授免職というが、実際にクビとなったのは陳独秀ひとりだけだ。吉野の説明は正確さを欠く。

判定する。1に出てくる人名は正しい。ただし、北京大学の職員、教授、学生の区別をつけないのは不十分だ。2の刊行物は正しい。『毎週評論』をあげないのが不足といえはいる。3にのべる新派の主張は正確である。4の「反対者をいじめ上げる」内容が具体性を欠く。5の旧派主張は、ほぼ正確だ。6の林紓書簡が存在していることを伝えている。ただし、内容は紹介していない。7の教授4人の免職は不正確だ。

吉野の紹介は、すべてが事実であるとはとてもいうことはできない。たとえば、「教授4人の免職」は明らかに事実と反する。つまり、事実によりつつも風説風

聞が混在した文章だといわざるをえない。しかも、錢玄同が王敬軒になりすまし劉半農とくりひろげた「なれあいの芝居」、私のいう捏造書簡については言及しない。ここは吉野論文の欠陥だ。

吉野は同時代に発生した事柄について説明するから、いちいち情報源を明記しない。同時代の証言者であれば、そうなるだろう。

吉野が論文執筆にあたって当然ながらもとづいた資料があるはずだ。私が追跡できるのは、当時の新聞、しかも日本で見ることは限られたものになる。

新聞報道

まず、上海で発行されていた新聞『申報』から見ていこう。

『申報』1919.3.4

「北京電 北京大学の教員陳独秀胡適ら4人は放校となった。出版物に係ずるといふ(2日午後3時)」

4人といいながら陳独秀と胡適のふたりしか名前をあげていない。しかも、くりかえすが陳独秀は教員ではない*3。当時の中国でもその違いを意識しなかったらしい。事實は、免職となったのは陳のみだ。その理由も出版物が原因ではない。かなりあやしい記事である。しかし、北京大学4教授の免職、罷免の風説風聞は、よく引用されている。くり返し報道されると、吉野が紹介するように噂がウワサでなくなる。事實として受け取られ、それが訂正されないままになってしまう。

これに先立つ新聞報道がある。北京大学学生の張厚載が2月26日付『神州日報』に書いた「学海要聞」という記事だ。陳独秀が解職され、大学文科の教授陶履恭、胡適之、劉半農らを辞職させるとある。錢玄同が含まれていないのが、たしかに奇妙だ。仮に錢玄同をいれるとすれば人数だけを見れば5人になるではないか。ということは、「4人」といいながら、またこれが広く伝えられているにしても、もとがウワサだから個人名を確定できないとわかる。数字の「4」だけがひとり歩きした。

北京大学教授の複数について辞職免職だと報道されている。しかし、事實は職

員の陳独秀文科学長のみが対象であった。この事実をおさえておきたい。現在もこまかい事実、たとえばこの文科学長は職員だということなどを無視したままに書かれる文章が多いということを私は指摘している。

次の静観論文は、当時の北京大学の状況を説明して重要だ。後日、別の新聞に無断引用されている。それくらいに注目を集めたといってもいい。「北京大学における新旧の隠れた流れ」と題する。長いから区切って翻訳し所感をのべる。

静観「北京大学における新旧の隠れた流れ [北京大学新旧之暗潮]」 『申報』
1919.3.6

「国立北京大学は、蔡子民（注：元培）が校長になってから様子が一変した。特に文科が生き生きしている [尤以文科為最有声色]」

注目してほしい。筆者の静観は冒頭に「特に文科が生き生きしている」という表現を使用している。この部分は、北京大学の変革について好意的に見ていることがわかる。

「文科学長陳独秀氏は、新派首領と自任しており、平素から新文学を主張して力を尽している。教員の中で陳氏と気脈を通じている [沆瀣一氣] もには胡適、錢玄同、劉半農、沈尹默などがいる。学生は呼びかけに応じて師のいうことにしたが、いそのことばを張りあげるものも少なくない」

前の部分で好意的な語彙を使っていると書いた。だが、ここの「気脈を通じている」は、よい語感ではない。つまり平衡を保って説明しようという態度なのだろう。だからこそ「静観」という筆名*4を使用している。ここで述べているのは、陳独秀文科学長のほか4名の教授たちということになる。学生たちはその師に従っている。

「その主張はつぎのようなものだ。文学は世界思潮の趨勢に応じなければならず、もしわが中国歴代に伝わるものが飾り立てて迎合する貴族文学、陳腐で見栄っ張りの古典文学、まわりくどく難解な山林文学であるならば、根本からそれらを打倒しなければならない。そうして、^マ平民の抒情の国民文学、新鮮で誠実な写実文学、明瞭で通俗な社会文学にかえる。これが文学革命の主旨である」

いうまでもない。これは、陳独秀が「文学革命論」（『新青年』第2巻第6号1917.2.1）

で展開した文学革命軍の3大主義を引用している。念のため以下に示す。

飾り立てて迎合する貴族文学を打倒し、平易で抒情の国民文学を建設せよ。
陳腐で見栄っ張りの古典文学を打倒し、新鮮で誠実な写実文学を建設せよ。
まわりくどく難解な山林文学を打倒し、明瞭で通俗な社会文学を建設せよ。

静観は、原文の「平易的」を「平民的」に誤植したかあるいは勘違いした。

「胡適氏が文科哲学門を担当してからのち、新文学の思潮を大々的に主張しますます盛り上がり、それは阻止することができなかった。前後してその議論が『新青年』に述べられており教授される哲学講義も白話文体にかえている」

胡適が文科哲学門の教授であることを正確に把握している*5。この文章の筆者静観は、北京大学の内部状況について相当に詳しいといっていだろう。

「近頃、その同派の学生が雑誌を組織して『新潮』というが、その学説を宣伝している。『新潮』のほかに『毎週評論』という印刷物が発行されている。その思想議論は、旧派文学に反対するばかりか破壊し肅清したいと考えている。すなわち社会に伝えられ残っている思想はその不適合の点を直接間接に発見しこれを攻撃しようというのだ。人類社会の組織と文学は、もとは密接な関係がある。人類の思想は、さらに文学の実質にある。旧文学に反対するからには、当然、旧思想に反対せざるをえない」

文学革命派の刊行物を紹介する。『新潮』『毎週評論』および『新青年』だ。その目的が旧文学に対する破壊と肅清であると見抜いている。自然と旧思想に反対することになる。

「同時に、対立するものとして旧文学一派がある。旧派は、劉師培氏を首とし、そのほかに黄侃、馬叙倫らがいる。劉氏と結びあって声援するものだ。くわえて国史館の老先生、たとえば屠敬山、張相文の一派も新文学派を蛇蝎のように見て、劉黄に深く同情をする。劉黄の学は、音韻説文訓詁を研究することがすべての学問の根本だと考えている（中略）」

ここでは、北京大学内における旧派の系統を説明する。つづく箇所（中略とした）で彼らの学問傾向を解説しているが、本稿とは直接の関係がないので省略す

る。

もう少し引用をつづける。

「従来、大学の教壇は桐城派の古文家によって占められてきたが、民国になって章太炎学派がこれにかわって勃興した。姚叔節、林琴南の輩は、劉黄らの後輩が高みにいることを目撃して文芸が衰微した感を抱くの免れない。しかし、もし新文学派の主張を見て、それが荒唐無稽だと認めるとすれば、その禍は人々におよんで大きな災厄であるのと異ならないだろう。転じて太炎の新派が反対に規則を汚していると考えるならば、まだそのほうが近いだろう。最近、劉黄の諸氏は陳胡らと学生が手を組んで種々の印刷物を発行しているのを見て、『国故』という雑誌を組織した。組織の名義は学生となっているが、主筆がとりしきり、闘士教員が実はその多数を占めている」

前に引き続いて大学内の学問的系統をいう。林紓の名前が出てくるのは、彼も改称前の北京大学に教員としてつとめていたからだ。旧派が対抗して出版したのが『国故』雑誌となる。

「学生はもより新旧両派にわかれ、それぞれその師のいうところを主とする。2派の雑誌は、互いに旗幟鮮明にして論争を行なう。将来、真理はこれにより定義が明らかになり、きっと学者の脳を絞りあげて文化に裨益するところがあるに違いないだろう。ただ、その弁論の範囲を忘れそれぞれが気ままに罵言で報復することは願っていない。2派にはさまって、しかも調停能力を持つものが海塩の朱希祖氏である。朱は章太炎の高弟でもある。国学に詳しく、かつ世界文学進化の道にも明るい。ゆえに旧文学の整理のほかにも新文学を組織することも希望している。彼のいわゆる新しいものとは古い範囲を脱却したのではなく、その手段は破壊ではなく改良にある」

新旧両派の中間に朱希祖が位置していることをいう。北京大学内における思想傾向の分布図を説明しているとわかる。表面上は新旧両派が雑誌を発行して議論しているのが注目されるにしても、それらとは違う考えも存在していることを指摘するのだ。それを見ても、北京大学の内部事情に詳しい人物の筆になる文章だと推測できる。外部の人間には、ここまで書くことはできないだろう。

「過日、教育部が大学に訓令を発して陳銭胡の3氏を辞職させたと喧伝された。

さらに、この提案は元首から発されたもので、元首が発動したのは国史館内の老人が進言したからという。しかし、記者が詳細に調査したところそのような事はなかったと判明した。これらの話がどこからきたものか、まったく不可解である」

吉野は、北京大学の4教授が免職されたと書いていた。静観は、その事実はないと断言している。静観の文章は、吉野より以前の新聞掲載だが、吉野の文章には影響をおよぼさなかった。おまけに、こちらでは陳(独秀)銭(玄同)胡(適)の3教授だ。中国でも陳独秀文科学長が職員であって教授ではないという認識が当初からなかった。吉野が区別しないのも当然ということになる。

教授辞職を進言したのは、ここでは国史館の老人になっている。元首すなわち徐世昌から教育部に命令が下されたともいう。もとが風聞風説だから、各種各様の意見がでてくる。のちには、これに議員の張元奇、教育総長傅增湘が付け加わる。さすがに、この時点では軍人の徐樹錚はまだ登場していない。

傅斯年は「新潮之回顧与前瞻」(『新潮』第2巻第1号1919.10.30)において、進言したのは「文通先生」すなわち馬相伯(建忠の兄)だと名指ししている。根拠はなにもないにもかかわらずだ。北京大学学生である傅斯年を書くから、知らない人が読むと事実だと受け取りかねない。

静観論文が重要である点は、まさにつぎの箇所にある。すなわち、北大教授の辞職説は、事実無根だと明記していることだ。北京大学の人事問題について、国史館内部からの進言もなく、行政も動いていないと書かれている。にもかかわらず、その事実があったかのように日本人にまで固く信じられているのは、なぜか。そのようなウワサがあると書く方が刺激的でかつ現実的だと判断されたのか。それとも、陳独秀が罷免されたのは事実だから、そこから類推して3教授とか4教授の免職説が広まったのかと考えたりする。さらに深めれば、複数教授の罷免ということにして陳独秀らが積極的にウワサを流した、と私は疑うのだ。

そうして結びになる。

「新文学諸君にお伝えしたい。中国文学が腐敗の極みであれば、世界の潮流にしたがい改革につとめなければならない。諸君が改革を提唱し世俗の大反対を顧みず文学の革新を求めるのは、その意図はまたすばらしい。ただ、その手段はゆ

るやかにするのがよく、敵を多く作らないように、また旧文学の価値をすべて抹殺することのないように」

終わりのこの部分に注目してほしい。文学革命派の意見に賛成しながらも、旧文学を全否定すべきではないことを主張している。改革の必要を認めながら、ゆるやかに実行することを提案している。まことに常識的な静観の意見だ、と私は理解する。逆から見れば、おだやかに、と意見を出したくなるほどに、文学革命派の急進的な態度があり、他者を批判する論調の激しさが現実存在していたことの証拠となるのだ。

林紆の蔡元培あて書簡は、この後の3月18日付『公言報』に公表された。時間的に見て、静観の文章に林紆書簡への言及がないのは当然だ。

静観の該文は、北京大学の思想分布状況の説明ということができる。4教授免職については、はっきりと事実ではないと書いてもいる。たしかに執筆者名のように冷静な文章であるといえる。

ところが、静観の当該文章をほとんど全文近く無断借用、すなわち盗用しながら、最後部分だけを書き換えた文章が『公言報』に掲載される。そして、有名であるのは、盗用したこの『公言報』の記事の方なのだ。

『公言報』(1919.3.18)に掲載された無署名「北京学界における思潮変遷の近状を見られよ〔請看北京学界思潮变遷之近状〕」という。

広く知られるようになったのには理由がある。蔡元培にあてた林紆の手紙が該紙に公表されたとき、その「まえがき」のような扱いで同時掲載されたからだ。しかも、林紆の書簡とともに新聞記事も、いくつかの刊行物に転載された。たとえば、『北京大学日刊』(1919.3.21)、『新潮』第1巻第4号(1919.4.1)などだ。前者は北京大学の刊行物だし、後者は文学革命派のものだ。新聞記事は一挙に著名な存在となった。ただし、当時の誰も、また、現在の研究者はひとりとして『公言報』の記事が静観論文からの盗用だとは指摘していない。その経過などどうでもよいのだろう。そこに書かれている内容が重要だ、という判断かと思う。

『公言報』の記事は、静観論文の1,036字から964字を盗んだ。字数が異なるのは、『公言報』の記事には写し落としがあるからである。しかも、上に示したも

との文章の最後部分、つまり穏健な提案部分を次のように書きかえている。

「陳胡らは新文学を提唱するにあたって、旧文学のすべてを抹殺したばかりでなく、旧道徳を必ず捨て去り、倫常を排斥し、孔孟を罵り、さらには国語を廃してフランス語（注：エスペラントの誤り）を国語にせよと主張する。その粗暴で滅裂であるのは実に度を過ぎている。最近、林琴南氏の蔡子民氏にあてた手紙は、ゆうに千言をついやし学界の前途について深い悲しみを表わしている。もとの書簡を以下に公表するから読者は近頃の学風が激烈に変遷していることを知ることができるだろう」

静観の文章を盗用し、最後部分のみを削除し上のように書きかえた。静観が冷静におだやかな改革を提案したのに比較すると、『公言報』の締めくくりは文学革命派に対して不賛成であるという意思表示になっていることが理解できよう。静観は中立の位置にいて文章を書いた。だが、『公言報』記者は、表面上は反文学革命派の立場に近寄ったといえることができる。

『公言報』の記者が最後部分を書き換えたといっても、陳独秀と胡適の主張を誤って、あるいは曲解して伝えてはいない。彼らの考えを凝縮すれば上のようなになる。それには、賛成できないというだけのことだ。賛成できないということは、攻撃になるのだろうか。

たとえば、朱文華『陳独秀評伝 終身的反対派』（青島出版社2005.5第3版。106頁）では、次のように説明している。

「該報（注：『公言報』）1919年3月18日は、林紓の「致蔡鶴卿書」のほかに、「請看北京学界思潮變遷之近況」と題する長編評論を發表し、陳独秀らの「旧道徳を必ず捨て去り、倫常を排斥し、孔孟を罵り」という言論を再度攻撃し、さらに「その禍は人々におよんで大きな災厄であるのと異ならないだろう」といった」

ここには、攻撃したと書いてある。先入観をもって読んでいる。

静観は、北京大学教授の辞職はウワサであると述べていた。『晨报』（1919.3.10）にも「北京大学謠言之無根」と題する記事が掲載されてもいる。つまり、最近伝えられている北京大学での新旧思想の衝突により教員が罷免され『新潮』雑誌が封鎖されるという風説は、すべて事実ではない、という。ウワサは否定されても、

風聞は再び出現する。

『申報』にまたもや辞職がらみの記事が掲載される。しかも、政治家が登場してきて規模が拡大するのだ。

「傳増湘教育総長弾劾説の由来 [傳教育弾劾説之由来] 」 『申報』 1919.4.1

「近頃、北京大学教員学生らが発行する出版物は、多くが新思潮方面において主張鼓吹するものだから、旧思想者の反対を大いに招いている。これらの出版物の作者は、大逆不道でありしばしば不正常的な勢力をかりて圧力をかけていると見られている。これらの隠れた流れは、1日にして作り出されたものではない。最近、これらの旧思想者は、敵視を深め、先日張元奇君は教育部方面におもむき、これらの出版物が実に綱常名教の罪人であることを訴え、教育総長に取り締まるように要請した。その時、『新青年』『新潮』などの雑誌を持っていき証拠とした。もし教育総長が相当の制裁を加えなければ、新国会に教育総長の弾劾案を提出し、さらに大学校長蔡元培氏を弾劾し、大学文科学長陳独秀氏に攻撃的をしぼるとした。陳氏は古くからの同盟会会員であり、革命の時にはその功績がすこぶる大きかった。中西の学問に造詣が深く、平日は中国の学問および仏教の学説にも大いに力をつくしている。近頃はさらに学術方面に注力して学長という地位を失うことなど陳氏ははじめから気にしていない。ゆえに、この知らせが伝わると大学の方では陳氏が辞職すると説が出た。陳氏は辞職したあと、つづけて学術思想方面で尽力することができるし、同時に大学に対する外部の攻撃を免れることができる。しかし、学長の去就は陳氏個人とは十分な関係があるわけではないと大学は一般に主張している。しかし、全国最高学府は、外部の理由のない干渉を受けるべきではなく、ゆえに陳氏の辞職もあってはならない。新国会のなかで弾劾案の提出をいったところで、多数の議員の賛成を得なければならない。このたびの傳（増湘）総長弾劾の運動は、参院のなかの老人派少数の意見である。事実となるのはまったく困難だ。張元奇が傳総長に警告をしたというのは、恫喝にすぎない」

張元奇が傳増湘教育総長を弾劾するという風聞風説である。その背後には、傳増湘が蔡元培に手紙（3.26付）を送ったことがあるのかもしれない。『新潮』の

創刊後、新旧対立が激化したのを憂える内容だ。蔡元培は、4月2日付で返信（傅斯年代筆）を送った。『新潮』だけでなく『国故』も発行されていると説明する。ここでも彼の「包容主義」を述べるのだ（『蔡元培全集』第3巻284-286頁）。

傅増湘の蔡元培あて書簡は、当時公表されてはいない。だが、手紙が送られたという事実が、内容とは別の噂にふくらんだ可能性がある。弾劾うんぬんにしても実現しなかったのだから、ウワサだ。たとえあったとしても、この記事の末尾でいうとおりの恫喝だろう。しかし、その証拠はないのだ。矢面に立つのは、蔡元培校長と陳独秀文科学長だ。こちらには胡適らの名前は見えない。ウワサだからこのように内容がめまぐるしく変化する。

4月8日、北京大学は、予定されていた組織の変更について、時期を早めて実施することを決定した（後述）。実質的には陳独秀の文科学長罷免である。次の新聞報道は、この北京大学決定にもとづいたものだ。

「北京大学の消息 [北京大学之消息 陳独秀辭職]」 『申報』 1919.4.13

「聯合通信社北京9日の速達郵便。北京大学文科学長陳独秀は『新青年』雑誌において新文学を提唱し、かつ孔子の道が文化を阻害すると考えたため、旧派の容れるところとはならなかった。校長蔡子民は教育部の口出し [教育部之擾] にたえがたく、陳氏は蔡子民を困難な状況におくことを願わず、ついに本日（9日）書類を提出し辞職し、明日（10日）より登校しないことにした。陳氏にふだん同調している胡適之、錢玄同、劉豊 [半] 儂らは、現在なお変動はない」

文中にいう「教育部の口出し」は、前出傅増湘の蔡元培あて書簡だろうか。あるいは、『新青年』の名前がでてくるところから、『申報』4月1日で報道された張元奇の教育総長への圧力かとも考えられる。しかし、後者がはたして本当に実行されたかは不明だ。陳独秀が「書類を提出し辞職し」と書いているところにも注目する。これを見ると陳は辞職願を提出したらしい。それは、ありえない。あとで説明するが、陳独秀の罷免は組織改革にともなうものである。自発的な辞職ではないのだ。ウワサを新聞記事にただけ。

また、つぎのような報道もある。

4月4日（日本『大阪毎日新聞』1919.4.19付では7日）、北京政府総統徐世昌は教育界の人士20余名を招いて会談している。北京大学内部の対立を調停するようにと勧められたといわれるのだ。あるいは、政府は干渉しないと声明したとも伝えられる。そうすると、上の『申報』報道は、憶測をのべたにすぎない。あやしい記事である。

広まっている筋書きはこうだ。教育部からの圧力に直面して進退窮まった蔡元培だった。陳独秀は自らが辞職することによって蔡を救った。まことに理解しやすい。多くの研究者に好まれているこの筋書きは、新聞記事が発生源であった。しかし、これはかならずしも事実とは限らない。というよりも、なんの根拠もない。

少しさかのぼり、3月18日に、林紓は北京大学校長蔡元培へあてた手紙を『公言報』に公表した。3月21日、蔡元培の返書が『北京大学日刊』に掲載される。以上をふまえて次の新聞記事になる。

「北京大学与思潮問題」『順天時報』1919.4.15

「北京大学の一部分で新思想が勃興して以来、いわゆる国粹問題がこれに対峙し、近頃続々と本紙の読者倶楽部に投稿がある。ある情報通のニュースによると、上海で発行する新青年、北京大学学生が発行する新潮において言文一致の問題に関して大いに論じられているという。旧学派につらなる人士がこれを非難し、翻訳小説をよくする林琴南氏がその門下生の某君（もと北京大学学生）のことは信じて北京大学では孔孟を排斥する気勢があることをもって公言報上でそれを攻撃する論調を発表した。ついに新旧両思想が衝突するという奇観を呈している。しかし、北京大学内では学問の見地から、また文字上の研究のためであって積極的に旧道徳を打破し、旧思想を抑圧はしていない。校長の蔡元培氏は、最高学府の長として研究の態度でもって思潮については新旧の一方に偏らず、学者の態度をとっている。ゆえに北京大学内ではなんら思想上の衝突というべきものは実はないのだ、と云々」

もと北京大学学生某君とは、張厚載を指す。「もと」と表示されるのは、張は

3月31日に退学処分を受けたからだ。蔡元培が林紓に答えて思想の自由と包容主義を宣言したことを伝えている。

この記事によると、北京大学の内と外では状況が異なることになる。外の林紓たちとは新旧思想の衝突である。しかし、校長の蔡が思想の自由を唱える北京大学内は、新旧思想の衝突はない、という。

林紓が蔡元培にあてた手紙の内容はふたつだった。すなわち、北京大学において孔孟の教えと古文教育のふたつは堅持されているか、大丈夫か、というものだ。思想と言語の2問題が重要だという認識である。蔡元培は、そのふたつの質問に答えて、北京大学では両方ともに教育を継続していると述べた。加えて、思想自由だから教授たちの学外における発言行動は北京大学とは無関係であるとも宣言している。授業さえきちんと行なっていれば、学外の行動は放任ということだ。林紓はその回答に満足した。その旨、新聞に公開もしている（『大公報』3.25、『時報』3.26）。いたって普通の手紙のやりとりである。それを陳独秀らが、旧派からの大攻撃だと打ち上げた。『毎週評論』に関連の文章を発表する。さらに、新旧思想の対立という構造で大々的に特集した。それが、4月13日と27日の「対於新旧思潮的輿論」特集である。

中国における新聞報道には、風説風聞が含まれている。陳独秀の北京大学文科学長罷免は、もともと思想問題ではなかった。表面だけ追っているのは、底にある事実には到達することはできない。

つぎの波多野乾一の文章も同様である。

波多野乾一のばあい

波多野は、「北京大学事件」だと説明している。以下に引用する。

波多野乾一『現代支那』支那問題社、大阪屋号書店1921.1.30。93-94頁

「かくて文学革命の評語は遍ねく都中青年の間に唱へられ、改造の烽火は漸く天に冲せんとするに至つたので、守旧派の錯愕一方ならずその機関誌「公言報」は陳胡二人を孔子教の破壊者なりとして極力攻撃し、在野の旧学者林紓（琴南）は蔡元培に書を贈つて陳胡を攻撃すると共に大学校長としての蔡の責を問ひ、其

實際政治に牽動するや軍閥政治家の尤たる徐樹錚及び安福俱樂部は、新国会議員張元奇をして教育総長傅增湘弾劾案を提出せしめ、陳胡のみならず蔡をも引責辞職せしめ、一挙に新思想派を北京から駆逐し去らうとした。蔡は此間に在つて頗る立場に窮したが、結局一の声明を發して守旧派の意を緩和し、学長を廃して理科学長秦汾を教育部に送り、文科学長陳独秀を平教員にしたが陳は教育部の圧迫に堪え切れずして辞職して了つた」

波多野は、陳独秀と胡適のふたりだけをかかげる。軍人の徐樹錚が出てきた。しかも、議員の張元奇と教育総長傅增湘の名前もある。新聞報道を基本的にそのまま受け入れた結果となっている。波多野は、上記引用文とほぼ同じ語句を使用して説明をくりかえした（『現代支那の政治と人物』改造社1937.8.20。269頁。『赤色支那の究明』大東出版社1941.2.15 / 4.5再版。8-9頁）。

蔡元培は、政府からの圧力をかわすために陳独秀を文科学長からおろし、平教員にして北京大学を守った。陳独秀は、「教育部の圧迫に堪え切れずして辞職し」た。ある意味でこの理解しやすい説明が、のちのちまでも日本の研究者に受け継がれていることはすでに指摘しておいた。

結局のところ蔡元培は陳独秀を守りきれなかった。あるいは、立場に窮していた蔡元培を救うために陳独秀は自ら身を引いた、といたいらしい。だが、事実がその説明を否定する。

だいいち北京大学の文科と理科を合併するという改組は、これよりだいぶ以前からの計画であった。陳独秀を文科学長からはずすための改組なのである。私は「林紓を罵る快樂」においてすでに説明した。

資料的な不自由があったか。あるいは逆に、同時代を生きているという自信によるものだろう。波多野の見解は変更されることなく、より「精密さ」を加えてくりかえされることになる。

波多野乾一『中国国民党通史』大東出版社1943.8.10。224-225頁

「五・四運動は、当時支那黎明運動の総本山であつた北京大学を中心として行はれた。一九一六年袁世凱の帝制失敗し、黎元洪が大總統となるや、蔡元培仏国留学から帰国し、聘せられて北大校長となつた。これが北大新文化運動の発端で、

蔡は文科学長に陳独秀を据へ、その下に胡適・沈尹默・李大釗・周作人・錢玄同・劉半農等を集めた。これらの新知識連は、蔡をかついで、おのおのの分野において、奔放な主張をした。その傾向は、実に左のごとく多岐に亘つてゐる。

- (1) 孔子教排撃 (陳独秀・胡適・吳虞・易白沙等) 。
- (2) 文学革命 (胡適・陳独秀・錢玄同・劉半農) 。
- (3) 旧道德排斥 (高一涵等) 。
- (4) 家族制度破壊 (羅家倫・陶履恭) 。
- (5) 人道主義鼓吹 (周作人等) 。
- (6) 文化普及並びに宣伝。
- (7) 社会主義運動 (李大釗・陳独秀) 。
- (8) 無政府主義的傾向 (易家鉞・朱謙之・区声白・黄兼生等) 。

このうちで、最も成功したのは文学革命で、北大系統運動の主潮である。社会的にも最も反響を呼び起し、守旧派の嫉視を招いたのは孔子教排撃である。又、その当時は明顕でなかつたが、後に大影響を及ぼしたのは社会主義的傾向で、陳独秀グループは、後に中国共産党となつたのである。

このやうな種種の傾向の文化運動が、北大を中心として捲き起されると、北京における守旧派の錯愕一方ならず、その機関誌『公言報』は陳独秀・胡適を孔子教破壊者だとして極力攻撃し、在野の学者林紓(琴南)は蔡元培に書を送つて陳・胡を攻撃するとともに校長たる蔡の責任を問ひ、やうやく實際政治に牽動するや、段祺瑞派の総参謀長徐樹錚、及び段派の私党安福倶楽部は、新国会議員張元奇をして教育総長傅增湘弾劾案を提出せしめ、陳・胡のみならず蔡をも引責辞職せしめ、一挙に新思想派を北京から駆逐し去らうとした。蔡はこの間に在つて頗る立場に窮したが、結局一の声明を發して守旧派の意を緩和し、学長制を廃して理科学長秦汾を教育部の役人にし、文科学長陳独秀を平教員に落した。陳はこの圧迫に堪え切れずして辞職した。これがいはゆる『北大事件』で、実一九一九年三月のことであつた」

注目してほしい。守旧派の圧力に直面した蔡元培は、学長制を廃止し陳独秀を平教員に落として窮地を脱出しようとした。陳は辞職したのがいわゆる「北京大学事件」である。これが波多野の解釈だ。

驚いたことに、この事実と反する解釈は現代中国にまで生き残っている。後で説明することにしたい。

吉野の文章は、五四事件の直後に書かれたという意味で貴重である。波多野の論文も、たぶん多くの材料を当時の新聞報道によっているのだろう。それは理解する。だが、風聞風説を事実によって確認する作業がそれ以後に必要であったと私は考えるのだ。残念ながらその検証はなされなかった。のちの研究者は、ふたりが書いたことを事実だと受け止めた。そうでなければ、吉野、波多野らの論調が後代まで訂正されずに受け継がれるはずもない。中国でも同様だったから、日本独特の現象ではなさそうだ。

2 北京大学改組と陳独秀の罷免

陳独秀の北京大学罷免について、特定の見方がある。

あくまでも政治的対立から旧派の圧力によって免職を余儀なくされたとする。旧派とは林紘を指す。吉野作造のところで紹介した。念のために引用する。

「最近林琴南が蔡総長に猛烈な手紙をやつた事が八釜しい問題になつて、所謂新旧思想是非の論が非常に沸騰した、而して、つい先頃新運動の陣頭に立てる前記の四教授が免職せらるに及んで、学生の憤慨が其の極に達した」

波多野乾一の文章からも重ねて紹介する。

「在野の旧学者林紘（琴南）は蔡元培に書を贈つて陳胡を攻撃すると共に大学校長としての蔡の責を問ひ、其実際政治に牽動するや軍閥政治家の尤たる徐樹錚及び安福俱樂部は、新国会議員張元奇をして教育総長傅增湘弾劾案を提出せしめ、陳胡のみならず蔡をも引責辞職せしめ、一挙に新思想派を北京から駆逐し去らうとした。蔡は此間に在つて頗る立場に窮したが、結局一の声明を發して守旧派の意を緩和し、学長を廃して理科学長秦汾を教育部に送り、文科学長陳独秀を平教員にしたが陳は教育部の圧迫に堪え切れずして辞職して了つた」

陳独秀が北京大学を罷免された理由について、上記ふたりの解説は、ともに中国の新聞報道を鵜呑みにした一方的なものである。私はそう考えている。しかし、政治運動が原因となり外部の圧迫から陳独秀が辞職したというのは、研究者にと

っては魅力のある説明らしい。

陳独秀の親族だという呉孟明は「陳独秀和他的北大情結」(錢理群、嚴瑞芳主編『我的父輩与北京大学』北京大学出版社2006.11。78-79頁)において次のように説明している。

「1919年の北大では、蔡校長はわき起こる学内紛争と北洋政府からの内外ふたつの重圧にすでに直面しており、北大で当初陳を擁護していた数人の教授も、陳独秀を留めておくことは蔡元培と北大(たぶん彼ら自身でもあるのだろう)にとつていずれも不利であるにちがいないと考えた。社会においていくつかの小新聞が陳独秀を中傷する多くのデマをそれにあわせて作り上げたから、胡適までものちに湯爾和あての手紙において、「私(注：胡適)が当時いぶかったのは、当時の小新聞が書いたこと、町の風説はすべて信用のできないにもかかわらず、学界の指導者がそれを事実と考え動かすことのできない証拠だと見たことです。おかしいではありませんか」といっている。/当時、蔡校長は確かにふたつの困難な状況にあった。そこで3月26日の夜、湯爾和の家で小規模の会議をもち、陳独秀の去就について相談したのだ。(中略)会議において、湯爾和と沈尹黙は陳独秀を留めておくことはできないことを大いに主張し、蔡元培校長はもとは留めておきたかったが、しかし湯爾和らは小新聞の種々の中傷を大いに引用し、これは堂々とした高等学府では容認できないものであると言い張った。蔡はやむをえず、文理科学長制を廃止し、教務長を設け教授会によってすべて指導することにし、陳独秀は教授のままとした。これは明らかに陳独秀に対する急所をついた方法であり、湯、沈、馬(叙倫)らは、そうすれば陳独秀が憤然として去っていくことを知っていた」

これは、陳独秀罷免の決定がなされたとされる1919年3月26日の会談について解説している。小新聞の中傷を信じた湯爾和、沈尹黙らが罷免を強く主張し、蔡元培もそれを受け入れざるをえなかったとする(後述)。

夜の会議については、だいぶ後に明らかになった事実である。だが、呉孟明の説明は、波多野の見解と同じだと理解できる。以上を指して、現在に至るまで引き継がれた見方であると私はいふ。

呉孟明は、用心深く資料を引用して述べている。彼は、政治的な圧力を受けて

いた陳独秀を、北京大学内部の人間が見放したと説明したいのだ。しかし、呉は小新聞が書き立てたというデマの内容について触れていない。意図的にひとつとも言及しない。実は、陳独秀の妓楼通いである。親族としては述べたくない話題だったとわかる。

波多野も書いている。学長制を廃止して危機を脱出しようとした。つまり、陳独秀を罷免することを意味する。しかし、教授のままにおいたのは面子を保つための処置だった。

この説明は、奇妙だ。私がそう思うのは、まさにこの学長制廃止についてなのである。呉孟明も学長制廃止をあげて事態打開策だと説明している。ならば、学長制廃止は3月26日の会合以後でなければならない。私は、それが事実とは違うことを知っている。しかも、陳独秀は教授ではなかった。教授ではないから、罷免はそのまま失職を意味する。面子もなにもない。だから、私は異議を提出するのだ。

陳独秀に対する批判が反対派から出されていたのは確かである。なにしろ陳独秀は、反段祺瑞の先頭を走っていた。だからこそ、陳の私生活を含めて安福倶楽部からの批判が新聞に載った。デマ風聞が発生する理由である。ただし、陳独秀の私生活に触れず、政治的な動きのみを追跡すると、吉野、波多野、あるいは呉孟明のような見解になる。当時の新聞には、雑多な情報、つまり陳の私的な記事も掲載されていた。私がいうのは陳独秀の妓楼通いなどだ。しかし、吉野、波多野らはそれを無視した。信じるに値しないもの、あるいは状況把握には不必要だと考えたのかもしれない。現代の呉孟明に代表させるが、彼は、吉野、波多野よりも多くの資料、具体的に言えば胡適の湯爾和あての手紙などを読む機会を得ている。当事者の証言をより多く検討することのできる資料的有利さを持っている。だが、彼にとっては、それらは重要な意味を持たなかった。自分の意見には不必要だと考えて特定の箇所は無視した。資料検討よりも結論が先行しているのだ。

現在は、資料についていえば以前よりも利用できるものがふえた。たとえば、『北京大学日刊』が影印発行されている。これを見れば、文理科学長制の廃止が思いつきのよう決定され、それが即座に実行されたのではないことが理解できる。蔡元培が北京大学改革の全権を握っていたとはいえ、制度改革には踏むべき手順がある。それは、短期間にできることではない。

問題になっている北京大学の文理科学長制の廃止について説明しよう。

文理科学長制の廃止

『北京大学日刊』の1918-19年間に掲載された関連記事を掲げる。

はじめは、大学組織の問題からだ。全体の流れは別のところで説明する。今は、問題にしている文理科学長制についてのみ焦点をあわせる。

かなり以前にさかのぼり1918年10月末のことになる。

1918.10.30「本校擬在専門以上各学校校長會議提出討論之問題」

「乙 大学本科与分科大学」という項目で以下の文面がある。

「現在、文理両科にそれぞれ学長制を設けているのを大学本科に学長ひとりだけを置き、大学教授会が全体大会を開催して3名を選挙し、校長がひとりを選んでこれに任じる。任期は2年。ただし、重任してもよい」

北京大学について大規模な組織改革が計画されていた。そのなかの一部分だから見落としそうになる。注意してほしい。内容は、文理科の学長制を廃止するという提案だ。また、これ以後『北京大学日刊』では類似の表現を用いて報道していない。だが、陳独秀についていえば、これこそが重要な変革だといえる。文科学長が廃止されると陳の職は自動的に失われるからだ。彼が蔡元培に招請されて就任した文科学長という地位は、北京大学の職員であって教授ではない。その職が廃止になれば、いうまでもなく陳は失職する。

次の決定は4ヵ月後のことだ。

1919.3.4「文理科教務処組織法」

「3月1日評議会において文理科教務処組織法が以下のように決定され、夏休み後に実行される。/(一)教務処は各教授会主任によってこれを組織する」

学長制廃止は「夏休み後に実行される」と公表している。この時点で、そう決定したからだ。目にとめておいてほしい。

4ヵ月前、すなわち前年10月30日の記事では「学長」と呼んでいたものをここでは「教務処」と変更した。その長だから教務処長となる。どこが巧妙かとい

えば、文理科の学長制廃止について再び説明しないところだ。単に教務処とだけ
のべる。巧妙であるふたつめは、陳独秀という個人名は出さない。組織の変更だ
からその必要がない。気づかない人には、陳独秀が罷免になることは理解できな
い。しかし、事実は、前年の10月30日以前から陳独秀はずしが計画されていた。

問題は、胡適の湯爾和にあてた手紙だ。「3月26日夜の会議では、蔡氏はそ
の時に陳独秀を切る〔去独秀〕ことをまったく望みませんでした」はどうなる
か。

注目すべきは、3月1日の評議会で文理科学長制の廃止、すなわち陳独秀罷免
の方針はすでに決定されている事実なのだ。だから、26日の時点で蔡元培が陳
の罷免を望まなかったというのは矛盾する。さらに、湯爾和宅における会合であ
たかも学長制を廃止したかのように説明する従来の見方は、成立しない（例えば
最近の著作で李志偉『北大百年：1898-2008』北京・作家出版社2008.5。63頁がある。従来
の説明を踏襲して少し小説仕立てではあるが詳しい）。

湯爾和宅の緊急会議は、胡適がというような陳独秀の去就についてのものではな
い。胡は記憶違いをしている。それでは、夜中の12時までかかった会合の内容
は、なにか。学長制廃止の実施時期についてだと考えるほかはないだろう。つま
り、夏休み後に実行する予定だった計画を前倒しするかどうかだ。前倒し実施を
湯爾和らは主張し、蔡元培はそれを渋ったと解釈すべきだ。これが現在の私の見
解である。

1919.4.10「大学本科教務処成立紀事」

「理科学長秦汾君は、すでに教育部司長に任じられたため代理学長の職を辞去
する。文科学長陳独秀君もまたある事請のため休暇をとり南に帰る〔適文科学長
陳独秀君亦因事請假南歸〕。校長は特に本月8日に文理両科の各教授会主任およ
び政治経済門主任の会議を招集した。当日の参会者は、秦汾、俞同奎、沈尹黙、
陳啓修、陳大齊、賀之才、何育杰、胡適の8人である。参会した諸君の議決によ
り3月4日に発表した文理科教務処組織法を前倒しで実行し、施行細則を以下の
ように議決した：（下略）」

「文理科教務処組織法を前倒しで実行」する。それを説明した北京大学の公式

発表である。

文理科学長の廃止をいうのではなく、教務処が成立したことを宣言している。それも、はじめの予定よりも時期を早めて実行するという。表面上の理由は、秦汾の人事異動と陳独秀の休暇だ。

だが、事実はこの逆だった。陳独秀を学長からおろすために制度を変更したのである。ついでにいえば、北京大学教授会で陳独秀の1年間休暇が宣告されたという説がある。だが、『北京大学日刊』にはそれに類する記事はない。陳独秀の体面を保つためのことばであるらしいが、そういわれるだけ。その事実はないと考えていいだろう。ここにいう陳の休暇と混同されているのかもしれない。

上の文面をよく見てほしい。陳独秀が大学に対して意思表示したのは、休暇をとる、だ。辞職するという考えが表明されたわけではない。休暇なのだから、教務処を前倒しして成立させる理由には本来なりえないものだ。

陳独秀がこの時期に休暇をとって南に帰る、あるいは帰った、というのはどういうことか。彼は五四事件後の6月に逮捕されるまで、北京において『毎週評論』に執筆するなどの活動に没頭していた。南に帰る時間的な余裕はなかったはずだ。事実、南行の形跡を見ることはできない。

北京にいたはずであるが、8日の会議には陳独秀は欠席している。記事には名前が見えないからそうだろう。普通に考えて、奇妙である。北京にいるが重要会議に参加していない。一方で、代理学長の職を辞去するはずの秦汾は、出席しているではないか。それとも、陳は休暇願をすでに提出していたから会議に参加するようにという連絡がいかなかったものか。

この間の事情について、説明はない。はっきりしないものを私は感じる。

何度もくりかえすが、学長職の廃止にともない陳独秀は失職することが決定している。しかし、その実施は夏休み後の予定だ。それまでは文科学長の任にあるから、彼は休暇願を出して故郷に帰ろうとした。陳独秀にその考えはあったが、しかし、北京の状況が陳にそれを許さなかった。以上のように理解しておく。

陳独秀の南方行に関連して少し補足する。

北京大学を罷免されたのち、五四事件をへた6月に陳独秀は北京の新世界でピラをまいて逮捕された。

陳はその時の口述書において、墓参りのために休暇願をだして南に帰った、上海で上海学生聯合会の友人から北京でまいてほしいとピラ1千450枚を受け取った、と証言している（劉蘇選編「五四時期陳独秀被捕档案彙編」『北京档案史料』1986年第1期（創刊号）発行月日不記。5頁）。

しかし、ピラ「北京市民宣言」は、陳独秀が自ら書いたものだ。英文に翻訳したのは胡適であり、陳と一緒に印刷所へ持ち込んだのは高一涵だった。高自身がそう説明している（高一涵「李大釗同志護送陳独秀出險」『文史資料選輯』第61輯1987.10.10。影印本。61頁）。

以上に基づけば、陳独秀の口述は虚偽ということになる。事実を話せば高一涵らが逮捕される可能性があると考えたのだろう。陳独秀は、仲間をかばってウソの証言をしたと解釈する。ただし、陳独秀が釈放された9月時点で、関係機関の手によって事実の究明はなされていない。あやふやにしたままであった。

さて、教務処成立の予定を早めて実施せざるをえなかった理由があるはずだ。3月26日の緊急会議しか私には思いつかない。そこでなされた議論は、陳独秀の妓楼通いの問題だった。妓女傷害事件がからんでいる。ただし、証言があるだけだ（後述）。

以上をまとめれば、次のようになる。

蔡元培は慎重に、しかも時間をかけて、陳独秀についての対策を準備していた。蔡が進めていた北京大学の改組にそれを組み込んだ。文科学長と理科学長の職を廃止することがその具体的内容である。学長制を廃止すれば、陳独秀は自然に失職する。陳独秀は、蔡元培自らが北京大学に招聘した人物だった。遠回しの方法でしか対応できなかったと理解できる。また、表立った処分をするよりも賢明な処置だと蔡元培は考えたのだろう。北京大学の名誉を守る必要が蔡にはあった。ゆえに、『北京大学日刊』という公的な機関紙においては、最後まで陳独秀罷免ということばは出していない。あくまでも大学の改組にともなう結果にすぎないのだ。しかも、直接の理由は陳独秀からの休暇願であり、陳は南に帰る、と大学は発表した。陳独秀は、大学を罷免されたあとに発生した五四事件後も北京にいて政治活動を継続している。大学側の発表は、陳独秀の休暇願をあたかも辞職願のように見せかけたことは明らかだ。

陳独秀が安福俱樂部から攻撃を受けていたのはそうだろう。陳の思想的政治的立場が、北京大学から追放された主要な原因だ。多くの研究者はそう見ている。さかのぼれば、当時の新聞報道もそのように述べている。だから、吉野、波多野も同じ見方を示し続けた。だが、北京大学罷免の理由は、それら政治的理由とは別のところにあったと見なければ、蔡元培が実行した大学改組と結びつかない。同時に、蔡の表明する「思想の自由」と「包容主義」にもかかわっている。

ということで、蔡元培の改組構想を検討する必要がでてくる。彼の大学改組構想と文理科学長制の廃止は、はたして整合性があるのか。

蔡元培の大学改組構想

ここで使用する資料は、主として高平叔『蔡元培年譜長編』中冊（北京・人民教育出版社1996.11）である。

1917年1月13日、蔡元培の推薦で陳独秀を北京大学文科学長に任命する辞令がでた（5頁）。前年1916年12月26日に蔡元培の北京大学校長が発令されている。その当日、北京に来ていた陳独秀を訪問して文科学長就任を約束しているから、その仕事のあわたしさがわかろうというものだ。

以下は、日付をかかげて動向を示す。

1917.1.27「大学改制之事実及理由」（部分掲載）

「（1）大学にはもっぱら文、理の2科を設置する。法、医、農、工、商の5科は、別に独立した大学にし、その名前は法科大学、医科大学などとする」（7頁）

該文は、『新青年』第3巻第6号（1917.8.1）に全文を掲載している。こちらを読んで目を引くのは、文理両科の拡張と法科の独立、商科の法科へ統合、工科の北京大学からの切り離しだ。

1917.5.9 外交総長あて手紙

「以後、北京大学では文、理の2科のみを行ない、そのほかの各科は縮小主義を取ります。預科も年限を縮め、夏休み後に本科に編入します。学制を改革するので教員の人数は当然減少します」（30頁）

文理両科を重視していく方針を固めている。また、教授能力が乏しいと判定した外国人教員を罷免したので裁判沙汰にもなっている。

1917.5.23 北京教育部批准

「北京大学にある商科を商業学門に変更し法科に配属する」(38頁)

ここまで蔡元培の計画は、順調に実行されているといえるだろう。

1917.12.17 「北大二十周年記念会演説詞」(高平叔編『蔡元培全集』第3巻北京・中華書局1984.9。114-116頁所収)

「本年(注:1917年)の改組は、文理科両科について特別に注意をし、ドイツの大学における哲学科の発展にあわせる」(115頁)

北京大学の中枢を文科理科に置いていることを蔡元培自身が宣言している。

ただし、計画はそうであったとしても具体的には問題なく進んだとはいえない。北京大学内に各種研究所研究会を設置し、進徳会を組織し、夜学、消費公社を創設するなど多忙をきわめる。入試時期を迎えた1918年6月には学生募集がはじまる。組織の統廃合が一挙にすすんでいるわけではない。

1918.6.5 「本校招考簡章」(『北京大学日刊』)

文理工法の5科を設置している。修業年限も変更になっており、預科2年、本科4年で卒業後は学士と称することができる、などの説明がある。従来通りの学科組織である。文科理科へ特化する道はなお遠い。

このあとのことだ。文理科学長制の廃止案が突然提出される。前出『北京大学日刊』(1918.10.30)の「本校擬在専門以上各学校校長会議提出討論之問題」にほかならない。

その後の動きを復習すれば、1919年3月1日の大学評議会で学長制の廃止を決定し、4月8日の会議でその実施を繰り上げることになった。

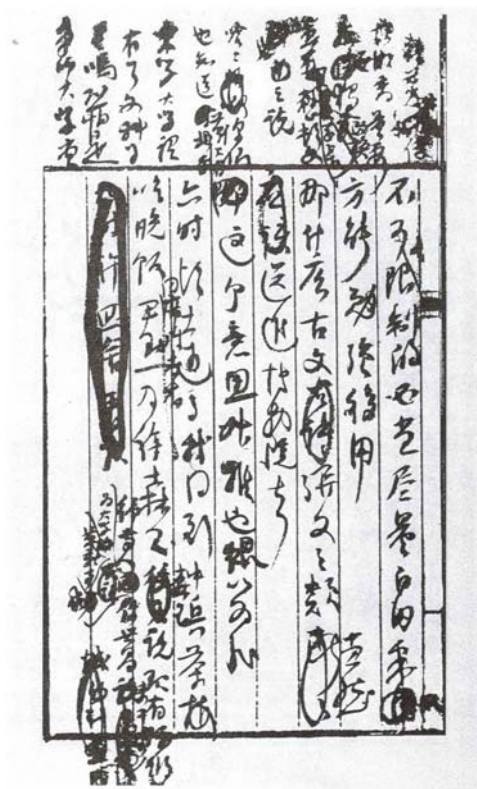
以上の経過を見れば、蔡元培の文理科重視とその学長制の廃止が結びつかない。私は、そう考える。文理2科を重視するならば、それぞれの学長の権限を強める必要がある、と普通はなるのではないか。ところが、逆に廃止してしまうのだ。

改組の準備段階では陳独秀の名前がまったく出てこない。名前を表面に出さないように注意深く進めたとわかる。

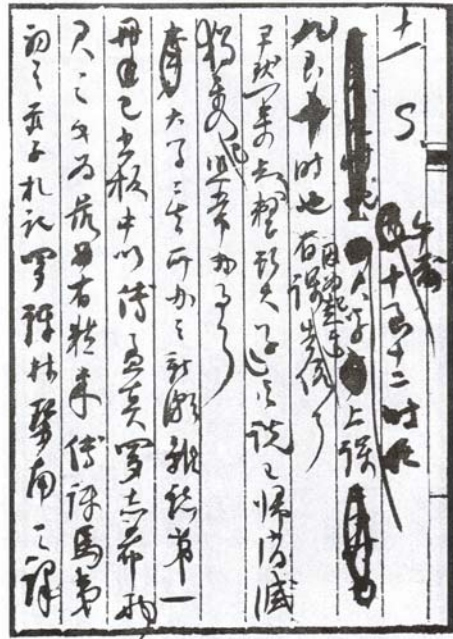
北京大学教授である錢玄同は、改組が進行していることをどれくらい認識していたのか。彼は、自分の日記に少し言及している。

錢玄同は、沈尹默、徐森玉らと夕食をともした。そのとき、徐森玉がいうには、ある人が「大学を革新するために徐世昌に干渉するように求め……学長を交代させて文科を整頓するという説がある」(『錢玄同日記』1919年1月5日付。影印本*6)と。

張耀杰の説明によると徐森玉は教育部の秘書だという。錢玄同日記で興味深いのは、錢は教育部秘書と面識があること。これがひとつ。ふたつ目は、その内容が学長交代による文科の整頓ということだ。



『錢玄同日記』1919年1月5日



同左 1919年1月11日

北京大学内部の改組だから外の社会からは見えにくい。だが、直接に関係している教育部では早くから情報を把握していたことがわかる。

約1週間後、銭は、沈尹黙から「大学を整頓する[整頓大学]」という説はすでに消滅し、陳独秀はいつも通り仕事をしている、と聞かされる(『銭玄同日記』1919年1月11日付)。

他人の口から情報が伝えられている。この書き方から、陳独秀問題について銭は部外者だとわかる。だが、大学の改組が陳独秀に関係しているということは、銭玄同も知っていた。だから、「大学整頓」ということばにつづいて、陳独秀の名前が自然にでてくるのだ。

ただし、「大学整頓」説の消滅とは、なんのことがよくわからない。私は改組についてのちの経過を知っている。消滅どころか、計画は着実に実行されていたからだ。ゆえに、1月の段階において改組計画の消滅といわれても、納得することはできない。それとも、情報が錯綜していたのか。身近にいれば豊富な情報を得られるだろう、と普通は推測する。しかし、このときの銭玄同日記を見るとそうでもなさそうだ。

結果からすれば、蔡元培は大学改組にむけた計画を深く静かに実行していた。

最終的には、改組の前倒し実施を緊急発表することになった。陳独秀の休暇願を前面に押し出した。これが北京大学の公式発表である。蔡元培にしてみれば、それしか報道のやり方はなかったであろう。陳独秀の素行の悪さ、すなわち妓楼通いが罷免の理由である、とは社会に公表できるわけがない。

文科学長と理科学長の職制を廃止する。これが蔡元培の考えた陳独秀対策だ。北京大学改組のなかに巧妙に織り込んだ。しかし、この事実に注目する人はあまりいない。私が、蔡元培の計画した改組の過程を注視するのは、文科学長が陳独秀だからだ。上にも触れたように、陳独秀は蔡元培から特に招聘されて北京大学文科学長に就任している。その陳が、なぜ大学を罷免されたのか。その経過に密接につながっているのが大学改組だと私は見ているからだ。

新聞紙上で報道されるのは、北京大学の新旧思想の衝突が教育部などの機関を巻き込んで、結局のところ陳独秀の辞職、あるいは罷免になったという見方だ。私は、そうではないと考える。陳独秀の思想問題が罷免の理由になるならば、蔡

元培が高らかに宣言している「思想の自由」と「包容主義」に抵触する。蔡は陳を守りきれなかったというのであれば、蔡の主義とは矛盾する。ゆえに、北京大学罷免の原因は、陳独秀の思想問題ではなく、彼のドロドロした私生活だと考えざるをえない。これについては蔡元培も弁護する余地がなかった。だが、陳独秀は蔡が特別に招請した人物だった。大学の体面上も直接に罷免することはできない。大学の組織改革を口実にしたのである。それによく似た前例が、すでにあった。大学改革をすすめるなかで徐某が罷免されている。怨んだ徐某は蔡元培を中傷する文章を新聞に発表し、そのとばっちりが林紓におよび冤罪事件を引き起こしてもいる（別稿参照）。

北京大学の組織改革を行なうことが必要だと蔡元培が考えた陳独秀の私的行為はなにか。つまり、妓楼通いのことである。

3 林紓の皮肉

林紓が発表した短編小説「荊生」と「妖夢」は、実在の北京大学関係者をモデルにしている。これは有名な話だ。「荊生」では田其美、金心異、狄莫らが登場する。それぞれ、陳独秀、錢玄同、胡適を指す。「妖夢」では校長元緒、教務長田恒、副教務長秦二世という人物名だ。蔡元培、陳独秀、胡適ということになっている。私がここで紹介するのは、別の箇所に出てくるある語句についてである。

「驟馬市引東洋車之人」

林紓は、短編小説「妖夢」を『新申報』(1919.3.19-23)に発表した。前作の「荊生」(同紙1919.2.17-18)^{*7}とともに北京大学の教授たちをモデルにし中傷したとして文学革命派から批判されて現在にいたっている。批判され続けてほとんど90年近い時間が経過した。

「妖夢」では、「校長元緒」が蔡元培を指す。「元緒」が亀を意味しており中国ではこれが罵りとなる。そう解説されるのが普通だ。小説だから誰をどのように書いても自由である。このように私が説明しても、たぶん耳をかさないだろう。

私が興味を感じるのは、著者林紓が該作品につけ加えた附記のほうだ。この附

記については、言及されることがない。

該作品の新聞連載は5日間だ。林の文章が5段落にわかれているのがそれと一致する。そのうち附記は2段落あり、2日にわたって掲載された。全体の約4割を占めている。

書き出しの大意はこうだ。「死文字」という3文字は「田恒」がひとり言い出したことではない。イギリスのディケンズがかつてそう言ったことがある。ラテン、ローマ、ギリシアの古文を指している。だが、ディケンズでさえラテン語を滅ぼすことができなかった。

小説の登場人物田恒は、陳独秀がモデルだということになっている。ただし、「死文字」「活文学」などを実際に使用したのは胡適（「建設的文学革命論」『新青年』第4巻第4号1918.4.15）だ。

林紓にしてみれば、陳独秀であろうが胡適であろうが文学革命派というだけで十分なのだろう。発言者について細かい区別をしていないだけのこと。

林紓が北京大學校長蔡元培にあてた手紙のなかで述べた内容をここでもくり返しているにすぎない。

この文脈においてつづけて次のように述べる。

「白話でもって白話を教えるだけで、その道理がどこから出てくるのかを知らなければ、驛馬市大街で人力車を引く者でも白話を知っているのだからどうして教える必要があるか [若但以白話教白話不知理之所從出，則驛馬市引東洋車之人，亦知白話，何用教耶？]」

私が注目するのは、「驛馬市大街で人力車を引く者」という語句である。これは、蔡元培あての手紙に出てくる「車を引いて豆乳を売る輩 [引車売漿之徒]」と同類である。

後者は、白話をしゃべることができれば小商人であろうとも大学の教授になることができることを意味している。ただし、福建広州の人間ではいけない。北京天津という地に限られる。林紓が意図したのは、軽い皮肉以外のなにものでもない。なにしろ、林紓自身は福建出身でありながら北京大学の前身である京師大學堂の教員をしていたことがあるのだ。

人力車夫が豆乳売りに対応している。林紓の述べている豆乳売りが蔡元培の父

親を当てこするというのは間違っている。林紘ではない別人が、デマを流したのだ。このことはすでに説明した。

「驛馬市引東洋車之人」を「ラバと馬を売る市場の人力車夫」*8とは読まない。なぜなら北京には驛馬市大街という場所が実在しているからだ。明らかに通りの名称である。

では、驛馬市大街の人力車夫である理由はなにか。

北京にはいくらでも大通りはあるではないか。北京大学の景山廟大街でもいい。

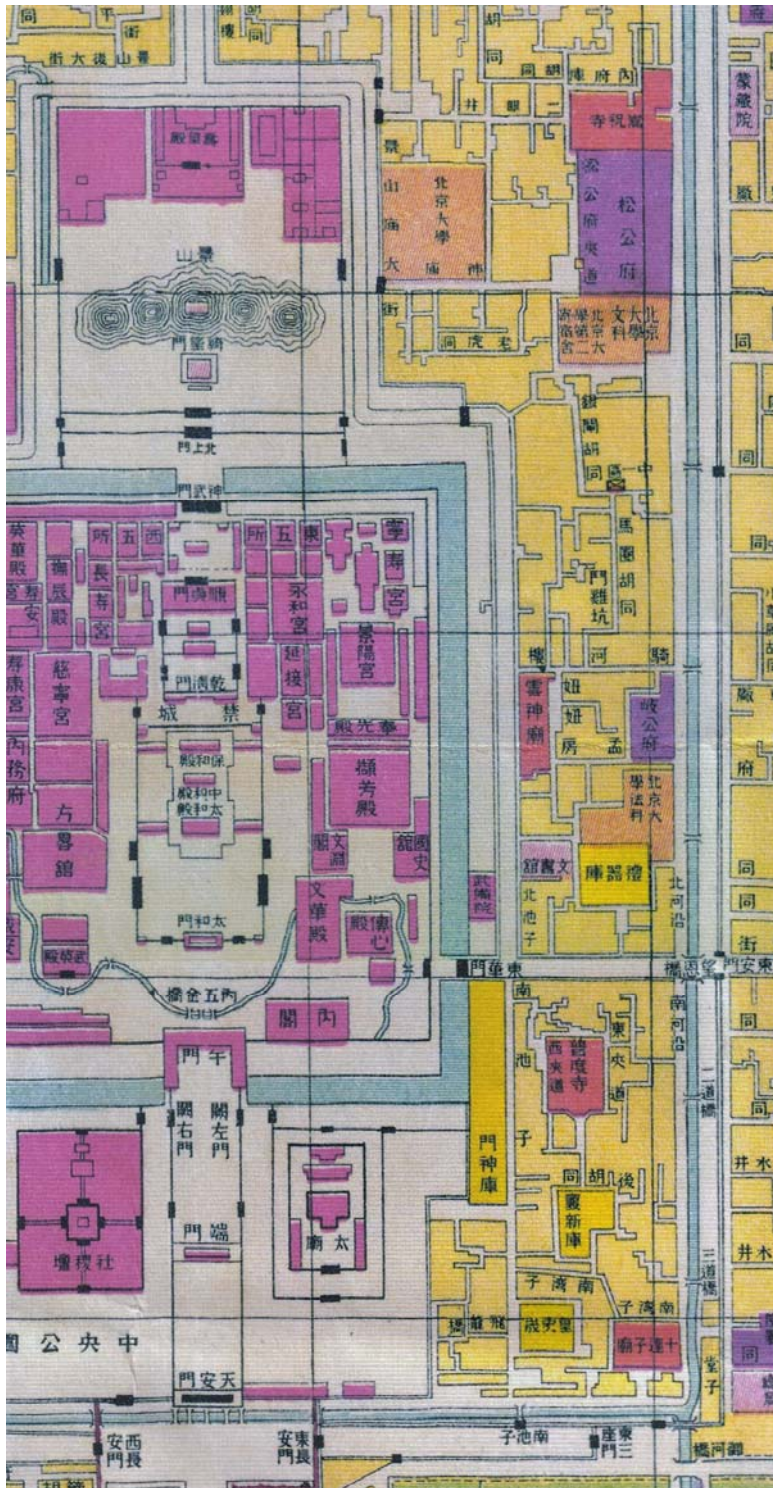
当時の地図をかかげる。景山の東に北京大学と北大文科が、故宮の東に北京大学法科が記載されている。

この法科の所在地に隣接して陳独秀の住居が位置していた。箭桿胡同である。

2007年の話。南池子は、故宮の東側にある南北の通りだ。東華門から北が北池子になりその北池子頭条と二条の間にあるのが東西方向の箭桿胡同になる。そこを私は探していた。はじめは見つからずウロウロした。二条のユースホテル前を通りかかる。民家を改装して宿泊施設にしたらしい。これは北京で流行しているという。欧米人の姿が見える。フロントの女服務員に質問すると電話がかかってきた。私との話を中断し英語で予約について話している。それが終わっての私への答えが、胡同は多いのでわからん、と。あとで見れば目と鼻のさきではないか。英語を操るのは得意でも、つい近所の胡同も知らない若い服務員だった。対応するのが面倒だったのだろう。陳独秀の旧居は、現在は民間の住居だから内部の参観はできない。説明板と石碑があり2001年「北京文物保護単位」に認定されたと表示される。展覧室でもなく文物保護単位に住人がいるというのもよくわからないが、確かにここに存在している。

『新青年』編集部住所表示は「東安門内箭竿胡同九号」だと雑誌奥付にある。現在の番地は「20」号だ。中国史話編輯委員会編著『中国史話(6) 呐喊声中の図強変革』(台湾・大地出版社2006.11。158頁)に掲げてある写真は陳独秀旧居にほかならない。編集部と住居を兼ねていたらしい。

さて、通りの名称だ。あるいは正陽門大街、宣武門大街であってもなんら不都合はないように思える。よりもよって林紘がわざわざ驛馬市大街だと名指しするのは、理由があるはずだ。



北京大学

北京大学文科

北京大学法科

陳独秀住居

当時の北京大学
のあり場所(1921)



陳独秀旧居 1917-20年に住んでいたと説明がある。中国人観光客数人がいた。民間住宅として使用中。内部は公開されていない。



箭桿胡同入り口から陳独秀旧居を見る。胡同には陳独秀旧居があるという表示がない。行き着くまでウロウロし何人もの人にたずねてようやく見つけた。これではわからない。傘をさして観光客が記念撮影をしている場所(2007.8)

『毎週評論』の住所が驛馬市大街米市胡同79号であるのとは、無関係だと思う。林紓は、基本的に該誌を読んでいなかったと考えるほうがよいだろう。

それでは、なにか。林紓はこの驛馬市大街に特別の意味をこめた、と私は考える。それも陳独秀の私生活に関係する。当時の人々で知っている人は、読めばすぐにその意味を理解しただろう。当然ながら『毎週評論』であるわけがない。だが、現在ではわからなくなった。あるいは、あえて説明することをしない。

それを理解するには、陳独秀の私生活について知ることが必要になってくる。胡適と周作人が証言を残している。

陳独秀と色街

胡適の文章から紹介しよう。

「女郎買いは（陳）独秀と（夏）浮筠のふたりともが行なったことです」*9

いきなり色街の話になってしまう。難儀なことだ。

今から20数年も昔の話になる。李伯元自らが経営する新聞『遊戯報』を使って開催した芸者コンテスト（選挙）を調べたことがある。花榜花選とよばれる。それを記録した『庚子蕊宮花選』という活版印刷物を日本で見つけた。花榜あるいは花選とは、芸者を花に見立てた選挙、すなわち人気投票である。花選が実行されたことがあると説明する文献はあっても、実物で示した例は過去になかった。中国において類似の、しかも李伯元が直接かかわった刊行物が出てきたとは現在にいたるまで聞かない。私が日本で掘り出したのは、李伯元自身の手になっているという意味でも珍しい小冊子なのだ。一生懸命に調査した。李伯元の行状に関する失われた一部分に光を当てることができたと思った（原本は『清末小説研究』第5号1981に写真で収録）。公表する価値があると今でも考えている。後年『李伯元全集』第5巻（南京・江蘇古籍出版社1997.12）に復刻収録されたといえばその価値がわかるだろう（事前に復刻収録したいという連絡はなかったが、研究資料だから私は気にしない）。

だが、この種の題材は、現代中国では触れにくいと見える。研究論文では言及されることがない（あるいは単に知らないだけか）。そればかりか、日本では私に面と向かって「芸者コンテスト？フンッ！」と鼻先で笑う人にも出会った。妓楼といえばあやしげな場所だとしか考えない思考の幅が狭い人だったらしい*10。自著を送った相手を私が見誤ったというわけだ。その人の無知を怒っているわけではない。あきれているにすぎない。

というぐあいに、この種の題材は研究論文としては扱いにくいのだ。

しかし、林紓が驛馬市大街だと書いたわけを述べるためには、どうしてもそこからはじめなければならない。

妓楼通いは、民国ではとりたてていうほどのことではない普通の行為だ。

たとえば、明治時代の日本人が当時の状況（民国直前の時期になる）を次のよう

に説明している。（適宜、句点をうった）

支那人は妓館に遊ぶことを以て恥とはなさず上流の人士も亦多く此に遊ぶ。妓を贖ふて妾となすが如きは上流社会に於て多く見るところなり。小説戯曲が多くは妓女と才子との關係を序し又古今人の詩集に妓に贈るの詩を載するが如き亦以て古来支那人の妓女に対するの感想を知るに足らん。^{*11}

その所在は、時代によって変化している。北京内城での営業が許されてはいなかった時期は、色街は外城にあった。これが公許となったのは、外城巡警総庁が妓館および妓女から営業税を徴することにしたからだという。楽戸税と称し、等級に分けられた。『北京誌』500頁から一覧にして次に示す。

- 1等（班子） 毎戸月税24元 別に妓女大1人につき4元、幼妓1人につき2元
 - 2等（茶室） 毎月14元 別に妓女大1人につき3元、幼妓1人につき1元半
 - 3等（下処） 毎月6元 別に妓女1人につき1元
 - 4等（小下処） 毎月3元 別に妓女1人につき5毛
- 相公（龍陽）は清下処と称し班子に準じる（注：男娼のこと）

税金を徴収するというのは、役所（ここでは民政部）が管理することを意味する。1919年当時の妓楼は377軒、妓女は3,130名だとある^{*12}。約3千名というだけでも多い。等級に入らない私営の場所も含めるとどれくらいの数になるのか見当もつかない。大いに繁盛していたとだけしておく。

そういう時代だったから、一般人の妓楼通いという行為は、現在から見て批判する必要もない。ただし、それはあくまでも一般人のばあいだ。北京大学の文科学長と理科学長という地位にある人であればどうか。中国における最高学府の人なのだ。しかも文科学長陳独秀は、『新青年』『每週評論』などの刊行物を編集していた。若者を思想的に指導する新思潮の代表者と目されていた人物だ。ただの旧派高官とは立場が違う。道徳的、教育的見地からいかなものか、という意見がでてきておかしくはない。加えて、陳独秀は、校長蔡元培が大学内で大々的

に推進していた進徳会の評議員にも選ばれていた。その会則のひとつは「女郎買いをしない〔不嫖〕」である。陳独秀の妓楼通いは必ずしも「女郎買い」と同じ意味であるとは限らない。だが、色街に遊ぶことは一般から見てそう理解されてもしかたがないだろう。だからこそ、反対派の新聞などから陳独秀は攻撃をされていたらしい。

陳独秀の妓楼通い

周作人の文章から引用する。関係する箇所は2カ所ある。別稿でも紹介した。当事者の証言として重要だと考えるからもういちど見る。

彼（注：陳独秀）は北京大学の文科学長で、改革時期の重要人物でもある。しかし、仲甫の行為はやや不注意で〔行為不大検点〕、時に花柳界へ足を踏み入れた。これは旧派の教員ではよくあることで、みんな当然のことだと認めていた。しかし、新派のなかでは異なり、新聞にしばしば暴露され、陳老二（注：独秀は次男）が妓女を傷つけたなどの事が載った。これは進徳会を高らかにのべていた蔡子民には、まことに頭の痛いことであった。^{*13}

周作人のこの短い文章から、陳独秀の妓楼通いは日常化していたことが理解できる。作人のいう新聞とは、安福倶楽部の御用新聞といわれていた『公言報』を指すだろう。北京大学で蔡元培が推進していた進徳会との関係をのべているところにご注目いただきたい。

前述のとおり、陳独秀は文科学長を罷免された約2ヵ月後の6月になって、北京の新世界でピラを撒いて逮捕される。

魯迅博物館蔵『周作人日記（影印本）』中冊（鄭州・大衆出版社1996.12）の1919年6月12日の条に「仲甫（注：陳独秀）逮捕される」（32頁）とのみ書かれている。

同じく6月14日、作人は李辛白、王撫五らと6人で北京大学代表の名義で面会に行ったが会えなかった（32頁）。9月17日、陳独秀が昨日出獄したのを知る（49頁）。18日、箭幹〔桿〕胡同に仲甫を訪問した（同頁）。

周作人は、陳独秀を回想して上に紹介した内容とほぼ同じことを別のところで

も書いている。

これ以前（注：陳独秀の逮捕）に、北京の御用新聞はその些細な過失、よく花柳界で遊ぶことを理由にして常に仲甫を攻撃していた。新聞紙上の報道は時に枝葉をつけて、ある日やきもちをやいて某妓女の下部を傷つけたとあって輿論をあおりたてようとした。なぜなら北大には、当時、進徳会の女郎買いをしない〔不嫖〕、賭事をしない〔不賭〕、妾を囲わない〔不娶妾〕という禁止事項があったからである。ここにいたり違反して逮捕されたため、学校の方ではもともとは問題にしなくてもよかったのだが、しかしその時蔡校長も出てきて、校内評議会の多くが「聖人君子」であったから陳氏の辞職になったのである。そこで邪魔ものを取り除いて反動派は大勝利を得たのだ。*14

ここに見える周作人の記述には、記憶違いがある。陳独秀の逮捕と大学辞職の関係についてだ。往時を回想した文章だから、間違いがあるのもしかたがない。

おさらいをする。北京大学改組という名目で文科と理科の学長職廃止を決定したのは、3月1日の評議会だ。3月4日付『北京大学日刊』にそれを公表した。実施時期は夏休み後を予定しているとも明らかにしている。ところが、3月26日、湯爾和、蔡元培らはそれを4月8日に前倒しすることに急遽決定した。4月10日に同じく『北京大学日刊』で公表する。だが、陳独秀逮捕は、周作人日記に見えたとおり6月11日だ。

すなわち、独秀は逮捕される約2ヵ月前にはすでに大学を罷免されている。逮捕されたから免職になったわけではない。しかも、逮捕理由はピラマキであって妓女傷害事件ではない。

周作人の記憶は、間違っている箇所はある。逮捕と大学罷免の時間的順序を勘違いしているから明らかだ。

しかし、ここにこそ重要な意味が含まれている。周作人の理解によれば、陳独秀が大学を罷免された理由は、妓楼通いをつづけそのあげくに妓女傷害事件をおこしたことだった。ただし、妓女傷害についてはデマだと周作人は考えている。

くりかえす。周作人は、事態の基本的な流れを上のように把握していた。時間関係に勘違いはあるにしても、陳独秀罷免の大きな原因は妓楼通いにほかならなかった。周作人の記憶にはそう強く印象づけられていたことを証明している。

陳独秀の妓女傷害事件は、あったのかどうかは今のところ不明とせざるをえない。資料が提示されているわけではないからだ。当時の新聞にその報道があったとしても、当然ながら事実だとはかぎらない。陳独秀を中傷するためにウワサを流したことは十分に考えられる。中傷非難は、お互いが行なったことだ。

重要なのは陳独秀の私的行動についてウワサがあり、それを事実だと考える人物、たとえば湯爾和らがいた点なのである。事件について書き残している周作人を含めてもいい。蔡元培にとっても陳独秀は身近な存在であったといえるだろう。陳の普段の生活が妓楼とはまったく関係がないならば、新聞に報道されたとしても普通は疑ってかかるものだ。あるいは一笑に付して問題にもしないだろう。ところが、3月26日の夜、湯爾和、蔡元培らは緊急会議を持たざるをえなかった。陳独秀の学長罷免を予定よりも前倒して実行することを決めている。よほど重要なことが発生しなければ、そのような決定はしないはずだ。陳独秀ならば事件を起こしても不思議ではない、その事実はありうる、可能性がある、と周囲の人々から判断された結果だと思うのだ。

もういちど注目してほしい。周作人がのべる陳独秀免職の理由だ。当時の新聞で報道されていたような新旧思想の対立が原因ではない。また刊行物が理由でもない。新聞の流す情報は、表面的なものにすぎなかったことがわかるだろう。こう書くと、政治の流れを無視し事件を矮小化した見方だ、という人が必ずでてる。目に見えるようだ。

しかし、私は、陳独秀の大学罷免にかかわる事態の流れは、周作人の理解が正しいと考える。作人は詳細に説明しているわけではない。だが、私が見るところ、北京大学の改組を蔡元培が計画していた事実と陳独秀の私生活での行動が深くかかわっているとしか思えない。これについては、私はすでにのべている。

政治を優先させた見方をすれば、周作人の回想は誤解になってしまう。事実、そう書く人もいるのだ。

石鍾揚は『文人陳独秀 啓蒙的智慧』（西安・陝西人民出版社2005.2。279頁）に

において、「遺憾なことに、『新青年』派のなかのある人は、陳独秀の「私徳にしまりがない〔私徳不検〕」のが罷免され放逐された原因だとはじめから終わりまで考えていた」と説明する。石は、北京大学内外の輿論と圧力により、蔡元培は陳独秀を罷免せざるをえなかったという。だが、石鍾揚の考えに従えば北京大学改組の事情が説明できない。また、なん度でもいうが思想の自由を宣言している蔡元培が、その主張を維持できなかった結果にもなる。

蔡元培は、教員の大学外での言動は自由であり大学とは無関係である、と林紆にむかって宣言していたのだった。ただし、女郎買い、賭博、畜妾などについては、北京大学には進徳会があって禁止しているともなべている。周作人のいう通りだ。

そういう蔡元培がはやくから陳独秀罷免を準備していた。なぜか。進徳会の評議員でもある彼が妓楼に通っているのは、まずいに決まっている。しかも、陳は文科学長という要職にある。

一般教員について、授業をきちんと行なっていれば放任している、と蔡は主張した。だが、陳独秀は授業を担当していない。彼は教員ではない。北京大学では、文科学長は職員だからである。これでは、蔡元培は陳独秀を擁護することができない。また、するつもりがないから、改組による罷免を計画していた。

陳独秀の妓楼通いについては、最も近くにいた胡適と周作人が証言している事実を無視していいわけがない、とくりかえす。

胡適と周作人は、ふたりとも北京の妓楼の所在地などは書いてはいない。その必要もなかったのだろう。

民国時代における北京の花柳界について、私にはもともと知識のもちあわせはない。だが、知っている人はなにげなく指摘する。八大胡同だという。

田茜、張学軍等『十個人的北京城』（台湾・高談文科事業有限公司2004.11。63頁）では、陳独秀が八大胡同で遊んでいるという艶聞が伝えられた、とのべる。まさにここなのだ。

朱文華は『陳独秀評伝 終身的反対派』（青島出版社2005.5第3版。109頁）で次のように説明している。「もとより陳独秀は「名士の遺風」を正してはならず、私生活の方面では確かに不注意なところがあった。蔡元培が1918年1月に発起

して成立した「女郎買いをしない、賭事をしない、妾を囲わない」という戒律をもつ進徳会に加入しているにもかかわらず、彼はやはり八大胡同（妓院）に出入りしていた」

朱文華は周作人の文章にもとづいてこれを記述していることがわかる。

あるいは、朱洪が『陳独秀与胡適』（武漢・湖北長江出版集団、湖北人民出版社2006.1。77頁）において、流言、つまりデマとして「北大文科学長陳独秀が八大胡同で遊んでいる」と書く。「驚天動地のデマである」とも説明しているから、その事実があったとは朱洪は認めていないことになるだろう。こちらのほうが「驚天動地」である。胡適、周作人が指摘しているのではないか。もしも事実無根であれば、蔡元培がそうと報道した新聞社に抗議の手紙を出すはずだ。訂正しろ、と。蔡は、北京大学の名誉を守るために大きな努力をしている。別の件、すなわち林紓との関係において彼は、『公言報』（1919.3.18付）と『神州日報』（1919.3.19付『北京大学日刊』に編集部への手紙を掲載）に投書している。陳独秀にまつわる妓楼通いの報道がデマであるならば、当然、見逃すはずがなかろう。

八大胡同という名称が出ているから私でも調べることができそうだ。

色街についての追求は、あくまでも陳独秀に関連する事柄として必要になっている。林紓が書いた驪馬市大街とのつながりであることはいうまでもない。

林紓批判をめぐって陳独秀について調査すればするほど、陳の「名士の遺風」が問題として大きく存在していることがわかってくる。五四事件が発生する直前の北京大学において、新旧思想の衝突、あるいは陳独秀をめぐる政治闘争に陳自身の私生活が深く関係しているのだから避けることができない。こうして、民国期における北京の妓楼について調べることになってしまった。

色街の実質は、はるか昔、私の生まれる前後に北京ではすでに消滅している。往事を知る人にとっては記憶の中に存在しているだろう。しかし、私の記憶にはもともと存在しない場所だから、当然のことながら文献による知識にならざるをえない。

八大胡同

八大胡同は、乾隆帝の時代にさかのぼる。江南の名優を北京にまねいて居住さ



八大胡同 驛馬市大街(1921)



陝西巷を北から南に歩いて韓家胡同を西方向に見る。普通の家並み(2007.8)

せた「班大人胡同」に由来するという*15。

「八」という数字は、縁起かつぎもあるはずで、そのまま胡同の数を指すものでもなさそうだ。正陽門（俗称前門）外の大柵欄から西に、当時の呼び名でいえば、東は煤市街（南北方向）からはじまり、斜めに観音寺 - 李鉄拐斜街（今の鉄樹斜街） - 五道街、南は榔樹井 - 虎坊橋で囲まれた三角地帯に集中している（『新測北京内外城全図』上海・商務印書館1921再版。影印による）。

横町（胡同）の名称では、東からあげると朱家胡同、王広福斜街、朱茅胡同、燕家胡同、石頭胡同、陝西巷、外廊営、韓家潭、百順胡同、皮條営などになる。

さて、問題の驪馬市大街だが、これは虎坊橋の西に続いて存在している。南北方向に走る南新華街を境にして西になる。八大胡同に隣接してなにがあるかといえば、妓女検治事務所なのである。

昭和時代に発行されている安藤更生『北京案内記』（北京・新民印書館1941.11.20 / 1942.3.1八版。312頁）には説明して次のようにいう。

妓女は月に四回北京特別市立妓女検治事務所で検査を受ける。同検治事務所には附設収容所があつて病妓を収容治療してゐる。医務主任の九州帝大出身の秦腕香女史以下四人の専門医と九人の看護婦とが八大胡同から程遠からぬ驪馬市大街の同所で、……治療に従事してゐる。

つまり妓女たちは、毎週1回は驪馬市大街へ行かなければならない。税金を納めている妓楼だけで約3千名の妓女をかかえていた。単純に計算して1日に約450名がそこら一帯に集まることになる。鑑札を発行してもらう必要があったという。だが、はたして実行されていたかどうかはわからない。名目だけのことで妓女から金を吸い上げる口実になっていた可能性も十分考えられる。

別に掲げた写真は、張金起『八大胡同的故事』（台湾・柏妝行銷整合股份有限公司2005.9*16。181頁）に収録のもの。その説明に「全北京城の妓院の看板を出している妓女は、定期的に驪馬市大街の「妓女検査所」で検査を受けなければならなかった。また、個人が開設した小さな診療所もあった。これは西草廠にある日本人が開設した性病診療所だ。2003年10月撮影」とある。建物の写真を見て、普通の



騾馬市大街の「妓女検査所」



名妓の外出



の民家にしてはえらく立派な入り口だと私は思うくらいだ。ここが診察所だったとは、説明されてももうひとつピンとこない。西草廠胡同は、騾馬市大街の北側に並行してある。現在では西草廠街と呼ばれる。

高級妓楼の妓女は、どんなに近所でも歩いては行かないはずだ。人力車が必需品であろうとは容易にわかる（張金起の同書から名妓の外出写真を2枚引用する）。

ここで結論。林紘が「妖夢」の附記でのべている「騾馬市大街で人力車を引く者」は、妓女が梅毒検査に行く必要があった事実を背景にしている。つまり、北京の人力車夫が口語を話すのに関連させて、文学革命派の口語運動を皮肉ったついでに陳独秀の妓楼通いまでも含ませているのである。林紘が知っているくらいに陳独秀の私生活は新聞で報道されたということだ。

張金起が調査したころは、八大胡同一帯はさらに荒廃が進んでいたことが写真（1999-2004年）でもわかる。

2001年に北京市内を観光した時のことだ。私たちは、前門大街の「都一処」でシューマイを賞味したあと（観光客だから）琉璃廠へ行こうと考えた。大柵欄を西に向かって真っ直ぐ歩けば到着するはずだ（そうだ、ここらあたりの衣料店だった。番台の内側に入ると地下に通じる入り口があった。扉を跳ね上げて下りていくと「文化大革命」時代に掘り進めた地下大防空壕である。1977年冬のことだと思い出す。文革時代のなごりで集団参観のコースに組み込まれていた。その後、旅館に利用されたと聞いたことがある。今は、どうなっているのだろうか。2008年3月9日にテレビ放映された「ニクソン訪中」で一瞬その景色を見た。撮影のため特別に開けさせたようで、使用している様子うかがえない）。まわりは手入れのよくない民家、あるいは旅館のような家屋が続いている。砂ぼこりのたちそうな通りをいくら歩いても琉璃廠につかない。虎坊橋に出てしまったのを見れば通りは斜めに走っていたらしい。南に少し行けば前門飯店がある。今から考えれば知らずに歩いていた鉄樹斜街だった。この南側一帯が八大胡同と呼ばれていた場所なのだ。

奥野信太郎が「北京へ来た道学先生たちは必ず一度は琉璃廠^{リウリイチャン} [廠] の書肆街を歩き、古本を漁り、日本への書信には紙魚の消息を洩らす。だが誰もこの琉璃廠が、柳暗花明の地である所謂八大胡同^{バアタアホウトン}に隣接したところであることは、知らずして語らざるか、一向報告に及ばない。これは甚だ残念なことに考へる」（『北京襟記』二見書房1944.4.5。4-5頁）と書いているその場所である。

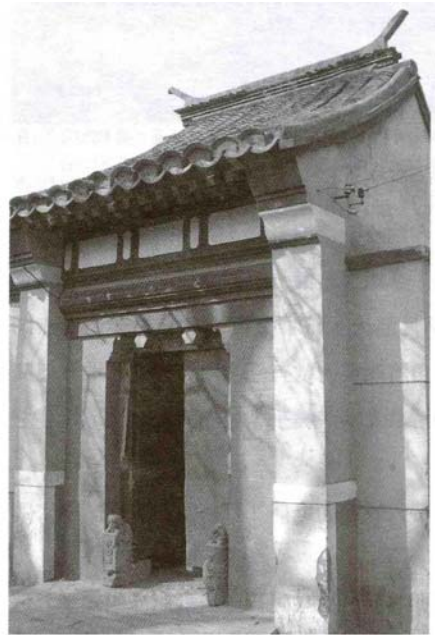
その時私たちは、奥の路地に入ったわけではなく、表通りを歩いただけにすぎない。八大胡同という名称すら興味がなかったのだからしかたがない。みすばらしい建物があるという印象だけが残っている。

中野江漢の著書から往事の飾り立てた妓楼の写真を引用する（入り口右に人力車が見える）。構えがにている建物の写真を張金起の著作から同様にかかげる。約80年後の姿ということになる。こちらの建物は、まだきれいな方だ。

2007年夏、私はその附近に行ってみた。2008年の北京オリンピックをひかえて前門大街は大改修が実施されている。清朝時代の町並みを復元するのだそうだ。正陽門から大柵欄に行くのにも小道をまがって行かなくてはならない。



中野江漢著書より



張金起著書より



大柵欄へは迂回して



驛馬市大街北側の取り壊しと表示のある家屋（2007.8）

幸いといおうか昔の（といっても、そのままでは当然あるわけでもないが）八大胡同は、まだ再開発に着手されていない。ただし、オリンピックまでにどうなるのか私は知らない。あたり一帯は、以前と同じく旅館や食堂が多い。昔の建物を宿泊設備に改装することが行なわれていると説明する書物もある。胡同の表示と通りのたたずまいを写真にとる。だが、それだけのことにすぎない。もともと何のなじみもない場所だ。歴史的なその地域を確認するだけである。昔の南新華街に出て驛馬市大街を東から西に向かって歩く。取り壊し予定の建物と魏染胡同を南から北にながめて写真を撮った。

後年、文学革命派のひとり劉半農が賚金花から聞き書き^{*17}をしたのもここ北京のことだった。

前出奥野信太郎の同書から関係部分を引用して本稿を終る。

一世の名士の居宅にしてすら、幾変遷かを経ては全くその片影だに窺ひ知ることはできなくなつてしまふものである。ましてや鏡裏の倩影、帳中の嬌声にして、果して幾年か人の噂に能く上り得るものがあろうか。能く上り得るものは醜ならずと雖も多くは酸鼻の哀話に満つものが多い。例すれば、往年前門外の名妓として謳はれた賚金花の末路の如きがそれである。団匪事件の前後独逸公使に愛を売りて国事に一鷹の力を添へた物語は、わが唐人お吉に酷似してゐるが、その後賚金花の身の上は幾変転し、老衰敗残、人の顧みるものもなく、つひに病を得て陋巷に窮死した。たしか今を去る兩三年前の冬のことであつた。それでも賚金花の病篤きに及ぶや、北京の諸新聞は争つてその病状を報じ、やがてその死を悼んだのであつた。貧窶その極に達し、当時大公報撮影の居室図には、卓上わづかに塵にまみれた蠟燭台一基をとどめるのみであつたことを記憶してゐる。202-203頁

賚金花が一時住んでいたという八大胡同は、すでに書物の中にしか存在していない。

【注】

- 1) 胡適「五十年来中国之文学」『最近之五十年』21頁。上海・申報社1923.2初版 / 上海書店影印1987.3 (出版説明に1922年2月初版本とあるが1923年の誤り) また、『晚清五十年来之中国』と改題影印した香港・龍門書店 (<1922年上海初版とする> 1968.9再版) 本がある。胡適は「紀念五四」(『独立評論』第149号1935.5.5) において徐樹錚が林紘の教え子であった、と書いている。
- 2) 吉野の経歴については『日本の名著』48吉野作造(三谷太一郎責任編集。中央公論社1972.6.10)の「年譜」を参照した。なお、吉野「北京大学学生騒擾事件について」も収録されている(236-241頁)。
- 3) 重要だからくりかえす。王楓「五四前後的林紘」(『中国現代文学研究叢刊』2000年第1期2000.2。249頁)は、「1919年2月22日、陳独秀を普通の教授にすることを決定した」と説明している。だが、ほかの文献と同じくその証拠を提出していない。王学珍ら主編『北京大学紀事(1898-1997)』(北京大学出版社1998.4 / 2008.4二版)の1919年2月(日にちは不記)に「評議会は学長制を廃止を議決する」(86頁)と記述する。これが、王楓の文章に該当するのだろう。ただし、陳独秀についての言及はない。ご注目いただきたい。私は、『北京大学日刊』を見たが、陳独秀を教授に採用したという記事を見つけることができなかった。ご教示いただけるとうれしい。
- 4) 静観を使用する人に李叔同弘一和尚(1880-1942)と胡霖(1889-1949)がいる。だが、李叔同は1918年に出家したし、胡霖は1918年から欧米巡遊の途についている。ふたりとも『申報』記事の著者には該当しない。
- 5) 胡適による中国哲学史の授業を受けた顧頡剛が当時を回想して次のように書いている。顧頡剛著、平岡武夫訳『ある歴史家の生い立ち 古史辨自序』(岩波書店1953.9.30。57-58頁)。胡適の授業を活写して興味深い。日本語訳を引用する。「二年目は、新たに胡適先生を招聘した。「あの人(胡適)は米国から帰国したばかりの留学生である。北京大学へ来て中国のことを講義できるのだろうか」。多くの級友たちは、みな、このような疑いを持った。私もやはり御多分に洩れなかった。彼はやって来た。それまでの授業にはおかまいなしに、プリントを編纂しなおした。關頭第一章は「中国哲学結胎時代」で、『詩経』を用いて時代の説明をし、唐・虞・夏・商を抛っておいて、たゞちに周の宣王以後から説きだした。この革新は、われわれ仲間の三皇五帝でいっぱいになっている頭に、俄然、極めて大きな打撃を与え、満堂のものを、舌がまき上って下りぬほどに驚かした。多くの級友は、いずれも、共鳴し

なかった。たゞ、クラスのなかに激烈な分子がいなかったばかりに、別に学校騒動もおこらなかった。私は、数回の講義を聴いて、一つの理法が呑みこめたので、級友に、「あの人は、陳漢章先生ほどにたくさんの書物を読んではいないが、論断の点では、一家を立てられる人である」と語った。そのころ、傅斯年君も、ちょうど私と同じ部屋に住んでいた。この人は誰よりも放言高論をやらかす人で、この人の言論によって、私の批判をする勇気も絶えずいや増していたのである。私は彼に「胡先生の講義は、確かにまちがっていない。眼光も利き、胆力もあり、判断もあり、まことに有能な歴史家である。この人の議論は、どれもこれも、私の考えと合う。どれもみな、私が言おうと思いつながら、どう言えばいいのかわからなかったものである。君は哲学科の人ではないが、聞いてみてはどうか」と言った。彼は傍聴に行き、やはり満足した。それ以後、私たちは胡適先生に非常に信服した」

- 6) 北京魯迅博物館編『錢玄同日記』福州・福建教育出版社2002.9。1711頁。1月11日付は1725頁。つぎの文章を参照した。張耀杰『魯迅与周作人』台湾・秀威資訊科技股份有限公司2008.1。258-259頁。また、1月5日付錢玄同日記に触れるものがある。洪峻峰「林紓晩年評価的兩個問題」(『齊魯學刊』1995年第1期。陳錦谷編輯『林紓研究資料選編』下冊 福建省文史研究館編2008.6所収。933頁)だ。蔡元培の発言があると紹介している。今、私は注記するに留める。
- 7) この2作品は、私はいずれもマイクロフィルムで確認した。薛綏之、張俊才編『林紓研究資料』(福州・福建人民出版社1983.6 中国現代文学史資料彙編(乙種))所収の「妖夢」に「載一九一九年三月十八^マ - 二十二日^マ」(85頁)とある。3月19-23日の誤り。
- 8) この部分を英訳して“even rickshaw pullers in markets selling horses and asses^{ママ}” p. 149 とする文献がある。通りの名前だとは考えなかったらしい。Translated by Timothy Wong (黄宗泰) “Nightmare” *MODERN CHINESE LITERARY THOUGHT Writings on Literature, 1893-1945*. Stanford University Press, 1996. また、asses では口バになってしまう。原文はラバ[騾]なのだから誤訳だ。黄が英訳に使用した「妖夢」は、『中国新文学大系』所収という。こちらには初出を明記していない。黄が、『新申報』を“Mar.18-21,1919”と誤記するのは『林紓研究資料』所収の記述に拠ったからだと思う。
- 9) 『胡適全集』第24巻書信(1929-1943)合肥・安徽教育出版社2003.9。278頁
- 10) 当時を知る人の回想録に白井武夫『北京追想 城壁ありしころ』(東方書店

1981.11.15 / 1982.2.25第2刷)がある。「前門外に遊ぶことをもって直ちに「女を買う」と解してはならない。頭等(注:清吟小班。高級妓楼のこと)は、清く遊ぶ処である」(103頁)

11) 清国駐屯軍司令部編纂『北京誌』博文館1908.12.30。842頁

12) 単光彥『中国娼妓 過去和現在』北京・法律出版社1995.2。111、113頁

13) 周作人「一六六北大感旧録(十一)」『知堂回想録』香港・聴涛出版社1970.7。下525頁

14) 周作人「一二二卯字号的名人二(二)」『知堂回想録』下356頁

15) 中野吉三郎(江漢)『支那の売笑(補訂)』北京・支那風物研究会1923.12.30 / 1926.6.30

補訂。39頁。関連文献は多数あるが、次の文章は私が偶然目にしたというだけ。蒋晗玉「也談八大胡同」『書屋』2004年第8期2004月日不記。李金龍『八大胡同』鄭州・中原農民出版社2000.10

16) 同じ著者の『八大胡同里的塵縁旧事』(鄭州大学出版社2005.11)がある。ほぼ同じ内容。

17) 劉半農初纂、商鴻逵纂就『賽金花本事』北平・星雲堂書店1934.11

周作人が魯迅を回想して林紓に言及する

日本語訳注釈について

松枝茂夫は、周作人の作品を日本語訳するにあたり不明箇所を手紙で質問した。周作人が兄魯迅を回想するなかで、当時読んだ書籍を掲げる。林訳のほかに冷血、ユゴーが出てくる。松枝は、冷血を林紓の筆名だと誤解している。その間違いが現在にいたるまで訂正されていない。これは、なにを意味するのか。つまり、松枝は周作人を通して林紓を見ている。周作人が林紓を批判しているのに影響を受けないわけがない。批判されている人物 林紓に関する注釈には力が入らないという簡単な理由だ。

梁啓超「論小説与群治之關係」からはじまる。「群治」とは、なにを意味しているか。

1 周作人と松枝茂夫の往復書簡

梁啓超が使用したこの「群治」は、現在ではすたれてしまった。使用されることは、ほとんどない。日本では「政治」だと理解する研究者が多い。日本語訳として「政治」をあてるのだから明らかだ。

しかし、「政治」という訳語は不適當だというのが私の結論である（樽本「梁啓超「群治」の読まれ方」1997）。

それでは、なにか。「社会」にほかならない。

私が10年以上も前の文章を持ち出すのは、最近、周作人と松枝茂夫の往復書簡が公開されはじめたことを知ったからだ。

小川利康編「周作人・松枝茂夫往来書簡 戦前篇（2）」（早稲田商学同致会『文

化論集』第31号2007.9電字版)である。

該当する原文を引用する。

19380827Z【周作人 尤炳圻 松枝茂夫】

平白兄：

昨日別后又想起松枝君譯稿中，梁任公「論小説與群治之關係」（割注：大約在／末一章）處，將群治註作デモクラシ，似不妥，其時尚無此語，所謂群治實只是社會或社會生活之意耳。如校稿尚未交出，請為改正。專此奉，順頌
大安 作人啓

廿七日（62頁）

梁啓超原文の「群治」は、日本語に訳せば「社会」あるいは「社会生活」になる。「デモクラシ」とするのは妥当ではない。これが周作人の考えだ。

このような日本語訳の問題が、なぜ周作人の手紙にでてくるのか。

理由は、簡単である。松枝が翻訳した周作人の原文に、魯迅を回想した文章が含まれているからだ。そこで言及されている。魯迅は、梁啓超が日本横浜で創刊した雑誌を読んでいる。兄樹人が読むものなら、弟作人も読んだだろう。当時、流行していた林紓の翻訳にも言及するのだ。

小川利康が注で簡潔に説明している。関係する部分のみを引用する。

手紙文中の梁啓超「論小説与群治之關係」とは、「關於魯迅（其二）」で周作人が言及するものを指す。この作品を松枝は『周作人隨筆集』（改造社）『瓜豆集』（創元社）の二冊に収録している。改造社版では文中指摘するとおり「群治」に「デモクラシー」とルビを打ってあるのに対し、創元社版では周作人の意見を踏まえて「群治（社会生活）」に改めた。31頁

「群治」は、「デモクラシー」ではなく「社会生活」だ。周作人は正しく認識している。私は、そう判断する。松枝が周作人の意見に従ったのはそれでよかった。

ところが、ここから問題がふたつ出現する。

ひとつは、竹内好が梁啓超の「群治」を2種類に翻訳する。

原語の「群治」とするのは、『魯迅』（日本評論社1944.12.20 / 1946.11.1第二刷。創元社1952.9.5創元文庫。未來社1961.5.20 / 1968.10.10第二刷）だ。

もうひとつは、「デモクラシイ」「デモクラシー」と訳している（『魯迅』世界評論社1948.10.10。115、256頁）。同様に「小説とデモクラシイの関係論」と書く（『魯迅入門』東洋書館1953.6.10。101頁）。

ふたつを並置している。どちらかにしたというわけではなさそうだ。

松枝と竹内の間柄だ。竹内は松枝の翻訳を読んでいるだろう、と私は思う。松枝は指摘しなかったのか。周作人が「社会」「社会生活」と手紙で知らせてきた、と。ところが、竹内は「群治」と「デモクラシイ」のままである。竹内が改めないのにはなにか理由があったのであろうか。

もうひとつは、ずっと後に刊行された松枝自身の単行本だ。

周作人著、松枝茂夫訳「魯迅について その二」（『周作人隨筆』富山房1996.6.28）である。こちらでは、以前の訳語とは別のものを提出している。すなわち、「小説と政治との関係を論ず」（278頁）にしてしまった。以前の正しい「社会生活」を「政治」に改めている。どうしてそうしたのか、よくわからない。松枝没後の出版だから編集者が勝手に改変したものか。それにしても、わざわざ誤ることはないだろう。

この話は、これ以上発展しない。前説を終り、本題にうつる。

周作人が魯迅を回想して書いた文章に、林紓が登場する。本稿で検討するのは、それにつけられた林紓に関する松枝らの注釈である。

2 松枝茂夫の質問と周作人の回答

1930年代のことになる。

松枝茂夫は、周作人の隨筆集を翻訳していた。改造社から刊行されることになり、訳文の不明個所を解決する必要がでてくる。機会があり、周作人に直接問い合わせの手紙を日本語で書いた。そのなかのひとつが、魯迅についての回想文だ。

松枝の日本語訳でいえば「魯迅について 其二」である（初出は「關於魯迅之二」『宇宙風』第30期1936.12.1に掲載後『瓜豆集』1937に収録）。これが林紓に関係してくる。

私が問題にするのは、松枝の翻訳と注釈だ。ゆえに、周作人の原文には触れない。

松枝が周作人にあてた手紙で提出した質問は多い。林紓に関連する箇所のみを示す。

1937年11月5日付の書信から。（周松枝の往復書簡について以下の引用は、すべて上記小川論文による。頁番号は、雑誌左開き論文縦書きのため逆になる）

其二、

- | | | |
|----------------------------------|---|--------|
| イ、黒太子南征録 | } | 原著者，書名 |
| ロ、仙女縁 | | |
| ハ、白雪[雲]塔 | | |
| 二、 <u>囂俄</u> 的偵探談似的短篇小説、叫作什麼尤皮的， | | |
- （尤皮とは外國語の譯書でせうか？）68-67頁

魯迅が、林紓の翻訳書を好んで読んでいたことをのべる箇所だ。出てくる外国作品について原著者名と原書名が、松枝にはわからなかった。翻訳された書名だけでは、わからないのも無理はない。くわえて周作人の記憶が正しいかどうかも考慮する必要があるだろう。

この質問に対して同年11月22日付で周作人の回答がある。同じく、関係部分のみの引用だ。

囂俄著偵探談，“尤皮”，日本譯作ユーベル，原文未詳⁽⁷⁾

又 『黒太子（Black Prince）南征録』（割注：哈葛得（H.R Haggard）／著，原書名今已忘。）『仙女縁』等⁽⁸⁾原書未説明，不可考。65頁

文中に見える(7)(8)は、小川利康のほどこした注番号を示す。あとで検討する。

周作人の回答を見ると、問題解決にはほど遠いように思う。彼は詳しくは覚えていないのだ。ユゴーの「ユーベル」がわかったくらいか。ハガードの名前もあるが、これは不正確な記憶だった。ほぼ30年前のことを思い出している。間違うのもしかたない。

3 松枝茂夫の翻訳と注釈

周作人著、松枝茂夫訳「魯迅について 其二」(『周作人隨筆集』改造社1938.6.20)である。

以上の書簡をふまえて松枝は、以下のように翻訳した。

魯迅が影響をうけた人物として、最初は巖復と林紘がいる、という続きだ。

その次は林琴南*で、『[巴黎]茶花女遺事』が出て後、出るたびにみな買った。確か最後の一冊は東京神田の中国書林で買った『黒太子南征録』だったと記憶するが、全部二三十種ぐらゐもあつたらうか。当時「冷血」の文章は非常にハイカラで、彼の訳述した『仙女縁』や『白雲塔』は私も今に荒まし覚えてゐる。そのほかユゴー(Victor Hugo)の探偵談みたいな短篇小説で『ユーベル』とか何とかいふのがあつたが、非常に面白く書けてゐた。

55頁

とても有名な文章だ。魯迅が日本でも購入したくらいに林訳小説を好んでいた。林紘を擁護したい研究者が好んで引用する箇所だ。魯迅の威光を借りたいのだろう。それは皮肉な見方であるというなら、たんにその事実があつたと書き直してもいい。ただし、民国になって魯迅は林訳から離れる。彼が五四時期の林紘を敵視するまでになったのは、これもよく知られた話ではないか。

周作人が書いた文章だから、本人に確認した。にもかかわらず、わずかな回答しかえることができなかった。それにもとづいて以上のような日本語翻訳になった。周作人の手紙で利用されたのは、わずかに「ユーベル」だけだったとわかる。引用文に見える「*」印は、松枝がつけた注釈だ。

注五五 林琴南 林紘（1852-1924）。字は琴南、別に冷紅生と署し、また冷血ともいう。泰西名著を訳した『林訳小説叢書』百数十冊があり、清末の文壇を風靡した。『[巴黎]茶花女遺事』は小デューマの『椿姫』であり、『黒太子南征録』はコナン・ドイルの小説、『仙女縁』及び『白雲塔』は原書及び原作者の名を記さず未詳。402頁

コナン・ドイルを補ったのは、松枝が調べた結果だと思われる。

前述のとおり魯迅を回想した文章として有名だ。よく知られているにもかかわらず、ここに出てくる人名書名についてとなると、説明がとたんにあやふやになるのはなぜだろうか。書いた周作人自身がはっきり記憶していないのだからしかたがないといえば、そうだが。しかし、林紘についての解説が不十分だといわざるをえない。解説者の力が入らないらしい。

「林訳小説叢書」が「百数十冊があり」と書くのは、誤りではないが正確でもない。正しくは、全100編186冊である。

松枝茂夫がおかした大きな間違いは、「冷血」を林紘にしてしまったことだ。冷紅生と「冷」が共通だから連想がはたらいて誤解したのかもしれない。だが、冷血は、陳景韓の筆名である*1。このことは、日本では広く認知されていなかったらしい。竹内好が『魯迅』において後々まで「「冷血」は彼（林紘）の号である」（未来社1961.5.20 / 1968.10.10第二刷。77頁）と説明している。いや、現在もそうか。そういう扱いをされる作家だ。

上記の周作人引用部分は、林紘、冷血（陳景韓）、『ユーベル』というみつつの話題がただ並列されているにすぎない。結びつけているのは、単に翻訳だということくらい。林紘とユゴーといったところで、はみだすものがある。それを松枝は、すべて林紘に関するものだと勘違いした。だから、別人である冷血を林紘にしてしまった。

周作人は、1938年7月11日付書簡で改造社本を受け取ったと松枝に知らせている。冷血について松枝が間違っ理解している、と指摘してもいいところだ。だが、それをしなかった。

つぎは、日本語訳『瓜豆集』だ。

周作人著、松枝茂夫訳「魯迅に関する二」(『瓜豆集』創元社1940.9.25)は、字句に少しの改変がある。だが、ほぼ同じだといっていいただろう。再度引用する。

その次は林琴南で、『[巴黎] 茶花女遺事』(小チューマの『椿姫』)が出て後、出るたびにみな買った。確か最後の一冊は東京神田の中国書林で買った『黒太子南征録』(原著者原書名未詳)であつたと記憶するが、全部二三十種もあつたらうか。当時は冷血(林琴南)の文章は非常にハイカラで、彼の訳述した『仙女縁』や『白雲塔』は私も今に荒ましおぼえてゐる。そのほかユーゴー(Victor Hugo)の探偵談みたいな短篇小説で『ユーベル』とか何とか云ふのがあつたが、非常に面白く書いてゐた。289-290頁

前著では注釈で説明していた一部分を本文に組み入れた。コナン・ドイルを削除したほかは、それほど変わっているわけではない。ただし、ドイルをなぜはずしたのかは不明だ。冷血については、林紓だと誤ったままである。

それにともない注釈が、書き換えられた。

注五五 林琴南孝廉 林紓、字は琴南、清末の拳人(孝廉と同意)、海外名著の翻訳『林訳小説叢書』百数十種あり、清末民初の文壇に新しい空気を吹込んだ功績は没すべくもない。しかし彼の頭は依然古く、翻訳の目的主旨は全然間違つてゐたため、遂に時代に残された。383頁

林紓と林訳についての評価をつけ加えている。

林紓の翻訳はその功績を高く評価する。だが、「遂に時代に残された」という。ここは、林紓に対する松枝自身の判断だ。

のちのことだが、増田渉も林紓について「歴史から置きざりにされてしまった」(1967)と書く。林紓が文学革命に反対した結果を指すのである。

これを読んだ日本の読者が、林紓についてよい印象をいただくのはむづかしいだろう。林紓は、時代に取り残され、歴史から置き去りにされた頭の固い老人だ。

せいぜいその程度の人物だ、くらいにしか思わないのではなからうか。

林紓の翻訳は認めつつ文学革命期の林紓を批判するという典型を、ここに見ることができる。

松枝は、「『青木正児全集』に寄せて」（『松枝茂夫文集』第2巻研文出版1999.4.20所収）を發表している。青木の書いた論文に感激したと次のようにいう。「雑誌『支那学』に發表された「胡適を中心として渦いている文学革命」を読んだときの感激を忘れることができない。先生の書かれた文章に激発されて中国文学に志したものは決して私ひとりではなかつたろう」126頁

その青木論文は、当然のようにして林紓に言及しているのだ（青木「胡適を中心として渦いてゐる文学革命（三、完）」『支那学』第1巻第3号1920.11。52頁。影印本による。『青木正児全集』第2巻春秋社1970.7.20。240頁）。

関連部分を紹介すれば、こうなる。

青木は、王敬軒の文章を『新青年』に見いだした。錢玄同がなりすました架空の人物だ。それが捏造書簡であるとは、青木は知らない。王敬軒が実在していると考えた。真相が明らかになるのははるか後のことだ。青木がだまされるのも当然だといえよう。青木は解説して「彼（王敬軒）は古文小説家林紓の為に熱心なる辯護を試み」、とこれが「逆流」だという。ならば、王敬軒に連なって林紓が存在している。頑固な旧派が林紓だという青木の認識なのだ。

青木論文に「激発され」た松枝が、林紓に対して悪印象を持ったとしても不思議ではない。

4 小川利康の注釈

創元社の『瓜豆集』からかぞえれば、ほとんど70年を経て該当部分の注釈が書かれた。研究は、進んだのか。

前出の小川利康編「周作人・松枝茂夫往来書簡 戦前篇（2）」である。注釈を引用する。

注7 ユーベルとは『探偵ユーベル』（ヴィクトルユーゴー作、森田思軒訳、

民友社一八八九年)のことを指す。林訳小説の中には見あたらず、漢訳は不詳。32-31頁

林紓の翻訳ではないから、見あたらないのは当然だ。漢訳は(法)西余谷著、冷血(陳景韓)訳「遊皮」『偵探譚』第1冊(時中書局1903)だろう。ここでいっているのは、森田思軒*2の日本語翻訳作品である。

周作人のその部分をよく読んでほしい。

「そのほかユーゴー(Victor Hugo)の探偵談みたいな短篇小説で『ユーベル』とか何とか云ふのがあつたが、非常に面白く書いてみた」

ここは、これで独立している。ほかの箇所とはかかわりがない。林紓の翻訳ではないのだ。周作人も読んでおもしろかったというだけのこと。ただ、ユゴーでつながる。

ユゴーといえば、魯迅の翻訳が自然に浮かんでくるだろう。

(法)囂俄著、庚辰(魯迅)訳「哀塵」(『浙江潮』第5期 光緒二十九年五月二十日1903.6.15)だ。この原作は、ウヰクトル、ユーゴー著、森田文蔵訳「フアンティーン Fantine のもと(一千八百四十一年)」(『国民之友』第26号1888.7.20)ということもわかっている。ただし、これには非魯迅翻訳説がある*3。

森田の該翻訳は、ユゴー作品集に収録された。それが、森田思軒重訳『ユーゴー小品』(民友社1898.6.4)だ。これを見れば、「探偵ユーベル」もある。ということは、周作人が読んだのはこの『ユーゴー小品』であった可能性もある。

小川の注釈をつづける。

注8 林訳小説の一種『黒太子南征録』(英国^{コナン・ドイル}柯南達利、林紓、魏易合訳、一九〇九年)。周作人の説明にある八ガード、続く書信に見えるスコットも誤り。『仙女縁』という書名は存在せず、書名から類推すると、おそらく『荒唐言』(伊門^{エドモンド・スペンサー}斯賓塞爾、林紓、曾宗鞏合訳、一九一四年再版)が該当すると思われる。同書の原題は、Faerie queene(邦題名『妖精の女王』)であり、内容的に最も近い。あるいは題名として近い『金梭神女再生縁』(英国^{マリア}哈葛徳著、林紓、陳家麟合訳、一九二〇年)か。このほか回答で言及していない『白雲塔』

も未詳。31頁

『黒太子南征録』は、コナン・ドイル Conan Doyle の “The White Company” が原作だ*4。そこまではよろしい。

つぎが問題だ。

小川は、『仙女縁』が林訳作品だと勘違いしている。松枝茂夫が冷血を林紘だと思いこんだのを踏襲したらしい。松枝の思考に深く影響されたのだろう。

林訳だと考えるから、「書名から類推すると、おそらく『荒唐言』」などと荒唐無稽な説明になってしまった。

あるいは、『金梭神女再生縁』だとすれば刊行は1920年ではないか。民国になって林訳とは離れた魯迅だったから、年代があわない。五四事件直前の林紘を批判した魯迅である。ありえない。該書の原作については興味深いことがあるが、本稿とは関係がないので書かない。

では、冷血陳景韓（1877-1965）*5の作品で「仙女縁」があるかといえば、これは該当するものがない。

ただし、これかと推測できる翻訳はある。（法）囂俄著、冷訳「賣解女兒」（『小説時報』第9期 宣統三年三月二十日1911.4.18）だ。

冷は、冷血と同じく陳景韓の筆名にほかならない。原作は、ユゴーの「ノートルダム・ド・パリ Notre-Dame de Paris」という。同じユゴーならば、状況からいって合致する。周作人は記憶違いすることがあるから、これもそうではなからうか。

もうひとつの『白雲塔』は、翻訳がある。

冷血訳『白雲塔（一題新紅樓）』（有正書局 光緒三十一年1905）という。原作は、押川春浪『伝奇小説 銀山王』（東京堂1901.6、博文館1903.6）と目録にある。

5 結 論

増田渉は自分のがのめり込んだ魯迅を通して林紘を見た。魯迅は、林紘のことを「ファシスト」と罵っている。

松枝茂夫は自分のがのめり込んだ周作人を通して林紓を見た。周作人は、林紓の死去にあって「文学革命」以後、人々はみな林氏を罵る権利をもつことになった」と罵っている。

魯迅と周作人は、ふたりともに林紓という人物を敵視していた。増田と松枝の見方に影響をあたえなかったはずがない。

増田と松枝のふたりは、ともに周氏兄弟という色眼鏡を通して林紓を見たということをおはいいたいのだ。

林紓に対するよくない印象は、のちのちまで松枝茂夫のなかで消えることはなかった。

1987年の座談会「松枝茂夫氏を囲んで 紹興、魯迅そして周作人」(飯倉照平、木山英雄『文学』1987.8.10。のち改題して前出『松枝茂夫文集』に収録)において松枝は次のように発言している。

それから王羲之の住居跡が王家山というんですが、その近くには筆飛街といって王羲之に由来する名前の街があるんですよ。その筆飛街に蔡元培の生まれた家がある。ごく狭苦しい小さな家で、進士及第の額のそばに簔と笠が下がっていたのが面白かった。蔡元培は下層階級の生れで、李慈銘の玄関番をして刻苦勉励したんだといえますね。林琴南が北大校長蔡元培にあてた手紙に、白話のことを罵って、「引車売漿者流が操る所の言」といっていますね。この引車売漿者流とは、白話運動に好意を寄せている蔡元培の出自をほのめかして、あてこすっているような気がするが、ちがうかな。47頁

同席している飯倉、木山のふたりとも、松枝の発言について特に反応を示していない。林紓が「蔡元培の出自をほのめかして、あてこすっている」ことを認めているのだと考える。

この松枝の発言は、1975年に日本で公表された魯迅の書簡がもとになっているのではないかと。魯迅から山上正義にあてた日本語の手紙(1931年3月3日付)だ。丸山昇によって詳しい注釈がつけられている。

魯迅はその手紙のなかで、林紓が蔡元培の父親をあてこすった、と説明した。

それ以後、ほとんど定説になっている。だが、これは違う。

確かに、魯迅は林紘が蔡元培の父親をあてこすったと受け取った。だが事實は、林紘ではない別人が中傷したのだ。それを、林紘が行なったことにして、魯迅は何も知らない山上正義に教えた。魯迅が引き起こした林紘冤罪事件なのである*6。

あてこすった対象は蔡元培自身が、それとも彼の父親か、微妙に異なる。だが、あてこすったと受け取ったのは松枝も同様だ。1975年公表の魯迅書簡が根拠でなければ、松枝が独自に感じたものかもしれない。そうであったとしたら、林紘に対する反感が長く深く松枝の中で息づいていた証拠となる。

残念ながら、林紘につながる日本人は、当時いなかった。だから誰も弁護しない。今も、いない。あるのは、林紘に対する罵倒だけだ。だからこそ私はそれを称して「林紘を罵る快樂」という。

研究者の全員が痛罵している人物を研究対象に選び取るひとは、めったにいない。林紘にとっての不幸であろう。林紘に関して日本人がほどこす注釈が不正確であるのは、それが原因のひとつではなかろうか。

【注】

- 1) あとから気づいた。山田敬三『魯迅の世界』(大修館書店1977.5.20)に指摘がある。333頁。もしかすると、ほかにも言及した論文があるかもしれない。そのばあいはこちらを容赦願いたい。
- 2) 森田思軒研究会『森田思軒とその交友 龍溪・蘇峰・鷗外・天心・涙香』松柏社 2005.11.30
- 3) 中島長文「「哀塵」一篇は魯迅の訳する所に非ざるを論じ兼ねて「造人術」に及ぶ」『颯風』第38号2005.3.28
- 4) 前出の山田敬三は、ドイルの『ナイジェル卿』43頁、*Sir Nigel* 333頁と誤る。
- 5) 樽本「贗作ホームズ失敗物語 陳景韓、包天笑から劉半農、陳小蝶へ」『清末翻訳小説論集』所収
- 6) 樽本「魯迅による林紘冤罪事件 「引車売漿者流」をめぐる」『林紘冤罪事件簿』所収

『林紓冤罪事件簿』ができるまで あるいは発想と研究方法について

『清末小説』第31号(2008.12.1)に掲載。林紓は戯曲を勝手に小説化して翻訳したと批判されつづけている。だが、林訳シェイクスピア、林訳イブセンの底本は、それぞれの戯曲原本ではない。クイラー＝クーチが小説化した、あるいはデルが物語化した書籍が林訳のもとになっている。すなわち、従来の林紓批判は根底から崩壊するのである。この、誰もが想像しなかった事実を私がどのように発見したか。その経緯を説明する。

台湾の国立政治大学において、私は林訳シェイクスピアと林訳イブセンについて話した。

参加者の大多数は、学生と大学院生らしい。一通り説明し終ると、どうやって原作をさがしたのか、とひとりから質問がだされた。インターネットで検索して、と答える。すると、そうではないという。林訳の底本が小説化本だとなぜ気づいたのか、との問いだ。なるほど、「新しい発見」にどのように結びついたのか、その発想の過程について知りたいらしい。論文をどのように書いたらいいのか。この問題に直面しているのだろう。いちばん興味を感じたところだとわかる。質問した人は、目のつけ所がいい。

以前はインスピレーション *inspiration* といわなかったか。ひらめき、だ。今はセレンディピティ *serendipity* と表現する人もいる。辞書には「掘り出し上手」とある。イギリスの文筆家が造語した。偶然によいものを見つける。林訳問題もその例のひとつか。偶然ねえ。そうすると私にだけ「偶然」がおこったことになる。普通に考えて、ありえない。

「ひらめき」にしても、準備段取り時にほとんどの力を汗として出しつくしたあとにふってくる。それも、必ずおりてくるという保証はない。考えつづけるという行為とは無関係に「ひらめき」が出てくるとは思えないからだ。なにも考えていないのに偶然掘りあてるだろうか。そもそも、なにかを求めているからこそ掘るのではないか。

いきなりはじめても理解できない。

20世紀への変わり目における中国での話だ。外国文学の翻訳で活躍した林紘(1852-1924)という知識人がいた。彼の翻訳原作に関して、従来知られていなかったまったく新しい事実を明らかにした。そういう種類の話題である。

林紘のある翻訳作品について、中国大陸、香港、台湾、日本そのほかの研究者が、つまり学界全体が長年にわたって罵倒しつづけている。80年をこえる。日本でいえば大正時代に非難がはじまり、昭和をへて平成の現在にまで続いている、といえわかりやすいか。定説そのものといっていい。中国では、中華民国から中華人民共和国になって成立60周年を目前にひかえた時期までだ。それくらい長期間にわたって林紘は批判されている。

だが、それは誤解にもとづいたものなのだ。中国近現代文学研究界では、この信じられないような事態が実在している。誤解だと表現するのでは生ぬるい。無実の罪なのだ。私が、林紘冤罪事件だと称する理由である。濡れ衣を着せたまま、それが事件であるという考えすら学界には存在しない。この事実に対する私の驚きはその根底にある。中国文学研究史上まれにみる冤罪事件にほかならない。

林訳について長年信じられてきたことが誤りだった。しかも冤罪事件である。何がどのように間違っていたのか。その実情について台湾で報告した。

私は、少し心配だった。なぜなら、私が話すのはまったく新しい事柄だ。いきなり説明して理解してもらえるだろうか。台湾だからというわけでは、当然ない。どこであっても同じだ。

以前、日本のある場所で別の話をしたときのことだった。話し終わったあとだ。学生のひとは、匿名のアンケートに記入して、自分が理解できないのは教員、すなわち私が悪いと責めるのである。その学生は、どう考えても中国とは関係がない。何も知らないといっていい。私が話すのは、大多数の人にはなじみのない

話題だとわかっている。だから、事前にずいぶん準備をした。資料を配付して丁寧な解説したところが、そういう結果である。私は、少し驚き気落ちした。

この林訳問題も、いままで誰も指摘していない。しかも、従来の評価を180度方向転換させる。納得してもらうのは困難ではないか。

だが、杞憂だった。中国文学研究に従事している、あるいは専門にしようとしている優秀な台湾の人たちである。問題の重要さをたちまち把握したばかりか、冒頭の問いが発せられたのだ。何も知らなければ出てくるはずのない種類の質問だ。

問題解決にいたった種明かしをし、という意味だと私は理解した。

聞いてみれば、何でもない。だが、そのなんでもないとされることに、なぜ今まで誰も気づかなかったのか。中国現代文学研究界が、従来まったく疑問にも思わず、問題があることすら察知しなかった。ゆえに、誤りが誤りであるという認識もない。その理由は何なのか。問題解決への過程と、問題そのものが生まれた研究環境について考える機会となったのだ。

林紵は、清朝から中華民国初期を生きた知識人だ。彼が死去したのは1924年だった。享年七十三。それから数えても80年以上が経過している。本稿で紹介する事柄は、その間、研究者のひとりも指摘することができなかった。自画自賛だという人がいるだろう、と先回りしていう。成功例を説明すると自慢話になりかねない。しかし、それだけには終らなかつた。さらに大規模な問題を浮き彫りにすることになる。ここに紹介したい。

1 林紵翻訳に対する批判

林紵が漢訳したシェイクスピアとイプセンについて、私が新しい知見を加えた。

といっても、背景には私独自の研究の流れがある。ある日、関係のないところで探さないのに出てきた、ということはある。考え続けさがし求めても見つからないのが普通だ。何を考えていたか。

林訳とは、林紵が口述訳者と共同で翻訳した作品群を指している。200種をうわまわる外国作品を漢訳した。イギリス、アメリカ、フランス、スペイン、ノル

ウェー、ロシア、日本など諸外国にわたる。まさに超人的な仕事量だということができる。

それが可能だった理由は、林紘が外国語を理解しなかったところにある。

やや逆説的ないいかたになるだろう。すなわち、林紘は、外国語に堪能な人物と一緒に組んで翻訳した。共同翻訳なのである。訳者が口述翻訳するのを聞きながら、林紘が得意の文言で筆記する。これが林紘の翻訳方法だ。協力者が多くいればそれだけ多くの作品を翻訳できる。ゆえに、この大量の漢訳を社会に送り出すことが可能だった。翻訳のひとつの方法である。非難されるべきものではない。

林紘を中心とした個人的で小規模な「翻訳工房」だったと考えれば理解しやすい。

「翻訳工房」ということばは、私が本稿ではじめて使用するものだ。しかし、工場という発想それ自体は、私のものではない。先例がある。

ひとつは、「文章製造工場 [文字製造廠] 」といった人がいる。ただし、こちらは翻訳ではない。訪問取材だ。

林紘の友人である高鳳岐（林紘と同時に挙人。商務印書館編訳所に勤務）が林紘『技撃餘聞』（上海・商務印書館1908未見）の序文にそう表現した。林紘が聞き書きを記録して、レコードのようにありのままだからそういう表現になっただけ*1。他人がしゃべるのを聞いて筆記するのだから、林紘にとっては翻訳のばあいと同じことだ。

もうひとつは、陳衍（石遺。林紘と同時に挙人）「林紘伝」（『国学専刊』第1巻第4期1927.10.2。台湾影印1970.2。94頁）だ。次のようにある。「その友陳衍は、かつて戯れにその部屋を「造幣局 [造幣廠] 」とよんだことがある。動かせば金になるということだ。しかし、林紘は金銭にはまったく無頓着で、人の急場を助け救済するのに出し惜しみすることはなかった」

「造幣局」というこの表現は、後に独り歩きをはじめた。多くの作品を刊行した。共同で翻訳するやり方の林紘小説が、あたかも粗製濫造であるかのような印象をあたえるように意図をもって引用されることになった。林紘をおとしめたい人は、自説に都合のいいように文脈を無視して断片を高く掲げる。林紘が他人を快く援助した後半部分は無視し、「造幣局」だけに注目する*2。金もうけのため

の工場だと短絡させるのだ。

私がいう「翻訳工房」ならば、林紘の名前しか出さないだろうと思われるかもしれない。そうではない。翻訳を公表する時、林は共訳者と必ず連名にしている。功名を林紘が独占するわけではない。公明正大なのである。

私は、林方式の翻訳 「翻訳工房」があってもよいと思っている。

原文に忠実な翻訳が出てくる必要があることは、いうまでもない。それらを含めているんな種類の翻訳があってもいい。その時代により、読者の需要が違うだろう。それに応じた翻訳作品の形態があるはずだ。

それとは別に、林紘が外国語を理解しないことを彼の決定的な欠陥だと考える研究者がいるのも事実だ。中国にかぎらず、大多数の研究者がそうである。だが、外国語を理解する人物しか翻訳を行なってはならない、というのはあまりにも偏狭である。なぜ、林紘が「外国語を理解しない翻訳者」だといわれ、軽蔑嘲笑され痛罵漫罵の対象にならなければならないのか。私には不思議に感じられる。

林訳批判の理由のひとつは、つぎのように説明されている。

すなわち、シェイクスピア、イプセンの戯曲を勝手に変形して小説体で漢訳した。著名このうえもない海外の戯曲作品を林紘は散文体に変更している。図式化すれば「原作戯曲 林訳小説」である。出てきた林訳が小説体になっているから、林紘が批判され続けてきた理由なのだ。ペイツ（中国風）。戯曲と小説の区別もつかない（私はこれを「区別がつかない論」と称する）。いっているのは私ではない。著名な研究者鄭振鐸がそう指摘し、そう書いている。劉半農が言い出し胡適が追随したから彼らも含めてよい。わかったようでよくわからない理屈だが、林紘を侮蔑しているのは明らかだ。

結論を先にいっておく。戯曲を小説体で漢訳したというのは事実ではない。私は断言する。

林紘＋陳家麟は、シェイクスピア原作を直接翻訳したのではない。林紘＋毛文鍾は、イプセン原作を直接漢訳したのでもない。実は、原作の戯曲を小説化した英語版が存在しているのだ。同じく図式にすれば「原作戯曲 英文小説化本 林訳小説」という流れになる。

原作の戯曲にもとづいて英語で小説化した人がいた。林紘たちが漢訳にあたり

底本にしたのは、その英文小説化本なのである。もともと小説化本だから翻訳して小説体になるのは当然だ。それを従来は「原作戯曲 林紓小説」だと誤解していた。すなわち、80年をこえて継続されていた林紓批判は、間違いである。

私が行なったのは、翻訳底本を特定したことにすぎない。見方によれば、まことに小さな事実だ。しかし、80年以上も続いたこの誤認は、尋常なことではない。さらに、この小さな発見が、規模のより大きな林紓冤罪事件を解明する契機になるのだ。

林紓批判が継続されているその時間の長さを表現するためには、具体的な研究者名を掲げて80本近くの文献を列挙するほかなかった。私が林紓の冤罪を主張してくり返すことなどは、彼のこうむった仕打ちに比較すればものの数には入らない。これが私の考えである。そのままを実践している理由でもある。

そこで本文冒頭の質問につながっていく。

原作戯曲と林紓の間にはさまって存在している英文小説化本について、どのようにして思いついたのか。どこでその発想を得たのか。従来の定説をくつがえす「新しい発見」にはどういう筋道で行き着いたのか。

2 「林紓を罵る快樂」

私が当時考え続けていたのは、つぎのことだ。

林紓の訳業を含めた彼の行動について、従来からの論説評論を検討しはじめていた。その作業をしながら私が理解したうえで名づけた論文の題名は、「林紓を罵る快樂」という。

検討の対象にしたのは、1919年の五四事件が発生する直前までの林紓だ。

諸論文を読むと次のことがわかった。すなわち、林紓の翻訳についてはおおむね正の方向で評価する。ただし、シェイクスピア、イプセンを小説化して翻訳した事実は否定しない。ここは大きな欠点だとして批判する。さらに、研究者の全員が、つまり研究界全体が、文学革命に反対した人物として林紓を罵り続けている。例外がない。しかも、研究者たちはあたかも罵るという行為そのものに快樂を感じているように私には思われた。罵ることが研究をしていることと等価なの

だ。どうしてそのような情況にいたったのか。これを私なりに追求することが当面の目標だった。

検討の過程で最初に不思議だと感じたのは、これも本当に小さなことだ。林紘が書いた古文擁護を主張する短い文章にまつわる。

小さな部分につながって大きな問題が背後に隠れている。あるいは逆に、見えない大問題が小さくほんのわずかに手がかりを露呈させている。私はそう思うのだ。林紘問題のばあいは、その些細なほころび目が、彼の当該短文だった。

1910年代後半の中国では、伝統的な文言を廃して白話の使用を主張する論調が出現して渦巻いている。林紘は、その時すでに六十歳のなかばをこえた老人であり文言を守る立場を維持していた。

文人である林紘は、白話を激しく攻撃する文章を発表した。どの研究論文にもそう書かれている。

アメリカに留学していた胡適が、その林紘論文を批判的に紹介した。私は胡適の文章によって林紘の文章があることを知った。情況を知るためには当然読まなければならない文献である。林紘の白話批判はどのように激烈なのかを知りたいと思った。ところが、批判されている林紘の論文そのものを読むことができない。奇妙なことだ。

論文名は、わかっている。「論古文之不当廢」という。だが、どこに発表されたものなのか。見れば、林紘の著作目録など専門書にもあやふやな記述しかない。発表月日も掲載紙も書かれてはいない。

おかしいではないか。反対派を代表する林紘の主張であるならば、研究者は原文を読んでいなければならない。それが研究の基礎であり常識だ。いまさら私がいうまでもない。文学革命派による林紘批判そのものを検討するためには、原文を手元に置いてこそ研究ははじまる。それにもかかわらず林紘の文章は中国で刊行されたいかなる資料集にも収録されてはいない（研究に着手した当時はそうだった）。疑問が生まれる。ということは、研究者たちは胡適による断片的な引用のみに依拠して林紘を批判しているのではないか。原文を読まずに批判していることになる。中国にはあれほど多数の研究者がいて、自国の文学研究においてまさか読まずに批判をするだろうか（だが、これが事実だった）。私はそう感じた。不

可解だ。

私は、林紘の原文をさがして新聞掲載のものを複写で入手した。見れば、題名は「論古文之不宜廢」である。驚いた。題名そのものを少数の論者*3をのぞいてほとんどの研究者が誤っていることになる。「不^マ當廢」と書いて題名の1字が間違っているのだ。

たった1文字ではないか、という人がいるに決まっている。たいした事ではない、というはずだ。意味は同じだ、論旨には関係がない、と主張するだろう。私は、そのような例をいくつか体験してきている。事実、別の問題で私に手紙をくれてそう断言した中国人研究者（統合版注：裴效維を指す）がいた。作品初版の刊行年が間違っていると指摘した。それに答えて、確かに初版は見えていないが、作家研究には関係がない、というのだ。細かい部分にこだわらず、大きな問題を論じろといたいわけだ。実物で確認する重要性をその研究者はわかっていない。驚いた。

字数の問題ではない。勘違いがあるにしても、林紘の論文名を一律に誤る。研究者が論文名を誤記するのは、原文を見ていないからだろう。多くが掲載紙も発表年月日にも触れない。実物で確かめなければ詳細を明らかにできるわけがない。胡適が最初に書き誤った、あるいは雑誌が誤植したのを踏襲した。

しかも、私が原文を探し出して読んでみると、内容は伝えられているものとは違う。いわれているような激烈な白話反対論ではない。「古文は廃止すべきではないことを論じる」。論文の題名が、その内容を的確に表現している。林紘は、文言の重要性を静かに述べているだけだ。どう読んでも、ここにいる林紘は、文学革命を主張する人々にとっての強力な反対者ではない。だいいち胡適自身が、これを読んでそのあまりにおとなしすぎる論調にガッカリした。これでは敵にはならないとサジを投げたくらいのものだ。しかし、のちの研究者たちは、林紘の原文を読まずに彼を批判している。あるいは、白話文に反対した、という定説に思考が縛られている。定説に従えば、林紘が書いてもいない文章が目に見えるということだ。私のいただいた最初の疑問は、不思議という感覚から疑念に変化してより強くなった。

文学革命派から罵倒されている林紘について、文献を読むことによってその経

過をさらに追跡することにした。

私が理解したのは、文学革命派である銭玄同、劉半農らが捏造論文（書簡）を発表までしてむりやり林紓を敵対者に仕立てあげたという事実だ。

北京大学学生だった羅家倫が歩調を同じくして林紓を批判したのは、特別に手がこんでいる。

志希（羅家倫）「今日中国之小説界」（『新潮』第1巻第1号1919.1.1。影印本）である。彼は、英文著書を引用して、外国人ラインシュ Paul S. Reinsch が林紓を批判していると紹介する。私が羅の示した英文原書を書店から取り寄せて読んでみれば、これにも驚く（それ以後も、手に汗握っておどろくことが続いた）。著者ラインシュは、翻訳に功績があった人物として林紓を称賛しているではないか。ところが、羅家倫の手にかかるとそれが逆転する。外国人が林紓を批判したことになっている。最初は、自分の目を疑ったほどだ。そこまでやるかね。著者の意図したことは反対方向に、羅家倫はねじ曲げて引用し紹介する。牽強付会である。こじつけというよりも、これも捏造としかいいようがない。

銭玄同は、この羅家倫論文を読んで自分の日記（1919年1月11日付。影印本）に感想を書いた。「羅は林琴南の翻訳小説を評して、正しい」。さすがに、捏造書簡を作った銭である。林紓批判がなされていけば気に入るのだ。

もともと英文だから誰も検証しないと羅家倫は考えたのだろうか。確かに誰も検証していない。のちの研究者もナメられたものだ。

ますます不信感が強くなる。問題は林紓の側にではなく、文学革命派の方にこそあるように私には思われた。

林紓の死去直後に鄭振鐸が登場する。

鄭にとって林は生前は敵対者であったが、死後だからこそ業績を公平に評価ができる。そう彼は告白するのだ。いかにも公平につとめ、その結果まるで正当に評価を下したかのように読めるではないか。

だが、鄭は公平を装って林紓批判を決定づけた。シェイクスピア、イプセンの戯曲を小説にして翻訳するほどのデタラメぶりだと林紓を批判したのは、ほかならぬこの鄭振鐸である。外国語を理解しない翻訳者林紓は、戯曲と小説の区別もつかない、と侮蔑と罵りの大合唱がはじまったのはそれ以後のことだ。「区別が

つかない」論は今にいたるも研究者によって支持されている。林紘は本当に戯曲と小説の区別がつかなかったのか、という疑問をひとりとしてもったことがないらしい。林紘は無知だ、とひたすら痛罵の声をあげて現在にいたるまで叫び続けている。

ひとことでいえば、研究者のほぼ全員が文学革命派の立場で当時の文学状況を把握している。それ以外の視点が存在しない。ましてや、林紘の側から文学革命派を見る発想など生まれる余地もない。その必要性が認識されることは元来ない。なにしろ、林紘は文学革命派によって敵対者に指名された。「勝者の文学史」においては、林紘は敗者としての扱いから逃れることはできない。しかも「勝者の文学史」しか書かれていない。これでは、林紘にとっては致命的だ。

林紘についての一般的な認識は、つぎようになる。

林紘は、200種にのぼる外国作品を漢訳した中国の著名な翻訳者である。ところが、外国文学を中国に紹介したこの先駆者は、五四時期には文学革命の反対者にまで落ちぶれてしまった。しかも、彼が翻訳で行なったことのひとつは、戯曲を小説に書き換えることだった。それほどまでに杜撰なことをしていたのだ。あまりの意外さから尊敬が一転して侮蔑嘲罵に変化したものかと思う。

だが、鄭振鐸はもともとから文学革命派のひとりではないか。見方によれば、これを偏向しているというだろう。その彼が述べることを無批判に検討することなく受け入れていいのだろうか。普通に出てくる感想だ。また、戯曲を小説に訳し直すという作業は、それほど簡単なものなのか。少し考えればその奇妙なことに気づく。

どこか腑に落ちない気持ちがつづいていたことは確かだ。

文学革命派の敵対者として林紘が特別に指名された。敵として指名をした側の鄭振鐸が、1930年代には当時を回想して文学状況についての概説を書いている。往時において敵対者であった林紘である。敵としての位置が変更されることはない。文学革命派にとっては、林紘は軍人と結びついた強敵だった、と彼の死後も説明されている。その林紘が外国の文学作品を翻訳するにあたって原作の戯曲と小説の区別をつけることができなかった。中国の知識人が、文学上の分野について無知であるというのだ。守旧派の老人だからなのか。外国語を理解しなかった

からなのか。筋が通っているような説明だが、どこか不自然だ。私はそう感じる。だが、鄭振鐸の論文が公表されて以後、すべての研究者が漢訳の誤りを指摘し、文学革命の反対者として林紘を認定している。中国大陸、香港、台湾、日本そのほかという違いがない。

奇妙だと思うのだが、明解に説明することはできない。私の意識の上ですっきりしない状態が生じる。自然に、頭のすみのほうでいつも考えていたのだろう。

その瞬間についてだけは、今でもはっきりおぼえている。

シェイクスピアの「歴史劇」ということばが脳裏にふと浮かんだ。「小説化本」プラス「歴史劇」である。これから説明します。

林訳シェイクスピア研究における前段階が「小説化本」である。つづく後段階が「歴史劇」だ。

前段階からお話ししよう。

林訳シェイクスピアには、英文小説化本があるのではないか。この考えにそって調査を進めていた。

3 林訳シェイクスピア

林訳シェイクスピアについて復習しておく。

流布するシェイクスピア作品は、いうまでもなく英語で書かれた戯曲だ。そのなかの「ジュリアス・シーザー」などについて、林紘は英語の原本にもとづいて小説体に変えて漢訳した。これが、定説であり林訳批判の根拠になっている。原作戯曲の「小説化 novelization」とよんでいる。

林訳シェイクスピアといえば、あの有名な『吟辺燕語』(1904)がある。底本がラム姉弟の『シェイクスピア物語』であることは、広く知られている。現在では、とつけ加える必要があるかもしれない。

劉半農の林紘批判にはじまる。

銭玄同が架空の人物王敬軒になりすまして捏造論文を書き林紘を称賛する。それに対して劉が徹底的な批判を加えるという「なれあいの手紙」である。あまりにも有名だ。1918年に公表された。中国現代文学史では、わかりやすく表現す

れば「やったねッ(笑)」という感覚で称賛されている。

事実、最近でもつぎのように説明している研究者がいる。「のちにこのなれあい芝居は、現代文学史において人々が好んで話すおもしろい逸話になった〔後來這出双簧戲在現代文学史上成了一件人們樂談的趣事軼聞〕」*4

林紵批判はあまりにも当然だから、立論の基盤を疑うという考えは、もとからない。攻撃目標にされた林紵は、標的として存在するだけ。視線を少し上にずらしてながめれば、生きている林紵が見えるはずだ。しかし、文学革命派の側に完全に立つその著者は、視点を動かす必要を感じていない。書かれた表現の上等ではない感覚に私は目をそむけそうになる。「文学革命」に気品の高さを求めるのはお門違いだと十分に理解はしているつもりだが、書かずにはいられない。だからこそ文学革命というか。革命にはなんでもあり、だ。当事者でなくても、文学革命側につく人間は、何を書いてもなにをやってもお咎めなしである。そう公認されている。

劉は林訳『吟辺燕語』を例にあげ、詩と戯曲の区別がつかないという。奇妙な説明だと思う。『吟辺燕語』の存在を頭においてわかりやすく書けば、林紵は戯曲を小説に変えて翻訳した、という意味である。翻訳で有名な林紵であるが、その翻訳そのものに大きな欠陥があると劉半農は指摘したのだった。

たしかに翻訳にはシェイクスピアの名前が表示されているだけ。ラムの名はない。見れば戯曲が小説になっている。林紵が勝手に小説化したと劉半農は思った。まさかラム姉弟の『シェイクスピア物語』が底本だとは考えなかったらしい。

それにしても、劉は本当に知らなかったのだろうか。あるいはラム姉弟の原作であることを知っていてそう批判したのか。劉半農が林紵を批判するために書いた文章だから、事実などどうでもよかったのか。そうだとすればおかしな論拠ではある。今となっては、詳しい事情はわからない。誰も劉半農の誤りであったとは言っていないのだ。当時、それについて説明する人もいない。

さらにいえば、林紵も反論しなかった。誤解してはならない。反論できなかったわけではないのだ。文学革命派からの批判は無視するのが林紵の考えだった。劉半農の林紵批判は、訂正のないまま認められて現在にいたっている。これも不審な点のひとつになる。ここでいう不審とは、研究者はなぜこれを劉の間違いだ

と指摘しないのかという意味だ。理解していてもそれを書くことができない事情でもあるのだろうか。

後に鄭振鐸が登場してダメ押しをする。

彼は、林紘批判の構造は維持しながら、劉半農が林訳を酷評する根拠としてかかげた林訳作品『吟辺燕語』を知らぬ風をよそおって取り下げた。そうして何をしたか。シェイクスピア作品「ジュリアス・シーザー [凱徹遺事]」などにすり替えたのである。そのうえで、戯曲を小説にして漢訳した、戯曲と小説の区別がつかない、と林紘を重ねて非難する。鄭振鐸が林紘の死後に公表した「林琴南先生」*5と題する専門論文において展開した。1924年のことである。鄭振鐸が行なったことは魔術であり、すでに芸術の段階にまで到達している。

のちの研究者は例外なく鄭振鐸に追随した。

その理由は、わからないわけでもない。鄭は、1924年当時、商務印書館に勤務していた（1921-1931年在籍*6）。該書館の重鎮である高鳳謙（夢旦）の娘婿だ。林訳は、その多くが商務印書館から刊行されている。ゆえに、鄭は商務印書館の内部資料を利用して林訳についても説明した、と誰でもがそう考える。ほかならぬその鄭振鐸が、林訳を批判して戯曲を小説に書き換えたというのだ。そのことばを信じるのが普通だ。だから、当時、林訳を独自に調査する気になった人は出現しなかった。鄭振鐸の文章は、のちの論文集などにも重ねて収録された。彼は、林紘研究の権威だと皆から認められたのである。そうでなければ、誰かが鄭論文を批判的に検討したはずだ。権威と認められるとその検討をする必要がなくなる。たしかに、鄭振鐸の文章を紹介し引用する研究者はいる。だが、彼の論文そのものを対象にして検証した人はいない。やはり研究の権威なのだ。

だが、現在は、林紘らが翻訳したのはラム姉妹の『シェイクスピア物語』だと広く知られているではないか。その延長線上に「ジュリアス・シーザー」ほかの戯曲をおけばどうか。こちらだけはなぜ小説体に変更したのか。どうもじっくりこない。そう思うのは私だけだったらしい。

林紘研究の専門書、翻訳目録、あるいは文学史など手元にあるものはできるかぎり見た。しかし、皆が鄭振鐸説にもとづきそれぞれが林訳非難をくりかえしている。私が所蔵する書籍は多くはない。少ないから例外がないのか。それにして

も研究者たちは、鄭の使用する語句を直接引用したり言い換えたりしているだけだ。彼らのほとんど全員が、林紘批判の列に加わって罵倒しつづけている。

日本のある中国話劇専門家は、「林紘はさらに、『ヘンリー四世』などを直接翻訳したが、これらはすべて小説体で訳されており、シェイクスピア作品の翻訳とは認められてはいない」*7と説明する。「直接翻訳した」と書いて、林紘がシェイクスピアの原作にもとづいていることを強調している。これを見ると、出典が書かれているわけではない。その中国話劇研究者は、独自に原本で確認したうえで断言している。誰もがそう思う。専門家が書いていることだから「正しい」のだろう。林紘がシェイクスピア戯曲を小説体で翻訳したのは動かしようのない事実である。

林紘の欠点をあげる研究者のすべてが、林紘による戯曲の小説化を指摘し批判し大声で罵る。翻訳界に多大の貢献をしたと林紘を高く評価している研究者ですら、シェイクスピアとイプセンの戯曲については小説化したことを否定しない。

林紘は、『吟辺燕語』に限ってラム姉弟が小説化した版本を底本にしたのか。ならば、逆にこの翻訳作品の方がほかとは異なる。

それにしても、よくわからない。なぜ、『吟辺燕語』だけに英文小説化本の底本があるのか。それ以外の作品については、原作の戯曲をわざわざ小説体に変えたのはどうしてなのか。だからこそ、林紘は戯曲と小説の区別がつかない、と劉半農、胡適、鄭振鐸らは嘲笑し罵った。だが、普通に考えて、そういうことがありうるだろうか。中国の知識人が、よりによって戯曲と小説を取り違えるだろうか。区別がつかないと考える方が奇妙である。劉鄭は、林紘を罵って中国知識人の水準の低さを強調したかったのか。どこかが異様だ。もし小説体に変えたのであれば、その理由を、あるいはその意図を説明してもよさそうなものだ。だが、解説が不足している。

ここまでくると思考の堂々巡りになってしまう。文字通りくりかえすのみ。結論は見つからない。

ひとくちに小説化するといっても、実際に翻訳をする段階では、かえって手間がかかるのではないか。戯曲のままに漢訳する方がよほど楽だろう。私は素朴にそう感じる。この疑問が私の頭のなかで生まれた。鍵語は「小説化本」である。

だが、すぐに忘れるのが普通のこと。備忘録に書きつけているわけではない。

林紵が原作の戯曲を勝手に小説化したという従来の説明、つまり定説について考えれば、その不合理で説明のつかない部分のほうが多いように思う。ところが、目を通した文献（限られたものであるのはいうまでもない）のすべてにおいて、林紵は戯曲を小説化した、と説明されている。80年をこえるほどの長期間にわたってくりかえされているこの説明が、私を圧倒する。私の感じ方のほうがおかしいらしい。自分の勉強不足を痛感するのだ。

林紵は原作の戯曲を小説化して翻訳した。これが定説だから疑いようがない。そうではないか。しかも、私の乏しい知識では、シェイクスピア原作を小説化した単行本といえばラム姉弟の作品しか思い浮かばない。ラム姉弟関係の文献を付け焼き刃的に読んで、彼ら以外にシェイクスピア戯曲を小説化した人がいるなど、どこにも書かれてはいない。この段階ではそうだった。ラム姉弟しかいなかったというわけでは必ずしもなかった*8。だが、それが判明したのはあとのことだ。これについてはすでに文章に盛り込んである。うすうす感じたのは、児童向けに書き直された作品は、それだけで英文学研究者の研究対象にはならないという事実だ。

腑に落ちない。今まで幾度も体験している。どこかおかしいと感じていてもそれに証拠を提出して反論することは簡単ではない。その多くは、腑に落ちないままに記憶からなくなってしまう。うまく証明できることは滅多にないのだ。あるいは、疑問に感じる自分の感覚がおかしい。誰もが認めているから定説なのだ。定説が正しいにきまっている。自分の認識不足に違いない。もっと勉強しなければならない。最後はそこに落ち着く。

疑問に思うところがあれば、それを解明したいと考える。論文を書く前には資料を集めていろいろな可能性をさぐる。それ以外には方法がない、とっているのではない。これが私のやり方にすぎない。先に結論があって、それに合わせて資料を取捨選択するというような器用なまねは私にはできない。

資料がふえれば、それらの問題を合理的に説明するための考えがいくつか出てくる。それをさらに資料をさがして検討することになる。思いつきはしても、資料の裏付けがある確かなものになることは、今までの経験からいっても多くはな

い。

こう考える方が合理的だ。前後の脈絡からして、そう説明すれば納得がいく。しかし、それを証明する資料はみつからない。いくら合理的だと考えたところで、出てきたひとつの事実がそれまでのすべてをひっくりかえすことがある。このくり返しである。いってみれば、その過程が苦しい。あるいは、その苦しさを楽しむ。

一定の方向に筋道がたったところで論文の執筆を開始する。短い論文であれば、結論を得てから執筆にとりかかる。だが、問題が比較的大きく時間がかかるばあいは、おおまかな論旨にもとづいて調査をしながら書くことになる。結論が出てから書けばいい（今、公表するかどうかは問題ではない。論文という形にする途中のことをいっている）。そういう意見はある。だが、わかった部分を文章にしていくことが重要だ。書けば問題がより明確になる。読み返すと説明が不足している部分に自分で気づく。そこを補強する資料をさらに探すという順序になる。書くという作業の重要性を強調しすぎることはない。いくら頭の中で考えて問題が解決したように思っても、実際に文章にしてみると成立しないことがわかるのはしょっちゅうだ。ごくたまに、細かく調べていくと、最初には予想しなかった展開になることがある。より深化して新しい局面が出現するばあいは自分でも意外に思う。いっておかなければならないが、そういう幸運にめぐまれることはマレである。

林訳シェイクスピアについては、その数少ない例であるということができるだろう。自慢しているわけではない。「小説化本」という鍵語で作業をつづけていた。ただし、これは前段階である。さらに後段階が出てきたので驚くことになる。まず、前段階から説明する。

4 前段階「小説化本」

前段階の「小説化本」というのは、定説である林紵による小説化も含まれている。だが、それだけではない。

たしかにラム姉弟の『シェイクスピア物語』は、戯曲を小説化した単行本だ。

林訳『吟辺燕語』は、そのラム姉弟の英文小説化本を底本にした。では、なぜ『吟辺燕語』だけに英文小説化本があるのか。どうしてもそこに戻っていく。ならば「ジュリアス・シーザー [凱徹遺事]」などにも同様に英文小説化本があっても不思議ではない。そうではないか。

周知のように、林紵は外国語ができなかった。翻訳者が口述するのを聞きながら林紵が文言で筆記する。くり返して恐縮だが、これが彼の翻訳方法である。誤訳、削除などが発生するのは避けられない。

しかし、もとの戯曲を小説体でわざわざ翻訳するだろうか。翻訳者が口述したセリフを林紵が小説体に変換するのだろうか。シェイクスピア原作と林訳を比較対照して小説化という事実が浮かび上がってくるのだろうか。この小説化には、原作には存在しない説明を含むのか。その説明部分は林紵による創作なのだろうか。謎が深まる。どこかおかしい。小説化本……

気がついてみると頭の中では「小説化本」ということばがグルグルまわっている。どこかで同じ体験をしたことがある。

昔のことだ。あれは、呉趼人「電術奇談」の原作を探索していた時だった。

図書館で『大阪毎日新聞』の原紙を調べていた。目的のものがみつからず、時間が経過して疲労がたまった。気がつけば頭のなかで「清末小説」という単語が浮遊している。あのときは、日をあらため場所を変え、使用資料もマイクロフィルムに変更しさらに探索の範囲を絞って、もういちど調べなおした。それでようやく菊池幽芳「新聞賣子」を突き止めたのだった。これこそが呉趼人「電術奇談」の原作である。今では、誰でも当たり前のように「新聞賣子」だと書いている。苦勞のしがいがあったというものだ。

ラム姉弟『シェイクスピア物語』と同様に、彼らとは別の作品を英文小説化した人がいるのではないか。イギリス人、あるいはアメリカ人が原作の戯曲を小説化しているかもしれない。これが思いつきだ。林紵が勝手に小説化したと考えるのではない。だから、もうひとつの「小説化」である。

この発想にもとづいて作業を続けていた。具体的にいえば、*Tales from Shakespeare* に似た書名でラム姉弟以外の人が執筆した英文小説化本を集めることだ。

探してみても意外なことを知った。かなりの数の人が小説に書き直している。こ

れは予想していなかった。そのことを紹介する文章を見かけなかったからだ。意外だと感じるくらいに私が無知だったといってもいい。あとから知ったことだが、児童文学関係の書籍では言及があった。そういう扱いらしい。

いくつかの版本を手元にたぐり寄せた。*Stories from Shakespeare*、*The Shakespeare Story-Book*、*All Shakespeare's Tales* などだ。書名は同じだが作者の異なる別物もある。まぎらわしい。それでも9種類では不足だと見え、いずれも林訳とは一致しない。私が求めている小説化本ではないのだ。ラム姉弟が選択したのと同じ戯曲を独自に小説化しているものがほとんどである。たまに「ジュリアス・シーザー」などが含まれているにしても、目的のものではない。原文を対照してみれば林訳とは無関係だとわかる。調査が暗礁に乗り上げた。こういうばあい、探索計画は成果をあげないまま中断してしまう。

5 後段階「歴史劇」

旅先のホテルでのことだった。観光旅行だから街を散策する以外は、持参の本を読む、テレビを見るくらいしかやることがない。自宅にいれば周りに雑用があふれていてそんな考えも出てこなかった可能性もある。環境が日常とは違っていた。だから、それまで進めていた林紵についての再評価問題を、頭の中で無意識に反芻していたらしい。

自分で書きながら「らしい」というのは奇妙か。いや、私のばあいは実験をしているのではない。経過記録を書きつけるという習慣はないのだ。思いつきは、突然にわいてくる。だが、何もないところからは出てこないはずだ。そこを説明したいのだが、記憶があやふやになっている。

旅先で思いついた「歴史劇」とは、こうだ。

シェイクスピア劇には喜劇、悲劇、史劇があったのではないか。これに関する私の知識はまったく貧弱で恥ずかしい。それまでラム姉弟に関連して読みかじったものにすぎないからだ。ラム姉弟が（区別は厳密ではないが）歴史劇を除いて小説化していたとすればどうなる。追究する重点を歴史劇に置いてみる。では、history、historic、historical という単語（これもいいかげんな連想だ）が英文小説化本の書名

についているのではないか。あっているかどうかはわからない。これが思いつきであり、手がかりにもなる。可能性があると思い調査に着手しても失敗するのが普通だ。このくり返しであると再度いう。

林紵が底本にした英文小説化本を引き続き探索する。「歴史劇」という鍵語は調査の可能性を高めると同時にその範囲を絞ることもなった。

帰宅して電腦をインターネットに接続する。以前の研究環境と異なるのは、インターネットを利用できることだ。

本当に手を焼くのは英文原作の探索である。ふたつの意味があって、手順といいなおしてもいい。

ひとつは、上に述べたようにある目的にそった作品を書物群の中から探し出すこと。もうひとつは、目的の書物そのものを入手することだ。

現在の状況が変化していることを説明するためには、以前の有様をいわなければならない。研究者ならば誰でもがやっていることにすぎないが、あえて書くことにする。清末民初翻訳研究を行なっている研究者は少ない。その人は探索の技術をすでに知っている。だが、大多数の人は、それについて興味もないだろう。中国文学研究にも、すでに昔とは異なった研究環境が出現していることを紹介しよう。

6 原本入手の手順

清末民初翻訳小説研究において、まずやらなくてはならない大きな課題のひとつは原作の特定だ。有名な作家のばあいは、それを省略することができる。それでも、全部の作品に作者名が明示されているとは限らない。

何をいいだすやら、と思われたはずだ。翻訳には原作者と原作品があるにきまっている。

いうまでもなく、いや、驚いたことに、と書いたほうがいいのか。清末から民初時期にかけての中国では、原作者、原作品を明記しない翻訳作品が多い。現在から見ればおかしいことかもしれない。だが、これが実際のありさまだ。「翻訳」とうたってある作品はまだいいほうだ。それすら明記されていないものは、誰が

見ても創作だと思う。ところが、これが翻訳だったりする。その情況は、複雑のひとつことにつきる。だからこそ、この林紵問題がある。

あるいは、中国の研究者は多数にのぼるから、原作に関してはすでに調査を終えているだろうと思われるかもしれない。だが、残念ながらほとんど手つかずの状態である。中国近現代文学の研究に空白の分野があるなどとは、想像もできないだろう。しかし、これがまぎれもない現実なのだ。

まず、原作がなにかをさぐる必要がある。それだけでは不十分だ。翻訳の際に利用した底本についての吟味が必要になる。初版から再版まで、あるいは出版社が違って発行されているばあい、それらのなかのどれが底本になったのかを突き止めなければならない。版本によって本文が異なっていることがある。底本とは違う版本をもとにして、漢訳の誤り、削除、加筆を指摘することはできない。そこを無視して立論しても、意味を持たない。以上は、清末民初にかぎらず翻訳研究では当たり前の作業について言っている。

いうだけなら簡単だ。しかし、実行するとなると困難がつきまとう。

たとえば「アラビアン・ナイト」がある。

漢語では「天方夜譚」あるいは「一千零一夜」と翻訳される。2種類の漢訳書名があるということは、異なる訳本が多数存在していることを暗示する。なにしろ、フランス語訳本から英語に重訳された数が桁違いに多い。それに児童向きに書き換えられた版本を含めるとほとんど意識を失うくらいにその種類と数はふくれあがる。そのジャングルの中に突入しようと思う中国の研究者はほとんどいなかった。現在も、いない。多数の英訳原本を見る機会が中国にはある、と考える方が現実的ではない。

だからこそ、漢訳「アラビアン・ナイト」の研究は進んでいない。それぞれの漢訳がどの系統の英訳本にもとづいたのか、それに言及する文章は中国では書かれたことがないのだ。たまたに底本を明示していることもある。しかし、調べてみれば間違っている。わかってみれば簡単な理由だ。漢訳の序文に書かれた誤った底本を、調べもせずに引用しただけ。

私の『漢訳アラビアン・ナイト論集』(2006)が存在する意味は、まさにここにある。遠回しな書き方になってしまった。拙著は、漢訳が底本とした英訳本の

系統を明らかにしながら記述したいのだ。

中国における翻訳研究は、接近の方向にふたつがある。

ひとつは、中国文学研究者が翻訳を研究する。ただし、中国の中国文学研究者は、基本的に翻訳には手を出さない。そのなかにあつて郭延礼は、精力的に論文を発表している。その成果に私は敬意を表する。だが、林訳シェイクスピア、林訳イプセンについては、彼も鄭振鐸による定説から自由であつたわけではない。

ここ数年は中国の研究界に変化が起つていることはたしかだ。外国語を理解する若手研究者が登場している。しかし、研究者の数は、やはり少ない。翻訳は中国文学ではない、という考えが古くから存在しているのが原因か。急いでつけ加えると、それでも日本に比較すればかなりマシだ。自国の文学研究だから当然だといえそうなのだ。

もうひとつは、中国人の外国文学研究者が自国の翻訳を研究する。

ただし、彼らは、対象の外国文学そのものを研究することに主力をそそぐ。彼らが漢訳に言及することは、まったくないということはないが、少ない。だから、郭延礼から、先行文献を十分に調査するように、と彼らにむけて苦言が呈されることになる。つまり、郭延礼の意図をひらたくいえば、外国語を理解していても中国の翻訳研究という分野には暗いという意味だ。

以上の理由によって、清末民初翻訳小説研究が空白になっている。

さて、大量の書籍の中からどうやって林紵らがもつづいた1冊の版本を探し出すのか。

以前、私が利用していた目録はごくわずかだ。英国図書館とアメリカ議会図書館の蔵書目録である。実物の記録だから確かに手がかりになる。だが、万能ではない。著者が判明している書籍をさがすことはできる。しかし、書名が不確かなものになるとほとんどお手上げ状態になってしまう。あいまい検索などもとから想定していない目録なのだからしかたがない(あくまでも紙媒体についていっている。目録が電子化される以前のことだ。現在は違う。誤解のないように)。

とりあえず、それらしい書名がわかつたとしよう。原物をどのように入手するか。これが次の段階だ。

日本の図書館蔵書目録を見るのは手間がかかるうえに成功率は高くない(これ

もインターネットが普及する前の話)。洋書専門店で注文を出しても、1年以上の時間と相応の費用がかかる。今見たいという要求がかなえられることは最初からあきらめなければならない。そもそも、書名も作者も不明である作品を注文することはできない。

そのような状況では、研究を進めることはむづかしい。だから、清末民初翻訳小説の研究に手を出す人は少なかった(例外のひとりの中村忠行だ。日本文学を基礎にして中国の翻訳小説研究に取り組んでいた)。どう考えても投入する労力のわりに成果が期待できない。なるほど、こう書きながら私は理解した。鄭振鐸の文章が林訳研究の権威になる理由だ。鄭説を検討しようにも原本そのものを見る機会が少ない。批判的に検討することができなければ、従うほかない。

研究の競争が激化している現在では、中国文学研究といえども悠長なことをいってはいられない。研究成果をだすことが要求されている。目に見える結果がすぐに得られる可能性が少ない分野は、やはり後回しになるだろう。

それとは別に以前とは様子が違ってきたのは、現在はインターネットがあるからだ。翻訳文学の研究環境が大きく変化した。

世界中の大学図書館、研究機関が所蔵目録を公開しはじめている。そればかりか古書店も進出してきた。利用価値が高いのはこちらの古書店ネットだ。

外国書籍であれば著者名、書名を入力する。すると加盟している複数の古書店が出品しているバージョンが価格を表示して一覧表になって表示される。適当なものを選択して電腦のキーを押すだけで原本が郵送されてくる。図書館に複写を依頼するよりも、原物を入手するほうが研究に役立つ。なによりも助かるのは、あいまいな表記でも鍵語検索にかければ関連書籍を表示することだ。さらには、原文の一部を入力すると該当の書籍が検索できる状況も出現しつつある。インターネット全体がひとつの巨大な索引になっている。便利でないわけがない。研究の形態が一変するはずだ。

7 林訳シェイクスピアのばあい

林訳シェイクスピアで、しかも「歴史劇」だと予測した。単語をいくつか組み

合わせて検索をくりかえす。最終的に出てきたのが、A・T・クイラー＝クーチ A. T. Quiller-Couch 『シェイクスピア歴史物語 Historical Tales From Shakespeare』(1899)である。原文と比較対照してみれば、これこそが林訳の底本だった。

林紵は、クイラー＝クーチの英文小説化本を底本にした。ゆえに漢訳が小説体であるのは不思議でもなんでもない。戯曲を小説に書き直した、と鄭振鐸が林紵批判をおこなった根拠が完全にくずれた。鄭は林に無実の罪を押しつけた。これはまぎれもない林紵冤罪事件である。

私が林訳の底本に到達することができたのは、試行錯誤の結果であると言い添えておく。10種類以上の版本を集めなければならなかった。だが、逆にいえばそれだけの数でよく合致するものが見つかった、という考え方もできる。これこそ偶然の幸運か。どちらにせよ、そう簡単には結論は得られない。問題が解決したからよかったものの、普通は結論には到達しないままで中断することの方が多いくり返す。

クイラー＝クーチの小説化本の初版と重版の合計2冊を入手したのは、それを自分で念押ししたかったからだ。

誤解が生じるかもしれない。インターネットを利用すれば、なんでも可能か。そんなことはない。クイラー＝クーチ版について私は確かにインターネットを使って探してあてた。しかし、インターネットを利用しているのは私だけではない。ほかの研究者も使っている。なぜ、その人にはできなくて、私にはできたのか。それは、私が林訳について考えつづけていたからだ。そこを勘違いしてはだめです。

では、インターネットのなかった時代では、クイラー＝クーチの小説化本を知らなかったのもしかたがなかったか。それもおかしい。知らなかったから林紵を批判するのは許されるのか。なにやらなつかしいスローガンめいてくる。愛国無罪、造反有理、革命無罪か。知らなかったからといって、劉半農、胡適、鄭振鐸ら、あるいは今までの研究者が免罪されるわけではないのだ。

インターネットについてももう少し説明する。

今のところ書物検索には便利である。研究資料を収集するばあいの手がかりを提供してくれるという点で、大いに利用する価値がある。

だが、これだけはいっておかなくてはならない。インターネット上には「新しい発見」は存在しない。

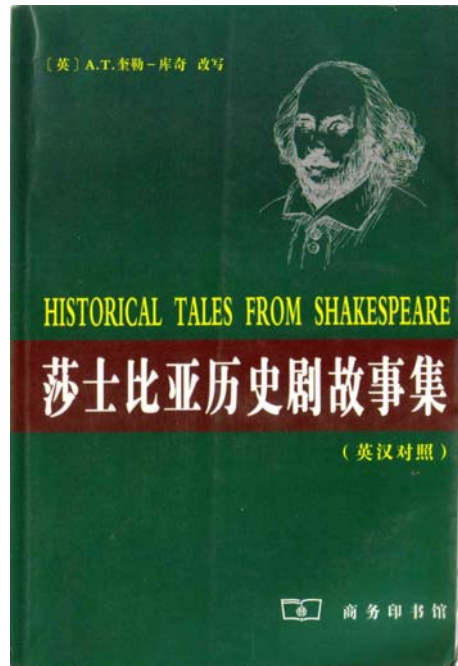
どんな論文であれ、インターネットで公表された瞬間に、「新しい」という形容詞がはずれてしまう。単なる古い「発見」の事例となる。また、他人の「新しい発見」ではあっても、自分とは関係がないものなのだ。だから、いくらインターネット上の情報をながめたところで論文を書く発想にはむすびつかない。少なくとも私はそうだ。

逆にいえば、自分の考えが「新しい発見」かどうかを確認する手段としては有用であるといえる。インターネットに内容の類似するものが掲載されていれば、それはすでに「新しい発見」ではない。自分の名前を出して発表する必要のない部類に属してしまう。つまり、文章にしてはならない。他人の「新しい発見」を引用しただけでは自分の発見になるわけがない。

インターネットで検索しても出てこない情報こそが重要になってくるという意味でもある。



『莎士比亚历史剧故事集』1981



『莎士比亚历史剧故事集(英汉对照)』2001

クイラー＝クーチの英文小説化本が林訳の底本であったことを確認した。

ところが、なんと中国では該本が漢訳出版されていたのだ。中国におけるシェイクスピア研究と翻訳を紹介した文章のなかに見つけた。林紘の翻訳に比較してずっと後代であるとはいえ、これを見逃すわけにはいかない。

奎勒-庫奇改写、湯真訳『莎士比亞歴史劇故事集』(北京・中国青年出版社1981.3)である。

クイラー＝クーチ版が林訳の底本だと判明したあとのことだから、私の目に入ったといえるかもしれない。それ以前だったら、気づかなかった可能性もある。該書に解説があるとして、林訳に言及していれば、私を含めて認識が不足していたことになるだろう。林訳の底本であると説明していなければ、林紘冤罪事件である可能性がますます強まる。

湯真の訳本は、すでに入手困難になっていた。しかたなく、所蔵する機関を調べて部分複写を取り寄せた(後日、湯真訳本そのものを入手。写真に掲げたのがそれ)。たしかに、クイラー＝クーチ版の漢訳である。

湯真の「訳者前言」を読む。蕭乾より原書を贈られたと書かれている。蕭乾はラム姉弟の『シェイクスピア物語』を漢訳しているからその関係で該書を所蔵していたのだろう。

湯真は、自らが翻訳したクイラー＝クーチ版が林訳の底本であることにはひとことも触れていない。

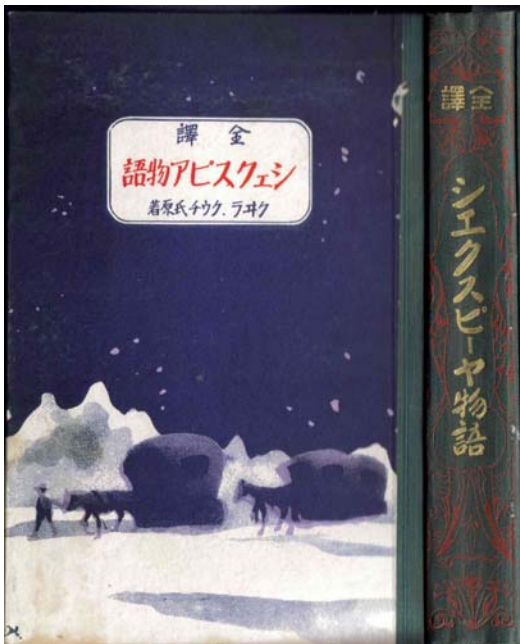
言及がないというのは、どういうことか。林訳シェイクスピアの底本に使用されたことを知らなかった証拠になる。さらには、原書を所蔵していた蕭乾も、その事実に気づかなかった。

蕭乾著、丸山昇、江上幸子、平石淑子訳『地図を持たない旅人』上下(花伝社1992.11.20、1993.2.25)を読んでいたのを思い出す。シェイクスピアについて記述があったかどうか、記憶にはない。その時は興味がなかったから忘れたのかもしれない。念のためさがすと、該書の片方がどうしても見つからない。あらためて書店から取り寄せたのは、蕭乾がクイラー＝クーチ版について触れているかどうか確認するためだ。言及はなかった。蕭乾が該書で述べたかったことはそんなことではない。言及がないのも当たり前だろう。

のちに漢訳クイラー＝クーチ版がもうひとつあることを人から教えてもらった。湯真ではない別人の漢訳だろうと思ったのは、たしかに私の早とちりだったかもしれない。

手元に届いたのが(英) A.T.奎勒-庫奇改写、湯真訳『莎士比亞歴史劇故事集(英漢対照)』(北京・商務印書館2001.2)である。

同じ湯真訳本だったのは意外だった。当然ながら、林訳については言及がない。ただ、クイラー＝クーチの英文と対照してあるのが珍しい。この英漢対照版が私たちになにを教えてくれているかといえば、つぎのことだ。探そうと思えば、中国にクイラー＝クーチ版の原文は存在していた。原本ではないが、英文は読むことができるという意味だ。私が、欧米の古書店から手間ヒマかけて原本を取り寄せるまでもなかったことになる(それでも私は実物を注文したと思うが)。手がかりは、近くに存在していた。ただし、そのことに研究者の誰も気づかなかった。そういう書籍があるという想像すらしなかったのだ。気づかなかったのも当然だということになる。



『シェークスピア史劇物語』1927

漢訳の表紙を掲げたから日本語訳本もあることを示しておく。クマラ・クウチ氏原著、通俗図書刊行会著『シェークスピア史劇物語』(大盛堂書店1927.10.15。表紙は「全訳シェークスピア物語」【統合版補記】国立国会図書館近代デジタルライブラリーに次のものが収録されている。クマラ・クウチ氏原著、課外読物刊行会編輯部訳編『シェークスピア史劇物語』課外読物刊行会1925.7.20)だ。林訳よりは遅いが、湯真訳よりもほぼ半世紀も前に刊行されている。

8 林訳イブセンのばあい

林訳シェイクスピアであることならば、イブセンにあっても不思議はない。可能性は高いと思った。『吟辺燕語』、あるいは「凱徹遺事」などと同じことをくり返していただろう。つまり、イブセンの英文小説化本があると推測した。前例が、それも複数見ついているのだから、こちらは比較的容易に思いつく。

当時の中国でノルウェー語を理解した人がいたかどうかは知らない。林紘の共訳者は多くが英語かフランス語を理解した。それからの連想だから英語の版本になる。

古書店の目録を見て注文したのが、ドレイコット・M・デル Draycot M. Dell 著『イブセンの「幽霊」物語 IBSEN'S "GHOSTS" Adapted as a Story』(1920)である。

最初この英訳版本を見たとき、はずれたと思った。なぜなら、イブセンの戯曲とはまったく異なった書き出しになっているからだ。舞台はパリだ。画家たちが登場して共同生活をしている。いや、まてよ、パリからはじまるのは林訳イブセン『梅孽』そのものではないか。

林紘は、複数の人物がパリで生活する部分を創造した。林訳イブセンを批判した鄭振鐸によればそうなる。イブセンの原作にない部分が漢訳にはあるのだから鄭はそう考えたのだ。

だが、これは鄭振鐸の間違いである。彼は、林訳シェイクスピアについて犯したのとおなじ誤りを林訳イブセンについてもやってしまった。イブセン戯曲にも英文小説化本があったのだ。鄭は、十分に調査することなく根拠もないのに林紘

を批判し痛罵したのである。林紓を批判することがさきに決められていたと思われる。ゆえに、地道に底本を探す気など鄭振鐸にははじめからなかった。

どうしても、そこに筆が行ってしまう。

9 より大きな問題 林紓冤罪事件の全体構造

問題は、林訳シェイクスピアと林訳イプセンで終らなかった。

頭のなかのどこかで無音の警報が鳴っている。そんな気分だ。シェイクスピアとイプセンについて林紓は、劉半農と鄭振鐸によって濡れ衣を着せられた。

ここに、ある疑問が普通に出てくる。林紓は反論しなかったのか。そう、彼は反論しなかった。

ひとつは、劉半農が『吟辺燕語』を持ち出したときだ。林紓は、銭玄同と劉半農による「なれあいの手紙」、私のいう捏造論文そのものを無視した。もうひとつ、鄭振鐸の批判には、死後のことだからもとより林紓は反論することができない。

では、林紓の共訳者はどうか。魏易、陳家麟、毛文鍾らは、底本にした英文小説化本を知っている。まさに当事者なのだ。だが、彼らが反論したという記録は今のところ出てこない。もし、あれば後の研究者の誰かが言及するのではないか。諸資料を読んでも、その気配さえもない。

翻訳についての事情はそうだ。だが、林紓が押しつけられた無実の罪はそれだけで終りであろうか。

1919年の五四事件直前に林紓は何を行なったか。

周知の事柄だといってもいいだろう。林紓は「武力による北京大学抑圧を促していた」といわれる。だが、具体的にあげられるのは、短編小説2篇と北京大学校長蔡元培にあてた手紙くらいのものだ。つまり、文章を発表して文学革命に反対した。林紓は、武力による抑圧と文章の発表を同時に並行して実行していたと理解されている。

誰が、そう説明するのか。驚いたことに鄭振鐸本人なのだ。

しかし彼（林紓）の道を守り文を「正す」という情熱は、別の方面に出口

を見つけた。彼は新聞紙上につづけて2篇の小説を書いた。ひとつは「荊生」で、もうひとつは「妖夢」だが、ふたつとも意味は同じだった。侠客を望み、鬼神に託するというだけ。しかも彼はある「外力」が、この新しい運動を制裁し屈服させることを望んでおり2篇ともに一致した精神なのである。罵りだけでは終らず、つづいて呪いになった。^{*9}

鄭振鐸こそが、シェイクスピアとイプセンの漢訳について林紘に濡れ衣を着せた張本人ではないか。その彼が、林紘を批判して「外力」つまり軍人（劉半農によると徐樹錚を指す）の出動を望んでいたと説明するのだ。おかしくはないか。

考えてみれば、五四時期の文学運動について記述するとき、よるべき文献資料というのがほぼ決まっている。そのひとつが『中国新文学大系』（上海良友圖書印刷公司1935.10.15 / 上海文藝出版社影印2003.7）のそれぞれにつけられた「導言」だったりするのだ。これも奇妙だろう。文学革命派の当事者が編集した書物は、疑いもなく文学革命派の視点で当時の状況を説明している。文学革命派から反対派の代表者に指名された林紘には、最初から敵対者としての位置しか用意されていない。片方からの視点のみによって説明するのは、普通、偏向した論断だという。この一方的な記述しか存在していないのが、中国現代文学研究界の実態なのだ。

林紘批判の構造、つまり林紘冤罪事件の全体構造が見えた瞬間に論文はできあがったも同然であった。

五四事件直前にくりひろげられた北京大学をめぐる風説風聞を追跡する必要がある。ウワサが林紘と結びつけられて説明されるからである。

ウワサと事実を検証する作業に入った。

これをはじめると必然的に陳独秀が登場する。

陳独秀が『毎週評論』で展開し説明した新旧思潮の対立は、自分にとってつごうのよい情報ばかりを取捨選択して成立していることが判明する。考えれば当たり前だ。陳独秀は、筆1本の評論家ではない。政治運動を実行している実践家だ。自分の主張を広めるための根拠として情報を収集している。自分が見て不利で不必要な情報は捨てるに決まっているではないか。活動家が普通にやることだ。自分たちが守旧派保守派からいかに攻撃されているかをしつこく主張する。だから

陳らがそれに反撃するのは正当な行為になる。陳独秀の編集した文献にもとづけば、その視点は自動的に文学革命派に固定される。研究界では、その線に沿った論文が大量に書かれている。陳独秀が排除した文献について、なぜ検討しようとししないのか。これに陳独秀の私生活がからんでくるから事情は複雑である。

それだけにとどまらない。林紓が北京大学校長蔡元培にあてた手紙が問題になる。従来は、軍人の力を背景にして北京大学へ圧力をかけた、などと林紓は批判されている。だが、調べてみればその事実はない。

徐樹錚に関連したことも風説風聞の域を出ない。林紓が行なったといわれ、批判の根拠とされるすべての行為はウワサであって裏付けのないものだとわかる。

北京大学学生の張厚載についても同じ。林紓のスパイだと非難される。だが、林との関係で張も身に覚えのない罪を押しつけられている。私は事実を知って驚く。

では、北京大学と教授たちを当てこすったと断定されている林紓の短編小説2篇はどうか。

小説には、蔡元培、陳独秀、胡適、錢玄同をモデルにした人物が登場している。たしかに林紓が書いた。だが、その内容は一笑に付して終りにするのが当たり前のものだ。しかも小説ではないか。どこの世界に小説、すなわち虚構と現実を混同する研究者がいるだろうか。ところが、林紓については、現在にいたるまで小説と現実が区別できない研究者ばかりである。林紓批判の根拠にすることができると考えている。その人は、意識のうえで異端審問官のつもりだ。

魯迅までが別の林紓冤罪事件に加担していることも明らかになるしまつである。それをいうなら、阿英も同様のことを行なっている。

前出の羅家倫は、暴露小説を掲載した雑誌を当局が取り締まることを期待していた。つまり、羅の方が言論弾圧を露骨に希望していたのである。ところが、文学革命派のひとりである彼の言論弾圧期待説は、こともあろうに林紓が希望したことにすり替えられた。

また、後には軍閥軍人である徐樹錚の名前をだして林が「武力による北京大学抑圧を促していた」という人も出てくる。根拠はないのだ。驚くべきことではないか。日本人研究者が書いた字句を2度も引用してしまったのは、それだけ印象が強いのである。

私は日本にいるのだから特別の資料、文献を持っているわけではない。ほかの研究者と同じ文章を読んでいるにすぎない。書いてあるままに読み進めていくと、私は従来の説明とは違う場所に到達してしまったというだけだ。いやはや、過去から現在まで一貫して主流である見方が逆転するのだから、ほとんど腰を抜かすことになった。

あとは拙著『林紵冤罪事件簿』(2008)をご覧いただきたい。

林紵冤罪事件を発生させた根底にあるものは、なにか。私は、今ここでそれを書く気にはなれない。

10 研究体制

このたび明らかになった林紵冤罪事件について、思考の筋道と結論を具体的に説明した。

私の研究方法についても少し紹介しよう。

研究体制はどうか。個人で行なうのか、あるいは研究集団を組織して行なうのか。一緒に研究している人はいないのか、と台湾では何度も質問された。いない、と答えると、寂しくはないかという。私はそういう状態になれてしまっている。

手間のかかる原作探索は、複数の人間が分担して作業をすれば時間の節約になる。そういうやり方もあるだろう。ただし、これには向き不向きがある。私のばあいは、その「不向き」に属する。性格だから、こればかりはしかたがない。作業の細部にいたるまで自分で関与したい。すべてを自分の力でやりたいという意味だ。細々とした研究分野にすぎない。ひとりでやるのが性格にあっている。個人だから能力に限界がある。作業を徹底することはできないかもしれない。そうならそれであきらめる。

私も過去においては、集団で共同作業に取り組む経験を持っている。昔、ある研究会の事務局に所属していたときのことだ。目録、索引、事典などの編集に参加した。そのときの体験からいうのだが、全体の作業進行は、もっとも不熱心な人物に左右される。分担作業を怠ける人物がいれば、実際にいたのだが、その時点で計画は不成功に終わる。怠けた人物が企画責任者だったからなんともいいよ

うがない。その作業に費やした自分の努力と時間は、ムダになった。

その経験が複数回あったから、いやでも理解する。自分ひとりでやるほうが、いくら時間がかかろうと責任をとることができようというものだ。計画が不首尾におわれれば、それは自分が悪いに決まっている。

こうして、現在も『清末民初小説目録』の増補訂正作業を継続している。第4版を刊行する予定はない。だが、この目録が私の研究には必要だ。他人のためではなく自分のための目録なのだから、編集作業が中断するわけがない。目録に記入する林訳シェイクスピア、林訳イブセンの底本についての説明は、書いても1行くらいのものにすぎない。だが、その裏には1冊の書籍になるだけの情報がつまっている。いくつかの作業は、私のなかで関連づけられて同時進行中の状態なのだ。（【統合版補記】『清末民初小説目録』は第4版から紙媒体には印刷していない。第5、6版は電字版をウェブ上で公開した。最新版のXも同様）

11 一瞬の判断

拙著『林紓冤罪事件簿』の核心部分を書き終えた瞬間、自分でも思わなかったことばが口から低く細く出てきた。

「こりゃ、イケンの」

言語域の古層に刻み込まれている部分からの発語らしい。論文が成立しない、という意味ではない。深い部分からでてきたやや複雑な背景がある。

ふたつの側面から説明しよう。

拙著を表現して80年から90年に1冊というのは、従来の林訳批判を覆したという意味だ。つまり、先行文献のなかで関連する80本近くの論文のすべてが指摘しなかった事実を私が提出した。林訳について動くことのなかった、しかも間違っていた認識を私が正したのだ。その結果、今まで知られていなかった冤罪事件であることが明らかになった。

論文の書き方としては、林紓批判の直接の発動者である劉半農、胡適と鄭振鐸だけをあげて代表させることもできた。だが、私は自分の目につくかぎり、林訳の誤りだと説明した論文名と研究者名を明記し、さらに関係部分を引用した。中

国大陸ばかりではなく、香港、台湾、日本、そのほかの地域の研究者を含んでいる。具体性を持たせるためには、そうすることが必要だと思った。林紘冤罪事件が長期間かつ広範囲にわたっていることを説明するためには、それが不可欠だと考えた。林紘は戯曲を小説化した、と誤って批判した人々がそれだけ多く存在したことを示している。林紘の側に立てば、それだけ多数の研究者によってムチ打たれたのだ。しかも、それは根本のところでも誤っていた。このことを証明するためには、研究者名を掲げることが必須だと判断した。

ただし、名前を出されたことはすなわち樽本によって批判された、と短絡して受け取る研究者がいなくてもかぎらない。まさか、とは思う。私は批判しているのではない。何度もそう明言している。誤解が広まっている事実を説明したかっただけだ。だが、この世界は狭い。事実を指摘されて立腹する人はいない、と誰が保証できるだろう。ほぼ1年後に小さな反応があった*10。

もうひとつは、五四事件直前における林紘の評価を逆転させたことだ。林紘は文学革命の反対者だ、と従来は説明していた。それが、現在も出版されている文学史の基本姿勢である。だが、林紘は文学革命派に濡れ衣を着せられた。実物の何倍にもふくらませた虚像になっている。これが事実だ。その方向に導いたのは陳独秀であり鄭振鐸らの文学革命派であった。ここまできると、林紘に関する現代文学史の記述を根底から崩壊させることになる。

そういう視点で書かれた書物が、現在の中国文学研究界で認められるはずがない。

予測される将来の動きが一瞬のうちに見えた。文学革命派を支持する研究者からは無視されるだろう。それらを総合して「こりゃ、イケンの」ということばになったようだ。

私の研究に関する日本の学界の理解度にも触れておく。

12 研究の理解度

自分が取り組んでいる研究課題は、日本の学界においてどのように評価されているか。

その理解度を測るひとつの物差しとして学術振興会の科学研究費が存在する。

普通に考えて、研究に値する、つまり重要度に応じて研究課題の採択不採択が決定されていると理解するのではなからうか。そのために専門委員が配置されて審査するのだ。事実、研究課題には点数をつけて評価し、採択か否かを決定している。

私は清末民初翻訳小説研究を主題にして数年にわたって申請しつづけている。だが、残念ながら不採択である。この研究についての私の説明が十分ではないらしい。審査員の理解を得ることができない。結局のところ、研究の重要度が低いと判定されていると考えざるをえない。これが現状だ。ご注意いただきたい。私はそれを怒っているわけではない。嘆いているわけでもない。その程度の認知度であるといっているだけだ。

論文「林紵シェイクスピア冤罪事件」の末尾に記入した清涼飲料水の固有名詞について、普通はアルコール飲料で乾杯だろうといわれた。ご注目いただいて恐縮です。

わざわざ特定の清涼飲料水名を出したのは、そこが設立している財団に研究費を申請して不採用になったことが背景にある。別の書籍についてビールを出したのも同じ理由だ。

従来からそうなのだが、清末民初時期の小説研究は、注目されることが少ない。最近でこそ中国では若い研究者が出現している。日本での清末小説研究はどうなっているのか、と台湾の大学で質問があったが、私には答えようがない。清末小説研究会では、研究資料叢書を刊行しているが購入する気になる人はまれである。まあ、日本ではそれくらい関心の薄い分野であることは確かだろう。その状態が私にとっては通常なのだ。

日本では興味を引かない研究分野であることを私は否定しない。審査員の理解がとどかないのでは、私にはどうしようもない。ゆえに、研究費の申請が不採択になるのもしかたがない。だから、蘆北賞を2度も（『清末小説』『清末小説から』の刊行、および『清末民初小説目録』『清末民初小説年表』を対象にして）受賞したのは予想もしなかった。さらに、勤務校において私の研究計画について特別研究費が認められているのは具眼の士がいるという珍しい例だと思う。私が深く感謝している理由だ。

当該研究分野に対する評価が低いというのは、現在そうだというだけのこと。本来そなえている重要度からいって妥当だという意味ではない。

逆にいえば、誰も注目しない、あるいは研究の重要度が低いと判定される（私は審査員の理解能力が劣っているといっているのではない）日本において、拙著『林紘冤罪事件簿』が刊行された。拙著によってきわめて根元的な問題が提起される結果になった。私はいうべきことばを持たないのだ。

【注】

1) 高鳳岐の序は、以下に引用されている。林薇「林紘第一部自撰的短篇小説集 《技擊餘聞》」『清末小説』第12号 1989.12.1。同改題「林紘自撰的武俠小説 《技擊餘聞》最早版本辨正」『新文学史料』1999年第3期（総84期）1999.8.22。同「林紘自撰的武俠小説《技擊餘聞》最早版本辨正」林薇『清代小説論稿』北京広播学院出版社2000.11。「技擊餘聞（文言白話対照版）」がウェブサイト「才子佳人茶館 <http://caizijiaren.booktopzj.com/>」にある。

2) 呉十洲「“名士”乎？“造幣廠”乎？ 林紘（1852-1924）」（『民国人物綽号雜譚』天津・南開大学出版社1998.6 / 2003年改題して台湾で刊行）がある。呉十洲は「造幣局」ということばをもとにして妄想をふくらませた。根拠もないのに林紘の名譽を傷つけている。これを一般に中傷という。呉十洲はその文章において、林紘の論文題名を誤る、短編小説の新聞掲載日を間違ふ。関連して樽本「林紘落魄伝説」を参照のこと。

また、李存焯「林琴南論」（『文藝論叢』第23輯1986.12。184頁）がある。「林琴南の翻訳活動は、手工業の工場〔手工業作坊〕に似た形式を採用して進められた」。ほめてその説明になったわけではない。「この奇形〔畸形〕の翻訳方式に加えて彼の翻訳態度が粗雑で、しかも口述者の多くが文章を生活にしていたわけではなく、その文学修養もいくらか割り引かざるをえなかったため、林琴南の翻訳は必然的に間違いが続出し、精彩も大いに減じたのである」。林紘が外国語を理解せず、口述訳者との共同作業を「奇形の翻訳方式」だというのだ。輕蔑しているのが明らかだ。この種の思考法は、李存焯に限らずほとんどの研究者が共有している。このほうが異常である、と私は考える。

- 3) 初出は天津『大公報』1917.2.1。再掲載は上海『民国日報』1917.2.8。胡適が見たのは『民国日報』のほうだ。以下は、正しい題名を掲げる論文。掲載紙のどちらに言及しているかも示す。
- 朱德尧『中国五四文学史』山東文藝出版社1986.11。148頁。『民国日報』
(つぎの2書は『民国日報』とするが題名を誤る。林薇『百年沈浮 林紓研究綜述』天津教育出版社1990.10。21頁〔ただし、尹雪曼「中国現代文学史話」1977からの引用〕。劉炎生『中国現代文学論争史』広州・広東人民出版社1999.12。22頁)
葛留青、張占国『中国民国文学史』北京・人民出版社1994.1百卷本《中国全史》叢書。27頁。『民国日報』
- 羅志田「林紓の認同危機と民初の新旧之爭」『歴史研究』1995年第5期初出未見。
陳錦谷編輯『林紓研究資料選編』福建省文史研究館編2008.6所収。954頁。『民国日報』
- 洪越「五四文学革命の另一面 以林紓為中心」『現代中国』第2輯2002.3。155頁。
『大公報』『民国日報』
- 楊聯芬『晚清至五四：中国文学現代性的發生』北京大学出版社2003.11。123頁。
『民国日報』
- 張俊才「“悠悠百年，自有能辨之者” 重評林紓及五四新旧思潮之爭」『河北師範大学学報（哲学社会科学版）』2005年第28卷第4期（總第117期）2005.7.15。107頁。『民国日報』
- 歐陽健「“白話文学正宗”論検討 兼評林紓“古文之不宜廢”論」歐陽健's Blog
「古代小説と人生体験」掲載 原創2006.5.29。轉載林紓文化研究所ウェブサイト
2008.6.6。前出『林紓研究資料選編』下冊。1082頁。『民国日報』江中柱「《大公報》中林紓集外文三篇」（『文献』2006年第4期（總第110期）2006.10.13）において「論古文之不宜廢」「林琴南再答蔡鶴卿書」「為閩事覆諸同志書」を収録する。いずれも『大公報』掲載。
- 林大文「後人心目中的林紓」錢理群、嚴瑞芳主編『我的父輩与北京大学』北京大学出版社2006.11。『大公報』から全文を引用している。ただし、「1917年2月8日上海《大公報》」と誤記する。
- 中国史話編輯委員会編著『中国史話（6）呐喊声中的凶強变革』台湾・大地出版社2006.11。158頁。『民国日報』。写真がそえられている。
- 張俊才『林紓評伝（修訂本）』北京・中華書局2007.4。223頁。江中柱論文を引用し

て正確に記述する。『大公報』

程巍「為林琴南一辯 “方姚卒不之陪”析」(『中国図書評論』2007年第9期(総199期)2007.9.10。ウェブ上で電字版を読むことができる)に興味深い記述がある。林紘の「論古文之不宜廢」は、『胡適留学日記』1917年4月7日付に採録されている、と。これは驚いた。林紘関係の文献ばかりをさがして見つけられなかったからだ。胡適の日記に収録されているとは思わなかった。たしかに架蔵の台湾商務印書館版(1947.11/1959.3台1版)1116-1117頁に見える(季羨林主編『胡適全集』第28巻合肥・安徽教育出版社2003.9ならば、538-540頁所収)。日記には題名が正しく書かれている。論文名の誤記は、胡適が『新青年』に投書したときに生じたと理解できる。程巍論文は、林紘の文章が間違っていると批判した胡適のほうが間違っているとのべて説得力がある。ただ、論旨とは別の細かい箇所が腑に落ちない。すなわち、程論文は「論古文之不当廢」と誤ったままであり、『民国日報』を掲げるのみだ。もうひとつ。程巍の該文は、前出『林紘研究資料選編』に所収される(1159-1167頁)。だが、『胡適留学日記』1917年4月7日付などについての記述を削除している。

欧陽健「福州近代的文化巨人林紘在民国」『閩江学院学报』2007年第6期(総第104期)2007.12.15。14頁。『民国日報』。欧陽健論文についてひとことつけ加える。欧陽が該論文で展開した林紘擁護論の一部は、私の「林紘を罵る快樂」とほぼ同じ主旨であることを知った。偶然の一致だ。私が複写を入手して読んだのは2008年8月11日である。

- 4) 桑逢康『胡適在北大』北京・文化藝術出版社2007.6。256頁
- 5) 鄭振鐸「林琴南先生」『小説月報』第15巻第11号1924.11.10
- 6) 松村茂樹「王雲五と鄭振鐸 商務印書館史の一断面」『中国文化』漢文学会会報第52号1994.6.25
- 7) 瀬戸宏「中国のシェイクスピア受容略史」『シアターアーツ』11 2000年1号2000.1.31。99頁
- 8) 『林紘冤罪事件簿』が印刷されてきた2007年7月のことだ(奥付表示は2008.3.31)。その後、該書で言及した以外に小説化本について説明があるのを見つけた。入手した坪内逍遙訳『シェイクスピア研究栞(新修シェイクスピア全集第四十巻)』(中央公論社1935.5.15)には小説化本について紹介がある。「作の梗概を物語風にしたもの」と小見出しがある箇所だ。引用する。「チャールズ・ラムの『物語』は、明

治の初期以来格外に歓迎されて、最近年の訳までも合せると、十三種程に及んでゐるが、其他のは殆ど顧みられない。勿論、それはラムのが名高くもあり、文章として優秀な部分が多いからでもあらうが、一つは諸学校の教課用書となつてゐるからでもあらう。教課書としてはともかくも、シェークスピアの梗概を知るためとしては、ラムのは適當ではない。といふのは、梗概としては、余りに省略された部分が多いからである」(44-45頁)。そして、ラム以後のシェイクスピア物語を14種あげている(46-47頁)。だが、これにはクイラー＝クーチ版は収録されていない。

9) 鄭振鐸「導言」『中国新文学大系』第2集文学論争集。7頁

10) 紋切り型の表現を使うのが妥当だ。「最初にとび出てきて攻撃したのは瀬戸宏である」。

以下を参照のこと。樽本「瀬戸宏報告を評する」 「林紘のシェイクスピア観 林紘は冤罪か」について」『清末小説から』第92号2009.1.1。統合版収録

瀬戸宏は、何かいわずにはいられなかったらしい。それほど私が提出した論文の衝撃度が大きかったということか。瀬戸宏が報告したその場に、私は評論員として立ち会った。それにしても、瀬戸宏報告は内容がなかった。通説のままに林紘批判をくり返し、林紘に濡れ衣を着せつけた。わざわざ出てきて、なぜみずからの無知をさらしたのか。いつものことながら、意図が不明である。

施蛰存による林紓冤罪事件

『清末小説から』第96号(2010.1.1)に掲載。ユゴーを漢訳して囂俄としたのは林紓である。こう施蛰存は断定して、その間違いを批判している。だが、林紓がユゴーを囂俄と漢訳した事実は、ない。この点について施蛰存は林紓に濡れ衣を着せた。

外国人の名前をどう表記するか。翻訳するとき、必ずといっていいほどでくる問題のひとつだ。

他言語の音を日本の文字で表記する。ものにもよるが、基本的にいえば、正確な翻訳は困難だ。音の体系が異なる。どうしても近似のものにならざるをえない。また、翻訳者の知識、表記方法、あるいは時代の状況によっても変化する。日本では、原語の音を尊重しカタカナを使って音写する(漢字は問題が別になる)。しかし、はじめから一致して動かないというわけではない。ギョエテとは俺のことかとゲーテ云ひ(齋藤緑雨とか)、と俗に伝えられている。

ひとりの外国人に複数の翻訳名が当てられるのは避けられない。時間が経過していくうちにだんだんと定着する。あるいは、実際の発音からは離れている翻訳名が、広く使用されて習慣になるということもありうる。ルブランの作品に出てくる怪盗紳士ルパンは、リュパンと表記されると別人のような気がしてしまう。現在でもヘボン式ローマ字表記を使っている。このヘボンがヘブバーンになると落ち着きが悪い。だが、アメリカの映画女優の名前ならどうしても後者だろう。長年にわたって受け入れられた表記は、たとえ正確ではないにしても無視することもできない。

文字が異なるとき、当然、翻訳のしかたは違ってくる。では、a b cが同じで

あれば問題は生じないかといえば、そうでもない。フランス語と英語では綴りが同じでも、実際の発音は違う。

ヴィクトル・ユゴー（Victor Hugo）について日本では、以前はユーゴーと表記することが多かった。ユゴオという表記もある*1。現在はユゴーと普通に書く。

フランス語原音によりながら表記が少し変化しただけ。ゲーテほど多様ではないにしても、最初からひとつではない。英語読みであれば、ヴィクター・ヒューゴー（またはヒューゴ）に近い。英語の文脈からいえば、そう読まれるだろう。

漢訳にも同じような状況がある。

ひとりの外国人にいくつかの漢訳が併存しているというのであれば、どこにでも見られる普通の現象にすぎない。しかし、中国のばあいが特異なのは、ユゴーの漢訳表記をめぐる林紘に濡れ衣がきせられている事実があるからだ。作家、評論家、翻訳家、大学教授で著名な施蛰存（1905-2003）が、権威をもつ文学全集に根拠のないことを書いている。その文章は、該書編集者の目を通過して公表された。長い時間が経過したにもかかわらず、研究者はそれに対してほとんど誰も訂正する文章を書こうとはしない。そういう事柄である。

1 施蛰存の説明

私が見るのは、施蛰存「導言」（『中国近代文学大系』第11集第26巻翻訳文学集1（施蛰存主編）上海書店1990.10）の一部分だ。

施蛰存は、まず林紘を擁護する。林紘は自らの翻訳につけた序文において外国文学の芸術性を分析し、その一部分は要点をついている、と。ディケンズ、スウィフトらの思想意義について高く賞賛した、と。彼はつづけて、林紘が文学革命に反対したことをとりあげる。

林紘はかつて白話文に反対したために新文学運動のなかの頑固な保守派だと認識された。それ以後、歴史家はどうしてもかたよってしまい、彼を革命派、進歩派に対立する人物の列に入れてしまった。林紘が書いた多くの翻訳小説の序文、題辞の中から、私たちは彼の思想境地が決して頑固ではなく、

決して保守ではない一面を見いだすことが可能である。19頁

ここまでは、よろしい。林紓に対するかたよった評価が発生した原因と経過を施蛰存は冷静に説明している。

問題が出てくる直前部分から紹介しよう。人名の翻訳について施蛰存は次のようにのべている。

いくつかの現象があって、本世紀最初の30年における文学訳本のなかにそれらの欠点を暴露している。まず、翻訳名の音訳が不正確、不統一である。多くの翻訳小説は、日本語訳本から転訳されたものだ。原作者の名前も日本語音訳から転訳された。たとえばゴーリキー〔高爾基〕だが、呉禱は戈礪機^{ママ}とし、魯迅は戈理基とする。周瘦鵑は英訳本から翻訳して高甘〔Gorky〕と訳したが、これは英語の読み音が正しくないことによる。19頁

ここにある本世紀とは、いうまでもなく20世紀を指す。施蛰存は、1930年までの翻訳状況について説明している。

中国近代翻訳文学の特色を説明するために彼は、ゴーリキー（Горький）を例に持ちだした。漢訳の実際を見ると、いくつもの表記があって不統一だというのだ。あげられた例を見れば、確かに不統一である。ただし、戈礪機も戈理基*²も中国音で発音すれば似たり寄ったり。大きく相違しているわけではない。近似の音を当てるとすれば漢字が異なる。やむをえないだろう。

周瘦鵑が英訳本にもとづいて高甘と翻訳したのは、英語が誤っているからだと言明する。

上の引用文に〔Gorky〕と補っておいた。それが周瘦鵑の翻訳に示された表記である。ならば、英語では Gorky をゴーキーと発音しても不思議ではない。それを周瘦鵑が蘇州方言で翻訳して高甘になったらしい。底本が英訳本であったから、人名も英語風に読んだ。人名部分だけ原語音で発音するというのもひとつの考え方だ。しかし、施蛰存のように正しくない、と断言できるものなのか。現代の基準を過去にさかのぼらせてはいないだろうか。私はいささか懐疑的だ。

施蛰存は、小さな誤記をしている。呉禱が「戈^マ礪機」と翻訳したというのだが、正しくは「戈厲機」だ。誰にでもある小さな間違いといえる。しかし、呉禱の翻訳作品は、施蛰存自身が編集した翻訳文学集1そのものに収録されている。しかも、「编者」つまり施蛰存は、その「解題」において「戈厲機は、戈理基とも訳した。今は決まって高爾基と訳す〔戈厲機，亦訳戈理基，今定訳高爾基（1868-1936）〕」（633頁）と説明する。違いは1字にすぎない。しかし、同じ著者が「導言」と「解題」では表記を変えているからなにかの勘違いだと思う。

2 施蛰存による林紓冤罪事件

以上は、ゴーリキーの漢訳について不統一であった、と理解しておく。問題は、つづく箇所にある。もとの漢語をカッコに入れて示したところがある。わずらわしく見えるだろうが、微妙な違いを理解するためには必要なのだ。

林紓はフランス作家ユゴー〔雨果〕を囂俄〔ヒューゴー〕と翻訳した。合作した人が英訳本から口述したことがわかる。英語の読みによれば、ユゴー〔雨果〕はヒューゴー〔許果〕となる。林紓は彼の福州方言を用いて囂俄と翻訳したのであった。この不正確な訳名は、多くの訳者によってずっと使われ続け、1929年に出版された方于訳『可憐的人』にいたるまで、やはり「囂俄〔ヒューゴー〕著」と題したのである。奇妙なのは、林紓はユゴーの『九十三年』を翻訳して書名は『双雄義死録』であるが、作者名はといえば「ユゴー〔預勾〕」だった。このことから、その本の口述者が用いたのはフランス語の本だとわかるのである。しかし、林紓自身はおそらくユゴー〔預勾〕がヒューゴー〔囂俄〕であることを知らなかったであろう。19-20頁

施蛰存がいうように、中国では、ユゴーを雨果と書くのが現在は一般的だ。施は、ゴーリキーについて英語の読み音（ゴーキ-）が正しくないと書いていた。同じく Victor Hugo についても英語読みのヴィクター・ヒューゴー（またはヒューゴ）は不正確だという。この英語読みから囂俄がでてきた。最初にそう訳した

のは林紘だ。こう施蟄存は断言している。しかも、その誤用が長く続いたともいう。

確認しておきたい。蠹俄は英語にもとづいた漢訳だ（英語系ヒューゴーである）。一方、雨果はフランス語にもとづいた漢訳となる（フランス語系ユゴーとする）。中国における大まかな流れをいえば、最初つまり1900年代は英語系蠹俄だったものが、40年代からフランス語系雨果に転換した。

施蟄存の文章には、問題がいくつかある。

問題1：ユゴーを英語読みで蠹俄〔ヒューゴー〕と翻訳したのは林紘である。そのとき、林紘は福州方言を用いて蠹俄と表記した。

問題2：林紘はユゴー『九十三年』を翻訳して原作者を預勾とした。そこから口述者はフランス語本を底本にしたとわかる。

問題3：林紘は、自分が翻訳していてユゴー〔預勾〕とヒューゴー〔蠹俄〕が同一人物であることを知らなかった。

以上のうち問題1と3は関係する。先に問題2から検討しよう。

林紘＋毛文鍾はユゴー『九十三年』を漢訳して『双雄義死録』（1921）と題した。そこまではいい。共訳者である毛文鍾は、英語ができた。私は、英訳版本多数を比較検討したことがある。彼らが漢訳の際に使用した底本は、英訳要約版だというのが私の到達した結論だ。そればかりか完訳版も参照しながらそこから補っている。林訳は頁数こそ多くはないが、手間のかかった翻訳である*3。

林紘らは英訳要約版を底本にした。原作者名をフランス語系ユゴーの「預勾」に漢訳していることと、底本が英語版であったことは関係がない。原作者の漢訳名は、底本が何語で書かれていたかを特定する根拠にはならないのだ。つまり、問題2は成立しない。

決定的な誤りは、まさに問題1にかかわる。蠹俄を使用しはじめたのは林紘だ、と施蟄存は断定した。

だが、林紘が翻訳したユゴーの作品は、ひとつだけ。上の預勾著『双雄義死録』がそれだ。林紘が蠹俄を使用した事実はない。中国では、韓一宇がそのこと

を指摘している*4。ほぼ唯一の例だといっていいだろう。

結果として、問題3の預勾と囂俄が同一人物であることを林紓が知らなかった、という施蟄存の説明はこれも成立しない。

囂俄という表記は、林紓とはもともと無関係である。林紓が福建出身だから、福州方言を使って囂俄という漢字を当てた。施蟄存が提出したこの推測は、はずれている。

施蟄存は、あたかも林紓がユゴー作品を複数翻訳しながら、著者名に異なる漢訳を当てたかのように説明した。同一人物に別の漢訳をほどこしたのは、林紓と共訳者には外国文学の知識がなかった、という意味になる。あるいは、林紓はそれほどずさんな翻訳を行なった。施は、そのように記述したのとかかわらない。該書の編集者もそれを読んで疑問に思わなかった。五四時期の林紓について、その評価はやや同情的であった。しかし、林訳に対する侮蔑の感情が露わになった文章だと私は感じる。

よく見てほしい。囂俄に関して、林紓にしてみればそう翻訳した事実そのものが存在しない。囂俄という漢訳名は、林紓が作り出したものではないのだ。林紓がやっていないにもかかわらず、施蟄存は林紓の責任を追及している。だからこれを、施蟄存による林紓冤罪事件だと私はいう。研究者のほぼ全員がそれに賛同した。事実を無視して林紓を貶めたのである。最初から林紓が批判の対象として存在していたことが理解できる。

あらたな問題が浮上する。では、フランス人ユゴーに英語系ヒューゴーである囂俄の2文字が当てられたのはなぜなのか。こちらについては、「ユゴーの漢訳名囂俄について」をご覧ください。

【注】

- 1) レオポルド・マビヨオ著、神部孝訳『ヴィクトル・ユゴオ』新潮社1927.2.2
- 2) 『域外小説集』(上海・中華書局1936.12 / 1940.11三版)には、「戈里奇 (Maksim Gorjki)」とある。「著者事略」の「契訶夫」に出てくる。7頁
- 3) 樽本「林訳ユゴー」『林紓研究論集』所収

- 4) 韓一宇『清末民初漢訳法国文学研究(1897-1916)』北京・中国社会科学出版社2008.6。
69頁。韓によると、人々は『孤星涙』を林紘の翻訳だと誤り、さらにある研究者は林紘の翻訳に『哀史』があると書いているらしい。明らかに誤解である。「彼(施蛰存)は林紘がユゴーを「囂俄」と翻訳したと考えている。しかし、林紘がいつどの作品のユゴーを「囂俄」と翻訳したのかを明確に指摘してはいない」。韓一宇は、林訳についての誤解が広まっているという事実を述べている。

『吟辺燕語』批判の謎

『清末小説から』第111号(2013.10.1)に掲載。沢本香子名を使用。文学革命派の王敬軒(錢玄同)と劉半農は、捏造した手紙に反論を書くというなれあい芝居を演じた。自陣である『新青年』誌上において林紓批判を始めたのである。敵として林紓を指名した最初のことだった。林紓の翻訳シェイクスピア『吟辺燕語』を批判の証拠に掲げた。原作の戯曲を勝手に小説化したと批判する。これに対して同時代の誰も、後代の研究者のひとりも反論を提出していない。奇妙なことだ。『吟辺燕語』の底本はラム姉弟の『シェイクスピア物語』であるからだ。文学革命派の陳独秀、王敬軒(錢玄同)、劉半農、胡適、魯迅周作人兄弟たちは、その事実を知らなかったのか。結論は、知っていて林紓に無実の罪を着せたのだった。冤罪という理由である。あわせて、この重要事件を、張俊才、王勇著『頑固非尽守旧也：晩年林紓的困惑与堅守』(太原・山西出版伝媒集団、山西人民出版社2012.1)が無視していることを述べる。従来からある五四新文化運動の評価を逆転した好著にして、欠陥があるのは残念なことだ。

英国莎士比著、林紓、魏易同訳『英国詩人吟辺燕語』(商務印書館1904。以下『吟辺燕語』と称す)がある。

ふたつの意味で有名だ。

ひとつは、シェイクスピア作品(の関係書)として広く読まれた。

「の関連書」とカッコでくくった。林訳には、シェイクスピア著と明記されている。だが、その中身はラム姉弟Charles Lamb、Mary Lambの『シェイクスピア物語 Tales from Shakespear^{ママ}』(1807)だ。林紓(琴南)らは、ラム名を示さずシェイクスピアだけを前面に押し出した。周知の事実だろう。

阿英は、どうしたことが自分の「晩清小説目」(1954)に「英蘭姆著」と書いている(124頁)。彼は自分の勝手な判断で、原書にはないラム名を記入したのだ。訂正したつもりか。あるいは、たんに勘違いしたにすぎないのか。そうだとすれば、うっかり書き間違いうくらいに、ラム原作という事実が広く知られていたとわかる。

ふたつは、文学革命派から批判されてさらに有名になった。

『吟辺燕語』は、文学革命を当時の社会に広く宣伝するきっかけに利用された記念碑的作品である。

林訳小説を批判することで、文学革命派は自分たちの敵が林紘であることを人々に知らしめた。のちの林紘批判の起点になった翻訳作品だ。

というわけで『吟辺燕語』は、中国では広く知られている。しかし、どこかしっくりとしない。研究者の側により大きな問題があるように思う。

結論からいう。1918年の文学革命派による『吟辺燕語』批判は、それそのものが成立しない。研究者で誰かこのことを指摘した人はいるのだろうか。私の知るかぎり、ひとりとしていない。中国の学界では、触れてはならない部類の事柄なのか。納得がいかない。

時代背景を簡単に説明しておく。

1 文学革命派の林訳小説批判

清朝末期において、林紘らが翻訳した外国の翻訳小説は、多くの読者から歓迎された。

林紘が採用した翻訳方法は、共同作業である。外国語を理解する人が原書を手にして口頭翻訳する。林紘はそれを聞きながら得意の文言で筆記する。主としてフランス語、および英語に堪能な協力者が、複数存在した。世界文学を大量に、しかも短期間に翻訳することができた理由だ。いわゆる「翻訳工房」である。このことばに負の意味は含まれない。出版元は、おもに商務印書館だ。

中華民国になっても商務印書館は、林訳小説を刊行しつづけている。商務印書館は、外国翻訳小説を集めた大型の「説部叢書」をもっていた。1914年全面的

に再版したのは、日本金港堂との10年間にわたる合弁解消を記念する意味があった。そうすることによって「説部叢書」の出版を活発化し拡張させた。収録作品を増大させながら第4集第22編(1924)までを出す。奇しくも林紘の没年である。1集に収録するのは100種だ。単純に計算して全体で322種になる。そこから林訳小説だけを抜き出して「林訳小説叢書」全100種にまとめて出版した。それくらい読者の人気が高かった。商務印書館も売れると踏まなければその種の出版企画を通すはずがない。

清末において林訳小説は、知識人の目を海外に開いたものとして高い評価を得ていた。

中華民国が成立して数年が経過したところで、その事件は起こる。

文学革命運動は、陳独秀の主宰する『新青年』を舞台にして提起され展開していった。

胡適「文学改良芻議」は、該誌第2巻第5号(1917.1.1)に掲載される。彼が留学中のアメリカから投稿したものだ。同じく『新青年』に、陳独秀がつづいて「文学革命論」を発表する。

『新青年』を中心にして、文学革命は大いに提唱喧伝された。主として、古文を廃し白話を使用せよ、という主張だ。ところが、社会的な反響がまったくおこらない。賛成だと支持を表明する人がいない。仲間内の議論だけがにぎやかた。外部からの反論も公には提出されない。反対者が出てこない。存在しているはずの強大で圧倒的な力をもつ敵が、姿を現わさない。

文学革命派は、せっぱ詰まった。ついに敵対者を自分たちでつくることにした。そうする必要があったのだ。注目を集めるためであれば、なんでもやった。これを捏造、あるいはでっちあげという。

林訳小説のひとつ『吟辺燕語』が、文学革命派から攻撃目標にされる。林紘にしてみれば、突然の出来事だった。

結果として文学革命派によって無理矢理引きずりだされたのが、外国語を知らない翻訳者として著名な林紘である。

文学革命派は、自分たちが関係する印刷物に批判の文章を発表して林紘に有無をいわせない。一方的で強引なやりかただ。若い北京大学教授たちが複数で集団

を形成し、市井にあって孤立無援の老人林紘ひとりによってたかってつるしあげている。そういう図式になる。この事実を否定することはむづかしい。研究者の多くは見ないふりをする。

『新青年』を主宰していた陳独秀は、1918年当時、北京大学文科学長（今でいう学部長）である。『新青年』は、陳独秀が北京大学によばれたのを機会に、編集部も上海から北京に移転している。

錢玄同（北京大学国文系教授）が、日本留学から帰国した王敬軒になりすまし、捏造論文を『新青年』第4巻第3号（1918.3.15）に投稿する。外部からの投稿という形だけをとりにくろった。文中で、林紘を当代の文豪だと特別に持ち上げる。例のひとつとして林訳シェイクスピア『吟辺燕語』を示した。身近には、別の林訳シェイクスピアが発表されていた。そちらを証拠として提出すれば、当面はより適切な例となっただろう。しかし、どういうわけか昔もむかし清末時期に刊行された『吟辺燕語』を選んだ。今から見れば、これがほころびのもとだ。

劉半農（北京大学法科預科教授）が、王敬軒（錢玄同）への反論を同時に掲載する。事前に打ち合わせていたとおり。ほめあげられた林紘について、劉半農は徹底した批判をくりひろげる。

劉半農は、林訳小説の欠点を数え上げた。

価値のない外国作品を多数翻訳した、誤りがあまりにも多すぎる、原文と訳文を比較対照すると削除書き換えが多くてでたらめだ、などなど。

その主眼は、なんといっても『吟辺燕語』批判だ。

林紘はシェイクスピアの戯曲を小説に書きかえた。劉半農は、そう非難攻撃したのである。「豆と麦の区別もつかない[不辨菽麦]」と罵った。胡適が用語を修正して劉半農に加勢した。のちに鄭振鐸が使用したことはでいえば、林紘は小説と戯曲の区別がわからない[林先生大約不大明白小説与戯曲的分別的]。文学の基礎的知識もない、という意味だ。外国小説翻訳の権威である林紘をその座からひきずり降ろすのが目的だった。

いまいちど確認してほしい。劉半農が林訳『吟辺燕語』を批判した理由は、戯曲の小説化である。

戯曲の小説化をいうのであれば、同じく索士比亜Shakspere^{ママ}著、訳者不記『解

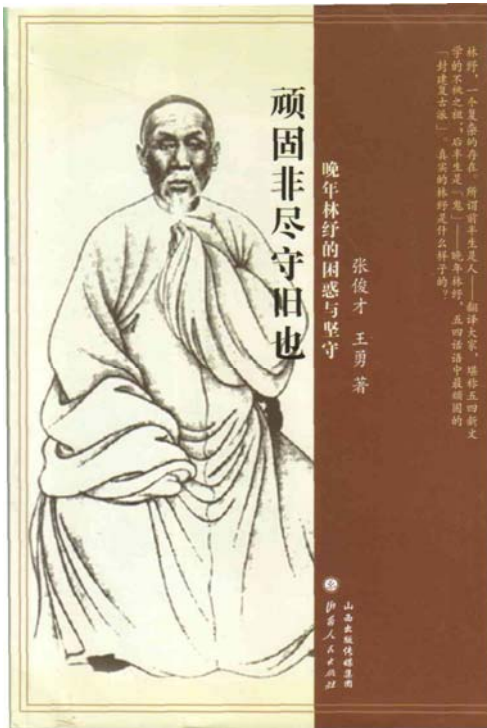
外奇譚』(上海・達文社1903)があった。ラムの小説化本が底本だと明記している。しかし、文学革命派は、無視した。なぜなら、林訳ではなかったからだ。

文学革命派は、特別に選んで林紘ひとりに目をつけた。自分たちの前に立ちほだかる敵対者に仕立てあげた。打倒すべき守旧派(のちに封建復古派と称される)の代表者に指名した。劉半農が書いたのは、それを宣言した記念碑的一撃の論文にほかならない。

それ以後、林紘批判が大々的に開始される。さらに、実在しないものに尾ひれをつけて巨大化させていった。

王敬軒(銭玄同)の捏造論文と劉半農があらかじめ用意した反論だ。ふたりがなれあって演じたこの芝居([双簧戯]。手紙だから[双簧信])は、中国現代文学史上ではとりわけ知られた事件である。

中国といわず世界の学界では、林紘批判が基本的主流になっている。ゆえに、ふたりのなれあい芝居は、「勝者の文学史」である各種中国現代文学史において正の方向で肯定的に、積極的に記述紹介される。ここには文学革命派が犯した文学史上の大きな汚点であるという認識が、ない。



これについては例外がある。そのひとつは、張俊才、王勇著『頑固非尽守旧也：晩年林紘的困惑与堅守』(太原・山西出版伝媒集団、山西人民出版社2012.1)だ。

なれあい芝居に関しては、「學術道德に違反している[有違學術道德的“双簧信”]」と書いている(229頁)。珍しい。

ただし、学界全体を見れば基本は今もかわらない。外国語を知らない翻訳者だとくりかえし林紘を嘲笑痛罵する。視点をずらす、つまり林紘からいえば、冤罪事件のはじまりになった。そう見る研究者は、ほとんどいない。

なれあい芝居のすぐあとに胡適が登場する。

胡適は、留学先のアメリカより帰国した。北京大学文科教授に就任したのは1917年9月のことだ。数えの二十七歳である。

王敬軒（錢玄同）と劉半農の文章が掲載された次の『新青年』第4巻第4号（1918.4.15）だ。胡適は「建設的文学革命論」を発表した。

現在の中国にある文学は「偽の文学[假文学]」と「死んだ文学[死文学]」だ。「真の文学[真文学]」と「生きた文学[活文学]」がそれらに取って代わる。30、50年以内に新中国の生きた文学を創造するという意気込みを示す。

該論文の主旨は、「国語的文学、文学的国語」という表現にまとめてある。つきつめると、死んだ文言を廃し生きた白話を採用しようという提案だ。

私が注目するのは、該論文の最後部分において胡適がつぎのように断言している部分だ（傍線省略）。

林琴南はシェイクスピアの戯曲を記述体の古文に翻訳した！これは本当にシェイクスピアにとっての大罪人である[林琴南把Shakespear^{ママ}的戯曲訳成了記叙体的古文！這真是Shakespear^{ママ}的大罪人]。306頁

シェイクスピアは普通Shakespeareと綴る。胡適が書いて、なぜだか最後の「e」が抜けている。小さなことに見えるだろう（後述）。アメリカに留学し、しかも北京大学教授である胡適にしては、不注意ではないか。該文を『胡適文存』巻1（上海・亜東図書館1911.12 / 1935.6十七版、101頁）に収録したとき、シェイクスピアについてはもとの英文表示を削除した。「蕭士比亞」と漢字表記に書きあらためている。自分で誤りに気づいていたか。漢字に置き換えた理由は、やはり不明。

「！」をつけて強調している。戯曲を小説に書き換えて翻訳した。今でいう「小説化」ということばが理解しやすい。しかも、林紓が筆述に用いるのは文言だ。小説化と文言使用が、胡適による林訳小説批判の根拠になる。劉半農が攻撃した林訳小説の削除改変についても胡適は視野にいれている。

胡適は、王敬軒（錢玄同）と劉半農のなれあい芝居から、その主張を継承した。

あるいは、追認した、またお墨付きを与えた、といってもよい。アメリカ帰りで新進気鋭の北京大学教授が、そう断定したのだ。胡適は、林訳小説を批判する急先鋒のひとりになった。

だが、戯曲の小説化というこの部分について、胡適を含めて文学革命派は極めて危険な賭けに出た。別のことばでいえば、大失態を後世に残した。なにしろ私が現在そう指摘しているのだから。

その理由は、こうだ。

前述のとおり林紘と魏易が漢訳してシェイクスピア著と示した『吟辺燕語』の底本は、シェイクスピアの戯曲そのものではないからだ。ラム姉弟の『シェイクスピア物語』だった。ラム姉弟がシェイクスピアの戯曲を小説化した。だれでもが知っていることにすぎない。底本の散文を漢訳して散文になるのは、当然だ。小説化したという批判は、林紘にしてみれば濡れ衣にほかならない。

漢訳題名の「英国詩人吟辺燕語」は、分解するとつぎのようになる。「英国詩人」はシェイクスピアだ。「吟辺燕語」は戯劇物語を意味する。日本語訳すれば「シェイクスピア戯劇物語」である。

林訳『吟辺燕語』をめぐる劉半農が批判を展開し、胡適が追随した。のちに鄭振鐸が登場し、根拠とした『吟辺燕語』を知らぬ顔をして取り下げる。林訳シェイクスピアの別作品に差し替えて林紘批判を完成させた。林訳小説を批判して、戯劇を小説化したと止めをさしたつもりだ。

研究者のだれでもが、林紘らがシェイクスピアの戯曲を小説化したと認めている。疑問を提出したひと、異議をとらえた研究者は、ひとりもない。別の表現をすれば、事実にもとづいて林紘とその翻訳を支持し擁護した研究者は、いなかった。

この部分をながめるとき、私はいつも不可解な気分に襲われる。どうしても立ち止まってしまう。

2 林訳『吟辺燕語』批判の謎

いうまでもなく、シェイクスピア自身が書いた「シェイクスピア戯曲物語」と

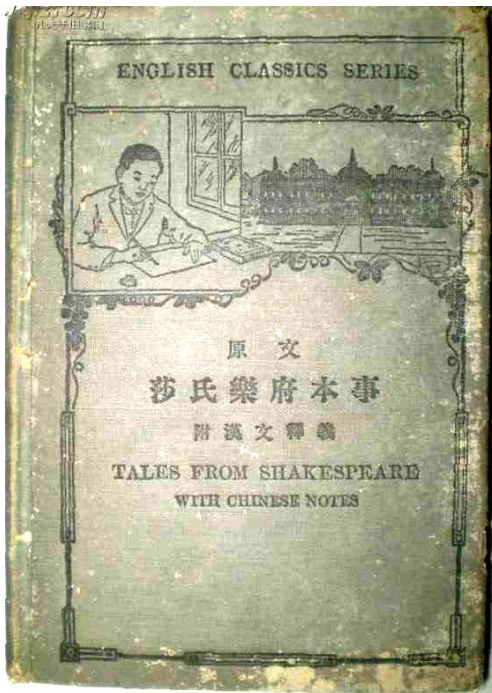
いう作品があるわけがない。だからこそ、林紓らがシェイクスピア戯曲から20篇をえらびそれをもとに直接小説化して1冊の要約版にした。そう考えて劉半農は林紓を批判するわけだ。

しかし、イギリスには昔からラム姉弟の『シェイクスピア物語』(1807)があつて有名ではないか。

中国では、ラム姉弟本の最初の漢訳は『吟辺燕語』ではない。その前に『瀕外奇譚』が刊行されていた。前述のとおりラム姉弟と説明してある。

さらに、『吟辺燕語』がラム姉弟の作品を漢訳したものだとして大学生ですら、はるか以前にその事実を知っていた(『吳宓日記』1911年分)。

1910年には、ラム本の注釈本が商務印書館から刊行されている(傅光明による*1)。拉穆著、平湖甘永龍註釈『原文莎氏楽府本事附漢文釈義』(宣統二年五月/1923二十版)だというのだ。英語学習教材である。



商務印書館の出版目録『図書彙報』にその名前が見える。『莎氏楽府本事(附漢文釈義) Tales from Shakespeare with Chinese Notes』だ。その第118期(1927.4. 222頁)、第121期(1930.2.28止。231頁)、新6号(1936.3. 265頁)のいずれにも掲載される。息の長い刊行物に違いない。中国の孔夫子旧書網から表紙写真を引用しておく。頭に「原文」と表示されるのは傅光明の指摘通りだ。

その重版数を知れば、教育界ではラム本の存在は広く知られていたとわかる。

『吟辺燕語』はラム本だと指摘する論文が、その時すでに発表されている(東潤(朱世溱)「莎氏楽府談」『太平洋』1917*2)。

以上をみただけで、理解できる。中国の知識人、しかも外国文学に通じている人ならば、ラム姉弟『シェイクスピア物語』は一般教養、常識の範囲内であるだ

ろう。北京大学の教授たちは例外だった、とでもいうのか。

林訳『吟辺燕語』批判には、王敬軒（錢玄同）、劉半農、胡適という高名な北京大学教授たちが参加している。また、『新青年』の編集には、魯迅（中華民国教育部部員）、周作人（北京大学文科教授、兼国史編纂処編輯員）兄弟もかかわっていた。

陳独秀、錢玄同、周兄弟たちは日本に留学したことがある。胡適はアメリカ留学組だ。劉半農はその時まで留学こそしてはいない。もとは上海に在住していた小説家、翻訳家だ。彼は英語ができた。ホームズ全集のうちの1冊（『福爾摩斯偵探案全集』第2冊、中華書局1916）を翻訳している。劉半農は、のちにイギリス、フランスへ留学し、フランスの博士号を取得する。このことは、本稿とは直接の関係はない。しかし、劉半農はもともと外国語について高い能力を持っていたといたいのだ。

北京大学を中心に集まった文学革命派は、同時に雑誌『新青年』派でもあった。当時、高度の学識を有する知識人集団のひとつであるといって過言ではない。

そのなかの誰ひとりとしてラム姉弟の『シェイクスピア物語』を知らなかったのか。とても信じることができない。

胡適がシェイクスピアの英文綴りを「Shakespear^{ママ}」とし「e」を抜いていたことを指摘した。実は、そう綴る著書が実在する。ラム姉弟の“Tales from Shakespear^{ママ}”にほかならない。胡適はラム姉弟本を知っていたことになる。

3 魯迅とシェイクスピア

日本留学中の魯迅は、林訳小説が刊行されるたびに購入した。大いに好んでいた、と周作人は証言している。後年の魯迅による林訳批判からはかけ離れている。

魯迅、特に林訳『吟辺燕語』批判前の彼について、シェイクスピアとの関係を探索するのは容易ではない。

ふたつに分ける。

魯迅はシェイクスピアを知っていたか。つぎ。魯迅はシェイクスピア作品を読んでいたか。

若い魯迅が筆名を使用した文章で、シェイクスピアに触れるのは次の3カ所だ。

- 1 令飛「摩羅詩力説」1908。狭斯丕爾（Shakespeare）の名前をだす*3。
- 2 令飛「科学史教篇」1908。狭斯丕爾（Shakespeare）の名前をだす*4。
- 3 迅行「文化偏至論」1908。「ジュリアス・シーザー」の一部分に言及する。ブルータス（布魯多）がシーザー（該撒）を暗殺し（ローマ）市民に説明演説をする。理路整然と大義名分を説く。しかし、アントニー（安多尼）が血にそまった（シーザーの）衣服を指していった数語にはおよばなかった。第3幕第2場の内容を紹介する*5。

1 2で魯迅が示す「狭斯丕爾」は、林訳の用いた「莎士比」とは一致しない。魯迅がよったのは、巖復『天演論』「導言十六進微」に見える「狭斯丕爾」だ*6。魯迅は、そのころ『天演論』に心酔していた。巖復経由でシェイクスピア名を吸収したようだ。

3のシェイクスピア「ジュリアス・シーザー」は、1908年当時まだ漢訳されてはいない。

魯迅は、シーザーに漢字の「該撒」を当てている。

沙士比阿著、坪内逍遙訳『自由太刀余波鋭鋒 / 該撒奇談』(東洋館書店1884.5*7。国立国会図書館近代デジタルライブラリー)に通じるか。ただし、坪内訳本の序は「塞撒奇談序」と記す。シーザーならば、当てる漢字が異なっても意に介さない。坪内が訳した人名を見ておく。ぶるたす（舞婁多須）、しいざる（獅威差）、あんとにい（菴兔尼）などだ。これまた魯迅が用いた漢字とは別物だ。

確定することはむづかしい。だが、魯迅のシェイクスピア作品理解は、日本語経由であったとしても不思議ではないだろう。

日本では、坪内逍遙の日訳シェイクスピアは原文からのものだ。同時に、ラム本からの翻訳も別に多く刊行されていた。それが当たり前の状況であったことをいっておく。魯迅はそういう環境のもとに留学生であった。

ついでに触れる。林紓らがクイラー＝クーチ本を底本にして「凱徹遺事」と題して漢訳した。「凱徹」であって「凱撒」ではない。のちの1916年になる。

1908年ころの魯迅とは、関係がない。

高旭東『魯迅与英国文学』（西安・陝西人民教育出版社1966.9 魯迅研究書系）がある。

該書「第3章 魯迅与莎士比亞、蕭伯納及其他」の「一、魯迅与莎士比亞」において林紘『吟辺燕語』に言及する（120-121頁）。高旭東は、林紘シェイクスピアによって魯迅はシェイクスピアを早くに了解したという。だが、その根拠を提出することには成功していない。

若い魯迅が、1904年に刊行された『吟辺燕語』を読んでいた可能性は、ないわけではない。では、魯迅がラム姉弟を知っていた証拠はあるのか。文献の上では、直接確認することができない。ただし、ラム姉弟本が、当時の知識人が有する常識の範囲内であれば、わざわざ書くことでもない。言及がないのも当然ということになるだろう。

4 文学革命派のたくらみ

林紘の単行本には、たしかにラム姉弟の名前は明記されてはいない。しかし、シェイクスピアの小説化本といえ、ラム姉弟の著作が従来から著名なのだ。林紘批判を行なった北京大学教授たちのうちひとりも、その事実気づかなかった。そう考えるのは、やはり無理である。胡適の例がある。彼を除いたほかの人々が知らないことを証明するのは、ほとんど不可能だ。

そうすると結論は、ひとつしか残らない。

北京大学の文学革命派は、『吟辺燕語』がラム姉弟の『シェイクスピア物語』だと知っていた。百も承知のうえで、該書にラム姉弟の名前がないという事実をつかまえた。これを根拠に、知らないふりをした。その目的は、シェイクスピアの戯曲を林紘たちが勝手に小説化した、と非難痛罵するためだ。林紘批判を発動し展開するために、虚偽の証拠を積極的に提出した。

こういう行為を指して社会一般では、「濡れ衣をきせる」という。あるいは、無実の罪を押しつける、罪もないのに陥れる。林紘は、身におぼえのない罪を受けた。普通に考えて、林紘冤罪事件である。

王敬軒（錢玄同）と劉半農のなれあい芝居を起点にして、つまり『吟辺燕語』から林紓冤罪事件がはじまった。それほど重要な『吟辺燕語』だ。なんどでも書くが、虚偽にもとづいて林紓小説を批判した証拠のひとつなのだ。

ところが、ここに注目する研究者は、いない。1918年当時も、また現在にいたるまで誰も指摘しない。不思議なことだと思う。

5 張俊才の注目すべき新著

先に触れた張俊才、王勇著『頑固非尽守旧也：晩年林紓的困惑与堅守』をもう一度とりあげる。

参考までにその目次を紹介しよう。

- 引 言 晩年林紓：一個複雜的存在、
- 第1章 “五四”林紓的“滑鉄盧”、
- 第2章 晩年林紓的政治絶望、
- 第3章 晩年林紓的文化憂思、
- 第4章 晩年林紓的文学焦慮、
- 第5章 重評五四新旧思潮之爭、
- 結 語 晩年林紓：一個文化保守主義者、
- 参考文献、
- 後 記

その内容は、書名の副題に示されている。晩年の林紓を対象にして論じる。その政治思想、文化的立場、文学主張などである。

目的は、文学革命派の林紓に対する扱いを再検討することだ。

晩年の林紓にしてみれば、突然の批判を受けたのだから「困惑する」はずだ。しかし、それに屈することはなかった。自己の考えは「堅く守った」。

再検討の結果は、こうだ。

文学革命派が林紓に対して不公正な評価を下したことを明らかにした。章題に

「五四新文化派の欠点を正視しなければならない」(226頁)があることを示すだけで、著者の姿勢を理解することができる。従来の研究評論は、かたよったものだ。この主張が、該書を特色あるものになっている。

文学革命派による根拠のない林紘攻撃が行なわれた。事実を押さえながらそう論証していく。林紘の立場によりそった記述は、実証的だ。今までには見ることのできなかつた種類の研究書になっている。従来からある否定的な評価を全面的にひっくりかえした。

張俊才の該当研究は、「国家社科基金」による研究成果だと明らかにしている(267頁)。従来からの主流である林紘批判を否定する研究なのだ。中国においてよく許可が出たものだ、と私は驚く。原稿を提出して出版審査も通過した。審査員が賞賛したことを張俊才自身でさえ予想していなかったようだ(268頁)。

晩年の林紘を研究した注目されるべき著作のひとつだと私は高く評価する。

冤罪を数えあげるのであれば、上に見てきた『吟辺燕語』が最適の実例だということができる。なにしろ林紘冤罪事件となる最初の事例なのだ。

ふたたび、簡単にまとめるところだ。

林紘らは、ラム姉弟の小説化シェイクスピアを翻訳した。ところが、劉半農、胡適らは、シェイクスピアの戯曲を勝手に小説化したと非難嘲笑する。文学革命派による誤爆も誤爆、大がつく。

張俊才は、この重大事実について、どういう説明をしているだろうか。

なにしろ張俊才は、林紘研究の専門家のなかでも第一人者として名高い。彼は、晩年の林紘が冤罪だと証拠を示して主張している。従来とは反対の評価を下した。では、『吟辺燕語』についても今までとは異なる説明があってもいい。今の私がいなく興味は、そこにある。

6 張俊才の説明

私の見るところ、張俊才が書名をだして『吟辺燕語』に言及する箇所は5カ所、書名をださないで触れるのは2カ所ある。

- 1 王敬軒(錢玄同)が『吟辺燕語』をほめあげる箇所を引用する(28頁)。

2 劉半農がそれに反論して「豆と麦の区別もつかない」と罵った箇所を引用する(29頁)。

3 「1904年、林紘は英国ラム姉弟著『シェイクスピア物語 [莎士比亞戯劇故事集] 』(林訳では題名を『英国詩人吟辺燕語』とする)を翻訳した」と述べる(139頁)。

4 「英国詩人吟辺燕語・序」から引用する(176頁)。

5 同上(185頁)。

6 劉半農が林紘を批判して「豆と麦の区別もつかない」と書いた(219頁)。書名は出さない。

7 上と同様(234頁)。書名は出さない。

書き抜きながら私の身体から力が抜け出ていく。

林紘冤罪事件の最初にして基本となった『吟辺燕語』なのだ。張俊才は、この重要事件を横目で見ながら、かたわらを通過したにすぎない。表面的な事実を述べるだけ。正視しないのだ。事件のもつ意味が理解できないのだろうか。

これには正直のところ、落胆した。

実は、別の林訳シェイクスピアについても冤罪事件があった。

鄭振鐸が、林紘批判を行なっている。

鄭があげた作品は、以下のとおり。「雷差得紀(リチャード2世)」「亨利第四(ヘンリー4世)」「凱徹遺事(ジュリアス・シーザー)」(1916年の『小説月報』に掲載)、さらに単行本の『亨利第六(ヘンリー6世)』(商務印書館1916)などを根拠にする。林紘は戯曲と小説の区別もつかないと罵った。彼は以前の『吟辺燕語』では証拠にならないことを知っていたのだ。わかっていたから、なにもいわず林訳小説のこれら別作品に入れ替えた。巧妙である。

こちらの底本がクイラー=クーチ本であったことも、林紘冤罪事件を決定づける事実である。だが、クイラー=クーチ本について張俊才の言及は、ない。

林訳イプセン『梅孽(幽霊)』(1921)にも、すでに小説化した底本があった、デル本である。張俊才は、デル本も無視する。

鄭振鐸が林訳小説を批判するためにかかげた上記の証拠は、機能していない。虚偽だからだ。研究者たちが知らなかっただけ。根拠が全滅であるからには、鄭

振鐸による林紘批判は冤罪にほかならない。

該書「参考文献」262頁に樽本の『林紘冤罪事件簿』(2008)、『林紘研究論集』(2009)が掲げてある。だが、ただの飾りにすぎないとわかる。

林訳シェイクスピア、林訳イプセンは、林紘の名誉を挽回するための重要かつ明確な証拠のひとつだ。張俊才には、その認識がないらしい。もしも言及があれば、張俊才の著作は人々を納得させるさらに強力な説得力を獲得したはずだ。残念なことだった。

林紘研究の第一人者張俊才ですらそうなのだ。ほかの専門書に期待しろというのは、無理な話だろう。

【注】

- 1) 傅光明「(台湾商務印書館《莎士比亞戲劇故事》) 訳後記」查爾斯・蘭姆 (CHARLES LAMB)、瑪麗・蘭姆 (MARY LAMB) 著、傅光明訳『莎士比亞戲劇故事集』台湾商務印書館2013.4。ウェブ上では「与莎士比亞“故事”終生相伴 台湾商務印書館《莎士比亞戲劇故事》訳後記」として2013.4.7付電字版
- 2) 詳しくは次を参照。樽本「阿英による林紘冤罪事件 『吟辺燕語』序をめぐって」『清末小説』第31号2008.12.1、5-35頁。本書所収
- 3) 令飛「摩羅詩力説」『河南』第2期、第3期1908.2.1、3.5初出未見 / 『魯迅全集』第1巻「墳」所収。北京・人民文学出版社1981。64頁
- 4) 令飛「科学史教篇」『河南』第5期1908.6.5初出未見 / 『魯迅全集』第1巻「墳」所収。北京・人民文学出版社1981。35頁
- 5) 迅行「文化偏至論」『河南』第7期1908.8.5初出未見 / 『魯迅全集』第1巻「墳」所収。北京・人民文学出版社1981。52頁
- 6) 侯官嚴幾道先生述『赫胥黎天演論』富文書局石印、光緒辛丑(1901)仲春。二44才 / (英)赫胥黎著、嚴復訳『天演論』北京・商務印書館1981.10 嚴訳名著叢刊。39頁
- 7) 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』明治文学研究第5巻 春秋社1961.9.15 / 1966.3.10 二刷。47頁。「同年[明治十六年]五月」は「同十七年五月」の間違いであると思う」とわざわざ説明している。だが、国立国会図書館近代デジタルライブラリー公開本には「同拾七年」とある。表紙は「沙比阿翁原撰」。

蔡元培を中傷した北京大学元教員

『清末小説から』第88号(2008.1.1)に掲載。中国では、ある人物についていったん負の評価が下されそれが定着すると、その人に関する詳細がわからなくなる。掘り下げて追究する必要がない、あるいはしてはならない、ということらしい。その理由は、わからないわけではないが、私から見ると不自由なものだ。北京大学校長である蔡元培を中傷して、その父親が豆乳売りであると書いた人物がいる。筆名思孟を使った。しかし、それが北京大学元教員の徐であると指摘したのは、胡適だ。同僚だからよく知っているらしい。ところが、この徐が誰なのか、不明だ。私は、徐崇欽と徐佩銑を提出する。ただし、そのうちの誰かまではわからない。林紓は蔡元培の父親が豆乳売りだったと当てこすった。そう書いたのは魯迅だ。林紓に濡れ衣を着せたのである。冤罪事件のひとつだからここに収録する。

林紓と蔡元培に関係して、問題は北京大学元教員徐某である。

徐某とは誰なのかを説明しなければわからない。林紓批判にかかわっている。

林紓が蔡元培にあてた手紙を公開した。そのなかに「車を引いて豆乳を売る輩 [引車売漿之徒] 」という語句を使用したのがはじまりだ。魯迅が「引車売漿者流」としてそれを「阿Q正伝」に取り込んだ。「阿Q正伝」を日本語に翻訳した山上正義に、魯迅は自分で注釈をつけて「蔡元培氏ノ父ヲ指ス」と説明した。この説明が現在にいたるまで定着している。

林紓は蔡元培の父親を中傷している、と研究者の全員が林を罵るのである。いうまでもないが、豆乳売りについて1919年当時の中国では、大学教授と比較して地位の低い職業だと差別していたことを背景にしている。現在のことを言って

いるのではない。ご了解いただきたい。

さて、林紓が蔡元培の父親を当てつけて書いたというのは間違っている。私は、そう考える。魯迅が林紓の意図だと受け取っていたのは事実だ。しかしそれは、林紓の考えとは無関係である。林紓が蔡元培の父親を罵ったというのは事実無根なのだ。魯迅の理解は、すなわち林紓の意図したことだ、と研究者の思考は短絡している。林紓は、蔡元培の父親など当てこすってはいない。林紓は、魯迅から濡れ衣を着せられた。

蔡元培の父親を豆乳売りだと中傷したのは、筆名思孟という人物だった。林紓とはなんの関係もない。しかも、思孟の文章は、林紓の手紙が公表された後に出てきたものだ。

「息邪」（一名「北京大学鑄鼎録」）という一連の文章に「蔡元培伝」（1919年8月7、8日の『公言報』に掲載。初出未見）がある。これが原文であるという*1。つまり、魯迅は中傷だと知っていて日本人の山上正義に、あたかも林紓が書いたかのようにデマを教え込んだという次第。私はこれを魯迅が引き起こした林紓冤罪事件だという。

当時、胡適も思孟の文章を読んでいる。彼は、『毎週評論』第33号（1919.8.3）に「關謬与息邪」（筆名天風）を書いた。

北京大学を退職した教員で宜興の徐某は、数カ月前「關謬」を書いて蔡子民（元培）を痛罵した。近頃また「息邪」を書いて蔡子民、陳独秀、胡適之、沈尹黙らを悪罵した。ここでは蔡氏について「ドイツに5年居住しながら百余の言葉しか知らず、フランスに3年逃亡しながら10余の言葉しか知らない」と書く。さらに陳沈諸君が外国語に通じていないと嘲笑し、胡適が「英語は精通しているに近いが、知っている言葉は多くはない」という。私たちははじめ見たとき、この徐氏は外国語に精通しているはずだと考えた。ところが第1頁を開いてみると、Marx を Marks と綴っている。この「誤り[謬]」も「うち消[關]」さなければならない。

というわけでこの徐某である。

さすがに胡適だ。彼の文章を読めば、事情をよく理解している。徐某は北京大学の元教員で宜興出身だという。しかも、「外国語に精通している」と説明する。同じ北京大学のことだから、胡適は徐某のことを知っているのも当たり前だ。

手がかりはありそうに思った。だが、徐姓で宜興出身者を調べてはみたが、見つからない。人物を特定することができないのは、もしかしたら別姓かもしれないし、宜興出身ではないかもしれない。だが、北京大学の関係者であればすぐにわかる人物なのだろう。

北京大学で教えていた徐姓の人物はひとりとは限らない。ここではひとつの可能性として徐崇欽をあげたい。

橋川時雄『中国文化界人物総鑑』（北京・中華法令編印館1940.10.25初版／名著普及会復刻1982.3.20。350頁）から引用する。

徐崇欽 一八七六 - X 字は敬侯、江蘇崑山の人、米国に留学してエール大学の碩士。セント・ルイス大学を卒業。前清時代より教職に従ひ、上海高等実業学堂教務長、国立北京大学預科学長、唐山路礦学校教務長、北京工業大学教授、民国大学教務長兼教授、中国大学、朝陽大学、塩務学校及北京大学教授、青島市政府教育庁長等に歴任、近くは三呉大学教務長兼商学院長に任ず。

アメリカに留学して修士号を取得しているくらいだ、外国語に精通している。ただし、出身が宜興ではない。また、「徐君英語に長じ又社交を好み、人物円満にして才気あり」*2という紹介がある。これを見れば北京大学関係者を罵る文章を書いたとも思えない。

私が徐崇欽の名前を知ったのは、高平叔『蔡元培年譜長編』中冊（北京・人民教育出版社1996.11。26-27頁）だ。これに北京大学改革の報道記事が、天津『大公報』（1917.4.22）から引用されている。

2カ所に徐崇欽の名前がでてくる。その大要は、つぎのとおり。

その1。預科組織の大改革だ。蔡元培が北京大学校長に就任して行なったのは、ひとつは学識のない中国、外国教員の罷免である。もうひとつは半独立している

大学預科の整頓だ。学長徐崇欽は大学校長からの指揮を受けるのを望まず、預科大学と自称し一切の課程を大学とは連絡なく行なっていた。蔡は本科との関係から見て現在の預科は廃止することにした。文、理、法の3科にそれぞれ預科を附設する。

その2。北京大学の教職員は前の清時代からの意識をそのまま引きずっており地位が高いものだと考えている。その結果、校長の指揮を受け入れない。蔡元培は校長に就任したのち、庶務長舒某を罷免し、学監張某は夏休み後に罷免を予定する。これらの人物は蔡校長反対の風潮を煽動している。預科学長徐崇欽は、預科の改組をうけその学長を取り消しのうえ教員にされた恨みで、罷免された中国および外国の教員と連絡をとり蔡君反対運動を始めた、と。

大学の教職員ばかりでなく、学生たちの意識改革から蔡元培は着手する。組織改革を進めることとそれは同時進行であった。預科の学長を廃止し、本科の附属とすることで統一性を確立したことになる。そのあおりで権力の座から追われたかたちになったのが名前のあがっている徐崇欽なのだ。

彼だけが実名で出ている。ゆえに注目した。

預科学長からははずされた徐崇欽だが、教員としては北京大学に在籍している。

『北京大学日刊』に掲載された彼の名前を拾ってみた。

1917.11.27「本校捐助航空学校白故學員永魁奠疑一覽表（補登）」に徐崇欽の名がある。

1918.1.20「法科教員姓名及籍貫」に「徐崇欽 江蘇」と掲載されている。この時点では、北京大学教員である。

1918.3.19「法科研究所教員所任科目一覽表」には次のように書いてある。「徐崇欽 最近發明之科学的商業及工廠管理法 未開講」。「未開講」ということは、徐にやる気がなかったのか、受講生がいなかったのか、それはわからない。

以後、徐崇欽の名前を『北京大学日刊』に見つけることができなかった。

ところが、別人が浮上してきた。徐佩銑という。

前述のように、蔡元培は北京大学改革の一環として教員にふさわしくない人物をクビにした。外国語の教員には外国人も含まれていて裁判沙汰になったことも有名だ。

クビになった教員のひとりが徐佩銑だ。その人を紹介して「彼（蔡元培）はごろつき、「漁色団〔探艶団〕」団長、年若い英語教員徐佩銑らをクビにした」*3と表現している。それだけで詳細は不明。徐佩銑のほうが、蔡元培を後に中傷する人物として該当する可能性がまだ高いか。ただし、詳細がわからないのだからこちらもあくまでも可能性でしかない。

このふたりについて、まったくの見当はずれかもしれない。そのばあいは、申し訳ない。最初からあやまっておく。

北京大学をクビになった教員が蔡元培を逆恨みする。中傷する文章を新聞などに公表したのは事実だ。そのなかに蔡元培の父親が豆乳売りだと書いた思孟が実在する。思孟が徐崇欽か、あるいは徐佩銑かはわからない。だが、林紘とは関係がないことだけは確かである。

【注】

- 1) 王永昌「“引車売漿者流” 指的是誰？」『魯迅研究百題』長沙・湖南人民出版社 1981.11。117-120頁
- 2) 北京・支那研究会編『最新支那官紳録』日本・富山房発売1918.8.20初版未見 / 1919.9.10三版。316頁
- 3) 蕭超然等編著『北京大学校史（1898-1949）(増訂本)』北京大学出版社1988.4。59頁

「林訳小説叢書」の作品数

『清末小説から』第89号(2008.4.1)に掲載。沢本香子名を使用。商務印書館が刊行した「林訳小説叢書」の種類と冊数について複数の数字がかかげられている。林紓に関して、実物を見ずに文章を書くことができる。原物を確認できなければそうなる。その実例を示す。本書に収録した理由である。あらためて、正確な数字を提示する。資料を追加し、用語について一部を書き直した。

本当にささいで小さな事である。だが、気になってしょうがない。

97、58、89、100という脈絡のない数字がでている。なんのことが。「林訳小説叢書」に収録された作品の数だという。叢書というシリーズ物に収録してある作品数だから、誰が数えても同じだろう。ところが、異なる数があがっている。なぜ一致しないのか、不思議だ。

林紓の翻訳が全部で何種類あるのか。私はここで数字をあげるつもりはない。これについても複数の数字がかかげられている。数え方による。なにを基準にするかで違ってくる。小説だけに限定するのか、単行本の有無、雑誌掲載の作品を含める、原稿になっているが未刊行であるものをどうするか。だから、私は、林紓の翻訳は200種をこえている、と表現する。

今ここで問題にしているのは、そのような複雑なことではない。単純至極、「林訳小説叢書」収録の作品はいくつあるのか、といているにすぎない。だが、上にあげたように、少なくとも4種類の数字がある。どれが正しいのか。

1 商務印書館版「説部叢書」

「説部」とは、小説のことだ。小説を集めているから「説部叢書」という。群学社、改良小説社、小説進歩社なども「説部叢書」名で継続出版している。時期的に早く刊行されたのは、商務印書館のものだった。

今では、「説部叢書」といえば商務印書館版を指すようになっている。有名になるくらいに収録作品が多い。しかもその特徴は、外国翻訳小説ばかりを集めている点だ。だから「説部叢書」といえば、外国翻訳小説シリーズだと受け取られることが多い。小説という本来の意味の延長線上にあると考えればいいか。それが定着してしまった。

商務印書館版「説部叢書」の成立過程については説明したことがある（樽本「商務印書館版「説部叢書」の成立」『商務印書館研究論集』所収）。

大筋を簡単にのべよう。

「説部叢書」という名称は、最初は存在しない。翻訳小説のいくつかは、単発で刊行されるだけ。1903年ころより「説部叢書」と命名され、シリーズものとしてかたちを整えはじめた。読者の好評を得て急速に収録作品を増加させていく。作品を一部入れ替えて改組しながら、最終的には第4集第22編（1924）までを発行した。

「説部叢書」として最初から綿密な刊行計画があったわけではなかった。

その刊行は、商務印書館が金港堂と合併をはじめめる時期に重なっている。両社が合併を解消したのちも企画が継続された。20年をうわまわる期間に、再版を重ねる作品もでてくる。その奥付に表示する刊行年月が正確でないため目録作成者の手間をふやしている。商務印書館自身が、詳細な目録を作成するのが本来あるべき姿だと思う。だが、該社が刊行した『商務印書館図書目録（1897-1949）』（北京・商務印書館1981）は、発行年月も記述しないズサンなものだった。研究資料としては利用することができないのだからまったく無惨である。世界的にも有名な商務印書館がやることとも思えない。

それはさておき、林訳小説だ。



第1集と第2集では叢書名と表紙の意匠が異なる

2 「林訳小説叢書」

商務印書館版「説部叢書」は、上述の第4集第22編で停止した。1集100編で構成されるから単純に合計すると、全作品は322編になる。

この「説部叢書」には、林訳が125編収録された。その中から特別に選択して刊行したのが「林訳小説叢書」なのだ。第1集（表紙には提示されない）と第2集（「林訳小説」と表示。奥付なし）がある。

簡単な問題だ。第1集と第2集はそれぞれ何編を収録したのか。

数をかぞえるだけのことだ。まったくの単純作業であって、誰がこう書いている、などと説明することではない。

ところが、紹介したようにいくつかの数字が乱立している。どうしてそうなるのか、説明したくなるではないか。

時間をさかのぼって私は橋川時雄の説明に行き着いた。

3 複数の数字

橋川時雄『中国文化界人物総鑑』（北京・中華法令編印館1940.10.25初版／名著普及会復刻1982.3.20）である。橋川の説明は信頼性が高い、と私は判断している。だから利用しているのだ。

その林紓の項目には、林訳を数えてつぎのように記す。

其の訳著に「林訳小説」、（一集九十七種、二集五十八種^{ママ}）、およそ一百五十六種、……247頁

「ママ」としたのは、カッコの位置が違うことを示しているのにすぎない。

第1集が97種、第2集が58種だと明記してある。合計して155種だ。それをなぜ「およそ156種」というのか。鄭振鐸が「林琴南先生」（『小説月報』第15巻第11号1924.11.10）であげたのが「156種」だった。それに引きずられたものかもしれない。ただし、鄭振鐸は、林訳全体を156種と数えただけのこと。「林訳小説叢書」がそうだと知っているわけではない。

これを見て中途半端な数だと思われるはずだ。「説部叢書」では、初集100編、第2集100編などになっている。「林訳小説叢書」だけが、97種と58種では区切りが悪い。

橋川からかなり遅く、中国で数字をあげる人がいる。

鄭逸梅「林紓訳《茶花女遺事》及其他」（『書報話旧』上海・学林出版社1983.8）である。

該文は、のちに『鄭逸梅選集』第1巻（哈爾濱・黒龍江人民出版社1991.5）に収録された。さらに、「不懂外文の翻譯家林琴南」と改題のうえ同じ『鄭逸梅選集』第6巻（同社2001.1）に再度収録される。重複させた理由は、私にはわからない。

林訳はすべて「説部叢書」第1集から第4集までの中に収録され、またそ

れぞれ単行本もある。のちに「説部叢書」第1集から第3集までに収録されたものを集めて「林訳小説[叢書]」第1、2集として刊行した。第1集は『吟辺燕語』から『玉楼花劫』まで全部で59種97冊、第2集は『大俠紅鬃露伝』から『戎馬書生』まで全部で58種89冊である。[林訳小説都列入《説部叢書》一至四集中、并各有単行本。後又把《説部叢書》一至三集中所列入林訳本、匯刊為《林訳小説》一、二両集。第一集自《吟辺燕語》至《玉楼花劫》止、共五十九種、九十七冊。第二集自《大俠紅鬃露伝》至《戎馬書生》止、共五十八種、八十九冊]33頁

第1集が59種97冊、第2集が58種89冊だと説明してある。具体的な作品名をあげ、種と冊にわけて数字が詳細だ。作品によっては上下冊に分けているばあいもあるだろう。冊数が97、89という半端な数になるのはわかる。それにしても、作品が59種と58種というのはすっきりしない。いっそのこと各60種にすればいいと単純に考える。だが、そうはなっていないのだ。

「説部叢書」第4集所収の林訳作品は「林訳小説叢書」には入れていないと指摘している点には、注目すべきである。

これがなにを意味するかといえば、つぎの興味深い事実がある。つまり、「説部叢書」第4集に入っている林訳は1921-24年の刊行だから、「林訳小説叢書」の出版は1920年以前になる。なぜ、これが興味深いかといえば、「林訳小説叢書」第1集の発行は1914年6月だが、第2集の収録作品には刊行年月が基本的に記述されていないからにほかならない。

鄭逸梅によると、合計117種186冊になる。橋川のあげる数字第1集97種と鄭の第1集59種97冊は、「97」が共通する。また、橋川の第2集58種と鄭の第2集58種89冊は、「58種」が同じだ。異なる箇所があるにしても、共通する部分に目が行く。

鄭逸梅の説明は、「林訳小説叢書」の原物を手元においているからこそ書くことのできるものだ。種類と冊数までも示している。それほどまでに詳細であるのは、原物で確認したに違いない、と誰でもそう思うだろう。私もそう考えた。

大木康「林紓」（山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会1995.9.1）に「……後に

『林訳小説』（1集97種、2集58種）としてまとめて刊行された」（480頁）とある。当然、橋川、鄭逸梅のあげる数字が大木によって確認されたと受け取る。

ところが、「林訳小説叢書」については、以上とは別の数字が提示されている。

東爾「林紓和商務印書館」（『（1897-1987）商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1）である。

商務印書館はかつて彼（注：林紓）のために「林訳小説叢書」を2集、全部で100種を出版した。527頁

橋川があげた97種+58種の合計155種、鄭逸梅のいう合計117種186冊とも異なる。第1集と第2集で合計100種だというのだ。もっとも、前出の『商務印書館図書目録（1897-1949）』には、すでに書名をかかげて第1集50種、第2集50種と明示されている。東爾はそれによったのかもしれない。

東爾の数字をそのまま引用して注で示すのが、郝嵐『林訳小説論稿』（天津社会科学院出版社2005.2。175頁）である。

論文で言及がなくても、調べる方法はある。たとえば、上海図書館編『中国近代現代叢書目録』（香港・商務印書館1980.2）がある。「林訳小説叢書」の第1、2集ともに書名、原作者、訳者、頁数をかかげている。上海図書館の所蔵本にもとづいているから信頼できそうに思う*1。

これによれば、第1集は『吟辺燕語』から『離恨天』まで50編、第2集は『大俠紅鬃露伝』から『戎馬書生』まで50編、合計100編である。

記述が詳細だと思われた鄭逸梅の数字が違う。作品も一部が異なることがわかる。鄭は『玉楼花劫』と書いているが、叢書目録では『離恨天』だ。なぜそういう齟齬が生じるのか。

叢書目録にもとづいて冊数を算出しようとするれば、少しむづかしい。原物のままを表示してあるはずなのだが、はっきりしない部分がある。

例をあげる。

22塊肉余生述前編二巻後編二巻（社会小説）（英）卻而司迭更司著 林紓

魏易訳 初版 上・下巻 636頁

原作は、ディケンズ CHARLES DICKENS の “ DAVID COPPERFIELD ” である。
この記述を見ると、前編が「二巻」後編も「二巻」だが、それで「初版 上・
下巻」という。前後編で合計4冊だと思われるが2冊かもしれない。

別の目録を参照してみよう。北京図書館編『民国時期総書目（1911-1949）』外
国文学（北京・書目文献出版社1987.4）だ。

こちらには「塊肉余生述前編」と同「後編」が別に記載され、それぞれ2冊と
なっている。ならば、単純に合計して前後編4冊になる。

もう1例を叢書目録からあげる。冊数について同じ内容だ。

28玉楼花劫前編二巻後編二巻（歴史小説）（法）大仲馬著 林紓 李世中
訳 初版 上下巻 637頁

原作は、大デュマ ALEXANDRE DUMAS père “ LE CHEVALIER DE MAISON-
ROUGE ” という。

こちらも『民国時期総書目（1911-1949）』を参照する。それぞれが2冊だから、
前後編あわせて4冊だ。

以上を合計すると第1集は97冊、第2集89冊という数字が得られる。

鄭逸梅があげたのは、第1集59種97冊、第2集58種89冊だ。種類数は間違っ
ているが、冊数は一致する。鄭逸梅は実際に数えたであろう、という考えが強く
なる。ただし、冊数を数えたのであれば、なぜ種類数が異なるのか。作品も一部
が違っていた。不可解なことだ。

理由がわかれば、疑問もとける。鄭逸梅は、原物で確認したわけではないら
しい。次の書目をご覧ください。

商務印書館『図書彙報』第118期1927.4。204頁

林訳小説 第一集 五十種／九十七冊 十六元

自吟辺燕語起至玉楼花劫止書名価目詳説部叢書一二集

林訳小説 第二集 五十八種 / 八十九冊 十四元

自大俠紅鬃露伝起至戎馬書生止書名価目詳説部叢書二三集

商務印書館『図書彙報』第121期（刊年不記〔民国十九〔1930〕年二月廿八日止〕。212頁）も同文である。鄭逸梅は、この記事によりかかって上の文章を書いたと思われる。ただし、第1集の50種を59種と誤記した。

鄭逸梅は、清末民初の文壇に関して多くの文章を残した。資料名をいちいちあげないのは、彼が直接見聞したことにもとづいているのだろう。欧陽鉅源から聞いた、と鄭が書けば、それだけで第1級資料になる。だが、上の例からわかるように、ものによると何かの資料を利用しながら、それを明示しないこともあるらしい。詳しい説明があるからといって、必ずしも正確ではない。

4 結 論

この種の問題は文献操作だけで解決するものではない。「林訳小説叢書」の原物を手にとればいいのである。

ただし、それができないばあいは、上述したように資料を吟味して使用する以外に方法はないだろう。研究者の文章をひねくりまわすだけだと疑問が生じても解決の方法がない。複数の数字が提出された理由だと考えられる。

私は、手元のを数えた。ところが、冊数があわない。よく見ると、あるべきいくつか欠けているのだった。全冊揃いを見ているわけではないことを正直に書いておく。

以上を総合すると以下ようになった。

「林訳小説叢書」は第1集50編97冊、第2集50編89冊を収録する。合計すれば、全100編186冊である。

【注】

1) ただし、商務印書館版「説部叢書」の第1集については不正確だといわなければなら

ない。10種が刊行されているにもかかわらず2種類しかかかげていないからだ(777頁)。残りの8種は所蔵していないらしい。

瀬戸宏報告を評する

「林紵のシェイクスピア観 林紵は冤罪か」について

『清末小説から』第92号（2009.1.1）に掲載。瀬戸博士が報告した林紵批判が的外れであることを説明する。瀬戸博士は証拠もださずにあいかわらず林紵に濡れ衣を着せ続けているのである。

つぎの通り報告があった。

大会名：日本現代中国学会2008年度関西部会大会 文学分科会

報告者：瀬戸 宏（摂南大学）

論 題：林紵のシェイクスピア観 林紵は冤罪か

配付資料：A4判15頁（うち書影など7頁）

日時場所：2008年6月15日午前 関西大学

評 者：樽本照雄（大阪経済大学）

司 会：萩野脩二（関西大学）

当日、私が行なった評論をもとにして以下の文章にする。

林紵が現在にいたるまで批判されている理由のひとつは、シェイクスピアとイブセンについて、原作の戯曲を小説に書き換えて翻訳したことだ。しかし、それは事実ではない。私は、林訳の底本を探しあてた。クイラー＝クーチとデルの英文小説化本を提出して、林訳批判が誤りであることを証明した。ありもしない罪で林紵に濡れ衣を着せたのだから、これは冤罪事件である。

瀬戸宏の報告を聞いて、私は大変おもしろく感じた。

シェイクスピア、イブセンといえば中国話劇研究者の瀬戸宏にとっては専門分野だ。だが、瀬戸宏は、クイラー＝クーチやデルの原作があるなどとは想像すらしたこともなかったのだろう。本来ならば、中国話劇研究の専門家である自分（瀬戸宏）がやるべき仕事、あるいはやりたかったことを樽本に先をこされてやられてしまった。瀬戸宏がいただく「くやしさ」、「くやしい」という強い気持ち、先ほど行なわれた報告の言葉のひとつひとつに込められている。ピシバシと私に伝わってきた。私がおもしろく感じないわけがない。

私は行なわれた報告を評論するにあたり、瀬戸宏にいくつかの事実を確認した。その場のやりとりをまじえながら述べることにする。ただし、ここに書いてあるすべてが問答になって実現されたという意味ではない。カッコの中などは、私の考えをのべた部分もある。おおよその状況であるをご了解いただきたい。

以下の質問に「はい」か「いいえ×」で答えてほしい。

質問1：樽本『林紓冤罪事件簿』は読んだか 瀬戸宏（樽本：瀬戸宏は、付箋をつけてまで読んだという。そんなことは質問していない）

林訳について具体的に聞く。

質問2：『吟辺燕語』は見たか 瀬戸宏（ちなみにその版本は何年発行か 配付資料10頁「林訳小説叢書」1914年版。樽本：紙型を使って同じだから初版でもなくてもかまわない）

質問3：ラム『シェイクスピア物語』原本は見たか 瀬戸宏

質問4：林訳シェイクスピア歴史劇（「凱徹遺事」ジュリアス・シーザーなど）『小説月報』掲載は見たか 瀬戸宏（配付資料11頁「雷差得紀」）

底本について聞く。

質問5：林訳シェイクスピア歴史劇の底本クイラー＝クーチ版は見たか 瀬戸宏
×（樽本：参考までに。クイラー＝クーチ A.T.Quiller-Couch 『シェイクスピア歴史物語 Historical Tales From Shakespeare』1899）

ついでに林訳イブセンについても質問する。

質問6：林訳イブセンの『梅孽』（商務印書館説部叢書）は見たか 瀬戸宏（配付資料12頁）

質問7：林訳イブセンの底本デル版は見たか 瀬戸宏×（樽本：参考までに。ドレイコット・M・デル Draycot M. Dell 著 『イブセンの「幽霊」物語 IBSEN'S "GHOSTS" Adapted as a Story』1920）

以上の質問は、瀬戸宏が報告するにあたり資料をどれくらい掌握しているかを確認するためであった。

資料を見た読んだといっても、それは必ずしも理解したことを意味しない。

私がクイラー＝クーチ、デルの原本があることを指摘したのは今回の報告からさかのぼって約1年前だ。それだけの時間がありながら、瀬戸宏は英文原本を入手していない。私が明らかにした林紵冤罪事件の核心ともいうべき箇所を無視したのと同じだ。瀬戸宏は、それで「林紵は冤罪か」と題して反論しようという。クイラー＝クーチ、デルを抜きにして林紵は有罪だと瀬戸宏は主張する。それが成立するはずがない。この段階で、私はまずあきれる。

さて、これからが本題だ。

瀬戸宏報告の表題になっている「林紵のシェイクスピア観」に的を絞って検討する。（的を絞ったのは、評論するための時間には制限があったからだ。瀬戸宏は、副題について林紵が有罪であるとあれこれしゃべった。いずれも愚にもつかぬ内容だ。いちいち反論するまでもない）

瀬戸宏の報告には、あやふやなところが多い。説明がない。瀬戸宏本人がどのように理解しているのか、聞かされる私としては把握するのがむづかしい。そのつど確認が必要になるのもやむをえない。確認するとき、私が記録していること、このやりとりを公表すること、あとで語句の訂正を希望しても受け付けないことを説明した。瀬戸宏のこの時点における考え（熟考した結果を発表しているはずだ）を知りたいのであって、私の評論を聞いてから後の修正意見はこの問題については関係がないからだ。

質問8：「林紵は、戯曲と小説の区別ができていない」（「区別がつかない」論と略称する）というが、その根拠はなにか。瀬戸宏自身の考えを簡潔に述べてほしい。

瀬戸宏の回答 説明した。(樽本：説明したのならもう1度簡潔に述べてほしいと重ねて要求した。だが、説明もなければ根拠についての回答もなかった。「区別がつかない」論は、林紓のシェイクスピア理解に関して重要問題である。にもかかわらず瀬戸宏は考えたことがないらしい。そこに問題が存在するという事実さえわかっていないようだ。いやな予感がする。私はムダ骨を折らされることになるのではないか)

質問9：瀬戸宏の配付資料2頁には、「林紓は『シェイクスピア物語』をシェイクスピアの詩の要約集だと理解している」と書いてある。その根拠はなにか。また、「シェイクスピアの詩の要約集」とはどういう意味か。

瀬戸宏の回答 シェイクスピア詩の梗概集だ。(樽本：説明になっていない。根拠についての回答はなかった)

質問10：『吟辺燕語』の林序に出てくる「詩」とはなにを指しているのか。瀬戸宏の考えを聞きたい。

瀬戸宏の回答 詩だ。(樽本：瀬戸宏は、イギリスの……、と説明しはじめたから私は遮った。林序にある「詩」はなにかと聞いているのだが、瀬戸宏は私の質問の意味が理解できなかつたらしい。瀬戸宏は、「詩」と書いてあるからそのまま「詩」だと把握している。林序の文脈からして、その中身が現在とは異なる可能性があるなどとはまったく考えたこともないらしい。そこにある文章には何が書いてあるのか解説しようという姿勢は最初からないのだ。林紓は理解していない。これがすでに答えとして事前に存在している。瀬戸宏は、自分がすでに持っているその考えを林序に押しつけているだけ)

林序には、重要語句がでてくる。瀬戸宏はそれらをどう理解しているのか。それを明確にするために、関係語句を具体的に列挙する。私は瀬戸宏に日本語を当てるように求めた。あらかじめ用意しておいた私の考えを併記し、瀬戸宏の回答を示す。

林紓の語句	樽本の考え	/ 瀬戸宏の回答
詩家之莎士比	戯曲家のシェイクスピア	/ 詩人のシェイクスピア

莎氏之詩	シェイクスピアの戯曲	/シェイクスピアの詩
莎士比筆記	『シェイクスピア物語』	/シェイクスピアの隨筆。訳語はあとで変更する可能性がある
莎詩之記事	シェイクスピア戯曲の物語、つまり『シェイクスピア物語』	/シェイクスピア詩の内容、要約したもの
莎詩紀事	シェイクスピア戯曲物語、つまり『シェイクスピア物語』	/シェイクスピア詩の内容、要約したもの

時間が限られているから手短かに日本語訳をつけてほしい、と要求した。ところが、回答がでてこない。あれこれいつくろい、「訳語はあとで変更する可能性がある」といいだすしまつた。

上の質問は、瀬戸宏が林序を正確に読みとっているかを確認するためのものだ。しかし、結果は見てのとおり無惨だった。提出したものの半数は、日本語として理解できないものである。それをそのまま放置している。林序をまじめに読む姿勢は瀬戸宏にはないとわかる。

瀬戸宏報告の主題は、「林紓のシェイクスピア観」である。林紓のシェイクスピア理解は、この林序の中にこそ示されている。だが、この重要な文章を読むにあたって、的確な日本語をつけるという普通の考えが瀬戸宏にはない。原文を読み込めば、自然と日本語が浮かんできて定着するだろう。訳語が動くというのは、内容の把握が瀬戸宏の中で揺らいでいるという証拠だ。瀬戸宏は、林序をどう読んだというのだろうか。無茶苦茶だ。そうだろうな、とは予想していた。だが、目前に現実として出現すると、私はやはり少し驚く。

林序の最後部分につきのようにある。

莎詩紀事。伝本至夥。互校頗有同異。且有去取。此本所収僅二十則。余一一製為新名。以標其目〔樽本訳：『シェイクスピア物語』は、伝本がきわめて多い。比較すると異同がはなはだ多く、取捨選択している。この本は20作を収録しているだけだ。私はそれらに新しい名をつけて題目とする〕。

私の訳をつけておいた。

質問11：「莎詩紀事。伝本至夥」は、どういう意味か。瀬戸宏の見解を聞きたい。
瀬戸宏の回答 シェイクスピア詩の要約集は伝本が多い。（樽本：意味不明。瀬戸宏は、「詩の要約集」の中身を説明しない。これでは理解するのがむづかしい）

私が読めば、「『シェイクスピア物語』は、伝本がきわめて多い」とはっきり書いてある。この事実に注目してほしい。

『シェイクスピア物語』は、ラム版しかないというわけではない。ラムとは別人の手によって小説化され、よく似た書名で複数が刊行されている。林紓らは、漢訳にあたりラム版を含めた『シェイクスピア物語』の版本を複数集めていた。それらを比較検討した。そのなかからラム版を特別に選択していることがわかる。林紓らは、準備を十分に行なって翻訳をした。一般に伝えられるような、偶然のようにして気軽に翻訳したデタラメなものではない。瀬戸宏にはそれが理解できていないのだ。

いよいよ私の評論の重要箇所にさしかかってきた。

理解の分かれ目は、林序で使われている原文の「詩」である。この単語をどう理解するのか。現在の感覚でそのままの詩であると考えたと誤る。要点さえわかれば、それほど難しいことではない。

『吟辺燕語』の林序を普通に読むと、林紓の用いる原文の「詩」は、現在でいうところの「戯曲」であるとわかる。

原文の「詩」を戯曲と置き換え、使用されている用語をそのまま分類する。すると、上記のようにシェイクスピア戯曲とラムの『シェイクスピア物語』は林紓によって厳密に区別されていることが明白だ。

ところが、瀬戸宏に確認したところ、上に示したように日本語が混乱している。これでは、瀬戸宏自身が何も理解していないといわれてもしかたがない。

林紓は、シェイクスピア戯曲とラム小説を区別していながら、両者の関係を説明しなかった。それだけのことだ。

当時、そうするのは彼だけではない。

王国維「シェイクスピア伝〔莎士比伝〕」（『教育世界』第159号1907.10初出未見。姚淦銘、王燕編『王国維文集』第3巻 北京・中国文史出版社1997.5。392-397頁）がある。

該論文で示された一覧表が興味深い。シェイクスピア戯曲の題名を掲げて喜劇、史劇、悲劇などと注記したものだ。

王国維はシェイクスピアの作品全体を指して「劇詩」と表記している。戯曲である。それよりほかに解釈のしようがないだろう。

注目されるのは、シェイクスピア戯曲を説明して林訳の題名を添えるのである。たとえば次のように書いている。

“ The Comedy of Errors. ” 閩県林紘訳作《鬪誤》一五九一年

この一覧表は、シェイクスピア作品の英文原題に添えて林訳『吟辺燕語』の20作品をすべて掲げる。

さらに、シェイクスピアをさして「大詩人」とも書いている。戯曲家、劇作家という意味で「詩人」を使用しているのは明らかだ。

以上を見れば、私がくどくどと解説するまでもない。林紘が書いているシェイクスピアの「詩」とは、今でいう戯曲を意味していた。戯曲とラムの小説を区別しながら、シェイクスピアの名前で表示しただけ。

くりかえす。王国維も、シェイクスピア戯曲と林訳『吟辺燕語』、すなわちラム『シェイクスピア物語』を区別しながら、シェイクスピアという名称で一括りにしている。それが、普通の把握のしかただった。

中国話劇研究の専門家である瀬戸宏は、王国維が「シェイクスピア伝」を書いていることを知らないわけがないと私は思った。念のために確認した。

質問12：王国維「シェイクスピア伝〔莎士比伝〕」は見たか 瀬戸宏

王国維論文を知っているのならば、そこ見える王の把握のしかたがわかっていなければならない。

瀬戸宏は、該論文を見たという。だが、肝要な箇所に気づかなかった。奇妙なことだといわなければならない。これほど明らかに書かれているにもかかわらずだ。読んだが理解しなかった。その結果、当時の文献、すなわち林序を読むための基礎知識を瀬戸宏は獲得しそこなったのである。基礎知識がなければ、林序に書かれた内容を正確に解釈することができないのも無理はない。中国話劇研究の専門家である瀬戸宏に、その基礎知識がないという事実があらためて私をア然とさせる。

林紓が序で使用した「莎詩紀事」という用語は、のちに形をかえてそのまま使用されている。すなわち、東潤（朱世溱）「莎氏楽府談」（『太平洋』1917年連載）である（この論文について瀬戸宏に確認する時間は残っていなかった）。

朱東潤は、この長編評論においてラム『シェイクスピア物語』を指して『莎氏楽府本事』と表記する。林紓の用語と対照すれば（林／朱の順）、莎／莎氏、詩／楽府、紀事／本事と対応しているのだ。

いうまでもなく、朱論文の表題「莎氏楽府」はシェイクスピア戯曲を意味している（朱が使用する単語は、ほかに劇、劇本、戯曲家など）。

重要な点だ。瀬戸宏は、林序にでてくる「詩」を、現在の認識でそのままの詩だと考えた。ゆえに、瀬戸宏は、林序にでてくるシェイクスピア戯曲とラム『シェイクスピア物語』が厳密に区別されていることを理解することができない。結果として、林序に書かれている内容がわかっていない。

質問13：林紓は、はたしてシェイクスピア戯曲を知らなかったのか。シェイクスピア戯曲を読んだことがなかったのか（ここは、共訳者から口述翻訳をされなかったのか、という意味だ）。瀬戸宏の考えを聞きたい。考えの根拠もあわせて示してほしい。

瀬戸宏の回答 知っていた。認識はあった。

瀬戸宏の説明によると、林紓は「シェイクスピア戯曲を知っていた」が「戯曲と小説の区別がついていない」ということになる。知っていたが区別がつかない。これは論理矛盾である。

瀬戸宏は、鄭振鐸のことは「林紓はおそらく戯曲と小説の区別があまり理解できていなかった」（配付資料8頁）を引用している。また、瀬戸宏本人も、「林紓自身が戯曲と小説の本質的な相違を区別ができなかった」（配付資料4頁）、また「林紓は戯曲と小説の本質的な違いが理解できず」（配付資料8頁）、とくり返して主張している。瀬戸宏は、鄭振鐸の書くままを引き写しただけ。

この説明と質問13の瀬戸宏の回答をあわせ見ると、その不可解であることがはっきりする。

林紓にはシェイクスピア戯曲だという認識はあった、だがラム小説との区別がつかない。なぜ、こういう説明になるのか。論理として成立しないではないか。

質問8でも説明を求めたが、瀬戸宏からの回答はなかった。「区別がつかない」論について、その内容に問題があると思ったことはない。だから、回答できないのは当然だ。鄭振鐸論文を後追いするだけの瀬戸宏には、とうとう最後まで自分で考えるという習慣は身につかなかったらしい。気の毒なことだった。

林紓は、林序においてシェイクスピアの戯曲とラムの小説を厳密に区別している。鄭振鐸らは、林序を読んでいるにもかかわらず、林紓が戯曲と小説の区別ができなかったとわけのわからぬ非難をした。これこそ林紓に濡れ衣を着せている証拠にほかならない。鄭振鐸説を疑わない瀬戸宏も同じである。

林紓が戯曲と小説の区別をしたうえで、両者をうまく利用して漢訳している箇所を紹介する。

瀬戸宏は、ラム『シェイクスピア物語』の英文原本は見ている。『吟辺燕語』も見ている。ならば、ラム版「十二夜」の林訳にはシェイクスピア戯曲を読んでいるなければ書けない部分があることを知っているだろう。瀬戸宏は、なぜそれを隠すのか。それとも、訳文を比較対照したことがなく、その事実を知らないというのだろうか。瀬戸宏は、両書の部分については比較対照したと答えた。ということは、「十二夜」について特に考察したということではないらしい。

瀬戸宏は、林訳シェイクスピア歴史劇（「凱徹遺事」ジュリアス・シーザーなど）『小説月報』掲載は見ている。だが、林訳の底本であるクイラー＝クーチ版は見していない。

ならば、林訳「ジュリアス・シーザー」の前3分の1がクイラー＝クーチ版で

残りの3分の2がシェイクスピア戯曲そのままであるという事実を知らないということだ。

林紘は、シェイクスピア戯曲とラム『シェイクスピア物語』を区別している。それどころか、シェイクスピア戯曲を読んで（上と同じく、共訳者が口述翻訳したという意味）それを翻訳に取り入れている。

林紘は、シェイクスピア戯曲とラムの関係を理解していたが、説明しなかった。それを瀬戸宏は、林紘は何もしらない、と罵る。罵る瀬戸宏のほうが、何も知らない。中国の知識人をバカにするにもほどがある。林紘に対して、これほど失礼なことはない。

劉半農、鄭振鐸も同様だ。彼らは、林紘は戯曲と小説の区別がつかないと勝手に解釈して非難の根拠とした。劉鄭は、最初から林紘を批判する意図をもって文章を書いている。林訳をまじめに検討していない。

もういちど説明する。瀬戸宏は、林紘はシェイクスピアの戯曲を知っていた、という。

シェイクスピア戯曲とラム小説が別々にあると知っていて、その区別がつかなかった、と瀬戸宏はいうのだ。これは、論理的に破綻している。支離滅裂なのである。こういう論理として成立しないモノを振り回す報告に、私はなぜつきあわなくてはならないのだろうか。

瀬戸宏は中国話劇研究の専門家だ。私の知らない資料を持っていて、瀬戸宏はそれを根拠に林紘の有罪を証明しようとしているらしい。私に評論員をするよう電話をしてきた宇野木洋（立命館大学）が、「副題「林紘は冤罪か」が刺激的です」といってそのようにほめかした。私は、そうかと思い瀬戸宏報告について評論（コメント）することを引き受けた（私はその時点で瀬戸宏に対する判断が甘かった。後悔している）。

だが、瀬戸宏の報告を聞けば、これはズサンという程度を越えていると私は判断せざるをえない。

私は林紘冤罪事件に取り組んで、今も複数の作業を並行して継続実行している。結果のすべてを公表しているわけではない。

その中のひとつは、『吟辺燕語』林序の検討である（別稿参照）。

私は、すでにその作業を終えていた。瀬戸宏報告を聞くはるか前である。林紵のシェイクスピア理解は、この林序のなかにこそあるとわかっている。中国人研究者の多くが、あの研究の権威である阿英を含めて林序を誤読しているのだ。瀬戸宏が独自に正しい理解に到達できるとは、私は期待もしていないし想像もしたことはない。それにしても、まさか支離滅裂であろうとは考えもしなかった。瀬戸宏みずからの専門分野においてすらこういう有様だ。

瀬戸宏は、新しい資料をなにも提出していない。昔からの資料を使ってもかまわない。新しい解釈をだせばそれはそれで価値がある。だが、瀬戸宏の報告は、昔ながらの資料を使って昔ながらの結論になっているだけだ。「新しい発見」はないのである。そういうものを発表する意味はあるのか。

瀬戸宏は、私の展開した林紵冤罪論に反論したいという意志は強烈に保持している。なにしろ眼を紅くして報告するのだ。だが、反論するために必要な準備が、瀬戸宏には決定的に不足している。準備不足どころか、論理を組み立てることができない。

瀬戸宏は、『吟辺燕語』の林序そのものは見たのだろう。だが、内容を理解することはできなかった。基礎知識がないのだから、わかるはずがない。

瀬戸宏は、最初から林紵を批判する意図だけをもつ。批判する考えだから、林序をまじめに読むつもりがない。原文の重要語句に日本語訳を満足につけることができないところに表われている。瀬戸宏が報告の主題にした「林紵のシェイクスピア観」が、結果として内容のないものになるのは当然だ。瀬戸宏報告は、発表する価値も意味もない。

瀬戸宏は、『吟辺燕語』とラム『シェイクスピア物語』を十分に比較対照することもしていない。クイラー＝クーチ（ヤデル）の原本を入手していない。

批判する時には相手が持っている資料は自分でも用意するのが常識ではないのか。瀬戸宏には、その最低の常識さえない。

私は、新しい資料を提出して林紵は冤罪だと証明した。だが、瀬戸宏はそれを認めることができず、あるいは認める意志を持たず、あいもかわらず「林紵を罵る快樂」を貪りたいらしい。どうぞ勝手に快樂におふけりください。

2007年に名古屋大学で開催された日本中国学会において私は報告した。瀬戸

宏は、それを聞いている。起立して発言までした。私の『林紘冤罪事件簿』も読んでいるらしい。私の指摘が重要であることを瀬戸宏は少しは感じたものか。

瀬戸宏は、私が提出した「新しい発見」を過小評価し、できることならナシにしてみたいらしい。それには力はいると見える。従来通説、つまり現代中国における「勝者による文学史」を後生大事に守り通したいのだろう。その立場に自分自身を設定しているのである。

瀬戸宏にとっては、文学革命派による林紘批判がすでに当然のように前提として動かずに存在している。だから、それを否定する樽本説には脊髄反射して反対なのだ。反論することを事前に決めている。それにあわせて資料を収集したつもりだ。だが基礎知識が不十分であった。資料を読み解くことができない。瀬戸宏にできることといえば、従来研究をなぞるしかない。新しい見解がでてくる可能性はないのである。はるか昔から継承されてきた旧説、正しくない通説、誤った俗説、間違った定説をくり返すだけだ。これが研究だろうか。

それにしても、これはなんだろう。私は証拠となる資料を提出して林紘は無罪だといっている。しかし、瀬戸宏は新しい資料はなにもださずに林紘の冤罪を否定し、林紘はやはり有罪であると臆面もなく主張する。瀬戸宏は、自分が何をやっているのか理解していないのではないか。林紘に濡れ衣を着せつづける。瀬戸宏のこの情熱は、いったいどこからでてくるのだろう。大胆不敵厚顔無恥というのがあてはまる。

瀬戸宏の報告を聞いて、『林紘冤罪事件簿』を刊行した意味があったことを私は確信した。私の著書は、それら旧説通説俗説定説を粉砕するのが目的であるからだ。

瀬戸宏の報告は、口頭発表する価値のないものである。このような内容のない発表に私はつきあわされてしまった。私の大切な時間を浪費させられたことについて、虚脱感すらいだく。抗議の意味をこめて、私はその日のうちに日本現代中国学会を脱会した。

中国のシェイクスピア最新成果

『清末小説から』第122号(2016.7.1)に掲載。林紓は戯曲を小説化して漢訳したと批判される。しかし、小説化されたラム本、クイラー=クーチ本を漢訳すれば小説になるのは当然だ。ただ、林紓は漢訳刊行にあたり底本の名前を出さなかった。瀬戸博士は、名前を出さなかったことだけを頼りに「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」と批判する。鄭振鐸らが「誤解」したため「誤りの通説」が発生した。そうなる原因は林紓が作り出した。小説化というやってもいいことをやると批判される被害者の林紓が、瀬戸博士の手にかかると「誤解」させた加害者に変身する。奇妙奇天烈でとんでもない主張だという。抑えめに書いた。

北京大学の陳独秀は、自身が主宰する『新青年』で文学革命運動を力強く推進していた。しかし、賛成者がいない。また、期待していた保守派からの反対もまったくない。反対があればそれに反撃することによって運動に弾みをつけることができる。だが、無視された。そこで一九一八年、錢玄同(北京大学)が「王敬軒」という筆名を使い、いかにも保守派が言いそうな文章を作文した。林紓氏は現代の文豪(当代文豪)である、と持ち上げたのだ。それに劉半農(北京大学)が反論を書く。林訳に文学的意味はないと徹底的に林訳を批判する。ふたりは事前に打ち合わせている。これが有名な「なれあいの手紙」だ。数え年六十七歳の林紓が反対派の代表として文学革命派から指名された瞬間である。中国現代文学史では、文学革命派のこの林訳批判に対して非常に高い評価を与えている。日本の学界も同様であって例外はない。

劉半農は、非難の根拠のひとつとして林訳『英国詩人吟辺燕語』をあげた。

『吟辺燕語』は小説体だ。非難して林紓は「詩」と「戯」の区別がつかないと書いた。シェイクスピアの戯曲を勝手に小説にかえて漢訳したという意味だ。慣用句「豆と麦の区別がつかない(不辨菽麦)」を使って嘲笑した。いわゆる「区別がつかない論」である。

一九二四年に林紓が死去した際、鄭振鐸が追悼文を『小説月報』に掲載してこの「区別がつかない論」を決定的なものにした。その時、鄭振鐸は根拠となる作品を差し替えた。さきの『吟辺燕語』は取り下げ、別のシェイクスピア「ジュリアス・シーザー(凱徹遺事)」、イブセン『幽霊(梅孽)』などを証拠にあげた。林紓は小説と戯曲の区別がつかないとくり返し、劉半農に追従し林紓批判を続けた。

それ以来、中国では現在にいたるまで「区別がつかない論」は学界公認の定説となっている。

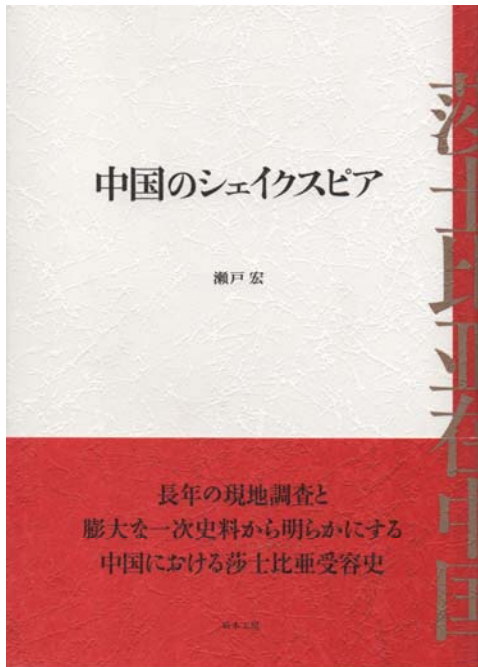
事実は異なる。林紓は戯曲と小説の区別をつけていた。『吟辺燕語』についていえば、ラム姉弟『シェイクスピア物語』が底本である。シェイクスピアの戯曲をラム姉弟が小説に書き直した。林序を読めば、シェイクスピアの戯曲とラム姉弟の小説は区別して認識していることがわかる。ただ、ラム姉弟の名前を出さなかっただけ。この当たり前の事実を、劉半農は知らないふりをして林紓批判を展開した。林紓からすれば無実の罪である。

鄭振鐸があげた別の作品もすでに小説化されたものだ。林紓が小説になっているのは不思議ではない。鄭振鐸はその事実を知らなかった。自分の無知を棚にあげて林紓に濡れ衣を着せて非難した。鄭振鐸の批判はもとから成立しない。

のちの研究者は、劉鄭説を受け入れ「区別がつかない論」を支持し現在も林紓批判を続けている。

私が興味を持っているのは、まさにこの点にほかならない。林紓の冤罪を認めるか否か。冤罪であることを確認して林紓を正しく評価しなおすか、あるいは、濡れ衣を着せた劉半農、鄭振鐸らの誤った観点を継承するのか。

前者であれば、中国のシェイクスピア受容史に躍動する展望を見いだす独自路線を歩くことが可能になる。後者は、林紓シェイクスピアに対する負の評価を維持したまま現在の閉塞状態にしがみついて事大の道を行くことを意味する。二者



択一しかない。研究者にとっては分岐点だ。

瀬戸宏『中国のシェイクスピア』(松本工房二〇一六・二・二九)の「第二章 林紓のシェイクスピア観」がまさに該当する。

シェイクスピアを詩人と劇作家にわけて呼ぶのは現代の常識だ。しかし、林紓の時代には「劇作家」という単語は使用されていない。劇作家を含めて「詩人」と称していた。

シェイクスピア劇は、無韻詩 blank verse (弱強五歩格。脚韻を踏まない韻文)で書かれているから詩である。ゆえにシェイクスピア劇を詩とよぶことは当然のことだ。

林紓はそれを知ったうえでシェイクスピアを詩人だと書いている。ラム『シェイクスピア物語』を漢訳して『英国詩人吟辺燕語』とした。「英国詩人」はシェイクスピアを指し、「詩人」は劇作家という意味であるのは当然だ。

林紓のシェイクスピア理解を知るためには、林序を読むしかない。ここに出てくる「詩」をどう解釈しているのかが問題だ。林序以外にでてくる瀬戸博士本のページ数も示す。

原文 - 樽本訳 / 瀬戸博士訳の順に示す。

詩家之莎士比	詩人のシェイクスピア	/ 詩人のシェイクスピア 89頁
莎氏之詩	シェイクスピア劇	/ シェイクスピア氏の詩 89、90頁
莎士比筆記	『シェイクスピア物語』	/ シェイクスピアの要約 91、94頁
莎詩之記事	シェイクスピア劇の物語	/ シェイクスピアの詩の要約 91、94頁 = 『シェイクスピア物語』
莎詩紀事	『シェイクスピア物語』	/ シェイクスピアの詩の記事91頁、 シェイクスピアの梗概 99頁

林序に見える「詩」は、戯曲である。くり返せば「詩人」は現代でいうところの劇作家だ。

瀬戸博士が書いている「詩の要約」「詩の記事」とは具体的には何を意味しているのか。林紓が詩（戯曲）と小説を区別して語句を書き分けているにもかかわらず、日本語訳がゆれている。瀬戸博士は自分で書きながら不審に思わなかった理由を自白している。「林紓が『吟辺燕語』の底本を記さなかったのも、ラムが『シェイクスピア物語』を書いたのは単なるシェイクスピア作品の圧縮にすぎず、両者の間には本質的な相違はないと考えたからであろう」（94頁）

林紓は戯曲と小説の区別がつかない、という先入観を持って林序を読むと上のような解釈と結果になる。事実は、瀬戸博士自身が区別をつけることができないのだ。

瀬戸博士は、林序を翻訳し次の部分を引く（71、94頁では同じ箇所を示して字句が異なる）。

「しかしながら私が聞いたところによれば、彼らの名士はシェイクスピア氏の詩を酷愛し、あらゆる家で愛唱されて終わることがない。そして劇界に与えて台本とし、男も女もそろって聴き、感激して涙を流すという」（90頁）

次のような解釈をする。

「ここに、林紓のシェイクスピア観が集中的に表現されている。林紓の認識では、シェイクスピア作品はまず詩として書かれ、それが広く愛唱されたため演劇の上演台本として用いられるようになったのである」（94頁）

ここに、瀬戸博士の無理解が集中的に表現されている。「詩」をあいまいにしたまま、「劇界に与えて台本とし」部分を「演劇の上演台本として」と考え、あたかもシェイクスピアその人の脚本になったように説明している。

この上演台本はシェイクスピア劇そのものではない。もとが伝聞である。イギリスの名も知れぬ好事家がシェイクスピア劇をとくに好みそれを家庭で朗読し、その後自分なりの脚本に書き換えて劇場にかけた、という意味でしかない。

「誤った通説」(93頁)だという。「林紘が戯曲を小説化して訳したという通説」は「錯覚であった」(100頁)、「従来通説は正しくなかった」(101頁)など。しかもその誤りの責任は林紘にあるという。「林紘は戯曲と小説の本質的な違いが理解できず、依拠した底本の著者を記さず、これが鄭振鐸らの誤解、錯覚を引き起こす直接の原因となった」(106頁)と決めつけるのだ。

鄭振鐸らは「誤解」「錯覚」にもとづいて林紘を批判したわけか。無責任である。文学革命派が全力をあげて林紘批判を展開した事実を知らないはずはないだろう。戯曲を小説化して漢訳したと濡れ衣を着せた加害者は、文学革命派だ。着せられた被害者は林紘である。瀬戸博士のいう「誤った通説」は、被害者の林紘に責任転嫁した文学革命派の立場からの書き方だ。

誤っているのだから林紘にとっては冤罪にほかならない。これが普通感覚だ。「樽本氏の「冤罪」説は出発から無理があるのである」(99頁)。意味不明。瀬戸博士は、加害者の劉半農、鄭振鐸らを擁護し、被害者の林紘を攻撃している。

以前、林紘のシェイクスピア理解について関西の研究会で発表するから出席するように言われたことがある。林序に出てくる語句について私は瀬戸博士に直接質問した。返答が意味不明で要領を得なかった。不思議に感じたのはそればかりではない。瀬戸博士の林紘についての説明は、従来言説をたどりつつ林紘批判をくり返すだけ。新しい発見がひとつもない。私を呼び出してまで発表する価値があるとは思えなかった。終了直前、多くの参加者によく聞こえるように普段よりも少し大きめの声で、当時の中国の知識人をバカにするのか、と丁寧にご忠告もうしあげた。瀬戸博士は沈黙したままだった。本書の該当部分を見て、私の忠告はなんの意味もなかったことがわかった。瀬戸博士はあの場で発したことばと同じく理解できない語句を林序に押しつけて平気である。自分の理解不足を林紘

に自己投影して批判しているのだ。

本書は、凝った装丁と読みやすい組版、厚めの本文用紙を使用した造本がすばらしい書物だ。科学研究費補助金を支給されながら索引を作成しなかったのは理由があるのだろうか（索引がないなら学術刊行物にあらずという婉曲表現W）。

なお、瀬戸博士は樽本と論争したと書く。私はまったく知らなかった。

評者からのお願いと展望。

瀬戸博士には従来通りの林紓批判を訂正することなく堂々と未永く継続してもらいたい。中国の学界は、日本人演劇研究専門家瀬戸博士の論文、特に林紓批判部分については絶賛し大歓迎するだろう。

漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序

——「区別がつかない論」再び

『清末小説から』第121-124号(2016.4.1-2017.1.1)に掲載。ラム『シェイクスピア物語』の漢訳は、1903年の漢訳者不詳『海外奇譚』と1904年の林紓+魏易訳『吟辺燕語』の2種類がある。莎劇(詩)をラム姉弟が散文で小説化したものだ。それぞれに序文がつけられている。序文の記述を解析することによって漢訳者が、莎劇を詩、ラム本を散文と認識しているかどうかを検討する。大方の論文で指摘されている、詩と小説の区別がついていない、という結論がくつがえる。樽本「阿英による林紓冤罪事件——『吟辺燕語』序をめぐる」(『林紓研究論集』2009所収)を深化させた論文である。

ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)は、英国の劇作家、詩人である。戯曲(脚本)は他人との合作を含めて40作、また「ヴィーナスとアドーニス」「ルークリースの凌辱」などの物語詩および154首からなる「ソネット集(十四行詩)」ほかが知られている。

1 劇作家と詩人に区別する

シェイクスピアを称して劇作家、詩人だというのは、一般の辞書、書物にも記載されているとおりだ。さらにいえば、俳優兼座付き作家、劇場の株主でもあった。名前だけは知らぬ者がいないほど有名な演劇人である。

注意点がひとつある。普通に劇作家と詩人を並べて書いている。戯曲を書いたから劇作家、「ソネット集」などの詩を作ったから詩人と区別しているように見

える。俗耳に入りやすいから容易に誤る。

現代の研究者黄焯結(2008)*¹は、シェイクスピアが劇作家(現代漢語でも同じ)であることを強調する。黄が先行文献からシェイクスピアの肩書き、あるいは呼称だけを抽出したその意図は、過去の中国人がシェイクスピアをどのように見ていたかを検証するためだ。

「英国の詩人(英国騷客)」「英国のもっとも名声のある詩人(英国最具声名之詞人)」「英国のもっとも著名な詩人(英国最著名之詩人)」「比類のない名優(絶世名優)」などと列挙する。

それらが多くは詩人と表示していることについて黄焯結は、シェイクスピアの「劇作家であるという身分については曖昧にしている」と不満を述べる。詩人ではなく劇作家と書くべきだ、と黄は主張する。

ここから、シェイクスピアを劇作家と詩人に区別する考えが、黄焯結の中で「常識」(以下において俗論と称する)として定着していることがわかる。あくまでも現代の知識にもとづいて言っているだけ。この点について疑問を感じていないらしい(後述)。

彭建華(2012)*²は、それと微妙に異なる。シェイクスピアの肩書きを抜き出すのは黄焯結と同じだ。しかし、言うことが黄とは反対なのだ。先行文献が「劇作家」という単語を使っていないにもかかわらず次のように結論する。「要するにシェイクスピアは主としてやはり劇作家と見なされており、詩人ではなかった(總言之, 莎士比亞, 主要還是被看作劇作家, 而不是詩人)」

そうならばシェイクスピアはなになのか。彭建華は続けていう。「シェイクスピアは英国の偉大な(詩体)劇作家および詩人であったが、林紓はシェイクスピアとその戯曲についての認識があやふやだった(莎士比亞是英国偉大的(詩体)劇作家和詩人, 但是林紓对莎士比亞及其戲劇的認識是模糊的)」

彭建華は、シェイクスピアについて劇作家と詩人にどうしても区別しなかった。原文のママとした「詩体」とは、詩の形式という意味だ。詩の形式をもった戯曲が詩であるとは考えないらしい。彼も現在の区別を過去の林紓に押し当てて「認識があやふやだった」と恣意的に非難している。

黄焯結と彭建華に代表させたが、研究者の多くにこの俗論 劇作家と詩人を

区別する、は深く広く普及している。あとで問題にする。

2 詩人と劇作家

現代では、詩人には英語のpoetを、劇作家にはplaywrightあるいはdramatistを当てるのが普通だ。playwrightは、作劇職人という意味であってplaywriterではない。

そもそもplaywrightとは、ベン・ジョンソン（Ben Jonson, 1572-1637）が1616年刊行の『^{エピグラムズ}警句詩集』において否定的に使用したという。ベン・ジョンソンはシェイクスピアと似た経験を持っている。彼自身は、詩人poetだと自任していたから、それから見れば作劇職人は格下という意識だった。1616年はシェイクスピアの没年に重なる。

ただし、O.E.D. 1989年版では、playwrightの初出は1687年である。そこにはベン・ジョンソンの名前はない。また、dramatistにしたところで、同じくO.E.D. 同版によれば、その初出は1678年となっている。いずれもシェイクスピアの死後だ。彼が生きた時代において劇作家は無縁のことばだった。

基礎となる知識を簡単に説明しておく。文字通り常識に属するものだが確認するために書く。

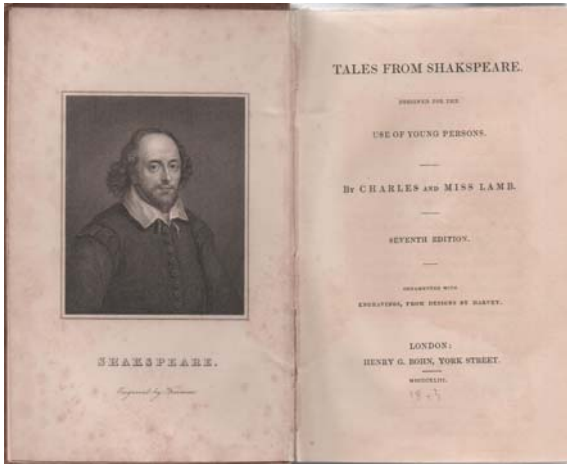
3 シェイクスピア（詩）とラム（散文）

大きくふたつに分かれる。詩verseと散文proseだ。

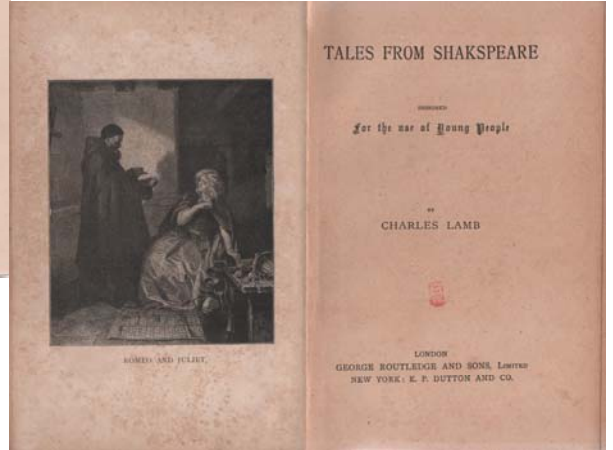
詩は韻文である。シェイクスピア劇（以後、莎劇と称する）は無韻詩blank verse（弱強五歩格。脚韻を踏まない韻文）で書かれているからこれも詩である。ゆえに莎劇は詩にほかならない。明確にするため必要な箇所では「莎劇（詩）」と表記する。

私は以前の論文*3で林紘が説明するシェイクスピアの「詩」は「戯曲」であると指摘した。今もその考えに変化はない。今回、表記に上のような工夫を加える。その方が実態をより反映しており理解しやすいと思うからだ。さらに、本稿にお

漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序



『シェイクスピア物語 Tales from Shakespeare』



いて、莎劇（詩）は印刷され書物となった脚本のことを指す。

シェイクスピアは詩人poetと呼ばれる。当然のことだ。ベン・ジョンソンが否定的に表現したplaywright（作劇職人）がシェイクスピアに適用されるはずもない。だからこそ、シェイクスピアを劇作家playwrightと表記するのは最初の否定的な意味を失った現代から見れば、という前提、注釈が必要になる。シェイクスピアの死後、彼の作品を改作、翻案する人がいたのも事実だ。名前も伝わっている。

無韻詩（韻文）で書かれた莎劇（詩）にもとづき、ラム姉弟は散文を用いて小説に書き直した。それが『シェイクスピア物語 Tales from Shakespeare』1807である*4。以下においてラム本とも書く。以上をまとめて表にする。印はその方向に変化したことを示す。

シェイクスピア	ラム姉弟
詩 verse、韻文	散文 prose
無韻詩 blank verse、戯曲	ラム本、小説

詩（戯曲）と散文（小説）が対立する。常識ではあるが、あらためてご留意いた

海外奇譚

第一章 蒲魯薩黃色背良朋

英國 索士比亞 著

萬倫貝邑諸生。家居斐律拉同邑。有蒲魯薩者。與萬交最厚。兩人志同道合。攻書一
 幽室中。朝夕相依。無少離。即課餘出遊。亦必攜手同行。未嘗一人獨往也。蒲生素愛
 好女名。周麗雅。居比鄰。蒲乘間輒往訪之。萬生心殊不悅。偶聚談時。蒲輒豔稱周女
 名。言津津有味。萬益厭聞之。嘗謂蒲曰。大丈夫。生世間。貴有磊落不羈氣。若甘作
 情慾奴。號為兒女。所戲弄。情長。短。吾死。不願為也。

一日萬倫貝東裝將遊美蘭。語諸蒲生。舊年知友。一旦別離。聞之。憂形於色。因以言
 尼其行。懇留甚切。不聽。謂曰。君何事。爾。爾。吾豈是。疑。情。兒。子。久。戀。家。鄉。樂。無。長。志。
 乎。上。各。有。志。何。容。相。強。君。之。不。能。動。吾。以。留。者。猶。吾。之。不。能。動。君。以。遊。也。倘。君。不。為。
 情。繫。想。必。與。吾。偕。行。一。觀。世。界。之。大。今。則。佳。人。在。蓮。君。身。非。君。有。矣。吾。亦。何。能。驅。策。

海外奇譚

英國索士比亞著

海外奇譚

達文社藏版

『海外奇譚 Tales From Shakspeare』

光緒三十年七月首版
光緒三十二年四月三版

翻印必究

原著者	英國 莎士比亞
繙譯者	閻 縣 林 紆
發行者	仁 和 魏 易
印刷所	中國商務印書館

上海路馬路北亞業會前西文員國隔號

上海棋盤街中市

總發行所 中國商務印書館

說部叢書 第一集 第八編

吟邊燕語

中國商務印書館印行

『英國詩人吟邊燕語』

だきたい。

4 漢訳ラム本など

1903年（刊年未確認）、訳者不記でラム本の漢訳が最初に出版された。つづいて1904年に林訳がでた。1903年刊行が正しいとして、時間差一年前後というのは、両書の出現はほとんど同時といってもいいだろう。

前者の漢訳は、英国索士比亞Shakspere著（蘭ト散文）訳者不記『瀕外奇譚 Tales From Shakspere』（10作所収。上海・達文社*⁵ [光緒二十九(1903)年十一月]手元の複写本には奥付なし、刊年不記）である。

ShakspereはShakespeareの間違いだといわれるかもしれない。だが、シェイクスピアの表記にはもともと複数が存在する。そう綴る英語書籍がある。誤りではない（後述）。

上で「蘭ト散文」と補充表記したのは、序文に「英国の学者ラムによって散文にされた（経英儒蘭ト行以散文）」と説明しているからだ。ただし、表紙、本文には「蘭ト」の表示はない。

後者の漢訳は、林紓+魏易共訳の英国莎士比著『英国詩人吟辺燕語』（全20作所収）だ。光緒三十年十月刊行のものが記録されるが未見。私が所蔵する版本には、上海・中国商務印書館 光緒三十（1904）年七月首版 / 三十二（1906）年四月三版説部叢書第一集第八編と印刷されている。

ふたつをまとめて漢訳ラム本2種と称する。

中国では、後者の林訳をめぐっておおよそ次のようなことがあった。

林訳は、シェイクスピアを莎士比と表記し、英語は示さない。ラムの名前もない。また林紓らは、ラム本を底本にしたことを説明しなかった。刊行から14年後の1918年、ここを文学革命派の劉半農らが見つかった。林訳に対して非難攻撃を展開したのは周知のとおりだ。彼は、「林氏は「詩」と「戯」のふたつを識別していない」と罵り、さらに重ねて「豆と麦の区別がつかない（不辨菽麦）」と書いて嘲笑した。私はそれを「区別がつかない論」と言っている。その直後に胡適は「戯曲」と「記叙体」に用語を修正して劉半農説を追認する（後述）。

1924年、鄭振鐸は林紘追悼の文章を発表した。鄭は、劉半農の林紘批判を継承する。その時、字句に細工をほどこした。理由を説明しないまま根拠となる翻訳作品を入れ替えたのである。『吟辺燕語』を取り下げ、そのかわりに別の林訳シェイクスピア作品とイブセン作品を掲げて同じように罵った。すなわち「小説」と「戯曲」の区別がつかない、である。鄭振鐸の細工は巧妙だった。誰も気づかなかった。私が鄭のことを「評論の魔術師」という理由だ。

まとめ。劉半農は「詩」と「戯」を対比させた。胡適は「戯曲」と「記叙体」に修正した。鄭振鐸は用語を変更して「小説」と「戯曲」を使用した。

用語は異なるが、彼らが林訳を非難攻撃する基本姿勢は同じだ。林紘たちが原作の戯曲を勝手に書き換えて小説に変身させたと責めたのである。戯曲と小説、文芸作品の種類について知識を持たない、無知である、区別がつかないという意味だ。

彼らが林紘に浴びせた嘲笑慢罵は、そのままどってきて劉半農、胡適および鄭振鐸自身を引き裂くことになるうとは想像もしなかつただろう（後述）。



作品集ではなくシェイクスピアの単独作品ならば、1903年に「ヴェニスの商人」が周桂笙によって漢訳されている。漢訳名は鍵語そのままの「一斤肉」だ。シェイクスピア名なし。大幅な削除がある。底本がラム本なのかどうかは不明*6。

1903、04年当時の中国人が、漢語の翻訳で実際に莎劇の舞台を見ていた、あるいは長詩をこれも翻訳で読んでいたかといえ、そういう事実はない。

例外はある。1902年に上海の学生が英語で「ヴェニスの商人」を上演したという*7。それを見るかぎり、上海における一

孔夫子旧書網より

部の大学生の範囲内にあったできごとだ。英語を理解する知識人たちのものだった。しかし、英語を理解しない一般の中国人とは無縁だ。莎劇は、それまでの中国では舞台にのぼったことがない、漢訳も存在していなかった。本稿はそういう時代の中国を対象にしている。

中国において公表された脚本形式での翻訳は、早いものでは、(英) 莎士比亞著、包天笑改編「女律師」4幕(『女学生』2期刊年不記/城東女学編印宣統3(1911))になるらしい。「ヴェニスの商人」だ。ただし、これは戯曲形式とはいえ、包天笑が『吟辺燕語』をもとにして脚本化したという*8。

莎劇(詩)そのものが漢訳される前に、中国人の間では、漢訳ラムの小説『吟辺燕語』が先行し、それに基づいて脚本が書かれ上演もされた。珍しい展開だ。

あるいは、1914年の亮楽月記「劊肉記(ヴェニスの商人)」があるという*9。

それらの作品のいくつかは、中国では長らく埋もれていて誰も注目しなかった。それ以前の1903、04年当時にあっては、シェイクスピアもラムの名前も一部の知識人だけが知っていたにすぎない。一般人にはほとんど無縁のシェイクスピアの名前と莎劇だった。そういうところに、漢訳ラム本が突然2種類も出現した。漢訳者が序文を書いて中国人に向かってなにをどう説明しているのか興味を感じる。

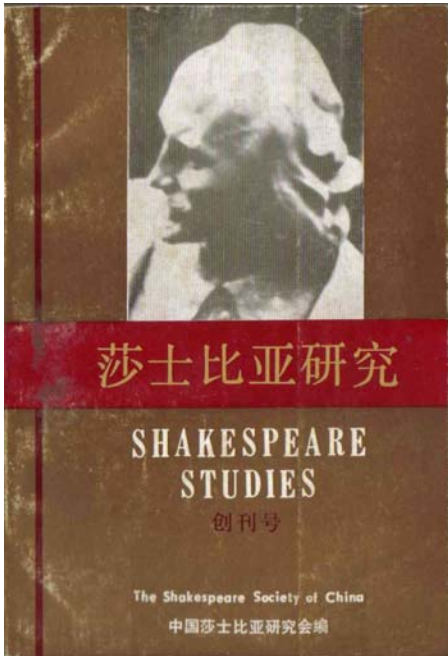
本稿の主目的は、漢訳ラム本2種の序文に出てくるシェイクスピアに関する単語について考えることだ。莎劇(詩)とラム本に関する漢訳者たちの認識がどうだったのかを確認するためである。区別しているのか。あわせて劉半農、胡適、鄭振鐸らの林訳批判、すなわち「区別がつかない論」を再度検討する。

5 シェイクスピア名の漢訳と肩書き

1903年以前の中国におけるシェイクスピアの受容状況について話題をふたつに絞って取り上げる。

シェイクスピアという名前の漢訳はどうなっているか。もうひとつは、肩書きがどう書かれているかだ。

戈宝権(1983)*10は、シェイクスピアが宣教師によって中国に紹介されたのは



1856年が最初だとする。

それに対して郝田虎(2010)*¹¹が、別の資料を提出しそれ以前に例があると指摘した。

それらの論文はそれぞれに意味がある。ただ、中国におけるシェイクスピア紹介に関して誰が最初だろうと、本稿とはそれほど関係がない。ラム本の漢訳者たちが、それらを読んでいるかどうか。シェイクスピア名の漢訳からして異なるところから、その可能性は低い。

戈宝権が取り出したシェイクスピアに冠された肩書きと名前の漢語表記を拾い出し

てみよう。説明、肩書きが付いているものはカッコでくくる。

[所著詩文,美善具尽]舌克斯畢(1856)、[英国騷客]沙斯皮耳(1882)、[英国一最著声称之詞人]篩斯比耳(1885)、[詞人]狹斯丕爾(1894)、[世称为詩中之王,亦為戲文中之大名家]莎基斯庇爾(1903)、[英国第一詩人]索士比爾(1903)、[最著名之詩人]夏克思苾爾(1904)、希哀苦皮阿(1904)、葉斯壁(1907)、沙克皮爾(1908)などだ。本稿で検討する漢訳ラム本2種の索士比亞、あるいは莎士比とは違っている。

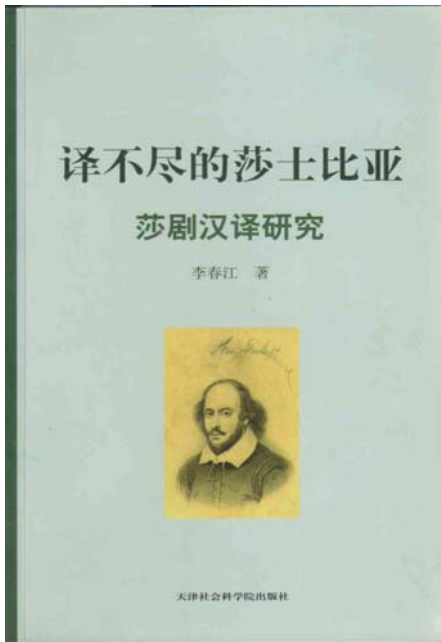
ただ、梁啓超(1902)*¹²が、[近世詩家]莎士比亞と表記したのがほぼ同じ。ほぼ、であって完全一致ではない。

郝田虎がつけ加えたのは、沙士比阿(林則徐『四洲志』1839-40)だ。

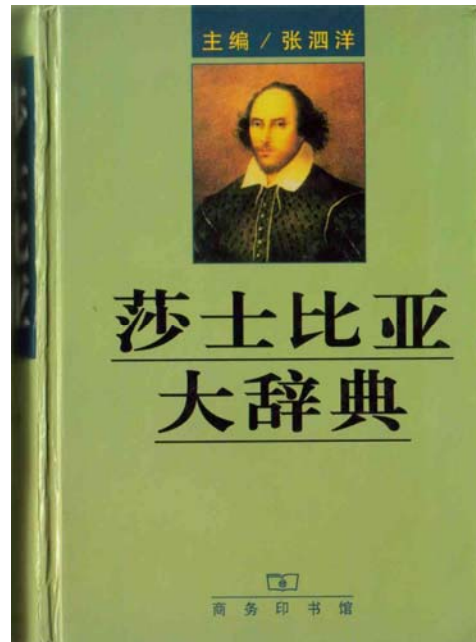
また、李春江(2010)*¹³が西洋の伝教士による漢訳を紹介するのは戈宝権と同じである。中国人の記述を抜き出して次のとおり。郭崇燾「舍色斯畢爾,為英国二百年前善譜齣者」、嚴復「詞人狹斯丕爾」(1894)など。

「善譜齣者」は戯曲を書くのがうまいと説明しているだけ。劇作家という単語は使われてはいない。「詞人」は詩人と重なる。

張泗洋(2001)*¹⁴は、[英国第一詩人]索士比爾(1903)、[英吉利国優人]索



李春江



張泗洋

士比爾（1903）、希哀苦皮阿（1904）などと紹介する。ここでも詩人であり俳優である。

あるいは、魯迅が「摩羅詩力説」（1908）^{*15}で狹斯丕爾と表記して厳復にならったといってもそれだけのこと。まず発表年が漢訳ラム本2種よりも遅れる。

私がふたつ追加する。

6 追加資料2件

ひとつは、蔣観雲「中国之演劇界」（『新民叢報』第3年第17号（原第65号）光緒三十一年二月十五日（1905.3.20））だ。

シェイクスピアを次のように紹介している。

今欧洲各国。最重沙翁之曲。至称惟神能造人心。惟沙翁能道人心。而沙翁著名之曲。皆悲劇也。11頁

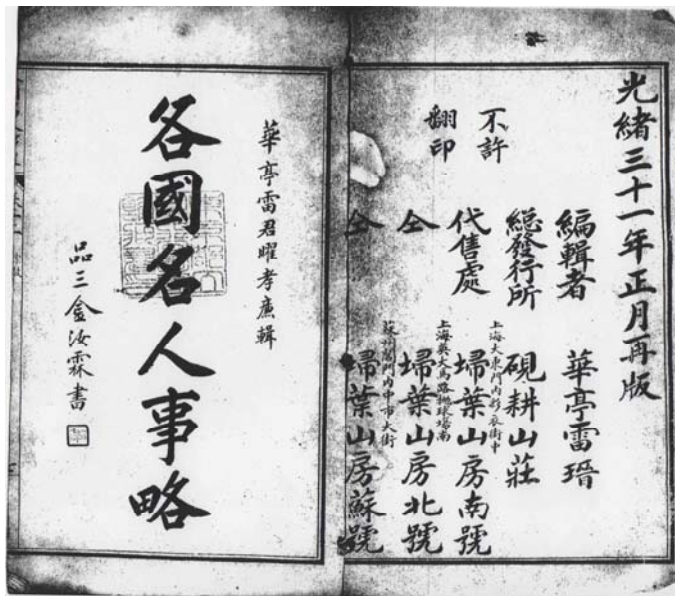
今ヨーロッパ各国では、沙翁の劇曲を最も重んじている。神だけが人心を作ることができ、沙翁だけが人心を述べることでできるとまで称されている。しかも沙翁の著名な劇曲はすべて悲劇なのである。

ここに見える沙翁とは、いうまでもなくシェイクスピアである。日本では1890年代からシェイクスピアを沙翁と呼びならわしていた。

それより前に、沙比阿翁原撰、坪内雄蔵訳『自由太刀餘波鋭鋒：該撒奇談』(東洋館書店1884.5)が刊行されている。それからの流れであっても不思議ではない。

蔣観雲がそれを知っていて沙翁とするのも自然なことだ。戯曲を「曲」で表示する。彼も劇作家という単語は使っていない。

もうひとつ加える。



華亭雷瑯編輯『各国名人事略』(硯耕山莊 光緒三十一(1905)年正月再版 石印本。扉に「華亭雷君曜孝廉輯」*16とある)にシェイクスピアを収録する。説明しながら内容を読む。

卷二十 藝術1才

脩苦吾匹亞 / 脩苦吾匹亞。為英國有名之作戲曲者。幼時在鄉里學校受教



育。移至倫敦而為俳優。年達三十時、受女王意色排拉之寵愛。奉其命而作戲曲。自其以莫司一世受劇場興行之免。許演其所作之黑莫西子篤之悲戲。時自上戲台而演怨靈。

「脩苦吾匹亜」は、ほかに見えない漢訳だ。シェイクスピアのことを「作戲曲者」、つまり戯曲を書く者だと説明している。ここでも劇作家ということばはない。また、生卒年には触れない。ロンドンに移り俳優をしていたのはそのとおり。ただ、30歳になった時エリザベス女王の寵愛を受けて戯曲を書くように命じられたというのは怪しい。そう紹介する文献があるのかもしれない。シェイクスピア

がロンドンについたのは20歳代の1580年代後半のころのことだった。すでに戯曲を書きはじめている。「其以莫司一世」は、エリザベス1世（意拉色排か）の後継者、ジェームズ1世を指す。ここらあたりは、拠る資料があるのだろう。

「黒莫西子篤之悲戲」の箇所ではしばし立ち止まる。悲劇というのだから「ハムレット」「オセロー」「リア王」「マクベス」あたりだと思う。だが、どれも「黒莫西子篤」には当てはまらない。「子」が息子だとしてハムレットを示すのだろうか。だが、ハムレットの毒殺された父の名前は、やはりハムレットなのだ。「黒莫西」は音訳するとハイモス、ハイモシ、ハイモヒくらいしか思いつかない。シェイクスピアの4大悲劇とは関係がなさそうに見える。

ところがそれにつづいて「時に自ら舞台にあがり怨霊を演じた」とある。「ハムレット」に違いない。その前に出てくる悲劇「黒莫西子篤」と関連しているから、それが書き誤りだと推測できる。思いつくのは「黒莫栗篤 Hamlet」だ。「西子」はあるいは漢語「栗子」からの連想で筆耕生が書き誤ったのだろう。す

ると名前の「脩苦吾匹亜」にみえる「吾」も間違いではないかを感じる。Shakespeareの「s」なら「士」「斯」「思」などが以前には使用されている。だが、「吾」では「s」とは読めない。「吾」は使用しなくてもよかった。疑問を出すだけでここではそのままにしておく。

7 詩人シェイクスピア

漢訳ラム本2種が出てくる前後の中国において、シェイクスピアについての知識といえば、あるといってもそれくらいのものであった。短文ながら簡潔に説明していると思う。ただし、せっかく「ハムレット」を出しながら誤記する。これでは理解しろというほうが無理だ。知っている人だけが了解する。

肩書きの表記はどうなっているか。

前述のように黄焯結は、シェイクスピアの肩書きを表わす劇作家という単語が使用されていないことを指摘し、それが不適切だと批判した。

「英国騷客」「英国一最著声称之詞人」「詞人」「世称詩中之王」「英国第一詩人」「最著名之詩人」「近世詩家」などはまとめていえば詩人である。劇作家という単語は、事実としてどこにもないのだ。前出1903年の莎基斯庇爾を説明した「世称为詩中之王」が詩を、「亦為戲文中之大名家」の「戲文」が戯曲（脚本）を指すだろう。だがやはり劇作家は使用していない。ただ、詩と戯曲に分けてはいる。

参考資料のひとつとして英漢辞典の記述を示す。『商務書館華英字典』（1902）から、関連語彙を拾った。

Poet 詩人，詩翁，騷人，詩字^マ[家]。

Play to act a play 演劇

Playwright なし

Drama 戯曲、戲調、梨園之戲。

Dramatist 造戲本之人。

「Dramatist 造戯本之人」は「芝居の脚本を書く人」だ。説明である。上述『各国名人事略』にも「作戯曲者」と記述していた。これらを見れば、当時の中国には劇作家という漢語がまだ成立していなかった、あるいは少なくとも定着していなかったことがわかる。

シェイクスピアを表現する漢語は「詞人」「詩人」「詩翁」「騷人」「詩家」などしかなかった。というよりも、莎劇はもともと詩なのだから、その作者を称して詩人を当てるのはまことに適切である。

黄焯結が単語の劇作家を使用するように強要するのは、中国の研究者が現代の俗論にとらわれている状況を明らかにする。現代で使う語彙を過去に持ち込み、それが無いといって批判するのは論理が逆転している。過去の用例を把握して当時の状況を考えるべきだった。

漢訳ラム本2種は、それ以前の文献とは関係が薄い。となれば、漢訳者にとってシェイクスピアを理解するためには、ラムの序文が重要な意味をもっていたはずだ。いうまでもなく、それ以外の英語文献による知識もあっただろう。英語を理解する人たちが漢訳に従事している。

8 ラム序文

ラム序文は、漢訳ラム本2種には収録されていない。なぜか。その内容が当時の中国人読者には向かないと判断されたためだろう。

収録されていないのだから、漢訳ラム本2種とは直接の関係はないのか。いや、そうではない。ラム序文について理解しておくことは必要だ。なぜなら、漢訳者はラム序文を知っており、自分たちの序にそれを反映させているからだ。

ラム序文は、シェイクスピアの生涯については説明していない。シェイクスピアの原文、つまり莎劇(詩)を直接読むよう若い読者に勧めるのがその主眼である。

ラムは序文の冒頭に、自分の作品を「この物語」と明記している。すなわち、Talesであり、それはprose散文である。シェイクスピアのPlays戯曲すなわちblank verse無韻詩を物語に書き直したラムの目的は、シェイクスピア研究の手引

き、入門にするためだと限定している。莎劇（詩）を理解するための入門書となるようにわかりやすい物語に書きあらためた。およその筋をあらかじめ知っておけば、成長して本物のシェイクスピア劇を読んだとき、そのなかにラム本では省略された、より複雑で豊富な内容を理解することができる。

ラム本は児童書に分類される。中国では奇妙な批判があったのも事実だ。林紓らは中国の成人にむけて西洋の児童書を漢訳した、と。

ラムは、莎劇（詩）と物語（散文）を厳密に区別している。わざわざ書くこともない（参考までに単語の対照表を掲げた）。

表：ラム本の序文THE AUTHOR'S PREFACEと日本語訳、漢訳の対照

	1	2	3	4	5
the following Tales	此物語集	次の物語	この物語	這些故事	這些故事
Tragedies	悲劇	悲劇	悲劇	悲劇	悲劇
Shakspare's own words	原文の言葉	シェイクスピア自身の言葉	シェイクスピア自身の言葉	莎士比亞自己的語言	莎士比亞的語言
Comedies	喜劇	喜劇	喜劇	喜劇	喜劇
the dramatic form of writing	戯曲の書振り	戯曲の文体	劇の書き方	戲劇形式	戲劇形式
prose	散文	散文	散文	散文	散文
blank verse	×	無韻詩(ブランク・ヴァース)	無韻詩	自由詩体	自由詩体
wild poetic garden	玉のやうな名作	手入れしない詩の花園	自然のままの詩の花園	充滿詩意的花園	生意盎然的花園
the originals	原本	原本	原作	×	原著
these imperfect abridgments	梗概を綴つた此筋書	此の不完全な短縮された物語	この不完全な短く纏めた物語	×	不完美的縮写本
the Plays at full length	原本	戯曲	シェイクスピアの原作	×	莎士比亞原著
the true Plays of Shakespeare	沙翁の戯曲	シェイクスピアの眞実の戯曲	シェイクスピアの本当の劇	莎士比亞原来的戲劇	莎士比亞的戲劇

- 1 チャールス、ラム著、小松武治訳『沙翁物語集』日高有倫堂 1904.6.12 / 1906.2.5訂正六版
- 2 チャールズ・ラム、メアリ・ラム著、野上彌生子訳『沙翁物語』岩波文庫 1932.6.1 / 1952.4.20十八刷
- 3 チャールズ・ラム、メアリ・ラム著、村岡勇訳『シェイクスピア物語』角川文庫 1952.7.30 / 1966.8.30二十四版
- 4 查爾斯・蘭姆、瑪麗・蘭姆改写、蕭乾訳『莎士比亞戲劇故事集』蕭乾訳策全集 西安・太白文藝出版社2005.1。部分的に省略がある。北京・中国青年出版社1956.9 / 1983.4北京第六次印刷も同じ

- 5 查爾斯・蘭姆、瑪麗・蘭姆改寫、傅光明訳『莎士比亞戲劇故事集』台湾商務印書館股份有限公司2013.4

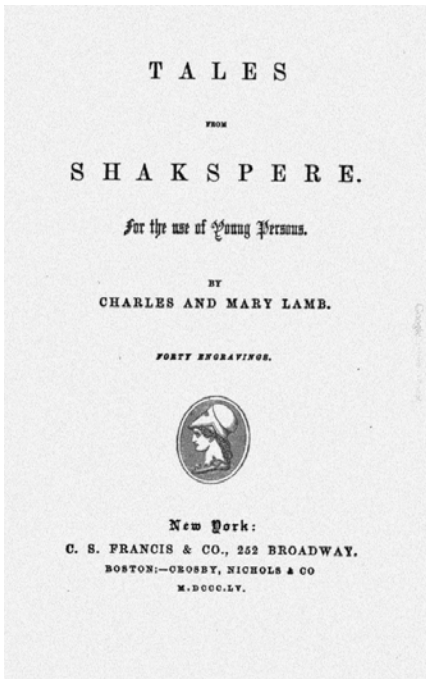
前述のように、漢訳本は2種ともにラム序文は収録していない。そのかわりに漢訳者の序がある。

莎劇は無韻詩で書かれた芝居の脚本である。それをラムが小説にした。漢訳者たちは、この事実を認識していたのだろうか。これが注目点である。中国ではこの点をあいまいにしたまま研究者たちは序を読んでいる。読んでいるというよりも、自分に都合のよいように恣意的に解釈する。研究者が各自で読み検討するまえに、立論の前提として戯曲と小説の「区別がつかない論」が存在している。それが一般化しているように思う。

「解外奇譚叙例」から検討する。「叙例」と称する。

9 『解外奇譚』のばあい

最初に言うておく。「解外奇譚叙例」に見えるShakspereは、Shakespeareを間



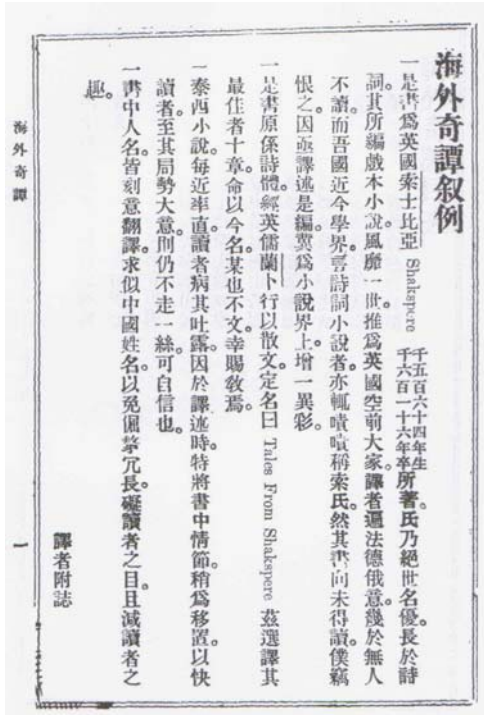
違えたものではない。そう綴る英語書籍が実在する。ところが、宋莉華(2015)*17は自著284頁注1においてわざわざ次のように説明する。

「訳者は“Shakespeare”を誤って“Shakspere”とし、訳者が英語をいくらか知っている新式の文人であることを示している(訳者将一个粗通英文的新式文人)」。宋莉華の知識不足からくる誤りだ。『解外奇譚』の漢訳者を貶めている。自分の無知を中国の知識人に投影する研究者のひとりだった。

もうひとつ例をあげる。陳歷明(2016)*18も「叙例」を引用して「是書英国莎士比亞(Shakespeare, ママ

千五百六十四年生、千五百一十六年卒)所著」と誤る。陳歴明も原文が間違っていると考えている。だから勝手に書き換える。引用としては正しくない。

箇条書きになっている「叙例」4条の順番を入れ替え重要な部分から始める。原文を引用し解説する。



一是書原係詩體。經英儒蘭士比亞 Shakespeare 千五百六十四年生所著。氏乃絕世名優。長於詩詞。其所編戲木小說。風靡一世。推為英國空前大家。譯者邇法德俄意。幾於無人。不讀。而吾國近今學界。喜詩詞小說者。亦輒嘖嘖稱羨。然其書向未得讀。僕竊恨之。因亟譯述。是編。實為小說界上。增一異彩。

一 是書原係詩體。經英儒蘭士比亞 Shakespeare 千五百六十四年生所著。氏乃絕世名優。長於詩詞。其所編戲木小說。風靡一世。推為英國空前大家。譯者邇法德俄意。幾於無人。不讀。而吾國近今學界。喜詩詞小說者。亦輒嘖嘖稱羨。然其書向未得讀。僕竊恨之。因亟譯述。是編。實為小說界上。增一異彩。

「一」は見出し。
「是書」すなわち本書とは何を指しているのか。『海外奇譚』にきまっている。「叙例」なのだから説明は不要だ。これを最初に把握しておけば、

「叙例」の別の箇所も無理なく理解できる。

「是書(本書)」はもとが「詩体」すなわち詩の体裁である。詩の形式で書かれているのは莎劇だ。もとづいたのが莎劇(詩)であって「是書(本書)」は詩の形式ではないから小説である。

つづく説明が決め手になる。「英国の学者ラムによって散文にされ、書名をつけてTales From Shakspeareという」

「是書(本書)」は、ラムの『シェイクスピア物語』を指す。「叙例」だから底本について説明している。「今の書名」が『海外奇譚』である。

「叙例」そのものが漢訳ラム本についての説明であると知るべきだ。しかも、ラム本が小説であり、もとになった莎劇は詩であると漢訳者は両者を区別し明確

に理解している。

莎劇（詩）をもとにしてラムが改編（散文）しさらにそれを漢訳した。この一連の流れを説明したのがこの文章だ。当たり前のことが書いてあり疑問が生じる余地はない。

漢訳の底本がラム本、しかも英語書名を明記しているのは、当時の翻訳書としては珍しい。中国では底本に言及しない例が多いからそう思う。

シェイクスピアにはShakspereという綴りがあることはすでに述べた。

のちの研究者、たとえば前出の戈宝権は「叙例」を部分引用したとき、原文通りの英語綴りではなくShakespeareに直している（334頁）。誤植だと考えるらしい。断わりなく書き換えてしまっただけは、かえって不正確になることに気づいていない。

あるいは、『中国近代文学大系』第11集第28巻翻訳文学集三（上海書店1991.4. 317頁）に収録した「海外奇譚」の「叙例」全文も該当する2カ所を無断で書き直している。注をほどこすべき箇所だ。

誤りは中国の学界で蔓延している。ほかの研究者が間違っただけで引用する例が続出する。孫引きですませるらしい。

瀬戸宏（2016）^{*19}は、該書を中国北京・国家図書館所蔵本で見たという。だが、該当部分を引用して「Tale From Shakespere」(83頁)と誤る。

確認する。漢訳者は上で「詩」と「散文」を対比させる。正しく把握している。これを何度も書くのは、この部分を見逃すと別の箇所の解釈を誤るからだ。

多くの研究者が、この重要な1条があることに言及しない。この部分を引用する論文は少ない。奇妙なことだと思う。無視しているのではなく、その存在を知らないのかといふがる。

この核心部分があることを知らない研究者は、「叙例」の説明を誤って解釈することになった。これから紹介する論文はほとんどがその要点をつかみそこなっているといわざるをえない。

10 ラム本とシェイクスピア

まず理解する必要があるのは、「叙例」全体がラム本について説明しているこ

とだ。ラム本との関係で副次的にシェイクスピアを紹介する。これが基本である。多くの研究者が引用するのは、次に引用する1条だ。これしかない、といった趣がある。

一是書為英国索士比亞 Shakspere 千五百六十四年生
千六百一十六年卒 所著。氏乃絶世名優。長於詩詞。其所編戲本小説。風靡一世。推為英国空前大家。訳者遍法徳俄意。幾於無人不読。而吾国近今学界。言詩詞小説者。亦輒嘖嘖称索氏。然其書向未得読。僕竊恨之。因亟訳述是編。冀為小説界上。増一異彩。

先に指摘しておく。鍵語は文中に見える「戯本小説」と「詩詞小説」だ。両者に「小説」がついているところに注目されたい。シェイクスピアが書いた小説は存在しない。書いたことがないからだ。しかもシェイクスピアのばあい「戯本」と「詩詞」は同じものだ。それらと「小説」を分離することはできない。「戯本小説」は戯曲小説だし、「詩詞小説」は莎劇（詩）小説だ。必然的に同一である。『シェイクスピア物語』にほかならない。ここを理解しない研究論文の多いことが、私を驚かせる。

冒頭の「本書は英国のシェイクスピアShakspere 1564年生 / 1616年卒 が書いたものだ」に注目する（原文の割注は開いた）。留意してほしい。この部分には説明、あるいは補足が不可欠だ。訳者は前述のとおり、莎劇（詩）をラムが散文化したと書いて基本を理解している。

「叙例」の前提を忘れる、あるいは知らずに、さらには悪意をもってラム本（是書）はシェイクスピアが書いたと読む人がいる。それは違う。ラム本の底本は、シェイクスピア原著である。そのことを述べている。

「本書（『海外奇譚』＝ラム『シェイクスピア物語』）はもとをたどるとシェイクスピアが書いたものだ」

ラムの名前を省いただけ。ここを読み誤ると、奇妙な解釈が生じる。あとでいくつかの英訳をあげて述べる。

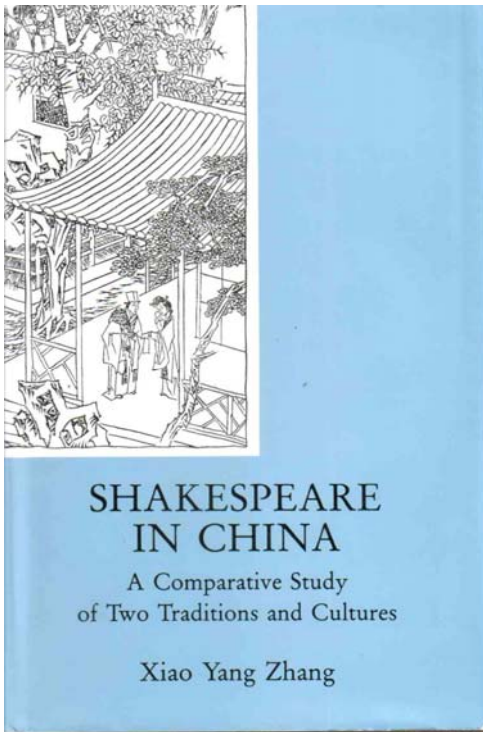
シェイクスピアの生卒年を注記しているのは、漢訳者が別の資料で見たのだろう。数字は正確である。シェイクスピアが俳優であったことは事実だ。詩詞、す

なわち莎劇(詩)=脚本を書くことに優れている、もよい。

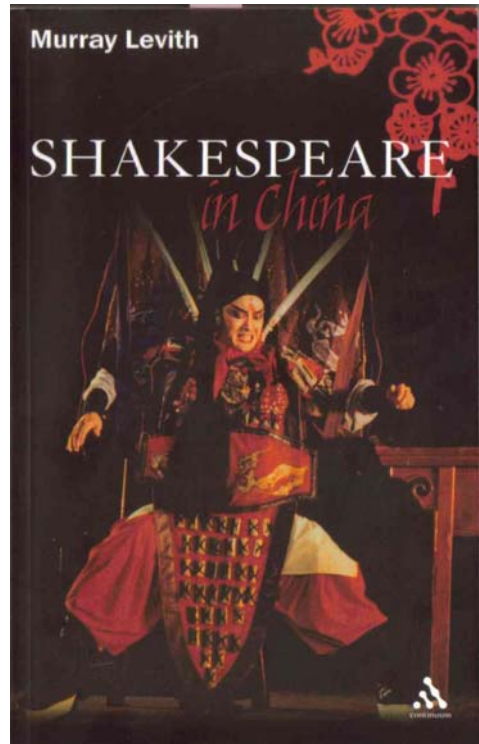
ラムが莎劇(詩)にもとづき改編した『シェイクスピア物語』、すなわち「戯本小説」が一世を風靡し、英国では空前の大家となった。翻訳は世界各国にあり、読まない人はほとんどいなかった。そうつづく文章だ。

11 訳例いくつか 「戯本小説」

中国の研究者は、原文のままを引いて示すだけのことが多い。基本的には現代漢語に翻訳しない。理解しているかどうかはわからない。しかし、英語論文では、それを翻訳して各人の理解度を示している。



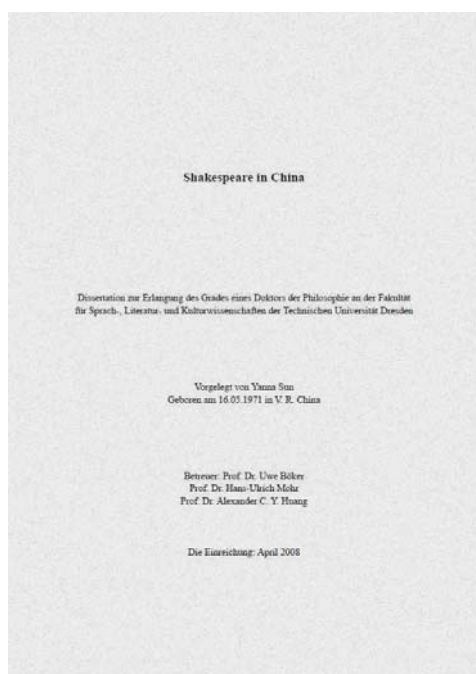
張曉陽XIAO YANG ZHANG



MURRAY J. LEVITH

主として3論文を紹介する。

張曉陽XIAO YANG ZHANG (1996)*²⁰、レヴィスMURRAY J. LEVITH (2006)*²¹



YANNA SUN

の英語著作、およびサンYANNA SUN (2008)*²² の英語論文である。それらの関連部分を適宜引用する。まとめて英訳しているから主としてここであつかう。部分的に訳している別の文章はそのつど示す。

【張曉陽】The book was written by the English writer Shakespeare. Shakespeare was an unrivaled dramatist in the world. He was good at writing poetry. His dramatic stories are very popular and he has been regarded as the world's greatest English writer.

本書は英国人作家シェイクスピアによって書かれた。シェイクスピアは世界で比類のない劇作家であった。彼は詩を書くのが得意だった。彼の劇的な物語はとても人気があり、彼は世界で最も偉大な英国作家だと見なされた。

「The book本書」とは、説明したとおりラム本を指す。ところが、張曉陽はそれがシェイクスピアによって書かれたとする。ここは注釈が必要であることはすでに述べた。だが、張曉陽はこの段落全体がシェイクスピアと彼の作品について述べたものだとして誤って理解している。彼の把握は大丈夫ではなさそうだ。

張曉陽は原文にある割り注「1564年生 / 1616年卒」を省略した。その理由は不明。

原文の「名優」はすぐれた俳優、役者だ。しかし、張曉陽の手にかかるとなぜか「dramatist 劇作家」になっている。張曉陽の判断は奇妙である。

原文の「戯本小説」を「dramatic stories 劇的な物語」と英訳した箇所を見る。「彼の」と修飾語をつけて「劇的な物語」だ。シェイクスピアが書いたと張曉

陽は考えている。シェイクスピア作「劇的な物語」とは何か。意味がわからない。戯曲と物語では基本的な部分で異なる。漢語原文とは離れてしまった。

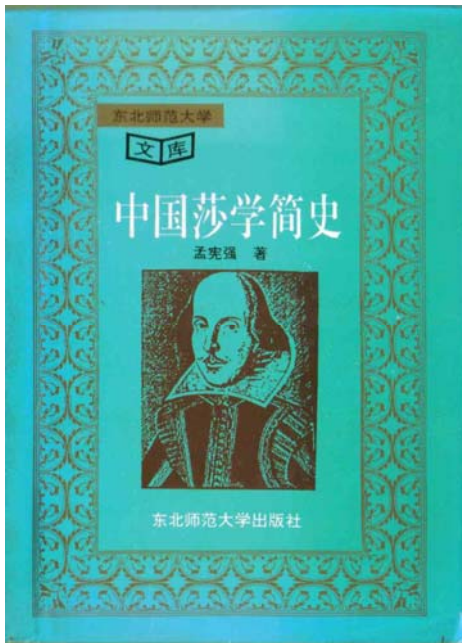
「叙例」がラム本についての説明であり、「戯本小説」がそれを指すことを理解していない。「叙例」の全体を見ていないのだろうかといぶかる。張曉陽にして理解度はその程度のものらしい。

時間的に遅れて出現した研究書も似たようなものになっている。

【レヴィス】He was a world-renowned actor, an accomplished poet, an extraordinarily popular playwright, and is considered a literary giant in England.

彼（シェイクスピア）は世界的に有名な俳優、熟達した詩人、特別に人気のある劇作家であって、英国において文豪だと考えられている。

レヴィスが利用した孟憲強（1994）*23は「叙例」を引用するが原文の一部分だけである。4条あるうちの最初の1条のみだ。ラム本を紹介した部分は引いていない。ほかの研究者と同じ。だから、レヴィスは何の予備知識も手がかりもなく冒頭の1条を翻訳することになった。それが躓く原因だ。



孟憲強

まず、レヴィスは孟憲強が示している冒頭の「是書為英国索士比亚（Shakespeare，千五百六十四年生，千六百一十六年卒）所著」という1文を無視した。シェイクスピアがラム本を書いたように読める。話がややこしくなると考えたからだろう。「其所編戯本小説」も省いた。それこそが重要な記述であるという認識がなかった。

レヴィスにとって理解できない箇所は英訳しない方針らしい。自分が分かるように英訳したから、すっきりとまとまった。

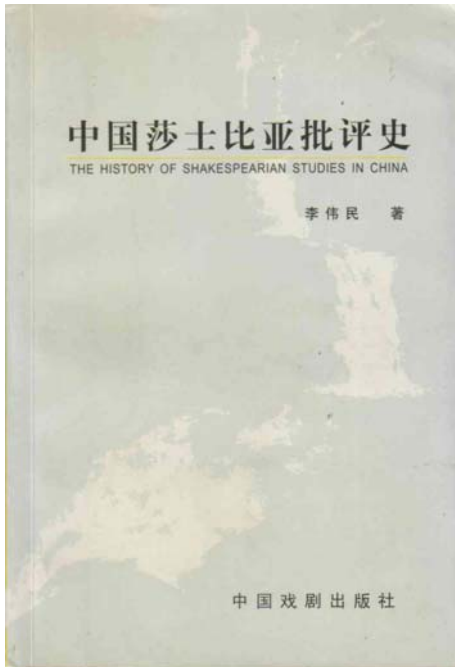
だが、原文に忠実ではない。なによりも、「叙例」がラム本についての説明であることを把握していない。

サンはどうか。

【サン】 The book was written by the Englishman Shakespeare (1656^マ1616). He was extraordinarily good at poetry. His dramas became terribly fashionable and he was regarded as the greatest writer in England.

本書は英国人シェイクスピア（1656^マ-1616）によって書かれた。彼は詩において特別にすばらしかった。彼の戯曲はとても流行し彼は英国最大の作家だと見なされた。

サンは李偉民（2006）^{*24}の文章から引用する。レヴィスと同じ箇所だ。ただし、



李偉民

李偉民は戈宝権から引用したと明記しているから曾孫引きになる。

シェイクスピアの生年である1564年を1656年と誤っているのは、基づいた李偉民の孫引きが「千五百六^マ年生」と誤植しているのを正したつもりらしい。それにしても没年よりも新しい生年になっていることをサンの指導教授たちは読んで指導しなかったのだろうか。

冒頭のThe bookについて理解が不足している。文章の表面をなぞって、ラム本がシェイクスピアによって書かれたことにした。注釈を加えなければならなかった箇所だ。

原文の「氏乃絶世名優」を省略した。「長於詩詞」を「詩において特別にすばらしかった」と英訳したが、「其所編戯本小説」の「戯本小説」を「彼の戯曲」だと

強引に解釈した。該文で「戯本」と「小説」は分離不可能だ。それをサンは片方の戯曲だけを採用し小説を捨てた。恣意的な読み方だ。原文の意味を理解していない。

「叙例」がラム本についての説明であることを見失っている。というよりも、冒頭でシェイクスピアの原作にしてしまったから、どうしても戯曲にせざるをえない。そこで「小説」をないことにした。思い込みである。その結果「戯本小説」がラム本を指すことに気づかなかった。

問題は、結局のところ「叙例」に出てくる「其所編戯本小説」にいきつく。張曉陽はシェイクスピア作「劇的な物語」にして意味不明。レヴィスはシェイクスピアの作品に、サンも戯曲にした。三人とも原文の「小説」を握りつぶした。

「戯本小説」をふたつに分離させることはできない。事実として、シェイクスピアは戯曲を書いたが、小説は書いてはいないとくり返す。小説に書き換えたのはラムだ。

「其所編戯本小説」が意味するのは、「ラムが莎劇（詩）にもとづき改編した『シェイクスピア物語』」である。ラム本が一世を風靡し、それにともない原作者のシェイクスピアは英国空前の大家になった、有名になったというわけ。ラム本は、フランス、ドイツ、ロシア、イタリアで翻訳された。

張曉陽はそこをどう訳したか。

【張曉陽】 His works have been translated into many languages such as French, German, Russian, and Italian, and have been well received by numerous readers.

彼（シェイクスピア）の作品は多くの言語、たとえばフランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語に翻訳され、多くの読者に受け入れられた。

張曉陽は、「戯本小説」を「dramatic stories 劇的な物語」に解釈したことは述べた。これがラム本であることに気づかない。そこで「His works彼の作品」、すなわち莎劇（詩）が翻訳されて広まったと理解した。誤りだ。

レヴィスはそこをどう訳したか。

【レヴィス】 His works have been translated into French, German, Russian, and Italian, and are read by almost everyone.

彼（シェイクスピア）の作品はフランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語に翻訳され、ほとんどの人々に読まれた。

レヴィスは「其所編戯本小説。風靡一世」の「其所編戯本小説」を省略した。肝心の「戯本小説」を無視し、一世を風靡したのは莎劇（詩）だと考えた。張曉陽と同じだ。主語をどうしても莎劇（詩）にしなければ気がすまない。

【サン】 Shakespeare's works were welcomed by the reader in France, Germany, Russia and Italy.

シェイクスピアの作品は、フランス、ドイツ、ロシア、イタリアの読者によって歓迎された。

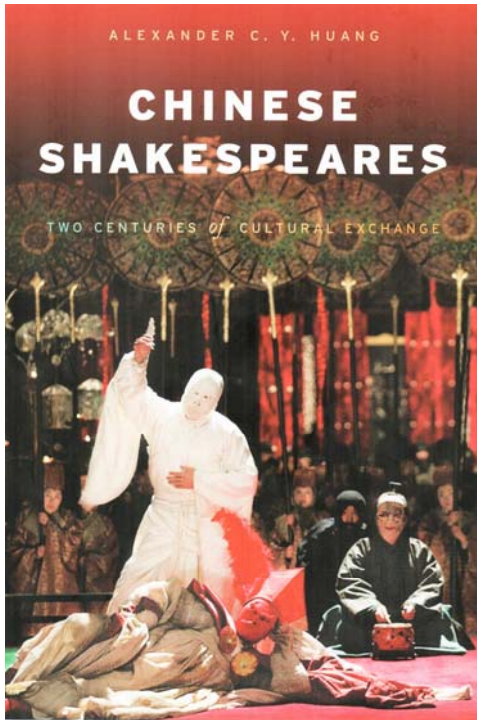
サンも「戯本小説」を莎劇（詩）だと断定した。サンにしてみれば文章の流れとしてはそうせざるを得ない。

ファングALEXANDER C. Y. HUANG (2009)*²⁵は「叙例」の一部を、しかも別の場所に分けて引用している。「/」を使用し連結してここに示す。

【ファング】 Shakespeare is the finest poet in the world. His plays and fiction sweep the world like wind and are immensely popular. / Shakespeare's works have been available in French, German, Russian, and Italian.

シェイクスピアは世界で最高の詩人だ。彼の芝居と小説は風のように世界に吹き渡り、非常に人気がある。/シェイクスピアの作品は、フランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語で入手が可能だ。

ファングの英訳は、原文の「長於詩詞。其所編戯本小説。風靡一世。推為英国空前大家。訳者遍法徳俄意。幾於無人不読」あたりに基づき、分けて英訳したら



ALEXANDER C. Y. HUANG

しい。逐語訳ではないからそう推測する。

問題はやはり「戯本小説」になる。

「plays and fiction芝居と小説」にしてしまった。「芝居」はいい。シェイクスピアの「小説」とは何だろうか。ありえない。それとも、漢訳者の無知にするつもりか。そうならば説明する必要がある。だが、その説明はない。『瀕外奇譚』がラム本の漢訳であることを忘れている。「戯本小説」はラムの『シェイクスピア物語』なのだ。

「戯本小説」という単語を見ると研究者は、反射的に鄭振鐸のいう「林紓は小説と戯曲の区別がつかない」を思い出すようだ。

葉庄新(2007)*26は、「たとえば『瀕外奇譚』の作者は莎劇を“戯本小説”と称した」(209頁)と説明する。莎劇が戯曲であるにもかかわらず小説にしてしまった、という意味だ。「戯本小説」が『シェイクスピア物語』であることを理解していない。

瀬戸博士も同じ誤りを犯している。

【瀬戸博士】氏は絶世の名優であり、詩詞に長じていた。その編んだ戯曲小説は一世を風靡し、英国空前の大家とされた。96頁

ここを説明して「シェイクスピアが絶世の名優であったかは異論があろうし、シェイクスピアが小説を書いたというのも誤解である」と書く。「叙例」がラム『シェイクスピア物語』について説明していることを考慮しない。だからここに出てきた「戯曲小説」をシェイクスピアの「小説」だと誤解して恥じるところがない。瀬戸博士は自らの無知を「叙例」の執筆者に押しつけて間違っている。

12 「詩詞小説」の解釈

つづいて「叙例」の話題は、当時の中国学術教育界になる。
再度示す。

而吾国近今学界。言詩詞小説者。亦輒嘖嘖称索氏。然其書向未得讀。僕竊恨之。因亟訳述是編。冀為小説界上。増一異彩。

わが国の現代学術教育界において「詩詞小説」を話題にするものは、シェイクスピア氏をしきりに称賛する。だが、その書はいまだに読むことができない。そこで急いで本書を訳述した。小説界で異彩を放つことを願う。

「詩詞小説」を原文のままにしたのは、理解の分岐点になるからだ。

ここでも重点は小説にある。前の「戯本小説」をここでは「詩詞小説」に置き換えた。「戯本」と「詩詞」はシェイクスピアについていえば同じものだ。「莎劇（詩）にもとづいた小説」だからラム本、すなわち『シェイクスピア物語』を指す。「莎劇小説」あるいは「莎詩紀事」としてもいい。ラム本を話題にして、その原著者シェイクスピアを褒め称える。

話題にしているラム本とは英語原文だ。当時、英語を理解する一部の中国人がラム本にもとづいてシェイクスピアを称賛した。普通にありそうなことだし、事実そうだった。英語のラム本が中国でも知識人に読まれていたとわかる。

「だが、その書はいまだに読むことができない」の「その書（其書）」とは何か。莎劇（詩）ではない。なぜなら、読むことができないから漢訳して出てきたのは底本がラム本なのだ。一般人が読むことができない英文ラム本を漢訳したから「小説界で異彩を放つことを願う」。主体はあくまでも小説のラム本である。「叙例」は小説を基本に置いた筋の通った説明になっている。

張曉陽は、この箇所どのように解釈しているのだろうか。「叙例」がラム本についての解説であることを思い出すだろうか。

【張曉陽】As for the academic and literary circles in our country, there are also many poetic and fictional critics who highly praise Shakespeare. But it is a pity that we have not read his works before now.

わが国の学術文学界については、シェイクスピアを称賛する多くの詩と小説の評論家もいる。しかし、残念ながら我々はいままで彼の作品を読んではいない。

「言詩詞小説者」を「詩のpoetic」と「小説のfictional」に分離し評論家に解釈した。張曉陽は、これが鍵語であることに気づいていない。「戯本小説」と「詩詞小説」は同じくラム本を意味しているのだ。要点を把握していないから、全体を莎劇（詩）についての説明にしてしまった。

「彼の作品を読んではいない」の主語を「我々we」にしたのはやりすぎ。「叙例」を書いた漢訳者もその仲間に入れてしまった。ラム本も出てこない。奇妙だろう。漢訳者も含めて当時の中国の知識人はシェイクスピア作品をひとつも読まず、ただシェイクスピアの名前だけをかかげて称賛していることになる。張曉陽は、中国の知識人をそれほど貶めている。

レヴィスはどうか。

【レヴィス】Our own contemporary literati who specialize in writing verse and fiction have also joined the chorus in his praise *without even having had the opportunity to read his work* [italics mine!].

詩と小説を書くことを専門にしている現在の文学者は、彼（シェイクスピア）の作品を読む機会すら持つことなく彼を称賛する合唱に参加してもいる。（注：イタリック体はレヴィス。日訳ではゴチック体にした）

原語の「言詩詞小説者」を「詩詞verse」と「小説fiction」に分離し「言」を実作するに解釈した。この英訳文も理解しがたい。

レヴィスの訳文にもラム本が出てこないから問題が発生する。ラム本も読まず、莎劇（詩）も知らない中国の知識人がシェイクスピアを賛美した。張曉陽と同じ

だ。何も読まずに称賛するということに奇妙さを感じたのだろう。だからこそレヴィスはイタリック体を使用して自分の驚きを強調した。

くり返すが、それでは中国の知識人はシェイクスピアの名前を聞きかじっただけで彼のことを称賛したことになる。ありえないと思う。話題にするからには何かを読んでいると考えるのが普通ではないか。レヴィスは漢訳「叙例」に書いてあるラム本（戯本小説、詩詞小説）の存在を無視している。自分が理解していないにもかかわらず、当時の中国の知識人をひどく侮り貶めている。私はここにも強い違和感を抱く。

サンはどうか。

【サン】 In contrast to the situation in European countries, none of the Chinese people has ever really read his works, although later on, in particular the intellectual classes sang high praise of Shakespeare when talking about poetry and novels.

ヨーロッパ各国の状況とは対照的に中国人はだれも彼の作品を本当に読んだことがなかった。しかし、のちに特別な知識階層において詩と小説について話すときシェイクスピアを絶賛した。

サンも原文の「言詩詞小説者」を「詩詞verse」と「小説fiction」に分離した。莎劇（詩）はいざ知らず、ラム本も読まずにシェイクスピアを絶賛するだろうか、と同じいい方になる。

【フアング】 Without even having read his works, Chinese intellectuals have praised him.

彼（シェイクスピア）の作品を読むことなく、中国の知識人は彼を称賛した。

中国の知識人がシェイクスピアの作品そのものを読まずとも、ラム本は読んだとは想像もしていない。だいいちフアングは同一著作の別の箇所（69頁）で、

1900年聖約翰大学においてシェイクスピア倶楽部が設立され週末に莎劇を読んでいたと説明しているのではないか。自分で書きながら、忘れてしまったのだろうか。知識人の一部は実際に莎劇を読んでいたし、そうならばラム本はもっと普及していたと考えてもいいところだ。

フアングも、張曉陽、レヴィス、サンらと同じく中国の知識階層をひどく侮蔑しているとしか思えない。

【張曉陽】 Therefore I have translated his works into Chinese and offer it to our readers. In the meantime, it will be added to our literary circles as a wonder with radiant splendor.

そこで私は彼の作品を漢語に翻訳し読者に提供する。とりあえず、わが文学界に輝かしい不思議さがあたえられるであろう。

シェイクスピアの作品を漢語に翻訳した、と書きながら自分で論理の整合性が失われていると感じなかったのだろうか。実際に漢訳され目の前にあるのは莎劇（詩）ではなくラム本の『シェイクスピア物語』なのだ。張曉陽は、詩と小説の区別をつけていない。

【レヴィス】 To remedy this unfortunate situation, I have undertaken this translation with the hope that it will add color and splendor to the world of fiction (quoted in Meng, *Survey*: 6).

この残念な状況を改善するために、小説の世界に色彩と輝きを加えることを希望して私はこの翻訳に着手したのだった（孟からの引用）。

莎劇（詩）が翻訳されていないからそのままの脚本の形で漢訳した。そうであれば説明の論理が首尾一貫する。だが、出てきたのが小説のラム本では話の筋が通らない。レヴィスの英訳を見れば、莎劇（詩）そのものを中心に述べていたのに、最後になって「小説の世界」が突然、出現する。莎劇（詩）と小説世界は別物であることを知らない。詩と小説の「区別がつかない」らしい。

【サン】 Consequently, I earnestly translated the book, hoping to bring new splendour to the circle of fiction.

そこで小説界に新しい輝きをもたらすことを希望してこの本を熱心に翻訳したのだ。

サンも張曉陽、レヴィスと同様だ。もっぱらシェイクスピアの戯曲、別の表現では莎劇（詩）について説明していた。最後になって小説界が取って付けたように出てくるのはどう見ても奇妙だ。ラム本との関連でシェイクスピアが少し説明される「叙例」の基本を知らない。サンもその区別がついていないのである。

【フアング】 It is my hope that my translation will remedy the unfortunate situation and enrich the world of fiction.

私の翻訳が不幸な状況を改善し、小説の世界を豊かにするのが私の希望である。

漢訳したのはシェイクスピア原作をラムが改編した『シェイクスピア物語』である。だからこそ「小説の世界を豊かにする」とつながる。それまでに説明していたのが莎劇では全体の統一がとれない。「叙例」の基本的説明がラム本についてのものであることを知らないからそうなる。

漢訳者のもとの説明、すなわち「叙例」全体を見るべきだった。『澥外奇譚』の訳者は、莎劇（詩）とラム本（散文）の関係を正しく把握しているとわかったはずだ。張曉陽は原書から引用していると明記している（259頁注15）。だが、この基本を理解していない。全文を読んでもそうなのか、と不可解さが増す。

レヴィスとフアングは孟憲強が、サンは李偉民が引用していない箇所の全文を読もうと思えばできないことではなかったはずだ。彼らが論文を書く前に『中国近代文学大系』第11集第28巻翻訳文学集三（上海書店1991）が刊行されていることを言っている。結果として、原文を読まず孫引き、曾孫引きすることの恐ろしさを私たちに教えてくれる。

わかりきったことをなぜ説明するのか、と思われる人もいるだろう。

ひとつは、張曉陽、レヴィス、サン、フアングのように誤解する研究者がいるからだ。もうひとつは、鄭振鐸の評言、すなわち林紘は小説と戯曲の「区別がつかない論」をいまだに信奉する人がいるためだ。それを『滌外奇譚』の訳者にも当てはめるかもしれない。上の英文論文は事実そうしている。

現代の中国人研究者が「叙例」を現代漢語に翻訳している例を紹介しよう。李偉昉(2011)*²⁷である。

李偉昉は、次のように説明する。『滌外奇譚』の訳者は、シェイクスピアを伝奇作家、あるいは伝奇小説家だというのだ。これには驚く。彼は、葛桂録『中英文学関係編年史』に収録された「叙例」を孫引き要約して以下のように訳した。李の要約原文を引用する。

莎士比亚是海外一位擅長構思奇譚故事的作家，不僅編写劇本，而且創作小說，因国人從未讀過他的作品，所以他要訳介莎士比亚，給中国作家的創作“增一異彩”，提供借鑑。152頁

シェイクスピアは怪物物語を構想するのがうまい海外の作家である。戯曲を編纂するばかりか小説も創作する。わが国の人々は彼シェイクスピアの作品を読んだことがないため、彼(漢訳者)はシェイクスピアを翻訳紹介し中国の作家が創作するのに「異彩を増す」手本を提供しようとした。

「叙例」の要約であるにもかかわらず、漢訳者本人について漢語「他」を使い李偉昉の視点を混入させている。奇妙だ。原文は「僕」だから現代漢語の「我」にすべきだ。

李偉昉による以上の要約は、あくまでもシェイクスピアとその作品についての説明だとする。しかし、「而且創作小説(小説も創作する)」という箇所を翻訳しながら李偉昉は自分でおかしいと思わなかったのだろうか。シェイクスピアが小説を書いたなどは、専門家が書く文章ではない。それを含めて漢訳者が無知であるといいたいのか。それこそ濡れ衣だ。なによりも「叙例」では「是書原係詩体(本書はもとが詩の形式である)」と明確に説明しているではないか。それを読まな

かったのだろうか。

ラム本（もとはシェイクスピアの作品）には幽霊、妖精などが出現するから角書に「神怪小説」とつけたりする。伝奇作家というのは、そこらあたりからの発想だ。

李偉昉がよった葛桂録本（127-128頁）に引用された原文を示す。[]で括ったのは「叙例」初出にあっても葛桂録が削除した箇所だ。波線をほどこし李偉昉が要約した部分を推測する。

[一是書為英国索士比亞Shakspere 千五百六十四年生
千六百一十六年卒 所著。] 氏乃絶世名優，長於詩詞。其所編戲本小説，風靡一世，推為英国空前大家，訳者遍法、德、俄、意，幾於無人不読，而吾国近今学界，言詩詞小説者，亦輒嘖嘖称索氏，然其書向未得読，僕竊恨之，因亟訳述是編，冀為小説界上，增一異彩。

波線部分を見ると「叙例」の一部分を李偉昉が適当に選択してつなぎ合わせたことがわかる。

根本問題は、「叙例」がラム本の説明であることを李偉昉が知らない、あるいは忘れてのことだ。ゆえに、ここでも鍵語である「戲本小説」を分解して戯曲と小説（不僅編写劇本，而且創作小説）にしてしまった。ラム本そのものを指していることに気づかない。あとの誤解も、そのほかの研究者と変わらない。シェイクスピアを翻訳するといいいながら、ラム本になったことが見えないのである。

「英国索士比亞Shakspere...所著」「其所編戲本小説」「言詩詞小説者」を無意識に、あるいは意識的に誤読する可能性がある。後の研究者は、当時の知識人を頭から軽視しているからシェイクスピアが小説を書いたことにして平気なのだ。

具体例は上を見られたい。シェイクスピアがラム本を書いたとしているのは誤りだ、と言い出しかねない。シェイクスピアとラムの関係について漢訳者が何も知らないことにしたいのだ。当時の中国の知識人が無知であり劣っていると貶めたいのである。

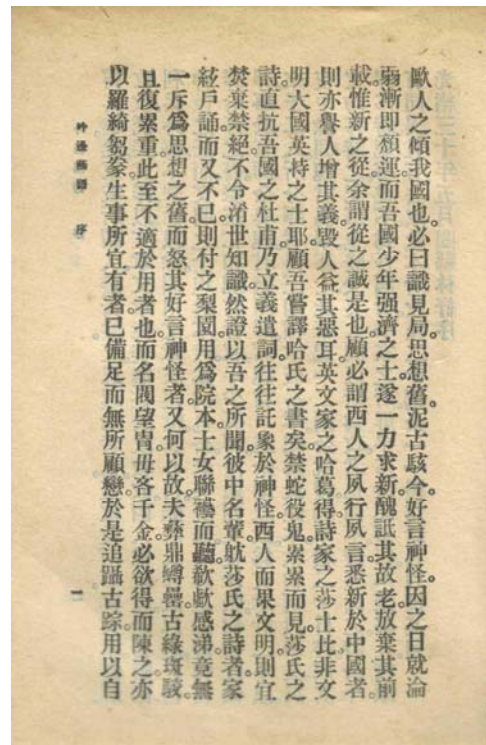
そういう考えを植え付けたのは、もとをたどれば1910年代に林紘を批判した劉半農ら文学革命派であった。現代の欧米にも彼らの影響が及んでいるといわざ

るをえない。知識がないのは、そう誤解する人たちの方であることがわかるだろう。「叙例」そのものが証明している。

ひとこと。現代のウェブ社会において検索すれば孫引き、曾孫引きする文献まで出てくる。あえて紹介したのは、現代における研究水準を知る材料になるかもしれないと考えるからだ。

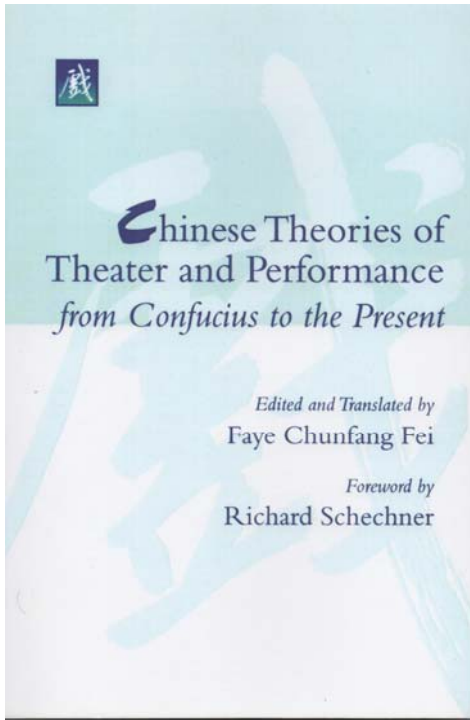
13 『英国詩人吟辺燕語』のばあい

林紓「吟辺燕語序」である。「林序」と称する。



林 序

「林序」の記述構造には大枠がある。前半部分でシェイクスピアについて述べ、最後部分はラム本について解説している。この認識が重要だ。「林序」の内容が



費春放

でたらめだと非難攻撃する研究者はそれを無視して、あるいは知らずに論じている。林紓については何を書いても、どう罵ってもよいと考えているらしい。

参考までにいうと、「林序」全文は、費春放 FAYE CHUNFANG FEI (1999)*28 が英訳している (114-116頁)。また、瀬戸博士の日本語訳もある (89-91頁)。

関連論文からシェイクスピアとラムに關係する語句だけを引用して説明する。誤解のないようにお願いしたい。そこに注目するのは、研究者の多くが問題にする箇所だからだ。林紓が無知である証拠として示されるのが常となっている部分である。順に検討していく。

14 ハガードと並べる

英文家之哈葛得。詩家之莎士比。

英国作家のハガード、詩人のシェイクスピア

ハガードは小説家だ。シェイクスピアの「詩家」は詩人でよい。莎劇(詩)なのだから。林紓にとって英国人のふたりともが作品を通して親しい存在だった。費春放はここを英訳して奇妙なことにしている。

【費春放】 Hardy and Shakespeare literary giants p.114

文学の巨人ハーディとシェイクスピア

ハーディはトマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) だろうが、それがなぜ

哈葛得の英訳になるのか。だいたい林紓はハーディの作品を翻訳したことがない。費春放は、別の箇所でも同じくハーディと誤訳している。ハーディの漢訳は哈代だ。費春放には林訳ハガードについての知識がないらしい。また、原文の「文家」と「詩家」をliterary giantsにまとめる。ここを区別しないのは、大いに問題だ。

ハガードとシェイクスピアを並置することに疑問を呈する、あるいは批判するのが、中国の学界における普通のやり方である。例を示す。

周羽(2013)*²⁹の書いた論文表題は、訳せば「林訳『吟辺燕語』の誤解と魅力」になる。林訳を貶めようとする姿勢がその題名から透けて見える。

さっそく林紓がハガードとシェイクスピアを並べたところに文句をつける。まず、共訳者の魏易がチャールズ・ラムを完全に無視したことを咎める。そうして次のようにいう。翻訳して示す。

さらにでたらめなのは、林紓が序言のなかで一再ならず別の英国小説家ハガードをシェイクスピアと並べて挙げることだ。179頁

両者を並列するのは誤りだという。つまり、その文学成果と文学史での評価がシェイクスピア、ラムよりもずっと低い怪奇冒険小説家のハガードを持ち上げている、と批判する。

林訳ハガードは当時の中国人読者から広く歓迎された。翻訳出版件数も多い。林訳に対する鄭振鐸らの非難攻撃以来、現代中国においてハガードの評価は低い。それを基準にして「林序」を責めているだけ。林紓と魏易に彼ら独自の見解があってもいいとは思わないらしい。

15 杜甫と並べる

「林序」には、詩をめぐってシェイクスピアと杜甫が出てくる。ここを取り上げて批判する研究者を多く見かける。

莎氏之詩。直抗吾国之杜甫。

シェイクスピアの詩は、まったくわが国の杜甫に匹敵する。

ここでは、「莎氏之詩」はそのまま「シェイクスピアの詩」と訳しておく。この「詩」が誤解を引き起こす原因になっているからだ。

費春放の英訳も示す。彼女は自分の解釈を施していない。

【費春放】Shakespeare's poetry is quite comparable to that of our [great poet]
Du Fu, p.114

シェイクスピアの詩はわが国の（偉大な詩人）杜甫に完全に匹敵する。

西洋人には杜甫といっても理解されないと考えたのだろう。「偉大な詩人」を補った。

現代中国の知識では、シェイクスピアは劇作家である。だから、劇作家のシェイクスピアと詩人の杜甫では対比の対象にはならないと考える。林紓は何も知らず、比較できないものを並置しているという非難攻撃につながる。林紓が文芸の種類に無知だから劇作家と詩人を並列した、区別がつかないと批判する。

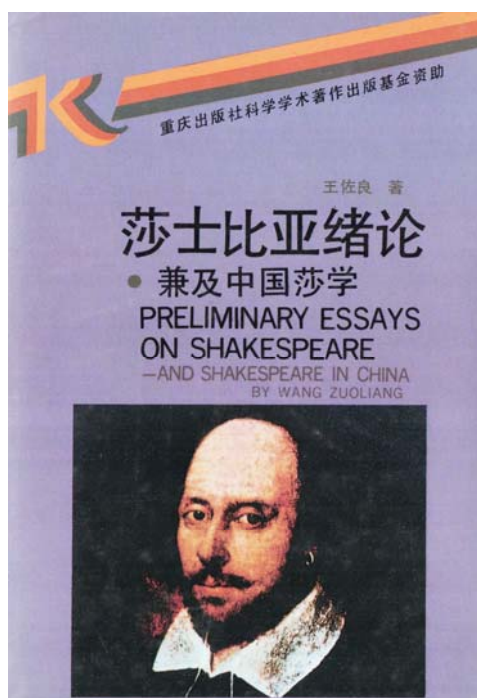
例をあげる。前出李春江がシェイクスピアと杜甫をならべた箇所について、次のように書いている。

林紓はシェイクスピアを劇作家だとは決して見ていなかった。そうではなく詩人の仲間に入れた。王佐良氏は次のように考えている。中国古典文学の伝統では脚本と小説の地位は詩歌ほど高くはないから、林紓が文壇の人物を絶賛するとき、まず彼の詩を担ぎ出したのであろう、と。37頁

莎劇は脚本、詩は詩であると李春江は分ける。王佐良の名前を出して自説を補強したつもりだ。中国古典文学の伝統をふまえて、シェイクスピアを称賛するために中国では格下の脚本ではなく上位の詩を取りだしたという論理だ。それでこそ杜甫と釣り合いがとれる、と。

だが、彼には莎劇が詩そのものであるという基本的認識が欠落している。李春江にとってシェイクスピアは、あくまでも現代から見た劇作家でなければならない。

李春江は、王佐良の名前を出すだけで彼の論文名までは書いていない。中国では典拠を示すまでもないほどの定説になっているらしい。だから、王佐良が間違っているなどとは思えない。



王佐良

そこで、王佐良(1991)*³⁰の文章を見る。シェイクスピアと杜甫を並置する「林序」をかかげ、王佐良は「莎翁に最高の賛辞をあたえたものだ」(164頁)と認める。そうして、同時に不足も言いたるのだ。

だが、この比較は完全に適切であるというわけではない。杜甫は詩人であるが、シェイクスピアは主として劇作家であるからだ。たぶん、中国古典文学の伝統では脚本と小説の地位は詩歌ほど高くないから、文壇の人物を絶賛するときには、往々にしてまず彼の詩を担ぎ出すのである。シェイクスピアの脚本は韻文を用いて書かれており、ゆえに「シェイクスピ

ア氏の詩(莎氏之詩)」というもきっぱりとは非難はできないにしても、ただ彼の並ぶものがないほどに輝かしい戯曲の天才を軽視しているのだ。164-165頁

王佐良は、莎劇が韻文であることは理解している。だが、どうしても戯曲に分類したい。シェイクスピアは詩人であるよりも劇作家であることの方が重要だという考えだ。林紘が「莎氏之詩」と書くと、それは正しい表記ではないと王佐良

は理解する。

王佐良は別のところで少し違うかたちで説明している。「シェイクスピアの脚本は詩劇であり、大部分は韻文を用いて書かれている。しかし、脚本以外にも彼はいくらかの詩を書いており、主要には、以下のものがある」(142頁)という。ここから、王佐良の中では詩劇は詩劇であって詩ではないという区分ができているとわかる。戯曲と詩に分けるのだ。シェイクスピアの作品は全体が詩であって、その中に戯曲とそうでないものがある、とは考えない。

興味深いのは、王佐良の同書に収録した英文論文でも「莎氏之詩[。]直抗吾国之杜甫」に言及している。

For Lin thought Shakespeare's "poetic genius simply matched that of China's Du Fu" (「莎氏之詩[。]直抗吾国之杜甫」), and Du Fu was one of the two poets who were considered to have reached the peak of poetic achievement, the *ne plus ultra* in the long history of China's classical poetry. p.209

シェイクスピアの「詩の天才は中国の杜甫に匹敵する」と林(紘)は考えた。杜甫は、詩的な成果に到達したふたりの詩人のうちのひとりであり、中国の古典的詩の長い歴史における極上の人なのだ。

王佐良は、俗論から離れることができない。あくまでもシェイクスピアを劇作家と詩人に分けて考えている。その自らの思考を「林序」に投げかけ、合致しているかどうかを検討する。林紘が「莎氏之詩」と書く場合の「詩」がどういう内容かは考慮しない。頭から自分の考える「詩」だと断定する。間違い。「莎氏之詩」は莎劇(詩)すなわちシェイクスピアの戯曲である。

王佐良の理解が李春江にも受け継がれていることがわかる。

周羽は、新聞広告と「林序」を区別していない。広告も林紘が書いたものとして扱う。不適切だ。本稿では「林序」部分のみを対象にする。その周羽も同じ箇所をあげて非難攻撃している。

小説を書いたハガードは林紘によって「文家」と見られ、シェイクスピア

は「文家」とは対照的な「詩家」に属している。当然、シェイクスピアが英国の大詩人であるというのは決して間違っていない。莎翁の十四行詩（ソネット集）は彼の偉大な詩人としての名声をあげるのに十分だった。問題なのは、劇作家としてのシェイクスピアがあきらかに詩人としての莎翁よりも重要であり、しかもここで林、魏が翻訳したのは、莎劇に基づき改編した戯劇物語集であって、莎翁の十四行詩とはまったくなんの関係もないことだった。ゆえに広告と序言において莎劇を詩歌と理解し、戯劇物語集を「詩之紀事」、あるいは筆記小説と考えたのは、すべて理解にずれがあるのである。

179-180頁

周羽は、シェイクスピアを劇作家と詩人に区別し、前者を重視すべきだと主張する。「林序」でシェイクスピアを詩人とするのは間違いだと指摘している。王佐良、李春江らと同じ考え方だ。これが現代中国の学界の常識なのだろう。

おかしな説明だ。

「莎劇を詩歌と理解」するのは、周羽から見ると誤りだそうだ。それこそ間違い。莎劇が詩であるという基本的知識が周羽にも欠落している。該書的主編である袁進は注意しなかったのだろうか。注意がなかったならば、袁進も同じ考えであると思われる。

「詩之紀事」が戯劇物語集、筆記小説だと考えることも間違いだという。周羽がそう判断したのは、字面の「詩」に惑わされたからに違いない。十四行詩を例にあげたのが証拠だ。よりもよって林紘が正しく理解していることを誤りだと断定する。理解に相当のずれがあるのは周羽の方なのだ。

「林序」の前半部分で莎劇（詩）を、最後部分でラム本について説明している事実を無視する。両者を分離せずに論じるのは、「林序」を真剣かつ誠実に読むという意識が周羽には最初からないからだ。林紘は無知であるという先入観に支配されているといわざるをえない。こういう例は多い。

劉半農がかつて明言した「林氏は「詩」と「戯」のふたつを識別していない」は、「林序」のこの部分も根拠にしている。

私がもう一度説明する。

「莎氏之詩」に注目してもらいたい。シェイクスピアの「詩」とは莎劇（詩）である。莎劇は無韻詩を用いた詩であることを忘れてはならない。莎劇は詩なのだから、中国でそれに匹敵するひとは杜甫になる。詩という共通点で両者を繋いでいる。論理上の整合性を備えている「林序」に対して疑問を表明するほうがおかしい。

16 家庭から劇場へ

「莎氏之詩」は、別のところにも出てくる。

彼中名輩。耽莎氏之詩者。家絃戸誦。而又不已。則付之梨園。用為院本。士女聯襜而聽。歎歎感涕。

名望のある年輩者のなかでシェイクスピアの「詩」をとくに好む者は、どこの家でも誰もが朗誦し、しかもそれで終わらず劇場にかけて用いて脚本とした（注；後で説明する）。すると、紳士淑女は連れだって聞き入り、感動して落涙するのだった。

原文のままにした「詩」は「莎氏之（シェイクスピアの）」という修飾語がついている。これを理解しない研究者がほとんどだ。実は莎劇（詩）である。その莎劇（詩）が家庭から劇場へ移っていったところを表面だけ見れば、伝播の方向としては逆のように思える。莎劇は、まず劇場で演じられたのちに脚本になったからだ。現在でも研究者の多くがここを示して林紓の理解が間違いだと批判する。誰も内容を検討せずに断定する。

魏策策（2012）^{*31}の論文を紹介しよう。

「林紓はシェイクスピアおよび作品に対する本来の様相についてそれほど明るくなかった」と書いて低く評価し貶める。上の「彼中名輩……」部分を引用し次のように述べる。

シェイクスピアは俳優、劇作家であり、その作品は先に上演され、後で本

になった。だが、林紘の認識はそれとはちょうど反対で、先に「詩」^{ママ}があって後に上演されたと考えた。とても劇的なのは、林紘のシェイクスピア作品に対する想像が、シェイクスピアが始めて中国に入ってきた過程そのまま、つまり、改編された物語から舞台に転じて上演された、というのとまったく同じだったことだ。この認識はシェイクスピアが劇作家であるという身分をまったく否定するのだ（後略）477頁

魏策策は前半部分で「林序」にあることを示してカッコ付きの「詩」を使用した。その中身を説明しない。納得のいく解説ができないからだろう。私がいえば、今まで見てきたとおりこの「詩」は莎劇（詩）だ。脚本が先あって後に上演されるのは、逆の方向になると魏は批判している。くり返せば莎劇は劇場で上演されたあと脚本として出版されたからだ。

魏策策は後半部分において、中国では物語を下敷きにし脚本が書かれたうえで芝居として上演されたことをいう。確かに、物語である林訳『吟辺燕語』にもとづき脚本化し、それを中国人が演じたことがある。文明戯だ。しかし、その事実は『吟辺燕語』という翻訳をした時点の林紘が知るはずもない。脚本化されるのはその後のことだからだ。

よく見てほしい。伝播のかたちは似ているが内容が異なる。「林序」のばあいは莎劇（詩）から脚本へ変化したことをいう。一方の中国では、小説『吟辺燕語』からシェイクスピア作と称する脚本が書かれた。中身が違うことは明らかなのだ。

林紘はシェイクスピアが劇作家であることを否定している、と魏策策がそう述べる。そこは先に紹介した黄焯結、李春江、周羽らの考えと同じだ。これが現代中国学界の共通認識だとわかる。

脚本から家庭をへて劇場への方向を示した箇所だけを見て、林紘の把握のしかたは中国では誤りだとされている。

しかし、林紘と協力者の魏易*32のふたりは、ともに豊かな学識を有した人たちだ。莎劇（詩）について、脚本から上演というような誤解を犯すと考えるのは不自然でありかつ彼らに対して失礼である。「林序」を読んで私はそのように判

断する。

私が解説する。

まず注目すべきは「名輩（名望のある年輩者）」だ。どこの誰かを特定していない。いつの時代であるかもわからない。書き出しからして、そういう話もあったという紹介である。伝聞の域を出ない。シェイクスピアよりもずっと時間を経た時代の物語だろう。

続いて「莎氏之詩」である。当然、莎劇（詩）を意味している。イギリスのどこかの名士が莎劇を気に入り、印刷された脚本を入手して家で朗読した。莎劇（詩）が評判を呼んだ結果、そういうこともあつただろう。あくまでも名前の知られていない人々の話である。

問題は原文の「院本」だ。「院本」が莎劇（詩）そのものだとすれば 多くの研究者はそう考えているのだが、莎劇（詩）が家庭に入り込み、その後に劇場に渡って莎劇（詩）になったことになる。そこで伝播の方向が逆だという批判につながる。

だが、そう読むのはおかしい。行きついた先が莎劇（詩）のままであれば、家庭における朗読は直接の関係がない。莎劇（詩）が各家庭に普及したことを説明してはいる。だが、それが莎劇（詩）そのものとして再び生成され劇場に登ったとつづけて読むのは不可能だ。

だいいち「莎氏之詩」と「院本」では用語が異なる。莎劇（詩）の変化をいうのであるから「院本」の語句が莎劇（詩）と同じであるはずがない。だからこの「院本」は莎劇（詩）そのものではなく、誰かが書き換えた韻文ではない、つまり詩形式ではない別の脚本だ。重点はシェイクスピア劇に人気があり、別の形に変化して広がったということを説明しているところにある。実際にそういう例があつたが、ここで言っているのは名前を特定できない一般人のばあいを示している。

私が説明を加えた読みを提出する。

「しかもそれで終わらず、書き換えて劇場にかける脚本とした」

莎劇（詩）の逆行などもとから「林序」には存在していない。

前出の張曉陽が、わざわざ「林序」のこの部分のみをとりあげて英訳している。

これがまた奇妙なのだ。

【張曉陽】 Shakespearean poetic works have been read by numerous families in the world. When they are presented in the theater to gentlemen and ladies, the audience is always deeply moved. p.103

シェイクスピアの詩的な作品は、世界中の家族によって読まれた。それらが劇場で紳士淑女に発表されると、観客はいつも深く感動するのだ。

原文の「莎氏之詩」は英訳すれば“Shakespeare's plays (dramas)”でなければならない。「林序」においてはそれ以外の解釈は存在しない。ところが、張曉陽は「Shakespearean poetic works シェイクスピアの詩的な作品」に翻訳した。「詩的な作品」というのは何を指しているのか。説明がない。

張曉陽が「poetic works詩的な作品」と訳した思考回路をたどる。

シェイクスピアの作品を詩poetryと戯曲play (drama)に二分する。彼も、その考えから抜け出ていない。その意味で現代中国の研究者のひとりだ。ゆえに「林序」の「詩」が戯曲であるとは気づかない。かといって「詩」をそのまま詩としてしまうと劇場で上演されることと矛盾する。戯曲と言い切る知識がない。しかたなく「poetic works詩的な作品」というまわりくどい表現にしたと思われる。意味が不明だ。張曉陽が「莎氏之詩」の内容を把握していない証拠である。

前出1903年の莎基斯庇爾につけられた肩書き「世稱為詩中之王，亦為戲文中之大名家」を張曉陽は、次のように英訳している。「Shakespeare..... has been called the king of poetry. He was also a famous dramatist. シェイクスピア.....は詩の王と呼ばれてきた。また有名な劇作家でもあった」99頁

原文にはない「dramatist劇作家」を使用しているところからも、劇作家と詩人に分けていることがわかる。

劇場に紳士淑女がいて彼らにむけて発表されたものは、なにか。張曉陽英訳の文脈からすれば、「シェイクスピアの詩的な作品」ということになる。原文の「院本」という意味を含ませたつもりか。これといった説明もせず、あいまいな翻訳にしてわけがわからない。

「林序」の「莎氏之詩」について明確な把握ができず、それに加えて「用為院本」を捨ててしまった。莎劇（詩）から別の脚本へ変化したことが見えなくなった理由である。

ここは、重要な部分だ。多くの研究者が林紘を非難するばかり、彼が「無知」であることの根拠にする。張曉陽は、問題の箇所を特別に引用しながら、その問題については解説もしない。張曉陽がどう考えているのかが不明だ。もしかすると彼には問題があるという認識そのものがない。

彭鏡禧 CHING-HSI PERNG (2000)*³³は次のように英訳している。

【彭鏡禧】As far as I know, however, some well-known personages among them are so enchanted by Shakespeare that they recite his poems or set them to music at home. And, as if that weren ' t enough, they use them as play scripts for the theater, where ladies and gentlemen go and watch, and are moved to tears. p.2-3

しかし、私が知る限りでは、彼らのなかのよく知られた名士の何人かはシェイクスピアに魅了され、家庭で彼の詩を暗唱し、あるいは音楽にした。それでまだ十分ではなかったかのように、彼らはそれを劇場用芝居の脚本として使用し、紳士淑女たちはそれを見に行き感動して涙するのだった。

問題が原文の「莎氏之詩」に集中していることがわかる。彭鏡禧は「his poems彼の詩」にした。莎劇が詩であったことを彭鏡禧は理解していない。ここは「his plays (dramas)彼の戯曲」にしなくてはならなかった。

「院本」を「play scripts芝居の脚本」と理解したのはいい。しかし、それが莎劇（詩）に基づいてあらたに改編されたものだと理解できなかったようだ。

李如茹 (2003)*³⁴の英訳も似ている。

【李如茹】However, the fact is that the intellectual elite of the West is so fond of Shakespeare's poetry that every household in the country seems to be reading and reciting his lines all day long. Moreover, his verses were also used as

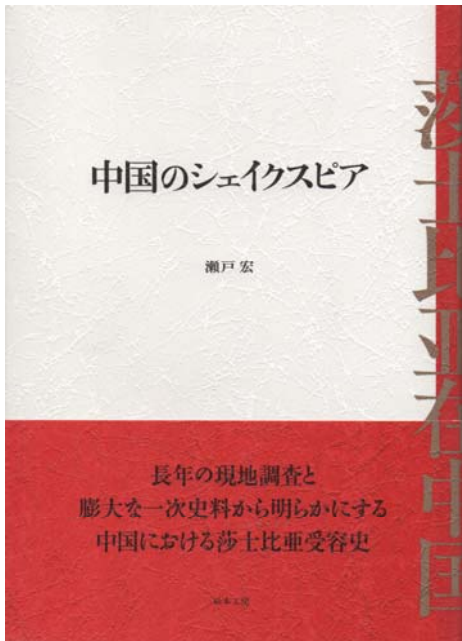
scripts for performances on the stage and no women who were present as part of the audience were not moved to tears. p.13

しかし、西洋の知的エリートはシェイクスピアの詩をそれほど好んだため、国中の家庭において一日中彼の台詞を読み、暗唱しているように思われているのが本当のところだ。そればかりか、彼の詩は劇場での演技のための台本としても利用され、観客のうちの女性で感動して泣かないものはいなかった。

李如茹も原文の「莎氏之詩」に引っかかっている。「Shakespeare's poetryシェイクスピアの詩」に英訳する。このpoetryは、後ろの「his verses彼の詩」につながる。それがそのまま「scripts台本」になると解釈していることになる。もしも、その「詩」が莎劇を意味しているのであれば、地方の誰ともわからない知的エリートが、劇場でそのままの莎劇（詩）を演じることになる。そう考えること自体が間違っているといままで述べてきた。

原文にある紳士淑女を女性だけにした理由は不明。

瀬戸博士が同じ箇所を取り上げて解説を加えている。



瀬戸博士

原文を翻訳しているのだが、3カ所に出てくる語句が微妙に異なる。別々に書いた論文を集めたのが原因だろうか。ページの順番に並べる。

【瀬戸博士】私の聞いているところによれば、彼らの名士はシェイクスピアの詩を酷愛し、あらゆる家々が愛唱した。そしてそれにとどまらず、劇界に与えて台本としたという。71頁

【瀬戸博士】私が聞いたところによれば、彼らの名士はシェイクスピア氏の詩を酷愛し、あらゆる家で愛唱されて終わることがない。そして劇界に与えて台本とし、

男も女もそろって聞き、感激して涙を流すという。90頁

【瀬戸博士】私の聞いたところによれば、彼らの名士はシェイクスピアの詩を酷愛し、あらゆる家々で愛唱された。そしてそれにとどまらず、劇界に与えて台本とし、男も女もそろって聴き、感激して涙を流すという。94頁

小さな違いであって基本は同じ、といえないこともない。

瀬戸博士は、次のような解釈をする。2例をあげる。

シェイクスピアはまず詩としてその作品を書き、後にそれが劇界の上演台本となったと認識していたことである。いうまでもなく、実際のシェイクスピア作品発表過程は、林紘の認識とは逆であった。71頁

ここに、林紘のシェイクスピア観が集中的に表現されている。林紘の認識では、シェイクスピア作品はまず詩として書かれ、それが広く愛唱されたため演劇の上演台本として用いられるようになったのである。94頁

ここに、瀬戸博士の無知、無理解と誤解が集中的に表現されている。

瀬戸博士は、上の部分は、シェイクスピア劇の成立状況を説明していると考えられる。本当にそう書いてあるのか。

「劇界に与えて台本」という「台本」の中身が問題だ。瀬戸博士は、シェイクスピアその人の脚本になったように説明している。ここが曲解だと私はいうのだ。

この上演台本はシェイクスピア劇そのものではない。林紘は伝聞であると明らかに書いている。イギリスの名も知れぬ好事家がシェイクスピア劇をとくに好みそれを家庭で朗読し、その後自分なりの脚本に書き換えて劇場にかけた、という意味でしかない。

瀬戸博士は、林紘をつかまえてシェイクスピアについての知識がなく「区別がつかない」人にどうしてもしたいらしい。

17 「林序」のラム本表記

「林序」の最後は、ラム本についての説明が中心である。

余老矣。既無哈莎氏之通涉。特喜訳哈莎之書。

私は年老いた。ハガード、シェイクスピアに通暁しているわけではないが、ハガードとシェイクスピアの書を特に好んで翻訳した。

林紓は年老いたと書いている。1904年当時、彼は数えの五十三歳だ。死去はその20年後である。

林訳ハガードは、のちの作品を入れると全部で20種以上を数える。だが、当時の漢訳は1種類だった。哈葛得著、林紓+魏易訳『埃司蘭情侠伝』(広智書局 光緒30(1904) HENRY RIDER HAGGARD “ERIC BRIGHT EYES” 1891)だ。1種類であろうとその時点で漢訳したという事実にかわりはない。

一方、シェイクスピアについては、ラム本を漢訳した『英国詩人吟辺燕語』が最初の刊行物だ。それ以後に発表、刊行する林訳シェイクスピアは、クイラー＝クーチ本(以下Q本と称する)を底本にしている。

「林序」に出てくるハガードの書とは、彼の作品を指す。また、シェイクスピアの書は、ラム本を意味している。この部分を含めて阿英らによって意図的に誤って解釈された(後述)。

「林序」にラム本が出てくる箇所を引用しよう。文字数は多くない。

林紓と共同で漢訳に従事していた魏易が登場する。林紓の説明によると次のようである(カッコ、下線筆者)。

夜中餘閒。魏君偶拳莎士比筆記一二則。余就燈起草。積二十日書成。其文均莎詩之記事也。嗟夫。英人固以新為政者也。而不廢莎氏之詩。余今訳莎詩紀事。或不為吾国新学家之所屏乎。莎詩紀事。伝本至夥。互校頗有同異。且有去取。此本所收。僅二十則。余一一製為新名。以標其目。

夜中の暇な時に、魏君がふと『シェイクスピア物語』の1、2作を提示した。私は灯火のもとで書きはじめ二十日で完成した。それらはすべて莎劇の物語(『シェイクスピア物語』)である。ああ、英国人はもとより新しいも

のを政策にするが、しかし、莎劇(詩)は捨てないのだ。私は今『シェイクスピア物語』を訳したが、わが国の新学家は排除しないだろう。『シェイクスピア物語』は、伝本がきわめて多い。比較すると異同がはなはだ多く、取捨選択している。この本は20作を収録しているだけだ。私はそれぞれに新しい名をつけて題名とする。

魏易が英語原本を口述で翻訳する。林紓がそれを聞きながら古文で筆記する。林紓が採用した翻訳方法である。中国には昔からあるやり方のひとつだ。林紓のばあいは複数の共訳者がいたから、私は全体を指して林紓の「翻訳工房」といつている。主に個人で翻訳する現在のやり方を基準にして過去を非難してよいものではない。ましてや、林紓が外国語を知らなかったことは、決定的な欠陥とはならない。

前述のとおり、胡適は林紓をシェイクスピアにとっての大罪人だと批判した^{*35}。脚本を小説のかたちに変更して翻訳したからだというのだ。その胡適は、フランスのドーデ作品を英訳に基づいて重訳していた。あたかもフランス語原文から直接漢訳したように装った。林紓批判と無関係ではない。胡適が英語経由でドーデ作品を漢訳したことは、林紓と魏易が作業を分担して翻訳したのと、他者を媒介するという点において同質だからだ。林紓批判が前提としてあるから胡適は自らの翻訳方法を秘密にした^{*36}。

18 莎劇(詩)とラム本

さて、上に見てきたとおり「林序」にはシェイクスピアに関係することばがいくつか出てくる。抜き出し、日本語も示す。参考までに瀬戸博士の訳も「/」以下に掲げる。あとで検討する。

詩家之莎士比 詩人のシェイクスピア / 詩人のシェイクスピア 89頁
莎士比筆記 『シェイクスピア物語』 / シェイクスピアの要約 91、94頁
莎詩之記事 莎劇の物語 = 『シェイクスピア物語』

		／シェイクスピアの詩の要約 91、94頁
莎氏之詩	莎劇（詩）	／シェイクスピア氏の詩 89、90頁
莎詩紀事	『シェイクスピア物語』	／シェイクスピアの詩の記事91頁、 シェイクスピアの梗概 99頁

一覧を見れば、林紓が莎劇（詩）とラム『シェイクスピア物語』を厳密に区別していることがわかる。語彙を変えているのは、修辞上の技巧による。

いうまでもなく書名『英国詩人吟辺燕語』の「英国詩人」はシェイクスピアを意味する。シェイクスピアはあくまでも詩人だ。それを含めて林紓は語彙を使い分け正しい認識を示している。

前出レヴィスが魏易部分を英訳している。見てみよう。

【レヴィス】When free one night, Mr. Wei picked up some Shakespeare by chance; I started scribbling away by the night lamp. Twenty day later we have a book of Shakespeare's poetic tales. p.5

暇なある夜、魏君がふとシェイクスピアのいくつかを差し出した。私は灯火のもとで走り書きをはじめた。二十日の後、シェイクスピアの詩的な物語1冊ができていた。

上の文章には注がついている。前出、費春放FAYE CHUNFANG FEIからの引用（115-16頁）であるという（確認済み）。レヴィスは異論をはさんでいない。費春放の英訳に賛成しているからそのまま引いたと思われる。

魏易が差し出した「莎士比筆記一二則」を費春放は「some Shakespeareシェイクスピアのいくつか」とのみ英訳した。これでは莎劇そのものになる。原文の「筆記」を無視してここは誤訳だ。20日後にできたのが「莎詩之紀事」である。原文の意味は『シェイクスピア物語』だが英訳して「Shakespeare's poetic talesシェイクスピアの詩的な物語」とする。漢語の字面を忠実に翻訳したが、もう一步の説明がない。ラム本だと言明しないから奇妙な展開になる。莎劇から直接漢訳して物語にしてしまった。戯曲を小説化したと誤解している。費春放とレヴィ

スはそう思い込んでいるようだ。「林序」にはそのようなことは書かれていない。ここにはラム本がないから英訳の誤りである。

徐錦TSUI KAM JEAN (2008)*³⁷が前出「林序」部分を英訳して次のようにする。

【徐錦】 On one of our working nights, Mr. Wei happened to have shown me some works of Shakespeare and I started scribbling by the night lamp right away. And twenty days later, we had a book of Shakespeare's verses in prose adaptation.

私たちが仕事をしていたある夜、魏君がシェイクスピア作品のいくつかを私に示したことがあった。私は灯火のもとで走り書きをはじめた。二十日の後、散文に書き換えられたシェイクスピア詩の本になった。

徐錦の英訳を見て私は再び落胆する。

「莎士比筆記」は、『シェイクスピア物語』であると私は指摘しつづけている。ところが、徐錦は「シェイクスピア作品works of Shakespeare」だと解釈した。費春放と同じではないか。莎劇(詩)そのものだ。林紓らがラム本にもとづいて漢訳したことをすでに忘れている。

つぎの「莎詩之紀事」を「シェイクスピア詩Shakespeare's verses」と「in prose adaptation散文に書き換えられた」に分解した。分解した瞬間にラム本が消滅した。林紓と魏易が、シェイクスピアの原作にもとづき散文の形式にかえて漢訳したことになった。徐錦はそう訳して、1918年時点の劉半農、胡適による林訳批判に後戻りしたのである。考え間違いだ。

「林序」にあるシェイクスピア関係の単語について瀬戸博士の日本語訳を見よう。

原文の「筆記」を訳して「要約」に、おなじく「記事」を「要約」に、また「紀事」を訳して「記事」と「梗概」にしている。訳語が不安定だ。なぜなのか。原文がそうになっているというのであれば、解説をしなければならない。

瀬戸博士が書いている「詩の要約」「詩の記事」についての具体的な説明がな

いともう一度いう。何を意味しているのか。瀬戸博士は書いていないから私には理解できない。林紓が詩（戯曲）と小説を区別して語句を書き分けているにもかかわらず、瀬戸博士の日本語訳がゆれている。

瀬戸博士はその理由を次のように書く。「林紓が『吟辺燕語』の底本を記さなかったのも、ラムが『シェイクスピア物語』を書いたのは単なるシェイクスピア作品の圧縮にすぎず、両者の間には本質的な相違はないと考えたからであろう」（94頁）

瀬戸博士が書く「単なるシェイクスピア作品の圧縮にすぎず」という箇所は、前後関係が理解しにくい。「シェイクスピア作品の圧縮」がラムの『シェイクスピア物語』だ。詩（戯曲）を小説に書き直して「圧縮」した。ここまでは、いい。ところが、これに「単なる」「すぎず」を加えて「両者の間には本質的な相違はないと考えた」と述べる。「両者」というのだから詩（戯曲）と小説を指している。両者を区別していながら、「本質的な相違はない」というのは論理矛盾だ。瀬戸博士は、論理矛盾を犯してまで林紓を無知だと強調したいらしい。無効である。

くり返す。シェイクスピア作品は詩（戯曲）だし、ラムがそれを「圧縮」して小説に書き換えた。林紓は、戯曲と小説を区別していたから当然そう理解している。瀬戸博士の説明が奇妙なのはそこにラム名の有無をからませる点だ。「底本を記さなかった」ことが「両者の間には本質的な相違はないと考えた」にされる。詩（戯曲）と小説を区別しているにもかかわらず、ラム名を出さなかったことだけを根拠にして「両者の間には本質的な相違はないと考えた」。区別しているのに区別ができていない。そう瀬戸博士は説明する。これほど奇天烈な説明があるだろうか。

上の対照表に示したように、瀬戸博士は「詩の要約」「詩の記事」「梗概」などと用語を統一せず放置したままだ。もうひとつの疑問が出てくる。訳語をわざとあいまいにしているのではなからうか。あとでもう一度問題にする。

「林序」には読者に誤解を与える表現がある。前に「ハガードとシェイクスピアの書を特によるこんで翻訳した」と書いた。シェイクスピアの名前を出して実

際に訳したのはラム『シェイクスピア物語』だ。また、ここで「莎劇（詩）は捨てない」と言及しながら、ラム『シェイクスピア物語』を漢訳したと書いた。ラムつながりでシェイクスピアに言及したのだが、ここが阿英の誤解を引き起こす根拠となった。

19 阿英による誤解の影響

シェイクスピアの名前を出しながら実際に漢訳したのはラム『シェイクスピア物語』だ。シェイクスピア原作、ラム改作、林紓+魏易訳と書けば、より正確だった。しかし、林紓たちは、ラム名を省略した。

『吟辺燕語』の著者は、莎士比（シェイクスピア）となっている。書物を見ればたしかにそうだ。

そこから阿英は次のように解釈した。林紓は、「原本が『シェイクスピア物語』だと誤解した(誤原本為《沙氏筆記》)」*³⁸。

シェイクスピアの原本がすなわちラム本だとは、奇想天外な解釈であるといわなければならない。詩人のシェイクスピアが小説を、しかも自分の名前を冠した『シェイクスピア物語』を書いたことになるからだ。想像を絶する阿英の空想力だといっていい。

阿英は、漢字わずか8文字を使用して林紓の無知を証明したつもりだ。しかし、ここには論理矛盾がある。

すなわち、ラムの名前がないからこそ林紓は莎劇（詩）を小説に書き換えたという批判が生じた。だが、阿英はなぜ林紓の底本が『沙氏筆記（『シェイクスピア物語』）』であると指摘できたのか。

阿英が執筆した林紓誤解説は1938年だ。阿英目録は、彼自身の説明によると1940年に編集し終わったという（「叙記」3頁）。

その阿英目録124頁には、『吟辺燕語』の著者を「英蘭姆著」だと明記している。これはとても異様だ。『吟辺燕語』にはどこにもラムの記述がない。そこを根拠にして「林紓は、原本が『シェイクスピア物語』だと誤解した」と阿英は断定し林紓の無知をあざ笑った。だが、自分の目録には、原書にない「英蘭姆著」

を記録している。

阿英が使用している用語にもう一度注目してほしい。重要な箇所だからくり返す。「原本が『シェイクスピア物語』だと誤解した(誤原本為《沙氏筆記》)」の「沙氏筆記」である。「林序」では「莎士比筆記」と書いて『シェイクスピア物語』の意味だ。阿英の書いた「沙氏筆記」と「林序」の「莎士比筆記」は同じではないか。ということは、「林序」において実行している区別を阿英は正しく理解していたということになる。

阿英は『吟辺燕語』の著者がラムであることを知っていた。知っていながらラム名が書かれていないところだけをつかんで「林紘は、原本が『シェイクスピア物語』だと誤解した」と無理矢理にでっちあげた。林紘を批判するためには捏造もためらわない。確信犯である。

そこから次のことがわかる。阿英は林紘のことを無知だと批判したかった。その目的を実現するためにひねり出した説明だ。

阿英の背後には、劉半農、胡適、鄭振鐸らの「区別がつかない論」が存在している。林紘は、シェイクスピアについて何も知らない。そう批判し続けていた人々だ。

阿英は、事実とか論理的整合性について最初から無視していたとしか思えない。

阿英がどのように考えていたかは文章を見るだけではわからない。林紘は無知であったという指摘だけが残った。清末文学研究の分野では先駆者であり権威である阿英の断言だ。今にいたるまで大きな影響力を維持している。

呉慧堅(2009)^{*39}は、論文の最初部分で林紘の「誤解」について指摘する。原文も示す。

林紘は、ラム姉弟がシェイクスピア戯曲にもとづいて散文物語に書き換えたのを誤ってシェイクスピアの作品そのものにしてしまい、シェイクスピアを「戯劇家」でなく「小説家」として読者の前に出現させた(林紘把蘭姆姐弟根据莎士比亜戯劇改写的散文故事誤当作莎士比亜的作品,讓莎士比亜以小説家而非戯劇家的面目呈現在讀者面前)。

前出李偉昉も同じようなことを書いている。

シェイクスピアは、林紘らによって間違っただけで古代伝奇作家の身分で翻訳紹介された（莎士比亞以古代伝奇作家身份，被林紘等人錯位訳介）。160頁

林紘は、シェイクスピアについてそのようなことを書いてはいない。「林序」には「詩家之莎士比（詩人のシェイクスピア）」と明記している。なによりも漢訳の書名が『英国詩人吟辺燕語』と「詩人」ではないか。「英国詩人」はまさにシェイクスピアを意味している。ここの「詩人」は、現代風に書けば劇作家だ。呉慧堅、李偉昉らは、それを見逃した。あるいは忘れたかわざと無視した。林紘を貶めてはなはだしい。

宋莉華も、林紘は作者をシェイクスピアだと誤認した（286頁）と説明する。「林序」の該当部分を引用しての解説だから、どこを読んだのかという疑問が生じるのもしかたがない。

呉李宋らは、阿英の意図的な誤解をそのまま受け継いでいる。阿英の影響力は絶大だとわかる。彼らは阿英に誤誘導された研究者たちだ。

20 伝本多数

もうひとつ言わなければならないことがある。底本選択の際に示した林紘らの慎重な態度だ。

林紘は『シェイクスピア物語』について「伝本がきわめて多い」と書いている。偶然にラム本を選択したわけではない。そう考えるとすれば、誤解である。

莎劇（詩）を小説化したのはラム姉弟しかいなかったわけではない。1904年以前の刊行物で改編者名だけを列挙しよう（*印未見）。シェイクスピアを書名に組み込んでいることだけを指摘し題名は省略する。刊年はズレているばあいがある。

*Thomas Bowdler 1807

*Robert R. Raymond 1882

*Mary Seymour[Seamer] 1883

Charles Alias 1885

*Mara L. Pratt 1890

Harrison Smith Morris 1893

*Edith Nesbit 1898

M. Surtees Townesend 1899

Jeanie Lang 1900 / 1909

*Mary Macleod 1902

*Ada Baynes Stidolph 1902

林訳の前には、ざっと以上のような小説化本が存在している。実際にはもっと多いただろう。

林紘と魏易はその中から慎重に選択しラム本1冊を得た。魏易がこんなものがあります、と偶然差し出したように林紘は描写した。そこから、いかにも思いつきによる気軽な漢訳だと受け取る人がいた。鄭振鐸だ。しかし、事實は綿密な準備を経たうえでの翻訳作業だったのだ。

シェイクスピア作品を小説化した書物の多くが児童用書に分類される。鄭振鐸は林訳を非難し、無価値な作家の作品が多く混入していることをいった。あくまでも鄭振鐸から見ての無価値な作品である。さらに児童用の物語読本をあげて攻撃している。鄭振鐸の目からすればラム本もその中のひとつだ。しかし、郭沫若は子供のとき林訳ラム本を読んで感激したが、成人になってシェイクスピア劇そのものを読んでもラム本ほどは身近に感じなかったという。研究者によく引用される話だ。児童用の物語だからといって蔑視する鄭振鐸のほう間違っている。

21 劉半農から胡適を経て鄭振鐸へ

漢訳ラム本2種の序を検討した結果は次のとおり。

漢訳者たちは、莎劇(詩)と散文であるラム本を区別し両者の違いを明確に認識している。

以上を確認したうえで、林訳批判を行なった劉半農、胡適、鄭振鐸の「区別がつかない論」に的を絞って検討する。

おおよその経過をおさらいしておこう。

劉半農は、『吟辺燕語』を取りだして林紘が「詩」と「戯」の区別がつかないと罵った。

胡適が、劉半農の用語を変更して「戯曲」と「記叙体」に修正した。

林紘の死後、前述のとおり鄭振鐸(1924)*⁴⁰は劉半農、胡適の展開した林訳批判を継承しつつ根本的な2カ所を修正した。

ひとつは、非難攻撃の根拠とした漢訳作品の『吟辺燕語』を取り下げた。もうひとつは用語を「小説」と「戯曲」に書き換えた。

私は何度でもいう。取り下げて何をしたか。根拠となる作品を別のシェイクスピア作品とイブセン作品に入れ替えた。その上で、林紘は「小説」と「戯曲」の区別がつかないと強烈に批判した。ここでいう「戯曲」は脚本のこと。詩形式かどうかは問わない。なぜなら、イブセン戯曲を含めているからだ。

証拠としての『吟辺燕語』は取り下げたが抹消したわけではない。鄭振鐸は、同文の別の箇所でもラムと明記して『吟辺燕語』を掲げている。『吟辺燕語』にはラムの名前はもともと記載されていない。そこからわかるように鄭振鐸は原作がラムの小説であることを知っていた。もともと小説なのだから林紘らが漢訳して小説になるのは当然のこと。莎劇を小説に変更して漢訳したと責める根拠にはならない。

鄭振鐸が見ると、あとから発表された林訳のシェイクスピア「リチャード2世」「ヘンリー4世」「ヘンリー6世」「ジュリアス・シーザー」「ヘンリー5世」など、またイブセン『幽霊』は、あきらかに原作の戯曲を小説に書き換えている。鄭振鐸の林訳批判はそこを突いた。彼の非難攻撃は完璧である(はずだった)。中国を中心にし、ひろく世界中の研究者は鄭振鐸の批判を正しいものとして受け入れ、彼と同じく林訳を非難攻撃しつづけたのが歴史的事実だ。

ところがその鄭振鐸の指摘は間違っていた。2007年、林訳の底本は、それぞれQ本とドレイコット・M・デル本であることが明らかにされたのだ。小説を漢訳して小説になるのは何の不思議もない。ラム本と同じこと。鄭振鐸は、林紘に

濡れ衣を着せたのだった。現在では林紓冤罪事件であることが明らかになっている。

鄭振鐸は用語を「小説」と「戯曲」に置き換える必要を認めた。それは、劉半農の実行した対林訳批判が間違っていることに鄭振鐸も気づいていたからだとくり返す。また、胡適が修正したことも彼は理解していた。

劉半農の文章を見てみよう。

22 劉半農の「区別がつかない論」

劉半農(1918)*⁴¹は、「詩」と「戯」という単語を対立項目として提出した。問題の箇所は以下のとおり。

吟辺燕語本来是部英国的戲考，林先生於『詩』『戯』兩項，尚未辨明，知識實比『不辨菽麥』高不了許多。274頁（影印本316頁）

『吟辺燕語』は、もとは英国の『戯考』であるが、林氏は「詩」と「戯」のふたつを識別していない。その知識は実に「豆と麦の区別がつかない」に比べてもあまりにもひどい。

最初に指摘しなければならないのは、劉半農が提示している「詩」と「戯」が奇妙だ。

「林序」で出てくる単語は「詩」とそれに対立する「筆記」「記事」「紀事」である。どこにも「戯」などありはしない。「戯」は「詩」に対立するものとして劉半農が「林序」とは関係なく独自に提出したものだとして理解できる。

劉半農がここで対比させた「詩」と「戯」の中身について考える。研究者は、その内容について検討したことがほとんどないようだ。説明の必要がないほどの常識に属すると思われるらしい。

林訳『吟辺燕語』にはラムの名前がない。劉半農は、林紓らが莎劇（詩）を直接漢訳して『吟辺燕語』にしたことにしたい。いうまでもなく出てきた『吟辺燕語』は小説だ。ゆえに、戯曲を小説にした、「豆と麦の区別がつかない」ことが

批判の理由になる。これが基本の考えだ。

誰も何もいわないが、冒頭の「『吟辺燕語』は、もとは英国の『戯考』である」という文章は理解しにくい。林紓が莎劇（詩）とラム本を辨別している事実と合致しないのである。つまり「林序」の記述にもとづけば劉半農の説明には論理的整合性がない。

「もとは（本来是）」とある。『吟辺燕語』が使用した底本はシェイクスピア原作（莎劇）であるというならば、劉半農の記述は正しい。莎劇（詩）を小説化したという批判に結びつく。それにしても「戯」とは対応しないが。

劉半農があげているのは、そこに当然あるべき莎劇（詩）ではなく「英国の『戯考』」である。これは奇妙だ。

『戯考』は中国の1910年代から20年代にかけて刊行されていた演劇叢書だ。中国伝統演劇の脚本を掲載した。それらは詩形式ではない。劉半農の説明に従えば、底本は英国の詩形式ではない脚本ということになる。ならば莎劇（詩）ではない。結局のところ、林訳の底本がなにであるのか不明になってしまう。それはおかしい。

さらに、劉半農のいうもう一方の「詩」とは何か。

シェイクスピアの「ソネット集」などの「詩」ではありえない。林訳は、詩集の漢訳ではないからだ。

劉半農は林訳を非難している。「林序」に見える「詩」と同じでなければならぬ。莎劇（詩）そのものだ。

以上をまとめる。劉半農のいう「詩」は詩形式の脚本であり、それに対置した「戯」は詩形式ではない脚本だ。

これではどちらも脚本になってしまう。小説であるラム本は、どこかに消えてしまった。小説の『吟辺燕語』を話題にしているにもかかわらず小説がでてこなければ「区別がつかない」どころの話ではない。

「林序」において使われた語句を劉半農の文章にあてはめて読めば、批判文として成立しない。

別の側面から考える。

劉半農は、銭玄同と組んで「なれあいの手紙」を捏造した人物だ。林紓を罵る

ために該文を書いている。林紓ほど明確に用語を区別して使用し立論しているとは思えない。

シェイクスピアを劇作家と詩人に分ける。その俗論に現代の中国人研究者たちは染まっている。劉半農がその俗論を有していた先人だったとしてみよう。

冒頭部分は、『吟辺燕語』の原作は英国の脚本だといっているにすぎない。莎劇という意味で使用しているならば、詩形式であるかどうかは問わないことになる。ずさんな書き方である。

劉半農から見ればシェイクスピアは劇作家であるにもかかわらず、林紓は詩人として扱っている。ゆえに林紓は「詩」と「戯」の区別がつかない。ただそれだけ。

『吟辺燕語』について劉半農の使用した用語を見ていくと、奇妙なことになる。彼は、林紓が「戯曲と小説の区別がつかない」と主張したい。だが、厳密に点検すると劉半農の指摘そのものが成立しない。

「林序」では、莎劇（詩）を意味する「莎氏之詩」、および『シェイクスピア物語』を意味する「莎士比筆記」「莎詩之紀事」「莎詩紀事」に書き分けていた。劉半農からすれば、そのような厳密さは彼の理解の範囲外だった。

劉半農は俗論にもとづいて「区別がつかない論」を掲げた。なるほど、そういうことなのだ。俗論から抜け出せない現代の研究者たちが劉半農の書いたこの部分を不思議にも思わず、当たり前のように素通りしてしまう理由だ。現代の知識でもって「詩」と「戯」が対立すると理解している。

区別がつかなかったのは、林紓ではなく劉半農、またそれを継承した研究者たちの方であった。

林紓が区別して使用したことばをふまえて意味が通じるようにこの部分を書きかえるとすればどうなるか。誤解を避けるために重ねていうが、林紓の厳密な用語法を劉半農のずさんな批判文に適用するならばどう記述すべきか、である。

『吟辺燕語』はもとは莎劇である、としなければならなかった。その時、劉半農はあくまでも林訳がラム本であることを知らない風に装う。もとの莎劇、つまり脚本を勝手に小説化したというのが批判の要点だ。それにあわせるために「戯」を「小説」に訂正する。すなわち莎劇（詩）を意味する「詩」と林訳『吟

辺燕語』の「小説」を対立させてはじめて劉半農の林紘批判は成立する。

とはいえ、林紘は詩と小説を区別していた。劉半農がいくら用語を書き直しても林紘に対しては無効であることに変わりがない。結果として、劉半農は、林紘が誤っている、区別がつかない、という根拠のない印象を人々に残すことには成功した。これが事実だ。

胡適は、『吟辺燕語』に関する劉半農の説明に不備があることを察知した。続く『新青年』第4巻第4号(1918.4.15)において発表する「建設的文学革命論」においてその部分をただちに修正したのである。

林琴南把Shakespear^{ママ}的戯曲，訳成了記叙体的古文！這真是Shakespear^{ママ}的大罪人。

胡適の主眼は、翻訳に古文を使うな、と主張するところにある。林紘の翻訳についてはさりげなく「戯曲」と「記叙体」すなわち散文(小説)に用語を変更したのだ。そうしたうえで「本当にシェイクスピアにとっての大罪人である」と林紘を批判した。

銭玄同(王敬軒)と劉半農が『吟辺燕語』を掲げた直後であるところにご注目いただきたい。林紘がシェイクスピアの戯曲を古文で散文に翻訳した、と胡適が書けば、『吟辺燕語』について説明していると考えるのが自然だ。

胡適は、「区別がつかない論」を内部から修正して補強したということが出来る。胡適はあらためて、林紘は戯曲と小説の区別がつかなかったと非難した。

23 瀬戸博士の理解

この自然な流れを理解できないのが瀬戸博士だ。説明してつぎのとおり。

胡適の文学素養からみてラム『シェイクスピア物語』を知らなかったとは考えにくい^[18]。ここでの記述は一九一六年『雷差得紀』以下の翻訳を指しているであろう。99頁

劉半農が『吟辺燕語』を提起した直後に胡適の修正が示された。瀬戸博士は、文章が公表されたこの時系列を無視している。文章を真摯に読んでいない。読んだが理解できなかったか。胡適説を認めながら根拠となる林訳作品を勝手に入れ替えた。「『雷差得紀』以下の翻訳を指しているのであろう」という推測は正しくない。瀬戸博士自身が別の箇所ですべてのように説明しているのを忘れたか。「林紓の翻訳（注：Qの『シェイクスピア歴史物語集』）も『吟辺燕語』と異なりほとんど反響を呼ばず、初出のままに終わり単行本発行あるいは再刊行はされていない」93頁

「ほとんど反響を呼ばない林訳作品を指してどうするのか。広く読まれていた『吟辺燕語』だからこそ批判の根拠となりうる。ラム『シェイクスピア物語』を知っていた胡適はそれを隠し、銭玄同、劉半農の提出した『吟辺燕語』を引き継いで林紓批判をくり返した。それ以外に読みようがない。

瀬戸博士は、劉半農の提出した「詩」と「戯」について次のように説明する。

劉半農は、『吟辺燕語』が戯考であるなら詩（文学的側面）の項のほかに戯（演劇的側面）の項についても触れなければならないのに、林紓はその区別をつけていないと批判したのである。98頁

瀬戸博士の説明は、普通の知識の持ち主には理解不可能の域に達している。

自分で「『吟辺燕語』はもともとイギリスの戯考であるのに」と翻訳している。どうして「戯考であるなら」という文脈に変更するのか。しかも「詩（文学的側面）」「戯（演劇的側面）」とはどういう意味なのか。それらに「触れなければならない」とは具体的に何をいっているのか。『吟辺燕語』という小説を漢訳した作品のなかで、どう「触れなければならない」のか。劉半農は、「豆と麦の区別がつかない」と書いて区別を問題にしている。「触れ」とどう関係するのか。疑問しか出てこない。まったく理解ができない文章だ。

しかし、その直後の部分に瀬戸博士独自の解答が示されていた。

『吟辺燕語』序は“余今訳莎詩紀事”と『吟辺燕語』の原本がシェイクスピアの梗概であることを明記しており、劉半農がそれに気がつかなかったとは考えにくい。樽本氏の「冤罪」説は出発から無理があるのである。99頁

「林序」に出てくる「莎詩紀事」は、すなわち「『吟辺燕語』の原本がシェイクスピアの梗概である」と瀬戸博士は書いている。劉半農はそれに気づいていた。瀬戸博士のいう「シェイクスピアの梗概」は、ラムの『シェイクスピア物語』にほかならない。劉半農は、『吟辺燕語』の原本がラム『シェイクスピア物語』だと知っていた。瀬戸博士は確かにそう述べている。

語るに落ちるとはこのことだ。瀬戸博士はそれまで注意深く隠蔽していたのに、うっかり本当のことを書いてしまった。劉半農が「林序」を読んで気がついたことならば、それを書いた林紓自身が莎劇と『シェイクスピア物語』を区別していることは明白ではないか。

劉半農はラム『シェイクスピア物語』を知っていた。普通ならば、林訳が小説になるのは当然ということになる。林紓は戯曲と小説の「区別がつかない論」が出てくる余地はない。

劉半農がはじめた林訳批判を見てほしい。批判の理由は、莎劇（詩）を漢訳して小説にしたことだ。劉半農がラム本を知らないことを前提にはじめて成立する。ラム名がないことだけを根拠にしてでっちあげた。それこそが林紓に対する冤罪だ。どうして「「冤罪」説は出発から無理があるのである」という瀬戸博士の説明になるのか。意味不明。

そもそも「シェイクスピアの梗概」などと翻訳せずとも『シェイクスピア物語』に置き換えれば理解できる。

林訳ラム本を主題とする専門研究論文でありながら、瀬戸博士は基本的な用語の統一をしていない。これは、瀬戸博士のほどこした特別な工夫であることがわかった。

林紓は戯曲と小説の区別をつけていた。その事実を瀬戸博士は隠蔽しようとした。これが瀬戸博士の「林序」に出てくる訳語が不安定である理由だ。区別したことが理解できるように訳語を統一してしまっただけでは自分の考えを瀬戸博士自身で

否定することになる。林紓は無知でなければならない。そう見えるように訳語をわざと混乱させあいまいにした。

だが、これは序の口にすぎない。頂点が待っている。

24 「誤った通説」の原因は林紓にある トンデモ説の出現

「誤った通説」(93頁)だと瀬戸博士はいう。

「林紓はシェイクスピアの戯曲を小説体で訳したとする通説が生まれ、それが長く通行した」(92頁)ことを指す。それが誤りであるという認識が瀬戸博士にはある。

あるいは、「鄭振鐸によって、林紓はシェイクスピア(およびイブセン)戯曲を小説化して訳したという通説が確立した。これが錯覚であったのは樽本氏の指摘の通りである」(100頁)のように「錯覚であった」というのだ。さらに、確立したのは鄭振鐸だという事実も認めている。

「林紓はシェイクスピアの戯曲を小説化して翻訳した、という従来の通説は正しくなかった」(101頁)

しかし、一転して「通説発生の主な原因は林紓にある」(97頁)と書く。驚くべき説明だ。

林紓は、底本とした『シェイクスピア物語』の編者ラムの名前を出さなかった。ここから瀬戸博士は不思議な論理を展開させる。それを根拠に次の主張になる。

林紓は、小説体書き直されたラム『シェイクスピア物語』を訳すこととシェイクスピア作品を訳することは同じではないことに、気がついていない。
96頁

ラム名を出さなかったことが『シェイクスピア物語』と莎劇(詩)を区別していない理由となる。前に引用した「林紓が『吟辺燕語』の底本を記さなかったのも、ラムが『シェイクスピア物語』を書いたのは単なるシェイクスピア作品の圧縮にすぎず、両者の間には本質的な相違はないと考えたからであろう」(94頁)

と同様である。ラム名のないことが瀬戸博士によって問題にされている。

さらに、「通説発生の主な原因」だという。ところが、瀬戸博士は反対のことを別の箇所で書いているのだ。

(注：Q本を底本にし) 林紓はやはりシェイクスピア原作とのみ記したので、後に林紓はシェイクスピア戯曲を小説体に変えて訳した、と誤解されることになった。ラム『シェイクスピア物語』は著名であったので誤解の生じる余地はなかったが、クイラー・クーチは、当時の中国でほとんど知る人が無かったのである。72頁

「ラム『シェイクスピア物語』は著名であったので誤解の生じる余地はなかった」と書いて事実の認識が矛盾している。

ラムの名前を書いていない『吟辺燕語』は、劉半農と胡適が知らない風を装って最初から批判している。「著名であったので誤解の生じる余地はなかった」どころではない。

鄭振鐸が出てくる

すなわち、「林紓は戯曲と小説の本質的な違いが理解できず、依拠した底本の著者を記さず、これが鄭振鐸らの誤解、錯覚を引き起こす直接の原因となった。

“林紓はシェイクスピアの戯曲を小説化して翻訳した。”という通説が形成された主要な原因は、林紓自身にある」(106頁)と断定するのだ。とんでもない考えだといわなければならない。

25 「シェイクスピア作品ではないもの」

林紓がQの名前を出さなかった点を取り上げて同じ主張になる。

林紓は、シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介したのである。96頁

シェイクスピア、イブセン作品ではなくなったものをシェイクスピア、イ

プセン作品として紹介した林紓…… 97頁

シェイクスピア作品ではなくなったものをシェイクスピア作品そのものとして翻訳紹介した事実…… 101頁

改編者の名前をださないことが莎劇またイブセン作品について無知である証拠だと瀬戸博士は主張する。

林紓は小説と戯曲の相違が理解できず、シェイクスピア作品の翻訳と物語化、小説化されたラム『シェイクスピア物語』の翻訳は別のことであることが認識できなかった。だから、『吟辺燕語』刊行にあたって林紓はただ莎士比亞^{ママ}原著とのみ記し、ラムの名を挙げなかった。71-72頁

ラム、あるいはQの名前がないことが、林紓の「区別がつかない論」を直接証明するという瀬戸博士の認識だ。

だが、「林序」を分析した結果、林紓はシェイクスピアとラム『シェイクスピア物語』の区別をつけている事実を明らかにした。Q改編のシェイクスピアにおいても莎劇（詩）そのものからの漢訳部分がかなり占めてもいる。林紓は、莎劇（詩）と小説化した底本は区別している。ゆえに瀬戸博士の立論は成立しない。

もう一度引用して示す。瀬戸博士いわく「『吟辺燕語』の原本がシェイクスピアの梗概であることを明記しており、劉半農がそれに気がつかなかったとは考えにくい」

ラムの名前がなくとも劉半農は『吟辺燕語』が『シェイクスピア物語』であることを知っていた。劉半農は知っていながら知らないふりをして「豆と麦の区別がつかない」と林紓を嘲笑したのが事実だ。

ラム本を利用しながらラムの名前をださないシェイクスピア作品はある。瀬戸博士自身が紹介している。

（『女律師』）林紓訳『肉券』に基づき包天笑が脚色したもの……74頁

申報掲載の上演広告には、「『女律師』は『吟辺燕語』中の『肉券』に取

材し、英国莎翁の最も価値ある作品である」とある。76頁

文明戯『肉券』はその幕表の冒頭に「是劇出自英国文豪莎士比亞所著」とあるように、シェイクスピアから出た作品であるという自覚をもっている。77頁*42

上の作品は、莎劇そのものではない。シェイクスピアといいながら、文明戯の多くは『吟辺燕語』に基づいて脚本化している。これらについて瀬戸博士は「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介したのである」と批判しなければならなくなる。非難したか。文明戯関係者は特別扱いにして、林紓だけを批判するのであれば、それを一般に「二重基準」という。

清末民初の翻訳文学は、原作者を明記するものは一般にそれほど多くない。「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」漢訳は、たとえば以下のようなものがある。

『盗花（言情偵探小説）』莎士比亞原著、貢少芹訳意 上海・文明書局1916.6 / 1932.12六版

SHAKESPEARE “ King Henry the Sixth ” [民外0539]1916初版。原著為劇本、本書改訳為小説

「欧史遺聞・羅馬克野司伝」24（英）莎士比亞原著、林紓、陳家麟同訳 『上海亜細亜報』1915.9.10-10.3

[古二徳15]WILLIAM SHAKESPEARE, “ CORIOLANUS, ” IN *HISTORICAL TALES FROM SHAKESPEARE*, ED. A. T. QUILLER-COUCH, (LONDON: EDWARD ARNOLD, 1899), 9-38. (瀬戸108頁)「欧史遺文」と誤る。張俊才の目録にもなく詳細不明

「一斤肉」上海周樹奎桂笙（周桂笙）戯訳、南海吳沃堯胥人（吳胥人）編次 『新庵諧訳初編』下巻 上海・清華書局 光緒29(1903)孟夏

WILLIAM SHAKESPEARE “ THE MERCHANT OF VENICE ”（鄭志明）英国蘭姆姐弟改編的莎劇故事「威尼斯商人」

「一磅肉（短篇小説）」皞、燦 『申報』1910.1.13-17

WILLIAM SHAKESPEARE “ THE MERCHANT OF VENICE ” [文文284]
文言短篇小説、節訳自莎士比亞的戯劇「威尼斯商人」

これらは一部にすぎない。すべて底本を明記していない。すると瀬戸博士のいうように「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介したのである」。瀬戸博士は、それらを批判したか。だが、それらが問題視されたことはない。

底本について明記する習慣のなかった時代の翻訳であることを知らなければならぬ。なぜ、林紓だけが批判されるのだろうか。そちらの方が問題はより重大だ。

中国で発表されたシェイクスピア関連の翻訳をながめれば瀬戸博士の把握のしかたが独特であることがわかる。

「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」。これが林紓批判の出発点ではない。瀬戸博士は、まず林紓批判をすることを決めている。批判の理由はないかと探すと「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」ことが見つかった。そういう簡単な構造である。論理的な整合性があるわけではない。無理矢理でちあげた口実にすぎない。

原書が明記されているのが望ましい。しかし、現実には書物に書かれていないことの方が多い。翻訳であるのに創作にしてしまうことは普通に見られる。逆の例もある。作者、訳者が自由に行なうことのできる時代だった。それを瀬戸博士は知らないのか。現代の尺度を清末民初に当てはめるといふ誤りを犯している。

底本の特定は研究者がやるべきものだ。底本を書かなかった林紓に責任を押しつけてどうするのか。意味のないことだ。新しい発見のないそれは政治的文書であって研究とはいわない。

ラム本の日本語訳について瀬戸博士が著書にあげている作品（269頁）をふたつ紹介する。細かいところは補った。

翠嵐先生（鳴鶴藤田茂吉）訳述『（西基斯比耶叢書No.1）^{マキシム} 仏国某州領主麻吉侯情話：As you like it』（東京・春夢楼1883.7）。

（樽本注）単行本未見。（セキスピーア）、翠嵐生「春宵夜話」『郵便報知

新聞』掲載。「緒言」1883.3.14より「ゼ・ウイントルス・テール」3.15-28、「As You Like It」4.5-5.1、「The two gentlemen of Verona」5.3-24、「ハムレット・プリンス・オフ・デンマーク」6.2-21。川戸道昭、榊原貴教編『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》1 シェイクスピア集』大空社1996.6.28

英国西基斯比耶（シェキスピーヤー）著、日本井上勤訳『（西洋珍説）人肉質入裁判』東京・今古堂1883.10。

（樽本注）国立国会図書館近代デジタルライブラリー。また『明治文化全集』第14巻翻訳文芸篇、日本評論社1927.10.5所収

瀬戸博士は、自著269頁でそれに言及している。藤田、井上の両訳本には、どこにもラムの名前は見えない*43。

「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」のが中国の林紘だけかと思えば、日本にも先例があった。ほかでもなく日本の瀬戸博士が日本人の翻訳を名指しして批判したのとかかわらない。それを聞かされた中国の聴衆は大いに喜んだだろう。

両者の違いは、中国の林紘は日本の瀬戸博士によって批判され、日本の翠嵐先生と井上勤は、日本の研究者からシェイクスピアに関係する重要な翻訳を行なったと尊重されていることだ。

鄭振鐸らは「誤解」「錯覚」にもとづいて林紘を批判したという。それですむのだろうか。「文化大革命」を経て現在も林紘批判は続いているのだ。瀬戸博士の記述は、あまりにも無責任で軽すぎる。

26 加害者が被害者に成りすます

極め付きは次だ。「誤解」「錯覚」の原因を作ったのが林紘自身だから責任は林紘にある。ここまできると瀬戸博士がくりひろげる論理は、一般人には理解がむづかしい。私は荒唐無稽な主張だと考える。瀬戸博士は、加害者と被害者の関係を意図的に逆転させている。

戯曲を小説化して漢訳したと濡れ衣を着せた加害者は、文学革命派だ。着せられた被害者は林紘である。林紘は、戯曲を小説化して漢訳していない。小説をそのまま小説として翻訳した。やっていないことをやると批判される。林紘にとっては冤罪にほかならない。事実に基づき林紘がこうむったこの冤罪という事実を瀬戸博士はどうしても認めたくないらしい。瀬戸博士の立場は、そこにはないからだろう。

瀬戸博士は、加害者の劉半農、胡適、鄭振鐸らを擁護し、被害者の林紘を攻撃している。瀬戸博士のいう「誤った通説」は、被害者の林紘に責任を転嫁したものにほかならない。

瀬戸博士によれば、誤解をさせた林紘が悪いことになる。誤解させられた劉胡鄭らに責任はないという。やってもいないことをやると批判した加害者が、反対の被害者に成りすます。

これこそあの文学革命派の人々が林紘に対して実践した手口だ。

錢玄同と劉半農は「なれあいの手紙」によって林紘を攻撃した。しばらくして林紘が発表した短篇寓話小説2篇をつかまえて反対派からの攻撃だと針小棒大に宣伝した。はては陳独秀自ら軍閥からの圧力があるなどと風聞風説をまきちらして自分たちは被害者に成りすましたというやり方にほかならない。瀬戸博士は、中国の文学革命派の手法をそっくり模倣している。

どこか腑に落ちない。林紘は戯曲と小説の区別がついていない。これが主な問題だった。だが、瀬戸博士はいつの間にか底本作者の名前を出ささないの問題に論点をすり替えている。加害者が被害者に成りすます。違和感がある。

27 瀬戸博士は林紘を詐欺師に認定し林紘の名誉を毀損する

被害者である林紘が、なぜ加害者に逆転してしまうのか。ここがいちばん不思議なところだ。

林紘は「林序」において莎劇とラム本を区別して単語を使い分けている。だが、瀬戸博士はそれをわざと曖昧に翻訳して放置した。意図したものと思う。林紘が莎劇とラム本を区別できていない証拠とするためである。

瀬戸博士が次に取り出すのは、林紘に底本の作者名がないことだ。それについて瀬戸博士は、「林紘は、シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介したのである」と何度もしつこくくり返す。それが直接の原因になり鄭振鐸らの「誤解」「錯覚」を引き出した。底本であるラム本、Q本を明記しなかった林紘の方にこそ責任がある、と。

もう一度引用する。「林紘は戯曲と小説の本質的な違いが理解できず、依拠した底本の著者を記さず、これが鄭振鐸らの誤解、錯覚を引き起こす直接の原因となった。『林紘はシェイクスピアの戯曲を小説化して翻訳した』という通説が形成された主要な原因は、林紘自身にある」(106頁)

瀬戸博士は、説明にまわりくどい言いまわしを採用し理解困難に導いている。了解するのは簡単ではないが、林紘に責任を転嫁していることはわかる。わざと不透明にしているのだろう。

しかし、ある単語を投入すると疑問が氷解する。「うそ」「虚言」である。

林紘は嘘をついた。「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」。つまり、瀬戸博士は林紘を「嘘つき」と指摘している。しかし、「嘘つき」では林紘のこうむった冤罪の重さと時間的長さに比較して軽すぎる。また、「誤った通説」が中国の学界で80年以上も保持されている事実と釣り合わない。

そこで私は「詐欺」という言葉を使う。法律用語ではなく、普通の意味で「あざむきだます」である。詐欺を行なった人だから詐欺師だ。瀬戸博士は林紘を詐欺師に認定している。瀬戸博士が説明する語句とその文脈から見てそれ以外に理解のしようがない。

私が瀬戸博士の思考経路を解説しよう。

林紘はラム本、Q本を漢訳したが、それをシェイクスピア作品であると偽って差し出した。シェイクスピア作品ではない「偽物」だから、それは詐欺行為である。林紘は詐欺師、ペテン師だ。林紘は、劉半農、胡適、鄭振鐸らを騙した。劉胡鄭らは詐欺にあったのだから被害者である。まさに陳独秀ら文学革命派に独特の論理を模倣している。

日本の中国現代文学演劇研究の専門家が、被害者の林紘の方にこそ責任がある

という。理由は詐欺師だから。瀬戸博士を除いては提出できないトンデモ説だ。中国の知識人を侮蔑するにも程がある。胡適にならえば、瀬戸博士は「林紓にとつての大罪人である」。

瀬戸博士はこの瞬間、林紓に対して新しい冤罪事件を引き起こした。しかも林紓の名誉にかかわる。

張俊才、王勇(2012)*⁴⁴は、銭玄同と劉半農が捏造した「なれあいの手紙」そのものが「林紓の人権と名誉権に対する侵害である(対林紓人権と名誉権の侵害)」(220頁)と述べた。

瀬戸博士がこのたび林紓を詐欺師に認定したことは、今までとは別の次元で林紓の名誉を毀損している。瀬戸博士がどう言いつくろおうともそれが事実である。

日本の研究者瀬戸博士が、中国の知識人林紓の名誉を毀損するのだ。前代未聞の事件が出来た。私は自分の目を疑う。

中国の学界では、今でも林紓を保守派の代表者だとして批判している。しかし、さすがに詐欺師とまでは言っていない。現代中国の学界でも思いつかないとんでもない珍説である。瀬戸博士の林紓に対する名誉毀損は、中国の研究者を超越した言説というべきだ。ぜひとも中国で紹介してもらいたい。瀬戸博士の意見に賛同する中国の研究者が出てくるかどうか。見物である。

瀬戸博士の文章は、新しい箇所といえば林紓を詐欺師に認定し彼の名誉を毀損したところだけ。それ以外に新しい発見は皆無だ。これほど無責任な文書を私は久しぶりに読んだ。

中国の知識人林紓を詐欺師に認定し林紓の名誉を毀損する瀬戸博士のこの荒唐無稽な文書が、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム『演劇映像の国際的教育研究拠点』『演劇博物館グローバルCOE紀要 演劇映像学2008第1集』(2009.3)に掲載された事実は記録された。また、それを『中国のシェイクスピア』という単行本に収録したことも今後忘れられることはないだろう。

28 余 話

胡適は林訳『吟辺燕語』に関する劉半農の批判が成立しないことを知って単語

を修正した。鄭振鐸は、それを理解していた。だからこそ、後年、誰にも気づかれないように証拠の作品を入れ替え、用語を「戯曲」と「小説」に変更したのだ。しかし、そのばあいも、林紘は莎劇（詩）あるいはイブセンの戯曲から直接漢訳したわけではないから、基本単語の変更には何の意味もなかった。鄭振鐸がその事実を知らなかっただけ。彼が林紘に濡れ衣を着せたのは本当のことだ。

鄭振鐸がほどこした細工についても、後の研究者は「中国現代文学演劇研究の末席に連なっている」（317頁）専門家の瀬戸博士を含めて誰も察知することができなかった。莎劇を小説に書き換えたと批判し続けた。これが現実だ。劉半農のばあいといい、鄭振鐸のばあいといい、研究者たちは目の前にある劉胡鄭の指摘がどういう内容かを検討することはなかった。

私の「小説という虚構は、あらゆる制約から自由である。何をどのように書いてもよい」（103頁）は、創作の大原則を述べている。文脈がある。銭玄同と劉半農が『新青年』で発表した「なれあいの手紙」が捏造であるにもかかわらず、林紘の創作は許さない。それは矛盾しているから理解しがたい。そう説明しているだけ。

作品を発表したあとの評価は、その時の、あるいはそれ以後の社会と政治の状況によってどのようにも変化する。中国の「文化大革命」を瀬戸博士はすっかり忘れてしまったようだ。創作の大原則は、その時々々の評価とは別問題である。ましてや「三島由紀夫の『宴のあと』裁判（一九六一）はじめモデル小説をめぐる日本での各種のトラブル」とはなんの関係もない。創作の大原則を認めないで中国現代文学演劇研究はできるのだろうか。

林紘批判という結論が先にあり、それに合うように「林序」を読む。瀬戸博士は、そういう大勢のなかのひとりだった。

林紘を詐欺師と認定し林紘の名誉を毀損する瀬戸博士が次のようにいう。「樽本氏の「冤罪」説は出発から無理があるのである」。私は失笑するだけ。

瀬戸博士は、反論するためにだけ反論している。そればかりか瀬戸博士は次元の違う新しい冤罪事件を引き起こし林紘個人に対する名誉毀損まで行なっている。ここは注目に値する。

私は鄭振鐸を「評論の魔術師」と称したことがある。瀬戸博士は、林紘の無知

を証明するために日本語訳をわざとあいまいにして提出した。誰も思いつかない林紘詐欺師説を作り出した。林紘評論にまつわる高等技術の保持者というしかない。瀬戸博士の方が鄭振鐸をある意味で上まわるといってもいい。詐欺師という単語を使用せず、それを知らしめる。虚偽をおおいかくし林紘を貶めるための荒唐技術である。一般人には理解が困難であるはずだ。負の方向に導く技巧を駆使する文章が日本において書かれ公表された。この事実は否定することができない。

どうぞ瀬戸博士には、林紘詐欺師説を主張し林紘の名譽を毀損しながら、劉半農、胡適、鄭振鐸らに対する強力で絶大な支持を今後とも未永く継続してもらいたい。

錢玄同と劉半農の「なれあいの手紙」において林紘批判を実行したのが1918年だった。林紘の冤罪が明らかにされる2007年まで89年が経過している。林紘が死去した1924年から数えれば83年間、劉半農、胡適と鄭振鐸たちが言いたてる「区別がつかない論」は研究者全員を欺き騙し通すことができた。それだけの効力があつたことになる。それどころか、林紘冤罪事件を知らない研究者は、いまだに「区別がつかない論」をくり返し主張しつづけている。このたび日本の瀬戸博士によって林紘が詐欺師であるというトンデモ説とそれに関連して名譽毀損が加わった。ますますにぎやかだ。

29 林紘冤罪事件 魯迅との関係

おさらいする。林紘批判は1918年に突然出現した。文学革命派の一員である劉半農が錢玄同（王敬軒は筆名）と仕組んで「なれあいの手紙」を捏造して始めた。王敬軒が林紘を「現代の文豪（当代文豪）」*45と持ち上げ、劉半農がそれに反論し林紘には文学的意味はない、などと徹底的に批判するという段取りである。あらかじめそのように相談していた。

陳独秀、錢玄同、劉半農、胡適、魯迅周作人兄弟らが、林紘を打倒すべき保守派の代表的人物だと勝手に指名した。どういう状況だったかを説明する。

当時、文学革命派の言説が無視されたことはよく知られている。だからこそ錢玄同と劉半農は「なれあいの手紙」を捏造して林紘を批判し保守派の代表に指名

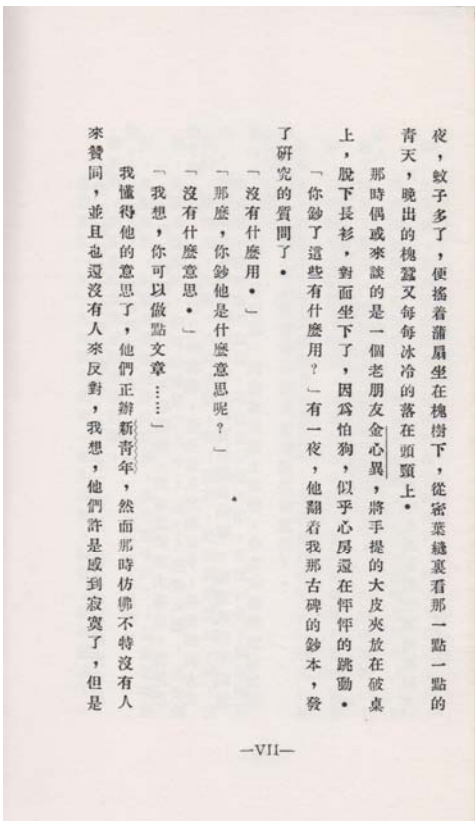
し引きずり出したのだ。

反応がないことを、劉半農は「なれあいの手紙」の冒頭で自ら白状している。

さて記者（劉半農）らが新文学を提唱して以来、反対する言論を聞くことができずまったく残念に感じていた。今、意外にもあなた（王敬軒＝錢玄同）のような老先生が「出馬（乗り出す）」してきた。これは極めて歓迎すべきことであり、非常に感謝しなくてはならないものだ。268頁 / 影印本310頁

こういうことを書くのが「なれあいの手紙」である。

当事者であった魯迅は、『呐喊』の「自序」で興味深いことを記している。古い友人の金心異がよく訪ねてきた頃の話だという。



彼らはちょうど『新青年』を発行していた。しかし、その時は誰も賛成してくれないばかりか、反対するものもない。だから、彼らはたぶん寂しさ（原文：寂寞）を感じていたのだろう、と私は思った。7頁*46

林紓が書いた短篇小説「荊生」は、文学革命派を揶揄した作品だ。金心異は、その登場人物のひとり。錢玄同をモデルにしていると言われている。漢字の当て方からしてそうだろう。錢玄同こそ「なれあいの手紙」を執筆して林紓批判を発動した人物のひとりだった。林紓が後に発表する短文の中で創造した人物名を魯迅は時間経過を無視

してわざわざここで使用している。特別の意図があるのは明白だ。魯迅の「自

序」、特にこの部分には、林紓批判を実行したなれあい芝居が色濃く影を落としていることがわかる。魯迅は当時の状況を説明してとても生々しい。

ことの経緯を順にあげる。

- 1 銭玄同（王敬軒名を使用）と劉半農のなれあい芝居は、1918年3月15日の『新青年』第4巻第3号に掲載された。
- 2 胡適が林紓をシェイクスピアにとっての大罪人だと批判した。『新青年』第4巻第4号（1918.4.15）だ。
- 3 魯迅が銭玄同に勧められて「狂人日記」を発表したのが『新青年』第4巻第5号（1918.5.15）だった。
- 4 金心異（銭玄同）が登場する林紓の「荊生」は、『新申報』1919年2月17-18日に載った。
- 5 そして魯迅の『呐喊』「自序」の署名日付は1922年12月3日である。

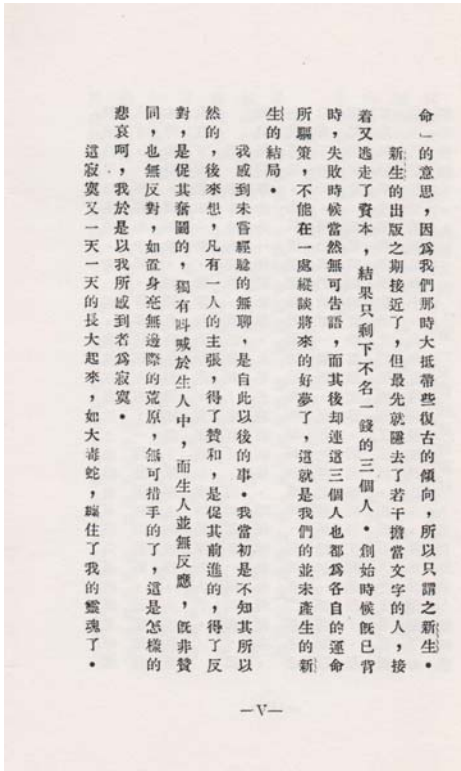
林紓批判開始から魯迅の「自序」まで約4年の時間しか経過していない。

出来事を以上のように時間順にならべてみれば、魯迅の5「自序」に金心異の名前が出てくる異常さがわかる。すなわち、3の「狂人日記」執筆以前に会っていたころの銭玄同が金心異と呼ばれていたはずがない。それにもかかわらず後の4「荊生」でようやく出てくる金心異をわざと使った。魯迅が時間経過を歪めてまで金心異の名前を登場させたのは、林紓批判事件に関連するからだ。特別の意図がある、と私がいう理由だ。

文学革命派は、『新青年』を中心に文章を発表する。だが、賛成するものも、反対するものも出てこない。敵を求めて得ることができない。まったくの無反応であったことを魯迅が述べている。彼の実体験だった。文章の雰囲気は深刻さをただよわせている理由だろう。

魯迅は、いかにも傍観者のように書いている。だが、実は魯迅自身も林紓批判に直接関係していた。

魯迅のいう「寂しさ（寂寞）」については、別の箇所でも次のように説明してい



る。

およそひとりの人の主張というものは、賛同をえればその前進がうながされるし、反対にあえばその奮闘がうながされるのだ。見知らぬ人の中でただ大声で叫んでも、見知らぬ人は反応しない。賛同するわけでもなく、反対もしない。まるで際限のまったくない荒野に身を置いたようで、なすすべがない。これはなんと悲しいことだろうか。私はそこで私が感じたものを寂しさ（原語：寂寞）と考えたのだった。5頁

この文章が特異なのは、「反対にあう（得了反対）」ことを重視しているところ

だ。反対があればそれに反発して奮闘できる（是促其奮闘的）。バネとするための役割を積極的に認めている。

文学革命派は反応のない現実には直面していた。彼らは、自分たちが感じていた「寂しさ（寂寞）」を打破することができない。魯迅はここで「なすすべがない（無可措手的了）」と書いた。いかにも無力で立ちつくしているように描いている。それは事実ではない。文学革命派は「なすすべがない」どころか事態打開のための確かな手段を持っていた。なれあい芝居を捏造するという方法である。

敵がいなければ動きがとれない。だが、自分に敵対する者がいれば、それに反対することで力を発揮し奮闘できる。敵の存在こそが彼らには不可欠だった。どうしても敵対者に出てきてもらわなければならない。王敬軒をでっちあげ、林紆を称賛する。劉半農がそれに反論する。手間をかけた戦法だ。その目的は、出てこない自分たちにとっての敵を自力で引きずりだすことだった。

彼らが敵に指名したのは、数え年六十七歳の老知識人林紆だ。無理矢理である

うがなかろうが、彼らの敵が林紓だとようやく明確にした。「自序」を読めば、魯迅はそう説明しているのとかわらない。金心異という林紓がらみの名前を使ったのがその証拠である。

文学革命派は、林紓を無知だと非難した。「詩」と「戯」、さらに「戯曲」と「記叙体」、のちに「小説」と「戯曲」の区別がつかないと攻撃した。自らの運動を推進するために、当時彼らにはそうする必要があった。しかし、林紓にしてみれば身に覚えのないことだ。原作が小説である外国作品のラム本を漢訳して小説になるのは当たり前ではないか。といて、林紓らがそう反論することはなかった。基本的態度は、無視することだった。林紓が「荊生」という揶揄小品を発表したのは、なれあい芝居からほとんど1年近く後のことだ。それほど反応のない時間があった。

30 「林紓を罵る快樂」

文学革命派の人たちにとっては特別に意味のある林紓批判だったことはわかる。だが、後の秀逸な研究者たちについては、理解しにくい。学力に優れた人たちだから、資料と先行文献を熟読しただろう。自分で深く考えたに違いない。ところが、提出されたその結果に私は物足りなさを感じざるをえない。「林序」において林紓が注意深く区別して使用した用語をそのままに読もうとはしなかったからだ。彼らは劉半農から胡適をへて鄭振鐸に継承された根拠のない林紓批判を受け入れて林紓を非難攻撃し嘲罵した。林紓批判の結論が先に決まっているからだ。林紓批判で思考が固定されたままなのだ。すでに下された評価をそのままくり返すだけ。非難攻撃の文句を複写して終わりだ。私はそれを「林紓を罵る快樂」と表現している。ただ、中国には中国特有の事情があるかもしれない。

残念なのは、学問の自由を享受しているはずの海外の秀でた研究者たちだ。「滌外奇譚叙例」に使用されている単語について漢訳者がほどこした説明を読もうとはしない。自分の考えを押しつけて解読し、誤る。また、『吟辺燕語』「林序」を熱心に読んだはずだが、これも恣意的に解釈し、当時の中国の知識人である林紓たちには知識がないと批判した。私の知る限り例外なく、鄭振鐸らが実行

した誤った林紘批判に便乗し同じように林紘を非難攻撃したのである。戯曲を小説に書き換えた、とことあるごとに罵った。無実の罪を着せつづけた。まるで目に見えない何かの法則に支配されているかのようにも思える。日本の瀬戸博士にいたっては、林紘に詐欺師の濡れ衣をきせて林紘の名誉を毀損している。

以上、漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序2種類を検討した。確認できたのは、莎劇が詩であり、ラム本が散文であることを漢訳者たちは明確に理解していることだ。

そうすると、今までの研究はなんだったのかという疑問、懐疑が生まれてくる。研究者たちが真摯に序文を読んだ結論が的外れなのだ。あらかじめ下されている批判的な結論をそれらの序文に当てはめ、利用できると思われる部分を自由に選択し組み立てているだけ。ラム本の漢訳者は誤解していると一方的に非難している。中国の当時の知識人に対する評価がきわめて低い。それはどう考えても正しくない。

研究者たちが当時の著名知識人林紘らを一方的に否定し続ける状態がこれほど長年にわたっているのはどういうことだろうか。林紘の名誉を毀損する瀬戸博士が新しく提唱する林紘詐欺師説も見逃すことはできない。大きな疑問を感じる。

【注】

- 1) 黄焯結「訳本解説：《吟辺燕語》的個案研究」『天津外国語学院学報』2008年第4期 2008.7.20。38頁。黄焯結は、該論文の中で林紘らがシェイクスピアの戯劇原著を文言小説にかえて訳した、とあいかわらずくり返している。41頁。戯曲と小説の区別がつかなかったと批判する。この誤った認識は中国学界において相当に深く根づいている。
- 2) 彭建華「論林紘的莎士比亞翻譯」『福建工程学院学報』第10卷第5期（総第58期）《林紘研究專刊》 2012.10.8。460頁
- 3) 樽本「阿英による林紘冤罪事件 『吟辺燕語』序をめぐる」『清末小説』第31号 2008.12.1。『林紘研究論集』2009所収
- 4) 版本は以下を参照した。CHARLES AND MISS LAMB. *TALES FROM SHAKSPEARE*. LONDON: HENRY G. BOHN, 1843. CHARLES LAMB. *TALES FROM SHAKSPEARE*.

LONDON: GEORGE ROUTLEDGE AND SONS, LIMITED, 刊年不記。見てのとおり SHAKSPEAREと表記している。本稿ではSHAKESPEAREを使用する。

- 5) 阿英([阿四] 242頁)は「光緒二十九(1903)年十一月」とする。刊年を考える参考資料として次を示す。上海図書館の目録には、達文社の刊行物は1903年のものが2種類収録されている。『倍根文集』光緒二十九年九月、『野蛮之欧洲』光緒二十九年十月
- 6) シェイクスピア名不記、上海周樹奎桂笙(周桂笙)戯訳 南海吳沃堯胥人編次『新庵諧訳初編』下巻 上海・清華書局 光緒29(1903)孟夏、初出未見。海風主編『吳胥人全集』第9巻 哈爾濱・北方文藝出版社1998.2所収。張純校点。據上海清華書局本点校収入
- 7) 葛桂録『中英文学関係編年史』上海三聯書店2004.9。126頁。それより以前の1896年に上海のSt. John's University(聖約翰大学)の学生が英語で「ヴェニスの商人」を演じたとある。ALEXANDER C. Y. HUANG *CHINESE SHAKESPEARES: TWO CENTURIES OF CULTURAL EXCHANGE*. COLUMBIA UNIVERSITY PRESS, 2009。69頁
- 8) 董健主編『中国現代戯劇総目提要』南京大学出版社2003.12。19頁
- 9) 朱静「新發現の莎劇《威尼斯商人》中訳本：《剗肉記》」『中国翻訳』第26巻第4期 2005.7
- 10) 戈宝権「莎士比亚作品在中国」中国莎士比亚研究会編『莎士比亚研究』創刊号、杭州・浙江人民出版社1983.3。また『中外文学因縁 戈宝権比較文学論文集』北京出版社1992.7
- 11) 郝田虎「彌爾頓在中国：1837-1888，兼及莎士比亚」『外国文学』2010年第4期 2010.7 電字版
- 12) 梁啓超「飲冰室詩話」『新民叢報』第9号 光緒二十八年五月初一日(1902.6.6)
- 13) 李春江『訳不尽の莎士比亚 莎劇漢訳研究』天津社会科学院出版社2010.11。33頁
- 14) 張泗洋主編『莎士比亚大辞典』北京・商務印書館2001.1。1254頁
- 15) 参考までに次をあげる。北岡正子『魯迅文学の淵源を探る 「摩羅詩力説」材源考』汲古書院2015.6.30。
- 16) 雷君曜は、雷瑯、松江県人、1888年の挙人。掃葉山房の編集者、『申報』主筆を務めた。文娟『文学場域変革中的交融共生 掃葉山房説部及雑誌刊行研究』上海大学出版社2015.11。132-133頁。肖像写真あり。孝廉は挙人のこと
- 17) 宋莉華『近代来華伝教士与児童文学的訳介』上海古籍出版社2015.11 中西文学文化関係研究叢書。284頁

- 18) 陳歴明「莎劇最早的漢訳本：《海外奇譚》」『外国語（上海外国語大学学報）』第39卷第1期 2016.1.20
- 19) 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房2016.2.29
- 20) 張曉陽XIAO YANG ZHANG, *SHAKESPEARE IN CHINA: A COMPARATIVE STUDY OF TWO TRADITIONS AND CULTURES*. NEWARK: UNIVERSITY OF DELAWARE PRESS; LONDON: -ASSOCIATED UNIVERSITY PRESSES, INC. 1996. 前出張泗洋は父親らしい。
- 21) MURRAY J. LEVITH, *SHAKESPEARE IN CHINA*. NY: CONTINUUM, 2004 / 2006. p.4. 6頁であいかわらず「リチャード2世」などを不完全なたちで翻訳したと説明して間違っている。But even then China's encounter with Shakespeare's plots was still obviously incomplete.
- 22) YANNA SUN, *SHAKESPEARE IN CHINA*. DRESDEN: 2008.4 電字版。別の読み方があるのかもしれないが、本稿では姓をサンと読んでおく。17頁であいかわらず「ジュリアス・シーザー」などを脚本ではなく小説に翻訳したと書いて間違っている。Unfortunately, he translated these plays once again in classical Chinese prose instead of the form of drama.
- 23) 孟憲強『中国莎学簡史』長春・東北師範大学出版社1994.8。8頁
- 24) 李偉民『中国莎士比亚批評史』北京・中国戯劇出版社2006.6。308-309頁
- 25) ALEXANDER C. Y. HUANG, *CHINESE SHAKESPEARES: TWO CENTURIES OF CULTURAL EXCHANGE*. COLUMBIA UNIVERSITY PRESS, 2009. 注7で紹介した。51、71頁。
- 26) 葉庄新「対林紆訳莎劇故事的再認識」『外国語言文学』2007年第3期（総第93期）2007.9.20
- 27) 李偉昉「接受与流变：莎士比亚在近現代中国」『中国社会科学』2011年第5期 2011.9.10
- 28) 費春放 FAYE CHUNFANG FEI 編訳, *CHINESE THEORIES OF THEATRE AND PERFOEMANCE FROM CONFUCIUS TO THE PRESET*. (『中国戯劇理論：從孔子到当代』) THE UNIVERSITY OF MICHIGAN PRESS, 1999
- 29) 周羽「林訳《吟边燕語》的誤解与魅力」袁進主編『中国近代文学編年史 以文学廣告为中心（1872-1914）』北京大学出版社2013.5
- 30) 王佐良「莎士比亚在中国的時辰」『莎士比亚緒論 兼及中国莎学』重慶出版社1991.4
- 31) 魏策策「以《吟边燕語》為例探究林訳之“訛”」『福建工程学院学報』第10卷第5期

(総第58期)《林紵研究専刊》 2012.10.8

- 32) 林元彪「魏易的翻訳」『外語教学理論与实践 (FLLTP)』2012年第3期 2012.8.25。通俗教育研究会會員魏易訳『泰西名小説家伝略』通俗教育研究会1917.3
- 33) 彭鏡禧CHING-HSI PERNG “CHINESE *HAMLETS*: A CENTENARY REVIEW” 2000 電字版
- 34) 李如茹LI RURU, *SHASHIBIYA: STAGING SHAKESPEARE IN CHINA*. HONG KONG UNIVERSITY PRESS 2003
- 35) 胡適「建設的文学革命論」『新青年』第4巻第4号1918.4.15
- 36) 神田一三「早期漢訳ドーデ「最後の授業」 胡適訳「最後一課」のばあい」1-4 『清末小説から』第112-115号 2014.1.1-2014.10.1
- 37) 徐錦 TSUI KAM JEAN, *REWRITING SHAKESPEARE: A STUDY OF LIN SHU'S TRANSLATION OF TALES FROM SHAKESPEARE*. THE UNIVERSITY OF HONG KONG, 2008.8 電字版
- 38) 阿英「翻訳史話」第4回『小説四談』上海古籍出版者1981.12。244頁。執筆は1938年
- 39) 呉慧堅「文学翻訳の価値：以“詩意”開啓原作の新旅程 従本雅明的翻訳觀看莎士比亞作品漢訳」『広東教育学院学報』第29巻第1期2009.2 電字版 91頁
- 40) 鄭振鐸「林琴南先生」『小説月報』第15巻第11号 1924.11.10
- 41) 劉半農「文学革命之反響」『新青年』第4巻第3号 1918.3.15
- 42) 瀬戸博士は、同じ文章を使いまわしている。次の128頁も同文。瀬戸宏「第五章 六大劇団聯合演劇の考察 文明戲の最盛期」『中国話劇成立史研究』東方書店2005.2.25
- 43) 参考：富原芳彰「『該撒奇談』に関する覚書」『一橋論叢』第50巻第1号 1963.7.1 電字版。「逍遙の『該撒奇談』が出る前の年、明治十六年には、有名な井上勤訳『人肉質入裁判』〔『ヴェニスの商人』〕と「翠嵐先生訳述」の『(西基斯比耶叢書No.1) As you like it 仏国某州領主^{マキシム}麻吉侯情話全』というのが出ている。以上に挙げた訳者たちも、シェイクスピアの原文に目を通してはいたであろうが、かれらが実際に翻訳するにあたっては、ほとんどすべての場合、ラムの『シェイクスピア物語』が底本をなしていたことがうかがえる。」45頁 / 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』明治文学研究第5巻 春秋社1961.9.15 / 1966.3.10二刷。41-42頁。「 明治十六年 ……春宵夜話(後閑話) 翠嵐生 報知新聞 / ラム「シェイクスピア物語」の紹介、翠嵐とは藤田鳴鶴の戲号なり。 ウイントルス・テール As You Like It. ヴェロナの二紳士 ハムレット」471頁

- 44) 張俊才、王勇著『頑固非尽守旧也：晚年林紘的困惑与堅守』太原・山西出版伝媒集団、山西人民出版社2012.1
- 45) 「当代文豪」は商務印書館「林訳小説叢書」の広告（『教育雑誌』1914.7.14）に使用された語句。ヒルMichael Gibbs Hillの指摘による。Michael Gibbs Hill, *LIN SHU, INC., Translation and the Making of Modern Chinese Culture*. Oxford University Press, 2013. 211頁。広告写真あり。
- 46) 魯迅著、周作人編『呐喊』新潮社1923.8 文藝叢書。7頁

【参考文献】

- 小澤康彦「ラムについての同時代批評 『シェイクスピア物語』など子供有向けの作品をめぐって」『イギリス・ロマン派研究』第16号 1992.3.20
- 鄭 鈺「愛情与契約：重読林紘の訳作《吟辺燕語》」原載『語文学刊』2006年第10期、（「林訳与“林訳小説”」）陳錦谷編輯『林紘研究資料選編』上冊 福建省文史研究館編2008.6

林紘冤罪事件簿 あとがき

これは、林紘が研究界に向けて仕掛けた「爆弾」ではないのか。

爆弾は、林訳シェイクスピア、林訳イプセンなど翻訳作品そのものに直結している。攻撃対象は、林訳小説の批判者たちだ。通常と異なるのは、林訳小説称賛者の一部もその対象に含まれる。原作の戯曲を小説化したと記述する研究者は、林訳小説を最終的に正の方向で評価しても容赦はしない。起爆装置は、林訳小説そのものに装填されている。ただし、それが起爆装置であることに気づかない人には、爆弾の存在も認識できない。見えない爆弾だ。林訳小説に関する評論が公表されるその研究界にひっそりと仕掛けられていた。ただし、林紘自身は意識して行なったのではない。結果としてそうなった。

一連の林訳冤罪事件を追跡しながら、私はたえず以上のように思った。

銭玄同、劉半農らが、文学革命を継続するために敵対者を必要とした。彼らがムリヤリ選び出したのが、古文を使った翻訳で有名な林紘である。文学革命派は、林訳小説批判をはじめた。批判の根拠のひとつは、原作の戯曲を小説化して翻訳したことだ。この批判に対して、林紘は、ひとつも反論しなかった。論争もしていない。不思議なことだと感じる。

林紘からの反論があれば、どうなっていたか。冤罪事件は発生しなかった可能性もある。だが、結局のところ林紘は弁明をしていない。彼は、そういう性格だったらしい。もっとも、林紘から見れば、文学革命派は話の通じない人々だ。あえて無視したということができる。説明をしないから論争も生じない。文学革命派が一方的に批判するだけである。しかも、林紘の死後に鄭振鐸がダメ押しのようにして林訳批判を実行した。林紘が口をだすわけもない。冤罪事件は、起こる

べくしておこったといえよう。

林紓からの反論が、ない。研究者のだれもが、林訳小説そのものに大きな欠陥があることを疑わなかった。実行されているその批判自体が正しいものだ、とみなが判断した。だからこそ、多数の研究者が後追いをしたのである。それには、自分で検討することなしに、ということばをつけ加えなければならないだろう。

実をいえば、1908年、スペンサーの寓言詩を漢訳したとき、林紓らは、底本としたマクルホーズの名前を出している。それと同じことをシェイクスピアの歴史劇、あるいはイプセン作品について実行してもよかった。だが、林紓はそれをやらなかった。底本とした小説化本については、明記しなかったのだ。

劉半農、胡適はラム本が底本であることを知りながら知らないふりをして林訳を批判した。鄭振鐸は、今でこそわかるのだが、当時、林訳について詳しく調べてはいない。底本が別にあることを知らずに襲いかかった。想像すらしていない。戯曲を勝手に小説化したと一方的に断定し、批判をはじめた。結果として、ことばは悪いが、林紓の意図せぬ策略にはまったことになる。

多くの研究者が、鄭振鐸に追随し同じ批判をくりひろげた。林訳小説批判という旗のもとに内外の著名な研究者を含めて、集まるだけの人が全員集合した。研究界の優秀な研究者たちだ。ただし、彼らは鄭振鐸によって打ち立てられた定説について疑うことを知らなかった、ということ是可以する。長期間にわたるからどれだけの数にのぼるのかわからないくらい研究者の多くが参加してきた。そこに、冤罪という名前の特大爆弾が破裂する。林訳小説批判を口にした研究者ばかりでなく、たとえ林紓を支持し擁護した人であっても、戯曲の小説化を認めた全員が吹き飛ばされるという悲惨な状況が出現した。ご覧になったとおりである。

2007年、その起爆装置に触れたのが、日本人である私というわけだ。

1916年シェイクスピア歴史劇を、クイラー＝クーチ版小説化本にもとづいて漢訳したと明らかにせずに発表してから、数えて91年目であった。かくも長き期間、作動するのを待ち続けた爆弾があったであろうか。林訳小説を読む読まないは関係なく（林訳小説そのものを読むことなしに批判する人がいることを指している）、戯曲の小説化を筆にした研究者の全員が、負傷した。林紓に無実の罪を押しつけ続けたことに対して相応の責任をとらなければならないという意味だ。実のどこ

る、中国文学研究界は、小さくない痛手をおったといわざるをえない。

だいぶ前のことだ。林訳小説の限られた作品だったが、私は、原作と比較対照したことがある。その林訳は、逐語訳ではない。当たり前だ。なぜなら、林紘は、外国語を理解しなかった。原作が翻訳口述されるのを聞いて古文になおして筆記しているからだ。だが、ほぼ原文のままに漢訳していることを私は理解した。

その経験からいうと、シェイクスピアあるいはイプセンの戯曲を漢訳するにあたり、林紘が体裁の異なる小説体にするとは考えにくい。これが出発点である。たしかに、原作を刈り込んで翻訳している作品もある。誤訳も避けられない。しかし、戯曲の小説化は、それらとは基本的に、また質的に異なる行為だ。

一方、研究界では、戯曲を翻訳して小説に書きかえたと一貫して林訳小説批判をくり返している。どういうことなのか。作品によっては、そこまで違うことを林紘は行なったのであろうか。疑問を感じた。

原作が不明のばあい、中国の学界における過去の例をいえば、翻訳を装った創作ではないかと疑われる。呉趼人の「電術奇談」、魯迅の「造人術」などがその見本だ。前者については、今でも再創作だと信じている研究者がいる。原作を私が明らかにしたにもかかわらずだ。

ところが、原作と翻訳がまったく異なっている林訳シェイクスピア、林訳イプセンについては、なぜか創作、再創作ということにはならない。批判の理由にされるだけである。

林紘批判の経過をあらためて追跡したのが論文「林紘を罵る快樂」だ。

題名を見て不思議に思う人もいるだろう。だが、私にしてみれば、林紘に関する多くの論文を読んで必然的にたどりついた表現なのである。私がいただいた率直な印象だといいなおしてもいい。

多くの研究者が「林紘を罵る快樂」に全身を浸して文字通り楽しんでいるように見える。林紘の死後、魯迅は彼のことを「ファシスト」だと罵った。魯迅がいうのであれば、安心して林紘のことを非難することができる。事実、研究界では、長年にわたり多数の研究者が参加して林紘を罵倒し続けている。約90年を経過するその時間の長さは、私の想像をこえる。

林紘が文学革命の反対者であったという事実は意識しながら、私は、彼が批判

にさらされる前段階から調べなおした。そこから奇妙な事実が浮かびあがってきたのだ。

銭玄同と劉半農が自作自演の林紓批判をくりひろげたことは、有名な話だ。その時、劉半農が林訳小説を批判する根拠に『吟辺燕語 [シェイクスピア物語]』をあげた。劉は、もとの戯曲を小説化したと林紓を責めるのである。

今では、誰でも知っている。『シェイクスピア物語』は、ラム姉弟の原作だ。小説化してある『シェイクスピア物語』を翻訳の底本にすれば、出てくる作品（『吟辺燕語』）が散文体になるのは当然である。劉半農の林紓批判は、最初から成立する可能性がなかった。

この指摘は、研究者のだれかが行なわなければならなかった種類のものだ。しかし、私の知る限り、誰もが知らん顔である。（事実を指摘すると林紓を擁護すると考えられたのだろうか。「ファシスト」林紓を擁護する研究者は「ファシスト」であると批判される可能性もあったのか、と中国の「文化大革命」を日本で見ていた私は思ってみたりもする）

鄭振鐸の論文「林琴南先生」は、そこをうまくすり抜けている。つまり、林訳小説欠陥の理由として戯曲の小説化をあげるのは、劉半農と変わらない。どこが巧妙かといえば、『吟辺燕語』を批判の根拠からそ知らぬ顔をして引っ込めた点だ。鄭振鐸は、原作がラム姉弟のものだと知っていた。知っていて劉半農を無言のままに擁護したのだ。そのかわり、鄭は、シェイクスピアの歴史劇を掲げた。もとの戯曲が、書き換えられて小説になっている。誰の目にも明らかだ。林訳小説批判の根拠にされ非難の大合唱がはじまるのは、それ以来のことになる。ゆえに、私は鄭振鐸論文を「林訳小説冤罪事件の原点」とよぶ。

だが、普通に考えれば、戯曲の小説化など簡単にできるものではない。林訳の実物を見れば、一目瞭然だと私には思われる。わざわざ小説化するには、それこそ創作に匹敵するほどの時間と労力を必要とするだろう。戯曲と小説の区別がつかない、と罵倒するのは悪い冗談にしか聞こえなかった。自国の知識人を侮蔑するにも程があるだろう、と私は鄭振鐸について感じる。鄭に対して恨みを持つ理由は、私にはない。私は、彼とは時空ともども異にし、なんの関係も持たないただの日本人だ。林紓批判を追跡して論文を読んだ感想をいっているにすぎない。

だが、中国、日本その他を含めた研究界全体における評価は、一致して林紘による戯曲の小説化をいい続けている。例外は、ない。

ラム姉弟著『シェイクスピア物語』を漢訳して『英国詩人吟辺燕語』にしたのであれば、シェイクスピアの歴史劇についても同じことがあるだろう。これが、探索の出発点である。結果は、その通りだった。

問題は、シェイクスピアにとどまらない。調べてみれば、イプセンのばあいも同じだ。驚いたことに林訳スペンサーもある時期は冤罪事件になっている。

ある語句についても、悪いのはすべて林紘のせいになっている。だが、林紘が使用したかどうかは不明なのだ。このたび私はあらためて確認した。

本書において、林訳小説、あるいは林紘本人にまつわるいくつかの冤罪事件について説明してきた。詳細を明らかにしたから、問題は林紘とその共訳者にはないことがわかるはずだ。

林紘らは、翻訳するとき用いた底本について正確な記述をしなかった。しかし、だからといって彼らを責めるべきではない。当時の翻訳には、普通に見られる現象なのだ。責任は、翻訳者にはない。

鄭振鐸に代表されるのちの研究者は、翻訳底本について探索をせず検討することもなく誤った判断を下した。記述の不足を補うことが研究者の仕事ではないのか、と私は考えるのだ。結果として誤った判断にもとづいて林訳小説を非難した。つまり、研究者自身が冤罪事件にしてしまったのである。

必然的に多くの研究者はそれが濡れ衣であるという認識を持たなかった。だからこそその冤罪事件だ。中国文学研究史上、中国翻訳研究史上まれに見る冤罪事件だという理由である。何度くり返してもそれで十分だということはない。

ところが、林訳小説冤罪事件は、林紘にまつわる問題の一部分でしかなかった。

林訳小説についての定説が崩壊したのを自分で確かめたあとのことだ。あらためて、林紘が五四事件直前に批判された状況を慎重に観察した。従来いわれている事柄のひとつひとつについて事実と照合して確認する作業を続けたのだ。それは、私が「林紘を罵る快樂」論文の執筆を継続するために必要な過程だったからでもある。事実を追求していくと、その奥底に横たわっている得体のしれないものにぶつかった。

林紓がとった行動で目立つことがあった。すなわち、時の北京大学校長蔡元培に手紙を書き、さらにいわゆる「モデル小説」を発表した。これが、文学革命派の怒りを買った。林紓が、北京大学校長の蔡元培を批判し教授たちを中傷した、と宣伝するのだ。そればかりか、林紓は武力による北京大学抑圧を促しているまでいう。旧派の代表者として林紓が改革派の前に大きく立ちはだかった、という筋書きである。しかし、林紓が主として提出した文書は、見れば1通の手紙と2篇の短編小説だけなのだ。林紓は文学革命に大反対したといわれているのに、わずかにそれだけ。どこか、おかしい。

林紓批判のはじまりは、例の銭玄同（偽名が王敬軒）と劉半農の捏造文書、つまり「なれあいの手紙」だった。林紓は、むりやり旧派の代表に指名されたのである。その彼が、突然、文学革命派の敵対者としてなりふりかまわず大暴れするだろうか。私にしてみれば、自然にでてくる疑問だ。

というわけで、翻訳問題だけではすまなくなった。調べていくと、五四以前における林紓をとりまいた風説風聞についても、根拠なく林紓のせいになっている。事実と照合すれば、こちらも冤罪事件である。より大きな、と形容することができる。

林紓が文学革命派にとっての強力な敵対者になるように誘導し、大々的に取り上げたのは、文学革命派の方だった。林紓を旧文人の代表者にする計画は、みごとに成功につつまれて完成したわけだ。その大運動を背景にして、林紓小説批判は、根深くかつ長期間にわたって継続され現在にいたっている。これが、林紓批判の基本的構造である。

文学革命に大反対する守旧派の大物として林紓が存在しなければならなかったという意味だ。実像を何倍にもふくらませた虚像にすぎない。文学革命派の実行する林紓批判の構造からいえば、そうならざるをえなかった。

私はこの事実に出会った時、ア然とした。

少数ではあるが、林紓再評価について提言がなされたことはある。一方的な批判ではたしてよかったのか、という反省のことばもなきにしもあらずだ。だが、それらは提言にとどまっている。具体例をあげて証拠とし、文学史を書きかえる必要をのべる論文は、残念ながら出現していないといわざるをえない。本書が、

林紵再評価につながるきっかけになればさいわいだ。

各論文のなかで、私は同じことを重ねて書くことになった。この「あとがき」でも同様だ。ご覧になったとおりである。長年にわたり多数の批判非難中傷にさらされ続けてきた林紵を思うと、私の行なう反復などたかが知れている、とここでもしつこく書いておく。

本書に収録した各論文のいくつかは、日本で少部数発行する研究専門雑誌に発表した。研究者の注意を引かない可能性もあるだろう。だが、それは、私の関知するところではない。

最後にひとこと。くれぐれも誤解のないようお願いしたい。多くの先行研究論文を引用した。私は、それらを批判しているのではない。客観的に見れば、そういう事実があるというだけのことだ。

2007.5.1

樽本照雄

本書は、2006、2007年度大阪経済大学特別研究費による成果である。

林紓研究論集 あとがき

中国の文学革命は、生贄を必要とした。

生贄だから、同時代に活動している生身の人間ではなくてはならない。しかも、著名人であることが求められた。有名であればあるほど生贄としての意味も価値も強まる。

1918年、それに指名されたのが林紓である。当時、外国小説の翻訳でこれほど広く名前が知られている人物もめずらしい。以来、林紓は、文学革命の反対者代表としての役割をつとめるよう強制された。死後もかわりはない。現在にいたるまで、文学革命に反対した守旧派の代表者として罵られ続けている。林紓本人の意思とは無関係に、文学革命派によってそう位置づけられたのである。林紓は、文学革命の犠牲者なのだ。痛ましい、ということばさえ凍りつく。

最初におことわりしておく。本書は「林紓研究」と称してはいるが、林紓の全体を対象にしてはいない。前著『林紓冤罪事件簿』につづく第2論文集となる。林紓冤罪事件に焦点をあわせ、引き続いて追究する。すなわち、林紓の翻訳についての論考いくつか、および文学史における林紓の位置を論じた文章などを集めた。「陳独秀の北京大学罷免」は、題名だけでは林紓とは無関係に見えるかもしれない。だが、林紓に濡れ衣をきせた人々のうちのひとりが陳独秀だ。林紓の文章を読み解く上で欠かせないと考える。本書に収録した理由である。

林紓冤罪事件は、大きくいってふたつの要素によって構成される。ひとつは林紓そのものであり、もうひとつは五四事件直前に見られる林紓の行動である。

林紓はシェイクスピアとイブセンの戯曲を小説に変えて翻訳した、とって罵倒されつづけてきた。しかし、これが無実の罪であることは私の前著で明らかに

している。

非難のもうひとつは、ユゴー「九十三年」などの原作を大幅に削除して漢訳したことだ。翻訳の底本について推測しておいた。簡約版を使えば、大幅に削除したように見える。結局のところ、これについての林紘批判も事実無根であった。本書に収録した論文をご覧いただきたい。

1919年の五四事件直前において、林紘は文学革命に反対したという。林紘批判が継続されているもうひとつの大きな理由である。しかし、事実は異なる。林紘が行なったことを針小棒大にいて彼を反対者代表に仕立て上げたのは、文学革命派の方だ。これも前著に書いた。また、本書でも文学史における林紘の位置を検討してそれを確認した。

林紘に関する批判の根拠が基本的に存在しない。私は、この事実を明確にした。

私は、つぎのことを主張する。現在学界で定着している林紘批判は間違っている。林紘とその翻訳を正当な位置にもどして再評価する必要がある。

林紘に関する個々の事実を検証せず、翻訳の底本を探索することもなく、研究者の多くは林紘を罵る列に加わった。私は、研究者たちを批判しない。その事実がある、とだけ言っているだけだ。だが、本書を読んだ人は、批判の言辞が多いと感じられるかもしれない。林紘に濡れ衣をきせた人々に対して相応のことばが自然にでてきた、とご理解いただきたい。

林紘に関するこの2冊を書いた後、私の心中にスッキリしないものが残る。

論文の根拠について不安を感じるわけではない。林紘冤罪事件は、基本的に解明したと私は判断している。それとは違う種類のものだ。

神経を逆なでされるような、ざらついた感覚だ。私の感情の奥底に新しく生じて沈潜している。それについて説明するのは少しむづかしい。

従来の林紘評価を逆転させることになったのは、そうしようと考えてのものではない。最初から意図したことはなかった。

できるだけ資料を集めて事前に準備をした。いつもとかわらない。資料といっても、一般に公表されたものであることは断わるまでもなからう。中国の、特に五四時期に関係する事柄だから、誰も知らない秘密の文献が日本にあるわけではないのだ。手元にたぐり寄せた文献を普通に読み、必要に応じて調査範囲を広げ、

さらに資料を集め曲折をへて、熟慮したあげく自然に到達した結論である。私としては、論証は可能なかぎり行なったと考えている。だから、そこに不安はない。その結論が学界で受け入れられないだろう、と悲観しているのでもない。ましてや焦燥感など私が持つわけもない。いつもひとりでやってきた。他人の評価は、私とはなんの関係もないからだ。

私のいただいた神経のざらつき感である。

その発生源をたどると、大学で中国語を学びはじめて以来の学習体験に関するようだ。私と中国の出会いがそこにはじまるから当然か。

大学で聞いた講義のひとつに、五四時期文学から説明がはじまる中国現代文学史があった。そこが出発点である。自分でも文学史をいくつか読んだ。それまで、個人としては中国とは接点がない。何も知らない学生だから、勉強が必要だった。卒業論文では清末小説を対象にしたが、いずれはそれにつづく五四時期の文学に、という考えが無意識にせよあったのかどうかすらも定かではない。

清末小説は古典文学史の尻尾だったり、あるいは現代文学史の頭になったり、研究者の考えによって扱いが異なる。その清末小説を当面の研究課題としたから、中国現代文学史も集めていた。ただし、当時は、現代文学史関係の書籍といっても香港からの影印本しか入手できなくなっている。大学入学と同時に中国では「文化大革命」がはじまった。いくつかの例外はあったにしても、毛沢東関係の書籍を除いて出版界も基本的には活動を停止したからだ。

1977年のことだ。「老残遊記」評価に関連して胡適を取り上げた。「文革」が終了したのは1976年である。中国の学界では、1950年代からの胡適批判が依然としてつづいていた。しかも、「老残遊記」は「文革」以前から否定的評価が下されている。いわば否定の自乗なのだ。当時、胡適の「老残遊記」研究について論文を書く研究者はいなかった。胡適を調べるとすれば、五四時期の代表的雑誌として有名な『新青年』を見なければならぬ。このたび林紓について追究する必要から『新青年』影印本をふたたび手にした。本当にひさしぶりだ。

五四時期における林紓の位置を確認するために、書架に置いていたいくつかの文学史が役立つ。40年が経過しているとは、われながら少し驚いた。だが、清末小説研究の延長線上にある。それくらいの時間がかかるのも不思議ではない。

文学史のいくつかはなつかしく読み直したことだ。ある書籍には鉛筆による書き込みがある。見れば、それが自分の筆跡であることに感慨をもよおす。昔の痕跡が残っているからそうだったとわかるだけで、今の私にはおぼろげな記憶しかない。所蔵のものだけでは間に合わない。数種類の文学史を補充した。

本書に収録した論文をごらんいただければおわかりだろう。中国現代文学史は、五四時期の林紓を基本において全面否定している。

私のいだけ違和感は、どうやらその過去の学習体験に原因があるらしい。

勉強だと思って力をいれて読んでいた中国現代文学史は、今から見れば明らかに偏向している。林紓には負の位置しかあたえようとしない。その箇所は事実とは異なるから、私はそれを偏向という。ここには、研究者の強い意志がある。あるいは、公平に記述しているつもりだから、偏っていることに研究者自身が気づいていない。意識的にせよ無意識的にせよ、傾いていることにはかわりはないのだ。

なにを今更、とおっしゃる人もいるかと推測する。偏向した文学史が書かれるのはその理由があるからだ。先刻お見通しである。そういう研究者もいるだろう。

ただ、私にしてみれば意外の感をめぐいきれない。林紓評価を検証した結果、たまたま偶然ではあるが現代文学史の偏りに気づいた。日本で刊行された中国文学史も例外なく林紓を批判する。最近というわけではなく、過去をはるかにさかのぼる。根が相当に深い。研究者独自の視点というものがないのである。それをいうなら、日本以外でも同様なのだが、例外がほとんどないという事実が、私を打ちのめす。

現代文学史の見なおし、書きかえの必要性が、中国で過去に唱えられていることを知らないわけではない。だが、それらは私にしてみれば人ごとであった。清末小説研究には、直接関係しないからだ。清末小説研究についていえば、着手されていない領域のほうが多い。見なおす本体が存在しないに等しいといえいいすぎか。だが、そうだからこそ清末を対象とした文学史がいくつか新しく刊行されている。

林紓についてはどうか。最近の文学史を調べたが、書き直された形跡は一切ない。そうであれば、林紓に関する文学史の見なおしは実行されなかった。あるいは、検討はされたが修正の必要は認められなかったということではないか。個々

の論文では従来とは違った指摘、すなわち林紘再評価の必要性を唱えるものがボツボツ書かれてはいる。とはいえ、文学史に焦点をしばれば、林紘批判がやはり揺るがぬ基調となっている。

ならば、私にとっては従来からの親しい文学史が継続刊行されていることにほかならない。そういう思いが強い。学生時代からはじまって現在にいたるも説明内容に変更がない。その期間が長かっただけに揺り戻しが大きいということだ。だからこそ「裏切られた」という感情が出てきたらしい。これが私のなかに発生した神経をざらつかせる感覚の実体だといってもいい。

「あなたもそうだったのか」。あれほど信じていたのに（自分がシーザーだといっているではありません。考えたこともありません。林訳「ジュリアス・シーザー」を検討したところからくる連想にすぎない。単に、一般論として、常識的にのべているだけです。まさかとは思いますが、わざと裏読みする人がいないとも限らないから、つけ加えておきます）。

五四当時から日本人研究者が、その情況について報告し評論を発表している。林紘に関しては、同時代者によって否定する言辞が発せられ、のちにそれが定着して変更がなされていない。その意味では学界が一体となって筋金入りである。

「「文学革命」以後、人々はみな林氏を罵る権利をもつことになった」（1924）。こう書いたのは周作人である。そのことば通りになった。中国のみならず世界中の研究者が林紘を罵る権利を共有し享受している。だからこそ、80年以上も林紘批判が継続された。それがおかしいと気づいているのは、ごく少数の人だけだ。

中国の研究を二番煎じ的に後追いする意味はあるのか、と発言する考えは私にはまったく、ない。ただ、日本で行なわれてきた中国近現代文学研究について、なんだがガッカリした、というのが正直なところだ。あくまでも林紘に関連して、という点をお忘れなく。林紘に言及のない文献は対象にしていないし、その他の作家は範囲外だ。ましてや、全体について言っているわけではない。しつこいようだが、林紘に関係する部分のみを話題にしている。取り違えのないようお願いしたい。

清末小説研究の分野では、そのような感覚を持つという体験をしていない。もともと冷え切った研究分野だ。つまり、人の興味を引かないということ。中国に

おいて言及されない時代だったから、日本でも触れられることがない。先行論文はほとんど存在していないといってよい。私はそういう状況の中で研究を進めてきた。だから、比較のしようもなかった。

だが、研究者が多くいる五四時期の文学研究には、林紓についての発言が比較的豊富だということができる。その分、結果として私が感じる力抜けの度合い、程度が深かったというだけのことだ。個人的な感想だとして読み流してほしい。

最後にひとこと。論文の中で多くの文献を引用した。それらを執筆した研究者を私は批判しているのではない。そういう事実があると指摘しているだけだ。このことは前著でもしつこく表明している。ご了解いただきたい。

2008.11.1

樽本照雄

初出一覧

以下の3本は、すべて『清末小説』第31号(2008.12.1)に掲載した。それ以外は未発表。

「阿英による林紓冤罪事件 『吟辺燕語』序をめぐる」

「周作人が魯迅を回想して林紓に言及する 日本語訳注釈について」(沢本香子名を使用)

「『林紓冤罪事件簿』ができるまで あるいは発想と研究方法について」

統合増補版 あとがき

本統合増補版は、『林紓冤罪事件簿』（清末小説研究会2008.3.31）および『林紓研究論集』（清末小説研究会2009.5.1）の2書を統合し、さらにいくつかの論文を増補して成った。電字版を作成しウェブ上で公開するにあたり目次で区別して表示している。

いくつかの箇所を訂正した。前2書について誤植の指摘をいただいた杉田英明氏、渡辺浩司氏に感謝します。

原文の翻訳について全面的には統一はしていない。その時々を理解程度を反映しているからだ。また、図版も重複するものがある。必要な場所に配置しているからそのままにした。

全文検索が可能だ。索引は作成していない。

ある論文の末尾に乳酸菌飲料の商品名カルピスが出ている。これには背景がある。

「林訳シェイクスピア冤罪事件」を追究しはじめていた時のことだ。カルピスを製造販売する会社に関連して研究支援機構があることを知った。創業者は当時のモンゴルでカルピスのもとを発想したという。その関係で中国を対象とする研究を支援するのが目的とか。林訳研究も対象になると判断し応募した。結果は不採用だった。別にそれについて嘆いているわけではない。その選考委員に評価されなかっただけのことだ。珍しいことではない。

数ヵ月が経過したある日、勤務する大学の教員から奇妙なことを聞かされた。その教員の配偶者が例の研究支援機構の審査員をしていたというのだ。なんの話かと思えば、私が提出した応募書類を審査したという。その人は採用するつもり

でいたそう。ところが、決定日の会議にもうひとりの審査員が欠席したため不採用になった。そういうことがあったというだけのこと。内部事情を私に知らせたその教員は何がしたかったのだろう。私は不可解に思っただけだ。思い出したからここに記しておく。

『林紓冤罪事件簿』について次のようなことがあった。

ある中国人研究者が私に中国の出版社を紹介するという。長年にわたって清末小説を研究している樽本の芳に報いたい。私の論文の中から指定すればそれらを漢訳して出版するという話だ。そういう親切な人は日本にもいない。

せっかくのご好意だから『林紓冤罪事件簿』を提案した。

紹介されたのは商務印書館である。

林紓と商務印書館のあいだには密接な関係が持続されていた。彼の翻訳作品は、ほとんどが商務印書館によって刊行されている。その多くが海外文学翻訳シリーズである商務版「説部叢書」に収録された。そればかりか、2集に分け全100種を選抜して「林訳小説叢書」までも出版している。上海の印刷会社として創業した商務印書館が、後に文芸を含む総合出版社に発展していく過程において林紓の存在が大きかった。

その一方で林紓は、やってもいないことで長年にわたり批判を加えられている。文学革命派は根拠もなく林紓を「無知」だと攻撃非難した。さらには風説風聞によって文学革命に反対する保守派の代表者に認定している。百年近くにわたって林紓は無実の罪を着せられたのだ。私は資料にもとづきそれが冤罪であることを証明した。その内容からしても、拙著『林紓冤罪事件簿』が漢訳されしかも商務印書館によって刊行されることは意味のあることだと思った。

この出版社とは、以前にある関係が生じている。拙著『初期商務印書館研究』を翻訳刊行すると約束し、とうとう実現しなかったことがある。

外国人研究者が自社について論文を書くことを歓迎するのが商務印書館の社風だと思っていた。その類の翻訳書をいくつか出版している。誰も知らない日本金港堂との合弁について詳細に説明している拙著は、商務印書館研究に大きく貢献するだろう。その自信が私にはあった。だが、刊行されることはなかった。

商務印書館のある人々にしてみれば、日本金港堂との合弁問題について公表し

たくないのが本音だったのだろう。日中の外交状況が影響しているのかもしれない。直視することのできない不都合な歴史的事実が書いてあることに気づいたのではないかと推測している。それらを含めた状況説明は、仲介者から一切なかった。

商務印書館の編集者から『林紓冤罪事件簿』を翻訳出版すると聞かされた時、私は半信半疑だ。出版契約書を取り交わした。ところが担当編集者は、熱が入らないらしく書名がどうなるかも知らせてこない。あとは放置である。聞かされた出版予定年月を大きく遅れても連絡はなかった。

2016年、別の中国人研究者が、どこで聞いたのか『林紓冤罪事件簿』の漢訳出版はどうなったのかと私に問い合わせてきた。商務印書館の担当編集者に聞いて欲しいと返答する。

その人が私にメールをくれて言うには、教えてもらった編集者はそのような出版計画は存在しないといっている、と。これには笑ってしまった。

その人に出版契約書を見せると、上の方から横槍が入ったのかもしれないという。

商務印書館と出版契約をするまでに長い時間が経過していた。その間、当然ながら同社内部で論文審査をいただろう。審査を通過したから契約を結んだとばかり思ったのだが、どうやら違うらしい。

私が刊行時期について商務印書館の編集者に質問すると、その返答がまた傑作なのだ。商務印書館にいる日本語担当者が突然辞職してしまい出版はだいぶ遅れるという。別の人には出版計画はないといい、私には遅れるという。その編集者は、揺れる商務印書館を体現しているようだ。

それにしても、これから刊行しようという書籍の内容をよく知らずに契約を結んだということだろうか。これも不思議なことだ。

私が見るところ、商務印書館は林紓について思考と行動が引き裂かれている。

林紓は、商務印書館創業者たちとの信頼関係が厚かった。しかも、長年にわたる出版の実績が積み重なって商務印書館にとっては大事な存在だ。しかし、中国の学界において林紓は文学革命に反対した保守派の代表という判定が下されている。商務印書館内部で立場によって正と負の評価に引き裂かれているという

意味だ。

書籍編集の現場がいくら刊行しようと努力しても、別の部署から政治的な判断によって決定が覆されるということもあるのではないか。出版を阻止する理由になるくらい彼らにとって直視することのできない不都合な歴史的事実が拙著には明記されているということだ。それはそれで興味深い。

『林紓冤罪事件簿』の漢訳『林紓冤案集論』(というらしい)がどうなるのか、今は知らない。私にはほかにやることがあるからそちらに集中するだけだ。

本統合増補版を電字版でウェブ上に公開するのは、研究者に広く利用してもらいたいからだ。データ量が多いためグーグルとマイクロソフトのクラウドに収納している。誰でもどこからでもダウンロードできるはず。

ところがそうでもないらしい。

前述商務印書館研究の電字版2種類を公開した時のことだ。中国の研究者からの反応がふたつに分かれた。ひとつは、ダウンロードに成功した。もうひとつは、ウェブサイトに接続することができない。接続に成功した人は出版社と図書館勤務の人だった。失敗したのは大学の教授たちだ。外国へ行ったときにダウンロードする、と知らせてきた人もいた。

中国大陸ではウェブ上の情報を取得する権限を許可された人々とそうではない人々に分かれているらしい。

清末小説研究会のウェブサイトで季刊誌『清末小説から』を公開している。これも中国では見ることができないということを聞いた。

こればかりは私にも対応のしようがない。

2016.6.1

樽本照雄

著者略歴

樽本照雄 (TARUMOTO Teruo)

1948年 広島市生まれ

1972年 大阪外国語大学大学院修士課程修了

現 在 大阪経済大学名誉教授 博士(言語文化学)
研究誌『清末小説から』を公開中

編著書 『清末民初小説目録Ⅹ』ウェブ公開 2015

『上海のシャーロック・ホームズ ホームズ万国博覧会 中国篇』
国書刊行会2016.1.20

『初期商務印書館研究(増補版)』ウェブ公開 2016

『商務印書館研究論集(増補版)』ウェブ公開 2016

『清末民初小説目録Ⅹ 2』ウェブ公開 2016

『清末翻訳小説論集(増補版)』ウェブ公開 2017

『漢訳アラビアン・ナイト論集(増補版)』ウェブ公開 2017

りんじょえんざいじけんぼ どうごうぞうぼほん
林紓冤罪事件簿 統合増補版

発行 2017年 1月15日

著者兼
発行人 樽本照雄

発行所 清末小説研究会 〒520-0806
滋賀県大津市打出浜 8番4-202
樽本照雄方
<http://shinmatsu.main.jp>

Printed in Japan

非 賣 品

